

いつかの明日へ、【ヒーロー】は助け合いでしょ

しょくんだよ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

総人口の約8割が何らかの超常能力“個性”を持つ世界を舞台に、事故や災害、

そして“個性”を悪用する犯罪者・敵へヴィランから人々と社会を守る職業、それは「ヒーロー」。

これは、その世界の人々に手を伸ばす若い青年の物語

【ハッピーバースデー!!新たな物語の誕生だよ!】

※No. 37からの話はご都合により書き方が変わっています!

目次

第1章	くヘドロ事件く	
No. 1	名は火野映司	1
No. 2	仮面ライダーオーズ	8
第2章	く雄英高校入学く	
No. 3	入試試験 始動	16
No. 4	火野映司・オリジン	25
No. 5	結果発表	33
No. 6	入学という名の別れ道	41
No. 7	個性把握の体力測定	48
No. 8	その個性をどう使うか	57
No. 9	雄英の特権	66
No. 10	戦闘訓練	75
No. 11	学ぶべき事	85
No. 12	学校らしい事	97
No. 13	頑張れ飯田!	107
第3章	くUSJ事件く	
No. 14	救助訓練	116
No. 15	未知との戦闘	129
No. 16	最強コンビ	140
No. 17	反撃の英雄	149
No. 18	プロの本気	159
No. 19	火野映司の“個性”	169
第4章	く雄英体育祭く	
No. 20	その男、偵察にくる!	180

N O.	2 1	雄英体育祭、開幕	190
N O.	2 2	第一種目、障害物競走	199
N O.	2 3	みんな個性的でイイネエ!!	208
N O.	2 4	騎馬戦!混合!	218
N O.	2 5	改めて行こう!!	227
N O.	2 6	この世は乱世!決着の時!	240
N O.	2 7	結果!そして!	250
N O.	2 8	ガチンコ対決!始動!	259
N O.	2 9	チャレンジャーの闘志!	269
N O.	3 0	頑張れお茶子!	282
N O.	3 1	その目は何を見る!	294
N O.	3 2	後藤慎太郎:オリジン&灼熱コンボ	305
N O.	3 3	照らせ特技!そして迅速に!	318
N O.	3 4	重力コンボ	330
N O.	3 5	その手は受け止める	339
N O.	3 6	炎翼コンボ	353
N O.	3 7	表彰式	369
N O.	3 8	真実と因縁	381
第5章 くヒーロー殺し			
N O.	3 9	ヒーロ名、オーズ	390
N O.	4 0	鴻上ファウンデーション	404
N O.	4 1	欲望が解放された時	413
N O.	4 2	動き出すその信念	423
N O.	4 3	増殖コンボ	435
N O.	4 4	ヴィランVS雄英生徒	447

N O.	4 5	隠密でフルスロットル	457
N O.	4 6	止まらない脅威	466
N O.	4 7	応援という名のアイテム	479
N O.	4 8	空前絶後の決着	489
N O.	4 9	行動の後始末	501
N O.	5 0	動き出す者達	513
第6章 　　くヒーローショー!く			
N O.	5 1	夢見る規格	525
N O.	5 2	騒動という名の準備	537
N O.	5 3	練習、そして出陣!	550
N O.	5 4	唸れ、波瀾のヒーローショー!	561
N O.	5 5	猛れ!爆・殺・卿!	573
N O.	5 6	穿て、真のクライマックス	585
N O.	5 7	蠢めくピエロ	599
N O.	5 8	性別反転!?個性も反転!?	614
N O.	5 9	やったれ反転生徒	629
N O.	6 0	水棲コンボ	643
第7章 　　く期末試験く			
N O.	6 1	やってきた生徒達の地獄	657
N O.	6 2	期末テスト	670
N O.	6 3	対オーズ戦闘ロボ	684
N O.	6 4	更にむけろ一皮	699
N O.	6 5	エンカウンター	713
N O.	6 6	対面する宿命の紅い糸	728
N O.	6 7	とある招待状	743

劇場版 二人の英雄

N o. 68 I・アイランド

N o. 69 集結の1年A組

N o. 70 パーティーへの準備

N o. 71 波乱のレセプションパーティー

N o. 72 雄英生徒達、出動!

N o. 73 コアに宿す奪欲

N o. 74 奪う欲望の誘い(いざない)

N o. 75 到達と真意

N o. 76 2人の英雄

第8章 林間合宿

N o. 77 道中の騒動

N o. 78 ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ

N o. 79 強化合宿

N o. 80 集結の合宿

N o. 81 闇夜の狼煙

N o. 82 海の化身ポセイドンと突林コンボ

N o. 83 深緑の欲望と開放

N o. 84 僕のヒーローと偽りのヒーロー

N o. 85 渦巻く森に出た指令

N o. 86 生徒達の覚悟

N o. 87 不意打ちの幕引き

第9章 神野区

N o. 88 敗北と病院

N o. 89 決行の夜

10871075 10641051103610211006 991 974 960 944 928 914 888 870 855 838 818 802 786 772 756

N o.	90	バカとプロと作戦開始	1171101
N o.	91	激突と太古の力	1133111
N o.	92	巨悪と無敵のコンボ	1149113
N o.	93	絶大と無の力と取り引き	1163114
N o.	94	反撃と鎮火の灯火	1177117
N o.	95	OFA(オール・フォー・ワン)とAFO(ワン・フォー・オール)	1187117
N o.	96	ヒーローの原点	1197118
N o.	97	全ての決着と始まり	1224121
第9・5章 く学生寮く			
N o.	98	家庭訪問	1259128
N o.	99	入れ寮	1271127
N o.	100	ベストセンス決定戦	1281128
N o.	101	部屋王は誰だ!そして…	1292129
第10章 く仮免取得く			
N o.	102	編め必殺技	1302130
N o.	103	発明好きみな発目	1312131
N o.	104	心浮かぶ	1322132
N o.	105	THE 試験	1335133
N o.	106	白熱!各々の実力!	1345134
N o.	107	聖愛学院の策略	1351335
N o.	108	裏の裏	1351335
N o.	109	雄英LUSH!	1351335
N o.	110	救助演習	1351335
N o.	111	その者は飾られる	1351335

N o.	1 1 2	一か八か最後の手段	1368
N o.	1 1 3	その結果は：	1380
N o.	1 1 4	尋問	1393
N o.	1 1 5	意思是揺るがない	1403
第11章 くインターンく			
N o.	1 1 6	後期始業式	1412
N o.	1 1 7	出会いの季節	1426
N o.	1 1 8	A組VS通形ミリオ	1437
N o.	1 1 9	強さの先と対面する者達	1449
N o.	1 2 0	いぎ、再びあの会社へ！	1462
N o.	1 2 1	不安から始まった校外活動	1474
N o.	1 2 2	バイクは自販機!?	1482
N o.	1 2 3	練習と事件と恋愛コンボ?	1492
N o.	1 2 4	2人のバースと呪いと告白	1506

第1章 くへドロ事件く

No. 1 名は火野映司

「君、持ち物を調べさせてもらってもいいか？」

「あ、はい。別に構いませんよ。」

「…？持ち物はこれだけか？」

「はい。必需品以外ならちよつとのお金と

明日の「パンツ」さえあれば、何日かやっていきますよ。」

「そ、そうか。えつと、ひの…。」

「映司。火野映司です。」

「ああ、映司君。年齢は14歳…。」

君はこの銀行に用があつて来たら既に銀行が襲われて、
通報してくれたんだね？」

「はい、でもすみません、銀行強盗した奴は見失いました…。」

「それは我々警察と「ヒーロー」の仕事だから

君が責任を負わなくていいんだよ。」

総人口の約8割が何らかの超常能力「個性」を持つ

このご時世で、当然その個性を使って力を悪用し

平和を脅かす連中、それを人々は「敵」と呼んでいた。

そして、その敵から平和を守って活動する仕事か

「ヒーロー」

事件というものは突然やってくる。

少しだけ1人の少年の話をしよう。

この男は今年で中学を卒業し、春には新しい日々が待つ
高校ライフが始まるうとしていた。

彼は受験生で、【英雄】という名の国立高校を志願していた。偏差値79で倍率は300倍、毎年受ける人数は一万以上と難問の高等学校であり、その中から選ばれた者が栄光の道へと開かれる第一歩を踏み出すことができる。

近年、敵の^{ヴィラン}犯行が増加しており、街の銀行で銀行強盗が起きたらしく犯行現場の銀行に偶々いたこの火野映司が警察2人に事情聴取されている最中だ。すると、無線から通信が入り、1人の警察がそれに繋げる。

「…本当かつ!?…分かった。」

強盗の容疑者が確保できたみたいだ。」

「えっ！本当ですかっ!?よかったあ…。」

ホッと撫で下ろす映司。

「そいつは助かるな。で、どこのヒーローが捕まえたんだ?」

「驚くなよ?なんとあの『平和の象徴』さ。」

「っ!!『オールマイト』か!」

くうっ!やっぱりすげえな!活躍する所生で見たかったあ…!」

「こら、勤務中だぞ、市民の前ではしゃぐな。」

その『人物』の名を聞き興奮する1人に

軽くチョップを頭部に入れ、「すまん」と苦笑。

聞いて驚くのも無理はない。

その人物はオールマイト。彼の影響力は単純に

日本の治安維持に関わるだけでなく、

世界中のヒーローにとっても絶大な影響を与えている

絶大な力と人気を誇る【No.1ヒーロー】。

誰もが憧れ、誇り、高なり、勇気を与えてくれる存在。

「…凄いですね、こんなに事件をあっさり…。」

さすが平和の象徴って言われてるだけあります。」

「そうだな。君は15歳だったね?今年の4月から

高校生なんだろ?」

「はい。俺、雄英に志望しています。」

「おお！あのオールマイトが卒業した高校か！

俺の娘も受けたいって言っていたがあそこは

偏差値がやばいから先生に止められて文句言ってたなっ。っだ!？」

「だからはしやぐなと言っているだろ。」

：君もヒーローになるのかい？」

再びチョップを入れ、映司に問い掛けると

彼は即答で「はいっ」と頷いた。

「俺は困っている人に手を差し伸べたいんです。」

「どんな場所にも手が届く…。そんなヒーローに。」

「うん、いい心掛けだっ、頑張れよ少年っ。」

「邪魔して悪かったね。何か用事があつてここにきたんだろ？」

「あ、はい。…あああつ!!忘れてた!」

咄嗟に何か思い出したかのように声を上げ

辺りの道路、地面を見渡し出し始める映司。

「どうした？何か探し物か？」

「あ、はい！あの、落とし物してしまつて…」

「この辺りに落とし物したと思うんですけど…!」

「何を落としたんだ？」

「『赤いメダル』ですっ。」

☆☆☆☆☆☆

『プロはいつだって命懸けだよ。』

…まだだ。

『夢を見るのは悪い事じゃない』
『相応に現実を見なくてはな少年』

何回も、頭の中であの人、オールマイトの声が
洗練に聴こえてくる。

これがフラツシユバックってやつかな…。

(…プロの、トップが言うんだ…。泣くなっ…。
わかってたろ…!?現実さ…。)

強盗事件から数時間後。

グスツと鼻を噉り涙を拭うこの少年、名は^{みどりや}「緑谷 出久^{いずく}」

彼は生まれながらにして「無個性」、何の個性もない

ごく一般的な…いや、この世界では「否一般的」な少年。

個性を持たない人間はこの世界では珍しいも珍しい。

その為か彼は横暴な連中からは虐められ

そこそこ仲良い連中からは貶され

そこら中にいる一般の連中からは陰口を言われる毎日。

それでも彼は必死に生きていた、抗っていた。

だけど、その抵抗は1人の男によって崩れそうになっていた。

オールマイトだ。

先の強盗事件の犯人が出久に襲おうとし、

それを止めたのはオールマイト。

出久はオールマイトの大ファンであり、

No.1ヒーローの彼から直接声をもらいたかった。

お母さんにも言われて欲しかったその言葉。

だが無理矢理止め質問しようとした

オールマイトの真実を知り、

そしてはつきりと現実を見ると告げられた。

分かっていた。心の奥底では理解していた。

個性がないとヒーローになるのはほぼゼロに等しい。
重々承知していた。

「…はあ。」

出久は深く溜息を吐く。

それと同時に、無意識にポケットから

“赤いメダル”を取り出し、ジツと眺める。

どうやら少し前に道に落ちてたのを拾った物だ。

鳥の造形が施された見たことのないメダルで

きつと誰かの落とし物だと思っただろう。

(先ずはこれを交番に届けなきゃ…、現実を見ろ！)

…見ないように、見ないように…)

その矢先だ。

ガヤの声が聞こえ、振り向くと商店街の入り口に
人が野次馬となって集まっていた。

おいおい、またかよ…。

出久は再び溜息を吐く。…分かっていたのに。

もう関わりたくないと思っただけなのにその矢先にこれだ。

きつとヴィランが暴れているのだろう。

この街でもそれは日常茶飯事にその出来事は起きていた。

出久は吸い寄せられるかの様にその野次馬の中へ入っていく。

その光景は目に見誤る事が起きていた。

(あいつ…!?何で!?)

その方向にいたのはオールマイトが捕まえたはずの

ヘドロ型の異形ヴィラン敵が暴れていた。

「ヒーロー何で棒立ちい?」

「中学生が捕まってるんだと。」

「つーか、あの敵ヴィランさつきオールマイトが

追いかけてたやつじゃね?」

「マジ!?オールマイト!?うそお!?きてんの!?!」

他人事みたくガヤガヤと野次馬の声が騒いでいる。

出久は両手で口を塞ぎ焦っていた。

あの敵サイランに襲われた時、個性のヘドロが身体中に巻きつき、身動き処
ろか呼吸すらも儘ならない状態だった。

それを目の前の犠牲者、増してや同じ中学生と考えるとゾツとし
た。

そして何よりあの敵サイランはオールマイトが捕まえ
ペットボトルに押し込んで確保した筈だった。

恐らくオールマイトが飛び立つ瞬間にしがみついて
落としてしまったのだろう。出久は罪悪感で溢れる。

(僕のせいだ…オールマイト彼は動けない！)

あいつは掴めない！有利な個性を持つヒーローを待つしかない！
オールマイトは敵の襲撃により致命傷を負ってしまい
度重なる手術と後遺症で憔悴してしまい

その活動時間が限界をきてしまい、一日三時間程しか
平和の象徴として活躍する事ができない状態だった。

今日その時間を使い切ってしまった為、
彼は恐らくこの場に来ていたとしても、
力が出せない一般人に等しい存在だ。

(頑張つて…!!ぐめん…!)

現場ごめんなさい…!すぐに救いが来てくれるから…!
ここに来ても何も解決出来やしない。

野次馬と同じ様に、何が起きているのか気になってきてしまっただ
けだ。

今は己の弱さと行動が不甲斐なく思う。

出久はただ、謝り、見る事しかできなかった。

(誰か…ヒーローがすぐ…!)

見る事しか、

「っ!!」

偶然、ヘドロが暴れてる際こちらに視線を向けた。

その時。取り憑かれていた中学生の顔が一瞬だけ目に入る。

なんと同じ中学校の「爆豪 勝己」だった。

「ーっ!!おえっ!」

「ひゃっはは!大当たりだぜえ!こいつあ!スゲエ個性だ!」

勝己はもがくが、ヘドロの怪人はその勝己の個性、

「爆破」の力に興奮し、辺りを爆破させて被害を拡大していく。

「くそっ!誰か良い「個性」いねえのか!?!」

「こっちは消火で手一杯だよ!状況どーなってるの!?!」

「爆炎系は私の苦手とするところ…!今回は他に譲ってやろう…!」

勿論、^{ヴァイラン}敵が入れば正義、プロヒーローも

駆けつけていたが、敵は文字通り流動体な身体で

物理的な攻撃は生半可な威力じゃ通じない。

相性の向き不向きにより、互いが互いを人任せにして

被害を最小限に抑えようとしていた。

「くそっ!吹き飛ばせるようなパワーがあれば…!」

一人のプロヒーロー、名は「デステゴロ」。

彼はパワー系のヒーローだが、あいにくそこまで強い衝撃を

放てる程の力を持ち合わせていない。

ヘドロの暴れる様を見て悔しがっていた

その時、デステゴロの横を駆け抜け、ヘドロに向かう者がいた。

一人、いや、二人の少年だ。

緑谷出久と、

火野映司だった。

No. 2 仮面ライダーオーズ

「はあ、参ったなあ…。ちょうど警察の人がいたから落とし物届け出したはいいけど、見つかるかなあ。

“二枚”だけじゃ使えないし…。」

火野映司は警察との聴取を終えた後、私用の「落とし物」を警察と協力し探したのだが見つからず、結局落とし物届けを出して帰宅する途中だった。

「あー…。考えても仕方ないか…。ん？」

意外と冷静で映司は軽く息を吐く。

ふと、映司は何かに気づいたのか辺りを見回す。

見つけたのは商店街の入り口だ。

そこには野次馬が集っており、映司は血相を変え地面を思い切り蹴り、全力で事件が起きている方角へと走り出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「ばかやろー!! 止まれ!! 止まれえ!!」

デステゴロが叫ぶ。ただでさえ苦戦していた敵サイランに向かっていくのはヘドロに捕まっている爆豪勝己と同じ若い少年二人だ。

緑谷出久に火野映司、駆け出す少年達に一気に

野次馬はざわつき、唾然としていた。

そしてその中には痩せ細った本来の姿のオールマイトもいた。トゥルーフォーム

(きつきの少年…!?何を!?それにあの子までっ!?)

オールマイトは焦る。今日の力を使い果たし、平和の象徴として活動する事が出来ず、目の前の光景を只々見る事しかできなかつたからだ。

「っ!?うぎゃっ!」

一方駆け出した出久は瓦礫に躓き、盛大に顔から転倒。

その衝撃にポケットから先程拾った一枚のメダルがコロコロと転がっていく。

「っ!あっ!」

それにいち早く気付いたのは映司。だが映司はメダルを拾わず、

出久の方へと駆け寄る。

「君!大丈夫っ!」

「…っ!!」

「あっ!ちよつとっ!」

安否を確認するも出久は構わず立ち上がると

へドロに向かって走り出す。

「爆死だ。」

「っ!しえいつ!!」

当然少年等に気付いてたへドロは爆豪の個性を使い手を大きく振りかざそうとする。

出久はビビるも何か思いついたのか背中に背負った鞆を下げ情けない声と共にそれをへドロへ目掛け投げた。

打撃が通じない相手に何とも言えない悪あがきだが

鞆は顔に当たり怯んでいた。

「かつちゃん!!」

「…ガハッ!!デクっ!!何でてめえっ!」

出久はへドロに近付き爆豪の口元についていた泥を掻き分けるとヒーローでもない、来る筈のない増してや

無個性な奴が、と思ったのだろう

動揺と怒りが合わさった感情をあらわにしている。

だが、出久は関係なく

「君が、救いを求める顔してた…!」

「っ!？」

ニカつと、出久は涙目で震えていて
恐怖に押し潰されそうな状態なのに、彼は笑って答えた。
その発言にオールマイトは何か突き動かされたかの様な
感覚に言葉が突き刺さる。

(っ!!くそっ!…こんな時に上手く力が入らない!? holy shit
…!)

オールマイトは力もうとするが上手く力が入らないのか
軽く吐血をしてしまい、今にも膝をつきそうになる。

(情けない…!情けない…!)

己の貧弱さにオールマイトは自身の膝を

ドンドンと拳で叩き、奮い立たせようとする。

「もう少しなんだから邪魔すんなあ!!」

「自殺志願かよ!」

「無駄死だ!援護する!」

目の前で無力の少年が無謀にも勇敢に立ち向かい
爆豪を救けようとしている。

そして、今にも出久が襲われそうになっている。

流星のヒーロー達もやむ終えず救けに行こうとする。

BOOM!!

だが、ヘドロの攻撃が当たり、爆発する。

誰もが間に合わなかったと思ったその時だった。

「っ!?!何っ!?!」

「!?!」

爆破したのは瓦礫でそこには出久はいなかった。
が、すぐ横に出久、それともう一人

「大丈夫かい?」

「あ…え…?あの…君は…?」

「俺は火野映司。後は俺に任せてくれないかな?」

あと、これは返してもらおうよ。

拾ってくれてどうもありがとうっ。」

「あ…それ…!君のだったんだ…!」

へドロの攻撃を映司が出久を抱えて

ぎりぎり交わしたのだろう。無事を確認した映司は
身体を叩きながら立ち上がり赤い^{コア}メダル^{メダル}を確認する。

「何だてめえ!?!俺とやろうってのか!?!」

いいぜえ!今の俺は無敵だ!どんな奴にも負けやしねえ!」

「物騒な奴だなあ。…その子を解放してほしい。」

俺も手荒な真似はしたくないんだ。」

「ほぎくな!お前みたいなのがキに何ができる!?!」

調子に乗つてるとまじで殺すぞ!!」

「ーっ!?!」

「おい!?!誰か知らんがお前等下がれ!子供が出て解決できる問題じゃない!!死んじまうぞ!」

映司の言葉に声を荒げるへドロ、それを見てるヒーロー達は止めようと声を掛けるが

映司は動かなかつた。彼の目は

今この状況を解決しようとしている勇敢な目をしていた。

映司は後ろポケットから不思議な形をした物を取り出し、
それを腰に宛てがうと、両サイドから

銀色のベルトが放出し、腰に巻き付く。

装着されたそれはドライバーの様な見た目となる。

名は、オーズドライバー。

「死んじゃう…か。楽しんで助かる命がないのは、どこも一緒だな！」

ピン！つと映司は赤のコアメダルを弾いてキャッチし、

同時に取り出していた二枚の別のコアメダルの内、

緑のコアメダルを赤と同時に、そして黄コアメダルをドライバーの空いている穴に嵌める。

ドライバーを右斜に傾けると右腰部分にある

円形の装置をドライバーに翳すとリズム良く小気味良い音がその場に鳴り渡る。

そして、彼は言った。

「変身。」

タカ！

トラ！

バッタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

リズム感のある音声が響き渡ると、先程の映司の姿とは別人の格好をした者が立っていた。

頭部は赤、身体は黄、脚部は緑とメダルと同じ配色をした見た目で胸部は鷹、虎、蝗と生き物のサークルが描かれた造形が施されている。

まさにそれは戦士と言うに相応しい姿だ。

「っ!?何だ…その姿…!?!」

「何だ!?どーなってんだ!?!」

「あの少年まさかプロヒーローなのか!?!」

「まさか!どう見ても子供だ!あいつの個性だろ!」

「でもあんな個性今まで見たことないよ…!」

「なんか、エモいな！」

「キタコレ」「キタコレ」「キタコレ」「キタコレ」

ワイラン
敵は勿論、ヒーロー、

野次馬達も驚きその姿を目に焼き付けていた。

「き…君は…!?そ、それに今の…!たか、とら、ばったって…!」

「あく歌は気にしないでいいよ。俺は火野映司。」

そしてこれは俺の力。 “仮面ライダーオーズ”だ。」

「オーズ…!す、すごい…!!」

ワイラン
で、でも!あの敵は打撃も触れることも出来ない個性なんだ!何か

かつちゃんから離れさせる方法があれば…!」

「大体見れば分かるよ。大丈夫、考えがあるから。」

さてと、…あぐつ!?」

「っ!どうしたのっ!?」

オーズは何もしててる訳でもないのに、

突然と膝をついてしまう。

「な、何だ!?やっぱりハツタリじゃねえか!」

「うぐつ!?やっぱりまだダメか…!でも!

誰かが救いの手を差し伸べるなら!俺はそいつを掴む!」

オーズは言い切つて立ち上がると、再び右腰にある装着

“オースキャナー”を取り出すし、再びドライバーに翳し、

ス読み込キャませた。

スキャニングチャージ!!

音声が鳴るとオーズの脚部 “バツタレッグ” が光り出すと

その足は形を変え、逆関節形態になり、

更に力を入れ一気に解放。跳躍力で空高く跳びあがる。

「っ!?飛んだ!」

「何だあいつ!?どんな個性してんだ!」

「キタコレ」パシヤツ「キタコレ」パシヤツ「キタコレ」パシヤツ

オーズが跳躍した高さは高度約百九十は飛んでいるだろう、

その高さにその場全員が驚き、一斉に見上げていた。

「ぐっ!?ダメだ…!痛みが強すぎて上手く力が出せない…!!」

天高く跳躍したオーズに再び激痛が走る。

しかしここで変身を解除したらそれこそ無駄死。

ここで決めなければあの子、爆豪は救えない!

「絶対に…!助ける!!」

「その意気だ!三色の少年!」

瞬間だ。今上空にいる筈なのに、

聞こえる筈がない声が隣から聞こえる。

オーズはえっ?と声を漏らし振り向くと、

そこには同じく跳躍して飛んできたのだろう、

平和の象徴、オールマイトがいた。

「あ、貴方はっ!オールマイト!」

「グハッ . . . Y E S !! さあ自己紹介は無しだ三色の少年!

君は今飛んでもなく J U M P してるが、ここからどうする気かね
!?!」

「ここから、俺の攻撃で敵からサイラン

あの子を衝撃で引き剥がします!でも…上手く力が…!」

その瞬間、オーズは強制的に変身が解かれ、

映司とオールマイトはそのまま落下して行く。

「…どうやら君はまだその力を制御

出来ないようだね!だが君の!君達の勇姿はしかと受け取った

!もう大丈夫!何故なら!」

オールマイト血を吐きながらも映司を抱え、

画風が違うその笑みでこう言った。

「私が来たからだ!!」

その瞬間、映司の意識は途絶えた。

第2章 く雄英高校入学く

No. 3 入試試験 始動

「…ううっ。」

「お、気がついたかい?」

「…えと、はい。」

火野映司は気がつくで見知らぬ天井が視界に入り、その身をゆっくり起こすと身体に痛みが走る。顔にガーゼ、手に包帯が巻かれてる事に気が付き

ここが病院だと知り、出来事が蘇る。

「安心したまえ、あの敵は

無事捕まえる事が出来た。

それに一緒にいた二人の少年も無事だよ。」

「本当ですか!? よかったあ…!」

ありがとうございます!

こんな手当てまでしてもらって…!」

「ハハ…。私がした訳ではないよ、だけど。

君がした事はとても危険で命を投げ出す様な行為をしてしまったのは許されない事だと肝に命じておきなさい。

あの時オールマイトが来てくれなかったら

君達の命の保証はなかったんだ。」

「…? はい。ですから、ありがとうございます。」

「エ?」

「だって、貴方はオールマイトですよね?」

「っ!?!」

映司の発言に汗が一気に吹き出しそうになる程に驚愕し、椅子から立ち上がる。

キョトンとする映司の見舞いに来ていたのは

オールマイト本人だ。

だが、今は本来の姿で

あの画風の違う平和の象徴とは

程遠い見た目をしているのに何故…？

「…ど、どうして私がオールマイトだと…？」

「え？だって声が似ていますし見た目も面影ありますから。」

「What!?!この見た目でそんな見破れる物なのかい!?!」ドバア！

「うわ！血が！大丈夫ですかっ!?!」

吐血するオールマイトに映司は動揺するが

オールマイトは血を拭うと真剣な表情になり口を動かした。

「…その通り、私はオールマイトだ。」

五年前に大怪我を負ってしまつてね。

その為一日のあの状態の活動時間は減る一方なのさ。

：今ここにいるのは君に礼を言いたくてね。

君と、もう一人の少年がいなければ私は口先だけの

ニセ筋になるところだった、ありがとう。」

「いや、全然つ。寧ろこつちが礼を言いたいくらいですよつ。

あの時オールマイトが来てくれなければ、俺は今頃この程度の怪我で済んでなかったでしょうから…。」

「君の個性は少しカルテを見させて貰ったよ。

“オーズ”…。素晴らしい個性だが、

まだ使いこなせていない様だね。」

オールマイトは尋ねると、映司は病室の机に置いてある

コアメダルを一枚手に取り眺める。

「あー、はい。俺のこの力はいつの間にか

俺の手元にあった物で最初はあの姿になる事すら儘ならなかったんですよ。今は変身できても

まだまだ戦えるレベルじゃないですし。

もっと特訓しないと…。」

「その心掛けは素晴らしいぞ、火野少年。

君は“雄英”を希望だったな。先程の二人の少年も

雄英志望だったから、君達が雄英に来る日を私は心待ちしている

ぞっ。」

「はいっ！ありがとうございます！

…ってオールマイトは今雄英の方なんですか？」

「YES。今は訳あって雄英高に滞在する事になっててね。」

「凄い！なら本格的に頑張らないと！」

「おっと、無理してはいけない。

今日はゆっくり休んで明日にでも備えるといい。

…それと、私がオールマイトって事は

くれぐれも内密で頼むよ？今の私がこの姿が本性だと分かれば世間は只事じゃ済まないだろうからね。」

「分かりました、ありがとうございます。」

オールマイトは言い残すと椅子から立ち上がり
病室から出て行く。

その道中、何か思ったのか立ち止まる。

(火野映司：。いや、何を馬鹿な事を…)

もう後継ぎは決めたんだ。

入試試験、頑張れたまえよ…！さ、明日からは

緑谷少年の特訓だ！私も心を鬼にしなれば！)

☆☆☆☆☆☆☆☆

————入試試験当日

「うわあ……流石は雄英！でっかいなあ！」

あれから3ヶ月後、長いようで、短いような中学生生活が終わりを迎える最中、

火野映司は試験を受けるべく雄英校へと到着し、その高く聳え立つ学校に驚き圧倒されていた。

個性の悪用による反社会活動に身を投じる犯罪者

ヴィラン

敵勢力への対抗勢力『プロヒーロー』の養成学科を有する。名を、国立雄英高等学校。

早い気もしているが、映司は学校生活を送っているのを想像したのか、歓喜高まり、グツと手に力を込めていた。

「よしっ！」

オールマイトとの約束を胸に、映司は一步を踏み出し、校門をくぐり抜けた。

と、思ったが。

「どけっ！邪魔だ！」

「えっ？ああつ、すみませ……って君はっ！」

「あ？……ああ!?てめエは……！」

背後から怒鳴る声が聞こえ振り返るとそこに居たのは

ヘドロ事件に巻き込まれていた爆豪勝己だ。

「てめエあの時の三色野郎……。何でここにいるんだ？ああ!？」

「何でって……俺も雄英に受けに来たから。」

「……はっ！コントロールもできねえ状態じゃあ

ソツコーで落ちるだろーなっ！」

「そんな事ないよっ、努力して来たんだから。」

えっと……爆豪君、もう元気そうだね。」

「いつの話してんだっ！殺すぞ！見りゃわかんだろっ！」

とにかくどけっ！試験に間に合わねえだろがっ！殺すぞ！」

「ああっ、うんごめんっ。(まだ開始まで三十分も時間あるぞ…?)」

啖呵を切って押し退ける様に雄英高の中へと入る爆豪の後ろ姿を見て元気そうだと安心したのか

フツと鼻で笑う映司。

「あれっ?君は…?」

「えっ?」

すると、再び背後から声を掛けられ振り返ると

今度は緑谷出久だった。

「あっ!えっとお…、緑谷君!」

「あ、お、覚えてくれて、たんだねっ。火野君!」

「勿論っ、ヘドロ事件あんな事があれば

忘れる事なんて考えられないよ。」

「そ、そだね…っ、ひ、火野君!ああっ、

あの時は、救ってくれてどうもありがとうっ。」

「そんなっ、あの時は気を失ったから動けなかったし。」

「そ、そんな事ないよっ。君の個性は凄く

ヒーロー向けの個性じゃかいかつ。あのメダルの力は恐らく動物の能力を秘めた個性だろう、上下三枚、てことは三つの個性を同時に使えるって事だよなそれはもう十分過ぎる凄い事だ、今度詳しく聞きたいな…」

「み、緑谷君?」

「ひゃっ!」

突然流暢に喋り出すと思えば独り言みたく小さな声で

ブツブツと言い出し、映司は思わず顔を引き攣ってしまう。

「と、とにかく!今日はお互いベストを尽くして頑張ろう。」

「う、うん!ありがとう!」

ここで立ち話をする訳も行かない。

今日この日は彼ら少年にとって人生を左右する大きな一歩を踏み出すチャンスとなるのだから。

映司と緑谷は会話を終え、受験生が向かう英雄高校の中へと入って

行った。

☆☆☆☆☆☆

『今日は俺のライブへようこそー!!!エヴィバデイセイハイ!!』

シーン……

『こいつぁシヴィー!!!受験生のリスナー!!実技試験と概要をサクツと説明するぜ!アユーレデイ!?YEAHH!!』

シーン:!!

筆記試験が終わり別の会場に呼び出された受験生達。

そして始まるかと思いきや途轍もなくハイなテンションで

自分の世界に入り込んだ説明を会場にその(喧しい)声が響き渡る。

名はボイスヒーロー プレゼント・マイク”。

当然、緊張やその変な応答も相まってか誰一人反応がない。

『入試要項通り!リスナーにはこの後!10分間の『模擬市街地演習』を行ってもらうぜ!!各自持ち込みは自由!プレゼン後は各自指定の演習会場へ向かってくれよな!!OK!?!』

シーン:

プレゼントマイクは受験生達に反応を期待しているが、

当然誰からも返事が返ってこない。

映司はと言うと相槌はしているが配られた

プリントに目を通して彼を見てすらいなかった。

『演習場には仮想敵を三種多数配置してあり、それぞれの攻略難易度に応じてポイントを設けてある!!各々なりの“個性”で仮想敵ヴィランを行動不能にし、ポイントを稼ぐのがリスナーの目的だ!!勿論、他人への攻撃等アンチヒーローな行為は御法度だぜ!』

「質問よろしいでしょうか!」

ガタッと立ち上がる音が聞こえ受験生等は一斉に注目する。

映司も反応するが映司が座っている場所は会場の

ほぼ一番端っこの方だ。方や立ち上がった少年は真ん中の席でここからだとよく顔が見えないが

真面目そうな眼鏡の子は認識できる。

そして少年は手にプリントをプレゼントマイクに見せ発言する。

「プリントには四種の敵が記載サイランされており!

誤載であれば、日本最高峰たる雄英において

恥ずべき痴態!!我々受験者は規範となる

ヒーローのご指導を求めて、

この場に座しているのです!!」

敢えて受験生にも聞ける為かその声は

プレゼントマイクには劣るが十分に聞こえる程の大声だ。

映司はプリントを見直すと先程

プレゼントマイクが言っていたのは三種。

確かにと騒めく声がちらほら聞こえ始めていた。

「ついでにその縮毛の君!」

すると眼鏡の少年は一人の少年に指を指す。

指を差されたのは何と緑谷で肩を跳ね上げ、

緑谷は挙動不審に自分に指を指した。

「先程からボソボソと…気が散る!!」

物見遊山のつもりなら即刻ここから去りたまえ!」

「すみません…」

ギロッと睨み付ける眼鏡の少年に注意された

緑谷は口を塞ぎながら小声で謝る。

「…おいおい、これじゃあ公開処刑じゃないか…。」
縮こまる緑谷の周りはクスクスと笑い声が聞こえてくる。
それに腹が立ったのか映司はボソツと呟いた。

『オーケーオーケー、受験番号7111番くん、

ナイスなお便りサンキューな！四種目の敵は0ポイント！
ソイツは言わばお邪魔虫！

スーパーマリオブラザーズやった事あるか!?

レトロゲーの！あれのドツスンみたいなもんさ！

各会場に一体、所狭しと大暴れしている『ギミック』よ！

倒せない事は無いが、倒しても意味は無い！

リスナーには上手く避ける事をオススメするぜ！』

「有難う御座います失礼致します！」

プレゼントマイクは分かりやすい様に説明すると

眼鏡の少年は90度しつかりとお辞儀をし、潔く席に座る。

あの眼鏡の少年を宥める為か、フォローを入れてくれたのか

さておき、映司はどこか安心した表情で

プリントを見直していた。

『さて！俺からは以上だ!!最後にリスナーへ我が校『校訓』をプレゼントしよう！かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った！『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えて行く者』と!! “Puls Ultra”
!!それでは皆！よい受難を！』

プレゼントマイクはそう言い残し話を終えると、

別の人が演説台へと上がり発言をする。

『…はい！それでは演習会場に案内致します！

これから会場への番号をお配りしますので、

皆さんは指示に従って行動してください！』

案内役の人は演説台から降りると受験生は、
ぞろぞろと席を立ち行動し始める。

映司は立ち上がりポケットに入れてた
鷹のコアメダルを一枚取り出し見つめる。

「…よっっー」

筆記試験は終えた、最後の実技試験に向かうべく、
演習会場へと向かうのだった。

No. 4 火野映司・オリジン

「うっわあ…！広すぎだろ…!?!」

火野映司は指定されたGの会場へとやってきた。
そしてその場所に圧感されていた。

建物やその膨大な敷地。これが全て英雄の所有物となると
どれだけ凄い高校なのか改めて実感できる。

「ねえ！そこのキュートなメダル使いさん！」

「えっ?」

緊張をほぐそうと背伸びをした瞬間、背後から
声をかけられ、火野は振り返ろうとしたその時。

急に後ろから抱きつかれ身体をワシワシと触りだしたのだ。
柔らかな感触が背中に当たり、映司は女性と

気付いたのか、慌てて振り払い距離を取り問いかけた。

「っ！ちよつ、なっ！何ですか急にっ!?!」

「おっと失礼っ！それよりもやつと会えましたね！」

これは運命の出会いと言うやつですよね!?!」

「は…い…?」

意味が分からなかった。ドレツドヘアーみたく
纏まったピンク色の髪にスコープの様な瞳をした
女の子、映司はそこそこ記憶力がいいので

こんな変わったのを忘れるのはほぼ有り得ない。

完全に初対面だ。だが一応映司は問い掛ける。

「えと、すみません、何処かでお会いしましたか?」

「いえー！全くー！」

「ですよね。」

「でも私は存じ上げていますよー！」

貴方ですね! 『仮面ライダーオーズ』！」

女性は映司に指を指した。

その発言に周りの受験生等が騒つき始める。

『仮面ライダーオーズ』って、あのヘドロ事件の…!?!」

「上空に飛んで気を失った人だ…！」

「まさかアレが生で見れるのか…？」

「また倒れるんじゃないかね？」

ざわざわと皆映司を見やる。あのヘドロ事件は

大きく新聞に取り上げられニュースにもなった出来事で、

知らない人は殆どいないだろうと有名な事件となっていた。

映司は半分納得して女性に発言する。

「ああ、君はこの力が見たくて声を掛けたの？」

「勿論っ！因みにそれを作ったのはもしかして貴方ですか？それとも別の方ですかっ!？」

「こ、これは多分俺の『個性』で物心着いた時に手元にあつたんだ。」

「個性っ!?!そのメカメカしい造形が個性なのですk」『はいスタートー!』

突然プレゼントマイクの声が聞こえ、

その会場にいた受験生達は困惑し始める。

『どうしたあ!? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ!! 走れ走れえ!! 賽は投げられてんぞ!!』

急な合図に驚き受験生達は一斉に走り出す。

「やばっ!と、とにかく話はまた後で!」

「お、もしかして見せてくれるのですかっ!?!」

「ええっ? ああもう!」

女性は興味津々と映司を見つめるが、映司は諦め

そのベルト『オーズドライバー』を取り出し腰に宛てがうと、ベルトが伸び装着される。

「おおおっ!!」

「君も早く行かないと合格できないよっ!?!」

「あ、大丈夫です! 私は!」

「ええっ?」

会話しながらも映司はバツタとタカのコアメダルを同時に、

そしてトラのコアメダルを真ん中のスロットに嵌める。
ドライバーを斜めにし、右腰の「オースキャナー」を
取り出すと待機音声が流れる。
そして、ドライバーに振りかざすと
小気味良い音がある場に鳴り渡る。

「変身！」

タカ！

トラ！

バツタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

「おおおおおっ！『変身』ですか！そうやって姿が変わるんですね！

このフォルム！この形！最高ですね！素晴らしい！！」

「と、とにかく俺は行くから！お互い頑張ろう！」

映司はそう言い残し、脚部の「バツタレッグ」が

緑色に発光すると、形を変え、能力解放状態となる。

そしてそのまま力を入れ勢いよく跳躍する。

「あー！待ってくださいーいっ！」

女の子は呼びかけるがもう既にオーズは点になる程
遙か彼方となり、姿を見失っていた。

（よしっ！痛みも反動も感じない！

他のメダルも使ってみたいけど、

この姿が一番安定するし、今はタトバで

どこまでやれるか試してみよう！）

跳躍しながらオーズはグツと拳に力を入れる。
彼はこの試験までの10ヶ月間、独自の鍛錬を行い、
今のオーズの姿、タトバコンボを何とか
使いこなせる様になっていた。
その自信を胸に秘め、オーズは演習場の中へと
入って行った。

☆☆☆☆

『標的確認！ブツ殺ス!!』

「来たな！・とりあえず！引っ付いてろ！」

演習場の中にて、早速現れた仮想敵^{ヴァイラン}。

ハイテクな技術で作られ、ポイントは1P！

脆い！速いぞ！と説明欄には書かれていた戦闘機。

目標を確認した目の前にいる人物は受験生の^{あわせようせつ}泡瀬洋雪。

彼は仮想敵^{ヴァイラン}の攻撃を避け、懐に潜り込むと

地面に手を当て白い物体が手の平から出現。

それを仮想敵^{ヴァイラン}に当てると溶接を試みたたく

くっ付いて動けなくなっていた。

「やっ！ー！1Pゲット！」

泡瀬洋雪

個性『溶接』

触れたモノ同士を分子レベルで結合できる！

生き物から無機物まで溶接可能。？ただし結合したいモノとモ

ノに

触れていないと発動しない！

『ブツ殺ス！ウゴケナイ！ブツ殺ス！ブチ殺ス！』

「言動怖すぎんだろ!?まあこの調子で他の

仮想敵^{ヴァイラン}も行動不能にすれば…」

車輪を回し必死に溶接をが剥がそうとするが

頑丈に固定され身動きが取れずにいる仮想敵。
泡瀬は一息付き、辺りを見渡した瞬間、
辺りが急に暗くなり、何か察したのか勢いよく振り返る。

『標的！確実にブツ殺ス！』

「うおっ!?不意すぎんだろっ!!」

現れた仮想敵はランチャーを背負った

3Pの戦闘機。

ミサイルを使うかと思いきや腕のアームを思い切り振りかざそうとしてきた。

「はっ!!」

その時、突然仮想敵は上空から

飛んできた物体に押し潰され破壊される。

それは紛れもなくオーズだ。

「あ、あんた…！へドロ事件の…！」

「大丈夫っ？襲われそうになったの見たから

身体が勝手に動いちゃって…、あ。もしかして

横取りしちやっただかな？だとしたらごめんねっ。

じゃ、俺も急いでるからっ！」

オーズは言い残すとバツタレッグで跳躍し、

ビルを壁キツクの要領で飛び、その姿を消した。

ぽかんと呆気に取られた泡瀬は我に返り、

辺りを再度確認する。

「もういないみたいだな…！にしてもアイツ…。

確か個性使いこなせてなかったっけ…？

いやいや！あれから何ヶ月経ってるんだ！

この日の為に努力してきたんだろっ。

俺も！負けてられねえぞ！」

バチンツと両手で頬を叩き、次の仮想敵を

探すべく走り出す泡瀬。

始まってから四分が経過し、現時点で残り六分となっていた。

☆☆☆☆

「ふっふっふー流石ですね。仮面ライダーオーズ！」
もう65Pですか！」

演習場のあちこちで爆発音が聞こえる最中、
ビルの屋上で戦闘機を次々と破壊していたオーズを
その女の子は見ていた。

発目はつめ明めい

個性『ズーム』

単刀直入で物凄く目が良い！

本気出せば五キロ先のものもクッキリだ！

『残り二分〜！』

「おやおや？もうそんな時間ですか？

もっと彼の活躍を拝見したいのですが。

もう少し近くまで行ってみることにしましょう！」

プレゼントマイクの声が聞こえ、発目は点を稼ぐ事は
諦めたのか屋上から降りようと振り返るその時だった。

『標的多数確認・全員ブツ殺ス・!!』

突然の地響きとどデカく聞こえる機械が軋む音。

受験生達は一斉に振り返ると全員上空を見上げた。

ビルを優に超えるその高さ巨体。

間違いなくプレゼントマイクが言っていた

OPの『お邪魔虫』、仮想敵だ。サイラン

「ちよーデカすぎんだろっ!？」

「マジかよー!あんなのに巻き込まれたら…!」

「に、逃げなきゃー!」

受験生達はその大きさに恐怖し、

パニックとなりその場から一斉に逃げ出す。

「えっと、これはポイント無しだったよね。」

逃げた方がいいのかな。

にしてもでつかいなあ…!

ここまでやるなんて流石雄英…!

ただ1人、オーズは立ち止まりその大型仮想敵をサイラン

眺めてはこれを用意した雄英校に感心すら抱いていた。

オーズはいけないと我に返り、その場から離れようとしたが、

ふと、ビルの屋上に目が入る。

「…人っ!？」

オーズの頭部“タカヘッド”の複眼が赤く発光する。

ビルの屋上にいたのは開始前に絡んできた

女の子、発目だった。

『…っ!』

大型仮想敵は腕のアームを大きく上げ、サイラン

勢いよく、発目があるビルへと振り下げ攻撃した。

「っ!!危ない!!」

衝撃で飛ばされている発目を見つけ、

オーズは右腰にあるオースキャナーを手に取り、

ドライバーへと振りかざし、コアメダルを転位する。スキャン

スキャンニングチャージ!!

音声が鳴るとオーズは頭部、体、脚部からそれぞれ

赤、黄、緑と発光し、飛び回ってたのとは比べ物にならない程の跳躍を見せる。

そして一気に発目との距離を詰めると発目を見事に抱き抱える。

「大丈夫っ!?!」

「ワオっ!来てくれたんですね!?

私は全然大丈夫なんでそのまま必殺技かましてください!」

「こんな時に呑気な事言ってる場合!?!」

わかった!ならしっかり捕まってる!」

「喜んでっ!ヒヤッホー!!」

そのまま大型仮想敵^{サイラン}の頭上を通過すると

オーズの真下に三つの三色の輪っかが発生する。

オーズはそのまま発目を抱き抱えたまま急降下し。

「せいやあああああっ!!!」

その技“タトバキック”が炸裂した。

渾身の一撃。必殺技とも言えるその威力は

大型仮想敵^{サイラン}に直撃し、

スクラップの様になり粉碎する。

オーズは上手く着地し、発目に安否を問い掛けるが

発目は無傷でその目を輝かせていた。

『はいー終了〜!!!』

直後、プレゼントマイクの声が響き渡る。

これにてヒーロー科の実技試験は幕を閉じたのだった。

No. 5 結果発表

「……雄英校入試試験5ヶ月前……」

「はああつ!!せいやああああつ!!うわあつ!」

仮面ライダーオーズに変身した火野映司は

誰もいない廃墟にて一人、その力を制御するべく独自の修行に励んでいた。

手作りの人型の的にタトバキックを入れようとするが

途中で力が抜け、変身が解かれ勢いよく地面へと

叩きつけられ転がる。

「いつてててっ…!やっぱり必殺技がダメか…」

変身っ、する時はっ、だいぶ慣れたけど、

これすると一気にしんどくなるんだよな…

あゝ、難題だなあ…」

映司はよろけながら立ち上がり、食糧が置いてある場所へと痛そうに座り込むと置いてあった水を喉が渴いたのかガブガブと飲み干す。

すると、そこに誰もいないはずの廃墟なのに、

人の気配がしたのか映司は身構える。

「誰かいるんですかっ…?」

「ああ、ごめん。驚かせたね。」

いやあ、あまりに凄い“個性”だったから

つい見惚れちゃって。」

建物の柱の影から姿を現したのは

同じ年齢くらいの少女だった。黒の髪に

白色のアッシュが目立つボーイッシュな髪型の女の子だ。

映司は気が緩み、ふうっ、と息を吐く。

「ここ、私のお気に入り場所なんだ。」

静かだし、誰もいないから。」

「えっ!? ああごめん! 思い切り練習場所として使ってた!」

「いいよいいよっ。面白いものが見れたんだもん。」

チャラってことだ。それに私が勝手に決めた所だから、別に好きにやっつけていいよ。」

「本当？ありがとう。そう言ってもらえると助かるな。」

「：ねえ、その腰に巻いてあるの、それが君の個性？」

女の子は映司のオーズドライバーに興味を示す。

「ああ、うん。そうだよ。物心付いた頃から

手元にあっつてき、このメダルを使って能力が出せるんだ。」

「へえっ！凄いつ！ちよつと触らせてもらってもいい？」

「いいよ。はい。」

映司は腰からドライバーを取るとメダルと一緒に

女の子へ渡す。女の子は興味津々とドライバーとコアメダルを色

んな角度から見えて観察し、

満足したのか映司にありがとうと言って返した。

「はく。面白いものが見れたあ：つと！

じゃあ私は行くね。修行頑張つてね！」

「うん、ごめんね。なんかお気に入り場所

横取りした感じになつちやつて：。」

「大丈夫！満足したし、それじゃあまたね。」

そう言い残すと女の子は手を振り、その場を去って行った。

それ以降、この廃墟でその女の子と出会う事はなかった。

☆☆☆☆☆☆

「な、何だあいつ!? デカイ仮想敵を

ヴァイラン

ぶっ壊しやがったぞ!？」

「あいつ確かヘドロ事件で気を失ってた筈だよな？」

「個性使いこなした…とか？」

「絶対そうだろう。あのバツタみたいな足で

片っ端から仮想敵^{サイラン}蹴り倒して行つてたぞ。」

「俺んとこ虎みたいな爪で敵を切り裂いてた！」

「高いところから周囲の様子を伺つてたけど、

あの人も鳥みたいなマスクで周囲の様子探つてたわ…。」

「三つの個性同時持ち?!?そんなんチートかよ!?!」

「てゆかつ、個性三つって前代未聞じゃないっ!?!」

試験終了後、鉄の塊となった大型仮想敵^{サイラン}の周囲に

ぞろぞろと受験生達が集まり、その光景を眺め驚き、

ガヤガヤと騒ぎ始める。

変身を解除した映司は発目明を降ろすと

ドツと疲れが出たのかその場に膝を突く。

「なるほど…そのチート級の力を使うと

反動も大きいのですね!まさにギブアンドテイク!」

「はあっ、はあっ…!んこ、この状況でも君は元気なんだね…。」

とゆか、君はいいの…?あのロボット倒してる

とこ見てないけど…!」

「あ、大丈夫です。私はやる事はやりましたので。」

「え…?」

その言葉に疑問を抱いていると、受験者等の間を

潜つてこちらに向かつてくる杖をついた老婆が現れる。

彼女は『リカバリーガール』。

英雄で看護教諭をしており、保健室の先生は勿論、

個性の治癒能力で完全回復してくれる

ドクターヒーローだ。

「お疲れ様々、お疲れ様々、

ハイハイハリボーだよ。ハリボーをお食べ。」

さ、怪我した子はいるか？直ぐに治してあげるからこつちにいらつしやい。」

老婆は受験生達にグミを渡し、怪我していた受験生に近づくとなんとチユウをした。

：治癒だけに？

とまあ、冗談はさておき、こうして

この雄英高校の入試試験は幕を降ろしたのだった。

★★★

その一週間後。

映司は結構なアウトドアな性格をしており家にいる事は殆どなかった。

それは親譲りで、彼の両親は共働りで政治家をやっており海外にまで出張するほど仕事熱心の親だ。

そして両親はほぼ家におらず、映司は

親の愛情を知らずに育つてしまいが、一人、

唯一手を差し伸べてくれる人がいた。

名は『泉いずみ比奈ひな』

「映司君、今日だよね？雄英から通知来るの。」

「うんっ。だから緊張しちやって昨日中々寝付けなくて…。」

「ちゃんと寝ないと身体に悪いよ？」

「分かってる…。」

彼女は親戚の子で、料理屋を店主と営んでおり、

映司とは小さい頃から面倒を見ているお姉さんの存在だ。

両親が帰ってこない一軒家で過ごしているが

こうして泉が直々来ては家事をしてくれている

よく出来たお人好しでその行為にすっかり

甘えてしまっているが映司も負けないくらいの

人好しでやる事はしっかりとやっている。

「…だ、大丈夫よ映司君！今までも大丈夫だったじゃない！

ほらっ、抽選会で一等絶対当てるって言ってたら本当に当たったし！」

「アレはたまたま。それとこれとは話違うよっ。」

点を取れたけど最後あのデカイロボット

倒しちゃったし：あれで不合格なんて事も：ああく：。」

映司は軽く塞ぎ込む。受験の合格通知は大体一週間か

遅くても二週間はかかり、その間の受験生は地獄の時間。

こうやって映司みたく、考え込んでしまうのもざらにある。

「もうっ！くよくよ考えない！映司君は凄い個性持ってるんだからきつと受かるよ！」

「…そう言う比奈ちゃんだってヒーローらしい

個性持ってるんじゃない。」

「なんか言った？」

「ごめんなさい。」

「もう、それに私映司君より歳上なんだから

〃お姉ちゃん〃 って呼びなさいっていつも言ってるでしょ？」

「今更でしょ、この呼び方の方がなんかしつくりくるし。」

そう言っつて映司は食卓に置かれてた味噌汁を啜る。

彼女の個性は『怪力』。

尋常ならぬ力の持ち主でなんのデメリットもない。

が、本人曰く女の子ぽくないと気にして

ヒーローは目指さなかつたみたいだ。

「ふう、〃〃馳走様。やっぱり比奈ちゃんの料理は美味しいな。」

「それこそ今更でしょっ。でもありがとう。」

〃〃飯を食べ終わると映司は食器を片付け、

自分の部屋へ戻り、そのままベッドに大の字で寝転がる。

「…：。そう言えば、緑谷君と爆豪君はどうなったのだろう。」

天井を見つめ、ふと考える。

爆豪の個性はヘッド口事件で折り込み済みなので

まず問題ないだろうとすぐ納得するが

緑谷に至ってはあの時個性も何も見せてなく

爆豪を助けようと足掻いていた。
ヘドロには効かない個性で使わなかったのかなと
考え込んでいる内に映司の意識は朦朧とし、
そのまま目を閉じ、深い眠りについたのであった。

☆☆☆☆

映司：

おい：映司……！
起きろ……！

誰かが呼んでいる。目を開けると暗くて
何も見えない世界がただ広がっていた。
でも呼んでいる事は確かだ。
その声は男性で、何故か聞き覚えのある声だった。

(…誰だろう…声が出せない…)

映司……！映司……！目を覚ませ……！！映司！！

「映司君！起きて！ふんにゆ〜う！」

「ふあっ?!いでででっ?!」

頬に痛みを感じ映司は飛び起きる。

何が起きたのか多少パニックになるが横には

泉がいて映司の頬を抓っていた。

「いたいっ?!何すんだよ比奈ちゃん!」

「これ！届いてたよっ！」

泉は一枚の封筒を突き出す。そこには封蝋がされおり、よく見ると雄英のシンボルマークが記されていた。

それは間違いなく、雄英からの通知だ。

☆☆☆☆

「……ふう、よしっ。せいやっ。」

いつの間にか夕方の時間帯になっていたこの時間。

映司は一人自身の部屋の机に座って封筒をがさつに破く。すると、一枚の黒いチップが卓上に転がる。

何かと思い触ろうとした瞬間、そのチップは光りだしその真上に映像が映し出される。

『んんっ！私が投影された！』

「わっ!?オールマイトっ!?!」

映像ドアップで映し出されたのは他の人とは違う画風のオールマイトが元氣よく発言した。

『驚いたかい!?いやあ最近のテクノロジーって奴は』

手の込んでる事してくれるよね！オジサンも正直びつくりだよ！ハッハッハ！…え？時間がない？

一言ぐらいギャグが有ってもいいだろよ？

：わかったわかったっ。』

映像の隅から男性らしき手が見えオールマイトに急かす様合図を送っていた。

『さてー本題に入ろう火野少年！君の筆記は』

ギリギリ合格点。勉強もうちよつと頑張ろね？

そして実技は65P！素晴らしい！文句無しの合格ラインだ！』

その言葉に映司は震え、一気に力が抜ける。

勉強は苦手な方だったので実技でカバーしようと思ってたが

65Pは合格ラインだったらしく、

映司は喜びの笑みを浮かべる。

『…まあ、まだ話は終わってないけどねっ!』

「え?」

『先の入試、見ていたのは敵サイランポイントのみにあらず!!もう一つの審査!!

レスキューポイント!!しかも審査制!!

全く君はあの少年と同様ヒーロー感満ち溢れてるね!

覚えてるかい!?どデカイあのロボットから救った一人の少女の事を!!』

そう言われて映司は「はっ。」と発目明を

救けた事を思い返す。

『我々雄英が見ていたもう一つの基礎能力!』

それは60ポイント!くう!久しく見たぞ!

総合ポイント「100」越えは!!文句無し的一位だぜ君は!

まあ君の合格なんて私はかなり予想してけどな☆

さあ来いよ!火野少年!

ここが君のヒーローアカデミアだ!!』

そして映像はそこで途絶えプツンと消える。

映司は手が震えている事に気付く。武者震いというものだろうと

解釈すると

「やっつったああっ!!」

ガタツと椅子から立ち上がり両腕を拳で突き上げる。

仮面ライダーオーズこと、火野映司、

彼のヒーロー人生はここから始まるのだった。

No. 6 入学という名の別れ道

「実技総合成績が出ました。」

ブウンとモニターが切り替わり、入試試験の最も高いポイントを獲得した順位が十名映し出される。

1位	火野映司	ヴィランP65	レスキューP60
2位	爆豪勝己	ヴィランP77	レスキューP0
3位	切島鋭児郎	ヴィランP39	レスキューP35
4位	麗日お茶子	ヴィランP28	レスキューP45
5位	塩崎茨	ヴィランP36	レスキューP32
6位	拳藤一佳	ヴィランP25	レスキューP40
7位	飯田天哉	ヴィランP52	レスキューP10
8位	緑谷出久	ヴィランP0	レスキューP60
9位	鉄哲徹鐵	ヴィランP49	レスキューP10
10位	常闇踏陰	ヴィランP47	レスキューP10

「救助ポイント0で2位とはなあ!!」

『1P』『2P』は標的を捕捉し近寄って来る。

後半他が鈍って行く中、派手な個性で寄せ付け

迎撃し続けた。タフネスの賜物だ。」

「対照的に敵ポイント0で8位。

アレに立ち向かったのは過去にもいたけど…

ブツ飛ばしちやったのは久しく見てないね。」

「思わず YEAH! って言っちゃったからなー。」

「しかし自身の衝撃で甚大な負傷…

まるで発現したての幼児だ。妙な奴だよ。

あそこ以外はずっと典型的な不合格者だった。」

審査員は爆豪、緑谷の成績を見て感想を話し合う。

爆豪はその個性で片っ端から寄せ付ける
仮想敵^{ヴァイラン}を破壊。

対して救助^{レスキュー}は性格相まって

周りの受験生に「どけ!」「殺すぞー!」などの
暴言を吐いていたので皆無。

方や、緑谷は仮想敵^{ヴァイラン}相手には

怖気付いたのか逃げ回ってしまっていた。

が、大型仮想敵^{ヴァイラン}出現した際は

瓦礫で足を挟んでしまった麗日を助けるべく、
その個性らしき「超パワー」で大型仮想敵^{ヴァイラン}
ぶっ飛ばし、麗日を救助する。

：が、その手足は反動なのかバキバキに折れ

その試験では行動不能となるが、救助P^{レスキュー}は

見事に獲得し、それぞれ二人は合格ラインを達した。

「んまあ、二人共凄いいけど…。」

「やっぱ一位の子だな!」

「周りを見る観察、敵を前にして戦える勇氣、

機動力に身体能力も素晴らしかったよ。」

「履歴書だと小学、中学は

特に平凡な学生生活をおくっているな。

あんな個性を持っておいて推薦がないのは珍しいよ。」

「聞いた話じゃ、個性を上手く制御できなかったらしい。

でも、この入試でそれも克服したってことだよな。」

「まさに“Puls Ultra”だな!」

その注目は一位、火野映司を見る。

ヴァイラン65レスキュー60、総合計は125と

歴代の高順位に入る程の成果を残している。

稀に見ない逸材とはこの事だろう。

(つたく、ワイワイと…。この試験は

本当「合理性」に欠ける…。)

一人、壁に寄りかかる男性は興味なさそうに、

ため息を吐いていた。

☆☆☆☆☆☆

春。：うん、春。

「映司君！ほら、ハンカチとティッシュユ！」

「ありがとう！ああっ、生徒手帳部屋に忘れた！」

「もお何やってるのっ！昨日の内に準備してないから

こうなるんでしょっ？」

「ごめん！」

時は流れ、入学日当日。年齢は15歳となり、いよいよ始まる高校生活。

新しい日々の楽しみ、それと緊張が昨夜の睡眠を妨げてしまい、朝からバタバタと荒れる映司と泉。

まあ初日の朝から慌ただしくなるのはよくある事だ。

それがあつてか映司は急いではいるが表情は微笑んでいた。

何せ新しい学園生活。しかも有名な名門の高校。

夢が叶う第一歩として今この瞬間はこれ以上の喜びがあるのだろうか。

「よしっ！じゃあ比奈ちゃん！行ってくる！」

「うんっ！行ってらっしゃいっ。」

映司は準備が終わり、玄関を開けて駆け出す。

その背中を見送った泉は何処か嬉しそうに見届けていた。

☆☆☆☆

雄英校 校内にて。

「ふああっ！雄英広すぎんだろ!？」

「やばいやばい！完全遅刻だっ!」

火野映司！行き道に困ってる人を

構ってしまつて学校完全遅刻！やつちまつた！

そして彼は自分の教室『1-A』へと目指し走っているが

その学校の広さもヒーロー級で中々教室に

辿り着けずにいた。が、そう思っている内に

教室へとたどり着いたが、そのクラスの前で

黄色の寝袋の男と生徒数名が見えるのを確認する。

「すみませんっ!!遅れましたっ!!」

「あっ！火野君っ!？」

「えっ?あっ！緑谷君っ!?!受かったんだね!よかつt」

「おい。遅刻して『先生』を前にして

よく再会の喜びなどできるな?」

緑谷が教室の前にはいた事に喜びを感じるのも一瞬。

その寝袋の男性の低い声が空気を一瞬で変える。

映司は察した、この人が担任なのだろうと。

「はあ。同じ事を言うのは嫌いだが、

初日だから遅刻も含めて特別だ。

俺は担任の相澤消太。あいざわしょうたよろしくね。

クラスの連中にも言ったが早速体操着こを来て

グラウンドに出ろ。以上。」

「え?..は、はい..。」

寝袋から取り出した体操服はさておき、

この異質な空気のまま映司達生徒は

初日からいきなり試験という名の授業を受ける事となった。

☆☆☆☆☆☆

「『個性』把握…テストオ!？」

「入学式は!?! ガイダンスは!?!」

「ヒーローになるならそんな悠長な行事、

出る時間ないよ。雄英は自由な校風が売り文句。

そしてそれは『先生側』もまた然り。」

相澤の発言に皆は啞然とする。

が、ここで意見を言っても聞いちゃもらえないだろうと、
納得いかないまま相澤の発言を黙って聞いていた。

「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、

持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈。

中学の頃からやってるだろ? 個性禁止の体力テスト。

国は未だ画一的な記録を取って平均を作り続けている。

合理的じゃない。まあ文部科学省の怠慢だよ。

：おい、爆豪。中学の時ソフトボール投げ何mだった?」

「67m。」

「じゃあ『個性』を使ってやってみろ。

円から出なきや何をしてもいい。思いつきりな。」

淡々と話を終えると、爆豪にボールを渡す。

爆豪は腕を慣らし、軽く準備運動をして投げる

位置の円の中へと入る。

「んじやまあ…死ねえ!!!」

FA BOOM!!

(…死ね?)

暴言を吐き、爆豪は投げる瞬間爆発で勢いを加算し、ボールは一瞬にして点となり飛んでいく。

映司は若干引いていたが、それは他の生徒等も同じ事を思ったはず。

そうこうしている間に相澤が持つ端末機から

『ピピッ』と何か知らせる様な音が鳴る。

「まず自分の最大限を知る。」

それがヒーローの素地を形成する合理的手段。」

そう言つて相澤が見せた端末機には、

『705.2m』と表示されている。

今爆豪が投げたボールの記録なのだろう。

「なんだこれ!!すげー面白そう!」

「705mつてマジかよ!?!」

「個性」思いつきり使えるんだ!!流石ヒーロー科!」

その数字に生徒等が一気にざわつき騒ぎ出す。

個性を使うのは今までの学校では

原則禁止とされていた。また別の高校に行つても

一部を除いてはそれは変わらなかつたのだろう。

その縛りから解放されたかのように生徒は湧き上がっていた…が。

「…面白そう…か。」

ヒーローになるためのこの三年間、

そんな腹づもりで過ごす気なのかい?」

その空気が静まり返る。一人、『面白そう』と言つた

金髪の少年は俺のせい?と言わんばかりに指を指すが

相澤の言葉は終わらず、それを発言した。

「よし。トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し、除籍処分としよう。」

「「はあああつ!!」」

その爆弾発言にこの場の空気が変わる。

「ちよつ！ちよつと待ってください！」

それはいくら何でもおかしいですよ!?

皆んなこの雄英に入る為に必死に努力したんですよ!?

それをいきなり除籍だなんて：！」

「だから何だ火野。お前は試験の総合結果が

一位だからって俺は甘やかすつもりはない。

ヒーロー目指すたる者、そんな生優しい覚悟じゃ

この世界はやっていけねえ。それに除籍は

最下位と言ったはずだ。お前ぐらいの優等生なら

この課題くらいどうって事ないだろう？

これ以上の文句があるなら問答無用で除籍にするぞ。」

「ぐっ…！」

納得が行かなかった火野は反抗するが

除籍の言葉に押し返され悔しそうに引き下がる。

「生徒の如何は俺達の『自由』！」

ようこそ、コレが雄英高校ヒーロー科だ。」

相澤は不吉な笑みで生徒等を見下す。

初日初、生徒等の人生の別れ道となる授業が

今、始まるのだった。

No. 7 個性把握の体力測定

「自然災害…大事故…身勝手な敵達…ライオン

いつでもどこから来るか分からない厄災。

日本は理不尽に塗れてる。そういうピンチを覆していくのがヒーロー。放課後マツクで

談笑したかったならお生憎。これから三年間、

雄英は全力で君達に苦難を与え続ける。

Puls Ultraへ。全力で乗り越えて来い。」

相澤は戸惑い困惑する生徒等に向け現実を叩きつけ
そして挑発するように皆を見下し発言する。

「さて、デモンストレーションは終わり。

ここからが本番だ。お前等自身の実力を知れるいい機会だ。
ある意味、入学後のコミュニケーションってやつだろ?」

((一理あるけど違うう…))

不気味な笑みで彼なりのフォローかジョークか分からないが、
当然重々しい空気で言われても心の中で
突っ込むぐらいしかできなかった。

「最初は50m走だ。二人で順番に走ってもらう。

呼ばれた者は位置につけ。飯田、蛙吹。」

「はいっ!」

「ケロっ。」

「(あの眼鏡の子受かってたんだ:。)

:てか最下位は除籍か:。:ダメだ!俺だつて
入学したくて入ったんだろ!今は全力で

この個性把握テストに取り組むしかない!」

飯田を見て映司は軽く首を振る。自身が最下位なら

他の人が落ちなくて済むと考えていた。
火野はドがつく程お人好し、その優しさが
時々痛い目を見ることが何度かあったが
本人はそこまで気にしない性格。
だが、今回雄英という重荷は違うのだろう、映司は
真剣な表情で走り終わる飯田の記録を見る。

『3秒04!』

「ほぼ3秒!」

「あいつ早すぎだろっ!」

重かった空気が一気に湧き出し騒ぎ出す生徒等。
相澤ももう面倒なのか何も言わずに名簿にチェックする。
ふと、脹脛からマフラーが飛び出てドルルルと
エンジン音が聞こえ、飯田は自分の記録を見るなり
不満だったのか表情が険しくなっていた。

飯田いいた 天哉てんや

個性『エンジン』

見たまんまだ!足が速い!
燃料は因みに100%オレンジジュース!
炭酸系はエンストを起こすぞ!

『5秒58』

「ケロ.:。」

飯田の記録を見て驚くのも束の間で
蛙吹も続けてゴールした。

「次、麗日、尾白。」

「はい!」

「は、はいっ！」

記録帳にチェックをし、直ぐに相澤は次の二人を呼び指定の位置へと立つと麗日は自分の服や靴に手を当て始める。そして合図が鳴ると、普通に走った。

一方で尾白は個性であろう尻尾を地面に叩きつけカンガルーの様に飛び跳ねゴールする。

『6秒45』

「ひくっ！」

『7秒15』

「あ、中学の時よりタイム上がってたっ。」

麗日お茶子

個性『無重力』
ゼログラビティ

触れたものにかかっている引力を無効化する！
ただし、キャパオーバーすると激しく酔う！

「ふう：：タイムは上がったけど

思ってたより普通だったな：。」

「お疲れ様、凄い尻尾だね！君の個性？」

「あ、ああ。まあこれしか取り柄ないんだけどね。」

映司は尾白に声をかけ、その強靱な尻尾を見せて

尾白は溜息を吐く。そんな事ないよとフオローするが彼の表情は苦笑だ。

尾白猿夫

個性『尻尾』

強靱な尻尾が生えているぞ！

第三の手にするもヨシ！

移動、攻撃ツールにするもよし！

仰向けに寝転がれない、寝返りが辛い、

イスに座りにくいのが難点だ！

「次、青山、芦戸。」

「フフツ☆」

「はあい！」

息つく間もなく次の二人が呼ばれる。

「フフ… 皆工夫が足りないよ。」

個性を使つていいってのは、こういう事さ！」

スタートの合図が鳴ると見るからに

ナルシストっぽい青山は後ろ向きで

ジャンプすると腰のベルトから粒子の光が集まり

眩い光線が射出された。

一方で芦戸は驚きはするが遅れず両足から

液体の様なものがドロドロ出ており、

それを活かして滑る様にコースを駆ける。

これは青山が一番かと思いきや、途中で光線が切れて

ドシャッと地面に落ちるが気にせずもう一度射出し、

芦戸、青山の順番でゴールする。

『5秒40』

『5秒51』

「1秒以上射出すると、お腹壊しちゃうんだよね。」

青山優雅

個性『ネビルレーザー』

へそからレーザーが出る！

持続時間がネックだ！

((何だこいつ：。))

芦戸を含め生徒等は額から汗をたらりと流す。

「次、爆豪、緑谷。」

「へっ！」

「は、はいっ！」

続いて爆豪と緑谷が呼ばれ位置に着く。

二人を知ってる映司はその実力が観れると半ばワクワクして彼らを見届けると、合図が鳴り二人は駆け出す。

意外と普通に走る二人だが、仕掛けたのは爆豪だ。

「爆速!!ターボ!!」

「どあっ!？」

『4秒13!!』

『7秒02』

両手を後ろに向け手の平から爆発を起こし、

その勢いでゴールする。対して緑谷は特に個性を使わず

爆発で邪魔されたものの、すぐに大勢を立て直し

普通にゴールした。

爆豪勝己

個性『爆破』

掌の汗腺が変異している！

ニトロのような汗を出し自在に爆発させる！

動けば動く程大量の汗を流して本領発揮！

つまりはスロースターターのなやつだ！

ちなみに、汗は無臭らしいぞ！

「：次、火野、峰田。」

「あ、はいっ。」

「はいー！」

出番が来た映司とだいぶ小柄な身長の峰田が呼ばれ走って位置につくと、生徒等がざわつき始める。

「おいつ、あいつの出番みたいだぞ。」

「へドロ事件じゃ気を失ってたみたいだな。」

「でもここにいてるってことは

あの個性使いこなせたんじゃないか？」

映司が確認した限りここにいる生徒は

同じ試験会場にいなかった連中だ。

恐らく皆試験の活躍を知らないから疑問に思うのだろう。

映司は気にせずオーズドライバーを腰に装着し、

複数のコアメダルを取り出す。

「先生、ちよつと変身してもいいですか？

じゃないと本気出せないんで…。」

「早くしろ。てか見てる時にやればよかつただろ。」

「す、すみませんっ。」

ギロリと睨む相澤に慌てて映司は三枚のコアメダルを
手に取り、三つのスロットに嵌め込む。

「…あれ？」

ふと、一人その異変に気付く。緑谷だ。

「三つ目のメダル、色が違う…。」

映司が嵌めたメダルは赤、黄、そして緑、

の筈だったが、今嵌めてる三つ目は黄色のコアメダルだった。

「えっと、峰田君？ちよつと離れててくれるかな？ごめんね。」

「え？あ、ああいいぞ。」

峰田に距離を取る様頼んだ映司はドライバーを

斜めにし、右腰の“オースキヤナー”を手に取り、

ドライバーへと振りかざしスキャン転位した。

「変身。」

タカ！

トラ！

チーター！

音声は鳴り響くと、映司は仮面ライダーオーズとなるが、タトバではなかった。

脚部は胴体の虎と同様、黄色で飯田の様なエンジンの様な造形が見受けられる。

これはオーズの「亜種形態」と言われるフォーム。タカ、トラ、チーターときて名はタカトラーター。

「おおっ！生！変身！」

「てか、足の色違くない？確か緑だったよな？」

「チーターって言ってた！」

「どーなってんの!?あの人の個性!？」

この授業で一番騒ついてるんじゃないかぐらい騒ぎ出す。

その中で、爆豪だけが何故か殺気立てた様な

目付きでこちらを睨みつけていた。

「おおおお前!?すげえなっ!!何だよそれ！」

かつこよすぎだろ!?ちきしょー！」

「おいっ。騒ぐな退学にするぞ。」

シーン……

隣で見ていた峰田を含め、生徒等全員ビビったのか相澤の発言に静まり返る。

気を取り直して位置につく二人に判定していたロボットが旗を掲げる。

『よーい…、ドンっ!!』

旗を降ろした刹那。空気が押し退けられる様な

音が聞こえ、スタート地点にいた筈の

オーズが消えていた。

皆がえっ?と一瞬困惑していた瞬間だった。

『…0.9秒!?0.9秒!?!』

「えっ…?」

「二「ええーっ!!」二」

「マジかよ!?一秒を切ったぞあいつ!」

「あのエンジンの奴よりはええっ!」

「っ!!お・僕もまだまだみたいだな…。」

ゴール地点にいたロボットが記録を出す

と緑谷を一番に全員が声を上げる。

隣にいた峰田も啞然としたのが遅れてしまい

特に個性を使わず、記録は『8秒50』となった。

皆そのあり得ない記録に驚愕していたが、

もう一つ、今度は困惑していた。

それはゴール地点にオーズがないことだ。

「すーすみませ〜ん!」

オーズ事映司の声が聞こえる。

それはゴール地点より遙か遠くの場所からだった。

トンっ、トンっ、と地面を蹴りスキップの要領で

オーズはこちらへと帰ってきたのだ。

「…火野。50mだぞ?誰が何百mまでと言った?」

「はあ…!はあ…!す、すみません!」

この足の力…!まだ制御しきれなくて止まるのに

時間がかかってしまいま…した…!」

「…まあいい。次、瀬呂、砂藤。」

「はい!」

「おっす!」

オーズは相澤に謝り待機している場所へそのまま戻ると生徒等は

我先にと質問をする。

「おおい火野つつったか!?お前どんな個性してんだよ!」

「まさか他にもまだあるのかっ!」

「あ、うん…。あと何枚かあるよ。」

一度に使えるのは顔、体、足の三枚。

この動物の力が宿ったメダルを使い分けて戦うのが俺の力なんだ。」

「すげー!!」

側から見れば彼の個性は無敵、と言える程。

既にとんでもない記録を出して他の生徒の

差を見せつけているが、相澤は何か思ったのか

記録を付け終えオーズを見遣る。

「〃個性〃を最大限に使い、各記録の伸び代を見れば、

何が出来て何が出来ないか浮き彫りになる：。

それは己を活かす創意工夫に繋がる：。

火野：、こいつはとんでもない奴が入学してきたもんだ。

要・注・意・人・物・と・し・て・入・れ・て・お・か・な・い・と

後々面倒になりそうだな：。」

そして第一種目が終わり、

次の第二種目の準備が行われた。

火野映司

個性『オーズ』

オーズドライバーとコアメダルを使って

仮面ライダーオーズとなり、その力を発揮する！

メダルの組み合わせによって臨機応変と

様々な動物の力を使い分けれる！

チート並みの身体能力となる最高最強の個性！

勿論、日々の修行あってこそだ！

本人曰く、使い慣れてないと急な負荷が掛かって

倒れてしまうらしいぞ！

No. 8 その個性をどう使うか

「使うなら、このメダルだな！」

タカ!

ゴリラ!

バツタ!

「ふんっ！」

第二種目の握力へと移行した火野映司事

オーズは二枚目のメダルを「ゴリラ」のメダルを

選びオーズは「タカゴリバ」へとフォームチェンジし、

握力測定器を握る。だが、

バキッ!

「あ。」

鈍い音が響き恐る恐る測定器を見ると粉々になっていた。

「「壊しやがった!!」「」」

「ああ!相澤先生ごめんなさい!」

「いや、いい。火野、記録は測定不能だな。

他の皆もこれは個性を測るテストだ。

道具はいくらでもあるから壊しても構わないからな。」

相澤はそう言つて記録帳に書き込み、オーズは

生徒の所へと移動すると案の定、

男子の生徒等は声をかける。

「測定不能つて化け物かよ!?!」

「さっきの障子^{しょうじ}つて奴も凄^{しやうじ}かったけど

凌駕しやがったぞ!流石つてかちよつと引くわ!」

「あはは…この姿になると身体能力も底上げするから

普通の動物の比じゃない力が出ちゃうんだよね。」

オーズは濁して溜息を吐く。

先程の障子という名の生徒は個性を使って記録は『540kgw』という驚異的な記録を出すが、

オーズはそれを遙かに上回る記録を出してしまう。それは引かれても当然つと言えば当然になる。

次々と男子生徒は個性を使って記録を出していき、続いて女子生徒の出番が回ってくる。

女子は個性を使っても数値はそれ程期待できないと皆は判断したのかあまり注目していなかったが

一人、その脅威的な記録を出して注目を浴びる。

「やおよろず八百万、記録、測定不能。」

「先生、この『プレス機』は『1t』が限度ですわ。

なので正確には1tでお願いします。」

「わかった。」

「『っ!!?』」

八百万という少女の横には工場などで使われている小型のプレス機が置かれていた。

恐らく個性なのだろう、それを使いオーズに

引けを取らない記録をだし、驚愕する。

「：世の中色んな個性がいるもんだなあ。」

「おっぱいがいい感じだね。」

「何だっ?」

オーズは感心していると隣の峰田が共感したいのか

聞こえる声でボソツと呟くが、余りに卑猥な発言でわざと聞こえないフリをしまっていた。

☆☆☆☆

第三種目 立ち幅跳び

タカ!

トラ!

バツタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

「せえっつ、のっ!!!」

タトバコンボにフォームチェンジしたオーズは

脚部のバツタレッグを能力解放状態にし

勢いよく腕を振るって高く跳び上がると

凄まじい跳躍で用意されていた範囲を余裕で超えてしまい、

遙か遠くで着地する。勿論英雄はそれも想定内なので

記録はしっかりと数値化される。

「火野、190m。」

((もう何でもアリだな。。。))

「あれ？皆んなどうしたの？」

「いや、突っ込むのも、もう疲れたっつーか。」

「才能マンすぎるだろ。。。とりあえずお疲れす。」

戻ってきたオーズは反応に疲れたのか軽く遇らわれると

次々と跳躍し、男性陣は青山、爆豪と高記録を出し

轟という少年に至っては氷の個性で120mを叩き出す。

そしてまた、女性陣から驚く記録を耳にする。

『160m!!』

「おお！麗日さんすげえ！」

「火野君よりは行けてないけど現実に戻れた気がする！」

麗日さんナイスっ！」

「あ、ありがとう。。。。」

麗日は自身を個性で浮かし、ふよふよと飛んで

記録を出すと若干顔が青白くなりながら戻ってきた。

☆☆☆☆

第四種目 反復横跳び

「ひゅううう!!!」

「凄い！残像が見える！」

ここで開花したのは峰田だ。

頭からもぎ取った紫色のボールみたいなのを

両サイドに大量にくっつけると峰田はボールに反発し、

凄まじいスピードでぶよぶよと跳ね返り、結果は

『156回』とA組一位の記録を出していた。

一方でオーズはタトバのコンボで『75』回と

雄英高で割と普通な記録を出した。

本人曰く力の加減が難しいとのこと。

「爆速！オラオラオラオラオラア!!!」

方や爆豪も器用に爆破を左右交互に放ち

『132回』と峰田には劣るが高記録を出す。

「くそが！」

「ば、爆豪君つ、十分凄い結果じゃないか。

そんな悔しがる事ないと思うよ。」

満足いかない爆豪は悔しがる。

その姿を見たオーズは励ましの言葉を入れるが、

これが逆効果となるのはこの時はまだ知らなかった。

「つるせえ!!俺は完膚なきまでの「一位」を目指す！」

そのつもりだった！雄英合格も！演習の実技も！

あのクソナードとてめえのせいで台無しなんだよ!!

これ以上喋ると殺すぞ！」

今にも殴りかかりそうな勢いで言い放ち、

オーズの肩に自身の肩をぶつけその場から

離れようとしたが、黙っていたオーズは振り返って爆豪を呼び止める。

「殺すって言葉。やめたほうがいいよ。」

「…あアっ?」

険悪な雰囲気の流れ始める。

爆豪のその性格はA組全員が把握していたが

初日で揉め事になるのは誰もが予想外だった。

一番彼をよく知っている緑谷も汗を流して二人を見る。

「入試の時もだったけど、お前の

その言葉で簡単に死んでしまう人もいるんだ。」

「何が言いてえんだ?」

一見温厚に見えていた火野の口調が変わり、

流石の相澤も気づき、記録帳に書き込むのを辞め、

二人を睨む。

「何って簡単な事だろ?」

「『ヒーロー志望』がそんな言葉使うなよ。」

「てめえ…!」

「いい加減にしろっ!」

爆豪は手の平から火花を散らし、

今にも飛びかかろうとした瞬間、相澤の喝が入り

その場の全員がビクツと肩を上げる。

「これ以上面倒事起こすな。爆豪、火野。

初日から突つかかるのはいいが、

除籍覚悟でやってんだろな?あ?」

「す、すみません…。」

「…ちっ。」

我に返ったオーズはすぐに謝罪、

爆豪は舌打ちをして黙り込む。

「はあ。ったく。」

皆んな、初日から喧嘩せず仲良くするんだぞ。

じゃ、気を取り直してやるぞー。」

(((いや、ちょっと無理があるぞ：。()))

相澤なりの気遣いなのかいかにも棒読みの掛け声に
気まじくなつた生徒等はしぶしぶと残りの
種目をこなしていくのだった。

☆☆☆☆☆☆

第五種目 ボール投げ

「えいっー！」

麗日がボールを投げると個性の力により、
ふよふよと落ちる事なく飛んで行く。

相澤が確認し、それを見せた端末には、
『∞』と有り得ない数値が出されていた。

「∞!!?すげえ!!∞が出たぞー!!!」

赤髪の少年 きりしま 切島が叫ぶ。

彼は自身を堅くする個性で、シンプルだが
身体能力はこのクラスの中では上位実力を
発揮した記録を出している。

残り三種目となっているが各々得意不得意と
個性を使い、その差を埋めていく。

が、一人何ら一般人と変わらない
記録を出す生徒がいた。

緑谷だ。

「緑谷くんはこのままだとマズいぞ…?」

「つたりめーだ。『無個性』のザコだぞー！」

その言葉にオーズも「え？」と反応すると直ぐに飯田は爆豪に驚いた表情で言い返す。

「無個性？彼が入試時に何を成したか知らんのか!」「はっ!？」

その飯田の発言に驚く爆豪だがオーズもだ。

確かに緑谷はへ今回の体力測定は

まだ一回も個性を使っていない。

ヘドロ事件の時もそうだったが、あのあの時は

流動体の身体ヴァイランの敵だった為、

相性の悪い個性だったのかと思いついたと

考えていたが、先程爆豪が言った

“無個性”と言うのも気掛かりになる。

もし緑谷が無個性なら入試を合格するのは

まず不可能だからだ。

緑谷は位置に着くと何か決意した表情になり、

腕に力を入れ思い切りボールを投げた。

が、ポトつと音と共に落ち、記録は『46m』。

「な…今…確かに使おうって…?」

「個性を消した。つくづくあの入試は…」

合理性に欠くよ。お前のような奴も入学出来てしまう。」

そう言うって緑谷に近づいて来たのは相澤だ。

だが彼の髪は逆立って目は赤く光っている。

その言葉を聞いた緑谷は何か思い出したのか表情が変わる。

「消した…!!あのゴークル…そうか…!」

視ただけで人の“個性”を抹消する“個性”!!

抹消ヒーロー『イレイザーヘッド』!!」

「イレイザー？俺…知らない。」

「名前だけは見たことある！アングラ系ヒーローだよ!」

ざわざわと騒ぎ出す。

オーズもそこそこヒーローに関しては勉強していたのでそのヒーロー名を聞いて思い出していた。

確か、イレイザーヘッドはその個性で相手の個性を消し、首に巻き付けてある捕縛性の布で捕らえる戦い方をする。余り世間に知られていない理由はメディア嫌いとネットに書かれていたからだだった：はずだ。

「見たとこ…：「個性」を制御出来ないんだろ？」

また行動不能になって、誰かに助けて貰うつもりだったか？」

「そつ、そんなつもりじゃ…！」

否定しようとする緑谷に首に巻かれた布を巻き付け引き寄せる。

「どういうつもりでも、周りはそうせざるを

えなくなるって話だ。昔、あつくるしいヒーローが

大災害から一人で千人以上を救い出すと言う伝説を創った。

同じ蛮勇でも…：お前のは一人を助けて木偶の坊になるだけ。

緑谷出久、お前の力じゃヒーローにはなれないよ。」

相澤は緑谷に圧を掛ける。

飯田と麗日、あと数名は何か知っているのか

心配そうな顔をしているがその他は何を言ってるのか

全く状況が掴めない状態だった。

話終わると相澤は個性を消して緑谷にボールを渡していた。

どうやら二回目を投げさせる気なのだろう。

「彼が心配？僕はね…：全っ然☆」

「ダレキミン？」

「どうやら指導を受けていたようだが…。」

「除籍宣告だろ。」

ブツブツと何か独り言を言いながら緑谷は

投げる円の中へと戻っていく最中、

青山は麗日に、飯田の発言に爆豪は、と

個々のやり取りをしていたが、

オーズは緑谷を仮面越しに見届けていた。

緑谷は覚悟を決めて思い切り片足を地面から離す。

オーズ、火野は確信していた。
彼は、そんなやわな男ではない。
誰もが苦戦し助けられないと諦めかけた中、
真っ先に動けた男なんだと。

「行け！緑谷君っ!!」

「SMASH!!」

緑谷は叫び、そのボールは尋常じゃないスピードで
上空を通過し、点となる。

その後、相澤の端末から音が鳴り、
相澤は記録を見て目を見開いていた。
その記録は『705・3m』だった。

「先生……まだ・動けます!!」

「こいつ……」

個性を使った緑谷の投げた手の中指が赤く腫れ上がり、
見てるこつちが痛々しく見えたが、

本人はグツと押し殺す様に握りしめて
涙目になり相澤に言う。

それを見た相澤はやりやがったと言わんばかりに
初めて喜ぶ顔を拝ませたのだった。

No. 9 雄英の特権

「705m!?!」

「やっとヒーローらしい記録出したよー!」

「指が腫れ上がっているぞ!入試の件といい…

おかしな『個性』だ…。」

「スマートじゃないよね。」

緑谷の個性が発動させ、脅威的な記録を叩き出し
切島、麗日、飯田、青山と騒めく。

「…!!?!」

一方で隣で見ていた爆豪は、

目を見開いて口を開け驚いていた。

何を思ったのか爆豪は怒りを露わにして緑谷へと駆け出す。

「どーいう事だコラ!訳を言え!デクてめえ!!」

「うわああ!!」

緑谷はビビって硬直状態となり、オーズ事映司は

まずいと思ったのかその後引き続き駆け出そうとしたその時。

「ぐえつ!」

手の平の爆破が消え、爆豪の身体に布が巻きつかれる。

どうやら相澤が個性を使って止めたみたいだ。

「ぐっ…!!んだ、この布、固っ…!!」

「炭素繊維に特殊合金の鋼線を編み込んだ

『捕縛武器』だ。まったく、何度も『個性』を使わすなよ…。

俺はドライアイなんだ!」

((個性凄いのにもったいない!!))

恐らく全員がそう思っただろう。

戦意喪失した爆豪を見て相澤は布を解き、
個性を解除して常備しているのか目薬を

両目に指していた。

「時間が勿体ない。次準備しろ。」

相澤の言葉に生徒は返事をし、残りの種目の準備をし始める。

「指大丈夫？」

「緑谷君大丈夫？君の個性反動が凄いなだね。」

「ああっ…うん。平気だよ…っ。」

麗日とオーズは緑谷に駆け寄る。

緑谷はそう答えるが余程痛いのか

涙目となつて指を手で押さえていた。

緑谷出久

個性『超。パワー』（映司等視点）

超人的なパワーを發揮する！

だが使えばその反動も凄まじく

使ったその場からバツキバキ！

まさに諸刃の剣つてやつだ！

☆☆☆☆

あ後は残り三種目、上体起こしと持久走、

長座体前屈だったが前半で盛り上がりすぎたのか

スムーズに事は終わり今全種目を終え、

相澤の前に生徒等が集合していた。

短直に上体起こしは尾白、常闇、蛙吹が高記録を出し、

八百万は腹筋マシンの道的な道具で一位の記録を出しており、

持久走も同じく八百万が一位の記録を出し、

なんと個性で原付を作り出し走行していた。
絵的にもシユールな光景で思わず笑ってしまうのもしばしば。

一方でオーズは脚部をチーターのコアメダルを選び
タカトラーターとなって挑戦したが制御が効かず
開始一回目にしてフルスピードを出して
思い切りコースアウトしてしまい、最下位となってしまう。

「臨機応変といっても個性を持って余すだけじゃ

ヒーローは務まらない」と相澤に指摘され

意外にも落ち込んでいたらしい。

最後の長座体前屈は八百万が個性で鉄のパイプを、出し
またもや測定不能という記録を残していた。

その次に障子、常闇、瀬呂と高記録を出していた。
そして。

「んじゃパッと結果発表。トータルは単純に

各種目の評点を合計した数だ。口頭で説明するのは
時間の無駄なので、一括開示する。」

相澤が端末を操作してその映像が空中に投影され、
全員は我先にと言わんばかりに自分の名前が
どの順位かを探す。結果はこうだ。

- 1 八百万百
- 2 火野映司
- 3 轟焦凍
- 4 爆豪勝己
- 5 飯田天哉
- 6 常闇踏陰
- 7 障子目蔵
- 8 尾白猿夫
- 9 切島鋭児郎

- 10 芦戸三奈
- 11 麗日お茶子
- 12 砂藤力道
- 13 蛙吹梅雨
- 14 青山優雅
- 15 瀬呂 範太
- 16 上鳴電気
- 17 耳郎響香
- 18 葉隠透
- 19 峰田実
- 20 緑谷出久

「一位：当然ですわ。」

「ああ!?何で四位何だよクソが!!」

「俺：あのナルシストに負けたのか：。」

「あつぶねえ：ギリギリセーフだぜ：。」

「ケロ：私もまだまだね：。」

各々がその評価を見て納得いかない者もいれば

己の力がまだまだだと反省する者がいたが

一人、絶望の表情で固まっている緑谷がいた。

最下位：。それは相澤に指令されていた

除籍という結果になっていたからである。

変身を解除した火野は緑谷に声を掛けようとするが

その手は留まり、俯いていた。

ここで声をかけても同情されるところだけだ。

そしてここは雄英、ヒーローになる為には

犠牲は付き物と言うが勿論火野は納得していない。

だが、自分が高記録を出した彼に

何て言えばいいか分からない。

悔しそうにする火野。

すると、相澤が急に順位のグラフを消し出す。

「!..うん、よろしくっ。」

ぎこちない挨拶。けれどもそれはお互いの関係を深める挨拶。入試の時間にお互い頑張ろうと誓ったあの日から今日までを待ち望んでいたのかもしれない。

二人は無事入学し、その喜びをほんの少し噛み締めていた。

☆☆☆☆☆☆

ー 雄英高校の二日目 ー

午前は必修科目・英語等の普通の授業!

「やっべええー!消しゴム忘れたあ!!」

「そんな事で騒がないで下さい峰田さん。」

はい、これあげますわ。」

「(八百万の肢体から出てきた消しゴム:やおゴム:!

くう:!!全体的に卑猥!!)ん?これ:

スゲエ!!めっちゃ綺麗に消えるう!!

キングオブケシゴム

K O Kだぜコレ!!」

「峰田君、五月蠅い。」

...普通!

昼は大食堂で一流の料理を安価で頂ける!

「火野君それってふおあぐらって食べ物だよね?

「ここの食堂やばっ!」

「あ、麗日さん。俺色んなところ行くの好きで

外国の料理とかもよく食べてたんだけど

ここの料理すっごい美味しいね!

アメリカの三つ星レストランよりも

下手したら美味しいかも。」

「三つ星レストラン…!?金持ちや!!」

会話も至って普通!!

そして、午後の授業！いよいよ待ちに待った
ヒーロー基礎学！

「わーたーしーがー!!」

普通にドアから来た!!!」

H A H A H A H Aと字幕が見えそうな笑い声と共に
教室へやってきたのはヒーロースーツを着用した
オールマイトだった。

その画風故に存在感が凄すぎて何人かは鳥肌が立ち
震え、歓喜を見せた。

「オールマイトだ…!!」

すげえや本当に先生やってるんだな…!!!」

「銀時代のコスチュームだ………!!」

画風が違いすぎて鳥肌が………!!」

切島の言う通り、そのコスチュームは
数年前、オールマイトが世に知らしめた時の戦闘服で
数々の事件や救助をこなした平和の象徴と飾るべき姿。
誰もが圧倒、勇気、そして憧れを抱いた時期。

オールマイトはやや大袈裟に腰を捻り、

『battle』と書かれたカードを見せる。

「ヒーロー基礎学…ヒーローの素地を作る為、

様々な訓練を行う課目だ！単位数も最も多いぞ！

早速だが今日はコレ!!戦闘訓練!!!」

「戦闘…訓練…!!」

緑谷は呟く。すると、オールマイトは腰から
リモコンみたいな端末機を取り出しボタンを押すと

正面から左側の何もない壁から四列の棚が
ゆつくりと出現する。その中には1から20と
番号の書かれたアタッシューケースな様な物が
入っているのを確認する。

「そしてそいつに伴って……こちら!!!」

入学前に送って貰った『個性届』と『要望』に
沿ってあつらえた……『戦闘服』!!」

「コスチューム
戦闘服!!」

おおおっ!とクラスは盛り上がる。

オールマイトの言う通り、入学前に書類と共に送られた
コスチュームの要望書。ヒーロー科は自身の要望を
書き込み、雄英のコスチューム制作会社が

その要望以上の仕上がりとして生徒等に配られる。

「着替えたら順次、グラウンド・βに集まるんだ!!」

「二はい!!!」

オールマイトは先に教室から出ると

生徒等は自分の出席番号のケースを取り出して行く。

火野も『17』と書かれていたケースを取り出す。

が、本人は他の人等よりもそこまで嬉しそうな
表情はしていなかった。

「お?どした火野。」

「いや、俺のコスチュームってアレだから……。」

「……ああ!そっか!お前変身したらもう

あの姿コスチュームだもんな!」

声を掛けた上鳴が納得する。

火野は変身してオーズとなるがその見た目は初見から見てもコス
チュームと言えば納得できる姿だからだ。

「なら、その中何が入ってたんだ?」

「まあ動きやすい私服かな?」

「そこはもうちよつと考えとこーぜ!？」
「んー、まあ俺は気にしないよ? さっ!
早く行こう! 皆も早く着たいだろ?」
砂藤に続き、瀬呂が加わる。
入学して二日が経過したが、このクラスの生徒は
かなりフレンドリーな人達で素性をろくに知らない
人にも関わらず接してくる。その中に居る映司は
何処となく嬉しそうな表情を浮かべ、
ケースを手に取り、教室を出て行った。

☆☆☆☆

「さあ! 始めようか有精卵共!!!
君達が来たと知らしめる時間だ!!」

グラウンド・βに集合したA組生徒達。
各々はその要望に答えたコスチュームをその身に纏い
ヒーローの第一歩を歩み出すのだった。

No. 10 戦闘訓練

「あ、デクくん!? カッコいいね!!」

地に足ついた感じ!」

「麗日さっ・うおおおっ!!」

「要望ちゃんと書けば良かったよ…。」

パツパツスーツになった。恥ずかしい…。」

グラウンド・βに集合したA組生徒達は

その規模の大きさに驚くが入試の演習に使われていた場所だったのでそこまでは驚いてはいなかった。

それよりもこれから行われるヒーロー基礎学。

本格的にヒーローについて学べる時間と

発注された自分のコスチュームの完成度に生徒達は喜び

それぞれ感想を言い合ってた。

特に女性陣の一部は凄いい格好だ。

麗日、芦戸はパツパツの生地で八百万は高校生とは

思えない発育の暴力で露出している。

麗日に声を掛けられた緑色のちよつと変な

コスチュームを着た緑谷も顔を赤めおどおどする。

「ヒーロー科マジ最高。」

「…峰田君、そんな考えでヒーロー科選んだの?」

「そうだよ峰田君! あ、火野君のコスチューム可愛いね!」

下心丸出しの峰田はさておき、火野に声を掛けてきたのは

『透明』の個性の葉隠だ。側から見れば

グローブとシューズだけのコスチュームだが

色んな意味でヤバい気がして映司は冷や汗を流す。

一方で映司はエスニック風の私服を着用しており

腰にはオーズドライバーが巻かれている。

彼曰くこれが一番動きやすくて落ち着くとの事。

「さあ戦闘訓練のお時間だ!」

そして良いじゃないか皆!! カッコいいぜ!!」

オールマイトは皆を見てそう言う。と緑谷の格好を見るなり彼の格好に気になったのかププツと笑い出す。

「先生……ここは入試の演習場ですが、」

また市街地演習を行うのでしょうか!？」

ザ・フル装備といえる見た目が一瞬誰か分からない

飯田はオールマイトに質問をする。

「いいやーもう二歩先に踏み込む!・屋内での

対人戦闘訓練さ!!敵退治は主に屋外で見られるが、

統計で言えば屋内の方が凶悪ライラン敵出現率は

高いんだ!監禁、軟禁、裏商売……このヒーロー飽和社会!

ゲフンっ……真に賢い敵は闇に潜む!

君らにはこれから、敵組とヒーロー組に

分かれて二対二の屋内戦を行ってもらおう!」

「ヒーローと敵のガチバトルか……」

男らしいぜー!」

「基礎訓練も無しに?」

「その基礎を知る為の実践さ!ただし今度は、

ブツ壊せばOKなロボじゃないのがミソだ!」

切島は拳を合わせ高まるが蛙吹が質問すると

掻い摘んでオールマイトは答える。

すると、生徒等は連鎖の如く質問攻めをし出す。

「勝敗のシステムはどうなります?」

「ブツ飛ばしてもいいんすか……!」

「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか……?」

「分かれるとはどのような

分かれ方をすればよろしいですか!?!」

「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか……?」

「このマントヤバくない?」

「んんん……聖徳太子イイ!!!」

八百万、爆豪、麗日、飯田、そして関係ないことを言う

青山と質問され、やや困惑するオールマイト。

いきなり実践訓練となるとそれは質問されても仕方ないと思うがオールマイトは手詰まったのかポケットから小さな紙を取り出し広げる。

「いいかい!?状況設定は敵が^{ヴィラン}

アジトの何処かに核兵器を隠していて、ヒーローはそれを処理しようとしている!ヒーローは時間内に^{ヴィラン}敵を捕まえるか、核兵器を回収する事。
^{ヴィラン}敵は制限時間まで核兵器を守るか、

ヒーローを捕まえる事!」

(設定がアメリカン:。)

「もつと理想的なのはとある男性が家族を救うべく、マフィアのアジトに乗り込み、自らの命を引き換えに家族を救うつてのがベストオブレスキューなシチュエーションだな!」

(設定がアメリカン!!)

ていうかそれ映画の見過ぎでは!?)

まさかオールマイトがジョークを言うとは思わず映司を含め皆そう思っていた、はず。

「因みにコンビ及び対戦相手を選ぶのはくじだ!」

「適当なのですか!?!」

「いや、飯田君、プロヒーローは他事務所との急増チームアップする事が多いから…多分そういうことじゃないかな…?」

「そうか…先を見据えた計らい…失礼致しました!!」
「いいよ!!早くやろ!!」

緑谷の考察に納得した飯田は深々とお辞儀をするとオールマイトは子供みたく了承し、くじの入った箱を生徒等の前に置く。

生徒等全員は順番に箱からアルファベットの書かれたボールを取り出し、即決のヒーローチームとヴィランチームが結成された。

Aチーム 麗日&緑谷

「わっ…!! (麗日さん!?マジか

ちゃんと喋らないとコレ…!)」

「わ、デク君! 凄い縁があるね! よろしくね!」

Bチーム 障子&轟

「よろしく頼む、轟。」

「ああ。」

Cチーム 峰田&八百万

「…これは罰なのでしょうか…。」

「発育の神様ありがとう…。」

Dチーム 飯田&爆豪

「あ。」

「ああ?」

Eチーム 青山&火野

「チートの君が入れば優勝確定だね! ☆」

「青山君、その言い方やめてくれる?」

Fチーム 尾白&葉隠

「尾白君…だよね! 頑張ろっ!」

「あ、うん。よろしく葉隠さん。」

Gチーム 上鳴&耳郎

「なあ耳郎! 今日放課後飯行かね!」

「こんな時に何言ってるの…? まあ奢りなら行くけど。」

Hチーム 蛙吹&常闇

「仲良くしましょう常闇ちゃん。」

「ちゃん・？あ、いや、御意。」

Iチーム 芦戸&砂藤

「よろしくねー！」

「お、おす！」

Jチーム 切島&瀬呂

「お！瀬呂か！お互い頑張ろうぜ！」

「お！切島！お前となら勝てそうだ！」

Aから順番にお互い相手となる相手と挨拶を交わしていき、オールマイトは別で用意した箱を二つ生徒等の前に置く。そこにはヒーローとヴィランと書かれていた。

「続いて最初の対戦相手は、コイツらだ！！」

Aコンビが『ヒーロー』！！Dコンビが敵だ！！^{ヴィラン}

最初に選ばれたのは、麗日&緑谷と飯田&爆豪。

「っ！！俺が敵^{ヴィラン}…！」

ヒーローを指す立ち位置なのに

何だこの口惜しい気持ちは…!？」

「飯田君落ち着きなよ。ここの授業だからこそ学べる事もあるんじゃないかな？」

「成程！己を知る前に敵を知る！流石だ火野君！

いけすかないが俺は敵を全うする！」^{ヴィラン}

火野は飯田を元氣付けると、オールマイトは

咳払いをし、注目を浴びさせる。

「敵^{ヴィラン}チームは先に入ってセッティングを！」

それと訓練場所の図面を渡しておくね！

実戦組は追加で“小型無線”と“確保テープ”を！

説明は準備しながら聞いて構わないよ！それじゃあ

五分後にヒーローチームの潜入でスタートする！
他の皆はモニターで観察するぞ！飯田少年、爆豪少年は
敵の思考をよく学ぶように！
これはほぼ実戦！ケガを恐れずに思いっきりな！
度が過ぎたら中断するけど……。」
オールマイトの説明が終わり指示で実践の四人は
戦闘訓練で行われる屋内のビルへ、
残りの十六人は同ビルの地下にある
モニタールームへと向かった。

☆☆☆☆☆☆

「さあ、君たちも考えて見るんだぞ！

それでは！屋内対人戦闘訓練開始!!」

オールマイトの合図により、ヒーローチームの

緑谷と麗日は行動を開始した。

「おっ！緑谷と麗日のやつ、上手く潜入できたみたいだな！」

「対して敵側は何か話してるみたいだが……。」

切島と障子はモニターの画面を見て発言する。

何箇所もカメラが設置されており、ビルの配置や図面がモニター越

しでも分かりやすく映っており

先程図面を渡されたが正直この映像だけでも

構造がどうなってるのか理解できる。

緑谷と麗日はビルの窓から潜入し、奥へと進んで行く。

一方で爆豪は飯田と何やら会話をしているが

このモニターは映像が見れるだけで音声は聞こえない。

ヒーローチームと敵チームはそれぞれ

小型無線を持って相方とオールマイトと会話出来るが

見学側の生徒等は声を聞けず、映像を見る事しかできなかった。

すると、飯田と話が終わったのか爆豪が行動し、下の階へと降りていく。

「爆豪のやつ、地凶燃やしたぞ?!」

「まさかもう把握したの?」

上鳴が気付き、耳郎が少しだけ首を傾げる。

凶面を軽く見た爆豪は個性で爆破し、投げ捨てる

重そうな籠手とは裏腹に軽い身のこなしで下の階へと降りて行き、

一気に緑谷と麗日ヴァイランのいる階へと辿り着く。

待ち伏せ。敵らしい行動だ。

そう思った瞬間。爆豪はヒーローチームが近くまで

来たのを確認したのか、勢いよく飛び出し爆破する。

「いきなり奇襲かよっ!?!」

「まあ・あいつらしいな。」

分かっていたとしても峰田は驚き、その性格故の

行動だと映司は察して呟く。

恐らく飯田は核の守り側を徹しし、強力な個性を持つ

爆豪はヒーローチームを奇襲し足止めさせるつもりなのだろう。

奇襲も成功し、麗日を庇った緑谷はマスクの半分が

焦げてしまい、顔が半分見えている状態だ。

「爆豪ズツケエ!!奇襲なんて男らしくねえ!!」

「奇襲も戦略!彼らは今実戦の最中なんだぜ!!」

「緑谷くんよく避けたな!」

後から映像を見てる生徒等も盛り上がり、

そのまま見続けていると、爆豪が仕掛け、

大振りの右手を緑谷に食らわせようとするが

緑谷はそれを分かっていたのか

両手で受け止め、なんとそのままの勢いで背負い投げをしたのだ。

あまりの出来事にまるで映画のアクションシーンを

見てるかの様に見学側は盛り上がる。

「背負い投げ!緑谷あいつ結構やるじゃん!」

「よく投げれたね!」

「スマートじゃないよね☆」

瀬呂、芦戸、青山とその行動に驚き歓喜を見せる。

何か会話をみたいだが全く聞こえないので

顔の表情や行動でその場がどうなってるのか

把握するしかなかった。

「やっぱ無線使ってるのと全く会話聞こえねえな…。」

「まあここはあくまでも見学する部屋だからね。

妄想アフレコでどう戦って会話してるのかって

シチュエーションも大事だと私は思うよ?。」

「それは見学の妨げになるんじゃない?。」

切島の言葉にオールマイトはまたジョークとやらを

かましてくるが、冷静にツツコミを入れる蛙吹。

「制限時間は15分間で、

核の場所はヒーローに知らされないですよね?。」

「Yes!」

「ヒーロー側が圧倒的に不利ですね、これ。」

「そりゃあそうさ、むしろ実戦じゃヒーローが

有利な状況の方が珍しいよ。それでも勝たなきゃ

いけないからヒーローは命懸けなんだよ。」

質問をした芦戸は同情の顔でヒーロー側が映る映像を見て、

オールマイトはそれに答える。

見学者は映像を見れば核の位置など丸見えだが

実戦のヒーローチームはその情報を伝えられていないため

ほぼ手探り状態だ。おまけに爆豪の奇襲により

緑谷等は先へ進む事ができない。

「まあ相澤くんにも言われたろ?。」

アレだよ、セーの! Plus Ult

「あ、ムッシュ爆豪が!」

お決まりの掛け声に皆も意気投合し、拳を突き上げるが
空気を読まず青山がモニターに指を刺す。

オールマイトは割とシヨックだったのか
眉毛を八の字にしてモニターを見ると
爆豪の猛攻に緑谷が個性を使わずに防戦していた。
ふと、麗日がその場にはいない事に気付き探すと
別のカメラに走っていく姿が目撃される。
どうやら緑谷は足止めをする為麗日を
先に行かせていたのだろう。

「すげえなあいつ!!」

「個性」使わずに渡り合ってるぞ!」

「入試二位と!!」

「てか、さっきからなんかすっげーイラついてる。

コワッ。」

爆豪の攻撃を躲し、緑谷は隙をついて

その場から離れていくと、爆豪は画面越しだが
表情からしてかなり激怒した顔で何か言い出し、
後を追っていく。

映司はふと思った。二人は幼馴染なのは聞いていたが
何故あそこまで緑谷に対して執着心というか、
敵対心があるのだろうか。

「・飯田のやつ、何をしてるんだろう?」

尾白が言い、そのモニターを見ると

核が置いてある部屋の机や道具を飯田はせつせと
奥の部屋に持って行っていた。

片付け終わると同時に麗日がコソコソと入ってくるなり様子を
伺っている、急に麗日が笑い出し

それに気付いた飯田は片付けたと言わんばかりな
素振りで麗日に何かを言っていた。

「・個性使わせない気か。」

「どゆこと?」

珍しく無口だった轟が口を動かし葉隠が聞くとそれに答え出す。

「麗日の個性の重力があれば何かしらの

機転に繋がるだろう？けど飯田はそれを読んで周りの物を片付けた。」

「そっか！そうすれば麗日さんの個性を使われずに済む。

後は飯田君の個性で麗日さんを翻弄すれば、

時間稼ぎになる！」

納得した映司の答えに轟は小さく頷き、皆も納得する。

「爆豪少年！ストップだ！殺す気か!!？」

その時、オールマイトは急に声を荒げ、無線を使って爆豪に呼び掛ける。

何事だと皆は爆豪が映る画面を見ると、

いつの間にか緑谷を見つけた爆豪が

腕に装備された籠手を緑谷に向け、

それに付いている小さなピンに指を引っ掛け、

勢いよくそれを引っ抜いた瞬間。

ドオオンッ!!

「うわ!?!な、何だ!?!地震!?!」

爆発音と衝撃が地下全体に響き、揺れ動く。

直様モニターを確認すると、

爆豪のいるフロアは壊滅状態、肝心の緑谷は

当てられていなかったようだがその爆風で

全身に軽い火傷を負っているのが確認される。

「嘘だろ…!」

その光景を見て火野は衝撃のあまり口をあんぐりと開け、ただただモニターを凝視していた。

No. 11 学ぶべき事

「先生！止めた方がいいって！爆豪あいつ、相当クレイジーだぜ！殺しちゃおうぜ！」

「いや…、爆豪少年！次ソレ撃つたら…強制終了で

君らの負けとする！屋内戦において、大規模な攻撃は守るべき牙城の損害を招く！ヒーローとしては勿論、

敵として愚策だそれは！大幅減点だからな！」

切島の発言を手を軽く上げて止めたオールマイトは何か気付いていたのか爆豪にそう伝え実戦を続行させた。

納得が行かなかったのか爆豪は手負いの

緑谷に飛びかかる。爆風のダメージ相まってか

緑谷は押される一方で片腕を掴まれると

爆破の勢いで地面に叩きつけられていた。

「リンチだよコレ！」

テープを巻き付ければ捕らえた事になるのに！」

「ヒーローの所業に非ず…。」

「緑谷もすげえって思ったけどよ…戦闘能力に於いて、

爆豪は間違いなく、センスの塊だぜ。」

その圧倒的な差、戦闘の実力は爆豪の方が上だ。

映像を見る限りそれは認めざるを得ない。

「逃げてる！」

「男のする事じゃねえけど仕方ないぜ。」

しかし変だよな…爆豪の方が余裕なくね？」

ここまで来ると少し緑谷が可哀想に思えてくる。

でもそれは一瞬だった。緑谷は急に立ち止まると

何か言っているのか口を動かし、

爆豪も近づきながら何か喋っている。

そして、二人は何か叫ぶと互いに地面を蹴り

真っ向から腕を突き立て突っ込んで行く。

「先生！！ヤバそうだってコレ！先生！」

「…！双方…：中止」

流石にダメと思ったのか切島は訴えると
オールマイトは言いたくないのか
無線を持つ手が震えていた。

「っ！何か合図したみたいだぞ。」

障子が言うのと幼馴染の二人に熱中していた

一部を除く生徒等は麗日と飯田がいるモニターを確認すると、麗日は小型無線で了承したのか急に

ビルの柱に捕まる。そして、爆豪と緑谷が激突！かと思いきや、緑谷は個性の超パワーを爆豪ではなく

頭上に向けて拳を突き出し、その天井から上の階は

衝撃波で貫通していく。また先程みたく地響きが鳴るが生徒等は動揺しつつも映像を見届けている。

その衝撃は核の置かれてる階まで走り、

麗日と飯田の空いた距離のフロアが破壊される。

そして、麗日が捕まっていた柱が壊れると

個性により浮かし持ちづらそうにするが

それを怪力の如く振ると残害の瓦礫や石の塊が

千本ノックみたく無数に飯田へ打ち飛ばしたのだ。

飯田は全力で避けている隙に麗日は個性を自分に使い、

浮かせるとそのまま核へと飛んで、

身体を覆い被さる様に核に掴んだのだ。

「ヒーロー…：、」

ヒーローチーム！W I I I I I N!!」

核の回収に成功し、オールマイトは勝利を告げると

同時に、緑谷は気を失い、麗日は下から込み上げてきた

異物が出され吐いていた。

「負けた方がほぼ無傷で、勝った方が倒れてら…。」

「勝負に負けて、試合に勝ったと言う所か…：。」

「訓練だけど。」

第一試合。一通りを見ていたが最初の
緑谷の背負い投げ以外は盛り上がり、現時点では
歓声の声すら上がらない。

「じゃ、私はちよつと様子見てくるから。」

皆は待機！ちよつと休憩しててもいいからね！」

オールマイトはそう言うともニタールームから飛び出し、
真っ先に緑谷と爆豪のいる階へ行った。

勿論超パワーを使った緑谷の腕は腫れ上がり、
直様搬送用のハンソーロボを手配していた。

そして残りの三人はここ、

モニタールームへと呼ばれるのだった。

☆☆☆☆☆☆

「まあつつても。」

今戦のベストは飯田少年だけだな!!!」

「なな!!?」

オールマイトの評価に当の本人の飯田は驚く。

「どういう事かしら?勝ったお茶子ちゃんか

緑谷ちゃんじゃないの?」

「何故だろうな~~~~?分かる人!!?」

「はい、オールマイト先生。」

蛙吹は首を傾げると挙手したのは八百万だ。

「それは飯田さんが一番状況設定に順応していたから。」

爆豪さんの行動は、戦闘を見た限り私怨丸出しの独断。

そして先程先生が仰っていた通り、屋内での

大規模攻撃は愚策。緑谷さんも同様の理由ですね。

麗日さんは、中盤の気の緩み。そして、最後の攻撃が

乱暴過ぎた事。ハリボテを核として扱っていたら、あんな危険な行為出来ませんわ。相手への対策をこなし且つ、核の争奪をきちんと想定していたからこそ飯田さんは最後反応に遅れた。ヒーローチームの勝ちには、訓練だからという甘えから生じた反則のようなものですわ。」

シーン：！

「(思ってたより言われた!!)」

ま：まあ、飯田少年もまだ固すぎる節はあつたりする訳だが：まあ：正解だよ！くう：！」
的確な説明に静まり返る中、プルプルと震えながらグツジョブを送るオールマイト。

「常に下学上達！一意専心に励まねば、

トップヒーローになどなれませんか！」

えっへんと言わんばかりに腰に手を当て八百万は言う。
聞いた話によれば八百万は推薦入学四人の内の一人。
個性も相まってかその頭脳も冴えていた。

「っ！まあ！欠点があるとすればアレだ！

飯田少年！訓練中にお片付けはあまりよろしくないな！」

「はっ!?ええっ!?!」

「ていうか芸術って感じだったよな。

今度教えてよその収納術、俺片付け

あまり得意じゃないんだ。」

必死に考え閃いたオールマイトは飯田に注意すると
火野は映像を見ていたので飯田に声をかける。

片付けた物は隣の部屋に詰め込んでいたが

それはもう二度見する程綺麗に隙間なく
収納されていたのだ。

そうこうしている間に第一試合は
ヒーローチームの緑谷と麗日の勝利、
緑谷は大怪我で、麗日は体調不良で保健室へと
連れて行かれ、飯田と爆豪はここで見学となるが
威勢が良い爆豪はこの時、妙に大人しく下を向いていた。

☆☆☆☆☆☆

場所は変わり、別のビル

第二試合

B ヒーローチーム 轟&障子
ヴィラン
F 敵チーム 尾白&葉隠

「轟かあ！あいつも確か推薦入学だったよな!？」

「ならこれもうヒーローチームの勝利確定じゃね!？」

切島、上鳴とBチームの二人に票を入れる様に宣言する。

轟の個性は氷を生成し、周りを凍てつかせる凄惨な個性。

奴がいればこの戦闘も有利にことが運ぶだろう。

「尾白君はあの強靱な尻尾……。葉隠さんは透明。」

不意をついて尻尾で氷を叩き壊す手もあるな。」

「火野ちゃんの言う事も一理あるわね。」

彼らもいい個性だからそう簡単にはやられないと思うわ。」

映司は考えると蛙吹が人差し指を口下に

当てながらそう答える。

賛否両論に騒つく中、二組の戦闘訓練が開始された。

Bチームの轟と障子は入り口にて会話中。

障子は触手の様な腕から耳を生やし、轟に

何かを伝えている様に見える。

彼の個性『複製腕』だろう。

障子目蔵

個性『複製腕』

触手の先端に自身の身体の一部を複製する事ができる！
耳を複製すれば辺りの音がよく聞こえて索敵に便利だぞ！

「あれ？葉隠がいねえぞ？」

一方で 敵 サイラン チームの尾白と葉隠だが

葉隠の姿がどこにも見当たらない、透明な彼女は

唯一グローブとシューズを着用していたが

それは尾白の横に置いてあったのが見える。

そう、今葉隠は正真正銘…。

「全裸だな。全く最高だぜ。」

「瀬呂、こいつ縛り上げた方がいいぞ。」

「あつー！」

誰もが分かっていた事なので敢えて言わなかったが

峰田が口に出してしまい、なんとも言えない空気になる。

切島に言われ瀬呂は個性でテープを出して

ぐるぐる巻きにすると、芦戸が声を出し全員

モニターを確認する。

そこに映し出されたのは先程のビルが見てない内に

凍結、それもビル丸ごとだった。

「うわあ！何アレ!？」

「凍らせるのは知ってるけど、あれは凄いな…。

とゆか、寒っ！」

「仲間を巻き込まず、核兵器にもダメージを与えず、

尚且つ敵も弱体化…。」

「最強じゃねえか!!」

芦戸と映司は驚き、次第にこちらまで影響され

部屋の温度が下がり皆はブルブルと震え出す。

障子は外でその光景を驚く顔で眺め、

轟は一人、核のある部屋まで移動していく。

その部屋には尾白が待機していたが
下半身を凍らされ、身動きが取れない状態でした。
葉隠も恐らく素足なので相当今痛いはず。

「ヒーローチーム！WINNER！：へっくしゅー！」

核に触れた轟を確認し、オールマイトは鼻水を出しながら
勝利を告げる。すると、轟は左手で触れた瞬間、
周りの氷がみるみると溶け始めたのだ。

「えっ!?何アレ！熱：!?!」

「まさかあいつ！個性二つ持ち!?!」

耳郎、切島と驚くとモニターも次第に
暖かくなってくるのが肌で分かる。

轟焦凍：、彼はどうやらもう一つ別の個性を
持っているようだ。

轟焦凍

個性『半冷半熱』

右手で凍らし左手で燃やす！

範囲も温度も未知数！化け物かよ!!

「すっごい個性だなあ。」

「火野、お前も大概だぞ?」

ボソツと呟く火野に上鳴が突っ込む。

呆気なく終わった訓練だったが、

爆豪は轟の映像を見て何か思ったのか
歯を食いしばっていた。

☆☆☆☆☆☆

その後、残り六組、つまり三回の戦闘訓練が行われた。

まず第三試合はこうだ。

第三試合

C ヒーローチーム 峰田&八百万
サイラン
I 敵チーム 芦戸&砂藤

この戦いはヒーローチームが勝利した。

砂藤が核を守り、芦戸が先制攻撃を仕掛けていたが、八百万は多彩な道具で翻弄している内に、

初めに用意しておいた梯子で最上階に登らせた峰田を砂藤と戦わせるが、頭の紫のボールで動きを封じ

見事核を回収する。終わった峰田は所々顔面が腫れており、八百万は顔を赤らめ、峰田に対して怒っていた。

何があったのかは詮索しなかったが、峰田は嬉しそうに微笑んでいた。

続いて第四試合

G ヒーローチーム 上鳴&耳郎
サイラン
H 敵チーム 蛙吹&常闇

この戦いは敵チームの勝利。

蛙吹と常闇の意外な連携プレイにより

ヒーローチームは制限時間外まで粘られ敗北となった。モニタールームに帰ってくるなり

上鳴は「うえーい！」と見た事がない顔で入ってきたので思わず火野は笑ってしまったのは内緒。

耳郎曰く、個性ぶっばしてあんなったの事。

そして残るは、この戦いは実物なんじゃないかと騒つく生徒が何名かいた。

それは入試一位の記録を残した彼の戦いが見れるからなのだろう。

☆☆☆☆☆☆

第五試合

E ヒーローチーム 青山&火野

J ヴィラン 敵チーム 切島&瀬呂

『双方！開始だ!!』

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

小型無線からオールマイトの声が聞こえる。

どうやら開始の合図だ。

火野はオーズに変身し、

訓練で使われるビルの屋上を下から眺める。

「さて、と。青山君。ちょっといいかい?」

「何だいマドモアゼル?」

「いや、俺女じゃないから:。」

俺がジャンプして一番上の階から忍び込むから、

青山君は下の階から上に上がって来てくれる?

流れるに上の階に“核”がありそうだけど念のため。

どっちかが核を見つけたらすぐに連絡し合おう。

君の個性も強力だし、心強いよっ。」

「オツケー。任せられたよ!」

それじゃあスマートに煌めこうじゃないか! ☆」

「う、うん。じゃよろしくね?」

青山にそう告げたオーズはそこからビルの屋上まで跳躍し、

着地すると、オーズは下を見下ろし、
青山がいない事を確認すると屋上の扉から侵入する。

そして下の階へ降り、その部屋を覗いてみると
予想通り、核が置かれていた。が、

「うわっ、何だこれ…?」

オーズが驚く。目に映るその光景は

天井に無数の“白いテープ”がぶら下がっているのだ。
すると、核の後ろから二人の姿が出て来る。

「あ!?!もう来たのかよ!早すぎねえかつ!?!」

「切島!?!せっかくトラップ仕掛けたのに何してんだよ!?!」

「ああ悪かったって!」

「…えと、これ何?」

私情を挟んでは訓練として悪い評価になつてしまおうが
この光景は気になつてしようがないのだろう。

オーズは指を天井に指して問い掛ける。

「俺の個性でトラップ仕掛けたんだけど、

切島の個性で千切られたわけ。」

「何かお化け屋敷のアレみたいじゃね?」

入り口にぶら下がってるアレ!」

「いや、俺は“蠅取り”に使うテープかと思った。」

「ああ…:」

『んんっ…:こらそっ!見えてるぞ!』

これは授業何だから私語は厳禁だ!』

普通に会話をしてしまい、オールマイトに怒られてしまう。

三人はいかんと気を取り直して警戒する。

「火野!お前とは一度勝負してみたかったんだぜ!
がっかりさせないようにな!」

「生憎、今はヒーローとしてここにいるから、

後ろの“核”をすぐに回収するよ。」

切島は拳を合わせるとガコン!と鈍い音が鳴り

オーズと戦えると嬉しそうに見てそう言う。

だが、時間は有限。オーズは腰を低くしながら
瀬呂をチラリと見て、一枚のコアメダルを取り出す。

「そうはさせねえ！」

「っ！うあっ!？」

瀬呂は腕を伸ばすと肘から「テープ」の様な物を出し、

一瞬にしてオーズを縛り上げる。

「何かしようと思ったか!?やらせないっつーの！」

「お、お前意外と 敵ライバルっぽいな。」

「…やるね瀬呂君、だけど、どうせ縛るなら

ベルト事縛れば、俺は困っていたかもね。」

「え?」

瀬呂に縛られたのは肩から肘の部分まで。

オーズドライバーはガラ空きだったので、

オーズはすかさず真ん中のトラのメダルを

黄緑色の「螻蛄」が造形されたコアメダルと入れ替え、器用にオー

ズキャナーを取り出しスキャンした。

タカ!

カマキリ!

バツタ!

「せいやっ!」

「のあっ!?!切れた!?!」

真ん中のメダルを『カマキリ』に変え、

オーズは「タカキリバ」となり、テープを切り裂く。

頭部から下は昆虫類の色が揃い顔は赤、下から緑と
異様な配色をしていた。

そして胴体の両手には逆手持ちのカマキリを
模様した刃が見受けられる。

「は、刃物ってありかよ!?!」

『個性ならね!ちよつと私も新しいの見れてびつくり!』

瀬呂と無線越しからオールマイトも驚き、

瀬呂は怖気づいたのか距離を取ろうとする。

「はっ!なら俺の“身体”は切れるか!!?」

「っ!!」

切島が飛び出し、オーズに向かって“拳”を突き出す。

オーズはその刃“カマキリソード”で受け止めると

鈍い金属音と共に火花が飛び散る。

「確か…に…!!君の個性とはこのメダルは

“相性”悪いかも…ね!」

「うおつと!?!」

オーズは踏ん張りを入れ、切島を仰け反らすと

バツタの跳躍で地面を蹴り、天井の壁へ器用に回転する。

そして天井の壁を今度は逆さで蹴ると

一気に核の場所まで跳躍し、

「あっ!しまっ!」

「よつとっ!!」

オーズは核に触れた。

『ヒーローチーム!WIN!』

オールマイトにそう告げられ、オーズは

軽く拳を上に向け、勝利を喜んでいたのであった。

No. 12 学校らしい事

A組全員の戦闘訓練が終わり、皆はビルの外へと呼ばれ、オールマイトは全員に向かって発言する。

「お疲れさん!!緑谷少年以外は大きな怪我もなし!

しかし真摯に取り組んだ!!初めての訓練にしちや

皆上出来だったぜ!」

「相澤先生の後でこんな真つ当な授業……。

何か拍子抜けと言うか……。」

「真つ当な授業もまた私達の自由さ!」

それじゃあ私は緑谷少年に講評を聞かせねば!

着替えて教室にお戻り!!」

そう言つてオールマイトはぎゅるんと後ろに半回転し、

物凄い勢いで保健室へと向かつて行く。

「?急いでるなオールマイト……、かけえ。」

峰田は呟く。

A組の生徒等は言われた通り更衣室へと

ぞろぞろと向かつて行き、緊張がとれたのか

疲れたくなどの声がちらほらと聞こえる。

ふと、映司は足を止め、オールマイトが

走つた方向を眺める。

「(…もしかして、あの姿維持できるのは

限界があるのかな……。見舞いに来てくれた時は

血も吐いてたし……)」

見舞いに来てくれた時のあの姿を今まで忘れていた

火野は血を吐いてた事を思い出し、少し心配な表情で

彼の走つた方角を眺めていた。

「ムツシユ火野君。」

「うわあ!?!青山君!?!急に声掛けないでよっ。」

「核を見つけたら連絡するって約束してたよね? ☆」
「あ・ああく、ごめんね。予想外の出来事があつて忘れてた。」

「イイヨ! やっぱり君の個性はワンダフルなチートだね!」
と、て、も、良いと思うよ! ☆」

「う、うん・? ありがとう・・・?」

青山はそう言つて更衣室へと向かつて歩き、

火野はお礼を言つてその後が続く様に歩いて行つた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

放課後、火野達は反省会をしていると、

包帯ぐるぐるでボロボロの緑谷が教室のドアを開ける。

「おお、緑谷来た!! お疲れ!! 何喋ってるか

分かんなかったけど熱かつたぜおめー!!」

「へっ!？」

「よく避けたよー!」

「一戦目であんなのやられたから

俺らも力入つちまつたぜ!」

「俺あ切島鋭児郎! 今、皆で訓練の反省会してたんだ!」

「私、芦戸三奈! よく避けたよー!」

「蛙吹梅雨よ、梅雨ちゃんと呼んで。」

「俺! 砂藤!」

切島を始め、芦戸、砂藤と緑谷に詰め寄り

自己紹介をするが緑谷は咄嗟の出来事でおどついていた。

「騒々しい。。」

「まあいんじゃない? それにこの雰囲気

学校! って感じで俺は好きだよ。」

「机は腰掛けじゃないぞ、今すぐやめよう!!」

「ブレない飯田くん!」

机に腰掛けた常闇に火野は宥めると

真面目な飯田は垂直に腕を常闇に向け注意し、

緑谷はそれを見てツッコむと、上鳴と麗日が

こちらにやって来る。

「麗日今度飯行かね？何好きなん？」

「おもち：あれ!?デクくん怪我！」

治してもらえなかったの!」

「あ、いや、これは僕の体力のアレで：。」

あの、麗日さん：それより、かつちやん見なかった？」

駆け寄る麗日は怪我を見て心配するが、

緑谷は教室にいない爆豪が気になり問い掛ける。

「あいつなら先に帰ったぞ？」

「皆で止めたんだけど黙って行っちゃったよ：。」

「っ！ごめん！ありがとう！僕も先帰るね！」

切島と麗日はそう答えると、緑谷は血相を変え

急いで教室を飛び出した。

「どうしたんだ緑谷の奴？」

「多分爆豪君に用があるんじゃないかな？」

あんな大人しい爆豪君俺等は初めて見たけど：。」

「いつもはシネえ！ってイメージがあるよねっ。」

切島、火野は言うど麗日は精一杯爆豪の真似をして

どこか可愛いらしく見えてしまい、火野は微笑む。

緑谷から聞いた話によると、爆豪は生まれながらにして

何でもできる、俗に言う『才能マン』だったらしい。

言ってしまうえば自尊心が強い性格でああったとの事。

恐らく今日の戦闘訓練で前は「無個性」だった

緑谷に負けたのが相当ショックだったのだろう。

「：今日の反省会はこれでおしまいにして俺達も帰ろうか。

皆今日の訓練で疲れてるだろうし。」

「そうだな！皆！疲れを十分に癒やして

また明日に備えよう！そうとなれば早速身支度！
急いで取り掛かるぞ！」

「リーダー気取りだな眼鏡。」

火野は扉を見てそう言うと、飯田は
テキパキと動き指示を出す。それを見た峰田は
ボソツと聞こえない程度に呟くのだった。

そして、この時はまだ知らない
彼等に待ち受けている者がいる。

オールマイトが言っていた：
真に賢い敵の恐怖を。

☆☆☆☆☆☆

ー とあるバーにて ー

「…なあ、どうなると思う…？」

平和の象徴が：敵に殺されたら…！」

「間違いなく、大問題と歴史に

その話題が刻まれる事になるでしょう：。」

「オールマイト 雄英の教師に！」と大きく
話題となった新聞紙を置いた

顔、身体中に無数の手が取り付いた不気味な少年が言うと、
黒いモヤが覆った男性がグラスを拭きながら答える。

「だよなあ……！新作も届いたし……！」

早くぶっ倒したくてしようがないよ……。

なあ……、お前の働きにも期待してるぜ？

「裏ワザ」さんよ……。」

「……言つとくけど、手を組んでるだけだからね。

君の配下になったつもりはないよ。」

手の少年は奥に座っている「女の子」に声をかける。

女の子は不貞腐れた顔をしつつ

「銀色の鷹のメダル」を見つめてそう言う。

「貴方のその「個性」があれば我ら敵に

サイラン

敵に

敵無しです。どうかお力添えをお貸しいただけませんか？」

モヤの男性が言うとき女の子はピンツ！と

親指で銀色のメダルを弾き、掴むとニカツと笑う。

「勿論だよ「黒霧」さん。」

それは契約内だから心配しないで。

それにこんな面白い事は滅多にないんだよ？

：早く試してみたいな……。ね、「火野映司」君。」

☆☆☆☆☆☆

―― 次の日、雄英高校にて ――

「ふああ……。」

「あ、火野、おつす。眠たそうな顔と欠伸してるね。」

「ああ、耳郎さん。おはよう……。」

オーズの力を使うと疲れが出ちゃうんだよ……。」

登校の最中火野は欠伸をしていると耳郎が後ろから声を掛けてくる。

「あんだけ凄い個性だから反動も凄そうだね。

いいなあ、ウチの個性地味だから羨ましいよ。」

「そんな事ないって。耳郎さんの個性も凄いよ。」

訓練の時もそうだけど索敵に優れてるし、

コスチュームを応用すれば武器にもなるし

本当言うことない凄い個性っ。」

「そ、そうかな…。ありがとう、少しは自信持てたかも。

…あれ?」

照れる耳郎はふと立ち止まる。

火野は「どうしたの?」と言い、その目線の方角を見る。

校門の前にはかなりの人集りができており、

よく見るとカメラやマイクなどを持つてるのが

見受けられている。まさかと思い、火野は

嫌な予感をしながら近づくと。

「雄英の生徒ですよね!?!一言よろしいですか!?

雄英高にオールマイトが教師として

滞在してるみたいですがオールマイトの授業は

どんな感じですか!」

「うわっ!?!えっ!?!マスコミ!?!」

急にこちらに駆け寄り、ズケズケとマイクを向けて来たのは

どうやらテレビの取材か何かの連中だろう。

「ええっと、俺達急いでるんで!」

ちよ!ちよっと通らせてください!」

「わわっ!?!」

火野は耳郎の手を掴み、マスコミの中を

無理矢理くぐり抜け、校門の中へと入る。

「はあ…。はあ…。流石に雄英の中には

無断じゃ入れないだろ…!」

「…あの、さ。火野…。手、離してもらえろ…?」

「え?ああごめんっ!」

火野は繋ぎっぱなしの手に気付き、慌てて離す。

耳郎は握られた手を手で隠し、少しだけ頬を赤めらせる。

「火野君！耳郎君！おはよう！」

「お、おはよう火野君、耳郎さんっ。」

「その様子だと二人もマスコミに止められたん？」

声をかけて来たのは飯田、緑谷、麗日の三人だ。

「お、おはようっ。あれ何：？」

「今朝のニュース見たかい？オールマイトが教師になって

不特定多数の人々の為に取材の方達は大騒ぎさ。」

「私も質問されてちよつと緊張した〜。」

「う、ウチもある意味緊張した〜。」

「あ、響香ちゃんも？一緒だっ。」

飯田はそう言い、麗日と耳郎は

お互い違う意味で盛り上がる。

『オールマイト：あれ!?君は『ヘドロ』の時の!?!』

「っ！やめろ：：！」

また取材の餌食になっている生徒がいると思いきや

「ヘドロ」と言うワードにこの場の五人が振り返ると

やたら機嫌悪そうに爆豪が雄英に入ってくる。

「か、かっっちゃ：！お、おは」

「黙れクソカス！今喋ってんじやねえよ！」

「ひゃいっ!?ごめんっ！」

爆豪はケツと悪態を吐き、挨拶もせずそのまま中へと入ってい

く。それとはすれ違いに

今度は相澤がこちらにやってきた。

「二「相澤先生おはようございます！」「二」」

「おはよう。お前らさっさと教室行っつけ。」

「ったく、これだからマスコミは嫌いなんだ：。」

相澤はブツブツと文句を言いながら、取材等がいる

校門前へと行くと、しっしっ、と言わんばかりに

手を振り、リポーターの一人が後を追おうと

校内に侵入しようとしたその時、ブザー音が鳴り、

物凄い勢いで校門、ついでに周りの柵にも
バリケードらしき壁が迫り上がっていた。

「うわっ!?すごい!」

「ほら行くぞ。もうすぐチャイム鳴る。」

それに驚く生徒だが相澤に言われ、生徒等は
機敏に教室へ向かった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「昨日の戦闘訓練お疲れ。Vと成績見せてもらった。

爆豪、お前もうガキみてえなマネするな。

能力あるんだから。」

「……わかってる。」

「で、緑谷はまた腕ブツ壊して一件落着か。」

「っ!」

ホームルームが始まるなり、戦闘訓練の事で

爆豪に注意し、爆豪は下を向きながら返事をしている。

次に緑谷が当てられ、緑谷は肩をビクツと跳ね上がらせる。

「個性の制御……いつまでも『出来ないから仕方ない』じゃ

通させねえぞ。俺は同じ事言うのが嫌いだ。

それさえクリアすればやれる事は多い。焦れよ緑谷。」

「っはい!」

怒りつつ、助言も入っており、緑谷は元気に返事をした。

「さてHRの本題だ、急で悪いが今日は君らに……。」

相澤の言葉に生徒等はざわつき身構える。

また臨時テストかのその類いなのだろうか。

「学級委員長を決めてもらう。」

「「学校っぱいの来たー!」」

いかんせん普通の委員長決めに生徒等は

不安だった分、その喜びで皆は一斉に手を上げ始める。

「委員長!! やりたいですソレ俺!!」

「ウチもやりたいス。」

「僕のためにあるヤツ☆」

「リーダー!! やるやるー!!」

次々と挙手し、もう殆ど全員挙げてるぐらいの勢いで

盛り上がるクラスに、相澤は少し強めに咳払いをし、

そのクラスは一瞬にして静まり返る。

「…まあ、他にも色々委員があるが、

合理的に考えてクラスの委員長決めが最優先。」

「あ、それなら提案です。」

峰田さんは保健委員以外でお願いします。」

「あ、それウチもさんせー。」

「なあんでだよ?!? まだ何も言ってるねえだろよ!?!」

相澤の言葉に発案する八百万、それに耳郎が賛成すると、

峰田が反応し突っかかるが、軽く舌打ちが聞こえていた。

「静粛にしたまえ!!」

突然飯田が声を上げ、A組生徒等は飯田に注目する。

「〃多〃を牽引する責任重大な仕事だぞ…!」

『やりたい者』がやれるものではないだろう!!

相澤先生が仰っていたまづは

クラス委員長を誰であるかを見定め!

そして周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務…!

民主主義に則り真のリーダーを皆で決めるといふのなら…

これは投票で決めるべき議案!!」

ビシイ!!

「聳え立ってんじゃねーか!! 何故発案した!!」

まともな意見を発案した飯田だがその腕は

誰もが二度見してしまうほど高く聳え立っていた。

「日も浅いのに信頼もクソも無いわ飯田ちゃん。」

「そんなん皆自分に入れらあ！」

「だからこそここで複数票を獲った者こそが、真に相応しい人間という事にならないか!?

どうでしょうか先生!!」

「時間内にやるなら何でもいい。

あと別の委員長はまた日を改めてだ、分かったな？」

「ちっ：。」

蛙吹と切島が言うのと納得の行く説明をし、

皆はなるほどと呟く。

相澤に了承を得ると、誰とは言わないが

小さく舌打ちをしている紫色の頭の奴がいた。

「それではー：この投票の箱に書いた紙を入れてくれ！」

文字通り投票が多い人が学級委員だ！」

寝袋に入ってしまった相澤に変わり、

飯田は投票箱を用意し、教卓に置くと

意外にも早く次々と箱に紙が入れられていく。

殆どは自分だろう：。果たして、結果は：：！

No. 13 頑張れ飯田!

緑谷出久 四
八百万百 二
爆豪勝己 一
常闇踏陰 一
障子目蔵 一
尾白猿夫 一
切島鋭児郎 一
芦戸三奈 一
砂藤力道 一
蛙吹梅雨 一
青山優雅 一
瀬呂 範太 一
上鳴電気 一
耳郎響香 一
葉隠透 一
峰田実 一

「ぼ、僕四票く!!?」

「なんでデクに：!!誰が：!!」

「まーおめえに入るよか分かるけどな!」

「あ、一票は俺入れたよ。」

「んだとゴラあ!?俺に入れろや三色野郎!!」

「え、やだよ。その口調直したら考えたかもね。」

投票の結果、緑谷が四、八百万が二、残りは一で轟、火野、麗日、飯田の四人が一つも入ってない結果となり、爆豪は苛立ちを見せていた。

「0票：！分かつてはいた!!」

流星に聖職と言ったところか：：!!」

「他に入れたのね…。」

「お前もやりたがっていたのに…、」

何がしたいんだ飯田…？」

飯田は四つん這いになり、八百万と砂藤は言う。

ともあれ、この投票の差で委員長は決定された。

「じゃあ委員長緑谷、副委員長八百万だ。」

「うーん悔しい…、流石ですわ。」

「マママジで、マジでか…!!」

納得が行かないが二票も差があるのか諦めの顔で

息を吐く八百万。

そして緑谷は緊張でガツチガチに震えていた。

「緑谷なんだかんだアツいしな！」

「八百万は講評の時のがカツコ良かったし！」

「二人ともがんばー！」

軽い拍手と応援され、緊張してた緑谷は若干照れ臭そうに

自身の髪を撫でる。

ただこの時、飯田はどこか納得が行かない

表情で俯いていた。

☆☆☆☆☆☆

「相変わらずすごい人集りだなあ…。」

「ヒーロー科以外にも、経営科やサポート科の生徒等も

いるんだ。当然こんな大所帯になってもおかしくない。」

お昼となり、食堂のメシ処へと来た火野は、

空いてる席を見つけて障子、八百万、葉隠の四人と

食事を始めていた。

ふと、八百万が箸を止めていたので葉隠は
気になり声をかける。

「八百万さんどしたのー?」

「…もしかして票の事?」

「…お恥ずかしながら…その通りですわ。

常に正当なクラスへと導く為、精進してるおつもりですが、

一番の役割である委員長で緑谷さんに

差をつけられてしまい、

自分でも驚く程落ち込んでしまつて…。

申し訳ありません、折角のお食事ですのに…。」

はあ、と八百万は溜息を吐く。

「まあ緑谷君はああ見えて

凄いい判断力と行動力があるからね…。」

「気にする事ないぞ八百万。

現にお前は委員長になれたじゃないか。」

「そうだよー!気にする事ないつて、元氣だそ?」

「皆様…!ありがとうございます…!」

百は、皆様の期待に恥じぬ様、

精一杯努力させていたきますわ!」

火野に続き、障子と葉隠は慰めると

意外にも立ち直りが早く、その目は輝かせていた。

「…そう言えば、火野さん。

前からお聞きしたかったのですが、

火野さんのコアメダルは色んな種類があるのですよね?」

「…んう?…:…ああ、うん。そうだね。」

「まだあるのー!?見せて見せて!」

「俺も気になつてた、是非拝見したいものだ。」

八百万の言葉にご飯を含んだ火野は飲み込み答えると

葉隠と障子は手を止めこちらを見る。

火野はポケットをぐこそそし、

テーブルに今あるメダル、計八枚を全て出した。

「うわー！こんなにあるのー!!？」

「八枚…、てことは八種類の個性が使えるのか…？
流石だな火野は…。」

「いやいや…、そんな事ないよっ。」

葉隠は二枚ほど手に持つが個性が個性なので
浮いてる様にも見えており、障子もゴリラの
メダルを手に取り眺める。

「凄いですわ…、

これ、どんな構造になっているのでしょ…？

（少し分解してみたいですが、そんな事したら
火野さんに怒られてしまいそうですわ…。）

「んー、俺にもよく分からないんだ。物心ついた頃には
手元にあつた…ていう感じだったから。」

「そういえば火野、いつも使うメダルは
変な歌が流れていたな？」

「タカ！トラ！バッタ！のタトバだよね！

あれ中毒性あるよね！頭の中に残る感じっ。」

「う、歌は気にしないで…。うん。あの姿は
違う色同士だけど、曲が流れるんだ。

一番使いやすいっていうか、身体に馴染む感じ。」
質問に答える火野、すると八百万が首を少し傾け
問いかけてくる。

「違う色…？ということは、

あのメロディは他にも流れるのですか…？」

「あーうん。この『昆虫』の緑の三枚なんだけど。」

そう言つて火野は、カマキリ、バッタ、そして

「クワガタ」のメダルを指で持ち、三人に見せる。

「螳螂と蝗に…鍬形虫か。」

「…なるほどですわっ。今まで異なる

三色のコアメダルを使つていましたが、その三枚は
全て同じ系統の緑、そして昆虫類っ。」

「えっ？何々どゆことなのっ？」

葉隠が聞くと、理解した障子が答える。

「要するに三色バラバラだったのが、統一した色で

別の力が発揮される…、勝手な考察だがこれであってるか？」

「うん、正解。凄いね八百万さん、障子君。」

火野は頷くと理解した葉隠が詰め寄る。

「ええー!!やっぱチートだね火野君！」

じゃあその緑のメダル使えば凄く強くなるって事？」

「うんまあ、…強くなる…と思うよ…。」

これ、中学の時一回使ってみただけど、

反動が凄すぎて吐血したんだよね…。」

「と、吐血!？」

聞いた葉隠はガタン!と(恐らく)椅子から

立ち上がったのか驚いていた。

「身体に害するフォームなのか。」

危険な組み合わせだな…。」

「…火野さん、もしかして他の色も

同じ三色があるのですか？」

「ああ、どうだろう。今あるのこれしかないし

考えた事なかったなあ…。」

火野は腕を組み考えていた。

元々あった昆虫系のメダルを除き、他のメダルは

三色全てではなく、一枚、二枚と欠けた状態だった。

八百万の深く考えもしなかった言葉に

そう言えばと言わんばかりに気付く。

「…ふっ、火野。お前はそこ知れない男だな。」

「え？何が？」

キョトンとした顔に三人は思わずクスクスと笑い出す。

側から見ればメダル一枚に付き、個性並みの能力が備わっている。

ただでさえチートの呼ばわりをされているのに

そんなのが何枚もあったら

本当に敵無しのヒーローになり得る。
それを思い障子は言うが、
能天気な映司の顔に笑ってしまったのだろう。
火野は首を傾げながらもメダルを返してもらった
その時だ。

ウウー!!!

「ぶう!?!」

「うわっ!?!」

突然サイレンが鳴り響き、葉隠は驚いたのか
味噌を吹き出すと向かいにいた火野の顔面に盛大にかかる。

「ご、ごめん火野君大丈夫?!?!」

「大丈夫っ!それより：警報っ!?!」

『セキュリティ3が突破されました』

「3・!?!」

『生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難して下さい』

「すみません!セキュリティ3って

どういう意味でしょうか!?!」

「校舎内に誰か侵入してきたって事だよ!

三年間でこんな初めてだ!!君らも早く!!」

八百万は隣のテーブルの席に座っていた男子生徒に
声をかけると、立ち上がりそう言って駆け出す。

すると次々と席を立ち上がり食堂の

外へと逃げ出していく。さっきも言ってたが

こんな非常事態は今までになかった出来事なのか
皆困惑しているのだろう。

「いてえいてえ!?!」

「押すなって！」

「ちよつと待って倒れる！」

「押しすなって!!」

直後、生徒という波が押し寄せて

立ち上がっていた火野達もその渦に飲み込まれてしまう。

「うわっ!?ちよっ!!」

障子君!八百万さん!葉隠:さん!!」

火野は吞まれながらも先程までいた三人を呼ぶが

生徒等の困惑とパニックの声が重なって

自分の声が掻き消されていく。

「ぐっ!?何がどうなってるんだ:!?」

校内に侵入者:!?」

はっ!と何か思ったのか火野は「すみません!」と

無理矢理人混みをくぐり抜け、窓際に辿り着き、

窓の外を見る。

そこには先程校門前にいた大量のマスコミの連中と

それを押さえるべく立っていた

相澤とプレゼント・マイクがいた。

「やっ:ぱり:i:ぐえっ!!」

確認した火野は今にも押し潰されそうになり

窓に身体が張り付いていた。

声を出そうとするが圧が掛かり上手く

言葉を出す事ができない状態だった。

その時だった。

「又オオーーー!!」?

「っ!?飯田君!」?

突如、頭上を何かが通り過ぎた。それは飯田だった。

足のエンジンを吹かしながらぐるぐると空中を

回転しながら飛んでいくと、

出口にある『EXIT』と書かれた標識の上にぶつかると

上手くパイプと片足でその体制を保つと

彼は大きく息を吸った。

「皆さん……」

大丈夫ー！夫!!!」

ズギヤアアン!!」

大胆に飯田は叫んだ。すると、パニックになっていた生徒はその足を止め、一斉に注目を浴びた。

「ただのマスコミです！」

なにもパニックになる事はありません！大丈夫ー夫!!

ここは雄英!! 最高峰に相応しい行動を取りましょう!!」

飯田の発言に徐々に落ち着きを取り戻し、

貼り付けられた圧が解かれ、火野はその場に尻もちを着く。

「ふう……。凄いな飯田君……」

：でも、本当にマスコミだけだったのかな……

あのバリケード突破したって事になる、よな……」

何にせよ、難は逃れた火野は疲れもあつて

その場に座り込んだのだろう。

それから数分後、警察が到着しマスコミは撤退した。

火野が気にしていた事を警察と教師等は調べると、

校門の防犯用の壁は壊されていたらしい。

その後の情報によるとマスコミの連中は

気が付いていたら壁が壊れていたとのこと。

何が起きたのか分からないまま、

火野達は午後の授業に移行したのだった。

☆☆☆☆☆☆

「ホラ委員長始めて。」

「でっでは、他の委員決めを執り行つて参ります！」

……けどその前に、いいですか！」

HRが始まり、早速決まった委員長の二人が指揮を取ろうとすると、緑谷が話を止め、飯田の方を見る。

「委員長は、やっぱり飯田くんが良いと…思います！」
「！」

「あんな風にカツコ良く人をまとめられるんだ、

僕は…飯田くんがやるのが正しいと思うよっ。」

まさかの委員長の座を譲ろうとする緑谷に驚く飯田。

だが、例の件あつてか皆はその意見に賛同する。

「あ！良いんじゃないね!!飯田、食堂で超活躍してたし!!

緑谷でも別にいいけどさ！」

「非常口の標識みてえになつてたよな！」

「適した者こそ指揮をするに相応しい…。」

切島、上鳴、常闇と賛同していき、

飯田は感動したのか震え出していた。

「何でもいいから早く進めろ…時間がもったいない。」

「ひっ!!」

相澤がギロリと睨み生徒等は怯えると

飯田は立ち上がる。

「委員長の指名ならば仕方あるまい!!」

「任せませ非常口!!」

「非常口飯田!!しっかりやれよー!!」

「頑張れ非常口ー!!」

文字通り非常口のマークの格好で叫んでいたので

皆はそう呼んでいた。

こうして、委員長は決まり、ヒーローとして学ぶ高校生活へ戻ると
思ったのはこの時は知らなかった。

こんなにも早く邪なる者と戦う事になることを…。

第3章 　　USJ事件

No. 14 救助訓練

PM 0:50

「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト

そしてもう一人の三人体制で見ることになった。」

予冷のチャイムが鳴り、午後のヒーロー基礎学が始まる。

「(なった：？特例なのかな：？)」

「(なった：、昨日のマスコミの件のせいかな：？)」

「(なった：!?三人目の先生、美人美人美人！

ヒヨオオオオオ!!)」

「ハイ！なにするんですか!?!」

何人かは先日のマスコミの件の事を考えているだろう、

すると瀬呂が手を上げ質問をすると

相澤は“Rescue”と書かれたカードを取り出し見せる。

「災害水難なんでもござれ、レスキュー訓練だ。」

「レスキュー…今回も大変そうだな。」

「ねー!」

「バカおめー!これこそヒーローの本分だぜ!?

鳴るぜ!!腕が!!」

「水難なら私の独壇場。ケロケロ。」

「おい、まだ途中…!」

上鳴、芦戸、切島、蛙吹が私話し出すと

話の途中だったので一瞬相澤の髪が浮き上がり、

四人は肩をビクツと上げ静かになる。

「今回、コスチュームの着用は各自の判断で構わない。

中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな。

訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗っていく。

以上、準備開始。」

相澤はリモコンでコスチュームのロッカーを操作し出すと
教室を出て行く。各々はコスチュームのケースを取ると
早々と更衣室へと移動する。
火野もケースとオーズドライバーを手に取り、
教室を後にした。

☆☆☆☆

「ん、デクくん体操服だ。コスチュームは？」

「戦闘訓練でボロボロになっちゃったから。」

「確か爆破の個性でボロボロになったんだよな緑谷君。」

「こっち見て喋れやクソがっ。」

着替え終わった生徒等は指示された

バスを停めている場所へ移動していると

体操服の緑谷を見て麗日と少し大きめの声で

火野が言うと、聞こえてた爆豪が舌打ちしそう言う。

「修復をサポート会社がしてくれるらしくてね。」

それ待ちなんだ。このへんは買い直し。」

「そっかあ…、パンツなら貸してあげれたけど

大丈夫そうだねっ。」

「パン…ッ!?!」

緑谷は言うと思わない発言をした火野に緑谷は驚き、

麗日は目を見開いて若干引いていた。

「バスの席順でスムーズに行くよう番号順に

二列で並ぼう!!」

「飯田君フルスロットル…!」

「常にトップギアって感じだねっ。」

先にバスの前へ来ていた飯田は

ホイッスルを使って仕切っていた。
皆は非常口頼むぞーなどと言いながら
言われた通りに並びバスへ入って行く。

「こういうタイプだった、くそう!!!」

「あつははは！飯田君もそう言う言葉使うんだねっ…！」

ダメだ…変なツボに…わははっ。」

「イミなかったなー。」

バスの席は普段よく見る二列式のタイプではなく
前車半分が向かい合って座るタイプだった事に

飯田は気付かずショックを受け、向かいに座ってる

火野はツボに入り、青山は冷静にツッコんでいた。

「私、思った事を何でも言っちゃうの。緑谷ちゃん。」

「あ!?!はい!?!蛙吹さん!!」

「梅雨ちゃんと呼んで。」

すると、急に蛙吹が緑谷に話しかけて

まだ女の子に不慣れなのか緊張気味に緑谷は

受け答えする。

「あなたの『個性』オールマイイトに似てる。」

「!!」

蛙吹が言うと、緑谷は何かまずかったのか形相な目で驚く。

「そそそそそそうかな!」

いや、でも、僕は、その、えー…!」

「確かに…、でも緑谷君あの『個性』使うと怪我するよな。」

「火野の言う通りだ梅雨ちゃん。似て非なるアレだぜ。」

たじたじと必死に言い訳か何かを考えようとすると

火野と切島がそれを否定し、話に入り込む。

「しかし増強型のシンプルな『個性』はいいな!

派手で出来る事が多い!俺の硬化は対人じゃ強えけど、

いかんせん地味なんだよなあー。」

「僕は凄くカッコいいと思うよ!」

プロにも十分通用する「個性」だよ！」

「プロなー！しかしやっぱヒーローも

人気商売みてえなところあるぜ!？」

フオローする緑谷の言葉に付け加え、その話題を
火野に向けた。

「やっぱ通用するつつつたら火野だろ！オーズ！」

「えっ？俺っ？いやいやそんなこと…!？」

「そうだよー！火野色んな「個性」使えていいよねー！」

「どんな敵や救助も臨機応変に使えば

とても凄いヒーローになれるよ火野君！」

「あ…はは…、ありがとう…緑谷君。」

切島、芦戸、緑谷と株を上げられ、

火野は恥ずかしくなったのか声が小さくなり

目を逸らしながら礼を言う。

「僕のネビルレーザーは派手さも強さもプロ並み☆」

「でもお腹壊しちゃうのはヨクナイよね！」

掻い摘んで入ってきた青山だが芦戸の一言で

シヨックだったのか固まってしまっていた。

「派手で強えつつたら轟と爆豪も負けちやいねえよな！」

「ケツ。」

「爆豪ちゃんはキレてばっかだから人気出なさそ。」

「んだとコラ出すわ!!」

切島は爆豪と轟へと切り替えるとそれを聞いてた爆豪は

窓の外を眺める。だが、蛙吹の言葉が

気に入らなかつたのか話に入ってくる。

「本当その口調は直した方がいいよ。」

「この付き合いの浅さでクソを下水で煮込んだ様な

性格って認識されるってスゲエよ。」

「ぶふっ!？」

「てめえのボキャブラリーは何だコラ殺すぞ!!」

あと笑ってんじやねー三色野郎!!」

「(かっちゃんがいじられてる：！)

信じられない光景だ流石雄英：！)」

上鳴がそう言うのと火野は吹き出し、更に怒鳴る爆豪。

それを緑谷はプルプルと震えその光景をただ見ていた。

「低俗な会話です事！」

「でもこういうの好きだ私。」

「爆豪くん、君本当に口悪いな！」

嫌そうにその光景を見る八百万、

その隣の麗日は逆に嬉しそうな表情だった。

飯田君は爆豪にそう言っていると

前席に座ってた相澤は生徒等に声を掛ける。

「もう着くぞ。いい加減にしとけよ：。。」

「「「「ハイッ!!」」」」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「「「すっげー!! USJかよ!!」」」

着いたA組一行は早速中へ入るとそこは広く、

色々な施設という名のアトラクション的なエリアが

設置されており、思わず声上がり感極まっていた。

「水難事故、土砂災害、火事etc、あらゆる事故や

災害を想定し僕が作った演習場です。

その名もU嘘の災害や事故ルームS J!」

((USJだった：。))

そこへ説明すべく現れたのは宇宙服を模様したヒーローだ。

「スペースヒーロー『13号』だ!災害救助で目覚しい

活躍をしている紳士的なヒーロー!」

「わー! 私好きなの、13号!」

有り難く説明をしてくれる緑谷にファンなのか

麗日は姿を確認するなり喜び飛び跳ねていた。

すると、相澤は周りを見渡し13号の元へ近寄り

ここそそと話出す。

「13号、オールマイトは?ここで待ち合わせるはずだが。」

「それが、どうやら通勤時に制限ギリギリまで

活動してしまつたみたいで、仮眠室で休んでいます。」

「不合理の極みだなオイ。

・まあ仕方ない、始めるか。」

納得のいかない顔をしつつ、相澤は離れると

13号は生徒等の前へとやってきて片腕を上げる。

「えー、始める前にお小言を一つ二つ……

三つ……四つ……。」

(増える……)

指がどんどん追加され生徒等は苦笑する。

「皆さんご存知だとは思いますが、僕の『個性』は

『ブラックホール』。どんな物でも吸い込んで

《チリ》にしてしまいます。」

「その『個性』でどんな災害からも人を

救い上げるんですよね!」

「〜っ!」

13号は自身の個性について説明すると緑谷は言い、

麗日は全力で首を上下に振っていた。

「ええ……しかし、簡単に人を殺せる力です。

皆の中にもそう言う『個性』がいるでしょう。」

13号はそう言うのと皆の表情は固くなる。

一人一人素晴らしい個性を持っているが

今言われた通り、簡単に人を殺害できる、

そう思ってしまうば、そんな事訳ない。

そう言いたいのだろう。13号の説明を続けて生徒等は聞く。

「超人社会は『個性』の使用を資格制にし、厳しく

規制する事で一見成り立っているようには見えません。

しかし一歩間違えれば容易に人を殺せるいきすぎた『個性』を個々が持つていることを忘れないで下さい。

相澤さんの体力テストで自身の力が秘めてる

可能性を知り、オールマイトの対人戦闘でそれを

人に向ける危うさを体験したかと思えます。

この授業では：心機一転！人命の為に『個性』を

どう活用するかを学んで行きましょう！君達の力は

傷付ける為にあるのではない。救ける為にあるのだと

心得て帰って下さいな。

：以上！ご清聴ありがとうございました。」

「ステキー！」

「ブラボー！ブラーボー!!」

13号の説明が終わり深々と礼をするとA組から歓喜の拍手と口笛が送られていた。

説得力のあるその演説にかっこいいと思った

生徒もいるだろう。

「そんじゃあ…、まずは…。」

一括りついたので確認し、相澤は動こうとする。

ふと、何か違和感を感じたのか広場の噴水へと目が行く。

そこには何もなかったはずの場所から

黒い渦みたいなのが浮き出て徐々にそれは広がって行く。

すると、そこから身体中に覆った

手を付けた男がぬうつと現れる。

「一かたまりになって動くな!!!」

「え?」

普段大声などを出さない相澤が叫び

生徒等は何の事か分からず戸惑ってしまう。

「13号!!生徒を守れ!!」

「なんだアリアヤ!? また入試ん時みたいな

もう始まってんぞパターン?」

黒い渦から大量の手の男を筆頭に次々と人が

湧き出てくるのを確認し、相澤はゴーグルを被り、

13号に指示を出す。切島は気付いたのか広場を見るなり

相澤の手口か何かと勘違いしていると相澤は

再び大声を上げる。

そう、それは奇しくも命を救える訓練時間に

生徒等の前に現れた…。

「動くな!!あれは敵だ!!!」

「13号に、イレイザーヘッドですか…。

先日頂いた教師側のカリキュラムでは、

オールマイトがここにいるはずなのですが…。」

「やはり先日のはお前らの仕業か…!」

黒い渦のは人の形へと変える、どうやら奴の個性で

ここに敵を連れてきたのだろう。

モヤを覆った男性は教師、生徒等を見るなりそう言う

手の男は首をボリボリと掻きながらこちらを見る。

「どこだよ…。せつかくこんなに大衆

引き連れて来たのにさ…。オールマイト…。

平和の象徴…いないなんて…。

子供を殺せば来るのかな?」

それを聞いた瞬間、ゾクツと背筋が凍る様な感覚が襲う。

紛れもなく、プロが何と戦っているのか

何と向き合ってるのか、それは途方もない悪意だった。

そして彼ら敵から底知れないその悪意が

こう向けられているように見えた。

平和の

象徴を

殺せ

「敵^{ヴィラン}ン!? 馬鹿だろ!」

ヒーローの学校に入り込んで来るなんてアホ過ぎるぞ!」

「先生、侵入者用センサーは!」

「勿論ありますが・!」

切島は言うのと八百万は13号に尋ねる。

13号は何故侵入してきた?と言わんばかりにそう言う
轟^{ヴィラン}が敵を見て口を動かす。

「現れたのはここだけか学校全体か。

何にせよセンサーが反応しねえなら向こうに

そういうことが出来る「個性^{ヤッ}」がいるってことだな。

校舎と離れた隔離空間、そこに少人数^{クラス}が入る時間割……、

バカだがアホじゃねえ、これは何らかの目的が

あつて用意周到に画策された奇襲だ。」

敵は何かしらの情報で行動してきた。

そう言いたいのだろう、それを聞き終えた相澤は

生徒等及び13号に指示を出す。

「13号、避難開始! 学校に連絡させ!」

センサーの対策も頭にある敵だ、

電波系のヤツが妨害している可能性がある!

上鳴、お前は「個性」で連絡させ!」

「ツス!」

「先生は!? 一人で戦うんですか!? あの数じゃ

いくら個性を消すっていつても!! イレイザーヘッドの

戦闘スタイルは敵の「個性」を消してからの捕縛だ、

正面戦闘は……!」

緑谷はそう言うのと相澤は首に巻き付けてある

捕縛布へ手を入れ緩めると、緑谷にこう告げた。

「一芸だけじゃヒーローは務まらない。13号! 任せたぞ!」

相澤はプロヒーロー、イレイザーヘッドとして目の前の階段を一気に飛び降りる。

それを見た敵が三人、戦闘に立ち何か出そうとするのか構えるが、

「個性」が発動しないのか困惑する。

その隙にイレイザーヘッドは捕縛布で縛り上げ器用に三人の頭部を合わせ叩きつける。

流石プロヒーローと言った戦力を見せつける。

個性を消すその目もゴーグルで隠し、誰を消してるのか分からない戦法、

対して、素のままの個性「異形型」に対しては格闘術と捕縛布を使ってその場を凌いでいる。

一芸だけではヒーローは務まらないとはまさにこの事だ。

「肉弾戦も強く…、その上ゴーグルで視線を

隠されているは『誰を消しているのか』分からない…、集団戦に於いてはそのせいで連携が遅れをとるな…。

なるほど、嫌だなプロヒーロー。

有象無象じゃ歯が立たない…。

「脳無」がいるから心配はないと思っていたが、

先に「裏ワザ」をこつちに持ってきた方がよかつたか…？」

ボリボリと首を掻いている男は緑谷並みの分析をブツブツと言う。

「凄い…、多対一こそが先生の得意分野だったんだ…！」

「緑谷君！」

「分析している場合じゃない！早く避難を!!」

見惚れてる場合じゃないと火野と飯田は緑谷を呼び、

イレイザーヘッドの言う通りその場から避難を試みるが。

「さっせませんよ。」

出口へ向かおうとした直後、目の前に

黒いモヤの男が突然現れそのモヤを広げて行く。

「初めまして、我々は敵ライアン連合。

僭越ながら、この度ヒーローの巣窟雄英高校に

入らせて頂いたのは、平和の象徴オールマイトに

息絶えて頂きたいと思つての事でした。

本来ならばここにオールマイトがいらつしやる筈、

ですが、何か変更があつたのでしょうか？

まあ……それとは関係無く……私の役目はこれ」

タカ!

トラ!

バツタ!

「せいやあ!!」

「オラア!!」

「うおおっ!!」

13号は指先の蓋みたいなキャップをポコツと開け

個性を使おうとすると、突如、音声が鳴ると同時に

三人の影が頭上を飛び交い、黒いモヤの男を攻撃した。

変身したオーズ、爆豪、切島の三人だ。

「その前に、俺達にやられる事は考えなかつたか!」

「危ない危ない……」

そう……生徒と言えど優秀な金の卵。

そして、やはり本物は素早いですねえ……」

「っ!」

切島が声を上げるとモヤの男はゆらゆらと

その身体を揺らしながらオーズを見ては口を動かす。

「ダメだ!退きなさい三人とも!」

「遅い!散らして、捌り殺す!!」

13号は叫ぶが、時既に遅し。

モヤの男は一瞬にして黒い渦を展開、その場にいた

生徒等は飲み込まれ、霧が晴れるとそこにいたのは
13号、芦戸、麗日、飯田、砂藤、障子、瀬呂の
七人だけだった。

☆☆☆☆☆☆

場所は変わり、薄汚れていた工場の中。
機材が多く並び、壁のあちこちには巨大なガラス瓶が
配置されており、中の液体が怪しげに沸騰していた。

「…もしもし。あ、『ドクター』？」

こっちは準備できたよー。

：分かってるって、実験も兼ねてだから心配いらないよ。」

「や、やめろっ！離してくれ！まだ死にたくない!!」

白毛のアッシュが掛かったボーイッシュな髪の子は
電話をしながら縛られている男へと近寄る。

男は縛られており、怯えているのか大声を出して

助けを求めるが、女の子は呆れた顔で息を吐く。

「うっさいなあ。今電話中なの分かる？」

それにさっきも言ったけど死なないからっ。

まあ、痛みは一瞬だけどね？」

そう言った直後、手に持っていた銀色のメダルを

男の額へと投げ入れた。

「うぐっ!?!うおおあああっ!!?!」

男は苦しいのか叫ぶ。その瞬間、男の身体から
出てくるはずのない包帯がぐるぐると巻かれていた

人型の何かがぬるつと抜け落ちるかの様に出てくる。

「ウウウウウ…!!」

「うっはぁ! すっごい本当に出たぁ! 面白〜い!

グリードじゃなくても出て来るんだぁ!

いいねえ! 最高だよ! …え? グリードって何かって?

まあそれはまた話すよっ。

じゃあ『黒霧』さんに繋いでコレを例の場所へ送ってくれる? まだまだ出すからそのつもりで。

一通り出したら私も行くから:。」

そう言っただけの子は電話を切ると、机にある

大量の銀色のメダルをいくつか手に取り、

捕まってる人々の元へと歩み寄る。

「怖がらないでね。一瞬だから:。」

私も早くこの『力』を試したいので早めに

済ませたいんだ:。ハハハッ。」

No. 15 未知との戦闘

「うわあっ!? つとと!!」

黒い渦に飲み込まれたオーズは視界が白くなると同時に宙に浮いた状態、そこから落下し、上手く着地する。

「何が起きたんだ…!? …あつっ…!?」

オーズは周りが暑い事に気づき辺りを見渡す。

そこは建物や地形その物が放火しており、

辺りは一面火災に包まれてる“火災ゾーン”。

どうやらオーズはあのモヤの男の

“個性”でここまで飛ばされたらしい。

「っ! 皆んなは…! 早く合流しないと…!」

「させねえ! 死ねよ!!」

「っ!」

恐らく散り散りになったと考えオーズは動こうとする直後、背後から刃物を持った敵サイランが襲い掛かってくる。

反応に遅れたオーズは何とかガードしようとしたその時。

「はあっ!」

「ぐえっ!」

「っ! 尾白君!!」

その背後から大きな尻尾を敵サイランに

叩きつけ、顔を地面へと直撃させる。

「よかった! 火野は無事だったんだな!」

「うん! 他の皆んなは!」

「いや、恐らくこの地帯は俺とお前だけだと思う。

そしてこの敵サイラン達のおまけ付きだ。」

尾白は言うのと、辺りの建物からぞろぞろと隠れていた敵サイランが現れる。

「…! 広場の敵だけじゃなかったのか…!」

「恐らくモヤの男の“個性”でバラバラにして

先に潜伏させていた敵で

俺たち生徒を殺すつもりだろう。

やり方が汚い連中だ。」

背中合わせとなったオーズと尾白は

敵に囲まれて状況を把握していく。

「とにかく、こいつら早く倒して皆んなと早く合流しよう！

行くよ、尾白君！」

「ああ！」

やる事は変わらない。今すべきことは一つ。

オーズと尾白は駆け出し、敵に向け

突っ込んで行った。

☆☆☆☆☆☆

ー 広場にて ー

「皆は!? いるか!? 確認できるか!?」

「散り散りにはなっているがこの施設内にいる。」

残った飯田は飛ばされた生徒等の安否を確認すると

障子は個性を使つて音が聞こえたのかそう伝える。

「物理攻撃無効でワープして…!!」

最悪の「個性」だぜおい…!!」

モヤの男から距離を取った七人のうち瀬呂はそう言う。

バラバラにされる前にオーズ、爆豪、切島の三人が

攻撃したのに効いていなかったのを確認したので

攻撃が効かないと判断したのだろう。

その時、13号は飯田に発言する。

「…委員長！」

「は!!」

「君に託します。学校まで駆けてこのことを

伝えてください。警報が鳴らず、そして電話も圏外になっていました。警報機は赤外線式、先輩：：イレイザーヘッドが下で「個性」を消して回っているにも拘わらず無作動なのは：恐らくそれらを妨害可能な「個性^{もの}」がいて：即座に隠したのでしょうか。とすると

それを見つけ出すより君が駆けつけた方が早い！」

「しかしクラスを置いてくなど委員長^のの風上にも：。」

クラスのまとめ役として自身のプライドもあるのか

13号の説得に飯田は拒む。

「行けって非常口!!外に出れば警報がある！」

だからこいつらはこん中だけで事を

起こしてんだらう!?!」

「外にさえ出られりや追っちやこれねえよ!!

お前の脚でモヤを振り切れ!!」

「救う為に「個性」を使って下さい!!」

「食堂の時みたく、サポートなら私超出来るから!

する!!から!!お願いね、委員長!!」

砂藤、瀬呂、13号、麗日と続き、後押しされた飯田は

覚悟を決めて大きく頷く。

すると、モヤの男は何か確認する仕草をする。

「他に手段がないとはいえ

敵前で策を語る阿呆がいますかね。

まあ、その策は不可能ですよ。」

「そうなる訳にならない様、

^{プロローグ}教師の私がいるんでしようが!!」

13号はそう言つて「個性」で吸い込もうとする。

が、モヤの男は距離を取ると、その黒い渦から

何かを落とした。

「では、貴方の相手は私で

出来上がった試作品で彼らを

足止めしてもらいましょうか。」

「ウウウウウ：!!」

「な、何だあれ：!？」

「気持ち悪っ：：！」

落ちたのは人の形をした者だった。

呻き声を上げ、砂藤は驚き、芦戸はその悍ましい姿に引いていた。

「見た目は弱そうですが、甘く見ない方がいいですよ。」

「っ！試作品って事は人間じゃないんですね！」

なら僕のブラックホールで」

「させませんよ。」

13号は包帯生物をブラックホールで吸い込もうとするが、黒いモヤの男が背後へ回り込んでそう言った。

「ウウ：!!ウツ!!」

「っ!?様子がおかしいぞ：：！」

生徒等の前に立っていた包帯生物は疼くまる。

その様子を障子は戸惑い、他の五人も警戒する。

そして、その包帯生物の身体が崩れ落ちる。

そして脱皮するかの様に別の姿へと変わっていた。

「：始まりましたか。」

「っ!!何ですかアレ：：：！」

それを見たモヤの男はニヤリと笑い、13号は驚愕する。

その姿は色鮮やかな羽を広げる「蝶々」の様な怪人へと変貌を変えた。

「：：：ユウエイ、ツブス。」

「っ！こいつ！何か変！」

「注意しろ！何か仕掛けてくるぞ！」

麗日、障子と叫び、構える。

その蝶々の怪人は羽を広げ羽ばたく仕草を見せると勢いよく生徒等に突っ込んで行った。

☆☆☆☆☆☆

ー 火災ゾーン ー

「うわあっ!?!」

「っ! 尾白君!」

火災ゾーンで敵と戦闘を始めた

オーズと尾白。何分か時が過ぎた頃、

尾白は敵の攻撃により腕を斬りつけられ、

オーズは尾白を受け止め地面に置き、

その敵へ今までにないくらい強く警戒する。

次の敵の言葉がそれを表していたからだ。

「ヒノエイジ…! “コアメダル”を渡せ!」

「いきなり黒い渦から現れて襲ってくるだけなら

分かるけど、こいつ…! 何でメダルの事を…!」

「気を付ける! 他の敵より強いぞそいつ!」

腕を抑えながら尾白は立ち上がる。

荒方 敵を撃退し、火災ゾーンから

出ようとした途端、モヤの男の差金か

新手的敵が渦から出現した。

この敵も包帯の生き物だったが急に変貌し、

今は両手に鎌の様な刃物が出た

蟾螂状の怪物へと姿を変えたのだ。

しかもオーズの名を口にし、

メダルを渡せと要求してくる。

「お前何者だ! 何で俺の事ごと知ってるんだ!?!」

「スベテハ、 “オウ” ノタメ…! キエツ!!」

「っ!？」

オーズは問い掛けると蠋螂の怪人はそう言い切り掛かってくる。オーズは虎の胴体を能力解放し、
「トラクロー」を出し、その鎌を受け止める。

「キエアア!!」

「っ!うわあっ!」

「火野っ!!」

その俊敏な動きにオーズは切り裂かれ、火花を散らし地面へと転がる。尾白はオーズへ駆け寄り
その前に立つと尻尾を前に出し構える。

「大丈夫か火野!」

「大丈夫…!それより尾白君は…!？」

「擦り傷さ、思ったより深くない…!」

尾白はそう言いつつも腕を押さえる手は変わらない。

尾白を下手に前へ出せばあの鎌で最悪重症を負いかねない。
そう思ったオーズは一枚のメダルを取り出し立ち上がる。

「尾白君、ここは俺に任せて。」

「二人の方がいいに決まってる!」

「大丈夫!それに尾白君の尻尾は強力だけど、

あの得体の知れない怪物の動きは素早い。

シンプルな個性より、手数多い

俺がそれを上回せる!」

「(つまり、普通って事!!?)」

ガーン…!

オーズの言葉にショックを受ける尾白は「わかった。」と
落ち込みながら了承し、距離を取ると、

オーズはトラのコアメダルを抜き取り、

カマキリのコアメダルを真ん中のスロットへ嵌め込む。

「コアメダルヲワタセ!」

「やだね!お前が蠋螂ならこっちもカマキリだ!!」

そう言い放ち、オーズはオースキャナーを取り出し、

オーズドライバーへとスキャンした。

タカ!

カマキリ!

バツタ!

「はっ!はあっ!!」

「ツ!グワア!」

オーズは「タカキリバ」となり、相手の鎌を去なすとすかさず腕のカマキリソードを怪人に斬りつける。

「よしっ!効いてる!」

「ウウ...!コアメダル・ワタセ...!!」

切り傷を押さえながら怪人はそう言う。

尾白はその傷口を見ると血は全く出てない事に気付く、しかもそれは徐々に塞がっている事に気付く。

「火野っ!そいつ多分“人間”じゃない!」

「えっ、そうなの!」

「ああ!だから思いきりやっていいと思う!」

「もし人間だったら!」

「その時は!...。」

「ちよっ!何か言っつてよ!」

黙り込む尾白にオーズは気を取られ、

怪人に攻撃を許してしまい、また地面を転がる。

「ああ!もう!信じるよ尾白君!」

オーズはそう言いながら立ち上がり、

脚部へと力を入れる。そして跳躍し、両腕を大きく広げる。

「はああ...!!せいやあっ!!」

「グッ!?グアアアア!!」

両腕のカマキリソードで斬りつけられ怪人は悶え、

そして爆散した。普通爆発する人間はまずいないので

驚きながらも何処かホツとするオーズ。

すると、爆散した勢いで一枚の銀色のメダルが
転がり足元へと当たる。

「ん……？これ……メダル……？でも色が違う……」

「火野！やったな！」

「う、うん。とりあえずは……」

駆け寄る尾白にオーズは答えながら
拾った銀色のメダルをしまい込む。

ふと、オーズは何か感じたのか広場の方角の空を見上げる。

「どうした火野？」

「……何か、強い気配みたいなのを感じる。」

オーズの頭部 “タカヘッド” のクリスタル状の額

“オークオーツ” と呼ばれる器官は

十キロメートルの四方にいる敵の気配を感知することが
出来る超感覚センサー。それを使い何か感じとったのか
オーズは脚部に力を入れ尾白に言う。

「ごめん尾白君！先に広場に行ってくる！」

「あっ!?火野っ!!」

呼び止めようとする尾白だが既に跳躍した後で
尾白はその後ろ姿をただ見送っていた。

☆☆☆☆

「13号、災害救助で活躍するヒーロー。やはり……」

「「先生ー!!!」」

「戦闘経験は一般ヒーローに比べ半歩劣る。

自分で自分をチリにしてみました。」

生徒は叫ぶ。

黒いモヤは13号の正面、背後にワイプゲートを作ると
ブラックホールを発動した瞬間後ろから自身の
ブラックホールに吸われ、13号の背中は飲み込まれ
チリとなつてしまつていた。

「くそおっ!!こいつが邪魔で

飯田を外に出せねえ!」

「こんの…!!すばしっこいなあ!」

「フハハハ!!」

心配する余地も無く、六人の生徒は飛び交う蝶々の怪人に
苦戦を強いられていた。

瀬呂はテープを出し捕らえようとするが紙一重で
交わされ、尚且つ低空飛行をして攻撃してくる為
出口に向かおうにも邪魔をされてしまう飯田。

麗日も奮闘し、何とか掴もうとするが避けられて
苛立ちを見せる。

「なかなかどして。随分と使える『ヤミー』ですね。」

モヤの男は倒れる13号の側にいながら

その光景を見ては感心していた。

そして、中央のセントラル広場も。

「ぐおっ!!」

ベキッ!とへし折られる様な音が響き渡る。

黒い怪物にのし掛かられ、左腕を簡単に折られていた。
痛みで激痛が走り悶えるのは相澤だ。

「対平和の象徴、改人『脳無』。

『個性』を消せる、素敵だけどなんてことは無いね。

圧倒的な力の前ではつまりただの『無個性』だもの。」

先程まで奮闘していたあの相澤が脳無によつて
押さえられていた。それを眺める手の男は

見下しては不吉な笑みを浮かべる。

脳無は続いて右腕を掴むと長ネギの様に簡単に

握りつぶし、へし折る。

「~~~~っ!!!」

声にならない叫びを上げる相澤。

そして今度はその頭の髪を掴むと、

思いきり地面へと叩きつける。

「みみ緑谷…!!ダメだ…!これじゃ動けねえよ…!

流石に考え改めただろ…!!?」

「ケロ…!!」

「~~~~っ!」

一方で、水難ゾーンへと飛ばされていた

峰田、蛙吹、緑谷は先に苦難を打破し、

セントラル広場へとやってきていたが

加勢をしようにも脳無の力が圧倒的過ぎて、

怯え、恐怖で動けなくなっていた。

救援も呼べず、救いの手の相澤をもやられてしまい、

この場の状況は最悪だった。

その連鎖は、まだ止まらなかった。

「『死柄木弔』。」

「…? 『黒霧』。13号とガキ共は始末したのか?」

「行動不能にし、生徒等は『ヤミー』が

足止めしてくれています。」

「は?…じゃあ何でここにいるんだよ?」

「連絡が入りました。『予定のヤミー』は生成出来たので、

こちらに向かうとの事です。」

モヤの男『黒霧』は言うど笑いながら手の男、

『死柄木』は口を動かす。

「そうか…!ははっ…、連れてこい。」

「はい。」

黒霧は頷くと黒い渦を広げワープゲートを作り出す。

次の瞬間、この場にいた緑谷達は予想などしていなかった

驚く出来事が待ち受けていた。

「遅いぞ…『脇真音』。」

「いやあーごめんごめん。色々ポーズ考えてたけど
時間掛かってしっくりこなかったから
変身して来ちゃった。」

黒い渦から現れた者に対して、驚愕、そして困惑。
それを見た峰田は目を大きく見開いて言った。

「嘘…だろ…!!何で…!!

何で オーズ が ライアン 敵側に
いるんだよおお!!?」

その者、仮面ライダーオーズが闇から姿を現した。

No. 16 最強コンボ

「ここがUSJかあ〜！」

本当アトラクションパークみたいなどだね！」

「うるさい、脇真音」。レイザーヘッドは

脳無が押さえてるからお前はガキ共を始末してこい。」

「…命令しないで、私は私なりに動くって言っただでしょ？」

「…はあ。お前、崩すよ？」

「落ちて下さい死柄木弔、それに脇真音わきまねゆうな優無。

彼女の「ヤミー」のお陰で足止めに

成功していることには変わりありません。

戦力は揃いました。ここにいる教師と生徒を制圧した後、

散らばっている生徒達を殺し、オールマイトを呼び出し、

奴を殺すのが我々の使命。

私は出口にいる残りの生徒達を始末してきます。

ここは頼みましたよ二人共。」

「…わかったよ。」

「はあ〜い。」

揉める死柄木と脇真音を宥める黒霧はそう言っ

たワープを使い姿を眩ました。

「(な、何で敵ライオンにオーズが:!!)

喋り方的にどうやら女性っぽいし

火野君ではない事は確かだ！でも、となると

あの個性は一体何なんだ？

同じ個性が二つもあるって事か:??

訳が分からない！頭の中が色々混ざってごちゃごちゃだ！

とにかくどうする:!!?

相澤先生はもう戦える状態じゃない:!!

さつき黒いモヤの男が言っていた「ヤミー」って奴

他の場所にもいるのか!?僕らは何とか撃退したけど

他の場所にもいたとしたらみんなが危ない!

あのオーズも火野君みたいな強い個性だったら
僕らじゃ勝ち目がない！ただでさえ化け物だけでも

厳しい状況なのに！この場をどう切り抜ける!?くそっ！」

緑谷は必死に考える。

水難ゾーンで派手にやったのか

緑谷の指は三本負傷していた。

脳無とやらがオールマイト並みの力の持ち主で 相澤はやられあ

の死柄木と言う男は

触れた相手を崩す “個性” を持つており、

イレイザーヘッドの右肘が崩れていた。

触れただけでも危険な敵に^{サイラン}

おまけと言わんばかりにオーズの個性をもった女の子。

まさに絶体絶命の状態だ。

「…とりあえずまあ。」

死柄木はゆつくりと立ち上がると

その視線は緑谷達に向けられる。

「まずはこいつらから消すか…!!」

一瞬だった。物凄い速さで死柄木は緑谷達の前へと移動し、

右手を蛙吹の顔へと出す。

一瞬の出来事で緑谷の脳内には死柄木の触れた手で

イレイザーヘッドの肘が崩れた事を思い出す。

蛙吹の顔に触れ、やばい。そう思った瞬間だった。

「…。本当にかっこいいぜ。」

イレイザーヘッド。」

「…!!」

蛙吹の顔に触れた死柄木だが “個性” が発動せず

死柄木は後ろを振り返ると、脳無に頭を

押さえられていても、イレイザーヘッドは意識朦朧する中、

死柄木を “個性” を使い、睨んでいた。

だが脳無にまた顔面を地面へと叩きつけられる。

「(ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ)

ヤバイヤバイ!!! さっきの敵とは明らかに違う！
考える暇ない！蛙吹さん！救けて！逃げ：！」

緑谷は躊躇なくただ救ける思いを胸に

死柄木に拳を突き出そうとする。

「手エー！離せえ!!」

「脳無。」

「SMASH!!!」

緑谷は渾身の一撃を死柄木に打ちかます。

腕なんか気にしてられない状態、その考えの為か

緑谷の腕は赤く腫れず、全く折れていなかった。

「え。」

だが、その攻撃は死柄木に当たっていない。

そこにいたのは脳無だからだ。

そして緑谷は脳内でふと思いついていた。

蛙吹が言っていた殺せる手段があるから

連中はこんな無茶をしたんじゃないかと。

緑谷の個性、オールマイト並みの力を出したはずなのに

脳無はダメージは愚かピクリとも動じていなかったのだ。

「いい動きするなあ…。スマッシュユって

オールマイトのフォロワーかい：？

まあいいや君：。」

「あくあ、これヒーロー側の

ゲームオーバーってやつだね。」

緑谷は離れようとするが脳無に腕を掴まれる。

それを見た蛙吹は緑谷を助けようと舌を伸ばす。

だが、死柄木はもう一度蛙吹に触れようとする。

峰田も助けようとするが蛙吹に頭を押さえられ

身動きが取れない状態。

そして、オーズの女の子はそれを眺め眩く。

何もかもが手遅れ。そう思っていた瞬間だった。

スキヤニングチャージ!!

「せいやああああっ!!!」

「っ!?!」

「おや?」

上空から声が聞こえ、死柄木、脇真音オーズは上空を見上げる。だが、既に落下してくる直後だったので、

脳無を呼ぶ暇もなく、死柄木と脇真音オーズは

距離を取り、上空から来たオーズは野無へと

タトバキックを食らわせた。

「だっ!?うわあ!」

「ケロッ!緑谷ちゃん!峰田ちゃん!」

衝撃で吹き飛ばされた緑谷と峰田と一緒に飛ばされる

蛙吹は舌を伸ばし、二人を巻き取り、

水面の方へと着地する。

三人は直ぐに広場の方を見ると、

そこにはいた。

「っ!ひ、火野おとおお!!」

「火野君っ!」

「ケロオ!」

「ごめん!遅くなった...!」

火野こと、タトバコンボのオーズが参上した。

タトバキックを受けたはずなのに、少し飛ばされた程度で

脳無はゆっくりと体制を直し、オーズを見遣る。

「嘘だろ...!渾身の一撃だったのに...!!」

瞬間、オーズは止まる。

その後ろが砂埃で見えなかったが、こちらにやってくる敵オーズを見たからだ。

「やっほー。初めまして…でもない…かな。」

火野映司君。」

「う、嘘…：だろ…：!?何で…!?」

無理もない。自分の個性だと思っていたオーズが

目の前にいる。映司の声を聞いた敵オーズは

ケラケラと笑い出す。

「やっぱり思った通りの反応だよ死柄木君！

賭けは私の勝ちね！晩飯奢ってよ?」

「ウザい。そんな賭けしてない。」

ほら、本物が来たぞ。お前はその対処だろ。」

「ノリが悪いなあ。まあ、

そのつもりだったからいいけどね。」

「脳無、お前も加勢してやれ。」

死柄木とやり取りを終え、敵オーズは構える。

そして脳無もオーズを睨み、両手を広げる。

敵のオーズを目の当たりにしてパニックになってしまう

オーズだが、その付近に倒れてる

ボロボロの相澤を見つけ、目を見開いていた。

恐らくどちらかにやられたのだろう。と思い

オーズは首を振り、何か決心したのか

同じ系統の色をした緑のコアメダルを二枚取り出す。

「考える時間はない…!!俺の身体がどうなろうと、

絶対に救ける!!」

「っ！火野君！」

オーズはタカとトラのメダルをドライバーから抜き取り、

「クワガタ」、「カマキリ」のコアメダルを

オーズドライバーに嵌め込むと、緑色にメダルが発光する。

今の言葉に不安を抱いた緑谷は声を掛けるが

彼の意識は敵にサイラン一点集中だった。

「うわっ。マジで？そのメダル…！」

「っ？脳無ッ!!」

敵のオーズは何か感じたのか焦る素振りを見せ、それを聞いた死柄木は脳無に指示を出し
脳無は地面を蹴り、オーズに突っ込んで行く。
が、オーズはオースキャナーを取り出し、
オーズドライバーへとスキャンした。

クワガタ！

カマキリ！

バツタ！

ガクター！ガタガタ・キリツバ・ガタキリバ！

変身する際に飛び出るオーメダルの形をした
エネルギー状の輪っかに脳無は当たると
弾かれるかの様に飛ばされる。

聞いたことのない音声が鳴り響き、

オーズの身体は全身緑色へと統一する姿へと変わる。

「す、凄い…！全身昆虫…!?!」

「な、何だよアレえ…！」

「タトバの時と違うけど、音楽が流れたわ…！」

その姿を見た緑谷、峰田、蛙吹は驚く。

それは敵^{サイラン}側もだった。

「ガタキリバ！そのメダル揃ってたの…!?!」

私持っていないよそれ！いいなあ!!欲しい!!

てか、不味いなこれ…！」

「おい…、一人で盛り上がるな。何が不味いんだ？」

「お前と脳無が入れば問題ないだろっ…?」

「あれは想定外！コンボの中でも」

特に厄介で最強なんだよアレは…!」

敵のオーズは何か知ってるのか戸惑い、それは伝染し死柄木も警戒する。その時だった。

「うおおおおおおおっ!!!」

「っ!」

「うるっきっ!」

オーズはドームに響き渡るくらいの音量で叫び、その場にいた脳無以外の人は全員耳を塞ぐ。すると辺りはその音量と衝撃で地面は震え、水面は波揺られていた。

オーズ、三色の同じ系統とコアメダルが揃い、完成するそのフォームは「コンボ」と言う。

そして今立っているオーズは

クワガタ、カマキリ、バツタと昆虫類系が揃った

「ガタキリバ」コンボだ。

「っっだあぁっ!!」

雄叫びを終え、煽れんばかりの力を去なす様に

オーズは気合を入れる。

その次の瞬間だった。

オーズの身体が「分裂」し、その数は五十と推定する人数へと分裂したのだった。

「…っ!?!増えた…!」

「っ!!」

その夥しい数に敵の二人は驚き

五十に増えたオーズは、〃意思を疎通〃して

何十体かは各事故のゾーンへと散り散りになる。

約十体は脳無へと飛びかかり、四、五体は

敵オーズ、死柄木へと飛びかかる。

流星の数に敵側は戸惑い、

猛攻により防戦する形となってしまう。

一気に数が減り、残りの一体のオーズは

緑谷達の元へ駆け寄る。

「大丈夫っ!?!」

「え、ええっ、火野ちゃん凄いわね…!」

「分身かよっ!?!これも勝確じゃねえか!?!」

「僕らは大丈夫…!それより火野君は…!?!」

「中学の時より動けるよっ。

他の場所にも俺の分身に行ってもらったから大丈夫!

今は安全な場所へ!ここは俺が食い止める!

あ、その前に奴らの個性教えてくれるっ!?!」

「う、うん…えっと、あの手の男は触れた相手を

壊すか崩す…みたいな個性だと思う!

黒い大男がオールマイト並みの力と

ダメージを吸収する複数の個性持ち…!

あのオーズは多分、火野君と同じ個性だと思う…!

で、でも!分身した火野君達にも知らせた方が…!」

「ありがとう!大丈夫!意思を共有してるから

もう伝わったよ!」

「火野お前何でもアリか!?!」

「さっ、早く出口の所へ!

無事に辿り着けたら、反撃開始だっ。」

コンボとなり分裂したオーズ、ここの三人は

もしかしたらこの窮地を何とかしてくれるかもしれない。
そう思っていた。が、現実はその甘くはなかったのだった。

No. 17 反撃の英雄

「はあ！」

「たあ！」

「せいやつ！」

「っ!? 流石に多勢は…! きつついね!!」

「こんな奴ら…! 触れて終いだ…!」

「そうはいかないっ! はああっ!」

「っ! 電流…!」

昆虫類の能力が使えて身体能力上昇、

おまけに増殖して電撃かよ…!

コンボって奴はチートだなそれ…! あくだるい…!

ガタキリバの分身の攻撃に防戦をする敵オーズ。

死柄木は隙を突いて触れようとするが、

頭部の「クワガタホーン」から雷を発生させ

辺りを緑色の電流が走る。死柄木は予想外の攻撃に

飛び下がりそう言いながら警戒する。

「まあ…強力…な…! 分…! 反動も凄いから!

ここは粘るしかないよ死柄木君!

「お前が一番粘れ…。その為の対策だろ…。」

「粘ってるよっ! でも私も使い始めたばっかだから

結構疲れるんだよこれ!」

「知るか…。」

敵オーズは受け流しながら言うど不満そうに死柄木は言う。

そして脳無に数で交戦するオーズは

力の差がある為、何体かは突っ込み飛ばされ、

また次の何体かは突っ込み、飛ばされている。

数打てば当たるとはこの事だが、シヨック吸収の

「個性」を持つ脳無には徐々に押されてる一方だ。

「お前! 何で俺と同じオーズの力を持つてるっ!」

「それは後々わかる…よ!

今は未知の敵^{サイラン} って事で！話通るかな！
はあっ！」

「うわっ!？」

問いかけるオーズに敵オーズはそう答えながら
蹴り飛ばし、一体のオーズは飛んで行く。

その交戦の最中、緑谷、蛙吹、峰田と一体のオーズは
倒れてるイレイザーヘッドの元へ駆け寄っていた。

「イレイザーヘッド!!」

「凄い重症・！見ていられないわ・！」

「は、早く運んでここから逃げようぜっ!？」

ボロボロになって気を失っているイレイザーヘッドを
緑谷は担ぎ、その後ろをフォローする形で

三人はその場から逃げ出していた。

☆☆☆☆

ー USJ 出口付近にて ー

「おおああっ!!捕らえたっ!!」

「ナニッ!？」

五体程駆けつけたオーズは肩から肩へと積み重ねで
塔みたく登ったオーズは上空にいる蝶々のヤミーに
向かって跳び、足を掴む。

「行くよ!」

「分かった!せいやあっ!!」

「「せいやあっ!!」」

「グッ!?ウオアアアアッ!？」

捕まってるオーズは合図を出すと

残りのオーズは順番に跳躍し、四人同時に蹴りを

食らわし、蝶々のヤミーはダメージを負い爆散する。

「やった！」

「す、すげえ！一人、いや五人であの怪物倒したぞ?！」

「これが同じ系統三枚の力：流石だ火野。」

「なら！俺等も全力でこいつを押しさえないと！」

芦戸、砂藤、障子は見て驚くと、瀬呂はそう言つて

黒霧に「個性」のテープを飛ばす。

「っ!?まさかヤミーを……やはり「本物」の

オーズは侮れませんか……!しかし、応援は呼ばせませんよ!」

「そうは……させへんっ!!」

黒霧はテープを避け、オーズに迫るが、

「個性」で浮いた麗日は黒霧の首元にある

「アーマー」らしき物に触れる。

「理屈は知らへんけど、こんなん着とるなら

実体があるって事じゃないかな……!!」

そう言いながら、麗日は「個性」を使い、

ソレを放り投げる。

「いっけえ!!飯田君っ!!」

「っ!?小癩な真似を……!!」

麗日は叫ぶと飯田は「個性」を使い全力で出口へ向かう。

ヤミーはオーズが倒した今、残すは黒霧のみ。

それを遠ざけた事でチャンスが生まれる。

追いかけてようと黒のモヤを広げるが、

引つ張られる様な感覚が襲い、黒霧のモヤは

飯田まで届かない。背後を見ると

瀬呂が「個性」を使い引つ張っていた。

「やつと捕らえた!!行けえ!委員長!!」

「こんな物……!」

「そうは行かないよ!せいやあー!」

「「せいやあ!!」」

テープを取ろうとするがその目の前に

オーズ五人が跳躍し、飛び蹴りをする。

何体かは空振るが一体はアーマーに直撃し、

黒霧は出口とは反対方向に飛ばされる。

「……応援を呼ばれる……。ゲームオーバーだ……」

出口を飛び出して行つた飯田を確認し、

黒霧はそう言うと、「個性」を使いその場から

姿を眩ました。

「よっしゃあつ！」

「火野が来ていなくなつたら私達本当危なかつたよー！」

「……安心するのはまだ早いよ。」

俺はこのまま広場で奴らを足止めするから

皆んなは13号と一緒にここで待っていてくれる？

直ぐに緑谷達もここにくるから。」「」

「一緒に喋ってる気色悪いな。」

砂藤は喜びガッツポーズを取り、芦戸はオーズにそう言うと、瀬呂

は横一列に揃うオーズに向かつて

毒舌を吐く。するとオーズはショックを受け

同時に四つん這いになり落ち込んでいた。

「と、とにかく皆んなはここにいて！じゃっ！」

「あ、火野君っ！」

一体のオーズはそう言ってセントラル広場の方へと

跳躍し、広場にいる他のオーズ等の加勢をする。

そして、階段付近で、イレイザーヘッドを抱き抱えてた

緑谷と峰田、蛙吹がこちらにやってくるのが見え、

麗日達は駆け寄っていた。

「……あれ？……これっ。火野君の……？」

ふと、芦戸は足元に落ちている一枚の

銀色のメダルを確認し、それを拾う。

☆☆☆☆☆☆

ー 山岳ゾーンにて ー

「せいやあっ!!」

「ドアッ!」

「耳郎さん!」

「オツケー!」

オーズは蠚螂のヤミーを蹴り飛ばし、怯む隙に

耳郎の名を呼ぶ。耳郎は耳朶についてるプラグを

コスチュームの足にあるステレオの様な部分に差し込むと

爆音の衝撃波を出し、ヤミーに食らわせる。

「とどめは私がつ!!」

「グツ!?ウオアアアア!!」

その背後からトランポリンを使って飛び上がった

八百万はロケットランチャーらしき代物を生成すると

ヤミーに向け引き金を引き、放つ。

蠚螂ヤミーに当たり、その威力に耐えきれず爆散した。

「これで一安心ですわね。」

「今の：バズーカ：？八百万さんそんな物まで創れるの？

すごっ…。」

「本来は使わない事にしてます。ですが

相手が人外なら別ですわ。」

「いや、てか火野。」

「あんたの個性の方が十分凄すぎるから。」

耳郎響香

個性『イヤホンジャック』

プラグを指す事で自身の心音を爆音でお届け!!

他にも微細な音をキャッチしたりだとか!

八百万百

個性『創造』

生物以外なら何でも生み出せれる！

それを可能にするのは分子構造まで把握する
彼女の知識量だ！

ヤミーを倒し、二人十三人の分身は互いの安否を確認すると
物陰から上鳴が出てくる。

「う、うえく〜い……。」

「うわっ、え？上鳴君？どしたの…？」

「さっきまで敵と戦ってたんだ。
サイラン

訓練の…時もそうだったけど…ブフツ！」

馬鹿みたいな顔に驚くオーズ。

一度見たことある耳郎は説明しようとするが
笑ってしまう。

上鳴電気

個性『帯電』

W数が許容オーバーすると

脳がショートし一時的に著しくアホになるぞ!!

「…ま、まあ無事で何よりだよ。

三人は早く出口に行つて皆んなと合流してほしい。

俺は他の所に行つて加勢してくるっ。」

「あつ！おい火野っ！」

耳郎が呼び止める間もなく、オーズ等は跳躍し、
その場から姿を消した。

「相変わらず凄いジャンプだなあ。

八百万、ウチらは言われた通りに出口へ…どうした？」

「あんなに急いでどうしたのでしょう…？」

「それは、ほらアレだろ？他の奴らが

心配なんだと思うよっ。」

耳郎はそう言うと、八百万は横に首を振つた。

「いえ、何か：火野さんはどこか
余裕がない感じが致しますわ：。」

☆☆☆☆☆☆

「「うわああっ!!」」

「どうした：：うええ、おい？」

「さっきまでの威勢はどこに行っただオーズ？」

「え、呼んだ？」

「黙れ、お前じゃない：。」

脳無に吹き飛ばされ、諸に攻撃を受けるオーズ。

すると、死柄木と敵オーズと交戦していたオーズは
身動きが鈍くなり、膝をつく。

「どうやら分身で作り出した個体は誰かがダメージを受けると、伝染し、分身全員にもダメージが与えられるらしく、その場にいる全オーズは疲労とダメージで足元がおぼつかない状態だった。」

「息も上がってんな：。そりゃあんだけ自分増やせば
その分疲労も溜まるわな：。」

「そうそう！ガタキリバはそこが弱点なんだよねっ。」

「知ってるなら先に説明しろよ：。」

「おかげで電撃受けて服が焦げた：弁償しろ：。」

「えーっ、服ぐらいいいじゃん。」

「それか私を選んであげよっかつ？とびきり可愛いやつ！」

「はあ：。本当粉々にするよお前：。」

死柄木と敵オーズは痴話喧嘩をし出す。

疲労が溜まり始め息が荒くなるオーズは

何かを感じ取ったのか、少し安心した表情を

マスク内で行い、立ち上がる。

「：悪いけど、お前等が持ってきた
敵ヴィランと変な怪人・ヤミーだっけ？」

「：全部倒させてもらったよ：。」

「えっ!? ヤミー倒したの!？」

「うーん、試作品だからやっぱダメかあ。」

「：あくオールマイトは来ないし、

お前を含めて雑魚共は役に立たない：。」

「は？ それは失礼過ぎない？ あんただって

連れてきたあの雑魚達使い物にならないじゃない。」

オーズの言葉に二人の敵ヴィランはまたもや痴話喧嘩をし出し、オーズは

チャンスだと思い

足に力を入れたその時だった。

「：うぐっ!? うあっ! ああっ!!?」

突然オーズは苦しみ出す。

すると身体の緑色が灰色へと点滅するかの様に

発光し、その変身は解かれ、膝をつく。

そして周りにいた分身も一気に消える。

「うう：!! もう限界か：!!」

「：あく、丁度いい。」

このイライラはお前で晴そう：：それがいい：。」

「あつ、待って待って。火野映司君が持ってる

ガタキリバ貫ってからにしてよっ。

でも殺したらダメだよ?」

「：ちっ。脳無、こいつの四肢をへし折れ。」

そう言っつて死柄木の言葉に脳無は従い、

映司の元へと歩み寄ってくる。

とてもじゃないが火野は立つ事すら儘ならない状態だが、

諦めず、息を荒く呼吸し、踏ん張ろうとする。

「死柄木弔。」

「：今度は何だ。」

すると、黒霧が死柄木の横に現れ、
そちらに反応がいったためか、脳無の動きが止まる。

「行動不能にはできたものの、散らし損ねた

生徒がおりまして……一名逃げられました。」

「はっ。」

「えっ？黒霧さんマジで言ってるの？」

「……………は？はー！…はあー！、黒霧、お前…

お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしたよ…

流石に何十人もプロ相手じゃ敵わない。

ゲームオーバーだ……。帰ろつか…。」

黒霧の知らせに敵オーズは驚き、死柄木は

首をがりがり引つかきながら黒霧を睨みつけ溜息を吐く。

飯田を逃がせたのはその場にいた分身体で

火野も知っており、悪態をつく様に鼻で笑う。

「…まあ、計画を台無しにしてくれたこいつだけは…。

殺して帰ろう…！脳無…！」

「ちよっ！死柄木君話がちがつ…！」

死柄木は形相を変え、脳無を呼ぶと

地面を蹴り、脳無は火野に突っ込んでいく。

敵オーズは止めんと駆け出すが、スピードからにして

圧倒的に脳無の方が早い。

一度は形勢逆転とした戦いが再び恐怖の現実に戻される。

強い個性を持つていようと、彼はまだ学生。

経験値もなく、その力を使いこなせなければ意味がない。

だが火野は思っていた。

周りの友達や仲間が逃げれたのならそれでいい。

十分だと。

そう思い、諦めて目を瞑ろうとした。

その時、それを打ち壊す者が現れる。

突如、出口の扉が勢いよく吹っ飛び、

広場にいた敵^{サイラン}達と火野はその方向を見遣る。

そこにはいた。平和の象徴、
この窮地を脱してくれる英雄。

「もう大丈夫。私が来た！」

No. 1 ヒーロー、オールマイト、ここに参上する。

No. 18プロの本気

「あー………コンティニューだ。」

「あれがオールマイト……！やば、画風違いすぎない？」

豪快に登場するオールマイトに死柄木はニヤリと笑い、敵オーズはその風格に驚き、スマホを出して写メを撮っていた。

「「オールマイトオ!!」」

「嫌な予感がしてね……校長の話を

振り切ってやってきたよ。来る途中で飯田少年とすれ違って、何が起きているかあらましを聞いた。」

出口付近にいた生徒達はオールマイトが来た事に歓喜、喜び、泣いている生徒も何人かいた。

抜け出した飯田から事情を聞き駆けつけたオールマイトは笑っていなかった。

(全く、己に腹が立つ……!!子供らがどれだけ

怖かったか……!後輩らがどれだけ頑張ったか……!!

火野少年が身を挺して戦った事か……!!しかし……!!

だからこそ胸を張って言わねばならんだ!!)

オールマイトは悔やみ、自身のネクタイを引きちぎり、再度こう言った。

「もう大丈夫。私が来た!!」

「オ、オールマイトっ!今、火野君が一人で戦って……!」

「大丈夫だ緑谷少年……蛙吹少女、峰田少年も

よくここまで相澤君を連れてきてくれたね!

後は私に任せたまえ!

相澤を担いでいた三人を見て三人の肩を順番に手を置き、セントラル広場へと向かおうと歩き、

その瞬間、地面を蹴り、一瞬にして広場へと跳躍。

「っ!?!」

「あだっ!!?」

その一瞬の出来事、オールマイトは死柄木と敵オーズ、
脳無を殴り、脳無以外の二人はよろける。

「よく頑張ったね火野少年っ……！本当によく頑張った！」

「オ、オールマイト……。はあ……。はあ……！」

ヴィラン 敵達は撃退しました……！

散り散りに……なった生徒は無事です……！

でも……！こいつらは……！強すぎて……！」

「（見る限り雑魚の敵は全員気を失っている……。」

他の生徒を守って、全部一人で立ち向かったのか……！

全く近頃の若い少年はとんでもない「個性」と

行動力を持つてるな……！）」

本つつ当、よく頑張ったよ……！」

ヴィラン 敵の襲撃でプロのヒーローが

やられてここまで本物のヒーローみたく活躍する学生は

中々おらず彼の活躍は凄いとしか言いようがない。

抱き抱えた火野は意識朦朧とする中、現状を伝え、

オールマイトは褒めまくっていた。

そして、オールマイトは死柄木と敵オーズを睨む。

「いったああ……！変身してるのに直に顔殴られた感じ……！」

流星オールマイトって言いたいけど……！」

女の子に暴力振るうなんて

ヒーローとしてどうなのそれっ！」

「ああああ……！ダメだ……！」

「ごめんなさい……、お父さん……！」

仮面をすりすりと撫でながら敵オーズは怒る。

そして死柄木は殴られた際に顔に付けていた手を

謝りながら拾い、再び顔に付ける。

「救けるついでに殴られた……ははは、国家公認の暴力だ。

流星に速いや、目で追えない。けれど思った程じゃない。

やはり本当だったのかな……？弱ってるって話……。」

「だね……！あー頭きた！本当は使いたくなかったけど

実験がてらにコレ使おつとつ！」

死柄木はニヤリと不気味に笑いオールマイトを見る。

同意した敵オーズは二枚のコアメダルを取り出す。

「火野少年、ちよつとごめんよつ。」

（飯田少年が言っていた火野少年と同じ「個性」の

オーズ！何かしかける気だな…！）

CAROLINA…」

オールマイトはそれに気付き、後ろにゆつくりと置き、

クロス型に手を交差させ偽オーズに突つ込む。

「ちよ早つ！死柄木君つ！」

「ちつ…脳無。」

「SMASH!!」

技を放つオールマイト。だが瞬時に現れた

脳無が敵オーズの盾となりカバーする。

「あつぶなあ…、ナイスっ！」

敵オーズはタカとトラのメダルを抜き取り、

百足の造形がされたメダルと、蜂の造形がされたメダルを

ドライバーのロットに嵌め込み、

オースキャナーでスキャンした。

ムカデ！

ハチ！

バッタ！

「っ!?俺と同じ昆虫…!?でも違う…！」

「Shit!何かまずそうだな…！」

頭は百足、胴体は蜂の造形が施された姿へと変わる

敵オーズ。

その姿に火野、オールマイトは驚き警戒する。

「それがドクターの言ってた

「新造」コアメダルってやつか…。

てかもっと早く使えよ、本物とあんな闘わずにすんだろ…。」

「うるさい！最初なんだからリスク伴うのこれ！

行くよ！」

百足、蜂、蝗といった亜種フォーム、

『ムカチバ』フォームとなった敵オーズは

胴体の腕にある蜂の針「ハチニードル」を構え

突っ込む。脳無も動き出し、オールマイトへその拳を大きく振りかざす。

「っ!?こんのっ…!!

マジで全然効いてない上に！二人がかりはズルいぞ！」

「女の顔を殴ったあんたが言うっ!?」

「それはご…めん！だがしかし！もう一発行くぞ!!」

「あっ!?ふぐっ!?」

脳無の一撃を海老反りで避け、敵オーズはハチニードルで攻撃するが、見かけに寄らない身のこなしで

攻撃を避けるオールマイトはそう言っただけで身体を捻らせ

敵オーズの腹部へと蹴りを入れ上空に吹っ飛ばす。

「げっほっ!!…こんのおっ!!」

咳き込む敵オーズは頭部のムカデの身体のような形が伸びて、オールマイトの右腕に絡みつく。

だが、これは失敗だった。

「ふうんっ!!」

「っ!?…きゃあああっ!!」

それを逆手にオールマイトは右腕を振りかざし

敵オーズは思い切り地面に叩きつけられ、

その地面は割れ、埋まる形になっていた。

それを見ていた死柄木は首を掻きながら口を動かす。

「おいおいおいおい…。全っ然役に立たないじゃないか…。しっかりしろよオーズさんよお…。」

「げっほげほ……あんた代わりに闘ったら……!？」

もうアレ、チートだよ……!!このムカデの目

物凄く周りが見えやすいのにあいつ早すぎ……!

全然攻撃が見えなかった……!あ……!くらくらする……!」

「……お前もう限界だろ……黙ってそこで見ていろ……。」

瓦礫を退けて出てきた敵オーズは文句を言う

と千鳥足となりふらつき、膝をつく。

死柄木はそうやってオールマイト等を見ると

脳無と交戦をしていて、オールマイトは背後を取り

脳無を掴むと、思い切りバックドロップする。

その威力は凄まじく爆発する様な衝撃を見せ

地面が大きく揺れた。

「っ!?す、凄い……!」

何とか物陰に隠れた火野はその光景を見て驚く。

オールマイトの闘いはもはや次元が違う領域で

一発一発が衝撃を放つ威力の攻撃だった。

流石の脳無も倒せるか……そう思っていたが。

「させませんよ。」

「っ……!!そういう感じかつ……!」

「いいね黒霧。」

脳無の胴体は地面……ではなく、いつの間に現れた黒霧の

ワープゲートに貫通し、その身体は海老蔵になつて

オールマイトの背中部分から胴体を出し、その手の爪で

オールマイトの両サイドの脇腹を食い込ませていた。

血が流れ、オールマイトは吐血する。

「コンクリに深く突き立て動きを封じる気だったか？」

脳無はお前並みのパワーの上ダメージを

受け付けないショック吸収だ。

そんな柔な攻撃じゃびくともしないさ……。」

「あつはは、やったれ脳無……。」

「お前……本当何しにきたんだ……。」

黒霧、こいつ追い出せ…。」

「はい…。大丈夫ですか脇真音さん…?」

「ごめん…。下手うったね…。」

「いえいえ、貴方のヤミーのお陰で

十分時間稼ぎになりました。

後は我々に任せて先に戻って休まれて下さい。」

拘束しているオールマイトから

変身解除して頭から血を流している脇真音の元へ

黒いモヤを伸ばし、黒霧は安否を問い、謝る脇真音。

「っ！くそっ！逃がさん…！アダダッ!？」

「っ!!オールマイト!!」

動こうとするオールマイトだが脳無が力を入れたのか

血を吐き、それを見ていた火野は叫ぶ。

すると、ワープゲートで身体が沈んでいく

脇真音と目が合い、彼女は笑顔で言った。

「ばいばい火野映司君…。とつても面白かったよ…。」

次会えたら、君のメダル貰うからね…?」

「っ!」

不気味に笑う顔を見て火野はゾツと身震いする。

そして脇真音は完全にゲートへと飲まれその姿を眩ませた。

「君ら…初犯でコレは…！覚悟しろよ…!」

「無様だなあ。社会のゴミめ…。」

このまま身体を引き裂こうか…、黒霧。」

「私の中に血や臓物が溢れるので嫌なのですが

貴方の物であれば、喜んで受け入れられる。

脇真音さんはリタイアされましたが、結果

本物を動けなくしたので上々…。そして

目にも止まらぬ速度で拘束するのが脳無の役目。

あなたの身体が半端に留まった状態で、ゲートを閉じ、

引きちぎるのが私の役目。」

「っ!」

黒霧のその言葉を聞いた火野は必死に立ちあがろうとするが、それでも身体が言う事を聞かない。

コンボを使った代償が今に来て後悔していた。後先考えなかった自分を呪いたい。

今ここでオールマイトを助けなきゃ、死んでしまう。

「ううう……やめろおお……!!」

必死に、必死にと手を伸ばそうとした。

その時。

「オールマイトおおっつ!!」

「!緑谷君っ!」

「緑谷……少年……!」

先程まで出口付近にいたはずの緑谷が

セントラル広場へと突っ込み、脳無へと

拳を振りかざそうとする。よく見れば片足が

曲がっては行けない方向へと曲がっており

彼は涙目になっていた。恐らく「個性」で

ここまで跳躍したのだろう。

だがそれに気付いた黒霧は緑谷の前に立ちあがり

ワープゲートを開こうとする。

「浅はか……」

「どっつっけ邪魔だ!!」

瞬間、突然現れた爆豪が爆破で黒霧を吹き飛ばす。

すると、脳無の身体が凍り、手元が緩んだのに気付いた

オールマイトは脳無を殴り、その場から一歩離れる。

「てめえらがオールマイト殺しを実行する役とだけ聞いた。」

「ダークシヤドウー!」

『アイヨツ!』

「はあっ!」

「だあー!!」

「っ!」

凍りの道を歩み寄るのは轟。

そして常闇が「個性」を使い、黒いモンスターのような化け物が死柄木を攻撃しようとするが、それを躲す。だが今度は尾白、切島が二人掛かりで攻めるがこれも気付き、躲されてしまう。

「くそっ！いいところねー！」

「同じく…！」

「ダークシャドウ。奴の手には触れるなよ。」

『アイヨツ！』

「スカしてんじゃねーよ！モブモヤが!!」

「平和の象徴がてめえら如きに殺れねえよ。」

「かつちゃん…！皆んな…！」

駆けつけた切島、尾白、常闇、爆豪、轟の

五人の登場に驚く緑谷。

「み、皆んな…！無事だったんだね…！」

「ああ!?三色野郎！テメエがこなくても

あの変なモブ怪人なんかよゆうで倒せたわ！」

「まてまて爆豪！火野が来てくれなかったら

結構苦戦してただろ！」

「俺もヤバかったな…！火野大丈夫かつ？」

急に消えたからびつくりしたよっ。」

「救援、感謝する…。」

火野もその登場に驚くと敵に警戒しながら

爆豪は怒鳴り切島は宥める。

尾白、常闇もガタキリバのお陰で敵サイラン及び、

ヤミーを撃退し、こちらに駆けつける事ができたようだ。

「ぬう…。威勢がいい生徒達ですねえ…。」

「だが的が増えた…脳無。殺れ。」

爆破の攻撃で惚気る黒霧に死柄木はそう言う

轟に凍らされた脳無はその凍った身体を

引きちぎり立ち上がる。

そして驚くのも束の間、そこからエイリアンの様に

細胞が増殖し、手足は再生した。

「うわ：何だあれ：!？」

「皆んな下がれ！何だ!?」《ダメージを吸収》する

《個性》じゃないのかっ!？」

「オールマイト並みのパワーは元から…。

ダメージを吸収する《ショック吸収》。

それだけとは言ってないだろう…。これは《超再生》だ。

脳無はおまえの100%にも耐えられるよう改造された

超高性能サンドバッグ人間さ。」

切島が驚き、オールマイトは脇を押さえながら

脳無を警戒すると死柄木は脳無の《個性》を言う。

「(時間はもう一分とない…!)

力の衰えが思ったよりはやい!

加勢に来てくれた頼もしい少年達だが…!

人数が多い分標的の的にされる…!

ここは…やらねばなるまい…!!何故なら私は…!

平和の象徴なのだから!!)

皆んな!なるべく遠くへ下がってなさい!!)」

オールマイトはそう言うと言おうと形相を変え、

物凄い圧がその場にいる全員に押し寄せてくる。

生徒たち、死柄木、黒霧も驚き、その場から離れると

脳無だけがオールマイト目掛けて突っ込み拳を突き出す。

それをオールマイトは同じ拳で受け止めた。

「《ダメージ吸収》って…

さっき自分で言ってたじゃんか。」

拳と拳のぶつかり合い、それは徐々に早くなっていき、

目にも止まらぬ速度で互いは拳を連打する。

その衝撃は凄まじく、周りの生徒等、

敵等も吹き飛ばされそうになる。^{ヴァイラン}

死柄木の言葉にオールマイトはニカツと笑い、

その拳の速度は段々と上がっていく。

「そうだなー！だつたらその前に限界を超えて

叩き込むまで！！私対策！？私の100%を耐えるなら！！

さらに上からねじ伏せよう！！ヒーローとは

常にピンチをブチ壊していくもの！ヴァイラン敵

よ、

こんな言葉を知ってるか！！？」

そう言つてオールマイトは腰を低くし、

その右腕の拳に力を入れ、脳無に解き放つた。

Plus 更に Ultra 向こうへ！！

オールマイトは、血を吐きながらも脳無に

渾身のボディブローを叩きつけ

勢いよくUSJの天井を突き破つて

空の彼方へと吹っ飛ばしたのだった。

「つつつ…チートが…！！！」

No. 19 火野映司の“個性”

「流石平和の象徴……！」

「もはや次元が違う……！」

脳無を吹き飛ばし、雄々しく立つオールマイトのその姿を見て常闇、尾白は言う。

死柄木は想定外の出来事に首を強く掻き始める。

「衰えた……嘘だろ……完全に気圧されたよ……」

「よくも俺の脳無を……チートがあ……！」

「全っ然弱ってないじゃないか!!」

「あいつ……俺に嘘教えたのか!?!」

「死柄木弔。ここは一旦引きましょう。」

脇真音さんがいない以上ヤミーの生成もできず

生徒達の足止めもできない状態。

増して脳無もやられてしまった以上、

オールマイトを殺す算段がなくなってしまうました。

「一度撤退し、対策を整えるのが筋だと……」

「うおお……ラスボスを目の前にして……！」

「……ちっ、分かったよ……。」

「逃がさんぞ……ぐっ?!」

黒霧はそう言ってワープゲートを作り出す。

オールマイトは追おうとするも、力が入らず、

身体から煙が出始めていた。

「逃すかクソ野郎!」

「待て爆豪っ!今はオールマイトに任せて俺等は

下がった方がいい!」

「そうだな……敵は戦意喪失してるみたいだし、

火野を回収して俺達は下がろう……!」

「賛成だ。……緑谷もその足、動ける状態じゃないだろう……?」

「だ、大丈夫……!」

爆豪は飛び出そうとするが切島に呼び止められ

尾白、常闇もその意見に賛成し、轟は無言で頷く。

常闇に言われた緑谷は片足を引きずって

冷や汗を流しているがそう答え、

不安そうにオールマイトを見ていた。

その時

ズドツ!!

「っ!!?」

死柄木の手を一つの弾丸が貫く。

「っ!来たか…!」

オールマイトは出口付近へ振り返る。

「ごめんよ皆、遅くなつたね。」

すぐ動ける者をかき集めてきた。」

「出口付近にいた生徒等は喜びの顔を見せる。

そこには雄英の教師陣を大勢引き連れた

飯田が立って、声を上げた。

「IーAクラス委員長飯田天哉!!」

「ただいま戻りました!!」

「あーあ、来ちゃったな…」

完全にゲームオーバーだ…。帰って出直すか。黒霧…。

今回は失敗だったけど…。今度は殺すぞ。

平和の象徴オールマイト。」

死柄木が言ったその瞬間、教師のスナイプが

死柄木、黒霧に向け銃弾の雨を浴びせる。

全身モヤの黒霧には当たらず何発かは死柄木に当たり

血が飛び散っていたが、すぐにワープゲートの中へと入り、

黒霧もその場から姿を消したのだった。

☆☆☆☆☆☆

ー 都内のとあるバーにて ー

「つてえ…。」

「あ、死柄木…君!?!どうしたの血塗れじゃん…!」

「騒ぐな傷口に響く…。」

ズヌリとワープゲートとから顔を出し、横たわる

死柄木に先に帰ってた脇真音はそう言っ

近づこうとするが、死柄木は止める。

「その様子じゃ…、失敗したみたいだね…。」

「先にリタイアしたお前に言われたくないね…。」

ああ…両腕両脚撃たれた…、完敗だ…、

脳無もやられた…。ヤミーも手下共も瞬殺だ…子供も

強かった…。平和の象徴は健在だった…!

話が違どうぞ先生…!」

死柄木はそう言うのとバーのテーブルに置かれてる

モニターから男の声と老人の声が聞こえる。

『違うないよ。ただ見通しが甘かったね。』

『うむ… 舐めすぎだな。敵 サイラン 連合なんちう

チープな団体名で良かったわい。『ヤミー』は

実験データさえとればいくらでも増やせるとして、

ワシと先生の共作脳無は?』

『回収してないのかい?』

「吹き飛ばされました。」

正確な位置座標を把握できなければ、

いくらワープとはいえ探せないのです。

そのような時間は取れなかった…。」

「あの脳無がやられるなんて…やっぱりオールマイトは

凄いな…イテテテ…。」

黒霧が言う。脇真音は自分で処置したのか。頭には包帯が巻かれており、痛むのか片手で押さえていた。

『せっかくオールマイト並みのパワーにしたのに…。』

まあ…仕方ないか…残念。』

「てか、ドクター…。この“新造”のメダル

全然使えないんだけど…。オールマイトに

手も足も出なかったよ…。？おまけに二、三発くらって

凄い痛いし…。」

『ふむ、調整が必要じゃな。後で儂のところへ来るといい。

それに、お前さんはその“オーズドライバー”とやらを

使い始めたのはついこの前じゃったろ？

使い慣れてない“個性”でプロに勝とうなんざ

烏滸がましいじやろなっ。』

「うるさい笑うなっ！」

モニターから“ドクター”の笑い声が聞こえ、

脇真音は頭に煙が見える様な感じで怒る。

すると、何か思い出したのか死柄木は言う。

「…そう言えば、一人。オールマイト並みの

スピードのガキがいた…。だが足が折れてた…。

あんな“個性”あるのか…？」

『……へえ。』

「そんな奴いたっけ？」

「そばかすがある地味な子ですよ。」

「あー！あの緑色の髪の子ね。」

死柄木の言う少年にピンとこない脇真音に

黒霧は教えると納得し、手をポンと叩く。

するとモニターから男は喋り出す。

『今回の事を悔やんでも仕方ない！

今回だって脳無やヤミーの実験データは十分に取れたし

無駄ではなかったはずだ。精銳を集めよう！

じっくり時間をかけて！我々は自由に動けない！

だから君達のような『シンボル』が必要なんだ。
脇真音優無！そして死柄木弔！！
次こそ君達という恐怖を世に知らしめろ！』

☆☆☆☆☆☆

「16……17……サイラン敵との戦闘で負傷した

少年二人を除いて……、ほぼ全員無事か。」

USJ襲撃後、駆けつけたプロの教師達により、
残党の敵は全員拘束され、

駆け付けた警察の護送車に乗せてる最中、

警察の一人、〃塚内〃と言う名の警部が

生徒の安否確認を行っていた。

「尾白君、腕大丈夫……？」

「ああ……火野のお陰でなんとかね。」

そういえば葉隠さんはどこにいたんだ？」

ヤミーに襲われ応急処置をしてもらった尾白の
腕を見て心配そうにする葉隠に尾白は言うど
轟に指を指した。

「土砂のどこ！轟くんクソ強くてビックリしちゃった。」

「まあ、……何にせよ、無事で良かったね。」

「（凍らすとこだった……、危ねえ。）」

葉隠が言った後、轟は小さく息を吐きそう思っていた。

「僕がいたところはね……、どこだと思おう!？」

「そうか……皆の所もあの悍ましい怪人がいたのか。」

「ああっ！火野が来てくれたら何とかなったけどよ！

ヤミーだっけ？気色悪い見た目してたな！」

青山が声を掛けるが、常闇は上鳴と会話し

聞く耳を持たなかった。

「どこだと思おう!？」

「…どっ?」

「秘密さ!☆」

蛙吹に声を掛けると反応してくれたが
面倒臭い返答が返ってきたのか蛙吹はスルーすると
塚内が話しかけてくる。

「とりあえず生徒らは教室に戻ってもらおう。

すぐ事情聴取ってわけにもいかんだろ。」

「刑事さん、相澤先生は…。」

蛙吹が聞くと塚内はスマホを取り出し

病院と連絡を取るとスピーカーをオンにし、
生徒等に向ける。

『両腕粉碎骨折、顔面骨折…幸い脳系の損傷は

見受けられません。ただ…、眼窩底骨が粉々に

なってしまいました…、目に何かしらの後遺症が残る

可能性があります。』

「だそうだ…。」

「ケロ…。」

その話には蛙吹は心配そうな表情になり、
話を聞いた峰田も両手を組み涙目になる。

「13号の方は、背中から上腕にかけての裂傷が酷いが

命に別状はなし。オールマイトも同じく命に別状なし。

彼に関してはりカバリーガールの治癒で

充分処置可能との事で保健室へ…。」

「あの、デク君は…!」

「そうだ、緑谷と火野! あいつらは大丈夫なんすかっ!」

話に割り入り、麗日と切島は二人の安否を求める。

「緑…ああ、彼は保健室で間に合うそうさだ。」

ただ、火野映司君も命に別状はないが彼は

これから警察署に来てもらう予定だ。」

「警察署っ!?!何故ですか…!」

塚内の言葉に飯田は反応すると、

ポケットから小さなジップロックを取り出す。

その中に入っていたのは数枚の銀色のメダルだった。

「敵にいたんだろ？彼と同じ『個性』が…。」

今回の事件で出現した見たこともない人外の怪物…。

先程君達から回収したこのメダルが恐らく関係している。

彼には心当たりはないと思うが念の為ね。

三茶、後は頼んだぞ。俺は保健室に用がある。

用が終わり次第、俺も署に向かう。」

「了解。」

塚内はおそらく異形型の猫の『個性』、三茶に指示を出し

その場にいた校長、教師等の方へ向かう。

「セキュリティの大幅強化が必要だね。」

「ワープなんて『個性』、ただでさえ

ものすごく希少なのもによりにもよって

敵側にいるなんてね…。」

校長の言葉に奇抜な格好をした『ミッドナイト』は、

物悔しそうに言った。すると鬼の顔をした警察が

塚内に駆け寄る。

「塚内警部！約400m先の雑木林で敵

と

思われる人物を確保したとの連絡が！」

「様子は？」

「外傷はなし！無抵抗で大人しいのですが…、

呼びかけにも一切応じず口が利けないのではと…。」

その敵は脳無で間違いないだろう。

報告を聞き、塚内は帽子を取り、校長に話しかける。

「校長先生、念の為校内を隅まで見たいのですが。」

「ああ、もちろん！一部じゃとやかく言われているが、

権限は警察の方が上さ！捜査は君達の分野！

よろしく頼むよ！」

「そう言われると頑張らないと行けなくなりますね。」

精一杯調査を頑張らせていただきます。」
許可を取り、塚内は再び帽子を被ると
部下の警察に指示を出し、行動を開始した。

☆☆☆☆☆☆

― 警察署にて ―

「ふう…。」

「塚内警部！お疲れ様です！」

「まだ終わってないよ。」

火野映司君から何か聞き出せたかい？」

時刻は夜となり、雄英から戻ってきて息を吐く塚内に

先に戻っていた三茶が敬礼をするが、

軽く手を振ってあしらひ、火野の状況を聞く。

「一応、今回の事件を含め、色々と聞いたのですが、

特に敵との接点…、心当たりがないそうサイランで。」

「そうか。あの銀色のメダルは？」

「それも、あの子は「初めて」見たらしく、

彼の「個性」である「ベルト」に

それを使用させてみたのですが

変な音が鳴るだけで何も反応がありませんでした。」

「変な音…？ああ、彼の「個性」のベルトか。

しかし、これまた凄い「個性」だな。

動物の造形が施された金縁のメダルを入れると

瞬時に身体に纏う形で生成され、

その能力以上の性能を扱う…。」

顎に手を置き、火野の「個性」についての詳細を
雄英から拝借し、眺めていると、何か思い出したのか
三茶に問いかける。

「そうだ、ご両親は？」

「はっ、両親は共々海外で働いており、

現在は親戚の泉比奈という娘と暮らしているそうです。」

「共働きか…じゃなくてっ！「個性」だよっ。」

「ああ！失礼しました！

母親の「個性」は身体を伸縮する…。

父親は動物と会話が出来る「個性」です。」

「至って普通の「個性」だな…。」

「ええ、一応両親に連絡してあの子の「個性」の詳細を

聞いてみたのですが、約三歳の頃、母親が

食器を洗っていた時に、いつの間にかあの子の手元に

例のベルトとメダルが三枚置いてあったそうです。

それに、あのベルトは本人しか使えない様で、両親も

試して見たのですが反応しなかったみたいです。」

「「個性」が発現するのは四歳になるまで…。

それに本人しか使えない…。

となると火野君の持つベルトは彼自身の「個性」…。」

塚内は再び考えると何か分かったのか

目を見開き、スマホを取り出す。

「三茶、ご苦労。火野君は今日は帰らせて上げてくれ。

勿論、家までだ。頼んだよ。」

「了解っ。」

そう言っつて、塚内は署から出て行く。

そしてスマホを操作し、耳に当てた。

「…もしもし、オールマイト。

度々すまないね…。…ああ、火野君の事だが…。

奴が関わってるんじゃないかと思うんだ…。」

☆☆☆☆☆☆

翌日は臨時休校となった雄英。

そしてUSJ襲撃事件から二日後…。

「皆ー！朝のホームルームが始まる！」

席につけー！！」

「ついてるよ。ついてねーのおめーだけだ。」

朝から元気よく、委員長として教卓に立ち、

指示を出すのが、瀬呂にそう言われ、

飯田は直ぐに席に戻って行く。

そんな姿を火野達は軽く笑いながら見ていた時、

教室の扉が開かれる。

「お早う。」

「「相澤先生復帰早えええ!!!プロすぎる!」」

何と現れたのは包帯ぐるぐる巻きの相澤で

思わず皆は声を上げツッコむ。

「先生、無事だったのですね!!」

「無事言うんかなアレ…。」

よろよろ千鳥足で教卓に着く相澤を心配そうに見る麗日。

「俺の安否はどうでもいい。」

何よりまだ戦いは終わってねえ。」

それを聞いた生徒達は身構えた。

「戦い?」

「まさか…。」

爆豪、緑谷が呟く。

「まだ敵がぁー!!?」

「えっ!? 敵!? 大変だ! 直ぐに対処」

「峰田ちゃん、火野ちゃん、落ち着きましょう。」

峰田が頭を抱えて言うのと火野は反応し、

席を立とうとするが、斜め前の席の蛙吹に止められる。

そして相澤は口を動かした。

「雄英体育祭が迫ってる!」

「クソ学校っぽい来たああ!!」

第4章 雄英体育祭 No. 20 その男、偵察にくる！

時は遡り、火野が帰宅した頃…、

「ただいま〜…。」

「あ、映司君！ニユース見たけど大丈夫っ!?

怪我とかしてない？どこも痛くないっ?」

「いたたたっ！あー！ちよ、比奈ちゃんっ。」

俺は特に何ともないから大丈夫だよっ。」

リビングに入ると泉比奈が駆け寄り

映司の身体のあちこちを触るがミシミシと骨が鳴り

映司は痛みが距離を取る。

興奮、もしくはパニックになると彼女の「個性」が

発動してしまうので馬鹿みたいに力が入ってしまう。

それが彼女のコンプレックスでなるべく発動しない

ようにと努力しているつもりだが中々難しいようだ。

「映司君、敵サイランにいたんでしょ？」

映司君と同じ「個性」の…。」

「あ〜うん、そうなんだよ。」

「同じ「個性」って聞いたことないよね…。」

それに映司君の「個性」ってちよっと特殊だし…。」

泉の言葉に映司は椅子に座りながら深く頷く。

よく似た「個性」ならザラに見掛けるが、

全く同じ「個性」は世に存在しない。

増してや火野の様に特殊な道具を使って姿が変わるのは

稀に見ない力で、それが敵サイラン側サイランにいたとなると

あの力が悪用される。そう思っただけでもゾツとするのか

泉は肩を震わせた。

すると、何か思ったのか泉は口を動かす。

「もしかして、「個性」をコピーする「個性」

とかあるのかな？」

「ええ？…聞いたことないなそんな『個性』…。」

「何か心当たりない？」

「心当たりかあ…あ。」

「何っ？何かあるの？」

「…いや、まさかね。ごめん、なんでもない。

ただの思い違いだよ…。」

泉に言われ、火野は過去の事を思い出した。

それは受験前の事、特訓していた時に

出会した一人の女の子だった。

^{ウイラン}敵のオーズも女性でもしかしてと思ったが

他人の力をそのままコピーする『個性』は

存在するのかと火野は疑問に思う。

それに、^{ウイラン}敵のオーズが

呼び出した『ヤミー』という怪人は火野にはない

能力だった。

深く考えたくないのか火野は有耶無耶にし、

机の上に置かれてたお茶を飲む。

「世界は広いから、俺と同じ『個性』がいても

おかしくないか…。」

「洒落にならないよそれ、映司君のオーズが

いたらそれこそ世界が危ないんだよっ？」

「だよね…、分かってる…。」

俺ももつと、実力をつけないと…。」

火野は自身の拳に力を入れる。

あの時、その場凌ぎにメダルのコンボを使い

なんとか一時的に免れたが、結局、オールマイトが

来なければやられていたのかもしれない。

まだ学生の身とはいえ、仲間達を守れなければ意味がない。

だからこそ、力を制御し、

ここぞと言う時に役立てなければ。

火野はそう思っていた。

「あまり無茶しないでね…？映司君がもしも何かあったら私…。」

「だ、大丈夫だよ比奈ちゃん！セキュリティも

強化してくれるみたいだし、何よりうちの学校には

オールマイトがいるんだっ。俺自身ももつと修行すれば、

どんな事だつてやっていけるさっ。」

「…うん。分かった。映司君、私信じてるからね。」

「ありがとう比奈ちゃん。」

心配させまいと映司は笑顔を作り、泉を安心させる。

しばらく沈黙が続き、気まずいのか映司は口を動かす。

「あく…、^{ツイラン}敵じゃなくて

味方の方にもメダルを使う『個性』がいればなく。」

「そんな奇跡ないでしょ。」

「分からないよ？もしかしたら今年の一年か

先輩に誰かいるかもしれないよ？」

「いたらもう話題になつてるでしょ？」

「ははっ…確かにね…。」

映司は笑い、お茶を啜る。

もし、本当にそんな頼もしい人がいれば、

希望の足しになるんじゃないかと、映司はふと思っていた。

☆☆☆☆☆☆

― 翌日、雄英校の会議室にて ―

USJ襲撃の翌日、雄英校の会議室で、

報告にやってきた塚内が教師陣に調査結果を見せ

会議が行われていた。

「死柄木という名前……触れたモノを粉々にする “個性”

……20〜30代の個性登録を洗ってみました、
該当なしです。『ワープゲート』の方、黒霧という者も
同様です。無戸籍且つ偽名ですね……

個性届を提出していないいわゆる裏の人間。」

「何もわかってねえって事だな……早くしねえと、

死柄木という主犯の銃創が治ったら面倒だぞ。」

「だが問題はもう一つ……」

塚内の報告にスナイプはそう言うと、校長が呟く。
それに続くかのように塚内は再び喋り出す。

「ええ、彼らと共に行動していた少女、脇真音優無。

彼女も死柄木と同様、“偽名”で、戸籍登録も
詳細も分からない状態です。

そして彼女の “個性”……」

「火野映司君と同じ……『オーズ』。」

「俄に信じらんねえな……俺達が駆けつけてた頃には
もういなかったが……」

「そもそも同じ “個性”なんて存在しないだろ？」

火野のあのベルトは本当に “個性”なのか？」

塚内の言葉にミッドナイトに続き、

「ブラドキング」が言う。

「個性届け、両親にも確認を昨夜聞き、調べた結果、

それは間違いないと言えますね。」

「だとしたら何で同じもんが
敵側にもあるんだ？」
ヴァイラン

「申し訳ありませんが、我々もそれは調査中です……」

火野映司君も初めて見たらしく彼女との接点は
一切ないそうです。

話を戻しますが、彼女の『オーズ』。それだけではなく、

あのUSJにいた人外の生物：報告書には『ヤミー』と名付けられ
た怪物を生成する事もできるみたいです。

そしてこれはあの場にいた生徒達から回収した
“メダル”の資料です。」

塚内はそう言ってマジックボードに何枚か
調べられた文と共に大きく写真に撮られていた
銀色のメダルの資料を何枚か貼っていく。

「協力してもらった国立研究科の人達に
調べてもらいました。詳しくはまだ分かりませんが、
このメダルには未知のエネルギーが
収縮されている事だけは判明しています。」

「…火野少年の持っているメダルと似ているな。」
その資料を見てオールマイトが呟く。

「ええ、彼の持つ“コアメダル”。
火野君からも一枚借り、調べてもらいましたが
エネルギーの量は明らかにコアメダルの方が膨大です。

あ、オールマイト、これ火野君に返してもらえるかい？
…ですが、この銀色のメダルは妙な報告を受けまして…。」

「妙な報告？」
塚内はコアメダルを一枚、オールマイトに渡す。
そして彼の発言に、ミッドナイトは首を傾げると

塚内は一旦区切り、喋り出す。
「このメダルは人に近づける、もしくは向けると、
そのエネルギー量が増幅するみたいなんです。」

塚内の言葉に教師等は騒めく。
すると、校長が何か分かったのかその小さな身体を
椅子から立ち上がらせ、こう言った。

「まさか、そのメダルは人の中に入れて
怪物を生み出してるんじゃないのかい…?」
「…っ!!」

「流石校長、私もそう考えていました。
脇真音はヤミーを生成する事ができる。」

そしてこのメダルは人に近づけるとそのエネルギーが増大…。」

校長、そして塚内の言葉に教師等の顔は

一気に青ざめていく。

「そんな…あの怪物は人から生み出されるってこと…!?」

「考えただけで気味が悪いな…!」

ミッドナイト、スナイプはそう言うのと、

塚内は続けて喋る。

「まあ、あくまでもこれは現時点での予測です。

ただこれが本当でまた彼女が再びヤミーを生成したら…。」

「まずいだらうね。」

生徒達はこのヤミーと交戦したみたいだけど

報告では動物のモチーフをした人外生物で

攻撃しても血は出ず、時間が経つとその傷は修復される。

そして見た目の動物の能力を使い攻撃を仕掛けてくる。

その強さは寄せ集めの敵サイランより強い…。」

…下手をすれば、甚大な被害を招きかねないね…。」

塚内が区切ると校長が喋り、息を吐く。

「…とんでもない女の子だぜこりゃあ…。」

「こちらもよりセキュリティを強化して生徒達の安心と未来を守らねばならないね…。」

「…幸い、死柄木とその少女は共に行動をしています。

何方も特徴的な見た目をしているので、こちらとしては

捜査網を拡大し引き続き犯人逮捕に尽力するつもりです。」

ブラドキング、校長が口を動かす、

塚内はそう言っって資料を戻していた。

「はあ…やる事が多いけど、頑張るかあ…。」
会議を終え、塚内は雄英を出て大きく背伸びをしようと
外で待機していた三茶が近寄る。
「塚内警部！お電話が入っています！」
「電話…？誰から？」
「それが、あの有名なサポートアイテム会社の
『鴻上ファウンデーション』からですっ。」

☆☆☆☆☆☆

「体育祭…！」
「クソ学校っぽい来たああ!!」
「待って待って！^{サイラン}敵に侵入されたばかりなのに
大丈夫なんですか!？」
時は戻り、A組のクラスでは体育祭の事で
盛り上がっており、切島はそう言うのと相澤は喋り出す。
「逆に開催する事で雄英の危機管理体制が磐石だと示す…
って考えらしい。警備は例年の五倍に強化するそうだ。
何より雄英の体育祭は…：最大のチャンス。
^{サイラン}敵ごときで中止していい催しじゃねえ。」
「いやそこは中止しよう？体育の祭りだよ？」
峰田がツッコむと緑谷が反応し、
後ろの席の峰田へと振り返る。
「峰田くん…：雄英体育祭見た事ないの!？」
「あるに決まってんだろ。そういう事じゃなくてよ…。」

峰田は恐る恐る言うのと相澤はそのまま喋り出す。

「ウチの体育祭は日本のビッグイベントの一つ!!」

かつてはオリンピックがスポーツの祭典と呼ばれ
全国が熱狂した。今は知つての通り規模も人口も縮小し
形骸化した…。そして日本に於いて今、

かつてのオリンピックに代わるのが雄英体育祭だ！」

「当然全国のトップヒーローも観ますのよ。」

スカウト目的でね！」

「だから知つてゐるつてば…。」

相澤の言葉に八百万が反応するが峰田は嫌な表情を変えず
そう言う。雄英体育祭は毎年テレビでも見る

超有名な体育の祭り。それを知らない人は
そうそういないだろう。

「資格習得後はプロ事務所にサイドキック入りが
セオリーだもんな。」

「そこから独立しそびれて万年サイドキックつてのも
多いんだよね。上鳴アンタそーなりそう。アホだし。」

「ああ、あのうえくいになるから確かにそうなりそうだな。」
「ぶふっ!?!」

「ああ?!おい!火野!耳郎!

余計なこと言わなくていいんだよ!」

上鳴が言うのと耳郎は馬鹿にし、火野も話に入り

馬鹿にして、上鳴は顔を赤らめて怒っていた。

「当然名のあるヒーロー事務所に入った方が経験値も

話題性も高くなる。時間は有限。プロに見込まれれば
その場で将来が拓けるわけだ。年に一回…、

計三回だけのチャンス、

ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ。

資料を渡すから目を通しておけ。以上。」

相澤はそう言うのとちようどチャイムが鳴り、

ホームルームは終わった。

☆☆☆☆☆☆

昼休憩

火野は若干漏れそうなのか急いでトイレに駆け込み
要を足すと、出てきて洗面所で手を洗っていた。

「…はあ。」

火野は相澤から言われた事を思い出す。

『火野。USJで出くわした敵サイラン オーズは

警察側が捜査している。お前は何かと突っ込むタイプだから
念には言っておくが、あまり関わるなよ。

学生何だから学生らしく学業に専念しとけ。』

「…なるべく…、とは言いたいところだけど。

同じ「個性」じゃ気になってしまうよな…。」

そう呟きながら、手を洗い終え、トイレから出ると

一人の男子生徒がトイレにやってくる。

8：2分けのふわっとした髪型だが

制服は整えており、いかにも真面目そうな生徒だ。

火野とその生徒はすれ違う。が、その生徒は声を掛けてきた。

「ニュースを見たが、貴様はまだその「個性」を

上手くつかいこなせていないようだな。」

「えっ？」

咄嗟の言葉に火野は動揺する。

「平和の象徴が来てなければ、あの場にいた生徒は
全員ただじゃ済まなかっただろうな。」

一旦区切ると、生徒は一步前へ火野に近づき
その目はガン飛ばし、そしてこう言った。

「…そんな状態で『世界』を守れるのか？」

No. 21 雄英体育祭、開幕

「せ、世界…?」

火野は突然呼び止められた生徒の言葉に困惑する。

「…そんな『個性』を持っていて、守れない様じゃ

どう足掻いても無理だ。世界に手を伸ばせない。」

生徒はそう言うのと火野から離れ、去っていく。

あつけからんとした顔になった

火野は自身の手を見つめる。

「…世界か、大きくでたなあ。」

まあ、俺は今やれる事をやるだけだ。」

火野はそう言って背中を向け教室に戻る。

この時、二人の距離に窓から照らす光が差し掛かる。

まるで二人に切れない糸があるような光景だった。

☆☆☆

「お金欲しいからヒーローに!」

「ん?この声は緑谷君…?」

廊下を過ぎ、階段へ差し掛かろうとした時、

緑谷の声が聞こえ、行ってみるとそこには

麗日、緑谷、飯田の三人がいた。

入学当時からこの三人は仲がいいのか

よく一緒に行動している。

「あ、火野君っ。」

「うえっ!?火野君っ!」

「教室振りだな!」

「ご、ごめんっ。何か聞いちやいけない事

聞いちやったかな…?」

今の聞かれたと言わんばかりに麗日は動揺するので

火野は咄嗟に謝ると、頬を赤らめながら

麗日は首を振る。

「…いや、いいんよ。話戻すと」

ウチ今回の体育祭本気で頑張りたいの…。

目立てば色んなプロの人から見てもらえて

そこでまた頑張れば人気が出るかもしれへん。

そうだったら卒業してプロになった時、

お金を沢山貰えると思うから…。

な、なんかごめんね不純で…!」

「何故!? 目標を掲げてヒーロー志望だろ？」

凄く立派じゃないかっ。」

「飯田君っ。その手の振り方その内人に当たるよ…?」

ほら、緑谷君の髪にちよいちよい当たってる。」

飯田の言う通り、麗日の目標は聞きは不純だが

生活を支える為の立派な目標だ。

少なくともここに居る三人はそれを貶す事は

絶対ないだろう。

「ウチ建設会社やってるんやけど、

全っ然仕事無くてスカンピンなの…。

こういうのあんま人に言わん方がいいんやけど…。」

「建設…。」

おどおどする麗日に飯田は手に顎を当て下を向く。

「麗日さんの『個性』なら許可とれば

コストかかんないね。」

「あ、本当だ。重機とか減らせるからだいぶ違うね。」

「でしょ!? 二人の言う通りなんよ!

それ昔親に言ったんだよっ!」

二人の発言に勢いよく反応する麗日

「でもウチの親はお茶子が夢叶えてくれた方が

何倍も嬉しいって言ってくれて…。

だから私! 絶対ヒーローになってお金稼いで、

父ちゃん母ちゃんに楽させてあげるんだ!」

「麗日君…、ブラーボー!!」

「凄い目標じゃないか麗日さんっ。

なら、今回の体育祭は余計に頑張らないとね!

絶対目立って社会に見せつけてやろう!」

「火野君…：うん!頑張るっ!」

その決意を真剣な眼差しで三人に向ける。

飯田は評価し、火野は応援し、拳を麗日に突きつけると

麗日は答え自身の拳を火野に合わせていた。

「おお!!緑谷少年!が!いた!!」

「!!!!」

突然、大声でやってきたオールマイトに

四人は肩をビクツと跳ね上がらせる。

何かと思い振り向くと、彼の手には

小さな小包が握られていた。

「ご飯…一緒に食べよ?」

「ぶふっ!?乙女や!!」

「…?。ぜひ。」

思わぬ発言に麗日は吹き出す。

緑谷はそう言うオールマイトについて行った。

☆☆☆☆

ー 食堂にて ー

「デク君なんだろね?」

「オールマイトが襲われた際、

一人で飛び出したそうぞ。その関係じゃないのか?」

「なるほど…。それで好かれたのかな？」

「乙女や！」ブフツ

緑谷がオールマイトについて行った後

火野達はメシ処にやってきて列に並んでいた。

その時、麗日が話しかけてきて飯田と火野は反応すると、

麗日はまた吹き出す。

「蛙吹君が言ってたように、超絶パワーも似ているし、

オールマイトに気に入られているのかもな、さすがだ。」

「なるほど。」

「ガッテンツ。」

飯田がそう言うと二人は手を叩きそれを納得していた。

その少し離れた列に並んでいた轟が

会話を聞いてたのかこちらを見ていた。

☆☆☆☆☆☆

ー 放課後、教室にて ー

「うおおおお…!!何事だあっ?!」

支度し終わった麗日は教室の扉を開け驚く。

そこには他のクラスの生徒達が大勢集まっていた。

「出れねーじゃん！何しに来たんだよ！」

「敵情視察だろ、ザコ。」

「…!!」

「峰田君、あれがニュートラルなの…。」

峰田が言うとその横を通りながら爆豪は言い放ち

峰田は口をパクパクしながら緑谷に視線を向けると

苦笑しながら答えた。

「敵の襲撃を耐え抜いた連中だもんな、
体育祭の前に見ときてえんだろ。」

意味ねえからどけ、モブども。」

「知らない人のことをとりあえず

モブっていうのやめなよ!!」

爆豪の言葉に飯田は腕を振りながら注意すると、
大勢の生徒達の中から一人、押し退けるように
爆豪の前へと出てきた。

「どんなもんかと思に來たがずいぶん偉そうだなあ。

ヒーロー科に在籍する奴は皆こんななのかい？

こういうの見ちやうとちよつと幻滅するなあ。」

「ああ!？」

「ちよ、ちよつと爆豪君落ち着いてっ！

変な誤解招くだろっ!?!すみません、こいつ

喋り方っていうか、頭がちよつと飛んでるっていうか。」

「んだとおいつ!?!テメエからのしてやろうか

三色野郎っ!!」

首を押さえながら呆れた様子で言う不健康そうな

顔をした生徒に爆豪は反応するが、火野が慌てて止めに入るが、癩
に触ったのか爆豪は

火野の制服のネクタイを掴み暴言を吐く。

その背後では飯田と緑谷が僕らは違うよと

言わんばかりに全力で首を振っていた。

「…普通科とかサポート科ってヒーロー科落ちたから
入ったって奴けっこういるんだ、知ってた?」

火野は爆豪の手を払い除けるとその生徒は
息を吐いて続けて喋り出す。

「体育祭のリザルトによっちゃ、

ヒーロー科編入も検討してくれるんだって。

その逆もまた然りらしいよ……。

敵情視察? 少なくとも普通科は

調子のつてつと足元ゴツソリ掬っちゃうぞーつつー、
宣戦布告しに来たつもり。」

「悪いが『心操』、サポート科おれもそのつもりだ。」

その生徒「心操」の言葉に不穏な空気が流れると思いきや、
別の人混みから押し退けて反応し、出てくる生徒がいた。

それを見て火野は顔見知りなのか「あ」と声を漏らす。

それもその筈、火野が先程トイレですれ違った

男子生徒なのだから。

「お前も見に来てたのか、『後藤』。」

「当然だ。こんな礼儀知らずのクラスに

ヒーロー科が務まるものか。」

心操とは知り合いなのか後藤という名の生徒を見て
そう言うした後藤は爆豪を見た後、隣にいた火野を睨みつける。

(((だ、大胆不敵組…!!)))

「隣のB組のモンだけだよ!!」サイラン 敵と

戦ったつうから話聞こうと思つてたんだがよう!!

エラく調子づいちゃってんなオイ!!!

本番で恥ずかしい事んなつぞ!!」

(((ま、また大胆不敵きた…!!)))

普通科の心操、サポート科の後藤に続き、

隣のB組の銀髪で活気ある生徒までもが

A組の連中に挑発を仕掛けてくる。

悪口や中傷が増えてく最中、爆豪は平然と、

その生徒達の壁を押し退け帰ろうとする。

「待てコラどうしてくれんだ! おめーのせいだ

ヘイト集まりまくっちゃってんじゃねえか!!」

「関係ねえよ……。」

「はぁー!?!」

耐えかねた切島が爆豪を呼び止めようとするが

爆豪は眩き、切島はその態度に呆れたのか叫ぶが

そのまま爆豪は言った。

「上に上がりや、関係ねえ。」

爆豪は言い放ち、生徒等を押し退け帰って行った。

「く…!! シンプルで男らしいじゃねえか!」

「上か…一理ある。」

「言うね。」

「爆豪君、ちよつとは見直したかも…?」

「騙されんな! 無駄に敵増やしたただけだぞ!」

切島、常闇、砂藤、火野が彼の言葉に同意すると

上鳴が間入れずツツコミを言い放つ。

「…はあ。興醒めだ、帰ろ。」

そのやり取りを見て心操は呟くと帰って行く。

それに続けてなのか他の生徒も帰り出す。

そして一人、後藤は火野を再度睨み、帰って行った。

「なあ火野っ。お前をずっと睨んでる奴いたけど、

お前なんかやらかしたのかっ?」

「えっ…いや、ただの顔見知りだよ。」

ちよつと注意されたっていうか…。」

峰田の言葉に火野は苦笑しながら返し彼等の

後ろ姿を少し見送った後、火野、クラスの生徒等は下校した。

☆☆☆☆

その男、後藤は校舎の外を下校していた時、

一人の女子生徒が後藤を発見するなり、近寄ってきた。

「どうですかっ?! ちゃんと見ましたか

「仮面ライダーオーズ」は!」

「…相変わらざるうるさい奴だなお前。」

…どんな奴かと思って興味を持ったがとんだ期待外れだ。

…俺にもつと強い「個性」があれば…!」

「ああ、その事なんですけど！」

貴方にもビッグチャンスが

訪れるかもしれないよ！フッフ！」

「何？」

後藤は反応するとその女子生徒はスマホを取り出す。

そこには「会長」と書かれていた名の

通話中の画面が載っていた。

☆☆☆☆☆☆

刑事の塚内は、都内の大型のビルへと足を入れエレベーターで上へと登っていた。

最上階に到達するとそこにはただ広い空間が広がっており、

奥には赤いスーツを着た男性と若い秘書と思える

女性が一人立っていた。

男性は趣味なのか蓄音機で誕生を祝う曲を流しながら

テーブルの上でケーキを作っていた。

「君が塚内刑事だね！我が『鴻上ファウンデーション』によく来てくれた！…座りたまえ。」

「いえ…、寧ろあの有名な

『鴻上ファウンデーション』に呼ばせてもらい

ありがとうございます。

…ところで、例の件なのですが…。」

「ああ、里中君！」

「はい。」

椅子に腰掛ける塚内に秘書の里中が束になった

資料を塚内に渡し、塚内はペラペラと巡り

その内容を見ていた。

「君が提供してくれたあの『メダル』！」

実に素晴らしいエネルギーが込められている！

あのニユースを見て私は考えた！

そのメダルを『利用』し！我々でも使いこなせる

『エネルギー』に変えてしまおうと!!」

「…これが！まさか…、本当に可能なんですか…?」

「事が早く進めそうならすぐに完成するだろう！

…だよね里中君？」

「はい、恐らく二週間後には…。」

その資料を見ながら塚内は口を開け驚いていた。

そして男性は持っていた泡立て器を上突き上げ大きく叫ぶ。

「ハッピーバースデー!!そのメダルを力に変える！

『新たな戦士の誕生だよっ!!』」

その資料の目次には『バース』という

文字が刻まれていた。

そして、二週間はあっという間に過ぎ、

いよいよ、雄英体育祭が幕を開けるー！

No. 22 第一種目、障害物競走

― 雄英体育祭、控室 ―

「皆準備は出来てるか!? もうじき入場だ!!」

「コスチューム着たかったなー。」

「公平を期すため着用不可なんだってよ。」

各々が緊張の為か会話をしたり一人で

精神統一を行う生徒等がいた。飯田の言う通り

開始時刻は残りわずか、火野も二枚のメダル

手に取り眺めていると緑谷が話しかけてくる。

「ひ、火野君っ、それもしかして『新しい』メダルっ?」

「あ、うん。そうだよっ。」

「『ライオン』と、『サイ』…かな?」

「凄い! まだこんなメダル持ってたんだ…!」

「え〜っつと、何て説明すればいいか…」

「コレ実は『いつの間にか』持ってたんだよ。」

「?…それってどういう―」

「緑谷。」

会話中、突然と轟が割り入り緑谷に声を掛けてきた。

轟が話しかける事なんて珍しいのか皆の視線が

徐々に二人の方へと向けられる。

「轟くん…、何?」

「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う。」

「へ!? うっ、うん…。」

キョトンとする緑谷に轟は宣言した。

「お前オールマイトに目エかけられてるよな?」

別にそこ詮索するつもりはねえが…お前には勝つぞ。」

「っ!」

いきなりの宣戦布告。その空気はドヨドヨとした

緊迫する空気に変わり、緑谷の隣にいた火野は

轟を止めようとする。

「ちよ、ちよつと轟君！体育祭前に喧嘩腰はよくないって…！」
「仲良しごっこじゃねえんだ。何だっついていいだろ。」

火野、お前は恵まれた「個性」だよな。

お前にも負ける気はねえからな。」

ギツと鋭い目付きの轟に火野は一瞬目を見開くが
周りを見て喋り出す。

「恵まれてなんかないよ。勿論力を使えば

身体だつて壊すさ。どんなに弱いとか強いとか

言われようとその人の持つてる「個性」だから。

言いかえれば皆んな恵まれてる「個性」だよ！

轟君が何を思っているのか分からないけど、

やるからには俺も全力で勝つよ！」

「ああ。」

周りの生徒の一部からおーつと感心する様な声が聞こえて、

火野は離れ、椅子に腰掛けると

一枚の紙切れを取り出しジツと眺め始める。

続いて緑谷も下を向きながら喋り出すが

それは段々と強い表情に変わって行った。

「轟君が何を思つて僕に勝つて言つてんのか…は、

僕も分かんないけど、そりゃ君の方が上だよ、

実力なんて大半の人達は敵わないと思う…。」

客観的に見ても…、でも…!!火野君みたいに、

皆…他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ。

僕だつて…遅れをとるわけにはいかないんだ！

僕も本気で獲りにいく！」

「…おう。」

緑谷が言い返してくるとは思わなかったのか、

轟は目を見開き頷いた。

そして、それぞれの思いを胸に、

A組は呼ばれ、体育祭の会場へと入場した。

☆☆☆☆

『雄英体育祭!! ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!! どうせてめーらアレだろ!? こいつらだろ!!? ウイラン 敵の襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!! ヒーロー科!!! 1年!!! A組だろおお!?!』

野球ドームの様なド派手な会場でそれは開幕されていた。

歓声の雨を呼ぶ観客達のテンションを上げるべく

実況をしているプレゼント・マイク。

そのオーバーな紹介に、一年A組は入場していく。

「わあああ…人がすんごい…。」

「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを

発揮できるか…! これもまたヒーローとしての

素養を身につける一環なんだな。」

「めっちゃ持ち上げられてんな…。」

「なんか緊張すんな爆豪…!」

「しねえよただただアガるわ…!」

飯田と緑谷、切島と爆豪は観客を見るなり

個々でそう言っていた。

『B組に続いて普通科C・D・E組…!! サポート科F・G・H組も来たぞー! そして経営科…』

ヒーロー科B組も入り、普通科、サポート科、

経営科の生徒達もA組とB組に続けて入場する。

だがあからさまに盛り上がりに欠けているその

状態のせいかな不満そうな生徒が大勢いた。

「俺等って完全引き立て役だよなあ…。」

「たるいよね〜…。」

普通科の生徒は不満を垂れ流す。そこには心操もいて

A組生徒を見ながら歩いていった。

「フッフフツ!! さあドツ可愛いベイビーちゃんの

出番ですね! 貴方のソレも

ギンギンと興味ありますが!」

「うるさい黙れ。」

サポート科の生徒、発目はその目を眩かせ、

後藤は一枚の銀色のメダルを握り、黙々と歩いていた。

『選手宣誓!!』

一年の全ての生徒等が集まり、壇上に上がった

ミッドナイトが鞭を鳴らし声を上げていた。

「18禁なのに高校に居てもいいものか?」

「いい。」

ボソツと呟く常闇に間入れず峰田は凝視しながら言う。

『静かにしなさい!! 選手代表!! 1-A 火野映司!!』

「はっ、はいっ!」

ミッドナイトに指名されたのは火野で、

緊張気味の火野はぎこちなく壇上へと登って行く。

「火野君?? え、何で??」

「あいつ入試一位通過だったからな。」

「……ちっ。」

驚く緑谷に瀬呂は教えてると爆豪は気に食わない

表情で火野を睨んでいた。

火野はミッドナイトに軽く礼をしながら

マイクへと近付き、息を吸い込み宣言した。

『選手宣言!! 先生! 私達、選手一同は自身の

全力を出し抜きスポーツマンシップに則り

戦い抜くことを誓います!! …。』

言い終わろうとしたその直後、機能停止したかの様に

火野の首はガクンと垂れ下がる。

一瞬何事かと思ひ、生徒等はざわつき、

ミッドナイトは駆け寄ろうとしたが、

火野は直ぐに顔を上げる。…が。

『…優勝するのはこの映司だ。』

その瞬間、生徒等からはブーイングの嵐が巻き起こる。

「ふざけてんじやねえぞお!!」

「調子乗んなよA組オラア!!」

「何だあいつ!?俺らはいいい踏み台ってか!?!」

ブーイングの最中、A組は驚愕していた。

あの火野があんな口調で煽る様な行為などしない筈なのに彼はその行為を行ったからだ。

「…ふあ…、え?ど、どうしたの皆んな…?」

「どうしたのじゃないぞ!こつちの台詞だ火野君!」

「お前そんなキャラだったかつ!?何で煽ってんだよっ!?!」

「え、ええっ!?!」

何が起きたのか分からないと言わんばかりの表情をする

火野に飯田と切島は怒るが本人は何故かシラを切っていた。

謝りながら壇上から降り、列に戻った火野を確認し、

ミッドナイトはブーイングを無視して競技の説明をする。

『さーて、それじゃあ早速第一種目行きましょう!』

「雄英って何でも早速だね。」

『いわゆる予選よ!!毎年ここで多くの者が』

涙を飲むわ!!さて運命の第一種目今年は…!』

「早速ではないよね。」

「言うな。」

麗日がツツコむと耳郎がボソツと呟き、上鳴が宥める。

『コレ!!!』

ミッドナイトの後ろに空中投影で映し出されたのは

障害物競走と書かれていた。

『計十一クラスでの総当たりレースよ!』

コースはこのスタジアムの外周、約4km!

我が校は自由さが売り文句！ウフフフ…！
コースさえ守れば何をしたって構わないわ！』

ミッドナイトが説明していると、背後の壁が
組み替えられ、入り口と見受けられる場所へと
形を変えていく。どうやらここがスタート地点みたいだ。

『さあさあ…位置に着きまくりなさい…。』

そう言い終わるとゲート上部に設置された

ランプが点滅を始める。生徒等は慌てて

スタート地点へと移動する。

「はあ…。」

火野も位置に着くと思いきやオーズドライバーを

腰に宛がい装着しながら溜息を吐いていた。

先程の宣言は昨夜泉と共に内容を考えていたのだが

あの発言の記憶が飛んでるのか

ブーイングを受けた事に意味が分からず、

終始首を傾げていた。

モヤモヤの気持ちが続かないまま、火野は

腰を低くし、目の前のゲートを見つめる。

何はともあれ、今から始まる体育祭。

出出しをよくよくよと考えてる暇も与えてくれない

その雄英に彼は逆に感心していた。

火野は考えるのを止め、三枚のコアメダルを

スロットに嵌めて行き、オースキャナーを

取り出し構える。

そして、ついに始まりの合図がやって来る。

『スター………スタート!!』

「変身…。」

その合図と共にドライバーへとスキャンした。

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

合図により火野はオーズに変身すると同時に生徒達が
一斉にゲートを通ろうと走り出すが
狭く設計されているのか詰め入った状態となり
後方の生徒等は通れずにいた。

『さて実況していくぜー! つとお!』

いきなり宣戦布告ボーイがド派手にフォームチェンジだ!

あ、解説ヨロシク! ミイラマン!』

『無理矢理呼んだんだろが…。』

まあアレはあいつの「個性」だから仕方ない。』

プレゼント・マイクが実況を取り行い、怪我人の相澤が

若干切れ気味な口調で一応解説していた。

オーズは混雑するゲートを一番後方列から見ると

足に力を入れ始める。

「下がダメなら、上だなっ!」

そう言っただけでオーズは跳躍し、ゲートのトンネルの中の壁を蹴って突
破していく。

出口まで出るとそこには一面氷が張られており、

何十名かその氷が足に凍り付き動けなくなっていた。

恐らく今先頭を走っている轟の仕業だろう。

オーズは凍らされていない地面へ着地し、

駆け出し轟の後方を走っていると、

後ろからA組生徒が人混みから飛び出し後を追う様に

駆け出していた。

「クラスの間中は当然として、

思ったよりよけられたな…。」

「氷は轟君の専売特許だもんね！」

把握してればその対策も考えるよ！」

「ちっ…、だが負けねえ…！」

轟は前方に氷を地面に生成し、滑る様に速度を早める。

すると、峰田が突っ走り、頭の紫のボールへと手を伸ばす。

「お前のうらのうらをかいてやったぜ！」

ざまあねえってんだ！ヒヤッハー！」

峰田実

個性『もぎもぎ』

頭から、粘着力の高いボール状の物質を無限に生み出す！

もぎつて投げるといふ単調な動き故に、対人は不向き！

もぎりすぎると頭から流血してしまふぞ！

「喰らえオイラの必殺、GRAPPE ドゴォー！」

「峰田君!!？」

突然ロボットに殴られ峰田は側転の如く転がっていき

近くにいた緑谷は声を上げる。

『ターゲット…大量！』

「これ…入試の仮想敵!!？」^{ワイラン}

入試の時にいた1Pの仮装敵^{ワイラン}が行手を阻むが、

その先には0Pの超大型仮装敵^{ワイラン}が

何十対と聳え立っていた。

『さあいきなり障害物だ!!まずは手始め…、

第一関門！ロボ・インフェルノ!!』

「入試ん時の0P敵^{ワイラン}じゃねえか!!!」

「マジか！ヒーロー科あんなんと戦ったの!？」

「多すぎて通れねえ!!」

ヒーロー科、そして他の科の多くの生徒達が

驚愕し立ち止まる。

「どこからお金出てくるのかしら…。」

その夥しい数のロボットを見て八百万が眩くと先頭の轟は腰を低くし、その周りが凍り始める。

「一般入試用の仮想敵^{サイラン}ってやつか。

（せっかくならもつとすげえの 用意して

もらいてえもんだな）：クソ親父が見てるんだから。」

轟は右手を大きく振り上げると前方にいた

超大型仮装敵^{サイラン}は一瞬にして凍りついた。

そのロボットの足元を轟は走り抜ける。

「あいつが止めたぞ!!あの隙間だ!通れる!」

「やめとけ。不安定な体勢ん時に凍らしたから…

倒れるぞ。」

続いて生徒達も後を追うが轟がそう言うのと

文字通り超大型仮装敵^{サイラン}は体制を崩し、

勢いよく倒れ、後方の生徒等を含め吹き飛ばされていた。

『IーAー轟!!攻略と妨害を一度に!!

こいつあしヴィー!!!すげえな!!

一抜けだ!!アレだな、もうなんか…ズリイな!!』

プレゼント・マイクが実況すると、轟は

この第一関門を突破し、次のステージへと走っていく。

オーズも負けずと立ちはだかる残りの超大型仮装敵^{サイラン}を

警戒していると、一体のIP敵^{サイラン}が

オーズに向けて突っ込んできた。その時。

その仮装敵^{サイラン}は何か貫かれたかの

様に、胴体が割れ、その場に鉄の塊となって倒れた。

オーズは振り返ると、そこには

グレネードランチャーを模した銃を

向けた普通科の後藤がいた。

「…こんなところでヒーロー科の奴らに

遅れをとるようなら、世界は守れない…!」

「…また世界か…。本当、雄英は色んな人がいるなあ。」

No. 23 みんな個性的でイイネエ!!

『第一種目は障害物競走!!この特設スタジアムの外周を一周してゴールだぜ!!ルールはコースアウトさえしなけりや何でもアリの残虐チキンレースだ!!各所に設置されたカメラロボが興奮をお届けするぜ!』

『おい、俺いらないだろ。』

再度説明をするプレゼント・マイクに相澤は横でツツコミを入れる。

「お、おい!誰か下敷きになったぞ!!」

「死んだんじゃねえか!?!死ぬのかこの体育祭!?!」

二人の生徒が声を上げる。

どうやら轟が倒した巨大ロボの

下敷きになってしまったようだ。

だが、その瞬間鉄の表面がベコベコと動き出し

勢いよく飛び出したのは切島だった。

「死ぬかあー!!轟のヤロウ!わざと倒れる

タイミングで!俺じゃなかったら死んでたぞ!!」

『1ーA切島潰されてたー!!』

切島鋭児郎

個性『硬化』

身体がガツチガチに硬化する!!

最強の矛にも最強の盾にもなる!!

「A組のヤロウは本当嫌な奴ばかりだな…!

俺じゃなかったら死んでたぞ!!」

『B組鉄哲も潰されてたー!!ウケる!!』

切島に続き、今度はB組の鉄哲が文句を言いながら飛び出してくる。

それを見ていたプレゼント・マイクは笑いながら

実況をしていた。

鉄哲徹鐵

個性『ステイール』

身体が鋼のようになる!!

最強の矛にも最強の盾にもなる!!

「『個性』 ダダ被りかよっ!!

ただでさえ地味なのにチキショー!」

鉄哲の『個性』を見て切島は涙目になりながら
駆け出した。

「良いなあいつら…潰される心配なく突破できる。」

「とりあえず俺らは一時協力して道拓くぞ!」

残りの生徒達も負けずとB組の生徒がそう言って

先陣を切ろうとすると超大型仮装ウイラン敵を

爆破の衝撃でその頭上を通り抜ける者が現れる。

A組の爆豪だ。

『1ーA爆豪、下がダメなら頭上かよー!!クレバー!』

「半分野郎なんかには負かされてたまるかよっ!!」

プレゼント・マイクの実況が響き、爆豪はそう言いながら

通り抜けようとするとその後ろから瀬呂と常闇が

後を追う様に飛び出て来る。

「おめー、こういうの正面突破しそうな

性格してんのに、避けんのね!」

「便乗させてもらうぞ。着地!」

『アイヨー!』

瀬呂範太

個性『テープ』

肘からゼロハンテープ的なものを射出!

巻き取って移動するも良し!

切り離してトラップにするも良し！

常闇踏影

個性『黒影』
ダークシャドウ

伸縮自在で実体化する影っぽいモンスターを
その身に宿している！厨二臭い野郎だ！

『一足先行く連中、A組が多いなやっぱ!!』

プレゼント・マイクが言うと、相澤が便乗して喋り出す。

『立ち止まる時間が短い。上の世界を肌で感じた者、

恐怖を植え付けられた者、対処し凌いだ者、

各々が経験を糧とし迷いを打ち消している。』

相澤は次々と突破していくA組を見ながら

何気に解説していると、突然爆発音が聞こえ、

巨大ロボは仰け反り倒れ込んでいた。

その砲撃の背後を振り返ると

そこには砲台をぶっ放した八百万がいた。

「チョロいですわ!」

「道が拓けた!」

「あの0ポイントがこんな容易く……!」

八百万はそのまま砲台を捨てて走り出し、

残った生徒等も続けて駆け出す。

そこには仮装ヴァイラン敵の破片を持った緑谷も

走っていた。

「皆んな凄いなあ。おっと、見惚れてる場合じゃないっ。

えっと……名前分かんないけどとにかく俺は先に行くね!

お互い頑張ろう!」

「あつ!待て!」

『オオー!ここでA組の火野オーズが飛び出したー!』

スッゲージャンプ力だなおい!バツタかよ!』

『オーズの脚のバツタメダルの力は文字通りバツタだ。

最大190mまで跳躍できる。』

『ちやつかり解説しちやつてコイツう!』

『だまれ。』

オーズはその場から跳躍すると、あつという間に第一関門の出口付近まで到着し、駆け出していた。それをプレゼント・マイク、相澤がコメントしていると、残された後藤は続かんと駆け出していく。

「(〃個性〃に頼らないとはいえ、

このメダルをエネルギーに変えて放つ

“バースバスター”。衝撃を押さえる為改造したが、まだ肩に来る…。もつと改良が必要だな…。)」

☆☆☆☆☆☆☆☆

『オイオイ第一関門チョロいってよ!!』

んじゃ第二はどうさ!?落ちればアウト!!

それが嫌なら這いずりな!!』

第一関門を突破した生徒等はその第二関門へと辿り着くが生徒等はその光景を見て驚愕し立ち止まっていた。

底知れぬ崖が広がりいくつかは足場はあるもののその渡り手段は一步のロープだった。そしてプレゼント・マイクはその場所の名を叫ぶ。

『ザ・フォー…ール!!』

「大袈裟な綱渡りね。」

生徒達の中から一人、蛙吹がヒタヒタと器用に渡り始める。

蛙吹梅雨

個性『蛙』

蛙っぽい事なら何でもできる！

舌は最大20mまで伸ばし、壁に張り付いて昇降可能！
さすがっ!!

「フッフッフ!!来たよ来ましたアピールチャンス！

私のサポートアイテムが脚光を浴びる時！

さあさあ私独自に開発した商品のご披露!!

ザ・ワイヤーアロウ&ホバーソール!!」

そこで笑いながら先陣を切ろうとするのは

サポート科の発目だった。

「サポート科!!」

「えー、アイテムの持ち込みいいの!?!」

「ヒーロー科は普段から実戦的訓練を受けてるでしょう?」

公平を期す為私達は自分の開発したアイテム、

コスチュームに限り装備オツケー!」と言いますかむしろ、

私達にとっては、己の発想・開発技術を

他の企業にアピールする場なのでスッフッフ!!」

麗日、そして芦戸は文句を言うと言目は

高笑いしながら脇下にあるサポートアイテムの

ワイヤーアロウから射出し、崖に当たると一気に飛び出す。

「さあ私にカメラを向けてとくと見よ!!」

この私のドツ可愛い…:バイビーを!!」

使い慣れたような身のこなしで

彼女は向こう崖にホバーソールを使って着地し、

今度は片方のワイヤーアロウを射出し、その姿は何処ぞの映画のワイヤーアクションの様に飛んでいく。

「すごい！負けない！」

「くやしー！悪平等だ！」

「…よつと、うわあ。また凄いコースだなあ。」

麗日と芦戸は負けずとその後続き、駆け出す。

そして到着したオーズは第二関門を見るなり

驚くが、余裕そうな笑みを浮かべ

ロープを渡らず、足場から足場へと難なく跳躍する。

『さあお目玉の火野オーズ！相変わらず』

バツタジャンプで飛んでいくー！！

簡単ってかこのステージは!?チクシヨー!

いやあ実に色々な方がチャンスを掴もうと励んでますね

イレイザーヘッドさん。』

『何足止めてんだあのバカ共…。』

プレゼント・マイクは実況する最中、

相澤に声を掛けると他のA組等がまだ苦戦しているのを

見かけてなのかイラツとした様子でコメントする。

『さて先頭は難なく一抜けしてんぞ!!』

実況は続き、第二関門を突破して渡りきった轟が

走っているとその後から爆破で飛んでくる爆豪がいた。

「クソがっ!!」

「あいつ調子上げてきたな…、スロースターターか。」

追って来る爆豪に轟は眩きながら、負けずと

地面を凍らせ走り抜ける。

その様子を遠くから飯田は見てみると、

ロープに足を乗せ、脚部のエンジンを吹かせる。

「おそらく兄も見ているのだ…!」

「かっこ悪い様は見せられん!!!」ボボボボボ!

『カッコ悪いイイーイーイー!!!』

両手を広げ飯田はロープを滑る様に進んでいくのを見て
プレゼント・マイクは笑いながらその姿を実況する。
どんだん第二関門を突破していく生徒等を見て
プレゼント・マイクは休む事なく先頭を走る轟が
第三関門へと辿り着くのを確認し実況していく。

『先頭が一抜けて下は団子状態!!上位何名が 通過するかは公表して
ねえから安心せずに突き進め!!』

そして早くも最終関門!!かくしてその実態は———
：一面地雷源!!怒りのアフガンだ!!

地雷の位置はよく見りやわかる仕様になってんぞ!!

目と脚酷使しろ!!ちなみに地雷の威力は

大したことねえが、音と見た目は派手だから

失禁必至だぜ!!』

『人によるだろ。』

一見何もない地帯だが所々地面から

出っ張っている所が彼方此方に見える。

轟は氷を生成するのをやめ、気を付けながら

進んで行くと後方から爆発音が聞こえる。

「はっはあ俺は——関係ね——!!!!てめえ

宣戦布告する相手を間違えてんじゃねえよ!!」

両手から爆破で空を飛ぶ様に爆豪は轟を

追い抜こうとするが、轟は負けずと

腕を引っ張り先に行かせないようにしていた。

『ここで先頭が変わった——!!喜ベマスメディア!!』

お前ら好みの展開だああ!!後続もスパートかけてきた!!!

だが引っ張り合いながらも…

先頭二人がリードかあ!!!?

…いや!もう一人来てるぞ——!!』

「お二人共!悪いけど一位は貰うよ!!」

「っ、火野…!!」

「アあ!?三色野郎!!調子乗るなあ!!」

一位はこの俺だあ!!」

「いっつたつ!!?ちよつ!!?」

その二人を追いついたオーズが割入ろうとすると爆豪はオーズに向けて爆発をかます。

不意の攻撃によりけてしまうが、直ぐに体制を立て直し、オーズ、轟、爆豪と三人がお互いを譲らんと並び

それぞれの“個性”を駆使し、妨害しながら走って行く。と、その時だった。

「借りるぞー!かつちゃん! (大爆速ターボ!!)」

BOOOM!!!

その時、第三関門のスタート地点から爆発音が聞こえ、先頭の三人が振り返ると仮想敵の

破片を台にして勢いよく飛んでくる生徒、緑谷が

爆風の勢いに乗り、あつという間に三人の

頭上を通過していく。

『後方で大爆発!!?何だあの威力!!?』

偶然か、故意かーーーーー!!?!!?

A組緑谷、爆風で猛追ーーーーー!!!?!!?

つーか!!!抜いたあああー!!!』

「デクあ!!!俺の前に行くんじゃねえ!!!」

「っ!凄いな緑谷君!」

(メダルチェンジしてる時間がない!一か八か!)

このまま駆け抜ける!!)」

「後ろ気にしてる場合じゃねえ……!」

妨害しあってた三人は緑谷に負けないと

浮遊してる緑谷を全力で追いかける。

轟は地雷が爆発しない様にする為か地面を凍らせる。

『元・先頭の三人、足の引つ張り合いをやめ

緑谷を追う!!共通の敵が現れば人は争いをやめる!!

争いは無くならないがな!』

『何言ってるんだお前。』

熱くなるプレゼント・マイクの発言に

相澤は冷静にツッコむ。

爆風の勢いで飛んでた緑谷は徐々に失速し、

三人は緑谷を追いつき、全力で目の前のゴールを駆け抜ける。

だが緑谷は負けずと持っていた破片を

振りかざし、地面に当てたその時。

カチカチカチカチ

ボオオオン!!

「っ!？」

「うおっ!!？」

「あだっ!!？」

地面に埋もれてた地雷がいくつか発動し、

爆発を起こし、緑谷はその勢いでゴール前へと吹っ飛び

轟、爆豪、オーズは爆発に巻き込まれて怯む。

緑谷は地面に叩きつけられるが器用に受け身を取り

すぐに起き上がり、体育祭の中へと続くゲートを

くぐり抜けていく。

『緑谷、間髪入れず後続妨害!!何と地雷原即クリア!

イレイザーヘッド、お前のクラスすげえな!!

どういう教育してんだ!』

『俺は何もしてねえよ、奴等が勝手に

火イ付け合ってるだろう。』

『さアさア序盤の展開から誰が予想出来た!?!』

『おい無視か。』

プレゼント・マイクは一人で盛り上がり、コメントを無視された相澤は苛つきながらツツコむ。そして、体育祭のゲートをくぐり抜け通過した一人の生徒にプレゼント・マイクは興奮しながらその実況をお届けする。

『今一番にそのスタジアムへ還ってきた』

その男「……………」、緑谷出久の存在を!!』

W A A A A A !!!

緑谷が現れると会場は一気に歓声の音が響き渡る。

「…はあ…はあ…!!」

息切れをしながらも緑谷は観客の席を見渡していると一つの区域の前例に座っているオールマイトを見つけ、ニツ！と互いは頬を上げ、笑っていたのだった。

No. 24 騎馬戦！混合！

『さあ続々とゴールインだ！順位等は後程

まとめるからとりあえずお疲れ!!』

緑谷出久の後に続き、轟、爆豪、オーズがゴールし、その下の順位の生徒等も続々とゴールしていく。

「ハア…ハアツ、また…クソっ…！クソがつ…!!!」

「……。」

『「四位」かあ…。まあ仕方ないか。』

爆豪は到着するなり、順位なのか緑谷に負けたのか悔しがっていた。

轟は無言で息切れしながら緑谷を見ており、火野は変身を解き、自分の順位を呟っていた。

「デクくん…！…！…！…！…！…！…！」

「この「個性」で遅れをとるとは…」

やはりまだまだだ僕…俺は…！」

「麗日さん、飯田君っ。」

ゴールする生徒等の中から麗日と飯田が緑谷に駆け寄る。

「1位凄いいね！悔しいよちくしよー！」

「いやあ…、てか顔近い…。」

素で悔しがる麗日に距離が近いかわかると緑谷は腕を顔を隠す様に覆い恥ずかしがる。

「はあ…！…！…！…！…！」

「お、おやおやおやあ…。例のビッグアイテムは使わなかったんですね…？」

発目の後にゴールした後藤に発目は声を掛けるが後藤は無言で彼女の横を通り過ぎて行く。

『さあ皆んなゴールしたわね。』

それじゃあ結果をご覧ください。』

生徒等が全員ゴールしたのを確認し、

ミッドナイトはそう言うモニターに順位が発表される。

- 1 緑谷出久 (A組)
- 2 轟焦凍 (A組)
- 3 爆豪勝己 (A組)
- 4 火野映司 (A組)
- 5 塩崎茨 (B組)
- 6 骨抜柔造 (B組)
- 7 飯田天哉 (A組)
- 8 常闇踏陰 (A組)
- 9 瀬呂範太 (A組)
- 10 切島鋭児郎 (A組)
- 11 鉄哲徹鐵 (B組)
- 12 尾白猿夫 (A組)
- 13 泡瀬洋雪 (B組)
- 14 蛙吹梅雨 (A組)
- 15 障子目蔵 (A組)
- 16 砂藤力道 (A組)
- 17 麗日お茶子 (A組)
- 18 八百万百 (A組)
- 19 峰田実 (A組)
- 20 芦戸三奈 (A組)
- 21 耳郎響香 (A組)
- 22 回原旋 (B組)
- 23 円場硬成 (B組)
- 24 上鳴電気 (A組)
- 25 凡戸固次郎 (B組)
- 26 心操人使 (普通科)
- 27 柳レイ子 (B組)
- 28 拳藤一佳 (B組)
- 29 穴田獣郎太 (B組)

- 3 0 黒色支配 (B組)
- 3 1 小大唯 (B組)
- 3 2 鱗飛竜 (B組)
- 3 3 庄田二連撃 (B組)
- 3 4 小森希乃子 (B組)
- 3 5 鎌切尖 (B組)
- 3 6 物間寧人 (B組)
- 3 7 角取ポニー (B組)
- 3 8 葉隠透 (A組)
- 3 9 取蔭切奈 (B組)
- 4 0 吹出漫我 (B組)
- 4 1 発目明 (サポート科)
- 4 2 後藤慎太郎 (サポート科)
- 4 3 青山優雅 (A組)

「見ての通り予選通過は上位43名！

残念ながら落ちちゃった人も安心しなさい！

まだ見せ場は用意されてるわ!! 所以ていよいよ本選よ！

ここからは取材陣も白熱してくるよ！ 気張りなさい!!」

生配信で走り終わって個性的な皆の顔が順位と共に

映し出され、ミッドナイトは一旦区切り、

瞬時モニター画面はルーレットみたく、

文字が高速で回転する映像が映される中、

ミッドナイトは喋る。

「さーて、第二種目よ!! 私はまだもう知ってるけど〜〜

…何かしら!! 言ってる側からコレよ!!!」

回転する文字が止まりミッドナイトは叫ぶ。

そこには『騎馬戦』と書かれていた。

「騎馬戦…！俺ダメなやつだ。」

「き、騎馬戦…ゴクッ。」

「個人競技じゃないけどどうやるのかしら。」

上鳴は自身の「個性」を気にしてるのかそう言うのと隣の峰田は何故か唾を飲む。

そしてその隣の蛙吹が首を傾げると

ミッドナイトは説明をし始める。

「参加者は2〜4人のチームを自由に組んで

騎馬を作ってもらおうわ！基本は普通の騎馬戦と

同じルールだけど、一つ違うのが… 先程の結果に従い

各自にポイントが振り当てられる事！」

「入試みたいなポイント稼ぎ方式か。わかりやすいぜ。」

「つまり組み合わせによって騎馬のポイントが

違ってくるよ！」

「あー！」

「あんたら私が喋ってるのにすぐ言うね!!！」

砂藤、切島が補足を言うと言戸と火野は納得し、

声を出すと余計なお世話だったのか

鞭をピシャン！と鳴らしミッドナイトは怒る。

「ええそうよ!!そして与えられるポイントは

下から5ずつ！43位が5ポイント、42位が10ポイント

…といった具合よ。そして…1位に与えられる

ポイントは、1000万!!!」

一位のポイントを聞いたその瞬間、全員の視線が

一位、緑谷に向けられる。

当の本人の緑谷は予想外のポイント数だったのか

あり得ないくらい驚愕した顔をしていた。

「1000万…?」

「上位の奴ほど狙われちゃう競技…、

言うなれば！下克上サバイバルよ!!!

上に行く者には更なる受難を。雄英に在籍する以上

何度でも聞かされるよ。これぞPlus Ultra!

予選通過一位の緑谷出久くん!!

持ちポイント1000万!!」

その言葉に全員の緑谷への視線はまるで獲物を狩る様な視線へと変わる。

その重圧の中、緑谷は冷や汗を流すと

ミッドナイトは続けて解説をする。

「制限時間は15分。振り当てられたポイントの合計が

騎馬のポイントとなり、騎手はそのポイント数が表示された

鉢巻を装着！終了までに鉢巻を奪い合い

保持ポイントを競うのよ。取った鉢巻は首から上に巻く事。

取りまくれば取りまくるほど管理が大変になるわよ！

そして重要なのは鉢巻を取られても、また騎馬が崩れても、

アウトにはならないってところ！」

「つてことは…。」

「43名からなる騎馬10〜12組がずっと同じ

フィールドにいるわけか…?」

「シンド☆」

「一旦ポイントを取られて身軽になっちゃうのもアリだね。」

「なるほど。それなら一回対策を立て直して

挑むってのもアリだね！」

「それは全体のポイントの分かれ方みないと

判断しかねるわ、火野ちゃん、三奈ちゃん。」

A組の生徒等が個々で話してどうするか考えていると

ミッドナイトは鞭を鳴らし注目を集める。

「個性」 発動アリの残虐ファイト！でも……

あくまで騎馬戦!!悪質な崩し目的での攻撃等は

レッドカード！一発退場とします！

それじゃこれより15分！

チーム決めの交渉タイムスタートよ!!」

そう言って交渉時間が始まり、皆は仲のいい仲間達で

メンバーを決めるべく散らばって行った。

☆☆☆☆

「火野ー！って火野はっ?! いねえじゃん!」

「火野なら組む人決まったって言ってたよ?」

「マジかああっ!! うわああ! アイツと組めば

絶対1位になれたのにい!!」

「考えが汚いわ峰田ちゃん。」

「芦戸お!俺と組もうぜえ!!」

「いや!」

「がああああ!!」

「行動が早いわ峰田ちゃん。」

峰田は火野を探すべく呼んでいたが芦戸にそう言われ
嘆いていると蛙吹にツッコまれる。

「障子君、俺と組まないか?背後は

俺の“個性”でカバーするよ。」

「尾白、助かる。後二人…、俺は図体がデカいから

上は不向き…。騎手を誰にするかだな…。」

一方でメンバーを探している障子に尾白が声を掛け、
二人は組む事になって、残りの空を探していた。

「…デク君?誰か人材おるん?」

「火野君っ。組めたらとても心強かったんだけど

流石にもう決まったのかな…。」

「そりゃオーズだもんっ。」

最初火野君色んな人に声掛けられてたよっ!」

その一方で一位の1000万ポイントを持つ緑谷は
彼の“個性”故か皆からは遠ざけられてる。

そこへ救いの手を差し伸べるかの様に

麗日が組む事となり、二人は残りのメンバーを探していた。

「時間は有限…、あ、飯田君!」

緑谷は刻々と過ぎて行くのを確認し、
飯田に声を掛けていた。

その一方…、

「後藤。組むか？」

「心操…、助かる。」

ここにいる奴らは同じ組同士で手を組んでいる。

サポート科の俺は仲間外れみたいだ。」

「それを言ったら通過した普通科一人の

俺はどうなるんだよ…。お前はまだ二人だろ？

てかあのアイテムフル活用してた子は？」

「…ああ発目か。奴なら一番と組むみたいなさ言って

向こうへ行った。」

心操は後藤に声を掛け、後藤は周りを見ながら言い承諾する。

後藤が言うには同じサポート科の発目は

恐らく1000万ポイントの緑谷の所へ行ったのだろう。

「で、残りのメンバーはどうするんだ？」

他の奴らは大体決まってきたみたいだし

後がないぞ。…最悪二人で行くか…。

(…最悪の手段は、いや、まだ使う訳にはいかない…。)」

「…ああ。そういうえば、お前には

まだ言ってなかったな。」

「何をだ？」

後藤は残りのメンバーをどう集めるか

心操に問い掛けると心操はニヤリと悪そうな

笑みを浮かべる。

すると、二人。こちらにやってくる者がいた。

「…!?お前…、何をした…?」

「まあ、ちよつと声を掛けたただけだ。」

☆☆☆☆

『15分経ったわ。』

それじゃあいよいよ始めるわよ。各組の騎馬は配置に!』

『さあ起きろイレイザー!』

15分のチーム決め兼作戦タイムを経て、

フィールドに12組の騎馬が並び立った!!』

『…なかなか面白え組が揃ったな。』

交渉時間が終了し、ミッドナイトが合図を出すと

12組の騎馬がポジションに配置し始める。

準備が整い、プレゼント・マイクは

うたた寝している相澤を起こし、相澤は

騎馬戦の組を見てニヤリと笑っていた。

『さア!上げてけ鬨の声!!血で血を洗う雄英合戦が今!!狼煙を上げる
!!!』

待ち侘びたと言わんばかりに

プレゼント・マイクの掛け声に観客は盛大に盛り上がる。

「さて、目玉は騎馬に選んだんだ。

俺が先導してやるから、後藤…、

サポートアイテムで背後はそいつと一緒に頼むぜ?」

「……………くそつ。」

前馬となった心操が右馬の後藤にそう言うと、

後藤は気に入らないのか軽く悪態をついていた。

それもそのはず、左馬はA組ヒーロー科の青山と

騎馬は火野映司こと、オーズだったのだから。

「……………」

「……………」

二人は間抜けの空の様に無言を貫き、
今、騎馬戦が開始されようとしていた。

No. 25 改めて行こう!!

― 交渉時間の時 ―

「火野!組もっ!!」

「火野!俺と組もう!」

「火野くん!私と組もっ!」

「うわっわっ、ちよ、ちよっと皆落ち着いて!」

交渉が始まると同時に火野は芦戸、砂藤、葉隠と声を掛けられ、その他のA組生徒も何人か集まり

火野へと交渉を申し込んでいた。

流石の火野もその呼びかけに驚いたのか

迫り来るA組生徒等を落ち着かせようと両手を上げ

押さえる素振りを見せる。

「ごめん、俺の中で組みたい人決まってるんだ!

その時空きがあったらまた声を掛けてくれる?

じゃ!俺急いでるからっ!」

「ちよっ!?火野!」

火野は手を合わせ謝るとそそくさにその場から逃げる様に離れる。

芦戸は叫ぶが彼は他の生徒の人混みに紛れ

姿が見えなくなっていた。

「ふう…。皆んなの気持ちは嬉しいけど、

俺はもう決めてる…。

(君のその判断力なら、きっと敵無しだっ。)

追手が来ないのを確認し、火野は息を吐くと

そのお目当ての人を探し始める。

が、意外と早く見つかり、火野は駆け寄ろうとした。

その目の先にいるのは辺りから遠ざけられ

一人ポツンと目立っていた緑谷だった。

が。

「オーズ、俺と組まないか？」

緑谷に近づこうとする最中に、男性の声が背後から聞こえる。
またかと思ったのか火野は困った表情を浮かべ

謝ろうと振り返った。

「本当ごめん！俺組みたい人が……………」

（あれ…………？何だ…!?身体が動かない…!?）

てか、この人確か……………普通科の……………」

その瞬間、なぜか火野は死んだ目の様な瞳になり
その場で固まってしまった。

火野の意識は段々と薄れ始め、最後に呼びかけた
その人物は普通科の心操だった。

☆☆☆☆

『それじゃあ騎馬戦を始める前に

誰がどこにいるか軽くチェックしましよ！

コレをご覧なさい！』

フィールド上に生徒の騎馬達が出揃うと

ミッドナイトはそう言っつてモニター画面に指を指すと

そこには騎馬のメンバーと合計ポイント数が書かれていた。

緑谷チーム

緑谷 10000000P

麗日 135P

兎目 15P

常闇 180P

合計 10000330P

鉄哲チーム
鉄哲 165 P
骨拔 190 P
泡瀬 155 P
塩崎 195 P
合計 705 P
爆豪チーム
爆豪 205 P
切島 170 P
瀬呂 175 P
芦戸 120 P
合計 670 P
轟チーム
轟 210 P
飯田 185 P
八百万 130 P
上鳴 100
合計 625 P
峰田&蛙吹チーム
峰田 125 P
蛙吹 150 P
障子 145 P
尾白 160 P
合計 580 P
物間チーム
物間 40 P
円場 105 P
回原 110 P
黒色 70 P
合計 325 P
火野チーム

火野 200 P
心操 90 P
後藤 10 P
青山 5 P
合計 305 P
葉隠 千一ム
葉隠 30 P
耳郎 115 P
砂藤 140 P
合計 285 P
拳藤 千一ム
拳藤 80 P
柳 85 P
取蔭 25 P
小森 50 P
合計 240 P
小大 千一ム
小大 65 P
凡戸 95 P
吹出 20 P
庄田 55 P
合計 235 P
鱗 千一ム
鱗 60 P
穴田 75 P
合計 135 P
角取 千一ム
角取 35 P
鎌切 45 P
合計 80 P

「鉄哲、恨みつ子無しだぞ。」

「おうっ！」

違う騎馬となったB組の鉄哲と物間は
何方が勝つても文句無しと互いで確認する。

「…えー!?火野っ、組みたい人って

教室に来た大胆不敵な奴なのー!?!」

「火野は誰にでも優しいから組んだんじゃねーの?
てか、いつの間に仲良くなっただんだ…?」

「喋るなモブ共オ!!気が散るだろが！」

火野チームを見て爆豪チームの芦戸は

予想外のメンバーで驚くと隣の瀬呂は呟く。

意外にも精神統一をしているのか騎馬の爆豪が
二人に対して怒鳴る。

『よオーし組み終わったな!!?』

準備はいいかなんて聞かねえぞ!!いくぜ!!

残虐バトルロイヤルカウントダウン!!

3!!2!!1!!START!!』

そして、プレゼント・マイクは合図を出し、

騎馬戦が開始!されると同時に、

皆の視線、行動はもちろん1000万の緑谷だった。

「実質1000万の争奪戦だ!!」

「はっはっは!!緑谷くんいっただくよー!!」

先に突っ走るのは鉄哲チームと葉隠チームだ。

「…いきなり襲来とはな、まずは二組。

追われし者の運命…選択しろ緑谷！」

「セクタク…！」

「サダメ…！」

「もちろん!逃げの一手!!」

常闇は状況見て騎馬の緑谷に指示を貰おうとすると
左右の馬の麗日と兎目は厨二臭いその台詞を
かつこいいのかボソツと呟いていると

緑谷はそう言つて他の騎馬から逃げようとする。
が、突然地面が沈み身動きが取れなくなつていた。

「ケッー！」

「沈んでるーあの人の『個性』か！」

麗日さん！兇目さん！顔避けて!!」

鉄哲チームの骨抜が笑い、緑谷は解釈すると

手に持っていたボタンを押す。

すると、背中に背負っていたホバージェットらしき

サポートアイテムが作動し、緑谷チームは

馬ごと大きく飛び上がる。

すかさず葉隠チームの耳郎が耳朵のプラグを伸ばすが

常闇のダークシヤドウによりそれは妨害される。

「いいなあ、皆んないい『個性』を持つてるなあ。」

「心操！ボサつとしてると取られるぞー！」

「ああ、そうだな…。」

火野チームの前馬である心操はニヤニヤしながら

眺めていると後藤が注意する。

「オーズの人！鉢巻もらうよ!!」

「…っ!？」

「っ！しまった!!」

すると、後方から来た拳藤チームの拳藤が

オーズから鉢巻を奪い取り、そのまま駆け抜けて行く。

「おい！心操！」

「とられたか…、まあ焦るな。」

まだ時間はある。」

後藤はほら見ろと言わんばかりに心操を呼ぶが

心操は冷静にそう言うのと、

鉢巻を取られたオーズが喋り出す。

「…え、ちよ…あれ…?」

「っ！火野…！」

「えっ、…俺…どうしたんだ…?」

確か心操って人に声をかけられて…って

あれ…!?何これ…何で変身してるの!?

もしかして始まつ「おいオーズ。」なにっ?あ…!」

困惑し始めたオーズに心操は呼びかけると

オーズは再び意識が飛び、抜け殻の様に固まった。

「…心操。お前…。」

「まあ、馬鹿は使い様だな。」

心操人使

個性『洗脳』

彼の問いかけに答えた者は洗脳スイッチが入り、

彼の言いなりになってしまう!

本人にその気がなければ洗脳スイッチは入らないぞ!!

「…さ。チャンスが訪れるまで待つところか。」

後藤、青山、とりあえず隅の方まで移動しよう。」

「…くっ! (こんなやり方でいいのか…!?)

…俺は…何の為に雄英に…!!)」

火野チームは取り合いが激しい中央を避け、

隅の方へと移動し始める。

後藤はそう思いながら嫌々指示に従っていた。

『さ…まだまだ2分も経ってねえが早くも混戦混戦!!

各所で鉢巻奪い合い!! 1000万を狙わず

2位〜4位狙いつても悪くねえ!!』

「アハハハ!奪い合い…?違うぜこれは…。」

一方的な略奪だよお!!」

「障子君!!後ろは尾白君!…あれ!?

二人だけっ!?!騎馬はっ!?!」

プレゼント・マイクが時間経過を知らせ

各騎馬組は乱戦を繰り広げていた。

その一方で緑谷チームに攻め入るのは
背中を触手の手で覆う障子と尾白の二人だけだった。

「一旦距離をとれ!!とにかく複数相手に
立ち止まっってはいかん!!」

ブニツ

「!?何っ!?取れへん!」

「これは峰田君の!?一体どこから…!」

「ここからだよ緑谷あ…。」

「んなあ!?それアライ!!」

『アリよ!』

常闇の言葉に動こうとするが峰田のモギモギボールが
麗日の片足にくつついて動けなくなっていた。

緑谷はよく見ると、障子の触手の手で覆われていた

その中、峰田は不吉な笑みを浮かべこちらを覗いており、
緑谷は驚くとミッドナイトはすかさず許可を出していた。

その瞬間、峰田の隣からは長い舌の様な物が飛び出す。

「わっ!!?」

「わっ!!?なんだコレ!?!」

反射的に避けられた緑谷の背後にいた鉄哲チームも
その舌にびっくりする。

すると、峰田の隣からひっそりと姿を現したのは

蛙吹だった。

「流石ね緑谷ちゃん。」

「蛙吹さんもか!!凄いな障子君!」

「梅雨ちゃんと呼んで。」

「ソレ反則でしょー!!耳郎ちゃん!!」

「わーってるよ!」

峰田&蛙吹チームの背後からいつの間にか

鉢巻がなくなっている葉隠チームが迫り、

葉隠の指示で耳郎は耳朶のプラグを

峰田&蛙吹チームへと伸ばす。

が、彼らの後ろにいた尾白が気付き、プラグを尻尾で跳ね返す。

「させないよっ!」

「ああーもお!!尾白君ナイス!!」

「褒めてどうすんだよっ!」

死角を守る尾白に葉隠は苛立ちながらもその立ち回りに褒めると耳郎がツッコむ。

『峰田チーム圧倒的な体格差を利用してやがる!』

そして背後は尾白少年がカバー!

ナイスなコンビネーションだあ!!』

プレゼント・マイクが実況する最中、

緑谷は止む追えず、ホバージェットのボタンを押し、

空中へと逃走。その際、麗日が履いていた

サポートアイテムはモギモギボールによって

地面へと引千切られる。

「ああベイビーが千切れたあ!!」

「ごめん!でも離れたよっ!!…!!」

麗日の片足から煙が立ち登りシヨックを受ける発目に

緑谷は謝っていると、その目の先から

同じく空中へと突っ込んで来る者がいた。

爆豪だ。

「調子乗ってんじゃねえぞクソがっ!!」

「かつちゃん…?!常闇君!!」

迫り来る爆豪に緑谷は常闇を呼び、

常闇はダークシャドウで応戦する。

激しい攻防が続く中、火野チームは

角取チームから鉢巻を奪いとうとうとしていた。

「っ!?!『角飛ばす』“個性”か…!」

「あの人たち、ポイント持ってないヨ!」

「角取！ここは逃げるぜ!!」

「OK!!」

「っ！待て!!」

角取の頭から放たれた「角」が心操の横を掠め、警戒すると鎌切がそう言つて火野チームから離れる。

「ちっ、このオーズ全然使えないな…！」

USJ事件で活躍してたから使えそうだと思つたのに…。

やっぱ他の騎馬は「洗脳」するしかねえか…。」

「……！」

心操は悪態を吐き、辺りに近そうな騎馬がいないか探していると、後藤は突然、オーズの背中を

突然「叩いた」のだった。

「…うあ!?!えっ…!?!」

「あ！おい後藤！何してんだっ!?!」

「お前も起きろっ!」

「っ!?!ファツ☆」

心操の呼びかけを無視し、隣の青山の頭も叩き

青山は目を覚ます。

「この…！おいオー」

「やめろっ!!!」

心操は再びオーズを洗脳しようとする

後藤はそれを止める。

「すまない、こんなやり方は俺は向いていない…！」

「謝るなよふざけんなっ！今洗脳解いたら

訳もなく組まされたこいつらは困惑するだけだ!」

「ちよ、ちよつと二人共落ち着いて!」

心操と後藤が揉め始めると、騎馬のオーズが

宥めようと割り入り、口を動かす。

「心操君…だっけ?途中から騎馬に乗ってた状態で

何となく記憶ぼやけてたけど、大体把握できたよ。

洗脳とか関係なしに、今はチーム何だし、

「洗脳無しでこの勝負勝たない…?」

「…っ。お前、良いのか…? 見ず知らずの

俺等と無理矢理使わされてたんだぞっ?」

オーズの言葉に心操は疑心暗鬼な表情で問うと

オーズは恐らく仮面の下でニカツと笑い口を動かす。

「だって君達とは体育祭前の時からの付き合いですよ?」

そっちの彼も卑怯な手を使いたくないって言ってるし、

「ここは俺に任せて、二人が良ければ手を貸してくれる?」

「…後藤だ。」

「え?」

「俺は後藤だ! 記憶があるなら名前くらい覚えろ!」

「ああ! すみません後藤 “さん”!」

覚えてもらってないのがショックなのか

後藤は叫び、その拍子でオーズはさん付けになるが

後藤は鼻を鳴らし、口を動かす。

「火野、それと…青山。一度しか言わない。

今、お前は騎馬で鉢巻を取られている。

…残り時間を組まないと上位に入るのは

難しいだろう…。こんな状況じゃ癪だが、

オーズの力を借りないと本戦に進めないだろう。

心操、お前もそれでいいな?」

「…まあ俺は “洗脳” があるから問題な」

「心操。」

「…分かったよ…。」

後藤が喋り、心操に賛同を認めさせ、一旦区切り、

周囲の状況を見ながら喋りだす。

「火野、お前はその力であるべく上位の騎馬達から

ポイントを取れ。俺はこの銃…、 “バースバスター” で

遠距離攻撃が出来る。…だが威力は保証するが反動が強い。

すまないが俺はあまり戦力にならない。」

「そ、そんな事ないよっ! じゃあ後藤さんは

あくまで最終手段の時に使ってください！心操君も！

「…わかった。…火野、一つ聞きたい。」

オーズの言葉に後藤は了承し、心操も頷くとオーズに問い掛ける。

「お前は、俺なんかと組めるのか…？」

いつ裏切ってもおかしくないんだぞ？」

「え？何で？心操君の『個性』ちょっと怖いけど

考えてみたら凄いヒーロー向きな『個性』じゃん。」

「っ！」

宣戦布告をして尚且つ洗脳して良い様に利用した相手をあつけからんとした態度で接するオーズに對して心操は疑っていた。

だがオーズは心操にとつて予想打にしない言葉が返ってきて戸惑っているオーズは続けて喋る。

「それに、ヒーローは助け合いでしょっ？」

俺達は雄英生、誰もが目指す目的は共通してるはず。だから、悪い奴なんていないと思うんだっ。」

オーズの言葉に心操、後藤は思わず貫禄しただろう。

二人は目を見開き、同時に心操は鼻で笑う。

「…そんなお人好しじゃ、すぐ寝首搔かれるぜ？」

「そんな事ないよ！だって…あ…！」

「ほら。」

「心操…。」

オーズが反応すると抜け殻みたく固まる。

『個性』を使ったと知り後藤はため息を吐くと

オーズは洗脳が解かれ、気を取り直す。

「よし…じゃあ二人共…！」

「僕を忘れてないかい？☆」

「…あ。」

「…ああ！ごめん青山君！えつと…」

「説明は大丈夫☆大体話は分かってるよ！☆
僕もサポ^輝ート^きに回るから、ヨロシク！☆」

青山が突然呼びかけると完全に忘れていたのか
三人は声を漏らす。が、話を聞いてたのか
青山は了承し、オーズはその仮面を両手で叩き
気合いを入れ直す。

「よっしーじゃあここからが反撃開始だね！

心操君！後藤さん！青山君！」

「ああ。」

「言つとくが、今回だけだからな。」

「ウイ☆」

「皆、改めてよろしく!!行くよ！」

三人は返事をし、オーズは声を上げる。

そして、ここからが火野チームが正々堂々、
騎馬戦に参加するのだった。

No. 26 この世は乱世！決着の時！

『さあ！残り時間の半分を切ったぞ!!』

B組隆盛の中果たしてー、

1000万ポイントは誰に頭を垂れるのか!!』

「つとーもう半分!?!」

「時間がない…!4位から1位の鉢巻を取りに行くぞ!」

「まあ、それしかねえわな。」

「ハイ☆」

プレゼント・マイクが叫ぶと

いつの間にか時間が過ぎてるのを見て驚く

オーズに後藤は最善の事を言うと言と心操と青山が領き、
フィールドの中央へと駆け抜ける。

その中央には1000万の鉢巻をまだ頭に付けている
緑谷を狙うべく、轟チーム、鉄哲チーム、

葉隠チーム、鱗チーム、拳藤チーム、角取チームと
以上の騎馬組が攻防を繰り広げていた。

爆豪チームは鉢巻を取られたのか額に付けておらず、
逃げる物間チームを追っている。

そして前方には峰田チームが緑谷チームを狙うべく
走っている。

「火野！USJで使ってた昆虫のヤツ三枚使え！」

「ちよ、ちよっとそれは厳しいよ後藤さん！」

アレは使えば凄い力出せるけど反動も凄いなだ…っ。

途中で動けなくなったら鉢巻取れなくなるよ!?!」

「はあ!?!さっき勝つって言ってただろ！」

はあ…仕方ない。なら頭と体はあの昆虫を使え!

足は何でもいい!」

「わ、分かった!ありがとう!」

コンボは身体に負担が掛かるので嫌がるオーズに

後藤はそう言うのとオーズは頷き、メダルを準備する。

「心操！前にいる障子のあの手を開かせ！」

青山はレーザーで前の騎馬の注意をこっちに引かせろ！」

クワガタ！

カマキリ！

チーター！

後藤が指示を出す最中、

オーズはタカとトラ、バツタのメダルを取り、

クワガタとカマキリ、足はチーターを選び

オースドライバーへと嵌め込み、

オースキャナーでスキャンする。

音声が鳴り響き、オーズは

「ガタキリーター」へと姿を変える。

「さつき卑怯な手使いたくないって言ったじゃんか…、

まあいいけど。」

「ウイ☆へエイ！そこの君達！シン！」

心操はそう言いながら咳払いをする。

そして青山は前方の峰田チームに向かって

当たらない様に臍のベルトから

レーザーを何発か放つ。

「うわっ!?何だ！青山かつ!？」

「火野のチームか…！だが鉢巻は取らせん！」

「その触手すつごいなあ！」

今度俺にも教えてほしいよ！触手君！」

「っ！これは「個性」！教えるのは無理だ…!!」

レーザーに反応した後馬の尾白が言う

障子は覆っている触手の手を固める。が、

心操が叫び、反応した障子は洗脳され動きが止まってしまう。

「障子！『その覆った手を全開に開け！』」

心操は叫ぶと障子は無言でその触手の手を開き、背中に乗っている峰田と蛙吹が丸見えとなる。

「うあっ!?何やってんだよ障子い!!」

「丸見えだわ…!」

「よし！火野！行け！」

「分かった！峰田君！ごめんよ！」

突然の行動に困惑する峰田と蛙吹。

後藤はオーズに言うのと火野チームの騎馬は

彼らに近付き、オーズは手を突き出す。

「っ！させるか！」

「青山！」

「ンウウ!!☆」

「うわっ!？」

後馬の尾白は防ごうと尻尾を伸ばすが

後藤が青山を呼ぶと青山は尾白に向かって

レーザーを放つ。尾白が回避しているその隙に、

オーズは胴体のカマキリの瞬発力を活かし、

瞬時に峰田から鉢巻を奪い取った。

「オイラの鉢巻いい!!」

「ケロツ!!」

「…つと！あぶなっ!？」

「…はっ！俺は…何を…!？」

「ボサつとすんな障子！鉢巻取られたぞ！追いかける!!」

嘆く峰田を押し退き、蛙吹は舌を伸ばして

取り返そうとするが、オーズは回避して

そのまま前方へと突き走る。

洗脳が解かれた障子は困惑するが

峰田は指示を出し後を追う様に駆け出す。

「よし！ポイントゲット！凄いよ後藤さん！」

「浮かれるのはまだ早い！奴らからも取るぞ！」

「オツケーっ！」

的確な指示に峰田から奪った鉢巻を額に付け、
褒めるオーズだが後藤は冷静に前へと進める。

そして、緑谷チーム等がいる乱戦へと入り込んだ。

「っ！火野君！」

「火野、来たか……！」

「緑谷君！本当は一緒に組みたかったけど

色々あつて予定変更！君に、勝つ!!」

「……僕もだよ……でも！今は敵……！負けないよ火野君!!」

「おや！仮面ライダーオーズ！」

貴方も、どうやら今は敵同士みたいですな！」

「見れば分かるだろ……！」

近づいて来る火野チームに緑谷、轟は警戒し、

オーズは緑谷にそう言うのと強張りながらも笑顔で返す緑谷。

発目はオーズと後藤を見てそう言うのと

呆れた顔で後藤は呟く。

他の騎馬達も遅れを取るまいと緑谷チームへと駆け出す。

「させるかよ……！飯田、前進っ。」

「ああ！」

「八百万、ガードと伝導の準備。」

「ええ！」

「上鳴は……！」

「いいよ！わかってる！しっかり防げよ!!」

轟も飯田を使って前進させ、八百万は右腕から

棒の様な突起物を生成、それが終わると

背中から大きな布の様な物を生成し出す。

そして、上鳴はそう言うのと頭からバチバチと

電流が流れ始める。

それを見た後藤はオーズに向かって叫ぶ。

「っ！まずい！火野！俺達に当たらない様電撃出せるか!？」

「えっ、多分大丈夫！」

「なら早くやれ！」

「分かった！ハア！」

オーズは頭から電撃を放ち始めると

轟チームの上鳴は思い切り電撃を放出した。

「無差別放電！130万V!!」

BZZZZZ!!

電撃により周りにいた騎馬は痺れ始める。

緑谷チームは常闇のダークシャドウによりなんとか防げたが

緑谷の背中ホバージェットはショートし、

煙を吹かしている。一方で火野チームは

クワガタヘッドの電撃により上鳴の電流は受け流す様に

その放出を往なした。

「残り6分弱、後は引かねえっ。悪いが我慢しろ。」

「…ぐっ!?氷…!!?」

轟は続けて八百万が生成した棒により

「個性」の氷を地面へと伝導し、周りの騎馬の

足ごと凍らせる。

『何だ何した!?群がる騎馬を轟一蹴!』

『上鳴の放電で確実に動きを止めてから凍らせた…』

流星というか…、障害物競走で結構な数に

避けられたのを省みてるな。』

『ナイス解説!』

その戦術にプレゼント・マイクは驚き、

相澤は見事解説し、褒めるプレゼント・マイク。

「はあん!?僕の足が…!？」

いや、これはこれで焔めきが増す…カモ?☆」

「何訳わからない事言ってるんだ！おい！どうすんだ後藤！」

「つーくそつー！火野！もう一回電撃だ！足元をやれ！」

「もう一回!? ああ分かった！ハアアツ!!」

火野チームも凍りつき、後藤は指示を出し

オーズは再び電撃を地面に放つと氷は砕かれ

動けるようになる。

「よし…このまま行くぞー！」

「あああアツ!!? ちよ、ちよつと待つて…!」

連続で出したから頭が！割れるうく…!!?」

「一時的なモノだろー！行くぞ!!」

「容赦ねえな後藤…。」

ビリビリと頭から電流が流れ、痙攣するオーズの言葉を

無視して後藤は前進させる。

その間、轟は足を凍らされた他の騎馬から鉢巻を奪い、

緑谷チームへと駆けるがダークシャドウにより

防戦され、轟チームと緑谷チームは互いに距離を取り

警戒している。

現在轟は4つ程鉢巻を所持しており、緑谷は

この時間まで10000万のポイントを所持している。

一方で爆豪チームは物間チームに鉢巻を取られ

爆豪チームは0ポイント。

物間チームは4つポイントを所持。

その他、拳藤と鱗チームがかろうじて予備の鉢巻を持っていて現時
点では

轟は自分、拳藤、鱗、鉄哲奪取で1705P

緑谷は自分の所持で10000330P

火野は峰田奪取で580P

物間は自分、爆豪、葉隠、小大奪取で1515P

拳藤は火野奪取で305P

鱗は角取奪取で80P

が鉢巻を所持していることになる。

「轟：奴のおかげで他の騎馬は行動不能になつてる。
今この場で動けるのは3騎のみ！」

「うう……ああやつと治まってきた……！」

後藤は周りを見てそう言う

オーズは痺れが取れたのか顔をブルブルと振るわせ
目の前にいる緑谷チーム、轟チームへと近づくと

緑谷は警戒したか馬の三人に指示を出す。

「キープ！常闇君！」

「ああ！ダークシャドウ！」

『アイヨー！』

緑谷チームは後方へと下がり、轟、火野チームから
距離を取りつつ、ダークシャドウは両手を広げて前に出る。

ダークシャドウを利用して残る時間は防戦に徹する様だ。

轟は火野チームを見て汗を流すと飯田が喋り掛けてきた。

「火野の奴ら氷割ってきたのか……！」

（くそ！緑谷は俺の騎馬の策略を考えて

上手いこと逃げやがる……！ここで火野達が

入ってこられたら1000万どころじゃなくなる……！

時間がねえ！）」

「皆！急ですまないがしつかり捕まっている！」

「飯田？」

「奪れよ、轟君！」

トルクオーバー！ ッレシプロバーストッ！！」

刹那、轟チームは途轍もない速度で前進し、

緑谷チームは何が起こったのか分からないまま

鉢巻を取られてしまっていた。

「……は？」

「……何が起きたんだ……？」

『な……！！？何が起きた！！？速っ速……！！』

飯田、そんな超加速があるんなら

予選で見せろよ……！！』

「トルクと回転数を無理矢理上げ爆発力を生んだのだ。

反動でしばらくするとエンストするがな。

クラスメートにはまだ教えてない裏技さ。

交渉の時に言ったる緑谷君、君に挑戦すると!!」

何が起こったのか分からない緑谷は声を漏らし、

火野チーム等も啞然としていた。

プレゼント・マイクも驚き実況すると、

それを解説してくれるよう、飯田はニツと笑いそう言った。

『逆転!轟が1000万!!そして緑谷、

急転直下の0ポイントーーーーー!!』

「突っ込んで!!」

「落ち着け緑谷!今は火野のチームもいる!

取るのはあちらを優先するべきだ!」

「火野君達のポイントじゃあ勝てるかどうか分からない!

こころしくない!轟君達のところへ!!」

「よっしゃ!!取り返そうデク君!絶対に!」

「麗日さん・うん!」

鉢巻を奪られ、緑谷は常闇にそう言うのと

麗日が指揮を上げ、轟チームに前進し出す。

「っ!俺達も前進する!」

そのやり取りについて見てしまった火野チーム。

いかんと後藤は無理矢理前進しようとするが

心操が動かず、止まったままでいた。

「おい心操!何してるっ!?!」

「:俺、今回の騎馬戦洗脳して緩く勝つつもりでいたんだよ。」

「だから何だっ!?!」

急に喋り出す心操に焦って後藤は叫ぶ。

「でもよ、後藤、お前と火野。

お前等に言われて:何か、今無性に心が湧いて来るんだ:!!

絶対、勝とうぜこの試合:!!」

「:。。ふっ、こんな時に何言ってる。」

「心操君…、よし!!奪るよ!!」

「おうっ。」「ああ。」「ウイ☆」

心操の言葉に思わず笑みが溢れる後藤、
そしてオーズは言うところ3人は頷き、駆け出す。

『残り時間ー、17秒!!』

緑谷ここで怒りの奪還!』

「とったあ!とったあ!!」

「待ってくださいその鉢巻違いますか!？」

「やられた…!!」

『そろそろ時間だ!カウント行くぜ!!』

エヴィバデイセイヘイ!!10:9:8!』

緑谷は鉢巻を奪ったがそのポイントは135。

この点数だと試合に勝つ事ができないと

緑谷は再度轟チームに突っ込む。

その間、カウンドダウンが始まり出す。

「上鳴!大丈夫かっ!？」

「だ、大丈夫だ…ウエ!？」

「上鳴!電気を…上鳴!？」

ショートしかけてる上鳴に安否を確認したのは

轟チームの誰でもなく、心操だった。

洗脳された上鳴は轟の声が届かず、その場に

止まっていた。

「火野!やれっ!!」

「オツケー!!上鳴君風に…!」

差別化!オーズ放電!!!」

BZZZZZ!!

「「「「「「「「「!!!」」」」」」

後藤の合図にオーズはクワガタヘッドから放電を放ち、その名の通り火野チームには電撃が当たらず轟チームは感電、緑谷チームはダークシャドウで何とかガードするが、隣の発目にあたっているのかビリビリと痺れていた。

「んだっ・コレエ…!!?」

いつの間にか空中から飛んできた爆豪も電撃を浴びて空中で痺れていた。

よく見ると爆豪の頭と首元には合計4つの鉢巻が巻かれている。

物間チームから奪い取ったのだろう。

「火野！行けっ!!」

「轟君！もろう！よっ!!」

「ぐっ…火野…!!」

「常闇君、僕達も!!」

「待て緑谷！発目が！」

「うえっふえふえふえ…！オーズの電撃・

痺れマステスウ…。」

「私が担ぐから！行って!!」

『タイムア………アップ!!!』

時間最中の乱戦、プレゼント・マイクの声がフィールドに響き渡った。そして騎馬戦は幕を下ろしたのだった。

No. 27 結果！そして！

『騎馬戦、終了だあー！！』

最後は白熱だったなお前等！じゃ、早速
上位4位チームの結果発表と行こうか！』

『1位！轟チーム！』

「……くそつ。(何とか1000万だけは死守できた……。)」
馬の3人から降りながら轟は小さく悪態を吐く。

『2位！爆豪チーム！』

「だああああああつ！！」

地面へと座り込み発狂する爆豪、

その背後からはチームの切島、瀬呂、芦戸が
駆け寄っていた。

『3位！火野チーム！』

「ああ〜取れなかったあ……！」

「……そんな事ない、結果オーライだ。」

「ふう……、熱くなりすぎた……。」

「ソレネ☆」

変身を解き馬から降りながら悔しがる火野、

後藤は順位に入れたからそう言うのと

背後で心操は若干悔しそうで青山は笑顔で共感する。

「……。あの……、ごめん……本当に……。」

4位の結果を言う前に緑谷はチームの3人に謝る。
動けなかった、奪えなかった。それを気にして
緑谷は顔も見ず下を向き、ただただ謝る。

「ベイビーちゃん……。」

「デク君デク君！」

「!？」

緑谷からホバー・ジェット外して受け取った発目は電撃を受けて故障してるのを見てシヨックを受けると落ち込む緑谷に気付き、背後を指差す。

それと同時に麗日も指差すと、そこには常闇がいた。「お前の初撃から轟は明らかな動揺を見せた。」

1000万を取るのが本意だったろうが……、そうは上手くいかないな。

それでも一本、警戒が薄くなった
頭の方
持ちPを頂いておいた。

緑谷、お前が追い込み生み出した轟の隙だ。」

そう言つて常闇のダークシャドウは啞えている

625ポイントを緑谷に見せた。

『4位！緑谷チーム！以上4組が！』

最終種目へ進出だああああ!!!』

「うわああああああ!!!」

同時にプレゼント・マイクが叫び

緑谷もまた、滝の様に湧き出る涙と共に崩れ落ちていた。

『それじゃあ1時間程の昼休憩挟んでから午後の部だぜ！』

じゃあな!!! オイ、イレイザーヘッド、飯行こうぜ……!』

『寝る。』

『ヒュー……』

マイクの電源を切り忘れたのか私言が入る放送が鳴り、

騎馬戦は無事終わり、昼休憩となった。

そろそろと会場から控室に戻るA組生徒等は

各々の反省点や褒めたりなどの会話をしながら

帰っていると火野はトイレに行きたくなり

別の入り口へと入っていく。

「はあ、スッキリい〜。」

火野は満面の笑みで出て手を洗い、廊下へと出ると

そこには爆豪がいた。

「…あ、爆豪君？君もトイ」

「……。」

火野が呼びかけると爆豪は珍しく発狂せず、
口元に人差し指を当て顎をくいっと後の廊下の
つき当たりを向ける。

何事かと思い恐る恐る覗いてみるとそこには
轟と緑谷がいた。

「あの…、話って…、何？」

早くしないと食堂すごい混みそうだし…えと…。
緑谷はもじもじと喋り出す。

どうやら呼び出したのは轟らしい。

轟は只ならぬその目付きで緑谷を睨むと喋り出す。

「気圧された。てめえの誓約を破っちまうほどによ。」

飯田も上鳴も八百万も麗日も常闇も…感じてなかった。

最後の場面、あの場で俺だけが気圧された。

本気のオールマイトを身近で経験した俺だけ…。

「それ…つまり…どういう…。」

「お前に同様の何かを感じたって事だ。」

なあ…：…オールマイトの隠し子か何かか？」

「…えっ、緑谷君隠しムゴウ!？」

「黙れ…!」

轟の言葉に火野は驚き声を出すと爆豪に

口を塞がれる。何とか気付かれずに済み、

緑谷も同様、驚き口を動かす。

「違うよ、それは…：…って言ってももし本当にそれ…!」

隠し子だったら違うって言うに決まってるから

納得しないと思うけど、とにかくそんなんじゃないやなくて…：…!

そもそもその…、逆に聞くけど…。

何で僕なんかにそんな…：…?」

言葉の筋立てられず乱れながら喋る緑谷に

轟は間入れず喋る。

『そんなんじやなくて』って言い方は、
少なくとも何かしら言えない繋がりがある、
って事だな。俺の親父はエンデヴァー。知ってるだろ。」

「っ！」

緑谷、そして隠れて聞いていた火野は
驚くと続けて轟は喋り出す。

「万年No. 2のヒーローだ。お前がNo. 1ヒーローの何かを持っ
てるなら俺は……、

尚更勝たなきゃいけないえ。

親父は極めて上昇志向の強い奴だ。ヒーローとして
破竹の勢いで名を馳せたが…、それだけに生ける伝説
オールマイトが目障りで仕方なかったらしい。

自分ではオールマイトを超えられねえ親父は、
次の策に出た：。」

轟は一旦区切ると再度喋り出す。

「『個性』婚、知ってるよな？」

「っ！」

「…！（まさか、轟君：。）」

轟の発言に緑谷、火野は驚き、
まさかと思いつながら轟は喋る。

「『超常』の時代が起きてから、第二〜第三世代間で
問題になったやつ…、自身の『個性』をより強化して
継がせる為だけに配偶者を選び…：結婚を強いる。
倫理観の欠落した前時代的発想。実績と金だけはある男だ…。
親父は母の親族を丸め込み、母の『個性』を手に入れた。
俺をオールマイト以上のヒーローに育て上げることで
自身の欲求を満たそうってこった。鬱陶しい…！
そんな屑の道具にはならねえ。記憶の中の母は
いつも泣いている…『お前の左側が醜い』と母は
俺に煮え湯を浴びせた。ざつと話したが、

俺がお前に突っ掛かんのは見返すためだ。
クソ親父の“個性”なんざなくたって……。
いや……、使わず一番になる事で、奴を完全否定する。」

「……」

緑谷、火野、爆豪はそれを聞いて下を俯く。
あまりに衝撃の家庭の事情の話に正直驚愕していた。
目指す場所は同じでも事情は人それぞれ。
それを改めて火野は奇しくも実感していた。

「……言いたくねえなら別にいい。」

お前がオールマイトの何であろうと

俺は“右”だけでお前の上に行く。：時間取らせたな。」

「……僕は、ずうつと助けられてきた。」

さつきだつてそうだ：僕は……

誰かに助けられてここにいる。」

轟はそう言つて立ち去ろうとすると緑谷が話しかけ
立ち止まる轟。

「オールマイト……彼の様になりたい……」

その為には1番なるくらい強くなきゃいけない。

君に比べたら些細な動機かもしれない……

他の皆に比べたら小さな理由かもしれない……

でも、僕だつて負けらんない。

僕を救ってくれた人達に応える為にも……!

さつき受けた宣戦布告改めて、僕からも、君達に勝つ……!

その緑谷の意気込みに轟は黙つて見つめ、
小さく頷くとその場から立ち去つて行く。

緑谷も後から立ち去ると、

二人がいなくなったのを確認し、火野と爆豪は
顔を出して出てくる。

「……なんか、聞いちやいけない事聞いてしまったかな……。
てか、爆豪君もあーゆー場面は空気読むんだね?」

「はあ!?読み殺すわ!!」

：ちつ、だが俺には関係ねえっ!

デクも!半分野郎も!お前も!!

俺が完膚なきまで叩きのめす!」

火野が眩き、爆豪を見て言う

爆豪は何か思ったのか舌打ちをし、

暴言を吐き捨ててその場から立ち去っていく。

火野は溜息を吐き、轟と緑谷の通った道を見つめ、

控え室へと向かって行った。

☆☆☆☆☆☆

昼休憩が終了し、一年生徒は会場に集まると

プレゼント・マイクが説明を行う。

『最終種目発表の前に予選落ちの皆へ朗報だ!』

あくまで体育祭!ちゃんと全員参加の

レクリエーション種目も用意してんのさ!

本場アメリカからチアリーダーも呼んで

一層盛り上げ……アリア?』

『なーにやってんだ……?』

『どーしたA組!!』

チアアア!!!

プレゼント・マイク、相澤は気づき、

A組女子を見ると何故かチアリーダーの衣装を着て

両手にはボンボンを持っていた。

「よっしゃあ!!」

「峰田さん上鳴さん!!騙しましたわね!!」

「ど、どうしたの皆その格好?」

「休憩中に峰田が午後は女子全員

応援合戦しなきゃいけないって相澤先生が言ってたって

言ってきたんだ……!ヤオモモが衣装だしてくれたけど

アホだろアイツら……。」

火野は聞くと耳郎が説明し、ボンボンを地面へ叩きつける。

恥ずかしがる女子等だが、葉隠は意外にも乗り気でした。

「まあ本戦まで時間空くし、張り詰めてもシンドイしよ。」

いいじゃん！ヤツタろ!?おらあああ！」

「透ちゃん好きね。」

ブンブンと腕を振り回す葉隠に蛙吹はツッコむ。

『さあさあ！皆楽しく競えよレクリエーション！』

それが終われば最終種目、進出4チーム総勢

16名からなるトーナメント形式!!

一対一のガチバトルだ!!』

「トーナメントか……！毎年テレビで見てた

舞台に立つんだあ……！」

「去年トーナメントだったっけ？」

「形式は違ったりするけど、例年サシで競ってるよ。な？」

「うん、そのバトルは白熱でいつも

見入ってしまうんだよねっ。」

プレゼント・マイクは気を取り直し、

残りの生徒等も集まってきた中、説明すると

切島が興奮し、芦戸は瀬呂に問いかけると

瀬呂は答え、火野に向け、火野もまた答える。

『それじゃあ組み合わせ決めのくじ引きしちゃうわよ。

組が決まったらレクリエーションを挟んで

開始になります！レクに関しては進出者16人は

参加するもしないも個人の判断に任せるわ。

息抜きしたい人も温存したい人も居るしね。

んじゃ1位チームから順にくじを引きなさい!』

ミッドナイトの指示により、騎馬戦で勝ち抜いた

上位16名が用意した箱から紙を取り、

ミッドナイトに渡していく。

素早く集計を終わらせてミッドナイトは
モニターを起動させ口を動かした。

「さあ！組はこうなりました！」

1 試合目	緑谷	V S	心操
2 試合目	轟	V S	瀬呂
3 試合目	常闇	V S	八百万
4 試合目	飯田	V S	兎目
5 試合目	芦戸	V S	後藤
6 試合目	火野	V S	青山
7 試合目	上鳴	V S	切島
8 試合目	麗日	V S	爆豪

「くそお！殆どA組ばかりか!!」

「まあ仕方ないよ鉄哲。私等は大人しく

見ておこう。どんな戦い方をするか

見て勉強するのも悪くないんじゃない？」

悔しがる鉄哲に拳藤はそう言って彼の肩に手を置き

他のB組等も一同頷いていた。

「…緑谷、か。」

「心操って確か…。」

心操、緑谷は互いは名を読み、そして見つめる。

心操は鼻を鳴らし、普通科の並びにへと帰って行く。

「…1 試合勝てばあいつとか。」

（火野、俺はお前に挑戦する…!）」

後藤は火野を見て拳に力を入れていた。

「…意外と早かったな。」

（来いよ緑谷、この手で倒してやる。）」

同じく轟もモニターを見てそう呟く。

「あ？麗日？」

「(ヒイイロー！)」

爆豪は麗日と最初に渡り合う事になり、
当の本人は背後で顔を真っ青にしていた。

「飯田ってあなたですか!？」

「ム？いかにも俺は飯田だ!」

「ひよー!!良かった、実はですね…!」

発目は飯田に駆け寄ると何やらコソコソ話を始め出す。

「青山君、お互いベストを尽くそう!」

「オーケー!☆チートの君でも負けないよ!☆」

火野は青山に握手を求めると青山は変なポーズを取りながらもその手を握っていた。

『よしそれじゃあトーナメントはひとまず置いて

イツツ束の間!楽しく遊ぶぞレクリエーション!』

プレゼント・マイクはそう言って、残りの種目の
準備へと取り掛かる。

格して、残りの競技は和気藹々と盛り上がり、
その時間はあっという間に過ぎて行くのだった。

NO. 28ガチンコ対決！始動！

『さあー最終種目の準備に取り掛かるぜえ！』

それまでは少しの間休憩しといてくれ！』

会場からプレゼント・マイクの声が響き、

観客はガヤガヤと騒いでいる中、

火野は前種目の借り物競争を終え、

水道で汗を洗い流す為、水を顔から浴びていた。

「火野。」

「…ん？…ちよつと待って…。」

背後から声を掛けられ、火野は洗い終え

タオルで顔を拭き振り返るとそこには心操がいた。

「心操君？…どうしたの？」

「…いや、ちよつと…、騎馬戦の時は…まあ、助かった。」

「あゝ、全然。むしろこつちが礼を言うくらいだよ。」

君の「個性」がなかったら鉢巻取れなかったし。

本当凄いい「個性」だよ！」

照れ臭いのか頭を掻きながら言う心操に

火野は笑顔で返す。すると、心操は真面目な表情になり

喋り出す。

「…騎馬戦の時もそうだけど、そう言われるのは

後藤を入れてあんたが初めてだよ。

俺の「個性」は昔から敵ライバル向きだった

よく言われてたからさ。…まあ、間接的に

言われるのは慣れっこだったから何とも思わなかったし、

そういう世の中だから、仕方ないって思ってた。」

「心操君…。」

「そりゃ、こんな「個性」他人だったら

悪用を思いつくだろうよ。でも、憧れちまったもんは

しょうがねえだろ…。だから、お前に言われて

ちよつと嬉しかったし…、久々に熱くなれた。

火野、ありがとうな。」

「…うん！こちらこそありがとう！」

火野と心操は握手を交わす。

「…このトーナメント。俺は俺なりのやり方で

戦うつもりだ。お前ともし、ぶつかることになったら、

その時は全力で来てくれ。手加減は無しだ。」

「分かった、お互い頑張ろう！あ、そうだ！」

火野は何か思ったのかゴソゴソとポケットを漁り

取り出し広げると心操に渡す。

「…何だこれ？」

「何ってパンツだよっ。」

「は…？パンツ…？何で…？」

「男はいつ死ぬか分からないからパンツだけは

一張羅で履いとけてよく爺ちゃんが言ってたんだ。

それは俺なりの声援。プラス戦別…かな。」

「…ぶっ、あははっ！これ、新品だよな？」

「なっ!?!し、新品だよ！履いたやつは流石に渡せないし！」

一応確認する心操に失礼なと言わんばかりに火野は言うど

笑いながら受け取る心操。

「お前は変わった奴だな本当…受け取っとくよ。」

心操はそう言って、振り替えり、立ち去って行った。

火野はそれを見送り、自身も会場へと戻って行く。

☆☆☆☆

「オツケー、もうほぼ完成。」

セメントスは自身の「個性」セメントを使って

フィールドにバトルリングを作り出し、

大体形が仕上がって来たのでプレゼント・マイクに合図を出す。

『サンキューセメントスー・ハイガイズ！』

アアユウレデイ!?色々やってきましたが!!

結局これだけガチンコ勝負!!頼れるのは己のみ!

ヒーローでなくともそんな場面ばかりだ!

分かるよな!!心・技・体に知恵知識!!

総動員して駆け上げられ!!』

プレゼント・マイクは叫び、観客は大いに盛り上がる。

そして、双方のゲートからは1試合目の

緑谷と心操がフィールドへと歩いて行く。

緑谷の方はひよつこりとトゥルーフォームの

オールマイトが覗いているのを発見する。

クラス用の観客席にいた火野は何か話してたのだろうかと思

いながらそれを見かけて思っていた。

『一回戦!!成績の割に何だその顔!』

ヒーロー科緑谷出久!!vs!序盤は見せ場なかったが

騎馬戦では火野オーズと共に活躍してた普通科!

心操人使!!ルールは簡単!相手を場外に落とすか

行動不能にする、後は『参った』とか言わせても

勝ちのガチンコだ!!怪我上等!!こちとら我らが

医療教師!リカバリーガールが待機してっから!!

道徳倫理は一旦捨てとけ!!だがまあ勿論命に

関わるよーなのはクソだぜ!!アウト!

ヒーローはを敵捕まえる為に拳を振るうのだ!』

歓声を浴びながらリングへと登って行く二人に対し

プレゼント・マイクは紹介&説明を行う。

その歓声の中、心操は緑谷に喋り掛けていた。

「…『まいった』…か。分かるかい緑谷出久。

これは心の強さを問われる戦い。

強く想う未来ビジョンがあるなら
なり降り構ってちやダメなんだ……。」

『そんじゃ早速始めよか!!』

レディイイイイISTART!!』

プレゼント・マイクは合図を出す

それでも尚心操は喋り続ける。

「騎馬戦、あのオーズを使わせてもらったが、

勝手に熱くなつて見苦しかったよ……。」

まあ、おかげでいい踏み台に

なつてくれて助かったけどな。」

「つ!!なんて事言うんだ!!……!!?」

「俺の、勝ちだ。」

心操の卑怯な笑みとその言葉に緑谷は激怒し、

反応して突っ込もうとした瞬間、

動きが止まった。

「デク君……!?!」

「ああ!緑谷!!忠告したじゃんか!?!」

『オイオイどうした?大事な緒戦だ、

盛り上げてくれよ!?!緑谷、開始早々……!?!』

完全停止!アホ面でビクともしねえ!!

心操の「個性」か!?!』

A組の観客席、火野の背後に座っている

上鳴が叫ぶ。騎馬戦の時に洗脳されたので

わざわざ緑谷に教えていたのだろう。

プレゼント・マイクもまさかの展開に実況しつつも驚く。

心操はわざと挑発させ良心の緑谷を

苛つかせて反応させたのだろう。

そのやり方に事前に聞いてはいたが火野は、

うわあ。と声を漏らす。

「…悪いな、卑怯でも何とでも言われても俺は構わない。

これが俺なりの「戦い方」だ。

『振り向いてそのまま場外まで歩いていけ。』

「…。」

『ああー！緑谷ジュージュン!!』

心操に言われるがまま、緑谷は無言のまま振り向き

リングの外へと歩き出す。

「み、緑谷君!!行っちゃダメー!!」

「あんなやり方漢らしくねえ!!」

「ブン、術中にハマったクソナードが悪い。」

「お前幼馴染だろ!?!緑谷を応援するべきだろ普通!」

「黙ってる!この勝負は友達ごっこなんていらねえんだよ…。」

葉隠が叫び、切島が言う。爆豪はそう返し、

上鳴が庇う。爆豪はそう言っただけで勝負を見届ける。

これは彼なりの戦い方。水を差す行為はいけないと思ったのか

火野は黙ってこの状況を見ていた。

「分かんないだろうけど…、こんな「個性」でも

夢見ちゃうんだよ。さア、負けてくれ。」

もうすぐ場外になってしまおう緑谷の背中を見て

心操は眩き、見届けていた。

だが、その時。

バキッ

「っ!?何…!」

「……………っ!!ハア!ハア…!」

緑谷の指先から鈍い音が聞こえると同時に

突風が巻き起こり、心操は身構える。

すると、緑谷は洗脳が解かれたのか

呼吸が荒くなり、心操へと振り返る。

『……………これは…緑谷!!留まったああ!?!』

「っ?!?緑谷君!?!」

「指が腫れ上がってるぞ…!」

「…暴発させたんか…!クソデク…!」

プレゼント・マイクは叫び、観席の火野、飯田は声を上げ、その指を見て気づいたのか爆豪は呟く。

「何で…、体の自由はきかないハズだ!」

何したんだ!」

心操は本音を兼ね問い掛けるが、緑谷は口を塞ぎ、心操へと近付いて行く。

「…何とか言えよ…。」

「…!」

「~~~~~!指動かすだけでそんな威力か!?

あのオーズといい本当羨ましいよ!」

「…!!」

「俺はこんな『個性』のおかげでスタートが

遅れちまったよ。でもよ、こんな『個性』でも!

褒めてくれる、ヒーロー向きな『個性』って

言ってくれる奴がいたんだ!!俺だってこんな所で

負けたくねえんだよ!なあ!?!」

心操は洗脳させようと緑谷に問いかけ続けるが

緑谷は返答せず、黙って心操に向かって歩く。

その足は徐々に早めていき、心操も焦りながらも

呼び続ける。

そして、緑谷は突っ込み、心操の胸ぐらを掴む。

「っ!!何か言えよ!!」

「っ?!?あああああっ!!」

心操は緑谷の顔面に拳を食らわす。

だが生半可な攻撃じゃあ緑谷は怯まず、

声を上げて心操を押しして行く。

「ぐっ!!:(場外させる気か!?)」

思ったよりも緑谷の力が強いのかなすがままの状態になり、その距離はどんどん縮められて行く。

ふと、心操の体操服のポケットから先程火野から貰ったパンツがはみ出ているのに気づき、心操はそれを見て、声を上げる。

「っ!!あいつに!背中押され・たんだ!!
負けるか、よおおお!!」

『心操!緑谷の押し出しを止めたあ!!』

いいぞお!初戦だからもう少しネバれー!!』

『盛り上げ重視かテメエ。』

押し止どめた心操にプレゼント・マイクは叫び相澤がツッコむ。

「お前が!出ろおっ!!」

「んぬう!!」

線が引かれてる前で心操は緑谷の押し出す力がないし、反応する緑谷は振り返るが、

心操は緑谷の顔を掴み、逆に押し出そうとする。

「あああああ!!」

「っ!!?」

だが、緑谷は負けずと声を上げて、

心操の腕と胸ぐらを掴み、勢いよく背負い投げをした。

リングに叩きつけられた心操の両足は

場外の線をはみ出していた。

「心操君場外!!緑谷君、二回戦進出!!」

『二回戦進出!!緑谷出久ー!!』

わあああああっ!!

審判のミッドナイトは手を振り、

プレゼント・マイクは勝利の緑谷の名を呼び叫んでいた。

殴られて鼻血を出しながらも緑谷は拳に力を入れて

その勝利を小さく噛み締めていた。

「クソ:。」

『IYAH A! 緒戦にしちや地味な戦いだったが!! とりあえず両者の健闘を讃えてクラッププアハンス!!』

clap clap clap clap

「雄英も馬鹿だな、あれ普通科か。」

「んー、戦闘経験の差はなー。」

「どうしても出ちまうもんなー、もったいねえ。」

悔しそうに起き上がる心操にプレゼント・マイクは言い、会場からは拍手が両者二人に送られていた。

その中にはプロヒーローが心操を評価している人達も何人かいた。

心操はそのままリングを降りようとすると

立ち止まり、緑谷に話しかけた。

「…結果によっちゃ、ヒーロー科編入も検討してもらえろ。」

緑谷、覚えとけよ?」

「え?」

「今回は駄目だったとしても、絶対諦めない。」

ヒーロー科入って資格取得して…、絶対お前等より

立派なヒーローになってやる…。」

「ーうん…あー!」

心操の言葉に緑谷は頷くと洗脳され、固まる。

だが、それは直ぐに解かれ、緑谷はキョトンとした顔で心操を見る。

「フツ、俺と話す人は構えるんだけどな…。」

あいつといい、A組は変わった連中ばかりだ。

そんなんじや直ぐに足を掬われるぞ。せめて、

みつともない負け方はしないでくれ。」

「心操君…、うん…あー!」

そう言われて緑谷は頷くと再度洗脳にかかり、

心操は鼻で笑いながら直ぐに解き、会場から

ゲートを通り、姿を消した。

☆☆☆☆☆☆

「緑谷君、お疲れ様。」

「隣空いてるぞ！」

「デク君お疲れ〜。」

「あ、うん。ありがとう。」

指を治しに保健室へ行き、戻ってきた

緑谷に火野、飯田、麗日は声を掛け、

緑谷は椅子へと座る。

そして、すぐに2試合目が始まろうとしていた。

『お待たせしました!!続きましたは〜、こいつらだ！』

優秀!!優秀なのに拭い切れぬその地味さは何だ!

ヒーロー科瀬呂範太!!』

「ひでえ。」

『V S : 2位・1位と強すぎるよ君！』

同じくヒーロー科轟焦凍!! S T A R T !!』

「まあ〜…、勝てる気はしね〜んだけど…、

つつても負ける気はね〜!!!」

合図が響くと同時に瀬呂は肘からテープを伸ばし

轟に素早く巻き付けるとそのまま

場外に向けて引っ張り投げ飛ばそうとする。

『場外狙いの早技!!この選択はコレ最善じゃねえか!?

正直やっちまえ瀬呂〜!!!』

勢いよく場外へと引きずられる轟。

だがその時。

「悪いな…!」

瞬間、轟は氷を、生成するとその大きさと範囲は

尋常ならざる程巨大な氷塊となり、会場をはみ出していた。

目の前の視界を氷で見えなくなるほどで

A組全員は驚愕していた。

「……………や、……………やり過ぎだろ…！」

「……………。瀬呂くん、……………動ける？」

「動けるはずないでしょ…！痛ええ…！」

ほぼ全身凍ってしまった瀬呂を見て、

同じく身体半分が凍ってしまったミッドナイトは

その返答でこれ以上の戦闘は不可能と判断し、

勝負の結果を言い渡した。

「瀬呂君行動不能!!轟君二回戦進出!!」

『と、轟焦凍!!凄まじい氷塊を瀬呂にぶつけ

見事勝利…!!やべーの領域超えてんぞこれ…!!』

びつくりしながらもプレゼント・マイクは勝敗を告げ

2回戦は圧倒的速さとその力の差を見せつけ

幕を下ろした。

「すまねえ、やり過ぎた。…イラついてた。」

「…ど、どんまい、どんまい。」

「どーんまい。」

「どーんまい。」

轟は左手で熱を瀬呂に当て、その氷はみるみると

溶け出していく。そして呆気ない瀬呂に対して

観客からは自然とドンマイコールが送られていたのだった。

No. 29 チャレンジャーの闘志!

『さあ！ステージを乾かして次の対決！』

『どどん行くぜー！』

轟の生成した氷を溶かし、元通りとなった
会場にプレゼント・マイクは叫び

盛り上がる観客と同時に3試合目が始まろうとしていた。

『攻防一体！ダークシャドウを従える暗き侍！』

『ヒーロー科！A組の常闇踏影!!』

『暗き侍…、悪くない。』

『vs!!万能創造！推薦入学もあってその才能は』

『折り紙付き！同じくヒーロー科！A組の八百万百!!』

『…』

『レディイイSTART!!』

『行け！ダークシャドウ！』

『アイヨッ！』

『つきや!?!』

開始の合図が響き、常闇はダークシャドウを使って
八百万へと突っ込ませる。

対して八百万はもたつきながらも盾を創造し、

ダークシャドウの攻撃を何とか受け止めるがよろけてしまう。

『オラア！』

『くうっ！創造の時間があれば…！きやつ!?!』

ダークシャドウの猛追に八百万は防戦となり

押されている一方だ。

『ダークシャドウ。』

『アイヨ！』

『…攻撃が止まった…?!今なら創造を…!』

『八百万さん場外!!二回戦進出、常闇君!!』

「えっ!?!」

常闇はダークシャドウを引っ込め、その隙に八百万は鉄の棒を創造し、構えるが…。

突然のミッドナイトの言葉に驚く八百万。ふと、下を見ると片足はリングの線からはみ出して降り、場外負けをしていたのだった。

「そんな…!?!何も出来ずに…!?!何も…!?!」

『圧勝!まさに圧勝!?!?!常闇のダークシャドウ!』

これっでもはや最強なんじゃねえの!?!?!?』

唾然とする八百万に常闇は一礼をし、リングから降りて行く。

八百万も俯向くまま、その姿は悔しそうにリングを降りて行った。

そしてプレゼント・マイクは常闇を高評価し、

3試合目もあつという間に幕を下ろした。

☆☆☆☆☆☆☆☆

『おっしやあとつとと次行くぜー!!』

ザ・中堅って感じ!?!ヒーロー科飯田天哉!

vs!サポートアイテムでフル装備!!

サポート科発目明!!』

4試合目の両者の説明を、する中。

飯田の格好をよく見ると発目と同じく

サポートアイテムがガッチガチに装備にされていた。

「ヒーロー科の人間はそういうの原則禁止よ?

無いと支障をきたす場合は事前に申請を…。」

「は!!忘れておりました!!青山くんも、火野君も

ベルトを装着していたので良いものと…!」

「彼等は申請しています!」

注意するミッドナイトに飯田は言い訳しながら謝る。

サポート科以外の生徒は「個性」ありきの道具は申請をすれば持ち込み可能。

青山も火野もベルトがなければ「個性」が使えないのでその辺は雄英は考慮してくれている。

「申し訳ありません！だがしかし！

彼女のスポーツマンシップに心打たれたのです!!

彼女はサポート科でありながら、『ここまできた以上対等だと思おうし対等に戦いたい!』と俺に

アイテムを渡してきたのです!この気概を俺は!!無下に扱ってはならぬと思ったのです!」

飯田が熱弁するとミッドナイトは顔を俯向き、鞭をピシヤンと鳴らせる。

「青臭っ!!好み!!」うひょーっ

『いいんかい…』

『まあ、双方合意の上でなら許容範囲…でいいのか…?』

顔を赤めらせミッドナイトの許可に

驚くプレゼント・マイクと相澤。

「発目さんてそんな事言う人なのかな…?」

「何か、俺も嫌な予感がしてきた…。」

観席の緑谷が言うど火野も顔を引き攣っていた。

二人は発目と共に行動していたので、共感したのだろう。

「フフフフ…（本当なら、

オーズと交えたかったのですが、今回は我慢して

目の前の彼を利用していただきましょう!）」

『んじゃ、気を取り直して、START!』

開始の合図が響き、飯田は発目に目掛けて突進する。

すると発目は右耳のヘッドホンから、

マイクを口元に伸ばし、声を上げた。

『素晴らしい加速じゃないですか飯田くん!!』

『はっ。』

「マイク？」

『普段よりも脚が軽く上がりませんか!』

それもそのはず!!そのレッグパーツが着用者の動きをフオローしているのです!そして私は

“油圧式アタッチメントバー”で回避も楽々!』

飯田、そして自身のサポートアイテムを説明しながら

飯田の突進を回避する発目。

彼女の視線は観客席にいるサポート会社の人達の反応を

“個性”の『ズーム』でハッキリと見ていた。

「くっ!発目君!どういうつもりだ!?!」

飯田は方向転換すると背中中のサポートアイテムが

その動作をカバーしてくれるよう作動する。

『飯田くん鮮やかな方向転換!!』

私の“オート balancer” あってこそその動きです!』

「やっぱり:。」

「あ、あはは、流石だなあの子:。」

休む事なく宣伝する発目に観席の緑谷、火野は同時に眩き、

麗日は頬が引き攣っていた。

アイテム解説付きの鬼ごっこはその後、

10分もの間繰り広げられ、

そして。

「ふー:。全て余す事なく見て頂けました。

少々心残りがありますが、満足です!!」

「騙したなあああああ!!」

汗を腕で拭き、彼女はリングの線を自ら踏み出し

場外へと行った発目に対し、飯田は叫んだ。

「すみません。貴方のこと利用させていただきました。

フフフフフフフ:。」

「嫌いだああ君:!!」

「発目さん場外!!飯田君二回戦進出!!」
ミッドナイトはこの状況でも顔色一つ変えず
勝敗を言い放ち、4試合目は発目のペースで
何とも言えない形となり、終了となった。

☆☆☆☆☆☆

『次々ー!あの角から何か出んの!?何か出るの!』

ヒーロー科!A組の芦戸三奈!!』

「うわあ〜!ちよつと緊張するう…。」

『VS!!騎馬戦ではその意外な知識で

勝利へと導いた策士!!それ以外は何も功績出せてない!

サポート科!後藤慎太郎!!』

「…。」

5試合目、芦戸と後藤のバトルが始まり

プレゼント・マイクにより紹介され二人は

リングの上へと立ち、両者は向かい合う。

観席の緑谷は気になったのか火野に話しかける。

「後藤君…だよな?彼どんな「個性」を使うの?」

「え?…そう言えば、後藤さんの「個性」聞いてないな…。」

「一緒の騎馬戦だったのに知らないの?」

「うん…。サポートアイテムを使う…しか言っていないし、

「個性」の事は何も言っていないから…。」

でも、あの人凄いや、一緒に組んでたチームの

「個性」をよく知ってるみたいだし、

あの人がいなかったら騎馬戦勝てなかったかもってぐらい。」

火野の言葉に麗日はへえ〜と言いい、試合に目を向ける。

芦戸は軽く準備運動を行なっており、

後藤はバースバスターを構えて警戒していた。

「後藤君、そのアイテムの威力は…。」

「大丈夫です。万が一人に当たっても

致命傷にはならない様に改造してあります。」

「よろしいーじゃあ始めましょうー！」

ミッドナイトは後藤のバースバスターを見て

確認を取り、試合の合図をプレゼント・マイクに委ねる。

『START!』

「後藤君…だっけ？頑張ろーねー！」

「敵に応援する前に、まず自分の勝敗を気にしたらどうだ！」

合図が響き、芦戸は後藤に言うの後藤はそう返し、

バースバスターの銃口を芦戸へと向け

トリガーを引いて放つ。

「うわわっ…！っど!?ひっどい！女子に向けて

銃は反則じゃないの!？」

「最初の一発は避けられると分かっていたからな。

それに俺はサポート科だ。アイテムを使うのは

前試合の同じサポート科の発目の時に見てただろ。

(残り5発…。)

『後藤へンテコなアイテムの銃攻撃！

芦戸ギリギリで避けたぜー！さっすがー！』

『“個性”を使わずしてサポート科の信念を貫くか。』

芦戸はその軽い身のこなしで側転し、銃弾を交わす。

プレゼント・マイクは叫び、相澤はそう言う。

「ならー…こつちも仕掛けるよー！」

あ・し・ど・み・な!!」

「っ!!」

芦戸は左手を突き出し、手から酸を後藤に向け放出するが、後藤は体制を低くし、横へと避ける。

「んんー！もういつちよー！」

芦戸は避けた後藤の足元へと酸を放出する。
が、後藤はバースバスターを自身の足元付近へと銃弾を放ち、地面は衝撃で割れ、その瓦礫が壁となり酸から身を守った。

「うわー、それアリっ!？」

芦戸三奈

個性『酸』

身体中から溶解液を噴出することができる！
溶解度に加え粘度も調節可能！
弱めの酸を地面に出せば滑って移動もできる
便利な個性だが味方に危険が及ぶ
ピンキーなどともあるぞ!!

「A組の『個性』は既に把握済みだ。(あと4発：。)」

「んもお！策士太郎め!!」

「後藤慎太郎だ！」

後藤はそう言いながらバースバスターを構えると
芦戸は両腕を突き出し、酸の塊を何発か放出させる。
後藤は銃弾を2発前方の両サイドの地面へ放ち
瓦礫が飛び散り、全ての溶解液を瓦礫に付着させ
身を守りながら芦戸に向け突き走る。

「来たっ!?あれは当たりたくない!!」

「(残り2発：！後方に退がるか：！だが、) 予定通りだ。」

芦戸は足から酸を放出させ、後方へ滑る様に
身を退けるが、後藤はその残り跡を利用し、
芦戸と同じく滑って追いかける。

「ええ!?ちよつと真似しないでよー!!」

「弱めの酸ならお前と同じく滑っても問題ないはずだ！」

それより、そんなに後ろに下がりすぎていいのか？」
「えっ？」

後藤に言われ、芦戸は振り向くともうすぐ
フィールドの線へと到達する勢いで滑っていた。

「わっ!?やばっ！」

「遅い!!」

「きゃあっ!!」

芦戸は避けようとするが、後藤はそれを逃さず、
滑つてた勢いを利用し、地面を蹴り、
芦戸にタツクルを食らわせる。

ぶつかつた芦戸はそのまま場外の外へと飛ばされた。

「芦戸さん場外!!後藤君二回戦進出!!」

『芦戸場外!後藤見事な戦略で追い詰め勝利ー!』

あの銃地面挟れてたけどひよっとして凄いアイテムなのかー!

ともあれサポート科初進出だー!!』

『アイテムは身を守るだけに使っていた。

それよりあいつは相手の“個性”と行動を利用し、

無傷で勝利……。とんだ冷静さと分析力だ。』

ミッドナイトに続きプレゼント・マイクは

勝敗を言い渡すと相澤は解説をする。

「いったたあーっ。あー負けたあー!」

「勝つか負けるかの試合だ。そんな気持ちで

勝ち進める程、世界は簡単じゃない。

(4発使ったか…。俺もまだまだだな…。)」

悔しがる芦戸に後藤はそう言い残し、

リングから降りて行った。

「凄いなあの少年…。」

「ありやもうヒーロー科の方がいいぞ。」

「あの分析力、ウチにもってこいだ!」

観客のプロヒーロー達はそう言つて後藤を評価していた。

☆☆☆☆

― 出場者用、控え室 ―

「いやあ、流石ですな―！」

バースバスターの出力を下げて自分への

衝撃を抑えつつ、相手の「個性」や行動を分析して

見事勝利！同じサポート科として

鼻が高くなるってやつですな―！」

「おまつ…!?…もうすぐ別の出場者が来る。

早く出るぞ。」

控え室に荷物を取りに来た後藤はドアを開けると

発目が喋りながら声をかけてくる。

後藤はため息を吐きながらバックを取ろうとすると

発目は声をかける。

「会長から受け取ったベルトは

使わないんですか？」

「…。」

「言ってみましたよね？『是非オーズと戦った

データが欲しい―！』って。」

「分かってる。出来るだけ、内密にしたいんだ。

「メダル」を使うシステムは…。時が来れば使う、

その為にこの体育祭に出場したんだ…。」

珍しく発目は真剣な表情で後藤に尋ねると

後藤はバックを強く握り、控え室から出て行く。

その顔は暗く、まるで命令に動く

精が感じられない目をしていた。

☆☆☆☆☆☆

『よっしゃあーコレだろ試合つつたらー！』

第6試合!!そのベルトで変身しないの!?

ヒーロー科!A組の青山優雅!!』

「ボンジュール☆」

『VS!!そのベルトで本当に変身!!』

変幻自在のタトバ!!同じくヒーロー科!

A組の火野映司!!』

「タトバは変幻自在じゃないんだけど…まあいつか。」

6試合目が始まると観客は今までにないくらい盛大に盛り上がった。

「うわっ!凄い…!」

「な、何であいつこんな盛り上がってんだよ!?!」

「オーズドライバーを装着して三枚のメダルを使い、

多彩なフォームチェンジができる火野君。

誰もが妄想し、憧れたんじゃないかな?

“あんなヒーローになつてみたい”つて。」

「そうね、今思えば火野ちゃんは、

子供の時に憧れたテレビのヒーローみたいなものだわ。」

尾白、峰田が驚くと緑谷に続いて蛙吹がそう言つて

リング上の火野を見る。

火野は三枚のメダルを両サイド、真ん中へと順に

ドライバーへ嵌め込み、右腰のオースキヤナーを取り出し、

カツコ良くポーズを決め、スキヤンした。

「変身!」

タカ!

トラ！
バッタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

ワアアアアッ!!!

『くうー！カッコ良く変身しやがって

羨ましい。個性だ。な本当!!

さあ両者！準備はいいな!?!盛り上げてくれよ!?

レディイイイSTART!』

観客は盛大に盛り上がり、開始の合図が響く。

「行くよ、青山君！」

「ウイ☆だ・け・ど！☆僕が勝つよ！」

「先手必勝ンンン！☆」

構えるオーズに青山は両手を頭の後ろに下げ

お腹を突き出すとそのベルトからレーザーが射出される。

「おっと！」

オーズはそれを難なく避け、青山へと攻め入る。

「ンン！☆ンンッ！☆」

青山は負けずとレーザーを射出させるが

オーズは避けまくり、すぐに間合いへと入り込む。

「ゼロ距離なら！☆」

「そうは行かないよっ！」

オーズはそう言っつて、その場を軽くジャンプし、青山の背後へと飛び込む。

「ハアッ！」

「オウウツ!!?」

背中からオーズは蹴りを食らわすと

バツタの脚力相まって青山は軽く吹っ飛ぶ。

『背中からの一撃いいいい!!』

青山飛んだー!!これはもう

勝敗決まったんじゃねえのー!!?』

「こ、腰があく…!?」

でも！僕だって負けないよ!!☆

ンフンツツ!!☆」

宙を舞う青山はそう言うと、威力を溜めた

レーザーを射出し、オーズに背中を向けたまま

突っ込んできた。

『青山！レーザーを打ってオーズに突っ込むー！』

こりやまるで人間ミサイルだー!!』

「どうだいオーズ君！☆名付けて

〴〵カウンター・トウー・レー」

「よつと。」

喋りながら突っ込んで来る青山だが、

オーズはそれをひらりと交わすと、

青山はその体制のまま場外へと突き進み

壁に激突した。

「青山君場外!!火野君二回戦進出!!」

『火野オーズの勝利ー!!この勝敗望ましー！』

そしてあんま活躍見れなかった俺悔しー!!』

『韻踏むな。』

ミッドナイトは言い渡し、プレゼント・マイクは

何故か韻踏ながら勝敗を宣言すると相澤がツツコむ。

「あ、青山君大丈夫っ!」

「へ、平気さ…☆流石だねオーズ君…！

僕の、か・ん・ぱ・い・ダヨ☆」

「青山君…:。」

変身を解き、壁から青山を引つ張り出すと

笑顔で青山はそう言っていた。

が、彼の顔は徐々に青ざめ始める。

「どうしたの？」

「…漏らしちゃった☆」

No. 30 頑張れお茶子!

「ふう…。」

「あ、火野君お疲れ様…。」

「ああ、麗日さ…うわ!?

どうしたの眉間に皺寄せて!?

「眉間? あ…ちよつとね。緊張がね、眉間にきてたね。」

青山とのバトルが終わり、控え室へと戻ってきた

火野は先に入っていた椅子に座る麗日と鉢合わせとなるが眉間を寄せ強張った目付きになつて麗日を見て

驚く火野。

「…。そっか、麗日さんの相手、爆豪君だもんね。」

「うん、超恐い。」

正直に言う麗日。相手は戦闘に置いては

A組の中でも屈指の実力者。そしてあの性格は例え女性だろうと容赦はしないだろう。

火野は何か対策ないかと思つたが

麗日はそのまま口を動かす。

「でもね、飯田君や、火野君の

あのやつとか見ててね…。」

「あのやつ?」

「麗日さんっ!」

麗日の言葉に首を傾げると突然緑谷が扉を開けて現れる。

「デク君? 皆の試合見なくていいの?」

「うん! 大体短期決戦ですぐ終わって…あ、火野君。

試合お疲れ様っ。レーザー避けるの凄かったよ!」

「あ、うんっ。ありがとう。」

ところで、緑谷君どうしてここに?」

火野に気付き、緑谷は声をかけると火野は

どうしてここに来たのか尋ねると
一冊のノートを麗日に差し出す。
それはいつも緑谷が相手の特徴や「個性」の
メモを取るノートだった。

「僕は麗日さんに沢山助けられたから、
少しでも助けになればと思つて……、

麗日さんの「個性」でかっちゃんに対抗する策、
付け焼き刃だけど考えてきた！」

「凄い緑谷君！これなら爆豪君に勝てるかもしれないっ。」

「ありがとうデク君……、でもいい。」

「え？」

緑谷はそう言う。流石に心配だっただろう。

爆豪と幼馴染な上に分析が得意な緑谷なので

火野は喜ぶと、麗日はそれを断つた。

「デク君は凄い！どんどん凄いとこ見えてくる。

騎馬戦の時……、仲のいい人と組んだ方が
やりやすいつて思つてたけど、今思えば

デク君に頼ろうとしたかもしれない。

だから、飯田君が「挑戦する！」つて……、

火野君が「君に勝つ！」つて……。

二人がそんな事言つてて、

本当はちよつと恥ずかしくなつた……。

「麗日さん……。」

「う、麗日さん！俺本当は緑谷君と組もうとしたんだっ。

でも心操君のおかげで……。」

「そのおかげで、デク君と戦えた。……実際そうでしょ？」

「それは……。」

麗日の言葉に火野は言い訳をするが

掻い摘んで言われ、黙り込んでしまう。

「ありがとう火野君、緑谷君……。でも大丈夫。

皆将来に向けて頑張つてる！そんなら皆、

ライバルなんだよね…、だから…。」
麗日はそう言って立ち上がり、扉の前へ移動すると
緑谷と火野に向かって振り返る。

「火野君、勝ったら準決勝で！」

デク君は！決勝で会おうぜ！」

麗日はそう言ってグツジョブをする。

が、その手は少しだが震えていた。

ニコリと無理矢理笑顔を作った麗日は

緑谷と火野に見せ、その部屋から出て行った。

☆☆☆☆☆☆

『さあー！第7試合！A組同士の闘い！！』

序盤は上鳴が押していたが！男気ど根性切島！

耐え抜いて耐え抜いたー！！』

「お、お前電撃に耐えられるんかうえ…!？」

「はーっ！こんなモノか電気はー!？」

火野達が控え室にいる最中、7試合目の

上鳴と切島がガチンコバトルを繰り広げていた。

プレゼント・マイクの言う通り、

上鳴の無差別放電をくらったのか切島の身体の

あちこちが焦げてはいるが、当の本人は

びくともしていない。電気を出し過ぎて

阿呆になりかけてる上鳴に、切島は身体を硬化させ、

突っ込んで行き、一気に懐へと入り込む。

「っー！ちよっとは効けっっーの!!」

「————!!効か!!ねえ————!!」

「はぶう!!?」

上鳴は最後の力を出し切り、無差別放電を至近距離で放出させるが、切島は押し切って上鳴にボディーブローを打ちかまし、見事にそれは入り、上鳴はその場で膝をつき、倒れ込んだ。

「う、うえ〜い……。」

「上鳴君行動不能!!二回戦進出、切島君!!」

『決まったー!!切島!重いボディーブロー!』

男は拳で鼓舞しろってか!?ププー!!』

『おい、一人で何笑ってやがる。』

上鳴は阿呆になりながら気を失い、

ミッドナイトは言い渡し、プレゼント・マイクは

勝敗を宣言するが、なぜか自身の発言にツボったのか

笑い出し、相澤はツッコむ。

「わり、大丈夫か?上鳴。」

「う、うえええい……。き、効いたうえ…。」

俺の負うえだうえい…。」

「お前の放電も、……。かなり痺れたぜ。」

「青春!!イイネー!!」

上鳴に肩を貸す切島、その二人の会話に

ミッドナイトは鼻血を吹きながら喜んでいた。

☆☆☆☆

「次、ある意味最も不穏な組ね。」

「ウチ、なんか見たくないな…。」

歓席に戻った火野と緑谷は席に座ると

8試合、1回戦の最後の試合が行われようとしていた。

蛙吹と耳郎が言う様に、周りのA組のその表情は

決して楽しいとか高揚感とかそういうノリではなかった。
そして、両者がリングへと上がるのを確認し、
プレゼント・マイクが紹介する。

『一回戦最後の組だな…。中学からちよつとした有名人！』

堅気の顔じゃねえ、ヒーロー科！A組の爆豪勝己！！

VS！ぶっちゃけ俺こっち応援したい！！

同じくヒーロー科！A組の麗日お茶子！』

「お前浮かす奴だな、丸顔。退くなら今退けよ。痛えじゃ済まねえぞ。」

「まるっ…！」

爆豪は睨み、麗日へ忠告をする。

『START!!』

「速攻!!退くなんて選択肢無いから！」

「…じゃあ死ね。」

だが麗日は開始と同時に低い体勢で飛び出し、

一気に距離を詰めるが、爆豪は爆破で迎撃し、

麗日はモロに直撃、その衝撃で煙が舞い、

麗日は煙の中へと包まれ姿が見えなくなっていた。

「くうああ!!爆豪の野郎!!」

マジにやってんじゃねえか！俺そっちの趣味ねえんだよお！」

「お前黙ろうか峰田君？」

歓席で見ていた峰田の発言に

いい加減鬱陶しいのか怒り気味の火野が言う

と峰田はすんなりと縮こまる。

爆豪は煙の中を警戒していると、

正面から麗日の体操服が動いてるのを確認し、

「押さえようと手を伸ばす。

「ナメっ…!!」

爆破して取り押さえるが本人は違和感を感じたのかすぐに爆破を止めると、それは麗日の上着だった。

『上着を浮かせて這わせたのかあ！』

よー咄嗟にできたな！ninjaだ！』

プレゼント・マイクの言葉と、背後に回り込んでいた気配に気付き、爆豪は後ろに向かって咄嗟に爆破させ、

麗日を吹っ飛ばす。

「わっ…たっ…!!くくおらああ!!」

「おっせえ!!」

リング上を転がる麗日だが直ぐに起き上がり

低い体制で突っ込むが正面から来る戦法で

爆豪は爆撃し、麗日を再度吹き飛ばす。

『麗日間髪入れず再突進!!』

「まだまだア!!」

『休む事なく突撃を続けるが…、これは…。』

何度も何度も攻めては吹き飛ばされを

繰り返しており、プレゼント・マイクはそう言う

ヤケを起こしたと思ったのかプロヒーローの1人が

立ち上がり、声を上げた。

「おい!!それでもヒーロー志望かよー！

そんだけ実力差あるなら早く場外にでも放り出せよ!!

女の子いたぶって遊んでんじゃねーよ!!」

「そーだそーだ!」

プロヒーローがそう言うのと次第にそれは

広がり、一部の観客席からブーイングのコールが鳴り出す。

『一部からブーイングが!しかし正直俺もそう思っ!』

わあ肘っ!何スーンだ!』

『今遊んでるつつつたのプロか?何年目だ?』

プレゼント・マイクも混ざって言おうとするが、

突然先程から黙っていた相澤がマイクを奪い取り、最初に声を上げたプロヒーローへと問いかけ説教を始める。

『シラフで言っただけならもう見る意味ねえから帰れ。』

帰って転職サイトでも見てろ。ここまで上がったきた相手の力を認めてるから警戒してんだろう。

本気で勝とうとしてるからこそ、

手加減も油断も出来ねえんだろが：！』

そう言われ、ブーイングしていたヒーローは

ピタリと止め、最初に声を上げていたプロヒーローは

俯きながら席へと座り、その試合を黙って見ている。

その言葉を聞いた火野は麗日を見ると

彼女は立ち上がり、「まだやれる！」と言わんばかりの表情をしていた。

「そろそろ…、かな…。」

ありがとう爆豪くん…、油断してくれなくて：！」

「あ…：？」

麗日はそう言って両指を合わせて「個性」を解除する。

すると、何かが飛来してくる音が聞こえ、

爆豪を入れ観客の全員が上を見上げると、

大量の瓦礫が勢いよく降り注いでいた。

『こ、これは流星群……！！！！』

『気づけよ。』

「っ！低姿勢で突進し続けたのは爆豪君の

視線を下に向かせる為：！でもって爆豪君の爆破で

飛び散った瓦礫が煙で遮られ、尚且つ突進で

そつちに注意が逸れたんだ：：：！」

「そんな捨て身の策を…：！麗日さん！！」

観席にいてその瓦礫の飛礫を見ながら火野が言うと

緑谷は驚き、リング上の麗日の名を叫ぶ。

「勝あアアアっ！！」

降り注ぐ瓦礫の中、麗日は爆豪に突っ込んで行く。

回避をしようにも、迎撃しようにも、この状況は
何処かで隙が生じるはず、そう思っていた。が。

BOOOM!!

「!!」

爆豪は左手を押さえながら勢いよく真上へ突き出すと
広範囲の爆撃を放ち、瓦礫は全て木端微塵となり
消し去ってしまった。

その衝撃で麗日も飛ばされリング上を転がる。

「デクの野郎とつるんでつからなてめえ。」

何か企みあるとは思ってたが…、危ねえな…!」

「そ、んな……一撃で……!?!」

『会心の爆撃!!麗日の秘策を堂々…!』

正面突破!!』

「づづ……!!」

目が空になり、满身創痕になりながらも麗日は
立ち上がる。それを見て爆豪はニヤリと笑い
両手を広げ威嚇する。

「いいぜー…っから本番だ、麗日!」

「…!! (全く通じんかった…それでも!!)」

捨て身の策が破れても尚、麗日は爆豪に触れようと
突っ込む、が。突然麗日は膝から崩れ落ち、
その場に倒れてしまう。

「ハッ!ハッ!んのっ…!身体言う事…!きかん…!

まだっ…父ちゃん…!!」

「…許容重量限界…!」

這いずろうと身体を動かすが徐々にその行動も鈍くなり、

ミッドナイトは爆豪に待てと手で指示を出して
麗日へと近寄る。

それを見ていた緑谷が呟くと、

ミッドナイトは立ち上がり言い渡した。

「麗日さん…行動不能。一回戦進出、爆豪君！」

…搬送ロボ、早くリカバリーガールのところへ。」

『アイノウ。』

「…！」

「緑谷君…。」

ミッドナイトは搬送ロボを手配すると迅速に

タンカーへと麗日を乗せ、そのまま運ばれていく。

緑谷はそれを見て立ち上がると無言のまま

観席から離れ降りて行った。

『ああ麗日…：ウン、爆豪一回戦とつば…ハア。』

『ちやんとやれよやるなら…。』

『さあ気を取り直して、一回戦が一通り終わった!!』

ちよつと休憩挟んだら早速次行くぞー!!』

『私情すげえな。』

分かりやすくテンションの下がったプレゼント・マイクに

相澤が言うのと直ぐに気持ち切り替えてそう言っていた。

爆豪は黙って振り返り、リングから降りて行くその姿を

火野は拳を強く握りながら見届けていた。

☆★☆☆

「おーう、何か大変だったな悪人面！」

「組み合わせの妙とはいえ、とんでもない

ヒールっぷりだったわ、爆豪ちゃん。」

「うるっせえんだよ黙れ!!フン!!」

試合から戻ってきた爆豪は早速A組の生徒等に

とやかく言われ、キレ気味に勢いよく席に座り込む。
「…おい三色野郎。テメーあの丸顔と一緒にいただろ？」

デクは教えてねーって言ってたが、
テメーは何も言ってるねえよな？」

「…俺は何も言っていないよ。」

あれは麗日さん自身の戦略だと思う。

…流石の爆豪君も翻弄されちゃったみたいだね。」

「ケツ!!……………焦ったわっ。」

火野に問いかけそう答えると爆豪は小さく呟いていた。

☆☆☆☆☆☆

『さあ…小休憩は終わったな!』

始める前に先ずは現在の結果ご覧いただきこーう!!』

プレゼント・マイクがそう言うど

モニター画面に映像の文字が映し出される。

トーナメントの現在の結果だ。

第二回戦

1 試合目 緑谷VS轟

2 試合目 常闇VS飯田

3 試合目 後藤VS火野

4 試合目 切島VS爆豪

『次の試合は勝ち上がったこの8名!!』

一体全体誰が勝ち上がるかー!!』

さあ、そろそろ初めて行こうか!

エヴィバデイセイハイ!!』

プレゼント・マイクが叫ぶと観客は

『イエーイー!』と答え、第2の試合が開幕された。

麗日と爆豪とまでは言わないが、不安を漂わせるその試合を火野達は見ていると保健室から戻ってきた麗日がやって来る。

「二人まだ始まったらん？」

「うら・・」

「見ねば。」

「目を潰されたのか!!!」

早くリカバリーガールの元へ!!!」

飯田が声を掛けようを見ると麗日の目は赤く腫れ上がっていた。

「行つたよ、コレはアレ、違う。」

その言葉に火野は察したのか声を掛けず

黙ってリングを見てみると、麗日は隣の席に座り、

口を動かした。

「…火野君、ごめん…。負けちゃった。

これじゃあ準決勝で会えないね…。」

「…ううん、麗日さん本当よく頑張つたよ。

…次があるさつ。それに、麗日さんの戦い

俺にとつては無駄じゃあないかもねつ。」

「え?…それってどういう…。」

麗日が尋ねようとするやと突然観客が盛り上がる。

その視線の先、リング上に上がって来るのは、

轟と緑谷だった。

『今回の体育祭、両者トップクラスの成績!!

まさしく両雄並びたち今!!緑谷対轟!!

レディイイイ!!START!!』

「行くぞ…!!」

「つ!!SMAAASSSHHH!!!」

合図が響き、轟は足元から凍りを生成し、
緑谷へと出してきた。

緑谷はすかさず、腕を前に出し、
デコピンの要領で指に力を入れ放ったのだった。

No. 31 その目は何を見る！

『おオオオオ!!緑谷!!』

轟の氷を破ったああああ!!』

「……やっぱそう来るか。」

「……っ!!」

緑谷の“個性”の超パワーにより

轟の氷は砕かれ、その衝撃の風は冷気となり

客席に押し寄せる。肌寒い空気が漂う中、

緑谷は中指が赤く腫れ上がり言葉にならない声を上げ
その手を押さえていた。

再度、轟は氷を生成しぶつけようとするが

緑谷は再び指を弾き、氷は砕け散る。

「SMASH!!」

『ま……た破ったあ!!』

「ちいっ……!」

再び氷を破られる轟だが追い討ちをかけまいと

何度も氷をぶつ放す。が、それを緑谷は次々と

指を犠牲にしながら超パワーで砕く。

緑谷の手指は見るに耐えかねない程血塗れになるが

彼の目は何か打開策がないかと考える様な目をしていて。

怪我の状況でも考えまいとするその意気込みに

火野は圧巻して見届けていた。

「やっぱ轟はすげえなっ。強烈な範囲攻撃を

あんなポンポン出せるなんてよ。」

「ポンポンじゃねえよナメんな。」

「え?」

その様子を見て切島が呟くと珍しく爆豪が反応し、

そのまま喋り出した。

「筋肉酷使すりゃ筋繊維が切れるし、

走り続けりや息切れる。『個性』だつて身体機能だ。奴にも何らかの『限度』はある筈だろ。」

「考えりやそりやそつか…。」

じゃあ、緑谷は瞬殺マンの轟を耐久戦に持ち込んで、気をうかがつてゐることかつ。」

火野もその言葉を聞いて自身の手を見つめる。

オーズとなつて驚異的な力を発揮できるが、

言つてしまえばそれはベルトとコアメダルの力に寄つて発揮できる力だ。他の生徒も同様で、

普段使える『個性』は生身では限度があり、

コスチュームで許容の力をセーブし、

それをパワーアップする事だつて可能。

今回の体育祭は生身でどこまでやれるかをも

もしかすれば見定めているのかもしれない。

『轟、緑谷のパワーに怯む事なく近接へ!!』

「つぶな…!!」

プレゼント・マイクが叫び、火野達はリングを見ると

氷を生成した轟は緑谷にぶつ放し、破壊されると

すぐに氷を生成し、その氷を登つて行く。

そして緑谷の真上から飛んで攻撃しようとする。

しかし、緑谷は間一発で横へ飛んで回避するが、

轟はすかさず空中の緑谷に氷をぶつ放す。

これは避けきれまいと誰もが思ったその時。

先程とは比べ物にならない衝撃が走り、

氷は砕かれ、観客に風圧が押し寄せる。

「…さつきより随分高威力だな。近づくなつてか。」

「うづう…!!!」

その威力に轟も吹き飛ばされそうになったのか

背後に氷を作り出し、壁となり衝撃から押し止まっていた。

土煙が晴れるとそこには右腕を負傷させて呻く緑谷がいた。

恐らく腕全身を使つて氷を打ち砕いたのだろう。

「守って逃げるだけでボロボロじゃねえか。

悪かったな。ありがとう緑谷。

お陰で…奴の顔が曇った。

その両手じやもう戦いにならねえだろ。

終わりにしよう。」

轟は客席にいるエンデヴァーを見ながらそう言うど

緑谷の顔付きと動きが変わる。

「どこ見てるんだ…!!」

「っ!!」

「SMASH!!」

「ぐっ…!!?」

緑谷は腫れ上がった指を弾き、衝撃波を放つ。

轟は吹き飛ばされるが、すぐに氷を背後に生成し、

何とか線の前へと踏み止まり、場外負けを免れる。

「てめえ…何でそこまで…!!?」

「震えてるよ、轟君…。」

「っ!!」

ボロボロになってまで抗う緑谷に轟は感情が

露わになりかけ、問い掛ける。

すると緑谷はそう言って轟は自身の右手を見ると

本人も分かっていたであろう、*“個性”*は身体能力。

氷を使いすぎて体温が低下し、震えていた

その手を押さえると、緑谷が喋り出す。

「*“個性”*だって身体機能の一つだ。君自身冷気に

耐えられる限度があるんだろう…!!?で、それって

左側の熱を使えば解決できるもんなんじゃないのか…?

…っ!!皆…、本気でやってる!勝って…!

目標に近づく為に…っ、一番になる為に!

半分の力で勝つ?!まだ僕は君に、

傷一つつけられちやいないぞ!!」

緑谷は一旦区切り、その腫れ上がる右手をバキツ、グチツ!と骨と血が擦れる様な音が鳴り、その拳を握りしめて叫んだ。

「全力でかかって来い!!!」

「何のつもりだ…!?全力…?」

クソ親父に金でも握らされたか…?イラつくな…!」

その言葉に苛立った轟は接近戦に持ち込もうと突っ込んで行く。負傷した緑谷にはもう拳を振るう力が残ってないと判断したのであるが、それは間違いだった。緑谷は腫れ上がった拳を轟の腹に食らわせ防御しなかった轟は吹っ飛んで行く。

『モロだあー!!生々しいの入ったあ!!』

「ぐうう…!!」

「くっ…ゲホッ!」

僅かに触れられたのか右腕が凍らされている緑谷だが、それ以前に両腕が負傷し、尚且つ今殴った拳に激痛が走ったのか呻き声を上げる緑谷。

轟も起き上がり殴られたお腹を摩りながら咳き込む。

そして、轟は再び氷を生成し緑谷に

氷結攻撃をしようとするが、その速度は格段に落ちており

緑谷は横に飛んで回避する。

「氷の勢いも弱まってる…!ぐっ!うう!」

「っ!」

緑谷は指を弾こうとするが、もう指が動かないのか今度は親指を口に引っかけ、その超パワーを放った。

「SMASH!!!」

「っ!!何でそこまで…!!」

氷で少しの壁を作りガードするが、轟は

何か焦りを感じたのか緑谷に問い掛けると、
緑谷は必死に答えた。

「笑って、応えられるような、カッコいいヒーローに……！
なりたいたんだ！！だから全力で！やっつてんだ皆！

君の境遇も君の決心も、僕なんか

計り知れるもんじゃない……！でも……全力を出さないで

一番になつて完全否定なんて、

ふざけるなつて今は思つてる！」

「うるせえ……！！」

「だからっ……！僕が勝つ！！君を超えてっ！！」

緑谷の言葉に轟は何か思い返したのか

氷を出す速度が鈍り、緑谷はそう言い放つて

轟を再び殴り飛ばす。

「っ……俺は……親父を……」

「君の！！力じゃないかっ！！！！」

「っ!!?」

何か言おうと、立ちあがろうとする轟だが

緑谷はそう叫ぶ。すると轟はある言葉を思い出していた。

それは幼い頃オールマイトを見ていた頃の母の言葉だ。

ヒーローにはなりたいたいでしょ？

良いのよ、お前は。血に囚われることなんかない。

なりたいた自分になつて良いんだよ……」

「俺は……」

ゴオツ

「アツチチ……!!?」

『これは……!!?』

突然、轟の身体が燃え上がる。
その熱に近くにいた緑谷は引き下がっている。

「勝ちてえくせに………ちくしょう……」

敵に塩を送るなんて、どっちがフザけてるって話だ……！
俺だって、ヒーローに……！！」

「っ！炎が……轟君……！本当に凄いや……緑谷君……！」

そう言つて轟は炎を出すと凍りついていた
身体の水が炎によって溶け出していく。

それを見ていた火野は戦闘で使わないと言つていた
轟を見て、ソレを使わせた緑谷を褒めていた。

「焦凍オオオオ！！」

その時、急に客席から男性の声が轟く。

No. 2ヒーローのエンデヴァーだった。

「やつと己を受け入れたか!!そうだ!!いいぞ!!」

ここからお前の始まり!!俺の血をもつて

俺を超えていき!!俺の野望を果たせエエ!!」

ズンズンズン!と客席から階段を降りて

エンデヴァーは轟に告げる……が、轟は緑谷しか見ておらず

その場は何とも言えない空気となり、

プレゼント・マイクが口を動かした。

『エンデヴァーさん急に激励か……?親バカなのね。

付き合いねーから意外だぜ。』

プレゼント・マイクがそう言ってるが、

火野は目を逸らさずリングの二人に注目する。

すると、緑谷は轟の炎を見てその口は笑っていた。

「凄……！」

「何笑ってんだよ。その怪我で……この状況でお前、

イカレてるよ。どうなつても知らねえぞ……！」

「……うん!行くよ!轟君っ!!」

そう言ってお互いは力を入れ、互いのパワーが
煽れんばかりに膨れ上がる。

それを見たセメントスは動き出す。

「ミッドナイト！」

「ええ分かっている!!」

危険を察知した2人は「個性」を使って止めようとする。

だが2人の猛威は止まらず、先制に轟が氷を放ち

緑谷はそれを交わして突っ込む。

だが轟はゆつくりと左手を前に出して

暴発する炎をその手に収縮させー、

「緑谷、ありがとな。」

それを解き放った。

ドオオオオオオン!!

「何だコレエええ!!」

「ぐっ!!皆大丈夫・!!?」

リングが見えなくなる程の爆発が起き、

その爆風と衝撃で峰田は吹き飛ばされそうになるが

障子が掴んで止めていた。

火野は安否を確認しようにも衝撃が凄すぎて

柵を掴むのが精一杯の状態だった。

そして、爆発が収まり、火野を含め、観客達が

リングを見ようとするが、辺りは土煙で満煙となり

2人の状況が全く見えなくなっていた。

『何今の…、お前のクラスなんなの…:…?』

『散々冷やされた空気が瞬間的に熱され膨張したんだ。

セメントスのお陰で壁が作れて威力は殺しているが、

「これほどまでとはな…。」

『関心してる場合かよ！そんなでもってこの爆風って、

どんだけ高熱だよ！ったくなんも見えねー！

オイこれ勝負はどうなって…!?!』

椅子から転げ落ちたのか立ち上がるプレゼント・マイクは

相澤の解説にツツコミ、状況を確認しようとするが

土煙が徐々に晴れて行き、緑谷の姿が確認される。

だが、緑谷は全身ボロボロになって壁に激突しており、

気を失っていた。そして轟は背後に氷を生成、

何とか衝撃から身を守っているのを確認し、

ミッドナイトは勝敗を告げた。

「緑谷君…：場外！」

轟君ー…：…：3回戦進出!!」

歓声が響き渡るが、一部では緑谷の暴発っぷりを

低評価する声がちらほらと聞こえる。

そして、緑谷が搬送ロボにより運ばれるのを確認した

火野は保健室へと走り出す。

それを見た飯田、麗日、峰田、蛙吹も

後を続く様に保健室へと向かった。

☆☆☆

「「「デ緑く君ん!!!」」」

「皆…：次の試合は…：?」

保健室にやってきた5人は緑谷の包帯姿を見て驚愕する。

そして隣にいたトゥルーフォームのオールマイトは

軽く血を吐き驚いて、その身をそそくさに寄って

生徒から距離を置いていた。

「びっくりした…。」

「っ、オー………！緑谷君大丈夫っ？」

火野はその姿でもオールマイトと分かっており、声を掛けようとしたが、秘密とお願いされた事を思い出し、緑谷の安否を問い掛ける。

「僕は…何とか…っ。」

「大丈夫じゃないだろ緑谷君！あと、ステージは大崩壊の為、補修タイムだそうだ。」

「心配できました…。」

「怖かったぜ緑谷あ。あれじゃプロも欲しがんねーよ。」

「峰田ちゃん、塩塗り込んでくスタイル感心しないわ。」

「でも、そうじゃんか。」

「うるさいよホラッ！心配するのは良いが

これから手術さね！」

「…」「シュジュツ…?!?!」「…」

心配していく生徒等にリカバリーガールは5人を追い払う様に行かせ、火野達は保健室を致しかなかく後にした。

☆☆☆☆☆☆

『さあさあ!!補修タイムは終わったぜー！』

待たせたなYOU達イー!!

んじや早速始めるぜー!!

A組対決！飯田VS常闇!!START!!』

「いけっ！ダークシャドウ!!」

『アイヨッ！』

補修が終わり元通りとなったリングに

飯田と常闇が並び、プレゼント・マイクは

合図を出すと、常闇はダークシャドウを前戦に出し

先制攻撃をしようとする。

「速攻で決めさせてもらおうぞ常闇君！

〃レシプロバースト〃!!!」

飯田はそう言うのと脹脛のマフラーから

青い炎が放出され、爆発的なスピードで

ダークシャドウを交わし、常闇へと突っ込む。

「っ!!戻れダークシャドウ！」

「うオオオオオオ!!」

常闇が指示を出すのが間に合わず、

飯田は常闇の背中の上着を掴み、

一気に駆け出し、リングの線の外へと

常闇を放り投げた。

「常闇君場外! 3回戦! 飯田君進出!!!」

『早ええええ!!先程のバトルとは比べものにならない

圧倒的な瞬殺だぁー!!!

最強と謳われた常闇飯田のスピードの前では

無力だったかー!!!』

「ぐっ!...無念...!」

「すまない常闇君、思い切り投げ飛ばしてしまった...」

「っ...情けは無用...だが、その奥手は見切れなかった。

流星は非常口と言われただけはあるな委員長。完敗だ。」

「常闇君...。僕も敬意を評して礼を言おう、ありがとう。」

「カー青春! A組は本当最つつっ高ねー!!!」

飯田と常闇のやり取りを見てミッドナイトは

興奮し、鼻血をダダ漏れしていた。

そして、2回戦の飯田と常闇のバトルが終え、

リングは損傷なく、早くも次のバトルが始まった。

☆☆☆

『どんどん行っちゃうヨオー!!!』

A組だけじゃないぜこのバトル!!

唯一生き残ったサポート科!!後藤!VS!

ぶっちゃけ色んなフォーム見たい!見せてくれエ!

ヒーロー科!火野!!』

「後藤さん!会えたね、このステージで!」

「火野……、手加減は無しだ。」

「もちろん!変身!」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ!タトバタ・ト・バ!

第二回戦、3試合目の試合が始まり、

プレゼント・マイクの紹介が終わり、火野は

オーズ、タトバコンボへと変身し、準備を整える。

一方で後藤は背中には頑丈そうな

リュックケースを背負ってあるが、それを使う素振りなく

後藤はバースバスターを両手でしっかりと握り、

オーズに銃口を向ける。

『START!!』

合図が響き、オーズは後藤に向け駆け出すと、

後藤は狙いを定め、バースバスターのトリガーを引いた。

No. 32 後藤慎太郎：オリジン&灼熱コンボ

ー 鴻上フアウンテーションにて ー

秘書、里中は会長室を訪れると

窓際のテーブルで相変わらさずケーキを作っている

鴻上を見て、小さなリモコンを取り出し

ボタンを押すと、液晶の画面が投映される。

そこには体育祭でオーズと後藤が

戦闘を繰り広げられる映像が映されていた。

「会長、もう後藤さんと火野さんの

戦いが始まっています。」

「例のシステムは？」

「背中に背負ってますが今のところ

使う様子が見当たりません。」

「あのシステム無しで戦うかその欲望素晴らしい!!!

……だが使ってくれないとデータ収集が

できないから困るのだがね!」

「まあいいんじゃないですか?あれ試作品ですし。」

鴻上はケーキを作りながらそう言う

秘書の里中は鼻で笑いながら返す。

「そこじゃないぞ里中君、彼は前から

真つ当で正義感が非常ローラーに強い!

他人の力を借りず、彼が自ら設計した

バースバスターだけで倒そうとしているのだろう!

んあゝ……みみっちいプライドだっ。」

「まあまあっ!そう言わないでやってくださいよっ!会長。」

鴻上は頬についたホイップを指で掬い舐めると

扉から1人の中年くらいの男性がやって来る。

「あいつはまだ学生なんだ。色々考える時期でもある。

でも、あの火野って奴がそのモヤモヤを

解消してくれるんじゃないですかね?」

「ほお…！彼がかね？」

「ええ…：そんな気がしますよ…。俺の勘ですけどっ。」

「勘なのですか…？」

「うん、そうだよ里中ちゃん。」

「…ふ。」

「え、ちよつと。俺なんか変なこと言った？」

自身気に言う男性に里中は鼻で笑い

男性は不思議そうに首を傾げながら、

その投映されている映像を見ていた。

☆☆☆☆

タカ！

ゴリラ！

バツタ！

「フウンッ!!」

「ッ!!」

『オーズフォームチェンジキター!!』

胴体はゴリラか!?ザ・パワー系できたなおい!』

『一撃は重いがスピードに欠ける。』

俊敏に動く後藤には体力を消耗させない限り

当てるのは難しいだろうな。』

オーズはメダルを取り替え、 “タカゴリバ” となり

後藤目掛けて腕部 “ゴリバゴーン” を大きく振りかざし、

後藤は避けるとリングの地面が割れ、大きく損傷する。

プレゼント・マイクは実況し、相澤が解説をする。

「その腕のせいで動きが鈍いぞー!」

「うわっ!?!」

地面へと転がり回転が止まると後藤は
そう言いながらバースバスターのトリガーを引き
オーズの側面を撃つ。

火花が飛び散り、片腕を押さえながらオーズは身を引く。

「動き…ねーそれならこれはどうかなー!」

オーズは体制を立て直し、ゴリラのメダルを取り外し、
カマキリのメダルを嵌め込み、オースキャナーでドライバーをス
キャンした。

タカ!

カマキリ!

バツタ!

『オーズまたまたフォームチェンジ!!』

いいぞー! こういう試合が見たかったんだよ俺ー!』

『私情はさむな。・俊敏性を備えたカマキリか。』

それに脚部のバツタを合わせれば

跳躍しながら攻撃する戦い方ができる。』

オーズは“タカキリバ”となり、その場から

跳躍し、胴体のカマキリソードを展開し、

両腕を大きく広げると、後藤は跳前方へと駆け出し、

オーズの真下を潜り抜ける。

「うわつちよちよつ!」

「はあッ!」

「うああっ!!」

『どうしたどうした火野オーズ!!』

後藤に押されてんぞー! “個性”が強くても

頭いい奴には勝てねーのかー!』

後藤はオーズの背中を撃ち、オーズは前方へ

痛そうにリング上を何回か転がっていく。

「火野の奴何してんだよー!？」

「…火野君どうしたんやろ…。」

「麗日、どうした?」

苦戦しているオーズに峰田が叫ぶと麗日は眩く。

それを聞いた常闇が聞くと麗日は口を動かした。

「多分やけど火野君、本気出してない気がする。」

「何故!?この後に及んで手加減など

相手に醜態を晒すだけだぞ!？」

「そーだぞー!手加減なんて漠らしくねえ!!」

「…だけど、火野のオーズって常人以上の力だろ?

相手を傷つけたくないとか…?」

「尾白ちゃんの言う事に一理あるけど、

その為の審判じゃないかしら?」

「た、確かに…。」

オーズの攻撃は全て後藤ではなく、

空振りをしたり地面を攻撃したり、威嚇など、

先程から戦うその姿はどうも様子がおかしかった。

それに気付いた麗日の言葉に飯田、切島は

反感を買ってしまったのかオーズに対して

そう言っていると、尾白はUSJの戦いを思い出したのか

フオローする形で喋ると、蛙吹に言われ、

返す言葉もなく黙り込む。

しかし、爆豪はその異変に気付いたのか

黙ってリングを見ていた。

「(あの野郎…。何か企んでやがるな。

あの八二分けの奴も背負ってるリュックを

全然使ってねえ…。どういうつもりだクソモブ共がっ。)」

爆豪がそう思っているとオーズはまた、

後藤のエネルギー状の銃撃を食らってしまい

吹っ飛んで転がる。

「…!!貴様、どういうつもりだ…!？」

「真面目にやってるのかっ!!?」

「いたた…それは、俺も同じ事が言えるよ…!」

後藤さん、本気で戦ってないよね…?」

「何っ?」

後藤自身もいい加減痺れを切らしたのか叫ぶと

オーズはゆつくりと立ち上がり、後藤にそう言いながら、

後藤のリュックケースに向けて指を指す。

「リュックケース、何かあるんでしょ?」

「……。」

「もしかして後藤さんの『個性』?」

「っ、黙れ!!」

オーズに言われ、後藤は癩に触られたのか

バースバスターのトリガーを引くが、

カチツと音が鳴るだけで銃弾は発射されなかった。

「っ…。(何やってんだ俺は…!?)」

さっきので弾を使い切ってしまったのに…!」

「…後藤さん、緑谷君が言ってた言葉覚えてる?」

皆目標を指す為に本気で戦ってるって…。

俺、正直嫉妬したんだ。あんなにボロボロになつてまで、

半分しか出さないって言ってた相手を本気にさせて、

勝てないと分かっても挑もうとするその勇姿に…!

それなのに、後藤さん全然本気じゃないっ!」

「っ!黙れって言ってるだろ!!」

『どうした後藤…!?弾切れで悪あがき攻撃か…!?』

さっきまでの策士雰囲気はどうしたんだ…!?』

後藤はバースバスターを投げ捨て、オーズに殴りかかる。

オーズは寄ろけるが、半端な攻撃ではダメージは入らず

後藤の拳は少し赤く腫れ上がる。

「…さっき言ってみましたよね?」

手加減は無しだつて…。後藤さん、俺だつて

誰にでも手を差し伸べるヒーローになりたいって

強い目標がある！雄英にいるんだったら、

後藤さんにもあるだろ!?何の為にここにいるんだよ!」

「っ!?何の…為に…!?」

オーズに説教され、後藤は後退り、ある記憶が蘇っていた。

それは、体育祭始まる数日前に前に、

鴻上ファウンデーションの会長から

シヨーケースを受け取っていた出来事だ。

――

『後藤君、君には体育祭に出てもらい、このシステムを

使ってオーズとの戦闘データを取ってきてもらいたい。

試作品だが、マニュアル好きな君なら

使いこなせるだろう。』

『これは…?ですが借り物などの力で

俺は勝ち進めたくありません…。

こんなものが無くても、戦闘データなら俺自身の力で勝ち進み、俺
の力で録ってきます。』

『あくまで自分の力でオーズと戦うつもりか

その欲望素晴らしい!!…だが、君自身の力、

ましてこのシステムを考慮した君の “バースバスター” でも!

彼には敵わないだろうね!』

『…………っ!』

『後藤君!君のそのプライドは

極端に邪魔だよ…not hing!…仕方ない。

君がそこまで言うのならこれ以上は何も言わない。

だがデータは録ってもらうよ!

そして、念の為にこのシステムは君に預ける!』

『…!ですから会長っ!』

『それを使うか使わないか、君次第だよ後藤君!』

ただこれだけは言っておこう！その試作品は！
もう君の力だ…。ハッピーバースデー!!!』

――

「……さっきの奴といい、火野、お前といい、

A組は相手を励ますのが好きなのか…？

…しかも俺はそこまで縁がない他クラスの生徒だぞ…？」

「…？何言ってるの？もう後藤さんとは

あのトイレ前で会った時からの付き合いでしょ。

障害物競争も騎馬戦も一緒にやった…。

騎馬戦の時も後藤さんの指示は的確で驚いたけど、

同時に、凄くなって思ったんだ…。だから、

ここまで来て本気を出さないのは、往生際が悪いよ？」

「っ。…ふ、はははは…。」

オーズの言葉に後藤は小さく笑うと、

背後に背負っているリュックケースを取り、中を開ける。

そこにあるのは奇妙な形をしたベルトがあった。

言い表すならガチャポンとそのカプセルを催した造形の

ドライバーを手に取り、伸びてるベルトを

腰に回す様に装着する。

『な、なんだあ？後藤が取り出したのはベルト!？

まさかあいつ！もしかしてー!?!』

『個性…じゃあないな。後藤の『個性』は別にある。

てことはサポートアイテムか。』

「おおお！やっとその気になりましたか！

こうしては居られません!!」

「あっ、おい発目!?!」

プレゼント・マイクが驚き、相澤がそう言っていると

観客の生徒、人達もざわつき始める。

その中のサポート科の発目はそれを見て立ち上がり、同じクラスの生徒に呼びかけられるが、無視をし、席を離れて行った。

「後藤君…それって…?」

「今は…プライドなんて捨ててやる…!」

(調整も何もしていない、完全に見切り発車だ…!)」

後藤はそう言っつてポケットから

1枚の銀色のメダルを取り出した。

それをドライバーの左部分にあるスロットに嵌め込むと何かを充電する様な待機音が鳴る。

「っ…そのメダル…!」

「安心しろ、これを使ってるのなら、

今から公表する…」

…変身。」

《カポーン…》

USJ事件でヤミーが所持していた銀色のメダル、それを知っているのは雄英A組の生徒、教師、そして警察の人達だけである。

火野はそれを見て驚き警戒しようとする

後藤はそう言っつて、ドライバーの右部分にある

ダイヤルを約2回、手で回した。

すると、ドライバーのカプセルが展開し、

ドライバーからドームの様なエネルギーが形成され、

後藤の周囲を囲む。すると、カプセルから

複数のカプセルが後藤の身体の関節部に

散らばり、そのカプセルから“アーマー”が

現れ、後藤の体に装着されて行く。
顔にも覆う様にアーマーが装着され
エネルギー状のドームが消える。
そして、そこに彼は誕生した。

「マジか強化装甲…!?!」

「あいつあんなもんでも作ってたのかよ!?!」

てか、メツチャかっこよすぎだろお!!」

「火野と同じで、ベルトを使って変身…!」

じゃあ火野はあいつを本気で戦わせる為、
わざと手加減してたんだな!」

A組の瀬呂、峰田、上鳴はそう言って盛り上がるが
一部の生徒はその銀色のメダルの存在に気付き、
その表情は徐々に強張っていく。

『オ、オーマイガー!!?後藤!』

“変身”しやがったああ!!何だそのスーツアーマー!
って、おいレイザー?どこへ行くんだヨ?』

『お前あいつの手元見てなかったのか??』

オーズのメダルと似てたあれを…。』

その変身した後藤にプレゼント・マイクは叫ぶと
会場は騒めき始める。そんな中、相澤は
銀色のメダルに気付き、それを伝え席を離れようとする。
実況する部屋のドアが突然開かれ、

入ってきた少女はプレゼント・マイクのマイクを
無理矢理取って話し出した。

『ぎゃっ?!?今度は何DA』

『困惑する中、ぐめんなさーい!!』

私はサポート科の発目と言います!

突然の後藤君が変身してしまって皆さん

驚きでしょうから、私があ有名なサポート企業!

“鴻上ファウンデーション”の名を借りて!

「ご説明させていただきます！」

「発目さん…?」

「おい、聞いたか?!? 鴻上ファウンデーションって…!」

「サポート会社でも指折りの大企業だぞ?!」

突然、発目が解説し出し、会場の全員は騒めき、

発目はリング上に立つ戦士の解説をし出す。

オーズも驚いていたが、今は発目に「おお」と

言いながら拍手をしていた。

『後藤さんが使われているのは彼自らが

発案し、鴻上ファウンデーションの技術によって

完成させたのがあの『バーストライバー』です!

そして、アレの動力となるのがこのメダルです!』

発目は会場のモニターを投影させ、そこに移っていたのは

銀色のメダルだった。

「お前、何考え…!?!」

会場が更に騒めく中、相澤は発目にそう言う

発目は視線を逸らさず腕だけ相澤に向けていた。

それは待てという合図だ。

『USJ事件の事は覚えていますでしょうか?』

あの事件で突然現れ、生徒達を苦しめた生物。

人とはかけ離れた怪人「ヤミー」。

この…鴻上ではコレを「セルメダル」と名付けています。』

「セル…メダル。」

「どどどどどーなってんだよ…!?! あいつ何であるの

メダル持つてるんだよ!もしかして敵かよお!?!
サイラン

プギヤ!?!」

「黙れアホっ…!」

轟が呟くと峰田は早口で怯え出し、声を上げると

爆豪に頭を押さえられる。

今発目が言っているのは世間にはまだ公表されていない情報だった。これでは英雄の評価が下がってしまう。誰もがそう思っていたが、発目はニヤリと笑い口を動かした。

『脅威となり得るこのセルメダル…ですが!!』

鴻上では！これを利用していただきました！

このセルメダルに秘められたエネルギーを利用して強化スーツを作り出せる事に成功したのです！

それが彼方にいる選手！『バース』です!!』

「バース…。」

「誕生っ…。」

発目の解説を聞いてた審判のミッドナイト、セメントスは呟く。

『アレはまだ試作段階ですがっ！』

何れは量産する予定です！詳細は鴻上の会社へ！

少々長引いてしまいましたが、

皆さんご安心ください！彼は頭はいいですけど

たまにうるさい人ですが、ワイラン敵の脅威を

逆に利用し、頼もしい力に変えたヒーローです!』

発目がそう言い終わると、パチパチと拍手が送られ

それが徐々に大きくなっていった。

「発目…お前…。」

「私は会長からの指示を実行したまでです！

あ、警察からセルメダルの許可はとってありますよ！

勿論校長にも！なのでこの場を借りて、

バースの宣伝をさせていただきました!」

「…色々としっかりしてやがる…。」

じゃあアレは、敵じゃないんだな?」

「もちろんです!!」

「…へっ、しゃーねーな。」

自身気に言う発目の言葉を相澤は信じて
プレゼント・マイクに目を合わせるとプレゼント・マイクは
そう言ってマイクを取り、実況し出す。

『オケーーーーイ!!ちよつとしたアクシデントだが』

サプライズでもあるなコレ!!詳細は鴻上会社に
聞けって事だから、気になる人は聞けってよ!
さあさあ!再度気を引き締めて!

こりやもうベルトで変身した者同士の戦いだあ!!
誰が予想できた!?出来るわけねえよなこんな展開!!
バースとオーズ!!果たしてどちらが

この戦いを有するか!?

プレゼント・マイクの実況に会場は

徐々に盛り上がっていく。

「発目の奴…俺の話に乗せしたな……。」

「凄いよ後藤さん!!その後藤さんが開発したなんて!

流石だなくっ!でも、やっと本気が見れてよかったよ!」

「…まあ、今はそうしておく。火野、全力で来い……!」

「…うん!なら、俺も全力で!」

構えるバースにオーズはそう言っ

てオーズドライバーのメダルに手を当てる。

ガタキリバが来るのかと思つたバースだが、

ドライバーから抜き取つたのはタカとバツタだつた。

「どうした?3枚同じメダルでこないのか?」

「え、その予定だよ?」

「何……?」

オーズはそう言いながら、チーターと、

「ライオン」のコアメダルを取り出し、

ドライバーに嵌め込み、オースキャナーで

オーズドライバーをスキャンした。

ライオン！

トラ！

チーター！

ラタ・ラタ・ラトラアータアー！

タトバ、ガタキリバと異なるコンボソングが流れて
オーズは姿を変える。それは、黄色をベースとした
哺乳類系のコンボだった。

No. 33 照らせ特技！そして迅速に！

ラタ・ラタ・ラトラアータアー！

「うおおおおおおおおああっ!!!」

ライオン、トラ、チーターのネコ科の

“ラトラーターコンボ”となったオーズは

そのエネルギーを放出せんと雄叫びを上げる。

その頭部“ライオンヘッド”は獅子の立髪を

模様した造形をしており、全身黄色揃ったフォームだ。

『新フォームキターーーー!!!』

これがオーズの本来の力コンボってやつか！

かっけええええー!! 火野オーズも

全力出してきたなあおい!!

…どしたイレイザー？ 何見惚れてやがんだよ？』

『見惚れてねえ。昆虫ときて、今度はネコ科の形態…』

コンボってやつは強大なパワーを秘めてるみたいだが、

その反面、反動と疲労も大きい。この勝負、

案外早く終わりそうだな。』

『見たいですねーじゃ、そろそろ私は戻ります！

故障した私のベイビーちゃんを修復せねば!』

USJ事件のガタキリバを知っているので

その疲労で動けなかったと聞いている相澤は

そう解説すると、バースは投げ捨てた

バースバスターを拾い、銃口の下部に装着されてる

マガジンの様な部分“セルバレットポッド”を取り外し、

中に入っている“セルメダル”を捨て、

新しくセルメダルを6枚装填し、上部の挿入口

“セルレンダー”へと接続し、6枚のメダルは

バースバスターの中へ供給される。

その後、再度銃口の下部にセットし、構える。

「へえ……それセルメダル……だっけ？」

それが銃弾だったんだ。」

「ああ、〃見せない〃様に事前に装填した6枚だけで

今ままでやり過ぎしてきたが、もうその必要はなくなった。

その頭部は初めて見るな。だが、胴体と足は既に把握している。頭だけ変えたところで、俺に勝算がなくなった訳ではない。」

「流石後藤さん、でも……」

〃コンボ〃はそれだけじゃないよ……！」

「昆虫系のコンボでそれも把握済みだ！ハッ！」

バースはバースバスターのトリガーを引き、

エネルギー状の銃弾をオーズに向けて放つ。

オーズは横に回避しようとするが、

その瞬間オーズはその場から消え、左側の離れた所に止まっていた。

『はっ？ハーーーーッ!!?』

瞬間移動したあ!!?どーなってんだ!?

チートかよチーターだけに!?!』

『違う、脚部のチーターで見えないくらいの

スピードで高速移動しやがったんだ。……驚いたな。

それもコンボの力か……?』

「す、凄い火野君！全然見えなかったよ……!?!」

「飯田のレシピプロより早くね!?!」

どこまで才能マンなんだよあいつ!?!」

「……野郎……!?!」

「(……あいつ、体力テストの時は

あの足制御出来てなかったはずだ……

コンボの力なのか、体育祭までに仕込んだのか……

侮れないな、火野……)」

プレゼント・マイクが実況し、相澤は目を見開いて解説する。観席にいた麗日、瀬呂、爆豪が驚くと

轟はそう思つてオーズの動きを見届けていた。

そうこうしてる間に、バースは4発、オーズに

向けて銃弾を放つが、オーズは高速移動で全て避け走る。

そしてバースは何か思ったのかオーズに向かつて口を動かす。

「成る程な…。止まる瞬間、その脹脛の穴、

車で例えるなら衝撃緩衝機溝の様な機能を

進行方向の逆に向けて煙を噴射させて

そのスピードを殺しているのか。」

「おお、すっごい後藤さん！その通りだよ！」

「褒めてる場合じゃないだろ…！」

バースはバースバスターをオーズに向けてると

オーズは走り出す。だがバースは打たずに、

走る方向に向けて、銃弾を放つとオーズに命中し、

火花を散らして転がる。

『命中!!後藤バースすげえ!!』

「うわあっ！いだった!？」

「走る方向とバースの分析機能があれば

対処できる。同じ行動は通用しないぞ。」

「あつはは……………はあ…はあ…！」

「何だ？疲れたのか？それともそのコンボのパワーが

大きすぎて疲労の蓄積が早いとかか？」

起き上がるオーズは息切れをしており、

バースはバースバスターのセルメダルを交換しながら

呼び掛けると、オーズは頷き答える。

「両方…正解…あまり長くは戦えないかな…！」

せっかくのバース色々見てみたかったけど、

そろそろ決めるよ後藤さん！」

「また高速移動かっ？何度も同じ…！」

オーズは声を上げ、バースはそう言おうとすると

「打ちまくるが、当たる手応えはなく、弾切れを起こしてしまう。」

「くそっ！どこだ…!？」

「せいやあああああっ!!!」

「っ!!ぐああああっ!!!」

探そうとするバースに高速移動で接近していたオーズは両腕のトラクローでバースをX字に切り裂き、バースは火花を散らして吹っ飛び、場外へと落下し、変身が解かれる。

その瞬間、光の熱波が収まり、ミッドナイトはゆっくりと目を開け、

場外で倒れてる後藤を見て、言い渡した。

「ご、後藤君場外!……3回戦!火野君進出!!」

『しよ、勝負アリイーーー!!』

何が起こったのか分かんない内に後藤場外落ちだー!!
とんでもねえ大熱波!リングのコンクリが溶けちまつてるじゃねえか!

恐るべし火野オーズ!!完全初見殺しだろ!』

プレゼント・マイクの評価に、観客の歓声を浴びる

オーズは変身を解き、後藤へと近寄り、手を差し伸べる。

「大丈夫後藤さん?」

「…分身に続いて、今度は熱線放射か…」

まだあるのか?そのコンボってやつは。」

「あ、うん…一応ね。…うおつとと…」

「お前もフラフラじゃないか…っ。」

「あはは…ありがとう…」

その手を掴み、起き上がる後藤だが、火野は体制を崩して蹠踉めく。それを後藤が支え、二人は互いを支えながら保健室へと向かった。

「あ、火野君…、それと、後藤君…だよね？」

「緑谷君！手術はっ!？」

「とりあえず、歩けるくらいは治ったんだけど…、

この手は後が残りそうなんだ…。」

火野は扉を開けると、リカバリーガールに

治癒してもらったばかりなのか疲れ切った顔をした

緑谷が腰掛けており、緑谷はそう言っ

傷で歪んでしまっていた右手を火野に向けていた。

「…あれだけ無茶な事をしたんだ。

その“個性”、緑谷君の身体に合っていない気がするな。」

「っ!?そ、そうかな…?そそそんな事ないと…

思う…けど…!そ、それより飯田君と常闇君の試合と

…ふ、2人の試合は…!？」

「あー、まず、飯田君が優勝して…え〜つと…。」

「何躊躇ってる火野。俺が負けた。」

「あ、…そうなんだ…ご、ごめん。」

緑谷が結果を聞くと隣の人が負けました、なんて

言えるわけもなく躊躇っている

後藤が躊躇なく言っ

てしまったのかばつが悪そうな表情となり、俯向く。

すると、リカバリーガールが手を叩き、口を動かす。

「はいはいっ。ここはお喋りする所じゃないさね!

緑谷君はまた明日くるんだよ? いいね?」

「は、はいっ…すみませんっ。」

じゃあ2人共、僕はもう行くね。

外に待たせてる人がいるから…!」

「うん、じゃあまた後でっ。」

緑谷はそう言って保健室から出て行く。

外に待たせてる人はトゥルーフォームの

オールマイトだろう。ここに入る前に火野は

声を掛けようとしたが後藤がいるので会話は出来ず、

ただ会釈をしただけで中へと入ってしまったので、

少し申し訳ない気持ちに火野はなっていた。

先に火野が治癒してもらっている

後藤はバースドライバーを出して、触っては眺めてを

繰り返していた。

「もしかして、壊れちゃった…?」

「お前の放熱のおかけでな。」

……と言っても外装があちこち溶けたのと

冷却装置がショートしたぐらいだ。」

「ご、ごめん!」

「何謝ってるんだ?寧ろ謝るのは…俺だ。」

このドライバーを使うのを躊躇ってしまい

納得の行く戦いが出来ず…申し訳ない…。」

「え!?いやいや、もう終わった事なんだし!

お互い全力を出せてよかったよっ。」

「…ああ、…だがな火野。」

後藤はそう言って立ち上がり、

真っ直ぐなその視線を火野に向けて、口を動かす。

「バースの力を手に入れた以上、

俺は本格的に『ヒーロー』を目指す。

世界を守る為に、俺は精進する。」

「後藤さん………うん!俺も頑張るよ!」

後藤から握手を求め、火野はそれを笑顔で掴む。

するとりカバリーガールは軽く息を吐いて口を動かした。

「アンタ達、仲良くするのは勝手だけど、

そう握手してられちゃ、治癒できやしないよ。」

「あ、すみません…。」

☆☆☆☆☆☆

『飯田行動不能！轟！炎を見せずに決勝進出だ!!』

「えっ!?!飯田君負けたの…!?!」

…轟君決勝ってことは…!?!」

後藤と別れ、保健室から帰ってきた火野は
プレゼント・マイクの言葉に驚き、

モニター画面を見ると、切島vs爆豪は、

爆豪の勝利となっており、現在は第3回戦の

轟vs飯田で、リングを見ると飯田は

氷漬けにされて行動不能となっている。

轟は決勝進出、次の試合は…、

火野vs爆豪だった。

「やっぱ！試合進むの早すぎるだろ!?!」

進行が早すぎてツッコむ火野はそのまま

急いで控え室へと向かった。

☆☆☆☆☆☆

― 都内のとあるバー ―

「死柄木君、どうしたの呼び出して?」

「脇真音…この世界を潰す」

新しい「仲間」を呼ぼうと思ってな…。」

「仲間?ふうん…私はその紹介ってわけ?

てか!私体育祭見てたんだけど!

火野映司君ラトラーターも持ってたよ!

もう出ただけでも興奮したよ!

まだその「仲間」って人来てないんでしょ?

黒霧さんテレビ借りていい?」

「やめろ…俺は見たくない…。」

「ええ!良いじゃんか!私だけ見てるから!」

「駄目だ…。」

「あ、リモコンあったらっつ。」

「おいっ…!」

「落ち着いて下さい死柄木君。」

まだ時間があります。いきなり呼ばれた彼女も

不満ではあるでしょう、私が探しに行く間の時間だけ、

彼女にも私用の時間を与えてあげてはどうです?」

脇真音の勝手な行動に死柄木は苛立ち、首をガリガリと

掻き始めるが、息を吐いてそれを承諾したのか、

バーの椅子に座り、黙り込む。

そして黒霧は出る準備が整ったのか、

テーブルの上にあるテレビのモニター画面に

向かって口を動かす。

「…では、先生。私は「保須」へ向かいます。」

『ああ、頼むよ黒霧。座標はさつき知らせた場所で

間違いないはずだ。それと死柄木君。」

君も体育祭を見るといい。』

「は…?何で俺が…。」

『よく見て備えろ。彼らは…いずれ君の

障壁になるかもしれない…。』

「……ハッ、糞みたいな話だな…。」

…まあ先生が言うなら…。」

「えー！死柄木君も見ろっ？やったつ。」

一緒に見よーよー！はいここ座ってー！」

「先生…、こいつ五月蠅いから他で見たい…。」

「えええー!? ひっどーい！」

女の子に対してそんな断り方するかな!? 泣くよ私!？」

「黙れ勝手に泣け…。」

脇真音と死柄木の会話を聞いてモニター画面越しの

男性は静かに笑い、言葉を発した。

『…まあいいじゃないか、死柄木弔。

脅威となる存在はあの雄英に固まっている。

脇真音優無、君も勉強し、その経験を次に生かすんだ。いいね?』

「はあい、分かってるよ先生。」

「ちっ…。」

「……では、私はこれで…。」

事が治まったのを確認し、黒霧は

自身のワープゲートを使ってその場から姿を暗ます。

死柄木と脇真音は別のテレビを付け、映像を見始めた。

そこには、第3回戦の試合、火野と爆豪の

戦いが始まるうとしていた。

☆☆☆☆☆☆

『さあさあ!! 準決勝始めるぜー!!』

お互い才能マン対決だ!!』

爆破の爆豪！VS！オーズの火野！！

今までの種目で活躍した連中だ！こりや実物だぜ！！』

「…まさか、君と戦うとは思ってなかったよ爆豪君。」

「ハッ！俺は殺り合っただけ見たかったぜ！！」

テメエの「個性」俺が全力で捻じ伏せてやんよ！

徹底的に叩きのめしてあの半分野郎も

ぶっ殺して1位になる！！」

「相変わらず乱暴だな…。だけど、

俺だってその意気込みは一緒だよ。

全力でお前に勝つ！」

爆豪は掌からバチバチと火花が飛び散り、威嚇するが、

火野はそれに臆せず、タトバのメダルを

ドライバーに嵌め込み、オースキャナーで

オーズドライバーをスキャンした。

タカ！

トラ！

バツタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

『準備はいいか!?レディイイイSTART!!』

「死ねえええええ!!!」

タトバコンボへと変身し、プレゼント・マイクは

開始の合図を会場に響かせる。

爆豪は爆破で空中へと飛び上がり、

後方へ爆破を放出させ、空中からオーズへと

突っ込んで行った。

No. 34 重力コンボ

「オラアっ!!!」

「だあっ!?!」

『爆豪爆撃のラッシュしまくりい!!』

火野オーズ避けまくるが流石に当たってしまったー!
防戦一方になってしまってるぞー!?!』

3回戦が始まり、爆豪は合図と同時に

容赦なく爆破を連撃し、オーズは避けたり
交わしたりなど防戦していたが、

その攻撃は徐々に範囲、威力、
スピードが上がってきたのか、その爆破はオーズの

懐に当たり、オーズは蹠踉る。

「くくっ…!障害物競争で味わったけど…
痛いっ…なあ…!」

(麗日さんこんな食らってたのか…!?)

流石に爆豪君手加減してあげたよね…?)」

「はっ…まだまだこんなもんじゃねえぞ!!」
「っ!?!」

懐を押さえ、痛がるオーズに爆豪は
すかさず接近し、爆撃を食らわす。

「爆豪君、どんどんスピード上がってない?」
「かっちゃんの『個性』は汗が溜まれば溜まるほど」

ニトロの汗が出てその爆破の威力は強くなる。だから
長期戦になればなるほどかっちゃんにとって

有利な戦況になっていくんだ…。」

「猛撃の連鎖…もはや修羅…。」

麗日が言うところ緑谷は解説し、それを聞いた常闇は呟く。

「いったっ!!?」

「どうした!? 防戦一方かつ!?

さっさきの『ガチャ玉モブ』みてえに

さっさと使えよコンボって奴をよお!!

俺はテメエの全力をぶっ殺してえんだ!」

「が、ガチャ玉モブ:!? お前本人の事

名前で呼ぶ気ない、よなっ!!」

「知るかよ! モブは、モブだあ!!」

「うわっ!？」

ガチャ玉モブ。恐らく後藤の事を言ってるのだろう。

そう叫びながらオーズに爆撃する爆豪に

オーズは声を上げながら跳躍し、回し蹴りをするが

爆豪は交わして爆破の勢いで背後に回り込み、

その背中を爆撃し、オーズは吹っ飛び、

線のギリギリの所で着地し、何とか持ち堪える。

「あー! 分かった…! 爆豪君、後悔しないでよ…!」

「はっ! そりゃこっちの台詞だ! さっさと使いやがれ!

完膚なきまでぶっ潰してやんよ…!」

そう言って立ち上がり、オーズは3枚のメダルを取り出す。

だが、何か思ったのかオーズはそのメダルを

ドライバーに入れずに見つめていた。

が、それも数秒で、オーズは首を振り

ドライバーからタトバの3枚を全部抜き取る。

「後藤さんの時その場の勢いでコンボ使っちゃったけど…

後先考える暇はないよね…! コンボ使わないと

多分勝てない…だから今は、やる事をやるだけ…!!」

コンボを使えばその特有の力を発揮できるが

その反動もまた大きい。だが相手は一筋縄ではいかない

爆豪。後藤との戦闘でラトラーターを使ってしまったのは、

本人にとっては想定外の出来事だった。

だが後藤の全力を出させてしまった自分にも非があるので
使わざるを得なかった火野は、自分の身体など

今は気にせず、勝利だけを胸に決め、

“サイ”、“ゴリラ”、“ゾウ”のメダルを

ドライバーに嵌め込み、オースキャナーで

オースドライバーをスキャンした。

サイ！

ゴリラ！

ゾウ！

サ・ゴーズ……サ・ゴーズオツ！

三色の赤、黄、緑から姿を変え、

モノクロ様なカラーリングをした色となり

オーズはサイの頭、ゴリラの腕、ゾウの足と

重量系を催した姿、“サゴーズ”コンボへと姿を変えた。

『で、でたぁー！！！！』

火野オーズ！また見たことないコンボチェンジい！！

見た目がごっつくなっちまつてるぞ！

今度はパワー系か！？

てかどんだけオーズってやつはコンボあるんだよ！

火野の“個性”はマジで未知数だなあ！！』

『サイにゴリラにゾウ……文字通りパワーに特化した

重量系のフォームか……。ラトラーターの様に

あのコンボも何かしらの特殊な能力があるだろう。』

歓声と共にプレゼント・マイクは興奮し実況すると、

相澤も初めて見た形態に興味をもってるのか

まじまじと見つめ解説をする。

「す、凄い……！どれも重量のある動物……、

パワー系のコンボだ…！」

「すつげえ… あの形態男らしくて俺好きだわ…！」

てかマジで火野の奴何でもアリだな…！」

「ですが、体育祭で2度もコンボを使用しています…。」

コンボの疲労は存じてますので、

火野さんの体力が持つのでしょうか…？」

「そこは一気に決めるんじゃない？」

パワー系なら一撃を期待して。」

「でも、相手は爆豪だけ？爆破を使ったスピードに

手も足もでなかったら意味ねえんじや…。」

緑谷、切島がそう言って驚いていると、

八百万が心配そうに言う、それに反応した耳郎が言い、

上鳴が口を動かす。

「それがテメエの全力か…！」

随分と鈍重な見た目してやがるな…！」

「ああ…！コレ、力が凄い分、動きが遅いんだ…！」

「なら速攻でケリをつけてやらあ!!！」

爆豪はそう言って地面に爆撃をし、空中へ飛ぶと

爆破を利用したトリッキーな動きで空中を飛び回り、

徐々にオーズへ接近していく。

オーズはその場から動かさず、ゆっくりと息を大きく吸う。

そして…。

「うおおおおおおっ!!!」

「!？」

オーズは他のコンボと同様に雄叫びを上げる。

突然大声で驚いたのか爆豪は怯む。

だが、オーズはただ雄叫びを

上げただけではなかった。

その足「ゾウレッグ」を地面に踏みつけ、
重々しい衝撃がリングに響き渡る。
そしてオーズは「ゴリバゴーン」の貫禄のある
両腕を大きく広げると、ある特有の動物の行動を開始した。

「オオオ!!ウオオ!!オオツ!!ウオア!!

ウオオオオオオオオオツツ!!」

「っ!何だ…!?!」

力強い猛声と共に、激しくオーズは胸を叩き出す。

一つ一つがドゴオオン!と鳴り響くその動作は

ゴリラ特有の「ドラミング」だ。

その猛々しい姿に会場の誰もが圧巻し、

観客の声は静まり返る。

爆豪は警戒し、接近するのを止めると、

そのサゴーズの「特性」が発動する。

「っ!?!身体が言う事きかねえ!?!いや違う…!?!」

「何…!?!何が起きてるの!?!」

「地震…!?!」

その会場全てが震えリングのコンクリートは

地割れが置き、サゴーズが立つその一体以外は

全て割れ、砕けて、爆豪を含め重力を無視して

徐々に浮かび上がる。

リング外は影響がないのかのミッドナイトとセメントスは

揺れだけを感じ取り驚いていた。

『な、何だあ!!いきなり地震!?!』

リングの瓦礫と爆豪がふわふわ飛んでやがるう!!』

『違う!!これは無重力!あのコンボまさか、

重力を操れんのか…!?!』

『ドラミングだけでこの会場のデカイ範囲が

許容範囲内ってか!? 麗日と完全に上位互換じゃねえか!!』

「うわわ!？」

「み、皆落ち着けー! うあつ!？」

揺れ出す会場、観席の緑谷達は騒ぎ出し、

飯田は落ち着かせようと席を立つが、その揺れは大きく、
転げてしまいそうになる。

「ど、どーなってるんだ!? 会場全体が揺れてやがる!？」

「チート過ぎるぞ火野おおく!!」

切島は叫び、峰田は椅子に捕まり泣きながら声を上げる。

その間、麗日も椅子にしがみつき揺れの耐性を備えてるのか
意外と冷静な素振りを見せ、オーズを見届けていた。

ふと、麗日はオーズこと火野が言っていた言葉を思い出す。

麗日さんの戦い俺にとっては無駄じゃあないかもねつ。

「…凄いけど…ズルいわ、火野君…つ。」

「うっぜえええ!! クソがあああ!!」

「オオオオ!! ウオアアア!!」

爆豪は宙に浮きながら身動きが取れない状態に苛つき

声を上げるが、ドラミングは止む事なく、

オーズは叩き続ける。リングはほぼ半壊状態となり

足場があるのはオーズの立つ位置を含め、

線のある外側部分だけだった。

このままじゃあ重力で場外に押し出されると

思ったのか、爆豪は無重力状態でも

身体は動けると気付き、両手を合わせ、オーズに向けた。

スタンダレネード

「閃光弾」

「っ?!眩しっ?!」

爆豪の手の平から眩い光が放たれ

ドラミングをしていたオーズは諸に目に光が差し込み、
両腕で塞ぐ様に顔を背ける。

その瞬間、地響きが止み、宙に浮いていた

瓦礫、爆豪を含め落下し、無重力が解かれる。

『爆豪新技でオーズの地響きを止めたあ!!』

あー…揺れに酔った…』

プレゼント・マイクは嗚咽をしながら実況する最中、
爆豪は空中を爆破で空中を飛び、その爆破の回数は
徐々に勢いと速さが増して行く。

「その重力操作はゴリラの

真似しなきゃできねえみてえだなあ!?

その前に!俺が爆速で終わらせてやるよ!!!」

「ぐっ…!? (目眩が…!!次の技で決めないと…

いや!決める!!)」

爆豪は宙からオーズに向け、爆風で加速し、
急降下でオーズに突撃する。

更に加え、爆豪は爆破を利用し、その身体は
錐揉み状となって急加速でオーズに接近する。

そしてオーズもオーズキャナーを取り出し
オーズドライバーへとスキャンした。

スキャンニングチャージ!

「うおおおおお……!!!」

「(っ!?吸い寄せられる…!!アホが…!
ソレ利用してやるよ!!)」

オーズは気合いを入れるかの様に両腕を大きく広げる。
錐揉み状で急降下する爆豪は発動した重力に
引っ張られる感覚に襲われるが、爆豪はそう思いながら
その勢いに任せてオーズに接近し、その手をオーズに向ける。
それと同時にオーズの頭、拳にエネルギーが纏い
互いの大技が激突した。

「ハウザーインパクト
榴弾砲着弾!!!」

「せいやあああああああ!!!」

衝撃と爆発がぶつかり、爆風が空へと舞い上がり
その威力は突風となり会場に風圧が襲い掛かる。

『だああ!?本当A組どんな教育してんだよおお!!
爆発大好きかよ!!』

『知らん。それに緑谷の時よりはマシだろ。』
衝撃にひっくり返るプレゼント・マイクに
平然と座る相澤はそう言っけてリングを見ていた。
会場の全員がその突風に耐え、煙に巻くリングを
くぎづけで確認する。

そしてその煙は徐々に晴れ、その戦況は目の当たりにされた。
リングに持ち堪えていたのは変身が解かれた火野、
そして、吹っ飛ばされたのか場外に爆豪が倒れていた。

「はあ…はあ…!!っ…っはあ…!!」

「っ！ば、爆豪君場外！火野君…決勝進出!!」

『ひ、火野の勝利だあああ!!!!』

爆豪特大火力に勢いと回転を加えた人間榴弾を

火野の猛烈パンチ頭突きみたいな技で打ち返されたー!!

敵無しすぎるぜオーズく!!!これで決勝に進出!

そして！お前らが待ち侘びた決勝戦だあああ!!』

W A A A A A A A !!

歓声が響き渡り、足場のリングに座り込む火野は息を切らしながら場外へと飛ばされた爆豪を見る。

爆豪も意識はあるみたいだが、その拳をずっと

地面に何度も、何度も叩きつけていた。

「クソ…クソ…クソおお…!!!!」

俺は、完膚なきまでの一位を…!!!!

クソがあああああ…!!!!」

「爆…豪…君…」

片腕を両目に当て、掠れ声で爆豪は言う。

その目を隠した腕の下から、一滴の滴が流れていた

事を、火野は見過ごさなかった。

No. 35 その手は受け止める

『早いところ決勝戦……と言いたいところだが』

Sorry! リングの修正に入るから、

それまで少し休憩だぜ!』

プレゼント・マイクはそう言って、

壊れたリングの瓦礫を工作用のロボットが数台、
そしてリングの補修をセメントスが行っていた。

その間、火野はコンボを使いすぎた反動が大きく、

動けない状態だったので控え室で休みをとっていた。

支給されてる飲料水を飲んでいると、

突然扉が勢いよく開かれた。

「火野君!!」

「ブフツ!?!:…凄いデジャブ:…どうしたの皆?」

飯田、緑谷、麗日の3人が入ってきて

火野は水を吹き出し、怪我した緑谷を見に行った事を
思い出し呟くと、3人は駆け寄る。

「大丈夫か火野君!? 君のコンボは強力だが

試合後の君が千鳥足だったので心配したぞ!」

「サゴーズ:…ってコンボ凄い強力だね!」

あのかっちゃんに勝つなんて:…本当凄いや火野君!」

「はは:…まあたまたまだよ:…」

爆豪君の攻撃半端じゃなかった:…

サゴーズはコンボの中でも頑丈だから

何とか耐えれた感じかな:…」

「防御力に備えて攻撃力も倍増:…」

動きは劣るけど重力を扱えるコンボ、反動は凄いが
他のガタキリバも分身の特性を持つてるし

火野君のオーズはほぼ敵無しの能力じゃないか

これはもう火野君だけでもブツブツブツ:…」

「相変わらずブレないな緑谷君!!」

飯田、緑谷はそう言い、火野は苦笑しながら

反省点を述べると緑谷は考察をふまえてブツブツと早口で喋りだし、独特なポーズで飯田はツツコむ。

すると、麗日は火野前に立ち、両腕を

ぶんぶんと振りながら口を動かす。

「火野君！凄いやけどズルいよちくしょう！

私の「個性」より色々と凄いや！身体大丈夫!!」

「落ち着きたまえ麗日君！話したい事が

重なってしまってるぞ！…しかし、俺も

あのチーターの「個性」のスピードに劣ってる…。

俺ももつと精進せねば！」

「あ、あはは…なんかごめんね…うつ…。」

麗日の言葉に飯田はツツコむと火野は目眩がしたのか

身体がふらりと揺れ、持っていた飲料水を離し

机に溢れてしまう。

「ひ、火野君!？」

「大丈夫?!?水…!？」

「う、うん…ちよつと頑張り過ぎたかな…。

…：…：そういえば…、爆豪君はどうしてるの…?」

緑谷、麗日が心配し、麗日は机にあった布巾を見つけ

溢れた水を拭いていた。

「爆豪君? 観席には戻っていなかったぞ?」

「多分かつちやんの事だ…。火野君に負けたのが

相当悔しかったんだと思う…。」

「完膚なきまでの1位!…って言ってたけど

見事にどんでん返しされちゃったね…。」

飯田、緑谷、麗日の言葉に泣いてたよ、と

言おうと思ったが火野は黙り込んだ。

自尊心の塊と言えど、今回の体育祭は本気で

勝ちに行きたかったのは爆豪も同じ。

これ以上プライドを傷つけるのは人として
絶対に言つてはいけないとそう思っていた。
火野の表情を見て察したのか3人は黙り
沈黙の空間が漂う中、それを壊すかの様に
飯田が突然震え出す。

ヴヴヴヴヴヴ!!

「「うわぁ、何だ!?!」」

「電、話、だ。」

バイブが起動したみたく震える飯田に

火野、緑谷、麗日は驚き声を出す。

飯田も声を震えながらスマホを取り出し画面を確認する。

「……母さんからだ。すまない、電話をさせてもらう。」

「電話か……うんっ、わかった。」

「ああ、火野君。今は身体を休めて

……決勝、頑張るんだぞっ。」

「……うん、ありがとう。」

飯田はそう言つて扉を開け、控え室から出て行く。

そして、この時の緑谷達は知らなかった。

飯田の兄が敵に襲サイランわれたことを……

火野に対して言った言葉が今日で最後になる事を……

☆☆☆☆☆☆

場所は保須市……

ヒーロー社会に乗じて活気に栄えたその街に

とある事件が次々と起こっていた。

名のあるプロヒーロー達が刃物で斬りつけられ

無残な死を遂げ、次々に殺害される事件だ。
犯人の痕跡も何も残っていないその手際に
警察は手をやいている最中、今日もその事件は起きる。
1人の男性が工場のタンクの上に身を置き、
警察が現場を調べている様子を見下ろし眺めていた。

「…おまえらは気付きもしない……。」

男は喋り出す。包帯状のマスクを身に着け、
ボロボロの長い赤のマフラーとバンダナを身につけ
身体のうちこちに刃物や刀が装備されている。

見た目は完全に敵^{サイラン}そのものの風格だった。

「偽善と虚栄で覆われた…ハア…、歪な社会。」

ヒーローと呼ばれる者ども…俺が気付かせてやる…。」

「探しましたよ、”ヒーロー殺しステイン”。」

そう、この男こそ連続殺人鬼、

ヒーロー殺しの異名を持つ、”ステイン”。

ステインはそう言うのと背後から男性の声が聞こえ、
背中に背負ってた刃こぼれた刀を抜刀し、
背後に素早く振りかざす。

だが、斬った感触が無く、男は疑問を抱き振り返ると
そこにいたのは黒いモヤがかかった男性、
ワープゲートで出現した黒霧だった。

「落ち着いてください…我々は同類……。」

「！」

「悪名高い貴方には是非とも会いたかった…、

お時間少々、よろしいでしょうか…？」

「……ハア……！」

黒霧は丁寧な言葉でそう言ってワープゲートを拡大する。
ステインは不気味な笑みを浮かべながら息を吐くと
そのワープゲートの中に入って行った。

☆☆☆☆☆☆

『よおーっし!!またせたなエブリバディ!!』

いよいよファイナーレのバトルだあ!!』

『雄英1年の頂点がここで決まる!決勝戦!火野VS轟!!』

ワアアアア!!』

補修も終え、新たなリングへと登り、

互いに向いて立つ火野と轟。

歓声が響き渡るその中で今、A組同士の

トップ争いが開かれた。

「……………」

「…コンボってやつの影響か？」

そんなんで戦えねえだろ。」

「大丈夫…!むしろここまで来て引き下がれないよ…。」

「宣戦布告、俺にもしてたよね轟君…!」

「なら、それを受けないと同じクラスメイトとして

今後の君に顔向けできないっ…!変身!」

立っているだけでもしんどそうにする火野に、

轟は心配するが、火野は頬を両手で思い切り叩き、

無理矢理意識を取り戻し、タトバのコアメダルを

オーズドライバーに嵌め込み、右腰のオースキヤナーを

手に取り、掛け声と共にドライバーにスキャンした。

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

「俺は、後悔したくない……この手で、君に勝ちたい！」
「……火野……、ああ。」

タトバコンボへと変身したオーズはその手を
強く握り、轟に言い放つ。

そしてその覚悟を見た轟も頷く。

火野はオーズに変身し、轟は右手に力を入れたのか
冷気がその腕に漂い始める。

お互いに準備が整ったのを確認し、
プレゼント・マイクは開始の合図を振り下ろした。

『両者が今!!START!!』

その瞬間、轟は右手を振り上げ、瞬く間に

轟が立つ位置とその背後の足場以外のリングは氷結し
瀬呂との戦いの時みたく、会場ドームの並の

冰山となり、先制攻撃を仕掛けてきた。

『いきなりかましたあ!!能力わんさかの火野オーズが
氷漬けにされたかあ!?!』

これは流石の火野オーズも早くもリタイアなのかあ!?!』

「うつわ!?!またいきなりかよ!?!」

火野の奴もこれ食らったら流石にアウトじゃねーか!?!」
「相変わらずすっげーな轟の氷……!」

つか、何で最初からコンボ使わねーんだ?

あのすげえ力で初っ端から全力出せば

あの氷も目じゃなかっただろっ?」

プレゼント・マイクに続き、あの氷を食らった

本人の瀬呂は両手を頭に押さえて叫ぶと

切島は疑問に思ったのか驚きながら呟く。

すると、緑谷がそれを説明するかの様に考察を話す。

「火野君の『個性』も僕達と同じ身体機能の1つ…。」

オーズ自体が強力な戦闘スーツみたいなものだけどそのコンボはその力を上乘せする

とんでもない能力付きの力…。今までの考えだと

まず基本フォームのタトバで相手の出方を見て

そこからメダルを変えて戦うスタイルじゃないかな…。」

「なるほどな…！基本で始めて最後の切り札で

コンボを使うのか！最初からすっげえ能力使ってたら

相手もへこんで良い試合ができなくなるもんな！

スツゲーぜ火野！男の中の男だ!!」

「…火野君。反動が少ない基本スタイルで戦っている…。」

これまでの轟君の戦いを知っているはずなのに…。」

やっぱり疲労が蓄積されて全力を出せれないんだ…!」

緑谷の言葉に切島は彼なりの解釈で納得し火野を褒める。

だが緑谷は前試合の反動で疲れきっていた火野を知っている為、タトバで戦う彼を見てそう思っていた。

そして、数秒が経過し、氷結されたリングにいる轟は腰を低くし、自身が凍らせたその前方を見て

警戒していた。その時。

クワガタ！

ゴリラ！

バッタ！

「フウンツ!!」

「っ!!」

氷山の奥からメダルチェンジの音声が聞こえた瞬間、

奥から氷が砕ける音が聞こえ、轟は警戒すると、前方の氷が勢いよく砕かれ、そこにいた

「ガタゴリバ」の姿のオーズが氷を

腕のゴリバゴーンで粉碎し、現れる。

「かき氷みてえに砕いて進んできたのか!？」

「んなケツタイな!？」

リングから一番近い客席から一般人が2人そう叫ぶと、オーズはバツタレッグで跳躍し、轟の頭上を飛び交う。

「てめえ、どうやって氷を…?」

「俺の足のバツタ!脚力は半端じゃないよ!

ギリギリで蹴って粉碎して、メダル変えて壊して来た!!」

「イカれた『個性』だな…!」

空中を跳ぶオーズに悪態を吐く轟は

すかさず右手を振り上げ、氷結を頭上へと

突き出し、オーズに攻撃しようとする。

「はあっ!!」

「っ?!電撃か…!」

オーズは頭部のクワガタヘッドを使い

緑の電流を放電し、轟の氷結は砕かれ阻止した。

砕かれた氷の破片が轟の周囲に落下し、

轟は顔に当たらない様両手でガードしていたが

その一瞬の隙をついてオーズはリングの地面に着地し、

轟の背後へ回り込むと、その背中の左側の服を掴む。

「せいやあ!!」

「っ!!!(氷が出せねえ左側を…!?)」

オーズはそのままリング外へと投げ飛ばすが、

轟は投げ飛ばされながらも右手を地面に当て

右腕を大振り、氷を生成。

それをスケートの様に曲がりながら滑り、

場外を免れる。

『水壁で場外アウトを回避——!!』

『楽しそ————!!』』

プレゼント・マイクは叫び、その間

轟はそのまま氷山のオーズが砕いた出口まで

氷の道で移動し、速度を止める。

「…ははっ…。やっぱそうは行かないよね…。」

「火野、お前は本気でこないのか…?」

「そう言う、轟君…こそ…。左側の炎使わないの…?」

戦う前から疲労でふらふらのオーズは

轟との戦闘で更に消耗をしてしまい、

立つだけでも精一杯なのか、途切れ途切れの声で

オーズに言われた轟は左腕を見つめ、口を動かす。

「悪いな…。緑谷との戦いで、自分が…どうするべきか…」

自分が正しいのかどうか…わかんなくなっちゃってんだ…。」

「…轟君…、わか…うっ!? ああ…!」

轟の言葉にオーズは何か言おうとしたが、

オーズはどこか痛むのか身体を押さえ、声を上げた瞬間、

変身が強制で解かれ、火野はその場に膝をつく。

『ど、どうした火野——!!?』

変身解いちまったら戦えねーだろおお!!?

決勝戦だぞオイ!? そんな終わり方でいいのかよ!』

『コンボの使い過ぎか…。疲労が蓄積してる中

無理矢理決勝戦で再度変身して、

ダメージが今来たんだろな…。」

こりや、勝負はもう決まったな…。」

「火野君!」

「控え室のあの状態回復してなかったんや…!」

プレゼント・マイクは叫び、相澤はため息を吐きながら

そう答えていると、緑谷が声を出し、麗日も

方言が出てしまうほど驚いて火野を見ていた。

そして徐々に会場がざわつき始める。

この会場で決勝戦を待ち侘びていない人なんて殆どいないだろう、無理もないはずだ。

審判のミッドナイトが火野に近づこうとすると、

火野はミッドナイトに右腕を突き出し

「待ってください…。」と弱々しい声で止める。

足が震え、呼吸が乱れながらも火野は立ち上がり、轟を睨む様に視線を向けていた。

「おい……まさか、その状態で戦う気か…?」

「はあ……はあ……ま、まだ……、動ける……からね……！」

俺はまだ……参ったなんて……一言も言っていないし……

場外負けもしてない……！まだ、やれる……!!」

さすがのその姿に轟も心配してしまっていた。

だが、満身創痍になりながらも火野は言い放ち、

ファイティングポーズをして構える。

轟は大きく息を吐くと額に手を当て、俯向く。

「……緑谷といい、お前といい……何でそこまでして……。」

……いや、いい……。お前は凄い奴だ……。

俺が認めてやる。だから責めて、

俺の手で勝敗を決めてやるよ……！」

轟はそう言っって右手から冷気を放ち、

その腕を振り下げると氷の道が出来上がり、

轟はその上に乗ってスケートみたく火野に

滑りながら突っ込んで行く。

「火野、これで終わりだ！」

「っ!!?」

この時、誰もが勝敗が決まったと察していた。

火野にはもう変身する力も残っていない。

立つだけでも、やっとな状況。

そして、火野は半ば諦めていた。

もうこの体で、轟に対抗できる手段がないからだ。

オーズに変身しなければ、その力は使えない。
言ってしまうば「無個性」の少年へと成り下がっている。
火野は迫る轟を見て、その構えていた腕を降ろそうとした
その時。

「俺に勝った男が!!そんな奴に負けんじやねえぞ!!火野オオツ!!!」

「っ!!爆豪…君…!!?」

聞き覚えのある声が会場に響き渡る。

火野はその声が出した方角を見ると、

歓席の柵に腕を置いて前屈みとなって叫ぶ

爆豪が視界に入る。悔しい表情を見せるその顔は

今にもぐしゃぐしゃになりそうになっていた。

「かっちゃん!?!」

「爆豪君…!?!が、応援しとる…!?!?」

その声はA組の歓席にいた生徒達にも聞こえ、

緑谷と麗日は目を見開いて驚いていた。

突然の爆豪の応援に啞然とする火野は

我に返り、突っ込んでくる轟を見て、

残る力を振り絞って再度ファイティングポーズを構える。

火野は意地でも勝ちたいと心の中で叫ぶ。

「(ここで、諦めるわけにはいかない…!!
最後まで…全力で…!!)君に!勝つ!!」

「っ!!うおおおっ!!!」

その勇姿を、轟に見せつけ、轟は声を上げ

火野に冷気を纏ったその右腕を大きく振りかざした。
パキイイ!!と凍てつく音が響き渡る。
轟の目の前は開始早々の氷結とまではいかないが、
火野が見えなくなる程の氷が繰り出されていた。
誰もが終わったと、そう思ったその時だった。

ポオオオ…!!

「っ!?!熱い…!!?」

瞬間、その氷に熱が伝わり、轟は驚き

自身が発動した氷から身を引く。

なんと氷は溶け出し、驚く事にそこから
炎が立ち上がっていた。

「……………つたく、どこにいても、

お前は相変わらずボロボロだなあ……………映司。」

「っ!？」

その炎の中から出てきたのは火野映司だった。

だが、轟はそれに驚いてはいない。

発言した時、全く違う低い男性の声と

その突き出していた異形な形をしていた右腕に
轟は驚いていた。

「てめえ…何者だ…!？」

状況が理解できない中、轟は真つ先に

そこにいる火野は火野じゃないと思ったのか

焦りを感じ、問い掛ける。

そして、火野の見た目をした男はニヤリと頬を上げ答えた。

「…気分がいいから教えてやるよ…。」

『アंक』だ。」

No. 36 炎翼コンボ

「な、何だありやあ…!!?」

火野の手が燃えてるぞ!!え…そんなじや何か…?

火野って変身しなくても“個性”使えるのかー!!?」

『いや、オーズにならねえと』

“個性”の力が使えねえはずだ…。

どーなってるんだあいつ…!!?」

突如、轟の攻撃により発生した右腕から炎を噴き出す

火野にプレゼント・マイク、相澤は実況を無視して

驚愕していた。

それはまた観客も同じで、会場は状況を把握できず、ざわざわと騒めく。そして、A組もまた然り。

「な、何だよあれ…!!?」

「ひ、火野ってあんな事もできんのかよ…!!?」

「内に秘められた力…! 圧巻…!」

飯田と爆豪を除き、A組の全員もその姿を見て驚き、

上鳴、峰田、常闇はそう眩き驚愕する。

「…んだよありやあ…!!?」

「ん? おお爆豪…。火野の奴すつげえな…!

あんな“個性”まで隠し持ってたのかよ…!」

「(隠し持ってた…!!? あんの野郎…!!?!!」

じやあ何か…? 俺の時は

本気じゃあなかったって事か…!!?!!」

…舐めプしやがったなあ…!!?!!」

ふと、A組の歓席に戻ってきた爆豪はその姿を見て

棒立ちしており、切島が気付き声を掛けるが、

爆豪は切島の言葉に反応して火野に苛立ちを覚え、

その表情は険しくなっていた。

「凄い…!でも火野君雰囲気はなんか違う…!!?」

「う、うん…! (どうなってるんだ…!!?)」

火野君の「個性」は変身しないと使えないはず…
炎なんて使えるのか?! いやそれより…!

あの右腕…! アレは何だ…!!?

歪な形をしている…! あれじゃあまるで、

敵ヴァイランみたいじゃないか…!?!」

麗日はその見た目、髪が金色のメツシユが入った

頭髮に変わっており、違和感を覚えて眩くと

緑谷は口元に手を当て、汗を流しそう思っていた。

「つ……………何なんだお前……………」

「あ……………さつきも言っただろ。俺は『アंक』。」

まあ、お前等で言うこいつの…、

映司の「個性」…と言っておくか…。」

「…その腕も、炎も、人格も変わっちゃまう

「個性」なのか……………? わかんねえな…。」

火野の「個性」はオーズの筈だろ…。」

人のまんま「個性」が使えるなんてそりやもう別の「個性」だ

……………。てめえ、本当に何者なんだ…?」

整理が付かないのか轟は何度も問い掛け、

火野：否。火野の身体を使った「アंक」はそう答え、

ニヤリと頬を上げ、赤をベースにした怪物の様な形に、手首から下

の部分には鳥の様な羽が付いている

その右腕を、刻みよく動かしていた。

一方で轟は初めて見るそのアंकに警戒し、

その場から動かず額から汗を流し、アंकを目視していた。

—————

火野映司は轟の氷結が迫る瞬間、その意識は途絶えていた。そして、彼は目を覚ます。だが、そこは轟と戦っていたリングの上ではなく、程々に輝く様な壁がある小さな“空間”だった。

「……………ここは……………？俺…確か…轟君の攻撃が来て……………」

「お前の心の中だ、映司。」

状況が分からず、眩くと、背後から声が聞こえる。

火野は振り返ると、そこには同じ背丈をした少年がいた。

半袖の黒シャツに右腕の部分は細工をしてあるのか関節部分をジッパで止め、そこから先は縫い付け無理矢理服にしたような赤色の布になっており、ズボンも赤色のジーンズ。赤が目立つその服装に頭部は独特な髪型をしており、左刈り上げ、右カール。上編み込んで、左斜め後ろがストパーと手の込んだ様な金色のヘアスタイルだった。

「…えつとく……………君、誰…かな……………」

「……………」

火野は見覚えのない少年に誰かと問うと、その少年、“アंक”は無言で火野を見つめる。だが、何故かその瞳は、何処か悲しげな瞳を見せていた。そしてアंकは息を吐くと、その口を動かした。

「俺の名はアंक……………。分かりやすく、

率直に言えば、お前の“個性”……………ってやつか。」

「…え？……………え！……………ええっ!？」

ちよ、ちよつ、ちよつと待って!どういうこと……………!？」

俺の「個性」ってオーズじゃないのっ!？」

それを聞いた瞬間、火野は2度驚き、

困惑しながら理由を聞くと、アंकは続けて
思いもよらない事を発言する。

「お前は俺の…俺達が元居た世界で死んだんだよ。」

その発言に、火野は更に困惑する。

「死ん…?ま、待つて…!本当に待つて…。」

全然理解が追いつかない…。」

「…まあ、そうだろうな…。」

俺もこうして生きてるお前を見てびっくりだ。

オマケに、お前の高校生姿は初めて見るが…、

間抜けそうなガキになっちまってるなあ。」

「間抜け…!?!アंकだっけ…?君の方こそ、

随分と不良みたいな格好してるし、

俺と歳も変わらない見た目してるじゃんかっ。」

「は?何言つて…?…?」

火野はムツとして言い返すとアंकは

立っている火野と背比べをし、身体のあちこちを確認する。

目を見開き驚くアंकは舌打ちをし、

悪態を吐いていた。

「ちっ…!影響が出るってこの事か…。」

…:まあ、姿くらいどうとでもなるから

気にする必要はないか…。」

「てか、1人で盛り上がって悪いんだけど

俺全然状況掴めてないよ!

俺試合中だったよね!?!あー、こうしてる間に

絶対負けてるよお…!?!ああ…:…。」

「安心しろ、ここは心の中だ。

どんなに喋ろうが、現実じゃ対して影響がない。」

「え?…:そうなの?良かったあ…。」

って良くない良くない!試合の途中っ!!」

「おい映司落ち着けつ。……ったく。

お前は本当……変わらないな……。」

忙しなくソワソワする火野に、

アंकは落ち着かせようとすると、

急に彼は涙を流し始めた。

「え？…何…どうしたの…？」

「……！馬鹿が…っ!!」

火野はアंकの突然の涙に驚くと、

アंकはそう言つて火野の両肩に手を置き

その口を動かした。

「世話やかせやがつてこの大馬鹿がっ!!」

あの時、俺がどれだけ…!!…っ!!

少しは残された方の気持ちを考えてろ…!馬鹿がっ…!」

「アंक……。……なんか、ごめんね……。」

アंकは大声を上げ、しゃくりあげながら涙を流す。

その表情を見た火野は謝り、訳ありの涙だと感じて

口を動かす。

「……ねえアंक。俺が…死んだつて話。

聞かせてくれないかな?ここならいくら喋つても大丈夫なんだろ

……?俺、……

…今の俺はアंकの事何も知らないし。」

「……ああ、そうだな……。」

火野の言葉に鼻を噉りながらアंकは答え

肩に置いてた手を離し、何歩か歩き、アंकは語り出した。

前の、火野映司という人物がいたオーズの世界の出来事を。

その話は現在の火野とは考えられない程壮大な話だった。

アंकとの出会い

コアメダルとセルメダル

欲望
クスクシエ

欲望の怪人 “グリード”

メダルの器

“ヤミー”

仮面ライダーオーズ

800年前の錬金術士

800年前の王

争奪戦

鴻上フアウンデーション

アंकの欲望

最終バトル

コアメダルの復活

火野映司の最期…

「…………とまあ、ざつとこんなもんだ。

馬鹿なお前でも理解したな？」

「…な、何か凄いな…。驚き過ぎていまいち

まだ理解…できてないというか…。

ていうか、その話が本当なら

アंक “個性” じゃないだろうっ。」

「何だ？強ち間違つてはないはずだが？

俺の知ってる筈の映司にまさか

これまでの生い立ちを話す事になるとはなあ…。」

いつの間にか2人は座り込んでおり、

説明が終わったアंकの言葉に、火野の目は上の空だった。

アंकは軽く頭を搔いてぼやくと、
火野は疑問に思った事を呟く。

「…俺、死んでまた別世界の人として
生き返ったって事になるんだよね？

それって漫画や小説で見た事がある『転生』…ってやつ。
本当にそんな事があるんだな…。

でも、何でオーズのベルトを持ってて
アंकもこっちにやって来れたんだ？」

「…まあ、色々とあつたんだよこっちも。」

「いやそこは教えるよつ。…まあ深くは詮索しないけど。

じゃあ、この世界に前の世界にいた人達は？

後藤さんもいたし…、比奈ちゃんもいた…。

他の人達はまだ見てないけど、

もしかしているって事だよね？それは何で？」

火野は問い掛ける。元居た前世界の人物が
何でこちらに居るのか。

アंकは数秒黙ると、火野の顔を見て口を動かした。

「………さアな。」

「え？ちよ、はあっ!?!何でだよー！」

余りにも予想外の言葉に火野はツツコむと
アंकは舌打ちをし、面倒くさそうに喋る。

「知るか…こっちが聞きたいくらいだつ。

俺はお前の中にいたが、他の奴らがいたのは…

悪いが、俺も知らない。」

「ええ、それじゃあ謎じゃないか…。

…おい待て。アंक、お前俺の中にいたって
それっていつからだ？」

「いつ来れたのかは俺も分からない。

だが、意識が保てる様になつてきたのは

あの高校の入試試験つてやつに

合格して通知が届いたぐらいだなあ。

…それがどうした?」

「合格通知の時から…? そつから記憶はあるつてこと?」

「途切れ途切れだがな。…おい、何故そんなに

引く様な顔してやがる?」

「いや…ずつと俺の中にいたつて考えると、

なんか気持ち悪くて…。」

「ああ!? 気持ち悪いのはこつちだ!」

気付けばお前の視界が映り込んで、

挙げ句の果てに風呂やトイレの視界が」

「どわつたつた!!? や、やめろよ気持ち悪い!!」

プライバシーの侵害だろそれ!!」

「馬鹿が! お前の入浴なんか誰か気にするか!」

話が段々と逸れて2人は立ち上がり言い争い始める。

そしてアंकは右手を突き出し、火野の頬を掴み上げると

更に文句を言い始めた。

「大体お前! この祭りみたいな騒ぎの時、

スピーチで面白くもない宣言しようとしてただろ!」

「スピーチ…? …ちよつと待てお前まさか!」

「ああ。この祭りは勝つ為の行事なんだから?」

少しだけ表に出れそうだったから俺が宣言してやった。

あんな奴らに、オーズが負けてたまるかっ!」

「あの時お前だったのかよ!!?」

通りで一瞬記憶が飛んで罵声やブーイングが来たと思つた!

アレのせいであの後大変だったんだぞ!」

「知るか!! まだ言う事はあるぞ!」

お前コアメダルの使い方が下手すぎんだよ!

しかもこのトーナメントみたいなやつで

コンボを2回も使いやがった！馬鹿か！

コンボで身体が持たないのは知ってるだろ！」

「知らないよ!?それは前の世界の話だろ!？」

ああでもしないと勝てない相手だったんだよ！」

「そこは使い分けろよコアメダル!その為の3枚だろが!」

「だから知らないって!!」

ヒートアップしていく2人だが、疲れたのか

息を切らし、2人は何も言わなくなっていた。

すると、アंकは息を吸い、急に背中を向けて口を動かした。

「……まあ、その危ない状況のお陰で俺は出て来れた……」

「アंक……」。

ねえ、そろそろ戻らない？

もっと色々聞きたい事あるけど、

なんか轟君を待たせてる気がして……。

……あ、でも大丈夫かな?今戻ったらまともに

戦える状態じゃないし……、この空間は全然疲労を感じないけど……。」

「フン、精神しかない状態なんだ。

疲れなんかあつてたまるか。

……俺が出てこれたなら、身体に入つてサポートができる。

少しの間は動ける筈だ。だが、終わった後は

恐らく気を失うぞ。それでもいいか?」

「いいよ!それで戦えるなら尚更っ。」

アंकの言葉に火野は即答で答えると

アंकは2枚の「赤色」のコアメダルを取り出し

火野に見せた。

「こいつで一気に決めろ、映司。

今持っているコアメダルの中でも

1番強い最強のコンボだ。」

そう言つてアंकは差し出す。

話を聞いた限り、そのメダルは

アंक自身のメダルで間違いないだろう。
自分のメダルを最強と言っていた事に
火野は笑みを浮かべるが、それはきつと
彼の中で火野を何度も助けてくれた
思入れのあるコアメダル。

「……ありがとう、アंक。」

「…フンっ。礼を言うのは勝ってからにしろ。」

「うん！そうだね…。」

アंकからその2枚を受け取ると、
火野の意識は徐々に薄れていった。

――

意識は現実に戻り、火野の視界には
先程までいた光景が広がっていた。
目の前には警戒して距離をとっている轟。
そして、火野はいつの間にか握っている
赤色の2枚のコアメダルを見つめ、
ドライバーから3枚を抜き取り始める。

『お？おお！？火野の風格が元に戻ったぞ！？』

しかも腰のベルトをつついてやがる！！

オーズに変身するのか！？待ってたぜこの野郎！！』

『まだ戦えるのかあいつ…?』

「…!火野…なのか?」

「え?ああつ、うん。ごめんねつ。色々と驚かせたよね?」

会場の人、轟視点では意識が戻った火野の姿が

憑依していたアंकから歪な腕が消え、

風格も変わり、噴き出していた炎が消え、

瞬時に元に戻って火野の姿になっていたので

気付いたプレゼント・マイクと相澤は実況を再開し始める。

そして驚く轟は問い掛けると、火野は理解して謝る。

「お前そんな隠し玉があったのかよ…。」

「流石に俺も驚いたな…。」

「ああ…まあ…うん。また後で話すよ。」

……轟君。さっき言ってたけど、

今はどうしたらいいか分からなくなってるんだよね?」

「…………ああ、そうだな……。俺は…」

「考えるのやめとこうよ、今は。」

「?」

轟の言葉に火野は掻い摘んで言う。

「色々事情があるのはしょうがないと思う…。」

でも、緑谷君も言っていたけど、その力は…。」

君が生まれてから、もうそれは歴とした君の力なんだよ?

無理に左側を使えとは言わない…。」

でも、俺は全力の…“ヒーロー”を目指す

全力の轟君に挑戦したいっ。

だから!今は考えるのを辞めて、お互いに

ベストを尽くす試合をしようよ!

周りの人がどう言おうが関係ない!

やりたい様にやればいい!!だから!

君の力で!君の“個性”で!俺と戦ってほしいんだ!轟君!!」

「っ!!」

火野の強く思いが籠ったその言葉に

轟は目を見開き、圧巻する。

「……お前……さっきまでボロボロだった癖に……」

もう勝負なんて決まりかけてた筈なのに……、

緑谷と言い、お前も……何で、そこまでして……!

俺に肩入れするんだよ……!?!」

「勝負なんて、やってみなきゃ分かんないじゃん……」

それに、今は体育祭っ!学校の行事の1つだよ?

今は周りを忘れて、全力を出し合おうよ!」

火野はそう言いながら、赤色の2枚のコアメダルを
ドライバーに一つずつ嵌め込んでいく。

轟はそれを聞いて鼻で笑うと左側の腕を上げ、

轟の左側は豪炎となり燃え上がる。

『で、出たああー!!轟の炎!!』

最終バトルで出しやがったあ!!!

てか、これまた爆発するんじゃない!?

いやーそんな事はどーでもいい!!

火野!お前も変身して最高のショーを見せてくれえ!!』

『いや教師だろ、心配しろよ。』

「あはは……、ハードル上げるなあ……」

ありがとう轟君。じゃあ俺も、全力で!!」

プレゼント・マイク、相澤の言葉に

火野は苦笑し、轟にそう言つて

タカのコアメダルを見つめ、オーズドライバーに嵌め込む。

そして、オースキャナーを取り出し、

大きく振りかぶり、ベルトにスキャンした。

「変身!!」

タカ!

クジャク!

コンドル!

タ〜ジャ〜〜ドルウ〜〜!

高らかに鳴く鳥の声と共に音声で鳴り響くと

火野の体は紅色の炎に覆い被される様に包まれる。

炎を纏わせる様な真紅のボディに、

今まで使われてた頭部の“タカヘッド”とは異なり

翼を広がる様にサイドに展開、そして顔の部分は

バイザーが覆われ、複眼は真紅の色に染まり輝く

“タカヘッド・ブレイブ”へとなる。

胴体のオーズのシンボルとも言える

“オーラングサークル”はそれぞれの3枚のメダルの

生き物の絵柄が催されるのだが、このコンボは

3つが重なり、まるで不死鳥を表す絵柄となっていた。

これが、アングのコアメダル

“タカ”、“クジャク”、“コンドル”を使った形態、

オーズ“タジャドル”コンボなのだ。

『で、で、出たあー—————!!!

新しいコンボフォーム!!!

ここで火野は切り札をだしやがったあ!!

さっきのは余興だったのかあ!?

そう思わせるぐらいのなんて美しい姿なんだ!!
まさに火の鳥!不死鳥!!最後を飾り立てる
ワンダフルすぎるコンボだああ!!!」

『馬鹿な…っ。あいつ…本当に何でもアリだな…。』

「っ……い…スゲエ……い…」

オーズは両手を広げるとその背中から

孔雀が羽を広げる様に虹色の翼

“グジャクフェザー”が展開する。

その見た目の美しさと神々しきは凄まじく、

轟も含め、誰もがそれを見惚れていた。

だが轟は我に返り、咄嗟に右腕を振り上げ、

氷結でオーズに攻撃しようとする。

「ハアッ……ハアアッ!!!」

オーズは氷結に向かって腕を振るうと

その“グジャクフェザー”が背中から放出され、

無数の羽の弾丸となり氷結に当て、

氷は粉々に粉碎する。

そして、オーズは止まる事なく両腕を振るうと

今度は6つの真紅の羽、“グジャクウイング”を展開し、

オーズはそこから秒速の速度で天高く飛翔する。

「なっ?!飛んだっ?!」

『と、飛んだあああ!!火野オーズ!』

翼を生やして飛んだあ!空から攻める気だなあ!

轟は地面に歩む捕食動物!空から獲物を捕らえるみたく

襲う気かー!!イヤー!やめてあげてー!!』

『大丈夫かお前?』

プレゼント・マイクの言葉に相澤はツツコんでいると

オーズは空中で苦しくなったのか息切れを起こす。

どうやら身体に限界が来てるらしく、
オーズは地上の轟に向かって叫ぶ。

「これが最後の攻撃だよ…!!轟君!!」

「ああ…：全力で！行くぞ！火野お！」

スキヤニングチャージ！

「行くよ…アंक!!」

オースキヤナーでベルトをスキヤンし、
音声が鳴り響くと、オーズは力を貸してくれた
身体の中にいるアंकにそう言って、
秒速でリングにいる轟に急降下し突っ込んで行く。
轟も全身に力を入れ、緑谷の時みたく炎が舞い上がる。

「はああああ!!」

「おおおおおっ!!!」

オーズは急降下の最中、脚部の“コンドルレッグ”が
能力解放状態となり鳥の猛脚の様な足へと変化して
突っ込んで行く。轟は溜まったエネルギーを
放出するかの様に、その左腕を大きく振り上げ
巨大な豪炎がオーズに向かって舞い上がる。

「せいやああああ!!!」

ドオオオオオオン!!!!

豪炎に吞まれるオーズだが、その速度は衰える事なく、轟に向かって突っ込み、轟にその脚が当たろうとした瞬間、大爆発が起き、会場の観客に熱風と衝撃が襲い掛かる。衝撃が治まり、リングを覆う煙が晴れていくと、衝撃で飛ばされ場外に落下したのか。場外で気を失っている轟が発見される。リングに立ち上がっていたのは火野映司こと、オーズだった。

「轟君場外……よって！火野君の勝ち!!」

ワアアアアアア!!

息を切らしてリングに立つオーズは拳に力を入れて、グツと右腕を掲げていた。勝利。その事だけを胸に、今は何も言わずにその事だけを噛み締めていた。

『以上で全ての競技が終了！』

今年度の雄英体育祭一年優勝はA組火野映司!!!』

そして、プレゼント・マイクが言い放ち、雄英体育祭の競技が全て、終了し幕を閉じたのだった。

No. 37 表彰式

『以上で全ての競技が終了！今年度の雄英体育祭一年優勝はA組火野映司!!』

火野の勝者が決定し、会場は歓声の声に包まれていた。オーズの変身が解かれる直後、コンボの使いすぎにより火野は立ったまま意識を失ってしまう。そして、入れ替わるようにアंकが憑依した火野へと風格が変わった。アंकは火野のボロボロな体を見ては小さく苦笑し、独り言のように口を動かす。

「…映司。お前が言っていた“いつかの明日”…。それが本当の意味で叶ってるぞ…。お前がどこの世界に居ようと……。例えば記憶が亡くなったとしても…。俺はお前の手を必ず掴んでやる……。」

あの時の、火野を失ってしまった絶望感。

救う事ができなかつた悔しさ。

そして、今再び合間見えて共に歩む希望。

火野アंकは拳を作り後悔がないよう、歓声の中そう誓ったのだ。た。

☆☆☆☆

「それではこれより!!表彰式に移ります!」

ミッドナイトがそう言うのと体育祭の終了を知らせる花火が打ち上げられる。

会場の真ん中に1年の生徒が集まり表彰式が行われ、その表彰台に立つ火野アंक、轟、爆豪の3人に拍手をする…のだが。

「火野の奴、個性」が発現したって本当かよっ?」

「え、ええ…先程あの個性」のお方に聴いてみたのですが『アंक』…と名乗っていました…。火野さん本人の意識は気を失って変わりにアंकがお身体に憑依してあそこに立っているそうですわ」

「他の事聞こうとしたんだけど無視された。見た目が火野だからウチ、何か違和感しかないよあれ…」

「どーなってるんだ…?火野は個性」2つ持ちなのか?」

「只でさえチートなオーズなのに、あのアंकってやつも個性」だったら本当、あいつ何モンなんだよ…」

「あの選手宣言の時、アंकって人が言ってたらしいよ?」

「やつぱりー?火野があんな口調で喋らないから変だなーって思ったんだよー!」

集まる生徒の中、A組の上鳴を始め八百万、耳郎、砂藤、峰田、葉隠、芦戸と順に火野アंकを見て喋ると切島は息を吐き、3位の爆豪を見て口を動かす。

「まあ…色々あったけどせっかくの表彰式だけ?なのに、あの変な火野に対してずっと暴れてんだよな。何っーか…締まんねー3位だな」

「もはや悪鬼羅刹」

「んゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ!!!」

常闇が呟くその目先にいるのはセメントスが作ったセメントの壁にミッドナイトの拘束具でガチガチに拘束された爆豪が火野アंकを睨み暴れているのだ。口も封じられて言葉は話せないが見ても分かる怒り狂うその態度を露わにしていた。

「…爆豪、何でそんな怒ってるんだ?」

「んゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ!!!」

「とりあえず落ち着けよ…何言ってるかわかんねえ…。…アंक、だったか?お前から何か言ってるやれよ」

2位の表彰台にいる轟は爆豪を宥めようとするが爆豪は治ること

なく、火野アंकを睨み暴れる。轟は溜息を吐き、火野アंकにそう言うと、彼は3位の爆豪を表彰台の高さを利用して爆豪を見遣る。

「……………フン」

「ん ぐん ぐん ぐん つつ!!!」

「いや、煽ったら逆効果だろ…」

火野アंकは見下す様に悪戯心が籠った鼻で笑い、爆豪は更に怒り狂う。その様子を見た轟はそう言って再び溜息を吐く。緑谷と火野と戦ってからか、ガンギマっていた轟の表情は吹っ切れたのかどうか、少しだけ優しい表情になっていた。ミッドナイトが中継されてるカメラを見つけて口を動かす。

「3位には爆豪君ともう1人飯田君がいるんだけどちよつとお家の事情で早退になっちゃったのでご了承下さいな」

「メディア意識…!?!」

「飯田ちゃん張り切ってたのに残念ね」

ウインクするミッドナイトに常闇はツツコみ蛙吹は人差し指を顎に当てそう言っていた。飯田は兄であるプロヒーロー ینگゲニウム^{ウイラン}が敵に襲われたらしく、心配で早退したらしい。蛙吹の言葉に隣にいた緑谷は浮かない顔をし、空を見上げていた。

「さあメダル授与よ!!」

今年メダルを贈呈するのはもちろんこの人!!」

ミッドナイトは声を上げ、会場のドームの上を指し示す。そこにいたのはオールマイトで、そこから勢いよく跳躍し、表彰台の前へと豪快に降り立つ。

「私が、メダルを持って来」

「我がヒーロー、オールマイトオ!!」

「あ、……………カブったっ…」

台詞を言いながら参上するオールマイトだが、同時にミッドナイトの言葉に被ってしまいオールマイトは震えながら悲しげな表情をミッドナイトに見せる。気を取り直し、オールマイトは3位からメダルを授与しようとするが、3位は爆豪だった。

「まずは爆豪少年……………つとこりゃあんまりだ…。1位にはなれなかつ

「たけど、3位おめでとう！」

口枷を取ってあげると爆豪の顔は怒りを顔に表す程物凄い形相でオールマイトに言い放つ。

「オールマイトオ……!!俺は完膚なきまでの1位……!頂点が欲しかったんだよオ!!こんなメダル絶対要らねえ……!しかもあの三色野郎!!俺との戦いは全力じゃなかった!舐めプな真似しやがったああ……!!だが次だあ……!次の体育祭で俺はぜってー1位取って!この場にいる奴らも!あの三色野郎も見返してやらあ!!」

「顔スゲエ……!だ、だがその心意気は素晴らしいぞ爆豪少年!その不変の絶対評価を持ち続けられる人間はそう多くない!受けとつとけよ!『傷』として!忘れぬよう!」

「要らねつつつつてんだろがっ!!」

オールマイトは本音が漏れながらも銅のメダルを首に掛けようとするが、爆豪は顎を上げて掛けさせまいと嫌がる。だがオールマイトは「まあまあ」と言っただけで力を入れると口に啞えさせる様に掛けてしまいが、そのままにして今度は2位の轟に近寄る。

「轟少年、おめでとう。自分の『個性』を出し切って戦えた様だね。見事だったぞ!」

「はい……、最初は緑谷にキツカケを貰いましたが、火野と戦うまで分からなくなってしまうました。貴方が奴に気にかけるのも少し分かった気がします。俺も貴方の様なヒーローになりたかった……。ただ、俺だけが吹っ切れてそれで終わりじゃ駄目だと思った……。そこに火野がキツカケを作ってくれて、最後は力を出し切れました……。だけど、俺はまだまだです。精算しなきゃならないものがまだあります……」

「H A H A……、以前と全然顔が違う。深くは聞かまいよ。今の君ならきつと精算できる」

爆豪と違い轟はすんなり授与をしてもらうと己の反省点を述べ、オールマイトは抱きしめて背中を叩き、そう言うとき最後は1位の火野アソクの前へ近寄る。

「さて!火野……いや。今はアソク……だったかな?いやあ、度肝を抜いたよ、君は火野少年の『個性』なんだろ?選手宣言の時に火野少年が

あんな事を言うとは思わなかったので納得したよっ。色々聞きたい事があるが、…先ずはおめでとう!」

「フン、お前が1番強いオールマイトか?随分と画風が違う大男だなあ。当然だ。映司:オーズがこんな大会で負ける筈がない」

「(態度悪:爆豪少年みたい…)ま、まあ、今回の体育祭、火野少年は大きく成長を遂げただろう!…:アंक少年、ちよつと面倒だと思いが後で詳しく聞かせてもらうよ?君が出てきて私を含め、他の皆が困惑している。全く違う「個性」が2つもあるのはまず持つて有り得ない事だからな」

オールマイトは火野アंकの態度に少し引きながらも金メダルを授与し、抱きしめようとするが火野アंकは本気で嫌なのかその表情が顔に出ていたがオールマイトの力には勝てず抱きしめられる。その時、オールマイトはこそこそとそう言う火野アंकは面倒くさそうな顔をしながらも要求を言い、承諾する。

「…ちつ。まあ…俺も聞きたい事がある。…だが、肝心の映司が目を覚さないと話し合いなんてできないと思うが?」

「…そうだな。なら起きるまで控え室で待つてもらえないかな?」

「…アイスだ、それをよこせ。そうすれば待つてやらん事もない」

「アイス…:あ、ああわかった。手配しとくよ」

了承を得たオールマイトは火野アंकから離れ整列してる生徒達に振り返り、口を動かす。

「ギア!!今回は彼らだった!!しかし皆さん!この場の誰にもここに立つ可能性はあつた!!ご覧頂いた通りだ!競い!高め合い!さらに先へと登っていくその姿!!次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!!てな感じで最後に一言!!皆さん!!唱和ください!!せーの!!」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「おつかれさまでした!!」

誰もが知ってるその言葉を言ってる、筈なのにオールマイトのままかの言葉にブーイングが巻き起こる。

「そこはプルスウルトラでしょ、オールマイト!!」

「ああいや……疲れたろうなと思つて……」

好敵手と書いて「とも」と読む。歯の浮く言葉だけど、実感せずにはいられなかった日だった。こうして、雄英体育祭は幕を閉じ、生徒等は各自、自分の教室に戻る事となるが、火野アंक……そして「緑谷」はオールマイトに呼ばれ、学校の控え室に行く事となった。

☆☆☆☆☆☆

「……………」

「……………おい」

「ひやいつ!? な、何かな……火……あ、アंक君!？」

「お前は確か緑谷……だったか? 何でお前がここにいるんだ?」

「え、えと! それはあの……! ぼ、僕もオールマイトに呼ばれて……それであの……偶然というか……一緒の部屋で……待機してるんじゃない……かな?」

「ああ? まあどうでもいいが……。その喋り方どおにかならないのか? 苛々するっ」

「ご、ごめん……! (見た目火野君なのに感じ悪い……! 凄いギャップだよお……! しかもさつきから棒アイス何本食べてるんだ? 気になつて仕方がない……!)」

控え室にいた緑谷と火野アंक。火野アंकはオールマイトに手配してもらつた棒アイスを彼此5本以上は食べており、緑谷は気になつて仕方がないようだ。火野アंकは手に持っている棒アイスを食べ終わると何か感じたのか組んでた足を直し、口を動かす。

「……やつと目が覚めたか」

「え?……僕、起きてるよ?」

「お前じゃない。……………わかつた」

火野アंकはそう言うのと、目を瞑り俯向く。すると、風格が変わり、緑谷から見ればいつもの、火野に戻っていた。

「ふう…、あれ？緑谷君？どうしてここに？」

「その喋り方…！火野君…ああよかったあ…！君の新しい『個性』のアंकって子、なんか…何処となくかつちゃんに似てるっていうか、話しかけ辛かったと言うか…」

「ああっ、ごめんごめん…。俺も気を失って変わりにアंकが行動してたみたいんだけど…。…見たところ、表彰式は終わったみたいだね…」

火野は眠ってた記憶は一切なく辺りを見渡している。粗方の事情は心の中でアंकに聞いたので状況は大体把握している様だ。すると、ノック音が聞こえ、オールマイトが入って来る。

「やあ、待たせたね2人共」

「えっ？…えっ!?ちよ、オールマイ…いや…!!ち、違うんだ火野君！この人はオールマイトの古い友人で決してオールマイトではなくてだよ!？」

トウルフオームで入ってきたオールマイトに緑谷は慌てて両手を振るいい言い訳をしようと喋るが火野はその仕草に笑い、口を動かす。

「ああ、大丈夫だよ緑谷君。俺もうあの人がオールマイトって知ってるから」

「…え？…え？…そ、そうなの!？」

「おや、その言い方はどうやら火野少年にもどっているようだね。…緑谷少年、火野少年には前にこの姿で会いに行つたことがあってね。その時にバレたのさ☆」

「バレ!!?バレるもんなのですか!!？」

緑谷はギョツとした顔で驚く。オールマイトはH A H A H Aと笑うと吐血をする。

「…そういえば、オールマイト1人だけなんですか？てっきり、他の先生や警察とかが来るのかと思つてました…」

「君達は体育祭でかなり疲労してるだろ？大勢で来たなら気を遣わせて

「しまいそうだから私が代理で来たんだ。勿論、後で報告するけどね」
「気を遣うなんてそんなっ！だ、大丈夫ですよ……！」

火野の質問にオールマイトは答えると緑谷が首を振りそう言う。
オールマイトはまあまあと言い、真剣な顔で火野に問い掛ける。

「……さて、火野少年。君の『個性』についてだが、私達が思っていたのは『オーズ』。そして今回の轟少年と戦った時に開花したのが、『アंक』……それで間違いないね？」

「あ、はい……、そうみたいです……」

「みたい……という事は、火野少年もその『個性』には気づいてなかったのかい？」

「えっと……その、急に発現したというか……俺にもちよつと分かんなくて……」

オールマイトの言葉に火野はどう説明すればいいのか分からず濁しながら答える。アंकの言う通り『転生して来ました』なんて言えば2人は困惑するのは間違いないし、そんな空想の話、信じてもらえない訳でもない。どうしたもんかと火野は考えると、突然アंकの声が聞こえて来た。

「回りくどいな、普通に言えばいいだろ映司っ」

「え？」

「エ？」

「ん？」

火野が反応するのは分かるが、何故かオールマイトと緑谷も反応していた。その時、火野の中から右腕のアंकが飛び出してきた。

「『ウワアアアアアアっ!!』」

「おい！うるさいぞ！揃って大声を出すな！」

鳥の怪物の様な姿をした右腕のアंकに3人は目を飛び出して驚く。当然火野の中からいきなり出て来て右腕だけが空中を浮遊していたら誰だって驚く。無理もない。

「ア、アंक!!?え!!?何で腕だけ!?!」

「う、ううう腕が喋ってるううう!!?」

「アアメイジングツツ!!」

「……まあ、この姿が馴染んでんだ。気にするな」

（（いや、気にするよ……））

2人が驚くのは当然だが前世の記憶がない火野も一緒に驚き、アंकは何処か気にしながらそう答えると一旦区切ってアंकは話し出す。

「俺と火野はこの世界に転」

「っ!!あー!!」

「うおっ!!」

アंकが喋りだそうとすると、火野は飛び出しアंकを捕まえて話を止める。そして2人に聞こえない様、小声でアंकに火野は怒り出す。

「（アंक！転生なんて言ったら大事になるだろっ!!）」

「（ああ!?事実だろ！その方が話が早く済む！）」

「（余計ややこしくなる！俺が説明するからアंकはそれに合わせて！）」

「（ちっ！面倒な世界だなここは……）」

そう言いながらもアंकは承諾してくれて火野は一旦呼吸を整え、説明を始める。

「えっと……このアंक……なんだけど。オーズの『個性』が関係して、俺の中で『生み出された個性』なんだ……」

「生み出された……?ど、どういう事火野君……?」

「『個性』が『個性』を生み出す……?そんな話聞いた事がないぞ……」

緑谷、オールマイトは目を見開き、その頭にハテナマークを出していた。

火野は頭の中で必死に言い分を考えしどろもどろで答える。

「え、えっと。この前のUSJの事件に出てきた怪人、覚えているよね

……?」

「あ、ああ……勿論。『ヤミー』の事だろ?」

「倒した時、発目さんが言ってた『セルメダル』で

「ヤミーが作り出されるんだよね……っ！まさか……」

2人の顔は徐々に青白くなつていく。火野は黙つて頷き、アंकを見て口を動かす。

「アंकは『コアメダル』と『セルメダル』で生まれた……グリッド
『つて言う類の奴なんだ』」

その瞬間、2人の顔は形相を変え、アंकを『敵視』し、警戒しようとするが火野は慌てて止める。

「お、落ち着いて！コイツはあの『ヤミー』と違って俺の中で生まれた存在だし悪い奴じゃないんだ！な、アंक？」

「……まあ、俺に危害を加えない限りは何もしない。もし、何か仕掛けて来たなら誰だろうと、つで!?何すんだ!?!」

「その言い方誤解招くだろ!?も少し丁寧な言葉使えないのかよ!?!」

「フン！俺なりに丁寧すぎる言葉だ」

「お前なりは洒落にならないから！」

とんでもない事を言うのではないかと思つたのか火野はアंकを叩き、喧嘩をし始めるとオールマイトと緑谷は敵ではないと悟つたのか警戒を解き、オールマイトは口を動かす。

「……グリッド、と言つたね。ヤミーとはまた違う類いなのかい?」

「フン！あんな雑魚と一緒にするな！いいか？グリッドは『コアメダル』を中心に『セルメダル』がくつついた奴の事だ。ヤミーはただの『セルメダル』でできた怪物。お前等で分かりやすく説明するなら、アイスキャンディがあるだろ？グリッドは棒がコアでその周りの食べる部分がセル。ヤミーは棒のないアイスだと思つとけ」

「なるほど、分かりやすい」

「（お前は前にも説明しただろ……いや、なんでもない）」

その説明に火野は頷き、アंकは小声でツツコみを入れるが、記憶がないので仕方ないと思ひアंकは腕を振るう。

「……成る程、なら君は火野少年が持つていたコアメダルとセルメダルが反応し、あの轟少年の戦いでそれが偶然にも開花し、君^{アंक}と言うグリッドが火野少年の中で生まれた……」

「そうか……、火野君の中で生まれた存在なら『個性』であつて『個性

「じゃない…」

「そ、そうそう…！だから俺の『個性』はオーズで、アंकはそのついでって感じかなっ」

「ついでってなんだおい！」

オールマイトと緑谷が上手いこと考察してくれて火野は全力で領き、そう言うその後ろでアंकがボヤクが火野は無視する。すると、緑谷は何か思ったのか口を動かした。

「火野君、アंकって鳥みたいに見えるけど…。もしかして、あの赤色のコアメダルで生まれたのがアंक君なの？」

「凄いな緑谷君っ。その通り、アंकは鳥がモチーフのグリードなんだよ」

「…じゃあ…もしかして…。他のコアメダルにもグリードが生まれるの…？」

「…ああ。少なくとも、後4体はいる」

「…その様子だと、他のグリードの事も知ってるみたいだね」

緑谷の鋭い考察に火野は褒めると続けて緑谷はそう言う。アंकが喋るとオールマイトがそう聞いているが、アंकはオールマイトに近付き、指を指す。

「詳しく教えてやらない事もないが、映司から色々聞いた。そのUS Jの戦いの時にいたんだろ？オーズが。どう言う事だ？オーズは2つも存在しない筈だ」

アंकはオールマイトに聞く。かつての戦いに『王』が存在していたが、奴まで転生してきたのかとアंकは考えていたが、何か事情を知ってるのかと思い、No. 1のオールマイトに問い掛ける。すると、オールマイトは何かを決意した目で火野、緑谷、そしてアंकを見て口を動かす。

「…ああ。確かに『個性』は2つも存在しない。だから火野少年。前から気になっていた事があってね。緑谷少年も呼んだのは君にも知る権利があるから呼ばせてもらったよ」

「え…？」

「どういうこと…ですか？オールマイト…」

明らかに何かを知っている口振りに火野と緑谷は疑問を抱くと、オールマイトは口を動かした。

「恐らく火野少年は…『個性』を奪われたんじゃないかと思う」

それをキツカケに、火野と緑谷、そしてアंकは知る事となった。

『個性』を奪う『個性』、A・F・Oオールフォーワンの事を。

No. 38 真実と因縁

「ええっ?!?じゃあつまり、緑谷君の“個性”は超パワーじゃなくて
ワンフオーオール
O・F・Aで、それはオールマイトから引き継がれて、その
ワンフオーオール
O・F・Aは代々引き継がれてきたってこと!?”

「う、うん…。実はそうなんだ…」

「ほお…。で、使った途端に身体がぶっ壊れていたのはまだ身体に馴染んでいない…ということか?」

「その通りだよアंक少年。緑谷少年の身体はO・F・Aを無理矢理
ワンフオーオール
その身に宿させている。要は突如尻尾が生えた人間に「芸を見せて」と言っても操ることすら儘ならないって話だよ」

オールマイトから突然知らされた緑谷の本当の“個性”。
ワンフオーオール
O・F・A。“個性”を譲渡する“個性”で、その力は聖火の如く引き継がれてきたモノらしく、先代から徐々に渡していき、次にオールマイト、そして今の後継者はこの緑谷出久だった。

その力の結晶は力を培い、超人的な力となっていくらしくオールマイトのあの強さも納得できる。そして緑谷が見せていたあの力は何処かオールマイトに似てるなど噂されていたが、これで話の筋が通る。

「オールマイト、そんな大事な話…俺やアंकにしてもよかつたんですか?」

「元より君はこの正体を見抜いたからね。何れは話そうと思ってたので問題はないよ」

「フン、…で、本題は何だ?まだあるんだろ?」

「…ああ、そうだね。これは緑谷君にも聞いてほしい事なんだが…。そのO・F・Aは特別な“個性”だから、今からその成り立ちを話そう」

「成り立ち…?」

アंकが問い、オールマイトは椅子に腰掛け両手を合わせそう言う
と緑谷が首を傾げ、オールマイトは話し出す。

「ワン・フォー・オール…この力は元々ある1つの“個性”から派生し

たものだ。その名はA・F・O。^{オールフォーワン}他者から“個性”を奪い、己がものとし、そして他者に『与える』事ができる“個性”だ」

「オール…皆は、1人の為…?」

「そんな“個性”が…?」

「…おい映司。お前まさか、そのオール・フォー・ワンって奴に“オーズ”奪われたんじゃないのか?」

「…!!」

緑谷と火野は呟くとアंकが目を見開いて火野にそう言い、火野は驚愕する。

他者に与える“個性”ならあの敵にいたオーズの力ワイランが使える女の子に“個性”を与えたのなら、全ての疑問は収まる…のだが。オールマイトはその答えに疑問を抱き口を動かす。

「私も古い友人にそう言われてその場合は納得してしまっただが、オール・フォー・ワンは他者の“個性”を奪う、それは完全にその人の“個性”を奪うと言う事になる。だが火野少年はオーズの力は失われていない…」

「ア?つまりどう言う事だ?奪われてなかったら何故映司のオーズをその敵が使ってやがる?矛盾してるぞ」

「私にも分からない…だが、奴の事だ。 “個性”を奪い与える“個性”、言ってしまうえば何でもアリだ。何か私の予想を遥かに上回る事をしてがしてるのではないかと思うのだよ…。あまり考えたくはないがね…」

「奴…。オール・フォー・ワンの“個性”を持つてる者…」

オールマイトの言葉にアंकは反応するとオールマイトはそう推測し、その奴といつ言葉に緑谷は反応すると、オールマイトは話し始める。

「これは超人黎明期。社会がまだ変化に対応仕切れてない頃の話になる。かつて、突如として“人間”という規格が崩れ去った…。ただそれだけで法は意味を失い、文明が歩みを止めたまさに“荒廃”…」

「超常が起きなければ今頃人類は恒星間旅行を楽しんでいただろう…昔の偉い人も言っていましたね」

「科学が発展して人類は別の意味で進化してた…だったよね？俺勉強苦手であまりそう言うの覚えてないんだよね…」

オールマイトの話に緑谷と火野がそう言って習った知識を思い出している。オールマイトは話を再開し、口を動かす。

「そう、そんな混沌の時代にあつて、一早く人々をまとめ上げた人物がいた。君達も聞いた事があるはずだ。彼は人々から『個性』を奪い、圧倒的な力によってその勢力を拡げていった。計画的に人を動かす、思うままに悪行を積んでいった彼は瞬く間に悪の支配者として日本に君臨した」

「フン、よく聞く悪の親玉的存在だなそいつは」

「お前も大概悪だけどね…。でも、その話がワン・フォー・オールとどう繋がるんですか？」

アंकがボヤくと火野はボソツとそう言ってオールマイトに聞く。

「オール・フォー・ワンは与える『個性』でもあると言ったろ？彼は与える事で信頼…あるいは屈服させていたんだ。ただ与えられた人の中にはその負荷に耐えられず物言わぬ人形になつてしまう者も多かったそうだ…ちようど『脳無』のようにね…」

「…！」

「何だ？そのノウムって奴は？」

「『個性』を複数持つてた大男。USJ事件の時に出てきた奴でその力もオールマイト並みに強かったんだよ」

アंकの質問に火野が答えてると、オールマイトは一旦区切り、再度話出す。

「…一方、与えられる事で『個性』が変異し、混ざり合うケースもあったそうだ。…彼には『無個性』の弟がいた。弟は身体も小さく、ひ弱だったが正義感の強い男だった…！兄の所業に心を痛め、抗い続ける男だった。そんな弟に彼は『力をストックする』という『個性』を無理矢理与えた。それが優しき故か、はたまた屈服させる為かは今となってはわからない」

オールマイトの話に段々と解つてきた緑谷と火野は目を見開き2人で「まさか。」と声を漏らす。オールマイトは両腕を広げてこう言っ

た。

「うん…、 “無個性” だと思われてた彼にも一応は宿っていたのさ自身も周りも気付きようのない…力をストックする “個性” と与える “個性” が混ざり合った！これが！ワン・フォー・オールオリジンさ」

「……!!」

「……」

オールマイトの言葉に2人は目を見開き、アंकはどうでもよくなつたのか何枚かセルメダルを出して手の上で投げていた。オールマイトはゆっくり両腕を下ろすと口を動かす。

「…皮肉な話さ。正義はいつも悪より生まれ出ずる」

「ちよ、ちよつと待っててください。話の成り立ちは分かったんですけど…。そんな大昔の話を何で今…」

「お前馬鹿か。さつきそのオール・フォー・ワンは何でもアリの “個性” って聞いてただろ？ どうせ成長を止めるかなんかで今もこの世に生きてるんだろおな…」

「YES…。その通りだよアंक少年。恐らく何等かの “個性” で半永久的に

生き続けてる悪の象徴…。覆しようのない戦力差と当時の社会情勢…敗北を喫した弟は後世に託す事にしたんだ。今は敵わずとも…少しずつその力を培って…いつか奴を止めうる力となってくれと…と…。そして私の代で遂に奴を討ち取った!! 筈だったのだが…奴は生き延び敵^{ヴァイラン}連合のブレーションとして再び動き出している…。ワン・フォー・オールは言わば、オール・フォー・ワンを倒す為に受け継がれた力！ 緑谷少年…君はいつか奴と、…巨悪と対決しなければならぬ…かもしれない」

そう言つてオールマイトは静かに俯向く。オール・フォー・ワンの存在を聞いた緑谷と火野は突然の事実とその真実に驚愕し、その脅威が未だ健在している事を少しづつ受け入れていた。

「酷な話だが…」

「頑張ります…!! オールマイトの頼み…何が何でも応えます！ 貴方が

いてくれれば僕は何でも出来る…出来そうな感じですから…！」

「オールマイト、俺も貴方に憧れている1人です。凄い力ではないけど、助力はします！」

「緑谷少年…火野少年…！」

緑谷に続き火野もそう決意し、オールマイトを見つめる。オールマイトは何か言いたげな表情だが、アंकが割り入り、火野に指を指す。「馬鹿が。オーズはとんでもない力だ。本気出せばお前1人でどうとでもなる」

「え？そんなの？でもコンボ使えば直ぐに気を失うけど…」

「それは慣れろ」

「ええ〜…」

「火野君が一緒なら凄く心強いよ！僕ももつとこの力を身につけて頑張らないと…！」

「フン、せいぜいオーズの踏み台として頑張れ」

「ア、アंक！お前その口の悪さどうにかできないのかよ!?ご、ごめんね緑谷君…！」

「う、ううん！大丈夫…アंक君、何処となくかつちゃんに似てるからそう言うの慣れてるよ…！」

2人の少年、そしてアंकがその場で盛り上がり、その光景を見ていたオールマイトは何処か悲しそうな表情で2人とアंकを見ていた。

☆☆☆☆

「ううう…！…アंक！お前アイス何本食べたんだよ!?!すつごい

「お腹痛いじゃないか！」

「ア?…知るか」

「てか、その身体があるならそれで食べればいいだろ！」

「この体はセルメダルで出来た模造品みたいなもんだ。グリードには味がわからない…。お前が嫌なら別の誰かに体借りてやるが？」

「絶っつっつ対ダメ!!…はあ、何か色々と疲れた…」

オールマイトとの話を終え、そのまま直帰となり体育祭を終えて2日休みとなった火野は心の中で見たあの人間の体のアंकと一緒に下校していた。そのセルメダルを使えばグリードは記憶に宿している人物へと変化する事ができるそうだ。今のアंकの姿は前世の世界で借りていた「泉信吾」の姿で本人はこの姿が一番いいとの事だ。そしてグリードは五感が鈍く、味覚は無く、景色は灰色で燻み、聴覚はノイズが走る様な雑音が入っているらしい。「人間」の体に入ればその五感が味わえるので火野の体を使って前世で初めて味わった「アイスキャンデイ」を先程味わい、火野はおかげで腹痛に襲われていた。

「にしても…この世界は「個性」とやらで常識を覆す面倒な世界だ…。そのおかげで敵にオーズが現れやがって…おまけに「ヤミー」を生み出す後始末…！」

「アंक、ヤミーってオーズの力を持つてる俺でも作れるの?」

「ヤミーはグリードにしか生み出せない。オーズの力がどれほど凄い力でも不可能だ。…まあ、体の中に「コアメダル」を取り込めば可能ではないがな」

「えっ?!何でそれ早く言わないんだよ?!」

「黙って聞け!…「紫のコアメダル」の話をしたのを覚えているな?」

「…う、うん…。俺に欲がなくて、それに漬け込んで体の中に入ってきて…暴走して、俺がグリードになりかけた…危険なメダル…だよね?」

「ああ…、前の世界でソレを取り込んだ奴がいた。そいつはグリードになって、「ヤミー」を生み出した。…だが映司。お前が会ったヤ

ミーは昆虫のヤミーだったな？」

「うん：蝶々に蝟螂：蝗みたいなヤミーだった。それがどうかしたの？」

「紫のコアメダル以外は身体に取り込めない。取り込んだとしても生み出せるヤミーはそのメダルに属した生物のヤミーしか生まれない。お前やオールマイトの話聞いてた限り、そいつは紫のコアメダルは恐らく持っていないだろうな」

「…じゃあ何で…」

「こつちが聞きたいぐらいだ！…つたく！本当に面倒な世界に来てしまったなあ…お前」

「そ、そんな事言っちゃって仕方ないだろ。…でも、どんな相手が来ても、お前となら、なんとかなりそうな気がする。前の世界でもそうだったんだろ？」

火野は夕暮れを見てそう言う。それを聞いたアंकは火野を見て鼻で笑っていると、いつの間にか自宅前まで帰宅しており、アंकはピタリと立ち止まる。

「アंक？」

「……比奈がいるんだったな？」

「ああうん……、あ！そうか！あー、とりあえず俺が説明するから中へ入ろうよつ。お前も俺の中にいるより部屋でゆっくりしたいだろ？」

「…まあ…そうだな……」

火野がそう言ってアंकは了承するも、何処か不安な顔をしており、火野は先に玄関を開ける。すると、奥から走る音が聞こえてくる。

「映司君!!おかえり!!中継見てたけど何あの『個性』……」

比奈が慌ててそう言いながら駆け寄るが、隣にいるアंकを見て言葉を失う。それもそのはずだ。

「…お兄ちゃん…?」

「え?」

「…ちっ、やっぱりこうなるか……」

比奈の兄、泉信吾はこの世界でも『存在』しており、偶然か『刑事』の仕事をしている。アंकのその身体は泉信吾。それは間違えら

れてもおかしくはない。アंकはやっぱりかと言わんばかりに舌打ちすると、火野は状況を理解し、説明しようとする。

「あああ…。ひ、比奈ちゃん！これは違うんだ！この人は俺の『個性』からできた『個性』で」

「お兄ちゃん!?どうしたのこんな所で！何で映司君と一緒になの?というか…なんか若返った…?そんなに肌ツヤツヤじゃないよね…?…え?何で髪染めてるの…?え、私聞いてないよお兄ちゃん!」

火野が説明しようにも比奈は押し退け、アंकに詰め寄る。泉比奈は根っからの兄好きで毎日電話やメールは欠かせない程だ。

「ちっ、どうでもいいだろ…、おい映司、何とかしろ。俺は部屋に行く」「ちよ!?お兄ちゃん!まっつて…!」

アंकは面倒なのか比奈を押し退け、火野の部屋に行こうとするが、比奈はアंकの腕を掴み…。

「ふんんにゅく…!」

「いっつっ!!いだだだだだ!!」

比奈が掴むアंकの腕から骨が軋む音…否。セルメダルが砕けそうな音が聞こえアंकは悶絶する。

「ア、アंक!」

「きやあ!?ごめんお兄ちゃん!」

「お前…!!どこにいてもその怪力は変わらないのか!」

「怪力…!!お兄ちゃんの…ばかあ!!」

「ぶおっ!!」

アंकの悪態は比奈の『地雷』を踏んでしまい、比奈はフルスイングでアंकにビンタを食らわしアंकはその場で倒れ、比奈は怒ってリビングへと走って行った。

「ああ…大丈夫アंक?…味覚とかは無いのに、痛覚はあるって…グリードってなんか可哀想だね」

「この状況で…哀れむような目はやめろ…馬鹿が…!!いつもこいつも…!」

「…こんな世界嫌いだああ!!」

痺れを切らしたアंकは叫ぶが、玄関に響き渡るだけで、その叫び

は虚しくも終わった…。

泉比奈

個性『怪力』

デメリット無しで人の何倍もの怪力を出せる！
だが本人曰くこの個性はひどく気にしており、
使いたくないとのこと！

生活にも支障をきたしてしまふ為、
そこがある意味デメリットだ！

第5章 くヒーロー殺しく

No. 39 ヒーロ名、オーズ

「んんく…ああ…よし、行くかつ」

電車から降りた火野は大きく背伸びをする。2日の休みはあつという間に終わり、雄英へと登校する他の生徒がちらほら見かける中、火野も改札口を降りると、雨が降っていたので火野は傘を差して雄英高へと歩き出す。

アंकという「個性」が発現して、比奈にはお兄ちゃんと間違えられたが、あの後火野の説得により、何とか事を得てこの2日間は何とか過ごせたがやはり比奈は兄に見えて仕方がなく態度の悪いアंकを指摘し、始めは嫌々だったが今は比奈の言う事をなんだかんだで聞く様になっていた。

登校の最中、心の中からアंकが呟いてくる。

『決まった時刻に行つて勉強をして、決まった時刻に帰れる…学生は面倒な場所だなあ。おまけにプロヒーローとかじゃなければオーズも使えないとは…本当この世界は不便で仕方がないな』

「プロヒーローになる為学校に行くんだからしょうがないだろ？…前の世界は俺どんな仕事してたの？」

『「クスクシエ」って店で働いていたが…、その前は世界を放浪している所謂フリーターって奴だったなあ』

「世界を放浪かあ…それも悪くないな」

『だが俺と出会つてからはオーズでヤミーと闘つていた…。まあ、その間はそっちの方が「本職」ってやつだったかもな』

「へえ…。濃い間だったんだね」

『……まあな』

そう言つて話を終え、しばらく無言のまま登校しているといつの間にか校門前へと歩いていった。すると、後から火野に声をかけて駆け寄る少年がいた。緑谷だ。

「火野君、おはようっ」

「おはよう緑谷君…って何か疲れてる顔をしてるよ？休日疲れが取れなかった？」

「う、ううん！そんな事ないけど…、さつき電車の中で体育祭の事で声掛けられてさ…。四方八方から質問攻めされたから朝からちよつと疲れて…。火野君は声掛けられなかったの？」

「え？勿論かけられたよ。最初はびっくりしたけど慣れればそうでもないよ。寧ろアंकの世話の方が疲れたかな…」

「す、凄いメンタルだね…。今アंक君は…？」

「俺の体の中にいるよ。出歩いてたら怪しまれそうだし…。『フン！疲れるのは俺の方だ！比奈に説教されてゆっくり出来もしない！』…それは仕方ない事だろ！」

「あはは…：大変だったんだね…」

緑谷と話をしている最中、中にいるアंकが文句を言い、それに反応し、声を出す火野。側から見れば独り言を言ってるような感じになっており、緑谷は苦笑していた。すると、後からバシヤバシヤと水を跳ね上げる音が聞こえまた声を掛けてくる者がやってくる。

「何を呑気に歩いてるんだ!!遅刻だぞ！おはよう火野君緑谷君!!」

「飯田君!?!全力疾走だね！」

「カカカカッパに長靴!!」

走ってやってきたのはカッパに長靴を履いた飯田だった。飯田は先を追い越し、火野と緑谷は後を続く様に小走りで着いて行き、緑谷は飯田に声をかける。

「遅刻ってまだ予鈴5分前だよ？」

「雄英生たる者！10分前行動が基本だろう!!」

「真面目だなあ…」

飯田の言葉に火野は眩く。ふと、火野は体育祭の時、飯田の兄ライラン「ゲニウム」が敵にやられ早退した事を思い出す。緑谷も思っているのかどこか気まずそうな表情を浮かべる。学校に入り、傘をしまっているカッパを脱ぎながら飯田は口を動かした。

「兄の件なら心配ご無用だ。要らぬ心労を掛けてすまなかつたな2人

共」

と言って飯田は笑顔の表情を作るが、振り返る最中、その顔はすぐに戻り真顔になっていた。まるで心配していたので安心させる一言だけ言っておこう。そんな気がして、緑谷と火野は無言のまま教室へと向かった。

☆☆☆☆

「おっ！火野!!今のお前は火野だよな!」

「え?あ、ああうん、そうだよ」

教室に着くと切島が声を掛けて火野は反応すると葉隠が近寄り、火野の身体をジロジロと見て挨拶をする。

「おおー、火野アंक君じゃない火野君おはよう!」

「火野アंकっ……?」

「うん!あの“個性”!火野君の姿をしたアंकで火野アंक君!これなら分かりやすいかなと思って!」

「な、なるほど…。『変な名前付けやがって…俺はアंकだ!』と、とここで!皆は通学路で声かけられなかった?」

葉隠の説明に納得していると心の中で不満だったのかアंकが叫び、火野は無視して話題を変えると、近くにいた芦戸が口を動かす。

「超声掛けられたよ来る途中!!」

「俺も!!」

「私もジロジロ見られてなんか恥ずかしかった!」

「俺なんか小学生にいきなりドンマイコールされたぜ」

「ドンマイ」

芦戸に続き、切島、葉隠が言うた瀬呂が入ってきてそう言うた、隣にいた蛙吹が呟く。すると、チャイムが鳴り出し、皆はそそくさに席に座り出す。HRが始まって騒いでいると担任の相澤に怒られてしまうからだ。

「おはよう」

「二」おはようございます!!「三」

教室へ入ってくる相澤に全員が挨拶すると、包帯をしていないいつも通りの相澤に蛙吹が声を掛ける。

「相澤先生、包帯が取れたのね。よかったわ」

「婆さんの処置が大袈裟なんだよ。…えー始める前に…火野」

「あ、はい」

相澤は目元の傷を弄りながらそう言うのと火野を呼び火野は返事を
する。

「あの『個性』…アंकだったか?その事情はオールマイトから聞いた。本当お前にはいちいち驚かされるな…。…まあいい、この2日間の休みの日に連絡事項で火野以外の全員にも知らせてある。一応、休みの日に市役所に行つて個性届けを再提出してこい。これは学校用に提出する用紙だ」

「(通りで皆至つて冷静だったのか…。)あ、はい…個性届け…ここ何て書けばいいんだろ…」

「発動型、変形型、異形型、複合型…。基本この4つで『個性』は各系統に分類されてるが、お前のアंकはメダルから出来たモンなんだろ?事前に連絡して聞いたが該当される系統がないらしい。だからお前のその『個性』は人類初の5つ目、『派生型』だそう…。そう書いとけ」

「派生型…分かりました」

「スゲエ火野!お前人類初の系統かよ!」

「体育祭といいお前本当チートかよ!」

「火野だもん、何でもアリだよ」

火野は用紙を受け取つて席に座ると切島、上鳴、芦戸を筆頭にざわざわと騒ぎ始める。火野の『個性』オーズはコアメダルをドライブに嵌め込み、スキャンさせる事で『発動』、その身をオーズの姿に変える『変形』、その二つを兼ね備えた『複合』型で登録しているが、アंकが出た事により実質『個性』は2つになる。コアメダルという源から生じた事により恐らく『派生型』と名付けられたのだろう。

「おい…話はまだ……よし」

シーン……！

騒つく生徒に相澤は低い声で言う和一瞬にして静まり返り、確認した相澤は本題に入る。

「…じゃあ、今日の『ヒーロー情報学』だが、ちよつと特別だぞ。『コードネーム』ヒーロー名の考案だ」

「二」胸膨らむヤツきたああああ!!「二」

その発表を聞いた生徒等は大声で叫び、気分は最速の鰻登りだった。だが相澤が睨むと一瞬で静まり返り、相澤は口を動かす。

「というのも先日話した『プロからのドラフト指名』に関係してくる。指名が本格化するのを経験を積み即戦力として判断される2、3年から…つまり今回来た『指名』は将来性に対する『興味』に近い。卒業までにその興味が削がれたら、一方的にキャンセルなんて事はよくある」

「大人は勝手だ!」

相澤が言うのと峰田は現実を知り、拳を振り下ろして机をガンと叩く。すると、葉隠が相澤に質問する。

「頂いた指名がそのまま自身へのハードルになる…って事ですよね!?!」

「そ。で、その指名の集計結果がこうだ」

そう言つて頷いた相澤は電子黒板にプロヒーローから指名の集計結果を表示する。

火野	5000
轟	4123
爆豪	3556
常闇	360
飯田	301

上鳴 272
八百万 108
切島 68
麗日 20
瀬呂 14

「例年はもつとバラけるんだが、3人に注目が偏った」

「だーーーーー白黒ついた！」

「見る目ないよね、プロ☆」

「おお、ピツタリ…」

桁が違う上位3人の結果を見るなり上鳴は上を向き呟く。青山が不貞腐れてる最中、火野は5000とピツタリの数字を見て驚く。すると、集計結果を見て切島が口を動かす。

「意外と爆豪票貰ってんな。表彰式の時暴れ回ってたのに」

「『個性』はスゲーけどあんな性格じゃあ1位と2位の人気の差がつかよな」

「出すわこつからあ!!」

切島と瀬呂の会話を聞いた爆豪はそう言って怒鳴る。ある意味自業自得だと火野は思っていると八百万が轟に声を掛けていた。

「流石ですわ、轟さん」

「ほとんど親の話題ありきだろ…」

轟は静かにそう言う。No.2の息子だと分かり、尚且つ強力な『個性』を持つ轟ならあの票の数も領ける。

「わあああつ」

「うむ」

「無いな！怖かったんだやっぱ…」

「んん……」

一方で麗日は指名がある事に喜び前席の飯田の肩を持っては振り、飯田は首を揺さぶられながら頷くと、方や峰田は緑谷の肩を持ちそう言う。緑谷は少し落ち込んでいた。力がまだ扱えなくバツキバキになつてまで戦っていた為、恐らく怖がられたのだろう。

「(アंकク…あつたよ指名!)」

『ハッ。当然だろ、俺が見込んだ奴だからなお前は』

火野は小さくアंकクにそう言うのと、心の中から見えていたのかアंकクは少し嬉しそうに返事をする。各々喜んでいると急に相澤は口を動かし、皆は黙ってそれを聞いていた。

「これを踏まえ…指名の有無関係なく、いわゆる職場体験つてのに行ってもらおう。お前らは一足先に経験してしまったが、プロの活動を実際に体験してより実りある訓練をしようってこった」

「それでヒーロー名か!」

「俄然楽しみになってきたア!」

その意味を知り砂藤、麗日はテンションを上げ声に出すと相澤は教室の扉をチラリと見て口を動かす。

「まあ仮ではあるが適当なもんは…」

「付けたら地獄を見ちゃうよ!!」

その言葉に割入るかの様に、扉が開かれ

入ってくるのは18禁ヒーローのミッドナイトだった。

「この時の名が!世に認知され、そのままプロ名になってる人多いからね!!」

「ミッドナイト!!」

その過激なコスチュームは誰もが見入ってしまうミッドナイトにクラスの生徒は声を上げ驚く。

「まあそういう事だ。その辺のセンスをミッドナイトさんに査定してもらおう…、俺はそういうのできん。将来自分がどうなるか名を付けることでイメージが固まりそこに近付いていく。それが「名は体を表す」って事だ…。オールマイトとかな」

プロヒーローはオールマイトを含め、本名を知られていない人は多く、自分が考えたヒーロー名で世間に名を知らしめる。ミッドナイトが用意したフリップボードを前列の席から順番に配られ、先程まで騒いでいた生徒全員は集中してヒーロー名を決めて書き始め、相澤はミッドナイトに任せて寝袋に入り昼寝をし始める。一方で火野は、「うーん。」と唸り声を上げ、フリップボードと睨めっこをしていた。

☆☆☆☆

「じゃ、そろそろできた人から発表してね！」

((発表形式かよ!?!))

(えっ!?!やばっ!)

フリップボードが配られてから15分後、まさかの発表形式とは思わなかったのかミッドナイトの言葉に火野を含めて何人かはビクツと肩を上げる。すると、自身気に青山が席から立ち上がり、フリップボードを持って教卓へと向かう。

「じゃあ僕から行くよ。」

輝きヒーロー『I c a n n o t s t o p t w i n k l i n g.』！略して「キラキラが止められないよ」！☆

「「短文!?!」」

まさかの英語の短文で思わず全員がツッコむ。するとミッドナイトは青山のフリップボードを見て指摘する。

「そこはIを取ってC a n n o tに省略した方が呼びやすい」

「それね、マドモアゼル☆」

決めたヒーロー名を改変されるが青山はすんなり了承し、席に戻ると今度は芦戸が立ち上がり、教卓に行ってフリップボードを見せる。

「じゃあ次アタシね！」

リドリーヒーロー『エイリアンクイーン』!!」

「2!!血が強酸性のアレを目標してるの!?!」

止めときな!!」

「ちえ〜」

誰しもが何処ぞの映画に出てくるエイリアンを想像し、若干引いてる最中、ミッドナイトも否定する。最初から変なヒーロー名が来たおかげで大喜利っぽい雰囲気になってしまい、皆は緊迫する空気へと変わっていく。すると、今度は蛙吹が手を上げ、教卓へと向かいフリックボードを見せた。

「じゃあ次私いいかしら？小学生の時から決めてたの。」

梅雨入りヒーロー『フロツピー』！」

「カワイイ!!親しみやすくして良いわ!!皆から愛されるお手本のようなネーミングね！」

「ニフロツピー！フロツピー!!フロツピー!!フロツピー!!!」

蛙吹の可愛らしいヒーロー名に緊迫とした雰囲気が一気に解れ、クラスは盛大にフロツピーの名を呼び称えていた。

「ははっ…いいな、こういうのっ」

『フン、別に名前なんて何でもいいだろ…。お前もオーズって名前があるんならそんなもんさっさと書いてろ』

「(そうなんだけどさ…思ったんだけど、何でオーズ？このベルト持ってた時から頭に名前が思い浮かんできて、ずっとその名前使ってきたんだけど…)」

『さアな…、俺も名前の由来は知らない』

「(ええっ…知らないのかよ…)…うくん…」

火野が呟くとアंकがつまらなさそうに物申す。体育祭の時に粗方はアंकから前の世界の事を教えてもらい何となくオーズの力の事は把握したがオーズという名前の由来は聞かされていない。幼少期の頃、火野はオーズドライバーを腰に装着した時、頭の中にその名前が浮かび上がり、オーズオーズと声を上げて叫んでいた為、火野の“個性”の名前はオーズとなっていた。仮面ライダーも雄英高に入るまでは名乗っていた。だがしかし後々考えていると疑問を抱く。仮面は分かるが、ライダーはバイクに乗ってないので名乗っても仕方がないのでは？と火野は思い、それ以降はオーズだけで名乗ってい

た。

そして今、フリップボードに“仮面ライダーオーズ”を書こうとしていたが、名前の由来を聞かれてどう答えればいいのか分からず肝心のアンケートに質問をしても彼も分からないらしくフリップボードは空白のままであった。

そうこうしている間に切島が教卓に向かいフリップボードを見せる。

「んじゃ俺!!」

剛健ヒーロー烈怒頼雄斗レッドライオット!!」

『赤の狂騒』！これはアレね!? 漢気ヒーロークリムゾンライオット 紅頼雄斗のリスペクトね!」

ミッドナイトは言うのと、切島は拳を作り元気よく答える。

「そつす! だいぶ古いけど俺の目指すヒーロー像はクリムゾン 紅そのものなんす!」

「フフ…、憧れの名を背負うつてからには相当の重圧がついてまわるわよ?」

「覚悟の上つす!!」

ミッドナイトは笑顔で言うのと切島は強く頷き、席へ戻る。すると、上鳴がまだ決まってるのか声を漏らす。

「うあ、考えてねんだよなまだ俺」

「つけたげよつか、ジャミングウェイ」

「おお! 『武器よさらば』とかのヘミングウェイもじりか! インテリっぽい! カツケエ!」

「~~~~いやつ、折角強いのにブフツ! すぐ……ウェイ……つてなるじゃん!?! ブフフツ!」

「つ!? 耳郎お前さあ! ふざけんなよ!」

隣の耳郎が上鳴の肩を叩き、名前を発案すると上鳴は良さげと喜ぶが、耳郎は笑いながらそう答えると上鳴は理解し、耳郎に怒る。耳郎は舌を出して教卓に向かうとフリップボードを見せる。

「ウチはこれ、ヒアヒーロー『イヤホンジャック』」

「いいわねえ! さあどんどん行きましよ! 次!」

ミッドナイトが声を上げて呼ぶと、決まったのか次々と生徒等は拳
手し、順番に教卓へと向かった。

まずは、障子

「触手ヒーロー『テンタコル』」

「触手のTENTACLEと、タコのもじりね！」

続いて、瀬呂

「テーパーンヒーロー『セロファン』」

「わかりやすい！でも大切！」

次に、尾白

「武闘ヒーロー『テイルマン』」

「シンプルで強そう！」

砂藤

「甘味ヒーロー『シュガーマン』！」

「甘くくっいっ!!」

芦戸

「ピンキー P i n k y !!」

「桃色！桃肌く！」

上鳴

「スタンガンヒーロー！」

チャージと稲妻で『チャージズマ』！」

「くうくう！痺れるくくっ!!」

葉隠

「ステルスヒーロー『インビジブルガール』！」

「良いじゃん！良いよお!!さあさあどんどん行きまくりましょー!!」

八百万

「この名に恥じぬ行いを…。」

万物ヒーロー『クリエティ』」

「クリエイティヴ!!」

轟

「『シヨート』…」

「名前?!いいの!?!」

「ああ」

常闇

「漆黑ヒーロー『ツクヨミ』」

「夜の神様！」

峰田

「モギタテヒーロー『グレイプジュース』！」

「ポップ&キツチュ!!」

麗日

「私も考えてありました…。『ウラビテイ』」

「シャレてるっ！」

「えへへ…」

爆豪

『『爆殺王』』

「そういうのやめた方がいいわね」

「何でだよ!？」

「爆発さん太郎にしろよ！」

「黙ってるクソ髪い!!」

爆豪は拒否され、苛立ちながらも自分の席へと戻り一通りヒーロー名が決まり、ミッドナイトはまだ発表していない生徒を見ては口を動かす。

「思ったよりずっとスムーズ！残ってるのは再考の爆豪君と…、火野君、飯田君、そして緑谷君ね」

ミッドナイトはそう言うと、暫くして飯田が無言で立ち上がり、教卓へと向かいフリップボードを見せる。が、彼は無言でフリップボードには『天哉』と書かれていた。

「あら、貴方も名前ね？」

「…」

飯田は顔を俯かせたまま席へ戻る。火野は何か思ってるのかと心配する中、緑谷も書き終えて、教卓に向かい、フリップボードを見せる。だが、それを見た瞬間、生徒は思わず口を開け驚く。

「!？」

「ええ緑谷、それでいいのか!？」

「うん。今まで好きじゃなかった。けど、ある人に意味を変えられて…、僕には結構な衝撃で嬉しかったんだ…。これが、僕のヒーロー名です!」

そこには『デク』と書かれていた。意味を変えた人物は麗日の事だろう。以前から麗日は緑谷の事を『デク君』とよんでおり、火野は空いた時間に理由を聞くと「デクって頑張れって感じじゃない?」と答えていた。爆豪には馬鹿にされ続けたあだ名だが、今となつては緑谷にとつてとても重要なあだ名なんだろう。そう思っている内に、火野も決まったのか立ち上がり、教卓に向かい、フリップボードを見せた。

「俺は、『仮面ライダー^{オー}○○○』です!」

「おお〜…お?仮面ライダーって、確かヘドロ事件の時に名乗ってたやつだよな?」

「仮面は分かるけどライダーってバイクに乗ってるあのライダー…よね?」

「その『○○○』はなんのマル〜っ?」

発表すると、切島、ミッドナイト、芦戸が質問をしてくるが、予想通りの質問なので火野はすぐに答えた。

「えっと、まず仮面ライダーなんだけど…。ミッドナイト先生の言う通り、仮面の戦士…そしてライダーは、俺プロヒーローになったらテレビのヒーロー番組でやってた“乗り物に乗ってきて登場する”あのシーンを現実でやってみたくて…。子供の時の夢だからちよつと言うの恥ずかしいけど…。今は名乗れないですけど、プロヒーローになってバイクの免許を取ったら、この仮面ライダーを名乗ろうと思いますっ」

「くう〜…気な臭い!でも嫌いじゃない!!じゃあ『○○○』は?」

「これは、俺の使ってるメダルを3枚模した名です。あと、俺の名前、『えいじ』。この文字の次の文字何だと思えます?」

「えっ……えつと……お、う……ず……あ!!」

「そうです、俺の名前を一文字ずらせば、〃おうず〃……〃オーズ〃になります!」ドヤア

「!!」うおおおおお!!「!!」

火野の言葉に生徒全員は感極まって大声を上げる。無理矢理考えた理由だが、間違っではない。火野はこの名に恥じぬよう、今ここで改めて〃仮面ライダーオーズ〃を証明したのだった。

No. 40 鴻上ファウンデーション

「職場体験は一週間。肝心の職場だが、指名のあった者は個別にリスト渡すから、その中から自分で選択しろ。指名の無かった者は、あらかじめこちらからオフアードした全国の受け入れ可の事務所40件、この中から選んでもらう。それぞれ活動地域や得意なジャンルが異なる。よく考えて選べよ」

「オイラはMt.レディ!!」

「峰田ちゃん嫌らしい事考えてるわね」

「ギクツ！ち、違うし！」

「声に出てる出てる…」

ヒーロー情報学でのヒーロー名決めが終わり相澤はそう言って受け入れ可の40件が書かれた用紙を配り現在自由時間で職場体験を決める時間となっている。

各自に用紙が渡され、皆はその内容に目を通しながら意見を言い合っていた。用紙を見ていた峰田は早速高らかに宣言するが下心丸出しなのか蛙吹にツッコまれると本心が出てしまい火野もツッコむ。

「芦戸も頑張ってたのに指名無いなんて変だよな」

「本当それ」

「…デク君はもう決めた？」

その横で尾白が最終種目に出場できた芦戸に指名が無い事をおかしいと言う。1回戦で負けてしまったのが原因かは不明だが芦戸は落ち込みながら同意する。すると、麗日は緑谷に声を掛けるが、彼はそれどころではなかった。

「まずこの40名の受け入れヒーローらの得意な活動条件を調べて系統別に分けた後事件、事故の解決件数をデビューから現在までの期間をピックアップして僕が今必要な要素を最も備えてる人を割り出さないといけないな…こんな貴重な経験そうそうないし慎重に決めるぞ。そもそも事件がない時の過ごし方等も参考にしないといけないな。ああ忙しくなるぞうひょー」

((芸かよ最早……))

集中すると発動するブツブツモードに入っていた緑谷にその場にいた6人は全員は固まり、心有らずのような笑顔で見ている。

「今週末までに提出しろよ」

「あと二日しかねーの!?!」

相澤がそう言うのと瀬呂が叫ぶ。火野は席に戻ると机には約100枚程の大量の用紙が置かれており、「うわあ」と驚いていると爆豪がそれを見て苛ついたので声を上げる。

「ハッ! 数がありやあ良いってもんじゃねえぞクソ三色野郎! ちんけな事務所でも選んでろ!」

「うわあみみっちい……! フン! 負けた奴が何騒いでやがる。お前の方こそ、しょぼい場所がお似合いかもな?」

「アあ!! 出たなこの赤鳥野郎!!」

「赤鳥……!! もういつペン言ってみろお! ……だあ!! 急に喧嘩腰に出てくるなよアंक! 爆豪君も喧嘩腰にならずに自分のやつ早く決めたらっ?」

「ケッ!」

爆豪の言葉に火野の中にいたアंकが反応し、火野アंकとなって表に顔を出し、言い返すと爆豪がお決まりの煽る呼び方で呼び、火野アंकは席を立ち上がり近寄ろうとする。だがギリギリで火野に戻り、アंकと爆豪を叱喝する。

「出た、火野アंक」

「なんか爆豪に似てる」

「似てねえ!!」

「似るか!! ……ぶああ!?! もおやめろよ!」

「火野君忙しそう」

「あれもう一芸だよな」

上鳴と耳郎が言うのと爆豪と火野アंकがツッコむ。火野に戻り、再度アंकに叱喝すると 葉隠と砂藤が眩いていた。

「ん〜…どれも名のあるヒーローばかりだなあ…これだけ指名があるのは有難いけど逆に決めるのに時間かかっちゃうな…」

「おい火野。嫌味かお前？指名が一つもない俺達に対してのあからさまな嫌味か!？」

「勝者が敗者の気持ちなんて考えないってか!?オイラ達だって体育祭頑張ったんだからなあ!!」

「ご、ごめん!そんなつもりじゃなかったんだけど…」

休みの時間、火野は何枚か目を通して眩くと通りかかった上鳴と峰田が怒り狂い声を掛けてくるので火野は謝ると、ブツブツ文句を言いながら2人は教室を出て行く。溜息を吐き、火野は再び目を通し出すと、アंकが話しかけてくる。

『フン、…にしても、どれも弱そうな奴らばかりだなあ…。職場体験なんざやる必要があるのか?』

「それは…(それはそうだろ…。学校の行事なんだし、こんな体験滅多にないんだよ?経験して立派なヒーローになるように学校も手配してくれてるんだから)」

『本当学校ってのは面倒な所だなあ…。…ん?おい映司ちよつと待て。前の紙もつかい見せろ』

「(え?えーと…あった、はい)」

相変わらず文句が多いアंकに火野は用紙に目を通しながら小声で会話すると、アंकが呼び止め火野は言われるがまま前の用紙を出す。

『…ほお、やっぱこいつ等もヒーローをやってるんだなあ。映司。その職場体験ってヤツはここにしろ』

「(これ?…。誕生ヒーロー『バース』…え?バースってまさか…後藤さん!?)」

『あいつはお前と同じ学生だっただろ?こいつは恐らく…あの五月蠅い奴が絡んでるなあ…』

「(確か、鴻上ファウンデーションが絡んでるんだっけ?発目さんが

言ってたな…：よし」

その用紙の中に書いてある「バス」という言葉にアंकはある男の人物を思い浮かんでいた。前世の世界の事を聞いた火野は体育祭の発目が言っていた事を思い出し、その用紙を見つめている。すると、決意したのかその用紙だけを鞆の中に入れ、後の用紙は後に相澤の元へ返したのだった。

☆☆☆

― 放課後 ―

「火野君っ。職場体験どこにするか決まった？」

「うん、一応ね。緑谷君は？」

「僕はまだ…。帰ってからゆっくり見てみたいんだ。」

「どれも名のある事務所ばかりだからじっくり考えたいし…！」

「あくそうだなあ。でも程々にね？夜更かしは体に悪いから」

「うんっ、勿論だよ」

身支度を終え、席を立ち上がる火野に緑谷は声を掛け、お互いどこにするか確認し合っているが、どうやら緑谷はまだ決めてないようだ。そして、先に出ようと教室の扉を開けた瞬間…

「わわ私が独特な姿勢で来た!!」

「ひゃっ」

「あ、オールマイト」

「そう、私だ」

開けると同時に腰を低く下げた姿勢で教室の前に現れ女の子の様な声を出す緑谷。その後にはいた火野が呼ぶと軽く手を上げ返事をしてくれる。

「ど…どうしたんですか？そんな慌てて…!？」

「ちよつとおいで」

「?…わかりました。ごめん火野君つ、また明日つ」

「あ、うん。またね」

突然の呼び出しに緑谷は火野に挨拶し、オールマイトに連れてかれその場から去って行く。火野は少し見送り、帰ろうとすると火野より先に扉を出て行く飯田の姿があったので声を掛けた。

「飯田君、職場体験はもう決まった?」

「ああ、火野君も決めたのか?」

「うんつ、誕生ヒーロー『バース』。」

場所は…三鷹市って書いてあったかな…」

「っ」

火野は指名先の場所をうろ覚えで言うのと、飯田が反応し動きを止めていた。

「飯田君はどこに決めたの…?…どうかした?」

「…ああすまない。…俺の指名先はノーマルヒーロー『マニュアル』だ。目立った活躍は著しいがその経験と知識を学びたくて選んだ。

…では、俺はこれで失礼するよ」

「うんつ、また明日ね」

「ああ」

飯田は軽く手を上げ、その場から去って行く。ふと、火野は顎に手を当ててその場に立ち止まるとアंकが話しかけてくる。

『おい、どうした?』

「いやあ、『マニュアル』ってヒーロー聞いた事はあるんだけど、事務所何処だったかな…って思っ…」

『フン。お前には関係のない事だ、さっさと帰るぞ。…待て、その前にコンビニだ。アイスが食べたい』

「だーめ。買い食いはあまりしたくない。コンビニなんて高いんだから家まで我慢しろっ」

『ふざけんなっ!…:…なら、我慢してやる代わりにハーゲンダッツ3つよこせ』

「お前段々がめつくなくなっ…?」

☆☆☆☆☆☆

そして、職場体験当日…。

「コスチューム持ったな。本来なら公共の場じゃ着用厳禁の身だ、落としてたりするなよ」

「はい！」

「伸ばすな『はい』だ芦戸。くれぐれも失礼のないように！じゃあ行け」

早朝に駅へと集合した1年A組は相澤の言葉を聞いて解散し、高揚感を漂わせ各々のプロヒーローの元へ体験しに行き始める。

「…えーと東京行きの…」

「火野」

「あ、轟君」

行き先の時刻を確認する為電光掲示板を見ている火野に、轟が話し掛ける。

「分からないのか…？」

「うん…、登校時にいつも乗ってるのと違う新幹線に乗るのに慣れてなくて…」

「途中まで是一緒だから一緒に行くか…？」

「え!? 本当!? ありがとう轟君! 凄く助かるよ、轟君様々だね!」

「いや…そこまで褒め称えなくていい…」

轟に言われ、火野は途中まで共に行く事になった。改札口を通り、時刻通りの新幹線に乗り込み、2人は自由席へと座る。走る新幹線に

少し揺られていると轟が話しかけてくる。

「火野：体育祭の時はありがとな」

「え？どうしたの急に？」

「お前の呼び掛けに俺は最後で本気を出せた……。結果は負けちゃったが、俺の中で何か解れが解けた気がして……。負けたのに清々しい気分だったんだ」

「轟君……。俺も君と戦えてよかったよっ」

以前の轟とは違うそのどこか優しさがある様な雰囲気。火野は笑顔でそう返す。後にたわいもない会話をして、2人は目的地へと向かって行く。その時に轟の好きな食べ物。蕎麦と知って火野は今度一緒に食べに行こうと約束をしていた。それは、この職場体験後にやってくる出来事で、一生忘れる事のないエピソードだと、彼等はまだ知る余地もなかった……。

☆☆☆☆☆☆

「……………うあくデツカいなあ……」

目的地に到着した火野は高く聳え立つ高層ビルに見上げながら驚く。

『鴻上ファウンデーション』。

大手のサポート会社で、その名は世界にも轟く大企業。有名のプロヒーローが着用しているコスチュームやサポートアイテムは殆どがこの大企業から制作されると言われている場所。勿論、大手だけ

あつて盗みを考えまいと動く輩も出てくる為、セキュリティや配属されたプロヒーローも多くいるとか。

『…あ？ついたか？』

「アंकっ、全然声が聞こえないと思ったら

まさかずつと寝てたの？」

『あく……………「さっさと入るぞ」

「うわっちよちよ!?出てくんなよ!?

責めて人間の姿になれ!」

「ちっ!」

突然アंकの声が聞こえたと思いきや、火野の身体から右腕だけのアंकが抜け出し、火野は怒るとアंकはセルメダルを大量に出してそれは徐々に人の形へと整えられ、一瞬にしてアंकは人間態となった。アंकが先を行き、火野は後を追う様に中へ入ろうとしたその時。

「ハッピーバースデー!!!オオオーズ!!」

「うわあっ!?!」

「うおおっ!?!」

自動ドアを入った瞬間突然目の前で大声を上げる赤が主体のド派手なスーツを着ていた男性に火野とアंकは驚き腰を抜かしそうになる。

「初めまして火野君!!そして…アंक君だね!!んんく素晴らしい個性だ!!オーズという個性”を持ちながら!アंकという君が初めての”派生型”を兼ね備えてるなんて!!非常に素晴らしい出来事だ!!おめでとう!!!」

「あ、えっと…初めまして。貴方が」

「私が鴻上だよろしくねっ!」

「(早口!?!しかも温度差激し!!)」

大声で発狂するかのように言う男性、この人がここの会社の代表取締役社長であり会長でもある『鴻上光生』。

「フン…相変わらずだなあ…会長が直々にお出ましか」

「我慢しきれなくて来ちゃった☆」

「そんな事は聞いてない!!」

アंकがそう言うのと突然のぶりっ子ポーズと発言に苛立ったのかアंकは怒りながらツツコむ

「さあ!火野君!アंक君!我が社へようこそ!!今日この日が!君達が初めて来たという誕生の日を盛大に祝おうではないか!!ハッピーバースデー!!」

「…この人って前世もこんな感じだったの…?」

「ああ…何なら今の方がクレイジーかもなあ…」

「あ、あはは…大丈夫かな…」

アंकに確認した火野は冷や汗を流す。心配になりながらも2人は鴻上の後を続き、中へと入って行く。火野映司の職場体験1日目、始動するのだった。

No. 41 欲望が解放された時

「うわああ…!!すつごおおおいつ!!」

「おい映司、五月蠅い。騒ぐな」

「まあアंक君、彼は今好奇心という『欲望』で満ち溢れている。好きにさせたまえ」

「……お前に言われるのは癪だが、そうしといてやるか…」

「ここってあべのなんとかってビルと同等の高層ビルなんでしょ?!すつごいなあ…!」

鴻上ファウンデーションにやってきた火野とアंकは会長の鴻上に案内され、エレベーターに乗ると東京都三鷹市の風景が丸ごと映し出されるガラス面越しの景色に火野は子供のようにはしゃいでいる。

鴻上に言われたアंकは前世の火野：『欲』がない火野を思い出し、このくらいならいいかと思っただのかそのままにさせてあげていた。そして地上から登る事最上階『60』階。高いとされる高層ビル、あべのハルカスと同等の高さでそれに驚く火野だが、鴻上はそそくさに降りて自身の仕事部屋『会長室』に勢いよく扉を開けて入る。そこには、だだっ広い空間に会長が座るであろう高そうな机と客間スペース、そして趣味なのかピアノが置かれてある。そこには秘書と思われる女性『里中』とソファアに座っている男性がいるが、その男性は火野がよく知っている後藤だった。

「え!?!後藤さん!?!」

「火野、やっと来たか。同じ時刻の新幹線に乗車したはずなのに来るのが遅れているぞ」

「ご、ごめんっ。初めてのところだからナビ見ながらここに来てたんだ…」

後藤は火野を見るなりそう言って溜息を吐く。火野が謝っているとアंकが鼻を鳴らし後藤に視線を向け悪態を吐く。

「フン…、後藤か…。映司と同じ若返って学生気取り…。おまけにその性格も前世譲りか…笑える冗談だな」

「…？お前が…アंकか？人間にも化れるとは驚きだが、若返るだの前世だの…何を言っている？」

「ちよっ!?（ア、アंक!?ダメだろ!!前世の話なんてお前以外知るわけないんだからっ!）」

「……フン」

ボロが出まくるアंकに火野は慌てて奥へと引つ張りアंकに小声で叱喝するがアंकは鼻を鳴らしてそっぽを向く。火野は諦めて後藤に話題を変えようと話し掛ける。

「ごめん後藤さんっ、こいつちよっとな変な事考える奴で…！そ、それより何で後藤さんがここにっ？」

「…『個性』の派生…。人格も身体も別人。お前も苦勞する奴を持つたな…。」

…ああ、俺もここに職場体験として来た。元より、俺はこの職員でもあり協力者でもある」

「…え!?職員!?どう言う事っ？」

後藤の発言に困惑すると先程から黙っていた里中がこちらに近寄り声を掛ける。

「秘書の里中です。後藤さんはこの会社の新たなサポートアイテム、『バース』の設計の仮の協力者です。……ぶっちやけコネですけどね」

「おいつ！一言余計だ！」

「まあいいじゃないか里中君。後藤君はまだ歳頃の学生。見栄を張るのは学生の専売特許だっ。そういうプライドは君の良い所でもあり悪い所だけどねっ」

「会長!!」

里中につき、鴻上も口を挟み、後藤は耳を赤くして怒ると、奥にいたアंकはにやけながらフンと鼻で笑う。火野は苦笑して後藤を宥めるが、逆効果だったのか後藤は歯を食い縛り俯向く。すると、鴻上は自身の席に戻り、座ると里中に指示を出す。

「里中君！2人が揃った事だし、始めたまえ！」

「…はい。では、お二人はこれから我が社で職場体験を開始させても

らいます。火野さん、後藤さん。まずは鴻上ファウンデーションの警備を任されている人物、貴方達で言う「プロヒーロー」に会っていただきます。内容とか詳細はご本人に直接聞いてください。色々説明するの正直怠いので…。あの人は今開発部署にいるので、案内します」

「っ！ちよつと待て、ここに呼べないのかっ？」

「はい、今は手が離せないなので連れて来てくれと」

「……っ。」

「ハハハ！そう言う事だ！頑張りたまえ諸君！」

里中の説明に後藤が反応し、何故か嫌そうな顔をする。火野は首を傾げると、鴻上が両手を広げてそう言い先頭を歩き出す里中に続き、アंकを含めた3人は、その開発部署へと移動した。

☆☆☆☆☆☆

高層ビルの中層部付近へとエレベーターで降りた3人は里中に案内され、頑丈そうな扉を開けてその中へと入ると、精密な機械が密集されており、職員であろう何十人の人が機械を使って様々なサポートアイテムを開発し、勤しんでいた。機械が軋む音、溶接の音など少々音が響く場所だが慣れている里中は悠々とその奥の部屋へと歩き、3人も後をついていく。ふと、後藤は段々と嫌そうな顔を浮かべていく。そして、奥の部屋へと入ると、強化ガラスで覆われた小部屋だった。その奥には広い面積が広がっており、どうやらその空間で何か実験を行うのだろう。火野達は覗き込むとそこにいたのはあの体育祭で見た「バース」だった。

「え!?バースっ!?でもバースって後藤さんが…?」

「俺のは一番最初に開発された「試作品」だ。あそこにいるのは、そのデータを元に作られた元々の機能や能力を備えた「バース」…」

「はい。そしてそのバースの装着者がこの会社の警備且つ、プロヒーローである『伊達明』です」

後藤の後に里中が説明すると、実験室にいたバースは何かを放ったのかそのコンクリの地面は焼け焦げた後が残っており前方の用意されてあった分厚い壁が粉々に粉碎されていた。そして、その場にいたバースは、別の小部屋にいる者に向けてか声を上げる。

『発目ちゃん！これ威力は強いんだけど！反動凄いわ体に負担掛かるわで正直すげー痛い！』

『フッフ、セルメダルのエネルギーを収縮して一気に放つ今は付け焼き刃の必殺技ですから当然です！まあデータは取れましたので後で改良しときますね！』

『助かるわー！』

「…えっ!? 発目さん!? え、彼女も職場体験に!？」

「まあ半分はあっています。発目さんはヒーローとしてではなくサポートとしての職場体験です。元より彼女もコネですが、両親がここで働いていますので、発目さんもその才能が凄いので特別に会長から許可が降りて登校日以外はここに入り浸って開発してます」

「そーなんですか!?! 凄い!！」

「何だ? そんなに凄い奴なのかあいつ」

「好奇心が激しい変わった奴だ。あいつといるといつも調子狂う…」

里中がそう言うのと火野は驚き、彼女のいる小部屋を見ていた。アンクは発目の事を知らないのかそう言うのと後藤が溜息を吐いて顔が下に向いていた。

すると、こちらの存在に気付いたのか伊達はバースドライバーに装填されてたセルメダルを抜き取ると、そのセルメダルは粒子となって消え、変身が解除される。そしてそこに立つ人物が伊達明だった。

『よお！来てたのか！悪いなここに来させちまって！発目ちゃんがどうしても試してみたいって言うからさー!』

『おや? おやおやおや!?! そこにいらっしやるのはオーズですね!! ちょうどお会いしたかったんですよー!』

伊達が言うのと、発目も気付いたのかこちらをみて笑顔で手を振って

くる。後藤は小部屋から実験室へ出れる扉を開けると、先に実験室へ向かった。

「では、私は戻ります。後は頑張ってください」

「あ、はいありがとうございます」

里中はそう言って出口の扉から退出していく。火野とアंकは後藤の後を続き、実験室へ向かうと伊達は笑顔で手を振り、自己紹介をする。

「おー！お前が火野だな？俺がここのヒーロー伊達明だ。よろしくう！活躍は体育祭で見たぜー。マジですげえ「個性」だよな！オゥ：ブだっけ？」

「伊達さん、オーズです」

「おおう、それぞれ後藤ちゃん！…で、その派生型で現れた新たな「個性」が…アンコ！」

「アंकだっ！！言うと思ってたぞ！何処にいても覚える気がないんだなあ!？」

伊達がアंकの名を言うと同時にやつぱりかと言わんばかりに伊達にその右腕をグリード化させ、見せながら詰め寄ると伊達は驚きながら後退さる。

「おちよちよちよちよ!?!え、誰この危なそうな子？」

「ごめんなさい！アंकやめろよっ！」

「え！こいつがそのアンコなの!?!人間の姿になれるってすげえ「個性」だな！」

「アンコじゃない！アンコじゃなあああい!!」

火野はアंकを抑えると伊達が興味津々で言いましたアंकの名を間違えるのでアंकはそう叫んでいた。

☆☆☆☆☆☆

― 都内死柄木等の拠点 バー ―

「……なるほどなア……。その一団に俺も加われと」

「ああ頼むよ大悪党の先輩」

ヒーロー殺し、ステインを敵^{ヴァイラン}連合に引き込もうと死柄木は説明して手引きするが、その様子を見ていた脇真音がステインの顔を伺いつつ黒霧にコソコソと話しかける。

「(2日前はすぐ帰っちゃったのに何でまた来てくれたんだろ?)」

「(あの時は我々の説明も聞かずに帰ってしまったからね。都合もあったのでしようが、恐らく……)」

「(あーはいはい、気分ね、大悪党様々ですかー)」

黒霧の発言に察した脇真音は感じ悪そうに ステインを見ていた。

「……………目的は何だ?」

「とりあえずオールマイトをブツ殺したい。気に入らないものは全部壊したいな。……こういう糞餓鬼共とかもさ……全部……」

死柄木はそう言って体育祭の時の緑谷や火野達のA組生徒の写真を見せて説明する。が、その瞬間ステインの形相が変わり、言い放つ。

「興味を持った俺が浅はかだった……。お前は……。ハア……。俺が最も嫌悪する人種だ……」

「はあ?」

「っ!ちよつと!何急に殺意出しまくってんの?あんたも結局ヒーローを殺したいだけでしょっ!」

「…ハア…お前等子供の癩癩に付き合えと…?俺の信念と…お前等…信念無き殺意では…ハ…ハア…格の差が違い過ぎる……」

ヤバいと思ったのか脇真音は死柄木の前に出て怒ると、ステインはそう言って両脇に備えてるナイフをゆっくりと取り出す。

「もー！何なのこいつめちやくちやウザい！」

「ああ…ダメだなこいつ…。勧誘は辞めだ、追い出そう…」

脇真音はオーズドライバーを腰に宛てがい装着し、死柄木は両手をゆっくりと上げる。それを見ていた黒霧は隣に置いてあるモニター越しの男性に喋り掛ける。

「先生…止めなくていいのですか!？」

『これでいい！答えを教えるだけじゃ意味がない。到らなぬ点を自身に考えさせる！成長を促す！「教育」とはそういうものだ』

☆☆☆☆

「じゃ、ヒーロー活動についてだが一応は公務員みたいなもんだ。まあでも一般的な公務員とは根本的につつーか色々違う。基本はだな……えーつと…」

「犯罪の取り締まりですね。事件発生時には警察から応援要請が出され地区ごとに一括で出動。逮捕協力や人命救助、貢献度を申告。そして専門機関の調査を経て、初めて給料が支給される。また、申請を出せば「副業」も可能です」

「YES！流石後藤ちゃん！俺そう言う説明に苦手だから助かるわー。もう俺よりヒーローじゃんっ」

「知識だけではヒーローは務まりません」

「相変わらず考えがかったいねえ」

伊達が頭を描きながら説明しようとするが後藤が代わりに言ってくれた為、グツジョブを送る。火野は納得し、伊達にどうすればいいのか聞いた。

「伊達さん。これから1週間よろしくお願いします！因みに…今日は

何をするんですか?」

「おうよろしくっ! そうだなあ…。取り敢えずパトロール…かな後藤ちゃん?」

「何で俺に聞くんですか? 俺も一応職場体験で来てるんですよ?」

「まあまあそう言うなって。俺だつてこの前“ヒーロー”に転職したばかりなんだ。その立場じゃ後藤ちゃんの方が上だと思うけどな」

「えっ? 転職って…伊達さんずっとヒーローしてたんじゃないんですか?」

伊達の意外な発言に火野は驚くと、小つ恥ずかしく伊達は説明する。

「まあその、俺元々個性ありきの『医者』だったのよ。だけど勤めてた病院と揉めちまつて辞めざるを得なくなつたんだけど、この会長さんに拾われてな。ヒーローをやる代わりに、“個性”持ちの相手と対等に戦える様この“バース”を貰つてヒーロー活動してるわけだ」

「医者だつたんですか! 凄い…!」

「フン、医者か…。だがそのベルトはヤミー専用みたいなもんだろ?」

「ええそれもありますねアंकさん!!」

「うおっ!? 何だっ!?!」

「USJ事件で出てきたヤミーを対策に作られたのがバースですから! 本業はヤミー撃退用と言つた方がある意味正しいかもですね!」

伊達の言葉に火野は驚くと、アंकがそう呟く。その瞬間、アंकの背後から発目が顔を出してそう言うのと、アंकは勢いよく飛び退く。

「発目さん! 体育祭以来だね」

「オーズのお方! 貴方にちようどお会いしたかつたんです! 私が貴方を独自で研究したグーロードベイビーちゃんをお披露目したいので少し手伝ってもらつてもいいですか!?!」

「おい発目! 俺達は職場体験に来て」

「では! 準備しますのでちよつと待つててください!」

発目が言うと、後藤が嫌そうな顔をして発目を止めようとするが、

彼女は夢中でそう言って先程入ってた小部屋へと戻る。後藤は溜息を吐くと、伊達が宥めようと肩を叩く。

「くそっ…自分の事になると周りが見えない…。だから嫌なんだあいつ…」

「まあまあそう言うなつて後藤ちゃん。職場体験は1週間もあるんだろ？今日は初日だし、発目ちゃんも一応職場体験として実務をやるうとしてると思えば、な？」

「……伊達さんが言うなら……」

後藤は自身の感情を堪え、冷静になると小部屋から何やら変わった形の剣を持ってきて火野に差し出す。それを見たアंकは知ってる物だったのか口を開いた。

「ほお、どこまで忠実に再現してるんだこの世界は」

「うわああ！すごい剣だあ!!かっこいいー!」

「ですよねですよね!?それはセルメダルを使ってヤミーと戦う事を考慮したオーズの武器!その名も『メダジャリバー』第零号です!!貴方のオーズドライバーをベースとしたカラーリングでその切れ味も抜群!更にセルメダルをその剣に入れば物凄いミラクルな必殺技が出せます!」

「おい、俺達は学生の身だぞ。武器なんて持ってたら凶器準備集合罪でそれこそ」

「そこは勝手に学校と警察に交渉してください!」

「馬鹿か!許可が降りるわけないだろ!!」

発目が説明すると、後藤はそう言って止めようとするが掻い摘んで発目が言つて後藤は怒り声を上げる。

「まあまあまあ後藤ちゃん、一応ここはサポート会社だから試験用として使つても問題ないだろよ。後で俺から学校とかに話し合つてみるから今は試しに練習してみたらどうだ?」

「いいんですか!?!やった!ありがとうございます!」

「流石伊達さん話が早いです!ではでは早速準備しますね!」

「おい待て!」

伊達の言葉に火野は嬉しがり、発目はまた小部屋に行こうとする

が、急にアंकクが呼び止める。

「お前色々作れるんだったな？この『コアメダル』を収納できるホルダーみたいなやつも作れるか？いちいち体から出し入れしていると体を使うから作れるなら今すぐ作れ。実験はその後だ」

「ほうほう。セルメダルとコアメダルを収納するホルダーですか？興味がありますね！ちようどいらなくなった小物入れがあるので改造してみますね！」

アंकクは交渉して発目が了承すると、そのまま小部屋に駆け込む。それを見た火野はアंकクに向かって口を動かす。

「お前以外とそう言う所はしっかりしてるな」

「フン、お前との連携に備える為だ。わざわざそうしてやってるんだから感謝しろ」

「んなっ!?!そういう一言が余計なんだよ！」

アंकクに言われ火野は声を上げて言い返す。

格して、火野と後藤、そしてアंकクの職場体験の1日がこうして始まろうとしていた。そしてこの職場体験で壮絶な事が巻き起こる事を彼等はまだ知る余地もなかったのだった。

No. 42 動き出すその信念

「何を成し遂げるにも信念…想いが要る。無い者、弱い者が淘汰される。当然だ。だからこうなる」

ステインは横たわる死柄木に跨りナイフを死柄木の右肩に突き刺し、ドクドクと血が流れる。もう片方のナイフは首元に突きつけていた。呆気なくやられていたのか死柄木は笑い出す。

「ハツハハハ…！…いってえええ…！強過ぎだろ。」

「もおおお…！！体…動かないんだけど…！？せめて変身させてほしかったなあ…、何もできずに動けないの超腹立つ！黒霧さんこいつ追い出してよお…！！」

「申し訳ありません…私もです…！！恐らくヒーロー殺しの『個性』……」

奥では脇真音も手を斬りつけられ、嘆くと黒霧も腕を斬られていたのか2人はその場から動けずにいた。

「英雄が本来の意味を失い偽者が蔓延るこの社会も、徒に『力』を振り撒く犯罪者も、粛清対象だ…ハア………」

「！！」

ステインはそう言って死柄木の首をナイフで切ろうと動かすと、死柄木は右手でそのナイフの刃先を鷲掴む。

「ちよつと待って待って…この掌は…ダメだ。殺すぞ」

その直後、死柄木が掴んだナイフは徐々に崩れていく。

「口数が多いなあ…信念？んな仰々しいものないね…。強いて言えばそう…：…オールマイトだな…あんなゴミが祭り上げられてるこの社会をめちやくちやにブツ壊したいなあ、とは思ってるよ…！！」

「っ!？」

顔を被さる掌の奥で不気味な笑みを浮かべる死柄木にステインは慄き、咄嗟に死柄木から距離を取る。そのまま掴みかかろうと死柄木は右手を振るうが既に飛び退いた後なので空振ってしまう。

「あく…：…：せつかく前の傷が癒えてきたところだったのにさ…。お

い、脇真音。お前のあのコンボ俺を回復できねえのか？」

「ごつめん…あれ私だけ…。それにあれ無理矢理怪我したとこ元に戻すだけだから正直回復とは言わないんだよね…しかも発動したら痛いし…」

「はあ…使えねえな……。おい、ヒーロー殺し…、この責任はとつてくれんだろおなあ…？」

脇真音はそう言うのと死柄木は首をボリボリと掻きながらステインを睨む。

「……それがお前か……」

「は？」

ステインはナイフを収めて立ち上がりながらそう言うのと死柄木は納得いかない言葉に声を漏らす。

「お前と俺の目的は対極にあるようだ…だが、『現在いまを壊す』、この一点に於いて俺達は共通してる…」

「はあっ…!? 喧嘩ふっかけて来て、こんな事しといて巫山戯んなだし！」

「…理解できねえ……。『最も嫌悪する人種』なんだろう」

ステインの言葉に脇真音は怒り声を上げ、死柄木はますますステインを怪訝そうに睨み声を出す。

「真意を試した。死線を前にして人は本質を表す。異質だが…『想い』…歪な信念の芽がお前には宿っている……。……お前等がどう芽吹いていくのか…、始末するのはそれを見届けてからでも遅くはないかもな…」

理由を述べるステインに死柄木は不満そうに斬られた肩を抑え、口を動かす。

「始末すんのかよ…。こんなイカレた奴がパーティーメンバーなんて只でさえその使えない奴がいるつてのに…、嫌だね俺…」

「ちよつと、今とても失礼な事言ったよね君？ まあそれについては私も同じだね。こんな奴とは一緒にいたくない。不愉快！ ベーっ！」

「死柄木弔、脇真音優無。彼が加われば大きな戦力になる。交渉は成立した！」

死柄木はそう言うのと、横たわってた脇真音が動けるようになったのかゆつくりと起き上がり、ステインに舌を出していると、黒霧は宥めようとステインを評価し、2人は嫌そうにも了承したのか黙り込む。そしてステインはここに連れてきた現況黒霧に向かって声をかけた。「用件は済んだ！キア 保須」へ戻せ。あそこにはまだ成すべき事が残っている…！」

☆☆☆☆☆☆

ー 鴻上フアウンデーション 開発部署 ー

「パトロール…ですか!？」

「おう、隣街の『保須』にな。ここはそんなに治安悪くねえし…。ほら、保須って最近盛んになってるだろ？しかも変なニュースが話題になってるし、パトロールするなら持ってこいだって話」

「伊達さん、ニュースってあの『ヒーロー殺し』ですか？だったら他に理由があるんじゃないですか？」

「正解！つつつても、半分正解かな後藤ちゃん。ここら辺は渋谷とかよりもあまり人口が少ない都市だからな。犯罪ってのは人が多ければ多いほどトラブルが増える。三鷹市は案外平和なもんだが、隣街の保須で既にヒーローが2人やられたらしい。原因はまだ不明だがヒーロー殺しの可能性がある。ぶっちゃけそのヒーロー殺し絡みの応援要請が掛かって今からその保須でパトロールってわけよ。OK？」

伊達はそう説明すると、珍しくアंकがその説明に、茶々を入れるかのように口を挟む。

「…フン、伊達。こいつらはまだ学生だぞ？公表でこいつらを戦わせるのは法律かなんかでその悪党共を叩きのめすのは禁止されてるんじゃないのか？」

「まあまあーそこはこの俺バースがいるから大丈夫だアンコ！」「アंकude！」

それにあくまで仮の話を想定してのパトロールだから、そこまで気を使わなかったっていいぞ。まあ、もし出会ったら火野や後藤ちゃんには市民の避難活動をしてもらうから…。だから危ない真似だけはするなよ？」

「はいっ！」

「わかりました」

名前を間違え、アंकは叫ぶが無視をされ伊達はそのまま話を進め、最後は本気表情で忠告すると、2人は頷く。職場体験が始まり、彼此3日目の午後17時。火野達は鴻上ファウンデーションに来てからはこの2、3日間は発目の実験に付き合わされ殆どヒーロー活動らしい活動などをしていなかった。それだけ三鷹市は平和な日々を送っているのだが、青春の学生の火野達にとってはそれは不満でもあった。後藤に至っては発目が嫌いなのか分かりやすく、常に拳を握っていた程だ。見兼ねた伊達は、体育祭で成果を残した2人を見込んで応援要請を引き受け、現在話し合っていたのだ。

「よし！じゃあ早速準備だな。コスチューム来たら下のフロアで待っててくれ。パパッと車用意しとくからよ」

伊達はパンツと手を叩き指示を出すと、先に開発部署を出て行く。

「火野、俺達もコスチュームに着替えて行くぞ」

「うん！…あれ？アंक…………あ、おいアंक！更衣室に行くぞー！」

「勝手に行ってろっ。俺は下に降りる」

「えーっ…。もお分かった。ちゃんと降りとけよ！」

壁に寄りかかっていたアंकは発目から作ってもらった合計24枚のコアメダル、セルメダルを収納できる“オーメダルホルダー”にコアメダルを嵌め込み眺めながら、火野にそう返すと後藤と火野は開

発部署から出て行つた。

「……中々揃っているなあ……。……だが映司の奴…、このコアメダル、どこから手に入れてやがる……?」

メダルホルダーのコアメダルを数え、アंकは呟く。そこに入っているコアメダルは何枚かセルメダルを除き、10枚が入っていた。

タカ×1

クワガタ×1

カマキリ×1

バツタ×1

ライオン×1

トラ×1

チーター×1

サイ×1

ゴリラ×1

ゾウ×1

そして、アंक自身には

タカ×2

クジャク×3

コンドル×3

と、以上の8枚を所持している。グリードは9枚揃う事で「完全体」となり自身の欲望を望むがまま行動をするのだが、前世で火野と出会い共に行動していたアंकは最も欲しかった物『命』を味わえた為、アंकはその衝動的行動をする事なく、現在に至り、火野の側を付き添っている。そして今、アंकは違和感を覚えていた。この世界で敵側^{ヴァイラン}にいたオーズを除きコアメダルが絡む存在と出会っていない火野が何故こんなにもコアメダルを所持しているのか疑問に思う。本人曰く、「気が付いたら手元にあった」との事。ますます謎の現象にアंकは眉間に皺を寄せるが。

「……まあ、リスク無しで手に入るのは儲けもんだな。takeが好きな俺にとつては有難い事だ」

アंकは考えるのを辞め、そう言い残すとホルダーを閉じ、開発部署を出て行つた。

☆☆☆☆☆☆

ー 保須市 ー

日が落ちて空の色が薄暗くなっていく頃、黒霧のワープゲートから転移してきたステインはビルの貯蔵タンクの上へと立ち、保須の街を眺めていた。しばらくすると、ワープゲートから続いて死柄木と脇真音も到着し、死柄木は保須を見て眩く。

「保須市って……思いの外栄えてるな」

「そりゃあ隣の三鷹市にあの超有名な鴻上ファウンデーションがあるからじゃないっ?」

「知らね」

「死柄木君、自分で眩いといてせっかく応えたのに、冷たいなあ」

「ヒーロー用の会社なんて興味が更々ないね」

脇真音と死柄木が言い合っていると、ステインは割り込む様に、口を動かしてきた。

「この街を正す、それにはまだ……犠牲が居る」

「先程仰っていた『やるべき事』というやつですか?」

「おまえは話が分かる奴だな……」

黒霧が反応し、問い掛けるとステインは保須を見渡しながら答える。すると、それを聞いていた2人は苛立ったのか小声で口を開いた。

「いちいち角立てるなオイ……」

「私等は空気読めない子供ですか……っての……」

脇真音が文句を言っているとステインは両手を広げ、保須に向かって喋るかの様に口を動かす。

「ヒーローとは偉業を成した者のみ許される『称号』!多すぎるんだよ……!!英雄気取りの拝金主義者が!この世が自ら誤りに気づくまで、俺は現れ続ける」

ステインはそう言って、背中に背負っている刀の柄を持ってその場

から飛び降り、姿を消した。

「…え？何？あれだけ言つといて地道にヒーロー殺しするの？」

「やる事は草の根運動だなあれ…健気で泣けちゃうね」

「……そうバカにも出来ませんよ、お二方」

「？」

根に持つ2人はステインがいなくなると同時に嫌味を吐き死柄木に至っては首を掻きまくっていた。すると、背後から黒霧が2人に向かって口を開く。

「事実、今までに奴が現れた街は軒並み犯罪率が低下しています。あの評論家が『ヒーロー達の意識向上に繋がっている』と分析してバツシングを受けたこともあります」

「……へえ、じゃあヒーロー殺しを野放しにしとけば、ヒーローはどんな行き場を無くして食いぶちを減らす算段、みたいなの？」

「素晴らしい……！とでも言うか回りくどい!!やっぱ…合わないんだよ根本的に…ムカつくしな…。黒霧、脳無出せ。俺に刃ア突き立ててタダで済むかって話だ。ブツ壊したいならブツ壊せばいいって話…ハハ……。おい脇真音」

「分かっているよ…今回は私もやられっぱなしだからね。……大暴れしてあげるよ」

脇真音が軽いノリで解釈すると死柄木は怒り、黒霧に指示を出すと、無言で従いワープゲートを開いて行く。そして脇真音はオーズドライブバーを腰に宛てがい装着すると、3枚のタトバのコアメダルを取り出す。その変身する手順は火野映司とは異なり、タカとバツタをそれぞれ持った両手を顔の正面でクロスさせ、2枚を嵌め込む。その後、トラのメダルを顔の正面に持つてくると、器用にスロット部分に投げ込む。そして右腰のオースキャナーを取り出し、ベルトへとスキャンした。

「変く身っ！」

タカ！

トラ！
バツタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

音声が鳴り響き、脇真音はオーズへと姿を変える。それと同時に、黒霧のワープゲートからUSJの時とは異なる姿、形をした脳無が3体出現する。

「ねえねえ！さっきの凄い決まってたでしょ!? 凄い練習したんだよ！綺麗に決まって今テンション爆上がりなんだけど！」

「五月蠅い。さっさと行け……。さあヒーロー殺しステインさんよお……。大暴れ競走だ。アンタの面子と矜持、俺等で潰してやるぜ、大先輩」

☆☆☆☆☆☆

ステイン、死柄木等が現れてから数十分後、保須へ到着した伊達、後藤、火野は車から降りる。アंकは途中で火野の中へと入っていたが、車から降りた途端、人の姿となり出てくる。

「…?どうした火野。」

「あ、ごめん…ちよつと友達の事思い出してて…」

「フン、飯田って奴だろ？」

「えっ!? どうして分かるのっ?」

「お前の中にいたら嫌でも聞こえてくるんだよ」

車で移動中、出る前ははしゃいでた火野は徐々に口数が減ってきたのを見兼ねて後藤は火野に声をかけると、アングがそう言っただけで市内を見ていた。飯田の兄、ターボヒーロー“インゲンウム”が敵に襲われ^{サイラン}た事はニュースは把握していたのだが、後付けで刃物で刺されていたなどの原因が述べられ、恐らくヒーロー殺しの仕業ではないかと推測されていた。その事を忘れて、今回のパトロールではしゃいでいた火野は自分が情けないと今落ち込んでいたのだ。

「飯田君…大丈夫かな…」

落ち込む火野に、伊達は声をかける。

「ま、時が経てば解決するだろ。さー今の俺達はヒーローとしてここに来たんだ。他のヒーロー達と合流して、街をパトロー」

ドゴオオオオン!!

その刹那。

伊達の背後で爆発が起き、火野達を含め周囲の人も驚き、その場を確認する。着地したのかそこには体が黒く、脳が剥き出しの大男、脳無が煙が上がると同時にゆっくりと立ち上がり、周囲を見渡していた。

「何っ!? 爆発!?!」

「わああっ!? なんだあいつ!?!」

「に、逃げた方がいいぞ! 逃げろお!!」

市民はその得体の知れない存在に驚き、困惑し、虫が散り散りになる様が大勢の人が逃げ出す。

「あれって…脳無!!? 何でここに…!?!」

「おいおいおいマジかよ…!?! こんな話聞いてないんだが…!?!」

火野は脳無を見て驚愕すると伊達はそう言いながら、バーストライバーを腰に巻き付ける。

「とりあえずこいつ抑えねえと被害が出るな…!?! 火野! 後藤ちゃん!

ついでにアंक！避難誘導頼むわ！」

「はい！皆さん！こっちはです！焦らず避難してください！」

伊達の指示に後藤は了承し、逃げ惑う市民に声をかけながら避難誘導をしていく。火野も手伝おうとするが、一歩も動かず、ビルの屋上を眺めていたアंकに声を上げる。

「アंक！お前も手伝えよ！」

「映司。…あれ見ろ」

アंकが屋上を指差す。怒りながら火野はその指差す屋上を確認すると、そこにはオーズがこちらを見下ろす様に立っていた。

「っ!!あいつ……!!」

「フン！初のご対面だなあ……映司！奴を追うぞ！放っておけば何を仕出かすかお前なら分かるよなあ！」

「っ!!?わかった！後藤さん！ここ頼みます！」

「！おい火野!!」

アंकの言葉に火野は恐怖を感じ、後藤にそう言って火野はアंकと共にオーズが立っているビルの屋上へと走り出した。

☆☆☆☆

「はあ……！はあ……!!」

「……お前が偽物オーズか……」

屋上へとたどり着いた火野は全力で来たので、息切れを起こし、その場で膝に手を置く。一方でアंकは人間でもその実態はグリードなので疲れ知らずな顔をし、目の前のオーズに問いかけるとオーズはアंकを見るなり興奮した声で口を開いた。

「アंकうっ!!会えて嬉しいよ……!!体育祭の時はもうテンション上

がって釘付けだったなあ！ねえ何で突然現れたの？火野映司君がコンボ使い過ぎてピンチだったからかな？ねえねえ何でっ？」

「ほお…。随分と知った様な物言いだなあ。…………お前、何者だ？」

「あつはあ！その喋り方本物アंकだあ！え？私？私は脇真音優無。そんなもつて、仮面ライダー…………あく…、そのままだと被つちやうか。んんっ！とりあえず、私は仮面ライダー『ヴァインオーズ』！つて事にしといて！」

「巫山戯るな！何者だつて聞いてるんだよこつちは！」

「名乗ったのに怒られた…………ぴえん」

ヴァインオーズと名乗る脇真音オーズにふざけた対応されたアंकは怒り声を上げると落ち込んだのか彼女は顔を俯向く。

「…お前…あの脳無使つて何を企んでる…!?」

「あく、あれは私じゃないよ？ていうか、何で君達ここに居るの？…あ！職場体験つてやつか！で、偶然ここに来たんだね？はいはいはい、成る程、納得納得。まあ私は君達に会えたのなら全然問題ないけどっ」

「こいつ…イカれてやがるな…！」

息を整え、火野は問い掛けるとヴァインオーズはそう言つて手をパタパタと震わせ、その行動にアंकは舌打ちをしてそう言う。するとヴァインオーズは振り返り、保須を見渡すと両腕を広げ、口を開く。「さっきアंकが言つてた何者…だったかな？ふふっ、そりや当然だよつ。私は君達の事、ずくずくつと見てたからね…………」

不気味な声でそう言い、アंकは警戒しながらオーメダルホルダーからタトバのコアメダルを取り出す。火野もそれを確認し、オーズドライバーを腰に宛てがい、装着した。

「見てただと？フン！訳分らない事言いやがつて…」

「とりあえず…君を捕まえるっ！事情は後で話してもらおうよ」

「えー、捕まるのはごめんだけど、まあちよつとだけ相手してあげる」アंक、火野はそう言うと、ヴァインオーズは手を頭の後ろに回して余裕そうな態度を取る。それはまるで、今から変身する事を想定し、やるならどうぞーと言わんばかりな態度だった。そしてアंकは

その隙を逃さず事なく、火野に向かってコアメダルを投げ渡す。

「映司!!」

「っ!」

「わああっ!!生の投げ渡し!!録画したかったあ!!」

綺麗にキャッチした火野を見てヴィランオーズは興奮し、拍手しながら眺めている。その行動に火野は困りながらドライバーにコアメダルを2枚、1枚と順番に嵌め込み、右腰のオースキャナーを取り出し、ベルトにスキャンした。

「変身!」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ!タトバタ・ト・バ!

音声が鳴り響き、火野はオーズ“タトバコンボ”へと姿を変える。

「おおっ!……さてと、やりましょうかつ」

ヴィランオーズはそう言ってファイティングポーズを構え、オーズも同じく構えると、アंकがオーズの横に来てヴィランオーズを見ながら口を動かす。

「映司、久々にやるか」

「やる……って何を?」

「馬鹿か、相手はメダルを使ったオーズ。となると狙いは当然……」
奴からコアメダルを奪う”事だ”

No. 43 増殖コンボ

「おつらああ!!」

伊達はバースに変身し、目の前にいる脳無に渾身の右フックを打ちかました。脳無はよろけるが、すぐに体制を立て直しバースに大振りの拳を振りかぶる。見切ったバースは何とか避けて脳無から距離を取りながら肝を冷やした。

「んおつと!!こいつ固ってえな!!」

「伊達さん!バースの『CLAWsシステム』使ってください!半端な攻撃じゃ奴は倒せませんよ!」

「そだな!んじゃ、やりますか!」

市民の避難をしながら後藤はバースにそう叫ぶとバースはセルメダルを取り出し、バースドライバの展開されたカプセル“トランサーシールド”を手動で閉じ、セルメダルをスロットに嵌め込んだ。すると待機音が鳴り、ダイアル部分の“グリップアクセラレーター”を回し、再度トランサーシールドが展開し、発光する。

《カポーン… 『ドリル・アーム』》

音声が鳴り、右腕のカプセル部分からアームが出現すると、バースの右腕に文字通り、ドリルのアームが装着される。これがバースドライバにセルメダルを投入する事により出現・装着されるユニット。その名も“バースCLAWs”。

「つしやあ…。後藤ちゃん!近寄るなよ!」

「近づくんなんて更々ありませんよ!」

後藤はそう答えると、バースは脳無に向かって走り出し、ドリルアームを装着した右手をぶん回し、脳無に攻撃する。高速回転を纏ったドリルは脳無に直撃し、身が削れる様に削がれていた。だが次の瞬間、その削られた部分が再生し、元の形へと戻っていく。

「ちよつと!!こいつ再生の“個性”かよ!!なら手加減はいらねえな!再

生が追いつかない勢いで攻撃してやるよ！ハアツ!!」

バースはそう言って再び脳無に攻撃を加え、戦闘を開始していると、人混みを掻い潜って保須のヒーロー達が何人か集結する。

「あんた等鴻上のとこのヒーローだな！遅くなった！加勢する！」

「てか何だよあれ！?!脳剥き出しって気持ち悪…！」

「っ！増援ありがとうございます！」

「君ヒーローにしちや若いね！もしかして職場体験っ？それならここはわたしが食い止めるから応援にきた警察の避難誘導に従いな！」

増援に来た3人のうち、2人はヒーローは脳無を見るなり驚きながらそう言うのと、1人の女性ヒーローが後藤を見て叫ぶ。が、後藤はバースドライバーを腰に巻き付け、セルメダルを取り出す。

「いえ！脳無相手ではこの人数でも苦戦を強いられると思います！だから俺も…」

「後藤ちゃん!!お前はまだヒーローじゃねえんだ！こっちは何とかする！後はヒーローに任せてお前も避難しろ！」

交戦中のバースが脳無の攻撃を避けながら叫び叱喝する。

「ですが伊達さん！」

「今は『バース』だ！…気持ちは分かるが！この脳無ってやつ！予想以上に強！い！今はそのお姉さんに従え！分かったな!？」

「っ……わかりました…!!」

バースに言われ、英雄生徒の身である後藤は悔しそうにセルメダルをしまうと逃げる市民の後を続き、その場から離れる。

「よしっ！じゃあヒーローさん達！協力して奴を…！」

後藤がこの場から離れたのを確認し、バースはヒーロー達に指示を出そうとしたその時。

ドオオンツ!!

「……………ッ!!!」

空から飛来してきた翼の生えた「脳無」が発狂すると共に現れ、その手に掴んでたヒーロー「ザ・フライ」を勢いよく地面に叩きつけていた。

「っ!?!おいおいおい新手かよ…!!」

「あれはザ・フライ!?!やられたのか!?!」

バースは別の脳無に驚き、女性ヒーローは地面に叩きつけられ気を失っているザ・フライを見て叫ぶ。

「おいっ!大丈夫か!?!」

「何だよこいつら…!?!」

すると、応援に駆けつけてきた2人のヒーローが現れる。1人は飯田が職場体験に向かった先のノーマルヒーロー「マニユアル」だ。

「ヒーローはこれで5人か…!!頼もしいねえ…!!じゃあ手分けしてこいつらを捕らえるぞ!!」

「二三了解!」

バースが指示を出すと2人の脳無に対し、3:2で別れ、脳無と交戦を開始する。

脳無の破壊活動により火災が発生し、戦いが繰り広げられる最中、一方で1人の少年、緑谷出久がこの保須市を駆け回っていた。彼は指名先の「グラントリノ」の元へ職場体験をしていた。この日はグラントリノの言葉によりちょうど保須へとパトロールに来ていたのだが、新幹線の移動中、脳無に襲われ、グラントリノは新幹線から脳無を引き剥がし、別行動となる。待機命令が下された緑谷だが、その脳無の存在を知っていた彼は新幹線を降り、最善を考えるべく保須を走り回っていたのだ。

「本当どこ行ったんだよ…!天哉くー…ん!!」

「っ!」

マニユアルが脳無と交戦の最中、途中でいなくなった飯田の名を呼び叫ぶと、その声に応じた緑谷が戦場に現れると、緑谷はその光景を見て驚愕する。

「そんな…何だ…コレ…!?!」

側から見ればその光景は地獄絵図だった。建物や車が壊れ、燃え上がり、脳無と戦うヒーロー達は苦戦を強いられ、やられているヒーローも何人かいた。バースもいつの間にか脳無の攻撃を受け火花を散らし倒れ込んでいた。

「何でこんな時に限ってどっか行っちゃうんだ！」

マニユアルが叫ぶと緑谷は飯田が言っていた訪問先の人だと思いついでいると、女性ヒーローが緑谷の存在に気付き、彼の前へと立って口を開く。

「こら邪魔だよ！下がってて！私等が食い止めてる！警察の避難誘導に従いな！」

「わっ！すいつ、すいません！」

緑谷が謝ってその場から身をひこうとするが、先程のマニユアルの言葉が頭をよぎる。あの真面目な飯田がこんな状況で単独行動を起こす筈がない。保須、脳無、事件：キーワードが頭の中をぐるぐると掻き乱し、彼は一つのニュースを思い出した。

「(ヒーロー…殺し……！)」

それを思い出した緑谷は、顔色を変え、その場から離れて全力で駆け出す。

「くっそ本当なんだこいつらは…!？」

「あだだだっ…！この強さ…これも「個性」かよ…!？」

女性ヒーローはその異常な強さを見せつける脳無に怖気づいていると、バースは立ち上がり、目の前の黒い脳無に向かってそう言い放つ。

「…ここが正念場だ…！気合い入れて頑張りますか…!!」

☆☆☆☆☆☆

「ハアツ!!」

「おおっとーあぶなっ！」

場所は変わり、オーズに変身した火野は、ヴィランオーズと戦闘を繰り広げていた。オーズが回し蹴りをすると、紙一重でヴィランオーズは交わし、そのバツタレツグで屋上を跳躍して距離を取る。オーズ

も後を追うように跳躍し、空中から飛び蹴りをするも、再び紙一重で避けられた。

「…ちっ！オーズの特徴を理解してやがる…！つくづく何者なんだあいつ…!？」

「さてね〜！そう言うアंकは戦わないの〜？君のコアメダル見えてるんだよ〜！」

「タカの特徴か…！生憎！俺も加勢したいところだが、この世界に来てからか上手く本調子が出せない！（まあ少しだけならイケるがなあ…。隙を見てコアメダル根刮ぎ奪ってやる…!）」

「ふうん、そりゃ残念…！じゃあ…！」

アंकの言葉に反応し、ヴィランオーズはそう言うアंकは右腕を左腕で押さえながら返すと、ヴィランオーズは口を動かしながら…その場から跳躍し、一気にアंकの元へと詰め寄る。

「まず君のメダルから貰おうかな!!」

「っ!？」

突然狙いをアंकに変え、アंकは咄嗟の動きに驚き、右腕を突き出そうとする。が、オーズも一気に跳躍してヴィランオーズの背中に飛び蹴りを食らわした。

「ハアッ!!」

「!きやあっ!？」

背後からの攻撃にヴィランオーズは吹っ飛ぶが空中で体制を立て直し、ビルの貯水タンクの上へと着地する。オーズもアंकの元へ着地すると、アंकの安否を伺った。

「危なかったな!」

「ハッ、余計な心配してる場合か」

「お前助けてあげた癖にその態度はないだろっ?」

「いったあ〜い…！女性に暴力はいけないんだぞ!」

「ごめん、でも敵のお前が言う台詞じゃないだろ。痛いのが嫌なら大人しく降参してくれば俺も助かるだけ〜!」

「あ〜…それは嫌だね。よっ!」

オーズの言葉に論破されたヴィランオーズは貯水タンクから降り

て、オーズとアंकに向き合うと口を開く。

「んん〜！やっぱ抜け目ないな〜！仕方がないか…、ちよつと本気出そつと…」

「……………っ！」

ヴィランオーズはそう言つて、3枚のコアメダルを取り出す。それを見たアंकは大きく目を見開いて驚愕し、口を動かした。

「お前…！それ……………どこで……………!?!」

「え？……………ああ！そつかそつか……………。コレ嫌な思い出しかないよね〜。でも安心して。この中にあいつはいないから」

「あいつ…？それって……………」

ヴィランオーズの言葉にオーズはアंकを見るとアंकは警戒しながら黙つて頷く。彼女の手に持っているコアメダル3枚。それは前世で瀕死の火野に取り憑いたグリード『ゴード』が使っていた『ムカデ』『ハチ』『アリ』のコアメダルだった。

「お前…！それを何処で手に入れた!?!」

「いやあ…、この世界には凄い科学者みたいな人がいてね？このタトバのメダルをベースに、なんとコアメダルを造つてくれたの！本当凄いやね!?!でも、君達のコアメダルはエネルギーがどうかなんか足りないだの言つてて何故か造れないの。よく出来た不愉快な設定だよね…」

「設定……………フン！それだけは同感だ…。お前を含めて本当に癩に触る世界だここは……………」

「あつは！ウケる！君等からしたらそうかもね！」

アंकの問いにヴィランオーズはドライバーからコアメダルを抜き取り、手に持つコアメダルを1枚ずつ嵌め込みながら口を動かす。アंकも同意見なのかヴィランオーズに指を挿しながら口を開くと、ヴィランオーズは頷き、オースキャナーを取り出しベルトをスキャンした。

ムカデ！

ハチ！

アリ！

ムカチリー！チリツチリツ！ムカチリー！チリツチリツ！

火野やアंकが聞いたことのないコンボソングの音声か鳴りその姿は同じ昆虫類の「ガタキリバ」とは異なる『毒性』を持った虫の系統のコンボ『ムカチリコンボ』となり、百足の頭に蜂の胴体、蟻の脚部のそのフォームはコンボ特有の一色の色ではなく、紫、黄色、黒と異色合わせのフォームへと姿を変えた。

「何だあのコンボ…!?」

「ちっ！おい映司！気を抜くなよ…！前の世界にはなかったコンボだ…！」

「設定上は考えられたコンボらしいけどね…？さあ、いつくよーー！！！」

初めて見るコンボに警戒するオーズとアंकにヴィランオーズは軽くジャンプしながらそう言うと言とうと胴体部分の鉢の針が装着されたその右手を勢いよく突き出すとオーズに向かってその腕が伸びてきた。

「っ!?おわっ!!」

「っ!?何だ!?伸びやがった!?」

「おおー！流石火野映司君！避けるかあ！まだまだ行くよー!!」

「うわっ!?この！ハアツ！」

ギリギリで避けたオーズとその腕に驚き飛び退くアंकは驚き口を開くと、ヴィランオーズは右腕を収縮し、続けて今度は左腕を伸ばして攻撃を仕掛けてくる。オーズは避けきれないと思ったのか能力を解放し、トラクローを展開すると咄嗟にその左腕を斬りつけた。

「ぎゃっ!?いったあああいつ!!」

「ああごめん！」

「馬鹿！敵に謝る奴があるか!!だが、手負いはできたな」

火花と血しぶきが散り、痛がるヴィランオーズは左腕を収縮し、そ

の腕を痛そうに押さえていると、オーズは謝り、相変わらずのお人好し振りにアंकは呆れそう叫ぶ。そしてアंकはヴィランオーズを見ると、左腕からは血が流れるのを確認し、ニヤリと笑っていた。

「痛い痛い痛いい……!!!こんんんの、ばかちんがあああア!!!」

だがヴィランオーズが叫ぶその瞬間。その傷口が瞬く間に塞いでいったのだ。

「っ!? 傷が治った…!!」

「…成る程なあ……。俄に信じ難いが、そのコンボは細胞を操る能力があるのか」

オーズは驚き、アंकはそれを見て推測すると、左腕が動けるか軽く手を振り確認するヴィランオーズは答える。

「正解……ムカチリコンボの特性は『細胞増殖』！文字通り、私の身体はあらゆる部分を急激に細胞を増殖させて伸縮自在の身体になったってわけ……。怪我すりやたちまち元に戻せるけど……痛みは……戻らないんだよ！ばああかつ!!」

激痛が走るのか言葉で怒りをぶつけるヴィランオーズはそう言い終わるとその場から両脚を伸ばして空中を登っていき、両脚を収縮してその勢いで跳躍する。

「こんの……」

「！おい待て映司！」

オーズも負けずとバツタレッグで跳躍するがアंकはそれを見て止めようと声を上げる。だが、オーズはそのまま飛んでしまい、空中のヴィランオーズに突っ込んで行く。跳んできたオーズにヴィランオーズは右手を伸ばし、攻撃を仕掛けるがオーズは空中でそれを避ける。

「さっきのお返し!!」

「おっと!? そう何度も同じ手は……」

「そんな単純な攻撃するかっての」

オーズがそう言った瞬間。ヴィランオーズは仮面の下でニイっと笑い、ムカデヘッドからムカデの胴体らしき触手、センターセンチ

ピード」を伸ばし、オーズの背中を突き刺す。

「あがあっ!!?」

「ハハハツ!!落ちろこの野郎!!」

痛みにオーズは叫ぶと、ヴィランオーズはそのままセンターセンチピードを振るい、オーズをビルの屋上へと叩き落とす。落ちた衝撃にアंकは怯むが、煙が晴れるとすぐにオーズの元に駆け寄り、無謀な真似をしたオーズを叱る。

「馬鹿が!後先考えずコンボ相手に飛び出す奴がいるか!」

「ご、ごめん……ぐっ?!あああ!?!背中が……!?!」

「っ?!……これは……『毒』か!?!」

「そだよ?激痛を伴う毒注入しといた……。オーズはコンボだけが取り柄じゃない……。メダル1つ1つが能力を兼ね備えてるのは火野映司君やアंकも理解してるでしょ……。痛い恨みは怖いよお?まあ死ぬ訳じゃないから。でもしばらくは痛むかもねえ」

刺された背中が痛いのか叫ぶオーズにアंकはオーズを見て言うと、空中から着地したヴィランオーズが両手を広げて愉快そうにそう言う。

「ぐう……!?!ああ……!?!はあ……!?!はあ……!?!」

「っ!おい映司!?!」

悶え苦しむオーズは激痛により変身が解かれる。それを見たアंकは目を見開いて火野の名を呼ぶ。

「あつれれ〜!?!火野映司君もうおしまい〜?やっぱ、このコンボ凄強いじゃ〜ん!ウケる。」

「ちっ!さっさとメダル変えさせればよかつたか……!」

コアメダルを変えさせ臨機応変に戦うのが火野とアंकの戦い方だが、敵がオーズで未知のコンボが相手となるとその出方も伺わなければ逆に不利の状況に変えてしまうこともある。それを見据えてタバで応戦させたが相手はオーズ。そんな流暢な考えなど甘い選択だったとアंकは舌打ちをした。

すると、息切れを起こす火野はポケットに入っていたスマホのバイブが鳴っているのに気付き、余裕そうなヴィランオーズに警戒しながら

クジャク！
コンドル！

タ〜ジャ〜〜ドルウ〜〜！

音声が鳴り響き、火野身体は真紅の炎を纏う。既に夜の時刻となつた空は暗くなつていたがその炎は美しく燃え上がり、その一面は明るく照らされていた。そして火野はオーズ “タジャドルコンボ” へと姿を変えたのだ。

「おおおおお!! やつば!! Time judged all!!」

その神々しい姿を拝めれたヴィランオーズのテンションは有頂天となり飛び跳ね、急に英語口調の小歌を口遊む。

「うぐつ……い……アंक！着いてきて!!」

「っ!?! おい何する気だ!?!」

オーズは痛みながらそう言うとき背中からクジャクウイングを展開し、地面を蹴つて飛び立つとヴィランオーズに向かって勢いよく突っ込む。

「えっ!?! ぐえっ!?!」

「アああああっ!!!」

ヴィランオーズの腹部に体当たりを打ちかまし苦しそうに声を上げると、オーズはそのままヴィランオーズを連れて空を滑空する。凄まじいスピードの風圧によりヴィランオーズは体を持つていかれそうな体制となつていた。その間に、オーズは緑谷が送られてきた位置情報の場所を探し、その場所を複眼で確認したのか、勢いよくその路地裏へと急降下する。

「せいやあああっ!!!」

「っーきやああああっ!!!」

オーズは急降下し、ビルの隙間を通り抜けた瞬間、ヴィランオーズを投げ飛ばし、地面へと叩き落とす。衝撃により、地面から土煙が舞い、そこにいた者達は何事かと驚いていた。

「つとー！………やっぱり………！大丈夫…皆………！！」

「ひ、火野君!? な、何で空から…!!?」

オーズはその場へ着地すると、その路地裏には情報を送ってきた緑谷本人、轟、飯田、そして、ヒーロー殺し“ステイン”がこの場に集結していた。

「……ハア………!!次から次へと………!!よく邪魔が入る………目障りだ………!」

突然登場したオーズ。そして地面に叩きつけられたヴィランオーズを見て、ステインは怒りの目を突きつけオーズを睨んでそう言っていたのだった。

No. 44 ヴィランVS雄英生徒

「火野君…!!? 何で君までここに…!!」

「緑谷君の位置情報で…ここにきた…!! 位置情報だけ送るのは不自然だと思ってる…! これ、状況どうなってるの…!?!」

「火野、俺もついさっきここに来たばかりだ。あのヒーロー殺しに緑谷、飯田、それとプロヒーローが動けなくてやられてる…恐らく奴の“個性”だ…」

「だから皆倒れてるのか…!」

「そういうことだ。もう少しでプロのヒーローの応援がくる。それまでこの場を維持さえできればなんとかなる」

オーズの登場に倒れている飯田は驚き、オーズは状況把握しようと声を出すと、轟がステインを警戒しながらそう答える。オーズは背後を振り返るとそこには緑谷、飯田、そして気絶しているプロヒーローの“ネイティブ”が倒れており、緑谷と飯田は意識はあるが身体を硬直させて動けない状態だった。そして、一緒に連れてきたヴィランオーズを見て轟はオーズに声を掛けた。

「あいつ…USJの時のオーズか…! 前あつた時より随分悪党っぽい見た目になってるが、火野、お前奴と戦ってたのか…?」

「うん…あいつもコンボ使えるみたいだけど毒と身体を伸縮させる“個性”みたいなもの持ってる…! ごめん、それを分かってて連れてきちゃって…!」

「いや…大丈夫だ。お前がいてくれる方が助かる…」

オーズはそう言って謝ると、轟は小さく首を振り答えた。オーズの息切れに気付いた緑谷が倒れたまま安否を問う。

「もしかして火野君毒が…!?!」

「平気…! オーズに変身してればさつきよりはだいぶマシだよ…!」

「味方のお前なら心強いが…、ヴィラン敵のオーズがそんな危ねえ能力持ってるって寒気がするな…!」

オーズはそう返していると、抉れた地面からヴィランオーズがゆつくりと立ち上がり、状況を見渡して隣にいるステインに話しかけていた。

「あつたたたた……うっ!!最っつ悪……!!……ええ……?何であんたがここにいんの?こんな所でヒーロー殺しの真っ最中……?」

「その声……あのバーにいた小娘か……。ハア……。飛んだ邪魔が入った……。お前のその見た目が変わる“個性”……。あそこにいる奴と似ている……。親戚か何かか……?」

「小娘言うな!コレはちよつと訳あり……。詳細は言わないけど……ね!」

「興味がない……。お前は退いてろ。何人増えた所で、俺のやるべき事は変わらない……」

「いいや!あんたが退きなよ!今私は気分が悪い!鬱憤晴らししたいの!」

「……ハア……」

ヴィランオーズはオーズと轟達を見ながらそう言うとステインは溜息を吐きながら、

ヴィランオーズに斬りかかった。

「ううわあっつっ!!?」

「!!?!」

不意の攻撃だがヴィランオーズは危機感を覚えたのか紙一重で振りかざしたその刀を避け、ステインから距離を取っていた。それを見た雄英生徒達は驚き、その場を見届けると、そのタイミングで後から

やってきたアंकがオーズの近くへと空から着地する。

「え…誰…!?!」

「アंकだよ、人間にもなれるんだ」

「ええっ!?!」

「本当…何でもアリだな…」

人間態のアंकを見るのは初めてで緑谷が驚くとオーズがそう言っただけに驚き、轟はそう呟くとアंकは辺りを見回してオーズに話し掛ける。

「おい映司…、一体どうなってんだ…?」

「ニユースでやってたろ…!あいつがヒーロー殺しだよ…!」

「ほお、…成る程なあ…、大体分かった…」

「てか、あいつ…急に仲間割れし始めやがった…?」

オーズの言葉にアंकは辺りを見回し、状況が読めたのか頷くと轟はステインを見ながら口を開く。

一方で斬りかかってきたステインにヴィランオーズは不意打ちの行動に激怒し、キレ気味に口を開いた。

「ちよつと!?!何すんの!!」

「お前は成っていない…!感情に身を任せ暴徒を起こそうとするその意志…ハア…!…!所詮子どもの癩癩だ…!」

「つ!!あんな…!やっぱムカつくのよ…!その喋り方も…その遠回しに馬鹿にする言い方も!!」

「ハア、その感情が子どもだ…!（…そろそろどいつかが時間かな）」
ヴィランオーズはそう言って、蜂の胴体の右手の針「スタツブオブビー」をステインに突き出し突き刺そうと仕掛けるが、ステインはそれを避けた。腰からナイフを取り出しヴィランオーズに向かって投げると、ヴィランオーズは左腕の蜂の巣の様な造形の盾「ハチシールド」で間一髪でそれを受け止めガードする。予想外の敵ヴィラン同士の交戦が始まり、轟達は口を開いて驚いていた。

すると、オーズはその状況を見て口を開く。

「あのオーズを見た時ヒーロー殺しと関わってここにいるんだろっとなって考えてさ…。USJの時、敵は寄せ集めがどうこう言った

のを思い出して…あの2人利害が一致してないかもって…思ってた…!!」

「…それでこの場所にヒーロー殺しがいるのを嗅ぎつけて奴をここに運ばせたのか…」

「うん…ちよつと捨て身の策だったけど…」

「す、凄いよ火野君…!」

「…!」

オーズの考えにアंक、緑谷、飯田が驚き、轟は「左腕から炎」を出して身構えた。

「チャンスだ、隙を出してここから避難するぞ」

「うん…!アंक!気を失ってるその人を大通りに避難させてくれる

…!?!ハアア!」

「ちつ!…プロのくせにやられてやがるのか…。面倒だなあ…!」

「(やっぱりアंक君…かっちゃんに似てる…)」

轟の言葉にオーズは両手を広げ、虹色の翼クジャクフェザーを展開する。アंकはネイティブを見て担ぐと、そのまま大通りに連れて行き、それを見た緑谷は苦手意識でそう思っていた。そしてオーズはクジャクフェザーを背中から放出させ、無数の羽の弾丸となり、ステイン、ヴィランオーズに向かって勢いよく射出する。

「っ!?!」

「うわっ!!!」

ステイン等の周りに当たって火花が散り、突然の攻撃に敵等^{ヴィラン}は怯むと続けて轟は左腕を振るい、豪炎の炎が放たれる。ステイン、ヴィランオーズは何か避けるが双方掠めてしまい、火傷を負ったのか身体の一部から煙が上がる。

「…っ…!!!」

「くくくっ!?!あっつっついいいい!!!」

「今だ…!!!」

その隙を見てオーズはクジャクウィングを展開し飛び立ってヴィランオーズに突っ込んで行く。炎を避け空中へと跳躍してしまったヴィランオーズは痛みで余裕がないままオーズが接近し、エネルギー

を収縮させたコンドルレッグの左足をヴィランオーズの腹部へと飛び蹴りを食らわした。

「きやあああつ!!?」

鳥の足の様なエネルギーを纏った蹴りにヴィランオーズは路地裏の奥へと吹き飛ばされる。すると、そのオーズドライバーから装着されていたムカチリコンボ3枚のコアメダルが外され、空中へと飛ばされる。放り出されたコアメダルを見てなにかいつの間にか右腕だけになっていたアंकが接近し、その3枚のコアメダルを見事キャッチする。

「上出来だ映司!フン、こいつは儲けたなあ...!」

「うん...!」

「その腕も『個性』か...面白い『個性』を持っているな。」

「っ!させるかよ!!」

「っ!」

「あだっ!」

オーズが頷く瞬間、背後からステインがそう言ってナイフを背中に突き刺そうと構える。が、それを見過ごす事なく、轟は右足を地面へ思い切り踏むと、そこから氷が生成され、ステインに向かって氷結攻撃を仕掛ける。だがステインはオーズの背中を踏み台とし空中へ避け、オーズは反動で地面へと落ちる。すると、轟の背後で倒れていた飯田が口を動かした。

「何故...3人共...何故だ...やめてくれよ...!兄さんの名を継いだんだ...やらなきや...そいつは僕が!」

「継いだのか...おかしいな...。俺が見たことあるインゲニウムはそんな顔じゃなかったけどな。お前ん家の裏じゃ色々あるんだな...」

「轟君...火野君...!!(あれ...!?)」

復讐の目をした飯田を見て轟はそう言うと同じく倒れていた緑谷は戦っている2人に加勢しまいと身体を必死に動かそうとする。すると、腕がほんの一瞬ピクリと動ける様になったのに緑谷は気付く。

そして、氷結された壁の向こうからオーズは飛んで轟の近くに着地すると、右腕だけのアंकも奪い取ったコアメダルを握り浮遊してこ

ちらにやってくる。その瞬間、氷の壁は角砂糖の様に切り刻まれる。ステインが刀で氷を斬ったのだ。だが、肝心のステインはその先にはおらず声だけが聞こえて来る。

「もう1人の方を対処して突っ込むその捨て身……。そして己より素早い相手に対し、自らに視界を遮る……。何方も愚策だ」

「何処だ…!?!」

「気を付けろ火野っ、奴は素早…!?!」

オーズが警戒し、轟が炎を放とうとすると、ステインの投げナイフが轟の左腕に2本刺さる。

「お前等も良い……」

「!映司!上だ!!」

「…!あぐつ……!!毒が………!?!」

アंकが叫ぶその真上にステインは刀を振り下ろそうとし、オーズは応戦しようとするが、激痛が走り動けなくなる。それを見た轟は左腕腕のナイフを抜いてオーズの前に立ち、右腕から氷を生成しようとするが間に合わないと悟っていたその瞬間。

「!」

「ううああああっ!!」

オーズと轟の頭上に黒い影が視界を遮る。それはステインの「個性」で動けなくなっていた筈の緑谷だった。そしてオーズが驚いたのは今までの緑谷とは考えられない軽い身のこなしで路地裏のビルの壁を三角飛びで跳躍するその姿だった。緑谷は跳躍し、ステインに接近すると首に巻かれたポロポロの布を掴むとビルの壁面に叩きつけ、そのまま壁が抉れる様に引き摺っていく。

「緑谷君…!?!すごっ…!!」

「緑谷!!」

「なんか普通に動けるようになった!!」

「…時間制限か何かなのか……?」

あのヒーロー殺しとかいう「個性」

オーズ、轟は驚いていると緑谷はそう言って尚引き摺る。それを見たアंकが何かしらの制限がある事に気が付いたのか呟くと、ステイ

ンは緑谷の脇腹に肘を入れて叩き落とす。

「(こいつ……Oか……)」

「ぐへっ！」

「っ！危ないっ！」

脇腹を押しえ咳き込む緑谷が落下していくのを見てオーズは直様クジヤクウイングを展開し、緑谷に向かって飛び立ち見事キャッチしてその場から飛んで離れる。

「ひええっ……！ゲッホッ！ゴホッ！」

「う……！大丈夫!？」

「人の心配してる場合か。お前も毒回ってんだろが。」

再び轟の付近へと降り立ち緑谷を離すとオーズは呻き声を上げているとアंकがツツコむ。すると、緑谷はステインを見ながら口を開く。

「大……丈夫！血を摂り入れて動きを奪う……僕だけ先に解けたって事は、考えられるのは3パターン。人数が多くなる程効果が薄くなるか、摂取量か……、血液型によって差異が生じるか……」

「血液型……、飯田、お前の血液型は？」

「僕は……A……」

緑谷の言葉に轟は飯田に聞くと飯田は小さく答える。それを聞いたステインはニイッと笑い、口を動かす。

「血液型……ハア……正解だ……」

ステイン

『個性』『凝血』

血を舐める事で相手の身体の自由を最大8分間奪う！

B・A B ・ A・Oの順で奪える時間は少ない！

ちなみに彼はB型だ！

「分かった所でどうにもならないけど……」

「…火野、飯田の奴もアंकを使つてここから避難させれねえか？奴は氷も炎も避けられる程の反応速度だが、一瞬ぐらいなら時間を稼げる…」

「そうだね…！アंक…！飯田君を…ううっ…！」

「火野君!？」

「ちっ…！これ以上はコンボじゃきつい…！」

轟の提案にオーズは動こうとするが、力が抜けたのかその場に膝をつく。それを見た緑谷は駆け寄りアंकは舌打ちをして毒の影響とコンボの力に疲弊しているオーズを見て顔を歪ませた。

「火野はさっきのオーズとの戦闘で深傷を負っている…。これ以上の戦闘は無理そうだな…。飯田と2人を守りながら、プロが来るまで奴との近接を避けつつ粘るのが最善だ。アंक、お前も戦えるか…？」

「フン、断る。あと俺に命令するな」

「ア、アंक…！」

轟の言葉にアंकはそっぽ向く。オーズは満身創痍になりながらもアंकの名を呼ぶとアंकはステインの奥、暗闇に満ちた路地裏を見て呟く。

「さっき映司が飛ばしたあのオーズ…、大方気を失ってるんだろうが……もしも、戻ってきたらその時は対処してやる……。お前等はヒーローの学生何だろ？こんな修羅場くらい自分で切り抜ける」

「アंक…お前…！」

アंकの言う通り、オーズが飛ばしたヴィランオーズはあれから此方にやって来ていない。ベルトからコアメダルを3枚奪い取った為、強制的に変身が解かれて身を潜めているのか、本当に気を失ってるのか定かではないが、こうなれば相手はステインただ1人。

負傷した2人を除いてアंकを含めば此方の戦力は3人。実質三体一と有利な戦況になっている。そして、アंकは轟と緑谷に向かってそう言うと言等目は見開き、その言葉を受け止めステインへと振り向き、2人の目付きは変わる。

それはヒーローとしての目となっている。

オーズはアंकの言葉を聞いて正直驚いていた。こんな事を言う

性格じゃない筈なのにと。だが、オーズもその言葉を聞いてニイツと笑うと、フラつきながらもゆつくりと立ち上がる。

「火野、無理はするな……」

「大丈夫……！助力くらいなら……！！」

「火野君……！君は毒で余り動ける状態じゃないし、轟君は血を流しすぎてる。僕が気を引きつけるから、二人は後方支援を！」

「分かった……！」

「相当危ねえ橋だが……そだな。三人で守るぞ」

「……フン」

緑谷の言葉にオーズと轟は承諾し、3人は並び立つ。右腕アंकは鼻で笑い、その状況をどこか微笑ましく見ている様な気がしていた。

「3対1か……そうそう甘くはないな」

ステインは身構えると、緑谷の身体から稲妻の様なエネルギーが身体を走り、その場を蹴って飛び出す。だがステインは腰を思い切り低くしゃがみ、緑谷の膝を刀で斬りつける。

「ぎゃっ!!」

斬られてバランスを崩し跳躍した勢いで転げ回る緑谷。それを見てマズイとオーズはクジャクフェザーを展開し、再び無数の羽をステインに向け放出させる。それに続き、轟は左腕に炎纏い、振るい上げ放出する。だがステインは軽い身のこなしでそれ等を全て避け緑谷を斬りつけた刀に付着した血を舐める。

「つつっ!!ごめん……二人共!!」

「血が!!」

「緑谷を助けるぞっ!!」

また身動きが取れなくなってしまう緑谷は2人に謝ると轟は右腕の氷を生成し、氷結攻撃を繰り返す。

「………止めてくれ……もう………僕は………」

黙っていた飯田が涙を流し口を開く。飯田は兄の天晴を重傷を負わせてしまったステインを憎み、職場体験を利用し、ヒーロー殺しが出現したこの保須へと来ていたがその予想は当たり、ヒーロー殺しと対面していた。純粹で真面目な飯田は憧れていたヒーロー殺しに殺

意と憎しみが生まれ、感情が抑えられずにいたがそれが仇となり、駆けつけてくれた3人の足を引っ張ってしまっている形となっている。復讐の結果。当然の報いだと最初は感じていたがそれを、危険な事を仕出かしているのに関わらず助けんとするお人好しの3人を見て、己が情けなく、動けずに只々彼等の行動を見ている。そして、これ以上自分のせいで傷ついてほしくないと思っていた。すると、しびれを切らしたのか轟が声を張り上げる。

「止めて欲しけりや立て!!!なりてえもんちゃんで見ろ!!!」

飯田のその言葉を掻き消す様に轟は叫ぶ。目の前のステインという脅威があったとしても、轟は今にも殺されそうになろうとしていても、涙を流す友達に喝を入れ、その脅威に立ち向かう。それは火野こと、オーズも一緒だった。

「飯田君!家の事はよくわからないけど……!ここは俺達が何とかする!……だから!無理はしないで!」

「っ!!」

轟、オーズの言葉に飯田は心を強く打ち突ける様な感覚が走る。

そしてこの状況。緑谷は「個性」により硬直状態。火野は毒により戦力には乏しい。唯一戦える轟も切傷などの負傷を負っている。

戦況を見ていたアंकは先程奪い取っていた3枚のコアメダルを何か考えてる様に手に持っていた。

No. 45 隠密でフルスロットル

「はあ……はあ……！」

オーズの蹴りを食らい、ヴィランオーズはドライバーから3枚のコアメダルが投げ出され、アंकに奪われてしまう。路地裏の壁まで飛んで行った後、変身が強制的に解かれた脇真音はこれ以上は戦えないと思っただのかお腹を押さえながらゆっくりと街の明かりが照らされない路地裏の奥を歩いていった。

「あくメダル奪われたあ……！一番気に入ってた奴なのに！コンボだって最近使えるようになったばかりなのに……、そもそもあの糞ヒーロー殺しが悪いんだ！邪魔さえしなければ……くつつそう……!!もう知らない！あの人数に勝てやしない……。殺られちゃえつての……！とか火野映司君、毒でやられてる筈なのに……！ただだけ頑丈なのよ……！信じらんない主人公最強過ぎるよチートだあ……！……ああく……ドクターに怒られる……。最つつ悪……！」

脇真音は歯を喰い縛り悔しそうにぶつぶつと嘆く。軽く咳き込みながら壁に寄りかかり、ポケットから何枚かセルメダルを取り出すと、脇真音は口を開いた。

「ふん……いいさ……勝負吹っつけたのは私だし……今は弱くたって、私だってオーズ同個性”を持つてる。もつと強くなってコアメダル全部貰ってやる……でも、今は……私の目標をやるだけ……！」

そう言ってセルメダルを強く握り締め、脇真音は再び路地裏の奥へと歩き出して行った。

「なりてえもんちゃんに見ろ!!」

「っ!」

轟の言葉に飯田は涙が止まらずその言葉を重々しく受け止める。だがステインは関係ないと言わんばかりに氷結したその氷を斬り刻み轟、オーズの元へ接近してくる。オーズは応戦しまいと立ち上がるが、毒で身体が言う事を聞かずその場でよろけてしまっていた。

「っ!来る!!…あっ!?!」

「っ!一か八かだ…!!映司!!」

吹っ切ったアंकはずつと持ってた3枚、ムカデ、ハチ、アリのコアメダルをオーズに向かって投げ渡す。

「っ!これ…!!」

「さっき奪ったヤツだ!それ使ってみろ!!」

「…っ!わかった!」

碌に戦えないオーズ、だが承知の上でアंकはそのメダルをオーズに渡す。幾つもの戦いを繰り返した、前世の火野を知っての決断でアंकはそう言い放った。

「腰のベルトで何かする気か…?その時点で…愚策…!」

「やらせねえよ…!」

「っ!」

ステインはオーズの動きに不審を抱き投げナイフを投げようとするが、轟がいち早く気づき、右腕を振るい氷結攻撃を繰り返し、ステインは避ける。その間にオーズは3枚のコアメダルを嵌め込むとそのメダルはそれぞれの色に合わせて発光し、オーズはオーズスキャナーでドライバーをスキャンした。

ムカデ!

ハチ!

アリ!

ムカチリー!チリツチリツ!ムカチリー!チリツチリツ!

オーズは先程のヴィランオーズと同様の姿、有毒性の昆虫類 “ムカチリコンボ” へと姿を変える。

「うおおおおあつつつ!!!」

「敵のオーズの…!凄…!」
ヴィラン

雄叫びを上げるオーズを見て緑谷は呟く。轟が氷結攻撃でステインの注意を逸らしている間にオーズはハチの胴体を能力解放し、両肩から蜂の羽 “ハチシヨルダー” が展開し、ブーツ!と昆虫特有の羽の音が響き、オーズは空中へと飛び交う。その間、羽から鱗粉の様な紫色の粉が撒き散らされ、それはこの場にいる全員にその紫の粉が身体に付着していくと、彼等の身体に異変が起きていた。

「っ!?この粉…!体の痛みが…なくなつた…!?!」

「何だこりやあ…。でも傷口は治つてねえぞ…?」

「あいつ…:…毒を “調整” して痛覚を無くす神経毒を撒き散らしてやる…。」

「!」

緑谷、轟が傷口を見ながらそう言うときアंकは空を飛び交うオーズを見て呟く。その異変に気付いたステインもまた然りだった。

「成る程…傷の痛みを消して畳み掛けようって算段か…。だがその痛みが消えたのは俺も同じ…:ハア…!この後どうする気だ…:…?お前は毒で碌に活動する状態じゃない筈だ…!」

ステインがそう言ったその時。オーズは頭部からセンサーセンチピードを伸ばすと自身の身体にその先端の急に針を突き刺したのだ。

「ぐうああつ…!!…こ、これで俺も毒の痛みが消えた！それでも…!! 畳み掛ける!! ヒーローは勝つのが当たり前だから！お前を倒して！皆を…救ける!!」

「ハア……良い…!!」

その覚悟を見せたオーズにステインは不気味に笑い頭上を飛ぶオーズに向かって刀を構え跳躍しようとしたその瞬間だった。轟の横を凄まじい速度の者が通過する。拘束が解けた飯田がエンジンをフルに発動し、ステインの刀目掛けて渾身の蹴りをかましたのだ。

「グレシプロ…バーストオオ!!!」

ガキイイイイ…イイイン…!!

「っ?! (速い…!!)」

刀は折れ刃先が飛んでいく最中、飯田は続けてその場で回転し、地面を蹴ってもう一度、今度はステイン目掛けて蹴りを入れるが、ステインは刀を持った拳で受け止め、その反動を逆手に飯田から距離を取る。

「飯田君!!」

「動けるようになっただね!」

「解けたか…。意外と大した事のねえ “個性” だな」

飯田の登場に緑谷、オーズ、轟はそう言うのと飯田は俯向くきながら口を開く。

「轟君も緑谷君も…火野君も、関係ない事で…申し訳ない…」

「またそんな事を…!」

飯田の言葉に身体が徐々に動ける様になってきた緑谷はゆっくりと起き上がり言い返そうとする。

「だからもう、3人にこれ以上…血を流させるわけには行かない」

涙目で言う飯田に、ステインは蹴られた拳から血を流しながら、飯田の登場にどこか不満気に口を動かした。

「感化され取り繕おうとも無駄だ。人間の本质はそう易々と変わらな

い。お前は私欲を優先する贗物にしかならない！英雄を歪ませる社会のガンだ。誰かが正さねばならないんだ…」

「フーン！流暢な物言いだなあ…。時代錯誤の原理主義ってヤツか」

「ああ。飯田、人殺しの理屈に耳を貸すな」

一般人の価値観とはズレた犯罪者の言葉に鼻を鳴らしてアंकはそう言うのと轟も同意して飯田に声を掛ける。

「いや、言う通りさ。僕にヒーローを名乗る資格など…ない。それでも…折れるわけにはいかない…。俺が折れば、インゲニウムは死んでしまう…！」

「論外」

飯田の言葉にステインの顔の更に険しく悍しい表情になり、危険を察知した轟は左腕の炎をステインに向かって放出させる。その間、オーズは緑谷の元へ着地し、緑谷の安否を問いかけた。

「大丈夫!?緑谷君!」

「う、うん！君のお陰で痛みは…！火野君！火野君の言ってた通り、ここは畳み掛ける…！僕が上手く殴り飛ばすから…火野君は空を飛んでて！」

「え…でも…！」

「大丈夫…！多分もう直ぐ動ける…!!飯田君の様に君にもあるんだよね…！必殺技が…!!」

「っ…！わかった！」

緑谷の言葉に従い、オーズは再び飛び立つ。緑谷は拘束が解かれてゆっくりと立ち上がるが先程斬りつけられた足から血を流し、上手く歩ける状態ではなかった。それでも、緑谷は力を入れ、体に稲妻が走り出す。

「(2回!!…ここから跳んで轟君の氷を踏み台に！踏み込み2回…！行けるか?!いや、今は!)」

緑谷がそう思ってる最中、飯田は脹脛のエンジンが、バスツボスツと詰まる様な音が聞こえ出し、隣の轟に向かって声をかける。

「轟君！温度の調整は可能なのか!?!」

「ひだり炎熱はまだ慣れねえ！何でだ!?!」

「俺の脚を凍らせてくれ！排気筒は塞がずにな！」

「！」

その言葉に轟は納得している最中、ステインはその執着故か炎が当たったのにも関わらず、その中から飛び出し投げナイフを轟に向かって放つ。

「邪魔だ」

「っ!!」

「つつっフン!!余所見すんな!!」

「すまねえ…！」

だが、投げナイフは轟に当たらず、右腕のアンクが防いだ。が、ステインは続けて腰からナイフを取り出し、それを今度は飯田に向けて放つと、ナイフは飯田の左腕に突き刺さり、その勢いで飯田は地面へと体が持っていかれ倒れてしまう。

「飯…」

「いいから早く!!」

飯田は叫び、轟は言われた通り、右腕を彼の脹脛に当て、排気筒を塞がず凍らせる。詰まりそうになっていたマフラー音がエンジンを吹かせる様な正常な音へと戻るのが確認した飯田は、左腕に刺さっているナイフを口で啞え、激痛などお構いなしに、無理矢理引っこ抜いた。

「粛正…!!!」

「くっそー！」

「ちっ！何をボサつとしてやがる映司!!」

迫り来るステインに警戒する轟、そしてアンクはステインの真上を飛んでいたオーズに向かって叫ぶとオーズは反応するかの様にオーズキャナーを再度オーズドライバーへとスキャンした。

スキャンニングチャージ！

「ハアアあぁッ!!」

音声が響き渡ると、オーズの3つのメダルの方が解放状態となり、頭からはセンターセンチピード、胴体はハチシヨルダー、そして脚は蟻の胴体を催した“アリアグソール”が展開されると、オーズはその場から“夜という闇の空に”その姿を眩ませる。

「っ?消えた…?」

それを見ていたステインはオーズに気を取られてしまいその一瞬の際に地上にいた飯田、緑谷がステインに向かって飛び出した。

「お前を倒そう!今度は…犯罪者として…! (今は脚が…!!)」

「5%デトロイト…!! (今は拳が…!!)」

「行け…!!」

轟は見届け口を開く。全速力で飛び上がる飯田と緑谷、両者がステインに接近すると互いの渾身の一撃がステインに向かって直撃した。

「『レシプロ!エクステンド』!!」

「『SMASH』!!!」

(あればいい!!!)

「っ?…!!…ぬう…!!!」

二人の攻撃が当たるステインだが、何とか持ち堪え、ステインは両者にナイフを突き刺そうとする。だが、その頭上に消えた筈のオーズが急降下で迫り来る。そのステインの頭上にはムカチリを催した3つのエネルギー状の輪つかが出現し、オーズはその輪つかを通り抜ける様に突っ込んだ。

「せいやあああああああ!!!」

「がっ!!!」

センターセンチピードを纏わせた毒の蹴り、“ヒートアリキック”ステインの背中へと直撃し、その威力でステインは地面が勢いよく抉れる程叩きつけられたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「ぐっ…ああああっ!!」

「ふ…ははは…!」

人気のない路地裏の奥、逃げ遅れたのか気を失っている人々が数名、そして脇真音の目の前にいる男性は苦しみながら体からヤミーが生まれ、それを見ていた脇真音は不気味に笑い出す。包帯が巻かれた様な身体のヤミーは直ぐに、脱皮するみたく、昆虫類の蠓螂の催したヤミーへと姿を変えていた。

「キエエエ!!」

「あらら、また昆虫系か。まあ、いいか」

発狂する蠓螂ヤミーに向かって脇真音はそう呟くと蠓螂ヤミーは何処かへ行くこうと飛び立とうとするが脇真音はそれを止める。

「ああまってまって!君にはもうちよつと力あげるよ」

脇真音はそう言うと言腰バックのチャックを開くと目一杯敷き詰められたセルメダルを蠓螂ヤミーに向かって放り投げる。それを全て吸収した蠓螂ヤミーは姿を変え、その姿は怪人とはかけ離れた巨大な蠓螂の様な怪物へと姿を変えた。

「まだ終わらせないよ…!!めっちゃくちゃに暴れ回ってこの世界に私が出来たって知らしめてやってよ…!!!そして大量のセルメダルを収穫してきてね…!!」

脇真音は両手を広げてそう言っただけで一旦区切ると、スマホを取り出し、画面を表示する。そこには目を瞑っていた1人の幼い少年が写っていた。それを見た脇真音は悲し気な表情となりボソッと呟く。

「もう直ぐだよ。待っててね……………弟君」

脇真音優無

個性その2！ 『ヤミー生成』

セルメダルとそれを生み出す為の人があれば
いつでもヤミーを生み出せる！
だが生み出すヤミーはランダムだ！

No. 46 止まらない脅威

「どああっ!!？」

「バース！大丈夫か！」

「つてえ〜！ああ、大丈夫だ！」

黒の脳無に吹き飛ばされたバースは転げ回り、別のヒーローはバースを心配し声を上げるが直ぐに立ち上がり、体制を立て直す。

「もうずっと戦ってるよ！この状況いつ回復できるの!？」

「泣き言言うな！プロなら好奇を見つけて叩き込め！」

「でも『再生』を持った奴に勝てんのかよ!？」

「分かんねえよっ!!」

他のヒーロー達は黒の脳無、翼の脳無を前にして揉め始める。しばらく交戦している状態で脳無にいくらダメージを与えても再生をされてはしようもない。だが翼の脳無はダメージは蓄積はされているが、飛び回っている為攻撃すら当てる事が厳しい状態だった。如何やら再生の「個性」があるのは黒の脳無だけみたいだ。

「クソ！一氣にぶっ飛ばしてえのに飛び回る奴のせいで時間すら与えてくれねえ！」…こりゃあ一方的な持久戦だねえ。…参ったな…！」

こつちばかりが体力を消耗している状態にバースは疲れた顔をしながらもどうしたものかと考えていた時、黒の脳無が拳を向け殴り掛かろうとしたその時だった。

ドゴオオオオン!!!

「!？」

突然、黒の脳無が空から落ちてきた燃える物体に直撃し、地面に勢いよく叩きつけられる。何事かとプロヒーロー達はその物体を見る

と気を失っている手足の長い脳無だった。

「んな!?また新手かよ!!」

「よく見ろ!こいつ気を失ってるぞ!」

一体誰が……!!」

ヒーローが叫ぶとそれを確認したバースがそう言つて降つて来た方向へと見上げる。するとそこにはNo. 2のフレイムヒーロー。エンデヴアーが両脚から炎を噴射して降り立って来た。

「何であんたがここに……!!?」

「…決まっている。ヒーローだからさ…」

「……!!」

エンデヴアーはそう言うと言つて翼の生えた脳無が発狂しながらエンデヴアーに向かつて突つ込んで来る。それを確認し、拳に炎を纏わせたエンデヴアーは再び両脚から炎を噴射すると、その脳無に向かつて勢いよく噴射し、飛び立つ。

「江向通り4-2-10の細道!!そつちにも敵ライアンがいる!お前達は応援に行け!……ここはこのエンデヴアー1人で事足りる。…」赫灼熱拳
「……!!」

エンデヴアーは言い放ち、その拳の炎は勢いを増し翼の脳無に向けて渾身の一撃を放った。

「…ジェットバーン!!!」

「……!!?!」

拳のブローが翼の脳無の腹部に炸裂し、貫通するかのように獄炎の炎が燃え上がり、ビル目掛けて吹っ飛び勢いよく打ち当たる。翼の脳無は瓦礫から呻き声を上げるがその目は徐々に白目となり気絶していた。

「す、すっげえ……!!」

「流石No. 2ヒーロー……!!」

「ここはエンデヴァーに任せて

さつき言われた場所に行こう！」

「分かった！」

あれだけ苦戦していた翼の脳無を最も容易く倒したエンデヴァーに感服をし、その場にいたプロヒーロー達はバースを除いて指定された場所へと向かう。

すると、残りの黒の脳無がエンデヴァー目掛けて跳躍し、襲い掛かろうとする。エンデヴァーは近付けさせまいと腕から凄まじい炎を出し脳無に直撃する。炎の勢いで脳無は地面へと戻され皮膚が燃えているが、忽ち再生の「個性」でその焼け爛れた皮膚は元通りに再生する。

「っ！再生の「個性」か……………」

「！翼の脳無がない今なら…!!」

エンデヴァー!!そのまま炎で奴の動きを止めれるか!？」

「お前も行け！もう時期俺の相棒サイドキックがやって来る！その間こいつは俺1人で十分だ！」

「まあそう言いなさんな！俺もやられてばっかじゃ腑に落ちないんでね……！」

エンデヴァーは続けて炎を噴射し、黒の脳無に浴びせてるその間にバースはセルメダルを取り出しバースドライバーのスロットに嵌め込む。待機音が鳴り出し、バースはグラップアクセレーターを回すとトランサーシールドが展開し、発光する。

《カポーン… 『ブレスト・キャノン』》

「っし、3枚ぐらいで行けるか……！」

音声が鳴り、胸部からカプセルが出現すると展開され、大きな砲塔を催したユニットが装着される。バースはその状態で再びセルメダルを3枚バースドライバーのスロットに連続で装填していくとブレストキャノンの銃口にエネルギーが蓄えられ充電されていく様に赤く発光していく。

「充電完了！どいてなエンデヴァー!!」

そいつにデカいのお見舞いしてやる!!」

「っ！」

エネルギーが溜まったのかバースは声を上げると気付いたエンデヴァーは脳無に向かって行くのを止め、真上の上空に炎を噴射して身を退くとバースはブレストキャノンのグリップを掴み、その収縮されたエネルギー砲を脳無に目掛け発射した。

「ブレストキャノンシユート!!はああー!!」

「……!!?」

高出力のエネルギー砲が放たれ、黒の脳無に直撃すると、地面に力を入れた両脚を踏み込み耐える。だが脳無はその威力に押され耐えきれず爆発を起こす爆風が収まり、煙が晴れると黒の脳無は何もなかったかの様に佇んでいたが、流石にダメージを負ったのかその場に倒れ込んだ。

「あだだだ……!やっぱこれ使うと反動が来るねえ……!おお……!腰が……!」

「フン……やるじゃないか。流石は鴻上のサポートアイテムと言った所か……」

「お、知ってたのか?いやあNO.2のお方にそう言っただけ貰えるなんて光栄だなあ」

バースは頭に手を置き照れながらそう言うとエンデヴァーの相棒^{サイドキック}2人が駆けつけ、戦況を見るなりエンデヴァーに声をかける。

「うわ、こいつは一体何だ……!」

「流石エンデヴァー!1人でもうやってしまったのかっ」

「いや、そこに倒れているのは鴻上のヒーローが抑えてくれた……。早速こいつを拘束し、身柄を警察に……」

エンデヴァーは相棒^{サイドキック}に指示を出そうとする。だがその時、何処から現れたのか人間とはかけ離れた異業の存在、昆虫類の「ヤミー」が突然、彼等の前に現れる。

「っ！新手か！」

「…おいおい、こいつあヤミーって奴じゃねえか…！」

「ヒーロー…コロス…!!…キエエ!!」

エンデヴアー、バースは警戒すると、蝶々を催したヤミーはその羽から斬撃を飛ばしてくる。バースに向けて攻撃してくるがバースは横へ飛び退きその斬撃を避けた。その斬撃は後ろの車に当たると車は真つ二つに切れ、それを見たバースは自分に当たったらと想像したのか身震いをしていた。そして取り出した「バースバスター」を蝶々ヤミーに向けて構える。

「さっきフルでやっちまったつのに…！デザートはいらねえつての！」

「虫の「個性」か何かか…にしても異業な存在…。だが、虫虻如きがこの俺に楯突くとはいい度胸だ」

「おお威圧凄っ…怖いねえ…」

エンデヴアーの威圧に付近にいたバースが眩くとその相棒達サイドキックがバースに声を掛ける。

「アレっ、「ヤミー」って言ったよな!?お前あのヤミーって奴と面識あるのか?」

「…いや、今初めてだ」

「はあ!?何だよそれっ！」

相棒サイドキックの1人がツッコむとバースはまあまあと言って宥める。その仮面の下で伊達はニヤリと笑い、バースバスターを再度構えて自信気に口を開いた。

「心配しなさんなつ。一応俺プロヒーロー何だけど…会長曰く「ヤミー専門」でもあるんだ。まあ小舟に乗ったつもりで期待してくれよ…!!」

(いや、小舟は期待できんぞ…?)

バースはそう言って駆け出すと、相棒サイドキックの2人は心の中でそう思いながら、エンデヴアーと共にバースを追う様に蝶々ヤミーへと突っ込んで行った。



「うおっ!？」

「ぎゃっ!？」

「つととと…!うわっ!」

「っ!立て!!まだ奴は…!」

「いや…流石に気絶してる…」

オーズの「ヒートアリキック」がステインに炸裂し、ステインは地面へと叩きつけられ、その衝撃の余波が空中にいた飯田、緑谷が受けてしまい2人は地面へと落っこちる。その後、オーズも落ちて着地しようとするが体制を崩して豪快に尻もちをついてしまう。だが油断は禁物だと言わんばかりに轟は3人に声を上げて呼び掛けるが、挟まれた地面を覗いたアंकはそう言って4人は立ち止まる。

飯田と緑谷の攻撃に続き、オーズの必殺技まで食らったのだ。これで起き上がっていたら肝が冷えるぐらいじゃ済まなかっただろう。強張った身体が緩んだのか轟は息を吐き、口を動かした。

「………まだ油断はできねえ。拘束して通りに出よう。俺の氷結だと起きた拍子で体割れちまうかもしれないねえ。何か縛れるもんは………」

「このコンボの毒を撃ち込んだから…起き上がらないとは思うけど…そうだね。念の為…えくつと…」

「…あ、武器は全部外しておこう。起き上がってきたらたまったもんじゃない…」

「…手伝おう緑谷君」

「あ、ありがとう飯田君」

轟の言葉に変身を解いた火野は何かないかと辺りを見渡し探し出す。緑谷はそう言って気絶しているステインを引つ張り上げ飯田と一緒に装備されてる武器を外す。飯田は緑谷に対して罪悪感、緑谷は飯田に対してどう接していいのか分からず、喧嘩のような雰囲気となり、2人は黙々と手だけを動かしていた。

☆☆☆

「さすがゴミ置き場…あるもんだな」

「そだね…うおっと…」

「火野君、やはり俺が引く」

「ああいいよいいよ。毒のせいで皆んな感覚おかしくなってるから、…多分飯田君腕ヤバいだろうし、俺がこのまま持つよ。……てかアック！お前何もしてないんだからお前持てよ！」

「あ？フン、誰がやるか」

戦っていた路地裏はちょうどゴミ置き場だったので意外と探せば粗大ゴミを縛っていたロープが見つかり拝借してステインの身体に縛り付けていた。ズルズルと引つ張り、力が抜けたのかロープを落としたり火野に飯田は代わろうと声を掛けるが火野は断り、飛んでいる腕のアンクに渡そうとする。が、アンクはそれを面倒くさそうに拒んでそっぽを向いていた。オーズのムカチリコンボにより痛覚を無くした神経毒を浴びせた為、火野を含めた4人は痛みを感じない状態だった。その状態で飯田は声を掛けたのだろうが実際は腕が上がりえない状態だった為か見ていた火野は拒み、ロープを拾い上げてそのまま続けて引つ張る。

「悪かった…プロの俺が完全に足手纏いだった…」

「いえ…一対一でヒーロー殺しの“個性”だともう仕方ないと思えます…強過ぎる…」

一方で緑谷をおぶさっていたネイティブが何も出来なかったのに不甲斐なく感じたのか謝ると緑谷はぐったりしながらそう答える。足を斬られた為、歩くのが辛そうにしていた彼にアंकが表通りに避難させたネイティブと合流し、軽症のネイティブは緑谷をおぶさっている。緑谷が言い終わると轟は気を失っているステインを見ながら口を動かした。

「4対1の上に火野の毒で油断、そしてこいつ自身のミスがあつてギリギリ勝てた。脚斬ったから動けないと油断してたんじゃねえかな。ラスト飯田のレシピロはともかく…緑谷の続いて火野の動きに反応がなかった…」

「う、ううん…。でも余り良い気はしなかったな…。毒なんて汚いやり方本当によかったかな…」

「フン！何処までお人好しなんだお前は。犯罪を犯した相手に汚いもクソもあるか！」

「う、うるさいなあ！お前だつて加勢しなかったじゃんか！」

轟の言葉に火野はそう言うのアंकは呆れた声で文句を言つてそれを火野は言い返す。それを見ていたネイティブは腕だけが動いているアंकを見て引き気味に口を開く。

「あ、あの腕は『個性』…何だよな…？」

火野君つて子凄いわ変わった『個性』持ちなんだな…」

「ま、まあ…世の中は広いと言う事で…」

ネイティブの言葉に緑谷は誤魔化しながら答えると大通りの脇道から1人の小柄な老人が現れる。老人の割にはコスチュームっぽい格好をしているなど火野は思った瞬間、こちらを見るなり緑谷を見たのか形相を変え、ご老人とは思えない速度でこちらに接近してくる。

「ん!? なっ！何故お前がここに!!」

「『グラントリノ』!!」

「え、知り合い？」

「うん、僕の職場体験先のヒーロぶぶう!!」

「座つてろつたろ!!!」

その老人グラントリノを見るなり緑谷は声を上げ火野は聞くと説明しようとした瞬間、顔面をグラントリノに蹴られていた。

「まア…よくわからんが、とりあえず無事なら良かった」

「グラントリノ…ごめんなさい…」

怒りながらも安否を確認し、無事を確かめていると足型がついた緑谷が謝る。するとグラントリノが出てきた細道からぞろぞろと他のプロヒーロー達がやってくる。

「細道…ここか!?あれ?」

「エンデヴァーさんから応援要請承った、んだが…」

「子供…!?!」

「酷い怪我だ、救急車呼べ!!」

「おいコイツ…ヒーロー殺し!!?」

プロヒーローはヒーロー殺しを見るなり驚くが火野達の怪我の具合を見て迅速に対処をする。プロヒーロー達が騒いでる最中、轟は尋ねる。

「あいつ…:エンデヴァーがいないのは、まだ向こうは交戦中という事ですか?」

「ああ、そうだ脳無の兄弟が…!」

「ああ!あの敵ならエンデヴァーとあとバースつて人が一緒に闘つてる!私等はこっちに応援に行けと言われて来たんだ」

「えっ!?伊達さん!大変だっ直ぐに行かなきゃ…」

「待て映司!」

緑谷が忘れてたのかそう聞くとプロヒーローは答え火野はそれを聞いた瞬間動こうとする。だが、いつの間にか人の姿になっていたアंकが火野を呼び止める。

「何だよアंकつ…:アंक?」

「…:この気配…。間違いない、ヤミーだ…!」

いつもと違う雰囲気のアंकに火野は疑問を抱くとアंकは目付きを変え、その気配のする方向へ振り向く。そして、火野達もそれを見て目の当たりにする。それはまるで、降り凌いだ脅威が再び現れる

様な感覚を火野達に襲い掛かろうとしていた。

「————ツツツ!!!」

「「「?」」」」

ビルからぬうつと顔を出したのはそのビルの屋上と大きさが変わらない程の巨大な螭螂の様な化け物だった。異業な鳴き声を轟かせ、こちらに視線を向ける。『オトシブミヤミー』にこの場にいる雄英生、プロヒーローは誰もが驚愕し、グラントリノは口を開く。

「なんじやありやあ…!?!」

「デカイ虫…!?!」

「さっきの敵とはまた違うのか…!?!」
サイラン

プロヒーロー達は驚いているとアंकは火野の服を掴みヤミーを見て口を開く。

「あれもさっきのオーズの仕業か?」

「多分…!でもあんなの見た事ないぞ…!」

「フン!せこい真似しやがる…!おい映司。ボサツとすんな行くぞっ」

「待て待て!お前等はまだ学生だろ!プロに任せてお前等は避難しろ!」

「はあ!?!んな事言ってる場合か!」

「ア、アंक落ち着いて!」

1人のプロヒーローに言われたアंकは苛ついたのか声を上げて返すと火野はアंकを抑える。するとオトシブミヤミーはビルの上から数多の足でこちらにゆっくりと近づいて来たのだ。驚いていたグラントリノは我に返り、足から空気を噴射してその場から飛び立つ。

「グラントリノ!!」

「子供等は大人しくしてろ!! (異形型の『個性』か…!?!どうであれ野放しにはできそうにないな…!?!)」

緑谷が叫び、グラントリノは雄英生にそう言つてビルを踏み台にし、凄まじい速度で壁ジャンプする。そして勢いよくオトシブミヤミーに突っ込んで蹴りを食らわした。

「oooooooooo!!?」

「図体がデカいだけか！とりあえず大人しくしてろ！」

グラントリノ

個性『ジェット』

足の裏の噴射口から空気を噴出!!

ただし噴く空気は呼吸で吸った分だ！

あくまで連続で噴くと老体にひびきますね。

「俺達も加勢するぞー！」

「貴方達は避難してなさい！ここは私等が食い止める！」

グラントリノが交戦を開始し、プロヒーロー達は雄英生に指示を出してオトシブミヤミーへと立ち向かう。

「俺達も加勢を…」

「待て！お前達はヒーロー殺しとの闘いで怪我をしている！ここは俺達プロに任せておけ！…さっきはハマしたけどようやく見せ場が来たってもんだ…！轟君だったかな？この子を頼む」

轟も加勢しようと左手から炎を出す。ネイティブが止め、そう言つて緑谷を下ろす。ステインとの戦いで痛覚は無くなっているが怪我をしている事には変わらない。ネイティブの言葉に雄英生は俯き、それを了承し、言われた通り反対の方角へステインを連れて避難しようとする。

だが。

その反対方向から、数体の昆虫類のヤミーが出現し、こちらを見て一体の蝗ヤミーが言葉を発する。

「ヒーロー…：アクノコンゲン…：ツブス！」

「こいつ等はUSJの時の…：!？」

「っ！別のヤミー…：!？」

「火野が蹴っ飛ばした敵のオーズが仕掛けてきたんだらうな…：!これじゃあ逃げられねえぞ…：!」

「これでも学生だから戦うなって言えるのか!?冗談じゃない!大人しくして死ぬのが関の山だろーな!映司!戦えるならこいつを受け取れっ!」

飯田、緑谷、轟がそう言うと言学生だから戦えないという縛りにうんざりしたのかアंकは声を上げ、火野にタトバのメダルを投げ渡す。反射的に火野は受け取るが、背後で戦っているプロヒーロー達を見て戸惑う。だが、それも一瞬で、火野は前方へと振り返り縛っていたステインの縄を離すと火野はオーズドライバーを装着する。二枚、一枚とコアメダルを嵌め込み、オースキャナーを取り出しベルトにスキャンした。

「今は考えてる暇はないようだな…：!変身!」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ!タトバタ・ト・バ!

「キエエ!!」

「シャアツ!!」

音声が鳴り響き、タトバコンボへと変身したオーズはファイティン
グポーズを構え、迫り来るヤミー達へと身構えていた。

No. 47 応援という名のアイテム

保須市で脳無を放ち街が恐怖と混乱に陥る最中、ビルの貯水タンクの上で死柄木は双眼鏡を使い状況を眺めている。だが何体か脳無がプロヒーローにより、やられている事に腹を立ち死柄木は口を開く。

「おいおいおいおい…。やられてんじやねえか脳無…！折角先生に頼んで出してもらったつてのにすぐ倒されたら無駄になっちゃうだろ…！！」

「ステインの奴はどうなったのでしょね。」

隣にいた黒霧がそう言うのと癩に触ったのか死柄木は首をボリボリと掻いて黒霧を睨み付ける。

「あんな奴の話なんかするな…。知った事じゃない…。はあ…。世の中はヒーロー様々かよ…。これじやあ世間に知らしめるのも無理そうだな…。」

「よつと！そんでもないよー?」

死柄木が溜息を吐くと、何処からか跳んで来たタトバコンボのヴィランオーズが着地し、変身を解くと脇真音はそう言っ保須市を眺める。

「…お前ボロボロじゃないか…。無様に登場してヒーローにでもやられたのか?」

「うっさいなあ…。雄英生の奴らがいたんだよ。火野映司君にコアメダルも奪われたしこっちは気分ガタ落ちなのっ。」

「はあ…。餓鬼共が何でこんなところなんだよ…?」

「この時期からすると、恐らく職場体験なのでは…?」

「都合よくこんな場所に来るか普通…。怠いなあ…。脳無もやられちゃったし…帰ろうかな…。」

黒霧の言葉に死柄木は気が抜けて両手を下ろして空を見上げると脇真音が朗報を伝える。

「まあまあ、まだ見る物はあるんじゃない?多分あの糞ステインも倒

されたと思うし、ちょうど私のヤミーが暴れ回ってるからさ。君の世に知らしめるって話はまだ続行かもよ。」

「…へえ、ヒーロー殺しが…?なら、もう少し見る価値がありそうだな…。」

死柄木は反応し、不気味の笑みを浮かべ再び双眼鏡で確認すると保須市を暴れ回るヤミーを見つけ観察し出した。

☆☆☆☆☆☆

「ウォアア!!!」

「ハアツ!!」

「ツ!?!」

蝗ヤミーの蹴りを交わしたオーズは懐えと潜り込み、回転で勢いをつけて蹴りを食らわす。蝗ヤミーは吹き飛ぶと、今度は空中からアゲハヤミーが飛び交ってオーズに向け接近する。

「避ける火野!!」

「うわっ!?!」

「グオツ!?!」

轟が叫び、オーズは地面へとしゃがみ込むと左腕を大きく振るい炎を放出、宙を舞うアゲハヤミーに当たり、その身体は瞬時に燃え上がリ地面へと落ちる。だが地上から今度は蠍螂ヤミー、アゲハヤミーとよく似た姿の「クロアゲハヤミー」が接近してくる。

「っ！止まってろ！」

パキイン…!!

「ッ!?!」

轟は右足を地面へと蹴り込むとそこから氷が生成され蠍螂ヤミー、

クロアゲハヤミーに氷結攻撃を繰り返して足元を凍らされ身動きが取れなくなっていた。だが休ませまいと先程燃えていたアゲハヤミーが炎を風で消しきり、蝗ヤミーも立て直してオーズ、轟の前へと立ちはだかる。

「クソっ……！次々と湧いてきやがる……！」

「轟君！火野君！僕も戦……うっ!?」

「怪我人は大人しくしているっ……飯田、お前もだ。」

「っ……しかし……！」

「さつき！レシプロ使って！もう動けないでしょ……！痛覚なくても身体が！多分動けない筈だから……！」

交戦する2人に緑谷と飯田も動こうとするがステインとの戦いで1番怪我をしているのか身体が動かないのかその場に疼くまる緑谷と飯田に轟と、ヤミーの攻撃を交わしながらオーズは安静にしてると言い聞かしていた。

その間、オトシブミヤミーと戦っているプロヒーロー達の、グラントリノはオトシブミヤミーの巨大な脚の攻撃を避け、雄英生等のヤミーを見て近くにいた2人のヒーローに指示を出す。

「こっちは少数で対処する！お前達は子供等を守って戦わせるな！」

「わ、分かった！^{サイラン}「ネイティブ」行くぞ！」

「げ！あっちにも敵がいたのかよ!？」

プロヒーローに言われて振り返りヤミーがオーズ達を襲う光景を見て表情が強張り、驚愕するネイティブ。

「っ……こいつ！全然ダメージ入ってる気配ない！不死身か!？」

「……!!」

ネイティブを含め、2人のヒーローは雄英生が戦う場所へ駆け出す。

その間女性ヒーローはヤミーから距離を取り、ビルの上へ着地すると、ダメージを負わない怪物に文句を垂れ流す。虫特有の嫌な鳴き声という咆哮を放ち、鼓膜が破れそうになったのかプロヒーロー達は耳を塞ぐ。すると、グラントリノの隣にアंकが現れると右腕を突き

出してその掌から火炎放射器の様に炎がオトシブミヤミーに向けて
投射される。

「ーっ！ツ!!？」

「な、何だ!?燃えてる!？」

「っ！あの金髪…！あいつの『個性』か!？」

「効いてる…！火が弱点か!？」

悶え苦しむ様な悲鳴に似た鳴き声を上げヒーロー達は戸惑い、炎を
投射しているアंकに向けて口を動かしていた。グリードの鳥類、ア
ンクは鳥の能力の他、炎属性を秘めており、火を得意とする戦いが可
能だ。側から見ればアंकも『個性』持ちの存在に見えるヒー
ロー達は心の中でそう思っていた。同じくグラントリノも驚き、ア
ンクの顔を見て声を掛ける。

「っ!?!お前さっきの小僧!？」

「フン！こいつらは半端な攻撃じゃ通用しない！文字通り虫だからな
！火が一番有効的だ!？」

「奴の事を知っておるのか!?!だが生憎ここに火を使える奴はおらん
！加勢は助かるが、時期に轟…ヒーローのエンデヴァーが来るだろ
うっ。プロじゃない小僧は大人しくしてろ!？」

追い込まれている筈なのに守ろうとするプロ意識を見せるグラ
ントリノ。だが、それは返って神経に触る発言だったのかアंकは苛立
ち、叫んだ。

「ああ!?!まだそんな事言ってやがるのか!?!この状況で碌な『個性』使
えないヒーロー共が出しやばるな！そのエンデヴァーとか言う奴の
所にもヤミーがいる可能性があるかもしれないだろが!?!こいつ等は
本気で殺しに掛からないと倒せない!?!こうしてわざわざ俺が手助け
してやってんだからさっさとあのデカブツの動きでも止めやがれ爺
い!!！」

「じ、爺い…!!最近の餓鬼は騷がなつとらんなあ!?!くそ…止む終えん

か……！始末書覚悟でここは協力するぞ！」

「はっ！せいぜい足を引つ張るなよ！（…映司の奴…痛覚がない分体のダメージを騙し騙しで動いてやがる…、反動が少ないタトバでこの場を凌ぐのが精一杯か…！）」

ヤミーの存在にとつてヒーロー達は未知数。街の被害、雄英生等を守る為に立ち向かうが怪人相手に捕らえるという目的で戦闘をしているヒーロー達にアंकは激怒して加勢したのだろう。そんな甘い考えなどではヤミーを倒せないと言い、アंकはその場から跳躍し、炎を球体に変えオトシブミヤミーに何発か浴びせる。攻撃を与える中、アंकは人型のヤミーと戦う動きの鈍いオーズを見てそう思っていた。

「うわあっ!？」

「火野！大丈夫かっ!？」

視点は変わり、アゲハヤミーが空中からの飛来攻撃が当たり火花を散らして転がるオーズに追撃をせんとアゲハヤミーは突っ込んで来る。轟は氷結攻撃で注意を逸らしオーズの元へ駆け寄ろうとするが、蝗ヤミー、螻蛄ヤミーが負傷している緑谷達へと接近していたのを見て左腕を大きく振るい、炎を放出させ距離を取らせる。すると、オトシブミヤミーから応援に来た2人のプロヒーローが緑谷と飯田の前へと駆けつける。

「大丈夫か!？」

「虫ばっかの連中だなおい…！お前達は下がれ！ここは俺等プロが…！」

「こいつ等は並みの敵サイランじゃないんです！協力してやらねえと不利な状況に変わりはありません！俺と火野で応戦するんで2人は緑谷達を安全な場所へ避難させてください！」

「そっくりそのまま返すぞその言葉！子供に危険をさせるわけには行かない！」

「半端な…！攻撃は通用しないんですこいつ等…！それに大勢で行つ

た方がこつちも有利です！これ以上傷つく人は見たくありません！協力をお願いします!!」

オーズは迫り来るヤミーを殴り飛ばし力強く言う。合計4体のヤミー相手に此方はオーズ、轟、そしてプロヒーロー2人が加われれば4:4となり数は互角だが、2人だけで攻めるよりはまだマシな戦力。オーズの言葉にプロの2人は止む終えず承諾し、1人は緑谷と飯田の前へと立ち、もう1人ネイティブは轟の前へと駆け出し先陣を切る。一方で緑谷と飯田も加勢しようとするが身体に痛みが出始めてきたのか額から汗を流し、口を開く。

「このままじゃ僕と飯田君のせいで火野君と轟君の足手まといに……!ぐ……!轟君!やっぱ僕も戦うよ……!」

「ヒーロー殺しと派手にやったんだろ!?怪我人は大人しくしてろ!」
「ですが!轟君達も負傷している!この数では不利だ!」

緑谷の言葉にヒーローが怪我の様子を見て叫ぶ。だがそれは轟とオーズも同じで飯田は声を上げる。オーズの毒の効果が切れてきたのか轟は左腕が痛むのか押さえていた。恐らくこの場の4人が痛覚が治り痛みが出始めたのだろう。迫り来るアゲハヤミーをかううじて蹴っ飛ばしたオーズは轟の隣へ飛び退くと轟に向かって口を動かす。

「大丈夫轟君??」

「そりやお互い様だ火野……!お前もコンボを使い過ぎてへばって来てるだろ……。流石にこの数相手じゃプロが応援に来ても埒があかねえぞ……!」

「っ!来るぞ!!」

オーズの心配に轟はお互い様だと疲れてるオーズを見て言い返すと、4体のヤミーが畳み掛けろと言わんばかりに突っ込んで来て、ネイティブは叫び、3人は構える。息を切らしてる2人、そして学生。ネイティブは思った。この状況で雄英生を守りながら戦うのは自信の「個性」を持ってしても守り切れないと悟ってしまったのだ。相手は異世界の怪人。その能力も行動も並みの敵ではないと思いつつたのだろう。

迫るヤミー達にネイティブが怖気付いていたその時だった。

ドオオオン!!!

「ギャアア!?!」

「グアア!!」

「!!!!」

先頭にいた蝗ヤミー、蠍ヤミーが突如、爆発に巻き込まれその威力に耐え切れず身体が爆破し、その場から消えていたのだ。黒煙が立ち上る最中、その爆発で何かが飛び散る。オーズは気付いた。その爆発から飛び散る物は大量のセルメダルだった。

「何だ…?!爆発…?!それにこれ…セルメダルじゃねえか…。」

「っ!奴ら…こんなメダルみたいなので出来てるのかっ?」

何が起こったのか分からない轟は降り注ぐセルメダルを見て驚く。その付近にいたプロヒーローも同様で、落ちたセルメダルの1枚を拾い上げそう言ってみつけていた。仲間がやられたのか接近していたアゲハ、クロアゲハのヤミーが進行を止め、オーズ等から距離を取る。何が起きたのか状況が読めない轟等だが、驚異的な視力を持つタカアイのオーズはソレが見えていた。2体のヤミーが迫る中、空から手榴弾が2つ程、蝗ヤミー、蠍ヤミーに向けて落ちてきたのだ。その投げられたビルの屋上を見上げると、そこには武装をした女性が立っていた。轟、プロヒーロー等、そして緑谷と飯田もその女性の存在に気付き、顔を上げ確認する。その見覚えのある顔にオーズは口を開く。

「火野さーん、会長の命令でお手伝いにきましたー。」

「さ、里中さん…!?!」

堀に片足を乗せて片手に手榴弾、もう片手には女の子には似合わないロケットランチャーを豪快に持つてこちらの状況を見下ろし眺め、里中はそう言っていた。その服装もまた派手なコスチュームを着用しており何処かの店でいそうな白黒のメイドの格好、その体のあちこちにサポートアイテムや武器を装着している。

「だ、誰だあれ…!? てか！ 敵を倒したのか!?」

「ヒーロー……いや、メイド……?」

里中の存在に疑問を声に出すヒーロー、そしてその格好とヤミーを倒した行動に轟は困惑し眩く。

「さ、里中さん！ え、何でここに？ え、戦えるの!?」

「はいっ、さつきも言ったんですけど会長の指示で応援という事で来ましたーっ。あ、一応私ヒーローの『資格』持つてるんで。」

里中はそう言い終わるとビルから飛び降り背中ホバージェットを使い落下速度を殺し着地する。そしてアゲハヤミーへロケットランチャーを構えると容赦なくミサイルを発射する。

「ツツ!!」

「命中…次、行きまーす。」

直撃し、落ちていくアゲハヤミーを確認し里中はそのままクロアゲハヤミーに標準を合わせ発射すると、そのミサイルも直撃し、クロアゲハヤミーも爆発の中から煙を上げながら落下していく。両方のヤミーが同じ付近へと地面に落下すると里中は無言で手榴弾を2つ手に取り、ピンを口で抜くとそのヤミー等の元へ放り投げる。

ドガアアアアアン!!!!

「グオアアアアッ!!!」

「ギャアアアアッ!!!!」

豪快な爆発と共にアゲハ、クロアゲハヤミーの断末魔が聞こえる。炎と黒煙が立ち昇り、2体のヤミーは爆発の威力で体は爆散、セルメダルの塊となつて飛び散っていた。

「……すげえ……！」

「一瞬で…何者なんだあいつ…!?!」

苦戦していた人間離れのヤミーをあつさり倒した里中に轟とプロヒーローは驚愕し、只々唾然としていた。それは後方のネイティブと緑谷、飯田も同様で口をあんぐりと開けたままだ。黒煙が上がりその場から2体のヤミーが消えたのを確認すると里中は涼しい表情でオーズに安否を問う。

「大丈夫ですか？」

「…ヤ、ヤミーを一瞬で………！凄……！」

「ビジネスですから。」

まあ、ちよつと火力を弄ってるんで…。」

里中エリカ

ヒーロー名

“ビジネスヒーロー”

プレガントガール

個性『弾火力増強』

銃の弾、ミサイル、手榴弾など

自身が装着するあらゆる武器の火力を上げる事ができる！

ビジネスで動く女性！彼女の仕事魂も増強されてるってか！

「あ、火野さん、会長からお届け物です。」

里中…否。ヒーローのプレガントガールが思い出したのかそう
言って肩に下げたりユックを下ろすとそこから取り出したのは「メ
ダジャリバー」だった。

「えっ!?これ…!」

「兎目さんが調整してくれました。会長の権限で使用許可は出ていま
す。火野さん、あのデカブツは貴方で対処して下さい。私は別のヤ
ミーを倒してきますので、失礼します。」

プレガントガールはメダジャリバーをオーズに渡して軽く頭を下
げるとホバージェットを起動し、跳躍するとその場を後にした。

「火野、何だそりゃあ…?」

「…使用許可が出てるって事は…」

思いつきりやつてもいいって事かな…、いや!

そんな事考えてる暇はないっ!」

轟が駆け寄り、メダジャリバーを見て首を傾げるとオーズはこの剣
の威力を知ってるのかぶつぶつと言いながら立ち上がり、反対側の大
通りの屋上ビルで交戦しているアंक、ヒーロー達、そしてオトシブ
ミヤミーを見てメダジャリバーを構える。

「皆さーん!!離れてて下さい!これ!!本当危ないヤツなんで!!!」

付近に落ちていたセルメダルを3枚拾い上げるとオーズはこの場
にいる者、そして交戦しているヒーロー達に向かって大声を上げてい
た。

No. 48 空前絶後の決着

「火野君っ！それは一体…？」

「職場体験先の鴻上ファウンデーションで発目さんに作ってもらったヤツ！

調整したって言ってたから多分被害は出ないと思うー！」

「剣…!?だが刃物は銃刀法違反で犯罪を犯してしまうぞ…!?」

「相手は怪物！人間じゃないから問題ない…筈！

皆んなはとにかく離れてて!!」

オーズの持つメダジャリバーに緑谷、飯田は興味を持つが形はどうであれ刃物である事は変わりなく、

飯田は犯罪になると言うがオーズは里中が言っていた会長の権限と云う言葉を信じ、

オトシブミヤミーに向けて駆け出す。

恐らくこの威力は開発部署で実験して把握済みなので出来るだけ至近距離で使いたいのだろう。

駆け出したオーズを見送り、轟は横たわって気を失っているステインの縄を拾い上げると、この場にいる人達に指示を出す。

「火野の奴、あの剣危ないって言ってたな…。緑谷、飯田、それにヒーロー方。」

俺達はなるべく距離をとった方がいいんじゃないか？

「よく分からないけどその方が良さそうだな…！ネイティブ！そのそばかす少年を背負えるか!？」

「あく糞！子供に危険を任すなんてヒーロー失格だっ！飯田君…だったか？お前は動けるよな!？」

「っ！はいっ、大丈夫です！」

ヒーローがネイティブに聞くと腑に落ちないのか頭を掻きながら緑谷を背負い、飯田は返事をする

4人はオーズが向かう反対方向へと走り出す。

オーズはオトシブミヤミーがいるビルの真下へと立ち止まると炎

を投射しているアंकに向かって大きく息を吸い込み、叫んだ。

「アंकクーーーーーッ!!」

「っ!?映司!?……それは!」

「何だ!?ヒーロー殺しを引っ張ってた小僧か!」

オーズの存在に気付いたアंकは彼の手に持つメダジャリバーを見て目を見開く。

その声に飛び回っていたグラントリノも立ち止まり

火野が変身したオーズを見てそう言う

アंकは理解してグラントリノに対し口を開く。

「おい!全員離れさせろ!コイツを仕留める術をアイツが持っている!」

「何じゃと!?っておい!」

アंकは言い終えるとそのままビルから飛び降りオーズの元へ着地する。

「お前!ソレ持ってんだったら最初から使え!!」

「さ、さつき里中さんが来て貰ったんだよ!」

「里中だど?…おい、向こうのヤミーはどうした?」

「里中さんが倒したっ」

「はあ?……ちっ、化け物かあいつは……!」

オーズの言葉に驚き、そしてあっさりとヤミーを倒した里中に対して苛立ったのか舌打ちをする。

恐らくアंकは前世の里中も人間離れのヤミーと生身で戦っていたその驚異的な身体能力を見せた彼女を思い出したのだろう。

世の中は理不尽だと思っていたのか「さっさとやれ!」と苛々をぶつける様にオーズに言い残すとアंकはオーズから距離を取る。

「(よう分からんが何かする気だな小僧……!」

お前達!この怪物から離れろ!多分巻き添え食らうぞ!」

「えっ!?わ、わかった……!」

「おーい!退避だー!コイツから離れろー!!」

歴を積んだグラントリノはオーズ達の行動を把握したのか交戦しているプロヒーロー達に指示を出し、

全員はその場から離れて距離を取る。

ヒーロー達がいなくなり攻撃が止んだ事にオトシブミヤミーは咆哮を上げ、

その真下にいるオーズの存在に気付き睨みつける。

その間、オーズは周りにヒーローがいなくなったのを確認すると、オーズはメダジャリバーを数秒見つめる。

ふと、発目の言葉が脳内で過っていた。

『オーズのお方！このメダジャリバーは

セルメダルを1枚から3枚まで装填可能で“三段階”の威力で技を出す事が出来る武器です！さらにさらに！貴方がお腰に付けているオースキヤナーをメダジャリバーに認識させる事でセルメダルを“最大限”に活かしたデーンジャラスな必殺技を出す事ができるのです！

正直、作った私ですらびっくりしちやいましたっ！』

「あの時は開発部署事斬れちゃったけど、今回は信じるよ発目さんっ。」

オーズは発目の開発したメダジャリバーを信じる。

ゆっくりと迫り来るオトシブミヤミーを一度見てオーズはメダジャリバーに視線を向く。

先程拾った3枚のセルメダルをメダジャリバーのスロット部分に投入していく。

3枚入れ終わると、柄の部分に当たるレバーを倒す。

すると、入れられた3枚がブレード部分に装填され、オーズはオー

スキャナーを取り出すと
待機音と共にソレをメダジャリバーのブレード部分にスキャンした。

トリプル・スキヤニングチャージ!!

オースキャナーから音声が鳴り響き、メダジャリバーの刀身が白く発光する。

オーズは腰を低くしゃがみ、オトシブミヤミーへと構える。

「oooooooooo!!!」

「ハアア……!!!せいやああああ!!!」

オースキャナーの音声に呼応する様に咆哮を上げるオトシブミヤミー。

そしてオーズは上半身を大きく半回転させ、メダジャリバーを勢よく振り回した。

この時、プロヒーロー、雄英生の人等は想像していた。

あの剣先から斬撃が出るのではないか。

あの剣の切れ味が凄まじく化け物を簡単に斬るのではないか。

この場の誰もが思ってたような雰囲気の中、アंकはあの武器の威力を重々承知していたのか見届けていた。

その瞬間。

ザンツツ!

凜とした斬撃音が響き渡り、そのメダジャリバーが振った先のオトシブミヤミーを含めた範囲に横一線に青い線が広がっていた。

物凄い衝撃が来るのではないかと警戒していたヒーロー達は一瞬驚き、その光景にキョトンとしていた。

すると、緑谷が小さく「あっ」と声を漏らす。

そのオーズの振った先の青い線の下がズレ始めたのだ。

その光景にプロヒーロー、雄英生等は目を見開き、顔は青ざめ、徐々に口を開いて驚愕していた。

空間断裂。

その言葉に相応しい光景が目の前に広がる。

「……………ツツツ!!!?」

その身体が真っ二つに裂かれたオトシブミヤミーは断末魔を上げる。

すると、空間断裂されたその光景は瞬時に元へ戻り、

オトシブミヤミーだけがそのまま斬られ大爆発を起こした。

その爆発から大量のセルメダルが暴発され、

オーズ達がいるこの場に大量のセルメダルが降り注がれる。

それはまるで、この戦いに終わりを告げようとする
鎮火する静寂な雨の様な光景だった。

「……………おわった……………のか……………?」

最初に轟が口を開く。

あのデカイ怪物を一撃で倒したオーズに啞然と立ち尽くすヒー
ロー達。

だが、直ぐにその光景をぶち壊す者がいた。

降り注ぐセルメダルを腕だけのアंकが飛び回り、
その腕で落下するセルメダルを吸収して取り込んでいた。

視界に入る雄英の3人は驚くがそれ程ではなかった。

だがプロヒーロー達は腕だけのアंकは初めて見てしまい声を上
げる。

「っ!!?何だこの腕!!?」

「きゃあっ!!?こっわっ!!」

「こいつ降って来るメダル喰ってるのかっ!!」

驚くヒーロー達だがアंकのその欲望は止まることなく

セルメダルをゴクン、ゴクンと呑む様に喰らい続ける。

その騒ぎに気付いたオーズは慌ててアंकを止めに入る。

「ちよちよちよちよっ!!?何やってんだよアंक!!駄目だろ腕だけに
なったらっ!!」

「馬鹿!離せっ!倒した報酬は貰っという何が悪い!!メダル、俺のメ
ダルだ!!」

「こ、こんの!駄目っだっばああ!」

オーズが抑えても尚暴れ回るアंक。

異様でシニールなそのやり取りを見ていたグラントリノは汗を流
しながらその場を見て大きく息を吐いていた。



「はっ!」

「グギャアアア!!」

里中事、プレガントガールはバースバスターのトリガーを引き、エネルギー状のセルメダルの弾が炸裂し蝟螂ヤミーは断末魔を上げ爆発する。

全てのヤミーを倒せたのかバースはドライバーから

セルメダルを抜き取り、変身を解くとプレガントガールに近寄る。

「いやあつ、助かったぜ里中ちゃん」

「フン、鴻上の連中は肝が据わった連中ばかりだな。

…しかし、奴らから出てきたこのセルメダルとやらは一体…。」

「まあヤミーの元みたいなモノです。

あ。伊達さん、セルメダルは回収して下さい」

「ああそうだった…。じゃあ一緒に手伝…っておいおいおい里中ちゃんどこ行くの?」

「私の仕事はこれで終わりました。

これ以上の残業はボーナスに含まれないので、これで失礼しますね」

「おおーい!まだ終わってねえって…!ああ行っちまいやがった…。」

伊達サイドキックの声をフル無視してこの場から立ち去った里中にエンデヴァーの相棒サイドキックの2人がその態度が気に入らなかつたのか声を漏らす。

「何だあいつ…敵倒すだけ倒して颯爽と去りやがった…。」

「まだ避難とか終わってないってのに気分屋なヒーローだな」

「まあまあまあ！そう言わないでくださいよ御二人さん。あいつはちよつと抜けてる所があるんだけど、実力はウチの会社のNO.1なんでね。お陰で事は手早く済んだでしょっ？」

「……フン。とりあえず脅威は去った。お前等、さっさと脳無を拘束しろ」

「了解」

敵を倒されて腑に落ちない表情を浮かべるエンデヴァーは氣を失つて動けなくなっている脳無を確保するべく相棒の2人に指示を出す。

2人は黒の脳無、手足の長い脳無の元へ駆け寄ると

その内の1人がエンデヴァーがビルに叩き込んだ

翼の生えた脳無を思い出し、その方角を見て確認する。

「…あれ？エンデヴァー、あの跳んでた脳無はどこへ……？」

「何を言っている？あそこのビルで気絶しているだろ……」

サイドキック
相棒の言葉にエンデヴァーは

自身が殴り飛ばした方角へと指を指し示す…。

だが、そこは壁が壊れて瓦礫だけの場所となっており、肝心の脳無がその場にいなかったのだ。

「っ!!まさか逃げたのかよー!」

「くっ、俺とした事が!そう遠くには行っていない筈……!ここは任せたぞ!!!」

「あ、エンデヴァー!」

伊達が叫ぶと、自身に怒るエンデヴァーは両脚から炎を射出させ、空中へと飛び立つ。辺りを見渡すが当然見当たらない。渾身の一撃を食らわせ重傷を負った脳無は逃げ切れる戸は思わなかったエンデヴァーはふと、息子である轟焦凍の言ってくれた位置情報を思い出す。まさかとは思ったが、息子がそこにいる以上可能性はなくても無い。エンデヴァーはスマホを取り出し位置情報を確認しながらそこ

へ飛び立った。

☆☆☆☆

「っ!?伏せろ!!」

エンデヴァーの予感通りに事は動く。

グラントリノは空中から迫り来る何かを察したのかこの場にいる人達に聞こえるくらいの声で叫ぶ。

翼の生えた脳無が此方に向かって飛んできたのだ。

「!?」

ヴィラン

「敵!?エンデヴァーさんは何を…!?」

女性ヒーローがそう声を上げた瞬間、滑空して来た脳無は攻撃してくるのではなく、緑谷を捕らえて上空へと飛び立った。

「緑谷君!!」

「え、ちよ……!!」

不意の連れ去りに身動きが取れなかった者達の中、飯田が叫ぶ。かなりの速度で飛び立つ脳無にグラントリノは“個性”が届かなくなると悟ったのか冷や汗を流す。

「やられて逃げてきたのか…!!」

「アंक！飛べるメダ…る!?」

「っ！おい映司!!」

女性ヒーローが見上げてそう言うのと脳無の血が顔に滴る。オーズは飛んで追いかけてようとアंकに手を突き出す、コンボの反動が来たのか膝をつく。

「わあああつ!!!」

「マズイ!」

「緑谷あ!!!」

「ちっ!!馬鹿が!!」

自身の状況を理解した緑谷が叫ぶ。徐々に距離が遠退く脳無にア
ンクは人型となって右腕を突き出し炎を投射しようとした、その時。
飯田の横を何者かが通る。その者、"ステイン"が女性ヒーローの頬
に付着した血を舐めり取ると、上空を飛んでいた脳無が硬直し、落下
する。落下最中にステインは脳無の背中へと飛び掛かると自身の
縛っていたロープを切った小型のナイフで脳無の剥き出しとなって
いる脳みそへと突き刺したのだ。

「うっ!?!ス…ステイン…!?!」

「そんな…!?!あの毒で…!?!」

脳無は地面へと落下し、ステインに掴み上げられた緑谷は動いて
ステインに対し驚く。それは変身が解かれた火野も同時に驚いて
いた。そして、脳無を止め緑谷を助けたその行動に一同は驚いて
いると、ステインは口を開く。

「偽者が蔓延るこの社会も、徒に"力"を振りまく犯罪者も、肅清対象
だ。全ては、正しき社会の為に…!」

そう言いながらステインは足元の脳無を見る。

脳から出血が止まることなく垂れ流れビクビクと痙攣を起こし虫
の息だった。

「助けた…!?!」

「バカ、人質とったんだ…!」

「躊躇なく人殺しやがったぜ…!?!」

「いいから戦闘態勢をとれ!とりあえず!」

その行動に混乱するヒーロー達は相手は敵、^{ライラン}こちらはヒーロー。や
る事は変わらないと捕まるべきと揉める。すると、別方向の空からエ
ンデヴァーが降り立つ。

「何故ひとかたまりでつつ立っている!!? そつちに一人逃げたハズだが!!?」

「親父……!」

「エンデヴァーさん!! あちらはもう!」

「援軍のお陰で済んだ! 多少手荒になってしまったがな! して… あの男はまさかの…」

真下に脳無が倒れてるのを確認しエンデヴァーはステインを睨む。

「うう… 放つせ…!」

地面に降ろした緑谷はジタバタともがく。

ふと、マスクがずれ落ちてその素顔が露わになるステインはエンデヴァーの存在に気付き睨みつける。

「エンデヴァー……!」

「ヒーロー殺し!!」

「待て轟!!」

炎を出して飛び出そうとするエンデヴァーに

グラントリノは叫んで呼び止める。

その時だった。

「贗物……!」

「!!」

憎悪、執念、殺意…。

その顔から放たれる感情にこの場の全員が動けなくなる。

その底知れない脅威は一步、一步とヒーロー達に歩み寄り、口を開く。

「正さねば……! 誰かが……血に染まらねば……! 英雄^{ヒーロー}を取り戻

さねば!! 来い、来てみる贗物ども……俺を殺していいのは本物の英雄^{オールマイイト}だけだ!!」

「……っ……!!」

「何……だ……!? 奴から感じるこの殺意……!?」

奴から放たれる殺意に女性ヒーローは腰を抜かす。エンデヴァー、そしてアंकでさえも後退る。プロさえも後退る彼の目は執念と言えるそのものだった。誰もが金縛りに合う様な感覚に襲われて怖気付いていた瞬間だった。気付いたエンデヴァーが口を開く。

「……気を……失ってる……」

ステインは白目を向き、立ったまま気絶していた。緊張が解け、ダメージと疲れが来たのか雄英生の轟、飯田、火野は膝から崩れ落ち、地面へと腰を着く。

火野は息切れを起こし、震えが止まらない手を見ていた。この時、ヒーロー殺しは顔面の骨がひび割れ、折れた肋骨が肺に刺さっていたそうだ。

誰も血は舐められていなかった。なのに、あの場で一瞬。

ヒーロー殺し「ステイン」。

彼だけが確かに相手に立ち向かっていた。

No. 49 行動の後始末

「あらら……あいつ脳無殺しちゃった！」

ビルの屋上、貯水タンクの上で戦況を眺めていた敵事^{ウイラン}、脇真音は双眼鏡でステイン達の間を眺めていた。

脳無を殺して気を失っているステインに応援に来た警察等が拘束している所を同じく双眼鏡で覗いていた死柄木は見るのを止め、苛立ったのか「個性」双眼鏡を粉々にする。

「…帰ろ」

「満足いく結果は得られましたか？死柄木弔」

「バアカ、そりや明日次第だ」

死柄木の言葉に黒霧はワープゲートを展開し、不満気に死柄木はそこの中へと入って行く。

すると、ビルを跳躍して来る者がいた。

蟪蛄やミーと蝗やミーだ。

「あ、帰ってきた……ってこれだけえっ？」

流石に倒されすぎちゃったかあ……、黒霧さん。

「こいつ等も連れて帰るよーっ。」

「？責めてこいつ等も暴れさせれば良いのでは……？」

「ダメダメツ。いっぱいヤミー作ったのは囿でこいつ等は持ち帰る用に残しといたのっ！」

早いとこ連れて帰るよっ。ア・ン・クに感づかれる前につ」

脇真音がそう言って顎をくいっと動かすと2体のヤミーは無言でワープゲートの中へと入って行く。

そして、脇真音も中へ入るとワープゲートは黒霧事その場から姿を消した。

☆☆☆☆☆☆

あの事件から一夜が明け、ステインと戦った
英雄生徒4人、プロヒーローのネイティブは
近くの保須総合病院に搬送されていた。

「冷静に考えると…すごい事しちゃったね」
「そうだな」

緑谷が喋ると轟は頷く。

ステインに斬りつけられた3人は箇所々に包帯を巻いており、火野は
深くはないが背中に二箇所針で刺され胴体に包帯を巻かれていた。

「あんな最後見せられたら、生きてるのが奇跡だって…思っちゃうね」
僕の脚、これ多分…殺そうと思えば殺せてたと思うんだ」

「ああ、俺らはあからさまに生かされた」

緑谷と轟は巻かれている部分の怪我を見てそう言う

轟は火野を見て口を開く。

「ヒーロー殺しが来る前にお前あのオーズと戦ってたんだろ…？怪我
してたのによく戦えたな」

「まあ…なんて言うか、救げなきやって思う気持ちでハイになってた
から…動けたんだと思う。」

俺なんかより、あんな状態で動けていた緑谷君と飯田君は凄いよ。

2人が畳み掛けなかつたらやられてたかも…。」

「いや、違うさ。俺はー…」

「フン…映司。コンボとオーズのお陰でもある事を忘れるな。」

オーズの力がなければその2人は怪我で動けなかつたのもある
だろっ」

飯田が言いかけた瞬間、病院の窓越しに座っていた人間姿のアंक
が鼻を鳴らしてそう言う。

「アंक、お前もあんな力あるんなら協力してもよかつただろ」

「本当にどうしようもなかったらとあの戦いで言った筈だっ。

これくらいの事で殺られる様ならお前等はそれまでだったって事だ」

「アंक―」

轟が言うとアंकはセルメダルを投げながら口を動かす。

言っている事と悪い事がある為、火野は怒り気味で叫ぶと、アंकは舌打ちをして窓の外を眺め始める。

すると病室の扉が開かれ、グラントリノ、マニュアルが入って来る。

「おお、起きてるな怪我人共！」

「グラントリノ！」

「マニュアルさん…！」

突然の来訪に緑谷は座り直そうとするが

グラントリノがそのままいいと言わんばかり手を出して止めると同時に口を開く。

「すごい…グチグチ言いたい…が」

「あつ…す…？」

「その前に来客だぜ」

動揺する緑谷だがすぐに落ち着きを取り戻す。

すると、グラントリノは背後に親指を指すとスーツを来た大柄の男が入って来る。

グラントリノがそう言うとアंकを除いた他の3人は立ち上がる。

「保須警察署署長の面構犬嗣さんだ」

「面構!!署…署長!?!」

「い、犬…!?!は、初めまして…！」

「フン、面が犬…まんまだなあ…」

「アंक…!!」

現れた男のその顔は犬。その事に火野は驚くと窓越しに座ってたアंकは鼻を鳴らし、侮辱する物言いに火野は注意すると面構は口を

動かす。

「掛けたままで結構だワン。君達がヒーロー殺しを仕留めた雄英生徒だワンね」

署長がこんな病院に現れる事に驚き緑谷は無理に立ちあがろうとするが面構がそう言うて皆に尋ねると4人は驚きながらも頷く。

「ヒーロー殺しだが…火傷に骨折と、微量だが毒が体内に残っていてなかなかの重傷で現在治療中だワン」

「！！！！」

面構が言うとはんの少し4人の目は見開く。

毒を打ち込んだ張本人の火野はまずい事を仕出かしたと思い俯向く。

そして面構はそのまま喋り始める。

「超常黎明期…警察は統率と規格を重要視し、〃個性〃を武に用いない事とした。そしてヒーローはその穴を埋める形で台頭してきた職だワン。

個人の武力行使…容易に人を殺められる力。本来なら糾弾されて然るべきこれらが公に認められているのは、先人達がモラルやルールをしっかりと遵守してきたからなんだワン。

資格未取得者が保護管理者の指示なく、〃個性〃で危害を加えた事、たとえ相手がヒーロー殺しであろうともこれは立派な規則違反だワン。

君達4名、そして火野映司君の、〃個性〃アंक。

及びプロヒーローエンデヴァー、バース、マニュアル、グラントリノ、この8名と1人には厳正な処分が下されなければならない」

「はあ…？ちよつと待て、映司の、〃個性〃の何で俺もだ？」

「君は、〃個性〃で合ってもその人格と行動は火野英司君の意に反して行動をしていると聞いてね。

こちらの判断の結果君も処分を下さないと行けないんだワン」

「巫山戯んなっ！あの状況で放って置いたら全員タダじゃ済まなかっただろが！」

「アंक落ち着いて！署長の言ってる事が正しいよ！」

面構の言葉に苛立ち窓から降りてズカズカと詰め寄るアंकを火野は肩を押さえて止める。

何を言おうと火野達は学生。危険を顧みずヒーロー殺し、ヴィランオーズ、ヤミー等と交戦してしまった事の重大差に緑谷、飯田、火野は顔を俯向くが、

ふと、処罰と言う言葉に納得が行かなかったのか轟が口を開く。

「アंकの言う通りだ…」

「轟君…」

物申そうと一歩前に出る轟に飯田は言葉が出ず名を呼ぶ。

彼もその正義感溢れる正しい心を持ち、兄がやられたという悔しさと憎しみが溢れて制御が効かず、我を忘れてしまった行動に何も言い換えせずにいた。

一旦区切る轟は感情的に口を開く。

「飯田が動いてなきやネイティヴさんが殺された。」

先に来た緑谷が来なけりや2人は殺された。誰もヒーロー殺しの出現に気付いてなかったんですよ。

規則守って見殺しにするべきだったって!」

「ちよちよちよ…!」

「ハッ!轟って奴の言う通りだなあ。お前等警察は碌に加勢すらして来なかった。俺達が動いていなかったらあの場のヒーロー共の命も無かっただろおな。」

学生がどうこう言ってる暇なんかあったらとつくに全滅だった!」

「やめろって!」

轟が続いてアंकも反感を買いに出て緑谷と火野は必死に止めようとする。

「結果オーライであれば規則など有耶無耶でいいと?」

面構が尋ねると、アंकは激昂し、轟は辛抱たまらなくなり反論する。

「分からねえのか!?映司は命知らずで

その『命』を掛けてこいつ等を守ろうとしてたんだよ!!」

「っ!人をつ…救けるのがヒーローの仕事だろ」

「だから…君は『卵』だ、アंक君も…。全く…良い教育をしてるワ
ンね。君の『個性』、そして英雄も…エンデヴァーも…」

「っ！この犬…！」

「その減らず口塞いでやる…！」

「やめたまえ2人共！もつともな話だ!!」

感情任せに怒る2人に面構は呆れると

火に油を注いだのか轟とアंकは突っ掛かろうとする。

「まア…話は最後まで聞け」

「アंक、取り敢えず話を聞こう？轟君も…」

するとグラントリノが手を出して止める。

火野もアंकと轟を宥めると2人は大きく息を吐く。

大人しくなった2人を確認し、面構は鼻を弄りながら口を動かす。

「以上が…！…警察としての意見。で、処分云々はあくまで公表す
ればの話だワン」

「!?!?!」

その言葉に目を見開く。

一旦区切ると面構は再び喋り出す。

「公表すれば世論は君らを褒め称えるだろうが処罰は免れない。一方
で汚い話公表しない場合、ヒーロー殺しの火傷跡からエンデヴァーを
功労者として擁立してしまえるワン。毒の方も時間が経過していく
内に消えている事が判明している。」

あのヤミーと言う存在も鴻上のヒーローによりそちらに市民達の
視線は向けられている…、つまり幸い目撃者は避難しているお陰で極
めて限られているワン。

この違反はここで握り潰せるんだワン。だが君達の英断と功績も、
誰にも知られる事は無い」

面構は親指を立ててグツジョブを作るとヒーロー殺しに関わった
5人に提案を申し込む。

「どっちがいい!?一人の人間としては…前途ある若者の『偉大なる過
ち』に、ケチをつけさせたくないんだワン!?!」

「まあどの道監督不行届で俺らは責任取らないとだな」

涙目になるマニュアルがそう言うのと職場体験でお世話になっていた飯田が頭を下げる。

「申し訳ございません…」

「よし！他人に迷惑がかかる！わかったら二度とするなよ!!」

飯田の頭を軽くチョップしてマニュアルは叱る。

面構の言葉を聞いた4人はその提案を承諾し、深く頭を下げる。

「よろしく…お願いします…」

「フン、後始末は警察側の取り柄だろうが」

「アंक！お前も頭下げる立場なんだよ…!」

「おい馬鹿！やめろ…!」

アंकが鼻を鳴らして腕を組むと、火野は頭を抑えて無理矢理アンの頭を下げる。

「大人のズルで君達が受けていたであろう称賛の声は無くなってしま
うが…せめて、共に平和を守る人間として…ありがとう!」

また、面構も深々と頭を下げた。

飯田、緑谷、火野は安心の笑みを浮かべると

轟とアंकは最初からそう言えと言わんばかりに

深く息を吐いていた。

思わぬ形で始まった路地裏の戦い、ヤミーの鎮圧は

こうして人知れず終わりを迎えた。

ただ…その影響もまた人知れず、彼らを蝕んでいた。

☆☆☆☆☆☆

『3人の敵ヴァイランは何れも住所・戸籍不明の男、そして虫の様な怪人が数名
…、その外見的特徴とNH Aテレビが偶然捉えた男2人、また怪人数

名の姿から先月、雄英高校を襲った「敵^{サイラン}連合」との繋がりを指摘する声も上がっています。

そしてこの保須市に散らばっていたメダルの様な物。

これは虫の怪人の源であると推測されており、その技術を応用して作り出された鴻上フアウンデーシヨンのシステムは更なる安全を約束すると宣言し、サポートアイテムの開発に勤しんでいるとの事です。

尚、「オールマイト」以降の単独犯罪者では最多の多数、犯罪史上に残すであろう敵^{サイラン}「ヒーロー殺し・ステイン」犯行の詳しい動悸など追ってお伝えします……

「……」

「……何処もかしこも、脳無は二の次かよ。」

忘れるどころか俺らの方がおまけ扱いか……」

「私のヤミーもだねえ……、鴻上の宣伝代わりみたいになってる、ウケる。」

「……その割には悔しそうじゃないな、脇真音」

死柄木等の拠点となるバーで、報道の連中が嗅ぎつけたヒーロー殺しの話題がテレビで放映されていた。

その内容はヒーロー殺しを中心とした内容で脳無、及びヤミーはそのヒーロー殺しの引き立て役となった存在となり、二の次となっていた。

新聞を開いても題名は大きく『ヒーロー殺し逮捕』、『保須での暴動、徒党組んでの犯行か』、『肅正を目論む執念』、などと殆どステインの話題と記載されており、脳無やヤミーは新聞の隅の話題となっていた。

死柄木は新聞をクシャクシャに丸め投げ捨てると意外にも悔しそうにしている脇真音を見て疑問を抱く。

すると脇真音は笑みを浮かべて大きな袋を背負う。

ジャラジャラと金属が摩擦する音はその袋の中から聞こえる。

恐らくその中にはセルメダルが大量に敷き詰められているのだろう。

「ま、私の本当の目的はセルメダルだからね。」

黒霧さん、ドクターの所へワープさせてくれるかな？」

「構いませんが…そのメダルどうされるおつもりです？」

言われた黒霧はワープゲートを開きながら聞くと

脇真音はその袋を担いで口を開く。

「成功したら教えるよ、じゃあねっ。」

そう言い残し、脇真音はワープゲートの中へと入りその場を後にした。

「…自分勝手な女だ……。何がしたいんだ…？」

「分かりません…、あくまで彼女は我々敵サイラン連合と契約で加入している身ですし、素性は聞いたことありませんね。」

「詳細不明のオーズの力を持った女…：先生が連れてきた奴だからしょうがなく一緒にいてやってるが…：本当訳わからない奴だ…：」

☆☆☆☆☆☆

「はあ…：」

「あ、火野君。話は終わったの？」

「あーうん…：とりあえずは…：」

保須総合病院のホールで麗日と電話していた緑谷が電話を切ると外から疲れた顔をしている火野がちょうど入ってきたので声を掛ける。

ヤミーに関しての話が警察に事情聴取されたらしい。

「敵ヴァイランにいたオーズ…ヤミーを生み出すなんてどんな“個性”を持っているんだろう…。」

「フン、文字通りヤミーを生み出す“個性”だろ。」

何処にいてもあの存在と出会す運命なのかもなあ。」

「あ、火野アंक君…ん？何処にいても？」

「だあっ!?な、なんでもないよ？あははっ。」

緑谷が疑問を抱くと火野からアंकが憑依して

火野アंकとなりボヤク彼に緑谷は首を傾げると

アंकを無理矢理引っ込めて火野は誤魔化す様に笑う。

前世の世界の発言はタブーなのでよくボロが出るアंकに火野は気が抜けず大きく息を吐く。

警察側には同じオーズを持つあの敵ヴァイランには

火野自身、アंकも不明で有力な情報は伝える事が出来なかったが、そのヤミーの詳細は（適当な理由で）説明してあげていた。

警察側も調査に専念すると言ってその場はやり過ごせたが

何れは知っている人達に記憶のない前世の事を話さなければならぬのかと火野は悩んでいる。

「と、取り敢えず教室に戻ろうかつ。ちょうど飯田君も診察が終わった頃だろうしっ。」

「あ、うん…そうだね」

☆☆☆☆

2人は病室へと戻ると轟、そして診察を終えた飯田が深刻な顔をして座り込んでいた。

「あ、飯田くん。今麗日さんがね…」

「緑谷、火野。飯田、今診察終わったとこなんだが」

「……………」

電話の事を教えようとするが轟が割り入り口を開く。

すると、飯田は包帯で巻かれていた腕を見つめ喋り出す。

「左手、後遺症が残るそうだ……」

その言葉を聞き2人は固まり、顔は青白くなる。

「両腕ボロボロにされたが……特に左のダメージが大きかったらしくてな。腕神経叢という箇所をやられたようだ。とは言っても手指の動かしづらさと多少の痺れくらいなものらしく、手術で神経移植すれば治る可能性もあるらしい。ヒーロー殺しを見つけた時、何も考えられなくなつた。マニユアルさんにまず伝えるべきだつた。奴は憎いが……奴の言葉は事実だつた。だから、俺が本当のヒーローになれるまで、この左手は残そうと思う」

「飯田君……」

「……………」

緑谷は何かを言い出そうとしたが、思い留まり自身の傷跡が残っている右手を見つめ口を開く。

「飯田くん、僕も……同じだ。一緒に強く……なろうね」

「……緑谷君……。ああ……、勿論だ」

拳を作る右手をほんの少し突き付け約束を誓う緑谷に

飯田はその腕を見ながら強く頷いた。

それを見ていた火野はうんうんと小さく2回頷き笑みを浮かべる。

すると、轟は何か思つたのか自身の手を見つめて口を動かす。

「なんか……わりい……」

「え？何が？」

その言葉に疑問を抱き火野が聞くと、轟は脂汗を流して口を開く。「俺が関わると……手がダメになるみてえな……感じに……なってる……呪いか？」

火野、お前もそのアंक……俺の呪いに掛かってそんな異形な手になつちまつたんじゃねえのか……？」

「えっ、そうなのっ?」「馬鹿!鵜呑みにする奴があるか!そんなわけないだろ!!」

「ほら、性格も乱暴になってるし…」

「馬鹿が!!俺は映司の『個性』だって言ってるだろが!何だ?お前意外と『天然』って言う奴の類いなのか?あア?」

「天然……?俺は天然記念物か何かなのか?」

火野アंकとなってツツコむアंकに轟は無表情で首を傾げる。

その予想外の発言に火野アंकは白目となり立ち尽くしていると飯田と緑谷がブツツと笑い出す。

「あっはははは、何を言っているんだ!」

「轟君も冗談言ったりするんだね」

「おい待て、コレは冗談なのか?」…だあ!急に出てくるなよ!…でも轟君面白い事言うんだね。」

笑い出す飯田と緑谷に火野アंकは首を傾げると火野に戻り轟にそう言う。

すると轟は増す様に脂汗を流して口を開く。

「いや、冗談じゃねえ。ハンドクラッシュャー的存在に…」

「「ハンドクラッシュャー……!!」」

思わぬ発言をしてしまう轟に、病室内は笑いに包まれていたのだった。

No. 50 動き出す者達

保須事件から2日後――：

退院した雄英生徒達は残りの日を各々の職場体験で勉強する事となり、その日は、あつという間に過ぎて現在の夕方、火野を含めた職場体験の3人は鴻上ファウンダーシヨンを出る事となり、会長室で別れの挨拶をしていた。

「皆さん、短い間でしたがお世話になりました！」

「ん、あんまし何もしてない気がするけどなあ。：保須事件の事もあつたしよ。」

兎目、人姿のアンク、後藤、そして火野が並び立ち、火野は挨拶をすると伊達は首を傾げて不服そうに答える。ヒーロー殺し、そしてヤミーと戦闘をした火野に後藤は嫌味を言うように口を開いた。

「火野：、俺達学生が無闇に敵と戦うなんて雄英生徒の風上にも置けないぞ」

「フン、そう言うお前は何をしていた？連中を見て逃げ惑っていたと聞いたが？」

「なっ?!違う!どこの情報だそれは!俺は伊達さんの指示に従って避難しただけだ!」

後藤の言葉にアンクが反応し、悪戯心の笑みで言うの後藤は感情的に声を上げる。

喧嘩っ早いアンクに火野は呆れていると兎目が目を見開いて火野に詰め寄った。

「オーズのお方オーズのお方!グッドバイビーのメダジャリバーは気に入っていただけましたか!?!」

「う、うん凄かったよ!開発部署の時は建物事斬れちゃったけど実戦は最終的に相手だけ斬れた!」

「そうでしょうそうでしょう!セルメダルの余分なエネルギーを変換させて空間断裂を抑える機能をプラスで付けたんです!会長の言葉

により、これでもうあの技をバンバン使って頂いても周りに影響は出
ませんね！」

「え？…ま、まあ…バンバンは使えないかな…。」

好奇心溢れる発目に火野は会長と言う言葉に疑問を抱きながら苦
笑して言う

ワイワイと騒ぐ4人を「まあ、あれだ。」と言って伊達は静かにさせ
ると真顔になつて火野に一言申す。

「今回の事件…、警察のお偉いさんからこつ酷く怒られたし内容も聞
かされたよ。俺は内心怒ってるんだぞ火野、アंक」

「あ…：…すみません…。」

「アंकだ！…：説教はウンザリだぞ伊達」

伊達の言葉に火野は気付き謝るとまた名前を間違えられたアंक
は怒り呆れた目で伊達に言う。だが伊達は少し息を吐いて口を開く。

「友達がピンチで駆けつけた事は人として正しい。だがな、もしもお
前等に何かあったら悲しむのは誰だ？火野」

「…親と…友達…です」

「そだろ？アंकも火野の『個性』だからって調子乗って勝手な行動
一緒にすんな。今回は無事だったから良かったものの、またこんな事
が起きたら無事じゃ済まない」

俯向く火野に対し、アंकも小さく舌打ちをして珍しく黙り込んで
いた。

元よりこれ以上反論したら余計に話が長くなると悟つたのだろう。
続けて伊達は喋り出した。

「ヒーロー殺しはプロを殺せる程の実力者だ。幸いにも手加減して生
かしてくれたんだろよ。」

…：…あ、こう言う説教地味な事は俺も嫌いなんだ。とにかく！事
は大事にならずに済んだ！生きて帰つてこれたのもお前等のその判
断も正しいっちゃ正しい！だがな、ああいう時こそ大人を頼るのが
筋つてもんだろ？

命を賭してまでも無茶な真似は今後するな！いいな!？」

「…はい！」

「フン…」

伊達は頭を掻き、言い纏めて火野とアंकに向かって声を上げ喝を入れる。

火野は自身の過ちと行動を反省して大きく返事をし、アंकは鼻を鳴らしてそっぽを向くが、その態度は彼なりの了承を得た態度だった。

伊達の言い分も終わり、数秒沈黙が続くと鴻上が勢いよく手を叩き注目を向かせる。

「さて！火野君！アंक君！そして後藤君に発目君！この職場体験を体験して君達はより経験を得ただろう！！

その経験を活かして更なる目標にチャレンジをしてくれたまえ！！

君達と言う新たな未来への希望の卵が生まれた事に盛大に祝おう

！！

ハッピーイイバアステエエエ！！！！

！！！！！！

「…な、なんか会長さんテンション高くないですか…？」

いつもよりテンションの高い鴻上を見て火野が汗を流して呟くと、後藤が息を吐いて火野の隣で囁く。

「会長の『個性』だ……。恐ろくかなり無茶な権限を出したのだろう…」

「え？『個性』？権限…？」

火野は首を傾げると里中が説明する。

「2日前の事件で会長は『個性』を使われました。

火野さんは特例としてヤミーと戦闘を行う時、我が社が開発したサポートアイテムを使える『許可』が降りましたので」

「え！？…ええ！？そうなんですか！？」

…はっ。通りでプロの人や警察の人達からあの剣について何も言われなかったのか…」

「…ハッ、それはめでたい事だなあ…」

ついでに学生でも戦える様仕向けたらどうだ？」

火野は驚くとアंकが鼻で笑いそう提案するが、伊達が首を振り口

を開いた。

「ダメダメつ、会長の『個性』は大きな事を発令すればする程テンションおかしくなっちゃうんだ。」

そんな『宣言』したら会長自身がどうなることやら……」

「ハッハッハ!!心配いらないよ伊達君!お陰で私は頗る機嫌が良いのでね!!ハッハッハッ!!」

心配する伊達に対して大いに高笑いをする鴻上だった。

鴻上光生

個性『権限発言』

個性を発動し、世に知らしめる宣言をすればたちまちその権限が世界に認知される!!

まさに権限という言葉の誕生!!

物凄い個性だがその発言する権限の内容が凄ければ凄い程自身の感情が昂り、超ハイになる!

お年寄りにとつては元気が1番だがやり過ぎ注意!!

命に関わるかもしれないぞ!!

「とにかくだ。敵さんのオーズは俺達と警察で協力して捜索に当たるが火野、万が一『ヤミー』と出会った時の防衛手段としての武器だ。会長のありがた〜い権限だが、今回の事件みたく無謀な戦闘はマジでやめろよ?」

「……はいっ!わかりましたっ」

「学生や警察の制限を関係なしにあの剣が使えるのか…、フン。少し

はマシに奴からメダル稼げそうだなあ。」

伊達が締め括り、火野は強く頷くと隣で独り言を言うアंक。

ふと、後藤は若干俯いていると兎目が詰め寄り声を掛ける。

「どうしましたか？後藤君」

「…何でもないから近寄るな、お前は男女の距離くらいのマナーを覚えろ。いつも近いんだ」

後藤はそう言って一歩後ろに下がり距離を取る。

「そんなの関係ありませんっ。人間誰しも興味を持たれば近寄りたくなる生き物なのです！」

「デリカシーを覚えろって話だ！」

また兎目は後藤に近寄ると声を上げて兎目を止める。

それを見ていた伊達は顔を上げて笑い、口を動かした。

「ハハハ！まあまあそういうなって後藤ちゃん。

兎目ちゃんは今回の火野に渡して上げたサポートアイテム中々の出来栄えだったぜ？あとバースもなー！」

「私はグッドなベイビーを作っただけですのぞ！」

兎目は頬を上げてスイカの様な形の口で笑う。

そして今度は後藤に向かって伊達は言った。

「どしたの後藤ちゃん？保須で避難して自分は戦わなくてよかったのかな、みたいな顔してるじゃないの」

「っ……そんな事……」

後藤は俯向く。伊達から見れば先程から保須事件の事を口にする度に拳を作ったりなどあからさまな態度が出ていて見え見えだった。

伊達は後藤に近付き頭に手をポンポンと置いて口を開いた。

「ま、気持ちちは分かるがお前のした事は1番正しい事だ。それに小さな女の子を救ったんだろ？」

母親からお礼の電話が来てたぜ。よくやったな、後藤ちゃん」

「……ありがとうございます」

伊達はそう言うのと小っ恥ずかしそうに後藤は俯向いたまま礼をすると、伊達は「よし！」と声を上げるとその表情は子供が笑う様な笑みを浮かべ口を開いた。

「職場体験終了祝いだ！おでん用意したから皆んなで食べようぜ！」

「おでん!? いいんですか！やった！俺おでん大好きなんですよ！」

「…本当おでん好きですね伊達さん」

「私は好きですよ？」

いつの間にかテーブルにカセットコンロの上にデカイ鍋が用意されており、ぐつぐつと煮込まれて何とも食欲を唆る匂いが漂っていた。

火野は喜ぶと後藤と発目はそう呟く。

すると、これまたいつの間にか用意していた

ケーキを載せた台車を里中が押してきて用意する。

「会長の作ったケーキもあります。デザートにどうぞ」

「おい、アイスはないのか？」

「ふむ、昨夜作ったアイスケーキを手配しよう！」

諸君!! 存分に堪能したまえ!!!

ハッピーイバアスデエ!!!

ケーキを目の前にしてアंकが言うとお決まりの口癖の様に鴻上は高らかに声を上げる。

火野達はその用意されたご馳走を有り難く食べ始めたのだった。

☆☆☆☆☆☆

翌日……

「アツハツハツハ！マジか!! マジか爆豪!!」

A組の教室では切島と瀬呂が大声で笑い爆豪に指を指す。

No.4の「ベストジーニスト」の元へ職場体験に行った爆豪は普段の爆発髪とは裏腹になんとピッチリとした8:2の髪型になっていたのだ。

「笑うな！癖ついちまつて洗っても直んねえんだ。おい笑うな！ブツ殺すぞ」

本人も相当気にしている様でその身体はプルプルと震え今にもキレそうになっていた。

「…フツ」

「蔑んだ目で見ると見るなや赤鳥野郎!!てめえらぶつ殺すぞ!」

「やってみろよ8:2坊や!!アツハハハハハハ!!ひー!!」

人の姿で火野の机の上に座り込み鼻で笑うアंकに

爆豪はキレると切島と瀬呂は同時に大爆笑をする。

3人が馬鹿にすると爆豪はその怒りが頂点に達したのかボンツ!と髪を爆発させ元に戻っていた。

一方で芦戸、耳郎、蛙吹の3人は人の姿をしたアंकを見て話していた。

「アंकって人の姿にもなれるんだねー!」

「チャライな…」

「火野君とは見た目も性格も大違いね、アंकちゃん」

順番にそう言うと言つて芦戸は話を変えて職場体験の話を持ち掛ける。

「響香ちゃんは職場体験どうだったのー?」

「え?ああウチは「デステゴロ」さんの所に行つたけど、めぼしい活躍は人質で立て籠つた敵を捕まえたくらいかなあ…」

「へー!敵退治までやったんだ!羨ましいなあ!」

「避難誘導とか後方支援で実際交戦はしなかったけどね」

「それでもすごいよー!」

「いやいや本当それくらいだよ。暇な時間は街中走り回って体力作り。ぶっちゃけ学校の授業よりしんどかった。」

耳郎は耳朶のプラグを指で回しながら苦笑して答える。

すると、今度は蛙吹が自身の体験の話をする。

「私もトレーニングとパトロールばかりだったわ。

一度隣国からの密航者を捕らえたくらい」

「それすごくない!!?」

「そうかしら?」

「いや、十分凄い体験だよそれ…」

驚く芦戸に蛙吹は首を傾げると耳郎がそう言う。

ふと、麗日が通りかかったのか蛙吹は麗日に声を掛ける。

「お茶子ちゃんはどうかだったの?この一週間」

「…とても、有意義だったよ」

麗日は白目となり気を解放している様なオーラを放ちながら喋る。

その息は白く、何かに目覚めた様な表情だった。

「目覚めたのねお茶子ちゃん」

「バトルヒーローのどこ行ったんだっけ」

蛙吹、耳郎が拳を突き出し素振りをする麗日を見てそう言う。

彼女はゴリゴリの武闘派ヒーロー『ガンヘッド』の元へ職場体験に行き、対人戦の基礎を学んできたらしい。

麗日を椅子に座って見ていた上鳴と峰田は若干引いており、上鳴は呟いた。

「たった一週間で変化すげえな…なあ、お前んところはどうかだったのよ?」

「変化?違うぜ上鳴」

上鳴の問いに峰田は指を振るとその指の爪を噛み始め震え出す。

「女つてのは…元々悪魔のような本性を隠し持ってんのさ!!」

「Mt.レディのところで何見た…?それやめろ」

ガジガジと噛みながら答える峰田に上鳴はその行為を止める。

上鳴は思い出したかの様に話題を緑谷、飯田、轟、そして火野に向かつて口を開いた。

「俺は割とチャホヤされて楽しかったけどなー。」

ま、一番変化というか大変だったのは…お前ら4人だな!」

その話を振られ集まっていた4人は一斉に振り向く。

爆豪に首根っこを掴まれていた瀬呂と切島が喋る。

「そうそうヒーロー殺し!!」

「命あって何よりだぜマジでさ」

「…心配しましたわ」

八百万も心配そうにそう言う切島が続けて口を動かす。

「U S Jの敵ヴァイランのオーズが出たんだろ? ヤミーが出現して

鴻上ファウンデーションのバースってヒーローとエンデヴァーさんが救ってくれたんだってな」

「う、うん…本当プロは凄いよ…」

「ああ、そうだな。救けられた」

切島の言葉に火野は無謀な真似をした事を思い出して俯きながら返事をする。

轟も同じく言うと言谷ははにかみながら頷く。

すると、尾白と障子が話を聞いていたのか口を開く。

「俺、ニュースとか見たけどさ。ヒーロー殺し、

ヴァイラン敵 連合とも繋がってたんだろ? もしあんな恐ろしい奴がU S Jに
来てたらと思うとゾツとするよ」

「現に連合のオーズが現れていた…。無事でよかつたぞ3人共」

2人がそう言うと言鳴がふと、軽い気持ちで言葉を発した。

「でもさあ、確かに怖えけどさ。尾白動画見た? アレ見ると一本気つ
つーか執念つーか、カツコよくね?とか思っちゃわね?」

「上鳴くん…!」

「え? あっ…飯…ワリ!」

上鳴の言葉に慌てて緑谷が止めに入る。

ステインの行動に飯田の兄がやられた事を思い出して上鳴は咄嗟
に飯田に謝罪する。

保須事件の一件以来、動画サイトで一般人が投稿したのかヒーロー
殺しステインの執念についての

動画が上げられていた。

それをメディアによって明かされた彼の思想は『英雄回帰』と呼ば
れており、主張は『ヒーローとは見返りを求めてはならない。自己犠
牲の果てに得うる称号でなければならぬ。』というものであった。

彼の言葉、そのカリスマ性に惹かれ動画は一躍ランキング1位となり、上鳴みたくかつこいい、等と言う輩も増えているみたいだった。そして、上鳴が爆弾発言をしてしまったかと火野は恐る恐る飯田を見ると、彼は後遺症の腕を見ては口を開いた。

「いや…いいさ。確かに信念の男ではあった…。」

クールだと思う人がいるのもわかる。ただ奴は、信念の果てに“粛正”という手段を選んだ。どんな考えを持つともそこだけは間違いないんだ。俺のような者をもうこれ以上出さぬ為にも!!改めてヒーローの道を俺は歩む!!」

「飯田君…!」

「おお…!かつこいいよ飯田君!」

「ビシィツと手刀を繰り出す様に腕を降り下ろし、その前向きな発言に緑谷と火野は安心して2人共拳を作って目を輝かせていた。

「俺も、負けらんねえな…!」

「フン、なら修行でも特訓でもするんだなア…!」

轟も負けずと思ったのか呟くと、火野の机からこちらにやってきたアंकが轟の発言を聞いて彼なりの助言をしていた。

そして、今だにブンブンと手を振るう飯田は大きな声を出す。

「さアそろそろ授業だ、席に着きたまえ!!」

「五月蠅い…!」

「何か…すみませんでした」

騒ぐ飯田に常闇がボヤくと上鳴が申し訳なさそうに謝っていたのだった。



同時刻―……

薄暗い場所で機材が多く並び、壁のあちこちには巨大なガラス瓶が配置されており、中の液体が怪しげに沸騰している。何処かの研究施設だろうか。

その施設の奥でカタカタとキーボードを鳴らしてモニター画面を見つめてるドクターに女の子、脇真音が声をかける。

「ドクター、完成した？」

「おお来たか、今ちようどな。…ほれ、ついでじゃ。お前さんが奪われたコアメダルも新しく作り直してやったぞい」

脇真音の存在に気付き、椅子を回転してそう言いながら振り返ると3枚のコアメダルを投げ渡す。

それは以前火野に奪われた「ムカチリ」のメダルだった。

「うわあ！ありがとうドクター！！マジ感謝だわ！」

「なあに、一度作った物なんぞ造作もない。

じゃが安易に奪られるじゃないぞ？他のコアメダルも貴重なメダルなんじゃからな…。」

それより…お前さんの要望通りの物が完成したんじゃが。」

喜ぶ脇真音にドクターはテーブルに置かれてあった物を脇真音に見せる。

ギザギザに覆われた黄色の淵に3枚の「メダル」を嵌め込めそうな突起物がある円盤状の形をしたドライバーだった。

それを手に取り確認すると脇真音は再度喜ぶ。

「おおお…よつくできてるねえ…!?流石ドクター！」

……で、肝心のあの子は…?」

脇真音はフツとその表情は真顔となりドクターに問う。

「ああ」とドクターは頷き椅子から降りると一際大きなガラス瓶の場所へと歩み寄る。

脇真音も後を追う様に近づくと、そのガラスの中には真っ裸の少年が液体に包まれていた。

それを見ていた脇真音は目を見開いて驚いているとドクターは口

を開く。

「多少セルメダルの影響か容姿が少し成長している。

最初はあるな小さな身体だったのに今では脇真音、お前さんと変わらん歳くらいに成長したんじゃないかの？」

「……………ドクター……………この子は……………弟君はもうこの中から出せるの……………？」

「ああ、出した時にコレを身体に入れてやれば実験は成功じゃ…。どれ、待ってろ」

脇真音の言葉にドクターは3枚のコアメダルを脇真音に渡す。

青色のメダル2枚に赤色のメダル1枚。絵柄は海の生き物を催した造形が施されている。

渡したドクターはその隣にあるレバーを倒す。

すると、機械が作動して中の液体が徐々に抜かれていき、ガラスの扉が開かれる。

流石に裸は良くないと思ったのかドクターはタオルを一枚持つてきて少年に纏わせ、床へと横にさせる。

脇真音は息を呑んで渡されたコアメダルを3枚、その少年の胸元に置くと、コアメダルは体内の中へとゆっくり入っていく。

ドツクン…と、まるで心臓が動き出したかの音が聞こえ、その音が聞こえた瞬間脇真音は涙を流す。

「おお…！成功じゃ…！セルメダルを投与すればヤミーの力を宿した身体へとなって目覚める事ができる…！」

フフ…！ハハハ…！セルメダル…！！なんて素晴らしいエネルギーじゃああ…！！」

両手を広げ興奮するドクターを無視して、脇真音はその少年の手を握り、ゆっくりと目を開けるのを確認し、声を掛けた。

「そうむ槍無…弟君…やっと、会えたね……………」

「……………」

少年、槍無は脇真音の顔を見ると小さく首を傾げていたのだった。

第6章 くヒーローショー！く No. 51 夢見る規格

午前の授業が終わり、午後のヒーロー基礎学の時間となったA組生徒達は学校から少し離れた特殊な運動場へと集合していた。

工業地帯を催したその場所はとても運動場とは言えない光景だった。

流石英雄高校、このお金はどこから出るのかとつくづく思う火野だった。

そんな中、授業が始まる時間が差し掛かると、何処からともなくオールマイトがヌルつとA組の前へと現れた。

「ハイ、私が来た。ってな感じでやっていくわけだけでもね。」

ハイ、ヒーロー基礎学ね！久しぶりだ少年少女！元気か!？」

「ヌルつと入ったな」

「久々なのにな」

「パターンが尽きたのかしら」

珍しくいつもより自然に現れたオールマイトに生徒達はボソボソと言うと「尽きてないぞ。無尽蔵だつーの」と強がる様な表情を浮かべ脂汗を流す。

すると緑谷がオールマイトのコスチュームを見て

興奮気味に「黄金時代の^{ゴールデンエイジ}コスだああ」と言う、オールマイトは苦笑して口を開いた。

「職場体験直後って事で今回は、遊びの要素を含めた救助訓練レースだ！」

オールマイトのその言葉に飯田は質問をするべく勢いよく拳手をする。

「救助訓練ならUSJでやるべきではないのですか!？」

「あそこは災害時の訓練になるからな。私は何て言ったかな？」

「レースですか？」

「YES！そうレース!!」

オールマイトは人差し指を立てて尋ねると、火野が答え、オールマイトは頷き説明をし出した。

「ここは運動場ガンマ。Y！複雑に入り組んだ迷路のような細道が続く密集工業地帯！5人4組に別れて1組ずつ訓練を行う！」

私がどこかで救難信号を出したら一斉にスタート！誰が1番に私を助けるかの競走だ!!勿論、建物への被害は最小にな！」

「指差すなよ」

スススと1番やりかねないと言わんばかりにオールマイトは爆豪に指を指し、爆豪は嫌がる様にそっぽを向く。

そして直ぐにオールマイトは最初の1組目のメンバーを選び、その5人はスタート地点へと移動する。

「じゃあ初めの組は位置について！」

「一二三はいっ」

オールマイトの指示に5人は返事をする。

その5人は瀬呂、芦戸、飯田、火野、緑谷だった。

因みに飯田はヒーロー殺しとの戦闘でコスチュームを修繕中とのことで体操着だ。

位置に立つ5人を他の生徒達はオザシキという名前の場所でモニター画面を見て待機をしていた。

「飯田まだ完治してないんだろ？見学すりゃいいのに…」

「クラスでも機動力良い奴が固まったな」

「うーん、強いて言うなら緑谷さんが若干不利かしら…」

待機の生徒達はモニター画面の5人を見てそう言っていると耳郎が隣に座る八百万に画面を見ながら話し掛ける。

「確かにぶつちやけアイツの評価ってまだ定まんないんだよね」

「何か成す度大怪我してますからね…」

緑谷の超パワーは戦闘では凄いが反動もまた然り。

そして今回のレースなどどう足掻いても“個性”を使えば怪我を免れない。

2人はそう思ってたそう言っていると、他の生徒達は誰が1位になるか予想し、言い合っていた。

「俺火野…あー瀬呂が一位っ」

「トップ予想な。いやいやいや、火野だろー」

「オイラは芦戸！アイツ運動神経すげえぞ」

「デクが最下位」

切島、上鳴、峰田が予想していると聞いてた爆豪は緑谷をドベと予想する。また、麗日と蛙吹も口を開いた。

「怪我のハンデがあっても飯田君な気がするなあ」

「ケロ」

機動力と言えばエンジンの飯田。

入り組んだ地帯と言えどその脚力とスピードで駆け抜ければ1位は取れると見受けられる。

そして、視点は変わり、各々が準備運動、深呼吸などをして精神を整っている中、火野はタトバの3枚のメダルを取り出しオーズドライバーに嵌め込む。

ふと、体の中に入っていたアंकが話しかけて来た。

「(おい、この授業はレースなんだろ？俺のメダルのコンボで一気に翔べば楽勝だろ)」

「(コンボは疲れるし俺はこの基本で挑みたいんだ。…これまでの戦いでコンボを使えば疲労で碌に動けない事が多かったからね…。だから基本を鍛えてコンボは最後の手段として使いたいんだ)」

「(…フン、少しは頭を働かせる様になったか。」

「どうやらお前みたいな馬鹿が学ぶと言う思考を覚えたみたいだなあ?）」

アंकがそう言うと火野は「うっさいなあ」と小さく呟き、オースキヤナーを取り出しドライバーへとスキャンした。

タカ!

トラ!

バツタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

音声が鳴り響き火野は「タトバコンボ」へと姿を変え、オーズとなりスタートの位置へと着くとオールマイトはマイクを持って大きく合図を出した。

「START!!」

5人は一斉に駆け出す。

工業地帯を地上から駆け出す者、障害物を足場に跳んで行く者など、それぞれが自身の「個性」を活かしてオールマイトの元へ向かって行く中、瀬呂はテープを伸ばして工業地帯の空中を宛ら映画のスパイダーマンの如く移動していた。

「ホラ見ろ!!こんなごちゃついたところは、上行くのが定石!」

「となると滞空性能の高い瀬呂が有利か」

オザシキから見ていた切島が立ち上がり予想していた瀬呂が一番に向かって確認し叫ぶ。

口を複製していた障子も言葉を発して瀬呂に注目していた。

そしてテープを伸ばして移動する瀬呂は調子に乗っていたのか上機嫌になって口を開く。

「ちよーっつと今回俺にうってつけ過ぎ…」

ダンッ!

「る…?」

ダンッ!!

「俺もーうってつけ過ぎる、かも!!」

瀬呂がテープを伸ばした直後、何かが背後から

跳び立つ音が聞こえ瀬呂の横を通り過ぎる者がいた。

火野映司事オーズだ。彼もまた工業地帯の空中をバツタレッグの脚力を活かし、パルクールみたぐぴよんぴよんと跳びながら移動していた。

「ほらほら見ろお！やっぱ火野が1番だ！」

「蝗みてえ」

「そりゃあ脚がバツタだからな…」

跳び回るオーズを見て上鳴が立ち上がる。

砂藤が呟くとそれにツツコみを入れる轟。

そのオーズのバツタレッグの跳躍力は解放状態にすれば最高190m。本気を出せば余裕で1位になれる事間違いないのだが、オーズは解放状態にせずにそのままの脚で跳躍してゴールへと向かっていた。「能力解放すれば楽勝…だけどその後のアクシデントやハプニングを想定しないと後々疲れて使い物にならなくなる…！今は普通で、最短に！ゴールへ辿り着く…！」

オーズはそう考えながら跳躍していく。

すると、そのオーズの隣を同じく跳躍する者がいた。

「うってつけ過ぎる！修業に！」

「っ！緑谷君っ！」

「おおお緑谷!?お前何だその動きイ!!ツソだろ!!」

オーズと同じく跳んで移動する緑谷にオーズは目を見開き、

完全に置いてかれた瀬呂は叫ぶ。

「緑谷ー!?跳んでんのー!?」

「っ！流石だ緑谷君…!!」

また、酸を使つて建物をよじ登っていた芦戸、地上を走り抜けている飯田も緑谷の行動の進化を見て驚き声を上げる。

それはまたオザシキで見えていた生徒達も同じだった。

「すごい…！ピョンピョン…何かまるで…」

「一週間で…変化ありすぎ…」

「……………また…!!」

麗日、峰田は画面を見て呟く。すると、爆豪はその緑谷の動きを見て腹を立てたのか歯を食いしばっていた。

「凄い！ね！緑谷君!!」

「う…ん!!でも！集中しない…と！すぐ切れる…!!」

跳びながらオーズは声を掛けると緑谷はその状態を維持するのに精一杯か上手く話せない状態で口を開く。

ふと、前方にボイラーのパイプ管が濡れているのを認識したオーズは緑谷に向かって声を上げる。

「緑谷君!!足場気をつけて!!」

「っ!!」

オーズの言葉に気付いた緑谷は濡れたパイプ管の存在に気付き、別のパイプへと着地して蹴り跳ぶ。

オーズも後続く様に跳躍し、再度緑谷に声を掛ける。

「跳ぶのもいいけど！足場が不安定な箇所は帰って自分に危険が伴う！から！上手く見定めて！」

「あ、ありがとう!!」

「うん…じゃあこのまま！競争と行こうかっ!!」

「っ…うんっっ!!」

緑谷は領き、互いはスピードを上げて全力で跳び出して行ったのだった。

☆☆☆☆

「フィニッシュシュー！」

オールマイトは叫び1組目の競争は無事終了した。

1位は火野の勝利となり、惜しくも終盤で足を踏み外してしまった緑谷は最下位となってしまいゴール地点の集合場所で倒れていた。

よって順位結果は火野、瀬呂、飯田、芦戸、緑谷となっていた。

1位の火野は『助けてくれてありがとう』と書かれた襷をオールマイトから貰い、かけて自分で見ていると照れくさそうにニヤけているとオールマイトが口を開いた。

「一番は火野少年だったが、皆入学時より“個性”の使い方に幅が出てきたぞ!!この調子で中間テスト、及び期末テストへ向け準備を始めてくれ!!」

「そっか、もうすぐ中間と期末も控えてるのか」

「うわあ…勉強苦手なんだよなあ」

オールマイトの言葉に緑谷は立ち上がりながら、火野は襷を取って嫌そうにそれぞれ呟いていた。

その後、残りの3組も競争が無事終了し、ヒーロー基礎学の授業が終わった。

☆☆☆

そして、生徒達はコスチュームを着替えるべく更衣室で服を着替えていた時の事だった。

「久々の授業汗かいちやった☆」

「俺、機動力課題だわ」

「情報収集で補うしかないな」

「それだと後手に回んだよな。お前や瀬呂、火野とかが羨ましいぜ」

服を着替えながら男子生徒達は反省点を述べて話し合っている最中、峰田が近くにいる緑谷に向かって手招きしながら突然叫ぶ。

「おい緑谷!!ヤベエ事が発覚した!!こっちや来い!!」

「ん?」

若干興奮気味なテンションの峰田に上着を脱いでいた緑谷は振り返ると、峰田は壁に貼られていたチラシを捲る。そこには壁に工具が何かで開けた小さな穴があった。

「見ろよこの穴、ショーシャンク!!恐らく諸先輩方が頑張ったんだろう!!隣はそうさ!わかるだろう!?女子更衣室!!」

覗きと言う行為は学生の醍醐味だと言わんばかりに興奮する峰田の言葉に砂藤、瀬呂、上鳴がピクツと反応する。

だが委員長として、真面目な飯田は止めに入る。

「峰田くんやめたまえ!! 覗きは立派なハンザイ行為だ!」

手首をスナツプさせながら飯田は止めるが、言葉だけでは通用せず峰田はチラシを剥がし、その興奮がエスカレートしていき、息は荒くなり、涎を垂らしながら覗き込もうとする。

「オイラのリトルミネタはもう立派なバンザイ行為なんだよオオ!! 八百万のヤオヨロツパイ!! 芦戸の腰つき!! 葉隠の浮かぶ下着!! 麗日のうららかボディ!! 蛙吹の意外おっぱアアア」

ドスツ…ドツクン!!

「あああああ!!!」

突如、その穴から耳郎の耳朶のプラグが伸びて峰田の左目に突き刺さる。そして自身の心臓の爆音を轟かせ峰田は悶絶し、断末魔を上げていた。

「耳郎さんのイヤホンジャック…正確さと不意打ちの凶悪コンボが強み!!」

「え、何か言った?」

「コンボで反応するな火野」

ガタガタと震えながら解説する緑谷に火野が着替えながら反応すると上鳴がツツコむ。

「目から爆音がああああああ」

「自業自得だ言わんこつちやない!」

左目を抑え叫ぶ峰田に飯田がそう言うと、火野も峰田の行動にいけないと思ったのか口を開く。

「ダメだよ峰田君」

「おう、言っただれ火野」

火野の言葉に男がする行為ではないと切島が後押しする。

一旦区切った火野は口を開くが、それは意外な発言だった。

「耳郎さんも可愛いって言ってあげないっ」

「いやそこかよ!?確かに耳郎だけ何も言わなかったけど!?」

予想外の言葉に切島は盛大にツッコみを入れていた。

一方で隣の女子更衣室では峰田の声がダダ漏れで当然の様に呆れていた。

「ありがと響香ちゃん」

「何て卑劣…!!今すぐ塞いでしましましょう!!」

頭から煙を出して言う葉隠に八百万も着替えながらそう言っていたが、耳郎はプラグを戻すとその耳を真っ赤にしながらそそくさに着替え始める。

「どうしたの響香ちゃん?」

「い、いや……………なんもない……………」

服で上半身の前を隠していた蛙吹は首を傾げて問うと耳郎は恥ずかしそうにそう小声で返していた。

☆☆☆☆

翌日のHR、相澤が教室に入ると騒いでた生徒等は一瞬で静まり返る。もはやこの光景もA組ならではの習慣となっている。

手元を持っていた資料を教卓に置くと相澤は口を開いた。

「えー…そろそろ夏休みも近いが、その前に中間、期末とテストが控えてる。だが、もう一つ控えてる事がある……………」

「テスト以外にまだあるのかよ…!?!」

「何だ…!?拷問という名の猛勉強か…!?」
生徒は騒めき出す。だが相澤は間入れずその内容を発表した。

「遊園地でヒーローショーをやるぞ」

「二」予想外でテンション上がるヤツきたああああ!!!」

予想外の発表に生徒等は感極まり声を揃えて叫ぶ。

だが相澤はギロリと睨むと生徒等は瞬時に静まり返り、相澤は内容を説明し出した。

「今回の行事はオールマイトの人気に兼ねて各地でその名を轟かせようとしている連中に協賛しようという学校からの案が出た。何でも敵を抑圧する為の行動だそう^{ヴァイラン}だ。そしてA組は遊園地で行われるヒーローショーを企画段階から入ってもらおう。」

「くああ!ヒーローショー!子供ん時見てたけどやる側なんて高校生俺らなんかそうそう出来る事じゃねえぞ!!」

「それな!テンション爆上がりだな!」

相澤の説明に切島と上鳴は盛り上がっていると飯田がピシツと手を上げ挙手をする。

「しかし先生!我々は中間と期末が控えています!勉強の時間を削がれると学業に支障を来たしてしまいますが!」

「それは俺も同意見だ。だが校長は今が好奇と言って話を逸らした。…それに、テストが終われば別の行事も控えている。お前等は若いんだからPlus Ultraの精神で乗り越えて行け」

「二」アイアイサー!!!」

相澤はそう言って寝袋を用意し出すと、活気良く生徒等は返事をしていたのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

とある都市の路地裏――……

「兄貴――兄貴――」

誰もいない路地裏に1人のフードを被った青年が声を上げて新聞を読んでいる男に駆け寄る。

「ブツが手に入りましたよ……って何見てんですか？」

「ああ？今話題の『ヒーロー殺し』の記事だよ。このステインって男はスゲエ奴だぜ全く……、そそがれるねえ……。で、何だ？」

「ブツが手に入ったんですって！もお兄貴は夢中になると聞く耳持たないんだから！」

記事に夢中になる兄貴と呼ばれる男はフードの子分らしき青年に要件を聞くと子分は怒りながら小さなケースを男に渡す。

「ほお、コレが『個性』を高めるつー薬か……」

「そうですそうです……あ、あとですねあとですね。耳寄りな情報が」「何だ？」

そのケースを男はポケットにしまい込むと、子分の青年は小声で男に話した。

「さっき通りかかった2人の奴らからチラッと聞こえたんですけど、雄英の学生共が、近くのテーマパークで手伝いか何かで来るらしいです。」

「……ほおオ」

その情報を聞いた瞬間、男はニヤリと不気味に頬を上げる。

「そいつらが来るのはいつだ？」

「えっと確か……2週間後……でしたっけ？ちょうど日曜っすっ」

自分はそう言うと言は記事をぐしやりと握り潰し、その辺へと放り投げると何か企む様な不気味な笑みを浮かべ、空を見上げて口を開いた。

「調子付いちやったお馬鹿な学生共…ヒヒっ…！いい機会だああ…！この英雄ステインに代わって、この俺様が世を肅正する…！まずは未来の世に降り立つ学生共から始末してやるかあ…！」

「いよっ、転個先輩カツコいい！」

転個と言う男性がそう言うと言分の青年はパチパチと煽って拍手をする。

「そうとなれば先ずは計画を立てるぞ、行くぞ水操すいそう」

「へいっ！」

転個に言われ、水操は後に続いた。

突如企画で行われるヒーローショー…だが、この2人の敵の登場サイランにより、A組生徒達は予想だにしない出来事が待ち受けていたのだった。

NO. 52 騒動という名の準備

「それでは、今回のヒーロー情報学の授業は私八百万と飯田さんがまとめ役として、ヒーローショーについてどういう内容にするか、そしてその役割を決めて行きますわ」

「日時は来週の日曜！午前10時から開始され、1時間程のショーらしいそうだ！皆、意見をドンドン上げて言っただけほしい!!」

HRが終了し、1時間目の授業はその内容を考えるヒーロー情報学となり、教卓の前に立つ八百万と飯田が指揮を取っていた。

今回のヒーローショーは遊園地の取締役会の人等いわく、「ショーの内容は生徒達で考えて実行していい」と言われたらしく、舞台と費用諸々は遊園地側が用意してくれるそうだ。有難い話に雄英の校長の賛成により生徒達は喜んで引き受けたのだ。

飯田がそう言う間入れず切島が手を上げ、質問をする。

「はい！休みの日にするのはいいけど終わったらどうするんですか!?!」

「ごもつともな質問に寝袋で寝ていた相澤はムクリと起き上がり口を開く。

「無論そのショーが終わったら後片付けをして昼からは自由行動で構わない。今回のショーはなるべく宣伝になる様派手に、そして被害がない程度に『個性』を使っても構わないそうさ。『個性』が使えるつつつても最小限にだ。いいな?」

「こつち見んなや……!」

「『個性』使ってもいいのか……！すげえショーになりそうだなぜ!」

相澤はそう言い終わると爆豪をジト目で睨む。

睨まれた爆豪はオールマイトと同じ感じの視線を感じて嫌そうにそっぽを向いてると、切島は拳を作りそう言っていた。

伝える事を終えた相澤は再び寝転がると生徒達は一斉に元気よく手を上げ案を述べ始めた。

「ヒーローショーつつつたらやっぱ友情、正義、勝利!!^{ワイラン}敵を倒して

ハッピーエンドが男らしくてお決まりだよな！」

「内容は王道で囚われた女かあるいは姫を助ける物語がよくないか!?!」

「災害を起こしてヒーローが助けるシチュもいいんじゃないか?その方が現実味があるし」

「摩天楼での戦いとかアツいんじゃないか!?空中戦!」

「キラメキを入れたら最高☆」

「ヒーローが1人で敵共を殲滅!!」

「緩いぞお前等!最高のショーにするなら勿論最後はお姫様と熱いデュープキス」

「やめなさい峰田ちゃん、子供が見るのよ」

「敵は元社長でその会社が倒産して悪に堕ちたとかいう設定も通だよツインね」

「父さん……!?!」

「轟、その『どうさん』じゃないぞ」

手を上げながら盛り上がる生徒達の意見を八百万は聴き逃さず黒板にへと書き込んでいく。

色んな意見が黒板に記載されて行くが何れも内容はバラバラで中々まとまらない状態になっていく最中、八百万は顎に手を当て口を開いた。

「これでは中々案がまとまりませんわ……」

「皆の意見はどれも面白味がある……、この中から選んで行くしかないか」

八百万と飯田はそう言っただけで考えると火野が席から立ち上がり黒板を見て発言した。

「ならいつその案を全部混ぜてみたらどうかかな?」

「全部……そうかつ、それなら意見もまとまって尚且つ新鮮味があつて大胆!!視聴者の観客も飽きずに最後まで楽しんでくれるかもしれない!名案だ火野君!!」

火野の言葉に飯田は手の平に拳を置いてそう言う

八百万は早速黒板の内容を全て把握して空いた枠へと書き込んで

行く。

「では、一回総まとめしてみますわね」

「結構めちやくちやに言ったけど…まとめたら凄い事になりそうだな」

八百万は書き込みながらそう言うと、上鳴が汗を流して苦笑して口を開いたのだった。

☆☆☆☆

「よし、それでは物語の内容を説明するぞ、八百万君！」

まとまった案を飯田が指揮り、八百万へと向くと

八百万は別に記載したプリントを見て読み上げた。

「では言いますわね。とある王国のお姫様が都会を夢見て王様に無理を承知で頼み込み、都会への外出許可を得て兵を連れて街へと向かいます。」

その街をお姫様は大変喜び街を見学していました。ところが、その街ではとある企業の会社で働いてた会社員の社長はお仕事でミスを犯し、会社は倒産してしまいました。

社長は借金を背負い人生はどん底へと突き落とされてしまいますわ」

「なんか無理矢理感あるな…」

八百万が説明する中、瀬呂がボソツと呟く。

切島は「まあ聞こうぜ」と言うと八百万は続けて説明し出す。

「社長は絶望し、心は闇に染まり金持ちになろうと社会不適合者…敵ライバルを仲間に入れ倒産された恨みを胸に自身も敵ライバルと化してしまいます。

お金欲しさの故に強盗を凶ろうとしますが、ヒーロー、及び警察の追手に逃走しました。すると、観光に来ていたお姫様を見つけ、人質として高層ビルへと立て籠ってしまいました。

ヒーローも警察もなす術もなく困り果てていると、そこに若きヒーローが現れましたわ。」

「お、主人公登場っ」

「この状況どうするのかしら」

若きヒーローと言う言葉に芦戸は反応し、蛙吹も首を傾げていると八百万は続けて説明する。

「無論、正面突破と言わんばかりに若きヒーローは他のヒーローと共に敵と立ち向かいますが苦戦を強いられています。」

そこで、見ているお客様に声援をお願いする様に呼び掛けます。

ヒーロー達は立ち上がり、寄せ集めの敵を倒しますが、ここでボスの敵が宙に飛んで逃げようとしています。

そこで若きヒーローが飛び出して、摩天楼を舞台に空中戦を繰り広げ、見事勝利。

最後はお姫様を助けてヒーローショーは終了ですわ。」

「「「「おおーっ」」」」

八百万は言い終わると生徒達は口を揃え、パチパチと拍手をする。

「どうなるかと思っただけど中々いいんじゃない?」

「なっ! やっぱ子供を中心に見るヒーローショーだから声援も欠かせないもんない!」

「ショーって言うより劇に近いな」

「同意見…」

「おい!? キスはー!?!」

「ないわ」

上鳴、切島がそう言うとその内容が内容なのか障子が言う腕を組みながら常闇が呟く。

すると、峰田は残念そうに声を上げると即答で蛙吹が言っていた。

「皆の反応を見る限り内容はこれで問題なさそうだな! では次の項目に移ろう!」

峰田を除いて文句無しの反応をしているクラスを見て飯田はそう言うとうと八百万が相澤が持ってきた資料を見ながら口を動かした。

「はい、それでは役割を決めていきますわ。」

役を演じるグループと後方で舞台のアシストをするグループがあります。先ず役の人数ですが、

主人公のヒーロー役が1名、プロの役が2名、警察が2名、民間人が3名、姫役が1名、その兵が3名、王様が1名、敵役が3名になりますわ。

そして残りが、ナレーションと後方のアシストに回っていただきませう。

「では！立候補のある人は挙手を!!」

八百万が説明して、飯田がビシツと手を上げながらそう言うと、クルスの生徒達は我先にと手を上げながら声を上げ出した。

「はい！俺主人公!!」

「僕こそ相応しい☆」

「空中戦なら専売特許として俺つしよ!!」

「はい！お姫様やってみたーい!」

「ウチはアシスト、音響とかあるならそつちで」

「俺に主人公やらせろやクソが!!」

「敵役……こう言う場面でしかやれないだろう。その役、俺が成す。」

「静粛にー！静粛にー!!」

次々と意見が出回り飯田は両手をブンブンと広げ静かにさせようとする。一方で八百万はこの飛び交う言葉を聴き取ったのか黒板に役の項目を書き、

彼等の返答をその役の欄に正の字で書き込んでいく。

「困りましたわ。主人公役ばかりに挙手をされて後の役が殆ど空白ですわ。」

「ふむ、皆の活躍したい気持ちは分かるが、公平に決めなければならぬいな。」

ならば誰がこの役に相応しいか皆の意見を聞こう!!」

主人公のヒーロー役に5人程の立候補が上がり、

脇役の欄が殆ど空白状態を見て八百万が困った顔をして言うと飯田が適切な判断をして生徒達にそう言うと、切島が手を上げて口を

開いた。

「敵の親玉役なら爆豪が言いと思うぜ!!」
ワイラン

「あゝあ!!」

切島の発案に当然の如く爆豪は怒りの表情で切島を睨む。

すると、後に続く様に瀬呂、上鳴が反応した。

「確かにその面は敵役ピツタシだな」

「一回演じて人生経験してみる。多分スゲエ評価上がるぜ?」

「誰がやるか!黙つつつてろ!!!」

2人の言葉にキレル爆豪だが、それを無視して切島が立ち上がり爆豪に親指を立てて口を開いた。

「お前がやるんなら俺も敵役やるよ!今こそ使えるな!『爆殺卿』!!」
ワイラン

「黙れつつつてんだろクソ髪い!!」

「では爆豪君と切島君は敵役を任命する!」
ワイラン

「勝手に話を進めんなクソメガネ!!!」

徐々にキレル爆豪に八百万と飯田もアリだなと言わんばかりに黒板に敵役の親玉を白羽の矢が立った爆豪、そして敵役の下っ端に切島を書き込んでいく。

これで敵役は爆豪、切島、そして立候補した常闇が揃ったのだ。

すると、その勢いで今度は女性グループが拳手をする。

「はい!お姫様役なんだけど、私はヤオモモがいいと思いまーす!」

「えっ!?!」

「私も!八百万さんザ・お姫様って感じがするし!」

「ねー!」

「ええっ!?!」

芦戸、麗日、葉隠がそう言って八百万は驚いていると男性陣の方からも「確かにな」、「ピツタリかもな!」などと声が聞こえていた。

多少困惑していた八百万だが落ち着きを取り戻して自ら手を上げた。

「…分かりました。この百、皆様のご期待に恥じぬ様、お姫様役、精一杯務めさせていただきますわ!」

「「おおー！！！！」」

了承した八百万に歓喜の声上がる。

その後もトントン拍子で役が決まっていき

残す所の主人公役だが、これが中々決まらない。

すると、尾白がスツと手を上げて口を開いた。

「主人公のヒーロー役、火野君が適任してると思う」

「え？俺？」

火野は驚き自身に指差して少し首を傾げると瀬呂が苦笑しながら喋る。

「あく確かになあ、昨日のレースも俺の専売特許だったのに勝ちやがったしな」

「火野が主人公なら文句無いな！オーズに『変身』できるし！」

「ヒーローがコスチュームに瞬時に姿を変えられるなんて火野くらいなもんだろ！」

「あの姿、まさに正義のヒーローそのものだ」

瀬呂を始めに上鳴、切島、障子が口を開いていくが、肝心の火野は椅子から立ち上がり両手を振って否定し出した。

「ちよ、ちよつと待って皆んな…！俺主役とか向いてないし！演技も下手だよつ、どちらかと言えばアシストの方に回りたいから…」

「でも客側はインパクトを求めるもんだろ？」

火野ならそれがピツタシだと思っただけだな」

切島が腕を組みそう言っていると、火野から提案を出してきた。

「主人公役なんだけど…、俺は緑谷君を推薦したいんだ」

「えっ!?!ええ!?!ぼ、僕っ!?!」

「あゝあア!!?!ふざけんな！何でこのクソナードなんだよ三色野郎!!?!」

「火野君、理由を聞かせてくれないか？」

まさかの緑谷を選んだ火野に爆豪はキレて立ち上がり火野に向かって声を荒げると、教卓から飯田が真剣な表情で火野に問い、口を開く。

「この主人公の特徴って若きヒーローなんだよね？緑谷君なら初々しい感じがするし、性格も真っ直ぐで努力家だし、俺なんかよりずっと適任だと思うんだ。」

麗日さんが八百万さんに言ってた様に、緑谷君こそザ・主人公って感じがするんだよね…」

「火野君…で、でも僕なんか…」

「俺も、緑谷が向いてると思う」

「轟君!？」

火野がそう言うのと緑谷は否定しようとする。

すると、珍しく轟が賛同して口を開き始める。

「緑谷は人を動かす言葉の動力がある…。俺もそれで動かされた…。演技でもそれが活かせるんじゃないかって、そんな気がするんだ。だから俺も緑谷が主人公役が相応しいと思う」

ポツポツと喋る轟の言葉に生徒達は徐々に口を開いていく。

「言われてみれば、昨日のレースも凄かったもんな。」

「空中戦もあの機動力なら凄いアクションができるんじゃないか？」

「俺、緑谷主人公役でいいと思う!!」

「私も賛成ー!」

「しゃーねーな、ここは譲ってやるよ」

賛同していく生徒達に火野と轟は顔を合わせてほくそ笑むと緑谷は感極まって若干涙ぐんでいた。

「皆……」

「ツケ!!」

「…よし！それでは緑谷君を主人公役に抜擢する!!」

異論のある方はいないな!？」

「…ないです!!」

不機嫌そうに爆豪はそっぽを向いてると、飯田は頬を上げて皆に意見を問うと、クラスの全員は声を揃えてそう答えたのだった。

☆★☆☆

授業が残り僅かと時間が迫る中、話は徐々に進んで行き、役とアシストの空欄が埋まり、現時点ではこうだった。

役側

主人公ヒーロー 『緑谷』

プロヒーロー1 『瀬呂』

プロヒーロー2 『砂藤』

お姫様 『八百万』

兵士その1 『飯田』

兵士その2 『尾白』

ヴィラン兵士その3 『峰田』

ヴィラン敵親玉 『爆豪』

ヴィラン敵その1 『切島』

ヴィラン敵その2 『常闇』

民間人その1 『麗日』

民間人その2 『青山』

民間人その3 『葉隠』

王様 『火野』

アシスト側

音響 『耳郎』

司会のお姉さん 『芦戸』

その他 『上鳴』 『障子』 『轟』 『火野』 『峰田』 『蛙吹』

王様役に選ばれた火野は出番は最初だけとの事で後はアシストに回るとの事。

そして兵役その3の峰田も最初の城のシーンのみの役だけなので彼もアシストに回るそうだ。

峰田は最後まで王様役をやりたかったみたいだが緑谷が選ばれた途端、すんなりと役を譲っていた。

だがその顔は何か企みがある様な笑みを浮かべていた事を生徒達は誰も知らなかった。

役割が決まったのを確認した飯田は教卓に手を置き、皆に向かって口を開いた。

「では、今週からヒーロー情報学での授業の1時間はヒーローショーの練習を行う！皆！最高のヒーローショーにするべく練習に励んで、必ず成功させるぞ!!」

「「おおーoooooooo!!」」

一致団結となり、全員の意気込みは教室内を熱く気合いを入れたのだった。

☆☆☆☆☆☆

放課後にてー……

「うあああ…緊張するう…!!ばばば僕が主人公役をやるなんて…!!

人人人人ヒトヒトヒト……」

「デク君めつちや掌に人の字書くやん」

「緊張するのも当然だ。今週を含めて後2週間で台詞を憶えてして何十、いや、何百人程のお客様達がご覧になるのだからな！」

下校中、仲良し3人グループに混ざった火野を含め、4人で帰っている途中、ガチガチに緊張している緑谷は歩きながら掌に人の字を夢中で書き込んでいく。

その姿を見て麗日は呟くと、飯田は手刀する素振りですう言い放つ。

ふと、麗日は火野に心配そうに声を掛けてきた。

「火野君大丈夫？今回のヒーローショーの物語を書く代役任されてるけど……」

「ああ、大丈夫だよ。コミックとか小説とか結構読むし、物語を書くのはちょっと楽しみでもあるんだ。皆が喜べる作品に仕上げないといけないから本気で頑張らないと……！」

「いい心掛けだ火野君！だが、ヒーローショーが終われば直ぐに中間試験！それが終わった頃にはもう期末試験だ！勉強共に両立させないと本来の学生の基として影響が出てしまうぞ!!」

「真面目過ぎるよ飯田君」

台本を作る重大な仕事を任された火野はノートを手に持って気合いを入れてると、飯田はテストの話題を出して拳を突き上げそう言っている、麗日はジト目で嫌そうに呟く。

すると、緊張が治ったのか緑谷は火野に声を掛けてきた。

「火野君、本当に主役君じゃなくてよかったの？」

「え？」

突然の言葉に火野はキョトンとした顔で見ると緑谷は頭を掻きながら口を開いた。

「い、いやほら、火野君は子供が憧れそうな『個性』だし、かっちゃんにも嫌がられてたし……」

「僕なんかより凄い注目が浴びそうな気がして……」

「何言ってるのさ緑谷君、授業の時にも言っただけ俺は緑谷君が凄い

から推薦したんだよ？」

「そうだよデク君っ。向いてるしデク君ならきつと大丈夫！」

「そ、そうかな……」

今変更なんて言えた物ではないと言わんばかりに火野はそう言う
うと麗日も後押しする。

そして、飯田も緑谷の肩に手を置くと口を開いた。

「緑谷君、君の努力とその行動はいつも驚かされてばかりだ。……そしてそれに俺は救われた。君のその活躍をショーとして赴く事を、俺は楽しみにしているぞ」

「い、飯田君……うん、僕頑張るよっ！」

真剣な表情から笑顔になってそう言う緑谷は覚悟を決めたのか強く頷く。すると、麗日は決意を固めた緑谷を見て拳を突き上げる。

「よおーし！今日は私！自分に奮発！！駅前に来た『サーティーツー』皆で食べに行こー！」

「サーティーツーってあのよりどりみどりの種類があるアイスクリーム屋さんの事っ？僕も気になってたんだーっ」

「ふむ、一時の休息も大事だな。よし！俺も行こう！」

麗日の提案に喜ぶ緑谷、顎に手を置く飯田は賛同する。

勿論火野も行くと言い掛けたが、それよりも早く反応する者が火野の身体を乗っ取り表に顔を出してニヤリと笑った。

「フン。緑谷、奇遇だなあ。俺も気になってた所だ。この馬鹿が買い食いは嫌いだのと抜かしていたが……。麗日、お前の発案でかしたぞ」

「うわっ、火野アंक君っ……あ、ありがとう？」

火野アंकは麗日を褒めると麗日は驚きながらもお礼を言いながら首を傾げる。

いきなり出て来たアंकを火野は抑えて表に出ると、上機嫌そうに口を開いた。

「だあ……い……よ、よし！俺も行くよ！俺も気になってた所だし……」フン！善は急げだ。早く行くぞ映司っ「……だあ！分かったから大人しくしてろよ！」待てるか！こっちはいつもお前の授業中は我慢してるん

だ！さっさと行くぞ！」

「二人芸や！」ブフウ！」

「側から見ると凄い光景だね…ハハハッ」

「余程アイスが食べたいのだな火野アंक君！」

火野、そして火野アंकと交互に感情が入れ替わり、1人で二重人格を演じてる雰囲気を見せる火野を見て、3人は面白そうに笑っていたのだった。

No. 53 練習、そして出陣!

翌日、ヒーローショーをする事になった1年A組の一同は役割を決めてヒーロー情報学の授業で体育館αへと集まり、体操服に着替えて練習と計画を立てていたのだった。

「今回のヒーロー情報学の授業から本格的にそれぞれの役をこの体育館αで練習し、こなして行く。」

演劇チームは壇上で、アシストのチームは今回お越し頂いたスタッフの機動活美きどうかつみさんが来ている。失礼のない様すっかりと教わるように」

整列したA組の前に相澤がそう言うと、隣に控えていた赤と青のツートンカラーの作業着姿の上に髪のカラーも赤と青の2色に分けられたツートンカラーの女性が一步前出て口を開いた。

「皆さんー!こんにちはー!!」

「!」

「うんうん!元気があって大変よろしいね!!」

さて、ヒーローショーのお姉さんを努めるのは誰かな?」

「はい!私です!」

A組は大きな声で挨拶をすると、頷きながら機動は司会役の子をキョロキョロと探している。

すると、芦戸は直ぐに手を上げると機動は笑顔で喋り出した。

「君が司会役だね!あ、自己紹介が遅れたけど、私はヒーローショーの事務所から代理としてやってきた機動活美!」

ヒーローショーの機械のサポートと、司会役を務めてる人だからよろしくね!

さて!今私が大きな声で挨拶をしたのはショーで見に来るお客様達は基本家族連れ、子供が多いんだよね!

基本の挨拶は子供の心を掴める様に明るく元気に、そして子供目線で挨拶をする事!そうすればこのショーは面白いんだと子供の心を最初から驚掴みできるからね!司会役の子は特に覚える様にね!」

「なるほどー了解でーす！」

機動が人差し指を立てながらそう言うのと芦戸はコクコクと頷きながら理解をする。

「さてー今回のヒーローショーはぶっちゃけ君達がほぼメインで行われる行事だからね！」

私等大人は機材やステージ、もろもろ大人事情の費用だけ用意して、肝心のショーは君達でこなしていくね！

夢を見させて子供達に希望を持たせてあげようね!!」

「「「はーいっ!!」」」

機動はそう言い終えると生徒達は元気よく返事をしたのだった。

☆☆☆☆

「火野君！台本いい感じね、斬新！これなら子供も大人も楽しめそうね！」

「本当ですかっ、ありがとうございます！」

「敵が襲う、ヒーローが来る、ピンチになる！声援でヒーロー復活！勝利！の王道が基本だからね！君のシナリオはまあまあそれに因るから問題ないね！後は練習あるのみ！短い期間だけど頑張つてショーを完成させようね！」

「はいっ！」

劇の役チームは体育館の壇上へと集まり機動は早速火野の書き上げた台本を読むと、何も指摘されずオツケーをもらい機動は台本を火野に返す。

すると、機動はニコニコしながら火野を含めた演劇チーム等に声を掛けた。

「それじゃあ私はちよくちよく見に来るけど本題のアシストの方へ回

るからね！」

「え!?俺等だけでやるんすか!?!」

「流石に経験がないメンツでやるってなると素人のショーになりそうなんだけど…」

機動がそう言うのと演劇チームは「えっ!」と揃えて声を出し、間入れず切島、瀬呂が不安そうに言うのと機動は人差し指を降りながら口を開いた。

「ノンノン、大丈夫ね!この学校には色んな人生経験の『教師』達がいるんだよね!…まあ、相澤先生は即答で断られちゃったけど…」

「俺はショーとか興味ないので」

機動がそう言いながらチラリと相澤の方へと目線を向くと相澤は軽く息を吐き、上の空の目線で答える。

すると、演劇チームから葉隠が見えない身体で手を挙げているのだろう肩が上がり、質問していた。

「他の教師が見てくれるんですか!?!」

質問に機動は親指を立てると、何処からともなく誰もが聞いて来た声が体育館に轟き、現れる。

「わー!たー!しー!がー!、監督しにそそくさと来た!!!」

「!!!オールマイト!!!」

壇上の舞台裏のカーテンから「H A H A H A!」の文字を頭上に出しながらひよっこりと現れたのはマッスルフォームのオールマイトだった。

機動はパチパチと拍手でお出迎えをした後、軽く咳払いをして説明し出す。

「英雄No.1ヒーローオールマイト!あのお方は数々のヒーローショーを見てきたし実際にやってきた経験があるね!今回のショーも彼の協賛の元で企画された行事だから私なんかよりもよっぽど上手く教えれそうだと思うたんだよね!」

「「「おおー!!」」」

「オールマイトはそんな経験もしてたのかよ!」

「マジで今回のショーベストグランプリ並みの成果になりそうじゃね!?!」

「…恐悦至極」

演劇チームはオールマイトが監督をやると聞いた途端感極まり声を上げると、峰田、切島、常闇と口を開いていた。

オールマイトは火野から台本を「ちよつと見せて」と言っ借りると内容をパラパラとめくり、軽く咳払いをして口を開く。

「さて!内容は大体把握できた!皆も知ってるが今回のショーは私の協賛の元に企画されたヒーローショー!」

君達は今回のヒーローショーで子供達に夢を見せてあげる大事なショーだ!私が経験して来た事をしっかりとレッスンとして叩き込んであげるから、君達もP u l s U l t r aで気合いを入れてショーを完成させよう!!」

オールマイトが拳を突き上げそう言うと生徒達はおー!と声を上げて同じ様に拳を突き上げた。

「それじゃ、私はアシストチームの方へ行くね!火野君と峰田君も目処がついたらこつちにくるんだよね!」

「分かりました!」

「もろチンだぜ!」

2人は返事をし、機動はアシストチームがいる方へと行き、その場を後にした。

格して、A組達は、機動とオールマイトの指導により、ヒーローショーの練習を始めたのだった。

☆☆☆☆☆☆

演劇チームでは……

「……という感じでショーは無事終了になります！じゃあまずは芦戸さんのナレーションから子供達に挨拶をする感じで入ってもらって、そこから物語は始まりますっ。」

「OK！皆も大体物語の内容は把握出来たかな!?それじゃあ早速、芦戸少女の挨拶から初めて行こう！」

他の皆も指定の位置につくように！」

火野が粗方の内容を説明し、序盤である王国シーンの生徒等と芦戸に声を掛ける。

オールマイトは皆の手元に配られたショーの台紙を確認し、練習を始めんとそう言うのと、芦戸は両手を降りながら指定位置に移動し、口を開いた。

「あーなんかドキドキするー！」

「ね！劇なんて幼稚園以来だよ！」

「わ、私は初めてです……！深呼吸をして明鏡止水の心で取り組まなくては……！」

「明鏡止水……」

葉隠、八百万がそう言うのと明鏡止水と言う言葉に常闇がピクリと反応し、呟いていた。

すると、オールマイトが何処から用意したのかクラツパーアクションボード、〃カチンコ〃を手に取り監督気分で口を動かす。

「役者はそのシーンの本物になりきる者！各々の指名されたその役に本当の出来事なんだとなりきりその場面場面を演じきる様に！」

……まあ今日は初日だからね。まずは台詞を読みながらどういう風に物語が動くかその流れを覚えよう！」

それじゃあじゃあ行ってみようか!!よい!……Action!!
オールマイトはそう言つてカチンコを鳴らす。
すると、芦戸は早速台詞の台紙を見ながら口を開いた。

「んん……皆さーん!こんにちはー!!今日はこの『フューチャーパーク』に雄英高校から来た素敵なヒーロー達が皆の為に来てくれたよー!素敵なショーをお披露してくれるそうだから、皆楽しんで見ていってねー!!それじゃあ、始まりまーす!拍手ー!!」

「おお、流石芦戸だな」
「掴みバツチリじゃん!」

笑顔で元気よく司会をする芦戸を見て待機の砂藤、瀬呂が評価して思わず拍手を送っていると、オールマイトもうんうんと頷いて親指を立てていた。

すると、芦戸は後方に何歩か下がると最初の王国シーンから始まり、位置に着いていた八百万が台紙と睨めっこしながら台詞を何回も見直していると芦戸が続けて司会をし始める。

「えーつと……とある国のお姫様は裕福な暮らしをしていましたが、都会に憧れ、毎日窓の外でぼんやりと眺めていました!」

芦戸がそう言い終わると次の台詞は八百万となっており、あたふたしながら八百万は台詞を指でなぞり、口を開いた。

「わ、私ですわね……えつと……ため息ため息!!は、はあ……、お城の生活も……た、退屈ですわね……!そ、そうだ……!お、お父様に許可を……い、頂いて都会に行ってみましょう……!そ、そうと決まれば、さっ、早速聞いてみますわ……!!」

緊張でしどろもどろになる八百万は何か台詞を言い終わると、用意していた椅子に座っている王様役（火野）の前へと移動する。

その横には兵役の1（飯田）2（尾白）3（峰田）が台紙と睨めっこしながら立っていた。

そして、八百万はぎこちなく台詞を読み始めた。

「お、お、お父様……!!私は前から……都会に憧れており、ず、ずっと悩んで……いましたわ……!」

どうか…！この私に…と、都会に行く許可をお与えください…ましゅ!!？」

「噛んだな」

「見事に噛んだね」

盛大に噛んでしまった八百万は顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしている所を待機していた切島、麗日がそう呟いていると、王様役の火野は台紙を見ながら咳払いをして、台詞を読み始めた。

「んんっ、モモよ…、今日はお前の誕生日だったな？良かろう、今回は特別に外出の許可を出す！」

「なっ!? いけませんぞ王様！ 姫をあんな物騒な都会などに行かせる等言語道断！ 王が許されてもこの私が許しませんぞ！」

「そ、そうですね王様！ 姫様はまだ若いのですぞ!?!」

王様役の火野がそう言うのと兵のその2、その3役の飯田、峰田が台詞を発言する。

すると、待機中の緑谷、麗日がその演技の出来に感心し、驚いていた。

「凄い…！火野君達ちゃんと役に成り切ってる！」

「うんっ…！ （飯田君演技得意なんか…？ 戦闘訓練の時も敵に成り切ってたし…）」

麗日はそう思っていると、様になっている王様役の火野が俺顎に手を置くと、提案を申し出た。

「ふむ、ならば兵を2人護衛として同行させよう。それならば問題はあるまいな？」

「…分かりました、このテンヤ！ 姫を守るべくその任務命を賭けて務めさせて頂きます！」

「えっと…、私も同行します！」

飯田がそう言うのと次の台詞は尾白となっており、

台紙を読みながら尾白は読み上げそう言っていた。

すると、火野は椅子から立ち上がり、八百万に向かって声を上げた。

「よし、モモよ！ 明日の朝城を出て都会を見て堪能して来るといい！ 世を知る経験にもなるだろう！」

だがくれぐれも人様に迷惑をかけぬ事だ…よいな？」

「あ…、は、はい！ありがとうございます…お、お父様！」

「カー…ット!! OK!! 中々良い出だしだ皆！」

八百万が言い終わるとオールマイトはカチンコを鳴らして声を上げる。八百万は気が抜けたのか大きく息を吐いているとオールマイトが声をかける。

「八百万少女！初めてで緊張しているだろう、だが本番となればそれは観客の人達にいいショーを見せる事ができない！リラックスも大事だぞ！」

「申し訳ございません…、緊張もありますが不慣れな言葉を使ってしまうと上手く喋れなくて…」

「(八百万っぽい台詞だったけどな…)」

「(ヤオモモっぽい台詞だったけど…)」

オールマイトの言葉に八百万は申し訳なさそうな表情でそう言う。と切島と芦戸は作り笑顔でそう思っていた。

すると、火野が八百万に近寄り謝りながら口を開いた。

「ご、ごめん八百万さんっ、俺なりに考えた台詞何だけど難しかったかな…？」

「い、いえ！火野さんのせいではございません！私の恥じらいが原因ですわっ。この役、百は何としても成功してみせます！」

火野の困った表情を見て八百万は我に返り、そう言い聞かせていると、切島、麗日、葉隠が八百万に励ましの声を掛けていた。

「おおっ、その意気だぜ八百万っ！」

「百ちゃん大丈夫だよ！私も劇初心者だから！」

「まだ時間はあるから、本番までには成功させようね！ヤオモモっ！」
「皆様…!!はいっ！」

失態で先程まで落ち込んでいた八百万だが3人の励ましによりそ

の表情は徐々に明るなると大きく頷いた。

その中、尾白は飯田と峰田の演技に感心して声を掛けていた。

「凄いね、2人共。」

「日頃イメーজトレーニングをしているからな！だが俺はまだまだだ。完璧なショーにする為、己にもっと厳しく行かなければ！」

「オイラも脳内の想像力豊かだからなあ！こんなもん朝飯前よ！」

「卑猥な妄想の間違いじゃね…？」

飯田、峰田がそう言うと言うと隣にいた瀬呂が峰田に対してボソツとツツコみを入れてみると、オールマイトは手を叩き皆の注目を集める。

「さあ！まだまだ序盤だぜ!?こっからは八百万少女が街を見学するシーンだよね！どんどん行ってみようか！」

「…はいつ！」「…」

「…ケツ！」

皆は返事をする、出番の役達は壇上に上がり準備をし始めていたのだが…ふと、爆豪は悪態を吐くような素振りを隅で見せていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

一方、アシストチーム

「凄いわ、こんなに機材があるのね」

「そ！アシストはその場面場面に使う機材を素早く設置してそのシー

ンに行われるシーンのベストなタイミングで起動！例えば、ヒーローが登場する時は煙幕を炊いてやればよりカッコいい登場シーンへとなるんだよね！」

機動から配られたカタログをアシスト側の生徒達は見ていると蛙吹が顎に人差し指を置いてそう呟いていると機動は笑顔で説明する。

カタログには種類が豊富で細かな機材が多く記載されており、あまり興味なさそうな生徒達も釘付けになっていた。

「煙幕か：俺の左側の炎を調整すれば出せそうだな…」

「ナイスな案だね轟君！今回のヒーローショーは“個性”使用可能！君達の“個性”を使えば機材を使わなくて済む！まあ、所謂経費削減ね！」

「大人の諸事情…」

轟が左腕を見てそう言うのと機動は親指を立てて言い返す。

すると、障子が珍しく小声でツツコみを入れてみると、上鳴が自分の“個性”をアピールした。

「経費削減なら俺の電気使えるんじゃない!?エコ電気！」

「発電か何かの“個性”持ちかい!?それは凄く心強いね！」

「意外と節約家なのね機動さん」

喜ぶ機動を見て蛙吹がそう言う。

「はい、ウチは音響係を希望したんですけど、この中から選べるんですか?」

耳郎が手を上げ質問をすると機動は振り返り笑顔で答えた。

「あ、音響はこちらで用意されてる最新式の機材使うね！耳郎さん希望したって事は経験ある感じかな?」

「まあ、両親の手伝いで少し…」

「おお！経験アリは有望だね！そのままウチで働きなよね！」

「ええっ!？」

ぐいぐいと詰め寄る機動に驚く耳郎に対して「冗談冗談！」と機動は笑いながらそう言うのと耳郎はホッと息を吐いて胸を撫で下ろす。

「んじやまあ！今日は説明だけだけど次の授業は本物のステージを活

躍した演劇用の移動大型トラックを持ってくるね！機材はショーで使われる物とほぼ同じやつだからそれでキツチリ覚えてもらうね！」

「すげえ！ヒーローショーする為のトラックとかあんのかよ!？」

「モチのロン！うちのヒーローショーは意外とビツクな会社ね！あの鴻上ファンデーションもバックに協力してくれているから色々と凄いいんだよね！」

「そんな大企業がバックにいるのに節約家なのね」

上鳴が興奮してそう言うとき高らかに機動はえっへんとポーズを構えて笑っているが、間入れず蛙吹は呟いていた。

格して、A組のクラスはそれぞれの役割を遂行し、事は順調に運んで行った…。

そして日はあつという間に立ち、いよいよ…A組全員によるヒーローショーの当日が始まろうとしていた。

No. 54 唸れ、波瀾のヒーローショー!

ヒーローショーを行うことになったA組はショーのアシスタントをしている機動活美、そしてオールマイトの指導を得て着々と生徒達は練習に励み、皆んなで考えたヒーローショーを完成させて行つた。

そしてあつという間に2週間が経ち、現在A組の雄英生達はいよいよ最近出来た最先端の技術を駆使して完成した遊園地、〃フューチャーパーク〃へと訪れていたのだった。

「うっおおおっ!!遊園地!!」

「最先端技術!!」

「おしゃれー!!」

「近未来!!」

「まさに輝いているね☆」

バスに乗って到着したA組生徒達は降りて移動するとそのフューチャーパークの門を見て興奮する生徒一行。

〃ようこそ未来のテーマパークへ!〃と書かれておりそれを見ていた生徒等は感動していた。

時刻は午前8時、遊びに来店するお客もまだ来ていない時間の中、生徒達は集まっていた。

元より学生、10代にとっては遊園地はまだまだ魅力溢れる夢の国だからだろう。

すると、相澤の目付きが変わり髪の毛がふわりと上がると生徒等に向かつて口を開いた。

「おい、はしやぐな」

相澤の言葉に生徒達は若干肩を震わせ一気に静まり返る。

確認した相澤は上がっていた髪の毛を降ろすと説明し出す。

「よし…今日は予定通りヒーローショーを午前の10時から予定では1時間で行ってもらおう。今まで練習して来た経験を活かして市民の皆様に見てもらい、存分に楽しませるように。いいな?」

「はい先生!!午後からは解散でいいんすか!？」

切島がバツと手を伸ばしそう声を上げて質問をすると他の生徒達も目を輝かせて相澤を見る。

相澤はやれやれと言わんばかりに軽く息を吐いてこう言った。

「…前にも言ったが、午後からは解散：帰るなり遊ぶなり、迷惑行動しなければ好きにして構わん」

「「「おっしやらああア!!」」」」

相澤の言葉に生徒達のテンションは頂点に達して声を荒げ、喜ぶ。

今日の日付は日曜日、シヨアの練習ともうすぐ来るテストを控えて勉強を両立して過ごした生徒達も羽を伸ばしたいのだろう。

だがそれは相澤の威圧で一瞬にして再度静まり返り、相澤はチラシを取り出しチェックする。

そのチラシとはこのフューチャーパークで行われるヒーローシヨアのデザインが施された内容のチラシだった。

「じゃあ今からヒーローシヨアのステージに行くぞ。このテーマパークの取締役のお偉いさんが待っている。挨拶はしっかりしてくれぐれも粗相のないようにな」

相澤がそう言うのと生徒等は「はい!」と大きく返事をしてぞろぞろと入園して行く。

勿論、フューチャーパークの入場料は無料で入れる手配をしてきている為、入園のゲートを通る際、受付の女性が笑顔で「おはようございます」と挨拶をし、生徒達は次々と挨拶を交わして行く。

ぞろぞろと移動する最中、シヨアを緊張して精神を整えようとする者もあり、また、その終わった後の遊園地を楽しもうとする者もいた。「お茶子ちゃん、三奈ちゃん!どのアトラクションに乗るか決めたい?」

「色々乗ってみたいなー!でも一番行きたいのはこのスイーツコーナー!!どれも美味しそう!」

「私は全部乗るよー!目指せフューチャーパークアトラクション制覇

！」

葉隠がフューチャーパークのパンフレットを見ながら麗日に声を掛けると麗日は涎を垂らしながら満面の笑みを浮かべてそう答えると芦戸も気合いを入れて嬉しそうに声を上げた。

開園したばかりのこの遊園地の飲食店は多くのスポンサーが協力してくれてるのか飲食店も名のある有名な店が豊富だった。中でもスイーツ店は女性の心を掴むかの様に種類も多く、そして値段も格安で提供しているそう。そんな話を聞いて雄英の女子達も黙ってはいない様だ。

ワイワイと食べ物の話題で盛り上がる最中、後方を歩く火野と轟はある飲食店をオススメとして勧めていた。

「轟君、この飲食店ざる蕎麦があるみたいだよ」

「本当か…？食べてみてえな…」

「じゃあ終わったなら食べに行こうよっ、前に約束したしね」

「ああ…そうだな。だがその前にヒーローショーを無事こなさねえとな…」

轟はそう言って拳を作る。この2週間で轟もアシストとして機動に色々教わり、彼なりににも努力してきたそう。元より、このショーはある意味楽しみにしていたのだろう。轟の意気込みの言葉には火野にとつてそう感じていた。

「大丈夫！あれだけ練習したんだし絶対成功するよ！」

「…ああ」

火野の言葉に轟は頷いていると、ふと、火野の中からアंकが話しかけてくる。

「（おい映司、蕎麦なんかよりアイスが食べたい。まずはアイスのお店だ）」

「あくわかったわかった。ざる蕎麦食べ終わったら行くよ」

「…アंकか…？なんなら先にアイス食べてもいいぞ？」

アंकの声に火野が反応して独り言の様に呟くと轟は察してそう声を掛けてくるが火野は両手を振り断っていた。

「いいよいいよ気を使わなくてっ。それにアイスってデザートだろ？」

スイーツコーナー行つてこっちの店来てたら時間帶的に混みそうだからっ」

「そうか…？わりの。なんか、氣い使わせてしまったな…」

「いやいや…（轟の言う通りだつ、ここは先にアイ）まあ！とにかく今はヒーローショー！絶対に成功させよう！」

「…そうだな」

火野の言葉に体の中から割入ろうと声を出すアंकを無視して火野はそう言うと言は軽く頬を上げ笑いながらそう答えたのだつた。

☆☆☆☆☆☆

「皆さん、今日はフューチャーパークに起こし頂き有難う御座います。私がこの遊園地を取り仕切る、代表取締役の丸山^{まるやまたぬき}大主樹でございます。

本日の件、ヒーローショーのご協力、重ねて誠に有難う御座います。」

「（狸じゃん…）」

「（狸だ…）」

「（大物つて皆んな動物系なのかな…？）」

ステージの裏方、控え室に集まった生徒達の前に現れた代表の丸山は堅苦しく挨拶をする。

その姿は言つてしまえば本当の狸の様な顔に、身長も峰田と同じくらしいの背丈で尻尾すら生えている。

上鳴、耳郎、そして火野はそう思いながらお辞儀をする。

恐らく他の皆もそう思っているだろう。

すると、一礼して代表の相澤が口を開いた。

「本日は御招きして頂きありがとうございます。」

「こちらもお客の皆様を楽しませる様、精一杯努めさせて頂くので今日はよろしくお願いします」

「！！！！」

相澤がいい終わると生徒達も空気を読み一同は声を上げお辞儀をする。丸山はうんうんと和かに頷き、口を動かす。

「子供は元気が一番ですね。あゝ、そろそろ開園のお時間になりますので、皆様は準備してください。お越しに来られるお客様達をどうか、来て良かったと笑顔で帰られる様、一緒に頑張ってくださいませよう」

「では、専用のコスチュームは演じる皆さんの名前が記載されてこちらに用意しています！更衣室は控え室を出て隣の部屋で男子女子と分かれてありますのでご試着の方を！

アシストに回られる方も動きやすい服に着替えて来る様をお願いします！その後は役者の機動さんがこられますのでこの部屋で待機しててください！」

腕時計を見ながら丸山はそう言うのと、後に続き社員の男性がそう説明する。

各自は返事をする和気藹々とショーによる準備に取り掛かったのだった。

☆☆☆☆

― 男子控え室 ―

「何で俺が敵役何だよ!!!」

「本番間近になって何言い出してんだ爆豪。敵役は決まった事だろ？
いい加減諦めろよ」

「…適役」

「うまいこと言ってるじゃねー!!!」

ショーを行う為のコスチュームに着替えた演劇役のグループ達。
その中、黒いマントを纏い髑髏を催したショルダーや破れた黒の服
装。まさしく敵サイランと言える格好をした爆豪は突然キレて声を荒げる。

普段のヒーローコスチュームとあまり変わらない（鎖や棘などが装
着された）切島は呆れながら宥めると、これまた普段のコスチューム
と変わらない黒いマント全身に羽織っている常闇がボソツと呟くと
キレながら爆豪はツツコみを入れていた。

この2週間の練習中も爆豪は才能故か役は割とこなしていたが敵
役の肩書きが気に食わなく文句をずっと垂れ流していた。そして主
人公が緑谷だったのも気に入らないのかアクションシーンは本気で
叩きのめそうとしてきたりとかかなり危なかつかしい練習になってい
たが、1番友好的な切島に宥められながらやってきたので何とかこの
本番までやってきたのだ。

「緑谷君カッコいいねヒーローコスチューム!」

「うむ!物語の主人公らしきがあつて尚且つ普段のコスチュームとは
違いどこか新鮮味があるな!」

「そ、そうかな…?飯田君も似合ってるし、火野君も凄いよっ、本当王
様って感じで!」

「緑谷の格好オールマイトのパチモンみてえ」

「言うな言うな。でもお前等羨ましいよ、俺等いつものコスチューム
だからよ」

対して火野は最初の出番だけとは言えどかなり派手な貴族の王様
の格好をしており、カラーも赤と黄色の派手な色のコスプレ感満載な
格好だった。

飯田も外国の甲冑兵士を催した格好で様になっている。

緑谷もオールマイトの様な奇抜なカラーリングのコスチュームで青いマントを羽織っており本人の地味さとはかけ離れたそのデザインに瀬呂はツツコみを入れると砂藤がそう声を漏らす。

2人のコスチュームは一般のヒーロー役なので学校で支給されたコスチュームをそのまま活用している為、砂藤はやや不満そうに思っていた。

「鎧本物みたいだなコレ…でもちよつと動き辛い」

「そんな事より火野早く控え室行こうぜ！俺ら機動さんの説明聞かないといけねえからよ！」

「あ、うん！分かった！それじゃあ皆また後でね！」

同じく甲冑兵士のコスチュームを着た尾白はその衣装の出来に評価していると峰田は着替え終わったのか火野を呼んで手招きをする。

火野は急いで峰田と一緒に更衣室を後にして飛び出して行ったのだった。

☆☆☆☆

時刻は10時前と差し掛かり、着替え終わった役のグループ達はステージの裏へと待機していた。

アシストグループも機動、そして他の従業員等と

機材や道具、ベニ板で作られた背景の模型を設置していく最中、上鳴はステージの降ろされた幕を捲り観客達の方をチラリと覗く。するとそこには

ほぼ満席と言える程、来店にこられた市民達がガヤガヤと騒いで待機していた。

「うおお…！ヤバ、めっちゃ人いるじゃん!!」

「そりゃあ今人気の遊園地だからね！ほらほら、手を動かすね！」

「うすー！」

覗く上鳴を見つけて機動はそう言うのと上鳴は王様が座る高そうなデザインの椅子を持ち上げ運んで行く。

そんな中、火野も台本を読み直して確認しているとステージの裏で後々使う模型の木に座り込んでいた峰田を発見して声をかける。

「峰田君何してるの？」

「わあっ!?ひ、火野かよお…驚かすなよなあ…。」

別に何もしてねーよっ」

「ああごめんごめん」

異様に驚く峰田に火野は首を傾げながら台本を持って移動すると、峰田は大きく息を吐いてその模型の木を何やらゴソゴソとつついていた。

その怪しげな行動にたまたま通りかかった蛙吹はジツと峰田を遠くから見つめていたのだった。

「…よし、セッティングはこんなもんな。皆んな、そろそろ始まるから配置についてね！」

一通り準備が完了したのを確認した機動は観客に聞こえない様、生徒達、作業員の数名に声を掛け各々は自分の持ち場に移動する。

そして最初から最後まで観客を盛り上げ、ナレーションを努めるお姉さん役の芦戸もマイクを持って配置に移動していた。

「よおーしっ、頑張るぞー！」

「その心意気だ芦戸君…よし！皆んな！これまでの練習を無駄にしないよう、そしてお客様達を笑顔に楽しめるよう！全力を尽くして最高のヒーローショーにしよう!!」

「！！！！おおー！！！！！！」

芦戸が気合いを入れると委員長である飯田は先陣をきって生徒達に向かって声を上げ、生徒等、大人達の機動等を含めた一同は拳を突き上げやる気を見せていた。

そして、時刻は10時となり、音響担当の耳郎はオープニングのBGMが鳴るボタンを押してヘッドホンを装着する。

BGMが鳴り騒いでいた観客達は始まると思ったのか静まり返る。幕が降りているステージの中央に芦戸は小走りで移動をしようと息を大きく吸い込み、声を上げて観客達に挨拶をした。

『皆さーん!!こんにちはーん!!!』

「「「こんにちはーん!」」」

手を振りながら芦戸の挨拶に反応したのは勿論子供達だった。

元気で明るい声で会場は和まされるが芦戸は物足らないと思ったのか再度挨拶を行う。

『元気が足りないぞー!? 大人達も一緒にー!!? こんにちはーん!!!』

「「「こんにちはーん!!!」」」

芦戸はもう一度声を上げると今度は親とその他の大人達も加えて会場を轟かす様な観客達の声が響き渡る。

それをVIP席で見ていた丸山は笑顔で口を開いた。

「ほっほっほ、いいですねえ。彼女は場を盛り上げる才能がありますね」

「今のは完全にアドリブですよ彼女：まあ、客の心を掴めてるのは彼女の生まれ持った才能ですかね」

丸山の言葉に隣に座っていた相澤はやれやれと言わんばかりにそう言うが彼なりに芦戸を評価して見守っている中、芦戸は満足したのか司会を続ける。

『うんうんー元気いっぱい挨拶どうもありがとう!!』

今日はこの「フューチャーパーク」に雄英高校から素敵なヒーロー達が皆の為に来てくれたよー!素敵なショーをお披露してくれ

るそうだから、皆楽しんで見ていってねー!!それじゃあ、始まります!拍手ー!!」

笑顔で司会をする芦戸に観客達は応える様に拍手を送る。

好奇心旺盛の子供達もワアアと言いながら精一杯拍手をする中、舞台裏にいたキャストイングのグループ達は緊張しながら配置につき、アシストの障子は幕を上げるボタンを押す。

すると幕はゆっくりと上がって行き、お城の背景を催した光景が広がり、子供達は「すげー!」と声を漏らしていた。

そんな中、観客席にいたカメラを持った大人2人の内の1人が口を開いた。

「俺達はヒーローショーを数々見てきた…。高校生達がやるショーは初めてだが、どうせ素人の集まりだろな…。まあ念には念をだ。カメラ止めるなよ?」

「勿論です」

2人はそう言ってカメラを回していると、高台に登って作られた空と太陽の模型を眺める八百万が

片手を胸に置いて待機していた。

そこへ、司会の芦戸は口を開いて物語の始まりを言い始める。

『とある国のお姫様は裕福な暮らしをしていましたが、都会に憧れ、毎日窓の外でぼんやりと眺めていました!』

「何だ?昔話もじりの始まり方で都会?」

「あれか、田舎の国に住む子が都会に憧れる的な?」

「なるほど…なんか斬新な設定だな!」

ナレーションが入り、大人の観客達はざわざわと騒めき出す。

子供はその模型の作りや色鮮やかな背景に釘付けだが大人はその内容に興味を持ち始める。

何とか掴みを取る事ができて物語ははじまろうとしていたのだった。

ヒーローショーが始まった最中、テーマパークの方は客足がショーの方に回ってしまったのかお客の数が少なくガラ空きのエリアで、ピエロの格好をした男が1人、大量の風船を手に持ち人間観察をしていた。

そこへ、1人の男『水操』が現れピエロに話し掛ける。

「兄貴！ショー始まったみたいですぜ？」

「馬鹿やろつ、ここでは従業員だ。兄貴の呼び方は止めろ！」

…そうか、予定通り来たか…」

水操が話しかけたピエロはその衣装を纏った転個だった。

転個はニヤリと笑い大量の風船を見て口を開く。

「平凡な作業員のフリをしてこの遊園地に入り、雄英の生徒共に近づくと…！計画の第一段階はクリアだな…」

「流石つす兄…ピ、ピエロさん…で、この後は…？」

慌てて言い直し、その計画の事を聞くと転個はメイクしたその顔で不気味な笑みを浮かべた。

「この風船には俺の『個性』が詰まっている…、奴らはまだ学生だからな。ショーが終わればこの遊園地で遊ぶのは間違いないだろう…」

そこへ、俺がこの変装で近付いてこの風船を渡す…」

この風船は時間が経てば破裂する仕組みになってんのよ…」

「ホホー！すげえ！やる事あげつねえつす！」

「だろお…？見てろよ学生共…！お前等偽りの餓鬼ヒーロー…、二度と外に出る事が出来なくなる程の姿を曝け出してやんよお…！！全ては…粛正の為…！！」

ステインの代わりをしようとしてるのか転個はそう言って高らかに笑う。

すると、このエリアで遊んでいた子供が転個を見て指差しながら母親に口を開いた。

「ママー、あのピエロさん変だよ？」

「しっ！大人の事情つてのがあつ。さ、早くヒーローショーに行きましよう、もう始まつてるわっ」

「うんー！」

親子はそそくさにその場から離れると、転個は恥ずかしそうに俯き、水操に声を掛ける。

「…とりあえず、計画はショーが終わつた後だ…。」

それまではお前も待機しとけ…。」

「了解っすー！」

転個の指示に水操は返事をしてその場から離れる。

移動する最中、水操はふとポケットに手を入れると何か触つたのか安心して声を漏らしていたのだった。

「もしもの時の為…！兄貴に喜んでもらうんだ…!!」

No. 55 猛れ!爆・殺・卿!

「大丈夫かな、百ちゃん…」

「緑谷もそうだけど1番練習中にアガツてたからな……」

芦戸の司会が終わって物語のショーが始まる最中、1番最初の台詞がお姫様のドレスを着込んだ八百万に麗日が心配そうに見つめる。

切島の言う通り、頭の良さ故に台詞や内容は誰よりも早く覚えたのだが、緑谷と八百万は練習中に一番緊張していた2人でもある。

やっと慣れて練習は成功していたが本番となつて緊張して声が出せなくなるのもザラじゃない。

増して大勢の人達が見ている視線もプレッシャーだ。

控えていたA組達が心配の視線を送っていると、

高台に立っていた八百万は一旦息を溜息の様に吐くと、作られた太陽の模型を見て口を開いた。

「(最高のショー…! Plus Ultraですわ!!)」

はあ：毎日、毎日。お城の生活も退屈ですわね…。あ、そうですわ!お父様に許可を頂いて都会に行つてみましょう!今日は私の誕生日、きつとお許しを頂ける筈…!

そうと決まれば、早速聞いてみますわ!」

「おおく!百ちゃん言えた!!」

「噛まずに流暢に喋つてたわ」

第一の台詞を難なく言えた八百万に舞台の裏から見守っていた麗日と蛙吹が我が子を見ているかの様にそう言つて感動していた。八百万は高台からドレスの裾を両手で掴み気を付けながら階段を降りて行き、城のブロックにその身が隠れると司会の芦戸はマイクを口に当て喋り出した。

『この国のお姫様、モモ姫は年頃の女の子。外に出てみたいと言う好

奇心にモモ姫は王であるエイジ国王に許可を貰う為に王室へと行き
ました!』

「さあ、最初の場面切り替えね!準備はいい2人共?」

「はい」

「よし、行くぞ轟」

芦戸が言い終わると機動は紐を持つ轟と障子に声をかける。

2人は頷き「セーの」と小さく同時に掛け声を出すと勢いよく紐を
引っ張る。すると、お城の外壁の模型は二つに割れてステージの両サ
イドに引っ張られると王室の部屋を催した背景が広がり、瞬く間に場
面が切り替えられた。

そこには王の椅子に座っていた王様役の火野、そして兵士役の甲冑
に身を包まれた3人の飯田、尾白、峰田が緊張しながら立っていた。

観客達はその切り替えに「おお」と声を漏らす者がちらほらと聞こ
える中、隠れていた八百万が出て来て火野が座っている付近へと移動
し、立ち止まると台詞を言った。

「お父様…!私前は前から…都会に憧れており、ずっと悩んでいました
わ!どうかこの私に…!都会に行く許可をお与えくださいまし!」

八百万はそう言って火野に頭を下げる。

肘置きに手を置き拳に顎を載せていた火野の顔はゆつくりと起き
上がり、台詞を言い始めた。

「ふむ…、百よ。今日はお前の誕生日だったな?良かろう、今回は特別
に外出の許可を出す!」

「なっ!?いけませんぞエイジ国王!モモ姫をあんな物騒な都会などに
行かせる等言語道断!王が許されてもこの私が許しませんぞ!」

「ぞ、そうですぞ王様!姫様はまだ若いのですぞ!」

火野は八百万に向かつて掌を突き出す。迫真の演技を見せた火野
に続き、飯田と峰田はそう言うって止めようとする振りを見せていた。

王役の火野は兵役の2人の言葉を聞いて少し考えると提案を兵士
に申し出た。

「ふむ、ならば兵を2人護衛として同行させよう。それならば問題は
あるまいな?」

「…モモ姫を都会に行かせるのはどうしても言う事ですか……。分かりました！このテンヤ！姫を守るべくその任務命を賭けて務めさせて頂きます！」

「私も、このマシラオ！僭越ながら同行させて頂きます！」

飯田の後に続いて尾白も声を上げて台詞を言う。

2人の了承を得た火野は椅子から立ち上がり、羽織っていたマントを掴んで大きく振り上げると高らかに八百万に向かって口を開いた。「よし、モモよ！明日の朝城を出て都会を見て堪能して来るといい！世を知る経験にもなるだろう！」

だがくれぐれも人様に迷惑をかけぬ事だ…よいな？」

「お父様…！はい！ありがとうございます!!」

八百万は火野の言葉を聞いて再度深々と頭を下げる。

王室のシーンはこれで終了となり芦戸は口を開きナレーションを再開する。

『エイジ国王から許可を貰ったモモ姫は大喜びでお礼を言いました！モモ姫は憧れていた都会に行ける事となり、期待を胸に膨らませて待ち望んでいました!!』

「よっし、お城のシーン終了ね、場面切り替え行くね！」

「はい」

「ケロっ」

言い終わった芦戸を確認して機動がそう言うと言と轟と障子は頷き、蛙吹は予備の薄い幕を下ろして観客達にはステージの裏が見えなくなる。

ステージ裏で次の場面を切り替え様とバタバタと作業している最中、観客達の方からちらほらと大人達の声が聞こえてきた。

「あの王様凄い迫力だったな…」

「他の子達も演技よかったぞ」

「モモ姫可愛い…なんかあざとい…」

「流石雄英、こんなのも仕込まれているのか…！」

「普通にこの後どうなるのか気になる！」

序盤のシーンなのにその高評な声が聞こえてきてナレーションの芦戸も思わず顔がニヤけていた。

すると、観客から見えないステージの天井から蛙吹が張り付いており、オツケーのサインを出す。

芦戸は目でそれを了承するとナレーションを始めた。

『翌朝、モモ姫は朝一番にお城を兵を連れて飛び出します。憧れていた都会に行けるとなつてモモ姫は楽しみで仕方ありませんでした！…ですが、その都会では良からぬ出来事が起きようとしていました…』

「出番ね、『爆殺卿』さん！」

「頑張れよ爆豪！」

「クソが、わーってるわ…!!」

次の都会のシーン。その冒頭は倒産して敵に落ちぶれた敵役の爆豪が出るシーンである。

機動が合図を出すと切島は爆豪の背中を軽く叩いて応援すると爆豪は嫌々、渋々と幕の降りてるステージの真ん中に移動して立ち止まり観客席に背を向けて大きく息を吐く。

それを確認した蛙吹は天井から幕を引っ張り上げると、そこには都会の会社のビルを催した建物が並ばれており、芦戸はナレーションをし出した。

『活気溢れるモモ姫が目指しているこの都会。』

ですが、現実はそうも行きません…。モモ姫がこの街に来る何ヶ月か前の出来事…。会社を立ち上げていた元社長だったこの人物、カツキはある日、仕事でミスを犯してその会社は潰れてしまいました』

「ああ!?!何でだよ!?!クソがあああああ!!!」

芦戸の言葉の後に爆豪は両手から爆発を起こして爆豪はキレ気味にそう叫ぶ。

『多額の借金を背負い、カツキは人生のどん底に突き落とされてしまっています。その心は闇に染まって行き、会社を潰したこの街、社会に復讐を誓うのでした…!』

「クソがあ…!この俺をコケにしたこの街…!この世界の舐めプ者共があ…!!許さねえ…全員…!!完膚なきまでにぶつ殺してやる!!」

ゆつくりと観客席に振り返り両手から爆発を発散しながらそう言う爆豪、その演技力に観客達は圧巻し、子供等は怯えて泣きそうになる子達もいた。

「す、すげえ気圧…!」

「今にも襲われそうだぜ…!」

「ああ!殺気に満ち溢れた目付きしてやがる…!」

「急に現実的なシーン入れてきやがったな…!」

「あんな奴が敵ライバルって…、モモ姫あぶねえじゃん!」

敵役に相応しいその危険な匂いをかます演技力に観客達も息を呑む。

その演技はステージ裏の生徒達にも伝わったのか切島が口を開く。

「なんだかんだで才能マンだよな、あいつ」

「演技もそうだけど、爆豪らしい台詞だよな、流石台本書いた火野。よく人の特徴を理解してるわ」

「てか、気のせいかな爆豪の奴こつち見ながら言っただけか?」

切島の言葉に上鳴、瀬呂が苦笑しながらそう言っていると爆豪はそそくさに舞台裏へと戻り、そのすれ違いに轟と障子、そして動き易い服装に着替えた火野と峰田が再び迅速な行動によって場面が切替わり、背景が切り替わる。

そして、八百万と飯田、尾白がステージの端で待機していると芦戸はナレーションを行う。

『街へと辿り着いたモモ姫は住んでいた国とは全く違う光景や建物に

目移りしていて感激し、その街を堪能していました』

「凄いですわ…!!これが都会と言うものなのですね…!見たこともない建物が沢山ありますわ!」

「モモ姫!いつ何が起きるか分かりません!このテンヤから離れぬ様に歩いて下さい!」

「まあまあ、テンヤ殿。調べた所、ここは警備も万全な街だ。余り警戒しては返って怪しまれるぞ?」

ゆつくりとステージの端から歩きながら八百万は模型の建物を見て感動する素振りを見せながらそう言うと兵士の飯田と尾白は台詞を口にする。

すると、奥のステージの端から出番で待機していた民間人役の麗日、葉隠、青山がステージに飛び出す。

彼等は民間人役なので衣装も一般の私服。そして最初の台詞担当の麗日が慌てて現れ颯爽と台詞を言った。

「た、大変や!!あつちに敵が現れた!!」

「手下を引き連れて街で暴れてるよー!!」

「君達見慣れない格好だね?☆早く逃げた方がいいよ!☆」

叫びながら麗日と葉隠はそのまま八百万達が出てきたステージの端へと走って行く中、青山は八百万達の前へと止まり、一声掛けて駆け出して行く……のだが。

「ア☆」

青山は躓き盛大に転んでしまった。

これは劇に含まれていない出来事なのでこの場にいた全員は固まってしまいが、すかさず飯田が駆け寄り声を掛ける。

「大丈夫かい君?!走る時は足元に気を付けなければ!」

「ウイ…!」

咄嗟にアドリブの台詞を口にした飯田に青山は転んで恥ずかしいのか震えながら答えると、麗日と葉隠はステージに出て来て青山を引っ張る様な形でステージ端へと引き摺りながら持って行く。

そのシーンを見ていた観客達は一部のギャグシーンと思っていたのかクスクスと笑い声が聞こえる。

一方、裏方へと青山を連れて来た麗日と葉隠は青山に安否を問っていた。

「青山君大丈夫っ?」

「もーっ、びっくりしたよーっ」

「ごめん…☆」

鼻を押さえながら青山は申し訳なさそうに謝っていると火野は急いで救急箱を持って来て青山君の応急処置をし始める。

その時、舞台の方では次のシーンの敵が現れて姫を人質に捕らえる場面となっており、音響の耳郎がいかにも悪役参上と思われるBGMを流していた。

麗日達が出てきた向かいのステージ端では敵ワイラン役の爆豪、切島、常闇が待機しており

その横には轟が床に膝をついてスタンバイしていた。

「よっしー! そんじゃ派手に登場だな!」

「ケツ!」

「轟…頼むぞ」

「ああ…(両方の「個性」を調節して…煙を…!)」

切島は気合いを入れ、爆豪は不満そうにしていると常闇は轟にそう言っていた。

轟は頷くと両手から少しの炎と氷を作り出し、その両手を合わせる。すると、両手から煙が始めステージ端から煙幕が放出される。

そしてその煙幕の中から敵ワイラン役の3人は飛び出しステージへと姿を現した。

「ダーッハッハッハア!! 俺達は爆殺卿の手下の敵だワイラン!! この街を破壊した後! 会場の全員をめちゃくちゃにしてやるぜえ!!」

「悪に染まれ…ダークシャドウ」

『オレハ、トテモオ…ワルイヤツ!!』

切島は叫ぶと続いて常闇はダークシャドウを呼び出し、ダークシャドウも悪役になりきって声を上げながら常闇の頭上をふよふよと浮

いていた。

渾身の演技に観客達は驚いていると爆豪も後に続き、両手から爆発を発散しながら台詞を口にする。

「ハッハー!! 気にイラねえモンは全部ぶつ潰す!! テメエらあ! 丁度あそこにいる女を人質として捕らえろ!!」

「捕まえてやるゼエ!」

「御意」

『シャー!!』

何気に成り切っている爆豪の指示に切島と常闇は八百万一向に襲い掛かろうとする。

「(襲われそうな……イメージ……) き、きやあつ!!」

「お下がりでください姫!!」

「姫を人質になんてさせるか!」

八百万は若干ぎこちなく叫ぶと兵役の飯田と尾白が前に出て立ち向かおうとするが、敵の2人の攻撃(当たらない素振り)で食らった様に見せかけてわざと吹き飛ばす。

「うわあ!」

「だあつ!」

「兵士さん……!! きやあつ!」

「捕らえた……ぜ……」

「へッへッへ! 大人しくしてもらおうぜ?」

(自分から)吹き飛ばされる飯田と尾白を心配する八百万だが、常闇のダークシヤドウが八百万を捕まえ常闇と切島は敵^{サイラン}つぼく台詞を言い放つ。

「人質は捕らえた……!! 来いよヒーロー共! 全員徹底的にぶち殺して俺の完全無敗北勝利だあ!!!」

「きや、きやあつ! 誰か〜!!」

「ひ、姫……!!」

その外見と口調によってサマになっている爆豪はそう言い残すとステージの端にズカズカと移動し姿を消す。その後を追う様に切島と八百万を持ったダークシャドウ事、常闇も後を追う様に姿を消すと、動けないフリをする飯田が叫んでいた。

『うああ〜どうしよう!!モモ姫が悪の親玉爆殺卿に攫われちゃった!!モモ姫!どうなっちゃうのお!!?』

「やべえ…!ど定番な設定なのにコレどうなんのよ!?!」

「爆殺卿、会社潰れて復讐の筈なのに趣旨変わってねえか?」

「きつと相当ストレス溜まってたんだろよ…分かるぞその気持ち…!」

ナレーションの芦戸がそう言うと、観客達もまた騒ぎ始める。

そしてこのシーンは終了となり蛙吹は再び予備の幕を降ろすと飯田と尾白は立ち上がりそくさと舞台裏へと移動し、アシスト組はいよいよクライマックスとなる摩天楼を舞台とした背景、建物等を設置する準備に取り掛かる。

「ここまでは順調だな!」

「ああ!爆豪も何やかんやで役ちゃんやり切ってるし俺ちよつと見直したわ!」

「ううん…フラグにならないといいけど」

次の出番となる砂藤がアシストの手伝いをしながらなるべく小声で上鳴に話しかけ、上鳴はそう答える。

だが、次のバトルシーンの事を思ったのか瀬呂は心配そうに呟く。

次のクライマックスのシーンは1番見所である摩天楼を舞台とした空中戦。爆豪と緑谷の“個性”をフル活用して戦うシーンなのだがその対戦相手の緑谷と爆豪の仲の悪さは皆誰しもが把握していた。勿論、これはヒーローショーの為に爆豪は分かっているつもりなのだろうが練習中は中々上手く行かずには進んで行き当日となってしまうていた。

2人の関係はぶっつけ本番するしかないと言っていたのだが、

正直不安でしかない所だ。

そんな中、火野も準備をしている最中、緊張している緑谷を見掛けて徐に声を掛けていた。

「いよいよ出番だね緑谷君」

「あ、う、うんっ！そそそうだねっ」

「落ち着いて大丈夫！緑谷君が人一倍努力しているのは俺もよく知っている！必ず成功させて凄いショーにしよう！」

緊張で強張る緑谷に火野は励まして緑谷の肩に手を置く。

緑谷は大きく深呼吸すると、「ありがとう！」と強く頷いた。

幕がおりてから数十秒後。場面切り替えが終わり、爆豪達も指定位置に移動して切島が合図を送ると蛙吹は幕を上げると同時に、八百万は摩天楼を背にロープで釣り上げられて行ったのだった。

『捕まってしまったモモ姫!!高らかに笑う爆殺卿とその手下共!…だけれどそこへ現れたのはこの都会の平和を守るヒーロー達だった!!』

芦戸はそう言い終わると、ステージの端からプロヒーロー役である砂藤、瀬呂、そしてこのヒーローショーの主人公である緑谷が登場する。

ヒーローショーの醍醐味と言えばヒーローの登場。音響担当の耳郎も正義の味方が登場する白熱のBGMを流す。そのBGMと同時に轟の煙幕が放出されて登場したヒーロー達に観客の子供、そして大人達も「おお！」と歓声の声が上がっていた。

「敵 共！そこまでだ!!」

「これ以上の悪さは見逃さないぞー」

瀬呂と砂藤がヒーローっぽい台詞を言い放つ。

そしてこの次の台詞は主人公である緑谷。

「僕達、ヒーローが参上したからには悪は絶対許さない!」。

この台詞を言つて、バトルシーンへと移行する。

「…!!ば、僕達ヒーローが…!!…!!ゆ、ゆるさやなへぞ…!!」

……筈だったが、緑谷は本番の観客達の前にして相まってか、下半身がガクブルな上に台詞もしどろもどろになってしまったのだ。

「っ！緑谷君……！」

「うあああっ！緑谷ああ!!！」

「あー！やっちゃまったああ!!！」

まさかの噛み噛みの台詞になってしまい舞台裏の火野、尾白、上鳴が口を開き、他の全員も戸惑ってしまっていた。

「あっちゃー……！やっぱお客さん達を前にしちゃうとプレッシャー掛かつちやうよね……！」

このヒーローショーの責任者である機動も焦りを感じて声を出していた。

予想はしていた筈だが、雄英高と言う名門の生徒達が失敗する訳ないと自身に与信してしまっていたのだろう。

盛り上がっていた観客達も徐々に白目になって行き場は完全に盛り下がる一方だった。

その時、その流れを更にぶち壊してしまおうとする者が動き出した。

「あー！うぜえなあ!!やるならちゃんをやれやクソがああ!!！」

「あっ！爆豪!!！」

突然、爆豪が鬱憤が切れたのか切島の呼び止めを無視して爆破の勢いで飛び出して緑谷に襲い掛かろうとした。

「おいおい嘘だろ！（フン！とんだ餓鬼だなあアイツ）」

その予想外な行動に驚く火野、そして見ていたアंकも呆れた声で体の中からそう言っていた。

舞台が始まって掴みの良かったヒーローショー……だが、主人公緑谷のミスによって爆発卿は怒りを露わにしまい、ヒーローショーは

混乱に陥ってしまった。

果たして、この予想外の流れがどうなってしまうのか、この時のA組は予想だにしなかったのだった。

No. 56 穿て、真のクライマックス

オールマイトの協賛から企画されたA組オリジナルのヒーローショー。

生徒達はフューチャーパークへと訪れヒーローショーが幕開けされて事は順調に進んで行った…の筈だったのだが、緑谷のミスにより怒りを露わにした爆豪が観客達が見るステージ舞台で緑谷に襲い掛かろうとしていたのだった。

「死ねええっ!!!」

「か、かつちゃん!!?」

「マジかよ爆豪!!」

飛び掛かろうとする爆豪に緑谷は怖気付いてしまい、尻餅を着きながら爆豪の名を呼ぶ。

だが、彼の猛進は止まる事なく敵ライオン役の切島と常闇は爆豪を止めるべく、舞台の地上から先回りして爆豪の前に立ちはだかる。

「おい!ショーの最中だぞ!」

「修羅め…!ダークシャドウ!」

『アイヨ!!』

「ぐっ?!テメエら何しやがる!!?」

切島は硬化して爆豪の爆破攻撃を正面から受け止めると観客に聞こえない様に小声で話し掛ける。

それに加わって常闇もダークシャドウを出して爆豪を取り抑えようと試みるが空中へと逃げて爆豪は両手から爆破を連発して彼等を錯乱させる。

「これじゃあショーが台無しだぞ!」

「と、とりあえず爆豪抑えるしかないしよ!」

こうなってしまうてはヒーローショーどころではないと判断したヒーロー役の砂藤が小声で瀬呂にそう言うと言おうと瀬呂も小声で答え肘からテープを射出して爆豪を捕縛しようとする。だが爆豪はその行動を先読みして伸びてくるテープを見ずに爆破させテープを燃やして

いた。

すかさず瀬呂はテープを繰り出し、切島と常闇も加勢して爆豪を止めるべく攻撃を繰り出し、爆豪は爆破と反射神経を駆使して次々と避けていく。

攻防が続いている中、人質として摩天楼をバックに吊されていた八百万、そして主人公役の緑谷も突然の騒動に困惑していた。

そして観客達もまた、敵の爆殺卿が他の敵、サイランヒーロー達と戦っているのを見てざわざわと騒ぎ始める。

「なんだなんだ!?爆殺卿って奴急に仲間割れし始めたぞ!」

「しかも手下の敵達サイランヒーローと手を組んで爆殺卿と戦ってる!」

「一時休戦って事?」

「それより無駄に戦闘アクション凄くない!」

「すげー!まるで本当の戦闘シーンじゃん!」

爆豪を止めるべくガチ戦闘を繰り広げている連中にまさかの観客達は盛り上がり歓声の声が上がっている。

VIP席に座っていた丸山も驚いて穏やかな口調で口を開いた。

「ほっほっほ、これは凄いアクションですねえ。流石雄英高校、楽しんでくれますね」

「…つたく、何やってんだあいつら……。だが予想外の展開はヒーローにとって付き物。この場面どう切り抜けるか……」

これもショーの一環と勘違いしている丸山に対して相澤は溜息を吐きながらそのハプニングシーンをそう言っただけに見届けていた。

一方で舞台裏で待機していた生徒達も止めようとしていたが観客達の盛り上がりには驚き戸惑っていた。

「やべえやべえやべえ……何か無駄に盛り上がってねえか!」

「だがこの後どうする……?今は観客達の勘違いで何とかなってるが、結局その場しのぎにやっているだけだぞ……?」

「ああ……やっぱ止めるしかねえか……!」

上鳴がおどおどしながら口を開くと障子、轟とそう言っただけで表に出ようと試みる。

「待つて！」

だが、火野は突然声を上げて止めようとする生徒達を呼び止めた。そして続けて口を開き、提案を申し出た。

「何とかなるかもしれない……！」

「火野？何か打開策が見つかったのか……？」

「うん、多分もしかしたらだけど……！アंक！」

火野の言葉に首を傾げる轟。すると、火野は自身の中にいたアंकに呼びかけ始める。

「(何だ?)」

「ちよつと付き合つてほしいんだ！」

「(あ?フン、断る。面倒事は勝手にやつてろ)」

「ショーが終わったらアイスたらふくご馳走してやるから！」

「(……ちつ、……乗った。)」

アイスの条件にアंकは舌打ちをするとすんなり了承する。

火野は「よし」と頷くと近くにいた機動、そして待機している生徒達に声を掛けた。

「機動さん、ここからは完全にアドリブで動きます！皆んなもなるべく合わせてほしい！」

「…オツケー！何か思いついたみたいね！」

「指示を出してくれ火野。できる限りの最善は尽くす」

「私も！」

火野の強い眼差しに機動は笑顔で頷くと轟、麗日とやる気を出して火野に声を掛ける。

「俺はちよつと準備してくるから、皆んなは今の状況をなるべく演技だと観客に持ち上げさせてほしい！ちよつとした騒動だけど、ヒーローの活動には予想外は付き物！必ずショーを成功させよう！」

「……おー!!……」

火野の言葉にこの場の全員が拳を突き上げ声を上げる。

やる気に満ち溢れる中、火野は奥の小部屋へ移動し入って行く。ふと、上鳴は先程までいたはずの峰田がいない事に気付き、辺りを見渡す。

「…あら、峰田はどこ行った？」

そう言つてキヨロキヨロと見渡し首を傾げる。

その直後だった。ステージの方から観客達の声が聞こえてきた。

「おい!?何だアレ!？」

「木が動いてる!?ビルを登って行くぞ!!」

観客達の視線、爆豪等が戦っているその隣に建てられた摩天楼の模型に設置されているベニ板で作られた木が勝手に動いてビルをよじ登っていたのだった。

観客達からはそう見えるが、その正体はなんと紐を通して木を背負っていた峰田だったのだ。

「（オイラの計算通り…!!爆豪と緑谷の相性は最悪!シヨールは台無しだ!この機にオイラが八百万を助けて万事解決つてな訳よ!!ひよー!!）」

「馬鹿!アイツ何してんだ!？」

「アレは流石に止めないとまずいよ!」

峰田はそう思いながらもぎもぎのボールで器用に摩天楼を登って行く。それに気付いた舞台裏の上鳴、麗日は声を上げて指を指すと轟は右腕から氷を生成し氷結を繰り出そうとしていた。

が、その時。

「ぐえあつ?!？」

八百万の真下まで来ていた峰田の木に突如、空の背景に設置されていた雲の模型から何かが伸びて峰田の首元に巻き付く。

「貴方大概にしなさいよ峰田ちゃん」

「ひ、ひいいい!!?」

その雲の裏に潜んでいたのは何と蛙吹だった。

「シヨールが始まる前にその木に小細工してたでしょ?貴方の思惑は見え見えなのよ…ケロ」

「迂闊だったあ…!だがしかし!ここで引き下がる程、オイラは甘く

ねえつての!」

今までにない程怒りに満ちた表情をした蛙吹のそのオーラにビビる峰田だが、彼もプライドがあるのか足掻こうともがく。

しかし、それを見ていた観客達は変な捉え方をし始めていた。

「見ろよ! 摩天楼を舞台に木と雲が戦ってるぞ!」

「どうなつてんだよ!! だけど気になるぜ!!」

「気になるなあ! 木だけに!」

しようもないギャグを言いながら観客達は何故か盛り上がり、混戦しているステージに釘付けとなっていた。

めちやくちやになつているヒーローショー。

火野の打開策と言えど止めるべきかどうか裏方の生徒達も迷っている最中、立て続けに事件は起きた。

峰田の重心で摩天楼の建物は大きく揺れ始め、徐々にそれは観客席の方へと傾き出したのだった。

「ケロツ!」

「うわあつ!」

ビルが傾き、蛙吹と峰田は投げ出されてしまい舞台の床へと落下する。吊るされていた八百万もビルと一緒に傾き出した。

「おお! ビルが落ちる!!」

「離れねえと下敷きになるぞ!!」

「いや待て! これ倒れたら観客が下敷きに!!」

爆豪と戦っていた4人も気付き、瀬呂、砂藤が声を上げ避難しようとするが、切島の言う通り、このまま倒れたら観客達が下敷きになってしまう。

「っ! 緑谷!!」

「…あつ」

珍しく常闇が叫ぶ。その視線の方角には観客のプレッシャーで腰を抜かしたのか緑谷が模型のビルの真下にいた。

常闇の呼び掛けに我に帰ったのか倒れてくるビルの存在に気付く。

このままだと大惨事になると舞台裏にいた生徒達も駆け出そうとそう思った直後、真つ先に動いた者がいた。

それは爆豪だった。

「ッ!!!」

爆豪は爆速で移動して倒れてくるビルを片手で押さえた。

傾きが止まり、八百万も上で宙ぶらりんとなっており、

生徒達、アシスタントの作業員等はホツと安心の息を吐く。

固まっていた緑谷もあたふたとしてしているとそれを見て苛立ったのか爆豪は緑谷に向かって口を開いた。

「おいこらデクてめえ……ミスった挙句に腰抜かしてんじゃねーよクソがあ……!!!」

「何!?!爆殺卿がヒーロー助けた!?!」

「どゆこと!?!」

「何!?!爆殺卿がヒーロー助けた!?!」

「どゆこと!?!」

頂点に達した怒りを緑谷にぶつけていると、観客達はその爆豪の行動に困惑して声を上げる。

そして緑谷は混乱しているのか小声混じりの台詞を喋り出した。

「(せ、台詞!台詞!)えと……!倒産だからってその……!悪事をその……働くのはだから……まずい……と思うよ……!」

「あ……あ!?!」

急な台詞をしどろもどろで言い出した緑谷に訳わからず爆豪は怒号する。

だが、それを聞いた観客達はざわざわと騒ぎ始めていた。

「え……、父さん!?!」

「と、父さん……!?!」

『父さん、悪事を働くのはまずい』……って言ったよな!?!」

「じゃあ何か!?!爆殺卿はあのヘタレの親父で爆殺卿が悪さをしていたのはヘタレな息子ヒーローを発奮成長させる為!?!」

「もしかして会社が潰れたのも爆殺卿の計算の内だったって事か!!」

「おいおいどこまで心揺さぶる気だよー!!」

勝手な思考と妄想で観客達は一気に盛り上がりつつ歓声の声がこの

会場を轟かしている。

大人達もそうだが、子供等もド派手なアクションシーンを見て興奮していた。

「な、何だこりゃあ…!!」

「めっちゃウケてんじやね…?」

「なんか完全に俺等浮いてるぜこの状況…」

「予想外…」

爆豪と緑谷から場違いと思ったのか舞台の端っこに離れていた切島、瀬呂、砂藤、常闇の順でそう言っていると、いつの間にか舞台裏にいた芦戸、蛙吹が麗日と共に「こっちに戻って」と口パクで伝えていた。

4人は頷くと観客達に悟られない様にそそくさと舞台裏に移動する。

その途中で転がっている峰田を瀬呂は無言で拾い上げていた。

「おいおいコレどえらい事になってねーか!」

「うん！私も驚いた！でも火野が何とかしてくるみたい！とりあえず切島達は待機してて！」

裏方に戻ってきてそうそう切島がそう言うと、先に戻って聞いたのか芦戸はどこか落ち着いた様子で4人に話すと、首を傾げながらも切島達は了承していた。

そして、勘違いで盛り上がっている観客達。「次どうなるの?」「全然展開が読めない」などとざわざわ騒ぎ始める。

そんな中、爆豪も多少は冷静になったのか観客達を見て小さく悪態を吐いて口を開いた。

「(はあ…?なんだよコレ…!!)クソが…!!」

爆豪は嫌そうな顔になりながらも辺りの状況を把握すると、目を泳がせながら続けて口を動かした。

「……少しは成長しやがれや…!馬鹿息子!ガキン頃にいつも振りまわしてやがったその拳…!!…今なら届くんじやねえのかよ…!!?」

「え……?か、かつちゃ」

「父さんだろが…!!?」

「ひい…!!?と、父さん…!!」

生徒達誰しもが思わなかった爆豪の発言。目の前にいる緑谷が1番驚いており名を呼ぼうとすると爆豪はなるべく聞こえない様な声で緑谷を睨み付け、無理矢理アドリブを言わせていた。その状況で…。

「「「うおおおおお！爆殺卿ーーー!!!」」」

観客達は爆豪のアドリブを聞いて大いに盛り上がり歓声の聲が上がる。

「いや…客の深読み凄すぎない…?」

音響の小さいスタジオからも耳郎は手を止めショーの騒動を見ていたのかそう呟いて脂汗を流す。

すると、無線でその部屋に取り付けられた小型のスピーカーから機動の聲が聞こえてくる。

ジツ：『耳郎さん！聞こえるね?』

「え、あつ、はい！何ですか?」

若干ノイズが走るがその声はしっかりと聴き取れるのか耳郎はすぐに返事をする。

ジツ：『予備の敵が登場するBGMを直ぐに！流して欲しいんだよね!』

「えっ?予備の…、わ、分かりました!」

機動の聲に戸惑う耳郎だが、返事をしてすぐに対応し、爆豪が登場した時に流したBGMとは違うBGMのボタンを押して音楽を流し始めた。

「えっ?何だこのBGM…?」

「何何!?今度は何だ!」

「俺ここで終わりかと思ってたんだけど…!」

突然流れ始める不穏なBGMに観客達は戸惑い始める。舞台にいた緑谷、そして傾いたビルを立て直しながら爆豪もその音楽に警戒し、戸惑っていた。

すると、舞台の端から待機していたナレーション役の芦戸が現れ、マイクを持って司会を始めだした。

「敵となつて実の息子の成長を見届けたかった爆殺卿！そしてその息子！へタレヒーロー『デク』!!再び親子の絆が確認され！結束された今!!予想だにしなかった真の敵が現れるのでした!!』」

「…よし。行けつ、火野」

「俺もそれなりに出してやんぜ!!」

芦戸のナレーションに更に困惑する観客達。それと同時にその合図に裏方にいた轟はステージの端から煙幕を放出させる。更には、上鳴も周りが巻き込まれない程の弱々しい電気を放電させ、煙と稲妻がステージの端からほとぼしる。

そして、その演出の中から…火野が登場するのだが、思わぬ格好をした姿で舞台に現れたのだった。

その姿を見た瞬間、観客達は目を見開いて一斉に声を上げた。

「お、お、王様……!!?」

なんとその派手な演出から現れたのは国王役だった格好をした火野だったのだ。

ゆつくりと爆豪と緑谷がいる中央へと歩み寄る中、緑谷、爆豪も驚き口を開いた。

「え…!?お、王……様……!?!」

「あ…あ……う…ちげえ…、お前……赤鳥野郎か!!」

爆豪はいち早く火野の顔を見て気付く。緑谷も確認すると、火野の姿だがその顔付きはアंकが憑依した時の姿、『火野アंक』がその場に現れていた。

「…おい映司。さっきの約束忘れんなよ?」

「(ああ、ただお前もすっかりやれよ?俺が台詞を伝えるからアंक

は演技でそれっぽく合わせて！」

「…フン」

アंकは火野の言葉に鼻を鳴らして俯くと、軽く咳払いしながらバツと両手を広げる。そしてアंकを知る生徒達がこの先見る事のないだろうアंकの演技を目の当たりにした。

「フッフッフツ…！ハハハハハハ！！爆殺卿！！貴様にチャンスを与えてやったと言うのに見事にしくじったな！！おかげで計画が台無しだ！！」
「ええっ!？」

「はあっ!?!どう言う事だ!?!」

火野アंकの高らかな笑いにビビるA組達だが、構う事なく火野アंकは悪者になりきり爆豪に（火野から言われながら）台詞を喋る。

当の爆豪と緑谷も突然の登場と台詞に困惑しているのだが、火野アंकは続けて台詞を言い出した。

「俺はある国の優しき国王エイジ！だが…本当の顔は悪の組織の頂点に君臨する…アंक大魔王」だ!!」

「…予想外の展開キター…!!?」

高らかに宣言する火野アंकに観客達は目が飛び出る程驚き声が重なる。

「おいおいおいおい！これ誰も予想できねえって!!」

「あのモモ姫のお父さんが悪者!？」

「マジでここ最近で一番びっくりなんだけど!？」

「おい見ろよ！モモ姫の表情！本当に何が起きたか分かんねえ顔してるぞー!」

「迫真の演技だ…!!むしろ逆に可愛い!」

一人一人が声を上げて言ってる最中、一人の観客が未だに宙ぶらりんになっている八百万を指差してそう言う。

彼女、八百万は爆豪が暴れ出した時点で本当に何が起きているのか分からず最初は困惑していたが現時点では抜け殻の様に固まっていた。

そして、火野アंकは一旦区切りを入れて再び悪役っぽく台詞を言い始めた。

「何れはあの忌々しい我が娘を殺す予定だった…！そこで都合良く現れてくれたのが貴様だ爆殺卿！貴様を利用して今日この日！あのモモを殺せると俺は考え、貴様に部下を送ってやった…！だが！何だそのくだらない茶番劇は…!?おかげでこの騒動に部下も逃げ出してしまった!!」

「…ハッ！成る程そういう事かあ…!!…で、テメエは我慢出来ずにこのこやつて来て直接あの女を殺すっつー寸法かよ?」

才能マンたる爆豪は状況を理解してそれっぽい台詞を言いながら両手を広げて構える。

「フン…この俺様が直々に手を下してやるんだ！貴様等を含め！街、そして会場の全員諸共葬り去ってくれる!!」

火野アंकはアंकの腕となった右腕の肘を曲げて上へと向けるとその腕から炎が出て燃え上がる。

それが合図だと知らされた耳郎は戦闘する為のBGMを流し、芦戸はマイクを口元に当てナレーションを開始した。

『真のラスボス！アंक大魔王が爆殺卿、デクの前に立ちはだかる!!モモ姫をたぶらかした悪の根源をここでやっつけてモモ姫の国！そしてこの会場を守る為に親子の絆が試される!!』

皆んなで爆殺卿とデクを応援しよう!!せーの!!』

「!!!「頑張れー」!!!「!!!」!!!」

「爆殺卿ー!!デクーー!!」

「倒してくれー！モモ姫があぶねーー!!」

「うおおお！そんな奴倒せー!!」

「今まで王として人を騙し続けた奴だろ！絶対倒せー!!!」

「今こそ親子の絆見せてやれー!!」

芦戸の掛け声に呼応するかのように観客達は精一杯応援する。すると爆豪はニヤリと笑うと両手から爆破を出して悪人の言うアドリブ

を口にした。

「ハッハー！いいぜ魔王!!この俺がギタギタに捻じ伏せてやんよ…!!お前には色々と苛ついていたからなあ!!」

爆豪は今にも飛び掛かろうと戦闘体制に入っていると、緑谷も覚悟を決めたのかゆつくりと立ち上がった。

「(僕のせいでみんなに迷惑が掛かってる…!きつとかつちゃんもかつちゃんなりにカバーをしてくれただろう…!ここで良い所を見せないとヒーローショーが本当に台無しになる…!立て…!緑谷出久!!最高のショーに!笑顔で終われるヒーローショーに!するんだ!!) うおおおおおおあああつ!!!」

緑谷は心の中でそう思うと雄叫びを上げ、両手で頬を思い切り叩く。気合いを入れると爆豪の隣に立ち、グツと拳を構えファイティンポーズを取った。

「おお!?!緑谷覚醒したか!?!」

「土壇場でプレッシャーを見事に打ち砕いたか!流石だ緑谷君!」

「いいねえ、若いつて素晴らしいね!」

「(機動さんも全然若いんとちゃうかな…)」

裏方で見えていた生徒達も緑谷の勇姿に驚き、瀬呂が言うど飯田も手をスナップさせながら喜び、機動はそう言っているが彼女も見た目はかなり若気な顔をしている。それに対して麗日はジト目で機動を見てそう思っていた。

「かつ…!爆殺卿!…いや、父さん!!力を合わせて…一気に勝負をつけよう!」

「…!!ああ親に向かって命令すんじゃねえ!!!いいか!?!俺の足をせいぜい引つ張らない程度にサポートしろ!!このクソナード餓鬼!!!」

「う、うん…!!(ワン・フォー・オールフルカウル、5%…!!)」

緑谷の事が嫌いな爆豪はかなり自分を押し殺したのだらうか唸り声を上げてアドリブをキレ気味に言うど、緑谷は頷き、身体から緑の稲妻がほとぼしる。

本気を出して挑まないと返って下手な演技になりかねないと思っ

たのだろう。するとアंकもニヤリと笑い、両手を広げて声を上げた。

「ハッ!! 来い!!!」

「言われなくても行つてやらああ!!!」

「えと…! 全力で、お前を倒す!!!」

爆豪と緑谷はそう言うと言つて爆豪は爆破の遠心力で上空に飛び出す。緑谷は舞台の床を蹴つて火野アंकに向かって突っ込んで行く。

そして両者が接近してくる中、表に出ているアंकに向かって火野はアंकに声を発した。

「(アंक! 避けたらダメだからな!)」

「フン…ならお前も覚悟しとけ! 緑谷はともかく爆豪は本気だぞ!」

火野の言葉にアंकはそう言つて爆豪の方を警戒し、右腕を突き出して防御体制を取る。

そして、爆豪は爆破を加えた回転力で勢いを増して突っ込み、緑谷も右腕を大きく振りかぶり、両者は攻撃を繰り返そうとした。

「〃ハウザーインパクト榴弾砲着弾〃!!!」

「(加減で…当たらない程度に!!) 〃5%オリジナル・SMASH
〃!!!」

ドオオオオオオオン!!

互いの技が炸裂し、直撃したアंकから爆発が起きる。その衝撃で応援していた観客達もピタリと声が止み、ショーの舞台は煙が立ち昇り見えなくなっていた。

「どうなった!?」など等観客から声上がる中、煙が徐々に晴れていき、そこに立っていたのは爆豪と緑谷。火野アंकは床に(わざと)横たわっていたのだった。

『し、勝者!!爆殺卿とデクの勝利ー!!親子の絆で見事、アंक大魔王を打ち倒してくれましたー!!!2人共!ありがとうー!!!』

「」「わあああああ!!!」「」

芦戸は高らかに勝利宣言をすると観客達から歓声の声上がる。爆豪は拳を突き上げ、緑谷も照れ臭そうにほくそ笑みながらも、倒れている火野アंकを心配そうに見つめていた。

「…おい映司、予想以上に痛いぞ……。礼のアイスもつと追加しろ」

「(あはは…、分かったよ)」

倒れていた火野アंक、表に出ているアंकは

爆豪の技を受け止めた右腕が煙が昇って痛みでビリビリと痺れているのか火野にそう言うと、火野は苦笑しながら頷いていた。

『さあ!今一度活躍した2人に大きな拍手をお願いしまーす!!!』

ナレーションの芦戸がそう言うと観客達は大いに拍手を送り、見事?ヒーローショーは無事終了となったのだった。

「つーわけでお疲れ。…と言いたいところだが、まあ見事に企画していたショーとかけ離れた終わり方をしたもんだなお前等」

ヒーローショーが終わり、観客達がテーマパークへと戻っている最中、舞台の幕を閉じて片付けに勤しんでいると、相澤が生徒達の前へと立ち労いを掛けてきた…と思っていたが、その表情は強張り生徒達に緊張が走る。

「まず緑谷、何だあの演技は？主人公の役を背負ってんだからその責務を真つ当しろ。ヒーローでも要救助者を助ける為の仕事、人様の注目を浴びるのも当たり前なんだ。下手な真似は金輪際するな」

「す、すみません……」

「次に爆豪。また餓鬼みたいな真似しやがって…、緑谷に対してのその態度はどうかならないのか？お前もヒーローを志す人間なら小さい事で癩癩起こすな。周りに迷惑が掛かる」

「わあーってるよ…」

騒動の発端となった緑谷、爆豪が指摘され2人は反省したのか俯く。

「そして最後、一番迷惑をかけた峰田。お前のその馬鹿みたいな卑猥な考えのおかげで危うく観客の人達に危険を犯す所だった。爆豪が抑えたからよかったものの、もしあの建物が倒れて市民が怪我でもしたらどうするつもりだったんだ？おい？」

「ご、ごめんなさい……」

「相澤先生、私も気付いてたのに直ぐに止めなかつた責任もあるわ…。」

2人に比べて一層怖い顔をして相澤は峰田に圧を掛けながら指摘すると、峰田は完全に縮こまり謝っていた。

すると、蛙吹が自ら挙手をして反省していると暗い雰囲気を見せる生徒達を見兼ねたのか機動が相澤に口を動かした。

「まあ先生、大目に見ましようよね。結果的にはかなりお客様達は高

評価でしたし子供達もよくやったね。あんな事が起きて咄嗟にアドリブを考えるなんて大人達でも早々出来る事じゃないよ本当ね」

機動の言葉に相澤は深く溜息を吐くと指摘した3人を含め、皆に向かって口を動かす。

「幸い、火野と他の生徒達で事は大事にならずに済んだ。爆豪と緑谷も咄嗟に言動したアドリブとその起点は良しとする。だが今後そんな真似をしてみる。一切の躊躇なく除籍処分とする。お前達はヒーローを目指す英雄の生徒何だからこれを機に必ず反省してその過ちを二度と繰り返すな…いいな？」

「「「「はい!!」」」」」

なんだかんだでこの相澤は生徒達を想ってくれているのだろう。相澤の言葉を重々と聞き入れ生徒達は大きく返事をしたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「んああ…!!終わったー!!」

舞台の後片付けも終わり、更衣室を借りて私服へと着替えた解散したA組一向は一旦会場から離れてテーマパークエリアに訪れていた。

時刻は午後の12時を過ぎた頃、切島は大きく背伸びをしてその解放感を味わっていた。

「ヒーローショーもなんやかんやで無事終わった事だし！」

「意外と高評価だったねー！」

「私、後半から何も出来ずにいましたわ…不甲斐無いです…」
「宙ぶらりんだったからね、仕方ないよ」

上鳴がそう言うのと葉隠が手を振っているのか袖がブンブンと動かしながら口を開いていると、申し訳なさそうに八百万は反省している。だがあの状況は仕方ないと耳郎が慰めていると、芦戸がプルプルと震えながら口を動かした。

「皆んな、ただ終わっただけじゃないでしょ…？」

芦戸が珍しく低い声でそう言うと言いつつ騒いでいた生徒達はピタリと止まり俯く。

そして、芦戸勢いよくは飛び上がると同時に声を上げた。

「午後からは自由行動だあー！！！！」

「！！！！イエー！！！！」

芦戸に続いて基本的に明るいグループと一緒に飛び上がって喜んでいた。

「入場料と乗り放題付きで実質タダだもんな！ここで遊ばないと勿体無いってな訳よー！」

「アトラクション！スイーツコーナー！デザート！！」

「食べて遊びまくるぞー！！」

上鳴に続き、麗日、葉隠がそう言うのと飯田が腕を振り下ろし、口を開いた。

「静粛に！！自由行動とは言っても俺達は雄英生！そして相澤先生が言ってた様に羽目を外し過ぎない程度と言われた筈だぞー！」

「おいおいおい…、解散しても尚委員長気取りか？」

飯田の言葉に峰田が険しい顔でズンズンと近寄るとテーマパークに指を指して口を開いた。

「授業の一環としてヒーローショーはこなしたが終わって解放された今！オイラ達は実質お客様、神様なんだよ！プライベートまで茶々入

れられてちやあ良くないんだよなあ!? こういう縛りプレイは好まない主義なんだよお!」

「お前ヒーローショーで一番迷惑掛けた人間だよな」

「唯我独尊…」

縛られたくないのか峰田は強張った顔でそう言う。と瀬呂、常闇が隣で呟く。すると、峰田は勢いよく2人に振り返り指を指した。

「こちとらそんな事くらい分かってんだよ! 緑谷と爆豪以上に反省文を書かされなきゃならねえ始末押し付けられた! だけどなあ!! 今は釈放された身!! こんな美味しい報酬貰つといて遊ばねえでいつ遊ぶんだよお!! オイラも1人の人間としてフリーダムが欲しいんだ!!」

「釈放で…」

「アイツの中で何かが解かれたみたいだな…」

声のトーンが高くなり舞い上がる峰田に瀬呂、砂藤が可哀想な目をしてそう言っている。

相澤に叱られその発端となった3人には反省文を提出しろとの罰が下された。緑谷、爆豪は2枚、そして阿呆な計画を立てた峰田は4枚と言い渡され「差別だああ!」と嘆いていたのは先程までだった。鬱憤晴らしで遊びたいのだろう。すると、珍しく轟が軽く手を上げ口を開いた。

「まあ、峰田の言う事にも一理あんじゃねえか…? この後は自由行動でいいって先生が言ったんなら、別に迷惑をかけなきゃ問題はねえって事だろ…」

「そうだね、普通に遊んでいけば大丈夫だと思うし、飯田君もたまには羽目を外してみたらどうかかな? ヒーローショーをやり遂げた自分へのご褒美としてっ」

轟に続いて火野が飯田に微笑みながらそう言う。

「…確かに、ここまで頑張つて来られたのも全員の力が結束して成し遂げる事が出来たモノ…! よし! 今から自由行動として思う存分フューチャーパークを楽しもう!! 但し! 閉園時間までには必ず退出するぞ!!」

ビシッと振り下ろす様に手をスナップさせ飯田は生徒等に声を上

げそう言うのと生徒達は各々で騒ぎ始めた。

「おっしや！つつつてもハナからそのつもりだったけどなあ！」

テンション上げた上鳴はそう言うのと、後ろで芦戸は女性陣達に手招きをして声を掛けた。

「やったー！お茶子ちゃん透ちゃん梅雨ちゃん響香ちゃんヤオモモ！早く行こー！お腹空いたー！」

「あ、うん！行こ行こ！」

「ケロツ、楽しみね」

「ウチ等も行こ、ヤオモモ」

「はい！（遊園地：よくお父様から聞かされていましたがアトラクションとはどんな物なのでしょう…！楽しみですわー）」

女の子達は和気藹々とそう言うつてまずフードコーナーへと移動して行く。

「爆豪！飯行こうぜ！勿論遊ぶだろ!？」

「はあ!?誰が遊ぶか！帰ってクソ勉強しなきゃなんねーんだよこっちは!!」

「意外と真面目さんだよなお前、まあそう言わずに今日くらいは遊ぼうぜー！俺遊園地なんて小学生以来だからよー！」

切島も爆豪を誘うが爆豪はキレながら断ろうとする。だが背後から瀬呂が近寄り爆豪の肩に手を置く。

「俺もなのよー。つーわけで爆豪今日くらいは付き合ってもらおうぜー?」

「今日は羽伸ばそうぜ！そうと決まれば先ずは飯!!肉食うぞ！」

「あ!?!クソ、テメエ等離しやがれコラア!!」

瀬呂に続いて切島も腕を掴み、爆豪は2人にキレながら無理矢理連れられ移動して行った。

「おい上鳴！オイラ達も行くぞ！女の子達が待ってるぜ！」

「それな！でも流石に腹減ったから飯食った後な！」

峰田もある意味同じ仲間の上鳴を誘いその場を後にする。

その後に障子、尾白、砂藤とその後から離れて残ったのは飯田、常闇、緑谷、轟、そして火野の5人となった。

「飯田君、僕達もご飯食べに行かない？」

「うむ！そうだな！常闇君も一緒に来ないか？」

「フツ、良いだろう。だが俺はアップルパイを味わってみたい…。」

緑谷が飯田を誘うと飯田は隣にいた常闇を誘う。

常闇も賛同するが珍しく食べたい物をリクエストすると緑谷が

「ああ！」と思い出したかの様に声を出して口を開いた。

「ネットで見たけどスイーツコーナーで限定数十個のアップルパイ！見た目もそうだけど美味しさもかなり高評価で僕も気になってたんだ！」

「ほう、それは興味深いな！限定なら早めに行かねば売り切れるかもしれん！早急に行こう！」

「うん…：あ、火野君と轟君もよかつたらどう？」

飯田も食べてみたいのか頷くと、残りの2人に緑谷が声を掛けるが、火野は軽く手を上げ口を動かした。

「あー、ごめん。俺はいいよ。轟君と蕎麦食べる約束してたし」

「ああ…俺も大丈夫だ…」

火野が断ると轟も小さく頷く。

「そうか、それなら仕方ないな。ならば緑谷君、常闇君！3人でアップルパイを堪能しよう！」

「ああ」

「うん、分かった！じゃあ火野君轟君！また後でね！」

緑谷はそう言って3人もその場から離れて行った。

残る2人となったこの場で火野が「よし」と呟くと轟に話し掛ける。

「俺達も行こっか」

「ああ、そうだな」

「(おい映司、約束忘れんなよ)」

「分かった分かった。蕎麦食べ終わってからな」

2人も移動しようとする火野の中のアंकが強請り、火野は軽くあしらいながらそう言って移動したのだった。

そして、その様子を陰から見ていた水操もまた、スマホを耳に当て小声で喋り出す。

「兄貴、例の餓鬼共が移動しましたぜ」

『そうか…、なら決行の準備だな。お前も手伝え水操』

「へいー」

転個から指示をもらおうと水操は頷き電話を切る。

そして2人の後を気付かれない様に動いたのだった。

☆☆☆☆☆☆

午後の時間。フードコーナーに訪れたA組生徒達はそれぞれの食べたい場所へと趣き、フューチャーパークの食事を堪能していた。その中で、火野と轟は飲食店のテーブルの椅子に座っており、やっと注文したざる蕎麦が持って来られ、2人はご馳走にありつけていたのだった。

「……うんま!!めっちゃ美味しいよこれ!」

「ああ…コシが効いてるな」

一啜りした火野はその味と蕎麦のもちもちとしたコシがたまらず美味しさを口に出して表現する。

一方で轟も余程美味しかったのか普段見せない綻びる様な笑みを見せ評価していた。フューチャーパークのフードコーナーもかなりの大手飲食店が協力しているお陰か品揃えも多く目移りしていた。そしてその客もまた多く、火野達が到着した頃にはほぼ満員で注文が殺到している程だった。

「にしても、凄い客だなあ」

「最近出来たばかりの最先端技術で出来た遊園地何だろ?飯も美味しい当然だと思うぞ…」

「そだね、見た感じ家族連れが多いみたいだし」

「……そうだな」

食べながら満員の客席を見渡す火野はそう言う。轟も一旦箸を止めて口を動かす。

火野が子連れのお客を見ながら言う。轟は何処か寂しげな表情をして頷いていた。

「……やっぱ火野はすげえな……」

「ふお？」

ふと、轟がポツリと呟く。突然の褒め言葉に火野は蕎麦を含みながら返事をしてしまう。

「ヒーローショー……緑谷達のミスを最速でカバーしてたる……、機動さんも早々出来るもんじゃないって言ってたし観客達も喜んでた……。お前はすげえよ火野……」

「……うん、そんな事ないよ。あれは偶々咄嗟の思い付きだったし、一か八かの賭けに出たからとてもヒーローとして正しい判断じゃないよ……。けど、ヒーローショーが成功したのは皆んなの力あってこそだと思う。轟君のアシストだって凄いいよかつたよ。あれだけ臨機応変に動けるんだから大した物だよ」

「そうか……？ありがとう……。だけど、お前だってオーズになれば十分なアシスト出来たんじゃねえか……？USJの時の……えと……確か……ガタガタって奴」

素直にお礼を言う轟だが、名前が出てこないのかコンボソングの冒頭部分をレクチャーする轟に火野は「ああ」と理解して口を開いた。「ガタキリバの事？確かにそうだけど、でもあれ他のコンボと違って使ったら物凄く疲れるんだよなあ。」

「最高で50体……だったか？まああれだけ分身すればそうなるのか……。」

「うん、力の代償ってヤツ」

火野はそう言い終わるとそこで会話は止まり2人は黙々とざる蕎麦を啜り始める。

すると、火野の中からアंकが突然出て来て目の前にあるざる蕎麦

を豪快に掴むとつゆに雑に漬け込み頬張る。数回噛んで飲み込むと火野アंकは少し驚いた顔でぎる蕎麦を見ながら口を開いた。

「…まああだな」

だが、そう言った瞬間。そのつゆをなんとグイツと飲み干したのだった。

「…いぶあつ!!?げっほ!!ア、アंक！何でつゆを飲むんだよ!!?」

「（おい！まだ食べてる途中だろが！俺にも食べさせろ!!）」

「俺が食べたいんだよぎる蕎麦は！お前後でアイス食べるだろ!!あー勿体ない…!」

予想外の行動に火野は慌てて表に出てつゆの濃い味が喉にきたのか咳をして咽出す。

火野が美味しそうに食べてるのが気になったのだろう。

無くなったつゆのお椀を見て落ち込んでいると轟は火野の中にいるアंकに向かって口を開いた。

「…アंक、蕎麦のつゆは飲み物じゃねえぞ…。さっきみてえに蕎麦を付けて啜って同時に味わうモノだ…。」

「（フーン！なら最初からそう言え!）」

「…最初からそう言えって、責めて一言言ってから食べるよな…。ああ…。ごめん轟君、ちよつとつゆ貰ってくるね」

「俺の半分やろうか?」

「いやいやいいよ！流石に悪いしっ。ちよつと行ってくる」

火野はそう言って席を離れると1人になった轟は少し見送ると、そのままぎる蕎麦を啜って食べていたのだった。

「あー美味しかった!」

「ああ…また食べに来てえな」

ざる蕎麦を食べ終え店の外に出ると第一声に火野は満たされた満腹感で幸せそうに言うのと、轟もよかったのかそう言ってスマホの食べログでざる蕎麦について評価していた。

「(おい!映司!さっさと行くぞー!)」

「うるさいなあ、言われなくても行くつてば!」

「…相当我慢してるのか…?なら早いとこ行こうぜ火野…」

急かすアंकにキレながら答える火野、それを見た轟はアイスが売られている店へと行こうとする。

「モシモシモーシ?そこの若いお二方っ!」

すると、背後から急に声を掛けられ2人は振り返ると赤と黄色のカラーをしたピエロが立っていた。奇抜この遊園地の仕事をしていてその関係か何かで声を掛けたのだろうかと火野は思っているとピエロは独特な喋り方で話しかけてきた。

「ヒーローショーで来てくれたユウエイのお2人デスヨネ!僕ちゃんとってもシビれましたー!感動感謝ですよ!!ブラーボー!」

「は、はあ」

「えと、ありがとうございます…」

その喋り方とくねくねと動く仕草をするピエロに火野と轟は脂汗を流しながら頷くとピエロは片手に持っていた大量のカラフルな風船を二つ、差し出した。

「これは僕ちゃんから細やかなプレゼントです!この後はアトラクションで遊びマスデスヨネー!楽しんで行ってくださいー!」

「風船だつ、ありがとうございますっ」

一つずつ貰い、火野はお礼を言つて轟は無言で会釈しながら受け取りふわふわと浮かぶ風船を眺めていた。

「デハ!僕ちゃんはこれでーシーユー!!」

風船を渡した途端ピエロはそう言つて颯爽にその場から立ち去つて行く。

「…俺あまり来たことないからわかんねえんだけど、遊園地ってこういうの渡すのが仕事なのか…?」

「さ、さあ…?まあでも良かったじゃん。タダで貰えたんだし」

轟は風船を見ながら首を傾げそう言う。火野は苦笑しながらも貰い物は貰い物なので素直に喜ぶ。

「(おい！風船なんかどうだっていいだろ！アイスだ！)」

「はいはい…、行こうか轟君」

「ああ、アイス何があるんだろな…」

急かされるアंकに火野は渋々了承して轟と共に2人は風船を手に持ちデザートコーナーへと移動したのだった。

☆☆☆☆☆☆

「のああ!!全然相手にもされてくんねーじゃねえかよお!!」

時刻は午後14時半頃、昼ご飯を食べ終えたA組、観客達はメインとなるテーマパークを遊んでおり、ゴンドラやジェットコースターなどがフルで起動しておりフューチャーパーク内は洒落たBGMと観客達の楽しそうな声により賑わっていた。

そんな中、敷地内の道の脇にあるベンチで峰田は土足で立ち上がり突然発狂していた。

「早めに飯切り上げて来たけど、結構カップルとかばかりだもんな、よくよく考えたらこんなところに女の子一人で遊びに来るもんじゃなくね?」

「上鳴！女子は友達と来る奴等だっていんだよ!…でも相手にもされねえ…!!」

うああ！オイラだってイチヤイチヤして遊びたい！ハーレムで遊

園地を堪能したいんだよお!!」

「とりあえず落ち着けよ」

峰田と行動していた上鳴は疲れたのか自販機で買ったジュースを飲みながらそう言うのと猛烈に息が荒くなる峰田が声を上げており、他の人達の視線を買ってしまった為、冷静に上鳴は峰田を落ち着かせる。

「まあとりあえず野郎だけでもアトラクション乗らね? せっかくの無料の入場料が勿体無いしさ」

「上鳴: オイラお前と友達でよかったぞ:!! だが本音は男じゃなくて女の子と乗りたいんだよお!!」

「余計な一言がなけりやマシな方なのに:」

上鳴はそう言って苦笑して飲み干したペットボトルを近くに置いてあつたゴミ箱に捨てる。

すると、その捨てた拍子に奥の方からこちらにやってくる女の子に視線が行く。

「あらー! 中々可愛い子じゃん!」

「どこだあ!?:...ん? 変な格好してねーかあの女子」

遠くからだだがその可愛らしい顔はハッキリと分かる上鳴は声を上げると峰田が食い付いて女の子を見る。だが、峰田の言う通り、可愛いらしい女の子の筈なのに服装は男性の格好をしていた。

サイズが合っていない様なダボとした服でこれまたサイズが合っていない眼鏡なのか少し斜めっている。女の子は2人に気付いていない様で、辺りをキョロキョロと見渡しながら何か思ったのか急に走り出そうとする。

コテツ:..

ののだが、何故か急に躓き転けたのだ。

「転けた!?!」

「これはチャンスだ上鳴! 助けてあわよくば最高のお礼をしてもらお

うぜ!!」

その動作に驚く上鳴だが、卑猥な考えは変わらず峰田はそう言つて駆け出す。上鳴も後を追いかける様に走り出し、その転けた女の子へと近寄り声を掛けた。

「御嬢さん、お怪我はありませんか? ☆」

「失礼、余りに君が可愛らしい顔をしていたから、見惚れてしまい助けるのが遅れてしまった☆」

言つてしまえば気持ち悪い顔をしながら2人は声を掛ける。女性にナンパする際、この様な感じで話しかけられたらそれは誰も寄つてこないであろうその表情に、転けた女の子は傾いてた眼鏡を元に戻すと、2人の顔を見て何故か笑顔になり口を開いた。

「峰田君! 上鳴君! よかった! 君達は無事なんだな!」

「エ?」

突然、2人を知つてる様な言い方をする女の子にキョトンとした顔で上鳴と峰田は声を漏らす。

「ど、ドナタデスカ...?」

「いや待て上鳴! オイラ達は体育祭やヒーローショーで活躍した身だ! 名前を覚えられる程有名になったんだきつと!」

名前を知られている目の前の女の子に急に片言の言語で会話しようとする上鳴だが、峰田はそう言うとは何故か鼻血を出しながら女の子に手を差し伸べた。

「ホラ、大丈夫かい? 転んでしまつては綺麗なお身体に傷がついちまうぜ?」

「あ、ありがとう。だが心配は無用だ! 元より俺の『個性』エンジンで毎日走っているからな! 鍛えてあるこの身体なんの影響もないぞ!」

「は？何してんだよ！午後の飯時ならあのエリアに集まっている時間帯に渡せって言ったろ!？」

「く、隈無く探したんですけど！何せ人が多いもんですから、中々発見出来ないと言いますか……!？」

「言い訳すんな！……ちつ、まあいい。他の餓鬼共には風船配ったからヨシとするか……。」

水操の言い訳に怒る転個だが、他の生徒達には風船を渡したのかすんなりと落ち着いてそう言っていた。

「へっへ、今頃驚いてわんわんと泣き喚いているのでしょーね!？」

「ああ……そうだな……。俺の『個性』は人生を狂わす自分でもびっくりな『個性』だからな……!……ひっひ……!……自分そのものが反転したらそりゃあ、もう今までの生活なんて出来るものか……!？」

喜ぶ水操に転個はニヤリと不気味な笑みを浮かべ自分の手からピントの色をした煙が微量に立ち昇り、そう言っていた。

性半転個せいはんてんこ

個性『リバーシブル』

身体から出る桃色の煙を相手に浴びせる事で

その相手の性別を反転させる!!個性も反転する!

因みに自身には効果がないぞ!!

「お、お、お前本当に飯田なのか…?!」

「ああ！皆で昼ご飯を食べ終えた後、突然ピエロから風船を貰ったんだが、その風船が破裂してしまい、気が付けばこの様な女体へと変貌していた…！間違ひなく、『個性』が関係していると俺は考えている…！」

「女になるって事…?!何だよその『個性』持ちの野郎…?!」

目の前にいる飯田と名乗る女の子に半信半疑の上鳴は再度問うと間入れず彼…彼女は返事をする。

喋り方とその愛用の眼鏡、そして男性の服装。先程言っていた自らの『個性』をエンジンと言った時点で間違ひはないだろう。

上鳴は自分が女の子になると想像したのか気味悪がると、峰田はプルプルと身体を震わせ口を開いた。

「ゆ、許せねえ…!!飯田がこんな姿に…!!クソオ…!!」

「峰田君…!!」

拳を強く握り俯く峰田に飯田は感心して目を見開いていた。

あの峰田がこんな言葉を言うとは思わず上鳴は驚く。確かにクラスメイトがこんな哀れも無い姿に変貌したのは驚くが、それ以前に友達はそのピエロと言っていた敵にライオンやられてしまった事に上鳴も峰田に同感して口を開いた。

「そ、そうだな！同じ仲間としてこんな事許される筈がねえ！」

「ああそうだ上鳴…!!」

上鳴の言葉に峰田は強く頷く…のだが。

「あのクソ真面目で女の子とかに興味が更々ない飯田がこんな可愛らしい女の子の姿になっちゃうなんて!!今現在目の前にいる飯田と言う名の美少女にオイラ変な気持ちと衝動に狩られちゃってしまったじゃねえかよおおお!!」

「一瞬でも見直した俺が馬鹿だったわ」

両手で頭を抑え発狂する峰田に真顔で見下す様な目をして上鳴はそう言った。そのまま峰田を無視して上鳴は飯田に向かって口を開く。

「えと…飯田、お前確か緑谷等と一緒にじゃなかったか？」

「ああ…！だが緑谷君と常闇君も風船が割れて女体化してしまったている！2人は向こう側のトイレ付近で待機してもらって俺が助けを呼びに来ていた訳だが…いかんせんどうも足の調子が悪い…！エンジンを発動させてもマフラーの音が鳴らないのだ…！」

（生…足…）

飯田は脹脛を見ながらそう言う。以前のゴツゴツとした筋肉質の脚とは裏腹に女の子の様なムツチリとした足になっており上鳴はゴクリと唾を吞んでいたが元は飯田なのでブルブルと首を振る。

そして飯田の脹脛のマフラーからはどこか爽やかな音が聴こえて来るのを確認した上鳴は何か思ったのか口を開く。

「この音、なんか俺の両親が乗っていた『ハイブリッド車』の走行音に似てる気がするんだけど…。」

「む!?ハイブリッドだど!?」

上鳴に言われて飯田は驚く。すると、再び走り出そうと脹脛に力を入れて爽やかなマフラーの音が鳴り、走り出そうと前に一步踏み出す。だが、慣れないのか「あっ」と声を漏らし、その場で踏み外してコテツと転けてしまう。

「た、確かにいつもと違い出出し野感覚が全く違うと同時に掴めない…!!俺のエンジンは自動車やバイクの様なマフラーを催した『個性』…!!だが今の俺のエンジンは騒音を抑え周りに優しい音をマフラーから出している…！」

ま、まさか!あの風船から出た桃色の粉は女体化だけではなく『個性』までもが半転するのか…!!」

「(ドジっ子眼鏡…ええですな…)」

四つん這いになりながら考えを推測する飯田。

それを見ていた峰田は満面の笑みでグツジョブを送る。

…飯田の現状を鑑みる。という事は、即ちこうだ。

飯田天哉（男↓女の子）

個性『エンジン』↓『ハイブリッド』

爽やかな音を出して発進！

周りに迷惑も掛からず、安全優先で（普通）走る!!

だが感覚を掴めなければエンストみたく止まってしまう！エンジンを掛けて止まってる時に作動するアイドリングブレーキってヤツさ!!

「取り敢えず飯田はさ！歩く事は出来るんだったら “個性” 使わずに歩いて救けを呼んできたらいいんじゃないかねーのか？オイラ達は緑谷達と合流して事をしでかした犯人を探してみるからよ？」

先程までトチ狂っていた峰田が冷静になって飯田にそう言うとな飯田は少し考えて了承したのか頷き口を開いた。

「そ、そうだな…俺とした事が公共の場で “個性” を使ってしまう所だった。すまない上鳴君、峰田君。俺はなるべく急ぎで助けを呼んで来るから君達も注意していてくれ！無論犯人と出会しても戦闘はしないように頼むぞ！」

飯田はそう言うのと急いでいるつもりだろうが凄惨な兵隊が歩く様な動作をしながら早歩きでその場を後にする。それを見送り遠くなる飯田を確認した上鳴は大きく息を吐いて口を開く。

「いやあ…マジで焦ったわ…！あんな可愛い子が飯田だなんて普通驚くっしょつ。声も女の子だしビビるて」

「おい上鳴！早いとこ緑谷達のとこ行こうぜ！」

「え？お、おおそうだなつ、きつと緑谷達も困ってるだろうしな！」

脂汗を腕で拭う上鳴に急かさんと峰田が手招きをする。上鳴は飯田に言われた通りトイレへと向かうが、その移動中に峰田が話しかけてくる。

「オイラも色々焦ったけどよ…！コレってある意味凄い体験じゃ

ねーかってオイラは思うんだよな」

「はあ？ 凄い体験？ いやいや完璧に事件だろコレっ。絶対敵^{サイラン}絡みじゃね!? 俺女の子好きだけど女の子になるとかは絶対嫌だぜ!」

「そうじゃねえよー！ いいか？ あのクソ真面目な飯田があんな可愛らしい姿になったんだぞ？ だったらその影響を受けた緑谷達だっつて同じ事になってるって事だろ？」

「いやまあそうだろうけどよ…それがどした？」

峰田の言葉に上鳴は首を傾げると、峰田は鼻息を荒くして口を動かした。

「飯田があんなにレベルが高い女の子…！ なら他に影響した奴らはどう思う…!!?」

「…!! た、確かに気になる…!!」

何かを想像したのか上鳴は数秒目を上に向け口を動かす。それを見た峰田はニヤリと笑い向かっている速度を早めて声を上げた。

「きつと緑谷も超美人に違いねえってこった!!」

「そ、そうだな…！ 目の保養としてなら全然問題ないな！ ヤベエ、なんか興奮してきた俺!!」

峰田の口車に乗せられ上鳴も本来の事を忘れて峰田と同様興奮と性欲の塊と化して走り出したのだった。

☆☆☆☆

「お!? あそこじゃね?」

「緑谷以外にも誰か居るみたいだ！ 行くぞ上鳴!」

上鳴と峰田は大はしやぎで向かうと飯田の言っていた通り、公衆トイレの直ぐ側に緑谷と常闇、それと何名か居るのを目撃し、2人は急い

で駆け寄った。

「おーい！」

「っ!!？」

上鳴が叫ぶと緑谷は驚いて何故かトイレの壁の向こうへと隠れてしまう。そして上鳴の声に気付いた常闇と、残りの3人の男装の女の子は振り返り声を掛ける。

「上鳴！峰田！お前等…は何も起きてないのか！」

「え…!?て事は術中にハマったのは俺等と火野達だけか？」

「どうだろう、分からないな…。とにかくお前等は無事で何よりだ」

3人の女子等が喋っていると峰田は「分かったぞ！」と声を上げてその子達に順番に指を挿して名を言ってあげた。

「喋った順から尾白！砂藤！障子だろ!!」

「おお!？スゲエな峰田！尾白は普通に分かったけど他の面子は分からなかったわー!」

「女の子になっても俺普通なのね…」

峰田が答えるとうやうやら正解みたいで3人は頷く。隣で感心する上鳴の普通と言う言葉に尾白は涙目になってボソツとしよげていた。

見た感じは尾白は特に変わった要素はなく普通にいそうな女の子の声や顔、身体付きになっており、驚く事に尻尾が生えておらずお尻の部分が丸見え、かと思いきや変わりに毛髪がお尻の下部分まで伸びていて上手く見えなくなっている。

「砂藤、お前学校のクラスにいそうな顔してるのな」

「分かる！」

「え?…お、おう?」

上鳴は少し可愛いとは離れた身体付きと顔の砂藤を見て言うと共に感したのか峰田は間入れず相槌し、砂藤は腑に落ちない表情で頷いていた。

「障子！お前めっちゃ顔整ってんじゃねーか！ちよつと友人としてマスキ取ってくれよお?なあ?頼むよお?」

「…申し訳ないがそれは断る」

一方で障子は普段の姿とは比べ物にならない程可愛いらしい顔付

きをしており、私服で羽織っているポンチョがいいアクセントで可愛さが強調されていて峰田が興奮気味にそう言う和不機嫌そうに首を振る。

「…峰田、上鳴。敵の術中に掛かった俺達はこの様な身なりになって少し傷付いている。悪いが、もう少し言葉は選んで発して欲しい…」

「あ、悪い常闇…（常闇も…女の子、なんだよな…?）」

「す、すまねえ…（あんまり変わってねえ）」

ふと、トイレの壁に寄りかかっていた常闇（女）が上鳴と峰田のはしやぎ振りを見て若干不機嫌そうに口を開く。2人は全然変わっていない（強いて言えばまつ毛が伸びて若干女の子らしい身体付きの）常闇を見て謝っている。

すると上鳴は先程から隠れていた緑谷の視線を感じて目が合う。

「ひゃっ…！」

緑谷は驚いて女の子らしい声を出しながら顔を壁の向こうへと引っ込める。

「どうした緑谷?」

「事情は飯田から聞いてるから大丈夫だって」

峰田と上鳴がそう言う不、緑谷は身体を震わせて恐る恐る壁から出て来るなり顔を真っ赤にして震わせながら言葉を出した。

「ちよ…ゴメン、僕今…身体が…その…変なんだ…!あまり近寄らないで…うう…!」

「!!」

涙目になりながら身体をもじもじさせ小声でそう言う緑谷。そのスリーサイズは見事にボンツキュツボンな身体付きをしており、緑の縮毛も少し伸びて女の子としてはだらしな髪型だが、地味系にいなヘアで中々どうしてかかなり可愛いく見えてしまふ上鳴と峰田は鼻血を吹き出してよろけていた。

「（恥じらう地味目な巨乳女子…!くう!!）と、とりあえず俺達は飯田に言われて来たただよ！」

「（ヤベエ!思いの外とんだ穴馬キタコレ!!）他の奴らもこうなってるのかよ!だとしたら許せねえ!!」

「ウン、その下心を取り敢えず直ぐに引っ込めてくれる2人共？」

鼻血を手で抑えながら上鳴と峰田は心配そうにそう言うが、言葉と動作が合っておらずそれを見ていた尾白は真顔でツツコんでいた。

「てか女の子になるなんて夢にも思わない出来事だよな。さつきはパニックになってたけど雄英に在学してるせいなのか以外と冷静でいる自分がこえー…。」

「だけどせつかく遊ぼうと思ってたのにとんだ災難だぜ…はあ…」

「…ああ、個性」もどうやら変わっているみたいだからいかなせん不自由極まりない」

「俺も尻尾がなくなつて焦る…。あのピエロ見つけ次第すぐに戻してもらわないと今後が心配だし明日学校行けないよ…」

駆け付けた2人が当てにならないと思つたのか砂藤、障子、尾白はそれぞれ身体を見ながらそう言うて話し合い、落ち込んでいた。

すると、気になつたのか上鳴は鼻血を拭き取り女の子になっているこの場の5人に聞いていた。

「そーいやあ、お前等も飯田みたいに反転したんだよな？ちよ、それだけマジ教えてくんね？」

上鳴が聞くと、現時点で分かる範囲で5人は順番に言い始める。先ずは尾白からだつた。

「俺、尻尾が急に無くなつて変わりに髪が伸びたんだ。しかもこの髪動かせるんだよ」

尾白猿夫（男↓女）

個性『尻尾』↓『立髪』

髪を身体の一部として自在に操れる！

巻きつけたりしなる鞭の様に攻撃出来るぞ!!

反転しても普通だ！

次に砂藤。

「お前等が来る前に俺も気になって試したんだけどよ…。糖分摂取したら力が湧かなくてなんか頭が気持ち良くなっただよな…。恐いんだけど正直あの感覚忘れられねえっつーか…」

「いや、それ危ないだろ」

砂藤の言葉にそのヤバい表情をした彼に上鳴がツツコむ。

砂藤力道 (男↓女)

個性『シュガードープ』↓『シュガードッグ』

糖分を摂取すれば少し寝れて次第に脳が快楽になる！

その快楽は忘れられない程気持ち良いだとか！ドラッグですね、皆さんは手を出したらダメだぞ！

続いて障子。

「恐らく…俺の複製、その反対は“原物”。

複製するのではなくて原物そのものを出すんじゃないかと俺は思う…。おかげで複製して喋る癖も出来ない…本当に困った…」

障子目蔵 『男↓女』

個性『複製腕』↓『原物腕』

腕から自信の実体そのものを原物を生み出させる事が出来る！
本物のもう1人を出せる事が出来るぞ！ドツペルゲンガー!!

お次は常闇。

「俺のダークシャドウ…。その対義語ならば光から生まれし分身。名付けるなら……。出でよ！ホーリーシャイン白 光！」

『ハアイ!!』

「うわ眩し！」

「なんも見えねえ!？」

常闇が声を上げると眩い元ダークシャドウがオカマ口調っぽく返事をして現れる。だがその眩さ故に何も見えず上鳴と峰田は反射的に顔を隠していた。

常闇踏影 (男↓女)

個性『ダークシャドウ黒影』↓『ホーリーシャイン白光』

伸縮自在で実体化する光っぽいモンスターをその身に宿している！眩しいZE!!!

最後は緑谷。

「ん…!!」

緑谷は身体に力を入れるがいつもの様に緑の稲妻が身体に走らず何も起こらなかった。

「…何も起きないな(ヤバイ、踏ん張ってる顔かわええ…)」

「超パワーの反転だろ?…何も力が出せないってことか緑谷?(この顔反則だろお…)」

プルプルと震えて頑張ろうとする緑谷の顔を見て上鳴と峰田はそう言いながら皆に見えない様にグツジョブを作っていた。

結局何も起こらず気張った顔を解くと緑谷はこの世の終わりみみたいな表情をして俯く。

緑谷出久 (男↓女)

個性『ワン・フォー・オール』↓『(恐らく)無個性』

恐らく超パワーが出せない!ただの一般人になっちゃったか!?

「げ、元気出そう緑谷君、あの風船が原因だしそれを渡したピエロが今回の元凶だからさ」

「そうだけ緑谷。今飯田の奴が助け呼んでくれに行ってるんだから俺等は信じて待つところぞ」

「……う、うん。ありがとう尾白君、砂藤君……」

涙目になっている緑谷に尾白と砂藤がそう言うとき少しだけ笑顔になつて緑谷は頷く。

「……しかし、現状こうなつてしまつてはいるが、この騒動は如何やら俺達だけあの道化人の術中にいる様だな」

「ああ、一般市民の人達は皆普通にアトラクションを愉しんでいる。恐らく、敵の狙いは今日訪れた俺達雄英の生徒を襲うつもりなのだろうな」

常闇は周りを見渡しながらそう言うと、他の客は何事もなくただフューチャーパークのアトラクションを楽しみ遊んでいる。障子は頷き推測すると緑谷は冷静になつたのか口を開いた。

「うん……僕も障子君の推測と同じ事を考えてた……。ここにいる僕等の他に飯田君、そして火野君と轟君もピエロの“個性”に掛かっている。それに僕達がヒーローショーを終え、お昼ご飯を食べた後にこの事件は起きている。恐らくあのピエロは事前に僕達がここに来るのを想定して他の市民達がパニックにならないお昼時にこの計画を実行したんじゃないかなつて僕は思うんだ……」

「ええ!?でも何で俺達学生に!?!」

緑谷の考察に上鳴が驚くと緑谷は少しだけ首を傾げながら口を動かした。

「僕にも分からない、でも怪我をさせずに僕等に近付いて相手の“個性”でこんな姿に変えたのなら、何か過去に嫌な事があつてその仕返しみたいな感じをしたんじゃないかな……?」

「そうであつても許されないやり方だ……」

緑谷に続いて障子がそう言うとき、突然峰田が何か思い出したかの様に口を開いた。

「そーいやあ、火野達も女になつたつて言つたよな!?あいつ等はどこにいったよ!?!」

「えと、俺達がこんな姿になつた時に偶然合流したんだけど、ピエロ探

しに行くって行って園内の向こうへと走って行ったよ」

「俺達もピエロを探そうとしてたら緑谷と常闇に会ってな。飯田が助けを呼びに行ってるって聞いたから俺達も大人しく待つ事にしたんだ」

峰田の言葉に尾白、障子がそう答えると峰田は上鳴に向かって声を上げる。

「上鳴……ここはまだ敵の攻撃にやられていないオイラ達が動くべきだと思わねえか!?他の奴らが困ってるかもしれないねえ!」

正義感のある強い言葉だが、その目は何か企みがある様な目付きをしており、上鳴にアイコンタクトみたく送っていると、上鳴は理解したのか口を動かした。

「ああそうだな峰田!まだ何も起きていない俺達なら助けに行けるかもな!」

上鳴も峰田にアイコンタクトを送ると緑谷は何か閃いたのか口を開いた。

「そうか!敵の狙いは僕達、ならまだ姿を変えられていない上鳴君と峰田君を何れ狙って来る!」

「成る程……わざとシラを切って風船を貰おうと相手に接近し、捕らえると言う算段か」

「おお!良い作戦思い付いてるじゃねーか!」

緑谷に続き常闇、砂藤と理解して行き希望が出来たかの様な視線を二人に送る。だが2人の狙いは半分はそうだがもう半分は卑猥な事しか考えていなかった事を緑谷達は知る由もなかった。

「そうと決まれば直ぐに行こうぜ上鳴!救世主のオイラ達の力、その馬鹿面ピエロに見せたらうや!」

「おうよ!お前等はここで待っていてくれよな!俺と峰田がパーっと解決して来てやるぜ!」

頼もしい発言を最後に2人はその場を後にして離れて行った。その後ろ姿を見送った後、緑谷のスマホから着信音が鳴る。緑谷は手に取り画面を確認すると、そこには「麗日さん」と書かれていたのだ。た。

☆☆☆☆☆☆

「うわ〜ん!!!酷いよこれ〜!!!」

「ちよちよちよ三奈!?声が大きい!!!他の人等に見られたら死ぬ程恥ずかしいから抑えて!」

一方で、フューチャーパークを満喫していたA組女の子達。だが、不幸にも彼女等も転個が用意した風船の餌食となってしまう、女から男の子へと姿を変えられてしまっていた。

女の子から男の子になってしまった為、私服の格好は側からみれば変態と認識されてしまう緊急事態になっていた。

だが幸いにもヒーローショーで予備として持ってきた雄英の体操服を持って来ていた為、女性グループは何か口ツカールームに置いていた持ち物を取って大急ぎで着替えて、そして今…人に見られない様に茂みに隠れて身を潜んでいた。

男の低い声で泣き喚く芦戸（男）を慌てて耳郎（男）が口を抑えて止めようとする。

「私の『個性』が酸じゃなくなったー!見てよコレー!固まるんだけどー!?!」

「いやそこじゃないっしょ!!ウチら男になったんだよ!?違和感の塊でしかないよこの姿!」

芦戸は手から粘着性のある液体を手から出して泣きながら言うように全力で少しキレ気味に耳郎がツッコむ。

すると芦戸は耳郎の言葉に首を傾げるながら口を開いた。

「えー何で?私は何かスツゴイ体験してる様な気がするよ!何か身体付きもゴツゴツしてるし下半身にも立派なモノがつ」

「わわあー!!!?」

突然の爆弾発言に耳郎は勢いよく声を出して止める。

すると隣で顔を真っ赤にしたイケメン男子、八百万が小声で2人に声を掛けた。

「お、お二人共…!お願いですので静かにしててくださいませんか…!?!」

「ご、ごめん…」

「ヤオモモマジでイケメンだよね」

両手で精一杯体操服を着ているのにも関わらず身体を隠そうとする八百万に耳郎は謝り、芦戸はそのイケメンな顔に羨ましそうに見ていた。

「はあ……本当にどうしてこんな事になってしまったのでしょうか…、私まだ何も乗っていませんわ…」

「そうね、透ちゃんが探しに行ってくれてるけど、あのピエロの男、もし園内から出て逃げ出したりなんかしてたら私達どうなっちゃうのかしら?」

「梅雨ちゃんマジで変な事考えないで」

落ち込む八百万に全く顔が変わっていない（髪が短くなつたくらい）の蛙吹が恐い事を言い出して耳郎が青褪めながら言い返す。

「取り敢えずウチらはここで待機しとこ…、ウチの『個性』素敵とか出来なくなつたし、こんな状態じゃ歩く事すら出来ないし…」

「そうですわね…私の『個性』も反転してしまったのか創造しても何も出てきませんわ…」

「性別も反転して『個性』も反転…恐ろしい『個性』ピョロね」

「(ピョロ…?)」

耳郎が提案して八百万は頷くと自信の『個性』が発動せずに落ち込む。隣の蛙吹もそう言うと言語尾のピョロが気になったのか蛙吹をジツと見ていた。

彼女達もまた『個性』が反転している。となれば、現時点での彼女等の『個性』はこうだ。

八百万百（女↓男）

個性『創造』↓『模倣』

発動すれば他者の真似をする！おんなじ行動を取る！はつきり
言って全然使えない！イケメンのくせに！

耳郎響香（女↓男）

個性『イヤホン・ジャック』↓『メガホン・ジャック』

耳朶のメガホンで自信の心臓音を大ボリュームで範囲に轟かす！
これかなり強力じゃね!?

芦戸三奈（女↓男）

個性『酸』↓『接着液』

身体から何でも固める接着剤の様な液体を出す！

だが使い方を間違えれば体と服がくっ付いて脱げなくなる大変な
個性だ！

蛙吹梅雨（女↓男）

個性『蛙』↓『おたまじゃくし』

おたまじゃくしっぽい事は何でも出来る！

だが蛙とは違って陸では何も出来ない！

補足だがおたまじゃくしの尻尾が今彼に生えてるぞ！

本人曰く子供の頃に戻ってしまったと酷く落ち込んでいるぞ！

ふと、蛙吹は「ちよつと電話してくる」と言って居なくなった麗日
がまだ帰って来ない事を口に出して言う。

「お茶子ちゃん、遅いわね」

「…トイレ？」

「野暮な事考えるなっ」

蛙吹の言葉に芦戸がそう反応すると耳郎が耳を真っ赤にして芦戸
の頭を軽くチョップしていた。

☆★☆☆☆☆

一方で、麗日は…

「…!!間違いない…!見つけた…!!」

緑谷との電話を終えたのかスマホを降ろして茂みに隠れている麗日(男)は風船を持つているピエロを発見する。その顔は間違いなく麗日達に風船を渡したピエロ事、転個だった。

「(ここで見失ったら一生戻れなくなるかもしれへん…!ウチが追わなきゃ…!!)」

麗日はそう思いながら髪を耳に掛けようとするが髪の毛も短くなっており耳に掛ける程の毛髪がなく空振ってしまい「あ」と小さく声を漏らし1人で恥ずかしがる。

だがそれも一瞬でかなり早歩きで歩くピエロを見失わない様に追いついて掛けたのだった。

No. 59 やつたれ反転生徒

ヒーローショーを終えたA組生徒達はせつかくの休日を残りの時間、フューチャーパークで遊ぶ事となった。だが、突如現れたピエロの風船により、生徒達は性別が入れ替わり「個性」も反転してしまった。助けを呼ぶ者も入れば、元凶であるピエロを探そうと園内を捜索する者もいた。

果たして、生徒達は無事に元の姿に戻る事が出来るのだろうか…。

☆☆☆

緑谷達が待機している公衆のトイレ付近から少し離れたエリア。ここはジェットコースターやゴンドラ等迫力満点の乗り物が集うエリアで、そこで緑谷達と同様に性別と「個性」を反転させられ、元凶であるピエロを探している生徒達が居た。

「クソがああっ!!!何処に居やがんだあのクソピエロ!!直ぐに見つけてぶっ殺して血祭りにしてやるああ!!」

「物騒な事言うなよ爆豪!でも早いとこ見つけねえとマジでヤベエ事になるなこれ…!」

「爆豪、取り敢えずその『顔』と『声』と『姿』で汚い言葉使うの止めよーぜ?」

「うっせ黙ってろしようゆ顔!!あんな風船 teme 等が受け取らなかつたらこんな事にはならなかつたんだクソが!!つべこべ言わずに探せカス!!こちとらババアの餓鬼の頃みてえな身なりで気持ち悪いんだよお!!!」

怒鳴り散らす物騒な女の子。側から見ればそう見えるがその中身はA組の爆豪。女性になったその姿は気性の荒い彼の母親と見た目も中身もそっくりで本人は物凄く気にしているのか相当嫌がっている。

次にピエロが見つからなかった事を考えたのか焦りを感じる切島は男らしい容姿だった時とは裏腹にムチムチの美肌にワックスで固

めてた髪が下りて可愛らしい女の子と声になっている。

そして瀬呂は身長が変わらず高身長女性の身なりで顔もそのまま女の子にしたまさにモデルと言えるその立ち姿。周りの市民からチラチラと目線が送られて来る程だ。

辺りを搜索している中、爆豪はふと子供達に風船を配っているピエロを発見し、物凄い勢いと形相でズカズカと詰め寄り、その顔をグイツとピエロの顔面に接近して声を掛けた。

「テメエか!?俺等をこんな姿にしたのは!!?」

「ひ!!な、何ですかお嬢さん!!?」

「誰がお嬢さんだコラア!!正直に言えや!!その風船に細工でもしてたんだろー!ああ!!?」

「ひいい!!」

ピエロからしたら今の爆豪は怖い女の子。ピエロは恐れを成してビビると瀬呂がピエロの顔を確認し、良く見るとメイクの仕方が違ったのか慌てて切島と一緒に爆豪を引き剥がす。

「待て待て爆豪!この人よく見たら違う顔してるだろ!」

「この園内にピエロは沢山いるからって一人一人にそんな怖え顔して尋問すんたって!女の子になってもお前怖いから!すんませんこいつちよつと頭おかしくて…!」

「テメエから先に血祭りにしてやろうかクソ髪!!」

ジタバタと暴れる爆豪を2人は抑えていると従業員であるピエロはそそくさにその場から離れる。

いつもなら意外と冷静な爆豪も女体化して相当嫌なのだろうかその冷静が掻き乱されているようにも見えた。

「さっきのでこから辺のピエロはこれで全員じゃね?」

「そだな、まだ探していないエリアに移動すつか。…まあしっかし意外とこの遊園地広いなあ。爆豪、これなら警備員に事情説明して搜索してもらった方がよくねえか?」

この辺りのエリアにいたピエロ達を調べ終えたのか瀬呂は口を開くと切島は爆豪にそう言う。

だが爆豪は「ケツ!」と悪態を吐くとキレ気味に口を動かした。

「阿呆か！そんな時間あったらクソピエロは逃げ出すに決まってるだろが！他の客共を見る限りこんな姿に変えられたのはどう言う訳か知らねえが恐らく俺等だけだ。今頃他のA組の連中も同じ被害に合ってるだろおから奴らもクソピエロを探してる筈だ。こんなみみっちい真似をする野郎なら俺等の姿を見て面白可笑しく観察してるだろよ、ならそう簡単に園内の外から逃げやしねえ…。だったらそれまでに探して速攻でぶちのめすまでだ！」

「成る程…！やっぱお前意外と冷静と分析力兼ねてんな！流石だぜ爆豪！」

「当たり前だ!!俺あいつでも頗る冷静だわクソが!!」

「その性格じゃなかったら完璧なのによー」

才能マン故の発言に切島は感心し、爆豪はいつも通りにキレる。それを見ていた瀬呂はボソッと呟いていた。

「しかし、まさか『個性』も反転するなんてよー。俺只でさえ地味なのにもっと地味になりやがった…」

「俺だって自慢の『テープ』が張り付かねーテープになったよ。こればかりは勘弁してくれっつーの」

切島が自身の腕を見ながらそう言うのと瀬呂もテープが射出する肘部分を見て溜息を吐く。

すると、爆豪もソレを聞いたのか彼等に背を向け見えない様になると、掌を出して『個性』を発動させる。

普段はニト口の汗が出て爆発するのだが、発動させた瞬間、掌の上で氷が生成されていた。

それを見た爆豪は小さく「ちっ」と舌打ちをしていた。

切島鋭児郎（男↓女）

個性『硬化』↓『もち肌化』

身体がもっちもちの柔らかか肌になる！

触っていると赤ちゃんの肌みたく気持ち良いぞ！

戦闘とかは全く持って皆無だけだな！

瀬呂範太（男↓女）

個性『テープ』↓『ボジテープ』

肘から粘着がないテープ的なものを射出！

まあ粘着がないだけで後は何ら変わらない！

爆豪勝己（男↓女）

個性『爆破』↓『冷氷』

手から液体窒素のような汗を出し自在に氷結させる！

動けば動く程大量の汗を流して本領発揮！

だが、使えば使う程身体が冷えて発揮しなくなるぞ！

はつきり言って使い辛れええ！

「オラー！とつとと行くぞー！」

掌の氷をパキンと握り潰し、爆豪はそう言うのと先頭を我先にと言わんばかりに歩いて行く。切島と瀬呂も後を続くとふと、瀬呂が切島の身体をジロジロと見ていた為か切島が気になり声を掛けた。

「なんだよ人の身体ジロジロ見て…」

「いやあ、お前意外と体型が女の子らしいっつーか何というか…発育の賜物じゃね？」

「はあっ!? やめろよ何か気持ち悪い！俺だってマジで好きでこんな身体になったつもりじゃねえぞー！」

突然の問題発言に切島はバツと胸を両手で隠して背中を向ける。それを見た瀬呂は苦笑しながら「そんな趣味ねーから安心しろ」と言って揶揄われて怒る切島と共に爆豪について行ったのだった。

☆☆☆☆☆☆

一方で、爆豪達が向かおうとするエリア。

ここは子供達を中心に遊ぶメリーゴーランドやコーヒーカップ。ゆっくり回転する乗り物等が集うエリアで子供は勿論、家族連れのお客が沢山いる場所。

「轟君〜！居た？」

走って轟がいる場所へ向かう火野。だがその姿は他の生徒同様女の子になつていた火野だった。

癖毛の特徴のある髪は少し伸びて女の子らしい顔付きになり、声も可愛らしい声になっており、普段着ているエスニック風の服装がまたその可愛さを引き立たせる様な姿をした火野は轟に近寄ると声を掛けた。

「いや…こっちはいねえ。そっちは？」

「ううん、こっちもダメ…。あーどこ行つたんだろ〜…」

振り向くと首を振る轟に火野は肩を落とす。

対して轟も女の子の姿になっており、髪型は変わっていないが左右に別れた非対称の髪の色が逆になっており、アザのある方は母親譲りの白の色へと変わっていた。その容姿も何処となく可憐で声も女性の低い声となっていて落ち着きのある少女へと見えていた。

2人もエリアを淡々と移動して隈なく搜索しているが同じ格好をしたピエロばかりで肝心のピエロは未だ何処に居るか不明。これだけ敷地が広い園内を探し回るのはかなりの一苦労とも言える。

「んん…困つたなあ、あの風船いきなり割れてこんな姿になるし…。あーせつかくの遊園地が遊べなくなつたのもショックだし…」

「ああ…さつさとあのピエロを探さねえとこれじゃあ学校にも行けねえ…それに…」

「それに？」

落ち込む火野に同調する轟。ふと、言い掛けた言葉に火野は聞くと轟は両手を出してジツと見つめると真顔で口を開いた。

「俺だけかわかんねえけどよ…。性別が反転して“個性”も反転しちゃまってる訳だが…。俺の髪色といい、“個性”がそのまま左右で反転っておかしくねえか…。？右手から炎で左手からは氷…。流石にかなりシヨックなんだが…」

轟は自身の両手を見つめてそう言う。火野は「あつ」と小さく声を漏らし察した。

お父さん嫌いな轟が最近になってようやく自身の炎を出す左手が逆になっていつも使う専売特許の右手から炎が出るこの現状に一見そこまで気にしてない様な顔をしてるが内心かなり傷ついているのだろう。

轟焦凍 (男↓女)

個性『半冷半熱』↓『半熱半冷』

右手から炎、左手から氷が出せれる！

左右が変わっただけで特に影響がないが

本人曰く右利きが強制的に左利きになった様な感覚になったとの事らしいぞ！

「ま、まあ！その“個性”はもう君のモノだろ轟君！それに、あのピエロを捕まえて元に戻してもらえば元通りになるでしょ？なら、尚更早く捕まえようよ！」

「…お前の言う通りだな火野。よし、早いところ探しに行くぞ」「うん！…と言ってもどうやって探そうかなあ…」

元氣付ける火野に轟は意外とすんなり立ち直り、強く頷く。再び捜索しようとする2人だが火野はこの園内で肝心のピエロを見つけれれるか少し不安になる。増してやもう遊園地から出てしまつては元も子もない。火野は焦りを感じながら迷っていると急に肩を叩いてくる感覚がして、火野は振り返ると、そこには女性が立っていた。

金髪で青色の瞳をしており、一瞬外国人かと思つたが、その独特な特徴に直ぐに気付いた火野はある人物の名を呼んだ。

「青山君!」

「青山：お前も女の子になつてたのか…」

「ウイ☆女の子になつても：僕は変わらず輝いているよネ☆」

火野の言葉に轟も気付いたのか声を掛けると女の子になつていた青山はその性格は相変わらずで身なりを火野達に見せつけていた。

すると、青山は続けて少し不機嫌そうに口を開いた。

「モウ！それより何で僕が1人で行動してると思う!?僕がトイレに行つてる間に皆人などどこか行つちやうからさ！ボツチだよ今僕！」

「え？ああごめんっ」

「(そーいやあ、解散した時あの場に居なかつたな…)」

プンプンと煙を立てる青山に無意識に謝る火野。

轟は心の中でそう思っていると、青山は落ち着いたのか冷静に喋り出す。

「イイヨ☆それはそうと、聞いてよ2人共。さつき変なピエロがぶつかつて来てさ！その後麗日さんによく似た男の子がピエロを追つて走つてたけど、この人は本当マナーがなつてないよネ！」

「!!」

愚痴を言う青山。しかしその言葉に火野と轟は目を見開いて青山に詰め寄つた。

「青山君！その人達何処に行つた!？」

「え？向こうの方だけど」

「追つ掛けてる奴もきつと麗日だ。急ぐぞ火野」

「うん！」

青山から手掛かりを貰つた火野と轟は直様青山が言つた方角へと駆け出す。

「…そう言えば火野。さつきからアंक全然喋つてこねえが、まさか女の子になつてからアंकに影響が出たのか…?」

走りながら轟は火野に声を掛けてくる。

火野達が女体化した後、プツンと途切れたみたくアंकが喋り掛けてこないし、表にも出て来なくなっていた。それを心配する轟に火野は口を開いた。

「俺もさっきから呼びかけてるんだけど、反応がないんだ…。気配は感じるんだけど…」

火野はそう言いながら自分の胸元を見て確認する。

だが、火野は女の子の姿になっていた為か大きくなった乳房が走って揺れているのを見てしまい少し顔を赤めて気を逸らすかの様に向く。自身の身体が女の子になっているのを再度実感し、火野は「参ったなあ」と小さく呟き、2人はその場を後にした。

☆☆☆☆☆☆

「だああ!?!止めろー!そんなの当たったら暴力罪で捕まるぞお前!?!」

「逃げるからやろ!?!大人しくして早く元に戻してくれば!ウチも何もせんから!!」

「うわったた!!?!くっそー!風船渡してねえ2人なんかほっといて帰ればよかった!!」

元凶であるピエロ事、転個は追って来て攻撃をしてくる麗日に叫びながら後悔していた。

峰田と上鳴をまだ女体化出来てなかった為にピエロに成りすまして捜索していたが、生徒である麗日に見つかってしまい今は園内を逃亡している最中だ。

男性になった麗日も反転した“個性”で動きを止めようと物を投

げては転個の頭上で発動させ、重力が掛かったかのようにその投げた物は勢いよく地面に叩きつけられる。

「早く投降しないとーその身体グチャグチャになるよ!!」

「ヒーローが言う台詞じゃねえ!!?お前等みてえな餓鬼はやっぱ肅正対象だ!!」

麗日の言葉にゾツとした転個は全力で逃げる。

幸いにもアトラクションエリアから離れて今はまだ開かれていないプールへと続く道を走っている。人気がない事を機に麗日は「個性」を使って捕まえようとする。

すると、転個は逃げながらもスマホを取り出すと自分である水操に電話を入れた。

「おい！お前今何処いんだよ!?!」

『あれ、兄貴？今は子供の乗り物がいっぱいあるところに居るっすよ?』
「馬鹿野郎！そのまま奥の道のプールがある場所に来い!!餓鬼に見つかって捕まりそーなんだよ!!」

『ええっ!?わ、分かりやした!!』

キレながら用件だけ伝えて電話を切ると転個は関係者以外立ち入り禁止と書かれた看板を無視してプールエリアへと入り込む。だが、いつの間にか麗日は転個の直ぐ背後まで近付いてきており、

麗日はその場から全力で跳躍する。

ガンヘッドオリジナルキック

「G O K!!!」

「どぶあつ!!」

転個の背後目掛けて飛び蹴りを食らわし、転個はくの字となって吹っ飛び、地面に直撃する。

ゴロゴロと転がる間に麗日はすかさず転個の身体に触れると転個は急に身体に重力が何倍にも掛かりその場から動けなくなった。

「あがぁ…!!?お、おっもお!!」

「おっしやー!!?なんか今までにないくらい気分が良い!!」

麗日お茶子（女↓男）

個性『無重力』↓『重力』
ゼログラビティ グラビティ

触れた対象に数倍もの重力が掛かる！使えば使う程気分が良くなりテンションMAX!!ヒヤッハー!!

「っ！居た!!」

「麗日ー!」

転個を捕まえた直後、プールの出入り口から駆け付けた火野と轟が麗日を見つけて駆け寄る。

女の子になっている2人を見て麗日は一瞬誰か分からなかったが、その身なりと服装を見て直ぐに2人と気付いたのか声を上げた。

「…え!?火野君!?それに轟君!?めっちゃ女の子や!!」ブフウ!!

「あ、あまり言わないで恥ずかしいから…」

「麗日、お前も男になってるじゃねえか…」

その姿を見て吹き出す麗日に恥ずかしそうにする火野。そして男になっている麗日を見た轟も静かにツツコむと、火野はうつ伏せで地面に倒れてる転個を見て口を開いた。

「間違いない。お前が風船渡したピエロだろ?」

「え、エ?僕チン?ナンノコトカナ?」

「顔覚えてんだから惚けても無駄だ」

火野が話し掛けるとピエロはあからさまに目を泳がせ片言に喋るが、轟がそう言うのと「ぐぬぬ」と観念したのか黙り込む。

その直後だった。突然火野の中からアंकが赤く発光し、人間態と なって飛び出てくる。

そして驚いた事にアंकも女の子になっていたのだ。

「ええっ!!?おまつ!アंक!?」

「うわ!凄いや美人!」

「お前も女になってたのか…」

火野、麗日、轟は驚く。全体的にすらつと細いボディに髪は少し伸びているが鶏冠の様なヘアスタイルは相変わらずで、麗日が言う様にどこか大人びた綺麗な顔立ちをしていた。

3人の言葉にアंकは「ちっ」と舌打ちをすると転個に詰め寄り頬を右手で強く掴むと口を開いた。

「お前、今すぐ俺を元に戻せ。おかげでアイスが食えなくてこっちはかなり苛ついてんだ。大人しく言う事聞けば命までは獲らない」

「ひっ!? お前ヒーロー志望の餓鬼の癖に言動が悪者じゃねえかよ…!？」

「ハッ! 知ったことか。そもそも俺は元々お前等の言う敵ザイランって奴みたいなものだったからなあ…、そこ等のヒーローと違って俺は甘くないんだよ…!」

「ひいひい!？」
アंकの威圧に転個はうつ伏せになりながら悲鳴を上げ涙目になる。

「アंक! 脅しは良くないって!」

「はあ!? こいつが阿呆な真似しなかったらこんな事にならなかつたんだ! 何でグリードの俺まで女にならなきゃいけないんだ! 巫山戯るな! 今すぐ殺してやりたい気分なんだよこっちは!!」

「お、落ち着けて!!」

火野は慌ててアंकを転個から引つ張り遠ざけるとアंकは怒鳴り散らしてそう言う。

今にも襲い掛かりそうで火野は全力でアंकを止めてる中、轟と麗日は転個に近寄り声を掛けた。

「…どの道お前はこの後捕まる…大人しく俺等を解いてくれればまだ罪は軽いぞ…」

「そうだよ! 私達意外の皆さんにも同じ事したんでしょ? 今呼ぶから皆んなを元に戻して!」

「ぐ…ぬぬぬ…!! お前等みたいな餓鬼が…! 世の中でヒーローなんかするもんじゃねえんだ…!! 真の…英雄こそが…! 世を制す…!!」

お前等は「個性」を持って余すだけの偽者だああ！」

重力が掛かって苦し紛れの呻き声を上げながらそう言う転個に火野に抑えられていたアंकが聞いてたのかフンと鼻で笑う。

「どっかのヒーロー殺しみたいな物言いだなあ」

「こいつ…もしかして影響されたんじゃない？」

アंकの言葉に火野は目を見開いていた…その瞬間。

「兄貴ーーーーー!!!」

プールエリアの出入り口から男性の声がエリア内へと響き渡る。

何事かと火野達は振り返ると、そこには走って来たのか息切れを起こした水操がいた。

「…来たか…!!」

「仲間っ!!」

「任せて!今の私はかなり強い!!」

増援により喜ぶ転個、その顔を見た火野は警戒すると麗日が駆け出し、両手を広げて突っ込んで行く。

だが水操はポケットに手を入れると、赤い使い捨て注射器の様な物を取り出した。

「っ!麗日さん待つて!!」

「兄貴はあ…俺が救けるんだああああ!!」

その行動に気付いた火野は突っ走る麗日を呼び止める。

そして水操は声を上げながらその注射器を自身の首元に刺して自身の液体を注入した。

「おまつ!?ソレ何で持ってんだよ!?」

声を上げたのは転個だった。あの薬は水操から渡され自宅に保管してあった筈なのに自分が持つてる事に驚いていた。

注射器を刺した水操はドクンと身体の中で何か起き始めたのかその注射器を落としてその場で苦しみ始める。

「ぐぎぎや……!?あああっ!!」

「うわっ…何!?」

「おいおい何かヤバいの打ったよなアレ……！」

「……映司、用心しろ。何かおかしいぞ……」

悶え苦しむ水操に麗日は何歩か下がって距離を取る。その行動を見た火野はボヤくとアंकはそう言っただけ警戒をする。

だが次の瞬間だった。

「あああああああ!!!」

突然、水操の身体から大量の水が放出され水操の周りだけ透明な水槽があるかの様に徐々にかき増しされていく。

火野、アंक、麗日、轟が驚く中、転個もその光景を見てあんぐりと口を開いて驚愕していた。

そして、その大量の水は水操を包み込む様に流れると、粘土で作られた様な水で出来た手足が生え、巨大な水の化け物となって火野達の前に現れたのだ。

「兄貴……!!今助けるぜえええ!!!」

すいそうぬれた
水操布烈太

個性『水流操作』

文字通り水を操る！だが操れる水の量は自分の体重の水だけ！

「ちっ！面倒事増やしやがって……!!」

「やべえな……ありや完全に敵だ……!!」

水の化け物の中心にいる水操はそう言っただけその巨体を動かす。ただでさえ転個に苛立っていたアंकは再度大きく舌打ちをして水操を睨み付ける。

そしてその水の化け物を見た轟は戦闘体制に入ろうと構える。

火野もオーズドライバーを取り出し、腰に宛い装着すると、アंक

は意図的にその行動を読み取りタバのコアメダルを取り出す。

「映司!!」

アंकは叫ぶと3枚のコアメダルを火野に向かって投げたのだつた。

「丸山さん、本日は色々ありがとうございます。私だけご馳走にまでなってしまうて…」

「いえいえ、素敵なショーを見せてくれたささやかな御礼ですよ。本当は生徒達も招待したかったのですが先に遊園地の方に行かれてしまいましたからね」

「午後からは自由にして良いと言ってしまうましたから…。年頃の生徒達なので仕方ないです」

A組達が転個の「個性」により混乱している中、遊園地の事務所内にて、相澤は丸山にご馳走されて御礼を言っていると丸山は相澤に質問をした。

「先生、この後は如何なされるのですか？」

「学校に戻ってもう直ぐ始まる中間、期末テストの問題内容を考える予定です。あいつ等にとって雄英初めてのテスト期間ですから頑張って貰わないと雄英教師の名折れですので」

「おお、そうなのですか。休日だと言うのに先生は凄いですねえ。少し休憩してから行きませんか？お茶とお菓子用意しますよ？」

「お誘いは有難いのですが遠慮しておきます。私も急いでいるので…、では失礼します」

時間は有限。相変わらずの合理的な判断をする相澤はお辞儀をして部屋から出ようとドアノブに手を掛ける。その時だった。

外側からその扉は勢いよく開かれ相澤は少し驚く。

すると、部屋に入って来たのは女の子の身体になっていた飯田だった。

「失礼します!!…!相澤先生!まだいらしてたのですね?!」

「お前……………まさか、飯田か…!?!」

「ほっほ、これはこれは可愛らしいお客様ですね」

流星は担任と言ったところか、女の子になっていた飯田を見抜いて

目を見開いていると、丸山は気付いていないのか微笑ましくそう言っ
て笑っている。

だがそんな悠長な事ではないと言わんばかりに相澤は真剣な表情
となり飯田に向かって口を開いた。

「何かあったみたいだな…。飯田、事情は現地に向かいながら説明し
ろ」

「わ、分かりました!」

「丸山さん、後で連絡するのでいつでも警察に連絡出来る様待機して
てください」

「け、警察!?!しかし…園内には大勢のお客様達が…!」

相澤の言葉に飯田は頷き、相澤は丸山にそう言う状況が分かって
いない丸山は目を見開いて焦り出す。

相澤は少し考えると、落ち着かせる様に口を開いた。

「今の時点で園内のお客様達から何の音沙汰もないって事は、恐らく
こいつ等雄英生徒達だけ被害にあっています。早急に見つけ次第こ
ちらで対処したらこちらの事務所に犯人を連れて来ます。その時は
警察を呼んで貰いますがよろしいですね?」

「わ、分かりました…:…よろしくお願い致します…!」

的確な判断力に丸山は了承し、飯田も流石だと目を輝かせていた。
現時点で遊園地サイランに敵が現れたとなつてはまだ営業しているこの
フューチャーパークで大問題になる事は間違いない。せつかくご来
店された人達を悲しませぬ様、相澤も考慮しての判断なのだろう。

「飯田、行くぞ」

「はいー!」

そう言つて相澤は飯田と共に部屋を出て行ったのだった。

「あああああつっ!!!」

雄叫びを上げる水操は水の塊となったその巨大を麗日、轟、火野、ア
ンク、そして麗日の「個性」によって倒れてる転個の元へと近づいて
来る。

「こんな奴が園内に出たら市民に被害が…!」

「ここで大人しくさせねえとパニックになるぞ…!」

「うん…!いや、ダメだよ!私達学生だから「個性」使うのは外では
禁止されてる!」

「てめえ!?さつき散々俺に使っただろ!!?何でもいいからそいつ止めて
やってくれ!!」

プールエリアは幸いこの場にいる者しかいないがそのまま園内
に行ってしまうえば大混乱になる事間違いない。轟は「個性」を使おう
と手を伸ばすが麗日が思い出したかの様にそれを止める。だが転個
は言ってる事が矛盾しているとキレると麗日は脂汗を流して下手な口
笛を吹いてそっぽ向く。

その間、アंकから投げ渡された火野は2枚、1枚とドライバーに
コアメダルを嵌め込むと焦りながら口を開いた。

「言われなくても止めるよ!学生がどうこう言ってるより他の人が危
害を加えられる方が危険だからね!」

「…案外仲間思いなんだな…。だがどの道お前等がしでかした事は当
然罪に問われるぞ」

火野に続き、轟は倒れてる転個に向かって口を開くと転個は間入れ
ずに水操を見ながら喋った。

「あいつは…!こんな俺みたいなの奴でもずっとついて来てくれた良い
奴なんだ…!あの「覚醒剤」は「個性」が一時的に増幅されるが「
副作用」も凄い薬なんだよ…!もしもの時の為に保管してあったの
に…!」

「フン!巫山戯るのも大概にしろ!人の性別変えて散々迷惑を掛けて
おいて情けに頼み事か!同情する余地もないし知った事じゃない。

が、ここで倒さねえとアイスが食えなくなるのは癪だからなあ。映司！さっさとこのデカブツを止める！」

「ああー！」

転個の頼み込みにアंकは呆れてそう言うがここで止めないとアंकにもデメリットがあるのかそう言うのと火野は領き、オースキヤナーを取り出し待機音が流れる。そしてオーズドライバーにソレをスキャンし、叫んだ。

「変身!!」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

コンボソングが鳴り響き、火野は仮面ライダーオーズ「タトバコンボ」にへと姿を変え、ファイティングポーズを構える。

すると、あさっさりとは変身出来たオーズを見て轟と麗日は目を見開いて驚いた。

「ええっ?! 火野君変身出来とるやん!?!」

「個性」も反転する筈なのに…どーなってるんだ…?」

「まあ、ラッキーと言うしかないなあ…。だが、問題はあの水の塊、どう対処するかだ」

驚く2人にアंकはそう言つて水操を見遣る。

タトバを使わせたはいいものの、基本形態は物理攻撃を得意とする戦い方だ。

「ハアツ!!」

オーズは駆け出し、腕部のトラクローを展開して跳躍すると、勢い

よく水の塊に腕を振り下ろして斬り付ける。

だが、アングの言つてた様に分厚い水の塊相手ではダメージは愚か水を弾いただけでなんの攻撃も当たらなかった。

オーズは地面に着地し、脚部のバツタレックに力を溜めて今度は蹴りを繰り出すが膜でも纏っているのかボヨン！と音がしてオーズはその反動で勢いよく飛ばされた。

「うあああっ!？」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ!!こいつはスゲエ!!誰も寄せ付けない!!今の俺は無敵その物つて事だよなあ!!」

吹っ飛ばされ地面を転がるオーズを見て水操は機嫌良くそう言うと、水で出来た腕を今度は轟と麗日に向けて勢いよく先端から水を放射する。

「悠長に考えてる暇ねえな!!そんなもん氷で!」

轟は前に出て右腕を勢いよく振り上げる。だが、その腕からは炎が放射され、水とぶつかり水蒸気となって煙が発生し巻き上がった。

「あっつ!!轟君ソレ火い!!」

「わ、わりい!!今は右腕こっちが炎だった!!」

付近にいた麗日は熱の温度で顔を両手で防ぎながら怒ると自身の“個性”が反転している事を忘れていたのか謝る。

「クツソ!!不快だが!!今は左手が!!氷!!」

そして轟は今度は間違えぬ様、そう言つて左腕を水操に向かつて突き出す。すると氷が生成され、お決まりのブツパ攻撃により氷結が水操を覆う水の塊を一瞬で凍らした。

「やったか!？」

「…いや、まだだ」

うつ伏せていた転個は声を上げるが、轟は否定して水操を見ていた。凍っている中で中心の水操まで凍っていないのか中々動いており、力を入れる素振りを見せるとその氷は一瞬で砕かれ、辺りに氷塊が散らばっていく。

「おらおらおらああ!!そんなもん通用しねえんだよおお!!」

「なら!その水事ウチの“個性”でっ!!」

転個が言っていた副作用のせいかハイになって暴れ狂う水操。すると、今度は麗日が駆け出し水に触れようと接近する。

「近づくんじゃあねええええ!!」

「っ!!あぶっ!!」

だが、水の塊から水圧噴射の様に水が放射され、麗日は身体全体でモロに食い、その衝撃と勢いで吹っ飛ばされる。

「麗日っ!」

「げっほ…!へ、平気…!!でもアレじゃあ近づけれへん…!」

轟が安否を確認すると麗日はびしょ濡れになりながらも咳き込み立ち上がる。

それを見ていたアंकは軽く舌打ちをすると、ちょうど吹き飛ばされてたオーズがやって来てオーズはアंकに向かって口を開いた。

「アंक!今持つてるメダルであの分厚い水何とかならない!」

「フン。メダルを変えたところで攻撃が通らないんじゃ拉致があかない…、メズールのコアメダルさえあればなあ…」

「メズールって…確かアंकと同じグリードの?」

「ああ、メダルの中で唯一水中戦を得意とする海の属性を秘めたコアメダルだ。あの塊が全部水で出来てるんなら本体を狙う事も訳ないだろおな。…映司、他のメダルは持つてるくせに何でそれだけ持っていないんだ?」

アंकの問いにオーズは「ううん」と唸る。

今まで持ってたアंक以外のコアメダルは火野映司曰く『いつの間にか持っていた』との事。オーズの「個性」での出来事なのか定かではないが唯一考えられるのは恐らくその「個性」故なのだろう。

「火野!!お前のオーズでどうにかならねえか!?俺の「個性」じゃ少しだけの足止めが手一杯だ!」

アंकとのやり取りをする最中、水操に氷結攻撃を繰り出し一瞬動きを止める轟が叫ぶ。

「ああごめんっ!」

「っ、おい映司!!」

話している中轟と麗日だけが戦っている事に罪悪感を感じてオ―

ズは飛び出す。そしてそのままアंकの呼び止めを無視してオーズはそのまま駆け出してしまふ。

「水が分厚くて氷が本体まで届かねえ上に炎も相性がわりい…！おまけに近付かせてくれねえ始末だ…！火野、オーズの力使えんなら、コアメダルで何とか出来るんじゃないかねえのか？」

「ううん…！アंकにも聞いたけど難しいって」

「俺を目の前にしてお喋りとは随分余裕じゃあねえか!!!」

隣に来たオーズに轟はそう言うのとオーズは小さく首を振って口を動かす。その瞬間、水操は声を上げて水の腕を勢いよく2人に向かつて振り下ろす。

だが水の巨体を動かすのは苦手なのか動きが鈍く2人は左右に転がって回避した。

「つとと！マズイなあ…！これじゃあ近付くのも一筋縄じゃ行かないぞ…！…アंकの言ってたメズールってグリードのコアメダルがあればなあ…！」

防戦一方となつている状況にオーズはそうボヤク。

すると突然オーズは違和感を感じる。オーズドライバーの左腰ベルト部分にある「オーメダルレスト」をふと、オーズは確認するとその中から微かに青色に発光していた。

「え…：う…ひよつとして…：…」

オーズはまさかと思い、オーメダルレストを展開すると、そこにはあるはずの無いコアメダルが3枚入っていた。直ぐに取り出して掌で再確認する。

あろう事か「鯨」、「鰻」、「蛸」の造形が施されたまだ所持していない青色のコアメダルだったのだ。

「こ、これ…!!アंक…アंक…！見て見て！ほら！これ！持ってた！」

「あ！お前…それをどこから…!?ちっ！まあいい！持ってたんならさっさとそれ使え！」

驚いたオーズは3枚を手に見せびらかす様声を上げると案の定アंकも驚き目を見開く。

だがこの場を打開する唯一のメダルだったので理由は聞かずにア
ンクは指示を出すとオーズは「分かった!」と強く頷き、オーズドラ
イバーからタトバのメダルを抜き取り、手に持つ青のコアメダルを嵌
め込む。入れ込まれた3枚のメダルは清らかな青色へと発光すると
オーズはオーズキャナーを取り出しドライバーへとスキャンした。

シヤチ!

ウナギ!

タコ!

シヤ・シヤ・シヤウタ!シヤ・シヤ・シヤウタ!

軽快なコンボソングが流れると共にオーズの身体から突然水が放
出され、それと同時にその姿は水棲生物を催した全身青色をメインと
したカラーリングの戦士となる。その名も仮面ライダーオーズ
シヤウタコンボ”。

「っ!新しいコンボか…!?!」

「凄い…!」

今まで見たことのないフォームに轟は驚き、2人はその凛とした立
ち姿とデザインに敵を前ヴイランにして見入ってしまった。

それは敵側の転個も同じ事で、うつ伏せながらもシヤウタの姿に驚
き口を開いていた。

「な、なんじゃありやあ…!?!色も見た目も変わってるじゃねーか!」

「あ?当然だ。オーズはあのベルトのコアメダルを3枚変える事で姿
も能力も変わる。現時点でその姿を変えられる亜種形態の数は未知数
だなあ…」

「…」

付近に立っていたアंकが反応してオーズを見ながらそう答えると転個は真顔になり言葉を失う。

「ああん…!?姿が変わったからって何になるんだオラア!!!」

「っ！轟君麗日さん下がってて！」

水操は叫ぶと再度水塊の腕をオーズに向けて振り下ろす。オーズは2人を後方に下がる様指示を出し、駆け出す。

「っ!?火野！」

「あぶないっ！」

オーズは何も攻撃体制に入る素振りを見せずに走り出したのを見て轟と麗日は声を上げる。

だが、アंकはそのコンボの能力を知っているのかニヤリと頬を上げて黙ってオーズの姿を見届けていた。

そして、水操の腕がオーズの頭に今にも当たりそうになっていたその瞬間。

オーズの身体が半透明に透けてその身体は液状となって水塊の腕の中へと入って行ったのだ。

「え!?!ちよ!?!何入ってきてんだよおお!?!」

液状となったオーズは水操に詰め寄ろうと突っ込んで来るが、水操はさせまいと水塊で内側から押し出そうとする。だが、液状となったオーズにはダメージどころか当たる事すら出来ず、あつという間に水操の前へと到達するオーズ。すると液状化していたオーズの身体は元に戻り、その脚部“タコレッグ”が発光し、驚く事に足が8本に増える。それはもう蛸の足そのものだった。

「うわ、蛸！ちよつと気持ち悪い」

「まるで水を得た魚かよありゃあ…。本当何でも出来ちまうんだな火野…」

水塊の中で戦う光景を麗日と轟は見ており、それを聞いたアंकは「フン」と鼻で笑いかを聞いた。

「オーズだから当然だ。…まあ、それを使いこなすあの馬鹿だからこそだがなあ…」

初めて使うメダルやコンボを難なく使いこなせる火野を幾多と見

てきたアंकはそう自身気に言っていた。
その時だ。

「あダダダダダダダダダダダダダダダダ!!!」

「ぶぶぶべ!?ぶ、びゃ!?ごべ!?ふぶつ!?ちよ!?や、やめ!?あバア!!!」

蛸足となったオーズはその8本のタコレッグでなんと連続蹴りを繰り出したのだ。

水の中だと言うのに重々しい音が響き蛸ラツシユの猛攻撃に水操は喋る間も無くボコボコと息を吐き出していた。

「や、やめろよおおおっ!!!」

「っ!?うわあ!!」

流星に堪えるのか水操は水塊の中で何とか逃げるとその巨体を大きく動かしてオーズを引き離そうとする。

すると、流星に重力にはどうしようも無いのかオーズは水塊から放り出され空中へと投げ出されてしまう。

だがオーズは体制を立て直し、オースキャナーを取り出すと再度ドライバーへとスキャンした。

スキヤニングチャージ!

「ハアア!!」

音声が響き渡るとオーズは両肩に付いている電気鰻を催した。ウナギウィップを両手に取ると水操目掛けて振り下ろす。ウナギウィップは勢いよく伸びると水操の身体に巻き付き拘束する。

「な、何だ…!?あばばばばっつっつ!!!」

拘束しただけではなく、何と電流がウナギウィップから流れ、水操はビリビリと痺れながら引っ張られ水塊から出て来る。すると、水塊は主がいなくなったのか動きが止まり、只の水に戻り地面に落下して水溜りとなって広がる。

そしてそのまま水操は電流を浴びされながらもオーズに引つ張られて行き、オーズは1つに束ねたタコレッグを回転させ、引き寄せる水操目掛けて落下する。

「はああああ！せいやあああああ!!!」

「あばあああああ!!!?」

これがシャウタコンボの必殺技、名を“オクトバニツシュ”。

ドリル状となって回転するタコレッグの先端に水操はぶち当たると水操は諸に受け、吹っ飛ぶと地面へ叩きつけられたのだった。

当然、水操はそのダメージに耐え切れずピクピクと痙攣しながらその場で気絶していた。

「や、やったあ!」

「…何とかなったか……」

暴走を止め、麗日は喜び、轟はホッと息を吐いていると、いつの間にか解除されていたのか転個はその場に座り込んで気絶している水操を見てガタガタと震えていた。

「な、何とかしてくれって言ったけどよお……!か、完全に……オーバーキルだろこれえ……!」

「おい!ああなりたくなかったらさっさと元に戻せ!」

「ひい!?します!元に戻します!!自首でも何でもしますので勘弁してください!!」

肩を掴まれガン飛ばすアंकに怖気づいた転個は何度も首を上下に動かして声を上げていたのだった。

「ああ〜！元に戻ったあ…!!」

「一時はどうなるかと思いましたが…」

「私は楽しかったけど？」

「あんたどんな環境でも生きられそうだね…」

しばらくして、A組生徒達は遊園地の事務所へと集まり、転個の個性により元に戻され女性陣を中心に周りは一息を吐いていた。2人の犯人も捕まえて取締役の丸山が警察を呼び、2人は署に護送されて被害を出す事なく事を終えていた。

水操の暴走を止めた直ぐに相澤と飯田が駆け付けてくれたが、個性を使って止めた等と言えばまた迷惑が掛かると思い、『変な薬を使用して暴走したが自爆して転個と共に捕まえた』と咄嗟に理由を述べたのだ。幸い誰も使用していない園内で唯一離れてたプールエリアなのであの場に居た者以外は誰もいなかった為その嘘は何とか通ったが相澤は最後まで疑心暗鬼の目で火野達を見ていた。だが何とか信じてもらい火野、麗日、はどつと疲れが出たのか事務所の玄関付近で座り込んで精も根も尽き果てていた。

「お茶子ちゃん大丈夫…?」

「あ、うん、梅雨ちゃん、私、大丈夫だよ」

「言葉と見た目が合っていないわ。目が死んでいるわよ」

蛙吹が麗日を覗き込むと麗日は上の空の目でそう答えている。

「犯人捕まえて何よりだぜ！流石だな火野、轟！」

「ま、まあ何とかなっただって感じかな…。ね、轟君」

「あ、ああ…」

「ケツ！もう少し早く行けば俺が仕留めれたのによお！」

切島が近寄り火野と轟に声を掛けると戦ったとは言えなかった為しどろもどろで2人はそう言うのと、爆豪が切島の隣で残念そうに悪態を吐く。

すると、警察を見送った丸山が生徒達の前に立つと急に深々と頭を下げたのだ。

「皆さん、楽しい時間を潰してしまい大変申し訳ございませんでした。私の不注意でこんな事になってしまい皆様に大変な迷惑をお掛けしました…」

「い、いや！謝らないでください！いいっすよ！」

「そうですよ！^{サイラン}敵が居たのは誰も分からなかった事ですし！」

「他の市民が無事だったのなら問題ない…」

「そうだな、寧ろ俺達が的でよかったかもしれん！」

「午後は大変だったけどヒーローショーは楽しかったしね！」

「それね」

丸山の謝罪に切島と尾白は首を振ってそう言うと言葉に飯田は強く頷く。後に続き葉隠がそう言うと言葉に耳郎が同感する。その考えはこの場の全員が思っていた事なのか、皆は強い眼差しを丸山に向けていた。

「皆様…」

「…本当、そんな事で謝らないで下さい丸山さん。こいつ等はヒーローを目指す若者達。そして誰よりも市民の安全を軽んじて無碍にしない生徒です。この子達にとって市民の笑顔を見る事が一番だと思いますから…」

丸山は驚いていると、警察の人と話を終えた相澤が帰って来て丸山にそう言っていた。

すると、そうでもないと思っている生徒が2人、陰で口口と小声で言っているのが聞こえてくる。

「クソ…！どうせなら反転した他の男子の奴ら見たかったわ…！」

「轟とかぜってー可愛かったろーにな…」

「…」ビュッ！

「……！！」

峰田、上鳴が指を地面に擦り付けながらそう言うと言葉に相澤がギロリと

睨み、首に巻いてある捕縛布を2人目掛けて伸ばすと、瞬く間に2人はがんじがらめとなってその場で蹴っていた。

その光景を見て生徒達は徐々に笑い出し、その場は笑い声と笑顔に包まれて行った。

ふと、その笑いに包まれる中アंकは皆が見えない壁に寄り掛かって立っており、火野が突然使っていたシャウタのコアメダル3枚を手に取り眺めていた。

「…映司の奴、何処でメズールのコアメダルなんか持ってやがったんだ…？この遊園地に来る前まで持ってなかつた筈だ…。これも「転生」した影響なのか…」

アंकはコアメダルをギュツと握り締め、笑っている火野を見て口を開いた。

「…だとしたら、紫のメダルもその内…」

アंकは不意に背筋に寒気が走る。グリードの身体の筈なのに感じたアंकは紫のメダルの事について思い出したのか表情が強張り、舌打ちをしていた。

いつの間かコアメダルを持っている火野。だが今はそれが火野とアंकにとっては大きな戦力となり得る事。アंकは深く考えず、5種類の属性のコアメダルに加えてムカチリのコアメダルを所持している事に少しだけ満足気になっていた。

こうして、フューチャーパークは予想外の出来事だったが、忘れる事のない思い出となったのは間違いないだろう。

そして、生徒達各々はこの出来事を息抜きとして次に控えているテスト期間に向けて励む事となったのだった。

第7章　く期末試験く
No. 61　やっってきた生徒達の地獄

とある地下室。顔が爛れているのか判別出来るモノがなく、口だけしかない男。その男には呼吸器や点滴の管が張り巡らされており、座っている椅子から一步も動けない様子に見えていた。

男はモニター画面に映し出されている死柄木を見ながらその口を開いた。

「ヒーロー殺し、捕まるとは思わなかったが概ね予想通りだ。暴れた奴、共感した奴…、様々な人間が衝動を解放する場として敵^{ヴァイラン}連合を求めろ。死柄木弔はそんな奴等を統括しなければならぬ立場となる！」

「出来るかね、あの『子供』に。ワシは先生が前に出た方が事が進むと思うが…」

その背後にいたドクターが肩をすくめながらそう言うと言男は軽く笑い口を開く。

「ハハ…、では早く体を治してくれよドクター」

「『超再生』を手に入れるのがあと5年早ければなあ…！傷が癒えてからでは意味のない、期待外れの『個性』だった」

「いいのさ！彼には苦勞してもらおう！次の『僕』となる為にあの子はそう成り得る歪みを生まれ持った男だよ」

男はそう言つて死柄木の映るモニター画面に手を差し伸べ触れる。ふと、ドクターは思ったのかそれを口に出した。

「そーいやあ、あの小娘も連合の一員じゃろ？『個性』も素晴らしいが奪えんのが残念でしょうがないのう」

「ああ…脇真音優無か。僕も驚いたよ、『個性』が奪えないなんてもう鳥肌が立つくらいね。…だけどあの娘の作り出すヤミーは素晴らしいものだ！弔を支える柱となりやがては世界を制する協力的な手助けとなる。…だが特殊な娘だね。例えるならゲームの一時的に協力

してくれるけど何を仕出かすか分からない要注意キャラクターさ。一つ扱いを誤ってしまえば「脅威」になってもおかしくはない…。ただどねドクター。彼女の心もまた黒く染まっている…まるで世界の残酷さを知ってしまった顔をしてたよ」

男は一旦区切ると手の甲に顔を置いて再び口を開いた。

「そんな「子供」が道を正そうとするのは決してない…！私が歩ませてもらってあげるとき、甲と同じ道を！今のうちに謳歌するといい、オールマイト。仮初の仮面をね」

☆☆☆☆☆☆☆☆

時は流れ6月最終日……

もう直ぐ夏休みが迫って来る中、その夏休みに行われる「林間合宿」の存在を知らされた生徒達は心を躍らせ待ち望んでいた。

だが、その前に中間を終え間もなくやってくる期末テストが彼等を待ち受けていた。その日も残すところ1週間を切っていたのだった。

「全く勉強してねー！！」

午前中の授業が終わり昼休憩と差し掛かる中、中間テストの成績がクラス内で最下位20位の上鳴が突然声を上げて焦っていた。その隣には成績19位の芦戸がその様子を見て笑っている。

「体育祭やら職場体験やら！更にはヒーローショーとドタバタ続きで全く勉強してねえー！！」

「確かに」

「あっはっはっは、どれも楽しかったねー」

頭を抑えて必死にそう言って叫ぶ上鳴に成績15位の常闇が同感

すると、もはや楽観的になっている芦戸。

それを聞いていたのか成績が12位の砂藤が背後の席の成績11位の障子に話し掛ける。

「中間はまー入学したてで範囲狭いし、特に苦労無かつたんだけどなー…。行事が重なったのもあるけどやっぱ、期末は中間と違って…。」

「ああ、筆記試験に加えて演習試験が行われるんだろ？」

複製した口から言葉を発すると、それを聞いていた成績9位の峰田があっけからんとした態度で自分の席から口を開いた。

「ま、その試験が辛え所だよなあ」

成績9位。改めてその順位を頭の中で思い出した上鳴と芦戸は妬めしそうに峰田に向かって声を荒げた。

「あんたは同族だと思ってた！」

「お前みたいなのはバカで初めて愛嬌出るんだろが…！どこに需要あるんだよ…!!」

「世界かな」

どこかを見据えた様に峰田は2人に背を向き最下位とその次の2人に対して調子に乗っていた。すると、緑谷が上鳴と芦戸に声を掛けた。

「アシドさん、上鳴君！が…頑張ろうよ！やっぱ全員で林間合宿行きたいもんね！」

「そうだね、俺も頑張るから2人も頑張ろ！」

「うむ！」

「普通に授業受けてれば赤点は出ねえだろ」

「お前等言葉には気をつけろ!!」

成績4位の緑谷に続き、10位の火野が励ますと3位の飯田が強く領き、轟が当たり前の様にそう言うと、自分より成績の上な奴らに言われて心苦しいのか胸を抑えながら叫ぶ。

「宜しいですかお二人共、座学なら私お力添え出来るかもしれません」
「ヤオモモロー…!!」

成績トップ1位の八百万の言葉に感極まり上鳴と芦戸は八百万の

あだ名を呼ぶ。

すると八百万は急に俯き、ボソツと呟いた。

「演習の方はからつきしでしょうけど…フツ」
「？」

何言ったか聞き取れなかったのか轟は首を傾げると八百万の前に成績7位の耳郎、17位の瀬呂、8位の尾白が集まりそれぞれがお願いした。

「お二人じゃないけど…ウチも良いかな？二次関数応用ちよつと躓いちやつてて……」

「わりイ俺も！八百万古文わかる？」

「俺も」

「え、え……!!良いデストモ!!では週末にでも私の家でお勉強会催しましょう！」

「マジで!?うん、ヤオモモン家楽しみー！」

同じクラスの仲間達にお願いされて八百万は大喜びで了承すると突然早口となり提案を申し出るとお金持ちの家に行けると思ったのか芦戸がはしゃぐ。

すると八百万は席から立ち上がり興奮気味に喋り出した。

「ああ！そうなるとまずお母様に…報告して講堂を開けていただかないと……」

（（講堂!?））

「皆さんお紅茶はどこかご最前ありません!?我が家はいつもハロツズかウエツジウッドなので…希望がありましたら用意しますわ！」

（（あ!?!））

「そうと決まれば早速家内のお手伝いの皆様にも報告して皆さんが喜べる様に最高のおもてなしをしなくては…!必ずお力になってみせますわ……」

ぷりぷりと期待に応える様興奮する八百万。

それを見ていた上鳴と耳郎は引いていたものの、彼女の笑顔を見てその顔は次第に笑みを浮かべていた。

「ナチュラルに生まれの違い叩きつけられたけど」

「なんかプリプリしてんの超カアイイからどうでもいいや）なんだっけ？いろはす？でいいよ」

「ハロツズですね!!分かりましたわ!!」

お金持ちの発言に格の差を突き付けられた気がしたのか適当に答える上鳴に八百万はそう言つて一層興奮していた。

すると、それを見ていた成績15位の切島が呟く。

「この人徳の差よ」

「俺もあるわ！テメ教え殺したるかッ!？」

「おお！頼む！」

それを聞いていた成績3位の爆豪がキレながら言うところ切島は拒否する事なくその発言に食い付きお願いしていた。

☆☆☆☆

ご飯を食べにメシ処に来た生徒達。一つの食卓に

緑谷、飯田、麗日、蛙吹、葉隠、轟、火野が座って食事をしていた。

それぞれが注文した料理が置いてあるトレーをテーブルに置き、ご飯を食べ始めていた時、緑谷が手を合わせ合掌しながら話しかけてくる。

「普通科目は授業範囲内からでまだなんとかなるけど…、演習試験が内容不透明で怖いね…」

「そうだな。突飛な事はしないとと思うがなあ」

「普通科目はまだ何とかかなるんやな…」

同じく合掌をしてる飯田が答え、成績13位の麗日は不安そうにそう言う隣りの蛙吹、葉隠が食べはじめながら口を開いた。

「一学期でやった事の総合的内容」

「とだけしか教えてくれないんだもの、相澤先生」

「戦闘訓練と救助訓練、後はほぼ基礎トレだよね」

成績16位の葉隠に続いて6位の蛙吹がパンを千切りながら言う
と麗日はそう答える。演習試験は葉隠と蛙吹が言う様に相澤からは
総合的範囲内としか知らされていない。なので午後からのヒーロー
基礎学で一学期に習った内容だと皆は認識しているが正直心許ない。
「普通に授業受けてりや大丈夫だろ…」

「轟君、優秀な人ならそうかももしれないけどそうでもない人もいるん
だよ…?」

蕎麦を啜る轟が呟くと隣に座っていた火野が苦笑しながら答える。
「試験勉強に加えて体力面でも万全に…あイタ!!」

緑谷は教わった事を思い返して予測していると突然後頭部に肘を
当てて来る者がいた。

緑谷は振り返るとそこに立っていたのは物間だった。

「ああごめん。頭大きいから当たってしまった」

「B組の！えっと…物間君！よくも！」

「君らヒーロー殺しに遭遇したんだってね」

「！」

嫌がらせみたいなの真似をする物間に緑谷は絵で描いた様な白目で
言い返そうとするが間入れず物間はそう言うて喋り出した。

「体育祭に続いて注目を浴びる要素ばかり増えていくよねA組って。
ただその注目って決して期待値とかじゃなくてトラブルを引きつけ
るものだよね」

「!？」

「何が言いたいの物間君？」

煽ってくる物間に聞いていた火野がそう言うと言物間は悪人ぼく笑
い出し見下す様な目付きで口を開いた。

「あつはつはつは！誤解しないでくれるかい？オーズの火野君。僕は
今後起き得る話をしに来ただけさ！あー怖い！いつか君達が呼ぶト
ラブルに巻き込まれて僕らにまで被害が及ぶかもしれないなあ！あ
あ怖ふっ!!」

憎たらしい顔と嫌味を言う物間に突如背後から手刀が繰り出され

物間は気絶して倒れそうになるがその手刀をした人物、同じくB組の拳藤が器用に抱える。

「物間シャレにならん。飯田の件知らないの？ごめんなA組。こいつ心がちよつとアレなんだよ」

「拳藤君！」

「(心が…)」

物間の持ってたトレーを隣のテーブルに置きながら謝り、飯田が名を言うと緑谷は若干気になったのか心の中でそう思っていた。

すると、拳藤はそのまま口を開く。

「あんたらさ、さつき期末試験が不透明とかなんだのって言ってたよね。入試ん時みたいなの対ロボットの实战演習らしいよ」

「！！！！」

突然の拳藤の言葉に食卓にいた7人が驚き目を見開いていた。

「え！？本当！？なんで知ってるの！！？」

「私知り合いに先輩がいるからさ。聞いたんだ。ちよつとズルだけど」

「ズルじゃないよ！そうだきつと前情報の収集も試験の一環に織り込まれてたんだ。そっか、先輩に聞けば良かったんだ。何で気付かなかったんだ…」

「…！！？」

「拳藤さん気にしないで。緑谷君考え事するとこーなるんだよ」

突然のブツブツモードに入った緑谷に拳藤は驚いて引いていると火野がすかさずフォローを入れる。

すると、浅かったのか気絶していた物間の首がゆっくりと起き上がり彼は口を動かした。

「馬鹿なのかい、拳藤？折角の情報アドバンテージを！！今こそ体育祭で僕達の出番を奪った憎きA組を出し抜くチャンスだったんだ…」

「体育祭は私等が駄目だった。そして憎くはないっつーの」

「あひっ！！」

性懲りも無く言う物間に拳藤は再び手刀を入れてそのまま物間を連れて行き、その場を後にした。

((((B組の姉御的存在…)))

「B組の人達も個性豊かだなあ」

拳藤達の後ろ姿を見て食卓に座っていた6人はそう思っていると火野はご飯を食べながらボソツと呟いていたのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

放課後、A組の教室にて。

「んだよロボならラクチンだぜ!!」

「やったあ」

拳藤に教えてもらった演習内容を緑谷達は他のクラスメイト達に知らせると馬鹿2人組の上鳴、芦戸が満面の笑顔で嬉しそうにしていた。

「お前等は対人だと『個性』の調整大変そうだからな…」

「ああ！ロボならブツパで楽勝だ!!」

「あとは勉強教えてもらえれば」

「これで林間合宿バッチリだ!!」

障子が複製の口でそう言って心配しているが上鳴はお構いなしに言うのと、瀬呂に続いて芦戸が喜び両手を上げる。

もう彼等の頭の中はお花畑でいっぱいなのだろう。

すると、不満なのか鞆を肩に背負い帰ろうとしていた爆豪が「ケツ」と言つて悪態を吐く。

「人でもロボでもブツ飛ばすのは同じだろ。何がラクチンだアホが」

「アホとは何だアホとは!!」

「うるせえな、調整なんか勝手にできるもんだろアホだろ！なあ!? デク！」

言い返す上鳴にキレてるとその言葉は突然緑谷に降り掛かる。2

人の関係はご存知の生徒達は会話を止めて静まり返る。そしてビクつく緑谷に爆豪はギロリと睨みつけ口を開いた。

「『個性』の使い方：ちよつと分かってきたか知らねえけどよ。てめエはつくづく俺の神経逆なでするな」

「アレか：：前のデク君、爆豪君みたいな動きになつてた」

「あー、確かに：：！」

その言葉に一瞬何のことだと火野は首を傾げると麗日がい出してそう言おうとそんな事あつたなと芦戸も思い出していた。午後の授業でレースをした時に見せた緑谷のフルカウルの事だろう。

「体育祭みたいな無様な結果は晒さねえ：：：！次の期末なら個人成績で否が応にも完全に優劣つく：：！完膚なきまでに差アつけて、てめエぶち殺してやる！火野オ、轟イ：：！！てめエ等もなア！！」

緑谷に指を突き出して言う目線を火野と轟に向けて宣戦布告を押し付ける。爆豪は言い終わると教室の扉を勢いよくガンツと開けて出て行った。

「：：久々にガチなバクゴード」

「焦燥：？或いは憎悪か：：」

「相変わらずだなあ：：」

（フン、雑魚の戯言だ）

若干引きながら頭を搔く切島に座って腕を組む常闇が爆豪の姿を見てそう言っていると、火野は面倒くさそうにしているとアंकが体の中からそう言っていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

放課後、火野も身支度を済まして帰宅する最中、靴入れのロッカーから靴を取り出して履き替えると火野は大きく背伸びをしながら体の中にあるアंकに声をかけた。

「んく：：いきて、帰って勉強しなきゃ：：そう言えばアंकって勉強と

か出来るの?」

(あ?人間の考えたよく分からん問題集か?あんなの直ぐに覚えられるがそんな事して俺に得する事が一つもない)

「へえ、グリードも頭いいんだ。じゃあ一緒に勉」

(断る。今言つたる、得する事なんか一つもない)

「えー、少しは学びなよ、歴史とか面白いよ?」

(くだらない。が、アイスの歴史なら見ても良いぞ)

「お前の頭ん中アイスしかないのかよ…」

相変わらずアイスの事となると食い付くがアंकと出会って散々アイスを見ては食べて来た火野にとつてうんざりしていた。

すると、後ろから轟が声を掛けてくる。

「火野、勉強お前は どうするんだ?」

「あ、轟君。んゝ自主勉強かな…」

「そうか、…お前が良かったら一緒に勉強しないか?」

「え、いいの?ちようど分からない所あったから助かるよ!どこかの誰かとは大違い、持つべきものは友達だね」

(おい、それは誰の事だ?)

轟の誘いに火野は喜び自分の体を一瞬見ながらそう言うのアंकが気にしたのかそう聴こえてくる。

だが火野は無視して轟に提案した。

「じゃあさ轟君、週末に図書館で勉強しない?あそこなら涼しいし勉強も捗ると思うんだけど」

「ああ、そうするか」

「よし決まりだね!これで勉強はバツチリ!轟君頭良いしもしかしたら凄い成績取れそうだなあ!」

「いや…、そんな言う程じゃねえぞ…?てか、そこまで期待されると返ってプレッシャーになるんだが…」

張り切る火野の言葉轟は買い被りだと目を逸らす心なしからどこかその表情は嬉しそうに見えていたのだった。



同時刻、鴻上フアンデーションの会長室にて。

「ふああ…、お呼びですかあ会長？」

「品のない欠伸ですね伊達さん」

「しゃーねーだろ、保須事件の一件で引っ張りだこで碌に休めてないんだよこっちは」

会長室に現れた伊達は入って早々大きな欠伸をして頭をボリボリと掻く。ソファアに座って会長から用意された1ホールのバースデーケーキをカットして食べながら里中は眉に皺を寄せて言う。伊達はジト目で言い返す。

すると、会長が席を立ち、伊達に向かってゆっくりと歩きながら口を開いた。

「伊達君、例の雄英高校の件は覚えているかね？」

「え？……あく何でしたっけ？」

「1週間後に行われるヒーロー科1年生の期末試験、演習試験は対人戦闘・活動を見据えた”より実戦に近い教えをする内容の事で火野映司さんには特別に伊達さんが”参加指導”する話です。昨日話したのにもう忘れたのですか？」

伊達はキョトンとした顔で首を傾げると呆れた里中は再度説明してあげていた。

伊達は「あー」と思い出したのか息を吐いて口を動かす。

「急な話だよなあ、そもそも雄英高にはプロヒーローの揃い組だろ？何で教師でもない俺が…」

「火野映司さんは”個性”オーズの力は底知れない物です。しかも最近発生したアंकが加わってぶつちやけチートみたいな力なので

同じメダルを使うバースの伊達さんにわざわざ協力を申し込まれたんですよ？チツ…それも昨日説明したのに低脳みそ過ぎませんか？」
「て、低脳みそて…里中ちゃん毒舌過ぎ…てか、舌打ちしたよね今？流石に傷つくよ？」

大きく息を吐き、聞こえない様舌打ちして里中はそう説明すると伊達は傷付いたのかしよんぼりしながら言うとう会長が何か思ったのか口を開いた。

「その事なのだがね伊達君。我が社の社員の1人が是非とも火野映司君と実戦を試してみたいと言う志願をもらったのだよ」

「え？」

会長の言葉に伊達が声を漏らすとその話を聞いてなかったのか里中も口を開く。

「それは初耳です会長。そんな物好きな方、誰なのですか？」

「私ですよ」

里中が言った瞬間。背後から男性の声が聞こえて里中と伊達は振り返る。その人物を見た2人は目を見開き驚くと、伊達がその人物に指を向ける。

「えっ!?ま、マジで言ってるの？開発部署の主任ともあろうアンタが…!?」

「ていうか、他人に興味を持つ事自体に驚きなんですけど…」

伊達に続いて珍しく里中も驚いてそう言うとき黒のスーツを着た男性がセルメダルを1枚取り出して口を開いた。

「ええ、火野君のオーズの力はバースシステムの戦闘データの元。職場体験の時は海外へ出張してしまい会えませんでした、直に観れるならば是非とも実力がてらに『観察』したいのです」

「ハッハッハッハ!!君のその見たいと言う欲望!!素晴らしい!では伊達君の代わりに君に頼むとしよう!!」

男性の言葉に上機嫌となった会長は高らかに笑いそう言うとき一旦区切り、男性の前へと歩み寄る。

「詳細は後で里中君に聞くといい!大いにその欲望を解放してきたまえ!『ドクター真木』!!」

「ありがとうございます…」

会長の言葉に“真木”と言う人物は左肩に置いてある不気味な人形が落ちない様、軽くお辞儀をしたのだった。

No. 62 期末テスト

筆記試験当日。1週間はあっという間に過ぎて行き、期末テストを向かえたA組生徒達は各々が勉強を励んだその知識を頭に入れ、答案用紙に挑んでいた。

時は流れて筆記試験3日目。シャープンを書き殴る音が教室に響き渡る中、その中の1人、轟と一緒に勉強した火野は問題集をスラスラと解いていく。

「よし…！これなら大丈夫だ…！」

殆ど問題を埋める事が出来た火野は再度間違いがないか確認し、それが終わると同時に教卓の前に相澤が立つと片腕を上げて筆記を止める様呼び掛けた。

「全員手を止めろっ。各列の一番後ろ、答案を集めて持って来い」
相澤の言葉により筆記試験は終了となる。

そして、筆記試験は無事に終わると上鳴と芦戸は立ち上がって八百万の席に向かうと声を上げた。

「ありがとうーヤオモモー！」

「わっ」

「取り敢えず全部埋めたぜー!!」

答案を集めてる最中に声を掛けられ八百万は驚くも感謝の言葉に喜んでいた。

「ふう、何とかなっただけ」

緊張がとけて火野は息を吐くと切島が近寄り声を掛けて来る。

「火野、筆記試験どうだった？」

「ああ切島君、何とか埋めれたかな。切島君は？」

「ちよつと危なかつたけど俺も何とかなっただけ！爆豪のおかげだな！
変な教え方だったけどありがとよー！」

「変な教え方ってなんだッ!!完璧だったろーが！」

切島が席に座っている爆豪にお礼を言うと余計な一言にキレる爆豪。こうして、3日間の筆記試験は無事終了となり、翌日…演習試験

が直ぐにやってきたのだった。

☆☆☆☆☆☆

実地試験会場中央広場にて。

「それじゃあ演習試験始めていく」

実技の試験となりA組全員はコスチュームへと着替えて会場に集まると、相澤を含めた教師が数名と何故か横一列に並んでいた。

「この試験でも勿論赤点はある。林間合宿行きたけりやみつともねえへマはするなよ」

「先生多いな…?」

「5…6…7人?」

その人数に気付いた耳郎が首を傾げ、葉隠は人数を数えていた。

「諸君なら事前に情報仕入れて何するか薄々分かっているとは思うが…」

「入試みてえなロボ無双だろ!!」

「花火!カレー!肝試!ー!!」

相澤が言いかけると内容を知っていた上鳴と芦戸が敵^{ヴァイラン}ロボ相手に得意な“個性”を持っている為か調子に乗って叫ぶ。

すると、相澤の体がモゾモゾと動き始め捕縛布の中から突然根津校長がひよつこりと飛び出した。

「残念!!諸事情あって今回から内容を変更しちゃうのさ!」

「校長先生!」

「何で相澤先生の中から…?」

その発表と同時に、上鳴と芦戸の動きが止まる。

瀬呂が驚き、火野は疑問を抱いていると八百万が尋ねると根津校長は捕縛布を掴んで相澤から降りながら説明した。

「変更って…」

「それはね、近頃多発している事件が日に日に多くなっているのは皆んなも知ってるね？ 敵サイランこのまま行けば活性化の恐れが何れ起こっても不思議じゃないのさ。勿論未然に防ぐ事が最善だけど学校としては万全を期したい。これからの社会現状以上に対敵サイラン戦闘が激化すると考えれば…」

「っ！ロボとの戦闘訓練は実戦的ではない…」

根津が説明していると「はっ」と分かったのか八百万が呟く。すると、教師の1人の13号が口を開いた。

「そもそもロボは『入学試験という場で人に危害を加えるのか』等のクレームを回避する為の策です」

「ロボだけで実戦をした所で本物の敵サイラン相手になんも活かせれない：不合理そのものなんだよあんな鉄の塊は」

13号に続いて相澤は息を吐きながら言う「と根津校長が一步前に出て生徒達に宣言した。」

「これからは対人戦闘・活動を見据えたより実戦に近い教えを重視するのさ！というわけで：諸君らにはこれから二人一組チームアップでここにいる教師1人と戦闘を行ってもらおう！」

根津校長の言葉に生徒達全員が目を見開く。

その予想外の戦闘実習に麗日リジが息を呑んだ。

「先…生方と…!?!」

「尚、ペアの組と対戦する教師は既に決定済み。動きの傾向や成績、親密度…：諸々を踏まえて、独断で組ませてもらったから発表してくぞ。まず、轟と八百万で俺とだ」

「…」

「っ！」

相澤に指名された二人は身構える。『個性』も有能尚且つ推薦入学二人組と来てその担当が相澤。

何か考えがあるのだろうかとうと火野は思っていると次の相澤の指名する生徒の名前に驚愕した。

「そして緑谷と爆豪がチーム」

「デ……!?!」

「かつ……!?!」

まさかの相性最悪コンビ。しかもその相手もまた驚く教師の名だった。

「で……相手は……」

「私がする！協力して勝ちに来いよ、お二人さん!!」

「オー……ルマイト……!?!」

相澤の背後から現れたのは筋骨悠々のマッスルフォームのオールマイトだった。

No.1最強のヒーローが相手となり緑谷は驚愕する。

相手にとって不足は無いと思っていた爆豪だがそのペアが緑谷なのか脂汗を流して緑谷を睨む。またその逆も然りで緑谷も眉を寄せながら爆豪を見ていた。

すると相澤が端末を取り出すと背後から現れたモニターに残りのメンバーとその相手の名前が映し出されてる。

「残りのチームと相手の先生はモニターで表示する。時間は限られてるからな」

「相変わらず合理的な男だなイレイザー」

相澤の思想的その行動にスナイプは軽く溜息を吐く。

そして、モニターに書かれていたチームのメンバー達とその相手をする先生は顔を見合わせ口を開いていた。

根津校長VS上鳴・芦戸

「校長先生!?!」

「てか、そもそも戦えんの!?!」

「宜しくなのさ!?!」

「メルシー☆宜しくネ☆」

「13号先生と…！頑張らなきゃ…！」

「君達の本気を思い切りぶつけて見せてください」

エクトプラズムVS蛙吹・常闇

「戦闘訓練以来ね常闇ちゃん」

「ああ、宜しく頼む蛙吹」

「フ：謳歌シテイルノモ今ノウチダ」

ミッドナイトVS瀬呂・峰田

「フフフフ…本気で掛かってらっしやあい…」

「やべえ…本気で掛かっていいってよお…!!」

「涎出てるぞ涎」

スナイプVS葉隠・障子

「よおし！合宿の為私頑張る！」

「そうだな」

「まあ、お手並み拝見と行こうか」

セメントスVS砂藤・切島

「おし！やってやろうぜ砂藤！」

「おうよ！」

「意気込みは良しとしましょう」

パワーローダーVS飯田・尾白

「対人戦闘試験…！今の時世に適した試験内容だ！全力を尽くさなければ！」

「ああ、頑張ろう飯田君！」

「ケケケツ！俺のフィールドを攻略できるかな？」

??? VS 火野・耳郎

「はてな？」

「どう言う事…？」

全員が把握する中、火野は耳郎とチームを組む事になったが、教師である名目の欄には見ての通りハテナマークが記載されており、火野と耳郎は首を傾げる。今になって気付いたがここに集まっていた教師は7人。1人足りない事に気付いていると根津校長が口を開いた。「火野君のオーズはコアメダルの力で様々な能力が扱えるのは勿論教師の全員も把握済み。対等に満足の行く戦いが出来る担任がいないので、特別に君のチームには鴻上ファウンデーションから来て頂いたスペシャルゲストと戦ってもらおうのさー！」

「鴻上って…まさか伊達さん!？」

鴻上の言葉に火野はバースである伊達が頭をよぎり口にするが相澤は首を振り口を開いた。

「バースシステムを使う伊達明…最初はその予定だったが向こうの都合で別の人物が来ている。さて、本題に戻すがそれぞれステージを用意してある。10組一斉スタートだ。試験の概要については各々の対戦相手から説明される。移動は学内バスだ。時間が勿体無い。速やかに乗れ」

相澤がそう言い終わると生徒、教師達は動き始め用意されていたバスへと乗り込む。

「じゃ、俺達も行こっか耳郎さん」

「そだね…てか、スペシャルゲストってアンタ本当“個性”優遇されてるよね、羨ましいよ。…でも、ウチらの対戦相手って誰だろ…。火野って職場体験鴻上ファウンデーションに行っただよね？心当たりとかないの？」

「そんな事ないよっ…。ううん…あるとしたら、里中さんぐらいしか思い浮かばないけど…あの人相当面倒くさがりだから有り得ないんだよなあ」

同じチームの耳郎とバスに向かう途中耳郎が聞いてくると首を軽く横に振った火野は秘書の里中が頭を過ぎる。実力は保須事件で織り込み済みだがその性格も知ってる故わざわざここに赴くのは無いだろうと呟いた。

そして、指定されたバスへと到着し、2人は乗り込むと真ん中のシートにある奇妙な人形がご丁寧にシートベルトをして置いてある事に気付き、2人は立ち止まる。

「え…人形…?」

「なんか凄い不気味なんだけど…」

2人は引いていると、突然火野の身体からアंकが出て来て姿を現す。それと同時に驚愕した目でその人形を睨んでいた。

「アंक?急に出て来てどうし…」

「…こいつは驚いたな。まさかお前までここに居るとはなあ…真木」

火野は声を掛けるがその強張った表情を見て喋るのを止めるとアंकはバスの奥に座っている男性に声を掛け名を呼ぶ。すると、男性は席から立ち上がりこちらにゆっくりと近寄りながら口を開いた。

「私の名を知っているとは光栄ですアंक君。そして初めまして、私が今回君達の戦闘試験の相手となる鴻上ファウンデーション開発部署専属主任の真木清人まききよひとです。どうぞ御見知り置きを…」

真木は座っている人形をシートベルトを外し、その人形を大事そうにそつと左肩に置くとアंकが「フン!」と強めに鼻を鳴らすと指を刺して口を開いた。

「知ってるぞ!ドクター真木!気味の悪い人形いつも持ち歩いて終末」だの何だのほざいていた研究員だろ」

「え?え?ちょ、アंकってあの人と面識あるの?」

「い、いや…ドクター真木って…まさか…」

アंकが言う中、状況が分かかっていない耳郎は挙動不審になりながら火野に言うとうと火野は思い当たる節があったのか目を見開く。

そう、真木という人物は前世のオーズの世界で「終末」を齎しめようとしていた人物だ。

そして、アंकの「終末」の言葉に真木は人形をチラチラと見ながら口を開いた。

「『終末』…美しい響きです。しかし私はその言葉を好きなのを知っているのは会長ぐらいな筈ですが？何処で知ったのかは分かりませんがそれはもう過去の話です。今の私にとって終末とは人生の美しい終わり…、謳歌した人生に相応しい終止符を求めるのが現在の思想です」

「は、はあ…」

真木の言葉について行けてない耳郎はただ頷くだけだった。だが、その予想打にしなかったのかアंकは目を見開いていると火野はアंकに耳打ちをした。

「アंक…前の世界でもあんな感じだったの…？」

「半分合ってるが半分違う…。だが用心しとけ映司。こいつは信用できない、前の世界で俺は殺されかけたからなあ」

「で、でも前の世界の事は皆んな記憶にないだろ？この人も案外良い人に生まれ変わってるんじゃないか？」

「…どうだかなあ」

火野の言葉にアंकは数秒考えるが、前世でしていた事が頭をよぎったのか曖昧な返答をする。

すると、バスのドアが閉まりエンジンの掛ける音が聞こえる。火野はふと、窓の外を見るといつの間にか他の学内バスの車が無くなっており、火野達が乗っているバスだけがこの中央広場に残されていた。運転手も焦ったのか慌ててシートベルトを締めてドライブギアを入れ、急にアクセルを踏む。

「わわ」

急に走り出そうとするバスに車内は重心が掛かり耳郎と火野、アंकは身体が少し持ってかれそうになる。

真木もまた同じでよろけていたその時。

左肩に乗っていた人形がバランスを崩し、スローモーションするか

の如く落下し、バスの床へと落ちたのだ。

「…!!あ…!!」

その瞬間、真木の表情は一気に青くなり大きく目を見開いて人形を凝視していた。

「あ…!!あ…!!?」

次第に呼吸も荒くなりその手は物凄い勢いで震え始める。

「えーちよつと大丈夫ですか?!人形落ちちやってるしっ」

明らかに様子がおかしい事に火野は人形を拾おうとしたその時。

「ヤーメーロオ!!」

「うわあっ!!」

「うわ!!」

突然、真木は形相を変えて物凄い甲高い声で大声を上げる。それに驚いた耳郎、そして人形を持っていた火野も驚くと同時に人形を放り投げてしまった。

人形は車内の宙を舞い、バスのシートの隙間に落下して入り込むと真木は両腕を頭に当てて発狂した。

「ダメダカラアー!!?ナゲチャダメダカラアー!!?ア!ドコ!?ドコナノ!!?ナイヨ!!?ミアタラナイヨ!!?ア!ココカナ!?チガウヨ!!?ドコナノ!?スキマ!?スキマハイツチャツタノ!!?トレナイヨ!!?セマイヨ!?ボクトレナイヨ!!?テガトオラナイヨ!!バスユレルヨ!!」

「……………ウワア」

「……………ぶ、ぶふーっ!!」

「……………映司。やっぱりこいつは信用出来ない」

先程までの口調とは裏腹に叫びながら必死に人形を探し出す真木。その姿を見て火野は引いていると最初は引いていた耳郎はその言動を見て思わず吹き出している。

そしてアंकはその相変わらずな行動を見下す様な目でそう呟いていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

S I D H : 緑谷・爆豪組

「さて、ここが我々の戦うステージだ」

バスから降りてやって来たのは高層ビルが並ぶ相変わらずどデカイ運動場。さっそくオールマイトが説明しようとする緑谷がたじたじと質問をした。

「あの…戦いつてまさかオールマイトを倒すとかじゃないですね？ どう足掻いてもムリだし…！」

「消極的なせつかちさんめ！今からちゃんと説明する！」

☆☆☆☆

S I D H : 芦戸・上鳴組

こちらの2人組が連れて来られたのは運動場β。工業地帯が縦並び運動場。2人の前に立つ根津校長が説明をする。

「制限時間は30分さ！君達の目的は、この『ハンドカフスを私にかけろ』or『誰か一人がこのステージから脱出』！」

角張った手錠の様な道具を見せてそう言う上鳴が受け取ろうとしながら口を開いた。

「戦闘訓練と似てんな」

「逃げてもいいんですか!？」

「うん、はい」

芦戸が質問すると根津校長は頷きハンドカフスを渡しながら頷いた。

☆☆☆☆☆☆

S I D H：切島・砂藤組

2人が連れて来られたのは緑谷達と同様にビルが多く建て並ぶ運動場。ここで担当するセメントスが2人に説明をしていた。

「戦闘訓練とは訳が違うからね。私達プロ相手なのでそのつもりでいる事が肝心だよ」

☆☆☆☆☆☆

S I D H：麗日・青山組

こちらは青山と麗日。試験場所は13号が設立したウソや災害の事故ルーム事、U S J。他の教師と同じ様に13号は説明する。

「今回は極めて実践に近い状況での試験。僕らを敵そのものだと考えて下さい」

☆☆☆☆☆☆

S I D H：葉隠・障子組

障子達が連れて来られたのは幾つもの柱が立ち並ぶ薄暗い屋内施設。2人の担当をするスナイプがウェスタン仕様の帽子に手を当てマスク越しに口を開いた。

「会敵したと仮定し、そこで戦い勝てるならそれでよし。だが」

☆☆☆☆☆☆

S I D H：八百万・轟組

「実力差が大きすぎる場合、逃げて応援を呼んだ方が賢明。轟、お前等はよくわかってる筈だ」

ここは民家が立ち並ぶ場所で相澤の言葉に轟はヒーロー殺しの一件を思い出していた。

☆☆☆☆☆☆

S I D H：飯田・尾白組

2人の場所は建設工事現場の様な試験会場。担当するパワーローダーが不気味な笑いと共に説明する。

「ケケケツ！まあ逃げる選択をしたとしても我々教師相手にそう簡単に逃げられない事も覚えとけよ？」ハンデ”を付ける分、お互いが協力してどこまで戦況を覆せるかも重要だ」

「〃ハンデ”？」

パワーローダーの言葉に尾白は首を傾げていた。

☆☆☆☆☆☆

S I D H：緑谷・爆豪組

「戦って勝つか、逃げて勝つか……」

オールマイトの説明に緑谷は頷くとオールマイトはゴソゴソと〃ハンデ”の器具を取り出した。

「そう！君らの判断力が試される！けど、こんなルール逃げの一択じゃね!?って思っちゃいますよね。そこで私達、サポート科にこんな作ってもらいました!!〃超圧縮おーもーりー”!!!」

テテテテン！とどこかの子供番組にいるキャラの様な声でバングルの形をしたサポートアイテムを取り出す。

「体重の約半分の重量を装着する！ハンデってやつさ。古典的だが動きづらいし、体力は削られる！『ガシャ！』あ、ヤバ、思ったより重……！ちなみにデザインはコンペで発目少女のが採用されたぞ」

「発目さんっ……！」

「戦闘を視野に入れさせるためか、ナメてんな」

その重りを付けながら説明すると爆豪が若干キレ気味にオールマイトの説明に納得する。

ハンデを付けられるという設定にどうやらご不満な様子だが、オー

ルマイトは笑いながら返事をした。
「H A H A！うん！だがどうかな！」

☆☆☆☆

S I D H：常闇・蛙吹組

「受験者：我々はステージ中央スタートか」

「逃走成功には指定のゲートを通らなきゃいけないのね。となると…
先生はゲート付近で待ち伏せかしら」

2人が連れて来られたのはデパートの中央ホールの様な会場で指
定位置に移動した常闇が言うど蛙吹が警戒し身構えていた。

☆☆☆☆

S I D H：火野・耳郎組

最後に到着した火野と耳郎は粗方真木に説明を聞かされるとス
タート地点へと移動して準備をしていた。荒野を催された戦闘会場
で岩が多く設置されているその会場。2人は軽く準備運動をしてい
ると耳郎が火野に声を掛けた。

「真木さんって人何処行っただら？」

「さあ…、だけど何か仕掛けて来るのは間違いないだろうから、耳郎さ
ん索敵をお願いしてもいいかな？」

「分かってる、ウチはそれが取り柄だからね」

拳に力を入れた耳郎は強く頷くと何処からかりカバリーガールの
アナウンスの声が会場全体に響き渡る。

『皆位置に着いたね。それじゃあ今から雄英高1年期末テストを始め
るよ！レディイイー…ゴオ!!!』

合図と共にブザー音が鳴り響き、戦闘実施試験が開始される。

だが、その瞬間。

ゴゴゴゴゴゴゴ!!!

「うわっわ!?!」

「な、なに!?!」

突然地響きが会場全体に響き渡り、火野と耳郎は揺れ動く地面に体全体が大きく揺さぶられたのだった。

No. 63 対オーズ戦闘口ボ

「開始早々……！何この地響き!?!」

「っ……！アंकク!」

期末試験、戦闘演習が開始された火野と耳郎は突然起こる地鳴りに驚いていた。火野は直様アंकクに変身する為に必要なコアメダルを催促すると火野の中から人型となったアंकクが飛び出し、コアメダルを収納しているメダルホルダーからタトバの3枚を取り出す。

「はっ！真木の奴早速おっ始める気だなあ！映司！アイツはドクターと言われてたんだ！変な物を使って企んでるに違いない!」

「自己紹介で……おっと！開発部署主任って言うてただろ！言われなくても承知の上だって!」

喋りながらアंकクはコアメダルを投げ渡し、フラつきながらも何とか掴み取り、事前に装着していたオーズドライバーのスロットに2枚、1枚と嵌め込むとオーズキャナーを取り出しドライバーへとスキャンした。

「変身!」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

コンボソングが鳴り響き、火野はオーズ「タトバコンボ」へと姿を変えると、それと同時に地鳴りは大きくなっていき、オーズ達がいる場所から少し離れた前方の地面、そこから突然大きな物体が突き破って来たのだ。

「っ!?!」

「なんが出た!?!」

現れた物体に驚いた3人は身構えるとその物体はゆつくりと地面から這い上がりその正体が顔を出す。

「これ…!?!」

「敵 ロボ!?!」

機械が軋む音と共に蒸気を噴き出すのは入試試験、体育祭と馴染みのある一軒家程の巨体を誇る仮装敵ロボだった。

だがその見た目は大幅に改造されているのかかなりスラッとした造形になっている。

「て、てかまさかロボットが相手…? 真木さんは…?」

『お呼びですか?』

「!」

相手となる真木の姿が見えない事に耳郎は辺りを見回していると敵ロボに付いている小型のスピーカーから真木の声が聞こえて3人は驚く。そして敵ロボから続けて声が聞こえてきた。

『耳郎さんの言う事は半分は合っていますが半分は違います。貴方方の前に立っている脅威は私が操作しているロボット。私の意のままに動く。言わば分身の様なモノです』

「操作…!? 真木さんが乗って操縦してるとかじゃなくて?」

ロボから聴こえる真木の声に耳郎は警戒する。

『操縦しても構いませんが、事前にこの試験では本気で君達を叩き潰せと言われておりましてね…。本気で相手をするならば操縦する私にも危害が及ぶ可能性が高いので。私は遠くから操作させてもらいます。勿論、私が居る場所は教え出来ませんがね』

真木清人

個性『遠隔操作』

無機物の物体を操縦席に乗らずに遠隔操作する事が出来る! その範囲は約10km! 操作する物体にカメラを付けていれば本人は身を潜めて操る事が出来るぞ!!

「じゃあ試験相手は真木さんが操る仮装敵サイランって事でいいのかな」

『ええ、そう思ってもらって構いません。ただ、君達が思っている仮装敵サイランとは少し違いますのでそのつもりで…では、行きますよ』

オーズが確認すると真木はそう答え、同時にロボの腕を大きく耳郎目掛けて振り下ろしてきた。

「っ！」

「！耳郎さんっ!!」

いきなりの攻撃に耳郎は固まって呆然としてしまい、オーズは地面を蹴って耳郎を抱えてその攻撃を避ける。ロボのアームは容易に地面が碎かれる程の威力を見せつけているとアंकが跳躍し、オーズと耳郎の側に着地すると身構えながら口を開いた。

「こいつ！本気で潰す気で来やがった…！」

「あ、ありがとう火野…！」

「うん、怪我しなくて良かった…！」

動けなかった耳郎は申し訳なさそうに礼を言うがオーズは目線を逸らさずにロボを警戒する。

ロボは両腕のアームを地面に当てるとスピーカーから音声がかえってくる。

『今回の戦いは二人一組チームアップ。お互いをカバーし合うのは重要なポイントになりますからね。…さあ、お話はこれくらいにしましょう』

真木は一旦区切るとそのロボの背中にある装甲が可動し、無数の小型ミサイルのハッチが展開される。

『今の私は敵そのモノです。私の手で君達の“良き終末”を迎えて差し上げましょう…！』

「やっばっ！耳郎さん捕まってて！」

「うわっ!？」

大量のミサイルを目視したオーズは危機感を覚え耳郎を担ぐと能

力を解放し脚部バツタレツグの力でその場から全力で跳躍する。ア
ンクも舌打ちをして距離を取ると同時に口ボから無数のミサイルが
射出され空中へと放たれ、オーズと耳郎目掛けて追尾し始めたのだ。
「誘導弾!!? 耳郎さんー! しつかり掴まってて!」

ドオオオオオオオン!!!

「うわああああっ!!?」

追跡して来るミサイルにオーズは目先にある巨大な岩の壁を蹴り、
別の方向へ跳躍する。するとミサイルは避け切れなかったのか岩に
直撃すると物凄い爆風と衝撃を起こしその岩は一瞬で木端微塵とな
る。

抱えられていた耳郎も流石のその威力に驚き声を上げていた。

だがそう思っているのも束の間、次々と後方から接近して来るミサ
イルがオーズ達を追尾して突っ込んで来る。

「まだ来るのかよ!!?」

「っ! 火野! ウチしがみついているから耳塞いでて!!」

「え!? わ、分かった!」

残りのミサイルにオーズは声を上げていると耳郎はオーズにそう
叫びオーズに抱き締める様に捕まる。

オーズはその一瞬で空いた両手で耳を塞ぐと耳郎は耳朶のプラグ
を伸ばし両足に装備されているスピーカーに挿すとそこから爆音の
衝撃波が放たれる。

後方から接近して来るミサイルに衝撃波が当たると連鎖するかの
如くミサイルは次々と空中で爆発していき、跡形もなく無くなって
いった。

「ありがとう耳郎さん!」

「う、うんっ、さっきの貸しは返したよ…!!」

「?」

『成る程…、自分の心音を爆音に変えて衝撃波の様な音波攻撃を放出
する『イヤホン・ジャック』。ミサイルは寄せ付けけないと言う事ですか

…」

オーズは空中から着地して耳郎を降ろしながら礼を言うと耳郎は耳を真つ赤にしてそっぽを向いていた。不意とは言え異性に抱き着いた事が今になって気付いたのか余程恥ずかしかつたのだろうか。オーズはそれに気付かず首を傾げているとロボが脚部に付いているキヤタピラでこちらに向かって前進し接近して来た。

「っ…っ…ち来るー！」

それに気付いた耳郎は声を上げると、付近に着地して来たアングがメダルホルダーから重力コンボでお馴染みの「サゴーズ」のメダルを3枚取り出し、オーズに向かって投げ渡した。

「映司！相手は所詮鉄の塊だ！時間も限られてるんならこのコンボでさっさとぶっ壊せ！」

「おつとつ！あ、これ！サツゴーズオ！！つてヤツ！分かった！」

オーズは受け取り久々に使うメダルなのか少し上機嫌にその3枚をドライバーに嵌め変え、オースキャナーでドライバーをスキャンした。

サイ！

ゴリラ！

ゾウ！

サ・ゴーズ…サ・ゴーズオツ！

「はああア!!」

重々しいコンボソングと共にオーズはパワー系重力コンボ「サゴーズコンボ」へと姿を変える。

煽れんばかりのエネルギーをドラミングの要領で自身の胸を打ち鳴らし雄叫びを上げた。

「うおおおおあああああああつっつ!!!」

「うわっわ!!?」

激しく打ち鳴らす重々しい振動音と共にオーズの居る会場全体が揺れ始め耳郎も立っているのがやっとな状態となっていた。

『属性を3枚使う事でその真の力を発揮するコアメダル。そのうちの一つ、重力を操るサゴーズコンボ…。確かに、そのまま接近すればこのロボットでも粉々になる事は間違いないでしょう…。ただのロボットならの話ですが』

真木は予測していた様な反応でそう言うと、ショルダー部分から小型の浮遊機の様な物が射出される。

空中へ飛び出したその機械は白く発光すると肉眼で微かに見えるか見えないぐらいの電子バリアの様なエネルギーが展開される。

すると、揺れていた辺りの地面一帯がピタリと止んだのだ。

「何…!?!」

「…あれ…:…?」

「っ!?!えっ?止まった!?!」

ドラミングをしても反応がない会場に驚くアंकと耳郎、オーズ。するとロボから真木の音声が届いてくる。

『“対オーズ用重力制圧防壁電子フィールド”。これで君の重力攻撃は無効化されました。言い忘れていましたが、この仮装敵^{サイラン}ロボは火野君。君が入試試験で破壊したお邪魔虫^{ロボ}を私が改造した代物ですからね。最も、君専用につくった“対オーズ戦用戦闘ロボ”です。無論他のコンボの詳細もその対策も把握済みなのですよ』

「うっそお!?!」

「バカが!そんなチートみたいな話あるわけないだろがッ!!ハツタリに決まってる!」

明かされたロボの詳細にオーズはマスク越しに両手を頬に当てて驚愕し、アंकはキレ気味に言い放つと真木の言葉から納得の行く発言を聞かされた。

『…まあ、少し会長の“個性”を使わせて頂きましたので、かなり強力なロボに仕上がってしまいましたのも正直な話です…』

「会長の…!?!」

「ちっ!!あんの野郎ツ!!」

「じゃあ…オーズの力は全部効かないって事!?ヤバすぎないソレ!?」

鴻上の「個性」「権限」は自身の発令した言葉が思い通りになる。それを聞いた瞬間、オーズは再び驚き、アंकは納得したのか不満そうに強く舌打ちをしていた。

耳郎も理解したのか青ざめた表情でそう言う。

その瞬間、ロボの背中から鉄の棒の様なモノが複数展開され、オーズの頭上へと射出される。

「っ!!耳郎さんごめん!」

「えっうわっ!!」

その飛んで来た物体が危険な物だと察知したオーズは加減して耳郎を突き飛ばす。耳郎は数m程飛ばされ地面に落とされる。その瞬間、鉄の棒の物体が勢いよく周囲に散らばるとロボ、オーズ、アंकを囲む様に地面に突き刺さり、作動すると同時にエネルギー状の壁が放出される。そして瞬く間に結界はドーム状の壁となった。

「これは…!?」

「ちっ!ハメられたか…!」

『「電磁防壁バリア」。これで君達は逃れられません…と言いたい所ですがあの瞬間にもう1人を範囲外へ逃すとは中々やりますね火野君。コレを作動してしまえば30分は自動で作動し、どんな攻撃でも止める事も出来ません。よって私も出る事は不可能…。もっとも、戦闘ロボを倒せば強制的に止められますけどね』

詰め寄るロボにオーズとアंकは身構える。その時、オーズは防壁の外に居る耳郎に向かって声を上げた。

「耳郎さん…ここは俺が引き付けるから君だけでもゴールへ向かって!」

「っ、何言ってるの…!?ウチだけゴールしたらあんだ失格に…!」

「かもね!…でも、俺だって合宿に行きたいから出来る限り抗うよ!」

唯一その場を動ける耳郎だけでも、そしてなんとか倒して出ると決断し、オーズはそう言う。

その瞬間、校内放送のスピーカーからリカバリーガールの音声が聞

こえて来た。

『報告だよ。条件達成最初のチームは轟・八百万チーム!』

「えっ!? もう!?」

「はっや…! 流石だなあ」

『…開始10分で1チームクリアですか…流石は雄英生徒ですね』

報告を聞いて耳郎、オーズは驚いていると真木は時刻を見たのかそう言つて感心していた。

「行つて耳郎さん! さあ早くツ!!」

「っ…! …! …! ツツ!!」

最初のクリアした報告を聞いて焦りを感じたのかオーズは耳郎に向かつて叫ぶと耳郎は悔しそうに歯を食い縛り、背を向けてゴールのある方角へと駆け出した。

『…自らの窮地を無視して彼女だけを合格させるとは、君はお人好しですね』

「フン! 不本意だがそれについては同感だ。自分の事は全く視野に入れない。馬鹿もいいところだ」

「五月蠅いアंक! 真木さん。さっきも言いましたけど俺はそのつもりじゃないです! 俺は最後までもがきますよ!」

『良いでしょう。ならば君達だけでも終末を迎えて差し上げましょう…!』

ファイティングポーズを構えるオーズに真木はそう言い残すとロボの両腕のアームを広げオーズとアंकに向かつて前進を開始し始めたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「はあっ…はあっ…!!あ、あつた…!」

荒野の会場を走り抜けて行く耳郎は前方に目的地点であるゲートが見えてくる。チカチカと洒落たライトが点滅しており、根津校長の絵が描かれており吹き出し口には『がんばれ!!』と文字が記載されていた。

耳郎は息を切らしながらゴール地点へ向かおうとするが、その足を止めて振り返る。目線の先、オーズが戦っているドーム状のエネルギー体を見ていた。

「…良いの…かな」

今更になって耳郎は考えボソツと呟く。ここで通過してしまえば耳郎は合格出来るのは間違いない。火野もオーズの力に加えてアンクがいるのだから倒して来ても不思議ではないと考え走って来たのだが、真木の作ったロボット相手に苦戦していたのも事実。

ふと、耳郎は火野が言っていたヒーロー志望の理由が頭を過ぎった。

『火野、当たり前前の事聞くんだけけど何でヒーロー目指そうと思ったの?』

『え?それは勿論 困ってる人に手を差し伸べれる 〃ヒーローになりたいからだよ。どんな場所にも手が届く、それが俺の理由でもあり目標でもあるんだ』

『へえ。お人好しの台詞だね…でも嫌いじゃないかも』

『あはは、よく言われるよ。そう言う耳郎さんは?』

『ウチ…?ウチは…』

「…!」

耳郎はその回想を思い出すと目を大きく見開く。

そして、その足はゴールではなく、オーズ達が戦っている方角へと変えて走り出したのだった。

☆☆☆☆☆☆

「うわあっ!!」

「おい！なに力負けしてやがる映司!!」

ドームの中、オーズはロボのアームの一撃によって吹き飛ばされアंकはキレ気味に言い放つ。コンボの中でもパワー系のサゴーズを使っているのにそのゴリバゴーンを使った拳のぶつかり合いに力負けをしたのだ。

流星に窮地と思ったのかアंकは右腕をロボではなく浮遊している重力制圧装置に突き出し、火球を放つ。だが、迫り来る火球を認知したのか制圧装置はそれを避けた。

「ちっ！面倒なモンだしやがって…！」

「いったあああ…!!あのロボットめちやくちや硬いよアंक…！」

『当然です。アंक君が炎を放射する事は知っています。そして火野映司君。地球上最も硬いと言われているダイヤモンド。コレよりも更に硬質なウルツアイト窒化ホウ素をふんだんに使用した特殊な素材を両腕のアームに纏っているのですから。君の自慢の攻撃にも耐えられる様になっているのですよ』

やや自慢気に話す真木に表情が強張るアंकはふとオーズを見遣ると若干息を切らし始めているのを確認する。

「コンボは持久戦には不向きだ…！ここはメダルを変えて好奇を狙うか…！」

『メダルチェンジですか。させませんよ』

アंकの言葉を聞いたのかロボは片腕のアームから小型のミサイルをアंकに向けて射出する。それに気付いたアंकはその場から急いで跳び離れると、ミサイルは誘導弾ではないのかその場の地面に当たり爆発した。

「アंक…！」

「クソ！そんな暇与えてくれないってか！」

『報告。緑谷・爆豪チーム条件達成!』

「!」

オーズはアंकの安否を確認する直後、リカバリーガールから放送が聞こえ、オーズは目を見開く。オールマイト相手にまさかの相性最悪コンビが初陣の合格に続いて2番目に早く合格したのだ。同じく聞いていたアंकは鼻で笑い口を開いた。

「フン!笑える報告だ。アイツら仲悪かった筈だろ…!」

「ああ…。本当凄いや…!」

共感したオーズは頷くと同時に全身に気合いを入れて拳に力を入れる。あの2人が勝った事により頭の中で負けられないと思ったのだろう。

オーズは一か八かでオースキャナーを取り出そうとしたその時だった。

突然、囲んでいたドーム状のエネルギーがビリビリと誤作動を起こしているかの様に微量に揺れ始める。

『?これは…』

真木も認識したのかその様子にロボ事見上げていると、オーズは気配を感じて背後を振り返る。

そこにはプラグを足のスピーカーに挿して爆音をドームに向けて放出していた耳郎が立っていたのだ。

「耳郎さんっ!?何で!」

「火野!ゴメンっ!無理だった!」

「えっ!?もしかしてゴール地点にトラップか何かあるの!?!」

耳郎の言葉にオーズは驚くと耳郎は大きく首を振る。

「1人で…!合格するなんて…!ウチには無理みたい!!火野ならオーズで何とかなるんじゃないかってさつき思ってたけど…!そんな後味悪過ぎるじゃん!」

ビリビリと自身にも心音が轟くのか耳郎の表情が強張っていきながらも続けて声を上げる。

「ウチ!索敵以外は何も取り柄ないけど…!そんな理由にしてたら

カッコ悪いって思ってたさ…!!だったらウチも最後まで足掻いて皆んなでクリアしようよ!!」

「!」

自分も苦しい筈なのに耳郎は笑顔でオーズに言い放つ。それと同じ時にオーズ、火野は耳郎が言っていた言葉を思い返す。

『ウチは、 “皆んな” で助けて最後は笑い合えるヒーローになりたい…かな』

耳郎の言葉を思い返したオーズは自然と笑みが溢れると、耳郎に向かって頷き、オースキャナーを取り出しドライバーにへと再度スキャンした。

「耳郎さん…!うん!必ずクリアしよう!!」

スキャンングチャージ!

「うおおおおっ!!!」

音声が鳴り響くとオーズの頭部と両腕のゴリバゴーンが発光し始め、雄叫びを上げる。

「う…!?これ以上は身体が…!!でも…!負けらんないよ、ね!!!」

負荷に身体が掛かり立っているのもやっとなり始める耳郎は自身を言い聞かせて更に爆音の威力を上げる。

「全力で!!Plus Ultra!! (“ハートビートノイズ” !!!)」

耳郎は声を荒げると衝撃波の威力が強まり、ドーム状のエネルギーが大きく揺れる。

その瞬間。

バキヤアアアン!!

『ツ!?バリアが…! (やはり外からの衝撃は脆いですね…!』

ドーム状のエネルギーを纏った装置が負荷に耐え切れず大破し、そのエネルギーが消え去る。

それと同時に耳郎の脚部に装備されていたスピーカーも壊れてしまふ。

「や…つた…!」

『小賢しい真似を…』

膝から崩れ落ちる耳郎にロボは先手をせんとアームを上げて耳郎に襲い掛かろうとする。が、付近にいたアंकがいなくなっている事に気づきその動きは止まる。

『まさか…!』

真木は異変を感じたのかロボを使い頭上を見上げるとそこには紅く美しい翼を背中から広げていたアंकが飛んでいたのだ。

「こういうのが出来る事も、調べてたのか!?フツ!!」

アंकはそう言うのと豪炎を纏いグリード化した右腕を勢いよく重力制圧装置に向け振り下ろす。すると、装置は真つ二つに切れ、その切れ目からは炎が立ち昇り空中で爆破したのだ。

その瞬間、辺りの空にノイズが走ったかの様に一瞬歪みが発生する。

『制圧が解除された…!マズイ…!アーム以外はただの鉄の塊…!!』

「映司!」

「火野オ! いっけええええ!!」

「ウオオオオオオ!!」

重力制圧装置が破壊され真木はスピーカー越しに冷や汗を流しオーズから離れようとするが、時既に遅く、オーズのドラミングにより途轍もない重力がロボの機体に掛かりバキバキと軋む音がロボから聞こえ始める。

そしてオーズはアंकと耳郎の言葉に呼応されその場から跳躍すると、ロボの胴体目掛けて突っ込んで行く。

「せいやあああああああつっ!!!」

両腕のゴリバゴーン、頭部のサイヘッドを同時に打つける。『サゴーズインパクト』がロボに炸裂する。アーム以外の鉄の塊はその威力に容易に碎かれそのダメージに耐え切れずロボは爆発したのだった。「ハアっ…ハアっ…!!うっ…!!」

瓦礫となり炎が燃え盛るロボの前でオーズは着地すると負荷が来たのか強制的に変身が解かれ、火野は息切れを起こしながらその場に膝を突く。

「や…やった…！耳郎さん、大丈夫…夫…？」

「ウチは…大丈夫…！あんた、自分の方がダメージ大きい筈なのに…！本当お人好しだね…」

「あはは…そうかもね…でも君が無事なら良かったよ…」「っ……………」

疲れて喋るのもしんどそうな火野を見て耳郎は苦笑するも、火野は安心した笑みを浮かべそう返す。すると、耳郎はその顔を見て頬を赤めらせそっぽを向く。

すると、アंकが火野に近寄ると疲労しているのに構い無しに声を掛けた。

「おい、呑気にしてる場合か。さっさとそのゴールってとこ通過しないと真木の奴が何か仕出かして来るんじゃないのか」

「あっ…！そうだな…おっとと！」

勝利した事に余韻に浸っていた火野は慌てて立ちあがろうとすると千鳥足となり踉蹌めく。

「大丈夫火野？」

「ああうん…っ。大丈夫っ。それよりアंक。飛べるならゴールまで連れて行ってよ」

「ハ？フン、断る。自分の足で歩け」

耳郎も何とか立ち上がると火野は頷き、翼を生やして飛んでいたアंकを思い出してお願いと面倒臭そうにアंकはそっぽを向い

たのだった。

No. 64 更にむける一皮

真木が送り出した対オーズ用の戦闘ロボを倒した火野、アング、耳郎は重い足を運びなんとか脱出ゲートを通過する事が出来た。ゲートを通過した際には根津校長の吹き出しに“よくぞ!!”と文字が記載され火野・耳郎チームは試験を突破したのだった。

☆☆☆☆

「私なりにかなり強力に仕上げたつもりなのですが…。流石はオーズと言った所ですね」

火野達が条件達成した後、真木本人は跡地に向かい瓦礫と化した戦闘ロボを見て呟く。

ふと、ここに来る前に校長室で根津校長と話していた出来事を真木は思い出していた。

――

『この度はご協力に感謝しますドクター真木。今回の試験内容についてですが…』

『根津校長。大丈夫ですよ。事前に送られてきた資料で今回私が受け持つ生徒2人、試験内容、評価すべき点数は把握しています。』

『流石ですねドクター真木。今回貴方が使用する“個性”を使った戦闘ロボ。事前に資料で拝見させて貰ったのですが素晴らしい出来ですね。これなら火野君のオーズにも対抗出来そうですし、耳郎君の課題すべき点も難題として与えられる』

『…実は、根津校長だけにお伝えして置きますが、あの資料の記載はほぼデタラメに記載されています』

『おや…？それは何故だい？』

『ええ、こちらで作られたバースシステムで戦闘データを取らせて作ったロボなのですが、オース全ての能力に対抗出来る程高性能ではありません。データを取っても彼の力は凄まじい物…』

『機械では到底測りしれない…。そう言う事だね？』

『はい。ですが策と予測はしてあります。火野君は恐らくロボットである以上パワー系のコアメダルのコンボで仕掛けて来る筈ですので装甲は頑丈にするだけに留めておこうとするつもりです。序盤に私が煽れば彼とその派生型であるアंक君も信じて他のコンボは使つて来ないと思えますので…。そして耳郎君。彼女には索敵に優れた“個性”を使うのが得意と聴かされたので、それを使わず窮地に立たされた万能個性オースに彼女は動くか…。今回はソレを重要課題として私が相手をします』

『実に素晴らしい考案なのさ！申し分無い程に。にしてもよくそこまで調べて来てるね』

『お恥ずかしいお話…、人間観察が私の得意の内の一つでしてね』

――

「…火野映司君。その若さ故に強大な“個性”を持っていては、この先の人生は危険で険しい道になるでしょう…。彼には悔いの無い良き終末が訪れて欲しいものですな」

思い返していた真木は左肩に乗せている人形“キヨちゃん”を見ながらそう言っていると、大きな焚き火の様に燃えているロボの瓦礫からバチツ！と火花が弾け飛び、偶然にも火の粉がキヨちゃんの頭に当たる。すると、その頭部の一部が焦げてしまいそれを見ていた真木は二度見をして目を大きく見開き叫んだのだった。

「ツ!? ファオツ!!!」



「あいタタタタ…！あれ、緑谷君っ」

「火野君、耳郎さんお疲れ様」

「お疲れ…つてあんたも凄いボロボロじゃん」

試験を終え、痛む肩を押さえながらリカバリーガールの居る出張診療所に来た火野、そして耳郎。そこにはボロボロになっていた緑谷が居て2人に声を掛けて来た。

緑谷の格好を見て火野は苦笑しながら口を開く。

「まあ相手がオールマイトじゃあね…。でも凄いよ！爆豪君と協力して勝ったんだよね?!流石緑谷君だなあ」

「いやいやいや、そんな事ないよ…！始まった直後は本当かつちゃんとお食い違つて喧嘩になるしオールマイトには勝てつこなかったしあの時は」

「ハイハイハイっ、ここはお喋りする場所じゃないさね！怪我してる子はこつち来て治療！そうでない子は控え室で待機だよっ」

褒めている火野に対して緑谷は説明しようとするとりかばりーガールが割入って注意する。

コンボの使用で疲労している火野は割と身体は丈夫なお陰でリカバリーガールからはハリボテを貰うだけだった。一方で耳郎も“個性”の反動で身体が筋肉痛みたいになっていたが怪我という怪我もなく2人は軽い処置で済んでいた。

「火野。控え室行く、ここは邪魔になるみたいだし」

「うん…。いや、俺はいいや。ちよつとここで見学したい。リカバ

リーガール先生。ここに残って他の人達の活躍見ていいですか？」

「静かにしてくれるなら別に構わないさね」

耳郎に声を掛けられた火野は頷くが幾つものモニター画面にまだクリアしていない生徒達が映っているのが目に入り、耳郎の誘いを断り、リカバリーガールに火野は許可を貰う。

「どうやら緑谷もここで見学しているようだ。」

「そっか。じゃあウチは控え室に行つとくね」

「うん、また後で」

耳郎はそう言つて出て行き、火野はさっそく緑谷が座っている椅子の隣に立ってモニター画面を見始める。

すると、早速目に入ったのは常闇と蛙吹がエクトプラズムと交戦している画面を注目していた。

「あの……今回テストと言いつつも、意図的に各々の課題をぶつけてるんですよ？」

「そうさね」

「課題……。そっか！緑谷君と爆豪君は相性最悪だからチームワークが求められたって事か！」

緑谷がモニター画面を見ながらリカバリーガールに質問すると彼女は頷く。それを聞いていた火野は合点が行ったのかそう言う。緑谷は真剣な表情で「僕もそう思った」と頷いて口を開く。

「何となくわかる組もあるんですが……さっきの火野君と耳郎さんの相手だった真木さんのロボはオーズの「個性」を覆ってくる高性能で、耳郎さんにはハナから2人の前に現れる事で索敵する時間すら与えてくれない……。どちらも不利な状況での戦闘だったから直ぐに分かったんですけど」

「おお、成る程成る程」

緑谷の考案に火野は掌にポンと手を置き理解すると続けて緑谷はちようど同じ画面を見ていた蛙吹と常闇を見て口を開く。

「でも、中には「何が課題なんだろう」って組も……。例えばその……常闇君と蛙吹さんとか……、エクトプラズム先生の「個性」が二人の天敵だとも思えないし……」

「うわあ、凄い。口から分身出してる…」

2人の課題に疑問を抱き首を傾げる緑谷に対して火野はエクトプラズムが吐く白い煙が徐々に形を変え次々とエクトプラズムが現れるのを見て驚いていた。

エクトプラズム

個性『分身』

口からエクトプラズムを飛ばし、任意の位置で本人に化けさせられる！一度に出せる人数はだいたい30人！しかし、カラオケで2〜3曲唄った後とか36人くらい出るらしいぞ！

「いや、天敵さ。常闇踏影にはね」

リカバリーガールはそう言うのとエクトプラズムから距離を取っていた常闇の間近に分身が現れる。気付いた常闇だが別の分身相手を攻撃していたダークシャドウが常闇から離れている為か急いで距離を取ろうとする。すると、蛙吹が舌を伸ばして分身のエクトプラズムを攻撃し、カバーしていた。

すると、それを見ていたリカバリーガールが口を開く。

「彼の強みは間合いに入らせない。射程範囲と素早い攻撃ね。けれど裏を返せばその間合いにさえ入れれば脆い…」

「成る程、それで数と神出鬼没のエクトプラズムか…」

「へえ。ダークシャドウって殆ど無敵かと思ってた…」

（フン、要は“個性”ってヤツは身体能力の一部なんだろう？どんなに強力だろうがその“弱点”は必ず存在する。お前のオーズもコンボを使えば凄まじい疲労が身体に蓄積されるみたいになあ）

リカバリーガールの解説に緑谷と火野は納得すると、体の中にいたアंकが見ていたのかそう聞こえてきて、火野は返す言葉もないのか颯めっ面になる。するとリカバリーガールは続けて今度は蛙吹に目を行き口を開いた。

「一方で蛙吹梅雨。課題らしい課題のない優等生さね。故にあんたが今言ったように、強力な仲間の“わずかな弱点”をもサポート出来る

か否か……。あの子の冷静さは人々の精神的支柱となりうる器ね」

「精神的支柱……」

「言われてみれば蛙吹さん、戦闘訓練とか体育祭の時もそうだったけどあの冷静さは尋常じゃなかったなあ」

その言葉に緑谷は思い当たる節が有ったのか小さく頷く。火野も彼女とはあまり関わりがなかったがその行動を見て来た為かそう感心していた。

すると、エクトプラズムからの攻撃を防戦し、回避しながら移動する常闇チーム等は脱出ゲートの前へと辿り着いていた。だが、そう簡単にも行かないと言わんばかりに脱出ゲート前でエクトプラズムが立ちほだかる。恐らく本人だろう。

次の瞬間、エクトプラズムは口から大量の煙を吐くとその煙はみるみると巨大なエクトプラズムとなり、大きな口を開き2人に噛みつき捕まえていた。

「強制収容ジャイアントバイト」！複数の分身ではなく収束させ一体の巨人となつて相手を捕まえる技！あの技で数々の敵を捕まえたんだ！」

「あ、そっか。流石ヒーローオタク。詳しいね」

突然少し興奮気味に解説する緑谷にヒーローオタクだった事を思出し、驚きながら火野はそう言う。

すると、捕まってしまった常闇チームは左肩辺りからモコモコとエクトプラズムの体の一部みたく拘束された状態となつて浮かび出て来る。だが諦めてはいない様で常闇はダークシャドウを使ってエクトプラズム本人に攻撃を仕掛けるが装備された義足で見事な蹴り技を繰り出しダークシャドウは手も足も出せない状態だった。

すると、ダークシャドウは一瞬だが一旦拘束された2人の元へ右手を運び、その右手を拳に変えエクトプラズムに攻撃を繰り出す。勿論エクトプラズムは義足の蹴りでソレを受け止めてしまう。

「っーアレー！」

瞬間、火野が叫ぶ。その目先にはエクトプラズムの受け止めた義足の先端には事前に貫っていたカフスが掛けられていたのだ。

「カフスをかける事さえできればクリアだ！『ダークシャドウ』と『蛙』、双方の“個性”を上手く使い合った！流石！」

「…そう言えばカフス貰ってたのすっかり忘れてたな、アंक。でもロボット相手に使ったら勝ちになるのか？」

（あ？知るか。終わった事気にしても仕方ないだろ）

拳を作り喜ぶ緑谷。それに対して火野はカフスの事を思い出しそう言いながら疑問をアंकに問い掛けるとアंकは適当に返事をしていた。

そうしてる間にリカバリーガールはマイクを手に持ち勝利報告を各会場に言い渡す。

『蛙吹・常闇チーム条件達成！』

言い終わると、それを聞いていたのかあたふたと慌てる素振りを見せるチームが目に入った。芦戸、上鳴チームで相手は根津校長の映っている画面だった。

根津校長は巨大なクレーンに先端のフックには大きな鉄球が付いておりそれを動かして建物を破壊する。

だがただ壊しただけではなくその建物はドミノの様に連鎖し倒れ、最終的にはかなり離れていた芦戸と上鳴の場所にまで崩壊の連鎖が届いて2人は苦戦していた。

「上鳴君と芦戸さん、大丈夫かな…?!? 脱出ゲートからどんどん離れて行ってるしキツツイぞ……」

「根津は昔人間に色々弄ばれてるからね…こういう時うつかり素が出るね」

「(闇抱えてるんだ…)」

見ていた緑谷はおどおどとした表情となりそう言うとりカバリーガールは紅茶を飲みながら高笑いの素振りを見せる根津を見て呆れており、火野は可哀想な目をしてそう思っていた。

根津

個性『ハイスペック』

“人間以上の頭脳”という個性が発現した動物！

世界的にも例を見ない唯一無二の存在だ！

「…あ、飯田君達突破できそう」

ふと、火野が指を指す。そこに映ってるのはパワーローダーと交戦している飯田と尾白の姿が目に入る。

パワーローダーの仕掛けている落とし穴のトラップをもろともせず飯田はレシプロバーストを発動し、駆け抜けると背負っていた尾白が勢いよく跳躍し、一気に脱出ゲートを通過したのだ。

『報告……飯田・尾白チーム……。条件達成!!残り時間あと約5分さね』

確認したりカバリーガールはマイクに向かって言い渡す。ついに残り時間もアナウンスすると残りの組達はヤバいと思ったのか焦る行動が目に入る。切島と砂藤がいい例だった。

相手はセメントスでパワー自慢の2人は押し通ろうと頑張っているが無限に作られるコンクリートに中々進めずにいた。

「大丈夫かな2人共……。どちらも持久戦には厳しい。個性”だし:”」

「消耗戦に極端に弱い2人さね。対人や救助つてのは如何に自分の得意を押し付けれるかの行動だからね」

ちようど緑谷とリカバリーガールも見ていたのか切島達が映るモニター画面を見ながらそう言う。

砂藤も糖分切れなのか動きが鈍くなっているのも確認でき、火野も心配そうな顔をして見ていた。

砂藤力道

個性『シュガードープ』

糖分10gにつき3分間パワー5倍！

しかし糖をパワーに使うと次第に脳機能がダウンしてくぞ！

「残るはあと5組かあ」

「うん……。凄いや、着々とクリアしてく。皆決して諦めない立派な雄英生徒なんだ……!」

火野は呟くと緑谷は格上相手の先生に勝とうと必死に頑張る生徒達を見て感心しているとリカバリーガールが何か見つけたのか指を指して口を開いた。

「いや、あいつめっちゃ諦めとるよ」

そのモニター画面には泣きながら叫び、脱出ゲートとは反対の方向へと全力疾走で逃げ出す峰田が映っていた。

「峰田君…!?!」

「ちよ!?!何やってんのあいつ!?!」

「ああなると厳しいかもねえ…。おや、別のチームがゲートを突破したみたいだねえ」

その行動に緑谷と火野は驚き、リカバリーガールは息を吐いていると障子と葉隠がゲートを通過しているのを目撃して口を動かす。

相手は銃撃を得意とする遠距離タイプのスナイプ。

「障子君達是对スナイプ先生…。索敵対決…。かくれんぼって感じだったのかな」

「障子君が敵の位置を把握しつつ、隠密行動に長けてる葉隠さんで上手くフォローし合ってたって感じかな。さすがっ」

『報告くくく障子・葉隠チーム……。条件達成!』

2人を評価してる緑谷と火野、そして達成の確認が取れたりリカバリーガールはマイクで言い渡していると、麗日・青山チームの行動が目に入る。

脱出ゲート直前で対する13号に見つかってしまい

“個性”のブラックホールで吸い込もうとする。

青山と麗日は柵のポールにしがみついていたが突然麗日が手を離し13号に吸い込まれそうになる。

ブラックホールは何でもチリにしてしまう恐ろしい“個性”で本人の13号も生徒をチリにしたらたまったものじゃないと思ったのか咄嗟に指の蓋を閉じてしまう。それをチャンスだと思い麗日は吸い込まれる勢いでそのまま突っ込み、対人の護身術で13号を捕らえる事に成功。そのままカフスを掛けて青山・麗日は見事試験をクリアしていた。

『あつと。ここで麗日・青山チーム…、条件達成!!残り時間は後僅かさね』

「後残すは3チーム…まだ全然チャンスはありますよね!!」

「…どうかなあ」

リカバリーガールはタイムを見るなりそう言い渡すと緑谷は冷静にそう言い放つ。

だが、火野が言う様に正直残る3チームの達成は厳しいと見ていた。

上鳴・芦戸チームは根津の策略でどんどん脱出ゲートから離れて行く始末。方や切島・砂藤チームは押し寄せるコンクリートの壁に今にも呑まれそうになっており脱出のすべが無くなって来ている。

そして、峰田・瀬呂チームも。

「まあやる気が途切れぬ者はならともかく…戦意喪失するとなると厳しいねえ」

今も尚逃げ惑う峰田を見てリカバリーガールはそう言う。

「あれだけ林間合宿楽しみにしてた峰田君が、何故…」

「まあ、オールあんたのマイトとゲストで来た真木博士…セメントス、そしてミッドナイトは特に難易度高いからねえ。人によっちゃ詰む…『詰んだ』と認識しても仕方ないよ」

緑谷の言葉にリカバリーガールはそう言つてモニター画面を眺める。脱出ゲートの前ではミッドナイトが眠っている瀬呂を膝枕して待機しており、峰田はそれを見て画面越しでも分かる程羨ましそうに歯を食い縛り血涙を流していた。

「うつわ、目から血が…」

「もしかしてアレもミッドナイトの『個性』が原因?」

「いや、ただ羨ましいだけだと思っさね」

驚く緑谷と考察する火野。だが見抜いたのか呆れて溜息を吐いたリカバリーガールはそう言っていた。

ミッドナイト

個性『眠り香』

体から放たれる香り強制的に眠らされる！

女性より男性の方が効きやすいぞ！ひよおおお!!

「ああいう子はここで生き抜くには辛いかもねえ」
「？」

「どう言う事です？」

リカバリーガールの言葉に緑谷は首を傾げ、火野は問うとりカバリーガールは口を開いた。

「雄英は絶え間なく壁を用意し、それを超えさせるって方針。そこを息切れせず乗り越えていくには、『具体的な目標』を見据えている必要があるのさ。『なんとなくヒーローやりたい』で登れる程易しい道じゃないんでね。仮にヒーローになれたとして、『ヒーローになる事』がゴールの人間に先はない。果たしてあの子の心に見据える目標が存在するのか…」

リカバリーガールがそう言って続けて画面を眺める。

息が切れたのか峰田は膝に手を置いて立ち止まっていると、背後からミッドナイトが鞭を峰田に当てる攻撃を仕掛けて来る。その表情はドSに満ち溢れた様な不気味な笑みを浮かべていた。

「…なら、峰田君なら大丈夫ですよ」

「え？」

「何故分かるんだい？」

ふと、火野はそう言うのと緑谷が反応し、リカバリーガールは問い掛けてくると火野は画面を見ながら口を開いた。

「峰田君は卑猥な発言でいつも巫山戯てる様に見えますけど、雄英に入った以上はそれだけ大きな目標があるからここにいると俺は思うんですよ。例えば、ヒーローになれば注目を浴びれる…。それを峰田君風に捉えれば…」

「…っ！『モテたい』とか！」

「直球だね。だけどそれだけじゃあ…」

火野の言葉に緑谷は理解したのか解釈する。リカバリーガールは溜息混じりで何かを言おうとしたその時、ミッドナイトの攻撃から逃れる為岩に身を隠していた峰田が飛び出していた。近付いてしまえば眠らされると承知の上での作戦かと思いきや峰田の鼻と口には瀨呂のテープが巻かれていたのだ。

窒息状態で挑むなんて自殺行為かとミッドナイトは不気味な笑みと共に鞭を振り下ろす。だが、峰田はもぎもぎをふんだんに投げまくると鞭やミッドナイトの体に地面へと付着し、身動きが取れなくなっていた。動きを封じたその間に峰田は眠り香が届かない場所まで移動して口を塞いでたテープを引き剥がす。そして眠っていた瀨呂を担いで脱出ゲートへと足を運び通過する。

火野はその勇姿を見てどこかカッコよく思い見入ってしまった。た。

「やった!!」

「おおーゲートから離れたところに貼りつけた事で、眠り香が届かないように……!」

「ホオ……器用な子だね……!すっかり騙されちゃったよ、私あ……!あんた達の言う通り、“モテたい”も突き詰めれば、見据えるべき一つの目標さね」

喜ぶ火野と緑谷に対してリカバリーガールは起点の行った策に驚いていた。そしてゲートを通過した事と時間切れになっていた事を確認し、マイクを手に持ちアナウンスをした。

『峰田・瀨呂チーム条件達成!!そして……タイムアップ!!期末試験、これにて終了だよ!!』

一歩進んだ者、壁に阻まれた者。

悲喜交交の中期末実技試験が終了する。

だが、その一方で三度動き出そうとする者がいた。

死柄木が身を潜めるバーの建物。その建物の路地裏から2人、脇真音優無と脇真音槍無の姉弟がやって来ていた。

「弟君ほんツと凄いな！ちよつと教えてただけで直ぐ覚えて後は勝手に勉強してただけでもう言語覚えちゃったなんて！小さかった頃が今となつちや懐かしく思えるなあ…。あ、他に欲しい物ない？お姉ちゃん奮発しまくるよ？」

「…いや、大丈夫…。小さい頃つて、姉さん僕…その時の記憶あまりない…」

「そりや小さかったから当然だよ」

ポツポツと喋る槍無に優無は当たり前と言わんばかりにそう言う。と槍無は無言になり、バーの建物が気になったのか見上げる。

「姉さん、今から会う人つてどんな人…？」

「死柄木君かい？ん…：単刀直入で不気味！」

「不気味…：絵本とかに出るお化けよりも不気味？」

「ぶっはははは！うん！アレより不気味かもね！やばっ…！ツボった…！わはは…！」

悪気のないその純粋な言葉に優無は想像したのか笑い出す。

ひーひーとお腹を抑えてしばらくすると落ち着いたのか優無は気を取り直すと、突然槍無と向かい合う。

「弟君。この建物に入れば多分普通の暮らしが出来なくなると思うんだ。今ならまだ引き返せる。どうする？」

「…姉さんが居る場所なら、どこに居ても平気だよ。…だから連れて行って。姉さんが行く場所に」

選択を選ばせる優無だが意外にもあつさりとこちら側に来る事を願う槍無。それを聞いた優無はニコリと笑顔になり、槍無に向かって

手を差し伸べた。

「じゃあおいで弟君！ちよつと変わった友達と、少し刺激が強いこれからの出来事を君に見せて上げる！大丈夫！何かあれば私が必ず弟君を守ってみせるから！」

「うん…。えつと…。ありがとう」

優無の手を握り、槍無はぎこちなくお札を言うと、二人はバーの建物の中へと入って行ったのだった。

No. 65 エンカウンター

死柄木が居るバーの入り口に来た脇真音姉弟。

すると、その扉は開かれており扉付近には柄の悪そうなサングラス、場合によっては「腸」に見える気味の悪いマフラーが特徴の男性が待機しており、姉弟を見るなり煙草を吹かしながら声を掛けてきた。

「お、あんたは死柄木んとこのオーズの嬢ちゃんじゃねえか」

「…誰？」

ニカつと不気味に笑う男性のその前歯は欠けており優無は警戒して睨む様に問い掛けると両手を見せて落ち着かせる様に口を開いた。

「おつとと、まあそう怖い顔しなさんな。俺は「義爛」。

人材から武器の調達をしているしがない「ブローカー」さ。そつちの男の子は見ねえ顔だな？」

「…こつちは弟の槍無。今から死柄木君に紹介させるつもりだよ」

「へえ、弟がいたのか。まあ何にせよちょうどいい。俺も紹介したい奴等が居るんでね。ついでに各自で自己紹介と行こうじゃねえか」

「紹介？」

義爛の言葉に首を傾げながら彼の横を通り過ぎて優無と槍無はバーの中へと入る。するとそこに立っていたのは2人。1人は変わった髪型をしたヘアスタイルに女子高生のベストとスカートを着た女の子でもう1人は身長高めの男性でボロボロの黒の服をベース。だが身体の皮膚も焼け爛れ、ケロイド質の皮膚で覆われた全身を金属製の太い継ぎ目で繋ぎ合わせおり、まるで全身を皮膚移植をしたような異様な外見をしている。一印象は気味が悪いと言っても過言ではない。

すると、女の子は優無を見ると形相を変えて詰め寄って来た。

「わっ!?女の子!!カアイイイねえ…!お友達になりましたよっ?」

「わわっ…えと、ありがとう?」

「こいつ等も敵ヴァイラン連合の一員か…?悪行をしてる様には全然ねえ見た

目してやがるな……」

きやぴきやぴとした笑顔でそう言う女の子に優無は戸惑いながらも槍無を背後に恐る恐る死柄木が座っているカウンターへと移動をする。すると焼け爛れた男の子は不満そうにそう言う。

死柄木の近くまで姉弟は移動すると死柄木は槍無を見るなり息を吐いて優無に声を掛けた。

「脇真音……何だそいつは？」

「あ、紹介するよ。この前セルメダルの件で色々あつて動ける様になつた私の弟の脇真音槍無。今日から敵^{ヴァイラン}連合の一員としてお世話になるから。ほら、弟君挨拶して」

「えと……よろしく……お願いします」

「色々あつて動ける様になつたつて何だそりや……？ ヤミーのオマージユか何かか？……しかも挨拶は姉だよりじゃないと出来ねえのかよ」
「まあ理由は適当に察してよ。てか仕方ないしょ、まだこの子世間不慣れなんだから」

悪態吐く死柄木に内心苛つきながら優無は手首を振つてそう言う
と死柄木は本題に戻して義爛の連れて来た2人に指を指す。

「……まあいい。そいつの面倒はお姉ちゃんのお前が責任持つて見てろ。………で、そいつ等は？」

「こつちじゃ連日あんたらの話で持ちきりだぜ。何かデケエ事が始まるんじゃないかってな。その件でこいつ等は連合に入りたいと志願して来た奴らだ」

義爛は煙草を吹かしながら言う
と連れて来た男性、女の子が死柄木を見て口を開いた。

「生で見ると……気色悪いなあ」

「手の人、ステ様の仲間だよねえ!? ねえ!? 私も入れてよ! 敵^{ヴァイラン}連合!」

死柄木の容姿を見て男性は気味悪がる様な目付きで言う
と女の子は上機嫌に仲間になろうと催促して来る。だが、それを聞いて見た死柄木はゆっくりと2人に向かって指を指した。

「……黒霧。コイツらトバせ。俺の大嫌いなモンがセットで来やがつた。餓鬼と礼儀知らず」

「ふっ…大嫌いて」

「はあ？」

死柄木の言葉に優無は吹き出し、女の子は首を傾げるとカウンター側に居た黒霧が宥めようと口を開いた。

「まアまア…。せつかくご足労頂いたのですから、話だけでも伺いましょう死柄木弔。それに、あの大物ブローカーの紹介。戦力的に間違いはない筈です」

「何でもいいが手数料は頼むよ黒霧さん。まア紹介だけでも聞いときなよ。まずこちらの可愛い女子高生。名も顔もしつかりメディアが守ってくれちゃってるが、連続失血死事件の容疑者として追われている」

黒霧の言葉に義爛はそう言って連れて来た2人の内まず女の子を紹介すると女の子は笑顔で口を開いた。

「トガ」です！「トガヒミコ」！生きにくいです！生きやすい世の中になってほしいものです！ステ様になりたいです！ステ様を殺したい！だから入れてよ弔君！」

「…ステ…？？」

「意味が分からん。破綻者かよ」

自分を中心に語り出すトガの『ステ』と言うワードに優無は疑問を抱いていると死柄木はヤバい奴と見受けてそう言うと言義爛は口を開き、もう1人の男性の背中に手を置く。

「会話は一応成り立つ。きつと役に立つよ。次、こちらの彼。目立った罪は犯してないが、ヒーロー殺しの思想にえらく固執してる」

義爛はそう言うと言義爛は自己紹介するかと思いきや、死柄木と脇真音姉弟を見ては文句を言い始めた。

「不安だな…この組織、本当に大義はあるのか？その姉弟も連合の肩書きにも置けねえ面してやがるし、そしてまさかこのイカレ女を入れるんじゃないやねえよな？」

「連合に入るから来たんでしょ？何言ってるのあんだ？」

「同感だ…てかよ。その破綻JKと脇真音の弟ですら出来る事がお前は出来てない。まず名乗れ。大人だろう」

男性の言葉に苛ついた優無がキレ気味に言い返すと死柄木も便乗して指を指してそう言う。

「今は『茶毘』で通してる」

「通すな。本名だ」

「出すべき時になつたら出すさ。とにかく、ヒーロー殺しの意志は俺が全うする」

「はあ…？ヒーロー殺し…？」

茶毘と名乗る男はヒーロー殺しの名を口にすると優無は保須事件で起きたあのイカれたの事^{ステイン}を思い出して表情が変わる。

同時に死柄木もゆっくりと椅子から立ち上がり連合の2人は口を動かした。

「聞いてない事は言わないでいいんだ。どいつもこいつもステインステインと…：良くないな…：気分が良くない…」

「あんなクソツタレの思想なんてクソ喰らえなんだよねえ…！思い返しただけでもムカつくのよ…！そんな奴の後釜みたいな奴らは…！」

「いけない2人共…」

「姉さん…？」

どちらもヒーロー殺しに対してはえらく敵対しており冷静さが失われている2人を見て黒霧は止めようとし、その姉の怒る表情を初めて見た槍無は呼び掛けるが、彼等の意思は止まることなく殺意の表情を表に出す。その瞬間、茶毘とトガは鳥肌が立つ様な感覚に襲われていた。

「駄目だお前ら」

「いらない!!」

死柄木は両手を突き出し、優無はオーズドライバーを腰に宛い装着し、タトバのコアメダルを3枚取り出す。

対してトガは袖から小型のナイフを取り出し、茶毘は黒煙が溢れ出した右手を突き出した。

だが次の瞬間。

咄嗟に黒霧はワープゲートを双方の真正面に展開し、その間近でそれぞれが突き出した手が散らばっていなしていた。

一方で優無は背後に居た筈の槍無が一瞬で優無の正面に立ちはだかり、彼女の進行を阻止していた。

「…今お姉ちゃん頗る機嫌が悪いの。退きなさい」

「喧嘩は…良くない…。これから仲間になる人達…傷つけるのは良くない…と思う」

苛立つ優無だが弟に当たる訳にも行かないのか先程とは違う優しい口調でそう言うが槍無は首を振る。

予想外のいざこざに義爛はニヤニヤしながら煙草を吹かしていると止めに入った黒霧が口を開く。

「弟さんの言う通りです。落ち着いて下さい脇真音優無、死柄木弔。貴方達が望むままを行うのなら、組織の拡大は必須。奇しくも注目されている今がその拡大のチャンス。排斥ではなく受容を…」

黒霧はそう言いながら死柄木と脇真音の間にモヤの顔を移動させると茶毘達には聞こえない様に耳打ちをしてくる。

「利用しなければ全て…彼の遺した『思想』も全て…」

「……………五月蠅い」

そう耳打ちをして来る黒霧に優無は何か考えたのか苛立ちの表情が無くなる。が、死柄木はワープゲートから手を引っこ抜くと悪態を吐いてバーから出て行こうと歩き出す。

「どこ行く」

「五月蠅い！」

義爛は呼び掛けるが一点張りで悪態付き、死柄木は扉を開けてその場を後にした。

「取引先にとやかく言いたかないが…彼は若いね。若すぎるよ」

「殺されるかと思った！」

「……………。気色ワリイ……………」

義爛が言うのとトガと茶毘は出て行った後の扉を見てそれぞれがそう言うと、優無は息を吐いて死柄木に続いて出ようとする。

「嬢ちゃんも同行か？」

「なわけ。ちよつと出掛けるだけ……。まだヒーロー殺しの件は根に持つてるから少し頭冷やして来る。……………来てくれたのに癩癩起こして2人共ごめんね。行くよ、弟君」

「あ…うん」

お前も若いねと言わんばかりの目で義爛はそう言うのと冷静さを取り戻したのか優無は茶毘とトガに謝り、槍無に声を掛けてその場から出て行く。

「…何だ、あつちの奴は少しは利口な態度出せるじゃねえか」

「素直な優無ちゃん…！やっぱりカアイイです…！」

「連合のボスがならアレ優無なら少しはマシな話し合いが出来てたかもな…『個性』も中々の賜物だし。…まあ何にせよ彼女も若いに越したことじゃないがな」

優無の態度を見て茶毘とトガはそう言うのと煙草を吸い終えポケットに灰皿に吸い殻を捨て義爛はそう言うのと、槍無は扉の前まで移動し、振り返ると軽く礼をして口を動かした。

「あの…僕…脇真音…槍無…です。茶毘さん、トガヒミコさん…。新参者同士…仲良くしま…しよう。よろしくお願いします」

「はい…優無ちゃんが貴方の事弟君と言ってたなら私も弟君と呼んでいい？呼びますね！よろしくです弟君！」

「仲良くねえ…。まあお前んとこの姉とあの手の奴が礼儀正しくしてくれるなら考えてやるよ」

「えと…姉さんは…礼儀…良いです。死柄木さんは…ちよつと分から…ない…けど。…じゃあ僕行きます…。黒つぽい人も…失礼…します」

改めて槍無はポツポツと言葉を発して自己紹介をする。トガと茶毘はそう言うのと優無の印象を良くしながらそう言つて3人と黒霧にお辞儀し、槍無はその場を後にした。

すると、黒霧が残った3人に向かい口を開いた。

「返答は後日でも宜しいでしょうか？死柄木も脇真音も自分がどうすべきか分かっている筈だ…。分かっているからこそ何も言わずに出て行ったのです。オールマイト、ヒーロー殺し…あの2人はもう二度

鼻を折られた。そして必ず導き出すでしょう。貴方方も、御二方も納得するお返事を……」

☆☆☆☆☆☆

期末テストが終わり、勉強に明け暮れてた日々から解放された1年A組。戦闘試験も無事クリアし事なきを得た……と思っていたのだが、クリア出来なかった上鳴、砂藤、芦戸、切島の4人は人固まりになって負のオーラを全開にその一体だけ出していた。

赤点：それ即ち、林間合宿に行けないと言う事。

皆……土産話つひぐ……楽しみに……ううっ！してるっ……がら！」

あまりのショックに泣いてしゃくりながら芦戸はそう言うのと緑谷と火野が慌ててフォローに入る。

「まっまだわかんないよ！どんでん返しがあるかも知れないよ……！」

「そうだよ……！相澤先生の事だし合理的虚偽って言いそうじゃん！」

「緑谷、火野……それを口にしたらなくなるパターンだ……」

2人の言う事に瀬呂が不安そうに割入ると、的中したのか上鳴は形相を変えて発狂し出した。

「キエエエ!!試験で赤点取ったら林間合宿行けずに補習地獄!そして俺達は実技クリアならず!これでまだ分からんのなら貴様等の偏差値はサル以下だ!!!」

「ええええ!?!」

「落ち着けよ長え」

八つ当たり混じりの怒号を吐きながら2人に目潰しを食らわす上

鳴に緑谷と火野は驚きながらも目が潰れる。それを聞いて見ていた瀬呂はツツコみを入れると、自身も不安なのかそのまま続けて口を動かした。

「分かんねえのは俺もさ。峰田のお陰でクリアはしたけど寝てただけだ。とにかく採点基準が明かされていない以上は…」

「同情するならなんかもう色々くれ!!」

瀬呂の言葉に上鳴はキレていると、その瀬呂の発言に椅子に座っていた峰田が上機嫌に耳を傾けていた。

すると、教室のドアが勢いよく開かれると、そこには相澤が現れていた。

「予鈴が鳴ったら席に着け」

その言葉と同時に生徒達は瞬時に静まり返り席へと移動する。相澤が教卓に立つ頃には完璧と言える程席に着いて静かになっていた。

「おはよう。今回の期末テストだが…。残念ながら赤点が出た。したがって…」

「赤点の奴等は学校で補修地獄」。次の言葉が目に見えていたのか赤点の4人は更にひどく落ち込む。上鳴に至ってはこの世の終わりを告げられた様な途方に暮れた顔をしていた。

だが、次の言葉は誰しもが予想打にしなかった。

「林間合宿は全員で行きます」

「!!」
「!!」
「!!」

まさかの全員参加で赤点の4人は大声を上げ希望が胸に膨らむ。

「筆記の方はゼロ。実技で切島・上鳴・芦戸・砂藤、あと瀬呂が赤点だ」
「!」

「行っついでいいんすか俺らあ!!」

続けて相澤は赤点報告をするとまさかの瀬呂も含まれており、瀬呂は体をビクツと震わせ驚いていると切島はガタツと立ち上がりそう聞く。

その間に瀬呂は先程の自分が言っていた発言が見事に的中してしまつた為か両手で顔を塞ぎ俯いて嘆いていた。

「確かにクリアしたら合格とは言つてなかつたもんな…クリア出来ずの人より恥ずいぞこれ……」

落ち込む瀬呂に緑谷と火野は可哀想にと言わんばかりな目をして見ていると切島の質問に相澤は答えていた。

「今回の試験、我々敵側は生徒たちに勝ち筋を残しつつどう課題と向き合うかを見るよう動いた。まあ裁量は個々人によるが。でなければ、課題云々の前に詰む奴ばかりだつたらうからな」

「本気で叩き潰すと仰っていたのは……」

相澤の言葉に尾白が質問をする。

「追い込む為さ。そもそも林間合宿は強化合宿だ。赤点を取つた奴こそここで力をつけてもらわなきゃならん。合理的虚偽つて奴さ」

「二」「ゴーリテキキョギイー!!」「二」

ニカつと意地悪そうな笑みを浮かべる相澤に切島達は喜びと共に叫ぶ。

「すんごく良いフラグ回収だよー!」

「ありがとう火野ー!」

「マジでありがてえフラグ!!」

「火野様ー!」

「い、いや…なんかそんな感じはしただけだから」

芦戸、砂藤、切島、上鳴とそれぞれが火野に感謝し、火野はおどおどしながら照れていた。

そして4人は盛大に喜んでいると飯田がプルプルと震え出し口を動かした。

「またしてやられた…!流石英雄だ!しかし!二度も虚偽を重ねられると信頼に揺らぎが生じるかと!!」

「わあ。水差す飯田君」

体力測定の時も合理的虚偽を言われていたのを思い出したのか飯田は席を立ち上がり相澤に問い掛けると後ろの席の麗日がツツコむ。

「確かにな。省みるよ。ただ全部嘘つてわけじゃない。赤点は赤点だ。お前らには別途に補習時間を設けてある。ぶつちやけ学校に残つての補習よりキツイからな。じゃあ合宿のしおりを配るから後ろに回してけ」

「……!!」

「アア、オワタ」

その相澤の言葉に喜んでいた4人と瀬呂が固まり、どん底へと突き落とされた様な表情をし、小声で嘆く者もいた。

そして落ち込みながらも4人は席へと戻り、相澤は合宿のしおりを配り始める。前席の爆豪からしおりを受け取り、後席の緑谷に余ったしおりを配ると火野は早速内容を読み始めていたのだった。

☆☆☆☆

その放課後。

「まあ何はともあれ。全員で行けて良かったね」

尾白がそう言うのと早速各々はしおりを確認しながら話し合いをし始めていた。

「一週間の強化合宿か！」

「結構な大荷物になるね」

「水着とか持ってねーや。色々買わねエとなあ」

「暗視ゴーグル」

「ああ、肝試しとかで役に立ちそうだね！」

「そう言うのじゃねえだろ」

飯田と緑谷の会話に上鳴が言うのと峰田が割入り欲しい物を口にするが聞いていた火野が別の意味で応え、峰田はわかってねえみたいな顔をしてツツコむ。

すると、葉隠が提案を申し込む。

「あ、じゃあ明日休みだしテスト明けだし……！って事でA組皆で買い物行こうよー！」

透明な手を叩いた音が聞こえ、恐らく笑っているであろう表情でその言うとその場にいた皆は賛同して騒ぎ出す。

「おお良い!!何気にそういうの初じゃね!？」

「おい爆豪!お前も来い!」

「行つてたまるかかったりイ」

上鳴が上機嫌に言うのと切島は爆豪に声を掛けるが爆豪は拒否して帰る身支度をする。

「轟君も行かない?」

「わりの。休日は見舞いだ」

「あーそれは仕方ないね…」

緑谷は轟を誘うが断られ、火野は残念そうに肩を落とす。

すると、誘いを断る2人を見ていた峰田が声を上げる。

「ノリが悪いよ空気を読めやKY男共オ!!」

わいのわいのと騒ぐ教室内。相澤の合理的虚偽で全員参加となつた林間合宿。その準備の為に、A組の一行（爆豪、轟不在）は週末に買い物へ行く事となつた。

☆☆☆☆☆☆

「つてな感じでやって来ました!県内最多店舗数を誇るナウでヤングな最先端!木榔区ショッピングモール!」

時は流れ爆豪と轟を除いたA組生徒達は木榔区ショッピングモールに訪れていた。日本でも随一を誇る面積と品揃えが豊富で売っていない物がないんじゃないかと言える程だ。勿論その人気と週末相

まっつてかその客の数も多く、ワイワイとモール店内は盛んだった。

「腕が6本のあなたにも！尻尾が生えてるあなたにも！脹脛激ゴツのあなたにも!!きつと見つかるオンリーワン！」

「ムム」

「個性」相まっつて服のチョイスが難しい障子、尾白、飯田に芦戸は上機嫌に言う。と飯田は嬉しそうに彼なりの返事をしていた。

「『個性』の差による多様な形態を数でカバーするだけじゃないんだよね。ティーンからシニアまで幅広い世代にフィットするデザインが集まってるからこの集客力」ブツブツブツブツ

「幼子が怖がるぞ寄せ」

テンション高まったのか緑谷はブツブツモードに入り込み、それを見ていた常闇は止めるよう呼び掛ける。

「お！アレ雄英生じゃん！1年?!体育祭ウエーイ!!」

「うおおまだ覚えてる人いるんだあ……!」

ふと、一般人等がA組生徒達を見かけて声を掛けてきていたのを麗日は驚いて若干引きながら声を漏らす。

すると、火野はメモを取り出すと辺りをキョロキョロと見回し始める。

「どうした火野?」

「えっと…小型の保冷ケースが欲しくて」

「あら、アイスがお好きのアンクさん用のですわね」

その素振りが気になったのか耳郎は声を掛けると火野はそう言う。すると直ぐに分かったのか八百万はそう答えた。普通は何の為に使うんだらうと疑問に思うのだがアンクがアイス好きなのはA組全員が理解している。ので納得するのも仕方がない。

「(おい映司。ついでにアイスだ。とつとと行くぞ)」

「うわつと?!急に体動かすな…ちよおつ!?!」

「あつ」

体の中にいたアンクが急かす様に体の自由を奪い、火野はそのまま皆と離れて行ってしまふ。

耳郎が声を掛けようとするが既に遅く、火野はもう人混みに紛れて

しまい見えなくなっていた。

☆☆☆☆☆☆

「おい映司。人間が多過ぎる。それとこの店は広過ぎる。迷惑だ。何とかしろ」

「無茶言うなよ！あゝ…お前のせいで皆んなと逸れちゃったじゃないかっ」

「フン、知るか」

別行動となった火野。その中から出て来て人間態となったアंकはショッピングモールの人集りとその広さにウンザリしていたのか愚痴を言うと火野は勝手な行動をしたアंकにキレ気味で言うところアंकは悪態を吐きそつぽを向く。

溜め息を吐きながら火野はスマホを見ると切島からメールが入っており、内容を確認すると『2時間後に一階の中央広場で合流!!』と書かれており、取り敢えず火野は返事をして安心の一息を吐く。

「んゝ…！合宿楽しみだなあ」

「あ？かつたるいだけだろ。人間のお泊まり会みたいな行事は」

「うっさいなあ。爆豪君みたいな事言うなよ。こういうのは学生の醍醐味だから良いだろ別に」

「あんな爆発頭と一緒にするな！」

安心したついでに大きく背伸びをする火野はそう言うところアंकは面倒臭そうに言い返す。

爆豪と同じだと言われたのかアंकはキレ気味にそう言っていると、突然足を止めていた。

「ん？どうしたアंक？」

「…妙だなあ……何か変なモノを感じる……」

「変なモノ？」

火野は疑問を抱いているとアंकの表情は変わり、奥の店の中を凝視していた。火野も気になってその方角を見ると、人集りの奥にある服屋の店の中に2人の男女が見えた。

両方背丈も変わらず側から見ればカップルに見えるその2人。

「気の所為じゃないの？」

「いや…気の所為なものか……。これは……」

火野は何でもないだろうとそう言うがアंकは首を振り、その男女に向かつて歩き出す。

「ちよっ!?アंक!」

もし勘違いだとしてもアंकの性格は重々承知していた火野は放っておけば揉め事は確実と思い、アंकを追いかけて後を追う。そして、男女の背後まで移動したアंकは立ち止まり、火野も止まってその男女を確認するが、やはり普通のカップルにしか見えないのか火野はアंकに声を掛ける。

「アंक! いい加減にしろって! 気の所為だって言っただろ?」

「!」

「……ん?……あれ……?」

火野がアंकに声を掛けた瞬間だった。

『アंक』と言う言葉に男女の内の1人、女の子の方が肩を上がらせる程大きく反応して勢いよく振り返る。

女の子は帽子をしていて分からなかったが黒髪のショートヘアの髪に前髪や所々に白髪が混じっているその髪色。女の子は2人を見るなりかなり驚いた表情でこちらを凝視していた。

だが、それは火野も同じ雰囲気を出し、その女の子をどこか見覚えのある様な素振りをして火野は見ていた。

「…どうしたの姉さん」

「……」

一方で男の子も女の子の行動に気になったのかそう気にかけてこちらへと振り返る。そして、顔を見たアंकは何かを感じたのか目を

大きく見開いていた。

「君……確か……」

「……………おい映司……」

火野はうる覚えな様子で女の子に話しかけようとする。

だが、その前にアंकが男の子から目線を逸らさずに火野に話しかけ口をそのまま動かした。

「この男…、こいつの中からコアメダルの気配を感じる…！」

「……………えっ……………!!?」

「ま……まぢか……………!!!」

突然のアंकの言葉。

それは予想外の発言で火野は思い出しそうな目の前の女の子をそっちのけにし、男の子を見て驚愕する。そして女の子はバツの悪そうな表情で声を漏らしていた。

それもそのはず、今火野とアंकが対面している2人は、…、仮面ライダーヴィランオーズ事、脇真音優無とその弟の脇真音槍無だったのだから。

No. 66 対面する宿命の紅い糸

ショッピングモールに訪れていたA組御一行。

火野は逸れてしまい、単独で行動している中、アंकが嫌な気配を感じとり、服屋に居た男女の元へとアंकと火野は移動する。そして、その男女の内の1人、槍無の体の中からメダルを感じ取れるとアंकは言ったのだった。

☆☆☆☆

「……アंक…今…なんて…!?!」

「この男の中にコアメダルの気配を感じるんだよ…! 少なくともこいつは普通じゃない…」

聞き間違いかと火野はもう一度確かめるとアंकは再度そう言つて槍無を睨み付けると同時に指を差して口を開いた。

「お前…何者だ? 言つとくが言い逃れされる程俺

は馬鹿じゃない。俺と同じメダルを取り込んでちやあグリードの俺には分かるんだよ…!」

感じてた物が確信へと変わりアंकは言動を槍無に突きつける。槍無は自分が何者なのかを悟られ警戒し、右腕の掌を広げて何かを仕掛けようとしたその時、姉である優無がその右手を掴む。

「姉さん…?」

「……(ダメ、ここは任せて)」

優無は小さく首を振りアイコンタクトで駄目だと素振りを見せると火野とアंकを見るなり溜め息を吐き、口を開いた。

「あく超絶誤算だったなあ…。そうだよね、アंकは、グリードは人体にあるメダルの気配は察知出来るんだったね」

「ほう…。その知った様な物言い。映司。間違いない。こいつは保須に居た敵のオーズだ」

「えっ!! おいおい嘘だろ…!?!」

優無がヴィランオーズと見抜いたアंकは警戒しそう言う。火野は驚愕し冷や汗を流す。すると優無は頬を上げて静かに笑い出す。

「アハハ……『こんな可愛らしい女の子があのおーズだなんて……！』と
か思ったでしょ火野映司君。まあこの姿で会うのは……2回目だね。
じゃあ改めて自己紹介。私は脇真音優無、こっちは弟の槍無。よろし
くね」

「……えと……よろしく……」

「フン！この状況で律儀に自己紹介か。巫山戯ているのも大概にしろ
……おい映司。さつさと変身しろ。奴からコアメダルを奪うぞ！」

優無に続いて槍無もぎこちなく挨拶をしてくるが、アंकはお構い
なしにタトバのコアメダルを取り出し火野にそう言う。が、優無は
「おつとつと！」と慌てる素振りを見せて手の平を突き出す。

「ストップストップ！今日私達は買い物しに來ただけ！戦うつもりな
んでこれっぽっちもないよ！」

「なら尚更ここで倒してやる！映司！なにボサつとしてやがる！さつ
さと変身して」

「ちよ！ちよつと待つてアंक！」

優無は止めようとするがアंकは知った事ではないと威嚇し、火野
に再度呼び掛けるが当の火野がアंकを止める。すると、アंकも気
付いたのか見渡すと服屋に居た客や店員達が何事かと見つめて注目
が集まっていた。

「……取り敢えず場所変えようか。まあ隣の喫茶店でコーヒーでも飲み
ながら話そうよ。アंकも迷惑掛ける程お馬鹿さんじゃないでしょ
？」

「ああ？……ちっ……フン！相変わらず俺達の事は知ってますよみた
いな言い方で心底ムカつく野郎だなあ……」

優無の挑発混じりの提案にアंकは周りの目を気にしながらそう
言う。タトバのコアメダルをしまう。

弟の槍無は何も言わずに会釈していると火野は警戒を緩めないま
ま、その案に乗ったのだった。

「やっぱ！このジャンボスペシャルパフェめっちゃ美味しそうじゃん！？これ頼もつと！弟君はもう決めた？」

「…ブラック：コーヒーでいい…」

「かア〜！弟で歳下の癖に大人ぶってらあ！そこがまた可愛いんだけどねエ!!」

「おいっ!!」

優無と槍無のやり取りに向かい側に座っていたアंकが怒鳴ると2人は驚いていると辺りの客達も連鎖したのか静まり返る。それを見た火野は立ち上がり「すみません…！」とペコペコして謝り、再び座るとアंकに向かって迷惑にならない程度の声を上げる。

「アंकっ、場所弁えてから声出せよ…！」

「ふざけんな！仲良くする所なんざ見るつもりで承諾してやったつもりじゃないんだぞこっちは！」

「すみませーん、ジャンボスペシャルパフェとブラックコーヒーっ
お願いしまーす」

「……!!」

火野は宥めようとするがアंकの怒りは治らずあろう事かその言葉が無視して優無は店員を呼んで注文していた。アंकは言葉を失い怒りの表情で優無を睨み付けていると注文し終えた優無は口を開いた。

「おやおやあ？少しはリラックスしなよアंक。苛々は糖分不足なんだよ?..」

「黙れ、後馴れ馴れしく俺の名を呼ぶな！」

「オッホオ！名言頂きましたっ！まあまあ、この喫茶店アイスをふんだんに使ったパフェあるよ？それ食べて落ち着きなって…：あ！グリードは味覚ないんだっただ…：ゴメン☆」

「っ！こんの…!!」

「わったった!?アंक！もお！あんたもこいつの事知ってるんなら挑

発するのやめろよ！」

プププと意地悪そうな笑みを浮かべる優無にアंकは襲い掛かろうと立ち上がるが火野は慌てて止めて優無にキレながらそう言うとう優無は苦笑して口を動かした。

「アハハ……ごめんごめん。ちよつと揶揄いたかったただだから」

優無はそう言うってお冷を少量飲むとアंकは舌打ちしながら席に座り胡座をかいてはテーブルの上へ肘を乗せる。普段もそうだが今は相当怒ってるのだろうと火野は思いながら席に座ると、早速優無に話かけた。

「…一応もう一度聞くけどお前がUSJ、保須事件の時に出来たオーズで間違いないんだよね？」

「さつきからそうだって言ってるじゃん。あ、因みに私のオーズは仮面ライダー ヴィランオーズ」ね。そうでないと君と名前被っちゃうでしょ？」

「名前は別にどうだって良いよ…。それより、話し合う前に確認と約束をしろ。お前の知ってる事を全て話す事。そして変な行動はしない事。この条件を呑むのなら今回は俺も手を出さない」

「映司。何言ってるやがる？今こいつ等を野放しにすればどうなるかお前も分かって」

「いいから黙ってて……で、どうなんだ？」

「大変お待たせ致しました。ご注文のジャンボスペシャルパフェとコーヒーになります」

「うっはーキタキタあ！」

火野の条件に聞き捨てならないのかアंकは割入ろうとする。だが火野はそれを拒み優無に問う。

すると優無が頼んでいたデザートとコーヒーが運ばれて優無は嬉しそうにかなりデカイパフェを見て感動していた。槍無もコーヒーを貰うと熱くないのか冷まさずそのままコーヒーを口元に運び啜る。優無はスマホを取り出してパフェを一枚撮ると「ん〜」と考える素振りを見せ口を開いた。

「全部はちよつと厳しいかなあ…。答えられる範囲なら良いけどね」

「フン！ならお前等をここで倒すまでだ」

「おやあ？さつきまでののは冷静の素振りだけだったのかな？」

「なに…？」

アंकは右腕を上げて手の甲を優無に見せながらそう言う。優無は企みの笑みを浮かべてパフェを食べながら言い返す。

「狙った私達^{獲物}は逃がさない…鳥の習性って奴？でも良いのかな？…あ、美味しいコレ！…んむ…別に捕まえるなり警察に通報するなり構わないけど…知つての通り私達は敵^{ライバル}。君達が変身して、私達を足止めして、そして通報している。でもその間は少なくとも暴れ回れる。簡単に人を殺せるって意味でね」

「っ…!?」

「ハッ。そんな事ぐらいで俺が止まるとでも」

「うん、思っちゃないね。少なくともアंकは。でも、そっちの火野映司君はどうだろうね？彼は英雄生…。今はヒーローを目指す為の準備みたいなものでしょ？…ここでオーズになれば無断で“個性”を使った事になって処罰を下される…。アंक、君も“個性”って認定されているんでしょ？君も暴れたらそのとばっちりを受けるのも彼。そうなれば、彼の人生はそこで御釈迦…。」

「！エグい事を考えてやがるなこの女…！」

優無の言葉にアंकはそう言って押し黙る。続けて優無は喋り出した。

「そして私達がそこらに居る人を殺めればお人好しの火野映司君は精神的に耐え切れない…。さて、ここまで説明して私何か間違ってる事言ってるかな？まあ単純な話、穏便に済ませようって事さ要は。君達も私達も買い物の為にここに来たわけで鉢合うつもりは更々なかった」

優無は一旦区切り、スプーンで掬ったパフェを頬張り食べて飲み込む。保須事件での出来事で面構署長に言われた事を火野はふと思いつく。ヒーローを目指している今は許可なく外での“個性”使用は禁止。そして揉め事を起こせば学校側、親族等に多大な迷惑。それ等

を無視して目の前にいる優無を捕らえようと行動した所で相手もオーズ。

火野と同じ姿になれる優無をそう簡単に捕らえる事が出来るのか、こちらにはアंकが居るので2人掛かりで交戦するか、などと火野は最初思っていたが、気掛かりな弟の槍無の存在に火野は思い止まった。アंकの言っていた事が本当なら弟の身体の中にコアメダルが入っている。少なくとも、「個性」持ちである事は間違いないだろう。

何方にせよ、下手に動けば今居るショッピングモール内は大騒動になるのは間違いない。火野は一旦その捕らえる気持を押さえて優無と槍無を警戒しながら優無の言葉を聞いた。

「君達にも私達にも今動けば互いにリスクが今ある訳…。ギブアンドテイクってヤツでここは話せる範囲の情報交換だけにしようよ。ね？」

「えと……うん…僕も…そう思う…」

優無の後に続き槍無が同調して頷くとアंकは鼻を鳴らして不機嫌そうに口を開いた。

「フン、俺はギブは嫌いだがテイクは好きなたちでな。…敵の提案にのるは癪だが、映司の行動にこれ以上制限が掛かるのは俺も色々困るんでなあ。情報交換は一方的にお前等だけにしろ。それならその要件のんでやらんこともない」

「うん。アंकの言う事には俺も一理ある。それに、お前等は俺達の事を知ってるんだつたらこつちからの情報を言う必要なんかないんじゃないか？」

「あつはは！…確かに！おもしろ！言われてみればそうだねえ！…わかった。いいよ」

アंकと火野の意見にそれもそうだと笑いながら優無は承諾すると早速火野が先程言っていた事を思い出して口を動かした。

「…君はさっき俺と会うの2回目って言ってたよね？…：…思い出したよ。君は俺が雄英に編入する前に廃墟のビルで練習してた時に出会った…あの時の子だよだね？」

「……へえ。覚えててくれたんだ。そうだよ。あの時に火野映司君と初めて出会ったね。今となつては懐かしいなあ」

「ハッ、出会いなんざどうだっていい。お前、何故オーズの力を持つてる？そのベルトは1つしかない筈だ。……どこで手に入れた？」

優無はそう言いながらパフエを食べてるとアंकが割り入り質問してくる。すると優無は少し考えたと息を吐いて口を開いた。

「…そりゃあ、私もこの弟君も君達と同じ立ち位置だったって事だと思ふよ？」

「立ち位置？」

「どう言う事だ？」

「なに、簡単な話だよ。私も弟君も…要はこの世界の人間ではないって事さ」

「!!」

その優無の発言に2人は驚愕する。この世界の人間ではないとすれば考えられる事は1つ。それを火野は口にした。

「もしかして……『転生』？」

「あはは…！まあ平たく言えばそうなるね」

「ほお。…だが、それならお前等は何故俺達の事をよく知っている？俺達の世界にはお前等はいなかった筈だ？」

アंकは続けて質問をする。

「それは前に言ったでしょ？私は君達の事をずっと見てたって。それ以上は今教えられないかなあ」

「おい、それじゃあ答えにならないんだよ！」

「…じゃあ君達は俺達の世界に居た住人…って事で勝手に解釈するけどいいい…？」

「ああそうだね。そう言う事にしといて」

遇らう様な態度をとる優無にアंकは納得行かずに舌打ちをする。だが聞きたい事はまだあるのかアंकは先程から黙ってコーヒーを啜る槍無を見て口を動かした。

「なら、こいつは何者だ？何故感じた事のないコアメダルが体の中にある？まさかグリードか？」

「失礼な！歴とした人間で私の大事な弟だよ！…まあ強ち間違つてはないけど」

優無は槍無の頭を撫でながら続けて喋り出す。

「そう、この子の体の中にはアंकの言う通りコアメダルが入ってる。理不尽な世界だよねえ…。こつちに来た時には弟はピクリとも動かないんだもん。コアメダルの力で何とか動ける様になってる…認めたくないけど、擬似的な生命維持をした身体になっちゃってるんだもんねエ」

「生命…維持…？」

「…ちっ。胸糞悪い話だなあ…！」

「…まあ、アंकからしたらそうだよね。あ、同情とかそういうのはいらないからね」

優無の言葉を聞いたアंकは何か思い出したのか更に表情は強張り不機嫌そうにそう言う。優無はその表情を見て納得したのか頷く。

体育祭の出来事でアंकから色々と前世の事を聞いた火野は何となく槍無の状態が予想出来た。

要は動かなくなつた死体にコアメダルを入れて擬似的に動ける様になってる事だ。暗くて現実味のない話を持ちかけて火野は何とも言えないのか目線を下に向けて黙り込む。

すると、優無はパンと手を叩き口を動かす。

「ご馳走様！…さて、話は終わり！そろそろ御暇させてもらうよ」「は？」

「え？…てか食うの早っ！」

突然のその言葉に2人は疑問符を抱き、火野はいつの間にか空になつてるパフエを見て驚く。

「おいちよつと待て。話はまだ済んでないぞ」

「ん〜でも食べ終えちゃったし。弟君もコーヒー飲み終わったし、もういいでしょ？てなわけでお会計するねー」

「巫山戯んなー！」

優無に続いて槍無は席を立ちあがろうとするとアंकが怒りながら声を上げる。すると火野が帰ろうとする優無と槍無を止めて口を

を仕込ませてもらってるんだ」

「っ!!」

「おい、つまらない冗談はよせ。お前等だって俺と映司に会う事が想定外とかなんとか言ってただろ」

予想外の発言に火野の顔は青ざめ、アंकはハツタリだと言い付けるが優無は首を傾けながら淡々と喋り出した。

「まあね、予想外だよ。でも…私達だって警察やヒーローに狙われている立ち位置にいるわけだよ？何も用心無しにただ買い物なんか来る訳じゃあないでしょ普通？もしも警察やプロの人達に見つかった時の対策って物は入念に用意するべき…フフ…！用心深いアंकだったら私の言う事…分かるよねエ…？」

「…お前…！」

「あつははっ！いいねえ！アंकらしい表情してくれるじゃん…。言っとくけど、爆弾はタイマー式…このまま放置すれば自動的に後5分で爆発かなあ」

「そんな…いや。…タイマー式なら操作出来る装置か何かがある筈だろ」

火野はそう言って聞くと優無は手提げ鞆に手を入れゴソゴソと探ると小さな小型のリモコンを取り出す。それを見せて本物だと確信した火野は一気に目を見開き凝視すると。

バキッ！

床に落として優無は踏み壊したのだ。

「なっ…!？」

「はあい…これで解除する事も出来ない…。」

さあどうする？アंक、火野映司君。ここで私を捕らえて他の人達が爆発で死ぬか…、一階のトイレの爆弾を解除しに行くか…。」

「っ!!」

踏み潰された事に驚愕し、追い討ちを掛ける様に優無はそう言う
と火野は一目散にその場から駆け出し、喫茶店を飛び出して行った。

「あ!?!おい映司!!クソ!」

アंकの呼び止めは既に聞こえず、優無達を睨み付けながらアंकもその場を後にして飛び出す。

優無は見送り、見えなくなったのを確認すると踏壊した破片を拾い集め、槍無に向かい声を掛ける。

「さてと弟君。さっさと会計済まして帰ろっか」

「…良い…の?あの人…達…」

「良いよ良いよ。でもまさかこんな所で会えるとは思わなかったなあ。正直まだ心臓バクバクしてらー。弟君どうだった?火野映司君とアंक!やっぱり生で見るとカッコいいよね!」

「…?分か…らない…」

内心隠してたのか優無は目をキラキラさせながら弟に共感して貰おうとそう言うが、槍無はハテナマークを頭に浮かべるだけだった。

そして2人は何事もなかったかの様に会計を済まして喫茶店から出て行ったのだった。

☆☆☆☆☆☆

優無が言っていた一階のフロア。

全力で走り降りて行く火野は言っていた通りに階段下の近くにトイレがあるのを確認する。

「ハア…ハア…ハア…ここかっ!」

「ちっ…あいつ等エグい事してくれたもんだっ」

火野は急いで駆け込み、アंकも悪態を吐きながら火野の後を追

う。駆け込んだ火野は中に入るとちようど要を足したのか子供が手洗いをしており、息切れを起こす火野を見て驚く。

火野は爆弾がないか辺りを隈なく探し始め子供は何事かと火野を見つけていた。

「どこだ…!?どこにあるんだ…!?…君!ここに爆弾が仕掛けられてるんだ!早く逃げて!!」

「えっ…!?」

「おい映司」

必死に言う火野に子供は驚いていると後から入ったアंकが火野に声を掛ける。

「アंक!お前も早く探すの手伝えよ!」

「…いや、その必要はない」

「え?どう言う事だよ?」

アंकは小さく首を振る。その行動と言葉に火野は疑問を抱いているとアंकはトイレの時計を指差した。

「奴が言っていた5分。それが本当なら当に過ぎてる……。俺達は嵌められたんだ。あいつ等は自分達が逃げれる為に演技をしていやがった…姑息な真似を使いやがる…!」

アंकは優無の策に乗せられままと引つ掛かってしまい徐々に怒りが込み上げてきていると、火野は若干放心状態となってトイレ一面を見遣る。

確かにここまで来た距離を考えてみれば裕に五分は経っている。優無が言っていた時刻が本当に5分ならもう入った時点で爆発してもおかしくはない。

「…はっ……………ああ……………よかったあ……………!」

そう考えていた火野は爆発物がないと確信した瞬間緊張が解かれたのか膝から崩れ落ち尻もちを付いた。

ふと、火野とアंकが驚くも困惑している子供に目が止まる。火野は「はっ」と我に帰ると慌てて近寄り声を掛けた。

「ご、ごめんね!急に驚かせちゃって!…あ!そうだ!」

火野はゴソゴソとズボンのポケットを探ると、とてもカラフルな色

をしたパンツを取り出す。

「はい、これあげる！大人用だけど君が大きくなったら履いてもいいからね！」

「え……？」

「フツ、馬鹿が。お前の汚いパンツなんか貰って喜ぶ奴が居るわけないだろ」

「お兄ちゃん、ありがとう」

「!!なっ…!!？」

子供はパンツをそつと受け取るがアंकは嫌味っぽくそう言っている何と子供は笑顔でお礼を言う。アंकは驚愕していると火野は自慢気にアंकを見遣る。

その時だった。スマホのバイブが鳴り出し、火野は取り出して画面を開くとそこには上鳴からの着信だった。

「はいもしもし」

『火野！今どこに居んだ!?!』

「え？今は一階のトイレだけど」

画面をスワイプして出ると慌しい様子で上鳴が繋がり、次の言葉でその理由が判明したのだった。

『最初に集まってた一階のオブジェが合ったとこ直ぐ来てくれ！緑谷ヴァイランが敵に襲われたらしいんだよ!!』

「えっ!?!」

☆☆☆☆☆☆☆☆

脇真音姉弟は死柄木達が潜むバーの建物付近まで帰って移動して

いる途中、弟の槍無が気になった事があるのか優無にポツポツと喋り声を掛ける。

「姉さん……あの爆弾……嘘……だよな？」

「ん？ありやりや、バレた？」

「分かる……そんなの……仕掛けた……所……見てない……。さつき……壊した物……アレただのおもちや……」

槍無の言葉に思い出したのか優無はポケットから踏み壊したストラップの玩具の破片を取り出すとポイツと投げ捨てる。

「火野映司君は超が付くほどお人好し。こんな玩具で引つ掛かるんだもんねえ。まあお陰で逃げ切れる事が出来たけど。あー……！せっかく弟君の服買ってあげようかと思つてたのに多分警察呼ばれてるだろうな。これであそこは近寄れないか……。敵ライバルつてのは本当肩身が狭いね」

「姉さんいいよ……服いっぱい……買つて貰つてるから……ありがとう……」

「ンまあ可愛い！お礼言える様になつてきたねエ！ご褒美にチュウしてあげよつか！」

「やだ」

「うっはあ！反抗期！」

即答で断られ喜びながらも落ち込む優無。すると、前方の建物の壁からヌツと現れる男が居た。黒のズボンに黒のパーカーを着ている男は此方を見るなり溜息を吐いて声を掛けてきた。

「何だ……お前等か」

「ん？あ、死柄木君。」

「……えと、お、お疲れ様……です」

何かを感じ取れるのか優無と槍無は直ぐに死柄木だと分かり声を掛ける。

「……何だ？」

「死柄木君、モヤモヤとれた？」

「……そうかもな。とれたって言うよりハナから持ってたって言った方が近いな」

「……そっか。……で、あの義爛が連れて来た子達はどうする？」

バーを出て行った時とは明らかに違う雰囲気をしてるのを見た優無は聞くと死柄木はそう答える。

続いて嫌っていたあの2人の事を聞くと死柄木は口を開いた。

「何ら曲がることはなかったんだ。ヒーロー殺しの言動に惑わされてただけだったんだ。全部ハナからあったよ…俺はあのヒーロー殺しを踏み台にして最初から持っていた『信念』を動かす。その為には…『駒』が必要だ。…勿論お前の弟もな…。使えるんだろ？」

「勿論。言つとくけど私より強いからね！」

「んだそりゃや？ならお前は用済みになるな…。」

「ちよちよちよ!?それはないでしょ死柄木君!?ひつどいなー!可愛い女の子を捨てるんですか!?!泣くよ!?!」

「五月蠅い勝手に泣け…まあ冗談だ」

「冗談かい!」

「…ははは」

2人の会話を聞いて槍無は静かに笑う。

死柄木は振り返ると優無と槍無に背中越しで口を開き声を掛ける。

「…:新しい新入りを招き入れ敵サイラン連合を拡大する。その為にはお前等も必要な戦力だ…:行くぞ」

「はいはい」

「…:うん」

死柄木にの言葉に心なしか何処か嬉しそうに優無は頷き、槍無も小さく頷いて死柄木の後に続いて歩いて行った。

暗く静かな闇の路地裏へと、誘われるように。

No. 67 とある招待状

「うえ!?火野!お前も敵サイランと遭遇したのかよ!」

「う、うん。それよりも緑谷君は大丈夫:!?」

「首を絞められたらしいが特に目立つ外傷なく済んだらしい!何にせよ火野君も無事でよかったぞ!」

先に来ていた上鳴と飯田に火野は事情を話すと上鳴は驚いた顔をして火野に聞く。火野は緑谷の安否を問うと飯田が説明して遭遇した2人が無事だと知ってホッと息を吐く。

その後火野とアंकは一階のオブジェが目印の中央広場へと駆け付けると麗日が通報した事でこのショツピングモールには警察が駆けつけてきた。

ショツピングモールは一時的に閉鎖され、区内のヒーローと警察が脇真音姉弟、死柄木を捜したが結局それらしき人物は見つからなかった。

死柄木、そして脇真音姉弟と遭遇した火野と緑谷は、重要参考人という事で警察に連れられ事情聴取を受けたのだった。

☆☆☆☆☆☆

警察署にて、火野と緑谷は個室で塚内警部に事情聴取を受けていた。

雄英襲撃、保須事件。警察は既に敵サイラン連合に対し特別捜査本部を設置し捜査にあたっているらしい。その捜査に今、主犯・死柄木弔と脇真音優無と弟の槍無の人相や会話内容を伝えていた。

「ふむ…、聞く限り連中も一枚岩じゃないものだな。増して脇真音に弟が居てその弟も連中に加わっている…。オールマイトの打倒も変

わらず…といったところかな。うん、よし。取り敢えずありがとう2人共」

「あ、いえ僕が引き止めていれば良かったんですけど…」

「俺もです…責めて時間稼ぎをしていけば…」

粗方の内容を聞いた塚内は頭を掻きながら言うところと大方の事情は聞いたのか2人にお礼を言う。だが2人は腑に落ちない顔をして俯くと塚内はそんな事はないと言わんばかりに口を開いた。

「いやいや！むしろ自分と市民の命を握られながらよく耐えたよ。普通なら恐怖でパニックになってもおかしくない犠牲者ゼロは君達が冷静でいたおかげだ。その判断は正しいよ。市民を守る警察として礼を言わせてほしい、ありがとう」

塚内がそう言うって頭を下げる。2人は本当に良かったのかと内心は思っていたがその場の空気の流れで2人は頬を上げて少し笑顔になりながら軽く頷いていたのだった。

☆☆☆☆

事情聴取が終わり警察署を出ると辺りはすっかり真つ暗な夜になつており火野と緑谷は疲れたのか息を吐く。せつかくのクラスメイト達との買い物も何も買うことが出来なかったが市民の被害がゼロだったので仕方ないと火野は夜空を見ながら再度息を吐いていると、オールマイトが外で待機してたのか火野達が出て来たのを見て呼び掛ける。

「緑谷少年、火野少年！塚内君！」

「お、良いタイミング」

トウルーフオームのオールマイトは右腕を上げてそう呼ぶと塚内がそう言うって緑谷は驚きながら声を掛ける。

「オールマイト！何で…」

「個人的に話があつてね」

「良かった、2人共無事で何よりだ」

塚内がそう言うのと緑谷と火野に向かってオールマイトは怪我がない2人を見て安否を確認する。

緑谷と火野はオールマイトに駆け寄るとオールマイトは2人の頭に手を置いて口を動かした。

「助けてやれなくてすまなかったな…」

「いえ…」

「俺達は大丈夫ですなんとか…」

オールマイトの言葉に緑谷と火野はそう言うのと緑谷は何か思ったのかオールマイトに向かって口を開いた。

「オールマイトも助けられなかった事はあるんですか…?」

「………あるよたくさん」

緑谷の言葉に火野は脇真音の脅しの言葉をふと思いつく。平気で人を殺そうと考えた彼女、もし行動を誤ればあの時に居た一般人は只ではすまなかった。そう考えて俯くとオールマイトは疑問を抱きながらだが小声でそう言つて空を見上げながら続けて喋り出した。

「今でも世界のどこかで誰かが傷付き倒れているかもしれない。悔しいが私も人だ。手の届かない場所の人間は救えないのさ…。だからこそ笑って立つ。『正義の象徴』が人々の、ヒーロー達の、悪人達の、心を常に灯せるようにね」

「オールマイト…」

緑谷は無言でその言葉を受け止め、火野は呟くと塚内が声を掛けてきた。

「緑谷君死柄木の発言を気にしてる。多分逆恨みかなんかだろうさ。彼が現場に来て救えなかった人間は1人もいない」

塚内の言葉に緑谷は凶星なのか俯く。そして彼の言う通りオールマイトはそうは言つても現場に駆けつけた事件は誰一人救えない事はなかった。手が届く距離の人達はちゃんと救っている。それを改めて実感し、改めてその憧れる人物に火野は口を開いた。

「オールマイト。俺も貴方のように手が届く人達を救い立派なヒーローになって見せます！」

「火野少年…。ああ、その心意気忘れるんじゃないぞ」
「はい！」

火野は強く決意して頷く。緑谷も火野を見て何か心に決めた様な表情を浮かべていると塚内が腕時計を目にして口を開いた。

「さア、遅くなつてしまった。お迎えだ」

塚内はそう言うのと警察署の自動ドアが開かれる。

するとそこから出て来たのは身長低めの緑の髪色をしたやや太った女性と、泉比奈が警察の人と共に出てきた。

「お母さん！」

「比奈ちゃん！」

「映司君！大丈夫!?怪我はしてない!？」

「出久…もうやだよ。お母さん心臓もたないよ…」

保護者を目の前にして火野と緑谷は驚く。駆け寄つて怪我がないか心配する比奈に対して緑谷のお母さんであろう人はハンカチを握りしめ泣きじやくりながら緑谷に近寄る。

「だ、大丈夫だよ…！それよりもわざわざごめんね」

「そんな事はいいの！映司君に何かあったら私も物凄く心配だし保護者として両親に顔向け出来ないから…」

「お母さんごめんね。大丈夫だよ。何ともないから泣かないですよ。ヒーローと警察がしっかりと守ってくれてるよ」

「うっ…」

火野は比奈に、緑谷はお母さんにとそう言って謝っていると塚内は保護者と共に出て来た三茶に指示を出した。

「三茶。送る手配を」

「ハッ。さ、2人共、ご両親。あちらにパトカーを用意しているので、私達が責任持つて送るよ」

「ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます…！」

三茶の言葉に比奈と緑谷の母はお礼を言って4人は歩き出す。それを見届けていたオールマイトに塚内が話しかけた。

「今回の2人の偶然は遭遇のようだったが、今後彼等を引いては生徒

が狙われる可能性は低くはないぞ。勿論引き続き警戒態勢は敷くが学校側も思い切った方がいいよ。強い光程、闇も大きく深くなる。雄英を離れる事も視野に入れておいた方がいい」

「…教師生活まだ3ヶ月ちよつとだぜ」

オールマイトは少し残念そうな表情でそう言う。と塚内は笑い口を動かした。

「ははっ、だから前に言っただろ。向いてないって。…オール・フォー・ワン。今度はちゃんと捕らえよう」

「うん、今度こそ…。その時はまたよろしくな、塚内君」

「おう！」

決意を再度交わした2人は火野と緑谷達が別々のパトカーに乗り込み、送り出す所を見届けていたのだった。

☆☆☆☆

「映司君、飯まだだよな？今準備するから映司君は部屋で待ってて。出来たら呼ぶから」

「あ、うん。ありがとう」

自宅へと送ってもらった比奈は靴を脱ぐと火野にそう言っただけでリビングへと向かう。火野は返事をして二階に上がり、自分の部屋へと入ると疲れが一気にきたのか大の字でベッドに寝転がる。

天井を見てボーっとしている。と体の中からアंकが人の姿となつて現れ、自身の寝床である赤いシーツを敷かれたソファアに寝転ぶ。それを見ていた火野はアंकに声を掛けた。

「…結局あまり聞き出せなかったな」

「フン、お前が虚言に乗るからだ」

「そうだけど…でも何もなくて本当よかったよ。あれが本当だったら」

物凄い被害が出てただろうし」

「何処までもお人好しだなお前は…」

アंकはそう言つてメダルホルダーを取り出すと中のコアメダルを手に取つては眺め始める。アंकにとってはその毎日の日課だ。コアメダルを取り出しては眺めて手入れをするなりやる事はコレクターの様な行動だ。すると、アंकはコアメダルを見つめながら独り言の様に呟いた。

「あの脇真音の弟…コアメダルを取り込んでた以上向こうの連中の戦力に加わっているだろうな…」

「敵の奴らも勢力を拡大してらつて事だよな…」

「フン！ただでさえ敵にお前と同じオーズの力を使える奴が居るんだ。他のグリードがいなくてもまだマシだが当のオーズはヤミーを生み出す能力を持つてやがる…！結局殆どやる事は前の世界と変わらないグリード奴等と一緒に言う事だなあ。クソが！冗談にも程がある…」

脇真音姉弟の存在に腹を立てながらアंकは文句を言う。

ふと、火野はそのグリードの思つたのかアंकに話しかけた。

「なあアंक。前の世界で他のグリードつてアंकみたいに協力的な奴とかいたの？」

「ああ？そんな奴いるわけないだろ。他のグリードは『欲望』の為に手段を選ばない連中ばかりだ。奴らが協力するのはまず持つて有り得ないな」

「ふうん…『欲望』ね。じゃあさ。もしそのグリード達がこつちの世界にも居たとして…もし、『仲間』として戦つてくれたら？その欲望は俺が叶えさせるみたいなき感じでさっ」

火野はベッドから上半身を起き上がらせて例え話をアंकに持ち掛ける。アंकは数秒考え口を動かした。

「……………まあ絶対が付く程有り得ない話だな。だが、俺に忠実で俺の為だけに行動してくれるようなら考えてやらない事もない」

「相変わらずだなあ…。でもそうだったら少しはこつち側としてかなりの戦力になると思うんだけどなあ」

「ハッ。記憶がないからって夢を見過ぎなんだよお前は。グリード達との戦いでお前は何回も死を目の当たりにしていたんだぞ。そんな連中が手を組むだなんて嫌気が刺す。……まあ、仮にもそんな奇跡みたいな事があれば脇真音の奴にも一泡吹かされるかもしれないな」

アंकはそう言つて寝返り背を向ける。火野は「そっか」と呟き再びベッドに横たわった。そして天井を見つめながら考えていた。もし、アंकと同じグリード達が味方として戦うのなら、どれだけ心強いことかと。

「……………そんなわけないか」

前世の話を聞いた火野はよくよく考えれば漫画でもよくある話巨悪な敵が味方になるのはアंकの言う通りまず持って有り得ない。火野は諦めた様な顔をして息を吐いたのだった。

☆☆☆☆

そして休み明けの学校生活が始まり、その教室内のHRでは。

「……………とまあそんな事があつて敵の動きを警戒し、例年使わせて頂いている合宿先を急遽キャンセル。行き先は当日まで明かさない運びとなった」

「「「えーっ!!」」」

ビリッと皆に配っていた合宿のしおりを破りながら相澤は生徒達に伝えると案の定生徒等はショックだったのか声を上げ、次々と声が上がっていた。

「もう親に言っちゃってるよ」

「故にですわね…。話が誰にどう伝わっているのか学校が把握出来ませんもの」

「合宿自体をキャンセルしねえの英断すぎんだろ！」

瀬呂、八百万とそう言うのと峰田が気が狂った様な喜びの表情で叫ぶ。火野は黙っているが峰田の言葉を聞いて心の中で確かにと同調する。普通の高校なら合宿なんてキャンセルして当然だと思いが思い切った判断を下す雄英も流石だと納得もしていた。

すると、前の前の席に座っていた爆豪が後ろ席の緑谷、そして火野に向かってボソツと言ってきた。

「てめえら、骨折してでも殺しとけよ」

「！」

買い物に来ていなかった爆豪は事情を聞いて心配する事なく悪態を吐く。爆豪らしい発言だがその言葉を間に受け火野と緑谷は若干俯いていると前の席に居た葉隠が聞こえたのか振り返って爆豪に注意した。

「ちよつと爆豪、緑谷がどんな状況だったか聞いてなかった!?そもそも公共の場で“個性”は原則禁止だし」

「知るかとりあえず骨折れろ」

「かつちゃん……」

「あ、あはは……」

葉隠の言葉に爆豪は腑に落ちない表情で吐き捨てる。緑谷は引き攣らせながら名を呼ぶ。そして爆豪らしい言葉に火野は苦笑をせざるを得なかったのだった。



7月最終日。修業式を終えたその放課後。

「よいしょつと…」

火野は身支度を済ませて席を立ちあがろうとする。すると、相澤が火野を見かけて声を掛けてきた。

「火野、ちよつと来い」

「え？あ、はい」

相澤が教室のドアから手招きをして火野は駆け足で教室を出ると相澤は懐から封筒を取り出し火野に差し出す。

「？何ですかこれ？」

「体育祭の一位で優勝した記念品だ。中にはチケットが何枚か入ってる」

「チケット……？」

火野は首を傾げて受け取ると中を開けようと手を添えるが相澤はそれを止めて口を開いた。

「校内で開けるな。それは帰ってからにしろ」

「え……あ、はい、分かりました……。因みになんのチケット何ですかこれ……」

火野は尋ねると相澤は小さく首を振って答えた。

「それは今は教えられん。……まあ、帰ってから見て検討するんだな」

「……わ、わかりました……。じゃあ先生、失礼します」

「ああ」

火野はお礼を言ってその場から離れて行く。それを見送った相澤は職員室へ向かおうと歩き出し階段を降りて行く。すると、根津校長が下の階から登ってきて鉢合わせとなり、根津校長は口を開いた。

「やあ、相澤君。例の物は火野君に渡したのかい？」

「…ええ、まあ一応」

「これは驚いたのさ。あれだけ渡すのを拒んでいた君が」

「渡せて言ったのは校長じゃないですか…」

校長の驚く素振りがわざとらしく見えた相澤は不機嫌そうにそう言う。校長はゆっくりと階段を上りながら口を開いた。

「USJ襲撃…保須事件…更には休日サイランのショッピングモールにて敵との遭遇。何にせよ状況は芳しくない方向へと進行している…。本来は渡すべき物ではないと私も重々承知しているのさ。…でも、だからこそ。不連続きの彼や他の生徒達にはそれ相応の『ご褒美』というものを与えなくては人間としての楽しみが無くなってしまう」

「…その言い方だと火野だけが特別扱いしている様に聞こえますが？」

「無論別の意味で特別扱いさ…。彼の『個性』は他の生徒達よりも優遇され過ぎている…。だからこそ1人の生徒として責任持って守らなくては。それにね相澤君」

校長はそう言つて一旦区切ると相澤に背を向け口を動かし、相澤は自分のしたその行為を胸にしまい下を向いた。

「彼は体育祭の優勝者なのさ。優勝の品をプレゼントするのは我が校の一興。君も承知の筈さ」

「…：…そうですね。…：…まあ、羽目を外すくらいなら問題ないでしょう。あの島なら」

☆☆☆☆

帰宅後、火野は自室へ戻ると早速相澤から貰った封筒を開けて中身

を取り出す。すると、中には『I・EXPOの招待状』の紙とその島に行く為のチケットが3枚付属されていた。

「っ!!こ、これって…!!?」

「何だ? I・EXPOって?」

火野が驚いていると体の中から人型となつて出てきたアंकが興味を示して紙を取り上げ表紙の文字を見ていると火野は紙を奪い取つて口を開いた。

「『個性』やヒーローアイテムの研究成果を展示した技術博覧会I・EXPO!それを開催する場所が海外に浮かぶ巨大人工移動都市I・アイランド!ヒーロー憧れる者なら一度は誰でも行きたがつてたハリウッドの様なすつっごい島だぞ!」

「ほお…ま、どーでもいいがな」

「どーでも良くないだろ!てか、こ、こんなの貰つていいのかな…!さ、流星に咄嗟の出来事過ぎてパニくるぞこれは…!!」

スンと興味削がれた態度を取るアंकに火野は言い返すもあまりにも衝撃な貰い物にあたふたと戸惑い始める。

すると、招待状であるチケットが3枚ある事に気付いて火野はそれを手に取り口を開いた。

「コレって…余り…だよな?アंकは俺の『個性』として認知されるから実質1人で足りるし…もしかして誰か誘えつて事…!?流星英雄…!あ、でも誘えるのはクラスメイトだけって書いてある…何だあ…。比奈ちゃん誘おうと思ったのに…まあしょうがないか。あー誰誘おうー!」

「おい、五月蠅い」

1人で興奮する火野にアंकは鬱陶しいのかそう言うが火野は興奮しっぱなしでスマホを取り出して早速連絡を入れていた。

「…あ、もしもし緑谷君?今日相澤先生から体育祭の記念品貰つてさ!中見たらI・EXPOの招待状が入ってたんだよ!もし良かったら緑谷君も……………え!」

掛けた相手は緑谷らしく火野は誘おうとするが突然声を上げて驚く。

「そ、そうなんだ…!!じゃあ向こうで会えるって事だよね…!!…うん…うん!分かった!じゃあまたね!」

「何だ?緑谷を誘ったのか?」

電話を切った火野にアंकは声を掛けると火野は笑顔で口を動かした。

「緑谷君オールナイトと行くらしいんだよ!知り合いに誘われたらしくて!だから向こうで会えるんだって!凄い偶然!」

「ハッ。なら余ったチケットは処分か?」

「ば?!そんな勿体無い事する訳ないだろ!えーつと次は…!」

悪戯な笑みを浮かべそう言うアंकに火野は怒りながら次の誘い相手へと電話を入れた。

「…あ、もしもし轟君?今日相澤先生から体育祭の記念品貰ってさ。I・EXPOの招待状が入ってたんだ!もし良かったら轟君も……え?!」

今度は轟に電話を入れたみたいで内容を説明して誘おうとするが先程と同じ反応をする火野にアंकはピクリと反応をする。「うん、うん」と火野は頷いて「じゃあまた」と電話を切ると火野はアंकに向かつて声を掛けた。

「アंक!凄くない!?轟君も招待状送られて来たらしくて行くんだって!これって凄い偶然だよね!」

「どんな偶然だ…」

「ん…どうしようか…余ったこのチケット…」

学校ではよく共に行動する2人がまさかの招待されていた事に驚くがそれによつて残った2枚をどうしようかと悩む火野。

「でも、まさか体育祭での優勝賞品がこんな招待状を貰っちゃうなんてな…思えばこの体育祭でアंकとも出会ったもんな」

「…そうだな。コアメダルの使い方を知らなくてボロボロになっていたっけか?」

「も〜根に持つなよ。…アंकが現れてくれたから勝ってたけど…それよりもあの時は…」

火野は体育祭の出来事を思い返していると、何か思ったのかスマホ

を取り出して連絡先を調べ始める。

「何だ？誰か見つかったのか？」

「……うん、そう言えば……あの時のお礼言っでなかったからね」

アンの言葉に火野はそう言っでスマホを耳に当てた。

こうして、あまりに濃密だった高校生活前期は幕を閉じ、夏休みへと入ろうとしていたのだが、相澤から渡された招待状により、夏休みの第一の週は突然の海外旅行となったのだった。

劇場版　く二人の英雄く
No. 68　I・アイランド

時刻は真夜中。

ここはもう数年は使われていない廃墟の工場。

あちこちが錆びて腐食し、夜空の光で照らされ肉眼で見える埃が宙を舞う薄暗い世界が広がる空間。

おどろおどろしく何かが出てきそうな雰囲気その廃工場。

そこへ何人か引き連れた額に大きな傷のある1人の男がその場を歩いて進む中、その廃工場の中央には2人の男女が立っていた。

やって来た人達の気配がしたのか男の子は顔を上げると女の子は待ちくたびれた顔をして連中を見遣る。

そして複数の人数の中からリーダーであろう男が2人の姉弟を認めるなり声を掛けた。

「“あの方”から言われてここに来たのだが、お前達が例の異形の姿になる“個性”を持つ姉弟で間違いないな？」

「まあ半分は違うけどそうだよ………ってか。おっっそい!! どんだけ待たせんの!?! 先生に言われてここで待つてろって言われたけどこんな時間に2時間も待たされるってどーなのよ! アンタら女性との待ち時間もつと学んだ方がいいよ!」

「姉さん……落ち……着いて」

男の態度と待たされた苛々が混ざり合って彼女、脇真音優無は怒号を突きつける。それを見ていた弟、脇真音槍無はボソボソと止めようとそう言う連中の1人が年齢からにして10代の見た目をしている姉弟を見るなり皮肉に口を動かした。

「……へっ。舐められたもんだな。まだ餓鬼じゃねーかよ。こんな奴等が“日本”で有名になってる敵サイラン連合のメンバーだったのか?」

「あ?」

「よせ、ソキル。……部下が失礼をした。遅れた事も詫びる。……さて、本

題に戻るとしよう」

ソキルと名乗る人物は姉弟を見るなり悪態を吐くと優無の目付きは変わりドスの効いた声で疑問符を返すとリーダーの男がそれを止めて謝罪し、口を開いた。

「あの方から戦力になるものを提供すると言われてここに来たわけだが、君達はその戦力になり得る者なのか？」

「いやいやあ、まあ私達は超が付くほど戦力になるけど。もつと律儀な子達さ……」

男の問いに優無は軽く手首を振るい否定すると、突然左手を上げて指を鳴らした。廃工場で人気のない分、その音は何層にも工場内へと響き渡る。

その瞬間だった。

辺りから有象無象と様々な種の怪人、ヤミーが何十体もの数で現れる。

「キエアア！」

「シャーア!!」

「ケケケケツ!!」

「っ!?!」

「な、何だこいつら?!」

「気付かなかった……!?!いつの間こんな……!?!」

奇声を発しながら複数のヤミーはあつという間に脇真音姉弟、集団の連中を取り囲む様に現れ、警戒していたのに気配すら感じなかった連中は驚き身を固くする。

闇の中から現れるその集団と化け物と呼ぶに相応しい身なりにより恐怖の存在感を漂わせる風格となつて見える為か部下達は青冷めた表情となり冷や汗を流していた。

それを見ていた優無はニヤリと自慢する様な笑みを浮かべると満足したのか右手をゆっくりと広げる。すると、奇声を発してたヤミー達は急に大人しくなり静かになる。

「どお?^{ヴァイラン} 敵連合も伊達じゃないでしょ?この子達はそこらの敵とは^{ヴァイラン}

訳が違う…。君達の命令を聞く様に細工しといたから好きに使うといいよ」

「…成る程。コレが戦力というわけか……」

「そゆこと。あ、勿論人として扱われないから持つてく時はお宅等のやり方で対処してね」

優無はそう言い終わると槍無が優無の裾をくいつと引つ張り口を開いた。

「姉さん…例のヤツ…」

「あくそうだったそうだった。もう一つ “渡す物” があるんだったけ」

槍無の言葉に思い出したのか優無はそう言つて奥のドラム缶の上に置いてあるアタツシケースを取りに行き、それを持つとリーダーの男の前へと持つて行く。

「…なんだこれは？」

優無から受け取つた男は何も聞かされてないケースを見て不信に思つたのか早速その場でロックを外して中身を見る。すると中に入つていたのは真つ黒の色をした “3つのメダルを入れ込む様な窪みがあるドライバー” だった。だが、オーズドライバーとは異なり形は長方形の様なドライバーに嵌め込む箇所は左右に2枚、真ん中のやや下の部分に1枚と異なる造形となっている。

そしてその横には甲殻種の生物の絵柄の造形が施された “黒色” のコアメダルが3枚付属されていた。

物珍しそうに見る男に優無は説明する為に口を動かした。

「それは今回のおまけ。そのメダルを使つて起動させれば身体能力を向上させて凄い力が入る。まあもしもの時に使いなよ。あ、役に立つ代物だからお金は勿論頂戴ね？」

「……フン。中々取引が上手い嬢さんだ。では、有り難く受け取らせてもらおう」

男はケースを閉じながらそう言うとな下に向かつて顎をくいつと上げる。手下は小さく頷くと手に持つていたアタツシケースを持つて脇真音姉弟に歩み寄る。槍無は無言で優無の前に立ち、それを

受け取ると中身を確認する。そこにはケース一杯に敷き詰められた大量の札束が入っていた。

「うっはあ……」

初めて大量の札束を目にしたのか優無の顔は尋常じゃない程驚愕した顔となり釘付けとなつていたりリーダーの男が辺りのヤミー達を見回して確認し、口を動かした。

「用は済んだ。これで失礼する」

男はそう言つてヤミー達を引き連れてその場から立ち去り、廃工場を出て行く。完全に去つたのを気配で感じたのか槍無は金の入ったケースを閉じて優無に向かつて口を開いた。

「…姉さん……。今更…だけどアレ…渡してよかつ…たの……？貴重…な…コア…メダル…入つてる……」

「んー？いいよいよ。『実験』がてらにドクターから頼まれた試験品なんだから。ま、使った所でそいつの命の保証はないけどね。それにアレは『日本』じゃ使えない。英知が結集したあの『島』なら使えると思うからついでに渡したんだけどね」

「島……？」

槍無は首を傾げると優無は羨ましそうに口を開いた。

「そうー！アイランドだったかな!? 凄く行つてみたいんだけど敵やつてるから入国出来ないし完全に詰んでる状態…はあ。まあいいんだけどね」

「…でも…実験の…結果…行かないと見れ…ない…」

「ああそこら辺はドクターが把握出来るって言つてたからいんじゃない？ てか！ それより！ この大金！ うっはあ！マジで貰つちやつていいのこれ!? テンション爆上がりなんだけど!! 弟君今から買い物いかない!? あ、死柄木君達も誘つてご飯食べにいこう！ お肉！ 焼肉食べたい！」

「姉さん…今、夜中……店やってない……。それに…僕達サイラン敵だよ……行動に…制限…ある…」

大金を貰い夜中だと言うのに舞い上がる優無を見て現実を突きつける槍無だったが彼女の笑顔を見てどこか微笑みを浮かべていたの

だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

人口都市 “I・アイランド”。世界中のヒーロー関連企業が出資し、“個性”の研究やヒーローアイテムの発明などを行うために作られた学術研究都市。

『ただ今より、入国審査を開始します』

時は流れ、仮面ライダーオーズこと火野映司は動く歩道に乗って搭乗口を出るとシャッターが開いた。入国審査室で全身をスキャンされる。

空中に投影されたモニターにはそのパーソナルデータが映し出されていく。そこには“派生”で現れた相棒のグリード、アंकも記載されており、火野の“個性”ということと審査されていた。しばらくすると入国審査終了のアナウンスが流れる。

『入国審査が完了しました。現在、I・アイランドでは様々な研究・開発の成果を展示した博覧会、I・EXPOのプレオープン中です。招待状をお持ちであれば、ぜひお立ち寄りください』

ゲートが開き、早速I・アイランドに踏み入れた火野はその広大なエキスポ会場が目に入り「わあ……！」と感激の声を漏らす。

いくつもの面白そうなパビリオンが建てられており、そこはまさに最先端科学による夢の未来とも言える光景が広がっていて、他の人々

は誰もが笑顔で心から楽しんでいた。

すると、早速火野の体の中から人型のアंकが出て来て周りを見渡すなり口を開いた。

「随分欲望の活気に溢れた場所だなあ…」

「一般公開前のプレオープンなのにこれだけ人がいるなんてすつごいなあ…!! “個性”の使用も自由だしコスチュームも可!何よりパビリオンには“個性”を使ったアトラクションがある!事前に調べてたけどもう情報量が多過ぎて頭が追いつかないよ!」

「ほお、ここではオーズになっても問題ないのか…日本もこのくらいにしてくれば良いものを」

「それは駄目だろっ」

嫌味そうに言うアंकに火野は静かにツッコみを入れる。

科学の発展を願う研究者達が住むI・アイランドは犯罪とはほぼ無縁。よって“個性”を制約する必要はない為に解禁されているらしい。^{ヴィラン}敵警備も万全で辺りには技術で造られた護衛のロボットが徘徊しているのが目に入る。

感動と感激の光景に見惚れている火野に、突如割入る声が後ろから響いた。

「入国審査長過ぎんだろ!!しかも俺だけ入念にチェックされた!クソが!」

^{ヴィラン}「敵と間違えられたんじゃねーか?」

「うっせーぞ “クソ髪” い!!」

怒号の嵐が巻き起こるその言葉の男、爆豪は苛々しながら宥める切島と共にやって来る。“個性”の規制もなく2人は堂々とコスチュームの姿で入国して来た。

火野の背後までやって来ると切島は先程の火野と同じ様に感激し、「スツゲエ」と声を漏らすとすぐに火野に声を掛けた。

「マジでありがとな火野!こんなすげー所に招待してもらえるなんて一生モンの思い出だぜ!な、爆豪!」

「ケツ!俺ア仕方なくだ!こいつがどーしてもお礼したいって言うからよ!本当に仕方なくだ!」

「……つちから誘った身なのになんか釈然としないなあ」

素直で喜ぶ切島に対して爆豪はツンとした態度でそう言う。招待状が2枚余ったその使い道は見ての通り爆豪と切島を誘ったのだ。火野の誘った理由は体育祭の決勝戦、轟との闘いでコンボの反動で疲弊している時に爆豪が観客席から応援してくれた事を思い出して爆豪を誘う。最初は断っていたのだが切島も連れて行くと提案するとその態度は変わり、嫌々そうに承諾した……と言う事である。

「……フン。よりにもよって何で爆発頭なんか誘ったんだ」

「あゝあ!? なんだとこの赤鳥野郎! 俺だって来たくて来たわけじゃねえんだよゴラァ!」

「あ? それが誘った者に対しての口の利き方か? 人間は礼儀が基本だろ。感謝の一つも言えない人間以下だったか?」

「んだとこの鳥野郎!! つくづく人の神経を逆撫でする奴だなてめエはよお……! 今すぐここでぶちのめしてやろーか……!?!」

「ほお。上等だ。この島は“個性”が規制されてないなら何しても問題ないわけだな。前々からお前は気に食わない態度をしてこつちも苛々してたんだ……!」

「そっくりそのまま返してやんよ! てめエも戦えるって聞いたから一度は殺してみたかったんだぜ!?!」

徐々にヒートアップしていく2人を当然火野と切島は止めに割り込む。

「アंक! 喧嘩は駄目だ!」

「おい爆豪、海外に来てまで揉め事するなよ!」

「「あ!?! あ?……チツ!」」

宥める2人にアंकと爆豪は同じタイミングで返事をし、それに気づいた両方は顔を見合わせこれまた同じタイミングで舌打ちをして互いはそっぽを向く。

「見事なシンクロ……」

「だな……。そう言えば火野。お前緑谷と待ち合わせあんだろ?」

それを見た火野はそう言うのと切島は同調して火野の用事を思い出して聞いてくる。火野は「あ、そうだった」と言いながら腕時計を

見てアंकに声を掛けた。

「アंक、俺達は待ち合わせ場所に行くぞ。爆豪君達は…」

「ケッ！クソナードとなんか会ってられっか！勝手に行ってろ！」

爆豪は緑谷のワードが出た瞬間嫌そうな顔をして3人に背を向け歩き出す。切島は追いかけてしようとすると一旦立ち止まり火野に声を掛ける。

「わ、わりい火野！せっかく招待してくれたのに別行動になっちまうなっ」

「ううん、別に問題ないよ。元々そう言う方向に行くのは目に見えてたから」

予想していた火野は苦笑する。同じくI・アイランドに訪れた火野は緑谷とオールマイトとの待ち合わせがあつたのだが爆豪が行かないのは想定内だった。元よりオールマイトが同行しているのは他言無用に頼まれていた為これはこれで好都合とも言える。

ズカズカと離れて行く爆豪を見て切島は慌てて火野に向かって口を動かした。

「じゃあ火野！開閉時間にまた連絡するわ！本当招待してくれてありがとな！…おい！待てよ爆豪ー！」

切島は急いで爆豪の後を追う。その後ろ姿を見ていたアंकは鼻を鳴らして声を出す。

「フン、結局別行動なら誘った意味なかっただろ」

「まあ捨てるよりかはいいだろ？それよりアंक、お前も規制掛かってないからって勝手な行動するなよ？」

「あ？知るか。売られた喧嘩は買う性分だ」

「良くない！…はあ、先が思いやられるなあ…。取り敢えず行くよ」

自分勝手なアंकに呆れる火野はしぶしぶ合流場所に向かうのだった。

☆☆☆☆

火野とアंकが訪れたのはエキスポ会場の先にあるI・アイランドの中央から島を見守るように聳え立つセントラルタワー。その入り口の前には火野が言っていた通り緑谷、オールマイト、そして金髪眼鏡の少女が立っており、火野に気付いた緑谷は大きく手を振って声を上げた。

「火野君ー！」

「緑谷君！オールマイト！」

「やあ火野少年！アंक少年！日本振りだね！」

火野も手を振り駆け足で近寄ると筋骨隆々で勇ましい姿のマッスルフォームのオールマイトは画風が違うその笑顔で挨拶をすると辺りを見回し出す。

それを見ていたアंकは鼻を鳴らしながら口を開いた。

「フン、爆発頭と切島って奴はここには来てないぞ」

「お、そうか！よかった。だがあの2人には気を遣わせてしまったな」

「来たがってなかったので気にしなくて大丈夫ですよ。それより緑谷君、オールマイト。そちらの人は…？」

気に悩むオールマイトに火野はそう言っただちらをニコニコと満面で可愛らしい笑顔をする女の子が気になったのか2人に聞くと、オールマイトは女の子の肩に手を置いて口を開いた。

「紹介しよう！彼女は私の古い友人の娘…」

「はじめまして！メリッサ・シールドです！マイトおじさまから聞いたわ！ヒノエイジ君と、個性の派生から誕生したアंक君ね？2人共よろしく！」

「あ、はいっ。よろしくお願いします」

「フン…：…おい、何をジロジロ見てやがる？」

メリッサが挨拶をして火野は歳上だろうと思いつつながら頑なに挨拶をし、アंकは彼なりの返事をするメリッサは真剣や表情となつてアंकをジロジロと見始める。

「人類初めての『派生型』……。貴方本当に『個性』なの？ちゃん人間だし本人とは違った思想と行動している……。えっと、ヒノエイジ君。貴方の『個性』は……」

「あ、はい。オーズです。で、これが変身する為のベルトですね」「わっ！凄いい！ちよつと見せてもらってもいい？」

アंकを観察する様に眺めると今度は火野にへと視線を変え火野はオーズドライバーを取り出す。するとメリツサの表情は変わり物珍しそうにドライバーを見つめると火野は差し出して口を動かした。

「良いですよ」

「おい映司。貴重なベルトを簡単に渡そうとするな」

「見せるくらいなら良いだろ別に」

火野の警戒の無さにアंकは嫌そうに言うが火野は軽くあしらひドライバーをメリツサに手渡すとメリツサは向きを変えては色んな方向から眺めてその目を輝かせていた。

「すっごい……。どんな技術が組み込まれたアイテムなのコレ……！見ただけじゃ把握出来ない代物だわ……。ここに何かを入れるみたいね……。しかも三箇所……」

「オッホン……。メリツサ」

すると咳払いをするオールマイトに「あ！」と我に返ったメリツサはオーズドライバーを火野に返すと恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべる。

「ご、ごめんなさいつい夢中になって……。早く行きましようマイトおじさま！こつちです！」

気を取り直してメリツサはこの場に居るオールマイトを筆頭として案内し、セントラルタワーへと入って行く。メリツサの後に続く皆んな。その中火野は「そう言えば」と何か思ったのか緑谷に声を掛けた。

「緑谷君はどうしてオールマイトと一緒に？」

「オールマイトの古い友人に会わせたいってメリツサさんから招待状を貰ったんだ。僕はその……付き添いみたいなものかな……」

「成る程、サプライズ的な何かかな」

苦笑する緑谷はそう言うど何となく状況を把握した火野はそう解釈していた。

☆☆☆☆☆☆

そのタワーの中にある広くがらんとした研究施設の中で1人の男が携帯に保存されている写真を眺めていた。

そこに映っているのはまだルーキー時代のオールマイト。どこか寂しそうに見つめる男に助手のサムが声を掛けてくる。

「博士、デヴィット博士。こちらの片付けも終わりました」

声を掛けられたデヴィット・シールドは顔を上げる。

「そうか、ご苦労様、サム」

いつもの笑顔のサムにそう言いながら一応確認の為か隣の小さな研究室に入る。資料はしっかりとまとめられており、後から来たサムが口を開いた。

「たまにはお嬢さんとランチにでも行ってきてはいかがですか」

「今日もアカデミーに行ってるよ」

「I・EXPO中は休講では？」

「自主的に研究してるんだよ」

不思議そうに尋ねるサムにデヴィットは苦笑して答えたその時、入り口から声が掛けられた。

「だってパパの娘ですもの。似ちゃったのね」

「メリッサ」

笑いながら近づいて来たメリッサにサムが「こんにちは、お嬢さん」と挨拶する。サムを見たメリッサはニコリと笑った。

「こんにちは、サムさん。いつも研究に明け暮れるパパの面倒を見てくれてありがとうっ」

メリッサの一人前の様な挨拶に「まいったまいった」と苦笑するデヴィットにサムも笑う。

「それより、どうしてここに？」

「私ね！パパの研究が一段落したお祝いに、ある人に招待状を贈ったの！」

「ある人？」

「パパの大好きな人よ」

そう言つて振り返つたメリッサにつられるようにデヴィットは入り口を見遣るとその目を見張つた。

「私があああ！再会の感動に震えながら来たあ！！」

高身長のアールマイトは研究室が狭いのか独特なポーズと共に現れるとデヴィットは突然の登場に驚き固まっていた。サムも後ろでびっくりしている。

「トシ…アールマイト………!?!」

「ほ、本物…!?!」

「H A H A H A H A！わざわざ会いに来てやつたぜ、デイヴ!!」

唾然とするデヴィットとサム。アールマイトはテンション高くデヴィットに駆け寄ると子供の様に持ち上げ、その場で一回転し向き合う。アールマイトの背後からメリッサがニコニコした顔を出して口を開いた。

「どう、驚いた？」

「あ、ああ…驚いたとも……」

メリッサの企みだと理解したデヴィットはわずかな笑みを浮かべ落ち着かせるように息を吐く。

「お互いメリッサに感謝だな。しかし何年振りだ？」

「やめてくれ。お互い考えたくないだろ、年齢の事は」

「H A H A H A H A！同感だ！」

お互い笑い合うとアールマイトとデヴィットは改めて見つめ合う。

「…会えて嬉しいよ、デイヴ！」

「私もだ、アールマイト」

合わなかつた時間を埋めるように、再会を分かち合うように、2人

は軽く拳をコツンと合わせる。そしてオールマイトは入り口に居る緑谷と火野、アंकへと振り返った。

「アंक少年！火野少年！そして緑谷少年！紹介しよう！私の親友、デヴィット・シールド」

「知ってます！デヴィット・シールド博士！」

感動し震える緑谷はオールマイトの言葉を引き継ぎ興奮気味に語り出す。

「ノーベル 〃個性〃 賞を受賞した 〃個性〃 研究のトップランナー！オールマイトのアメリカ時代の相棒で、オールマイトのヒーローコスチュームヤングエイジ、ブロンズエイジ、シルバーエイジ、そしてゴールデンエイジ!!それら全てを制作した天才発明家！まさか本物に会えるだなんて、か、感激です!!」

「えっ?!そんなに凄い人なの!?!」

大興奮の緑谷にメリツサは思わず笑みを漏らす。火野も相変わらぬオタクっぷりに驚くがその内容を聞いて目を見開きそう言う。アंकはこの時間がどうでもいいのか面倒さそうに目を逸らす。緑谷はオールマイトの活躍に欠かせない人間は、緑谷にとって憧れの存在のようなものだ。

彼の勢いに驚いてたデヴィットは好意的に笑みを浮かべ口を開いた。

「…紹介の必要は無いようだね」

「あ、すみません！何か…」

「いや、構わないよ。……君達も友達みたいだね。私はデヴィット・シールド。どうぞよろしく」

我に返った緑谷は恥ずかしそうにするとデヴィットは心優しく口を開き、火野とアंकを見遣り声を掛けた。

「あ、はい！よろしくお願いしますー！」

「……フン」

「おいつアंक！…すみません、こいつちよつと変わった奴なので…」「ハハハ、構わないさ」

鼻を鳴らしてそっぽを向くアंकに火野は申し訳なさそうにデ

ヴィットを見ると彼は笑って許してくれた。

「コホ…コホ……」

「！」

小さな咳にデヴィットはオールマイトの様子に感づく。一瞬真顔となるが直ぐに元に戻して緑谷、火野達に気軽な表情で言った。

「オールマイトとは久しぶりの再会だ。すまないが、積もる話をさせてくれないか」

「あ、はい」

「メリッサ、ミドリヤ君とヒノ君とアंक君にI・E・X・P・Oを案内してあげなさい」

「わかったわ、パパ」

「え、いいんですか？」

「未来のヒーローとご一緒できるなんて光栄よ。さ、行きましょう！」

デヴィットの指示にメリッサは笑顔で緑谷と火野、アंकに対応すると、緑谷と火野の2人は笑顔になりお礼を言った。

「はい、よろしくお願ひしますっ」

「うわあ楽しみだなあ！」

「フン、子どもか」

「子どもだもーん」

「……！」

ワクワクしていた火野にアंकは嫌味を言うともカツと来たのかわざとらしい態度で言い返すとアंकの眉の皺がピクピクと動く。楽しそうに出て行く3人と面倒臭そうにするアंकを見送るサムにもデヴィットは声を掛けた。

「サム、君ももう休んでくれ」

☆☆☆☆

研究室を出て行き、通路を歩いているとメリッサが声を掛ける。

「君達の事……なんて呼べばいい？ミドリヤ君？イズク君？あとヒノ君かエイジ君？」

「俺は何でも…、映司で大丈夫です」

火野は間入れずそう言うとメリッサは「わかったわ」と了承する。すると緑谷は自分で納得したのか小さく頷くと口を動かした。

「僕の事は……デクと呼んで下さいっ」

「『デク』？変わったニツクネームね。分かったわ、デク君にエイジ君！私はメリッサでいいからね2人共。あ、アंक君は…アंक君でいいの？」

「あ？」

変わったニツクネームにキョトンとするがその表情を察してメリッサは了承する。ふと、後ろを歩くアंकにもそう言うと言おうと機嫌悪そうに疑問符を出すアंकは口を開いた。

「フーン！気安く呼ぶな…。ま、『アंक様』なら良いがな」

「おい!?どこまで自分勝手なんだお前！」

「わかったわ、アंक様！」

「メ、メリッサさん!?そこはアंक君で良いと思いますけど…!？」

☆☆☆☆

「失礼します」

サムがドアを閉めるとすぐ、オールライトはゴホゴホッと強く咳き込み出す。デヴィットは膝をつくオールライトに駆け寄るとその身体からは蒸気のような煙が出始める。

「おい大丈夫か、トシ!？」

煙が消えて現れたのはトゥルーフォームのオールライトだった。

「助かったよ……。マッスルフォームを維持する時間がさらに減って
いてね……」

弱々しい姿になれ果てたオールライトを見てデヴィットは焦るような表情をした目で見つめた。

「メールで症状は知っていたが……、まさかそこまで悪化してるとは

…」

☆☆☆☆☆☆

その頃、エキスポの入場ゲートにとある一団が現れた。その一団の先頭に立つ大きな傷を負った顔の男は会場を見渡す冷めた視線には何か企みがあるように感じる目をしていた。

「会場内には問題なく入れた。さて…決行は今夜レセプションパーティーが行われる時間…。今のうちに謳歌しているといい」

男はそう言って視線を向ける。その方向にはエキスポ会場の先にあるI・アイランドの中央から聳え立つセントラルタワーだった。

「凄いなあ〜っ。こうしていると、ここが人工の島だなんて思えないや！」

「うん！本当化学の力って凄い！」

エキスポ会場にやって来た緑谷と火野は様々なパビリオンを見上げて歩きながら、改めてI・アイランドの広さを実感していた。なかにはいると、どこまでも街並みや景色が広がっているように見える程広大だった。

「アंकも珍しいな。いつもなら俺の中に居るのに」

「フン、別にいいだろ。日本じゃ“個性”の規制が厳しいからな。閉じ籠るより出て来た方がこっちも気楽なんだよ」

普段自分に関係ない事、つまらない事や用事があると火野の体に入るアंकだが、“個性”の規制がない分、外に出ても何も縛るモノがない。まあ、普段から好き勝手に行動する事があるが公式が認めた制度ならアंकもアंकなりに羽目を外せると思ったのだろう。

ふと、3人が周囲を見回す姿を見ていたメリッサは嬉しそうに口を動かした。

「大都市にある施設は一通り揃ってるわ。出来ないのは旅行くらいね」

「そうなんですか？」

「ここにいる科学者とその家族は、情報漏洩を防ぐ守秘義務があるから」

価値ある研究はそれだけ莫大な富を生む。それだけではなく情報を悪用されてしまうこともあり得る。その為の守秘義務なのだろう。火野は大変だなと実感しているその時、4人の前を巨大な影と“怪獣”のような咆哮と共に通り過ぎた。

「うわああ！カイジュウ・ヒーロー『ゴジロ』!!」

「うわ凄っ!!本物初めて見た!!」

噴火、大災害で活躍するヒーロー、ゴジロが通り掛かり、テレビで

しか見たことないその迫力が目の前で拝めれたのか緑谷と火野は興奮する。

その巨体とゴツゴツとした岩の恐竜の姿でお茶目ピースサインをして行くゴジロを見て2人の目は輝いていた。

「スポンサーを出している企業から招待されたのね。最新アイテムの実演とかサイン会とか、色々催し物があるみたい!」

「あぁっ!流石I・EXPO!」

気付けば、周囲には各国のヒーロー達が出て、ファンにサインなどをしていた。ヒーローオタクの緑谷にとってはここは天国のようなエリアだ。

来てよかったと興奮する緑谷にメリッサは口を開いた。

「夜には関係者を集めたパーティーも…って、デク君も出席するんだよね。マイトおじさまの同伴者なんだし。そうだ!エイジ君とアンク君もパーティーに出席してみない?」

「パーティー…ですか?」

「ええ。パパの主催で今夜セントラルタワーでレセプションパーティーが行われるの。私の紹介であれば参加出来るんだけどどうかな?」

「それはもう是非!…あ、もしかして正装しないとダメですよね?」

「あ、そうだった…。困ったわ…正装の服の予備あるかな…」

パーティーとなればそれなりの格好をして赴かなければならない。誘ったメリッサはうっかりしてたのか困り果てていると火野は手を上げて口を開いた。

「俺は大丈夫です。持って来てるんで」

「えっ?そうなの?」

「火野君準備万端過ぎる…!」

「まあ、旅先何があるか分からないんで。準備は念入りにする主義なんですよ」

実は以外と旅行が好きな火野はかなりの大荷物でこのI・アイランドにやって来ていた。その荷物の中に豪華な店や会場に入る為の正装も当然持って来ていた。だが、何か問題なのかアंकを見ながら

口を動かした。

「ただ、アंकの服は流石に持ってないんですね」

「あ？」

グリードであるアंकはいつもどういった理屈かは分からないが人型の時はいつも同じ服装をしていた。それ以外の服は見たことないし、一度比奈が服を見繕うとしたのだが拒んでいた。それを聞いてメリッサと緑谷はどうしようかと悩んでいるとアंकは鼻を鳴らし、急に身体にセルメダルが身体を包み込むように現れ、それが消えて行くとなんとアंकの服装が赤い色をベースとした正装着へと変わっていたのだ。

「俺はグリードだ。見た目も、服なんざどうにだってなる」

「何その特技！すごっ！」

「グリード恐るべし…！」

「まあ！凄いわアंक君！」

よくよく考えればアंकはセルメダルの塊で活動している。どういった理屈かは分からないがそのメダルを組み替えて体や服を自由自在に変えられるのは可能だと火野は納得するが、緑谷は啞然とメリッサはマジックを見せられたかのようなはしゃいだ様子だった。

「これでパーティーは問題なさそうね！じゃあ3人共、見学を再会しましょう。あそこのパビリオンもオススメよ」

パンつと手を叩いたメリッサはそう言うって指を指した方を見るとガラス張りのサッカースタジアムのようなパビリオンだった。中に入ると広い建物内にさまざまなサポートアイテムが展示されていた。

「うわあ！すごーい！」

「最新のヒーローアイテムがこんなに！」

「3人共見て見て！この多目的ビーグル、飛行能力はもとより、水中行動も可能なの！」

メリッサが示す先にあるのは丸みを帯びた飛行機型の乗り物。その頭上のモニターにはその乗り物の詳細が映し出されており、火野と緑谷は釘付け、アंकも興味があるのか2人程ではないがモニターを見ていた。

「凄い！」

「最先端！」

「ほお、人間ここまで進化したのか」

緑谷、火野、アंकと順に感想を述べるとメリッサは次の展示ブースへと案内した。巨大な水槽内の中心にはどこか幻想的なデザインの潜水スーツが展示されている。

「この潜水スーツは、深海7000mにまで耐えられるの！」

「深い！」

「凄い潜れる!!」

「ハッ、シャウタも本気を出せば行けるだろ」

緑谷と火野は水槽に張り付きあまりの深さに驚愕するとアंकは何故か競争心が湧いたのかオーズの性能と比べて皮肉に言った。

次に案内したブースでメリッサは試着用のメットを緑谷にかぶせた。すると、ゴーグル部分が発光し稼働し始める。

「このゴーグルには、36種類のセンサーが内蔵されてるわ」

「え、そんなに!? 凄い、緑谷君中どうなってるの!？」

緑谷は辺りを見回すと周囲に次々と小さなモニターが映し出され一際大きなモニターにはメット内の緑谷の驚く顔が表示された。

「わわ!? す、凄いクツキリ見える! 見え過ぎる!!」

「タカのメダルもそんなもんだろ」

驚く緑谷にまたもアंकが比較する言い方をしていた。すると、誇らしげにメリッサが口を動かす。

「実は、ほとんどのものはパパが発明した特許を元に造られてるの!」
「へえ、すごいなあ〜!」と緑谷が素直に関心していると、メリッサは思い出したように火野に言う。

「そういえば、少し前に日本の鴻上フアウンデーションからドクターマキッて人が来客に来てたわ」

「えっ、真木さんが?」

「ええ、あの人も凄い開発者で説明を受けた時は私もパパも驚かされていたし、いつも左肩に可愛い人形を置いていたから凄く印象深い人だったわ!」

「(可愛い…のか…?)」

鴻上の開発部署研究者の真木が来ていた事を知らされ火野は驚いているとあの不気味な人形を可愛いと言ったメリッサにアंकは頭おかしいのかと蔑んだ目で彼女を見ていた。

すると、メリッサは展示されているサポートアイテムをずっと見ていた緑谷を見て口を動かした。

「ここにあるアイテム一つ一つが、世界中のヒーロー達の活躍を手助けするの」

そう言う彼女のその眼差しからは父親の憧れが伝わってくる。

「お父さんの事、尊敬してるんですね」

「パパのような科学者になるのが夢だからっ」

嬉しそうに微笑むメリッサに緑谷は思い出す。

「あ、そういえばメリッサさんってこのアカデミーの…」

「うん。今、3年!」

「I・アイランドのアカデミーっていったら、全世界の科学者志望憧れの学校じゃないですか!」

「え、メリッサさんこのアカデミーの生徒なんですか!? すっごい!」

この英知の集大成と言えるI・アイランドは化学育成機関も備えており、当然難関中の難関でそれに入れたメリッサは将来有望な科学者の卵だ。

緑谷と火野に将賛されメリッサは照れ臭そうに首を振り口を動かした。

「私なんかまだまだ…。もっともっと、勉強しないと…」

「僕も…オールマイトのようになるために…もっと努力しなくちゃ…!」

自分に言い聞かせるようなメリッサを見て緑谷も呼応するように頑張ろうと拳を見つめていた。

「いいな。お互い憧れの人がいるって」

「お前もオールマイトに憧れているだろう?」

「まあ…ね」

その2人の背を見ていた火野は微笑ましく言うアंकが隣から

腰を持ち上げてくるような物言いをする。火野は照れ臭そうにそう言うど心配を感じたのか後ろを振り返る。「あ」とそれを見た小さく火野は声を漏らしていた。すると、メリッサは彼の言葉に緑谷を覗き込んで微笑む。

「デクくん、ホントにマイトおじさまが大好きなのね！さつきは凄い勢いでビツクリしちゃった」

「あっ！すいません、ついその…癖で………」

緑谷が照れるとメリッサも楽しそうに笑う。側から見れば微笑ましいカップルにしか見えない。そんな2人を横から、火野とアंकとは違う別の聞き慣れた声が聞こえてきた。

「楽しそうやね、デク君」

「え？う、麗日さん!? どうしてここに!?!」

そこに居たのはA組の同じクラスメイト麗日だった。まさかこんなところで会うとは思っても寄らなかつたのか驚く緑谷だが麗日はいつも通りでどこか平坦な笑顔で言った。

「楽しそうやね」

「(2回言った!?)」

困惑する緑谷、すると「コホン」と咳払いが聞こえる。振り返ると緑谷はさらに驚いた。

「八百万さん!?!」

「とても楽しそうでしたわ」

同じくクラスメイトの八百万が興味を隠せない顔で緑谷を見遣る。すると、その隣に居たA組の耳郎が耳朶のプラグをユラユラと浮かせながら緑谷を見ていた。ちなみに3人共ヒーローコスチュームだ。

「緑谷、聴いちゃった」

「恐るべし、耳郎さんのイヤホンジャック……!」

「奇遇というか…凄く偶然だね…」

耳郎の言葉に緑谷は不安を感じる。もしかして今までの会話を全て聞いていたのだろうか。聞かれて困るような事は何も言っていない。詮索するある意味恐い女子達の視線に火野は苦笑し、緑谷は妙に落ち着かせたくなる気持ちでいっぱいだった。

「お友達？」

「学校のクラスメイトで：何か誤解してるみたいで：あ、あの、僕は火野君達と一緒にメリツサさんに会場の案内をしてもらってるだけで…」

麗日達の誤解を解く為説明しようとする緑谷に状況を掴んだメリツサは助け舟を出そうとメリツサも口を開いた。

「そうなの！私のパパとマイトおじさまが…」

「わーーーーっ!!」

緑谷は慌てて大声で遮る。そして麗日達から離れて小声で懇願する。

「お願いします。僕がオールマイトの同伴者って事は火野君とアंक君には良いんですけど麗日さん達には内緒にしておいてください！」

「どうして?」

「色々事情がありまして…」

ヒソヒソと話している緑谷はそう言いながらもこちらを見ている火野とアंकに視線を向ける。

困り果てたその視線からは「僕が来た詳細は彼女達に内密に」と言わんばかりのアイコンタクトを送っていた。火野は了承して頷き、アंकを見遣るとアंकは了解したのかしぶしぶそっぽを向いた。

すると、耳郎は火野に話しかけて来る。

「火野、何でここに居るの?」

「え?あ、ああ、招待状を貰ったんだよ。ほら、体育祭で優勝しただろ?その優勝品としてさ。それでアंकと2人で見学してたら偶然にも緑谷君と会ってさ」

「そうだったのですの?私は火野さんもお方と楽しそうに会話をしていたのを見かけたので、てつきり…」

「……」

その悪意のない八百万の言い方は何処か誤解を生む言動で、それでいて何故か耳郎はジト目で火野を睨んでいた。火野は首を傾げていると話し終わった緑谷とメリツサが立ち上がり彼女達に近づくと笑

顔で口を動かした。

「よかったら、カフェでお茶しません？」

☆☆☆☆☆☆

「へ〜！お茶子さん達、プロヒーローと一緒にヒーロー活動した事あるんだ！」

「訓練やパトロールくらいですけど…」

感心した様子でメリッサに麗日が答える隣で耳郎が苦笑する。

「ウチは事件に関わったけど、避難誘導をしたくらいで…」

「それでもすごいわ！」

「私は何故かテレビCMに出演するハメに…」

落ち込む八百万にメリッサは笑顔を向ける。

「普通じゃ出来ない事ね。素敵！」

どうなる事かとヒヤヒヤした緑谷だったが、エキスポ内のオーブンスペースのカフェで、女子達はあつという間に打ち解け和気藹々と喋り始めていた。

女の子同士というのもあるだろうがメリッサの明るい振る舞いが彼女達の心を動かしているのかもしれない。

「明日、アカデミーの作品展示してるパビリオンにも行く予定なんです」

「すごい楽しみ！」

「メリッサさんの作品も？」

「ええ、もちろんっ」

トークが盛り上がる中、隣のテーブルに座っていた緑谷は安堵して息を吐く。火野はそれを見て口を動かした。

「よかったね、誤解解けて」

「う、うん…本当メリッサさんが優しい性格で助かったよ…」

脱力して再度息を吐いていると足を組んで手に顎を乗せてるアンクはこちらに来るウェイトレス店員に目が行く。その店員は「お待ちせしました」と飲み物2つとアイスクリームを緑谷達の座るテーブルにへと置く。

ふと、聞き慣れた声だったのか火野と緑谷は顔を上げて店員の顔を見た。

「その声…！か、上鳴君!?!」

そこに居たのは、ウェイター姿の上鳴と峰田だった。その声気付いた麗日達も声を上げる。

「と、峰田君!?!」

「あんたら何してんのっ?」

驚く耳郎に、親指を立てて上鳴は答えた。

「EXPOの間だけ、臨時にバイトを募集してたから応募したんだよ。な?」

「休み時間にEXPO見学できるし、給料貰えるし、来場した可愛い女の子とステキな出会いがあるかもしれないしな!」

峰田は得意気に胸を張る。そして物色するような視線は、クラスの女の子達を通り過ぎてメリッサにロックオンしていた。上鳴と峰田は下心丸出しで火野と緑谷にからみつく。

「おい緑谷!火野!あんな美人どこで知り合ったんだよ!?!」

「紹介しろよ、紹介!」

「いや、あの…」

「メリッサさんはそういうんじゃないだっ」

困惑する緑谷と火野を見てアंकは鼻で笑ってアイスクリームをペロリと舐める。グリードの体で食べても味はしないはずなのに、どこか美味しそうに夢中に食べるその姿はまるで子供のようだった。

その後ろでメリッサは「彼等も雄英生?」と小声で八百万達に尋ねる声を上鳴と峰田の耳がキャッチした。

「そうですー!」

「ヒーロー志望です！」

勢いよくメリツサ等の前に現れカツコつける上鳴と峰田。だがその時、またしても聞き慣れた声が聞こえて来た。

「なにを油を売っているんだ!? バイトを引き受けた以上、労働に励みたまえー!!」

ダツシユでやってきたのはヒーローコスチュームを身に纏ったA組の飯田だった。その物凄い勢いで恐怖のあまり「ギャアア〜!!」と絶叫する。

「い、飯田君！」

「立て続けに凄い偶然……!」

「来てたん?」

驚く緑谷と火野に唾然とする麗日。どうやら飯田は先にカフェに客として入って来てバイトをしている2人を委員長として使命感から見守っていたらしい。飯田は立ち止まると腕をブンブンと動かして口を開いた。

「ウチはヒーロー一家だからね。I・EXPOから招待状を戴いたんだ! 家族は予定があつて、来たのは俺一人だが……」

「飯田さんですか? 私も、父がI・EXPOのスポンサー企業の株を持っているものですから、招待状を戴きましたの!」

偶然、奇跡の連鎖のような出来事と物言いに驚く一同。八百万はそう言うとうとうと耳郎が続けて口を動かした。

「で、ヤオモモの招待状が2枚余ってたから、女子全員で厳選な抽選の結果、ウチらが一緒に行く事になったってわけ」

勝負に勝った耳郎は麗日の肩に乗せながらニツと笑う。

「ん。他の女子も、この島に来てるんだよ」

「奇遇だね、男子も実は他の子が来てるんだよ」

「えっ、そうなんっ!?!」

「A組集結って感じだね……」

麗日はそう言うとうとうと火野も連れて来ていた爆豪と切島を思い出す。それと、轟も訪れている事も。となると現在I・アイランドには殆どのA組が耳郎の言う通り偶然にも集まっているということになる。

「明日からの一般公開に、全員が見学する予定ですよ」

プレオープンには招待状が必要だが、一般の公開なら自由に観て回る事が出来る。今頃来られなかった女の子達も宿泊するホテルのんびりしているのだろう。

「よければ、私が案内しましょうか？」

「いいんですか？」

「うん！」

「「やったー！」」

メリッサの申し出に喜ぶ女子達。上鳴と峰田も便乗しようと「お、俺達も連れて行って!!」とメリッサに縋ろうとしたその時。

ズンツ…!

「な、何だ…!?!」

大きな爆発音が響き渡り、緑谷は振り返るとその視線の会場から大きな土煙が上がっていた。

☆☆☆☆☆☆

土煙が上がる最中、^{サイラン}敵を模したロボットが次々と倒されていく。ここは「個性」を使用して^{サイラン}敵を倒していくアトラクション『ヴィラン・アタック』。観客席へと急いでやって来た緑谷達は何事かと目を見開いた。土煙が晴れて現れたのは山岳を模した大きな岩山。

MCのお姉さんと共に近くのモニターにその人影が映し出される。

『クリアタイム33秒！第8位です！』

「あ、切島君っ」

モニターに映し出された切島にこんな所に居たのかと言わせる表情で言う。

「デク君、あの人も…?」

「はい、クラスメイトです」

メリッサに聞かれ緑谷は答えていると今度は耳郎が火野に声を掛ける。

「火野、他の男子って切島の事?」

「それともう1人。切島君がいるって事は…」

『さあ、次なるチャレンジジャーは!?』

火野に続くように場を盛り上げるMCのお姉さん。その声につられるようにスタート地点で見た人物に火野は「やっぱり」と声を漏らし、他のクラスメイト等はその人物に驚いていた。

「!かつ…かつちゃん!」

悠然とスタート位置に立つのは爆豪だ。

『それでは、ヴィラン・アタック!レディ…:ゴー!!』

スタートと同時に爆豪は両手の平から爆破を放出。一気に上昇すると次々と敵を爆砕していきながら、叫んだ。

「死ねえええええ!!」

(死ね?)

綺麗な青空、楽しめるアトラクション。そんなこの島に不向きな言葉が響き渡り、緑谷と火野は唾然としていた。

『これはすごい!タイム15秒、トップです!!』

トップになったのに「フン」と物足らなそうにスタート地点に戻る爆豪。すると切島が驚いた様子で声を出した。

「あれ?あそこに居るの緑谷と火野じゃね?!」

「あ、あはは…」

切島が見上げる先に居た苦笑する緑谷に気付いた爆豪は両手の平から爆発を起こして一気に距離を詰めると観客の手摺りに掴まる。

「うおっ!」

「うわあっ!」

驚く緑谷と火野、緑谷は思わず退くが構わず爆豪は吠えた。

「何でてめエ等がここにいんだあ!？」

「そりや島なんだからどこに居たって、偶然会ったとしてもおかしくないだろ?」

「だからって俺の前にデクを持って来るな!俺がいる範囲外で観光しろや!!」

「無茶言うなよ」

柵越しの猛獣みたくガシャガシャと暴れる爆豪に戸惑う緑谷に対し冷静に会話をする火野。その間に飯田が割入った。

「やめたまえ、爆豪君!」

「てめエに用はねーんだよ!こんなところでまで委員長ヅラすんじやねえ!!」

「委員長はどこでも委員長だ!」

相変わらずの怒号を当たり散らす爆豪。そんな彼を見てメリツサは麗日と耳郎に聞く。

「あの子どうして怒ってるの?」

「いつもの事です」

「男のインネンってやつです」

呆れたように耳郎、真剣な顔で麗日は答えているとスタート地点の付近にいる切島に八百万は声を掛ける。

「切島さん達もEXPOへ招待を受けたんですの?」

「いや、招待されたのは雄英体育祭で優勝した火野!爆豪と俺はその付き添いで別行動してた!なに、これからアレ挑戦すんの?」

切島の言葉に耳郎は「あいつ誘えたの?」と呟くと、聞いていたアソクが「ま、馬鹿だからな」と火野の代わりに答えていた。すると爆豪は暴れるのを止めて悪態を吐く。

「やるだけ無駄だ!俺の方が上に決まってるんだからな!」

「む?…そうとは限らないよ?なあ緑谷君?」

「ひゃ!?!ぼ、僕はその……」

煽るような口調にカチンと来たのか火野は眉に皺を寄せ緑谷に同調を求めるが緑谷は困ったような笑顔をする。しかし、麗日はふと、口を開いた。

「でも、やってみなきや分からないんじゃないかな？」

「うん、そうだね……え？」

思わず相槌をしてしまった緑谷。火野は「だよーね！」と喜ぶ顔をしてるとは裏腹に爆豪は苛ついたまま柵を乗り越えて飯田を軽く突き飛ばすと緑谷に詰め寄る。

「だったら早よ出て惨めな結果出して来いや！三色野郎！クソナード！！」

「は、はいいー！」

「言われなくてもそのつもりさ、アंक！」

「フン、挑発にノリやがって。まあ、爆発頭の驚いた顔が見れるなら別にいいか」

気の抜けた返事をする緑谷。そしてやる気に満ちた火野はアंकを呼ぶと自分にもやる価値はあると思ったのか悪だくみの笑みを浮かべて火野に近づく。

と、その時だった。スタート地点から火野とアंकは聞き慣れた声が聞こえて来る。

「おいっ。申し訳ないが順番は守ってもらえないか？次の人が控えているんだ」

「え？この声……」

「……まさか」

飯田に負けない律儀な物言いに反応した火野とアंकは柵から見下ろす。スタート地点に立っていたのは癖毛で8：2分けが特徴でその腰にはバーストライバーが巻かれている後藤だった。

「ご、後藤さん!?!」

「なっ……!?火野、アंक!?!」

「フン、とんでもない集結だなあ、これは」

お互いの顔を見合わせて驚く2人。アंकは鼻を鳴らして運命なのか宿命なのか、徐々に集うクラスメイト、雄英生徒を見渡してアंकは面白そうに笑っていたのだった。

No. 70 パーティーへの準備

「変身」

《カポーン…》

後藤はセルメダルをスロット部分に装填し、バースドライバーのグリップアクセラレーターを回すと中心のトランサーシールドが展開、カプセルが開いたような音が鳴り響く。ドームのようなエネルギー体が形成され後藤の周囲を囲むと続いてアーマーが部分部分に現れ装着されていく。後藤はバースへと姿を変えると変わった“個性”と思われたのか観客達からどよめく声が聞こえて来る。

『それでは！続いてのチャレンジャー行きます！ヴィラン・アタック！レディ〜…ゴー!!』

MCのお姉さんが合図を出すとフィールドの各地に敵のロボットヴィランが出現する。バースのマスク内に映像で映し出されたロボットを後藤はロックオンしていくと、グレネードランチャーを模した武器、バースバスターを構えて駆け出す。

ある程度近づくと瞬時に標準に狙いを定めトリガーを引く。メダル状のエネルギー弾がロボットに命中すると破壊され、バースは次々にロボットに向けて銃弾を放ち破壊していった。

「ラストっ！ふっ！」

山岳の頂上にいるロボットに向け後藤は銃弾を放つとロボットは破壊されそこでゲームは終了となりMCのお姉さんは声を上げた。

『それまで！タイムは18秒！現在2位です!!』

「…ふう。威力の反動…狙いの標準に多少ズレが生じる…。俺もまだまだか…」

観客席から「おお〜」と声上がるがバスは満足いかない様子で声を漏らし、スタート地点へと戻るとドライバーに装填されたセルメダルを抜き取る。すると、抜き取ったセルメダルは粒子となって消えていき、変身は解かれ、後藤は軽く息を吐いていた。

それを見ていたメリツサは麗日達に声を掛ける。

「凄い『個性』ね…。彼も英雄生？」

「はい。でも私達ヒーロー科とは違うサポート科の生徒なんです」

「それにアレは『個性』じゃなくて彼のサポートアイテム。名前はバスって言うらしいですよ」

「サポートアイテム!? 『個性』を使わずにこの記録を出せるなんて凄い…。アーマーを形成して身体能力を上げるシステムかな…。あの武器も変わった銃弾が使われていたし、興味深いね」

麗日、耳郎が答えるとメリツサは興味がそえられるような表情となりまじまじと後藤を見つめる。

同じ境遇の立場として興奮を隠せない様子だった。

すると、後藤はチャレンジャーの出入り口へと入って行くと、そこに待機していた緑谷、火野、アंकを見つけ、少し気だるそうに声をかけた。

「まさか、こんな場所にまでお前等と会うことになるなんてな」

「お疲れ様後藤君！ 凄い記録だね、バスもかつこよかつたよ！」

「…爆豪よりも順位は低いのにその褒め方は間違いじゃないのか緑谷？ まあ、一応ありがとうとは言っておく」

無愛想に言う後藤に「あう、ごめん」と緑谷は申し訳なさそうに謝っている。火野が次に話しかけた。

「後藤さん何でこの島に？」

「I・EXPOの招待状を会長が貰ったんだ。だが会長は急用が出来て行けなくなつて、伊達さんと来る予定だったのだがヒーローとしての仕事が増え出してな。結局来ているのは俺一人だけだ」

鴻上ファウンデーションは日本のサポートアイテム専門の大企業の一つ。化学が発達しているこの島に招待状が送られるのは当然だろう。すると、アंकが鼻を鳴らして口を開いた。

「フン、学生の身分だからお前は暇を持て余してそうだな」
「なんだと？」

相変わらずの喧嘩腰のアंकに後藤は眉をピクリと動かし詰め寄ろうとするが火野が慌てて割入る。

「アंक！揉め事起こすなって言っただろ！ごめん後藤さん…」

「…つたく、相変わらずその減らず口は変わらないな。お前のアंकは…」

謝る火野に冷静になった後藤は溜め息を吐く。すると、MCのお姉さんのアナウンスが入り口から聞こえて来る。

『さて！今回飛び入りで参加してくれたチャレンジャー！一体どんな記録を出してくれるのでしょうか！』

「あ、僕の順番か！」

「頑張つてね、緑谷君！」

反応した緑谷は慌てて出入り口に向い、火野は応援すると緑谷は「うん！」と返事をしてスタート地点へと向かう。次に出番となる火野は軽く準備運動を行なっていると後藤はそのまま通路を奥へと進んで行った。

そして、やや緊張しながら緑谷はスタート地点へと立つ。

「やると決めたからには…（ワン・フォー・オール…フルカウル…！）」
グツと腰を下ろして全身に力を溜める。すると全身に緑色の稲妻が程走りその身にワン・フォー・オールの力を巡らせた。

『ヴィラン・アタック！レディゴー!!』

MCのスタートの合図と同時に緑谷は猛スピードでフィールドの岩山を駆け上がる。瞬く間に頂上付近まで上り詰めた緑谷のスピードにメリツサは驚いていた。

そして、あつという間に敵を次々と粉砕した。MCのお姉さんは驚いた顔をして叫ぶ。

『これもすごい！16秒！第2位となりました！』

緑谷のパワーに見慣れていた飯田達は感心していた中、爆豪は気に入らないのかその記録と緑谷を見て不機嫌そうに舌打ちをする。そして、緑谷のパワーを初めて見る観客達は驚くばかりだ。もちろんメ

リッサもその中の1人だった。

だが、彼女の顔は引つかかってような顔をしてスタート地点へと降りる緑谷を見ていた。

『どんだん行きましよう！続いて飛び入りのチャレンジャー！彼もどんな記録を出してくれるのでしょうか!?!』

緑谷はその場から出て行くと今度の挑戦者火野がスタート地点へと立つ。火野はオーズドライバーを腰に宛い装着するいつものように「アंक！」と名を呼び変身に必要なコアメダルを要求する。アंकは無言でタトバのコアメダル3枚を投げ渡すと火野は見事に思い切り振った片手で掴み取り、ドライバーの左右に2枚、真ん中に1枚と嵌め込む。そして右腰部分にあるオースキャナーを取り出し3枚嵌め込まれた部分へとソレをスキャンさせた。

「変身！」

タカ！

トラ！

バッタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

コンボソングが鳴り響き、火野はオーズ「タトバコンボ」へと姿を変える。バースとは異なる変身シークエンスと音声、そしてその姿に観客達は驚愕していた。その中のメリッサも驚き、口をポカンと開く。

MCのお姉さんも驚きのあまり喋りながら合図を出した。

『先程の若い少年と同じように変身した!?!これは期待出来そうです！それでは！ヴィラン・アタック！レディゴー!!』

「はああ……ハア!!」

合図と同時にオーズは脚部のバッタレッグに力を溜めると能力が解放し、文字通り蝗のような足となるとその場から勢いよく跳躍す

る。頭部のタカアイで敵であるロボットサイランの場所を瞬時に把握すると、腕部のトラクローを展開し、引き裂くようにロボットを次々と破壊して行き、瞬く間に最高記録を出した。

『きやー！凄いい！！記録は1.3秒！現在トップに躍り出ました!!』
「よつとー…やったつ」

頂上に着地するオーズは小さくガッツポーズをする。観客達も興奮して歓声の聲が上がる最中、メリッサは戻ってきた緑谷に興奮気味に声をかけていた。

「凄いね！デク君！デク君もだけどエイジ君、彼何者なの!？」

「はいっ、火野君の“個性”は『オーズ』。動物の能力を宿したコアメダルを使って全身を戦闘コスチュームみたく纏い、戦う事が出来る凄いい“個性”なんです!」

「すつっごいっ！最近のヒーローの卵達はとても有望な子達ばかりなのね!」

自分も中々高記録を出したのにも関わらず火野を褒めて持ち上げる。緑谷からすれば他の人や友達の方が“凄い個性”だと評価し、感激している善良な子だ。

☆☆☆☆

「え!?!じゃあゴトウ君は鴻上ファウンデーションに所属していてバースシステムはそこで作られたって事っ?」

「はい。ですが正確には学生の身なので名を置いているだけ…。このバースは真木博士が主に設計したシステムです」

「ドクターマキは優秀な科学者なのね!それで、元となったのがこのコアメダルってメダルで、その所有者のエイジ君はオーズになれる…。益々興味深いわね。これはどうやって出来たの?」

「えと…これは俺の“個性”なんで詳しい事はよく分からないんです。気付いた時には手元にあっただけどころな代物が“個性”だなんて驚き

「へく…!何度も言うようだけどこんな代物が“個性”だなんて驚き

ね……!」

ヴィラン・アタックを終えた火野と後藤は早速メリツサに質問攻めをされて淡々と答えていき、メリツサは改めて貸してもらったオーズドライバーと数枚のコアメダルを手に持ちまじまじと観察しては研究者の目となりと独り言を呟く。すると、アंकが言い訳をする火野の言葉を聞いて気に入らないのか口を挟んで来る。

「フン、下手な言い訳しやがって。そいつは錬金術師によって作られたベル」

「だーったった!!アंकも知らないもんな!」

アंकによれば前世の世界でオーズドライバーは800年前の錬金術師達によって作られた物。そしてコアメダルもまた然り。その欲望の力を入れてグリードも生み出されたらしい。が、そんな話を今したところで疑問と困惑は増すばかりなので火野は慌てて大声を出してアंकに割入る。「おい!」と怒るアंकだが気にせず火野はアंकの前に立ち誤魔化すように苦笑いをするメリツサは『?』マークを浮かべて首を傾げていた。

その付近で緑谷はクラスメイト達に囲まれている。

「んー、おいしい!そんで火野君やっぱ凄いなあ!」

「だが君も見事だったぞ。流石だ緑谷君」

残念がる麗日と称賛する飯田に囲まれた緑谷は嬉しそうに言う。

「まさか、火野君もただじゃかつちゃんの記録にここまで迫れるなんて…」

それを聞いていた爆豪は緑谷に向け声を上げる。

「だー!クソありえねー!もっかいだ!完膚なきまでの1位だ!!」

まさかの火野に負けて尚且つ緑谷と1秒差を付けられたのか爆豪の怒りは頂点に達していた。もう一度挑戦しようと足を踏み出した瞬間。

突如ガガガツ!!という何かを凄い勢いで作り上げるような大きな音がした。

『ひゃー!すごいすごい!!じゅ、14秒!凄いけど惜しくも2位です!!』

驚くMCの言葉に慌てて緑谷達が見ると巨大な氷の塊が岩山を覆っていた。スタート地点にいたのは、白い息を吐き出す轟だった。

「轟君！」

「おお、轟君も参加してたんだ！」

驚く緑谷と火野達にメリツサは口を開いた。

「彼もクラスメイト？」

隣にいた八百万が「はい」と答える。

「皆んな凄いわね！流石ヒーローの卵！」

率直な感心に八百万は恥ずかし嬉しく「そんなこと」と顔を見合わせていると、その後ろにいた爆豪が突如、その場から爆破で飛び出し、轟の前へと現れる。

「てめえ！この半分野郎！」

「爆豪」

怒れる爆豪に対しいつも通りあまり驚かなく冷静な轟。

「いきなり出てきて、俺すげーアピールかコラ！」

詰め寄る爆豪。だが、轟は向こうの観客席から見下ろす緑谷、火野達に気付き、顔を上げる。

「緑谷、火野。お前達も来てたのか」

「うんっ。まさか轟君もヴィラン・アタックに来てたなんて！探す手間が省けたね！」

「ああ」

「無視すんな！」

挨拶する轟と火野。それに爆豪は割り込むとガン飛ばして口を動かした。

「大体何でてめえがここにいんだよ!？」

「招待を受けた親父の代理で」

サラリと轟は答える。プロヒーローエンデヴァアの息子の轟は当然だがその招待状が届かれていたらしく、エンデヴァアはヒーロー活動がある為不在。1人でやってきた轟は火野と後々合流する筈だったのだが、縁があるのかここで他のクラスメイト込みで合流出来てい

た、ということになっている現状だ。

するとおどおどしていたMCのお姉さんが爆豪へと声を掛ける。

『あのー、次の方が待って…』

「うっせえ！次は俺だ!!」

爆豪の態度にビビるMC。それを見て黙っていられないのか飯田はバツと飛び出しながら叫ぶ。

「皆んな！止めるんだ！雄英の恥部が世間に晒されてしまうぞ！」

「う、うん！」

「お、おう！」

「わ、わかった！」

緑谷、切島、火野も慌てて下へと飛び出し、飯田と共に爆豪を押しさえに掛かる。

「だー！なんだためエら!!放せ！燃やすぞ！」

「かつちゃん落ち着いて！」

「本当迷惑掛けるの好きだなお前っ！」

「これ以上恥を晒すのはやめたまえ！」

「誰が恥だクソメガネ!!」

「ここは悟ろうぜ爆豪っ！」

4人に取り押さえられ暴れるその騒ぎはまるで小学生のような光景で、後藤はそれを見るなり溜め息を吐き、アंकは手摺りに腰掛け見下すような表情で爆豪を見ては鼻で笑っていた。一方で女の子達はさつきメリッサに褒めてもらった時との落差に恥ずかしそうになる。その横でキョトンとしていたメリッサだが「フフ」と思わず笑みをもたらした。

「……………」

更に恥ずかしそうになる3人を見てメリッサは口を動かした。

「あ、ごめんなさい。雄英高校って楽しそうだなって思ってた」

メリッサの言葉に八百万は少し考えて言った。

「少なくとも退屈はしてないですわね…」

「タシカニ…」

同意して麗日と耳郎が頷く。何せ雄英高校の生徒。毎日が刺激的

で息つく暇はあまりないほど忙しい学校生活なのだから。

☆☆☆☆☆☆

『本日は18時で閉園になります。ご来園ありがとうございました』

日も暮れ始めたエキスポ会場に開閉のアナウンスが流れていた頃、閉店したカフェの入り口で上鳴と峰田が疲れたのか背を合わせ座り込んでいた。

「プレオープンでこの忙しさって事は、明日からどうなっちゃうんだ一体…」

「やめろ、考えたくない！」

地獄の未来を想像して上鳴は頭を抱え込む。小遣い稼ぎ、エキスポ見学、あわよくば女の子とデート、などと考えていた2人だが現実という労働に時間を持っていかれるだけで甘くはなかった。疲れて気力を失くしていた2人に声が掛けられる。

「峰田君、上鳴君、お疲れ様！」

やってきたのは緑谷に飯田、麗日に耳郎、八百万、そしてメリツサだった。皆んなで様々なパビリオンを観てきたあとだ。ちなみに爆豪はみんなと回るのが嫌だったらしくさっさと行ってしまい、切島はそれを追いかけ、火野はこれ以上迷惑掛けられては困るとアंकを連れて2人の後を着いて行ったらしい。轟と後藤はそれぞれ来る筈の人物、エンデヴァー、鴻上の代わりに来た為顔を出さなければならぬと別行動となった。

「労働よく頑張ったな！」

そう言っただけ飯田は上鳴達の目の前にカードのようなものを差し出した。

「なにこれ？」

首を傾げる峰田に八百万が答える。

「レセプションパーティーへの招待状ですわ」

「パ、パーティー…？」

「俺らに…？」

身も心も疲れ果てていた2人にとってその誘いはまるで天国に導かれるような感覚だった。そんな2人に耳郎と麗日が言った。

「メリッサさんが用意してくれたの」

「せめて今日ぐらいはって」

「余ってたから…よかったら使って」

控えめに笑うメリッサはそう言うのと、峰田と上鳴は彼女が女神のように見える顔を見合わせる。

「上鳴い…」

「峰田あ…」

「俺達の労働は報われたあ!!」

うるうると涙目になりヒシツと抱き合い声を上げる2人。

上鳴、峰田の参加も決まったことで、委員長である飯田は一步前に出て振り返り口を動かした。

「パーティーには、プロヒーロー達も多数参加すると聞いている！雄英の名に恥じない為にも、正装に着替え団体行動でパーティーに出席しよう！18時30分に、セントラルタワーの7番ロビーに集合！時間厳守だ！轟君や火野君達には俺からメールしておく！では、解散!!」

そう言い残し、「個性」のエンジンで物凄いスピードで走り去って行く飯田に緑谷は親指を立てた。

「飯田君フルスロットル！」

「じゃあまた後でね！」

「うん！」

麗日達の宿泊するホテル前で別れ緑谷も自分のホテルへ戻ろうとすると、メリッサが声をかける。

「デク君、ちよつと私に付き合ってもらえるかな？」

「え。あ、はい」

☆☆☆☆☆☆

一方その頃、火野、爆豪、切島が宿泊しているホテルの部屋。火野と切島が身支度をしている最中、爆豪は広いベッドに大の字になって寝転がって言った。

「誰がパーティーなんぞ行くか。知らねー奴のスピーチ聞いて、いちいち拍手なんかしてられっか。馬鹿馬鹿しい」

メリッサに招待状を貰ったのにも関わらず、その機会をそっちのけにしようとする彼に火野は呆れていたが切島はめげなかった。

「豪華な飯が食い放題らしいぜー!」

「そもそも俺は正装なんて持ってきてねえ」

「うくん、あまりがあればいいんだけどなあ。アंक、お前の力で服作ってやる事できないの?」

そう言う爆豪に火野は赤いシーツを被せたソファーに寝転がるアंकに聞くとアंकは面倒臭そうに答えた。

「あ?それは無理な話だな。もつとも、俺が憑依すれば可能だが…」

「ケツ!誰が赤鳥野郎なんかとくつつくか気持ち悪い!」

「フン!それはこっちの台詞だつ。映司ならともかくお前みたいな礼儀知らずの体に取り憑くわけないだろ。想像しただけで寒気がする!」

「あア!?!」

「もー、2人共!ホテルに来てまで喧嘩するなよ!」

会話をする度に喧嘩をされてはお目付役としてもたまったもんじゃない。火野は呆れ気味に2人を宥めると切島がニツと笑う。

「だと思っ…おめーのぶんも持ってきた!」

爆豪のと自分の正装を見せて持ち上げる切島に爆豪は吠えた。

「用意周到すぎるだろ！クソ髪い！」

「本当、どこから用意したのそれ？」

「ここ来る前に爆豪ん家のおばさんに話して借りてきた！」

「はあ!? てめえ勝手に家くるんじゃねーよ!!」

「ほお、よかったなあ。お前のママにきちんと用意してもらって…な？」

「……………!!」

まさかの自宅へ行って借りてきた事に爆豪は驚きながら怒号する。それを聞いていたアंकはソファアに寝そべりながら悪戯の笑みを浮かべ爆豪に言う。爆豪は声にならない唸り声でアंकを睨み付けていた。ともあれ、これで爆豪も行ける事となり、火野達は刻々と迫るパーティーの時刻へ向け準備を進めて行ったのだった。

☆☆☆☆☆☆

『拘束しました。警備は5人、プランどおりです』

セントラルタワーの内部、警備システムを管理するコントロールルームで、警備員達が拘束されていた。拘束したのは顔に傷のある男の部下だった。

そのうちの1人がトランシーバーで連絡する。

「まだ警備システムは生きています。殺さず軟禁しておけ」

暗い地下でその報告を受けた傷の男はそう答えると『はい、これより作業に入ります』と言われて通信が切れる。

「順調だな」

傷の男は満足そうに言いながら、鉄でできた仮面をその顔につける。すると前の扉がゆっくりと上がっていく。男は優無から提供し

てもらったヤミーが数体と、控えている数人の部下達に言い放った。
「こちらも動くぞ」

☆☆☆☆

セントラルタワー7番ロビーの自動ドアパネルに『No. E000
I123J E1J1 HINO』と表示されるとドアが開き、グ
レーのスーツに赤のネクタイと見慣れない正装に着替えた火野と後
ろからアंकがロビー内へと入って行く。

「あーギリギリ…じゃないか、ごめん遅くなった！」

火野はそう言いながら辺りを確認すると来ていたのは同じく正装
をした飯田と轟、後藤。正装を持ってないウエイター姿をした上鳴と
峰田だった。

「まだ来てない。団体行動をなんだと思ってるんだ！」

「全く、メリッサさんに言われて同行しているのにも関わらず…A組
の連中は時間も守れないのか」

「A組として恥晒し！申し訳ない！」

委員長として責任感を感じる飯田は嫌味を言う後藤に90度腰を
曲げて謝罪する。すると、正装をした緑谷が入って来る。

「ごめん遅くなって…ってアレ？他の人は？」

「まだみたい、俺もさっき来たところ」

「…火野、爆豪達と来てないのか？」

慌てて入ってきた緑谷に火野は息を整えて言うと同行する筈の爆
豪と切島が見当たらないのか轟が聞く。すると火野は「あゝ」とバツ
が悪そうに答えた。

「爆豪君しぶっちゃっててさ。やっと行く気になったんだけど、2人

は遅れて来るから先に行つてつて言われたんだ。それに同じ部屋に居るとアंकと爆豪君喧嘩するし…」

「ブン、喧嘩腰しになるアイツが悪い」

俺は悪くないみたいない方をするアंकに「お前もだろ！」と火野が怒る。すると、立て続けに自動ドアが開き、可愛らしくも大胆なドレスを着た麗日がやってきた。

「ごめん！遅刻してもうたあ！」

見慣れないその華やかなしい可憐な姿に峰田と上鳴は「おおくほお!!」と興奮する。続けて八百万と後ろに隠れるように耳郎が立っている事に火野達は気付く。

「申し訳ありません…耳郎さんが……」

大人っぽくエレガントなドレスを身に包んだ八百万を見て上鳴と峰田は「OH~~~~イエス！イエス!!」とさらに興奮する。

「うう…ウチ、こういうカツコは…その、なんとゆーか……」

八百万の後ろから恥ずかしそうに出て来た耳郎は可愛らしくもシツクなドレス姿だ。みんなの反応が気になる耳郎に、上鳴が親指を立てた。

「馬子にも衣装ってヤツだな！」

「女の殺し屋みてえ」

自身の心に響かなかったのか峰田は眩く。そんな2人に耳郎は耳朶のイヤホンジャックを突き刺し、心音の爆音を流した。

「ギャアアアア!!」

「黙れ」

「なんだよ!?俺褒めたじゃんかあつ！」

「褒めてない」

突然の攻撃に怯みながらも意義を出す上鳴に耳郎は機嫌を直さない。ふと、耳郎は火野に近寄ると自身のドレスの感想を求めていた。

「あの……火野……どう思う……?やっぱ似合っていないかな……」

「ううん、そんな事ないよ！華やかしくてすごく綺麗だと思うっ」

「っ…!!そ、そうかな…!?あ、ありがとう…!火野もスゴク似合ってるよ……!」

純粹で率直な感想に耳郎は真っ赤になりながらそう言う。それを見ていた上鳴と峰田はこの差はなんだと言わんばかりな腑に落ちない表情で浴びせられた心音の余韻を節々と実感していた。

そしてその近くで麗日も照れ臭そうにしながら緑谷に近づく。

「正装なんて初めてだ…。八百万さんに借りただけだ…」

緑谷は麗日のドレス姿にドキドキしながらも感想を言った。

「に、似合ってるよー！うん、すごく！」

「わーデク君たら！お世辞なんか言わんでいいって！」

それを聞いた麗日は頬を赤く染めながらテンションが舞い上がったのかブンブンと腕を振る。「麗日君!」と止める飯田と驚く緑谷。

「おい、お前等流暢に服の感想言い合ってる場合か。もう時間は過ぎてるぞ」

「映司、さっさと行くぞ。デザートにアイスがあるんだろ？」

後藤が腕時計を見ながらそう言う。時刻は等に過ぎており恐らくパーティーは始まっているだろう。アंकもここでしか食べれないデザートに待ちきれないのか火野を急かすと、再び自動ドアが開く。現れたのはメリッサだった。

「ヒョー!!」

「デク君達、まだここにいたの!?もうパーティー始まってるわよ！」

「真打ち登場だぜ!!」

メガネを外し、華やかで魅力的なドレス姿のメリッサに上鳴と峰田のハートは撃ち抜かれていた。

「ヤベーよ峰田。俺どうにかなつちまうよどーしよー！」

「どーにでもなれ」

感動のあまり涙目になる上鳴に耳郎は呆れていた。

セントラルタワーのコントロールルームでは、警備員達を閉じ込めた男達の1人が、メインであるコンピューターを操作していた。モニター画面に映し出されるタワー階数の警備システムが次々と赤い警報のシグナルへと変わっていく。

その中の1人、緑色の髪色をした男はふと、リーダーである傷の男から譲り受けた黒いドライバーと3枚の黒のコアメダルを手に持ち、眺めると、傷の男と会話した記憶が脳内に蘇る。

『あの方に俺は“力”を貰った。もしもの時の為にコレはお前が使え』

『……わかりました』

男はそれを腰のバッグにしまい、引き続き、モニター画面を眺めてはその口をニヤリと不吉な笑みを浮かべていたのだった。

No. 71 波乱のレセプションパーティー

『えー、ご来場の皆様、I・EXPOのレセプションパーティーによるこそおいで戴きました!』

セントラルタワー2階のレセプション会場には来賓客や関係者、プロヒーロー達で賑わう最中、司会者がステージの壇上の上に立ち、司会と共に注目を浴びせる。広い会場にはバイキング形式の豪華な料理が用意されており、ステージの大型モニターにはエキスポのロゴが映し出されている。その壇上の天井には上の階段の高さを見上げられる吹き抜け式となっていた。

『乾杯の音頭とご挨拶は、来賓でお越し戴いたNo. 1ヒーロー、オールマイトさんをお願いしたいと思います。皆様、盛大な拍手を!』

壇上の司会者がヒーローコスチューム姿のオールマイトに向かってそう言うのと観客達から拍手が送られる。

『どうぞステージにお越し下さい!』

周りから拍手が送られる中、オールマイトが困った笑顔を浮かべていた。

「デイヴ、聞いてないぞ」

近づいて来たデイヴィットに苦笑いしそう言うのとデイヴィットは苦笑し返し口を開いた。

「オールマイトが来ると知ったらそうなるさ」

「やれやれ…」

困り果てるオールマイトは諦めたのか言われるがままにステージへと歩き出した。

その頃、飯田達はまだロビーに滞在していた。何故ならまだ全員集まっていないからだ。

「ダメだ。爆豪君も切島君も、どちらの携帯にも応答が無い」

飯田は繋がらないスマホを切り、心配そうな表情を浮かべる。

「まさか、迷子…?」

「切島ならともかく爆豪に限ってそれはないと思うぞ」

「いや、興味のない事は流石のかつちゃんも把握してないと思う…」

火野が呟くと器用で何でも出来てしまう爆豪に限って有り得ないと轟が口を挟むが、幼馴染である緑谷は爆豪の性格をよく知っているのかそう答えた。

一方、その頃で渋々参加を決めた爆豪と切島はどこかの通路をうろうろと彷徨っていた。先程から同じような道をぐるぐると回っているような気がしたのか爆豪は前を歩く切島に声をかける。

「…おい、本当にこの道で合ってるのか?」

「多分そうだと思うけど…」

自身なさ気な答えに爆豪は眉を寄せた。

「多分だあ?」

「いやあ、実は携帯部屋に忘れちゃってさ……」

面目ないと言わんばかりの顔をする切島に爆豪は呆れていた。

☆☆☆☆

ステージの上へと上がったオールマイトはグラスを片手にマイクの前へと立つ。

『ご紹介に預かりました、オールマイトです。堅苦しい挨拶は…』

次の瞬間、突如、サイレンが鳴り響いた。大型のモニターには警告

を知らせるマークが表示され何事かとオールマイトを含め、会場の全員の耳に島内放送が流れた。

『I・アイランド管理システムよりお知らせします。警備システムにより、I・EXPOエリアに爆発物が仕掛けられたという情報を入力しました』

突然の警告と出来事にパーティー会場の人達はどよめき「何事だ？」と騒ぎ出す。

『I・アイランドは現時刻をもって嚴重警戒モードに移行します。島内に住んでいる方は自宅または宿泊施設に。遠方からお越しの方は近くの指定避難施設に入り待機して下さい。尚、今から10分以降の外出者は、警告なく身柄を拘束されます。くれぐれも外出は控えて下さい。また、主要施設は警備システムによって強制的に封鎖されます』

また、ロビーに居た緑谷達もその放送を聞いて戸惑っていると火野はハツとする。窓の防火シャッターが次々と閉じ始め、入り口が塞がれていった。

☆☆☆☆

レセプションパーティー内の会場は突然の出来事に戸惑い、不穏な空気に包まれていた。その時、その空気を破るように右側のドアが開く。入って来たのはライフルを構えた敵が3人と昆虫種のヤミー、そして見たことのない哺乳類系のヤミーが数体だった。

「キシヤアア!!」

「ヒエアア!!」

「きやああっ!!」

「なんだ!?! 化け物!?!」

敵と奇声を上げるヤミーを初めて見た客達は悲鳴を上げる。すると今度は左側のドアが開き、同じようにライフルを持った敵と昆虫のヤミーが素早く会場にいる人々を威圧する。

「ッ!?あれはヤミー!?!」

混乱に陥る会場の中、ステージの上にはいたオールマイトはヤミーの存在に気付き驚愕する。ヤミーを生み出せる人物は脇真音優無ただ1人。だが、日本にいる筈の彼女が入場を嚴重に規制されてるI・アイルランドに来る筈がない。だが仲間である黒霧の“個性”を使って来たのでは?とオールマイトは脳内の中を過ぎる。すると、真ん中トのドアから同じくライフルを構えた部下を従えて堂々と入ってきたのは鉄の仮面を被った傷の男、『ウォルフラム』だった。

ウォルフラムはステージへと向かいながら口を開いた。

「なかなかどして。この“ヤミー”という名の怪物共は使えるな…。さて、聞いた通りだ。警備システムは俺達が掌握した。反抗しようなどと思うな。そんな事したら…」

優無の言う通り、忠実に従うヤミーを見て感心するウォルフラムは中央のモニター画面を見遣る。すると、合図をするように手を上げるとモニター画面は街中の映像へと切り替わる。高いところから見下ろすように映る街中では操られたように警備マシンが徘徊し、人々は不安そうにしていた。

「警備マシンがこの島にいる善良な人々に牙を剥く事になる」

モニターを背にウォルフラムはバツと両手を広げる。

「そう。人質は…この島にいる全ての人間だ。当然、お前らもな」

嚴重な警備ロボットが仇となってしまう、島中のロボットが警戒モードへと切り替わり島の人々に威嚇し、今にも牙をむこうとしていた。

モニターを見ていたオールマイトがウォルフラムへと振り返ったその時、先手をせんとウォルフラムが耳に当てた通信機に向かって命令をする。

「やれ」

そう言った次の瞬間、床に埋め込まれていたセキュリティ用の捕縛装置が作動し、光ると同時に縄状のものが飛び出し、近くにいたプロヒーローだけを的確に捕縛していく。当然、オールマイトもだ。

「いかん!」

並のヒーローはともかく並外れの力を持つオールマイトなら引き千切ることもくらい容易い。だがその時、ウォルフラムは拳銃を突き上げいきなり発砲する。悲鳴が上がる中、ウォルフラムは威嚇するように口を動かした。

「動くな！一歩でも動けば即座に住民共を殺すぞ」

そう言つてウォルフラムはステージに上がりオールマイトに向けて拳銃を突き出した。

「Shit！」

会場のみの人質ならば即座に行動して敵、ワイランヤミー共々を捕らえることが出来た。だがこの島中が全員人質となれば話は別。ここで動いた所で外の人達に危害が及ぶのは間違いない。打つ手がなくなるオールマイトは悔しそうに歯を食い縛る。ウォルフラムはそんな哀れなオールマイトを見て肩を蹴り、その巨体は転がる。

「ぐっ！」

「いい子だ」

No. 1ヒーローが足元で何も出来ず悔しそうにする。そんな彼を見下ろしてウォルフラムは愉快そうにそう言うと言って口を動かした。

「全員オールマイトを見習つて無駄な抵抗はやめるんだな」

怒りに震えるオールマイトはなんとかしなければと思い、ふと、かつての相棒を見た。デヴィットもオールマイトを見ており視線に気付くと彼は小さく首を振る。

「トシ、ここは奴らに従うしかない…」

「(しかしデヴィヴ…!)」

「(私が必ず救ける方法を見つける。それまで耐えるんだ…)」

焦りと悔しさを顔に出すオールマイトにデヴィットは心配ないと小さく頷いていた。

☆☆☆☆☆☆

ロビーに閉じ込められ取り残された緑谷達は薄暗い中、不安な空気に包まれていた。

「携帯が圏外だ。情報関係が全て遮断されちゃったらしい」

電話を掛けていた轟が顔を上げてそう言う。「マジかよ…」と青ざめる峰田。その近くでエレベーターのボタンを押していた耳郎が振り返る。

「エレベーターも反応がないよー!」

「マジかよお!?」と更にビビる峰田。

すると、何か引つかかっていたのか後藤はメリッサに聞く。

「メリッサさん、ここの警備システムは爆発物が発見されただけでこ
うも簡単に警戒態勢になるものなんですか?」

「ううん、それだけでこんな大ごとになるのは有り得ないわ…。この
状況は私も初めて…」

メリッサも思い当たる節がないのかそう返答する。2人の発言に
火野、緑谷の嫌な予感深まる。牢獄タルタロス並みの警備システム
を誇るI・アイランド。その警備を潜り抜け、そう簡単に爆発物を仕
掛けられるのか?たとえそうだとしてもここまで警戒態勢になるの
かと違和感を抱く。

火野は同じく考え込む緑谷の顔を見て「緑谷君…」と言うと緑谷は
火野を見つめ、無言で小さく頷くと一歩前に出た。

「…飯田君、パーティー会場に行こう」

「何故だ?」と飯田は理由を尋ねる。

「会場にはオールマイトが来てるんだ」

もし、事が重大ならばオールマイトが何とかしている筈。現状を確
かめるべく緑谷は提案する。

「オールマイトが!?!」

「なんだ、それなら心配要らねーな!」

ホッと安心する麗日と峰田。続けて緑谷はメリッサに聞く。

「メリッサさん。どうにかパーティー会場まで行けませんか？」

「非常階段を使えば会場の近くに行けると思うけど」

メリッサが指を指す方向に重そうなドアがある。

確認した緑谷はメリッサに向き直ると真剣な眼差しと表情で口を動かした。

「案内お願いします！」

「分かったわ。みんな、着いてきて！」

了承するメリッサが先頭を歩き、緑谷達は後を追う。火野も行こうとした瞬間、先程から黙っているアंकが目に入り声を掛ける。

「アंक、どうした？」

「…まさか、奴も来ているのか…？」

「アंक？」

「おい、火野、アंक。何してる、置いてかれるぞ」

呟くアंकに火野は再度名を呼び声を掛ける。ふと、立ち止まっている2人を見て後藤はこちらに近づいてくるとアंकは火野に向かって注意を促した。

「おい映司、気合い入れておけ。何故か分からないが、この上の階……いや、このセントラルタワー全体の至る所にヤミーの気配がする。…それも今までにない程の数がなあ」

「えっ!？」

「何だと!？」

アंकの言葉に驚愕する火野と後藤。まさか脇真音優無がここにいるのかと火野の頭をよぎり、その顔は更に険しくなった。

レセプション会場では、人質となった客、拘束されたプロヒーロー達が座り込んでいた。全方向から銃を向けられ、更には今にも襲い掛かろうとせんヤミー達が唸り声を上げながら人々を睨み付けていた。「安心しろ。大人しくしていれば危害は加えない。時間が来れば解放する準備もある」

ウォルフラムが歩きながら言うのと1人のプロヒーローが拘束されている状態で身を乗り出し叫ぶ。

「貴様らの目的は何だ!?!」

すると、ウォルフラムはそのプロヒーローの顎を容赦なく足蹴する。「ぐはっ!」と倒れ込むヒーローに近くにいた女性客が悲鳴を上げた。ウォルフラムは見下すようにヒーローに向け口を動かす。

「聞こえなかったのか? 大人しくしている」

その時、ウォルフラムの通信機、部下からの連絡が入る。

「…ああ、そうか。…わかった」

そう言つて、周囲を見渡す。すると近くにいたサムが目に入り胸に止められていた社員のプレートに続けて目に入るとウォルフラムは口を開いた。

「お前、この研究者だな?」

「は、はい……!」

怯えるサム。ウォルフラムは部下の1人に「連れて行け」と命令する。

「い、一体何を……!?!」

「やめろ!」

慌てて飛び出すデヴィットにウォルフラムは視線を向ける。デヴィットは恐れながらも毅然とした態度で声を出す。

「彼は私の助手だ、どうするつもりだ!?!」

「ん?……デヴィット・シールドじゃねえか。お前も来い」

「断ったら……?」

「この島のどこかで誰かの悲鳴が響く事になる」

仮面の下に浮かぶ巨悪の笑みにデヴィットは息をのむ。

「……………わかった……………行こう」

承諾したデヴィットとサムは部下の1人に銃口を向けられ会場の外へと連れて行かれた。

「デイク……」

親友が連れて行かれるのを見てる事しか出来なかったオールマイトは己の不甲斐無さに、そして周囲にいる敵^{ライアン}達に腹を立てていた。オールマイトは考える。敵^{ライアン}を倒して警備システムを元に戻せるか。刻々と迫るマッスルフォームの制限時間までにいけるか。必死に考えるオールマイト。だが、困っている人がいる限り彼は立ち上がり笑ってみせる。平和の象徴としての役目を果たす為に。

オールマイトは拘束具を引き千切ろうと力を入れたその時、視界の隅に何か光ったような気がした。吹き抜け式の天井を見遣ると、そこにはスマホの画面の光を利用した緑谷が立っていたのだ。

「(緑谷少年!?)」

オールマイトが気付いたその天井のフロア。緑谷は隣にいた耳郎に合図を送る。

「オールマイトが気付いたっ。耳郎さんイケそう?」

「いいよー!」

耳郎の“個性”は索敵に優れ微細な音でも聴き取る事が出来る。耳郎の返事を聞いた緑谷はオールマイトに向かって「喋ってください!聞こえてます!」とジエスチャーをする。理解したオールマイトは敵^{ライアン}に気付かれないよう小声で話した。

「聞こえるか?敵^{ライアン}がタワーを占拠。姿は見えないが脇真音のヤミーも出現している。警備システムを掌握。この島の人々が全員人質に取られた。ヒーロー達も全員捕らわれている。危険だ。すぐにここから逃げなさい……!」

「っ!大変だよ緑谷!」

耳朶のプラグを戻しながら慌てた様子の耳郎は緑谷に報告した。

非常階段の踊り場で待機していた火野達は戻った緑谷の報告を聞いて現状の出来事に言葉を失う。少し沈黙が続いた後、飯田が先陣を切って物申した。

「オールマイトからのメッセージは受け取った。俺は、雄英高教師であるオールマイトの言葉に従い、ここから脱出する事を提案する！」それを聞いた八百万もその提案に賛同する。

「飯田さんの意見に賛同します。私達はまだ学生、ヒーロー免許も無いのに敵と戦うわけには…」

どこか悔しそうな表情の八百万に上鳴は困惑しつつも思いついた案を口にする。

「あ、なら脱出して外にいるヒーローに…」

「脱出は困難だと思う。ここは敵サイラン犯罪者を收容するタルタロスと同じレベルの防災設計で建てられているから」

メリッサがそう言うした後藤も飯田の意見に同意したのか口を挟む。「飯田の意見に俺も賛同だ。厳戒態勢であるうえにヤミーまでも出現している以上、下手な動きはやめた方が身の為。大人しく俺達は待機するべきだな」

「そ、そうだよな…」

メリッサと後藤の意見を聞いた上鳴は気落ちしながらそう言うと、耳郎が立ち上がった。

「上鳴、それでいいわけ？」

「どういう意味だよ？」

「救けに行こうとか思わないのっ？」

先程緑谷とレセプション会場を見てきた耳郎はヒーローを志す者として現場の状況に苛立ちを募らせていた。先程のオールマイトの声と共に不安で怖がる人達の声も聴こえたのだろう。

つまる上鳴に怯えていた峰田が声を上げる。

「おいおい、オールマイトまで敵サイランに捕まってるんだぞ?!オイラ達だけで

助けに行くなんて無理すぎだつての!」

その言葉を聞いて緑谷は顔を曇らせる。すると、轟が口を開いた。

「俺らはヒーローを目指してる」

「ですから、私達はまだヒーロー活動を…」

八百万が言い掛けるが轟は左手をグツと握りながら言った。

「だからって…何もしないでもいいのか?」

「それは……」

八百万も同じ雄英生、ヒーローを目指す者として出来る事なら救いたいと思っている。それは飯田も同じだ。委員長として最善の判断をしたが救いたい気持ちは彼も、そして後藤だって同じだった。沈黙し、葛藤する中、火野がポツリと呟く。

「…救きたい」

「……僕も」

緑谷も続けて呟くと全員の視線が2人に向く。麗日は「火野君、デク君?」と心配そうに声を掛ける。そして真剣な顔で考え込んでいた緑谷は顔を上げて口を開いた。

「救けに行きたい」

「敵と戦う気か!? ヤミーだっているんだろ!? USJで懲りてないのかよお前等!!」

怯える峰田が反論するが、緑谷は必死に言い分を口にした。

「違うよ峰田君、僕は考えてるんだ。敵と戦わずにオールマイト達を、皆を助ける方法を……!」

「フン、都合のいい話を。これだけ敵もヤミーもいるこのタワーで戦闘無しで救けるなんざ不可能に近いだろ」

必死に伝える緑谷の言葉を聞いた全員は驚く。その中、アंकは嫌味を言うように割入る。敵と戦わずに人質の人々を救けるなど普通出来る筈がない。ましてやあのオールマイトでさえも人質の側に入っているのだ。未来の卵と言われているとはいえまだ学生の身。口だけなら何とでも言えても実行に移さなければ意味がないのだ。

アंकに便乗して上鳴も戸惑うように言う。

「アंकの言う通りだぜ。そんな都合のいい事……」

「…でも、俺達は動ける」

ふと、火野が口を挟み、そのまま喋り出した。

「何もせずに助けを待っている間にもし人質の身に何かあればこれ後悔するだけだ…！だったら少しでも他のヒーロー達が動けるよう手を差し伸ばして助力したい！」

「火野…」

覚悟を決めた火野は揺るがないその気持ちをぶつけるように言い、耳郎はどこか安心するような目で火野を見つめていた。それに便乗して緑谷も口を動かす。

「火野君の言う通り。僕も、それでも探したいんだ。今の僕達にできる最善の方法を探して、皆を助けに行きたいっ」

火野と同様に一步も譲らないその熱意。何の見返りも求めず、人々を救いたいという一心が火野と緑谷を突き動かしているのだろう。その2人の姿がメリツサには小さなヒーローに見えた。

「デク君…」

緑谷と同じ想いで緑谷を見つめる麗日。その後ろでメリツサが口を開いた。

「I・アイランドの警備システムは、このタワーの最上階にあるわ」

その言葉に皆から注目を浴び、メリツサは続けて口を動かした。

「敵がシステムを掌握しているなら、認証プロトコトやパスワードは解除されているはず。私達にもシステムの再変更ができる。敵とヤミーって怪物の監視を逃れ、最上階まで行く事ができれば…皆を助けられるかもしれない！」

メリツサが話す情報によって道筋が見えてきた。彼女も覚悟を決めていたようだ。

「メリツサさん…」

「監視を逃れる…。相手はプロのテロかもしれないですよ？」

希望の光が見えたように緑谷は呟く。ふと、後藤が質問をする。手がそれなりの腕を持つ集団なら監視を逃れるなど容易ではない筈。だがメリツサは辺りを見渡して口を開く。

「現時点で私達に実害はないわ。敵達は警備システムの扱いに慣れ

てないと思う」

「…確かに」

「戦いを回避してシステムを元に戻す、か。成る程…」

言われてみればと後藤は頷き、意見を述べた3人の考察をまとめ、現時点での最善策に轟は納得する。その隣で八百万も考え込んでいた。

「それならイケんじゃね!？」

「だよね!」

可能性を感じた上鳴と耳郎が頷くと急激に変わっていく流れを見て峰田が震え上がる。

「しかし、最上階には敵が待ち構えていますわ…。ヤミーもいるのでしたらいつ襲ってくるのかも分かりませんし…」

どうにか作戦を成功させようと考えていた八百万が愚痴をこぼす。すると、緑谷が声を掛けた。

「戦う必要はないんだ」

その言葉に全員の注目が集まる。

「火野君が言ってたけど、システムを元に戻せば、人質やオールマイト達が解放される。そうなれば、状況は一気に逆転するはず…!」

「緑谷君…」

「……」

自分の意見に賛同してくれた緑谷に火野は少しだけ笑顔を見せる。そしてその強い眼差しの中の彼の横顔を飯田は見ていた。その時、麗日がバツと立ち上がる。

「デク君!行こう!!」

「麗日さん!」

「私達にできる事があるのに何もしていないのは嫌だ!そんなの、ヒーローになるなら前問題だと思っ!」

麗日の心強い言葉に緑谷は火野と顔を見合わせて笑顔で立ち上がる。

「うん!困っている人達を助けよう!人として当たり前前の事をしよう!」

「おう！」

「よしっ！後藤さん、アंक！」

緑谷と麗日が拳を握り、やる気を見せる。火野も同じく強く頷く。そして端の方でこちら側を見ていた後藤とアंकにも賛同をもらおうと声を掛ける。

「…つたく。ヒーローを目指すとは言え俺達はまだ学生の身分だ。大人しく待った方が懸命…だと思っていたが、メリツサさんの説明を聞いて俺達でも何とかなるかもしれない可能性が出てきたな…。戦闘を極力避けるなら俺も協力する」

「フン、相変わらずお堅い頭をしているなお前は。敵はともかく人ではないヤミー相手なら戦闘になろうと問題ないだろ」

「お前俺の発言を聞いてなかったのか？…まあ…このタワーのどこかで敵とぶつかるかもしれない。戦闘はあくまで最終手段、そして正当防衛としてだ」

「あ？…フン。俺は人助けなんざ更々興味がない。だが敵にヤミーがいれば話は別だ。メダルを稼げるチャンスになるからなあ。そのついでにお前等と一緒に行ってやる」

どのみち敵とヤミーがうじゃうじゃといるこのタワー内で遭遇する可能性は極めて高い。後藤の言う通り戦闘はあくまで最終手段。2人の同意を聞いた火野は笑顔を見せると轟と耳郎が一步近づいてきた。

「緑谷、火野。俺も行くよ」

「ウチもっ」

「響香ちゃん…！」

「轟君…！」

「轟君…耳郎さん…ありがとう！」

笑顔になる火野、緑谷、麗日に飯田は毅然となる態度で言った。

「これ以上無理だと判断したら引き返す。その条件が飲めるなら、俺も行こう」

「飯田君！」

覚悟を決めた眼差しに緑谷は喜ぶ。

「そう言う事であれば、私も」

「よっしゃ！俺も！」

「八百万さん！」

「上鳴君！」

八百万も納得して頷くと無駄にカッコつけながら上鳴も承諾する。そんな中、嫌な流れに峰田は狼狽えていた。だが、その希望になろうとする大きな流れには逆らえなかった。今怖いと言い逃れていては、男として名が廃るからだ。

「あーもー！わかったよ！行けばいいんだろ行けばア!!」

やけになり泣き叫ぶ峰田に緑谷、火野、麗日、上鳴が声を掛ける。

「ありがとう峰田君！」

「カッコいいよ峰田君！」

「頑張ろう峰田君！」

「一丁やってやろうぜ峰田！」

そんなみんなを笑顔で見っていたメリッサに緑谷が近づく。

「メリッサさんはここで待っていて下さい」

「私も行くわ！」

「で、でも…メリッサさんには『個性』が…」

「この中に警備システムの設定変更ができる人いる？」

「あ…」

きつぱりと一番大事な役目を言うメリッサに上鳴が声を漏らす。顔を見合わせるみんなに向かいメリッサは一步踏み出した。

「私はアカデミーの学生、役に立てると思う！」

「でも…」

メリッサが『無個性』だと知っていた緑谷は止めようとする。だがメリッサは自分を奮い立たせようと胸に拳を作る。

「最上階に行くまでは足手まといにしかならないけど…私にも、皆を守らせて。お願い！」

自分にしか出来ないことがあるのなら、メリッサは危険も、迷惑をかけてしまうかもしれないと思いつつもそれらを全て胸に想い、確信して頼み込む。その表情を見た緑谷は強く頷いた。

「…わかりました。行きましよう、皆を助けに！」

真剣な緑谷の後ろでみんなが頷く。アंकも鼻を鳴らして彼なりの相槌を見せる。全員の笑顔にメリツサは「…ええ！」と答えたのだった。

No. 72 雄英生徒達、出動!

警備システム奪還を決行した火野達は非常階段の近くで待機していた。緑谷がオールマイトに助けに行くと伝えに行っている間、火野はアंकに声を掛ける。

「アंक、ヤミーの場所は把握出来る?」

「あ?正確な場所までは無理だ。近づけばその付近にいるってのは分かるが」

「なら、今のところ反応がないのなら近くにヤミーはいないな」

お前なら分かるだろと言わんばかりに呆れた様子で答えるが前世の記憶がない事をうっかり忘れていたアंकは腑に落ちない表情でそっぽを向く。平然というアंकを見て後藤は推測していると、緑谷が戻ってきた。オールマイトに伝えたと、皆に向かって頷く。それを確認した飯田が皆を見渡しながら口を開いた。

「行くぞー!」

「「「「おう!」」」」

この場にいる者達の作戦開始の狼煙が密かに上がった。

☆☆☆☆☆☆

デヴィットとサムが連れてこられたのは、セントラルタワーの最上階にある管理室だった。中には4人の敵と数体のヤミーサイランがいて、そのうちの変わった形の眼鏡をかけた男が黙々とコントロールドパネルを操作していた。

「連れて来てやったぜ」

デヴィット達を連れてきた敵^{サイラン} “ソキル” がそう言うと、眼鏡の男は振り返りもせず「早く保管室の解除を」と言う。言われたソキルは「偉そうに…」と苛立ちながらマスクを外し、“個性”で腕を刃物に変化させデヴィットに刃を向ける。

「だよ。死にたくなければ急いでやんな」

脅されたデヴィットは冷静に「わ、わかった…」と頷く。サムは不安げな顔をのまま黙っている中、ソキルは他の敵に^{サイラン}「連れて行け」と命令する。

「出る」

言われた敵の1人が^{サイラン}デヴィットとサムにライフルを突きつけ命令すると2人は言う通りに管理室を出て行った。

☆☆☆☆

その頃、緑谷達は非常階段を駆け上がった。各フロアが閉ざされた以上、ここが唯一の最上階への道なのだ。

「これで30階…」

一同を率いる飯田は階段の階数の表示を見て一旦足を止める。その後が続いた緑谷は最後に着いてきたメリツサに振り返り声を掛ける。

「メリツサさん最上階はっ？」

「ハッ……ハッ……200階よっ…」

苦しそうに息切れをするメリツサが答えたその言葉に上鳴は顔を顰める。

「マヂか…!?!」

「そんなに昇るのかよ!?!」

気が遠くなる程の階数にげんなりする上鳴と峰田に八百万が反省

を促すように言った。

「敵とヤミーに出くわすよりマシですわ！」

八百万の言う通り、これが今での最善の近道。だが、その八百万の言葉を嫌味つたらしくアंकクが鼻を鳴らす。

「フン、面倒だなあ。この壁ブチ破って外から飛んで行った方が早いだろ」

「馬鹿か。今の状況を考えろ。壁壊した瞬間に敵サイランに見つかるのがオチだ」

オーズの力を使えば飛んで行けば事は早く済む。だが壁を壊した瞬間に警報が鳴り敵サイランやヤミーが襲い掛かってくるのは当然当たり前。何の勝算もなく言うアंकクに後藤が嗜めるとアंकクは舌打ちをする。すると、その体は発光し、火野の体の中へと入って行ったのだ。いきなり入ってくるアंकクに火野は声を上げる。

「うわっ!?おいアंकク!」

「(地道に階段を昇るのはお前等だけにしとけ)」

「お前も走れよっ!」

「(馬鹿が。こんな大人数で駆け上がるより人数減った方が走りやすいだろ。心配なくとも、ヤミーと出会したら出て来てやる)」

言われてみれば、人数が多い状態で駆け上がるよりも1人でも減れば走りやすい。アंकクなりの考慮なのか一理あると思った火野は「そうだけでも…」と言って顔を顰めていた。

再び、どこまでも続いてそうな階段を駆けていく。50階を過ぎたあたりで麗日は後ろから足音が小さくなつていくのに気付いて振り返る。一番後ろを走っていたメリツサが疲れて立ち止まっていた。

日々ヒーローを目指す為鍛錬をする雄英生とは比べメリツサが励む場所は頭を使う研究がメイン。体力面はどうしても差が出てしまうのだらう。

「メリツサさんウチの『個性』使おうかつ?」

浮かばだいたいぶ楽になると麗日は提案を持ち掛ける。メリツサは息切れを起こしながらも笑ってみせた。

「ありがとう…でも大丈夫!その力はいざという時にとっておいて

！」

メリッサはそう言ってハイヒールを脱ぎ捨てて駆け出す。

60、70と駆け抜け、80階に到着したその時、先頭を走っていた飯田がハッと立ち止まる。

「シャッターが！」

目指す階段の途中でシャッターが下りていた。続々とやってきた緑谷達は息を整えながら立ち止まる。

「どうする？壊すか？」

轟は腕を上げながら言うど追いついてきたメリッサが口を動かす。

「そんな事したら、警備システムが反応して敵に気付かれるわっ」

「困ったなあ……！」

行先が通れず顔を曇らせた火野が呟き、皆んなもどうしたものかと考えている中、すでにへ口へ口になっていた峰田が反対側にあるドアに気付く。

「ならこっちから行けばいいんじゃないの……」

見るからにどうやらフロアへと続く非常ドアだ。峰田はハンドルに手を伸ばしたのを見た緑谷がギョツとする。

「…峰田君!!」

「おい！やめろ！」

「ダメ！」

慌てて止めようとする後藤とメリッサも間に合わず、峰田はハンドルを引いてしまった。

☆☆☆☆☆☆

管理室に警告のブザー音が鳴り響き、ソキルは何事かと、パネルを操作していた眼鏡の男に近づく。

「なんだ？」

「80階の扉が開いた？」

眼鏡の男が疑わしそうに答える。

「お前、各フロアのスキヤニングミスったのかよ!？」

吹かしていたタバコを下ろしたソキルは先程の態度のお返しと言わんばかりに眼鏡の男をせめる。眼鏡の男は舌打ちをし、パネルを操作した。するとモニター画面には80階の監視カメラの映像が映し出され、廊下を駆けていく緑谷達の姿が目撃される。

そしてレセプション会場、早速連絡を受けたウォルフラムが状況を聞くと冷静に指示を出す。

「80階の隔壁を全て降ろせ。餓鬼共を逃がすな」

「了解」

緑谷達を捕らえに手下の細長の男とチビの男の2人が会場を出て行くのを見ていたオールマイトは咳き込みながらも、少年少女達の無事を祈る。

「(気をつける…、みんな。サイン 敵は狡猾だぞ)」

☆☆☆☆

「他に上に行く方法はっ?」

非常ドアを開けたせいで敵にサイン気付かれた可能性が高い。走りながら轟は問うとメリツサが答える。

「反対側に同じ構造の非常階段があるわ!」

「急ぐぞ!」

飯田が速度を上げ駆け出したその時、行手の通路の隔壁が奥から次々と下りて閉じられていく。

「シャッターが!」

「くそ!」

驚く緑谷、後藤は啖呵を切る。すると八百万がハッと振り返る。

「後ろもですわー！」

後方もシャッターが下される。連中はこの場にいる者を閉じ込めようとしてきたのだ。どうすればと焦る火野。その中、隔壁で塞がれる隙間に何処かへと繋がる扉が見えた。

「っ！あそこー！」

「わかってるー！」

同じく気付いたのか轟は頷き足元から氷結を繰り出す。閉じる寸前の隔壁を止める事ができた。

「よし、今ならー！」

「くそ、もう派手にやっても問題ないな…！」

飯田と後藤も気付き、飯田は脹脛のエンジンで隔壁の隙間を飛び越え加速する。後藤も飛び越えバースタターを構えると隔壁に向けてエネルギー弾を2発放つ。風穴が空いたように扉は破壊されると続けて、飯田は銃弾で脆くなった箇所を勢いで、威力が増した蹴りを扉に当てて破壊した。

「この中を突っ切ろう！」

飯田を先頭に急いで扉の中へと入り込む。そして一同はその景色を見て驚いた。様々な植物がその広い内部を埋め尽くしていた。火野は驚き、同じように驚きながら緑谷はメリッサに声を掛けた。

「何だここ…：すつご…：！」

「こ、ここは…！？」

「植物プラントよ！ “個性” の影響を受けた植物を研究…！」

「待ってー！」

バツと耳郎がみんなの前に駆け出し止める。耳郎の視線の先にこのエリアの中央部に見えるエレベーターが見えると耳郎は指を指した。

「あれ見て！エレベーターが上がってきてるー！」

表示されている階数を示す数字がどんどん上がって、ここ80階に近づいてきていた。

「敵が追って来たんじゃ…！？」
ウイラン

恐れる峰田の隣で緑谷は皆に声を掛ける。

「隠れてやり過ぎそう！」

「うん！あそこなら全員大丈夫そう！」

火野が指を指す茂みに全員が移動して身を潜める。隠れている最中、上鳴はエレベーターを見て眩いた。

「あのエレベーター使つて最上階まで行けねえかな…？」

「無理よつ。エレベーターは認証を受けてる人しか操作できないし、シエルター並みに頑丈に作られているから破壊もできないつ」

「使わせろよ文明の利器…！」

メリッサの言葉に悔しさ故か体を震わせる峰田。その時、ポーンと音が鳴りこの階にエレベーターが止まったのを全員が知り、驚く。

「ひっ！」と峰田は体を縮こませる。

二重になっている扉は上下、左右へと開かれると中から細長の男とチビ男の敵サイランが出て来た。目視出来るかぎりやってきたのは人間2人のみ。アंकも反応がないということはヤミーを連れてきてないようだ。緑谷は2人を見てハツと小声で叫ぶ。

「っ！あの服装、会場にいた敵だ！」サイラン

辺りを見回すチビ男は口を動かす。

「ガキはこの中にいるらしい」

「面倒なところに入りやがって…」

細長の男が苛立ちながら答えると2人の足は徐々に茂みに隠れている火野達の方へとやってくる。

「っ！ち来る!？」

思わず声を漏らす麗日に飯田は「静かに」と制す。緊張が走る中、耳郎と八百万は必死に「あつちへ行け」と言わんばかりに願う素振りを見せる。火野も緊張しながらもゆっくりとオーズドライバーを取り出す。もし見つけた時はせめて足止めをと考えていた。

「見つけたぞ、クソガキ共！」

その時、投げかけられた声に全員が固まる。

やるしかないかと火野はドライバーを腰に宛い装着した瞬間、予想外な声が聞こえる。

「ああ!?今何つったためえ！」

「!?」

初対面だろうと怒鳴るその声に聞き間違いとかレベルではない。緑谷達は慌てて茂みの中から向こうへと顔を覗く。そこにいたのは敵とは知らずにガン飛ばす正装姿の爆豪とここに来てはいけな^{サイラン}いと思っただのか顔を顰める、同じく正装姿の切島だった。

(爆豪君:!?切島君!?)

「お前等、ここで何をしている?」

「そんなの俺が聞きてえくらい」

「ここは俺に任せろ!な!」

チビの男に突つかかろうとする爆豪を慌てて押さえ、申し訳なさそうな笑顔を浮かべた切島は敵^{サイラン}達へと近づく。

「あの一、俺ら道に迷ってしまつて:レセプション会場つてどこに行けば:??」

予想外の展開と事態に戸惑う火野達。峰田が怯えながらツッコんだ。

「道に迷つて何で80階に来るんだよ:!?」

切島の言い分はこの事態で更に悪化しており、当然敵^{サイラン}達に信じてもらえるわけがない。苛立った細長の男の右手袋が破れ、巨大化する。

「見え透いた嘘つくんじゃねえぞ!!」

「っ!? “個性”を!」

^{サイラン}敵の突然の攻撃に爆豪は飛び出す。

「切島君!!」

「切島く:~!」

思わず火野と緑谷は立ち上がる。

まさか攻撃されるとは微塵も思つてなかつた切島は啞然とするしかなかつた。だが、その攻撃の波動が切島に当たろうとした直後、巨大な氷の壁がそれを防ぐ。現れた氷壁に思わず尻もちをつく切島に爆豪が駆けつけ口を開いた。

「この“個性”は:~!」

「轟!」

冷気の向こうに氷結を繰り出した轟を見て切島は驚く。その時、ズン…と氷壁の奥から壊すような音が聞こえ「チツ」と轟は舌打ちをする。

「俺達で時間を稼ぐ、上に行く道を探せ！」

火野達に言いながらしやがみ込み、右手を地面へと当てる。瞬く間に広がった氷結は火野達の足元へと広がると氷柱となって上へと持ち上げられていく。

「轟君!?!」

「君は!?!」

叫ぶ緑谷と飯田に轟も声を上げる。

「いいから行け！」

「轟君っ！」

「轟さん！」

火野と八百万も声を上げると心配させまいと轟は言った。

「ここを片付けたらすぐに追いかける！」

「…わかった！」

「…はいっ！」

迷わないその返事に火野と八百万は強く頷く。すると、他のクラスメイト達を見た切島が轟の元へと駆け寄った。

「皆をここに…? どういう事だよ轟!?!」

「放送聞いてないのか? このタワーが敵に占拠された」ワイラン

「ええ!?!」

「んだと…!?!」

簡潔に告げた轟に切島と爆豪は驚き、その顔に緊張が走る。

「詳しい説明は後だ。今は敵を…」ワイラン

植物プラント最上部まで氷柱を持ち上げると緑谷達は横にある通路へと飛び移る。それを確認した轟はそう言いながら立ち上がる直後、氷壁が拳大の大きさ程次々と抉り取られるように穴が開いていく。どうやら細長の男の「個性」らしく、チビの男と共に氷壁から姿を現した。

「何だあの「個性」…!」

轟達が戦闘態勢に入るよう身構えると爆豪が言った。

「油断すんなよ」

「うっせ！わーっとなるわ！」

轟の促す注意を叫び除ける爆豪。するとチビの男がまるで野性を解放するような雄叫びをする。

「ガキ共が…つけ上がってんじゃねえぞオオ!!」

するとチビ男の体の色が変わると同時に大きくなり獣のような姿へと変貌した。轟は舌打ちをしながら氷結の先制攻撃を繰り返す。だが男は氷壁をその剛腕で砕き、雄叫びを荒げながら轟達へと突進してくる。その振りかざした拳を轟と切島は避け、爆豪も爆破で宙へと回避する。そしてすかさず爆豪は爆破の勢いで急降下すると、無防備な背中へとそれを打ち込み爆破させた。

「死ねええ!!」

直撃した爆発のダメージが大きいのか男は痛そうに声を荒げる。だが、男はすぐに爆煙を退けて着地した爆豪へと襲い掛かった。

「爆豪!!」

助けまいと切島が爆豪を突き飛ばし、自身を硬化して男の拳を真正面から受け止める。だが、その威力は大きかったのか火花を散らしながら切島は吹き飛ばされ植物プラントの壁へと激突した。

「ガあああ!?!」

「切島あ!!」

「避けるー!」

思わず名を叫んだ爆豪が、轟の声に気付き、爆破で宙へと逃げる。

「キエエエ!!」

直後、細長の男が発狂しながら攻撃を仕掛けて来る。間一髪で避けた所に空間ごと空けられたように丸く穴が空いた。直様轟が敵へと氷結攻撃を仕掛ける。

「キアアアア!!」

だが敵は怯む事なく大きい手を振るい氷結を次々と穴を空ける。

着地した爆豪と飛び退く轟が両者背中合わせとなった。それぞれの前方には敵が立ちはだかる。

「お前ら、ただのガキじゃねえな？」

「何者だっ!？」

「答えるか!このクソ 敵が!!」

「名乗る程の者じゃねえ」

敵の質問に爆豪と轟はそう言つて身構えた。

☆☆☆☆☆☆

植物プラント上部の通路の扉を破壊して火野達が出て来る。だがここも隔壁によつて閉ざされていた。

「くっ……こつちもダメか!」

「おいおいどうすんだよ……!オイラ達完全に袋の鼠じゃねえか……!？」
「ここまでかよ!」

焦る飯田に峰田と上鳴が弱音を吐く。他の皆もどこかに通路がないかと必死に探す。轟が繋いでくれた道標をここで途絶えるわけにはいかない。そう思った火野は、一か八かで壁を破壊できないかと考えていたその後藤が何かを見つけたのか天井を見て声を掛ける。

「おいっ。アレは……ハッチか?」

「……本当だ。メリッサさんあれは……?」

後藤と緑谷が指差す先にはプラント内の天井の片隅にある小さなハッチだった。

「日照システムのメンテナンスルーム……!」

「!あの構造なら非常用の梯があるのでは!？」

メリッサの言葉に飯田は提案するとメリッサは小さく首を振る。

「確かに手動式があるけど、中からしか開ける事はできない……!」

残念そうに俯くメリッサ。麗日が「ここまで来たのに……!」と悔しそうに拳を握る。峰田も絶望しかける中、ジツと外周通路の天井を見

ていた後藤に八百万が声を掛けた。

「後藤さん、気付きましたの?」

「ああ、まだ可能性はあるみたいだ」

頷く後藤はバースバスターを取り出してハッチに標準を向けるとエネルギー弾を放ち直撃すると蓋ごと外すされる。中の狭いダクトが僅かに見えた。

「通風口の隙間から外に出て、外壁を伝って上の階に…」

「そうか、上にも同じものがあれば…」

「中に入れるわ!」

八百万の言葉に麗日とメリツサと耳郎が嬉しそうに顔を見合わせる。

「凄い後藤さん!よく思いついたね!」

「……考えればすぐに分かるだろ」

近づく火野に後藤はぶっきらぼうな態度で答える。ふと、緑谷がブツブツと言いながら考え始めていた。

「狭い通風口に入って、外壁を登っていくには…」

小さく、壁を登れる人物。火野はハツと思いつく。どうやら全員も同じらしく一斉に峰田へと振り返った。

「え?」

自分を振り返るメンバー全員に、峰田はビクツと反応した。嫌な予感しかしない峰田は後ずさる。

「も、もしかしてオイラが!」

「お願い峰田くん!」

「アンタにしか出来ないんだよ!」

麗日、耳郎が頼み込む。女子2人をお願い事をされるなど普段の峰田なら喜ぶシチュエーションだが状況が状況なのでそうもいかないようだ。

「バカバカ!ここ何階だと思ってるんだ!」

全力で拒否しようとする峰田。ここは80階。そして命綱など無し。その状態で壁を登れと言われているのだ、無理もない。そんな峰田に上鳴がサツと近づき肩を抱いた。

「皆を助けた功労者になったら、インタビュートかされたりして女子に大人気間違いなしだぞ！」

上鳴は親指を立てると麗日と耳郎も真剣な様子で峰田に近づいた。

「お願い！」

「ハーレム、ハーレムっ」

上鳴の囁きが峰田の脳内に押し寄せる。非常事態でこそ、悪魔の誘いと言うものは逆らえないものだ。そして峰田は泣きじやくりながら叫ぶ。

「…わーっつたよ！行けばいいんだろ行けばああ!!」

「おお、さすが峰田君！」

「見返り求める程、人の性格がよく出るな」

峰田を見て火野は感心する隣で後藤も別の意味で感心していたのだった。

☆☆☆☆

風が吹き荒ぶタワーの外壁に出た峰田は「個性」のもぎもぎを使用してほぼやけくそで壁を登って行く。外はもう夜で当たりは暗い。だが、その暗さが今の彼を隠すような暗さで返ってそれが良かったのかもしれない。

「ハーレムツ、ハーレムツ、ハーレムツ……ふう」

峰田にとっての魔法の言葉を糧によじ登る。だが階段を駆け上がった疲労もあつたのか途中で止まる。気が抜けそうになったのかズズっと下がってしまい、峰田は我に返り死ぬ気で登り出した。

「ハーレムー！ハーレムー！ハーレムー……ふう」

またしても止まる。目的地点まで気が遠くなる高さだが、何せ落ちたら死ぬ。そうになったらハーレムどころではない。

「ハーレム!!ハーレム!!ハーレム!!」

峰田の脳内は性欲と死を繰り返しながら登る。そしてなんとかメンテナンスルームへとたどり着いた。

「やったぞー！オイラはやったぞー!!」

執念により見事に登りきった。これでPuls Ultra。命懸けで降ろした梯に皆は無事メンテナンスルームへと上がることが出来た。

「さあさあさあ！オイラを褒め称えよ！女子だけでいいぞ、女子だけで！」

徐々に上がって来る皆を迎えながら天狗となる峰田。すると最後上がったってきたメリツサが、ニコリと微笑みながら口を動かした。

「凄いわ峰田くん！さすがヒーロー候補生ね！」

「ワア…」

素直に褒められる峰田は感動のあまり情けない声を漏らす。そして峰田は湧き上がる気持ちのまま皆に向かって声を上げた。

「お前ら！気合入れて行くぞー!!」

「「「おー!!」」」

☆☆☆☆☆☆

最上階の管理室では、異常事態に眼鏡の男が映像を探っていた。

「おい、まだ見つからねえのか!?!」

苛立つソキル。ふと、緑谷達が映る映像が目撃されるがその中で振り返った耳郎は耳朶のプラグをモニターに向かって伸ばす。次の瞬間には映像が消えて画面は真っ暗になっていた。

「クソー」とソキルは苛立つて壁を叩く。

その時、待機していた敵の1人が背もたれしていた壁から起き上が

り、通信機でウォルフラムに通信を入れ始めた。

☆☆☆☆

レセプション会場、連絡を受けたウォルフラムは頷くと、待機していたヤミー達へと指示を出した。

「……そうか、わかった。この場にいるヤミー共！ “オルカ” の元、100階フロアへ移動しろ！」

「「キシヤアア!!」」

ウォルフラムが手を広げ指示を出すとヤミー達は理解したのか一斉に奇声を上げ、客の悲鳴が響き渡りながら会場の外へと姿を消して行った。

全てのヤミーが姿を消すとオールマイトは気掛かりだった事をウォルフラムに問い掛ける。

「あのヤミーは一体!？」

「ほう? ヤミーを知っているのか? アレは日本からの贈り物でな。今回も、そして今後の俺の駒として使わせてもらう! 話は終わりだ」

そう言ったウォルフラムは再び黙して会場を見回す。ウォルフラムの言う事が本当だとすれば、どうやら脇真音自体はここには来ていないようだ。

「……くっ!」

だが、あの数が今緑谷達がいる場所に向かわせたのならあの子達に危険が迫る。動けずにいたオールマイトはただ、ただ情けないと悔しがっていた。

☆☆☆☆☆☆

その頃、緑谷達はちょうど100階フロアへと到達する。階数の表示を見て峰田は「やつと半分…」と肩を落としてそう言っている中、飯田は通路の向こう側に見える階段と、その隣にある扉を見て疑問を抱くように口を開いた。

「妙だな…シャッターが閉じられていない」

彼の言う通り、行く道を阻む通路の隔壁が下りてないのだ。不安に思う一同だが「すんなり通れてラッキーじゃね!」と楽観的に上鳴は言う。

「いや…むしろ逆に不安だよ…」

「うん、俺もそう思う」

険しい表情で緑谷の言葉に火野も同感し頷く。

「とりあえず、警戒を怠らず先を急ごう」と飯田が先陣をきって皆に言うのと全員は駆け出す。だが、そのフロアの扉を通り過ぎようとしたその時、火野の中から人型のアंकが飛び出した。

「うおっと!?何だよアंक、出てくるなら言ってからー」

「映司、この中にヤミーがいる」

「!?!?!」

突然のアंकの呼び掛けに火野を入れて全員が立ち止まり驚愕する。何人かは腰を低くして臨戦態勢に入る者もいた。

「ここまで来てあの怪人共が相手かよお…!?!」

「でも…様子が変だ…」

先程の威勢は消えて怯え出す峰田。だが同時に緑谷は不穏な空気が漂うその扉を見て疑問に思っていた。すると、飯田が答えるように口を開く。

「確かに、通路の先には待ち構えておらず、何故この中にヤミーがいるのだ…?」

「メリツサさん、向こうの階段からは最上階に行けるんですか?」

「え、ええ。問題ないわ…この部屋はヒーローアイテムの実地試験を

行う救助用のテストルームなの…。上に行くエレベーターはあるけど、その他の階段はあそこの階段でしか行けない」

麗日の問いにメリッサは顔を曇らせながら答える。なら、何故わざわざこの部屋に待機しているのか？上に行かせない為ならこの通路で待ち構えててもおかしくはないはずだ。火野は考えながらもその部屋の状況を確かめるべくアंकに声を掛ける。

「アंक、この中にヤミーはどれくらいいるんだ？」

「かなりの数だ、こいつは稼げれそうだなあ」

緊迫する空気の中、アंकだけは扉の向こう側にいるセルメダルセルメダルにしか目が行っておらず、増してやまるで鳥が獲物を狩るような目をしていた。すると、バースバスターに弾であるセルメダルを装填し直した後藤がメリッサに声を掛けた。

「メリッサさん、恐らくこの中にいるヤミー達は足止め要因だと思います。ここで全員階段を目指してしまえば奴らは追ってくる…」

それを聞いたメリッサ、他の全員表情が強張る。理解した八百万が恐る恐る口を開いた。

「つまり…手薄だと向こうもこちらも分かってる上で、こちら側の誰かが残って囷になると…?!」

「そんな…」

麗日は戸惑う。だがここで残らなければ全員がやられる可能性が高い。敵の思惑サイランに乗らなければいけないということになる状況に「クソ！」と飯田は悪態を吐く。すると、火野が拳手をした。

「俺が残るよ」

率直に受けている火野にメリッサ、クラスメイト達は驚く。火野は続けて口を動かした。

「ここは敵の思惑サイランに乗るしかない。ヤミーがいるなら、尚更俺とアंकが残った方が適任だと思っただ」

「火野君…いや、僕が残…」

「緑谷君は！メリッサさん達と最上階目指して」

緑谷の言葉に火野は割入る。覚悟を決めたその目に緑谷は言葉を失う。だが、その力強い瞳にどこか安心できるような気がしたのか緑

谷は重々しく受け止めた。

「……………わかった…！」

「緑谷君！…なら、俺も残ろう！」

了承した緑谷に飯田が割り入り自らも囷になろうと挙手するが、それを後藤が止めた。

「おい委員長。お前の『個性』はこの先で役に立つ筈だ。敵に見つサイランかった以上、戦闘は避けられない。ここは俺が残る」

「後藤さん…！」

「だ、だったらウチも残る！」

後藤は火野の隣に立つと耳郎までもが残ろうと挙手する。すると、アंकは面倒臭そうに苛立ち始める。その瞬間だった。

「チッ！めんどうだなあ！」

アंकは強く舌打ちをしてそう言う。火野と後藤の首根っこを引っ張り、扉の目の前へと寄せると、緑谷達が居る足元の目の前に向かってアंकはグリード化した右腕を勢いよく横に振る。瞬間、炎が燃え上がり、火野達と緑谷達の立つ目の前に横に広がる火の壁ができ、近寄れない程燃え上がった。

「っ！何を…!？」

「っ!アंक！」

「ハッ！これなら問題ないだろ！お前ら、時間がないならとつと先へ急ぎやがれ！」

後藤と火野が咄嗟の行動に驚く中、アंकは緑谷達に声を上げる。ここで口論しては時間の無駄だと思っただろう。先を急げと喝を入れられた緑谷は燃え盛る火壁越しに火野達に声を上げた。

「火野君！後藤君！アंक君！後で、必ず合流しよう！」

「くっ…！3人共！絶対無茶するんじゃないぞ!!皆！友の行為を無駄にしてはならない！先を急ぐぞ！」

飯田も割り切り、皆に言い渡すと他の仲間達は現実の状況を思い出して強く頷く。

「火野！あとバースの人！絶対追いつけよ！」

「必ず合流しましょう！」

「火野お！オーズのお前なら楽勝だろ！」

上鳴、八百万、峰田と言い残し緑谷達は次々と通路を走り去って行った。その中、最後を走ろうと背を向ける耳郎が立ち止まり、火野達に振り返る。

「火野……！死なないですよ……！」

「耳郎さん……、うん、大丈夫！だから行って！」

強く願うその言葉に火野も強く頷くと耳郎は「うん！」と返事して緑谷達の後を追った。見送った後、残った3人の1人、後藤がバースバスターを構えたまま先陣をきつて勢いよく扉を開ける。

そして、目の前の光景に火野と後藤、アंकまでもが驚愕した。

「キシヤアア!!」

「ケケケ!!」

「ガアアア!!」

ただっ広く広がる空間を半分が埋め尽くさんとヤミーが有象無象と待ち構えていた。その数の多さに思わず後藤は怯んで後ずさってしまう。その中、奥の壁の上にこのテストルームを見渡せれる足場に敵が1人、^{ヴィラン}「オルカ」が悠々とした姿で立っていた。

「ほお。俺の予想だと全員階段を指すと思っていたのだが、賢いガキ共もいたのか」

「生憎だったな。そんな子供みたいな手口が俺達に通用すると思ったか?」

「お前、このヤミー共をどうやって従えてる!」

嘲笑うオルカに後藤が言い返すとアंकがヤミーらを見ながらキレ気味に問い掛けるとオルカは少し驚いた様子で口を動かした。

「ヤミーは日本の敵^{ヴィラン}連合から送られたんだ。見かけによらずかなり忠実で驚いたよ。駒はこうでなくちゃあね……」

オルカの言葉にアंकは鼻を鳴らすとタトバのコアメダルを取り出して少し残念そうに口を開いた。

「何だ、脇真音の連中がいらないのか。コアメダルを奪えるチャンスかと思っただが、仕方ない。さっさとメダルを稼ぐぞ」

「いや、寧ろいなくてよかったよ」

有象無象にいるヤミーから目を逸らさずに火野は言うのと、アंकは「映司!」と叫んでコアメダルを投げる。それが合図と知って火野は振り返ってコアメダルを3枚受け取る。その隣で後藤もバースドレイバーを取り出し、腰に装着した。

「火野、かなりの数だ。気を抜くなよ」

「はい!後藤さんも無茶しないでください!」

お互いが覚悟を決めてそれぞれのドライバーにコアメダル、セルメダルと嵌め込む。火野はオースキャナーを取り出すと待機音が鳴り、後藤もバースドレイバーから鳴る待機音と重なった。入り違う音が合わさり協和音となってテストルームに響き渡る。そして、火野はオースキャナーでスキャン、後藤はダイヤルのグラップアクセラレーターを回した。

「変身!」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ!タトバタ・ト・バ!

《カポーン…》

それぞれの変身シークエンスが完了し、火野はオース、後藤はバースへと変身して戦闘態勢に入ったのだった。

No. 73 コアに宿す奪欲

最上階の管理室、引き続きモニター画面を監視している眼鏡の敵^{サイラン}。ソキルも腹立たしい様子で同じくモニター画面を見ていた。80階へ駆けつけた敵^{サイラン}2人がまだ爆豪達を捕らえていないからだ。ソキルは舌打ちしながら通信機に手を当て通信した。

「おい80階！まだ捕まえてねえのか!？」

一方、植物プラントは爆煙に包まれながらソキルから通信を受けた怪物に変身した敵^{サイラン}があたりを見回しながら通信機に向かって叫ぶ。

「うるせえ！黙ってる!!」

「オラア!!」

その時、煙の中から現れた爆豪が怪物の敵^{サイラン}に爆破を食らわせる。怪物の敵^{サイラン}も反撃を試みるがギリギリの所で爆豪は攻撃を交わし、容赦ない追撃をどんどん食らわせていた。息もつかせぬ攻防が続く中、爆豪達と離れていた所で轟もまた細長の敵^{サイラン}と戦闘を繰り広げていた。デカイ手を振るい空間に次々と空いていく攻撃に足元を凍らせて避ける轟は隙をつこうと氷結攻撃を繰り出す。しかし、敵^{サイラン}も高速で走りながらそれを避け、それでも避けきれない氷は腕を振るい丸く削り取る。それを見た轟はハツとした。

「あいつ、空間に穴を開けてんじやねえ、抉ってやがる…!」

「そういう事か…!」

轟の声を聞いた爆豪は納得していると立ち上がってくる怪物の敵^{サイラン}を見て舌打ちをする。

「キリがねえ、いつまでもてめえに構ってられねえんだよ!」

そう言つて爆豪は爆破で跳び上がる。空中で両手をクロスさせ爆風でスピードを上げると、敵^{サイラン}目掛けて突っ込んでいった。

「〃榴弾砲着弾〃!!!」

「ウオオオオオオオオ!!!?」

雄叫びを上げる怪物の敵^{サイラン}に向け、回転しながら爆豪は大火力の爆破

を放つ。衝撃が走り、爆煙が薄まると直撃した、敵はボロボロになつて倒れていた。

「よくもー!」

爆煙の中、細長の敵は仲間の仇とばかりに爆豪目掛けて腕を振るおうとする。それを見た轟はしまったと言わんばかりに叫ぶ。

「爆豪!」

だが爆豪は才能と言える反射神経で体を大きく反らすとその場の煙ごと丸く挟りとられ大きな穴が空く。直後、爆豪の右腕の服が破れる。すると、細長の敵の掌がキラキラと濡れていた。

「チツ……ん?何だこりゃ?」

構えた細長の敵は掌に付着している液体に気付くと爆豪はニヤリと企みの笑みを浮かべた。

「俺の手の汗だ」

「?」

「二トロみてえなもんだッ」

「っ!」

轟を見る爆豪の思惑に気付いた轟は直ぐ様細長の敵に向かって炎を放つ。二トロの汗に引火すると爆発し、敵は吹っ飛ばされる。すかさず轟は氷結攻撃を行い、敵を氷で拘束する。2人の敵を倒した轟と爆豪は慌てて瓦礫に埋まっている切島の元へと駆け出した。

「切島!」

「無事か!」

「う…動けねえ…助けてくれ…!」

辛そうに訴える切島に爆豪は呆れた顔で口を動かした。

「……アホかお前は。個性”解けばいいだけだろが」

「あつ、そっか…」

ずっと硬化したまま挟まっていた事に気付き、切島は一瞬ポカンとしていたが、個性”を解いて瓦礫からスルリと抜け出しホッと安堵する。

「あー、ビックリした」

「とりあえず怪我がなくてよかった」

「おう！おめえらもな！」

轟達にそう答え立ち上がる切島に爆豪は「ケツ…」と眩き背を向ける。ふと、身を挺して守ってくれた事を思い出したのか爆豪はボソツと呟いた。

「……あんがとよ」

「んだよ、らしくねえ！気にすんな！」

「してねえわ!!」

笑う切島に吠える爆豪。とりあえず一段落ついた事を確認した轟は2人に声をかけた。

「よし、緑谷達を追うぞ」

「命令すんな！」

駆け出す轟に爆豪と切島がついていく。

「轟！詳しく教えてくれ！」

訳も分からない状態で事情を聞こうと切島がそう言った直後、機械音がした。その方向を見上げた轟らはハッと驚く。プラントの壁から押し寄せて来たのは約30体程の警備マシンだった。あつという間に囲まれてしまい、轟は再び戦闘態勢へと入る。

「奴ら、本気になったようだな」

☆☆☆☆☆☆

『ボスー！あいつらはただの子供じゃありません！雄英高校ヒーロー科…ヒーロー予備軍です！』

管理室では緑谷達のパーソナルデータがモニターに映し出されていた。眼鏡の男からの報告に、レセプション会場にいたウォルフラムは慌てる様子もなく口を動かす。

「ガキ共の目的は、おそらく警備システムの復旧だ。80階の警備マシンは稼働させたな？」

『はい』

「なら101階から130階までの隔壁を全て上げろ」

『え……？』

「言うとおりにしろ」

緑谷達の狙いが読まれている。冷静に指示を出すウォルフラム。その間、オールマイトは薄らと蒸気を出しながら、焦燥に駆られていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「ハアツ!!」

「ギャア!?!」

100階フロア、テストルームにて、オーズとバースは大量のヤミーと戦闘を開始していた。2人は囲まれながらも一定の距離を保ち、攻防を繰り返す。タカアイでヤミーの攻撃を交わし、トラックローで切りつけ、バツダレツグで跳躍して避ける。3枚の能力を使ったタトバの戦闘スタイルにヤミー達も怯んでいた。

「フツ！」

「グオア!!?!」

一方でバースも遠距離からのバースバスターでヤミー等を一扫していく。一度に打てる数が6発しかないのがデメリットだが、ずっと愛用している後藤は器用にメダルを素早く補充、装填し、瞬時に急所に狙いを定めてエネルギー弾を放つ。有利な戦況に見えるが、数が数、倒しても倒しても湧き出てくるように現れるヤミー等を見てオーズは少しだけ弱音を叫んでいた。

「あーもうー!どんだけいるんだよ!?!いくら倒してもキリがない!しかも初めて見るヤミーもいるしー!」

昆虫系のヤミーとは別に哺乳類系のヤミーも中には混じっていた。丸く太った「ネコヤミー」に女性の身体付きをしている「シヤムネ

「コヤミー」。少し離れていた監視用の高台に立っていたアंकも確認してめんどくさそうに舌打ちをする。

「チツ、脇真音の奴、別のヤミーまで生み出せてたのか…。予想はしてたが、後々の事を考えると面倒だなあ…」

「アंक！コンビで一気に倒せない!？」

「馬鹿が、後先考えてからモノを言え」

コンビを使えばその特性で楽に倒せるだろうと思ったオーズだが、その反動も大きく、動けなくなる事を重々承知しているアंकは悪態を吐きながら断り、メダルホルダーから2枚のコアメダルを取り出す。右手に持ったアंकは「映司!」と叫び、オーズに向かってコアメダルを投げ渡した。

「おつとー…あ!?!これ、コンビじゃないだろ!」

投げ渡されたのはクワガタ、コンドルと別々のコアメダルだった。オーズはヤミーの攻撃を避けながらも文句を言うとその対応に苛立ったのかアंकも言い返す。

「いいから、とつととそれ使えつ!」

「もお!わかった!」

投げやり感のある言葉にオーズは半分やけくそにドライバーにあるタカとバツタのコアメダルを抜き取る。その間、アゲハヤミーが空中から飛来して襲ってくるが、間一髪気付いたオーズが「うわつと!」と言ってしゃがんで避ける。直ぐに立ち上がり、クワガタとコンドルのメダルを嵌め込み、オースキャナーでスキャンした。

クワガタ!

トラ!

コンドル!

「ハアツ!!」

音声が鳴り響き、それと共にオーズは「ガタトラドル」へと姿を変

える。タトバの逆バージョンと思えるようなフォームへと変化し、オーズは片足を上げて身構える。すると、直ぐにオーズはクワガタヘッドに意識を集中させると、バチバチと頭部に電気が流れる。「ハアッ!」の掛け声と共に電撃が放出し、囲んでいたヤミー等に電流を浴びせた。

数体のヤミーが断末魔と共に爆散し、セルメダルが飛び散る中、続けて他のヤミー等が攻め込もうと駆け出す。今度は腕部のトラクローを展開し、脚部のコンドルレッグにも力を溜め入れた。

「フツ!!」

「ギャア!?!」

迫り来るヤミーの一体にオーズはトラクローで切りつける。続けて迫るヤミーに今度はコンドルレッグで回し蹴りをする。赤い斬撃の残るような残像が見える中、蹴られたヤミーは斬撃を食らったように切り込まれ、吹っ飛ばされていた。虎の爪、コンドルの足爪。双方の特性を合わせ持ったオーズの攻撃にヤミーはなすすべもなく次々とヤミーは倒されていく中で、アंकは再び別のコアメダルを3枚取り出し、オーズに叫んだ。

「映司!次はコイツだ!」

「!」

戦闘する最中、オーズはアंकの声に振り返り投げ渡されたメダルをキャッチする。模された造形のコアメダルを把握するとすぐにドライバーのコアメダルを取り替え、オースキャナーでスキャンした。

シヤチ!

ゴリラ!

チーター!

「ハアッ!……フウン!!」

ガタトラドルから変わり、続いてシヤチ、ゴリラ、チーターの「シヤゴリーター」へと変身を遂げる。オーズは腰を低くするとチーター

レックから蒸気のような煙が輩出する。次の瞬間、目にも止まらぬスピードで駆け出し、ゴリラの腕部ゴリバゴーンを両手いっぱい広げ、ダブルリアットの要領で駆け抜ける先のヤミーに直撃していった。その重々しいゴリラの一撃にチーターの脚が加わりスピードを増した重量攻撃はどんなヤミーでも立ち上がる事は難しいだろう。

「シャアア!!」

「ツッハアア!!」

地上が駄目ならばと思ったのか空中からアゲハ、クロアゲハヤミーがオーズへと接近し襲ってくる。オーズは立ち止まり、頭部の額のクリスタル器官「オークオーツ」で敵を感知して飛来するヤミー等へと振り返る。すると、その頭部から水が勢いよく噴射される。ウォータージェットののような威力で噴射された水はアゲハヤミー、クロアゲハヤミーはなすすべもなく断末魔を上げながら空中で爆散される。

そしてオーズとバースの戦闘により、かなりの数のヤミーが倒されていくのを目の当たりにしたオルカは驚くような表情で口を開いていた。

「これは…少し予想外だな…。火野映司、オーズ：侵入者のデータを拝見していたつもりだが…。予備軍如きがあれだけの化け物を次々と倒してしまうとは」

「フーン！データってのは所詮は世間体の情報だろ？映司：オーズの力は想像を遥かに超える未知の領域ってヤツだ。情報だけの知識で挑もうなんざ烏滸がましいにも程がある」

「成る程。……その力ってのは、あのメダルが関係しているみたいだな…」

オルカの言葉に割入るようにアंकはそう言うとオルカは小さく何度も頷くようにオーズの戦闘を眺めていた。一方でバースもバースバスターで応戦していたが、オーズの戦闘をチラチラと見てハツとしていた。

「コンボでもないのに、メダルの組み合わせでこうも変わるのか…」

体育祭の時にも亜種形態で戦っていたのを思い出していた後藤だが、火野の使い方にも寄るのかアंकの的確なコアメダルの選択とそ

の戦い方を見て驚くバースにアंकは鼻を鳴らす。

「当然だろ。コンボだけがオーズの力じゃない。：せつかくだ、コアメダルが全部揃ってるついでに脇真音から奪ったコアメダルもある。：。ここはオーズを知らない奴の為に特別に出血大サービスと行ってやろうか。映司！メダルチェンジだ！」

アंकが手に持つオーメダルホルダーには最大24枚までコアメダル、セルメダルが入れる。その内の現在オーズが使っているの自身自身の鳥のコアメダルを除いたコアメダルが入っていた。ここまでメダルが揃った事は前世でもなかったアंकは上機嫌にそう言うって強気にニヤリと笑みを浮かべ、再びオーズに別のコアメダルを3枚投げたのだった。

☆☆☆☆☆☆

その頃、緑谷達は120階まで到達し、通路を駆け抜けていた。

「なんかラツキーじゃね？101階超えてからシャッターが開きっぱなしなんて！」

「火野君の場所にヤミーを集中させ過ぎてウチらのこと見失ったとか？」

そう言う上鳴と麗日に耳郎は火野の事が心配なのか俯向く表情をしながら「恐らく違う…」と言うと八百万が続けて口を動かした。

「私達、誘い込まれていますわね！」

「ああー！」

険しい顔で頷く飯田。緑谷も真剣な表情で走り続ける。

「それでも、少しでも上に行くために、向こうの誘いに乗る！」

今は進むしかない。轟達や火野達が作ってくれた道をと緑谷は強く言い放つ。

130階まで上がって来た緑谷達は、最上階への通り道であるフロ

アの扉の前で警備マシンがうようよと徘徊するのを発見していた。

「なんて数なん…!?!」

ドアからこつそり覗いていた麗日がその数の多さに驚く。おおよそ70〜80体はいそうだった。

「やはり相手は、閉じ込めるのではなく捕らえる事に方針を変えたか…!」

「きつと、僕達が雄英生である事を知ったんだと思う…」

相手も本腰を入れてきたのだらうと息をのむ飯田と緑谷。だがその後ろで八百万は強気に微笑んだ。

「でも、そうなる事はこちらも予想済みですわ!」

そしてかがかんだ背中からは創造で造られた巨大なシートが空中に広がる。それを確認した飯田が頷いた。

「よし!予定通りプランAでいこう!上鳴君!」

「よっしゃ!やってやるぜ!飯田!いっちゃ頼む!」

気合いを入れた上鳴が両手を飯田に差し出す。

「ああ!」と受け答えた飯田は上鳴の両手首を掴むと同時に実験室のドアを蹴り上げた。

「ぬおおおお!!」

飯田は上鳴をグルグルと振り回し、遠心力で警備マシンの真上へと放り投げた。その間、飯田はすぐに皆が潜り込んでいた絶縁シートの中へと入り込む。

「くらえ!無差別放電130万ボルトオオ!!」

落下しながら上鳴は警備マシン目掛けて放電する。だがしかし、警備マシンは放電に対してその体を縮こませ電気を逃がすように一時停止したのだ。

「防御された!?!」

「ちツ…なら!200万ボルト!!」

覗きながら驚愕する緑谷。だが上鳴は効かないのなら更に威力を上げるだけと言わんばかりに最大出力で放電する。雷のような電撃が実験室に迸り、そのド派手な放電に思わず耳郎がシートから顔を出す。

「馬鹿！そんな事したら！」

「ウエ〜イ……」

煙が晴れて現れたのはアホ顔の上鳴だった。

「アホになっちゃうだろ……」

遅かったかと耳郎は呆れる。恐らく彼の「ウエ〜イ」は「ごめ〜ん」と言ったのだろう。立ってもいられずにしやがみ込む上鳴。だが警備マシンはショートしてバチバチと火花を散らしていたのでプランAは成功のようだ。確認した緑谷がシートの中から立ち上がる。

「でも、お陰で警備マシンを止める事が……」

ホツとして駆け寄ってくる緑谷達。だったが、突如、停止していた警備マシンが再び可動し始めたのだ。そして数台の警備マシンが座り込んでいる上鳴に向かってワイヤーを射出し、上鳴を拘束する。

それを見た麗日が叫ぶ。

「上鳴君！」

「頑丈すぎだろ……」

あわわとなる峰田達を認識して警備マシンは動き出した。構えながら飯田は皆に向かって声を上げる。

「仕方ない！皆、プランBだ！」

「はい！」

頷いた八百万は胸元から通信干渉入りの発煙筒を創り出す。ふたを外したそれを警備マシンの前へと投げると一気に煙が噴き出した。「これで通信を妨害できますわ！」

八百万がそう言うのと警備マシンは点滅し始めてフラフラと誤作動を起こし出す。その間、同じ発煙筒を八百万から貰った麗日、メリッサ、耳郎が次々と警備マシンに向かって投げつける。実験室は徐々に煙に包まれていく中、緑谷は峰田に合図する。

「峰田君！」

「上鳴を返せ！ハーレムが待ってるんだ！」

峰田はそう言いながらもぎもぎでちぎったボールを投げまくる。混乱した警備マシンにそれがくつつき、動きが止まっていく。動けなくなった警備マシンがバリケードのようになり、後ろから攻め入る警

備マシンたちを次々と堰き止めていった。

「どうだ！」

思わずガッツポーズを見せる峰田。だが、後ろの警備マシンはそのバリケードをよじ登ってきていた。

「しつけえ〜!!」

「くっ…!」

まだ襲ってくる警備マシンに飯田は悔しそうな顔をして身構える。

「行くぞ！緑谷君！」

「うん！」

緑谷は正装の上着を脱ぎ捨てて、右の袖を捲る。手に巻かれていたメリツサ特製のフルガントレットのボタンを押すと右腕にピッタリと装着される。それに気付いたメリツサはハツとしていた。

「ッワン・フォー・オールフルカウル！」

緑谷は気合いを溜め、緑色の稲妻が全身を迸る。

そして直ぐに飛び出し、ガントレットを纏った拳を構えた。

「ッフルガントレット」…!」

『これを装着すれば、デク君の本来の力が発揮できると思う』

メリツサの言葉を思い出しながら、緑谷は力を調整する。

「SSMAASH!!」

そう叫びながら拳を一番前の警備マシンにぶつけると、とてつもない威力と風圧で警備マシンたちが吹き飛んでいった。緑谷は痛くない右腕を確認し、その性能を確信していると上鳴がアホ顔で親指を立てていた。

「ウエ〜イ！」

警備マシンを蹴り飛ばし、上鳴を解放する飯田。残りの警備マシンを蹴り飛ばしながら、周囲の状況を索敵を行う耳郎に声を掛ける。

「耳郎くん！警備マシンは!?!」

「左から来る！」

「よし！右から進むぞ！」

飯田はそう言いながら上鳴を背負い駆け出す。緑谷達もまた後から続いた。

「デク君！なにその腕、すごいやん！」

先程の威力に驚いてた麗日に緑谷は「うん！」と頷き、斜め後ろを走っていたメリツサに少しだけ振り返る。

「メリツサさん、バッチリです！」

「持ってきてたのね！」

自ら設計したサポートアイテムの性能を目の当たりにしたメリツサは嬉しそうに微笑む。ふと、緑谷は恥ずかしそうに照れ笑いをした。

「外し方、わからなくて…」

「あ…」

そういえば伝えてなかったと言わんばかりにメリツサは苦笑を浮かべていた。

☆☆☆☆☆☆

『ボス！警備マシンのセンサーに障害が！ガキ共を見失いました！』

管理室の眼鏡の男から報告を受け、ウォルフラムは疲弊している人質達を見回しながら口を動かした。

「狼狽えるな。恐らく、ガキの中に聴覚の鋭い『個性』持ちがいるな…。わかった、何かあればすぐに連絡しろ」

ウォルフラムは連絡を切ると今度はこちらから100階フロアにいるオルカへと繋がった。

「オルカ、そっちのガキは始末したのか？」

『すみません、コイツ等少々厄介な『個性』持ちのガキです。ヤミーでは歯が立たないどころかほぼ全滅寸前の状態なんですよ…』

「なんだと…!？」

常に冷静でいたウォルフラムの顔が強張る。人外の存在であり、人以上の力と能力を兼ね備えたヤミーがやられているのは予想外だっ

たのだろう。雑魚を送られたかと言わんばかりにウォルフラムは舌打ちをすると、オルカが口を動かした。

『ボス、例のブツ使ってもよろしいですか?』

「…ああ、あの小娘に貰ったやつか。ヤミーが使えないのならそれも使ったところでゴミのようなものだよ」

信用してない態度でそう言う。だがオルカはそれを否定した。

『いえ…、あのガキが使うのと同じメダルなら、ガキ共を倒せるかもしれません。ボス、勝手ながら使わせてもらいます』

「…そうか、わかった」

☆☆☆☆☆☆

100階フロア、テストルームにて。

通信を切ったオルカは再びオーズとバースの戦闘を観察する。既にタワー全てから送られてきたヤミー等は僅かにしか残っておらず、それが今倒されようとしていた。

ライオン!

カマキリ!

チーター!

「ハアアアア!!!」

オーズは“ラキリーター”となりライオンヘッドの立髪部分、“ライオネルフラッシュャー”から直視出来ないほどの光が放たれ、残ったヤミー共は眩しそうに目を押さえ悶えていた。その間、オーズは高く

跳躍するとカマキリソードを展開し、怯むヤミー共に向かつて突っ込む。

「セイヤー・セイヤア!!」

「ギヤアアア!!?」

何が起きたのかわからないまま切られたヤミー共は断末魔だけを最後に爆散し、セルメダルが飛び散った。バースの方も、バースバスターで残りのヤミーに乱発し、倒していた。

「…はあ…はあ…これで、全部か…」

「みたいだね…さて、残るは…」

辺りに散らばる大量のセルメダルを見ながらバースはバースバスターを降ろし息を整える。そして全てのヤミーを倒したオーズ等に残る敵のオルカへと目を向けた。だがオルカは追い詰められたというのにも関わらず、敵であるオーズとバースにパチパチと拍手を送っていた。

「お見事…あの数をこうも容易く倒されるとは、敵ながら感服だ…！」

「何言ってるんだあいつ…?」

敵相手に褒められるバースは警戒を怠らないまま首を傾げると、高台から降りたアंकはオーズの横まで歩み寄ると鼻を鳴らして口を動かした。

「フーン！ 追い詰められて頭がイカれたのか？ 映司、あんな奴さつさと倒せ」

「ちよ、ちよつと待って。丸腰の相手に戦えだなんてちよつと気が引けるなあ…」

「俺もそういう趣味は持ち合わせていない。…おい、大人しく投降しろ。そうすれば手荒な真似をせずに住む」

見たところ武器も何も装備していないオルカに対してオーズは戸惑うとバースも同意なのか頷くが、相手は敵^{サイラン}。身柄を拘束しようとはバースバスターを構えてそう言う。だが、オルカは不気味な笑みを浮かべて背中後ろにゆっくりと手を入れながら口を開いた。

「安心しろ…丸腰なんて事はないからな」

「何?」

オルカの言葉に疑問を抱くアंक。すると、オルカは背中後ろから手をゆつくりと出す。そして、その手に持っていた見た事もないドライバーを見せ、オーズ達は驚愕した。

「っ！それは!?!」

「ドライバー、だと…!?!」

「…!」

オーズ、バース、アंकと続いて目を見開いているとオルカはニヤリと不気味に笑い、それを腰に充て装着する。そして、ポケットから真つ黒の甲殻種のコアメダルを3枚取り出し、見せびらかしながら口を動かした。

「お前達そのメダルはとんでもない『個性』を秘めてるな…。ならば俺も、有効に活用させてもらおうよ」

「チツ！脇真音の野郎…! あんなモノまで渡していたのか…!」

1枚ずつ窪みに嵌め込むオルカにアंकはつくづく余計な事をしてくれる脇真音に腹を立てる。そしてオルカは3枚コアメダルを嵌め込むと、その両手をバツと広げて雄叫びを上げた。

「うおおおおおっっ!!」

その瞬間、腰のドライバーが赤く発光し、黒いモヤが湧き出す。それはオルカの体をみると包み込んでいき、オルカは姿が見えなくなるほど黒いモヤに飲み込まれていった。オーズとバースは身構えると、アंकはまずいと思ったのか自身の赤いコアメダル3枚を取り出しオーズに声を掛けた。

「映司！コイツで一気に…!」

メダルを投げ渡そうとした、その瞬間だった。

ドスッ

「え…?」

オーズ達の目の前にいた筈のオルカの姿が消えた。何が起きたのか分からないオーズは声を漏らすと、隣で何か貫かれた鈍い音が微かに聞こえ、漠然とした素振りでも振り向き、その光景に驚愕した。

「……………な……………っ!!?」

隣にいるアंकの懐に消えた筈のオルカの腕が突き刺さっていた。突き刺された部分から血が流れているようにセルメダルがボトボトと足元に落ちていく。オルカは腕を引っこ抜き、アंकから離れると理解が追いついたオーズは慌ててアंकに駆け寄る。

「っ！アंक!!」

「ぐっ…はアっ……………!!?」

お腹を押さえて塞ぎ込むアंक。「一体何が…!!」とバースも困惑する中、ある程度離れた位置に着地したオルカは自身の黒いモヤに包まれた体を見ながら不気味に笑い出した。

「フフフ…！なんてスピード…!!想定外…！予想以上…！……………うっ!!?」

見惚れるオルカだが、突如、胸元を押さえて膝をつく。

「ううう…!!……………なる…ほど…!!凄まじい能力と引き換えに反動も大きいってことか…！だが、想定内だ…！」

「ッ!?赤いコアメダル…!?アंकのか!」

苦しむオルカはそう言いながら、先程アंकに突き刺した右腕の拳を広げると、その掌には6枚のアंकのコアメダルがあった。それを見たバースは驚き、同時にオーズは目を見開いて、再びアंकへと振り返る。息が荒くなるアंकは必死にオーズに何かを渡そうと手を差し伸べる。

「アंक…!!」

「映…司…!!」

肩に手を置くオーズは何かを渡そうとするアंकに気付いてその手を差し伸べ、掴んだ。

その瞬間、アंकは原形を留められず、体は崩れ落ちてメダルの塊となった。

「っ!?!……アंकクーーーーッ!!」

「そんな…!?!」

膝から崩れ落ち、悲しみの声を上げるオーズ。バースもアंकがやられるとは思わず漠然とする中、オルカは再び不気味な笑い声をあげる。

「フ…フフフ!!このベルトを付けた瞬間ソイツが普通の人間じゃない事が分かってもしかしてと思ったが、予想通りだ…!」

そう言い終わった時、オルカはアंकのコアメダルを体の中に取り込む。そして、戦闘に入る為の言葉を口にした。

「変…身…!!」

瞬間、オルカの体は燃え上がり、熱波の衝撃が放たれる。力が漲るのか、はたまた炎で体に激痛が走るのか、オルカは雄叫びを上げるとその体はみるみると炎の鎧に包まれていった。激しい炎が収まり、そこに立っていたのは、オーズとバースと同じよう異なるような戦士がそこに誕生したのだ。まるでアंकのメ_コダ_アルをその身に取り込み宿した戦士が…!。

No. 74 奪う欲望の誘い（いざない）

135階の非常階段の踊り場にて、耳郎は耳朵のプラグを壁に突き刺しながら周囲の音を探る。

「下の階から警備マシンの騒音多数！」

「上からの音はっ？」

緑谷の言葉に耳郎は簡直に答えた。

「ない。大丈夫！」

「よし、行くぞ！」

情報を得て、飯田は上鳴を背負いながら走り出す。そうしてやってきたのは、大型コンピュータが何十台も置かれた巨大なサーバールームだった。セントラルタワー、そしてI・アイランドを取り纏める設備ともいえる場所だ。一刻も早く最上階に向かおうと駆けていた緑谷達だが、なにかに気付いたのか立ち止まる。奥の扉が突然勝手に開き始めたのだ。その奥にはギッシリと並んだ警備マシンがいた。数は先程交戦した倍以上はいる。

緑谷達を確認した警備マシン達は一斉にランプを点灯し前進してくる。

「くっ……！ 畏か……!？」

「突破しよう飯田君！」

圧倒的な数だろうとフルガントレットを装備した緑谷のワン・フォー・オールなら一掃できる。そうやって身構える緑谷にメリッサが慌てて止めに入る。

「待って……このサーバーに被害が出たら、警備システムにも影響が出るかも……！」

メリッサの言う通りこのコンピュータが破壊されたら警備システムを変更できなくなってしまう。どうすればいいか考えていると上からガシャンと音がする。全員は一斉に見上げると天井近くのタラップから大量の警備マシンが落下してきたのだ。それを見た峰田は叫ぶ。

「どんだけいんだよおお!!」

通路を埋め尽くす程の警備マシン。すると、八百万がしゃがみ込む。

「警備マシンは私達が食い止めますわ!」

八百万の背中から武器を創り出す。飯田もしゃがみ込んで上鳴を下ろすと、警備マシンに身構えながら緑谷に叫んだ。

「緑谷君!メリッサさんを連れて別のルートを探すんだ!」

今は一刻も早く最上階へ。指示を受けた緑谷はその思いを受け止めメリッサへと振り返る。

「:メリッサさん、お願いします!」

駆け出す緑谷の後を追おうとするが、踏み止まり、麗日に声をかけた。

「お茶子さんも一緒に来て!」

「え、でも!」

食い止める側として気合いを入れていたがメリッサの突然の言葉に戸惑う。ふと、飯田を見ると飯田は頷き口を開いた。

「頼む!麗日君!」

メリッサは何か考えがあると判断したのだろう。飯田はその言葉を信じて麗日に言い放つ。その真剣な表情を見て麗日は頷き、メリッサと共に駆け出した。軽く見送った飯田は警備マシン達へと振り返り、エンジンのトルクを最大出力に引き上げる。マフラーから炎が噴き出すと同時に飯田は高速で移動し、勢いよくジャンプする。そしてその勢いを利用して、警備マシンに向けて蹴りを放った。

「トルクオーバー!レシプロバースト!!」

ぶつかりながら警備マシンは吹き飛び、壁に激突する。さらに警備マシンが接近してくると、今度は八百万が動き出す。

「砲手は任せます、私は弾を創ります…!」

八百万は大きな砲台を創り出した。デカイモノを創るほど、疲労もまたデカイ。辛そうにしている顔を心配する耳郎は託された弾を受け取り「了解!」と受け答え、弾を装填して砲身の狙いを定め、放った。放たれた大砲は白いトリモチ。無用の爆発でコンピューターを

破壊を防ぐためだろう。トリモチが当たった警備マシンは動けなくなっていた。

「ハーレムは譲らねえかなあ!!」

上鳴を守りながらも峰田はもぎったボールを警備マシンに向かって投げまくる。背後で上鳴も申し訳なさそうに「ウエーイ」と親指を立てていた。床に落ちたもぎもぎは警備マシンに付着すると動けなくなる。

「行けっ!」

確実に狙いを定め、トリモチで仕留める耳郎。その横では苦しそうに弾を創り出す八百万。休む事なく後から後へと増えて迫り来る警備マシン。

最上階を目指す緑谷達の希望を繋ぐ為、飯田達は再度気合を入れ直し、警備マシンを食い止めていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

100階テストルームにて。

「ぐううヴヴ…!フ、フフフ!!スバラシイ…!コレガ…!コアメダルノチカラ…!ヨソウイジョウ!!チカラガワキテクル!!」

炎の鎧を見に纏ったオルカ事、「コア」はドスの効いた声で高らかに笑い、自身の溢れ出る力を鵜呑みにし、感動していた。しかもその身体はみるみると巨大化し、テストルームの天井に頭がつきそうなほどの大きさとなっている。驚愕するバースは後退りながらもバースバスターを構え、コアを見上げながら口を動かした。

「力に溺れたか…!これが外に出たら被害が尋常じゃないぞ…!」

こんな化け物がタワーから外へ出てしまえばI・アイランドの危害や人の被害が只事では済まないと思像するバースは仮面越しに冷や汗を流す。今すぐ止めなくてはと銃口をコアに向けながら、立ち上がるオーズを見遣る。

「火野！気持ちちは察するが悲しんでる暇はない、今はこいつを食い止めるのが最優先だ！」

アングが目の前でメダルの塊となってしまうた火野に後藤はなんて言葉を掛けていいのか正直分からなかった。だが今はコアを倒して最上階を目指す緑谷達と合流することだ。他の被害を押さえるべく、無理矢理にでも戦わせようとバースは声を掛ける。

「……………くも……………」

「え？…何だ？」

オーズがボソツと呟くように言う。バースは聞き直すと、オーズのその拳は震えていた。

「よくもっ…!!」

「!!」

怒りに満ちた震える声。次の瞬間、オーズは床を強く蹴って跳躍し、コアに向かって突っ込んだ。

「火野！」

「はああああつ!!」

バースの呼び掛けに反応せずオーズはコアに腕部のカマキリソードを振り下ろそうとする。

「ムダナコトヲ…、ハア！」

「ツ!?うわあ!!」

だがコアは炎を纏う体から熱波を放つ。直撃したオーズの体中に火花が飛び散り、その威力で吹き飛ばされ壁に直撃した。

「火野オー！クソ！」

悪態を吐きながらバースはバースバスターをコアに向け、トリガーを引いてエネルギー弾を放つ。だがコアに弾は直撃するも火花が散るだけでダメージが通る素振りも反応もなくコアは悠々とバースに近づいていく。

「ムウンッ！」

片足を後ろに振り上げその巨大から繰り出す大きな蹴りの攻撃をバースはモロに食らってしまった、バースもオーズとは別の方角へとフロアの壁に吹き飛ばされめり込むように直撃した。「グハツ!？」と

バースの体から火花が散り、バースは苦しそうに息を吐く。

先程まであのヤミー軍団を相手にし、殲滅したオーズとバースを最も簡単に吹き飛ばし苦しむ姿を見てコアは勝者になった気になり優越感に浸ったのか笑い出した。

「フッフフ…!!コレガ…コノメダルノチカラカ…!!ホントウニスバラシイチカラダ…!コレナラ、ゼンセカイヲテニデキル!」
「ぐっ…!!なんて力だ…!」

バースのマスク内のモニターからはエラー音が鳴り出す。先程の蹴りでダメージが大きくかなり損傷したのだろう。同じ攻撃を次も食らったらマズいとバースは焦りを感じる。だがそれと同時に同じくめり込んでいたオーズが壁から立ち上り飛び出した。

「うおおおっ!」

「待て火野…!くそ、…あいつ完全に自分の思想で動いてる…!」

大声を上げて再び突っ込んでいく姿はいつもの火野とは思えなく完全に周りが見えていない状態だと見受けられる。高速で移動したオーズはコアの懐に入り込み「ハアッ!」とコアの胴体にカマキリソードを数回切りつける。

「ゴザカシイ…!」

体をチクチクする程度の攻撃でコアはもう一度熱波の衝撃を放とうと身構える。だが動作に気付いたのかオーズは距離をとると、頭部に力を溜め、ライオネルフラッシュを発光した。

「はああ!!」

「ム!?!」

攻撃が通用しなくとも視覚を奪う光は通用するのかコアは眩しそうに片手で目を塞ぐ。その間オーズは高く跳躍し、コアの頭部目掛けて急降下した。

「アंकを!返せっ!!」

「…!ムイミ!!ガアア!!」

「ツ!うわああああ!!」

振りかざそうとするが、所詮は目眩し程度の戦法でコアは片手で目を隠したまま熱波の衝撃を放つ。空中では避ける術もなく直撃した

オーズは大量の火花を散らしながらそのまま地面へと落下した。コアはそのままオーズにトドメをさそうとてを伸ばす。

「ッ!」

突如、手を伸ばしたコアの腕から何かに当てられたのか火花が散る。その飛んできたモノの方向を見遣ると壁にめり込んだままのバースがバースバスターのエネルギー弾を放ったのだ。舌打ちをするコアは標的を変えてバースにゆっくりと近づく。

「メザワリダ、マズハ、オマエカラクタバルトイイ!」

「くそ……!」

オーズから標的を外せた事には良いが、壁から抜け出せない状態からどう切り抜けるかは考えていなかった。打開策を必死に考えるバースにコアの腕がゆっくりと迫ってくる。

「はあ……はあ……!うう……!」

熱線放射が相当効いたのかオーズは満身創痍になりながらも痛む体を無理矢理にでも起こして立ち上がる。だがその目線の先は今にも襲われそうなバースではなくコアだった。怒りと憎しみに満ちた目はいつもの火野の目ではない。アंकを失った事が衝撃の出来事で周りが見えていないのだろう。オーズは身構え、後ろから攻撃を仕掛けようとした……その時だった。

突然、何かが、囁くような声がオーズの脳内へと響くように聴こえてくる。

“アंकを奪いたいか……?”

「え……!何だ……!」

“答えろ、ヤツが憎いんだろ……?ヤツからアंकを取り戻したいのか……?”

ノイズが掛かった男性の声が脳内に聞こえる。聞き覚えのない声だが、今現状もつとも叶えたいその願いにオーズは戸惑う事なく頷い

た。

「…取り戻したい…！ヤツを倒してアंकを…!!」

“…わかった、その【欲望】…解放しろ”

得体の知れない声はそう言い終わる。次の瞬間、オーズの心臓がその囁く声に応えるように、ドツクン…と鼓動を打ち鳴らす。「うっ…!？」とオーズは鼓動に痛むように声を出すと、力が抜けるように脱力感に襲われぶらりと身構えてた両腕を下ろした。その眼は強い。深緑色”の目を宿していた。

ズズズズズ…

何かが湧き出るような音が聞こえてきた。コアは後ろに違和感を感じ取り、バツと振り返る。そこに立っていたのは様子がおかしく、下を向いたまま立っているオーズだ。次の瞬間、オーズの立っている付近の地面がバチバチと緑色の稲妻が地面を駆けるように程走る。壁から天井へと電流が走り、コアは何事だと辺りを見回す。それはバースも同様だった。

「電流…：…おかしい、電気を流せるのはクワガタのコアメダルだけのはずだ…!？」

オーズのコアメダルを把握している後藤はその特性も能力も事前に調べていた。だが今の形態はラキリーター。どれも電撃を扱うメダルではない。もう一つあるとするならばウナギのコアメダルも電気を流す事が可能だが地面や壁にへとここまでハッキリ見えるほど強大な電力はない。明らかに様子がおかしいオーズは電撃を流しながらもゆつくりと下を向いたコアへと歩み寄る。

「シブトイヤツメガ…！イマラクニシテヤル！」

「っ！避ける火野!!」

コアも只事ではない何かを感じ取ったのか今度はバースからオーズへと標的を変え、オーズの頭上から拳を振り下ろそうとする。気付

くの遅れたバースはハツとしてオーズに叫んだ。すると、オーズは顔を上げるとその深い緑色の目を強く発光させ、振り下ろすコアの右腕の拳に向かって右腕を上げた。

その瞬間、右腕から雷が天井に落ちたかのような凄まじい電撃が放たれる。

「ツツツ!!?グワアア!!」

雷鳴と共に断末魔を上げるコアは炎を纏うその右腕が焦げておりそのまま地面へとズシン!と巨体が倒れ込んでしまう。凄まじい衝撃と雷鳴で目を閉じてしまったバースは何が起きたのか分からず顔を上げては漠然とその光景を目の当たりにした。目の前のオーズは倒れ込んでるコアを見下すように眺めてはゆつくりと歩み近づいていた。

「ナ…ナランダ…!?ナニガオキタ…!」

焼け焦げる腕を押さえながらコア自身も何が起きたのか理解できていない様子でオーズを見遣る。オーズは緑色の電撃をその身から放電しながらもゆつくりと近づき、両腕でを広げてその口を動かした。

「…デカいだけでその程度か?…フン!」

「ツ!!?ウオオオア!!」

火野から口にするとは思えない悪態に違和感を覚えると同時に驚くバース。オーズは再び右腕を突き出し、コアに向けて放電させ直撃する。悶え苦しむほどの威力なのかコアは声を荒げていた。

「グウウウ…!!ナゼコンナニモダメージガ…!!オマエ、ナニヲシタア!!」

絶対的な力を手にした筈なのに雰囲気が変わっただけのオーズに逆に手も足も出せない状態になった状況にコアは怒りを露わにしてオーズに吠える。オーズはその言葉に軽く息を吐いて貶した。

「フン…簡単な話だ。俺が強くて、お前が虫ケラ以下の存在ってことだ」

「…!!グオオオオオ!!」

苛立ち雄叫びを上げるコア。しかし、それを見ていたバースは不安

の様子でオーズを見遣る。

「火野：どうしたんだあいつ：!？」

コアに電撃を浴びせながらどこか快樂に陥ったような不気味な笑い声を出すオーズ。今までの火野とは違い何かに乗っ取られた風格にバースは戸惑い、そう言っていた。

☆☆☆☆

「……あれ……う……こは……?？」

火野は目を覚ますと見覚えのある空間の中に浮いていた。輝くような壁に自身が何層にも鏡のように写り込んでいる。ここは以前アंकとこの世界で初めて出会った火野の精神の空間だ。火野は辺り一面を見渡していると突然の睡魔と疲労が襲い、今にも眠ってしまいそうになる。次第に何をしていったのかも分からなくなり、火野の意識は朦朧としていた。

「……駄目だ、意識……が……」

考えるのを辞めて火野は再び目を閉じろうとする。すると、目の前に小さな赤い光が突如出現する。とても暖かな光で、火野はそれをジツと見ていると、聞き覚えのある声が耳に響いてきた。

(映司：……映司：……!)

「この声……!アंक!」

次第に意識がハッキリとしてきた火野は声のする赤い光を見てハツとする。光が治るとそこにはアंकのコアメダルが3枚浮かんでいた。自身がどうなっていたのかも思い出した火野はバツと腕を突き出し、アंकのコアメダルを掴もうと伸ばす。

「アंक……!!」

コアに取り込まれ、救けたいと願いながら火野は更に腕を伸ばす。

そしてコアメダルを掴み取るとコアメダルは白く発光し、眩い光が精神の空間、火野自身を包み込んでいった。

☆☆☆☆☆☆

「グオアアア!!?」

電撃を浴びせられ、再びコアは地面に倒れ込んでしまう。オーズはトドメをさそうと右腕を構えてコアに歩み寄ろうとしたその時だった。

「………何だ……?」

オーズは自分の体に異変を感じて立ち止まる。何かが内側から出てきそうな感覚がしたのかオーズは「ちっ……」と不満そうに舌打ちをする。その瞬間、オーズの変身が強制的に解かれ、火野はその場に膝を突いた。

「火野!」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

息切れを起こす火野にバースは心配そうに声を出す。はゆっくりと呼吸を整え、右手に握っているモノを感じ取り、指を広げて確認する。それは精神の空間で掴んだアंकのコアメダルだった。

「……あの時……」

それは、アंकが必死に火野に渡したコアメダル。コレを使ってヤツを倒せと言われていたような気がした火野はフツとにやけて、その重い体をゆっくりと立ち上がらせる。そして、アंकの想いを受け止めた火野はドライバーにアंकのメダルをコンドル、クジヤクと順番に入れる。最後のタカのコアメダルを少し見つめて火野は口を動かした。

「アंक……行くよ……!」

アंक自身のコアではなくとも、既に2人の間には切っても切れないう紡がれる糸がある。精神の空間で呼び掛けてくれたアंकがコアに取り込まれても生きていると確信した火野は救きたい想いとその

覚悟を胸に火野はタカのコアメダルをドライバーに装填し、オースキヤナーをゆつくりと取り出す。待機音が流れると同時に、勢いよくオースキヤナーをドライバーへとスキャンさせた。

「変身ー!」

タカ!

クジャク!

コンドル!

タ〜ジャ〜〜ドルウ〜〜!

高らかに鳴く鳥の声と同時に神々しく誕生させるような音声が鳴り響く。火野の体は紅色の炎に覆い被される様に包まれ、炎を纏わせる様な真紅の姿、〃オーズ タジャドルコンボ〃へとその身を変えたのだ。

「…ウオオアアア!!」

その美しい炎を纏うオーズを見て一瞬怯むが、掻き消すように雄叫びを上げてコアは立ち上がる。直ぐに拳を握り、コアは渾身の一撃をオーズに放とうとしてきた。オーズは両手を広げるとクジャクフェザーが神々しく展開され、背中から分離するとコアに向かって無数の弾丸となり放たれた。

「はぁぁぁぁ…ハア!!」

「ツ!?グオオ!!?」

コアの体に直撃し、怯んでいる隙にオーズは直様クジャクウイングを背中から広げると、空中にへと飛翔する。すると、胴体のオーラングサークルが輝き出す。その紋章は左腕へと移動するとそこにはオーラングサークルを模した手甲型の武器、〃タジャスピナー〃が現

れ、装着される。

「ハア!!」

オーズは空中を飛びながらタジヤスピナーをコアに向けて炎のエネルギー弾が何発か放たれ、コアの体に直撃する。怯むコアの間隙を見るとオーズはタジヤスピナーの蓋の部分 “タジヤドルフェイス” を展開する。中にはコアメダルが入られる窪みが7個あり、ドライバーからタジヤドルのコアメダルを抜き取るとその中へと装填していく。

「…ケシズミニシテクレル!!」

やられてばかりではとコアも倒れそうな体を踏ん張り、熱波の衝撃波を放とうと力を溜める。だが、そうはさせまいと壁にめり込んでいたバーズはバーズバスターを構えてコアの頭部にエネルギー弾を射出した。

「くらえ!!」

「…ムウ!?キサマア…!」

「火野!今だ!一気にキメろ!!」

注意を逸らす事が出来たバーズは何かをしようとしているオーズにへと叫ぶ。タジヤスピナーの中の台座 “オークラウン” に3枚入れ終わったオーズはタジヤドルフェイスを閉じる。そしてバーズの言葉にオーズは「うん!」と頷き、オーズキャナーを取り出すとドライバーではなくタジヤスピナーへとスキャンさせた。

タカ!

クジャク!

コンドル!

ギン!ギン!ギン!ギガスキャン!!

音声が鳴り響くと同時にオーズの体は巨大な炎に包まれる。すると、その炎は形を変え、炎の体を纏った巨大な火の鳥のような姿へと成り変わる。

オーズはタジャスピナーを装備した左腕を突き出すと同時にその纏った火の鳥と共に滑空していく。バースに気を取られたコアは慌てて振り返り、滑空する火の鳥に向かって拳を突き出す。

「うおおおっ!!」

更にスピードを上げたオーズはそのままコアの突き出した拳へと直撃する。ぶつかった衝撃波がビリビリと壁や地面等が振動し、テストルーム全体が震えていた。すると、コアの方が徐々に押され始める。このままではまずいと大声を上げながら押し返そうとするが、火の鳥の勢いは治るどころか勢いを上げるばかりだった。

「グウ!? バカナ…!? オレハサイキョウウノチカラヲテニイレタハズダ!! ナゼ…!?!」

自身の力は強大。だったはずだが、それは力の一旦に過ぎなかった。オルカは察した。目の前のオーズに借り物の力では勝てないと。

「ハアア…!! セイヤア…!!」

「グウオオオアアアア!!」

渾身の掛け声と共に威力は更に強まり、コアの拳を弾く。そして、コアの体にその技、〃マグナブレイズ〃が直撃し、コアの胴体を一貫したのだ。

コアは貫かれた胴体を押さえながら雄叫びを上げ、その体は爆発した。着地したオーズ、だが、その技の反動が凄まじく、強制的に変身が解かれてその場に倒れ込んでしまう。

「ハア…! ハア…!」

「火野! 大丈夫か!」

なんとか壁から抜け出し火野の元へ駆け寄りながら変身を解き、後藤は声を掛ける。「なんとか…」と意識が朦朧とする状態で返事をした火野はコアが爆発したその付近を見遣る。そこには人間の姿のオルカが倒れており、付近にはアंकのコアメダルが散らばっていた。すると、一つのタカのコアメダルが宙に浮くと、コアメダル、そして大量のセルメダルが勝手に動き出し、そのアंकのメダルへと集まる。火野は安心した笑みを浮かべると、メダルは一塊となって発光する。

そこに立っていたのはいつも隣にいたアंकだった。アंकはバツの悪そうな顔をしながら倒れ込んでる火野に声を掛ける。

「…映司、相変わらずボロボロだなあ」

「…ちよつと、無茶…し過ぎたかも…。無事でよかったよ…」

「フン、コアメダルさえ砕かれてなければ何度でも蘇る。お前、前に話しただろ？」

アंकがそう言う。「あ」と思い出したかのように火野はハツとする。グリード等は意志の入ったコアメダルがとセルメダルがあれば何度だって復活する事が出来る。オルカに取り込まれるぐらいでは死ぬ事はないのだ。唾然とした火野の顔を見てアंकは強く鼻を鳴らすと辺り一面に散らばっているセルメダルを眺めていた。

すると、後藤が火野に手を差し伸ばす。

「立てるか？」

「あ、はい……ありがとうございます…」

「お前は本当無茶する奴だな…一瞬人格が変わったのは驚いたぞ。アレもオーズの影響なのか？」

「え？」

後藤の言葉に火野はキョトンとする。その顔を見て後藤は眉を顰めた。

「お前、覚えていないのか？」

「…うん。えと…何かしたかな俺……？」

本当に何も覚えてない表情を浮かべる火野に後藤は軽く溜息を吐いて口を動かした。

「…まあいい。それよりも緑谷達と合流するぞ。倒れてる奴も直ぐには起きないだろう」

「あ、うん。そうだね……。アंक、行くよ」

後藤の言葉に火野は頷き、アंकに声を掛ける。だがアंकは右腕だけのグリード化となってセルメダルを必死に集めてはその手の中に飲み込むように取り込んでいた。火野は呆れた表情で「アंकく」と気の抜けた声でアंकへと近づいて行く。後藤もやれやれと言わんばかりにその後を追おうとするとオルカの付近に散らばっている

黒い甲殻種のコアメダル3枚が目に入った。後藤は近寄り、そのメダルを拾い上げると、ジツと見つめていたのだった。

No. 75 到達と真意

飯田達が食い止めている間、緑谷達は通路を駆け抜けていた。すると、サーバルームから大きな衝撃音が耳に入ってくる。

「!?」

思わず振り返って立ち止まる緑谷。だが後から走ってきた麗日が声を上げた。

「アク君止まっちゃダメだ！ここでウチらまで捕まったら、飯田君達が残った意味がなくなる！」

その声に緑谷は「う、うん！」と頷き、再び駆け出す。

「(皆んな、どうか無事で…!)」

☆☆☆☆

その頃、サーバルームでは警備マシンの圧倒的な数に苦戦していた。先程まで警備マシンを蹴散らしていた飯田のマフラーが掠れた音を立て始める。

「エンジン!?!」

限界を超えてしまい、エンジンが止まってしまうと飯田は悔しそうに顔を顰める。その停止を察したかのように警備マシンは一斉に飯田に襲いかかった。

「うああああっ!!」

「飯田ー!」

警備マシンに押し潰される飯田に気付いた耳郎が、なんとかしようとしてトリモチ弾を撃ち込む。しかし、多数相手には連続で撃たなければ意味がない。

「ヤオモモ、弾を…ヤオモモ!?!」

振り返った耳郎は目を見開く。八百万は息切れを起こして今にも倒れそうになっていた。

「創造の…限界が……」

連続で創造をし続け、脂質をエネルギーに変えていたその体がついに底を尽きていたのだ。ふらつく八百万を慌てて抱き抱える耳郎。そして、もぎもぎを投げすぎた峰田も頭から流血を起こして今にも倒れそうになっていた。

「オ、オイラも、頭皮の限界だ……」

警備マシン達は峰田達にワイヤーを伸ばし、拘束した。

☆☆☆☆☆☆

「ハハッ、ガキが調子に乗るからだ。逃げた3人は？」

管理室から愉快そうに笑うソキル。だが直ぐに真顔になり、この場にはいない緑谷達の事を眼鏡の男に聞く。

「今探してる」

「チツ、イライラさせやがる……!」

冷静に答える眼鏡の男にソキルは爪を噛みながらその苛立ちを募らせていた。

☆☆☆☆☆☆

サーバールームを出た後、180階まで駆け上がった緑谷達はメリツサの案内で、ある扉の前まで来た。緑谷はその扉を破壊すると、途端に風が吹き込んでくる。緑谷はメリツサの後を続くように駆け出し、周囲を見渡しながら驚いていた。

「(っ)、(っ)は……」

「風力発電システムよ」

タワーの空洞部分に作られた風力発電エリア。

壁はなく、むき出しになっているフロアで夜のI・アイランドの街並みを見下ろすように中央エレベーターが通っている柱があり、その周りに囲むように並んでいる大きなプロペラが海からくる潮風で回転し動いていた。

「どうしてここに…?」

「タワーの中を登れば警備マシンが待ち構えているはず。だからここから一気に上層部へ向かうの。あの非常口まで行ければ…!」

緑谷の問いにメリッサは答える。およそ20階分の高さはあるような発電エリアの天井に小さな非常口の扉が見える。

「あんなところまで…!?!」

「お茶子さんの触れたものを無重力にする『個性』なら、それができる…!」

「…:うん、任せて!メリッサさん、デク君に捕まってる!」

メリッサの言葉に麗日は強く頷く。「はいっ!」と後ろからメリッサは緑谷に捕まると麗日は「いくよ」と2人の体に肉球で触れる。すると、2人の体は無重力状態となり、麗日はメリッサの腰を持つと力一杯真上へと放り投げるように押し出した。同時に緑谷も深く踏み込んでいた足を蹴り出し、勢いよくジャンプする。

「いつけー!」

ふわふわとエレベーターに沿って上昇していく緑谷達を見て麗日は「…よし!」と両手をいつでも合わせられるようにスタンバイする。2人が非常口についたら『個性』を解除するためだ。

だがその時、少し離れた所で音がする。麗日は振り返るとそこにはぞろぞろと入ってきた警備マシン達だった。

「そんな…!」

上昇する中、緑谷とメリッサはそれに気づいて叫ぶ。

「麗日さん!」

「『個性』を解除して逃げて!」

だが麗日は逃げる事なく警備マシンと向き合った。

「できひん!そんな事したら、皆を助けられなくなる!!」

「お茶子さん！」

多数の警備マシン相手に生身で戦おうと麗日は身構える。個性“を使わずして立ち向かおうとする麗日の姿に緑谷の胸が締め付けられる。しかし、ここで立ち止まるわけにはいかない。麗日の想いを、他のみんなの想いを託されて今は最上階に向かっているのだから。

「早く……！早く……！早く……！！」

緑谷の焦りが募る中、麗日に迫る警備マシン達が一斉に飛びかかろうとしていた。だがその時、横から飛び出してきた爆豪が不敵な笑みを浮かべながら警備マシンを爆破した。驚く麗日と緑谷、そしてメリッサ。

「かつちゃん!!」

だがその後に波のように迫り来る警備マシン。すると、今度は氷結が生成され、警備マシンは飲み込まれていく。

「轟君に切島君!!」

続いて駆けつけてきたのは氷結攻撃を繰り出す轟と切島だった。驚いている麗日をかばうように前に立ち、口を動かした。

「怪我はねえか、麗日」

「うん、平気！デク君達が今最上階に向かっている！」

「ああ見えてた。ここでこいつらを足止めするぞ！」

そう言いながら轟は再び足元から氷結を繰り出し、迫る警備マシンを凍らせる。

「俺に命令すんじゃないぞ!!」

爆豪も呼応するように吠え、警備マシンを次々と爆破し、破壊していく。その後ろで硬化した切島が警備マシンを薙ぎ倒しながら笑った。

「でもコンビネーションはいいんだな！」

切島の言葉に「誰が！」と言いながら爆豪は警備マシンを破壊していく。頼もしい仲間達が集まり、緑谷とメリッサはホツとする。

「ありがとう、みんな……なあああ!!?」

「きやああつー！」

突如、突風が巻き起こり、無重力状態の緑谷とメリッサはタワーの外へと吹き飛ばされそうになる。

「デク君、メリッサさん!!」

どんどん離されていく2人に気付いた麗日は叫ぶと同時に轟は正装の上着を脱ぎ捨てて駆け出すと、交戦していた爆豪へと叫んだ。

「爆豪！プロペラを緑谷に向けろ！」

「だから命令すんじゃねえ！」

そう言い返しながらも爆豪は直ぐに爆破でプロペラの向きを変え、背面を破壊されたプロペラが上を向いたのを確認した轟は下あたりへと移動し、左腕から炎を放つ。温められた空気が、勢いよく舞い上がり彼らはグングン上昇する。

「ぐうぐうぐう!?!」

唇が捲れるほどの直撃に、飛ばされていた緑谷達は気流によって戻ってきた。

「熱風!」

麗日は顔を輝かせる。切島も戦いながら轟の機転に「すげえ!」と素直に感心していた。

「轟君、ありがとう!」

「っ!デク君!壁にぶつかる!」

メリッサの言葉に緑谷はハツとする。熱風の勢いで加速し続けて、いつの間にか発電エリアの天井に迫っていた。

「くっ!しっかり捕まって!」

「はい!」とメリッサは腕にギュツと力を入れる。確認した緑谷は力を溜め込み、迫る非常口に向かって放った。

「ッワン・フォー・オール、フルカウル!デトロイト・S M A A A S H !!」

突き出す拳の衝撃で非常口の扉は破壊される。その行方を注視していた麗日は緑谷達が非常口の中へと入ったのを確認して指を合わせた。

「タワーに入った!解除!」

非常口を超え、最上階へと続く階段で浮いた緑谷達の無重力が解か

れ、2人は落下した。

「うわあああ！」

「きやあああ！」

☆☆☆☆☆☆

管理室の眼鏡の男から、警備マシンの追手を潜り抜けた緑谷達の報告を聞いたウォルフラムは、僅かに顔を顰めた。

「ソキル達を向かわせろ」

『はい！』

「俺が行くまで制御ルームは死守しろ」

指示を出したウォルフラムはレセプション会場を出て行く。その後ろを見ながら、オールマイトは身体中から少しずつ噴き出す蒸気を必死に抑えていた。

「堪える…！堪えるんだ…！オールマイト…！彼らならばやってくれる…！必ず…！！」

☆☆☆☆☆☆

「セイヤーー！！」

「ハッ！！」

サーバールームでは、警備マシン達に拘束されなす術がないままだった飯田達だったが、無事に合流したアंक、そしてオーズとバースにより、大量に湧き出ていた警備マシンは全て薙ぎ倒され動きが止ま

る。山積みとなった警備マシンを背に変身を解いた火野と後藤は拘束された飯田達を解放していた。

「皆んな、怪我はない？」

「ああ、ありがとう火野君」

「た、助かった〜…」

差し伸ばした手を掴み起き上がりながら飯田がお礼を言い、峰田は流血した頭を手で押さえていた。その後ろでは「ウエ〜イ…」と上鳴が親指を立てている。後藤も同じように八百万と耳郎を解放していると2人は「ありがとう」と言つて八百万は口を動かした。

「御三方もご無事でしたのね…」

「いや、運が良かっただけだ」

八百万の言葉に後藤は怪我をしている皆を見渡しながらそう答える。学生の身分とは言え敵と渡り合えた時点サイランで命を懸けていた状態だ。全員ヒーローを目指している者として勝てたと言えてもおかしくはないだろう。すると、アंकが鼻を鳴らしてサーバルームの天井を見遣る。

「流石にヤミーの気配はないか…。もうこのタワーに用はないな」

「そうはいかない…。緑谷君達の後を追わないと」

火野はそう言つて歩き出そうとすると千鳥足となつてフラついていた。それを見た耳郎は駆け寄る。

「火野、大丈夫？」

「ちよつと無茶しすぎたけど、大丈夫。…まだ動けるよっ」

「無理は良くないぞ火野君」

笑顔を見せる火野だが、その額からは汗が滲み出ていた。それを見逃さなかった飯田はそう言うのと火野は首を振つて口を開く。

「でも、緑達君達が必要で頑張つて最上階に向かっている…。早く合流してタワーのシステムを戻さない」と…」

「で、でもよ、オイラ達も頑張つたぜ…。少し休憩してからでも…」

「なら、峰田君達は少し休んで…。俺は先に行つてるから…」

座り込む峰田に火野はそう言つてその重い足を一步、また一步と運ぶ。足止め要員として離れていた身だが、最上階へと目指す緑谷達は

今も必死に向かっているはず。なら尚更ここで立ち止まっているわけには行かない。火野は持てる気を緩まず、上の階へと通じる階段へ行こうとすると、耳郎が峰田に向かって口を動かした。

「ウチはまだ動けるから、火野の言う通り怪我人は休んでなよ。後でまた合流しようっ」

「俺もだ、緑谷君達の助力に向かわねば！」

「わ、私もまだ、助力くらいなら出来ますわ…！」

耳郎に続いて飯田、八百万が立ち上がる。先へ行こうとする火野達を見ておどおどしていると後藤は息を吐いた。

「全く、ヒーロー科の連中は命知らずが多いな…」

「お、お前はいかねえのか…？」

行かない素振りを見せるような物言いに峰田は後藤に声を掛けると、後藤はバースバスターにセルメダルを装填して口を開いた。

「ここまで来てそうも言ってもらえないだろ。タワーのシステムを解除して人質となっているヒーロー達を解放するまでは協力すると言ったからな」

後藤は峰田にそう言い残して歩き出す。その言葉と後ろ姿を見て峰田は涙目を浮かべていると上鳴が峰田の肩に手を置く。

「ウエーイ…！」

「上鳴…！」

サムズアップをする上鳴。その言葉はどこか「やってやろうぜ」と言わんばかりな表情をしており、峰田は泣きながら笑みを浮かべた。

「…へっ、お前そんな面してやがんに妙にかっこよく見えるじゃねえかよ…！わかったよ…！オイラだって、ハーレムが待ってた…！ここで泣き言言ったら、男が廢るもんない！」

峰田はズズツと鼻水を吸る。覚悟を決めた峰田は上鳴と共に火野達の後をついて行く。その火野達の背中を見ていたアंकは前世の記憶を思い返していた。

「…全く、どこにいても変わらないなお前は…」

自身を犠牲にしても助けようとするその意志は変わらない。それが火野映司だ。

「……………本当に、無茶する男だなあ」
そしてその支えとならんと、アंकは息を吐いて、その足を前に出して火野達の後について行った。

☆☆☆☆☆☆

一方、緑谷達はソキルを筆頭の手下達が立ちほだかっていたがワ
ン・フォー・オールで蹴散らし、最上階である200階の通路へと到
達する。目当ての階へと2人だけでたどり着いたので、それだけ危険
も大きいだろう。2人は周囲の様子を窺いながら誰もいない事を確
認して駆け出す。

「メリツサさん、制御ルームの場所はっ？」

「中央エレベーターの前よ！」

一気に角まで走り、周囲を警戒する。すると入り口が解放されてい
た。

「誰かいる…！」

その中の人影に気付き、緑谷達は敵かと身を潜める。恐る恐る見遣
るとその人影にメリツサはハツとした。

「パパ…………？」

「本当だ…………！」

その人影は、保管室で懸命にパネルを操作しているデヴィットだっ
た。

「どうして最上階に…？」

レセプション会場に居るとばかりに思っていたメリツサは困惑し
ていると、緑谷は口を動かした。

「敵に連れて来られて、何かされている…？」

「っ！救けないと…！」

心配に顔が歪めるメリツサに緑谷は「はい！」と頷き、慎重に近づ

いていった。

☆☆☆☆

ブロックのようなボックスが壁全体に敷き詰められて天井まで続いている保管室で、敵^{ヴァイラン}達に連れて来られてからデヴィットはずっとプロテクトの解除に勤しんでいた。すると、強張つてた顔がパツと明るくなる。

「コードを解除できた、1147ブロックへ！」

デヴィットに言われたサムは「は、はい！」と、急いで短い階段を上り、そのボックスが到着される場所へと向かう。「開くぞ」とデヴィットは言うと言が起動し、目当てのボックスがサムの元へと壁を通して運ばれていく。そして出てきたボックスをサムが取り出し、それを開くと中にはアタッシュケースが入っていた。

「やりましたね、博士！」

アタッシュケースを開けて、サムは興奮した様子でデヴィットへと向ける。

「……!!」

その中に入っていた物を見てデヴィットは、安心と喜びの顔を見せて息を吐く。

「全て揃ってますっ！」

その中身とはデータの入ったケースと、小さめの丸い形のようなものにフックがついている装置だった。何かを決心した表情を浮かべ、それを拳へと伝わったのか強く拳を握るデヴィットは口を動かした。

「ああ…、ついに取り戻した。この装置と研究データだけは、誰にも渡さない。渡すものか…!!」

「プラン通りですね。敵^{ヴァイラン}達も上手くやってるみたいです」

「ありがとう。彼等を手配してくれた君のお陰だ、サム」

サムの声に我に返ったデヴィットが、急いでケースの元へと駆け

寄ったその時、小さな強張った声が聞こえた。

「……パパ………?」

驚いて振り返ったデヴィットとサム。そこには信じられない顔をしたメリッサと緑谷だった。1番遭遇したくなかった人物だったのかデヴィットは息を飲む。

「メ………メリッサ………!!?」

「お嬢さん、どうしてここに!?!」

サムの質問に答える余地もなくメリッサは今にも崩れ落ちそうな足を一步、また一步とデヴィットに近づいて行く。

「〃手配した〃って…何…?」

「………」

「もしかしてこの事件………パパが仕組んだの…?」

「………」

メリッサの質問に、デヴィットは喉に何か詰まったかのように言葉を出さず、何も答えられない。

「その装置を手に入れるために…? そうなの、パパ!?!」

会話の意味が混乱する頭の裏で、それが事実だと告げられていた。必死に問い掛けるメリッサにデヴィットはギョツと目を閉じた。愛娘の非難を受ける為なのだろう。

「………そうだ」

デヴィットの言葉にメリッサは口を動かす。

「なんで………どうして!?!」

信じられない発言に食い下がるメリッサ。すると、サムが代わりに口を開いた。

「博士は奪われたものを取り返しただけです! 機械的に〃個性〃を増幅させる、この画期的な発明を……!」

ケースを見せながらなんとか説得しようとするサムに、メリッサと緑谷は疑問を抱く。

「っ!?! 〃個性〃の増幅………!?!」

「ええ、まだ試作段階ですが、この装置を使えば薬品などとは違い人体に影響を与えず〃個性〃を増幅させる事が出来ます。しかし、この発

明と研究データはスポンサーによって没収、研究そのものも凍結させられた。これが世界に公表されれば、超人社会の構造が激変する。それを恐れた各国政府が、圧力を掛けてきたのです。だから博士は、私が考えに承諾してくれて今日この日、敵が暴れている隙にこの装置を取り戻そうと……！」

「そんな……嘘でしょ、パパ……」

サムの説明にメリッサの声が震える。全て、この騒動全てがデヴィット達が仕組んだ事を聞かされた今も、メリッサは信じられなかった。

「嘘だと言って……！」

「嘘ではない」

遮るように言うデヴィットにメリッサはそれでも口を開く。

「こんなのおかしいわ……！」

「メリッサさん……」

悲しみと怒りが籠ったその声に緑谷の顔は曇っていた。そして、彼女は必死に叫ぶ。

「私の知っているパパは、絶対そんな事しない！なのに……どうして！……どうして!?!」

心が傷付いていく娘を目の当たりにしたデヴィットは、苦し気に顔を歪ませ躊躇していた声を振り絞った。

「……オールマイトの為だ……」

その名前を聞いて緑谷はハツとする。

「お前達は知らないだろうが、彼の『個性』は消えかかっている……」

「!!」

デヴィットの発言にかなり目を見開き、驚愕する緑谷だが、デヴィットはそれに気付く事なく、立ち尽くすメリッサを見遣る。

「だが、私の装置があれば、元に戻せる！いや、それ以上の能力を彼に与える事ができる。No. 1ヒーローが……平和の象徴が……再び光を取り戻す事ができる！また多くの人達を、救ける事が出来るんだ!!」

平和の為、世界の為、そして出会ったあの日から憧れてた親友の為

に力を尽くしたい。デヴィットの原動力はそれが全てだった。

「僕が、ワン・フォー・オールを受け継いだから………オールマイトの力が失われている事を憂いて、博士は……」

譲渡してもらいその力が無くなってきているオールマイトにデヴィットはなんとかしようと思死になっている。そんな彼を見ていた緑谷は体の奥が冷えた感覚に襲われる。デヴィットはサムの前へと駆け寄り、ケースを奪うとメリッサ達に向かって口を動かした。

「頼む！オールマイトにこの装置を渡させてくれ！もう作り直してる時間は無いんだ！その後でなら、私はどんな罰でも受ける覚悟も……」

「命懸けだった……!!」

デヴィットの言葉を遮り、俯いてたメリッサがバツと顔を上げる。怒りを隠そうとせず、先程、ソキルに切られ、包帯代わりにしていたハンカチを乱暴に引き剥がし、痛々しい傷口をデヴィットに向け叫んだ。

「捕われた人達を助けよう！デク君、エイジ君にアंक君！クラスメイトの皆が、ここに来るまでどんな目に遭ったと思ってるの!？」

皆んな自分の限界を超え、戦闘では役立てないメリッサをここまで運んでくれた。その事を思うとメリッサは悔しく、情けなかった。激高するメリッサにデヴィットは困惑する。

「……どういう事だ……!? 敵は偽物、^{サイラン}全ては芝居のはず……!？」

デヴィットはサムへと振り返る。サムは顔を徐ろに逸らすと入り口から高圧的な声が聞こえてきた。

「もちろん芝居をしてたぜ。偽物、^{サイラン}敵という芝居をな」

眼鏡の男を連れて現れるウォルフラムに緑谷はハツとする。

「あいつは!!」

レセプション会場にいた鉄の仮面男だと直ぐに認識した緑谷はワン・フォー・オールを全身に行き渡らせる。だが、その前にウォルフラムの鉄製の扉に触れていた手が光った。直後、メキメキと外れたかと思うや否や、まるで生き物のように高速で襲い掛かる。鉄に絡めとられながら壁にぶつけられ、緑谷は全身を鉄で壁に張り付けられ

た。

「デク君！」

メリツサは慌てて駆け寄る。

「!! (……金属を操る “個性” か……!?)」

口元も覆われて緑谷は声も出せない。

「少し大人しくしている。サム、装置は？」

外そうともがく緑谷にウォルフラムはそう言いながらサムを見遣る。するとサムは慌てた様子でデヴィットからケースを乱暴に奪い取り、小走りで「こ、ここに……」とウォルフラムへと駆け寄る。

「サム……?」

何が起きたのか分からず、啞然とするデヴィット。だがその顔は徐々に驚愕した。

「まさか……、最初から、装置を敵に渡すつもりで……」

その声にサムはピクリと反応し、振り返る。

「だ、騙したのは、貴方ですよ。長年貴方に仕えてきたというのに、あつさりど研究は凍結、手に入れる筈だった榮譽、名声……全て、無くなってしまう……せめてお金くらい貰わないと、割が合いません……!」

責める声でケースを大事そうに抱きしめながらサムは弱々しく叫ぶ。その目には涙が浮かんでいた。心血注いだ研究を奪われた事で追い詰められたのはデヴィットだけではなかったのだ。

「……!」

長年の仲間の裏切りにデヴィットは言葉を失う。否、何も言えなかった。この計画を立てさせてしまったのは自分のせいなのだ。自分がこの計画に乗らなければ今回の事は何も起こらなかった。自分を裏切ったのは、自分の弱さなのだ。

「約束の謝礼だ」

そう声が掛かり、サムは振り返る。だがそこに向けられていたのはウォルフラムの左手に持つ拳銃の銃口だった。そして、挨拶みたく気軽に放たれた銃弾はサムの肩に命中する。

「う、わあ!!」

「!!」

肩は貫かれ血がドバツと飛び散り、倒れ込むサム。デヴィットは驚愕し、緑谷を救出しようとしていたメリッサも「サムさん!」と思わず口元を両手で押さえる。

「な、何故…!?約束が違う!」

激痛と恐怖に混乱するサムに向い、ウォルフラムは白を切るような物言いで銃口を向けて口を開いた。

「約束? 忘れたなあ。謝礼はコレだよ」

そして、躊躇せずにもう用済みとなったサムに向けた銃のトリガーを引く。銃声の音が響く中、ケースに血が飛び散った。

「!!」

目の前の光景に緑谷は目を疑った。サムを庇い、デヴィットは身代わりとなって弾を食らったのだ。父が目の前で撃たれたのを目視したメリッサは全身の毛が逆立つように短い悲鳴を上げる。

「……!!」

「博士…どうして…!?」

肩の少し下部からどんどん血が溢れてくる。呆然とするサムにデヴィットは口を動かした。

「に、逃げろ……!」

「パパあ!!」

「来るな!!」

駆け寄って来たメリッサに向かってデヴィットは叫ぶ。だがその目の前でウォルフラムがメリッサを容赦なく殴り飛ばした。

「ああっ!!」

「メリッサ!」

床に転がるメリッサにデヴィットは悲痛な声を上げる。緑谷は鉄の拘束から抜け出そうと必死にもがいていたその前で、ウォルフラムが横たわるデヴィットの背中を踏みつけ、その足に力を込めながら口を動かした。

「がはっ……!」

「今更ヒーロー気取りか? 無駄だ。どんな理由があろうと、あんたは

悪事に手を染めた。俺達が偽物だろうが本物だろうが、あんたが犯した罪は消えない。俺達と同類さ。あんたはもう科学者でいる事も、研究を続ける事も出来やしない。敵の闇に落ちていく一方さ。フハハハハ!!」

世界の為、親友の為。自分で崩してしまった夢の重たさと犠牲にデヴィットは押し潰される。そんな父親を見ていたメリツサは目の前で壊れていく様が目に入り、涙を止められなかった。

「今のあんたに出来る事は、俺の下でその装置を量産する事ぐらいだ」
全てがどうでもよくなったように脱力したデヴィットを、ウォルフラムは愉快そうに襟首を掴み持ち上げると、銃のグリップを後ろ首に向かつて殴り、気絶させる。そして眼鏡の男に「おい、連れて行け」と指示をする。

「返して…!」

ウォルフラムが振り返ると、床を這いずりながらメリツサは叫んだ。

「パパを返して…!!」

怒りか恐怖なのか震えるメリツサを見てウォルフラムは下衆な顔を浮かべ、メリツサへと銃口を向ける。

「そうだなあ、博士の未練は…断ち切っておかないとなあ」

「やゝめゝろ。おおお!!」

ウォルフラムがトリガーを引こうとした瞬間、緑谷は渾身の力を出して拘束を無理矢理外しながら吠えた。直後、壁を踏み台として跳ぶとウォルフラムへと「SMASH!!」と突っ込んでいく。

弾丸の如く向かってくる緑谷にウォルフラムは床の鉄板に触れると、鉄板は防壁となつて聳え立ち、緑谷の拳が鉄板にめり込んだ。すると、緑谷はバツとメリツサを見遣る。

「(メリツサさん!博士は救けます!だから皆んなを!)」

「…!!」

その想いを強く受け止めたメリツサは涙を振り切りもたつく足を懸命に動かさせて入り口へと駆け出す。

「追え!逃すな!」

「はいー」

それに気付いたウォルフラムは眼鏡の男に指示を出して眼鏡の男は慌ててメリツサの後を追う。

緑谷はフォローに回ろうとその眼鏡の男を追おうとするが、ウォルフラムはそうはさせまいと鉄板の壁を目の前に作り出す。緑谷は壁へと避けようと動いた瞬間、ウォルフラムは触れていた数本の鉄パイプを緑谷に向けて飛ばした。

「がっ!？」

「よく飛び回る小蠅だ、大人しくしてろ！」

手足に巻きつくように鉄パイプは絡みつき、縛られた緑谷は落下して床に叩きつけられる。「やれー」とウォルフラムは眼鏡の男に指示を出す。眼鏡の男は懸命に走るメリツサの後ろ姿に銃口を向ける。

「メリツサさん!!」

緑谷は早く、早くと必死に拘束を外そうとする。

そして、眼鏡の男がトリガーを引こうとしたその瞬間だった。

「ハアツ!!」

「ぐあっ!？」

眼鏡の男は何かに蹴飛ばされた衝撃が顔に走り、宙へと飛ばされると、ウォルフラムの付近へと転がる。何事だとウォルフラムはその場を振り向くと、そこには背中から美しい赤い翼を羽ばたかせていた火野の体に憑依したアंकが立っていた。それを見ていた緑谷は目を見開いて喜びの声を上げる。

「火野君!・アंक君!」

「フン! やつとボスの面を見る事が出来たなあ」

今この現状、これ以上の頼もしい助っ人がいるのだろうか。緑谷は火野の中からアंकが出て来て2人になったのを見ながらそう実感していた。火野は「あの男殺してないよな?」とアंकに言う。「知るか」と単調に返すアंकに火野は息を吐きながら、拘束されている緑谷に声をかける。

「ごめん、待たせたね緑谷君!」

「火野君……いや、本当にベストタイミングだよ……！」

「ハッ、どーでもいいだろ再会の挨拶なんざ。狙いはヤツだ」

2人の再会を水指すようにアंकは割入る。だが悠長に会話をしている暇はないのは火野も分かっている。オーズドライバーを腰に宛い装着させて、不快そうにこちらを睨み付けるウォルフラムへと火野とアंकは身構えていたのだった。

No. 76 2人の英雄

「ヒーローのガキ共が…調子に乗るなあ!!」

ウォルフラムの怒号と共に天井から伸びた鉄柱が襲い掛かる。火野は後ろにいるアंकへと手を伸ばして「アंक!」と叫ぶと、アंकはタトバのメダルを3枚投げ渡す。火野は受け取るが鉄柱がすぐ上まで迫って来ており、間に合わないと思った火野は避けようとする。だが、それをカバーするかのように緑谷が腕を上げて受け止めたのだ。

「うぐっ!」

「緑谷君!」

「大…丈夫!早く変身を!」

必死に受け止める緑谷だがあまりの威力に顔が歪む。火野は時間を無駄にはしまいと「わかった!」と頷き、コアメダルを3枚ドライバーへと嵌め込み、直ぐにオースキャナーでスキャンした。

「変身!」

タカ!

トラ!

バッタ!

タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

コンボソングが鳴り響き、火野はオーズ「タトバコンボ」へと姿を変える。オーズは直ぐに緑谷が受け止めている鉄柱へと向かってバッタレッグに力を溜め込み、勢いよく蹴り飛ばした。

「ハアア!!」

直撃した鉄柱は砕かれ、粉碎されると緑谷は「ありがとう!」とお礼を言って全身にワン・フォー・オールを巡らせて構える。ウォルフラムは不快そうに舌打ちをすると、突然タワー内の照明が復旧し

た。閉じられていた各フロアの壁も次々と開いていく。

「チツ、警備システムを戻したのか！余計な真似を!!」

保管室でもついた明かりにウォルフラムは苛立ち気に言う。鉄板の床に触れる。緑谷とオーズの立つサイドから鉄の壁が迫り上がると2人は背を向き合って身構えた。だが、少し離れていたアंकはハツとなる。

「っ！映司！上だ！」

アंकの呼び掛けにハツとなり緑谷とオーズは頭上を見上げると鉄柱が再び襲いかかってきていたのだ。対処に遅れた2人は間に合わず鉄柱とサイドに聳え立つ鉄の壁に挟まれてしまう。

「うああああつ!!」

「映司！」

☆☆☆☆

「!?なんだ…!」

風力発電エリアで、突如停止した警備マシン達に爆豪が啞然とする。懸命に応戦していたがその数に押されて崖っぷちまで追いやられていた。止まった事を確認した麗日は同じく啞然として眩いていた。

「止まった…?」

☆☆☆☆

一方、先に行った火野とアंकを除いた飯田達は最上階へと続く階段で照明がついていくのを確認して飯田と耳郎はパツと顔を輝かせていた。

「緑谷君達、やってくれたか！」

「うん！流石火野…！」

「これならエレベーターも問題なく使える筈ですわ！」

「よし、先を急ぐぞ！」

八百万の言葉に後藤は頷き、次のフロアにあるエレベーターへと向かう為、一同は駆け出した。

そして島内でも、見張りのように配置されていた警備マシン達が、正常に戻り次々と撤収していた。島内放送がI・アイランド全体に響き渡る。

『I・アイランドの警備システムは、通常モードになりました。I・アイランドの警備システムは、通常モードになりました』

☆☆☆☆

レセプション会場では照明がついたあと、直ぐにプロヒーロー達の拘束が解除された。

「何だいきなり!?!」

「どうなって…ガッ!?!」

当然の事に動揺する敵達ライアンに自由になったプロヒーロー達が襲い掛かった。

「くそっ！ぐう！」

逃げ出す敵達ライアンを、プロヒーロー達はあっという間に拘束する。軟禁されていた参加者達が、解放してくれたヒーロー達に歓声を上げた。オールマイトは体から微かに蒸気を上げながらも立ち上がり、笑顔を浮かべた。

「(やり遂げてくれたか、皆んな!)」

そして、自分の果たすべき事をする為に、急いで駆け出した。

☆☆☆☆☆☆

気を失ったままのデヴィットを肩に担ぎ、片手でアタツシユケースを持ちながら、ウオルフラムはオーズに蹴られた顔を押しえながら歩く眼鏡の男と共に保管室を後にした。デヴィットの両手両足には金属で拘束されている。

「へりは？」

「到着しています」

「脱出するぞ」

「は、はい」と慌てて眼鏡の男がウオルフラムの後を着いて行つた。

☆☆☆☆

その間、保管室では金属の鉄柱と壁に埋もれていた緑谷とオーズをアंकが顔を歪めながらグリード化した右腕で鉄柱をどかしていく。2人の顔が見えたのを確認したアंकは手を止めて少し離れると彼らは自力で鉄屑の中から這い上がった。

「あ、ありがとうアंक…」

「フン、奴は逃げたぞ」

「分かつて、る…」

オーズはそう言つて緑谷に手を伸ばし、緑谷は手を掴むと引つ張つて引き上げる。直ぐに後を追おうとする2人だが、2人共膝をついて倒れそうになる。それを見ていたアंकは舌打ちをすると火野に声を掛けた。

「ここに来るまでオーズの力を使い過ぎたな」

「そう…みたいだね…。でも、ここで倒れる訳には行かない…！絶対、救げるんだ…！」

身体能力が強化されると言えど使い過ぎは疲労も増加する為鉄柱を動かすのもやっとな素振りを見せるオーズ。いつ倒れてもおかしくない状態の筈なのに、オーズは息切れを起こしながらも何とか立ち上がる。恐らく人を救いたいと思う一心で体からアドレナリンが出ているのだろう。一方緑谷はポツポツと続いている血痕の後があつ

た。デヴィットの血だと直ぐに分かり、緑谷は自分に喝を入れるように両手で頬を叩き、奮い立たせた。

「僕も、大丈夫……行こう……火野君……」
「うん……」

2人の体は既に限界を超えている。だが敵はもう目と鼻の先にいる。オールマイトが来るまでの時間稼ぎくらいは出来ると信じ、2人は重い足腰を上げて駆け出す。そして、アंकもオーズをどこか心配そうな顔をして見つめ、その後をについて行った。

☆☆☆☆☆☆

オールマイトは最上階へと通路を走っていると、後ろポケットに入っていた携帯から着信音が鳴る。相手はメリッサからだ。

「どうした、メリッサ!？」

『マイトおじさま……パパが敵ヴァイランに連れ去られて、デク君やエイジ君達があとを追って……!』

制御ルームに映っているのはデヴィットが連れ去る敵ヴァイラン達。そして別のモニターには痛そうにしながらも必死に後を追う緑谷と火野、そしてアंकが映っていた。ふと、オールマイトは気付いた。他のモニターを見る限りヤミーの姿はどこにも映っておらず、テストルームで散らばっているセルメダルが目に入る。恐らく緑谷達が倒したのだろうと推測したオールマイトはグツと拳に力を入れる。危険を顧みず市民を守る為にどれだけ子供達が頑張ったことかと。そして、泣きそうに切羽詰まったメリッサの声に、オールマイトは体に力がこもり、蒸気が消える。

「大丈夫! 私が行く!」

その顔は覚悟に満ちていた。

屋上ヘリポートでは、手下のパイロットがウォルフラム達を出迎えていた。しかし、2人しかない事にパイロットは疑問を口にする。

「ボス、他の連中は？」

「警備システムが再起動しきる前に出るぞ」

ウォルフラムはそれに答えず、ヘリへと歩きながら指示を出す。足手まといになる仲間は容赦なく切り捨てるのがウォルフラムのやり方なのだろう。

「は、はい！」

察したパイロットと眼鏡の男は慌てて操縦席へと走った時、ウォルフラムに担がれたデヴィットが意識を取り戻したのか呟く。

「私を……殺せ……」

「もう少しだけ罪を重ねよう。その後で望みを叶えてやる。出せ」

そう言うウォルフラムは起動させたヘリの後部ヘデヴィットを乱暴に降ろし、ケースを置く。ウォルフラムも乗り込もうとしたその時、炎の球がわざと外すかのように飛んできて辺りは小さな爆発を引き起こす。

「何だ…？」

「死にたくなければヘリから降りろ、次は外さないぞ」

何事かとウォルフラムは振り返るとグリード化した右腕から白い煙が昇るアंकが威嚇する。その後ろには立っているのも辛そうにする緑谷とオーズが叫ぶ。

「待て！」

「博士を返せ……！」

やってきた緑谷達にデヴィットは目を見開いて驚く。

「成る程、悪事を犯したこの男を捕らえにきたのか？」

バカにするように笑うウォルフラムに緑谷は「違う！」と声を上げ、ワン・フォー・オールを全身に巡らせてバツと飛び出す。同時にオーズも駆け出した。

「僕は博士を救いに来たんだ！」

「そして！お前をここで捕まえる！」

「ガキが凶に乗るな！犯罪者を救けてなんになる!？」

ウォルフラムがヘリポートの床に手を当てると、向かって来る緑谷とオーズに鉄柱が襲う。そしてその後ろにいたアंकにもだった。

「ハアツ!!」

オーズは緑谷の前に先走ると鉄柱をトラクローで引き裂く。緑谷はその場から跳ぶと散らばった鉄柱を緑谷は踏み台として蹴り込み、ジャンプしてウォルフラムへと突っ込んでいく。

「僕はみんなを救ける！博士も救ける!!」

「お前、何言ってるんだア!？」

「うるせえ！ヒーローはそうするんだ！困ってる人を救けるんだ!!」

感情が昂り汚い口調を吐きながら緑谷は息もつかせぬ程の鉄柱を掻い潜り突っ込む。オーズも後に続くよう駆け出したその時、ウォルフラムはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「どうやって!？」

「!!」

緑谷とオーズの目は大きく見開く。ウォルフラムは後ろのデヴィットに銃口を向けていた。鉄柱から退けたアंकは止まっている2人を見て不機嫌そうに舌打ちをすると右腕を突き出して攻撃しようとする。

「っ！アंक待って！」

「ああ!？」

見境なしに攻撃しようとするアंकにハッと気付き、オーズは声を上げる。すると、弱々しくデヴィットが苦しげに叫んだ。

「私はいい……逃げろ……!」

銃を向けられてはこちらも動きようがない。増してやウォルフラムの視界に緑谷達が立っている。隙を作ろうにもどうする事も出来ない状況だ。緑谷とオーズは悔し気に身動き取れず警戒態勢に入るとふてぶてしくウォルフラムは笑った。

「全くヒーローってのは不自由だよなあ！たったこれだけで身動きが取れなくなる！」

動けない緑谷、オーズ、そしてアंकクに向かって鉄柱が襲い掛かる。もろに衝撃を食らった3人は宙に浮くとウォルフラムはすかさず、ヘリポートの地面、そして背後から出て来た鉄柱との間に挟まれ、押し潰された。間を置かず再度下から飛び出た鉄柱が3人を突き上げる。

「ガハッ！」

「うわああ!?!」

「うぐ!!」

3人は地面に落下する。緑谷は口から血を吐き出していた。

「どつちにしろ、利口な生き方じゃない。出せ」

そう吐き捨て、ウォルフラムはヘリへと乗り込む。

浮き上がり、飛び立つヘリ。緑谷は何とか立ちあがろうとするが体に力が入らないのか膝をつく。

「緑谷君…!?!…ぐっ…!?!」

倒れそうになる緑谷に声を掛け、オーズは痛む体に耐えきれず声を漏らす。2人はどうに限界を超えていた。すると、アंकクがよろけながら立ち上がると背中から紅い翼を出して目一杯広げる。

「あんの野郎…!!」

「っ!そうか…!アंकク君なら…飛んで捕まえられる…!あいつは手で触れないと“個性”は発動出来ない筈…!」

「アंकク！」

緑谷の言葉にハツとなったオーズはアंकクに呼び掛けると「俺に命令するな!」と吠えてその場から飛び立った。攻撃を止められた挙句にウォルフラムに攻撃されたのが相当苛立ったのだろう。

アंकクの飛行速度は素早く、あつという間にヘリの真横へと飛翔した。それを見たウォルフラムは感心そうに口を開いた。

「ほお、空を飛ぶ“個性”か?」

「いくら空に逃げようが俺には関係ない!相手が悪かったな!」

アंकクはそう言って右腕を突き出し炎を出そうとした。が、ウォルフラムはニヤリと不敵に笑い座席の下にあった鉄パイプに触れた。

「じゃあその台詞そっくり返してやるよ!」

「!?」

直後、鉄パイプがヘリから飛び出してアंकに襲い掛かる。間一髪でアंकは避けるがその避けた方向に別の鉄パイプが飛んで来てアंकに直撃する。

「がつ!?うわあっ!!」

「っ!アंकっ!!」

空中でもろに直撃したアंकはバランスを崩し、そのままヘリポーターの地面まで落下して激突する。オーズは叫び駆け寄ると、抉れた地面で苦しそうにアंकはもがいていた。すると、出入り口からメリッサが姿を現し、負傷している3人を見て「皆んな!」と慌てて駆け寄る。

「判断を見誤ったな。何も対策無しにヘリに乗り込むと思うか?」

「ぐ…アंक君…!」

「お前は大人しく寝ている」

起き上がるデヴィットにウォルフラムはヘリの壁に激しく叩きつけられ、デヴィットは倒れ込む。どンドン上昇していくヘリ。アंक落下した衝撃で凹んでいた場所で緑谷は悔しそうにヘリに向かって叫んだ。

「博士!!」

「…アंक!お前のメダルを貸し…ぐっ!」

「エイジ君!」

オーズは再びタジャドルに変身しようとメダルを催促する。が、手を伸ばした瞬間激痛が体に走り、オーズは膝をつく。メリッサが心配そうに近寄ると痛みに耐えながら上半身だけ起き上がらせたアंकがオーズの体を見て口を動かす。

「馬鹿…が…!お前もボロボロだろ…!」

「でも!博士が…!!」

「ちくしょう…!博士を…返せえ!!」

理不尽に人を襲う敵への怒りと己の弱さが心をぐちゃぐちゃにする。緑谷は涙を流しながら叫んだ。

だが、その時。

「こういう時は笑え！有精卵達よ！」

「！！」

その声に、その場に居た4人は大きく目を見開く。

それは世界で一番、頼もしい声だ。

タワーの中から弾丸のように飛び出して来た何かが一気に急上昇し、ヘリの上空で止まった。サイラン 敵達はその姿をヘリの中から唾然と見上げる。

「もう大丈夫！何故って!?私が来た!!」

筋骨隆々とした逞しい体で参上したのは我らが誇るNo. 1ヒーローだった。

「「オールマイト…!!」」

「…フン」

唾然とその名を呼ぶ3人に喜びが湧いていた。アंकも鼻を鳴らしてニヤリと笑みを浮かべている。

「親友を返してもらおうぞ！サイラン 敵よ！」

オールマイトは叫ぶと、両手を振った反動でヘリに向かって急降下しながら拳を構え突進する。オールマイトの拳が貫通したヘリは爆発し、炎上しながら墜落する途中、空中で大爆発を起こした。

その爆発の中からデヴィットを抱えたオールマイトがヘリポートに着地するとデヴィットを床に降ろし、肩を支えながら手足の拘束具を壊した。

「パパ…：…：パパ！」

駆け寄ったメリッサにデヴィットは痛みに顔を歪ませながら懸命に口を開いた。

「う…：…：メリッサ…」

「もう大丈夫だ」

オールマイトの言葉にメリッサは涙を浮かべ微笑んだ。その後ろで肩を押しさえながら緑谷はホツとする。

「よかった…」

「フン、No. 1とあろう者が…来るのが遅いんだよ」

「文句言うなよ。…でも、本当によかった…」

もつと早く来ていれば怪我をせずに済んだと言わんばかりにアックはそつぽを向きながら言うと、オーズはツッコみながらも安堵の息を吐く。そんな3人を優しく見守っていたオールマイトにデヴィットは改まったように口を開いた。

「オールマイト…私は…」

だが、次の瞬間。

オールマイトが勢いよく吹っ飛ばされた。墜落したヘリの炎の中から突然鉄柱が飛び出してきたのだ。

「オールマイト！」

転がるオールマイトに緑谷が叫ぶ。駆け寄る間もなく、今度は地面から破るように伸びてきた鉄のコードがデヴィットを巻きつき連れ去る。

「がはっ！」

「パパア!!」

「博士！」

「この攻撃…！」

叫ぶメリツサと緑谷、オーズはウォルフラムの仕業と直ぐに認識して振り返ろうとしたが、揺れる足元から轟音と共に割れ始める。何事かと驚く3人の前で、周り、そして地面から湧き出る金属が凄まじい勢いで形を成していく。鉄パイプ、鉄板、鉄柱、ヘリの残骸、そしてデヴィットまでもがソレに取り込まれていった。

うねるパイプは筋肉組織のように蠢き、鉄は熱を持って蠕動する。まるで鉄で出来た生物みたく禍々しい形成物。その頂点にいるのはウォルフラムだった。

「サムめ…。オールマイトは『個性』が減退して往年の力は無くなったとか言つてたくせに…！」

何かに憑かれたような悍しい目をした仮面のないその顔にはデヴィットが開発した『個性』増幅装置が取り付けられていた。

「あいつ…！博士の…?!」

恐らくヘリが墜落する前にその機械をつけたのだろう。オールマ

イトが咳き込みながら立ち上がる。口元を押さえていた手には血が付いており、体からは限界を知らせるかのように蒸気が上がる。

「……！時間……！」

拘束されていた間、ずっとマッスルフォームを維持していたオールマイトにはもう時間が残されていなかった。一撃で倒さんとオールマイトは「往生際が悪いな！」とウォルフラムに向かって飛び掛かった。

「ッテキサス・S M A A A S H ！！」

渾身の力で拳を叩き込むオールマイト。しかし、それを地面から突き上がったいた鉄の壁に防がれてしまった。しかも衝撃が走るだけで鉄の壁は壊れずに残っている。

「なに!?!」

「!?オールマイト!」

「まさか時間が……!?!」

驚くオールマイト、緑谷にオーズ。いつものオールマイトのパワーならば鉄の壁くらい容易に破壊できた筈だ。

「なんだそりゃ!?!」

馬鹿にした笑みを浮かべながらウォルフラムは手を振り上げると、鉄の壁から鉄柱が伸び、直撃したオールマイトは弾き飛ばされた。勢いよくヘリポートの床に叩きつけられると、衝撃でタワー上部が破損する。それと同時にウォルフラムが形作った金属の塊の根元から青い光が脈を打つように走り、広がっていく。メキメキと音を立て、ウォルフラムの元へ吸いつくように引き寄せられていった。セントラルタワーの一部がウォルフラムの一部となっていく。全ての金属を吸いあげて巨大な形成物になっていく姿に、オーズとアंकは愕然と目を見開いていた。それは緑谷も同じく、彼も見上げる事しかできない。

「流石デヴィット・シールドの作品。『個性』が活性化していくのがわかる……ハハハ、いいぞこれは！いい装置だ!」

自分の強大な力に満足そうに笑う間も、崩れかけた金属が更にウォルフラムにへと吸いあげて巨大化していく。瓦礫の中、オールマイト

は立ち上がりながら顔を歪めた。

「こ、これがデイヴの…」

「パパが作った装置の力…」

メリツサが呟く。崩壊していくタワーを喰らい尽くす塔を表すような異形の金属の塊。

「さて、装置の価値を吊り上げる為にも、オールマイトをぶつ倒すデモンストレーションといこうか!」

宣言をしたウオルフラムは金属を操りオールマイトを攻撃する。凄まじい勢いで鉄柱が襲いかかって来るのを、オールマイトは寸前で避けながらウオルフラムへと飛び掛かろうとする。しかしウオルフラムは静かに笑い、向かって来るオールマイトを虫でも弾くかのよう
に鉄柱を食らわせる。

増幅された“個性”の力にオールマイトは押し負け、そのまま地面へと埋め込まれ続ける。うねる鉄柱に蹂躪されたヘリポートが裂けて衝撃が走り、メリツサが投げ出された。

「きゃあああ!」

「メリツサさん!」

飛び出した緑谷がメリツサを抱えながらオールマイトを振り返る。オーズとアंकも衝撃から身を守ろうと何とか壊れていない地面へと跳んで着地する。そしてオーズはオールマイトを見遣る。鉄柱を必死に耐えるその体からは蒸気が上がり、苦しそうに咳き込む。同じく見ていたアंकは舌打ちをして口を開いた。

「あいつ、もう限界じゃないのか…?」

「オールマイト…!!」

「ハハハハハッ!!」

オールマイトをも上回る自信の力に酔いしれたウオルフラムが続けて鉄柱で攻撃を与えた。緑谷はメリツサを抱えたまま伸びて来る鉄柱を交わす。アंकとオーズも間一髪でその鉄柱を交わしていた。出来る事なら加勢したい。だが言う事を聞かない体である鉄の塊に挑もうとすれば返って足手まといになる。鉄柱を交わしながらオーズとアंक、そして緑谷とメリツサの視線はオールマイトに向かって

いた。

「マイトおじさま……！」

「ぐっ……がは……！」

息つく間もなく鉄柱が雨のように降り注ぐ。絶え間ない攻撃にオールマイトは吐血をしながらも必死に耐え続ける。ウォルフラムはさつさとトドメを刺してやろうと更に鉄柱の数を増やした。

「さつさと潰れちまえ!!」

「!やめろおお!!」

「オールマイト!!」

オーズと緑谷が絶叫したその時、冷気が走った。勢いよくオールマイトに向かっていた鉄柱が一気に凍り、動きを止める。異変に気付いたウォルフラムは別方向から向かってくる小さな爆発音に気付く。

「くたばりやがれえ!!」

跳んで来たのは爆豪で、掌の爆破を連続で繰り出す。ウォルフラムは舌打ちしながら腕をバツと振り下から立ち上げた鉄の壁で攻撃を防ぐ。

「:!!チッ!」

爆豪は攻撃を防がれた事と、腕に走った激痛に舌打ちをした。ライラン敵と警備マシンを爆破し続け、体が悲鳴を上げている。それでも爆豪は不敵な笑みを浮かべて苦戦しているオールマイトに向かって叫んだ。

「あんなクソだせえラスボスに、何やられてんだよ!ええ!?!オールマイト!!」

「爆豪少年……!」

「今のうちに……敵を……!」ライラン

鉄柱を氷結させた轟が辛そうに息を吐く。左から僅かに炎を出して体温調節をしているが、それでも氷結を出せる右側は徐々に凍りついていた。

「轟君!みんな!」

メリツサを下ろし、緑谷は頼もしい仲間の登場に顔を喜ばせる。轟の後ろには八百万を支える飯田、上鳴を支える麗日と耳郎、峰田、切島、そして事前に変身していたバース達がやってきていた。

「あの鉄柱、死力を尽くして止めるぞ！」

「おう！金属の塊は俺達が引き受けます！」

「八百万君！ここを頼む！」

「はいっ！」

バースバスターを構えてエネルギー弾を放ち、先制攻撃腕をするバース。後に続かんと硬化させた切島と、飯田が駆け出し、伸びてくる鉄柱を協力して力を合わせて砕いていく。爆豪も空中から爆破攻撃を続け、轟も氷結攻撃を繰り返していた。そして、集結した全員が一丸となつて立ち向かうその姿勢を見たオーズは鼓舞されるかのようになりに痛む体を見捨てて立ち上がる。

「アंक……終わったらイー・アイランドのアイスたらふく食わせてやる！全力であいつを止めるぞ！」

「チツ……その言葉、絶対だぞっ!!」

「ああーハアアア!!」

全身に力を溜め込み、トラクローを展開、更にバツタレッグを能力解放して、蝗の脚となった脚部で跳び立つと襲いくる鉄柱をトラクローで切り裂いて行く。アंकも背中から美しい赤の翼を広げてその後に続くように鉄柱に向かって炎の球を連続で放射させる。

皆んな、とつくに限界を超えている。それでも動くのは救いたいから。雄英生徒達の奮闘に、オールマイトは底を尽きそうだった力が再び湧き上がってくる。蒸気が消えて、筋肉を唸らせる。

「教え子達にこうも発破をかけられては、限界だなんだと言ってもらえないな！限界を超えて、更に向こうへ……！」

オールマイトは向かい合っていた鉄柱を一撃で破壊し、ウォルフラムへと飛び上がった。

「そう、Plus Ultraだ!!」

凍っていた鉄柱がウォルフラムの操作によって碎かれ、再びオールマイトに襲いかかる。間入れずやってくる鉄柱を粉碎しオールマイトは突き進む。次々と粉碎して突っ込んでくるオールマイトにウォルフラムは腕を振り、同時に三方向から鉄柱で襲撃する。オールマイトはバツと腕をクロスさせ、そのまま突撃した。

「ッカロナイナ・S M A A A S H!!」

激しい金属音と共に鉄柱が砕かれ衝撃波が広がる。爆風に耐えながらその行方を緑谷とメリツサは見つめていた。

「観念しろ、敵よ!!」

勢い衰えず、射抜くように突っ込むオールマイト。ウォルフラムに向かつて拳を振りかぶろうとしたその時、後方の鉄柱から無数のワイヤーが伸びて、拘束されるとオールマイトの動きがピタリと止まる。「この程度……!」

ワイヤーを引きちぎろうとするが、その前にウォルフラムの手がオールマイトの首を掴んだ。片手で締め上げようとしたその腕が、異様に膨らんでいくと、服が破かれ筋肉が盛り上がっていた。

「観念しろ!?!そりやお前だ、オールマイト」

「っ……!?!」

異常なパワーを感じたオールマイト。その時、左脇腹に強い衝撃が走った。

「ぐっ!!……ぐぐ……がああああ!!」

的確に傷口を抉るウォルフラムの腕がオールマイトを吐血させ、絶叫させた。立ち上る蒸気を見て緑谷は救いなければと駆け出そうとした。

「オールマイ……ぐっ!?!」

しかし満身創痕の体に激痛が走り、思わず蹲ってしまう。メリツサが「デク君!」と慌てて駆け寄る。オールマイトのピンチに気付いた爆豪、轟、オーズ達も、襲ってくる鉄柱に対処するのが精一杯だった。「クソがあああ!!」

悔しさを吐き出す爆豪。

「オールマイト!」とオーズは叫んだ瞬間、鉄柱がオーズの体を直撃し、地面へと吹っ飛ばされる。

「映司!クソ!こんな鉄の塊ごときに手こずるとは俺もオチたもんだ、なあ!」

アंकもオルカとの戦いで本調子が出せない事に腹を立てており、その怒りをぶつけるかのように迫り来る鉄柱を必死に炎で攻撃し続

けていた。

その頃、オールマイトは首を絞められ古傷を抉られ、苦しさで激痛で意識が朦朧としていた最中、気付いた事実には胸騒ぎが徐々に確信へと変わった。

「この力は筋肉増強……個性」の複数持ち……ま、まさか……！」
ハツとするオールマイトにウォルフラムは楽しげに見下しながら口を動かした。

「ああ……この強奪計画を練っている時、彼の方から連絡が来た！是非とも協力したいと言った。何故かと聞いたら、彼の方はこう言ったよ！」

まさかとオールマイトの頭の中にあの男の声が過る。理知的で、穏やかでありながら、静かに闇を持つ醜悪な声が。

『オールマイトの親友が悪に手を染めるといふなら、是が非もそれを手伝いたい。その事実を知ったオールマイトの苦痛に歪む顔が見られないのが残念だけれどね……。近々日本に来たまえ。その時には、君に素敵なプレゼントを我々で送るとしよう……』

それは、倒さなければならぬ宿命の相手。

「オール・フォー・ワン……！」

裏で引いていたその名前を呟き、オールマイトの顔は来るしみから怒りの顔へと変わる。ウォルフラムはその顔を見て愉快そうに見下した。

「ようやくニヤケ面が取れたか！」

「Nooooo!!」

怒りのままワイヤーを引き千切ろうとするオールマイトに、正面から鉄柱が激突する。もがくオールマイトを大きな鉄の塊が左右から挟み打った。

「……!!」

愕然と見開く緑谷の目の前の光景。挟まれたオールマイトにウォルフラムは引力に引きつけられるみたく鉄の塊がオールマイトを

次々と襲う。

「「オールマイト!!」」

「おじさま…!!」

戦う者、身を守る者、この場にいた全員がオールマイトがやられていく様を見て驚愕して叫ぶ。ウォルフラムは高々と笑い声を上げると、その腕を振り上げた。

「さらばだ、オールマイト!!」

すると地面から鋭い鉄柱が何本も伸び、オールマイトを閉じ込めている鉄の塊を貫いた。

「マイトおじさまああああ!!」

悲痛に叫んだメリツサ。だがその時、その塊に向かって飛び出した者がいた。オールマイトを閉じ込めた巨大な塊に臆することなく立ち向かっていく小さな体。爆豪、轟、そしてオーズこと火野はそれが緑谷だと直ぐに気付いた。

緑谷はオールマイトを救いたい一心で激痛の体を顧みず飛び上がり、ワン・フォー・オールの力を全身に漲らせ、その塊に拳を向ける。

「「デトロイト・SMASH」!!」

渾身の力で振るった拳は鉄の塊を見事に打ち砕いた。力を出し切ってしまった緑谷は鉄の瓦礫と共に落下する。それと同時に閉じ込められていたオールマイトが飛び出した。

そして、緑谷が破壊した大量の鉄の塊の一部はウォルフラムを押し上げている鉄の塔に矢のように激突し、塔を崩していったのだ。煙が立ち上る中、ウォルフラムが忌々しそうに緑谷に向かって吐き捨てる。

「あのガキが…ぐっ!!」

更に飛んできた鉄片がウォルフラムに突き刺さる。痛みに気を取られ、益々鉄の塔が崩れていくと、中で気絶していたデヴィットが露わになった。

「ゴホツゴホツ…うっ!」

緑谷が鉄片の下敷きになる寸前に、オールマイトが飛び込み鉄片を背中で跳ね除ける。そして緑谷に向かって口を動かした。

「緑谷少年！そんな体で、何て無茶な……！」

既に緑谷の体は限界を超えていた。満身創痍な緑谷に思わずオールマイトは声を荒げる。すると、緑谷はなんとか体を起こすと、当然のように口を開いた。

「だって……困ってる人を救うのがヒーローだから……！」

ぎこちなく力強く笑うその笑顔に、オールマイトは心を少しうたれた。その頼もしい笑顔は今、自分にとってもヒーローのように見えたのだから。

「……H A H A H A H A、ありがとう。確かに今の私はほんの少しだけ困っている。手を貸してくれ、緑谷少年」

オールマイトはいつものように笑いながら手を伸ばす。緑谷はしっかりと握り、「はい！」と応えた。そのまま緑谷を引き上げると2人は揃って立ち並び、ウォルフラムを見上げた。

崩れたとはいえ、未だに金属の塊は巨大のまま。緑谷は装着しているフルガントレットを見つめる。ここまで何発もスマッシュを打ってしまったからいつ壊れてもおかしくない。だけど、最後まで一緒に戦ってほしいと緑谷は願いを込めた。

「行くぞー！」

「はいー！」

そして、気合いを入れて、2人はウォルフラムに向かって駆け出した。

「ぐっ……くたばり損ないとガキが……。ゴミの分際で往生際が悪いんだよ!!」

痛みにくったりしていたウォルフラムが湧き上がる怒りと共に叫ぶと、腕を振り上げた。小さな鉄片が無数の塊となって2人に散弾のように攻撃を仕掛ける。

「そりゃあ、てめえだろがあー！」

爆豪が叫びながら、散弾に向かって最大限の爆破を浴びせる。散弾が一掃されオールマイトと緑谷が駆け抜けて行く中、続いて鉄柱が降り注いできた。

「させねえー！」

轟が、緑谷達が向かう鉄柱の前に氷壁を出現させる。激突した鉄柱と氷壁がぶつかり合って打ち砕かれた。突き進んでくる緑谷とオールマイトにウォルフラムが手を振り上げる。

「くたばれえー！」

緑谷とオールマイトの左右から一際大きな鉄柱が襲い掛かろうとする。緑谷は顔を歪ませ拳を構えたその時、別方向からオーズが跳んで来た。

スキヤニングチャージ!!

音声が鳴り響くと同時に赤、黄、緑とタトバを表す色をした大きなエネルギーのリングが3つ出現し、オーズはその輪を潜るように勢いよく通化した。

「先へ!!セイヤアアア!!」

三色の輪を潜り抜けたオーズはそのエネルギーを見に纏い、タトバキックがまず左側の鉄柱に直撃し、粉碎する。そしてその勢いを止めずに今度は右側の鉄柱にへと直撃し、破壊した。砕けた瓦礫が落ちて行く最中、オールマイトと緑谷は止まる事なく駆け抜けていく。

「っ！邪魔だあああ！」

ウォルフラムが叫び、腕を振り上げる。オールマイト達を攻撃する鉄柱がそこかしこから伸び、八百万達がいる地面すらも巡り上げた。メリツサのいる地面も大きく揺れ、鉄片が飛んでくる。

「きゃあー！」

メリツサは吹き飛ばされ転がる。痛みを堪えながら、彼女は必死にオールマイトを目で追った。次々と仕掛けてくる鉄の攻撃に2人は臆する事なく交わり、破壊し、突き進む。そして2人は一本の鉄柱の上を全力で駆け抜ける。

「……………」

メリツサは全力で走る2人の姿を、ジッと見つめていた。命懸けで誰かを救けようとする姿からは目が離せない。きつとそれが希望に

繋がるからだ。

「ぐぐぐおおおお!!」

ウォルフラムが力を振り絞るように両手を高く上げる。同時に無数の鉄片が素早い速度で一つに集まっていった。

崩れた鉄片の中、体を起こした麗日が目を見開いて戦慄した。

「ててて……い……なに、あれ……」

それは、ウォルフラムの上に集まっているとてつもなく巨大な金属の塊。啞然としている間も更に鉄片は集まり大きくなっていく。だが、それに向かって上昇する鉄片を足場にして飛び渡りながらオールマイトと緑谷は突き進んで行った。2人はもろともせず、巨大な塊に向かつて拳を構える。

目の前の危機を乗り越え、全力で人を救ける。

それこそがヒーロー。

2人の覚悟、想いの力が全身から拳へと宿る。

「おおおおおっ!!」

爆豪、轟、アंकや変身が解かれた火野達は八百万達と合流し、全員で息を呑みその行方を見守る中、ウォルフラムは怒号と共に両手を振り下ろした。

「タワーン」と潰れちまえええ!!」

巨大な鉄の塊がオールマイトと緑谷に向かって落ちていく。だが2人は勢いを更に加速させ培ったその力を宿した拳として打ち込んだ。

「ダブルデトロイト・SMASH!!!」

「ぐっ!!?ぐ……ぐう!!」

鉄の塊を押し返しウォルフラムへと迫っていた。なんとか押し戻そうとするが2人の力は止まる事なく突き進む。

「おおおおおっ!!」

オールマイトが吐血し、緑谷のフルガントレットにはヒビが入る。それでも、2人はありったけの力で拳を押し込んでいく。

「ぐぐ……ぐ……ガハッ!」

必死で抵抗しているウォルフラムの頭に装着している個性増幅装置が、オーバーワークで異常動作を起こす。2人の圧倒的な力により耐え切れずに腕を大きく弾かれた。形成した鉄は崩れ始め、土煙が舞う瓦礫の中を2人は更にウォルフラムの元へ。

「行つけええええ!!」

麗日の必死の応援に耳郎と八百万も続く。

「オールマイト!!」

その横で座り込んでいた上鳴も必死に「ウェイイ」と声を上げた。そして呼応するかのように切島、飯田、峰田、後藤が叫ぶ。

「緑谷!!」

「緑谷君!!」

「決める!!」

「ぶちかませええつ!!」

「行つけええええ!!オールマイト!緑谷君!!」

爆豪、轟に続いて火野も全力で声を張り上げる。アंकも応援こそはしないがその見守る目には強い思いが込められていた。皆んなの思いを受けながら、2人は再び拳を大きく構えた。人々の平和を願うその強い思いが限界をなくし、希望という光へと紡がれる。

「更に!!」

緑谷の声にオールマイトが続く。

「向こうへ!!」

そして、2人の拳と声の一つとなり合わさる。

「PlusUltra!!!」

「!!うおおおおおお!!」

渾身の力。フルガントレットが壊れても尚緑谷は止まることなく拳を突き出し続ける。2人の拳は容赦なくウォルフラムを打ち砕く。凄まじい勢いと威力に増幅装置から光が漏れ爆発した。ウォルフラムを失った金属の塔が崩れていく。その崩れいく鉄片と一緒にデヴィットも落下していた。絡まるコードが彼の体の身を守っている。

朦朧とする意識の中、デヴィットは微かな光を感じるような気がして僅かに目を開けた。そこに映るのは、若き日のオールマイトだった。「う……」

瞬きをする。拳を振り上げ、飛んでいたのは緑谷だった。その姿は、若き日のオールマイトにそっくりだった。デヴィットは目に焼きつける。彼もまた、ヒーローなのだ。

「や、やったのか……」

崩れる金属のタワーを見ながら飯田が呟く。その後ろで確信へと変わった思いで峰田が拳を振り上げる。

「やったんだ……敵をやっつけたんだあ!!」
サイラン

その勝利に、皆んなに笑顔が戻る。沸き立つその喜びに轟も笑顔が浮かんだ。爆豪も笑みを浮かべているのに轟が気付くと「ケツ!」と爆豪はそっぽを向いた。

「やったな、火野」

「うん、後藤さん。あ、怪我は大丈夫ですか?」

「ふっ……お前の方が酷いだろ」

後藤は火野に近寄り喜びを分かち合おうとする。だが火野は後藤の体を見て心配そうに見つめていた。相変わらずのお節介者に息を吐くが、今はそれが笑いへと変わる。アंकもまた、首を傾げる火野を見て静かに笑みを浮かべていた。

いつの間にか、夜の空はすっかり白みを帯びていて夜明け直前の淡い色をした夜空となっていた。その空の下、吹っ飛んだウォルフラムが装置の影響かガリガリの姿となって鉄片にぶら下がった状態で絶していた。

「ぶはっ!」

ふと、少し離れた瓦礫の中から顔を出した緑谷にメリッサが気づく。

「デク君!」

「っ!メリッサさん!」

「よかった……!」

メリッサは緑谷の無事に笑顔を浮かべていた。その頃、別の場所で

は探していたデヴィットを鉄片にもたれさせたオールマイルトが「デヴィ：デヴィ：！」と心配そうに声を掛けていた。その半身はトウルーフォームになっている。

「……オール、マイルト……」

気付いたデヴィットに、オールマイルトは微笑む。

「助けに来たぞ、デヴィ」

「ありがとう……」

その時、鉄片の山からオールマイルト達に声がかけられた。

「パパ！」

「オールマイルト！」

安堵して喜びの笑顔を見せる緑谷とメリッサ。そんな2人を見たオールマイルトは口を動かした。

「礼なら、メリッサと緑谷少年、そして助けに来てくれた子供達に言うべきだ」

オールマイルトの言葉にデヴィットは緑谷達に目を向ける。涙目を拭うメリッサはデヴィットの安否を確認すると、緑谷に向き合う。

「良かった……本当にありがとう。デク君達のお陰で、皆を救える事ができた」

すると緑谷も向き合い、「メリッサさんもです」と告げた。

「え？」

「僕は、メリッサさんのフルガントレットに何度も救われました。ありがとうございます」

「デク君……」

何度も命懸けで助けてくれたのは緑谷なのに自分の発明した物が役に立った事にメリッサは僅かに驚いていた。同時に嬉しかった。微笑むメリッサに緑谷は掻い摘んで申し訳なさそうに口を開いた。

「あ、でもすみません。壊しちゃって……」

「ふふっ、そんなこと……」

「デク君……メリッサさん！」

笑うメリッサ。すると、分断された麗日達の声が聞こえた。2人は見下ろすと、元気よく手を振る麗日と峰田と火野。2人の姿にホッと

する八百万と耳郎。やっと本調子が戻った上鳴はキョロキョロしていた。

「怪我はないか2人共！」

「やったな、緑谷！」

飯田と切島が安否を確認して喜びの声を上げている。その後ろでは誇らしげに後藤と轟が微笑んでいた。爆豪とアंकはお互い距離を取りつつ気のない素振りをしている。

「大丈夫！オールマイトも博士も無事だよ！」

笑顔で振り返す緑谷。メリッサは「みんなは大丈夫!？」と声を上げると飯田と麗日が「大丈夫です！」と大きく返事をしている。緑谷とメリッサは顔を見合わせて笑顔が浮かんだ。

「メリッサから大体の事情は聞いたよ」

全身トウルーフフォームへと戻ったオールマイトは、デヴィットの怪我を応急処置しながら静かにそう言った。数秒黙ったデヴィットはゆっくりと口を開く。

「……………私は…君という光を失うのが、築き上げた平和が崩れていくのが怖かった」

「……………」

ジツと聞いているオールマイトを、デヴィットは見つめた。

「だが私の考えも、あの装置も、所詮は現状維持の産物でしかない。未来が、希望が、すぐそこにあるというのに、私はそれに気付かなかつた……………」

立ちあがろうとするデヴィットをオールマイトが支える。そして2人は火野達に向かって手を振る緑谷とメリッサの後ろ姿を見上げた。

「メリッサが…私の跡を継ぐようしているように、ミドリヤ・イズク……………彼が…君の跡を継ぐ者なんだな」

目に焼きつけた緑谷の姿に、デヴィットは希望が見えた。その言葉を聞いたオールマイトは口を開く。

「まだまだ未熟さ。しかし、彼は誰よりもヒーローとして輝ける可能性を秘めている」

強く確信しているオールマイトの横顔にデヴィットは穏やかに微笑んだ。

「私にも見えるよ、トシ……。君と同じ光が。ヒーローの輝きが……」
デヴィットも同じように緑谷を見上げていた。

長かった夜が、やっと沈んでいく。

太陽が目覚めて、I・アイランドに光が差し込んだ。その淡い光に照らされていた少年少女達は少しだけ、逞しく見えていたのだった。

第8章 く林間合宿く
No. 77 道中の騒動

華やかな超人社会の裏側に蠢く悪意。何度退けられても暗闇の中に身を潜め 力を蓄え再び動き出す。それは、敵ライアン連合率いる死柄木弔が潜むバーにて、その話は着々と進められたのだ。

「さすが先生だ…。どんなに調べても分からなかった奴らの目的地をこうもたやすく見つけてくれた」

暇を持って余すかのようにカウンター席の上に散らばるトランプを1枚ずつ積み上げてタワーを完成させる死柄木が呟く。それを聞いた向い側に居る黒霧が口を開く。

「彼らを待機させていた甲斐がありましたね、死柄木弔」

黒霧がそう言う間に、タワーの一番上のトランプのバランスが崩れてバラバラと散らばった。死柄木は興が冷めたのか席を立ち「…まあ」と応えると、バーの出入り口の扉がベルの鳴る音と共に少しだけ開かれる。

「組み合いから連絡が来た」

少し開かれた扉の向こうから煙草の煙が立ち上る。闇ブローカーの義蘭の声だ。義蘭は入りもせずには扉越しで話を進め始める。

「明日の朝までに届けるそうさ。急ごしらえなんで見てくれは悪いが品質は保証するってよ」

「無理なお願いをしました…。申し訳ありません」

律儀に黒霧が謝ると扉が更に開かれて義蘭顔を出す。指で挟む煙草を啜えると空いた手で気にすんなど言わんばかりに軽く手を振るい、煙草を吹かしながら死柄木に向かつて口を動かした。

「なあ、死柄木さん。組み合いがあんたの無茶な要求をのんだ理由がわかるかい？皆あんたに期待してるのさ。敵ライアン連合が活気づけば闇の中で燻ってる連中が動き出す。そうなりや俺らみたいな者達もそのおこぼれに預かれる…ってね」

勢力を上げている敵^{サイラン}連合が名を上げ動けばそれだけ闇の中に潜む義蘭のようなブローカー達が動きやすくなり、それに賛同する敵^{サイラン}達もまた活発になる。そんな目論見を喜ばしそうに伝える義蘭に死柄木は機嫌良く返事をした。

「安心しろ…時期忙しきで手が回らなくなる」

「ははっ…そりや楽しみだ」

一旦区切り煙草を吸う義蘭。要は伝えたのか義蘭は「じゃ、まいど」と言い残してバーから出て行く。

「目的地に手駒。獲物が揃った……」

義蘭の言伝を聞き、死柄木は企みの笑みを浮かべる。計画が順調に進んでいるのが嬉しいのだろうか、徐々にその笑みは悍しい笑みへと変わっていった。

「なら…ゲームスタートだ……!」

☆☆☆☆☆☆☆☆

I・アイランドの事件から帰国した1週間後、夏休みの宿題に勤しんだ火野は休みを謳歌する事はなかったが、1日だけ緑谷の誘いによりA組の男子生徒はプールの誘いを受けていた日があった。それもあつという間に過ぎ、本日。林間合宿の当日がやってきた。

「雄英高は一学期を終え、現在夏休み期間に入っている。だがヒーローを目指す諸君に安息の日々は訪れない。この林間合宿でさらなる高みへ、Plus Ultraを目指してもらおう」

「「「はー!」」」

雄英高校前で集まったA組生徒達は相澤の説明に大きく返事をする。この合宿ではB組のヒーロー科と合同合宿の為、隣では担任のブラドキングを軸にB組生徒達も集合して説明を受けていた。

強化合宿とは言えど楽しみにする者もいれば、真剣に取り組もうと気合いを入れる者もいた。そして、まだ出発までに時間があるので雑談をする者もいた。その中の1人、麗日が緑谷に声を掛けている。

「デク君、ついに林間合宿の始まりだね！」

「う、うんー!? そうだね麗日サン！」

期待を胸に笑顔を見せる麗日。だが相変わらずの至近距離での会話を緑谷は徐々に顔を赤く染めらせてたじろぐ。そんな緑谷を見て麗日は疑問に口を開いた。

「どうしたの？」

「い、いやー、そのー!?!」

しどろもどろに返事し、大袈裟に腕を振るう緑谷。すると、麗日は期末試験の時に青山に言われた事を思い出したのか脳内に彼の声が過る。

『君、彼の事好きなの?』

「……」

ボツと赤面になる麗日。緑谷の事を意識してしまったのか麗日は誤魔化そうと声を張り上げた。

「が、がが合宿だね!! ガツシユクガツシユク！」

「ガツシユク、ガツシユク!!」

意識せまいと麗日は物凄いスピードで緑谷から離れるとテンションを上げてリズムよく手拍子をし始めた。それに重なって同じく楽しみにしていた生徒の芦戸と上鳴が便乗して手拍子をする。

それを微笑ましく見ていた火野に耳郎が声を掛けた。

「合宿楽しみだね、火野」

「耳郎さん、うん。でも強化合宿だから何が起きるかわからないし、気を引き締めないと」

火野の言葉に「真面目だなあ」と苦笑する。ふと、火野の荷物を見て疑問に思ったのか耳郎は口を開いた。

「荷物それだけ?」

「え? ああ、うん。島で余分に持って行き過ぎたのを反省して今回は出来るだけ少なめにしたんだ。体操服2着とタオル…歯ブラシと…」

あとパンツ5枚」

「何でパンツだけそんなに多いの…」

ぽんぽんと肩下げ鞆を叩きながら言う火野に耳郎は脂汗を流す。男はいつ死ぬか分からないからせめてパンツは一張羅で履いておけ。火野の祖父の遺言らしくA組生徒達は把握はしているものの、女性にとってはとても恥ずかしい名言だと思ふのだろう。

各々が雑談をしている時、ふとB組から影が忍び寄った。

「え？A組補習いるの？つまり赤点取った人がいるって事!?ええ!?おかしくない!?おかしくない!?A組はB組よりずっと優秀なはずなのに!?あれれれえ!?」

「うっわ、B組の物間…」

清々しい表情とは裏腹に張り上げた声には煽るような嫌味つたらしく、ぐいぐいと詰め寄るB組生徒の物間。耳郎は眉を寄せて嫌そうに顔を歪めると、物間の背後に近寄り、後頭部に手刀を綺麗に当てて気絶させる者が現れる。同じくB組生徒で、姉御的存在である拳藤だ。

「ごめんな」

気絶している物間の首根っこを掴み連れて行く拳藤。もはやそのやり取りはB組の挨拶事項みたいな習慣となっていた。顔を引き攣らせてA組生徒達は見送っているとB組生徒の女子達が声を掛けてくる。

「物間怖」

「体育祭じゃなんやかんやあつたけど、まアよろしくねA組」

B組の柳がボソツと呟くと柳の横にいた小森と後ろにいた角取が同意してコクリと頷いていた。その後に取り蔭が愛想良くA組に挨拶をすると小大が「ん」と頷く。A組にも引けを取らないその可憐さが集結するB組女子達。そのまま気さくに挨拶をすれば男子生徒は目の保養として終わったかもしれない。だが、それを踏み壊す発言を峰田がした。

「よりどりみどりがよ…!!」

下心満載の笑みと溢れる涎を拭う仕草。更には息遣いも荒い。流

石にまずいと思ったのか切島が「お前ダメだぞ、そろそろ」と真顔で注意をしていた。すると、集合場所に合宿用の大型バスが2台やってくる。確認した委員長の飯田が声を張り上げた。

「A組のバスはこっちだ、席順に並びたまえ！」

いつも以上に張り切る声が雄英高校のバス乗り場に響いた。席順と言われ、火野は耳郎と一旦別れて列に並んでいると、緑谷が声を掛けてくる。

「いい天気で良かったね！」

「うん、本当だね。寝る前にてるてる坊主作っただけで見事に晴れたなあ」

「懐かしいな…俺も小さい頃よく作ってた」

2人の会話に轟が話しかけてくる。他愛のない日常会話をしながらバスに乗り込むA組生徒達。

「B組のバスはこっちだよー。早くしな」

同時にB組委員長である拳藤が声をかけると、B組生徒もぞろぞろとバスに乗り込んでいく。A組のバスは乗り込んだはいいものを、席順と言われた筈なのに全員は自由気ままだった。

「お茶子ちゃん、一緒に座らない？」

蛙吹は席を探してキョロキョロしている麗日に声を掛ける。

「うん！座る座る！」

「俺、まーどぎわー！」

「ちよつと誰だよ、荷物邪魔！」

「あ、そこ私が座ろうとしたのにー！」

「ちよちよ！押さないでよ！」

「いだっ!?誰だ足踏んだ奴!？」

「静粛にー！席順と言った筈だぞ君達!!」

右往左往にしている車内、だが地を這うような相澤の一言が車内を静ませた。

「どこでもいいからさっさと座れ」

エンジンをかけたバスが僅かに振動して、それからゆっくりと走り出す。次第にスピードを上げ流れる景色に、相澤の一声で静まり返っていた車内はすぐに切れた。

「音楽流そうぜ！夏っぽいの！チューブだチューブ！」

「バッカ夏といやキャロルの夏の終りだぜ！」

「終わるのかよ」

1番前の席に並んで座った上鳴と切島がスマホを片手に話す横で、同じく並んで座っている芦戸と葉隠がしりとりをしている。

「しりどりの『り』！」

「りそな銀行！『う』！」

「ウン十万円！」

車内は、まるで小学生の遠足のようなウキウキした賑やかさが充満していた。

「……………」

葉隠達の前の席、相澤はあまりの浮かれように呆れていた時、委員長の飯田が使命感を感じたのか立ち上がり叫ぶ。飯田は上鳴の後ろの席でその隣は緑谷。更に後ろの席には耳郎と八百万が座っていた。「みんな！静かにするんだ！席を立つべからず！べからずなんだ！みんな！」

懸命に静かにさせようと叫ぶが、その声はウキウキとした空気にかき消されていた。隣の緑谷が気の毒そうに宥める。

「ま…まあまあ飯田君。それよりも、危ないから座った方がいいよ」

「ムー俺としたことが！」

「……………まあいいか。ワイワイ出来るのも、今のうちだけだ……………」

相澤は注意するのを諦め、仮眠を取るべく目を瞑った。何度注意したところで、噴火する火山のように騒ぐのは既に分かりきっている。若さが取り柄の生徒達とはこれから1週間、寝食をともにしなければならぬのだ。無駄なエネルギーを消費したくない。この後に迫り

来る合宿の内容を知らされてない生徒達には、今だけ、この時間を学
生気分でいさせて、相澤は眠りについた。

「お茶子ちゃん、ポッキー食べる？」

火野と耳郎の列に並んで座っている蛙吹が赤く細長い箱、お菓子の
ポッキーを取り出し袋を開けると麗日に差し出す。

「食べるー！」

「ポッキーちょうだい」

「あ、私飴持ってきたの！梅雨ちゃんどうぞ！」

「ありがとう、頂くわ」

「ねえ、ポッキーちょうだいよ」

麗日達の会話から強請るように前席から顔を覗かせるのは青山
だった。因みに葉隠達の後ろの席で隣に座っているのは轟だった。

「うお！青山君！」

「そんなにポッキー好きだったの？青山ちゃん」

驚く麗日の隣でポッキーを青山に差し出す蛙吹。青山は一本貰う
と「メルシイ」と言つて無駄に髪をかき上げながら口を開いた。

「昨日、荷物の準備で遅くなって寝坊してしまったのさ。それで朝食
を食べ損ねてしまったんだよね。だからせめてポッキーをと思って
さ☆」

「せめてつてポッキーに失礼やよ。グリコの大看板の商品なんだよ
？」

青山の言葉に少しだけムツと顔を歪める麗日。彼女は節約生活を
している為なのか、贅沢品のお菓子をついで呼ばわりされたのがいけ
好かなかったのだろう。

「ソーリー、レディ」

あまり反省していない様子でポッキーを食べ終えた青山はそう言
うと、ポケットから自作なのかキラキラにデコレーションをされた手
鏡をサツと取り出す。そして自分の顔を映しては色々な角度から入
念に身だしなみをチェックし始めた。

「……眩しい」

隣で眠たそうにしていた轟が、日光が手鏡に反射したのか顔を歪ま

せる。しかし青山は「ソーリー☆」と謝って少し窓際に寄ったもの、一向に止める気配はなかった。

「ああ、朝日よりもまばゆい僕☆」

「…ブレないな、青山君」

「そうね、ある意味凄いわ」

一連を見ていた麗日と蛙吹がそう言う。その後ろの席には爆豪と常闇が座っており、相澤と同じく和気藹々とした車内に馴染まないのか爆豪は寝ていた。隣の常闇は起きてはいるが気配を消すようにひっそりと沈黙している。一方、その列の隣には火野が座っており、窓際には障子が景色を眺めていた。火野は爆豪と常闇の異様な組み合わせが気になるのかチラチラと見ていると気付いた障子が声を掛ける。

「どうした、火野？」

「え？ああ、あの2人が組み合わせって中々見れないからちよつと気になってて…」

「確かにな。…だが、それを言ったら俺達も中々ない組み合わせだと思うが？」

複製の「個性」ではなくマスクで覆った口で喋る障子に火野は「あ、確かにね」と頷く。基本的には火野は緑谷か轟とよく連んでいる事が多い。決して他の生徒達とは仲が悪いわけではなく、気が合う人がいればその人と一緒に行動する。人間誰しもがそうしている筈だ。すると、障子が鞆からゴソゴソと何かを探り緑色のお菓子の箱を取り出した。

「たけのこの里持ってきたんだ。道中で小腹が空くと思ってな。食べるか？」

「いいの？ありがとう！障子君ってこっちが好きなの？」

封を開けて差し出すお菓子に火野は一つ摘んで口へと入れる。食べ終えた火野の質問に障子は小さく首を振るって応えた。

「俺は別にどっちでもいい。たまたま目に入ったのがコレだったただだ」

「そうなんだ。正直俺もどっちかって言われたら迷うんだけど、いざ

買おうってなったらやっぱりその時の気分が出ちゃうよね」

火野の言葉に障子は「そうだな」と頷き、「個性」で複製させた口の中にたけのこの里を入れて食べていた。すると、気になったのか障子が火野を見るなり口を開いた。

「そういえば、アंकはどうした？朝から姿が見えないようだが？」

「今は体の中で寝てるよ。コイツこう見えて朝弱いみたいなんだ」

「…そう、なのか？」

どこか不思議そうな顔をする障子。火野は気になり、「どうしたの？」と声をかける。

「前に聞いたが…確かアंकは、火野の赤い鳥属性のコアメダルから生まれたんだろ？」

「うん」

「鳥なのに朝が弱いのだろうかと思ってな」

障子の言葉に火野は「あゝ」と半分疑問を抱きながら納得する。言われてみれば鳥のグリードのアंकは日常でも気になる行為をする事があつた。やたら高い場所に居座る事が多く、火野の家でも使っていない2段ベッドの上に赤いシーツを被せてそこを寝床にしている。プライベートでも道中休憩する時は木の上で休憩している事も何度かあつた。他にも、比奈が作ってくれたご飯に鶏肉が入っているとこの世の物とは思えない戦慄した顔で凝視して嫌そうに食べながら1人で怒っていたりもあつた。

「…まあ、鳥と言っても鶏とかそういう類いではないと思うよ？」

「…そうだな。すまない、野暮な事を聞いた」

朝に活発に行動する鶏や、夜に動く梟など、鳥は鳥でも様々な種類がいる。火野の言葉に障子が謝ると「何で謝るのさっ、全然気にしてないよ」と機嫌良く返していた。その後、軽い雑談をして2人の会話が弾んでいる最中、隣の列に並んで座っていた常闇が寝ている爆豪に声をかけていた。

「…爆豪。…爆豪」

「…んあ？…んあ？」

静かに呼び続ける常闇の声に爆豪は目を覚まし、呼ばれている事に

気付いた。その途端、起こしてはならない獣を呼び覚ましたみたたく爆豪は吠える。

「ああ!!?何だ鳥野郎!」

「ちよつと……聞きたい事がある……」

寝起きだというのに相変わらずの態度で吐き散らす爆豪。彼の性格は重々承知しているのか、引けを取らずに冷静な対応で常闇が話しかけていた。

「るせつ、話しかけんな……!眠いんだよこつちは……!」

「そう言うな。隣の席になったのも……因果だ」

「因果ツ?てめえ何言ってやがる……!」

普段使う事があまりない言葉に爆豪は顔を歪ませる。だが、珍しく話しかけてくる常闇の目を見た爆豪は諦めたのか軽く舌打ちをする。仮眠をとっていたのに起こしてまで聞きたい事があるのだろうかと思っただからだ。

「聞くなら早く聞け!」

了承を得た常闇は「感謝する」と礼を言うと、さつそく質問をした。

「お前、確か『ベストジーニスト』のところに職場体験に行ったな?

……どうだった?」

「ああ!!?」

質問……否。ベストジーニストのワードを聞いた爆豪は怒鳴り声で悪態吐く。だが負けずと常闇はそのまま口を動かした。

「何せNo.4ヒーローだ……。どんな様子だったか……興味はある」

ビルボードランキング、No.4のベストジーニストの元へ職場体験に行ったのはこのクラスで爆豪のみ。有名なプロがどんな風に活動しているのか気になったのだろう。だが、爆豪は更に苛つきが増したのか怒号する。

「うるせえ!どんなじゃねえ、思い出させんな!殺すぞ!!」

「思い出させるな……?何だ、合わなかったのか?」

「合うわけねーだろ!キザな野郎だしピッチピチなジーパンがユニフォームだし、髪型をこれまたピッチピチの七三分けにされるし!全くどんだけピッチピチにさせる気だ!あのデニム野郎!!」

嫌な記憶が蘇ったのか軽く愚痴みたく吐き散らす爆豪。それを聞いた常闇は自分の思っていた思想を口にする。

「俺は実際に会ったことはないが、テレビや新聞から推測すると、確かに彼は規律を重視する傾向がある。…フツ、そうになると、お前とは水と油だったかもしれないな…」

「うるせえっ！アレと合う奴なんざ、ウチで言えば、クソ真面目しか取り柄のないクソデクか、アホみたいなお節介が取り柄の三色野郎とか、後は眼鏡野郎ぐらいなもんだっ！」

会話が進む度に吠える爆豪。すると、爆豪なりの呼び方をするのに反応した火野が気になってチラリと爆豪達の方へと振り返る。同時に緑谷もビクツと反応して焦るように振り返っていた。

「類は友を呼ぶ…か。確かに、プロヒーローの事務所に入るにしろ、相棒サイドキックになるにしろ、ランクが上位のヒーローでも自分と相性が良いとは限らない…。お前は、No. 4ヒーローであっても、その色には染まらなかった…。寄らば大樹の陰にはならなかったということか……」

強大なものが安心。頼る相手を選ぶならば、力のある者が得策である。常闇が言いたいのはそう言う意味なのだろう。すると、それを聞いた爆豪が疑問を浮かべるような険しい表情となって息を吸い込む。

「……………てめエ、……………今日はやけに喋るな？」
「ん？そうか…？俺は別に無口でもないぞ？饒舌でもないがな」

爆豪が驚くのも無理はない。ここまで常闇が淡々と喋るのはクラスでも見た事がないからだ。途中から聞いていた火野と緑谷も同じく、物珍しそうな表情で驚きながらその様子を見ていた。だが、次の爆豪の発する言葉で驚きが驚愕へと変わった。

「ていうか……………お前本当に高1か？」

「え？」

「……………何？」

予想外の発言に聞いていた緑谷と火野は思わず声を漏らす。それは常闇も同じで、先程までの友好的な感情とは異なる苛つきを覚えた目付きで反応した。

「やけに古くて小難しい、普通の高1は使わねえような言葉ばかり使えだろうか？実は…、年齢誤魔化してるジジイなんじゃねえのか!？」

「ジジイ!？」

「爺…!?フツ笑止。俺は歴とした高校生…15歳だ」

またしても予想外の言葉に火野と緑谷は盛大に声を漏らす。流石の常闇も思いがけない発言に一瞬愕然と顔を歪ませたが、有り得ないと自身の年齢を主張した。だが爆豪は止まることなく煽るような言い方が混じる口調で吹き出し

「ブふふっつ！笑止って、ジジイしか言わねえよ!？」

「何だ俺は単に古典的な言葉を使っているだけだ!？」

「古典って自分をジジイだって認めてんじやねえか!？」

「何だと!?そこまで愚弄するなら俺のダークシャドウを食らってみるか!？」

「あー上等だ!!てめエの『個性』なんざ俺の爆破で捻り潰してやんよ!!」

「笑止いいいい!!」

「オラまた笑止っつったな!?やっぱてめエジジイじゃねえか!!」

2人は喧嘩腰となつて物凄い早口で怒鳴り始める。今にも立ち上がって喧嘩が始まるのではないかという雰囲気になつて周りの生徒達が何だ何だと爆豪と常闇へと振り返り始めていた。緑谷も「かつちゃん!？」とオロオロしていると、これ以上はまずいと思ひ火野は揺れるバスの中で立ち上がり、慌てて止めに入る。

「ちよちよちよちよ!?!2人共落ち着いてっ!!」

「ああっ!?!うるせえ三色野郎!今はこの鳥野郎に用があるんだよ!邪魔すんな!」

「やめろって!場と状況考えろよ!」

爆豪の飛び火が火野に掛かりつつも、火野の説得により何とかその場は何とか治つたのだった。

ハプニングが起きた数十分後、緊迫とした雰囲気は消え去り、再び車内は和気藹々となっていた。騒動が発生した後、これ以上2人が隣に居合わせるのは危険と判断した火野は自ら爆豪の隣に座り、常闇は障子の隣の席へと移動していた。常闇は冷静さを取り戻して今は自信の反省を兼ねて目を閉じ、ひっそりと瞑想をしていた。一方で爆豪は火野が隣に来た事に最初は文句を垂れ流していたが、今では大人しくなつて再び仮眠をしていた。やっと一息出来ると火野は安堵する。

「大変だったな、火野」

ふと、後部座席から尾白が声を掛けてきた。一番後ろの席には、尾白と瀬呂。その隣には峰田と砂藤が座っている。

「あーうん…。一時はどうなるかと思ったよ…」

「ぶつちやけ委員長よりも委員長らしい事してたな」

火野は爆豪を起さないよう溜息混じりの小声で応え、瀬呂が顔を出して気さくにそう言う。

「そんな事ないよ、たまたま隣の列に座ってただけだから」

「まあ何はともあれナイスだったぜ火野。オイラ達後ろの席だったからよ、危うくこつちまで八つ当たりが飛んでくるんじゃないかってヒヤヒヤしたぜ…」

ホツとする峰田が言うと、尾白が「そうだね」と頷いた。すると、瀬呂が話を変えて合宿の話題を持ちかけてくる。

「てかよ、マジで合宿楽しみなんだよな。芦戸じゃねーけど、肝試しとかよ。ワクワクすんな！ワツと驚かすの楽しそうだし」

「張り切ってるね、瀬呂君」

「ったりめーよ！合宿での醍醐味だろ！脅かし役になった時の為、色々考えてあるんだからな！」

上機嫌に喋る瀬呂。大方、「個性」のテープで木や地面などにお化けの模型を貼り付けるんだらうなと火野は予想して、「ほどほどにね」

と苦笑する。

「わかるぜ瀬呂！ワツと後ろからおっぱい揉んだりな！」

「いや、それ犯罪だから」

瀬呂が盛り上がる会話に峰田が興奮気味で指先を嫌らしく動かしながらそう言うのと、呆れ顔でツツコむ尾白。すると、峰田の隣で砂藤が可愛らしい包み紙を広げた。

「なあ、お前らマシユマロ食う？バニラとチョコとメロン味だけだよ」

「なに!?マシユマロおっぱい!?!」

「ブレないなあ」

峰田の思考は常に性と共通しているようだ。瀬呂、尾白、火野と峰田は有り難くマシユマロを頂いている。結構な量を作ったのか包み紙の中にはまだ沢山残っており、前列の障子と常闇にもあげていた。

「ヤオモモ、これ聴く?クラシックをアレンジしているバンドなんだ」

「まあ、興味深いですわ」

「じゃ、一緒に聴こ」

障子達の前席は八百万と耳郎。音楽好きな耳郎は、クラシックが好きだと言う八百万の意見を聞いた。耳郎は気に入りそうな曲を詮索し、2人は片方ずつのイヤホンで音楽を聴く。

「マシユマロおっぱい美味すぎだろお!?!」

「おっぱい言うな」

一方、砂藤から貰ったマシユマロがあまりにも美味しかったのか性混じりの発言をしながらもりもりと食べる峰田に瀬呂がツツコむ。だが、大量に食べて口の中の水分が持っていかけたのか、峰田は持ってきていたグレープジュースをがぶがぶと勢いよく飲んでいたのであった。

あれから1時間が経過し、山道を走らせていたバスが休憩所も何もないパーキングスペースにバスが停車する。窓から見える景色は建物など見当たらない、見渡す限りの山ばかりだった。

「さっさと降りろよ」

相澤に促され、皆んなはそれぞれ休憩かと伸びをしながら立ち上がる。ジュースを飲み過ぎた峰田は「おしっこ……！」と体を震わせながらいち早くバスを降りていく。

「んー……！ずつと座つてると体が痛いな……」

「もう老化現象？」

「なわけないだろ」

降りた矢先にぐーっと背伸びをしてボヤク火野に、ふざけた笑みで上鳴が茶々を入れる。苦笑しながら応える火野の隣では、今にも漏れそうなのか股間を押さええながら「おしっこおしっこ……」とか細かい声で訴えていた。

そして広い空、広大な山々を堪能しながら火野は新鮮な空気を吸い込む。山に続く眼下に広がる森は鬱蒼としている。そんな中、気掛かりに思ったのか、上鳴が呟いた。

「つか何っこ、パーキングじゃなくね？」

「ねえアレ？B組は？」

上鳴の言葉に便乗して耳郎が首を傾げる。確かに降りた場所には一緒に走行していた筈のB組のバスがどこにも見当たらない。景色を眺めるだけにわざわざ止まったのもおかしいとA組生徒達が考えられている中、相澤が口を開いた。

「お……おしっこ……！トトトトトイレは……」

「何の目的も無くでは意味が薄いからな」

峰田の声を跳ね除けるかのように相澤は呟く。その言葉の意味を

まだ火野達には理解しかねなかった。すると、別の場所に駐車していた1台の車から何人か下りて来て相澤に声を掛ける。

「よーろーろーうイレイザー!!」

「ご無沙汰しております」

上機嫌に話し掛けるのは金髪の猫をモチーフにしたヒーローコスチュームを着た女性だった。隣のショートボブヘアの女性も似たようなコスチュームを着ている。そしてもう1人は小学生くらいの年頃の男の子で角が付いてある変わった帽子を被っていた。相澤はかしこまってお辞儀をする。そして、2人の女性はA組全員を目の前にして大胆不敵に自己紹介を始めた。

「煌めく眼でロックオン!」

「キュートにキャットにステインガー!」

「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!」

ババーンと絵文字が飛び出しそうな自己紹介。そして、いい歳をした女性が小さな女の子が見てそうな子供番組のオマージュみたく登場する。『プッシーキャッツ』の2人に生徒一同は呆然となっていた。

「今回お世話になるプロヒーロー『プッシーキャッツ』の皆さんだ」

掻い摘んで相澤が紹介すると、知っているかのように緑谷が興奮気味に声を上げた。

「連盟事務所を構える4名1チームのヒーロー集団!!山岳救助等を得意とするベテランチームだよ!キャリアは今年で12年にもなるー」

ブレない興奮と熱狂で送るヒーローオタクの解説。だが、キャリアの詳細を言い掛けたその時、プッシーキャッツの1人『ピクシーボブ』が肉球を模した手袋で緑谷の顔面を鷲掴みにした。

「心は18!!」

「へぶっ!」

「心は?」

「じゅ、ジュウハチ!」

必死に訴えるピクシーボブ。肉球に仕込まれた爪型の刃がギリリと輝き、脅すような物言いだ。緑谷は言われるがままとなっている。そ

れを見ていた火野は「若づくりつて大変だなあ…」と呟くと耳郎が慌ててシートと静かにさせていた。

「お前等、挨拶しろ」

「二「よろしくお願いします！」」

礼儀を忘れずに挨拶の指示で一同は大きな声で挨拶をする。すると、もう一人の「マンダレイ」が振り返って山々を見渡しながら口を開いた。

「ここら一体は私等の所有地なんだけどね。あんた等の宿泊施設はあの山の麓ね」

マンダレイはそう言ってピツと爪型の刃で指差す。その山は立っているこの場の目視だと握り拳と同じくらいのサイズの山だった。バスで移動しても小一時間は掛かりそうな距離に、何人かは声を揃えて「「遠っ!!」」と言うのも仕方ない。そして、そのマンダレイの言葉に疑問を思う生徒が呟く。

「え…？じゃあ何でこんな半端な所に……………」

不審に思う麗日。パーキングエリアでもなく、下りた先に緑谷が言っていた山岳地帯のプロヒーローがわざわざ待ち構えていること。何かが妙だと思い、生徒達はざわつき始めていた。

「これってもしかして…」

「いやいや…」

「ハハ…。バス…戻ろうか……。な？早く…」

「そうだな…そうすつか…」

考えが鋭い蛙吹は顎に人差し指を置いて言うと、砂藤が首を振り、顔を曇らせながら瀬呂が背を向ける。その言葉に賛同した上鳴もまた、頷く。のどかな遠足気分浸っていたA組の面々は、自身達が置かれていたこの状況を理解し始め、生徒達の額には冷や汗が流れていた。だが、その嫌な予感を更に向上させるようにマンダレイが口を開いた。

「今は午前9：30。早ければあ…12時前後かしらん」

「ダメだ…おい…」

腕時計を見ながら企みの笑みを浮かべるマンダレイ。嫌な予感が

確信へと徐々に変わっていき、切島の顔は青ざめていた。このままここに滞在すれば身の危険が迫ると感じたのか、芦戸が声を張り上げる。

「戻ろう！」

「バスに戻れっ!!早く!!」

切島が叫ぶと生徒達は一斉に停車していたバスに向かって一目散に駆け出した。だが、全員が戻ったわけではなく、緑谷は何事かとオロオロしており、爆豪はこの状況が逆にワクワクするのか不敵な笑みを浮かべて動じていない。そして飯田と轟、そして火野もこれから起こりうる出来事に備えて警戒態勢に入っていた。

「12時半までに辿り着けなかったキティはお昼抜きねー」

「悪いね諸君…。合宿はもう始まっている」

マンダレイが逃げる生徒達に忠告をすると、相澤が生徒達へと軽く謝罪と宣言をする。先導を走る切島、バスはもう目の前だった。その時、そのバスの前に先回りしたピクシーボブが現れる。彼女が両手を地面に触れる次の瞬間。その地面は急速に盛り上がり、瞬く間にその場にいた生徒達は呑み込まれていく。

「何だぁー!!?!」

「土が、盛り上がってー!!」

「うわっ!!…っておいおい嘘だろおお!!」

土砂災害の勢いでフェンスを越えて押し出された生徒達。まさか先程まで見渡していた鬱蒼とする森に放り出されるとは思っておらず、火野は叫びながら他のクラスメイトと共に森の中へと落下する。そして、生徒達全員が落下したのを確認したマンダレイがフェンス越しで「おい！」と声を掛けた。

「私有地につき、『個性』の使用は自由だよ！今から3時間！自分の足で施設までおいでませ!!この…『魔獣の森』を抜けて!!」

マンダレイの説明を聞いて、落とされた生徒達は不吉で太陽の光が届いてないのか薄暗く、気味悪い森を見遣る。すると、魔獣の森と思わぬ単語を聞いた緑谷の声が裏返った。

「『魔獣の森』…?!」

「なんだそのドラクエめいた名称は……」

名称を聞かされ、まるでゲームの世界に飛ばされたような感覚になったのか上鳴が顔を顰めながら言う。

「雄英こういうの多すぎるだろ…」

「文句言つてもしゃあねえよ。行くつきやねえ」

ごねる耳郎に切島が土のついた服を払いながら立ち上がる。便乗して他の全員が渋々覚悟を決めていた。その中、「耐えた：オイラは耐えたぞ…！」ともう膀胱が破裂しそうなのか峰田はいち早く用を足そうと森の中へと入ろうとしたその時。

パキツと木の枝を踏みながらこちらを睨む名称の名に相應しいソレ”が姿を現した。

「マ、マジユウだー！！？」

「H A A ……」

こちらを睨むソレは四つ足の歩行で生物に近い姿をしていた。だが動物にあるべき毛皮どころか、目も鼻も耳も無い。体を覆う木とゴツゴツと岩のような皮膚。〃魔獣〃と言えるその生物に上鳴と瀬呂は愕然と叫び、1番近くに遭遇した峰田は一瞬身震いをし、天にも昇るような声を漏らしていた。

「魔獣…!? 本当にあったのか…!」

火野は驚きながらもオーズドライバーを腰に宛い装着する。すると、ソレに反応するかのようには火野の中からアंकが出てきた。ヤミーかと思いたつたバのメダルを取り出すアंकだが、その魔獣を見つめて少し怠そうに息を吐いた。

「おい映司、あの化け物：グリードでも生き物でもないぞ」

「え…? そうか! ……だったら手加減はいらないな!」

よく見ると魔獣の体は硬そうな皮膚ではなく動く度にボロボロと土くれが落ちていた。恐らくピクシーボブがなんらかの〃個性〃で創り出したモノだろう。だったらやる事はシンプル。そう確信した火野は、ヤミーではないと認識していたアंकの持つタトバのメダルを奪い取り、ドライバーの左右に2枚、真ん中に1枚と嵌め込む。

「あ、おい!」

無理矢理盗られたアंकは吠えるが、構わず火野は右腰部分にある

オースキャナーを取り出し3枚嵌め込まれた部分へとソレをスキヤンさせた。

「変身！」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

「ハアッ！」

コンボソングが鳴り響き、火野はオーズ「タトバコンボ」へと姿を変えると、アंकは不満そうに舌打ちをしてオーズから距離を取る。オーズは直様駆け出すと、魔獣は峰田に襲い掛かろうと右前足を大きく振りかぶり、攻撃を仕掛けていた。だが、咄嗟に緑谷が峰田を担ぎ、その攻撃を交わしていた。涙目になる峰田を木影に下ろすと緑谷も気付いたのか全身にワン・フォー・オールの力を巡らせて戦闘態勢へと入る。

「轟君！こいつ…！」

「ああ、大体分かった」

同じく駆け出していた轟にオーズは声をかけると轟も把握していたのか頷きながら、足元を踏み入れ氷結させる。氷結は魔獣の4本足を凍らせると、別方向からエンジンで駆け出した飯田と、爆破で飛んできた爆豪が魔獣目掛けて突っ込んでいった。

「『レシプロバースト』!!」

「死ねやあああっ!!」

脹脛部分が破れ、高熱を帯びたマフラーが剥き出しになった飯田は全力の足蹴りを氷で身動きのとれない魔獣に食らわす。それと同時に爆豪も溜め込んだニトロを発火させ、爆破攻撃を魔獣に食らわせた。両サイドからの攻撃で魔獣の体は土くれとなって粉々になるが、まだ本体が残っている。それにトドメをささんとオーズが跳躍する

と、それとまた同時に、緑谷もジャンプした。

「セイヤアア!!」

「SMASH!!」

オーズの飛び蹴り、緑谷の渾身の拳を当て、魔獣は断末魔と共に土くれとなって砕け散った。魔獣を倒した事によって戦闘した5人を除くA組達から「おおっ!」と喜びの声上がる。

「あの魔獣を瞬殺かよ!」

「やったな!」

オーズ達の援護に回っていた轟の元へ砂藤と瀬呂を先頭に歩み寄って勝利の笑みを浮かべながらそう言う。一方で木に手を添え、片方の手を股間に当てながら峰田は嘆いていた。

「やった…! オイラやつちまった…!」

まさか高校生にもなって漏らすなんて夢にも思わなかったのだろう。その付近では、爆豪に切島が声を掛けている。

「流石だぜ、爆豪!」

「…まだまだ!」

警戒を解かない爆豪に切島は「え?」と声を漏らす。爆豪が向いている森の奥、良く見ると木の影から先程のとは姿形、大きさが違う魔獣がこちらを睨んでいたのだ。その魔獣は背中から巨大な翼が生えており、ドラゴンを模したような体で翼をはためかせる。すると、土くれの体なのに空中へと飛び立った。

「おいおい、一体何匹居るんだ…!?!」

「どうする…、逃げる…?」

「冗談。12時半までに施設に行かなきゃ昼飯抜きだぜ」

木々が生い茂って空の様子が全く見えない中、A組生徒達の上で魔獣が飛び交う音が威嚇をするみたたく聞こえる。怖がる上鳴の言葉に戸惑う芦戸。だが、砂藤の言う通りこの魔獣の森を抜けなければ昼食どころか宿泊施設に辿り着けることもできないだろう。すると、辺り一帯から魔獣の雄叫びが森全体に響き渡り始め、オーズは身構え口を開いた。

「魔獣を倒して進むしかないみたいだな。…それにしても、土くれで

できた体なのにどうやって声を出してるんだろ…？」

声帯器官など無いはずなのにと、オーズは疑問を抱いていた。隣のアंकは興味なさそうに「知るか」と啖呵を切る。それに目や鼻、耳といった感覚器官も無いのにどうやってこつちを捕捉して襲ってきているのかも不明だ。だが、そんな浅はかな考えは今はしている暇はない。いきなり放り出された森で引き返すなどは考えず、全員が覚悟を決め始め戦闘態勢に入る中、八百万と飯田がA組生徒達に声を掛けた。

「火野さんの言う通りですわ。ここを突破して最短ルートで目指すしかありませんわ！」

「よしっ！行くぞA組!!」

「！！！！おおっ！！！！！！」

委員長の声によって指揮が上がり、全員は覚悟を決めた。

薄暗い森で何処から攻めてくるのか分からない状況。それを把握する為に、索敵を得意とする障子が複製した耳で音を聞き、眼で周囲の魔獣の場所を確認する。それと同時に耳郎も木に刺したイヤホンジャックで音を探っていた。

「前方から3匹！左右に2匹ずつ！」

「総数7…来るよ！」

「よっしや！行くぜ！」

障子と耳郎の合図でまず瀬呂がテープを木の枝に射出させ、左方面の空中へと飛び出した。飛んでいたドラゴン型の魔獣が瀬呂を発見して襲い掛かろうと口を大きく広げるが、瀬呂は素早くテープを射出させ、ドラゴンの翼を縛ると、飛行能力を失い地面へと落下する。

「砂藤！切島！」

瀬呂が叫ぶと地上で待機していた砂藤が所持していた角砂糖をふんだんに口へと頬張り、ポリポリと噛み砕く。糖分を摂取することによってパワーが増加する『個性』で砂藤の体は筋骨隆々と膨れ上がり、溢れる力に「うおおおっ！」と雄叫びの声を上げた。

「オー！オーララララアッ!!」

その間、切島は両腕を硬化させ、身動きの取れないドラゴン型魔獣

の懐へと潜り込み、強烈なラッシュを繰り出す。

「ウらあつー！」

ボロボロと崩れ落ちる体に、トドメの一撃をと砂藤が顎下からアツパーを直撃させた。

続いて、右から迫り来る生物型魔獣2体。先頭を駆け出した常闇が「ダークシャドウ！」と叫ぶと体から分身であるダークシャドウが姿を現す。

『フーン！ウラア！』

薄暗い森のせい、少し気性が荒々しくなっている。だがその分攻撃力も増しており、ダークシャドウの攻撃により生物型魔獣は簡単に吹っ飛ばされていた。すると、後方から尾白も突っ込んできて、「個性」の尻尾で強靱な一撃をもう1体の魔獣にへとダメージを与える。

「今だ！青山！」

「トドメね☆ンウツ！」

怯んだ魔獣2体を確認する尾白が叫ぶと、いつの間にか付近の木の頂上へと上っていた青山が頷き、腰に巻かれたベルトの水晶から「個性」のネビルレーザーを魔獣に向けて射出する。直撃した魔獣2体の体は貫かれ、断末魔を上げながら爆散した。

次に、前方から迫り来る3体のうちの1体。二足歩行でゆつくりと襲い掛かろうと生徒達を睨む魔獣に、泣き喚きながら峰田が突っ込んだ。

「ちつくしよーっ！お前らのせいで下がビツチャビチャじゃねえかあ！！」

その発狂と同時に峰田は「個性」のもぎもぎを八つ当たりする勢いで魔獣へと投げまくっていた。どうやら魔獣は知恵を持っていないようで、大量のもぎもぎは魔獣の体へと付着していく。すると、掴んでいた木ごとくつついて身動きがとれない状態の中、「離れてろ峰田！」と上鳴が動けない魔獣の背中を駆け上がりながら叫ぶ。そして背中に乗った上鳴は両手を魔獣に押し当てると体がバチバチと帯電し始めた。

「食らえー！130万ボルトーツ！！」

「oooooooooo!!」

放電され電撃をもろに浴びる魔獣は断末魔を上げた。放電が治ると魔獣は黒焦げになっていて、体のあちこちから煙が立ち上り、そのまま崩れ落ちる。同時に背中に乗っていた上鳴も地面に落下したが、やってやったぜと言わんばかりにサムズアップをしながら「ウツヘウエーイ」とアホ顔になっていた。

「うわー！こっちは来ないでー!!」

そうこうしてる間に、前方から来た二足型魔獣2体に透明化が「個性」の葉隠が逃げ惑っていた。隠密行動に長けている彼女だが、こう言った戦場で面と向かつての戦闘だとやや分が悪い。だからこそ、敢えてわざと大声を上げて逃げていた。

「あらよつとー!」

葉隠しか見ていなかった二足型魔獣の1体に、背後から近づいていた芦戸が、その巨体の足に酸を出した手で触れる。触れた部分は一瞬にしてドロドロに溶け、二足型魔獣はバランスを崩して膝をついた。

「うわー！大変！やられちゃうー!!」

「葉隠さん、ナイス囷ですわ!」

続いてもう1体の二足型魔獣から再び大声を上げて逃げる葉隠。だがその先には創造から創り出した砲台を横に、威厳に満ちた表情で八百万が魔獣を見遣った。葉隠はそのまま走ると、正面からこちらに走ってくる芦戸とすれ違い様にハイタッチを行う。

「ほらっつー!」

芦戸はそのまま葉隠を追っていた二足型魔獣の片足に酸を放射する。片足が溶け、膝をつく魔獣。それを待っていましたと確認した八百万が叫んだ。

「お2人共！伏せてください!」

八百万の声に反応した葉隠と芦戸はその場でしやがみ込む。すると、2体の二足型魔獣の顔面目掛けて八百万が大砲の弾を放った。直撃した魔獣の顔は跡形もなく吹き飛び、意識を失うようにそのまま倒れ込む。

「やったねヤオモモ!」

「お2人の協力あってこそですわ」

芦戸と葉隠は駆け寄ると、八百万はそう応えた。

一方で左方向の瀬呂、切島、砂藤が戦っている別の場所では、麗日と蛙吹が見るからなに動きが鈍そうな四足型魔獣を相手にしていた。動きが鈍い分簡単に背後に回り込めた為、麗日は両手の肉球で触れる。

「いいよ！梅雨ちゃん！」

「任せて！」

無重力状態となった魔獣から距離を取り、木の上の蔦を持って待機していた蛙吹に麗日が合図を出す。蛙吹は頷くと長い舌を伸ばして魔獣の体へと巻きつかせた。

「ケローッ！」

蛙吹は蔦を利用し、遠心力の力で魔獣を大きく空中へと放り投げた。舌を離れた蛙吹は地上へと下りて麗日と同じく木影に隠れると、麗日はその場に誰もいない事を確認して「解除！」と両手指を合わせる。すると、魔獣の無重力が解除され、四足型魔獣は勢いよく落下し、地面へと直撃した。

着々とA組の力によって魔獣は倒されていく。だが、この合宿はそんな甘優しいものではないと障子の一声で実感させる。

「更に多数出現！」

「っ！全方向から来るよ!!」

複製の目で確認、イヤホンジャックで音を探知し叫ぶ耳郎。そして、更に数が増えて襲いくる魔獣達。A組達は協力して立ち向かっていったが、爆豪は不敵の笑みを浮かべて単独で突っ込んでいく。

「ハッ！死ねや！」

土くれでできた体の魔獣なら手加減など不要。思う存分に殺す事ができる爆豪は不敵な笑みと共に二足型魔獣を宙から攻撃しようとして飛び出す。だが、地上から接近していた轟が氷結攻撃を繰り出す。凍った魔獣に爆豪は振りかざした手から爆発が起き、直撃した魔獣の顔横半分と片腕が吹き飛ばされる。

「クソが！」

まだ残っている体に悪態を吐く爆豪はもう一度食らわせようとするの平からバチバチと火花が飛散し出した。だが次の瞬間、上空から突如炎の球が飛来して魔獣の体が燃え上がって土くれとなる。爆豪と轟は何事かと上を見上げると、木の上でグリード化した右腕を突き出したアंकが愉快そうにこちらを見下ろしていた。

「あ!? てめエこの赤鳥野郎!! 何しやがる!?!」

「フン、コイツらは生物でもなければグリードでもない。いくらでも倒しても問題ないんだろ? 合宿なんざ退屈していたが、こういうのは悪くない。おい! お前から感謝しろ。この俺がわざわざ手伝ってやっているんだからなあ」

「ふざけんな! 横取りしてんじゃねえ!」

「爆豪、ここはアंकの力も借りた方がかなり戦力になー」

「黙ってる半分野郎! それに赤鳥野郎! こんな土雑魚は俺1人で余裕だ! てめエらの出る幕じゃねえんだよクソが!!」

怒号を吐き散らす爆豪はそう言い残して先に駆け出す。アंकと轟は爆豪の悪態にムツと顔を顰めらせると負けずと爆豪の後を追って行った。

奮闘するA組達。薄暗く鬱蒼とした森は混戦する衝撃と轟音で辺りは揺れ、騒がしい森へと変わっていた。だが、それでも尚増え続ける魔獣。それに立ち向かうA組生徒。奮闘する中、緑谷、飯田、オーズもまたその戦場を駆けていた。

「行くぞー! 緑谷君! 火野君!」

「うん!」

飯田は更に加速し、地上を群がる魔獣達を次々と蹴り込んでいく。同時に、緑谷とオーズはその場からジャンプし、上部な木を踏み台として跳んでいき、空中から魔獣へと目掛けて渾身の拳、そして蹴りを放っていたのだった。

「あ、やーっつと来たにゃん」

「随分遅かったねえ」

時刻は午後17時20分。日が沈み、鳥が鳴く空は夕闇迫る頃だった。目的地である宿泊施設、『ブッシーキャッツのママタビ荘』で、待ちくたびれたピクシーボブがそう言うと言いつつマンダレイも反応し、壁に背もたれしていた相澤も腰を上げる。少し離れた場所には角の帽子を被った目付きの悪い少年もめんどくさそうに待機していた。

すると、森の奥からボロボロになり疲弊しきっていた生徒達がやって来る。約7時間も森の中を魔獣と戦いながら駆け抜け、*個性*も使い過ぎたのだ。オーズも宿泊施設が見えたので変身を解くと今にも倒れそうな疲れきった顔をしている。アंकも調子にのってエネルギーを消費し過ぎたのか右腕を押さえて息切れを起こしていた。

全員が施設の前まで足を運ぶと瀬呂と切島が文句を言うように垂れ流す。

「何が3時間ですかあ……!」

「腹減った…死ぬ…!」

「アレ私達ならって意味なの。悪いね」

「実力差自慢の為か……やらしいな…」

マンダレイがプロと比較された発言をすると砂藤がげんなりとなつて肩を落とす。するとピクシーボブが「ねこねこねこ…」と笑っているのかよく分からない仕草で肩を震わし、口を動かした。

「でも正直もつと掛かると思ってた。私の土魔獣が思ったより簡単に攻略されちゃった。いいよ君等……」

そう言つて一旦区切ると、肉球の指で火野達へと向ける。

「特にその5人。躊躇の無さは経験値によるものかしらん?」

火野を含め、緑谷、飯田、轟、爆豪にピクシーボブは期待を膨らますような笑みを浮かべた途端、急にその5人に向かって飛び出し、唾をぺっぺつと吐き付けた。

「3年後が楽しみ！ツバつけとこー！！」

「うわっ!？」

「何を!？」

「ヤメロー！」

必死に腕で顔を覆いガードする5人。すると、それを不審に思った相澤がマンダレイに声を掛ける。

「マンダレイ…。あの人あんなでしたっけ?」

「彼女焦ってるの。適齢期的なアレで」

相澤の言葉にマンダレイが応える。適齢期と言えどまだ学生の少年達にマーキングみたく唾を吐き付けるのはどうかと、と言わんばかりに他の生徒達は哑然としていた。すると緑谷が「適齢期と言えばー」と言った瞬間、ピクシーボブが緑谷の顔面を掴みかかった。「と言えばって!!」

「ぶっ!?!ずつと気になってたんですが、その子はどなたのお子さんですか?」

顔が肉球で埋もれながら緑谷は帽子の少年へと指を指して問う。するとマンダレイが「違う違う」と否定し、口を動かした。

「この子は私の従甥だよ、洗汰!ホラ挨拶しな。一週間一緒に過ごすんだから…」

マンダレイはそう言う。だが「洗汰」はその場から動かず、緑谷達を子供とは思えない目付きで睨んでいた。見兼ねた緑谷は自ら歩み寄り、自己紹介しようとして握手を求める。

「あ、えと、僕雄英高校ヒーロー科の緑谷。よろしくね」

少し背を屈めさせ、笑顔で手を差し伸ばす。背丈は緑谷の腰辺りの身長、洗汰は緑谷の顔を見たが、その目線は真っ直ぐ男の急所へと向けられた。

キン!

「キュウ…」

「緑谷君!?!」

冨太の右ストレートが見事にフィットし、緑谷の全身が色褪せたように消え、その場に倒れ込む。飯田と火野が慌てて駆け寄り、飯田は歳上に無礼を働いた、早歩きで逃げ出す冨太に向かって叫んだ。

「おのれ従甥！何故緑谷君の陰囊を!!」

「だ、大丈夫緑谷君!!」

火野は呼び掛けるが声にならない呻き声を上げる緑谷。マンダレイも困ったような表情を浮かべていると、冨太は立ち止まり、かなり鋭い目付きで飯田達を睨んだ。

「ヒーローになりたいなんて連中と連む気はねえよ」

「つるむ!!いくつだ君は!!」

とても少年とは思えない発言に驚愕する飯田。すると一連の光景を見ていたアंकが「フン」と鼻を鳴らして愉快そうな笑みを浮かべた。

「こいつは傑作だなあ」

「アंक!」

面白可笑しく言うアंकに火野が怒ると、冨太はアंकを見るなり苛立つように口を動かす。

「お前のそのトサカも傑作だよ。ヒーロー目指してんのに敵みてーな面しやがって…!」

「あ?おい今なんつった!」

「だあー!やめろよ!子供の挑発にのんかって!」

キレルアंकが冨太に詰め寄ろうとし、火野は慌てて両肩を掴んで止めに入る。冨太はそのまま去っていくと、同じく冨太の行動を見ていた爆豪が鼻で笑っていた。

「マセガキ」

「お前に似てねえか?」

「あ?似てねえよ!っーかてめエ喋ってんじやねえぞ舐めプ野郎!!」
「悪い」

轟のツツコみに爆豪が吠える。その感情任せに怒るところと汚い言葉を使うところを思っ冨太に似てると言っても過言ではないだろうと火野は顔を曇らせていた。

ここで時間を潰すのは非合理的と思ったのか相澤が生徒達に声を掛ける。

「茶番はいい。バスから荷物下ろせ。部屋に荷物を運んだら食堂にて夕食、その後入浴で就寝だ。本格的なスタートは明日からだ。さア、早くしろ」

ようやく休めると生徒達はヘトヘトの重い体を起こし、立ち上がる。林間合宿1日目は、想定外な出来事で半日が終わろうとしていた。だが、これから始まる合宿の出来事に、まだ火野達は知る義もなかったのだった。

No. 79 強化合宿

先に到着していたバスから荷物を受け取り、A組の一行は宿泊する大部屋に荷物を置いて食堂へと移動した。生徒達の体力はもう微かに残っているだけだが、目の前に並ぶ豪華な料理を前にしては本能的に食べたいと体が動き出し、全員は空いている横長の椅子へと座り込む。

「いただきますっ！」

パンつと緑谷が手を叩いて食堂の横長のテーブルに沢山置かれている料理へと手を伸ばす。他の生徒達も既に食事を始めていた。何せバスでお菓子を摘んでいた以来の食事だ。魔獣の森で“個性”をフル活用して7時間近くも森を駆け抜けて入れば空腹も限界なのだろう。生徒達は、かなりのハイペースでそれを口から胃袋へと運んでいる。涙を流しながら黙々と食べる者もいれば、森の地獄など忘れて楽しそうに会話しながら食べる者もいた。

「へえ、じゃあ女子部屋は普通の広さなんだな」

「男子は大部屋なの？」

「うん。人数が人数だから結構広かったよ」

瀬呂の言葉に隣の耳郎が質問をすると、その隣の火野が応える。プツシーキャッツが営むマタタビ荘は、山岳地帯で遭難した市民達を救助し、一時的に保護する施設だが、同時に登山を楽しむ一般人にも気軽にお泊まり出来る施設だった。設備や建物も万全で、寝室もかなり手入れが行き届いている。大人数用の大部屋も、男子生徒14名が大の字で寝ても余る程の広さだった。耳郎はそれを聞いて「へえ」と頷くと、聞こえてたのか後ろのテーブル席で食事をしていた芦戸が振り返り、口を開いた。

「見たい！ねえねえ、後で見に行つていい？」

「おー来い来い」

瀬呂はそう言つてご飯を食べ続ける。昼飯を抜いた為か、料理が本当に美味しく感じて全員の箸は止まることなく大皿のおかずを休む

事なく、取り続けていた。火野の斜め横に向かい合って座っていた切島と上鳴もその1人で、白米を目一杯口に運ぶ。

「美味しい！米美味しい！」

「五臓六腑に染み渡る!!ランチラッシユに匹敵する粒立ち!!いつまででも噛んでいたい！」

箸と茶碗が擦れる程勢いよく掻き込む2人。すると、上鳴がハツとする。

「土鍋…!?!」

「土鍋ですかあ?!」

唯の炊飯器ではなく土鍋で炊き込んだ米だと気付いた上鳴に、料理を次々と運んでいたピクシーボブに向かって切島が声を掛ける。

「うん。つーか、腹減りすぎて妙なテンションになってんね…。まあ、色々世話焼くのは今日だけだし、食べれるだけ食べな」

「あざっす!!」

苦笑しながらもピクシーボブは愛想良くそう言うのと切島と上鳴は頷き、再び白米を掻き込む。出しても出しても瞬く間に無くなる料理に、ピクシーボブとマンダレイは料理を持って慌ただしく食堂内を歩き回っていた。

「あー洗汰！そのお野菜、運んどいてっ」

手が空いてないマンダレイは食堂の端に立っていた洗太に指示を出す。洗太は「フン」と鼻を鳴らしながらも、隣に置いてあった野菜が沢山入っている段ボールを持ち上げて食堂を出て行った。

「……………洗太君……」

その小さな後ろ姿に、火野は心配そうに見ていた。ヒーロー社会と云えども、誰でもヒーローに憧れる訳ではなく、当然ヒーローに対して否定的な人もいる。でも、ただ「嫌い」とか「気に入らない」などと、単に毛嫌いしているのではないように見えた。洗太が持つ嫌悪感には底知れぬ深いものだと感じていた。火野はその気持ちを聞くべく、踏み込むのはどうなのだろうと悩む。もやもやが頭から晴れないまま、止めていた箸を動かさし、ご飯を掻き入れる。

「…………」

その考えを持つのは緑谷も同じだった。

☆☆☆☆

カポーーーーー……ン……

漫画でありそうな、桶がタイルに当たる音が響いた。食事を終えた生徒達は泥まみれになった体を洗うべく風呂場へやって来たのだが、そこはなんとかすかに湯気の立つ露天風呂。仄かにひんやりとした石造りのタイルに、装飾として植えられている松。昔ながらの和風庭園といった感じだ。男達は体を洗い流すと、直ぐ様大浴場へと入る。

「くああ〜…!!気持ち良い〜…!」

「ああ、雰囲気も悪くねえ」

火野はゆつくりと浸かる。少し熱めのお湯だが直ぐに慣れて心身と肩まで浸かった。全身の疲れが一気に吹き飛ばす気持ち良さで思わず声を漏らすと、隣に浸かっていた轟がそう言って露天風呂を見回していた。

「てかここ広過ぎじゃね?!泳げるぜ、ホラ!」

「そんなにはしゃぐと怒られるよ?」

広々とした露天風呂に喜ぶ上鳴は疲れなど忘れてバタ足で泳いでいた。隣で尾白が少しだけ注意をしていると、木で出来た端から端まである大きな仕切り板を見上げながら呟く。

「まあまあ…。飯とかはね…ぶっちゃけどうでもいいんすよ。求められてんのかってそこじゃないんすよ。その辺分かってるんすよオイラあ…。求められているのはこの壁の向こうなんすよ…」

「1人で何言ってるの峰田君…」

「やめとけてって峰田」

えらく柔い口調で淡々と呟く峰田に緑谷はそう言うのと向こう側が女子専用の露天風呂だと知ってて呆れたように切島は止める。だが、

峰田にとって性とはご飯とデザートが別腹になるように、峰田の体力は女体の為ならいくらでも湧き上がるのだ。

「まさか合宿に来て温泉入れるなんて思わなんだ！」

「気持ちいいねえ」

「温泉あるなんてサイコーだわ」

耳をそつと仕切り板に当てると女子の声が聴こえてくる。峰田は「ホラ…」と口を開いた。

「いるんすよ…。今日日、男女の入浴時間ズラさないなんて事故…。そう、もうこれは事故なんすよ…」

「……………!!」

学生の合宿とは、生徒達が協力して試練を乗り越えるもの。それとは別に、男子にとっての楽しみとは、峰田のような卑猥な考えを持つ者にとって、女性の風呂を覗く事も考える奴らも少なくはない。この薄い壁の向こうには女体の生徒達が湯槽に浸かっている。意識してしまった緑谷と切島は顔を真っ赤にしていると泳いでいた上鳴も反応して振り返る。他にも意識して固まる男子が何人かいた。

「フー……」

峰田の脳内では、百合の花が咲き乱れようとしていた。天国でもあり、パラダイスでもある。自分が女になつて素知らぬ顔で加わりたいとさえ思った。だが憤慨とともに耐える。なぜ、女体を壁の向こうにしながら妄想で補わなければならないのかと。

すると、当然のように委員長飯田が昇天が合わない目の峰田を止めようとした。

「峰田君やめたまえ！君のしている事は己も女性陣も貶める恥ずべき行為だ！」

「やかましいんすよ…」

妄想と希望と期待を邪魔された峰田は悟りを開いたような表情で飯田に言う。ふと、峰田は仕切り板を見上げると、引き寄せられるかのように頭のもぎもぎを手に取り、口を動かした。

「壁とは超えるためにある!!」

次の瞬間、峰田は声を荒げ「Plus Ultra!!」と言いなが

らもぎもぎを壁に貼り付けて物凄い形相で登っていく。

「峰田君?!」

「速っ!!」

「校訓を穢すんじゃないよ!!」

あまりのスピードに驚いた火野と緑谷は思わず声を漏らし、トチ狂う発言に飯田は止めようとするが、峰田の耳にはそれは聞こえず、只々、壁の向こうにある花園へと赴こうとしていた。念願の女体。楽園の天国。峰田のまさに、更に向こうへの意志で男湯から越えようとしていた。だが、現実はその行かないのが付き物。壁の上からバツと小さな影が現れる。

「!」

「冨太君!?!」

顔を出した冨太に峰田はピタリと止まる。驚く火野。どうやら壁は一枚だけではなく、2枚壁で僅かに空いていた間から梯子を使って先に登ってきたのだろう。

「ヒーロー以前にヒトのあれこれから学び直せ」

冨太はそう言ってパンツと差し伸ばす峰田の手を叩き、バランスを崩した峰田は「クソガキイイイイ!!」と激昂しながらそのまま男湯へと落下していった。すると、冨太の後ろから賑やかな歓声がかかる。

「やっぱ峰田ちゃんサイテーね」

「ありがとー! 冨汰くん!」

その声に思わず振り返ってしまった冨太。そこには湯気が微風で無くなり、裸体を露わにする女性生徒達が冨太の視界へとくつきり入ってしまったからだ。

「わっ……あ……」

刺激が強過ぎたその光景に思わず冨太はバランスを崩して男湯の方へと落下してしまう。まずいと思った火野はバツと立ち上がる。だが、先に駆け出した緑谷が鼻血を出して顔を真っ赤にし、気絶する冨太をなんとか受け止めていた。ホッと安心する火野は、その隣をチラリと見遣る。

「オ、オイラの……楽園……!」

飯田に受け止められた峰田は白目を向いてピクピクと痙攣しながら気絶している。覗きという名の天国に行けなかったのが相当ショックだったのだろうが、それは自業自得であるのは当然の事だ。

「洗太君大丈夫っ?」

「気を失ってるみたい。ちよつと僕、マンダレイのところに連れて行くね」

緑谷はそう言つて気絶している洗太を抱き抱え、露天風呂を出て行つた。

「…大丈夫かな」

「恐らく落下の衝撃で気絶してしまつたのだろう。…全く、峰田君も大概だ。不埒な事を考えるからこうなるのだぞ」

心配そうに呟く火野に、峰田を抱き抱えた飯田が呆れるように気絶している峰田へと説教をしていたが、彼は聞く耳など持たず、しまいにはブクブクと泡を吹いていたのだつた。

☆☆☆☆

翌日、山際から朝日が昇り始める午前5時30分。A組生徒達は体操へと着替えてマタタビ荘の広場へと集合していた。

合宿は2日目となり、全員の顔はまだ起きていない様子で、欠伸をする者もいれば、ヘアセットが間に合わずボサボサになっている者もいる。火野も早起きは得意な方なのだが、昨夜の晩は何せA組生徒達と同じ部屋で一夜を共にしたのだ。学生の身分もあつて雑談をしたり、少しはしゃいだりして就寝するのが遅くなつてしまつたのだらう。火野は眠たそうに大きな欠伸をする中、相澤が生徒達の前へと

立った。

「お早う諸君。本日から本格的に強化合宿を始める」

眠たそうにする生徒等を見渡しながら、相澤は淡々と喋る。

「今合宿の目的は全員の強化及びそれによる『仮免』の取得。具体的になりつつある敵意に立ち向かう為の心の準備だ。心して望むように」

「敵意」。言わずもがな、それは敵^{サイラン}連合の事を意味しているのだろう。近日活発化している連合、今回の林間合宿もA組達で行ったデパートで緑谷は死柄木と、火野は脇真音姉弟と遭遇した件で変更された件もある。相澤の思う今回の目的とは、緊急時における『個性』行使の限定許可証、ヒーロー活動可資格の仮免の習得する為の強化合宿。活発化してきた敵^{サイラン}に対して自衛の術を持たせようと判断していたのだ。

「(……いずれは……)」

火野は拳を強く握る。現実をストレートに突きつけられて、眠気は瞬く間に吹き飛んだ。他の生徒達も同じように、全員は顔を引き締め、緊張と覚悟で身構える。

「というわけで爆豪、こいつを投げてみる」

緊迫する雰囲気させた相澤は、空気を変えるように突然と爆豪にボールを投げ渡した。

「これ……体力テストの」

「前回の……入学直後の記録は705.2m……。どんだけ伸びてるかな」

そのボールは、入学時に行われた『個性』把握テストで使用されたあのボールだった。相澤の言葉に、全員の期待が膨らんだ。

「おおー。成長具合か！」

「この3ヶ月色々濃かったからな！1kmとかいくんじやねえの!?!」

「いったれバクゴー!!」

芦戸や瀬呂、切島らが歓声を上げる中、爆豪は右肩をぐるぐるんと回してストレッチを行う。準備が整ったのか、さっそく爆豪は思い

切り振りかぶると同時に、その顔はいつもの不敵な笑みへと変わった。

「んじゃ…よつこら…くたばれや!!」

手放す瞬間、爆発が重なりボールは爆風と共に勢いよく朝日の空を通過していく。体力テストの時にも見た光景で、その悪態吐く投げ方も前回と同じような口調。まるで既視感を思わせる光景だった。ボールは山の彼方まで飛んでいき、「ヘッ」と爆豪は楽勝と言わんばかりの笑みを溢す。すると、ピピッと相澤の端末が鳴り相澤はその表示された記録を発表した。

「709.6m」

「!!?」

「…あれ、思ったより………」

その記録に、皆んなの驚きの声が静かに騒めく。投げた本人である爆豪も1番驚いて目を見開いていた。

「約3ヶ月間様々な経験を経て、確かに君らは成長している」

相澤の言う通り、A組生徒達はヒーロー基礎学に於ける救助訓練や戦闘訓練、USJ事件、体育祭、職場体験、ヒーローショーなど、3ヶ月にしてはなかなかの濃い1学期を過ごしてきたのは生徒達も承知していた。それと同時にそれだけ経験し、乗り越え、強くなっていたと思い込んでいた。相澤はそれらを踏まえて、本日行われる「内容」を説明する。

「だがそれはあくまでも精神面や技術面。あとは多少の体力的な成長がメインで、「個性」そのものは今見た通りでそこまで成長していない。だから、今日から君らの、「個性」を伸ばす」

相澤は嘲笑うかのようにニヤリと微笑む。

「死ぬ程キツイかもしれないが、くれぐれも死なないように」

その相澤の言葉に緊張が走る。この後、地獄のような試練が待ち受けている事を生徒達はまだ知らなかった。

☆☆☆☆☆☆

少し時間が経ち、午前6時頃。B組生徒達も同じようにマタタビ荘から出てきて広場へと集まっていた。眠たそうに欠伸をする面々。担任のブラドキングが相澤と同じように説明をすると、さっそく訓練を行う場所へと移動をしていた。

「突然『個性』を伸ばす訓練って言われても、一体何をするんだ？」

「20名20通りの『個性』があるし…。何をどう伸ばすのかぶっちゃけ分かんないよね…」

「具体性が欲しいな!!」

道中、泡瀬が呟くと取蔭と鎌切がそう言っつて疑問を抱く。すると、聞こえていたのか先頭のブラドキングが歩きながら応えた。

「筋繊維は酷使するほど壊れ、強く太くなる…。『個性』も同じだ。使い続ければ強くなりでなければ衰える！即ち、やるべき事は1つ！」

各々が持つ『個性』は体の身体機能の1つ。経験し、その能力を熟知し、修行してより己の糧とする。そう言いたいブラドキング。すると、目の前の茂みの向こうに光が差し込む。辺り一帯も明るくなり、いつのまにか日の出が上がっていた。B組一行は茂みをぬけると、先にぬけたブラドキングがその光景を見ながら口を開いた。

「限界突破!!」

「[[[[:]]]]」

その光景を目の当たりにしてB組生徒達は驚愕する。

「あああああああ!!」

「いてえええええ!!」

「クソがあああああ!!」

「ぎゃあああああ!!」

断末魔が飛び交う訓練広場。そこはまさに地獄絵図だった。限界突破、即ち。『個性』を使いまくれと至ってシンプルな内容だが、そ

れは予想以上にキツイ事である。例えば、走れば走る程足の筋力や持久力が高まるが、酷使すれば筋肉痛や疲労を伴う。

それは「個性」も同じ原理で、爆豪の爆破、轟の半冷半熱、芦戸の酸、上鳴の帯電、青山のレーザー、瀬呂のテーパーは、ひたすら出し続けたり、麗日の使った後の酔いを慣らす為に空気注入式のバルーンに入って崖から転がり落とされたり、耳郎のイヤホン・ジャック、切島の硬化を硬いモノに打ち付け強度を上げるなどが行われていた。

また、切島の硬化を利用して尻尾で叩き込む尾白や、索敵と隠密の障子と葉隠のように互いで互いを高め合う特訓も見受けられる。他にも、蛙の長い舌、手足を使って崖つづちを登る蛙吹、暗い洞窟で闇で活発化するダークシャドウを常闇が必死で従わせる、エンジンを酷使してひたすら走り続ける飯田、もぎもぎをひたすら千切る峰田と個々で修行する者もいる。

そして、八百万と砂藤は食べ物エネルギーとして「個性」を使う為か、テーブルの上に置かれている大量のお菓子やケーキを食べながら「個性」を使用し続けていた。

その光景をあんぐりと口を開けて見ていたB組生徒達にブラドキングが口を開く。

「許容上限のある発動型は上限の底上げ。異形型・その他複合型は「個性」に由来する器官・部位の更なる鍛錬。通常であれば肉体の成長に合わせて行おうが…」

「まあ、時間ないんでな。B組も早くしろ」

時間は有限。割入った相澤が合理的に事を進めようとそう言う。だが拳藤が「私達40人それぞれの「個性」を、たった6名で管理でききるの?」と疑問を口にした。

「そうなの!あちきら四位一体!」

すると、それに答えるべく、彼女らがB組の前に姿を現す。

「煌めく眼でロックオン!!」

「猫の手手助けやってくる!!」

「どこからともなくやって来る…」

「キュートにキャットにステインガー!」

「二二ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!!」

そう言つてポーズを決めて出てきたのはプッシーキャッツこと、マ
ンダレイ、ピクシーボブ、そして青と緑色のロングヘアーと丸い目が
特徴の「ラグドール」。もう1人は可憐な女子チームの中に混じつ
てはいけない雰囲気をかましている、茶色いコスチュームに筋骨隆々
な肉体をした「虎」だった。フルバージョンで登場を決めたプッ
シーキャッツはさっそく今回の内容と自身らが合宿を担当する役目
をそれぞれが言った。

「あちきの「個性」「サーチ」!この目で見た人の情報100人まで丸
分かり!!居場所も弱点も!」

「私の『土流』で各々の鍛錬に見合う場を形成!」

「そして私の『テレパス』で一度に複数の人間へアドバイス」

「そこを我が殴る蹴るの暴行よ……」

他の3人ならまだしも、虎は殺意を秘めているような表情で言い放
つ。1人だけ場違いな姿の上、殺しに掛かってくるような物言い。B
組生徒達は言葉を失っていた。そのまま虎はB組生徒に向かって声
をかける。

「単純な増強型の者、我の元に来い!我ーズブートキャンプはもう始
まっているぞ」

「ひー……!」

虎の言葉にB組の増強型の穴田と回原が反応する。虎の後ろには
手足を延々と引いて伸ばしてと昔ながらの特訓を必死に行っていた。

「さア今だ、打つて来い」

すると、虎は緑谷に声を掛ける。緑谷は「はっ」とし、直ぐにワン・
フオー・オールの力を全身に宿した。

「5%デトロイト・SMASH!!」

「よオオオし、まだまだキレキレじゃないか!!」

素早くストレートを打ち込む緑谷だが、虎は体のあらゆる箇所を曲
げれる『軟体』の「個性」。ブリツジみたく拳を避ける虎は直様体制
を立て直し、緑谷の顔面に拳を打ち込んだ。

「筋繊維がちぎれてない証拠だよ!!」

「イエッサ!!」

「声が小さい!」

「イエッサア!!」

アメリカ軍の鬼教官みたく喝を入れる虎に四つん這いになりながらも懸命に叫ぶ緑谷。ノリが怖いとはこの事だろう。それに追い討ちを掛けるように虎は指をくいくいとさせた。

「プルスウルトラだろお!?!しろよ!ウルトラ!」

あまりの形相にB組生徒達は唾を呑む。それを見ていた相澤は独り言みたく呟いた。

「雄英も忙しい。ヒーロー科1年だけに人員を割く事は難しい。この4名の実績と広域カバーが可能な『個性』は、短期間で全体の底上げするのに最も合理的だ」

そう言い終わると、突然森の向こうから轟音が鳴り響き、鳥達が一斉に飛び立つ。相澤はそれを確認すると、ラグドールとピクシーボブに声をかけた。

「ラグドール、ピクシーボブ。向こうもそろそろ様子を見に行つた方がよろしいかと…」

「あらま、もう倒しちやつたみたいね」

「了解にゃ〜」

ピクシーボブのサングラスのモニターがピピツと反応し、彼女は少し驚いた様子で言う。ラグドールも頷き、相澤と共に森の奥へと移動した。



A組、B組生徒達が修行に励んでいる場所から少し離れた場所。そこには土くれとなった魔獣が辺り一帯に倒れており、その中央には火野映司こと、オーズ、ラトラーターコンボが立っていた。ピクシーボブの土流で造った魔獣が一通り倒したのを確認し、アंकが声をかける。

「フン、修行なんて面倒な事を思いつくな、あの教師」

「いいじゃんか。ピクシーボブのおかげで思い切り相手が出来る魔獣も出してくれたんだし。…でも、相澤先生、何でコンボ限定で戦えて言ったんだろ…?」

オーズは疑問を抱きながら軽く準備運動をし始める。コンボこそ強力な切り札となるがそのデメリットも大きく最終手段として使用するのが基盤となっている。本心を言えば今回の修行は負担が少ないうたつたバや亜種フォームで慣らしたいのが火野の理想だが、相澤に言われるがまま、今現状こうである。

アंकは再び鼻を鳴らしてそっぽを向くと、ちょうどその方角から相澤達がこちらに歩いて来るのが確認される。近寄った相澤はオーズに声をかけた。

「火野、そのコンボは使い慣れてるのか？」

「あ、いえ…。そんな事ないですけど…。どうかされましたか？」

「なら、一番疲労が激しいコンボを使って魔獣を倒しまくれ。でなきや修行にならん」

相澤の言葉にオーズは「わかりました」と頷く。が、不服そうにアंकが茶々を入れる。

「コンボは方が一の為だ。それ以外はバラバラのメダルで敵と戦うのがオーズのやり方でもあるんだ。偉そうに指図するなっ」

「アंक！先生に向かってその態度はないだろ！」

「……まあ、アंकの言う事にも一理はある。火野のオーズは多種多応制にかけたとても珍しい“個性”。ましてや派生型で生まれたアंकの冷静と分析力によって敵の特徴、弱点を瞬時に把握し、メダルチェンジをして戦う術。…その戦い方は間違っていない」

アंकの言葉に相澤は素直に納得し、アंकはホラなど言わんばか

りに上から目線のような目をする。だが、相澤は一旦区切つて「だがな」と口を開いた。

「それは、アंकと一緒に戦う”って意味でのやり方だ。敵^{サイラン}連合はヒーローが警戒する一方で日々勢力を拡大している可能性もある。仮にもしも、お前らが連合と戦う時があつたとして、アंक。お前が火野の側にいられなかつた時、火野は1人で敵と戦わなければならん」

「あ?…何が言いたい?」

淡々と喋る相澤にアंकは眉を寄せて尋ねると相澤は続けて口を動かした。

「オーズも相手によっては相性の悪い相手と鉢合う可能性もある。そうなつてしまつてはその方が一のコンボを使わざるを得ない事にもなり得る。その時に、仮にコンボを使つたとしても、次々と敵^{サイラン}が現れると予想しよう。…コンボの反動で疲弊してしまつた火野は戦う事が出来るか?」

「…」

相澤の言葉にオーズはハツとする。アंकが現れてからはメダルはアंकが一方的に管理している。火野とは違い、相手の出方、能力、相性などは瞬時に分析してその場に見合つたコアメダルを使つていた。火野も以前までは自分で選んで戦つてきたが、その扱いが悪いせいか体育祭みたくコンボを使い過ぎていた時期もあつた。それ故に多少は耐性が付いたつもりだつたのだろうが、1番反動が少なく、現在使っているラトラーターで相澤には見栄を張つたが、正直しんどいのも事実である。

すると、相澤の話を聞いたアंकが少し納得したのか相澤に声をかける。

「ほお…、俺がない時、あるいは、コンボで凌いだ途端に次の敵が現れる状況、それ等を対処できるかどうかつてことか…」

「そう言う事だ。火野、確かお前は中学の時に初めてコンボを使った時は、維持出来ないくらいの反動が襲つたらしいな?」

その言葉にオーズは思い出して「はい」と頷く。

「USJの時に使用して力を発揮できた。そして体育祭、その他の出来事にもそれなりに使えるようになってきているのはこっちも把握済みだ。…その意味が分かるな？」

「…少なくとも体は慣れてきている…！」

「だったら、やる事は他の皆んなと変わらない。ヒーローを目指す者として死ぬ気で励め！」

「はい！よおし、やるぞー!!」

相澤がそう言い終わると、オーズはやる気が溢れてきたのか全身に気合いを入れて叫ぶ。その姿をアंकは呆れたような目でオーズを見つめていた。

「(馬鹿が、オーズの力を使いこなせるのはお前自身に素質があるって事だ…。まあ、この世界の映司には言ったところで鵜呑みにするだけか…。修行でコンボを使いまくれば、体が慣れて強敵にも難なく倒せるかもしれない。)…楽にメダルが稼げるなあ…！」

最初はどうかと思っていたこの修行だが、理に適っている相澤の説明を聴いて、アंकはニヤリと微笑んだ。相澤は他の生徒達の所へ戻ろうと背を向ける。その間に、ピクシーボブとラグドールに声をかけた。

「では、ピクシーボブ、ラグドール。彼の特訓をお願いします」

「お任せー！くうー！逆立ってきたあ…！」

ピクシーボブは猫の毛が逆立つかのように体を震わせ、嫌らしい手付きで興奮していた。

「ん……？」

ふと、ラグドールがオーズを見て首を傾げる。その眼は少し青白く発光していた。それは、彼女の「個性」『サーチ』を発動している眼だ。目で見えた相手の居場所、弱点などの情報を100人まで知ることができる。また、一度見たものは星形の目印が見えるようになる登録型であり、情報に適した「個性」だ。彼女が見た者の「個性」は視界にくつきりと名称と説明が映し出されるのだが、オーズ、火野の「個性」を見てラグドールは首を傾げていた。

「(資料には「仮面ライダーオーズ」って書かれてた筈、だよな?)」

ここに雄英生等が来る前に相澤がA組の資料を手配していた。ラグドールは全員の「個性」を把握していた、はずなのにだ。彼女の視界にはこう映っている。

火野映司

個性 『仮面ライダーオーズ?』

「ハテナマークは何かの間違いかにやあ…? まあ、こういうのも、偶にはあるでしょくにや」

ラグドールはあまり気にせず、歪ませていた顔を元に戻し、ピクシーボブと共にオーズの元へと駆け寄ったのだった。

No. 80 集結の合宿

A組、B組の総勢40名がプツシーキャッツの指導と共に地獄の合同訓練が行われた2日目。限界突破の“個性”伸ばしの訓練に死ぬ気で勤しんだその夕方の時刻、マタタビ荘の調理広場にて全員は集合していた。

「さあ、昨日言ったね。『世話焼くのは今日まで』って!!」

「己で食う飯くらい己で作れ!!カレー!!」

ピクシーボブ、ラグドールが声を張り上げる目の前のテーブルには、大量の野菜、肉、米や調味料、そして調理器具が置かれていた。前日はプツシーキャッツの皆が作って提供してくれたが、今日からは生徒達で晩飯を作れとのこと。

「「「イエツサ……………」」」

まだ材料や器具などを用意してくれただけ有難いのだが、既に生徒達の体は限界を超えており、今にも倒れそうな人も何人か見受けられる。精気のない表情や返事に、ラグドールは涙目になるほど高笑いをして口を開いた。

「ニヤハハハハ！全員全身ブツチブチ!!だからって雑なねこまんまは作っちゃダメね！」

ラグドールはそう言うと、飯田がハツとする。

「確かに…。災害時など避難所で消耗した人々の腹と心を満たすのも、救助の一環……。さすが雄英、無駄が無い!!世界一美味しいカレーを作ろう!皆!!」

「「「オ…………オオ……………」」」

心身共に疲れ果てている筈なのに、その真面目な性格故か、前向きに考え他の生徒らを先導するように声をかける。空腹も限界の生徒達は最後の一声を絞り出さんと声を出していた。そんな委員長に相澤は便利だなと言わんばかりに小さく頷き、感心している。

こうして、全員は残る力を振り絞り、A組B組と共同でカレーを作ることとなった。

☆☆☆☆

「轟——こっちにも火イちよーだい！」

キャンプ道具であるキャプテンスタッグという器具でグツグツと米を沸かしていた最中、石組みかまどに炭を入れ終えた芦戸が轟に声をかける。「個性」を使用しても構わないと言われて、炎を扱える轟は完全に引っ張りだこだ。

「爆豪、爆発で火イつけね？」

ならばと常闇と炭を入れ終えた瀬呂も近くにいた爆豪に声をかける。爆破の火力でつくんじゃないかと期待した瀬呂だったが、それは大きな間違いでもあった。

「つけれるわクソが！」

轟が出来るなら俺も出来ると爆豪は不敵な笑みと共に炭に手をかざす。直後、BOM!!と爆発するが、炎と爆発では威力が違うのか炭は吹き飛び、立ち上るのは黒煙だけだった。せっかく苦労して積み入れた炭が着火せずに消し炭となってしまう、「ええっ…」と瀬呂は思わず声を漏らす。

「皆さん！人の手を煩わせてばかりでは、火の起こし方も学ばせませんよ」

「……………」

八百万がそう言って創造で造ったチャツカマンでかまどに火をつけようとする。「個性」を使用して火をつける原理は轟と一緒になのか、その行動に対して耳郎は啞然としていた。すると、轟は「いや、いいよ…」と左腕の袖を捲り、かまどに炎を灯した。あつという間に燃えるかまどを見ていた芦戸と麗日は喜びの歓声を上げる。

「わー！ありがとー!!」

「燃えろー！燃やし尽くせー！」

「尽くしたらあかんよ」

はしやぐ芦戸に微笑みながらツツコむ麗日。そんなやりとりを横に、燃えるかまどを見ながら轟もまた、微笑ましく火を眺めていた。

一方、緑谷は材料を切る係りで、まな板の上で大量の野菜を切ってはボウルに入れる作業を行っていた。合宿で皆人と作っている事もあるのか、その顔は喜ばしそうな表情を浮かべている。ふと、先程まで隣で切っていた火野が目を離れた隙に居なくなっている事に気づき、辺りをキョロキョロと見回す。

「あれ…？火野君？」

「映司なら気を失っている」

「ワツ!?あ、アंक君!?!」

背後から声をかけられ、驚く緑谷。振り返ると、火野の体に憑依したアंकが立っており、腕組みをしながら呆れたように口を開く。

「映司の奴、昆虫のコンボを使って調子乗りやがって…。こうなる事を知っててやりやがったな…!」

「昆虫…、USJの時のガタキリバ!」

その言葉に緑谷はハツと思い出してそう言う。訓練の最中に相澤に言われ、1番キツイコンボを使えと言われたオーズは躊躇なくガタキリバを使用してしまった。案の定、今にもぶつ倒れそうになっていた火野は材料を切っている最中に気絶してしまい、アंकが体を借りて、ここにいる訳だ。火野の策略だと思いついた火野アंकは舌打ちをすると、緑谷が宥めようと声をかける。

「ま、まあまあ…：火野君は倒れるまで頑張ったって事で、大目に見てあげてもいいんじゃないかな…?」

「あ?フン、コイツはこう見えて腹黒い奴だ。お前も一緒に行動するなら、せいぜい寝首をかかれないことだな」

「え?…あ、うん…：気をつけるよ…(そんな態度をとるのはアंक君だけなんじゃ…)」

指を指してくる火野アंकに緑谷は苦笑していた。すると、同じ材料を切る係りの蛙吹が、手が止まっていた2人に気付いたのか声をかける。

「火野アंकちゃん、緑谷ちゃん、手が止まってるわよ。まだ材料は沢山あるんだから」

「あ、わっ、ごめん蛙吹さん!」

相変わらず名字で呼ぶ緑谷に「梅雨ちゃんと呼んで」と蛙吹は言う
と、火野アंकは途中で放置している切り掛けの野菜を見るなり、顔
を歪ませた。

「チツ。こんな面倒な事やってられるか」

「ダメよ火野アंकちゃん。疲れてるのは他の皆んなも同じなのよ。
材料を切るだけなら出来るでしょ?」

「…おい女。その呼び方はやめろ。俺の名はアंकだ」

「…分かったわ。でも、だったら私の事も女じゃなくて梅雨ちゃんと呼んで?アंकちゃん」

「ちゃんも余計だ…!…!…!フン。俺はグリッドだからな。飯なんか食わなくてもどうってことないんだよ」

「貴方はそれでいいかもしれないけど、火野ちゃんは食べないと明日保たないわよ?」

蛙吹の言う事に一理あると思ったのか火野アंकは不快そうに強く舌打ちをする。見兼ねた蛙吹は自身が切り途中だった肉を指指して口を開いた。

「なら、私が野菜を切るから、この肉を切ってちょうだい。一口サイズで切ればいいから」

「おい、まだ俺は手伝うなんて一言も…」

「お願いね」

「……!」

半ば無理矢理交換され、目の前に切り掛けの鶏肉が置かれる。アंकは火野にご飯を食べさせないといけないと思ったのか仕方なく、不満そうに包丁を手に取り、目の前の肉を見つめると、包丁を手に持ったまま目を見開いていた。

「ど、どうしたのアंक君?」

固まる火野アंकに緑谷が声をかける。

「……おい、これ何の肉だ……?」

「鶏肉よ?」

「鶏……!!?」

蛙吹の言葉によって、火野アंकに戦慄が走る。まさか、同類をこ

んな肉の塊で切れと言われるなんて思ってたのだから。肝を冷やす火野アंकは火野の為と思ったのか、はたまた手伝いをする羽目になったのか、手に握った包丁を思い切り鶏肉に振り下ろし、ぶつた切っていたのだった。

☆☆☆☆

「「「いただきまーす！」「」」」

そんなこんなで、カレーは完成し、全員が腰掛けて合唱をする。辺りはすっかり暗くなっていることに気付いたが、全員は目の前に盛り付けられた食欲をそそられるスパイスの匂いの、カレーライスを目の前しては、そんな事すらどうでもよかった。

「店とかで出たら微妙かもしれないけど、この状況も相まってうめー！！」

「言うな言うな野暮だな！」

空腹の胃袋を取り敢えず埋め尽くさんと生徒達はカレーライスを掻き込むように食べ始める。素人が作った味とは思えない美味しさで、切島はそう言いながら食べると隣の瀬呂も食べながらその発言を止める。また、その隣の八百万も珍しくかなりのスピードで掻き込んで食べていたのを、後ろの席の芦戸が気になって声をかける。

「ヤオモモがつつくねー！」

「ええ。私の『個性』は脂質を様々な原子に変換して創造するので、沢山蓄える程沢山出せるのです」

八百万は一旦手を止めてそう言うと、正面に座っていた火野アंकがちびちびと食べていたカレーライスの手を止め、「フツ」と鼻で笑う。

「お嬢様みたいなお前でも、そういう発言をするんだな」

「…？と、言いますと？」

アंकの言葉を理解していない八百万は首を傾げる。アंकなりの遠回しの言い方をしているが、他の皆んなは何を言いたいのか検討がついているのかピタリとスプーンの手を止めていた。そして、これ以上の発言は禁止だぞと言わんばかりに八百万を除いた皆は、油汗を流しながら火野アंकを見つめている。のだが、それは瀬呂の一言によつて壊された。

「うんこのことだろ」

瞬間、八百万は勢いよく席を立ち上がり、少し離れた所で蹲つてしまふ。禁句を発言した瀬呂と、その発端を発言した火野アंकに耳郎が鉄槌を下した。

「お前ら謝れ!!」

「すいませえん!」

「だつ!?!おい、何すんだ!」

「うるさい!まだ火野の方がデリカシーあるよ!」

ぎゃあぎゃああと騒ぐA組達。でもそれは、側から見れば何処か楽しそうにも見えた。だがそんな光景を気に食わないと思ったのか、遠くから見ていた冨太は睨み付けるような目線で見つめたあとくるりと振り返り、悪態を吐く。

「何が『個性』だ…。本当…下らん…!!」

そう言つて冨太はその場から立ち去る。ふと、おかわりを装つて席に戻ろうとしていた緑谷が後ろ姿の冨太を、心配そうに見ていた。

☆☆☆☆

カレーを食べ終えた後、後片付けを行い、A組、B組はマタタビ別荘へと戻った。生徒達はすぐに露天風呂に入り、湯気が立ち上る体で寝室の大部屋へと戻ると、直ぐに布団へと寝転がり寝る人もいれば、ワイワイと雑談する生徒もいた。そんな中、マタタビ荘に戻る際に意

識を取り戻した火野は、アंकと交代してもらい、温まった体を涼ませようと、大部屋を出て長い廊下を歩く。ふと、光が差し込む部屋が見え、中を覗くとそこは立派な広縁だった。中へと入ると、さつそく置かれている椅子へと腰掛けた。窓の外には、月の光が微かに照らされた森の風景が広がっていた。ひんやりとした空間と相まってか、火野は夜の景色に夢中になっていた。

「あれ、火野君」

ふと、声をかけて広縁へと来たのは火野と同じ寝巻き姿の緑谷だった。緑谷は窓際の景色が目映ったのか「わあ」と思わず声を漏らしていた。

「昨日は疲れてすぐ寝ちゃったけど、この部屋、こんな景色が見られたんだ…」

「俺も今さつき知ったよ。昨日は本当疲れ果てて、皆んなすぐ寝ちゃったもんね」

昨日は訳もわからず、森へと放り投げ出された拳句に5時間以上、土の魔獣と戦いながら森を駆け抜けたので直ぐに疲労がやってきたのだろう。しかし、今日の方が体力的にしんどい筈なのにまだ眠気はこない。耐性でもついたのでだろうかと火野は首を少しだけ傾げていると、緑谷が声をかけた。

「…さつきね、洗太君と少しだけ会話してきたんだ」

「…どうだった？」

顔を曇らせながらそう言う緑谷に、察した火野は野暮な事を聞かずに問い掛ける。

「火野君って、ヒーローの『ウォーターホース』知ってるかな？」

「ああ、うん、勿論。川や海で溺れた人達を救った水を操れる、個性“のヒーローだよ。その人達がどうかし…”」

火野がそう応えていた時、脳内にそのヒーローの事件が過る。ウォーターホースは夫婦であり、両方とも、敵に殺される事件サイランがあった。何故この話を今するのかと、火野が疑問を思った瞬間に、その答えが見つかり、確信してハツと口を止める。緑谷はその見開いた火野の目を見てゆつくりと頷いた。洗太はウォーターホースの息子だっ

たのだ。

「……洗太君、 “個性” 超人社会そのものを嫌悪してるみたいなんだ……。その事件のせいなのか、ひけらかすヒーローや敵をサイラン気に食わないって思ってる……」

「……そうなんだ……。まだあんなに小さいのに……辛い事があったのか……」

緑谷の言葉に火野はあの睨む目付きの洗太の顔が頭を過り、痛切に感じていた。その時、緑谷が「…僕ね」と口を開く。

「オールマイト……、それに火野君と出会うまでは “無個性” だったんだけど、本当にヒーローに憧れててさ……。でも、 “個性” がないとヒーローは目指せなくて……。かなり絶望的な環境の中で立たされてた……。それでも、 “個性” が出るんじゃないかと練習せていたんだ」

「緑谷君……。練習ってどんな？」

緑谷の語りに火野は何も聞かずにその話を聞こうと質問する。緑谷は苦笑しながらもポツポツと喋った。

「お母さん譲りを期待して物を引き寄せる練習をしたり……。お父さん譲りを期待して火を吹こうとしたり、……。あと、爆発しないかと頑張っ張って見たりとか……」

「爆発って……。爆豪君じゃないか」

「う、うん……。かつちゃんはその、性格は……あんなのだけど、一応、僕の……幼少期からの憧れだから……」

側から見ても一方的に緑谷に対して癩癩を起こす爆豪。そんな彼を今でも尚、その背中を追いかけようとせん眼差しで、窓際の夜空を眺めながら緑谷はそう応える。

「洗太君に言ったんだ。 “個性” に対して色々な考えがあって一概には言えないけど、そこまで否定してると、君が辛くなるだけだ……って」

「……」

取り留めないその励ましは恐らく今の洗太には通用しないのではないか？と一瞬考えていた火野だが、小さく首を振って、口を動かした。

「……多分、そう簡単に過去は断ち切れない。しかもあんなに小さな子

供だともつと厳しいかも…」

「……………やっぱり、そう、だよね…」

「でも…」

「？」

火野の言葉を重く受け止めた緑谷は顔を俯かせようとするが、その一言で顔は面を上げる。

「俺の爺ちゃんの言葉なんだけど、『人生は何が起こるか分からない。その時を無駄にせず、悔いのない生き方をしろ』って。今は世界を拒絶してるかもしれないけど、緑谷君のその“きっかけ”で、洗太君のどこかで何か変わってるかもしれない…」

「火野君…」

「きつと大丈夫つ。もし俺達が洗太君を動かせなかつたとしても、人々を救けるヒーローの背中を見たら、洗太君も立ち上がれるかもしれないからさ」

人はきっかけがあればその人生は大きく変わる。その変わる事を信じて火野は強く想いを緑谷に伝えた。緑谷は次第に笑みが溢れ、笑いながら口を動かす。

「…火野君のお爺さん、凄く立派な人だったんだね」

「うん、本当凄い人だったよ。だから俺も負けないように、いつもパンツは一杯持つてるんだつ」

「パンツ…？プツ、アハハ…！」

突然の拍子抜けな発言に緑谷は思わず笑ってしまう。火野も便乗して笑みが溢れ、ふと、窓を開けて星空を眺める。都会とは違う濃度の高い闇が広がる中、その星空は輝いて見えていた。

ゴオオ……………

その時、一陣の強風が吹き荒ぶ。

まるで威嚇するようになり過ぎたそれに、火野は少しだけ頭の中をざわりと攪われたような気がした。思わず眉を顰めて窓の外を見るが、そこには闇が広がるだけだった。

☆☆☆☆☆☆

闇夜の強風が吹き荒ぶその世界。その風は一際高い岩場へと誘われ、そこに居た者達を通り過ぎる。

「疼く…疼くぞ……。早く行こうぜ……！」

ローブを纏い、仮面を付けた大柄の男が、腕をゴキゴキと鳴らし、山の麓に見えるマタタビ荘を見つめながらそう言う。

「まだ尚早。それに、『派手な事はしなくていい』って言わなかった？」

大男とは一回り小さな小柄。中学生の制服を身に纏って、自身の顔を隠す為、はたまた守る為か、ヘルメット付きガスマスクを被る少年が割挟む。

「ああ、急にボス面始めやがってな」

大男とガスマスク少年の前に立つ、サイラン敵連合の茶毘が不服そうな顔を浮かべながら一步前が出る。

「虚に塗れた英雄達が、地に堕ちる。その耀かしい未来の為のな」

茶毘は闇夜の中心に光を灯すマタタビ荘を見下ろしながらそう言う。その隣には注射器のような機械を背中に備え、まるで悪魔の歯を剥き出しにした、不気味なマスクを装着したトガが立っていた。トガはそのマスクを気に入らないのか文句を言う。

「ていうかこれ、嫌。可愛くないです」

「裏のデザイナー・開発者が設計したんでしょ。見た目はともかく理には適ってる筈だよ」

「そんな事聞いてないです。可愛くないって話です」

闇ブローカーからの手配で支給されたサポートアイテム。恐らくここに集まっている何人かはその支給品を身に付けているのだろう。

ガスマスクの男が穏便に言うが、それでも見た目が気に入らないトガは文句を垂れる。すると、茶毘達の後ろから続々と他の敵が現れる。サイラン

「おまたー……」
サングラスをして長髪の男性。その手にはぐるぐると包帯で巻かれた巨大な棒のような物を持っていた。

「仕事……仕事……」

口を除く全身を黒の拘束着に包んだ痩身の男。その言動は何かに囚われたような発言をしている。

「……」

トカゲの見た目に紫で染め上げた髪、その体には無数のナイフを所持する男性は、まるでステインを模した格好をしていた。

そして、その後ろを敵連合の脇真音優無と、その弟の槍無が歩み寄っていた。優無はこの場にいる敵達を数えながら、茶毘の隣に立ち、茶毘に声をかけた。

「6……7……8……9人じゃん。後3人は？」

「まだだ」

「あつそう」

「それより、何でお前までここに居る？お前は気色悪い男と一緒に立ち位置じゃねえのか？」

茶毘は優無に嫌悪するような目付きで質問する。優無はその態度が気に入らないのか、ムツとしながら応えた。

「あんた達の監視役よ。連合に入るなら、死柄木君に認められるような行為を示すのが懸命だと思うけどね？」

「……嘘くせえな。他にもあんだろ？」

何かを悟ったのか茶毘は睨みつけるように優無に問う。優無は軽く息を吐いて隣に居る槍無を見ながら口を開いた。

「ま、半分はそうだけど、半分は弟君の初仕事のサポートさ」

「…相変わらずのシスコンか。…まア事情はどうでもいい。加わるなら、お前もそれなりの働きをしろよ」

「…ちよっと、私アンタらより立ち場は上なんだけど？」

「この作戦は俺が黒霧に任されてんだ。だから俺が指揮を取る」

「あ？」

上から目線の言葉に優無の表情が変わる。2人の間にビリビリと不穏な空気が漂う。それは殺意を剥き出しにしているからだ。それを見ていたサングラスの男は「あらあら…」と何処か楽しそうに2人を見ていた。

その瞬間、トガが優無を後ろから抱きついてくる。

「優無ちゃん！今日もカアイイですね！」

「わっ!?ちよ、いきなり抱き付かないでよ！」

「連合の仲間になるんです！優無ちゃんも私の事をヒミコちゃんって呼んで！呼んでほしいです！」

「わかったわかった！わかったからヒミコちゃん離れてっ」

無邪気なトガに優無は名前を呼んで満足したトガを引き剥がす。殺意を向けていた茶毘はその光景を見て冷静になったのか呆れた様子でそっぽを向いた。すると、大男が指をゴキゴキと鳴らして口を動かした。

「どうでもいいから早くやらせろ。ワクワクが止まんねえよ」

「黙ってるイカレ野郎共。まだだ…決行は…そのイカレ姉を含めて13人来てからだ」

「イカレは余計だイカレ焼き男」

「……」

大男に茶毘はそう言って制す。イカレ姉の言葉に反応した優無は子供みたいな言い返し方をして、隣の槍無は困ったような目を向けていた。茶毘はそれを無視して再び一歩前へと踏み出し、再びマタタビ荘を見下ろしては口を開く。

「威勢だけのチンピラをいくら集めた所でリスクが増えるだけだ。やるなら経験豊富な少数精鋭。まずは思い知らせろ…。てめエらの平穩は俺達の掌の上だという事を」

「偉そうに…死柄木君の事言えないじゃん」

「姉さん…」

光り輝く星空の下で、闇は密かにその深さを広め始める。その星だけが、忍び寄る悪意を知っていた。

☆☆☆☆☆☆

林間合宿3日目。絶好の太陽の陽光眩しい空の中だが、時刻は昼に差し掛かり、昨日に続いている“個性”伸ばしの訓練が行われている。A組、B組の合同訓練が行われている中、火野もまた、少し離れた場所でおーズ、“ムカチリコンボ”へと変身し、ピクシーボブの土魔獣と交戦していた。

「一気に決めるー！」

数体の魔獣を前にしておーズはオースキャナーを取り出すと、待機音が鳴っていると同時にドライバーへとスキャンした。

スキャンングチャージ！

音声が鳴り響くと頭部、胴体、脚部のそれぞれの力が解き放たれ、能力解放状態となる。ハチシヨルダーの背中から羽が展開されるとおーズは虫の羽ばたき音と共に空中へと舞い上がった。すると、魔獣達の頭上にはムカチリを模した3つの色をしたエネルギー状のリングが形成される。

「せいやあああああ!!」

声を張り上げ、おーズはリングを通過しながら急降下する。必殺技、“ヒートアリキック”が魔獣を貫く。その爆発で他の魔獣達も巻き込まれ、断末魔を上げながら魔獣達は爆散した。

「つと……ハア……ハア……！」

着地したおーズは辺りに魔獣が動いているかを確認し、全部倒したのを認識すると反動の疲労が襲って息切れをし始める。少し離れた所でメダルホルダーを手にしたアंकがおーズに声をかけた。

「シャウタにサゴーズ、そしてムカチリ……、流石に3回もコンボを使つてへばって来たか？」

早朝から訓練は行われ、昼の休憩をはさんでも3回のコンボを連続使用した火野はかなりの反動が体に来ていた。アंकは情けの表情でオーズを見つめる。すると、訓練広場から相澤が近づいて来た。

「何だ、もう限界か火野？」

「い…いえ、まだ頑張れます…！」

「意気込みと体調が合っていないぞ」

相澤の言葉にオーズは疲弊していた体の姿勢を直すのが、フラリとよろけていたので相澤は軽く溜息を吐く。

「…向こうの奴らにも言ったが、誰もいないからとはいって、気を抜くなよ。何をするにも原点を意識して、それを向上させろ。何の為に汗掻き、何の為にグチグチ言われるか、火野。常に頭に置け」

「…原点…！」

オーズは胸に手を置いて呟く。近寄って来たアंकは鼻を鳴らし、相澤に声をかけた。

「フン、基準か。…さしずめ、比喩的に物事の根源を成すって意味か。…人間ってのは本当に回りくどい生き物だな」

「その回りくどいやり方で人は大きく変わるんだ。…もつとも、それがなければヒーローは務まらない」

「！」

相澤の言葉にオーズはハツとする。昨日、緑谷に言った自分の言葉、*“きつかけ”*を思い返す。それを思い出したオーズは顔を両手でパンツと強く叩いた。

「よおつし！アंक！コンボのメダル！プルスウルトラだ!!」

「ああ？何だ、お前疲労で頭でもイカれたのか？」

気合いを入れて声を上げるオーズにアंकは引いた表情でそう言った。それを見ていた相澤は相変わらず無愛想な目をしていたが、その口は僅かに上がっていたのだった。

No. 81 闇夜の狼煙

「個性」を鍛える訓練2日目に突入したが、その苛烈故に過酷を究めていた。限界突破をするには当然、限界まで体を追い詰めなければならぬ。その限界に到達した体は疲弊している状態で欲するものがある。それは休息と栄養。

そんな生徒達全員が待ちに待った夕飯。過酷な状況の中でご飯は栄養補給でもあり、同時に癒しの一時だ。だがそれを準備するのは生徒達。四肢が悲鳴を上げながらも生徒達は最後の力を振り絞り、今日の献立、肉じゃがを作っていた。

トトトトト……

「爆豪くん包丁使うのうま！意外やわ：!!」

「意外って何だコラー！包丁に上手い下手なんざねエだろ!!」

薪を運んでいた麗日が材料を器用に切っていた爆豪を見掛けて驚きながら声をかけていた。男子にしてはかなりのスピードで手際良く切っていた為だろう。それを聞いた爆豪は相変わらずの態度で吠える。余所見をしながらもそのペースは落ちることなく材料を切っている。通りかかった上鳴も口を開いていた。

「出た！久々に才能マン」

「皆、元気すぎ……」

そんなやり取りを聞いていた補習組の切島は心身共に疲れ切った様子で呟く。体を休む為の貴重な睡眠時間を削って訓練に勤しんでいるのだから無理もない。そんな切島は隣でせつせと薪を焚べる火野を見て皮肉そうに口を開いた。

「お前も凄いやな火野……。コンボってかなり負担かかるんだろ？何処にそんな元気あるんだよ……」

「え？……うーん……まあ正直しんどいけど、皆んなでいられるこの時間が嬉しいから……かな」

「……お前……色々と眩しすぎんだろ……!」

照れ臭い様子で笑顔で応える火野。その表情は疲れきった切島に

とって直視出来ないくらいに明るい顔だったのか目を逸らしてそう言っていた。続けて火野は薪を焚べながら口を動かす。

「それに今日は肉じゃががでしょ？俺結構好きなんだ。だから任された仕事は頑張らないと」

「純粹無垢すぎるだろ…」

肉とじゃがいも等の野菜を醤油と砂糖で煮込んだお袋の味とも言える和食の定番料理。作り方は至ってシンプルだが、少し手間暇かけると更に味わい深くなる料理とも言える。そんな和食を心待ちに楽しみにしている火野の顔を見て切島は弱音を吐いている自分が情けないと思ったのか、両手をパンツと頬を叩いて気合いを入れた。

「よっしゃー！早いとこ作って食べようぜ！食べ終わったら肝試しもするしな！」

そう、切島の言う通り、晩御飯の後はA組、B組全員で肝試し大会をするとの事。ピクシーボブいわく、飴と鞭の行事らしい。その言葉に火野は「うん、そうだね」と笑顔で応えて薪を焚べていた。

☆☆☆☆

そんなこんなで、全員は肉じゃがを食べ終えていた。心身共に疲れた体にお袋の味と暖かい食べ物か体の疲れを取ってくれるみたいだ皆の顔とお腹は満腹と高揚感で満たされている。皿や鍋などの後片付けを終えた時には、すっかり辺りは夜の世界となっていた。

「…さて！ 腹も膨れた、皿も洗った！ お次は…」

「肝を試す時間だー!!」

ピクシーボブの言葉に芦戸と上鳴は待つてましたと声を張り上げる。食べる、寝るのが至福の時間だった前日。今回はそれに加えて楽しむ行事がある事に、全身で喜びを現している…のだが、相澤のボソリとした言葉で、それは地に堕ちた。

「その前に大変心苦しいが、補習連中は…これから俺と補習授業だ」

「ウ、ソ、だ、ろ!!!」

まるで天変地異が起きたかのような衝撃の言葉に、芦戸の表情は一気に落胆していた。

次の瞬間、相澤は逃させまいと補修組の芦戸、上鳴、切島、瀬呂、砂藤を捕縛布で捕まえ、連行して行く。

「すまん。日中の訓練が思ったより疎かになってたので、こつちを削る」

「うわああ堪忍してくれえ!」

「試させてくれえ!!」

「嫌だあ!俺達にも天国見させてくれええ!!」

ズルズルと引き摺られながら、断末魔を上げる5人に、残された緑谷達はどうする事も出来なく、只々、その叫び声の苦痛を耐えていた。その姿を見ていた火野は呟く。

「可哀想だな…」

「仕方ないよ、そういう運命だもん」

「土産話でもした方がいいのかもな…」

「やめとけ、後で悔やまれるぞ」

耳郎が反応すると、轟がせめてとそう言う。だが、芦戸と上鳴がそれを聞いたら文句を垂れるに違いないと隣にいた障子が轟にそう言っ止めていた。すると、プッシーキャッツを筆頭にピクシーボブが手を叩いて注目を集め、肝試しの説明をし始める。

「はい!というわけで脅かす側の先攻はB組。もうスタンバってるよ。A組は2人1組で3分おきに出発。所要時間は約15分!ルー卜の真ん中に名前を書いたお札があるから、それを持って帰ること!」

肝試しのルールを説明している最中、常闇が小さく「闇の狂宴…」と呟く。賑やかなメンバーがいない分、A組の空気は何処か神妙になっていた。

「脅かす側は直接接触禁止で、
“個性”を使った脅かしネタを披露してくるよ」

“個性”を使うとなると驚かすバリエーションは豊富になる。ふ

と、微風が吹き、闇夜の森が騒めき始めていた。不気味な雰囲気になつていくその森に生徒達の何人かは唾を呑んでいる。

「創意工夫でより多くの者を失禁させたクラスが勝者だ！」

「やめて下さい。汚い」

取り敢えずと言う形で虎は説明を終わらせると、怖いのが苦手な二郎は顔を歪ませながら言う。すると、飯田がハツとした。

「なるほどー競争させる事でアイデアを推敲させその結果、個性に更なる幅が生まれるというわけか。流石雄英!!」

「なんてポジティブ思考…」

確かに飯田の言う事には一理あるのだが、状況相まってそんな思考に辿り着くのは真面目の性格故だろうと思ひながら、火野は隣で咳く。

「さあーくじ引きでパートナーを決めるよー！」

ピクシーボブは声を張り上げ、その右手には番号の書かれた紙切れが人数分握られていた。全員はさっそく、くじを引き、組み合わせが決まる。

- 1 番目 常闇と障子
- 2 番目 爆豪と轟
- 3 番目 耳郎と葉隠
- 4 番目 青山と八百万
- 5 番目 麗日と蛙吹
- 6 番目 尾白と峰田
- 7 番目 火野と飯田

という様な結果となっていた。

だが、『8』のくじを持っていた緑谷がものおかしそうな表情をして、くじを見ては2人一組のメンバーを見てと、何度も確認し始める。

「2人一組…あれ?20人で5人補修だから…1、2、3、4、5、6、7、8……………」

何かがおかしいと、緑谷は言葉で人数を数えて確認する。

さて、単純な計算をしよう。20人の内、5人は補修で今ここに
いる生徒の数は15人。2人一組で1〜7まではパートナーが決まっ
ている。2人の人数が7つあるということは、現時点で14人はもう
穴埋め出来ているわけだ。

「……………20人で5人補修だから、1、2、3、4、5、6、7、は…」

緑谷はだんだん目の焦点が合わなくなり、何かの間違いかともう一
度数を数える。だが、何度も確認しても、自分のパートナーはいない。
ようやく現状を確信した緑谷はハツとなった。

「ツ！1人余るウ……………」

「く、くじ引きだから…。必ず誰かがこうなる運命だから…」

そうなってしまうた運命には抗えず、現実を突きつけられた緑谷の
周りは精気を失った白黒のカラーとなっていた。それを宥めようと
尾白が声をかけていると、尾白の肩に手を置いた爆豪が不満そうな態
度で話しかけた。

「おい尻尾…代われ…！代われつつつてんだよ…！」

「青山あ…オイラと代わってくれよ……………」

「俺は何なの…？」

轟と組むのが相当嫌なのか爆豪は近くに居た尾白にそう言う。ふ
と、ペアである峰田が八百万と組み合わせとなっていた青山と代わる
よう頼んでいた。無論、当の本人の青山は物凄い早さで首を横に振つ
て拒否している。何とも言えない状況に立たされた尾白は複雑な表
情で肩を落としながらそう言っていた。

「…アंक、お前緑谷君と肝試し参加してあげろよ」

「(あ？フン、くだらん。俺は疲れたんだ。勝手にやってる)」

「お前何もしてないだろ…」

落ち込む緑谷を見兼ねて、火野は体の中にいるアंकに声をかける
が、即答で断られていた。自分の興味がある事以外には、全く興味
のないアंकのその性格に、火野は深く溜息を吐いていた。

一方で耳郎と組む事になった葉隠は透明な体で両手をブンブンと
振っているのか、半袖の服が上下に激しく動かしながら耳郎に声をか
ける。

「肝試しワクワクするね響香ちゃん！」

「う、うん…。そ…そだね…」

怖いのが嫌いな耳郎はしどろもどろになりながらも応える。ふと、耳郎は後ろ姿の火野をチラチラと見ては何処か寂しげな様子で自分のくじの番号を見つめていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

そんなこんなで、肝試しが開始された12分後。

3分毎に一組、また一組とスタート地点から出発していく生徒達。ふと、肝試しが開始された森の奥からA組生徒であろう、壮絶な叫び声が森全体に響き渡っていた。

「じゃ5組目…、ケロケロキティとウララカキティGO！」

ピクシーボブが合図を出して麗日と蛙吹がスタート地点を出発する。夜で不気味な森に加えて、何度も悲鳴が上がる声に麗日はブルブルと身震いしていた。

「怖いよ梅雨ちゃん…。めっちゃ悲鳴上がつとる…」

「響香ちゃんと透ちゃんね。手を繋ぐといいわ。大丈夫よ、私平気なの。行きましよう」

今叫んでいるのは耳郎と葉隠だとすぐに理解し、怖がる麗日を落ち着かせようと手を差し伸べた。麗日は「う、うん」とその手を握る。相当怖いのか、その手は少し汗ばんでいた。

一方、麗日と蛙吹が森に入った頃、脅かし組であるB組の骨抜が通りかかった耳郎と葉隠の驚きっぷりに、愉快そうに笑って口を開いた。

「カツカツカツ、小大！お前の脅かし、今んとこ全員ビクツてなつてっぞ」

「体張るねえ、唯」

同じチームである拳藤がサムズアップをすると小大は「ん」と頷く。彼らの脅かし方は、骨抜の「個性」で地面に沈ませた小大の首だけを通りかかったA組生徒達の目の前に、突然と顔を出す寸法らしく、今のところ全員がそのやり方に驚いていたようだ。骨抜は2番目である轟と爆豪の事を思い出したのか再び愉快そうに口を動かす。

「爆豪と轟、超ウケたな！『お』て！」

普段クールな轟と才能マンの爆豪が2人揃ってビクツと体を震わせたのがツボに入ったらしく、笑っていた。その言葉には体育祭で出番を取られたA組に仕返しをしようと、皮肉そうな言動が見受けられる。すると、拳藤が何か匂うのか鼻をスンスンと動かし、骨抜と小大に話しかけた。

「てか、ちよつときさ…さつきから微妙に焦げ臭くない？」

「ん？…そう言えば、急に煙っぽいのが…」

拳藤の言葉に反応する骨抜。辺りを見渡すと、奇妙な事に桃色の煙が微かに立ち上っていた。

「爆豪達、ビビって『個性』ぶつ放しちゃったんじや…」

大方爆豪が苛ついて当たり散らした爆破の煙がここまでできたのだらうと、骨抜が推測していた直後、骨抜はドサリとその場に倒れ込んだ。

「骨抜!？」

急に倒れ込む骨抜に拳藤は驚く。ふと、辺りの煙が徐々に濃くなっている事に気付いた拳藤はハツとなり、「唯！」と叫んだ。

「吸っちゃダメ！」

「ん!？」

慌てて「個性」を使い、巨大化した手で小大を覆うように掴む拳藤。明らかに火を使った煙ではない桃色の煙。それを吸ってしまった骨抜は気絶している。となると、この煙は体を害するモノと判断した拳藤は辺り一帯に広がる煙を見て、確信した。

「この煙……有毒!!」

☆☆☆☆☆☆

「……ん?何、この焦げ臭いの……」

一方、スタート地点でもその匂いに反応したピクシーボブが眩く。肝試しを行う森の奥には薄らと青く光っており、そこからは煙が立ち上っていた。

「黒煙……?」

「っ!まさか山火事!？」

立ち上る黒煙にマンダレイも気付く。生徒達も異変に気付き、その燃え焦げる匂いにハツとなった飯田が叫ぶ。その瞬間だった。

「きゃっ!?!な、何ー!ー!」

突如、ピクシーボブの体が浮き上がり、背後の森の茂みに吸い寄せられるように引っ張られた。

☆☆☆☆☆☆

黒煙が立ち上る麓。そこには辺りの木々に手を置いて青い炎を発火させた茶毘がいた。一通りの木を燃やした茶毘は鬱蒼とした表情

でその口を開く。

「ギア、始まりだ。…地に墮とせ、ヒーローと言う偽りの輝きを、断罪するは、我ら敵^{サイラン}連合“開闢行動隊”」

麗日、蛙吹に忍び寄るトガ。肝試しルートをゆつくりと歩く瘦身の男、“ムーンフィッシュ”。森の中に有毒を撒き散らすガスマスク少年、“マスタード”。そして、暗い茂みを進む脇真音姉弟。

鬱蒼とした森に潜んでいた闇は、不気味に笑う茶毘の狼煙と共に進撃を開始していた。

☆☆☆☆

「飼い猫ちゃんはジヤマね」

一瞬、何が起きたのか分からなかった。ついさつきまで、肝試しを楽しむ為にスタート地点にいた火野達は、引き寄せられたピクシーボブを目で追いかけてようと、振り返ったその先にはもう既に、頭から血を流して彼女は倒れている。恐らく、オカマ口調で喋る長髪の男、“マグネ”

の持つ包帯を覆った巨大な棒で殴られたのだろう。その隣にはステインを模したトカゲ男、“スピナー”が堂々とした振る舞いで立っていた。その2人の姿に峰田は青ざめた表情で声を荒げた。

「何で…！万全を期した筈じゃあ…！！何で…何で敵がいるんだよオ!!!」

峰田の言う通り、今回の林間合宿は一部の教師、そしてプツシキヤツツしか情報を与えていないこの場所に、敵^{サイラン}が現れた。現れる筈の無い脅威。火野も顔を歪ませながら「何で…!?」と驚愕していた。「ピクシーボブ!!」

「やばい…！」

緑谷の呼び掛けに応じず、不意打ちをされたピクシーボブは完全に

気を失っている。その隣のマンダレイはふと呟いた。それは敵が現れた事に対してだと思つたが、緑谷はその言葉の真意を理解してハツとする。

「冢太君…!!」

「っ！」

緑谷の言葉に火野はハツとした。ヒーローと馴染めない冢太は、夜に決まった場所にいる。緑谷から聞いた話だとそこは「ひみつきちらしい。今、この状況で、そのひみつきちに居るのを知っているのは現時点で緑谷のみ。突然敵が襲撃してきた緊急事態に、冢太も予想など毛頭していないと、火野は冷や汗を流していた。

その予感的中しており、秘密基地にいた冢太は青い炎で燃え広がる森を見て愕然としている。そして、後ろの岩陰から、黒いマントに身を包んだ仮面男、「マスクキュラー」が冢太を襲おうと足を踏み出していた。

☆☆☆☆☆☆

その5分前、相澤に連合されていた補修組の5人は抵抗をやめて渋々と歩いていった。だが喚き言はやめてないらしく、涙目になった芦戸が口を開く。

「あうう……私達も肝試ししたかったあ……」

「飴と鞭つつつたじゃん飴は!?!」

「サルミアツキでもいい…飴を下さい先生……」

芦戸に続いて切島と上鳴が便乗する。サルミアツキとは北欧のお菓子が世界一不味いと評価されている。…とは言っても人によるので、相澤は「サルミアツキ旨いだろ」と反論していた。

そしてついには嘆くのを諦めた5人。捕縛布を解いた相澤に着い

て行くと、あつという間に補修を行うマタタビ荘の別館へと到着した相澤は扉を開け、今回行う補修について説明し始めていた。

「今回の補修では、非常時での立ち回り方を叩き込む。周りから遅れをとったつう自覚を持たねえと、どんどん差ア開いてくぞ。広義の意味じゃこれも飴だ。ハツカ味の」

「ハツカは旨いですよ…」

ハツカが嫌いでそう例えたのか、相澤の言葉に切島はか細い声でそう応えた。そして、補修を行う扉を相澤が開くと、そこにはB組の担任ブラドと、席にちよこんと座っていた補修生が、A組の5人を見るなり皮肉そうに高笑いを上げた。

「あれえ、おかしいなア!!優秀なはずのA組から赤点が5人も!?B組は一人だけだったのに!?おっかしいなア!!」

「どういうメンタルしてんだお前!!」

A組に難癖でもつけてるのかと言う勢いで、厭味つたらしく煽る物間に、切島は盛大にツッコむ。地頭は良いが、勉強の頭の良さは中の下の物間は、筆記試験こそギリギリ回避出来たのだが、戦闘試験の方が赤点だったらしい。彼の「個性」コピーは「個性」を持つ人間に触れると、その人間が持っている「個性」を5分間使用することができる。だが、触れてから5分するとコピーした「個性」は消えてしまうので、相方の「個性」が使えないとそれは無個性に近いも同然だ。そんな哀れな物間だが、それでも人を貶すメンタルはある意味で尊敬に値するかもしれない。高笑いする物間を見ながら切島は席に着きながら口を開く。

「昨日も全く同じ煽りしてたぞ…」

「心境を知りたい」

隣の席に座る芦戸も高笑いする物間を見つめながらそう呟いてると、相澤はブラドにこれから行う補修の話を持ちかけていた。

「ブラド、今回は演習も入れたい」

「俺も思っていたぜ。言われるまでもなくー」

『皆!!』

ブラドがそう言った直後、脳内にエコーのかかったような声が響く。声の主はマンダレイだ。

「マンダレイの『テレパス』だ」

「これ好きー。ビクツてする」

「交信出来る訳じゃないから、ちよい困るよな」

「静かに」

複数の人数の脳内に語りかけるマンダレイの“個性”に生徒達は騒いでいると、声のトーンからして、何か起きたのだろうと相澤は単直に静めた。

そして、マンダレイのテレパスが再び脳内に響く。

『^{サイラン}敵 二名襲来!!他にも複数いる可能性アリ!動ける者は直ちに施設へ!!会敵しても決して交戦せず撤退を!!』

「…は?何で敵が?^{サイラン}ここはバレないんじゃない?」

「っーブラド、ここは頼んだ。俺は生徒の保護に出る」

マンダレイのテレパスに物間は何を言っているのか頭が追いついていない様子で口を開くが、相澤は無視してブラドに指示を出し、急いで扉から出る。

「(……っ!考えたくはないな……!)」

万全を期した筈の林間合宿。誰にも情報を漏らしてはいない。それでも、こんな人知れずの森の中に敵が^{サイラン}現れた。まさかと思つた相澤は、それ以上の事を考えるのは一旦やめて、急いで廊下を走り抜ける。そして別館の外へと飛び出すと相澤は足を止めて目の前に立ち上る黒煙を目にした。

「!……マズいな」

肝試しでA組とB組の生徒達が森の中にいる。このままでは災害と怪我人が出てしまうと、顔を歪ませたその時だった。

「心配が先に立ったか、イレイザーヘッド」

「!!ーーーブラド」

黒煙に気を取られ、待ち伏せしていた茶毘の言葉に反応した相澤は“個性”を発動させ振り返りながら応援を呼ぼうとする。だが、茶毘

の不意打ちの方が早く、構えていた左手から相澤を瞬時に呑み込む程の蒼炎が放たれた。

「邪魔はよしてくれよ、プロヒーロー。用があるのはお前らじゃない」

☆☆☆☆☆☆

「ご機嫌よろしゅう雄英高校!!我ら、^{サイラン}敵 連合開闢行動隊!!」

マグネと共に突然現れたスピナーは、笑みを浮かべながら自分等の存在を機嫌良く名乗る。

「^{サイラン}敵 連合…!?何でここに…!!」

マンダレイ、虎を先頭に身構える生徒達の中、尾白が警戒しながらそう言う。合宿でいない筈の敵が目の前にいるのだ。この場にいる全員が疑惑を脳内で過っているだろう。すると、マグネが足元に倒れているピクシーボブに巨大な棒を、グリグリと流血している額に突きつけながら口を開いた。

「この子の頭、潰しちゃおうかしらどうかしら?ねえどう思う?」
「させぬわこのっ…!」

明らかに挑発してくるマグネに虎が激怒し、今にも襲おうと足を踏み出したその時、^{サイラン}敵のスピナーが両者の間に入った。

「待て待て早まるなマグ姉!^{ねえ}虎もだ、落ち着け」

その言葉に両者はピタリと動きを止める。^{サイラン}敵である筈なのに戦いを好まないのだろうかと疑問に思う中、スピナーは口を開いた。

「生殺与奪は全て、ステインの仰る主張に沿うか否か!!」

「ステイン…:i:充てられた連中か…:i:!!」

ヒーロー殺しの行動は全世界に響き渡っていた。彼の思想によって信奉者が増えても、今更おかしくはない。飯田は目を見開いて唾然

としていると、スピナーは飯田を見て自身の意志を告げた。

「そして、アア、そう！俺はそうお前、君だよ眼鏡君！保須市にてステインの終焉を招いた人物。申し遅れた、俺はスピナー。彼の夢を紡ぐ者だ」

そう言つて背中に背負っていた武器を構える。包帯が解かれると、手作りなのか無数の刃物が、ベルトで繋ぎ合わさっている巨大な剣が露わになる。物騒な武器に緑谷は「わっ…」と顔を引き攣らせていた。すると、隣の虎が、そんな事はどうでもいいと言わんばかりに一歩前へと踏み出し、口を動かす。

「何でもいいがなあ、貴様ら…！その倒れている女…、ピクシーボブは最近婚期を気にし始めててなあ。女の幸せ掴もうっていい歳して頑張つてたんだよ。そんな女を傷物にして、男がヘラヘラ語つてんじゃないよ!!」

倒れているピクシーボブを目の前にして、肉球を模したグローブからは鋭利な爪が飛び出させた虎は激昂する。そんな虎をお構いなしにとスピナーは刃物の剣を構えてダツと駆け出した。

「ヒーローが人並みの幸せを夢見るか!!」

スピナーと同時にマグネも駆け出す。突っ込んで来る2人の敵に^{サイラン}虎は身構えると、マンダレイが前に出て虎、及び後ろにいる生徒達に指示を出した。

「虎!!『指示』は出した！他の生徒達の安否はラグドールに任せよう！私らは2人でここを押さええる!!皆行つて!!良い!?決して戦闘はしない事！委員長引率！」

決して敵から目を逸らさず、冷静な判断の指示を委員長である飯田に出す。後の行動はその見込みのある委員長の名を持つ人物に任せると託したからだ。

「承知しました！皆行こう!!」

飯田は了承し、その場にいる生徒らに声をかける。引き連れて離れようと動き出したその時、緑谷は振り返ってマンダレイの顔を見た。

^{サイラン}敵に対しての警戒した表情だが、その眼の奥には何か焦りを感じる瞳をしていた。

「飯田君、皆、先に行つてて……」

「緑谷君?!何を言っている!?!」

「緑谷!!」

まさか加勢するつもりなのかと飯田は緑谷の言葉に慌ててそう言う。尾白も声を上げるが彼は全く動じず、マンダレイに声をかけた。

「マンダレイ!!僕、知ってます!!」

「!?!」

緑谷の言葉に、マンダレイはハツとする。はつきりとしたその表情に偽りはなかった。

「……!?!ごめん!ならお願い出来る!?!ただし見つけ次第直ぐに委員長達と合流すること!?!いいね!?!」

「はいっ!!」

考える時間などどこにもない。危険を承知でマンダレイは緑谷に指示を出して託し、迫り来るスピナーとマグネを、虎と共に迎え討つた。緑谷は飯田達に「ごめん!後で合流する!」と言い残し、別方向へと駆け出して行く。

「緑谷君!!」

「何だよ緑谷の奴!こんな緊急事態によお!!」

飯田の声はもう届かず、走り去る姿を見た峰田は声を上げてパニツクになっている。そして、同時にその後ろ姿を見ていた火野は、何か決心した様子でコクリと頷き、飯田に声をかけた。

「飯田君!先に行つてて!俺も緑谷君と一緒に行動する!」

「なっ!?!火野君まで!?!」

「ごめん!必ず合流するから!」

緑谷の目的は洗太を連れて逃げ出すこと。その意図を読んだ火野は彼を1人にしてはいけないと感が働いたのか飯田にそう言い残して、その場を後にしたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「緑谷君!!」

「っ?!?火野君?!?何で…!」

駆け出した緑谷の後ろを追いかけ、火野は声をかけると、緑谷は驚いた表情で振り返る。

「洸太君でしょ?!?俺も行くよ!」

「…!ありがとう!」

着いてきたのならしょうがない。ここで断つても嫌だと断言するような表情をした火野に、緑谷は頼もしいと思えたのか、その頬は上がっていた。

ワン・フォー・オールを全身に巡らせた緑谷は脅威的なスピードで駆け抜けていた。火野に合わせて加減してくれているようだがそれでも差がひらいていく。火野は止むを得ずオーズドライバーを取り出して腰に宛い、装着したその直後。

「っ!!緑谷君止まって!!」

「!!」

前方の暗い茂みからギリギリと何かが光ったのが視界に入り、火野は声を張り上げる。緑谷も気付いたようで、砂煙を上げながら勢いよく止まると、その前方から何かが物凄いスピードで飛んできた。緑谷には当たらなかつたが、飛んできたモノは火野の頬をかすめる。ツ…と頬から血が流れ、火野は慌てて振り返ると、そこには異様な造形をした赤い槍が木に刺さっていた。

「火野君?!」

「大丈夫!かすっただけ!それよりこの槍…!」

見た事のない槍に火野は違和感を覚える。すると、火野の体の中から人型のアंकが姿を現し、驚きながらも感心した様子で火野に声をかけた。

「…:ほお、こんな近くになるまで気付かなかったとは、俺も鈍ったものだなあ」

「アंक！」

突然出てきたアंक。その言葉にまさかと火野はハツとしたその時、茂みの向こうから木の枝がパキツと折れる音が聞こえ、その場の3人は振り返った。

「ちよつとお、弟君！脅かす程度なら槍なんて物騒な物投げたらダメでしょ！当たったらどうするのさ！」

「……避ける……と……思った……から」

茂みから現れたのは弟を叱る優無と、その弟の槍無だった。

「脇真音……優無！と、弟の槍無……!?!」

「……まさかとは思ってたけど……」

2人の姉弟の登場に驚く緑谷。敵サイラン連合が出てくるのなら、この2人も間違いなく現れると、スピナーとが名乗っていた時に火野は予想していたが、最悪のタイミングで鉢合わせとなってしまった事に火野は焦りを感じていたのだった。

No. 82 海の化身ポセイドンと突林コンボ

洗太がいる。〃ひみつきち〃へと向かうべく森を駆け抜けていた火野と緑谷。だが、その途中で敵^{ヴァイラン}連合の脇真音姉弟と遭遇してしまっていた。

「まさかとは思ってたけど…最悪のタイミングだぞ…！」

「この人が…敵^{ヴァイラン}のオーズ…!!」

「おおー！探す手間が省けたよお！シヨツピングモール以来だね。火野映司君、アंक」

「……えと…こんばんは……」

警戒する火野の表情を見て、脇真音姉弟と見抜く緑谷は驚愕しながらも身構える。そんな2人に対して、友人が挨拶をするように声をかける脇真音姉弟。相変わらずのなめた態度にアंकはシヨツピングモールの事も相まつてか、苛立ちを覚え、口を開いた。

「よくもまあ、のうのうと俺達の前に現れたもんだな。素直に顔を出した…ってことは、それなりの覚悟は出来てるんだろな？」

「え、覚悟？…ああ、そんな事もあったっけ？まあ、過去の事は水に流そうよ、アंक」

忘れたような物言いにアंकは「巫山戯るな！」と激怒する。ふと、身構えながら緑谷は火野の隣まで後退って来ていた。火野は姉弟から目を逸らさず、緑谷に声をかける。

「…緑谷君。ここは俺とアंकで引き付けるから、緑谷君は洗太君のところへ行って…！」

「っ…でも…」

「ここで緑谷君まで、こいつらの相手をしてたら洗太君の身に何かあったら手遅れになる。…俺は大丈夫だから」

脇真音姉弟は言わずもがな、狙いは火野とアंक。火野は、緑谷に付いて来たのはこうなる事を想定していた為だ。真剣な眼をした火野の覚悟を、無駄にしたくはないと緑谷は「わかった」と深く頷く。そして直ぐ、全身にワン・フォー・オール^{ワン・フォー・オール}の力を巡らせると、地面を強

く蹴り出し、脇真音姉弟の方向とは別の方向へと駆け出した。

「あら、そばかすの子は逃げちゃうの？」

「……させ……ない……」

駆け出す緑谷を目で追う優無。だが槍無はそう呟くと、その場から跳躍し、緑谷に襲おうと飛び掛かる。その瞬間、火野は「アंक！」と声を張り上げると、アंकは舌打ちをしながらグリード化した右腕を槍無に向けて突き出し、炎の球を放った。

「!!」

槍無は間一髪でソレを避けるが、体勢を崩して地面へと着地する。その間、緑谷は稲妻が迸る体で、物凄いスピードの速度で駆け抜けて行った。

「ちよつとお！火なんて危ないでしょ！当たったらどうすんのさ！」

「フン、どうもしないだろ。まあ、当たって手負いが出来るなら万々歳だったんだが……。映司、さっさとコイツら倒してメダルを奪うぞ」

「……………戦闘は避けろって言われてたけど、ヒーローが手薄の今、こればかりはしょうがないよなっ」

プンプンと頬を膨らませて怒る優無を蔑ろにしてアंकは、マンダレイの言葉を思い返していた火野に向けて、タトバのコアメダルを投げ渡す。優無も「せっかちなあ！」と文句を垂れながらオーズドライバーを腰に宛い、装着させる。そして、火野、優無は両者共にタトバのメダルを構え、それぞれの変身手順のシークエンスを見せた。

「変身！」

「変身」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ!タトバタ・ト・バ!

同じ音が両者のオースキャナーから鳴り響き、重なり合う。そして火野はオーズ、優無はヴィランオーズ、〃タトバコンボ〃になってその身を変えた。オーズは「ハアッ！」と声を上げて戦闘態勢に入る中、ヴィランオーズは何故か身構えず、弟の槍無を見遣る。

「さアて、弟君！憧れの2人に、君のカッコいい姿を見せちゃってよ！」

「うん…」

ヴィランオーズはそう言うのと槍無はコクリと頷き、ヴィランオーズの前へと移動する。そして、後ろに手を回して取り出したのは、オーズとアंकにとつて、見たこともないドライバーだった。

「っ？何だそれは…!？」

「違う…ベルト…?？」

ギザギザに覆われた黄色の淵が3つある円盤状のドライバーにアंकとオーズは目を見開く。その光景を見ていたヴィランオーズはニヤニヤとしながら口を開いた。

「君達にとつてはパラレルのような世界で遭遇した代物だからねエ。ここからはオリジナルの展開でご披露させてあげるよ…!」

ヴィランオーズが自慢気にそう言っている間、槍無はそのベルト、〃ポセイドンドライバー〃を腰に宛い装着させる。すると、槍無の目が青く光り、勢いよく胴体から3枚のコアメダルが飛び出す。そのメダルは槍無の周りを数秒間浮遊すると、瞬時にドライバーの3つの窪みに嵌る。そして、目を閉じた槍無はゆっくりと目を開け、小声で呟くように言った。

「…変身」

サメ！

クジラ！

オオカミウオ！

海の生物の名が轟き、槍無の体は水流に包まれる。海洋生物に至ってはシャウタと同じモチーフとなっている。だが、そのコアメダルは、同じ海とは言えど、どれも脊椎動物である「サメ」、「クジラ」、

「オオカミウオ」のコアメダルだ。槍無を纏った水が弾け飛ぶと、ここにはオーズと似た見た目をした姿の戦士が立っていた。鯨の頭部、鯨の胴体、そして狼魚の脚部を模した体は、まさに海の化身とも言える。戦士は腕を差し出すと、木に刺さっていた赤い槍、「ディーペストハーブーン」がそれに反応し、引き寄せられるかのようにその戦士の手に戻っていく。そして、その戦士はディーペストハーブーンを地面に突き刺すと、その姿に驚くオーズとアंकに向けて口を開いた。「……言つとくけど……命乞いをしない方がいい………時間の………無駄だから……。えと………これで、いいんだ……よね？姉さん？」

ポツポツと喋る台詞のような言葉。だが、最後に疑問系となってヴィランオーズに振り返る。それを見たヴィランオーズは「あちゃあ」と顔に手を当てて口を動かした。

「その疑問系がなかったら完璧だったのに……まあいいか。次からは気をつけなよ？」

「ごめん………」

「おい！茶番なんかどうでもいい！何だお前は!？」

2人の会話に痺れを切らしたアंकが吠えたとヴィランオーズは溜め息を吐いて口を動かした。

「せっかくの晴れ舞台なのに、少しは待機って言葉の配慮したら……まあいいけどさ。」

私の弟の槍無はその身に宿す海のコアメダルを使って変身できるの。勿論、ドクターお手製のベルトだね。その名前は、「仮面ライダーポセイドン」！」

「ポセイドン……!?あの、海の神様の……!？」

「馬鹿がつーそんなわけあるか!」

オーズはギリシャ神話のポセイドンが脳内に浮かんでたのか、愕然としている。この状況でも天然地味リアクションが取れるオーズ

に、アंकが呆れて、吠えながらオーズの頭を叩いていた。すると、ポセイDONはディーペストハーブーンを突き刺した地面から引っこ抜く。戦闘態勢に入るポセイDONの隣に立ったヴィランオーズは口を動かした。

「さて、そろそろ始めますか。火野映司君の相手は任せたよ、弟君」

「……うん……」

「っ、アंक！今回はお前も戦えよ！」

「チツ、まあ……そうせざるを得ないか……」

オーズの言葉にアंकは珍しく了承していた。だが、その目は身構えるオーズの背中を、どこか心配そうな目をして見つめていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

有毒のガスが充満した森。拳藤は巨大化した手の中で、小大と骨抜を閉じ込めてガスを吸わせないようにと、微風が吹く風上の方へと走っていた。当の本人も息継ぎの要領で呼吸をしているが、一呼吸をする度に「ゴホツゴホツ」と咳き込んでいる。

「拳藤！」

「っ！鉄哲！茨！何そのマスク!?!」

馴染みのある声に振り返ると、そこにはガスマスクを装着した鉄哲と、同じくガスマスクを被って抱き抱えられてた塩崎だった。

「A組の八百万が近くについて創ってもらった！泡瀬がB組らの待機位置を案内して救助にあたって！使え！沢山貰った！」

鉄哲はそう言いながら腰に下げているガスマスクを拳藤に見せる。「ありがと！」と拳藤は腰からガスマスクを貰い、小大と、気を失っている骨抜に装着させ、自分もそれを被る。やっと呼吸が出来たのか、

軽く息を整えて口を開いた。

「早く施設に戻ろう。敵がどこにいるのかも分からないし、危ない……」

マンダレイのテレパスで交信された現状、敵とは接触せず、尚且つ最短ルートで施設に戻る。提案する拳藤だが、鉄哲はそれを拒否した。

「いやー俺は戦う。塩崎や小大の保護を頼む」

「は!?!交戦はダメだつて……」

生徒の身として敵と戦うのは規則違反かつ、活動免許を取得していないのに戦うのは懲罰が下される。後先考えずにそう言う鉄哲に拳藤は止めようとすると、鉄哲は若干俯きながら口を開いた。

「お前はいつも物間を窺めるが…、心のどこかで感じてなかったか!?! A組との差……」

鉄哲の言葉に拳藤は目を見開く。確かに、同じヒーロー科とは言えど、体育祭の時は最終種目で栄光を浴びたのはA組生徒のみ。その時は仕方ないと目を瞑っていたが、本心は悔しかったのもある。

「俺ア、感じてたよ……!」

鉄哲はそう言って一旦区切り、塩崎を地面へ下ろすと口を動かした。

「同じ試験で、雄英に入って同じカリキュラム。何が違う? 明白だ! 奴らにあって俺達に足りなかったもの……“ピンチ”だ!! 奴らはそいつをチャンスに変えていったんだ! 当然だ! 人に仇なす連中にヒーローがどうして背を向けられる!?!」

「鉄哲……」

その言葉の意味はおそらくUSJ事件。授業の一環として訪れた演習場に、予想をしていなかった敵の襲撃。雄英に入って間もない頃に起きた出来事に、A組生徒達は各々の冷静な判断力と行動力で凌ぐ事が出来た。先程、鉄哲にガスマスクを渡した八百万もその1人。咄嗟に判断し、創造したマスクによって、今もこうして鉄哲達はこの有毒ガスの中立ち回れる。悔しくもそれは“経験”の差だと鉄哲は拳に力を入れて、現状を受け止めていた。

「止めるな拳藤！一年B組ヒーロー科！ここで立たねばいつ立てる！見つけ出して俺が必ずぶっ叩く!!」

だからこそ、ヒーローを目指す者として、このピンチをチャンスに覆したい。鉄哲は覚悟を決め、その上げた右腕をステイルにして、ガキツ！と鉄が軋むような音と共に拳を作る。一度言い出した事を曲げないその男らしさの鉄哲に、拳藤はかける言葉もなく、ただ不安そうに横たわる塩崎と骨抜を見つめていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

『冨太…！冨太聞いてた!?すぐに施設に戻って！私ごめんね、知らないの！あなたがいつもどこへ行ってるか…。ごめん冨太!!救けに行けない！すぐ戻って!!』

冨太の脳内でマンダレイのテレパスが、先程から何度も響く。燃える森を見た以上、只事ではないと、冨太もそうしかかった。だが、振り返った途端に冷や汗が溢れ出て、その足は止まっていた。そこには黒マントを覆った仮面の男、マスキュラーが立っていたのだから。

「見晴らしの良いところを探して見ればどうも…、資料になかった顔だなア、ところでセンスの良い帽子だな子供。俺のダセエマスクと交換してくれよ。新参は納期がどうかってこんな玩具つけられてんの」ズンズンと詰め寄りながら愚痴を溢すように話しかけるマスキュラー。冨太にとっては化け物のような巨大と存在感のある男だ。今にも襲われそうな危機感を覚え、冨太は反対方向へと逃げ出す。

「ひえああア…!!」

「あ、オイ」

マスクを外す最中に逃げ出した冨太を呼び掛けたその時、マスキュラーは足に力を入れる。その途端、ブーツがモリモリと膨れ上がる。踏み込む地面は割れ、ジャンプすると、巨大とは思えないスピードで

洗太の前へと回り込んだ。

「ひっ…!!」

「景気づけに一杯やらせろよ…!」

マスキュラーは右腕を大きく振りかぶる。すると、皮膚から筋肉の繊維が覆うように飛び出て、その腕に纏わりつく。膨れ上がるその腕に驚く洗太。…否、それではなく、マスキュラーの顔を見てその顔は愕然としていた。

「お前…!!」

少し前の出来事。洗太の両親ウオーターホースは1人の心無い敵サイランに殺害された事件があった。その敵は、ウオーターホースとの戦闘により、左眼に大きな傷を負っていた。左眼に傷を負い、義眼をしている。それがまさに、今日の前にいる「血狂い」の異名を持つマスキュラー本人そのものだった。

「パパ…! ママツ…!!」

恐怖、憎悪、絶望。そして、死の窮地に立たされた洗太は、溢れ出す涙と共に殺された両親の面影を思い出し出していた。それと同時に、心の底で僅かに、「たすけて」と願った。

マスキュラーは満面の歪んだ笑みと共に拳を振り下ろしたその時、下の崖から緑谷が現れ、勢いよく跳び出す。洗太を抱き抱えマスキュラーの攻撃を間一髪避けたのだ。

「ぐっ…!」

勢いが有りすぎて緑谷は洗太を傷つけまいと受身で転がる。その際に衝撃でスマホがポケットから落ちてしまう。画面には亀裂が入り、もう使い物にならなくなっていた。

「何で…!!」

洗太を置いて、咳き込みながら体制を立て直す緑谷に、洗太は困惑状態のまま尋ねる。ふと、マスキュラーは現れた緑谷の顔を確認すると、嬉しそうに口を開いた。

「んん? お前は…リストにあったな…!」

資料に当てはまる人物を当てたマスキュラーは緑谷の顔を嬉しそうに舌舐めずりをする。

「大丈夫……」

一方、緑谷はマスクユラーを目の前にして反射的に体に無駄な力が入る。悪い癖だと、落ち着こうと息を整えながら緑谷は洗太にそう言い聞かせ、考えていた。洗太を庇った衝撃で連絡手段のスマホは破損。途中で脇真音の足止めをしている火野達にもこの場所までは知らせていない状況、ここに応援が来るのは厳しいとなる。よって、この場を動けて退けるのは、緑谷のみとなっていた。

僕1人でやれるかどうか。

焦りと不安を感じる緑谷はふと、洗太の顔を見遣る。

「！」

洗太は涙で顔がぐしゃぐしゃになっていた。何せ両親を殺した本人が目の前にいる。しかも自分も殺されかけたのだ。色々な感情が湧き出ているその表情を見て、緑谷は「（ーじゃない!!）」と心の中で一喝する。

「だいつ……大丈夫だよ、洗太君……」

不安に襲われる人を背にして、ヒーローを目指す者が怖気付いてどうする。緑谷は冷や汗を流しながらも、笑顔で呼びかけ、その顔を上げてマスクユラーを見つめた。

「必ず、救けるから……」

ピンチはチャンス。例え1人だろうと、困ってる人は放っておけない。緑谷は全身にワン・フォー・オールの力を張り巡らせ、身構えたのだった。

☆☆☆☆☆☆

スタート地点から少し離れた場所。有毒ガスが届いていない

この付近は、荼毘の炎によって焼かれた森より静寂していた。の、筈だが、突如衝撃と轟音が夜空へと響き渡る。次の瞬間、一本の木が軋む音と共に地面へと倒れた。そして、その向こうではオーズとポセイドンが戦闘を繰り広げている。

「ハアッ!!」

「:!!ムッ!」

オーズは渾身の回し蹴りをするが、ポセイドンはディーペストハーブーンでそれを受け止める。すると、ポセイドンはすぐにその脚を掴む。オーズは何かされる前にハツとなり、地面を踏み込むと脚を掴まれた状態で宙へと上がり、ポセイドンの肩に片方の足で蹴りを放った。

「タア!」

「!?ムン!」

何歩か後退り、よろけるポセイドンだが、反撃をせんとディーペストハーブーンを豪快に振り上げる。すると、刃先から水の斬撃が放たれ、地面へ着地したオーズの足元に斬撃が直撃し、抉れる程の威力でオーズ諸共吹き飛ばされた。

「うわあっ!」

地面を転がるオーズに、追い討ちをかけんとポセイドンがディーペストハーブーンを振り回して詰め寄る。態勢を立て直そうとオーズは顔を上げた時、ポセイドンはその槍をオーズ目掛けて振り下ろそうとしていた。

だが次の瞬間、直撃したディーペストハーブーンから、ガキイイ!と硬いモノに当たった音が響く。ポセイドンは何かと見遣ると、オーズは取り出したメダジャリバーで受け止めていたのだ。オーズはそのまま押し出すように力を入れ、ポセイドンを引き離す。

「ヤミー相手じゃないけど…、この際防衛手段として使わせてもらおう…!」

「……………」

メダジャリバーは鴻上から譲り受けた物で、ヤミーとの戦闘でのみ使用可能と許可を貰っている。相手が武器を所持して無防備で挑む

のは余りに無謀だとオーズはメダジャリバーを構えて言う姿に、ポセイドンは無言で身構えていた。ふと、それを見ていたヴィランオーズは若干興奮気味に口を開く。

「くああーやっぱりオーズって言えばメダジャリバーだよねえ…！目の保養になるけど弟君相手に刃物はダメだぞ！」

「お前の弟にも同じ事が言えんのか！」

見惚れるヴィランオーズの背後に回り込んだアंकが、グリード化した右腕を大きく振るい、ヴィランオーズの背中へ直撃する。「ぎや!?」と苦痛を上げヴィランオーズは前方へと転がった。

「んああっ!!不意打ちは嫌い!もー!痛いじゃんか!」

「だったら素直にメダルを渡せ。そうすれば楽に始末してやる。そうでなければ苦痛の中で始末するぞ」

「両方選んでも殺されるのかい!?!」

恐怖の選択を見下すような笑みで問うアंकに、ヴィランオーズはツツコみを入れながらも、その言葉に若干背筋が凍りついていた。

「…姉さんー」

「ハアッ!」

姉が圧されているとポセイドンは感付き、加勢しようとするが、オーズはその隙を逃さず、ポセイドンへと詰め寄るとメダジャリバーを大きく振り上げる。だが、ポセイドンは直前で気付いたのかディーペストハーブを前に出して攻撃を防御した。

「邪魔…!!」

「それはこっちの台詞。お前等何で林間合宿の事を知ってるんだ!?!」

睨みつけてくるポセイドンにオーズは身構えながらもこの襲撃について問いかける。すると、ポセイドンは軽く息を吐くと、前髪を掻き上げるような仕草を見せて口を動かした。

「言えない…言わ…ない…。そんな…の…どうだったいい…!!」

「!?」

明らかに声のトーンが変わり、その漂わせる悍しいオーラを出すポセイドンにオーズはゾツとする。その感覚を感じたヴィランオーズ

は、ポセイドンを見るなり「あちやあ」と手を額に叩いた。

「ちよつと弟君。テンション上がるの早すぎない？」

「ウウアア…!!」

「あーあ…、完全に入っちゃってんね」

「…おい、何がだ？」

やれやれと息を吐くヴィランオーズにアंकが声をかける。ヴィランオーズはアंकへと振り返り、ポセイドンに向けて親指を指しながら口を開いた。

「あのポセイドンはね。『欲望』を強さにして戦うの。『戦闘欲』ね。戦いたい、倒したい、勝ちたい…、その弟君の想いが強さの引き金になるわけ。ま、理性は残ってても半分暴走状態に近いから、治るのに時間がかつちゃうけど」

「…フン、つくづく面倒な物を作ってくれるなあ。おい映司！面倒になる前にとつとそいつを倒せ！」

「俺もなるべくそうしたいんだけど…！思うように体が…！」

怒れるポセイドンにアंकは警戒しながらもオーズに呼びかける。明らかにヤバい雰囲気を出すポセイドンと戦っているオーズもそれは重々承知しているのだが、屁理屈を言うオーズにアंकは「あ？」と疑問を抱いていた。だが、それも一瞬で、アंकは今日行った『個性』伸ばしの訓練を思い出し、不快そうに舌打ちをする。

それもそのはず、今日の訓練で火野はコンボを3回も使用している。いつ倒れてもおかしくはない。増してや、今反動が少ないタトバコンボで戦えてるのも奇跡なのだ。

「…チッ！何でも厄介ごととは万全じゃない時に限って訪れるんだよ…！」

「えー？なにになに？何の話？」

「黙ってる！」

ヴィランオーズが興味を示すように顔を覗き込む仕草を見せると、それにキレたアंकが右腕から炎の球を飛ばして攻撃を仕掛ける。「あつぶな！」とヴィランオーズはそれを避ける。

一方、オーズは徐々に疲労が出始めたのか、息切れを起こし始める。

だがポセイドンは止まることなく、リミッターが外れたようにその息が荒くなると共に、地面を踏み込んだ。

「ウウウア!!」

跳び出したその速度は先程まで戦ってたポセイドンの比では無かった。オーズがハツと気付いた時には、目の前で回し蹴りをしようとしたポセイドンがいたのだ。

「アア!!」

「っ!?!うわあっ!!」

左肩に諸に直撃し、そのまま真横へと吹っ飛ばされる。吹き飛ばされても威力は止まることなく、オーズが通過する度に木々がその衝撃で、何本かへし折れる程だった。

「うがっ!?!うう…!?!」

勢いは治まり、木の根元にぶつかったオーズは痛む全身に悶えていると、ポセイドンはディーペストハーブンを構えて、オーズへと向かって駆け出す。

「ツ!おい映司!メダル変えろ!」

「させるわけないっしょ!」

アंकはオーズに声をかけ、コアメダルを取り出そうとする。だが、ヴィランオーズが飛びかかるように襲い、それを止めた。

「!邪魔すんな!」

アंकは飛び退きながらも炎の球を放つ。ヴィランオーズの胴体にそれが直撃すると、火花を散らしながらヴィランオーズは地面を転がった。

「いだっ!?!あっつ、あっついっ!?!」

残り火が胴体に引火し、ヴィランオーズは慌ててバタバタと手を振るって火を消す。鎮火したのを確認すると、徐にオーメダルネストへと手を差し伸べ、3枚のコアメダルを取り出し、口を開いた。

「もお!酷い!女の子に火は当てちゃダメって火野映司君に言われなかった!?!」

「知るか!それに毎回、変に可愛い子振るのはやめろ!苛々すんだよ!」

「女の子なんだからいいじゃんか！もお頭にキタ！本気出すからね！」

互いに吠える両者。するとヴィランオーズはドライバーからタトバのメダルを抜き取り、見たことも無い造形を模したコアメダルを嵌め込む。それを見たアंकは、また知らないコアメダルだと心底不快そうに舌打ちをし、身構える。

そして、オースキャナーを取り出してヴィランオーズはドライバーへとスキャンさせた。

シカ！

ガゼル！

ウシ！

シーガーゼーシー！シーガーゼーシー！シーガーゼーシー！！

今までの変身音とは随分と、軽快でポップな曲調で鳴り響く。頭部はシカ、胴体はガゼル、脚部はウシと、〃偶蹄類〃を模した茶色をベース姿となっている。どの部分にも共通した〃角〃が見受けられ、ヴィランオーズは〃シガゼシコンボ〃となっていた。

「…!?新しいコアメダルにコンボ…!?」

「不愉快極まりないな…！どれだけ持ってんだお前…!!」

ポセイドンと戦闘していたオーズも初めて見るその姿に驚いていた。同時にアंकも目を見開きながらヴィランオーズに問いかけると、ヴィランオーズは軽装を纏ったみたくぴよんぴよんとステップをしながら口を開いた。

「ふっふーん！どのくらい持つてるでしょう…：さて！こうなったら流石のアंकでもちよつとしんどいかもかもしれないからね！」

ステップを止めると、ヴィランオーズは脚部の〃ウシレッグ〃で地面を何度も蹴り上げる。それはまるで、猛牛がこちらを威嚇し、今にも突進してくるような姿だった。

「フウ…：フウ…：」

一方、オーズも左肩を押さえながらなんとか立ち上がり、興奮気味に息が荒くなつて迫り来るポセイドンを見つめていた。戦闘欲の塊と未知のコンボ形態。立っている事すら儘ならなくなって来たオーズは窮地をどうするかと、必死に考えていた。それは同時にアंकもだった。

No. 83 深緑の欲望と開放

敵^{ヴァイラン} 開闢行動隊が襲いかかり、A組、B組の生徒達及び、その教師とプツシーキヤッツは一部交戦を除いて肝試しを行っている森を抜けようと動き出していた。

その中、2番目に動いていた轟と爆豪も施設へ向かおうとしている最中、脅かし役の円場は有毒ガスを吸って倒れているのを発見し、轟がおぶっている。

「くっそ…!!」

有毒ガスが森を充満する中、爆豪は咳き込みながら悪態を吐く。^{ヴァイラン}敵が来ること事態想定外な上、逃げ出そうにもガスが濃くなり道手を阻んでいる。呼吸も碌に出来ない状態で頼るのは歩いて来た道のみ。苛々が募る爆豪に轟が辺りを見回しながら口を開いた。

「このガスも敵の^{ヴァイラン}仕業か。他の奴らが心配だが仕方ねえ。ゴール地点を避けて施設へ向かうぞ。ここは中間地点にいたラグドールに任せよう」

B組と同じ脅かし役としてラグドールはゴール地点に持つていく為のお札がある中間地点に滞在しており、残された生徒達はラグドールが救けると信じて轟は爆豪に指示を出す。爆豪は「指図してんじやね…:」と不満そうに言ったその時、爆豪の目が見開き、立ち止まった。「おい、俺らの前誰だった…!?!」

爆豪は確認の為か轟に問う。轟も何事かと前方を見遣ると、そこには黒の拘束着に身を包んだ敵^{ヴァイラン}、ムーンフィッシュが道の真ん中で膝をついていた。その男は此方に振り向く事なく、何かを眺めている。

「綺麗だ。綺麗だよ。ダメだ、仕事だ。見惚れてた。ああ、いけない……」

ボソボソと呟くムーンフィッシュ。どうやら足元にあるモノを見て言っているのだろう。轟は眼を凝らしてそのモノをよく見ると、次第にその表情はみるみると恐怖に表情を歪ませていた。闇夜でも薄ら見える赤い液体。……爆豪、轟等の前のチーム…それは。

「常闇と…障子……!!」

恐らくその場に居ないということは、2人は逃げ出したと轟は冷や汗を流しながら信じていた。そこには目に映ってはいけないモノがムーンフィッシュの足元に転がっているからだ。地面にこびり付いた赤い血。そして、綺麗に斬られた右腕。

「綺麗な肉面……ああもう…。誘惑するなよ………仕事しなきゃ」

ムーンフィッシュは爆豪達の存在に気付いたのかボソボソと呟きながらその悍ましい顔を見せるように振り返る。顔も黒の拘束着に覆われ、剥き出しなっている口からは涎が垂れていた。息遣いも荒い。そんな男を見て爆豪はこの状況にも関わらず不敵な笑みを浮かべた。

「交戦すんなだあ…!?!」

この敵は恐らく強い。男から放つ異常な雑鬼が、肌身でそう感じている。マンダレイの指示とは言えど、この男からはそう簡単には逃げ出せないと思つた爆豪は、相澤に怒られる覚悟で、いつでも爆破が放てるよう身構えていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「てめエらのような利口的なヒーローもどきは、肅清対象だ!」

肝試しのスタート地点で敵との交戦ヴァイランが開始された最中、スピナーは自称ステインの意思を継いだ想いでそう叫び、刃物を繋ぎ合わせた大剣でマンダレイに向かって大きく振りかぶる。すると、スピナーの脳内からマンダレイの声が響いた。

『スピナー、敵ヴァイランながらカッコいいじゃない♡好みの顔してる』

誘惑するような声に思わず「え?」と声を漏らして動きが止まる。

「何照れてんの、ウブね」

「!」

赤く頬を染めて動揺している隙に、マンダレイは懐へと潜り込み、肉球を模したグローブから爪の刃を出し、スピナーの脇腹へと斬り込んだ。

「でえ!!?!?!なんて…っ、不潔な手を！尻軽女めが!!」

姑息な真似をと激怒するスピナー。攻撃を与えたとは言え、痛がるだけで軽症なようだ。マンダレイはそのまま地面へ両手足を付けて身構える。次の瞬間、マンダレイの自身の体が急にふわっと軽くなつた。

「!?!」

そのまま引き寄せられるように、宙を浮く。その先には包帯で包んだ棒を待ち構えたマグネがニヤリと笑っていた。

「わあ?!」

「おいで、飼い猫ちゃん」

飛んでくるマンダレイ。だが、そつちに攻撃を仕掛けようとしてる隙に、虎が詰め寄り、剛腕の腕をマグネの持つ棒へと振り下ろした。

「そう同じ手！させぬわ！」

「きやつ」

虎の拳が直撃し、棒を落とすマグネ。するとマンダレイも同時に地面へと落下した。マグネの「個性」は物を引き付ける何かだろう。それを、解説するかのように虎が口を開いた。

「引石研磁。^{サイラン}敵名「マグネ」。『磁力で相手を引き寄せる』「個性」。強盗致傷9件、殺人3件、殺人未遂29件」

「やだ、私有名じ…んっ!?!」

多くの犯罪に手を染めたマグネはそれなりに名が知れ渡っており、虎の発言にマグネ自身も驚く。だが、口を開いた最中に虎はすかさずブローを顎に食らわそうとしたが、マグネはそれを受け止めた。

「何をしに来た。犯罪者」

「虎!!おかしいよ…!まだラグドールの応答がない!いつもならすぐ連絡を寄こすのに…!」

尋問する虎。するとマンダレイが耳に当てた通信機を起動させながら叫ぶ。サポート専門のラグドールが未だに連絡を、仲間の誰一人

に寄りついていないのだ。不安が過るマンダレイと虎に、マグネは不気味にニヤリと笑みを浮かべていた。

☆☆☆☆☆☆

洗太の元へ駆け付けた緑谷。対面した敵、サイランマスクュラーを目の前にして必ず救けると宣言し、身構えていた。

「必ず救ける…って？はあははは…。流石ヒーロー志望者って感じだな。何処にいても現れて正義面しやがる」

マスクュラーは不敵にも笑う。見下すような顔で左腕の蠢く筋肉繊維を体内に戻すと、今度は右腕を筋肉繊維が覆う。空いた左腕で黒いマントを掴むと、警戒する緑谷に向かって口を開いた。

「緑谷ってやつだろお前？ちようどいい…。お前は率先して殺しとけっってお達しだ」

そう言うのと、マスクュラーは自身の黒いマントを放り投げる。筋骨隆々とした肉体と同時に左腕の筋肉繊維が露わとなり、笑みを絶やすことなく吠えた。

「じつくり痛ぶってやるから、血を見せろや!!」

その瞬間、マスクュラーは飛びかかる。

「(来ー来ー)」

来る。そう思った時には、既に物凄い速度で間合いに入られていた。頭上まで来ていたマスクュラーに慌てて振り返る。だが、マスクュラーの拳の方が早く、緑谷は直撃して岩の壁へと吹き飛ばされた。

「あ、いけね。そうそう」

幸い、咄嗟に腕を交差して防御をとっており、大事には至らなかったが、それでも男の放った拳の力は強力で諸に直撃した左腕が赤く

腫れ上がって内出血を起こしていた。恐らく骨にヒビが入ったのだろう。激痛が走る中、マスキュラーは何か思い出したかのように余裕な表情で、壁に減り込んでる緑谷に詰め寄り、口を開いた。

「知ってたら教えてくれよ。爆豪ってガキは何処にいる？一応、仕事はしなくちゃあ…」

「!？」

その名前に緑谷は大きく眼を見開く。

「な!!」

「ふっ！」

考える暇も無く、振りかぶる筋肉繊維を纏った拳に緑谷は瞬時にワン・フォー・オールを全身に行き巡らせ、壁を蹴るよう横に跳躍して避けた。容易に岩の壁は砕かれ、土煙が舞う中、マスキュラーは続けて口を動かす。

「答えは『知らない』でいいか？いいな？よし、じゃあ…」

マスキュラーは土煙を腕で振るうように吹き飛ばすと、再び地面を踏み蹴り、目にも止まらぬ速度で跳躍し、避けて着地した緑谷の腹を蹴り上げた。

「遊ぼう!!」

「!!？」

緑谷は再び吹き飛ばされ、岩の壁に激突して地べたへと落下し倒れ込む。鈍痛が腹部に走る中、マスキュラーは流血する緑谷を見下すように、そして不敵な笑みを浮かべて口を開いた。

「はっははー血だ!!いいぜこれだよー楽しいやー!ああ何だっけ!?!必ず救けるんだろ!?!何で逃げるんだよ!?!オツカシイぜお前!!」

「ぐっ…!？」

相手を分析しながら立ち回るのが緑谷の戦法。だが、マスキュラーの言った爆豪と言うワードに頭の中はその目的を探るのに必死だった。冷静さを掻き乱したせいでもあるのか思うように動けなかった。緑谷は一旦爆豪の事を忘れ、戦いに集中せんと全身にワン・フォー・オールの力を巡らせる。瞬時に右手に力を入れ、グツと起き上がり地面を蹴ると、マスキュラー目掛けて拳を放った。

「(『SMASH!!』)」

腰に力が入ってないとは言え、5%でも人並み以上の力があるので十分なダメージを与えられる。直撃した拳に衝撃が走り、先ずは一撃。そう思ったが、マスキュラーは不敵にも笑い口を開いた。

「なんだ？それが『個性』か!？」

「!」

緑谷はハツとする。突き放った拳は腹部ではなく、筋肉繊維を纏った左腕で防御されていた。

「いい速さだが、力が足りてねえ!」

「ぐあつ!」

吠えると同時に力の差を示さんばかりに左腕を振るい、緑谷は吹き飛ばされる。マスキュラーの纏った筋肉繊維は攻撃にも防御にも適していた。それを説明するかのように、または見せつけるように膨れ上がる筋肉繊維と共にマスキュラーは口を動かした。

「俺の『個性』は『筋肉増強』!!皮下に収まんねえ程の筋繊維で底上げされる速さ!力!そして防御!!何が言いてえかって!?自慢だよ!つまり、お前は俺の---:完全的な劣等型だ!わかるか俺の今の気持ちか!?!笑えて仕方ねえよ!必ず救ける!?!どうやって!?!実現不可の綺麗事をのたまってんじゃねえよ!」

圧倒的な戦闘型の『個性』。5%の力では足元も及ばない。そう見下すマスキュラー。既にボロボロの緑谷は満身創痍になりながら咳き込み、息遣いも荒くなって横たわっていた。そんな緑谷にマスキュラーは近寄り、筋繊維を纏った左腕を大きく振り上げ、トドメをさそうとしていた。

「自分に正直に、生きようぜ!!」

緑谷は意識が朦朧とする中、何か打つ手はないかと必死に考える。高らかに拳を天に掲げたその時、コツン、と小さな音が聞こえマスキュラーの動きが止まった。どうやら石を投げたらしく、緑谷、共にマスキュラーは振り返ると、そこには涙目になって震えていた洸太が口を開く。

「ウォーターホース……パパ……ママ……も、そんな風にいたぶって……殺

したのか……！」

「……！！」

冨太の言葉に緑谷は眼を見開く。

ウオーターホース、その言葉を冨太の口から聞いて緑谷は異様な空気を驚愕と共に理解した。今緑谷がこうして痛ぶられ、殴られ蹴られをされて苦しい過去が振り返り返したのだろう。すると、一瞬面を食らった顔をするマスクキュラーが思い出したのか冨太に向かって口を開いた。

「ああ……？マジかよ、ヒーローの子供かよ？運命的じゃねえの。ウオーターホース。俺の左眼を義眼にしたあの2人だ」

過去に殺したヒーローの子供が目の前にいる。増してや、自分の眼に傷を負わせたあのヒーロー達の息子。マスクキュラーは嬉しそうに冨太へと近づくと、冨太は後退りながらも叫んだ。

「お前のせいで……お前みたいな奴のせいで、いつもいつもこうなるんだ！！」

ヒーロー社会、“個性”、そして信頼を受け入れずに冨太は必死に叫び、その怒りを言葉でぶつける。だが、所詮子供の癩癩だとマスクキュラーは溜息を吐きながら言い返した。

「……………ガキはそうやってすぐ責任転嫁する。良くないぜ。俺だって別にこの眼の事恨んでねえぞ？俺は殺す事やりたいやって、あの2人はそれを止めたがった。お互いやりてえ事やった結果さ」

マスクキュラーの平然とした言葉に冨太は震えながらも、何を言ってるんだこいつは？と驚愕していた。互いが互いの目的の為にやり遂げた結果。そうなったものはしょうがないと片付けようとするその神経に、ある意味悍ましさを冨太は感じていた。

「悪いのは出来もしねえ事をやりたがってた…、

てめエのパパとママさ！！」

緑谷、冨太、そしてヒーローの理屈など通じることなく、マスクキュラーは悪魔に似た顔を表情に出す。自分の娯楽の為に殺す。例えば子供だろうと老人だろうと無差別に殺す。それがマスクキュラーの敵ライバルとしての生き方だ。襲い掛かろうとするマスクキュラーに冨太は溢れん

ばかりの涙を流し、自己防衛の為か両手を顔まで持つてくる。パパやママみたいに殺される……。そう思ったその時だった。

「…つとなつたら、そう来るよな!?ボロ雑巾!」

「悪いの、お前だろ!!」

マスキュラーは感じたのか歓喜の笑みを浮かべて振り返る。そこには、ワン・フォー・オールを張り巡らせた緑谷が激昂しながら岩の壁を駆け上がって飛びかかろうとしていた。洗太は緑谷の、その言葉と行動を見て再度驚く。何故なら、こんな自分の事で怒りを露わにしてくれる人など存在しなかったからだ。世間は、可哀想に…、辛いね…などと、心許無い声しか掛けてくれなかったから。

それを今、緑谷が全身全霊で怒り、助けようとしてくれている。その姿を見て、洗太の中で何かが一瞬揺らいでいた。

一方で緑谷は接近しながらも必死に考えていた。

スピードは劣る。ダメージも与えられない。こいつは強い。救げに出来ない。ならば、と。

ギチツ!

緑谷は折れた左腕を伸ばし、マスキュラーの筋繊維へと絡ませた。拘束具で強烈に縛られるような感覚、そして激痛。だが、それを分かかって口を開いた。

「これで、速さは関係ない…!」

「で、何だ!?力不足のその腕で殴るのか!」

折れて使いものにならない腕を絡ませてスピードを封じる。近距離でなら殴れるとそう思っていたのだが、同時にそれはマスキュラーも同じ事。当然、5%など、この男には通用するはずがない。同じ戦闘型として、不敵な笑みを浮かべてマスキュラーは左腕で殴りかかろうとした。

「出来る出来ないじゃないんだつ…!!」

だが、緑谷は怒りと共に吠える。残った右腕を大きく振りかぶると、力が溜め込まれるように稲妻が迸った。

「ヒーローは!!」

どんなに危険な状況でも、それを覆す。

彼の英雄はこう言った。

「命を賭して綺麗事実践するお仕事だ！（ワン・フォー・オール100%！！）」

プロはいつだって、命懸け。ヒーローは常にピンチをぶち壊わしていくものと、と。

「ああああ！！！」

さっきまでの様子とはまるで違うその気迫と拳。

マスキュラーが一瞬困惑する中、渾身の一撃が放たれた。大爆発でも起きたかのように轟音と衝撃が巻き起こり、その一帯は土煙に包まれたのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「うわあっ！！」

闘争のままに攻撃するポセイドンにオーズは吹き飛ばされる。序盤の戦闘とはまるで違うその荒々しい戦闘に、立つ事も儘ならないオーズは何とか防御を取るのが精一杯だった。しかもそれだけでは無い。アंकと対峙していたヴィランオーズも新しい姿、シガゼシコンボにそのアंकも苦戦を強いられていた。

「アッははは！どうしたのアンクー!?避けるだけじゃ倒せないよー!?!」

偶蹄類を模したその姿。胴体のガゼルアームの手首に付けられた外骨格、*「ガゼルアントラー」*を振り回す。飛び退くように避けるアंकだが、猛牛のように迫り来るその猛攻は、止まる事なくアंकに当てんと接近して来ていた。

「チッ!!こんの…暴れ牛が!!」

アंकは悪態を吐きながらも炎の球を放つ。だがヴィランオーズはソレを容易に避けては、ガゼルアントラーで弾くなど、全く寄せ付

けていない。未知の形態その上にコンボの力は絶大。アंकの攻撃も虫を叩き落とすみたく去なされていた。

このままでは埒があかないと思ったアंकは背中から翼を広げ、一旦空中へと飛翔する。

「ああ、ちよつとお。飛んで逃げないでよね！」

「……流石に空中向きのコンボじゃないみたいだな……」

文句を言う辺り、空中には追ってこれないとアंकは判断し、オーズの方を見遣る。何とか急所を狙われまいとメダジャリバーでディーペストハープーンを受け止めているが、ポセイドン相手に一杯でこちらの加勢は不可能だろう。アंकは舌打ちをしながらムカチリのコアメダルを3枚取り出し、オーズに向かって叫んだ。

「映司！これで敵の動きを封じー！」

そう叫んだ直後だった。真下から、触手のようなモノが急速に伸びて飛んでいたアंकの体に絡み付く。ギシギシと締め付けられ圧迫されるような痛みにはアंकは断末魔を上げる。

「ぐあああつ!!?な、何だこれは!?!」

その正体は木の蔓だ。そして、ハツとしたアंकは真下を見遣ると、地面に両手を当てたヴィランオーズが地面から蔓を生やしていたのだ。

「ふっふっふー!?!どう?これがシガゼシのコンボの特性!昔持ってた“CSM”の資料は角が能力かと思ってたけど、まさかこんな能力があるなんて私も想定外だったよ。オーズって本当未知数で万能な力だよねエ!実際に使ってみないと分からない事だらけだもん!」

「シーエスエム!?!何言ってるやがる!?!訳分からない事を抜かすな!」

勝手に気が高まり、独り言みたく説明するヴィランオーズに苛々が募り、アंकは吠える。蔓の締め付ける力が思ったよりも強力で、アंकの体からボロボロとセルメダルがこぼれ落ちた。このままではマズイとアंकは腕から炎を燃え上がらせ、拘束した蔓を燃やす。

「あー!燃やしたらダメだよ!」

燃やして脱出しようとする寸法だが、ヴィランオーズはそうはさせ

ないと両手に力を入れる。すると、地面から更に蔓が伸び出し、アंकの体を燃えた蔓事締め付けた。

「うぐあああつっ!!」

「そうそう、大人しくしてなきやねっ」

再度締め付けられたアंकは、その苦痛に叫ぶ。すると、力が抜けたのか手に持っていたムカチリのコアメダルをポロリと、ヴィランオーズの目の前へと落とす。ヴィランオーズは「返してもらおうよ」と言いつつソレを拾い、拘束したアंकに続けて声をかけた。

「さ、持つてるコアメダル全部ちようだい。そっちの持つてるメダル私使いたくてしょうがないのよ」

「ぐ…!?フン！お断りだ…！逆にお前のコアメダルも、あの弟のコアメダルも全部奪ってやる…！」

「この状況でそんな事が言えるなんて本当欲深いねえ。…その態度、いつまで続くかなア？」

意地を張るアंकにヴィランオーズは不敵な笑みを浮かべる。すると、アंकの叫び声が聞こえたオーズはバツと振り返り、「アंक！」と心配そうに叫ぶ。

「余所見…するナア！」

「うわっ!?!」

アंकに目がいつてしまい、隙だらけの背中にポセイドンがディーペストハーブを振り上げる。火花が飛び散り、オーズはそのままのめりて倒れ込んだ。疲労とダメージが蓄積し、立ち上がる事すら出来なくなつた自分に「クソ…！」と悪態を吐くオーズ。向こうもコンボを使った相手になす術が無く、アंकは拘束されたままとなっている。

「どうすれば…!!」

オーズは必死に考える。現状を打破するにはオーズもコンボで対応して応戦をするしかない。だが碌に動けない体で、尚且つアंकを救って2人の仮面ライダーと対峙出来るのか？もし、変身が強制的に解かれたらその後はどうする？葛藤するオーズ。

すると、ふと相澤の言葉を思い出した。

“何をすることも原点を意識して、それを向上させろ”

「……ー原…点…ー」

その言葉を呟きながら、オーズは懸命に立ち上がる。そして、自分の中の原点を思い出しながらポセイドンと向き合う。

自分は何の為にヒーローを目指したのか。

その時、小さい頃の記憶が薄らと蘇る。それは幼少期、自宅のテレビで映っていた人。筋骨隆々とした肉体で笑顔で手を差し伸べていたNo.1ヒーロー。

「……俺は…ヒーローに…」

憧れたオールマイトのように、笑顔を決やさず、どんな場所にも手が届くヒーローになりたい。自分の原点であり、目標でもある。

火野自身は自分に問い掛ける。今出来る事は何だ？体がボロボロだろうと、危険が迫る人を救けるのがヒーローの仕事。だとすれば、今救えなければならぬ人を守れと。

オーズは決死の覚悟を決め、メダジャリバーを構える。その姿勢を見たポセイドンは息を大きく吐きながらディーペストハーブーンをオーズに向け、ジリジリと詰め寄った。

その時だった。

突然何かが、囁くような声がオーズの脳内へと響くように聴こえてくる。

“オーズ。アंकを救いたいか…?”

「…!?な、何だ…声が…!?」

“俺と替われ。そうすればこの状況を覆せる”

低い男性のような声が脳内を通して話しかけてくる。聞き覚えのない見ず知らずの声に一瞬戸惑うオーズだが、この状況を覆す言葉に、オーズはなり振り構わず、それを了承するかのように頷き、応えた。

「俺は……！救けたいっ！皆んなを守りたい！」

“よし…、その【欲望】、開放してやる”

次の瞬間、オーズの心臓がその囁く声に応えるように、ドツクン！と鼓動を打ち鳴らす。

「うっ……いー」

鼓動が痛むのかオーズは思わず声を漏らす。すると、力が抜けるように脱力に襲われ、その場で立ち尽くしてしまう。

「ナン…だ？」

様子がおかしい事にポセイドンは首を傾げる。だが、隙だらけのその姿勢に容赦はしないと云わんばかりに飛びかかり、デーイペストハーブーンで斬りかかろうとしたその時だった。

「…ムン!!」

いきなり顔を上げたオーズは全身に力を入れる。すると、オーズの体から緑色の電撃が迸り、辺り一帯に電流が走る。

「……!!ガガガ!!」

突然の電撃にポセイドンは咄嗟に防御を取るが、感電してしまいポセイドンの体はビリビリと痙攣を起こすかのように痺れ、地面へと落下した。

「っ?!弟君!!」

「何だ……?!電流だと…?!」

それに気付いたヴィランオーズは叫ぶ。同時に拘束されていたアークはオーズの発した電気に驚愕していた。基本形態のタトバに電流攻撃をする事は出来ない。電流を流すオーズも様子がおかしいと見つめる中、ヴィランオーズはポセイドンを助けようとオーズに向かって駆け出した。

「弟君に何するんだ！」

「…フン。…虫ケラが…いー」

こちらに向かって来るヴィランオーズを見遣り、オーズは鼻で笑うとそう言つて再び電流を流す。

「ツツ!!ギギアアア!!?」

電流が直撃したヴィランオーズは痺れ、バチバチと体が発光するかの様に黒煙が立ち上る。そのまま倒れ込んだヴィランオーズを見て、オーズは再び鼻で笑い、アंकが拘束されている蔓の真下へと近寄る。オーズは無言でメダジャリバーを横風に振り払い、蔓を斬ると、アंकの拘束が解かれ、そのまま地面へと落下し、着地した。

「おい映司。その電撃は一体なんー」

拘束されて手首が痛むのかぐりぐりと回しながらオーズに近寄り、その声をかけようとした直後。

「フーン!」

「ぐあっ!?!」

突然、オーズは裏拳をするみたく腕を振り払い、アंकへと攻撃を仕掛けた。諸に顔面に直撃したアंकは吹き飛ばされると同時に腰に持っていたメダルホルダーが地面へと転がる。それを見つけたオーズはニヤリと笑い、メダルホルダーを拾い上げ、中を開いた。

「ほお…、随分と沢山持つてるな、アंक…」

「お前…!!」

中身のコアメダルの数を見てオーズは少し驚いたように声を掛ける。殴られた事に苛立つアंकはオーズを睨んでいた時、オーズはメダルホルダーから2枚のコアメダルを取り出し、メダルホルダーを投げ捨てた。そして、その2枚をアंकは見た瞬間、大きく目を見開き、その思い込みが確信へと変わって口を開いた。

「貴様…!!?まさか…!!何で…!!」

「せっかくだ。オーズの力、俺にも試させて貰おうか…俺のコアメダルでな…」

その2枚をドライバーに装填しながらオーズは呟く。驚愕するアंकはハツとし、人格が変わったオーズに問い掛けた。

「貴様…何で映司の中にいやがる!?!あの時、取り込まれた筈じゃないのか!?!」

「ギアな。俺にもよく分からんが、気付いたらオーズの中に居た。今は感謝しろ、アंक!あの目障りなもう1人のオーズを倒した後、お

前からコアメダルも全部奪ってやる……！」

オーズは憎悪を現したような目付きでアंकを睨み、ドライバーに装填したコアメダルが深緑の色へと発光する。そして、オースキヤナーを取り出し、ドライバーへとスキャンする。読み込む音が暗闇の森へと響き渡ると、暫く余韻が残る。オーズは不敵に笑い、立ちあがろうとするヴィランオーズ、ポセイドンを見つめ、その口を開いた。

「確か……こう言うんだったな……。『変身』」

クワガタ！

カマキリ！

バッタ！

ガクタ！ガタガタ・キリツバ・ガタキリバ！

昆虫類のコンボソングが鳴り響き、オーズはエネルギー状の虫を模した輪をその身に纏う。その体は緑一色に覆われた姿、『ガタキリバ』コンボへと変わり、戦闘態勢へと入った。そして、その姿を見ていたアंकは再び目を見開きながら、オーズへと叫ぶように声を掛けたのだった。

「何でここにいやがる……！『ウヴァ』!!」

No. 84 僕のヒーローと偽りのヒーロー

ヴィランオーズ、ポセイドンと交戦を繰り返していた火野映司ごと、オーズとアंक。相手側の未知のコンボと力に苦戦を強いられていたアंकの前に、オーズの体から突如、この世界にいる筈のない存在のウヴァが姿を現したのだった。

「フッフフ…ハハハハハハハ…：…：…はア…。こいつは凄い…！凄いで…！コレがオーズのか…！！」

ガタキリバコンボとなったウヴァは、初めて使うオーズ、そして自身のコアメダルで変身したその煽れんばかりの力に高揚して、体から緑色の電流が流れながらそう言う。そんなオーズの力に自惚れるウヴァ。その言動は、過去に火野の体に乗っ取ったゴードにそっくりだった。それを聞いたアंकは怒りを覚え、拳を震わせながらウヴァに吠える。

「ウヴァ…：…！映司から離れろ！」

「フン、出来ない相談だな。それに、この俺が手助けをしてやろうと言ってるんだ。雑魚は大人しく黙ってる」

弱い犬ほどよく吠える。まるでそう言っているようなオーズの物言いにアंकは今にも飛び掛かりそうになるほど怒りを激らせた。だが、それを必死に堪える。今この状況でガタキリバコンボのウヴァを相手していたら間違いなく自分が返り討ちに合うのが目に見えているからだ。ウヴァの発言が本当だとすればヴィランオーズとポセイドンを足止め、もしくは倒す事が出来るかもしれない。

それを予測して、アंकは噴火しそうな感情を押さえ、大きく深呼吸をしながらゆっくりと立ち上がる敵^{ヴィラン}2人を見ていた。

「あああ…：…！！体痺れる…：…！！」

「…：…！姉さ…：…ん大丈夫…：…？」

電撃の余韻が残るヴィランオーズはまだ痺れが取れず、痙攣していた。ポセイドンは声を掛けながらオーズを見遣る。その姿が変わっていた事にポセイドンはディーペストハーブを構えていると、

ヴィランオーズもオーズの姿を見ては「うっわ……！」と声を漏らしながら身構えた。

「えー……ちよつとおお……！チート級のガタキリバ使うんかい……！通りで電撃出したと思……」

ふと、ヴィランオーズは疑問が浮かんだのかその言葉を止め、こちらを見つめているオーズに向かって声を掛けた。

「ん？……あれ？ちよつと待って。さっきタトバで電撃を流してたよね……？え、基本形態であんな攻撃出来た……？」

電撃を浴びせられた時は間違はなくタトバコンボ。その状態で浴びせられた攻撃に疑問を抱くと、オーズの後ろに居るアंकがオーズを睨みながらソレを応えた。

「どういうわけか知らないが……そこにいるオーズの中にウヴァが入ってやがる」

「ああ〜成る程！それで電撃攻撃が出来たのね！そっかそっか……」

アंकの言葉に納得したヴィランオーズは、うんうんと頷く。だが、その上下に動く首は徐々に動きがゆっくりとなり、完全に止まると同時にオーズを二度見した。

「え、……え？ええ!!?ウ、ウ、ウヴァあ!!?」

「は？……何だ貴様。俺の事を知ってるのか？」

驚愕の事実に驚きを隠せず声を上げるヴィランオーズ。その様子を見ていたオーズは声をかけると、ヴィランオーズは動揺を隠せない仕草でオーズに話しかけた。

「待って待って待って!!え、あのウヴァ……!!本当に？え、マジで？ちよつと、嘘じゃないよね？ね!!?しぶとく最後まで生き残ったあのウヴァ様ですか!?!」

「ウヴァ様……？あ、ああ……そうだ。俺はグリードのウヴァだ」

「きゃ〜!!何で火野映司君の中にいるの!?!って事は今自分のコアメダルで変身したガタキリバって事!?!どんだけ胸熱展開なフォームチェンジだよ!!待って興奮がとまらない!!思わぬサプライズ過ぎるでしょー!!」

物凄い勢いでぴよんぴよん飛び跳ねると同時にテンションが最高潮になっていくヴィランオーズ。ポセイドンは「有名人…？」とその様子を見ては首を傾げていた。すると、オーズは突然アंकに振り返り声をかける。

「お、おいアंक！何だアイツらは!?何で俺の事知ってる!?そもそも何で敵にオーズがいやる!？」

「あ!?おまつ…!そんな事も知らずに出て来たのか!?……………フツ、ハハハ……………」

「な、何がおかしい!」

突然の戸惑い様を見てアंकは思わず笑い出す。

「お前、あれだけ強者振った登場をしときながら全然知らないのか? …やはりお前は相変わらずの虫の脳みその持ち主のウヴァさま、だったようだなあ」

「…!!先にお前から消してやろうかアंक!!」

相手の挑発に直ぐにのつかかるウヴァに、アंकは鼻を強く鳴らし、てそっぽを向く。すると、ディーペストハーブーンを思い切り振り回し、オーズの足元に向かって水を纏った斬撃を放った。

「うおっ!」

突然の攻撃にわざと外されたとはいえ、衝撃音に驚くオーズ。はしゃいでたヴィランオーズも驚き、ポセイドンに向かって声を掛けた。

「ちよ、ちよつと弟君!」

「姉さん…まだ…、戦い…途中…!」

思わぬ出来事に戦いが止まっている事に苛立ったのか、その言葉には溢れ出しそうな怒りがこもっていた。ヴィランオーズもそれを察して「あく…」とバツの悪そうな表情を浮かべて身構えた。

「そうだったそうだった。今私もコンボだし、あまり長びかせるわけに行かないんだった…。あくつ、ガタキリバ相手にシガゼシで勝てるかなあ…!ちよつと不安っ」

コンボの力と言えど、オーズのガタキリバはその防御力に加えて、電流攻撃、そして特性の分身。50体まで増えてリンチされればこち

らの2人では圧倒的に不利になる。その状況を考えヴィランオーズは弱音を吐いていると、ウヴァが憑依したオーズもやつと戦えると思っただのか両腕を大きく広げて口を開いた。

「フン、今は事情なんかどうでもいい。さっさと掛かって来い。今の俺は、最強だ」

「最強コンボだけに？はあ…弟君、本腰入れなよ。さっきのオーズとは比べ物にならないと思うから…！」

自分で言っておいてしようもないギャグと思っただのか溜息を吐きながら身構えるポセイドンにそう言うヴィランオーズ。ポセイドンは「うん…」と頷き、ディーペストハーブーンを振り回して、ヴィランオーズと共に駆け出したのだった。

☆☆☆☆☆☆

100%のSMASHを0距離から打ちかまし、轟音と共に衝撃波がその場から放たれる。岩の壁は豆腐みたく崩れ、辺りの地面にもその余波が響き渡る。

「うわあ!!」

近くに居た冴太も地震に足元を掴われ、衝撃波でその小さな体は簡単に吹き飛ばされる。そしてそのまま崖の下へと落下しそうになった。

「わっ…うわあああっ!?!」

落ちると思っただ直後、服を掴まれたのかガクンと勢いは無くなり、崖の上で吊るされたまま止まっていた。止まらない荒い呼吸と冷や汗の中、冴太は捕まれてる服へと視線を向けた。

「ごえんっ…！ふっおあひえ…！」

ごめん吹っ飛ばしてと、服を口で掴んでいる緑谷はそう言ってい

た。そのまま引つ張られ、洗太は「ありが…」とお礼を言おうとした直後、立ち上がる緑谷の体を見て驚愕した。

ボロボロの体に、至る所からは血が流れ、両腕は紫色に腫れ上がっていた。ぶらん…と脱力した腕を見る限り折れているのは間違いない。そんな姿を見て洗太は恐怖と共に疑問を抱いた。何でそこまでして救けて、立ち向かってくれるのかと。涙目で緑谷を見つめる中、緑谷は崩れている岩の瓦礫を見ながら口を開いた。

「施設へ行くこう。ここからは近……………」

言い途中の直後、瓦礫から岩を退けるような音が聞こえる。緑谷はその瞬間大量の汗を流した。青ざめた表情で恐る恐る振り返ると、土煙が晴れたその中で、筋繊維で上半身が肉たるまとなっていたマスクュラーが立っていたのだ。

「ウソだ…ウソだろ…100%だぞ…!!?」

ワン・フォー・オール100%。それはNo.1ヒーロー、オールマイトが常時放つ力。天候さえも変える程の威力で、しかも至近距離で放った拳の筈なのに、奴は立ち上がった。戦慄が走る緑谷に、筋繊維を体内へと戻して行くマスクュラーが、不敵の笑みを浮かべる。衝撃で飛んだのか、片目の義眼は無くなっていた。

「テレフォンパンチだ。しかしやるなあ！緑谷…!!」

オールマイトの力で放った一撃。それなのに平然と立っているマスクュラーは何も無かったかのように緑谷と洗太に詰め寄ろうと足を踏み出す。その悍ましい姿に恐怖を覚えた緑谷は震えながらも後退り、叫んだ。

「くっ来るな！」

「やだよ、行くね。俄然」

ズンズンと詰め寄るマスクュラー。張り上げた声だけでは止まる事はないと、緑谷は分かっていた。だからこそ、近づけさせないと吠えて、この状況をどうするか必死に考えていた。マスクュラーの攻撃、及びワン・フォー・オールの力を放った両腕は完全に折れて使い物にならなくなっている。両腕無しで今戦闘をするのは極めて危険過ぎた。増してや、洗太が背後に居る。守りながら戦う事も出来ない

状態で、必死に頭を回転させて打開策を見つけようと緑谷は吠えながら考えた。

「なっ、な、何がしたいんだよ!! 敵^{サイラン}連合は何が…!!」

「知るかよ。俺アただ暴れてえだけだ。ハネのぼして“個性”ぶっ放せれば何でもいいんだ。覚えてるか? さっきまでの遊びだ! 俺言ってたよな!?! 遊ぼうって!! な!?! 言ってたんだよ! やめるよ! 遊びは終いだ! お前強いもん!」

己の快楽を満たす為に巨悪の行進は止まらない。すると、マスキュラーはポケットに手を突っ込みゴソゴソと手探っていた。ポロポロとポケットから落ちて行くのは義眼。そして、1つの義眼を手に取り、空いた左目にソレを嵌め込み、口を開いた。

「こっからは…本気の義眼だ」

闇夜に染まるような真つ黒な瞳。底知れない漆黒だ。嵌め込んだと同時に筋繊維が体に纏っていくマスキュラーを見て緑谷は目を見開き、洗太に叫んだ。

「洗太君捕まって!!」

尋常じゃない程の殺気を感じ、焦りを感じた緑谷の咄嗟の声に「え……」と声を漏らす。震えていた洗太は我に返り、一瞬遅れて緑谷の背中に抱き付いた直後。

マスキュラーは地面を蹴り、凄まじい勢いで緑谷に向かって殴りかかって来た。

「うウっ!!?」

間一髪でしがみついた洗太と共に緑谷はワン・フォー・オールの力で跳躍する。轟音と同時に崩れる崖。跳びながら緑谷はその光景を目にして恐怖を覚えた。さっきまでの戦闘とは比べ物にならない力と速さ。マスキュラーが言っていた事が本当なら、先程までの戦いは彼にとっては単なる遊び。遊び感覚で殺そうとしていただけだったのだ。

「待って待て、大人しく殴られろや!」

マスキュラーは空中を跳ぶ緑谷を確認すると、再度地面を強く蹴り、緑谷に向かって突っ込む。緑谷は岩の壁を蹴って別方向へと跳ん

で逃げると、その蹴った岩壁に勢いよくマスクュラーが突っ込む。再び轟音と衝撃が辺りに走り、余波が緑谷を襲い、冨太ごと地面へと叩きつけられた。

「ぶわっ!!」

「クソ、勢いあまった」

地面に落ちた衝撃で冨太は離れて転がる。緑谷は体制を何とか立て直し、筋繊維を纏った腕が岩壁にめり込んだマスクュラーを見遣る。本気で殺そうとしているマスクュラーの動きは桁違いの速さだ。そして簡単に拳1つで岩が崩れるほどの力。余波だけで吹き飛ばされた緑谷は、もし当たったらと思うと肝が冷える。

「火野君に応援を……いや、無理だ！施設まで行けば相澤先生がいるハズ！先生に“消して”もらえれば……」

ヴィランオーズと戦闘をしている火野が、そう簡単に駆けつけれるとは思えない。なら、相澤の抹消を使えばマスクュラーを倒せれる。だが、『ダメだ』と緑谷は脳内でそれも否定する。今にも殺されそうな状況で緑谷は必死に考えた。

「ここから施設まで距離を追いつかれずに行けるか!?ただでさえ合宿の疲労が溜まつてるそんな状態で獣道を……」

ブツブツと言葉に出しながら打開策を見つけようとする。だが焦りも同時に募って来ており、考えれば考える程頭の中はパニックになり、真っ白になっていく。緑谷は大きく首を横に振り、考えるのを止めた。重症のまま逃げたとしてもあの速さで追い付かれるのは目に見えているからだ。だったらここで戦って勝つしか道はない。

どんなにピンチでもそれを覆せ。

自分の限定を思い出せ。

緑谷は自分を鼓舞するみたく、そう言い聞かせながら、後ろにいる冨太に向かって声をかけた。

「下がってて冨太君。離れ過ぎると的になる。……うん……7歩……くらい……で、ぶつかったら全力で施設へ走るんだ」

それを聞いてハッと理解した冨太は、折れた腕を震わせる緑谷に向かって口を開いた。

「ぶつかっただらうて…お前、まさか！無理だ、逃げよう！お前の攻撃効かなかったじゃん！それに…両腕！折れてー」

「大丈夫！」

激痛が走る右腕に緑谷は、ワン・フォー・オールの力を張り巡らせる。痛みで涙目になるなか、不安になる冴太にそう言つて、迫り来るマスキュラーに向かって、決死の覚悟でその拳を突き放った。

「『デトロイト・SMASH』!!!」

正面からの一騎討ちを行い、筋繊維を覆ったマスキュラーに渾身の一撃を放つ。100%の重々しい一撃。猛攻で突き進んで来たが、一瞬怯むマスキュラー。ブチブチと筋繊維が千切れる音が聞こえる中、マスキュラーは吠えた。

「~~~~つってええ、どうしたあ!?さつきより弱えぞ!!!」

どうやらダメージは有るようだが、筋繊維の中から少しだけ見えているその顔は、なんともないような笑みで不敵に笑っていた。ぶつかり合った時は互角の力…と見えたが、手負いが大きい緑谷の力はフルに出せなかつた為、マスキュラーはその一瞬の緩みに潰れ込み、筋繊維を纏った拳で押し戻した。

「ー…:…じょうぶ…:…大丈夫!!」

もはや意識も飛びそうになる程の激痛、朦朧とする中、緑谷は冴太に心配させまいと何度もそう言つて足腰に力を入れ、持ち堪えていた。その勇敢かつ無謀な行動を見ていた冴太に、緑谷は声を張り上げる。

「こつから後ろには絶対行かせない!!からつ…走れ!!」

全力で止めている間にと緑谷は必死に叫ぶ。だが側から見ればその光景は地獄絵図だ。バキバキと骨が砕かれる音が聞こえ、満身創痍で抵抗する緑谷はある意味恐怖でしかない。冴太は完全に腰を抜かしてしまい、動こうにも動ける状態ではなかつた。

「走れ!!」

「んのガキが、てめエエ…」

それでも声を掛け続ける緑谷。他人の心配などしている状態ではないその姿に、マスキュラーは心底喜びの笑みを浮かべた。こんなに

真剣に誰かの為に助けようと全力で挑んで来るその姿勢に、敬意を示さんと。だから全力でコイツを殴り殺してやろうと、マスキュラーも持てる力を出し切り、足腰に力を入れ、更に拳に力を加えた。

「最っ高じゃねえか!!」

「!!?ぶづ……つるせええええええ!!」

ズーン!と更に力が加わり、緑谷は海老反りの体制になるにも関わらず、激昂しながらそれを耐える。ここで倒れてしまえば洸太の命が危ない。その思い一心で懸命に持ち堪える。その緑谷の姿を見て、「何で……!」と洸太は声を漏らしていた。だが、緑谷はもう押し返す程の力が残っていない。徐々に耐えている足の地面は亀裂が走り、今にも潰れてしまいそうになるほど押されている緑谷。必死に抗おうと耐える緑谷に、マスキュラーは追撃の力をお見舞いした。

「血イイイイ見せろやあ!!」

「ぎい!!」

衝動に狂い叫ぶマスキュラーの猛攻に押し潰される緑谷。圧倒的な力になす術も無く、地面にめり込みそうになる緑谷には、もう反撃の力など残ってはいなかった。

もう駄目かもしれない……、ごめん、お母さん。徐々に力が抜けていく中、緑谷は脳内に浮かんだ母の顔を思い出しながら涙を流す。そしてもう1人、ワン・フォー・オールのを授けてくれたオールマイトの言葉が脳内に過った。

「ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの!!」

どんなに危険な状況でも覆し、人々に笑顔を齎らす。だが、人には必ずしも限界がある。守る力を授かっても、それをオールマイトみたいに使いこなせなければ意味がない。所詮この世は弱肉強食。強い者が上に立ち、弱い者は地べたに這いつくばる。まさに今がその現状だった。最期の悪足掻きか、折れた両腕で筋繊維を纏った拳を押さえる緑谷は、諦めそうになっているその時。

バシヤア……!

「!?水!」

を筋繊維に突っ込むと、デコピンの要領で拳を広げ、弾いた。その瞬間、マスキュラーの拳の筋繊維がバツ！と一気に張り裂けるように千切れた。そして、ガラ空きとなった顔目掛けて、緑谷は渾身の、捨て身の勢いで思い切り拳を打ちかました。

「『デラウェア・デトロイト・SMASH』!!」

最大威力の一撃。マスキュラーは直撃し、なす術も無く、岩壁へと吹っ飛び轟音と共に大きく亀裂が走ると同時にめり込んだ。白目を向き、完全に意識を失うマスキュラー。

「……何も知らないくせに……!」

あの血狂いマスキュラーを倒す事が出来た。確信する最中、洗太は涙を流しながら困惑していた。どうしてそこまでボロボロになるまで守ってくれるのか。見ず知らずの人間をそんな状態にまでになつて救ってくれるのか。訳の分からない状況で、ふと、洗太はマンダレイの言葉を思い出していた。

「洗太。あんたのパパとママ……ウオーターホースはね、確かにあんたを残して逝ってしまった。でもね、そのおかげで守られた命が確かにあるんだ。あんたもいつか、きつと出会う時が来る。そしたら分かる……」

「何で!!何も……知らないくせに……!」

「命を賭して、あんたを救う。あんたにとっての……!」

「何で……そこまで……!」

そんなヒーローなどいるわけがない。所詮は見返りを求めるだけの有象無象のヒーロー社会。そんな人生にうんざりしていた洗太。だが、どうだ?まだ立派なヒーローでもない、学生の一人の少年に、親

の仇でもある敵サイランから、守ってくれ、助けられ、そして勝ってくれた。勝利の雄叫びを上げる緑谷出久…ヒーローネーム「デク」という1人の人間が、命を賭して救ってくれた。冨太は溢れる涙を流す中、その思いは確信へと変わっていく。

僕にとつての…、僕の、ヒーローが、現れてくれたのだったのだから…。

☆☆☆☆☆☆

同時刻、岩壁の向こう側の森の奥地から、轟音が夜の闇に響き渡る。土煙が舞うその中からヴィランオーズ、そしてポセイドンが飛び退くように姿を現した。

「姉さん…大丈夫…!?」

「いったああ！もお！電撃ばつかで近付けない上に木だから直流してくるし！ウザい！めんどい！」

体からバチバチと電気の余波が流れるヴィランオーズにポセイドンは心配そうに見つめる。文句を垂れるヴィランオーズ。すると2人の前に土煙から堂々と歩いて此方にやって来るオーズが現れた。オーズは無言で左腕を差し出し、挑発するみたく指をくいくいと曲げていた。

「次は、僕が…先陣切る…!!」

ポセイドンはそう言ってデーパーストハーブーンを振り回し、その場から駆け出した。間合いを詰め、勢いよく横から薙ぎ払うように振りかざす。だが、オーズはそれを見切ってカマキリソードで受け止めると、「ムン！」と体から電流を流し、デーパーストハーブーンを通し

てポセイドンに電流を流し込んだ。

「!!ウガガラー…!!?」

「弟君!!こんのっ!」

ヴィランオーズは両腕を地面に押し当て、オーズの足元から無数の蔓を生やす。一瞬にしてオーズが見えなくなる程の蔓で拘束した隙に、ポセイドンは痺れながらも距離を取った。これなら攻撃出来る、と思ったのも束の間、オーズはカマキリソードで瞬時に蔓を切り刻み、縛られた拘束を解くと、蔓はバラバラと地面に落ちていく。

「あ〜コレもダメなのお!?!」

近づいても電撃、直接攻撃しても電撃。生憎ポセイドンとシガゼンコンボは近接戦闘に優れているフォームの為、相性はかなり悪い。それを見て肩を落とすヴィランオーズ。すると、オーズは後方にいるアंकに向かって声を掛けた。

「おい、アंक。この姿、分裂が出来た筈だったな?どうやれば出来るんだ?教えろ」

「は?馬鹿がつ、俺が知るわけないだろ。知りたいのなら直接映司に聞くんだな」

「…無理だな、俺が出ている以上、コイツは精神の底で閉じ込めている。…クソ、オーズつてのは使い勝手が悪いもんだな…!」

初めてオーズになって戦闘をしている分、コンボの力は絶大だが、素人故にその使い方が分からずに戦闘をしているウヴァは溜息を吐く。それに比べて火野は初めて使うコアメダルやコンボを難なく使いこなして戦うのは、やはりオーズの器としての才能あるべきと言えるのだろう。

「だったらさっさと映司から離れろっ。お前如きが使える代物じゃないんだよ」

「誰が今更!今までの鬱憤を晴らす絶好の機会だ!そう簡単にこんな力、手放してたまるかっ!」

「…チッ、面倒な奴が復活したもんだ…おまけに映司の中にいるサービスまで付けてくれる…」

以前の世界の事を思つての発言か、オーズは苛立ちを見せる。その

様子だと火野の体から離れるのは毛頭ないようで、アंकは面倒くさそうに舌打ちをした。すると、ヴィランオーズがオースキャナーを取り出し、待機音が鳴る中、ポセイドンに声をかけた。

「弟君、ごめんそろそろ限界かも……同時に仕掛けるよ！」

「分かった……！」

ポセイドンは頷くと、腰を低く身構え、全身に力を入れる。すると、デーパーストハーブの刃先が青く発光していく。そして、ヴィランオーズはオースキャナーをドライバーにスキャンさせた。

スキャンングチャージ！

「ハアアアア！能力！開放!!」

音声が鳴ると同時にヴィランオーズは声を張り上げる。すると、全身が発光し、頭部のシカヘッドの“シカアントラー”が大きく伸び、胴体のガゼルアームのガゼルアントラーがドリルの形状へと変わる。そして、脚部のウシレッグはなんと4本足へと形を変え、その姿はまるで神話のケンタウロスを模した姿へと変わったのだ。

「何だそりゃ……？」

「フルパワー状態さ！さあ、いっくよー!!」

人間とはかけ離れたヴィランオーズの姿に首を傾げるオーズ。ヴィランオーズはそう応えようと、ウシレッグの前足で地面を蹴り、重量のある馬が走る鈍い音と共に駆け出した。同時に、全身に力を溜めたポセイドンがその場から跳躍し、空中へと跳ぶ。

「何か仕掛ける気か……おいウヴァ！お前もそれなりに対抗しろ！」

「五月蠅い！雑魚は黙ってる！こんな転け脅しに俺がやられるわけないっ！」

火野の体の事を思ってたなのか、アंकは忠告するが、オーズはそれを断り、真っ向から受けようと身構える。接近するヴィランオーズはオーズの間合いへと詰め寄ると、その4本足の内前足を大きく持ち上げた。二本足だけで立つその姿は何倍にも巨大に感じたウヴァは化け物を見るみたいに、目を見開いて驚く。

「つつつダあッ!!!」

「!?」

その瞬間、ヴィランオーズは前足を振り下ろし、地面が抉れ、衝撃波が起こる。地ならしが起きる程の威力で、立っていたアंकもふらついてしまうほどだった。土煙が巻き起こり、オーズは腕を交差して防御を取っていると、ヴィランオーズはその場から飛び退き、空中を跳んでいたポセイドンに向かって大きく「弟君!!」と叫んだ。

「ウオオオアアアアアアアア!!!」

張り上げる声と共に、ポセイドンは右腕に持ったディーペストハーブーンをオーズに突き刺すように構え、急降下した。その槍の先端は青から赤へと発光の色が変わり、更には「オオカミウオ」を模した悍しい顔がエネルギー状となって浮かび上がる。土煙を腕で振るい、視界が晴れたと思ったオーズ。だが、既にポセイドンは頭上まで接近していた。

そして、直撃した刹那、凄まじい衝撃が辺り一帯に迸り、大爆発が起こった。

「ぐつつ!!? うおああああつ!!!」

衝撃の余波により、アंकは必死に耐えるが、爆風が強過ぎてそのまま吹き飛ばされてしまったのだった。

No. 85 渦巻く森に出た指令

同時刻。ガチャリと扉が開かれ、黒霧はバーのカウンター席に座っている死柄木に気付き、声を掛けた。

「死柄木弔。本当に彼らのみで大丈夫でしょうか？」

敵^{ヴァイラン} 連合開闢行動隊を命名し、林間合宿へと出陣させた茶毘達を差し置いて、当の頭的存在の死柄木は今回待機している。それに疑問を抱いた黒霧の言葉に死柄木は「うん」と単調に応え、1枚のボロボロな写真を見つめては口を開いた。

「俺の出る幕じゃない……。ゲームが変わったんだ。今まではさ、RPGでさ、装備だけ万端で……レベル1のままラスボスに挑んだ。やるべきはシミュレーションゲームだったんだよ」

死柄木はゲームが割と好きな方で、今までの現実をゲーム基準として見てきた。その経験故なのか冷静に相手を分析し、予測して行動する頭脳の持ち主だが、ゲームに負けるように癩癩を起す事もしばしばある。その趣旨を説明するように続けて死柄木は口を動かした。

「俺はプレイヤーであるべきで、使える駒を使って格上を切り崩していく……。その為まず超人社会にヒビを入れる。開闢行動隊、奴等は成功しても失敗してもいい。そこに来たって事実がヒーローを脅かす」

「……入って来たばかりの新参者は仕方ありませんが、脇真音姉弟は我々にとつて今、捨て駒扱いにするのは少々痛いですよ？」

死柄木の言い分だと、その合宿で暴れて名を知らしめ、その後はどうなるかと構わない。そんなふう^{ふう}に聞こえた黒霧は、少し納得の行かない様子でそう言うと、死柄木は右手を振るい、「馬鹿言え！」と軽く吠えた。

「俺がそんな薄情者に見えるか？脇真音を含めた奴等の強さは本物だよ。向いてる方向はバラバラだが、頼れる仲間だ」

頼れる仲間。以前の死柄木はそんな発言など絶対にしなかった言葉だ。シヨップピングモールで緑谷と接触した時から死柄木は妙に落

ち着いた……否。彼と話して本当の目的を知ったと黒霧は推測していた。その発言を聞いて、何処か成長したかと、黒霧は「そうですか」と少し安心した様子で頷く。

「法律で雁字搦めの社会。抑圧されてんのはこっただけじゃない……。成功か、それ以上を願ってるよ」

不気味に微笑むその視線には、体育祭で納得が行かずに暴れ、そして拘束されてた3位の爆豪勝己が写っていたのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

マスキュラーとの戦闘に勝つ事が出来た緑谷。勝利の雄叫びを上げ終え、疲労が一気にきたのか、息切れを起こし、フラリと体が倒れそうになる。

「あ、オイ……」

慌てて洗太は駆け寄ると、緑谷は足を強く踏み出して止まる。フラフラなりながらも緑谷は心配させまいと声を掛けた。

「大丈夫……まだやらなきゃいけない事がある……」

「そんなボロボロで何をしなきゃいけないんだよ……」

満身創痍の状態で一体何をするんだと洗太は問いかける。緑谷はワン・フォー・オールを続けて放ったその拳に、ズクツと襲いくる痛みで冷や汗を流しながら口を開いた。

「防御されるのはわかってた……。だからこそ撃つんだ。そこを差し引いても大ダメージを与えようと思ってた。でも……思ったより遥かに強い敵だったんだよ」

何せオールマイトのパワーだ。その攻撃を食らって立っていたマスキュラーの耐久性は倒した後でも恐ろしさを感じるくらいに、肝を冷やす緑谷は燃え広がる森を見ながら続けて喋る。

「もし、この夜襲に来た敵が全員このレベルなら危ない。その上、狙いは僕ら生徒かもしれない。その事を相澤先生やプツシーキャッツに伝えなきゃ。僕が動いて助けられるなら、動かなきゃいけないだろ」

今回の襲撃はU S J事件の有象無象の敵ではなく、手練れだ集団が多いと見受けられる。マスクュラーもそうだが、ここに来る途中に遭遇した脇真音姉弟も火野と同じオーズの力を持っている。そしてマスクュラーが言っていたように爆豪を探しているとなると、緑谷の言う通り狙いは生徒。ならば、今その目的を知っている自分が動いて、突然の襲撃に困惑している皆んなに知らせなきゃならない。ボロボロの状態で覚悟を決める緑谷のその態度に、冨太はまだこんな敵がいるのかと思いい、思わず唾を呑んだ。

「何よりも、君を守らなきゃいけない」

振り返る緑谷のその言葉に、思わず「え？」と冨太は声を漏らす。「君にしか出来ない事があるんだ。森に火を付けられている。あれじゃどの道閉じ込められちゃう」

その言葉にふと、冨太は火の森を見遣る。青い炎は勢いを増して森を焼き尽くさんと徐々に広がりつつある。現状を把握していない生徒、または施設へ向かおうと動く生徒が森の中になると、炎に囲まれて逃げ場を失ってしまう。と、なると何で僕が？と疑問に思う冨太に、緑谷は近寄り、膝をついて冨太を見つめながら、その口を開いた。

「分かるかい？君のその『個性』が必要だ。僕らを救って。さっきみたい」

冨太は目を見開く。冨太の『個性』は水を放出出来る。親譲り故の『個性』だが、同時に亡くしたトラウマの『個性』でもある。緑谷を救いたい一心で振った『個性』が、今必要だと言う緑谷に、冨太は戸惑いはしたが、その内心は覚悟を決めていた。自分のこの忌々しい『個性』が必要なんだとー。

冨太は小さく頷くと、緑谷はくるりと回転し、背中を見せ、口を動かした。

「さあ、おぶさって！まず君を施設に預けなきゃ」

「その怪我で…、動けるのかよ…!?!」

「大丈夫。その為に、脚を残した!」

戦闘に使ったのは両腕だけ。その場から逃げる、または動くのを想定して、緑谷はダメージの少ない脚にワン・フォー・オールの力を巡らせる。しがみつくと洗太を確認し、動こうとした直後。

ふと、自分が来た方角を見つめる。火野が脇真音姉弟を足止めしている場所だ。

「…今は、信じるしかない…」

状況を知って戦地に飛び出した彼もどうすれば良いかは分かっている筈。緑谷を信じて先に行かせたように、緑谷も火野を信じて、先ずは洗太を施設へと運ぶ事を選び、その場から駆け出したのだった。

☆☆☆☆☆☆

数分前、別館で茶毘と接触した相澤は、茶毘の不意打ちを食らい、別館の外は青い炎に包まれていた。直撃した筈なのに茶毘は冷静な態度で上を見遣る。何故なら炎が当たった感覚が無いからだ。

「まア…プロだもんな」

茶毘の視線の先には、別館の2階の柵へと捕縛布を巻き付け、壁に足を掛けている相澤がいた。恐らく炎が当たる直前に当たり判定が無い上へと逃げたのだろう。茶毘はすかさず、右腕を突き出してもう一度焼こうと掌を翳す。だが、何故か炎は出なかった。

「出ねえよ」

相澤の“個性”、抹消によって炎は出せずに、そのまま捕縛布を伸ばして茶毘の体を拘束する。

「うおっ」

勢いよく相澤は捕縛布を引っ張ると、茶毘は空中へと引き寄せられ

る。その勢いに相澤は2階から飛び降り、茶毘の後頭部を掴むとその顔面に重々しい膝蹴りを食らわせた。激痛に加わり、視界を奪われた茶毘の背中に回り込んだ相澤は、更に捕縛布を引っ張り、反動で茶毘の体はぐるりと回転する。そしてガラ空きとなった背中に相澤はのし掛かり、そのまま地面へと頭を押さえながら倒れ込ませた。

「目的・人数・配置を言え」

「何で？」

尋問する相澤にしれつと応える茶毘。次の瞬間、相澤は左腕で押さえている茶毘の腕を、長ネギをへし曲げるように撚り、ゴキツと鈍い音が響いた。

「~~~~っ!!」

「こうなるからだよ。次は右腕だ。合理的に行こう。足まで掛かると護送が面倒だ」

「…焦ってるのかよ…イレイザー」

容姿ない拷問。だが、茶毘の言う通り、行動とその真顔の表情の瞳にはどこか焦りを感じていた。そして、応えない茶毘に相澤は無言で右腕をゴキツとへし折った直後。

轟音と共に地響きが静かに響く。それも2回だ。それぞれ別の方向から鳴る衝撃音に、相澤は驚いて顔を上げる。

「何だ……………」

「先生!!」

その時、聞き覚えのある声に相澤は振り返ると、獣道を走って来た飯田、尾白、峰田が姿を現す。マンダレイの指示でここまで来たのだろう。

だが、そつちに気を取られた瞬間、茶毘は勢いよく体を捻らせ、馬乗りとなっていた相澤を払い除けた。茶毘はフラフラと立ち上がりながら距離を取ろうとするが、捕縛布は拘束されたままだったので、逃げようにも逃げられない状態だった茶毘は口を動かす。

「……流石に雄英の教師を務めるだけはあるよ。なあ、ヒーロー……」

不気味に笑う茶毘。相澤はそのまま引っ張ろうと捕縛布に力を入れたその時だった。

茶毘の拘束されたその部分事、捕縛布がズルツと引つ張られ、茶毘の胴体は真つ二つになるような状態となっていた。

「生徒が大事か？」

「!?」

泥野ように体が見るみる液体化する茶毘を見て驚愕する相澤。同時に、炎を操るのが茶毘の“個性”じゃないのかと困惑する。

「守りきれるといいな……また会おうぜ……」

そして、不気味な笑みでそう告げた茶毘は、体が完全に泥になり、ベチャリと地面に広がった。また会おうぜと言う言葉は恐らく、この場から消えた事になると、一先ず息を吐きながら相澤は捕縛布を首へと巻き直す。

「先生今のは…!!」

「……中入つとけ。すぐ戻る」

状況が理解出来てないのか慌てて声を掛ける峰田に、相澤は単調に指示を出し、再び鳴り響く衝撃音の方向へと駆け出した。

その一方、森を燃やす炎の付近で本物の茶毘が引き続き木に手を当てて燃やしていた。そしてもう1人、全身に黒と灰色を基調としたラバースーツを身に纏い、顔全体を覆うマスクを着用した男、“トウワイス”が、何かを感じとったのか口を開いた。

「あー！ーダメだ茶毘!!お前!やられた!弱!!雑魚かよ!!!」

「もうか……弱えな、俺」

「ハアン!?馬鹿言え!結論を急ぐな、お前は強いさ!この場合はプロが流石に強かったと考えるべきだ!」

茶毘は意外にもショックだったのか声のトーンが弱くなっていた。だが先程まで侮辱していたトウワイスは急にフォローへと入る。

「…まあいい。もう一回俺を増やせトウワイス。プロの足止めは必要だ」

「雑魚が何度やっても同じだったの!!任せろ!!」

指示を出す茶毘に、自分勝手な返答をするトウワイス。その片手は、中指を突き立てたファック、もう片方はサムズアップをしていた。

☆☆☆☆☆☆

再び衝撃音が森全体に走っていた中、緑谷は冴太を背負って獣道を駆け抜けている。その轟音にビクツとなった冴太は緑谷に声を掛けた。

「いつ今のは爆発…!？」

「わからない…とにかく急ごう…もう、すぐそこだ」

暗い森の中を走り続けている中、夜襲されたこの森で戦闘を開始してもおかしくはない。焦りが募る緑谷は、急いで施設へ向かおうと足を踏み出したその時。「おい、あれ！」と冴太が何かを見つけたのか声を出す。その目線の先には、施設から出てきた相澤が走っていた。

「先生!!」

「緑…」

「先生！良かったー！」

緑谷は声を上げて近付く。相澤も反応して振り返ると、その顔は歪ませていた。側から見ても尋常じゃない程の怪我を負っているからだ。

「大変なんです…！伝えなきゃいけない事が沢山あるんです…！けど」

「おい…」

「とりあえず僕、マンダレイに伝えなきゃいけない事があって…冴汰君をお願いします」

「おいつて…」

「水の『個性』です。絶対守って下さい！」

「(コイツ…完全にハイになってやがる…!)」

相澤の声が届いていなく、現状を伝えようと必死に説明する緑谷。今にも倒れてもおかしくない体なのに、まるで痛みを感じていないよ

うな態度を見せる緑谷。助けようとするその一心でアドレナリンがドバドバと溢れ出ているのだろう。

「お願いしますー!」

「待て緑谷!!」

振り返って走り出そうとする緑谷を、声を張り上げて止める相澤。ビクツと肩を跳ね上げ、振り返る緑谷に、深く溜息を吐きながら続けて口を開いた。

「その怪我…またやりやがったな」

「あ…いやつ、でも…」

ようやく会話が出来るくらいの冷静さを取り戻し、相澤の言葉にしろもどろで口を動かす緑谷。ヒーロー活動未習得者が“個性”を使うのは規則違反なのは当然。だが、洗太を救ける為には使わざるを得なかった。そんなのは言い訳になると目に見えている。緑谷は必死に通用もしないその言い訳を考えてようとしていた。

「だから、彼女にこう伝えろ」

すると、相澤は緑谷に指示を出す。彼女とはマンダレイの事だろう。相澤は何か決心したような表情で口を開いたのだった。

☆☆☆☆

「……………ぐっ……………ああ……………クソ、あの野郎……………」

ヴィランオーズ、ポセイドンの必殺技で、大爆発を引き起こした爆風により、かなり離れた森の奥地へと吹き飛ばされたアंकは木々がクッションになってくれたおかげで大事には至らなかったが、それでも体のあちこちを打撲していた。痛む体を無理矢理起こしながら、アंकは上半身を起こし、引っかかった木から地面へと下りる。だが、脚にもダメージがあるのか、着地と同時に膝から崩れ落ちてそのまま

地面へと倒れ込んだ。

息切れを起こしながらも何とか立ち上がるアंकは、辺り一帯を見回す。

「チツ、きつさと見つけないと…後々が面倒だ…!」

火野の体に取り憑いたウヴァ以上、火野から離れる訳にはいかない。それこそ、何を仕出かすかわからないからだ。アंकはポセイドンやウヴァのコアメダルの気配頼りに、森の獣道を歩こうと踏み出したが、またしても膝から崩れ落ち、よろけそうになる体を必死に耐えてその場で立ち止まる。

「ああくソ…!思ってるよりダメージが…!!」

ふと、体を見遣ると周りにはセルメダルが散らばっていた。吹き飛ばされた衝撃でかなり飛び散ったのだろう。力が入らないアंकは、「背に腹はかえられないか…」と呟き、メダルホルダーを取り出そうと腰に手を回す。だが、ある筈のメダルホルダーが無かったのだ。

「…!!落としたか…!!クッソ!」

更に苛々が募るアंकは右腕を思い切り、木に向かって殴る。グリードの腕とは言えど痛覚は感じるので、ジワリと痛みが拳に残っていた。

「…バイクがあればなあ…」

少し落ち着いたアंकは、前世で使っていたライドベンダーの事を思い出す。だがこんな森の奥地でバイクを使ったとしてもまともに走る事は出来ない。アंकは顔を曇らせながら、痛む体を堪え、獣道をゆっくりと歩いて行つた。

☆☆☆☆☆☆

同時刻、スタート地点で敵と戦う虎とマンダレイは激しい攻防戦を繰り広げていた。虎はマグネの持つ包帯を巻かれた棒を払い落とす

と、その筋骨隆々とした体で接近戦を行う。『キャットコンバット』を繰り出していたが、マグネはそれを去なすように真つ向から受け止めていた。

「あーん、もう近い！アイテム拾わせて!!」

オカマ口調で文句を垂れるマグネ。だがそのアイテムを拾えば、『個性』でマンダレイに危害が及ぶ。拾わせまいと虎はキャットコンバットを続けて繰り出す最中、マンダレイはスピナーの攻撃から避けながら彼女も文句を垂れていた。

「しつこっ…」

「い…のはお前だ偽者！とつととシユクセーされちまつー」

猫のように素早しっこいマンダレイにスピナーも苦戦しているように、彼女の頭上へと飛び出し、継ぎ合わせた巨大な剣を空中から振りかざそうとした。

だがその時。

「SMASH!!」

駆け付けた緑谷のドロップキックにより巨大な剣は砕かれるように分解され、無数のナイフや刃物が散らばる。突然の加勢に「ええっ!?!」と声を上げるスピナー。すると、緑谷はそのまま空中でマンダレイに向かって声を上げた。

「マンダレイ!!洗太君！無事です！」

「君…!!?!」と緑谷が現れた事に驚くマンダレイ。

「いっ!!!っ!!!」

勢いよく空中へ飛び出してスピナーの攻撃は防いだのは良いが、着地を想定してなかったのか、地面へと転がるように落下し、重傷を負った体に激痛が走る緑谷。だが緑谷は直ぐに態勢を立て直し、地面を滑るようにそのスピードを殺しながら、続けて声を張り上げた。

「相澤先生からの伝言です！テレパスで伝えて!!」

そう言う緑谷は相澤の言葉を思い出していた。今回の襲撃事件は完全に生徒がターゲット。そしてマスクュラーが言っていた爆豪がほぼ絶対に狙われている。プロヒーローが少ない以上、この場を生き延びるには防衛手段が必要。

即ち——。

「A組B組総員!!プロヒーローイレイザーヘッドの名に於いて、戦闘を許可する!!」

状況が分からないままでは被害は大きくなるばかり。なら、生徒達が闘う事でその被害は少なくとも最小限に出来る。相澤は生徒たちの命を守る決断であるとともに、すべての責任を背負う覚悟でそれを緑谷に伝え、託したのだ。それを聞いたマンダレイは何も言わず、直ぐに「個性」のテレパスを使い、森にいる全ての生徒達、及び他のプツシーキャッツに伝令を言い渡した。

(いいんだね?イレイザー……)『A組B組総員——……プロヒーロー、イレイザーヘッドの名に於いて、戦闘を許可する!繰り返す!A組B組総員!イレイザーヘッドの名に於いて、戦闘を許可する!!』
テレパスを発信し終えたマンダレイは、武器を無くした無防備なスピナーへと駆け出し、踏みつけるように足蹴りを当てる。だが、スピナーは両腕を交差してそれを防御した。

「伝達ありがと!でも!すぐ戻りな!その怪我尋常じゃない!」

「いやっ……すみません!まだ!もう1つ……伝えて下さい!」ザイラン
敵の狙いは少なくともその1つ——」

異常な怪我をしている緑谷にマンダレイはそう言うが、その場から駆け出した緑谷は自分の事を構う事なく駆け出しながら声を掛ける。その言葉に戦闘していた虎とマグネはハツとしてる中、緑谷は燃える森の方角へと走りながら声をかけた。

「“かっちゃん”が狙われている!テレパスお願いします!」

「え!?かっちゃん……誰!?待ちなさいちよつと!」

急いでいるのか冷静さを失っている緑谷はいつもの呼び名でそう言ってしまった為、マンダレイは誰か分からずに聞き返そうとする。だがその声は届かず、緑谷はそのまま走り去ろうとしていた。

ふと、マグネは緑谷を眼で追いながら顔を曇らせていた。先程の地鳴りのような音。ザイラン 敵側でパワーを得意とした戦闘が出来るのは血

狂いマスクユラーか、脇真音姉弟ぐらいだ。戦闘を行ったと言わんばかりに緑谷の体はボロボロになっていた。情報が漏れている故に、緑谷がここにいるとなると、恐らく何方かと闘い、倒したと言う事になる。

「やだ……この子、ホント殺しといた方がイイ！」

そんな緑谷に脅威を感じたマグネは、虎を押し退けて真っ先に緑谷の方へと駆け出す。周りが見えていない緑谷に横から殴り掛かろうとしたその時だった。

「手を出すなマグ姉!!」

「!?」

突然スピナーがマグネに向かってナイフを投げたのだ。マグネは慌てて顔を仰け反らせてそのナイフを避けるが、お陰で緑谷は森の獣道へと入って行ってしまった。

「ちよつと何やってんの!? 優先殺害リストにあつた子よ!」

「そりゃ、死柄木弔個人の意思」

「スピナー何しに来たのよあんた!」

殺害を妨害され苛立つマグネ。だが、しれつとした態度に更に苛々が募るマグネは吠えると、スピナーは緑谷の後ろ姿を見つめながら口を開いた。

「あのガキはステインがお救いした人間! つまり英雄を背負うに足る人物なのだ!! 俺はその意思に、シタガ!!」

従う。と言おうとしたのだろうが、隙だらけな状態のスピナーにマンドレイは、その顔面に渾身の回し蹴りを直撃させる。

「やっつと、イイの入った!」

その一撃にマンドレイはそう言って、緑谷が走って行った獣道を見遣る。当然、彼の姿は何処にもなかった。仕方ないと思つたマンドレイは、言われた通りにテレパスを発信する。

『^{ヴィラン}敵の狙いの1つ、判明ー!! 生徒の“かつちゃん”!! “かつちゃん”はなるべく戦闘を避けて!! 単独で動かないこと!! わかつた!? “かつちゃん”!!』

生徒達の脳内に発信されるテレパス。A組の生徒達は緑谷がよく言う呼び名だったので直ぐに分かるが、B組生徒達はその名前が誰か解らず困惑していた。

その一方で、死刑囚のムーンフィッシュと接触し、テレパスの交信で戦闘の許可が降りた轟は、さっそく氷結を繰り出し、防御をとっていた。ムーンフィッシュは歯を鋭利な刃物に形を変え、それを伸ばして攻撃を仕掛けてくる。その強度はかなりのモノで、氷壁が簡単に貫かれる程だった。

「耐えなきや…。仕事を…。しなきやああ…。ああああー……」

無数に伸びた歯を蜘蛛の足みたく地面に伸ばし、体はぶらんぶらんと宙で揺れながら、ムーンフィッシュは自分の衝動を押さえようと独り言を言う。すると爆豪が飛び出し、攻撃を仕掛けようと手の平を突き出す。だがムーンフィッシュは歯の刃を斗出させる。それを見てハツとした轟は爆豪の前に氷結を繰り出し、「不用意に出るんじゃないやねえ!」と怒鳴った。

「聞こえてたか!? お前狙われてるってよ!」

続けて更新されたテレパスに、一緒に居た爆豪を戦闘させまいとそう言うが、マンダレイの発信した呼び名が脳内で何度も響いたせい、爆豪は眉を顰めながら口を開いた。

「かっちゃんかっちゃんっせんだよ頭ン中でえ……。クソデクが何かしたなオイ! 戦えつつたり、戦うなつつたりよおくくああ!」

狙われている身とは言え、敵に背を向けて逃げるなど彼のプライドが許されない。「クッソどうでもいいんだよ!!」と爆豪は吠えて接近しようとした直後、爆豪の目の前に歯の刃が襲い掛かる。すると、その歯から別方向に歯が飛び出し、爆豪は慌ててそれを仰反るように避ける。轟はすかさず氷結を繰り出し、本体を狙おうとするが、伸びた歯を利用してムーンフィッシュは空中でかわす。当てられなかった事に舌打ちをする轟はその動きを見ながら口を動かした。

「地形と『個性』の使い方がうめえ」

「見るからにザコのひよるガリのくせしやがってあんのヤロウ…！」
その俊敏な動き、距離をとつての攻撃、そして確実に急所を狙って手負いを負わせようとするやり方に爆豪は苛々が募る。明らかに場数を踏んできた証拠だ。こちらにも全力で対処したい所だが、問題があつた。

「爆豪、ここでだけえ火使つて燃え移りでもすりや火に囲まれて全員死ぬぞ。わかつてんな？」

「喋んなつ、わーつとるわ！」

お互い火を発火、または放射する「個性」。森に囲まれたこの場所でそんな事をすれば二次災害になってしまう。至近距離での爆破なら燃え移るのは無いと思うが、その相手は近寄らせてくれない所存である。そして、ここで一旦引こうと轟は後ろを見遣るが、奥から桃色のガスが徐々にこちらに広がりつつある。分かりやすく、この場に止めようと縛りに掛けられている事に、轟は顔を歪ませていたのだつた。

☆☆☆☆

ウヴァ、ポセイドンの気配頼りに獣道を歩くアंक。ダメージも酷いのか、その速度はかなりゆっくりだった。

「……!？」

アंकは何かを感じ取つたのか立ち止まると、その表情は険しくなり、辺りをキョロキョロと見回し始める。

「…!気配が消えた…だと…!？」

ハッキリとしていた気配が、電化製品がプツツと切れるみたく消えて感じ取れなくなっていた。しかも、ポセイドンとウヴァの両方の気配がだ。

「クツソ!!何処行きやがった…!!映司ーー!!!」

頼りにしていた足掛かりが消え、アंकは火野の名前を叫ぶ。その声は届く筈もなく、闇夜に響き渡るだけだった。

☆☆☆☆☆☆

トウワイスと行動し、森を燃やしていた茶毘。そんな時、茶毘の持っていた通信機から音が鳴る。茶毘は起動させ、発信した相手と連絡をとった。

「……………そうか、分かった」

「相手誰だ？」

何かを了承し、通話を切る茶毘にトウワイスが話し掛ける。

「脇真音の姉弟共が先に帰るんだとよ」

「ハア!?何でだよ!?まだ作戦の最中だろ!疲れてんのかな?」

キレると同時に心配するトウワイス。すると茶毘は小さく首を振って、脇真音姉弟が居たであろう方角を見つめて口を開いた。

「まアそう怒るな……………。奴らは今回の目的以上の事を成し遂げてくれたんだ。俺達は残りの目的を早いとこ捕まえるぞ」

不敵に笑う茶毘。

一方、脇真音姉弟は黒霧が発動させたワープゲートを潜り抜けようとしていた。優無は嬉しそうに、その手にはアंकが落としたメダルホルダーが握られており、その2人の後ろには、緑色に輝かせる瞳をした、火野映司が立っていたのだった。

茶毘とトウワイスが動き出した数分前、ポセイドンの一撃で大爆発が起き、付近に居たアंकは爆風により吹き飛ばされてしまう。土煙が舞い、晴れたその場所で、2人の戦士は立っていた。

「いったア〜……。ギリギリで防御とつたは良いけど、やっぱ威力強いねソレ」

「ごめん……」

何層にも覆った木の蔓でバリケードを作ったヴィランオーズ。力を使い切ったのか変身が解かれ、優無はその場に座り込んでいた。ポセイドンは申し訳なさそうに謝っていると、気配を感じたのかディーペストハーブーンを構える。ポセイドンが見るその方角を優無は蔓のバリケードから顔を出して見遣ると、そこには腕を交差して防御をとっていたオーズが立っていた。

「うっわ…。アレを食らったのに立ってられるんだ…！流石ガタキリバ…。防御も随一なんだね…」

「…フン、これぐらい、どうって事ない」

強気を見せるオーズだが、その腕はプルプルと震えて煙を出していた。いくら防御が硬いフォームと言えど、大技を正面から受け止めていたのでダメージは大きいのだろう。オーズはそのまま戦闘態勢に入ろうとすると、優無は「待った待った！」と慌てて両手を上に上げて降参するようなポーズをとり、辺りを見回ながら口を開いた。

「…さっきの威力でアंकは飛ばされたみたいだね。……ねエ、ウヴァ。私と少し話さない？」

「話し…だと…?…」

アंकが居ない事を確認した優無はウヴァに会話をしようと持ちかける。ふと、優無はポセイドんに視線を送り、その眼を見たポセイドンは変身を解いた。姉弟は闘う意志を見せようとするが、オーズは変身を解かずに、いつでも襲えるよう警戒態勢へと入る。

「何で火野映司君の体に居るのかはさておいて…、質問なんだけど、今

火野映司君の意識はあるの？」

「……いや、体の奥底に奴の精神を閉じ込めている。俺が引つ込まない限りは出てこれない筈だ」

オーズは自分の胸に手を置きそう言うと、優無は「そっかそっか……」と顎に手を置いて何度も頷く。そして、ニツと笑うとオーズに提案を持ち掛けた。

「じゃあウヴァ、率直に言うね。私と契約しない？」

「は？契約？」

「うん、そう。まあでも、見ず知らずの敵にそうなるのは当然の反応だよね」

何を言ってるんだこいつは？とオーズは目を見開く。槍無もその提案に理解が追い付いていないのか「姉さん……？」と首を傾げるが、優無は続けて口を動かした。

「ウヴァは恐らく何らかの影響で火野映司君の体に転移してきたと思うの。因みにこの世界はアंक以外にグリードは存在しない全く別次元の世界。そして、1人1人には特殊な能力を持った“個性”を使う事が出来る超人社会になってる世界なの」

「……さっきから何を言ってるやがる？」

「……やっぱり。王に取り込まれて、ウヴァ自身の意志はそこで途絶えたような素振り……。そのまま急にこっちの世界に来ちゃったみたいだね……」

いきなり説明されても思考が追い付かないウヴァ。どうやら優無の推測通り、前世で服従していた800年前の王に取り込まれたまま、ウヴァの意識は消失してしまったのだろう。優無は自身の胸に手を置いて口を開いた。

「まあ、詳しい話は後で話すよ。それよりも契約の内容なんだけど、私もちよつと特殊なその“個性”を持つてね。オーズに変身出来るのもそうなんだけど、もう一つ。ヤミーを生み出せる“個性”も持つてるの」

「っ!?ヤミーを生み出すだ?!馬鹿な!人間如きがそんな事出来る訳がないっ!」

「そう、人間はそんな事出来ない。でも私は特別。それが出来ちゃうんだよね。今はちよつと土台となる人間がいないから見せれないんだけど、他の証拠としてオーズに変身出来てたのは事実でしょ?」

戸惑うオーズに優無はそう言うと、オーズは先程闘っていた本人の言葉に何も言い返せずに困惑していた。優無はそのまま自身の「個性」について説明をする。

「セルメダルさえあれば私はヤミーを生子ませれる。と言っても、生子ませるヤミーはランダムなんだよね。でも、その子達は私に忠実で、その人間が持つ欲望が大きければその分、セルメダルも大量に増える。まアでも、どう言った原理か分からないんだけど、欲望のままに私の生子み出したヤミーは行動しないんだ。ただその人間の欲望と言う餌を溜め込んだ、忠実さを持つヤミーって感じかな」

「つまり何だ!? 勿体振らずに言え!」

まず状況があまり把握出来ていないウヴァは「個性」を説明されても困惑が増えるばかりだ。吠えるオーズに、優無は軽く息を吐いて口を開く。

「増やしたヤミーのセルメダルは全てウヴァにあげるよ。その代わりに、私と一緒に行動してくれないかな?」

「っ! 何だと…?」

「あ、別に縛る訳じゃないよ? 肝心なお仕事みたいな時に一緒に居てくれたら良いからさ。」

ね? どう? この世界にいるグリードは多分アंकと君だけ。私と一緒に動けばセルメダルはウヴァだけの独り占めさ。悪い話しじゃないと思うんだけど?」

この世界がどんな世界なのかはウヴァは知らない。その中でウヴァの存在を知っている雰囲気を出す彼女から提案された交渉は、今のウヴァにとってはかなりの都合の条件だ。敵意も感じられない。そして火野の体に乗っ取っている以上、アंकが来ようとも、オーズの力で難なく対抗出来る。

「ウヴァ、君の持つその欲望…存分に解放したくない?」

黙り込むオーズに、優無は更に一押しする。その言葉にオーズは目

を見開くと、下を向いて静かに笑い出した。

「クククク……ハハハハ……い……フツ、良いだろう。その契約に応じてやる」

オーズは顔を上げて了承すると、ドライバーに手を掛け、その変身を解く。火野の姿だが、その瞳は緑色になっており、髪も緑のメツシユが追加されてオールバックになっている。取り敢えず、交渉は成立したので優無はニコリと笑い、火野の姿をしたウヴァに握手をしようとして手を差し伸ばした。

「フフツ、よろしくね。ウヴァ」

「フン、勘違いするな。お前の言った条件が今は最適だと思ったただけだ。色々知りたい事も山程あるしな。……それに……」

握手を断ると、火野ウヴァはチラリと槍無を見遣る。

「そこにいるガキの中にコアメダルの気配を感じるぞ……。何者なんだぞいつは？」

「私の弟君。味方だから安心して。まあ諸々の説明は後で話すよ。今は取り敢えず場所を変えようか。コンボ使つて私ももうヘトヘトなんだよね……」

警戒し、睨むようにそう言う火野ウヴァに、優無はフォローしながら応えると、通信機を取り出して黒霧に繋げた。それを見た火野ウヴァは「フン」と鼻を鳴らしてそっぽを向く。そして、その態度を見ていた槍無は、ずっと黙って火野ウヴァを見ていたが、その目付きは強張っており、睨んでいるように火野ウヴァを見つめていた。

「……………」

ふと、火野ウヴァは何か気になったのか辺りを見回し始める。そして、顔を見上げて闇夜を薄らと照らす月の光を、物珍しそうに見つめていたのだった。

数十分後、戦闘を行った場所まで戻る事が出来たアंक。だが、気配が消えた通りに、その場からオーズやヴィランオーズ達の姿は何処にも無く、アंकは「やっぱりか……」と表情が強張る。

「……………無い……あの野郎……手土産に持って行ったか……!!」

アंकはメダルホルダーがないかと辺りを見回す。当然ソレは何処にも無い。パンパンに敷き詰められた財布が落ちていれば、悪い奴は大体持って帰るのが当たり前だ。更に苛つきが募る中、ふと、辺りを見回すとアंकは口を開いた。

「霧が、晴れていく……」

先程までこちら一帯を漂っていた桃色の煙が徐々に晴れていく事に気付く。

それもその筈、こちら一帯を充満させていた有毒ガスは敵のマスタードによる「個性」。その付近にいた鉄哲と拳藤の活躍によってマスタードを倒して「個性」が強制的に解かれたようだ。

幾度の闘いをして来た為か、その煙が害を持つてるモノだと感じ取ったアंकはなるべく吸わないように避けてここまで来ていた。煙が晴れた中、アंकは引き続き火野を探そうとする。

「ッ！アंक君!!」

「っ、お前……、何でここに……!?!」

その時、聞き慣れた声にアंकは振り返ると、そこには緑谷が立っていた。そのボロボロな体を見てアंकは目を見開く。

「尋常じゃないな、その怪我……」

「う、うんまア……。それより……火野君は……? 一度スタート地点に戻ったから通りかかったんだけど……アंक君1人……?」

交戦しているだろうと緑谷は肝試しのスタート地点と岩壁の中央地帯へと駆け付けたらしく、火野と脇真音姉弟が見当たらない事に疑問を抱く。

「……………恐らく連れて行かれた」

「え……」

アंकが応えると緑谷は声を漏らして口を開けたまま固まってい

た。何を言ったの？みたいな表情をする緑谷は、もう一度確かめようとアंकに声を掛けた。

「つ、連れて行かれた…？何で…？狙いはかっちゃんの手筈じゃ…」

「フン…さつき頭ン中で猫女が言ってた事か？何で爆豪が狙われてるのか知らないが、別にそんな事はどうでもいいッ。あの脇真音共と闘ってる最中に、何故か映司の中で俺と同じグリードが目覚めやがったんだ…！」

「同じ…グリード…?!？」

「ああ、ウヴァって奴がなあ。映司の体を乗っ取った奴は、喧嘩っ早い性格で頭は悪い。大方、脇真音がそれを知ってて上手い話を合わせ誘ったんだろ」

文句を言うアंकは「虫頭が…」と言って舌打ちをする。すると、緑谷はそれを聞いて一気に表情が青白くなっていく。マスクユラーを倒して、直ぐに火野の元へ駆けつけていればと、頭の中で強く後悔していた。狙いは爆豪だけじゃない事くらい、少し考えれば想定出来ていた筈。洗太を安全な場所に連れて、爆豪を救けようと無我夢中になっていた緑谷は、片手で頭を押さえて、絶望感に襲われそうになっていた。それを見ていたアंकは軽く息を吐くと、緑谷に声を掛ける。

「…おい、別にそこで塞ぎ込んでいても俺には関係ないが…、お前はまだやる事があるんじゃないのか？」

「え……」

「あの爆発頭が狙われてるんなら、さつきと行け。後悔してる暇なんかないだろ。手が届く場所にいるんなら…その手掴んでやれ。…ま、その腕じゃ掴めるにも掴めないだろうがなあ」

アंकは元気付けるように皮肉に緑谷の腕を見ながら、お人好しの男の言葉を口にする。思わずキョトンとする緑谷は、気をつかってくるアंकに疑問を抱いた。

「アंक君は…、どうしてそんなに冷静なの…？火野君が連れ去られたのに……」

「あ？冷静な訳あるかつ。大事なメダルまで持ってかれたんだ。直ぐにでも奴の居場所を掴んで、あの憎たらしい顔を捻り潰してやりたい気分なんだよこっちは……！」

アंकは一旦区切ると、右腕を見つめて口を動かした。

「あの馬鹿は俺が居ないと何を仕出かすかわかったもんじゃない……。だが、馬鹿は馬鹿なりの悪あがきくらいはするだろう。それに奴らは、ウヴァがオーズに変身出来るのを良い事に連れて行ったのなら、早々殺すなんて事はしない筈だ。今はこの森にいる敵から情報を炙り出して、それから映司を連れ戻す……！」

冷静に振る舞っているように見えるが、その眼は怒りと、何処か焦っているような眼をしていた。ただむやみに突っ込んでたら意味がない。まずはこの状況をどうにかしようと考えているのだろう。

前の世界の二の舞にならない為に、と。

「…………アंक君……………そうだね。アंक君の言う通りだ……！」

アंकの想いを聞いて、緑谷は立ち上がった。今すべき事は爆豪を安全な場所へと向かわせる事。連れ去られてしまった火野はどこに連れ去られたのか分からない。なら、アंकの言う通り、この森にいる敵から火野の居場所を突き止める事と、爆豪の安全を確保する事。

「アंक君、ありがとう………うわつと……！」

緑谷は振り返り、足を踏み出した直後、急によろけてしまい、その場に転んだ。冷静さを取り戻してアドレナリンが切れかけたのだろう。じわじわと滲み出るような激痛が体を襲い始める。

「フン、お前もどっかの馬鹿みたいに相当無茶したな」

「う、うん……………ちよつとやりすぎたかもね……！でも、休んでる暇はないよ……！早く、かっちゃんを探さないと……！」

見るからに重症を負っている緑谷は、それでも動こうとする。他人の為に自らを顧みず救けようとするその姿勢は火野にそっくりで、アंकは見て見ぬ振りが出来なかったのか、突然体を光らせると同時に、緑谷の中へと入り込んだ。

「うわつ!?ちよ……！……………これなら痛む事ないだろ」

緑谷の中へと入り込んだアंक。緑谷の髪型はメッシュのかかつ

た赤い髪に、アंक特有の羽を模した髪型へと変わる。緑谷アंकはスツと立ち上がり、中の緑谷に声を掛けると、精神の中で緑谷は、「うわ!え!?何これ!?!」と体に乗っ取られるのは初めての為か、かなり戸惑いの声を荒げていた。

「チツ…この両腕折れてんのか。かなり無茶な戦闘したもんだなお前」

「(ご、ごめん…)」

「フン。……言つとくが、体を借りてるだけでダメージや痛みは今の
お前には余り感じないだろうが、回復した訳じゃない。俺が使っている以上、後からお前にその負荷が戻る。…それが嫌ならー…」
「(僕は大丈夫…!それで少しでも動けるのなら、僕の体、君に託すよ…!)」

これ以上動けば後々動けなくなる緑谷。だがその救けたい想いに、
敵から情報を奪おうとするアंकは言わば自分の都合でその体を借りている。少し申し訳無く思ったのか、緑谷に問い掛けると、有無を言わずに緑谷はそれを了承した。

「…そうか…で、爆豪の場所はわかるのか?」

「(あ、えと…うん。この獣道を真っ直ぐ行けば肝試しの道に繋がる筈だから、その道筋を辿れば合流出来ると思う。かつちゃんも轟君も敵と遭遇したのなら、恐らく交戦している…)」

精神の中の緑谷の言葉にアंकは無言で了承すると、グリード化した右腕を動かし辛そうにゆっくりと右耳の上辺りまで持っていく。そして指を突き当てると、アंकは目を閉じた。

「(アंक君?何してるの?)」
「飛んで行った方が楽だが、生憎俺もセルメダルをかなり消費したんでな」

翼を出す余力も無いアंकはそう言って一旦区切り、「悪いが…」と言うと、全身に力を入れる。すると、体に緑色の稲妻が迸る。紛れも無くなく、アंकは緑谷の体にワン・フォー・オール^{ワン・フォー・オール}の力を宿らせた。
「お前の『個性』を使わせてもらおう」

アंकはそう言って、足を踏み出し、脅威的な速度で獣道を駆け出

した。

「(え!?!す、凄いよアंक君!ワン・フォー・オールの使用方わかるの!?)」

「お前の記憶を辿ればこのくらいどうって事ない…。さっさと案内しろ。一気に行くぞ」

5%の力でもコントロールが難しいその力を、意図も容易く使いこなすアंकに驚愕する緑谷。改めてアंकは凄いと感心すると同時に、頼もしいと感じていた。

しばらく駆け抜けていると、緑谷の言った通り肝試しの道へと辿り着く。緑谷の指示に従い、道を走っていると、別の方角からバキバキと木が薙ぎ倒される轟音が聞こえてきた。

「なんだ?どつかで戦ってんのか?」

緑谷アंकはその衝撃音が聞こえる方角を見遣る。その直後。黒く、巨大な手を横した物体が勢いよく緑谷アंकに向けて突っ込んできた。

「!?!」

咄嗟にその物体を跳んで避けた緑谷アंक。すると、「緑谷っ」と声を殺したような叫びで呼び掛けてくる者がいた。緑谷ほどではないが、怪我を負った障子が後ろに立っていた。

「あ?お前…」 「障子君:!!?!」

「シッ……あまり声を出すな。気付かれる」

緑谷アंकの声を静するように障子は人差し指を立ててそう言う。再び木が薙ぎ倒される音が聞こえ始め、緑谷アंकはその方角を睨みながら口を開いた。

「……………どうやら、何か向こうにいるみたいだな…」

「…その重症、動いていい体じゃないだろ…?友を救きたい一心か?呆れた男だ…」

「あ?フン、確かにコイツのお人好しはあの馬鹿と同等だな」

「つ……?お前、緑谷じゃないな……………!?!」

「悪いが、俺はアंकだ。今重症のコイツの体を借りている。俺が入ってれば少しは負担が軽くなるから安心しろ」

いつもと違う喋り方に気付いた障子は警戒態勢に入るが、アंकと知ってそれを解く。それと同時に「アंक……？」と疑問を抱いた。

「何故お前が緑谷の中に……？火野はどうした？」

「ちよつと面倒な事になってな。敵に連れ去られた」

「!?何だと……!?!」

驚愕する障子。直後、バキバキと圧し折れる衝撃音が聞こえる。緑谷アंकと障子は身を屈めてその方向を見る。そこには、見た事ある黒い大きな物体が暴れ回っていた。

「あいつ……確か……」

「(ツ!!?常闇君……!!?)」

その方角で暴れているのは常闇を今にも覆うとしているダークシャドウだった。いつも見るダークシャドウとは明らかに巨大で、その光る眼は悍ましい獣を模した眼となっており、力を振るわんと辺りの木々を薙ぎ払っていた。精神の中で驚愕する緑谷。すると、障子が口を開く。

「^{ヴァイラン}敵に奇襲をかけられ俺が庇った……。しかしそれが、奴が必死で抑えていた“個性”のトリガーとなってしまう……。ここを通りた
いならまずあの常闇をどうにかせねばならん」

常闇の“個性”ダークシャドウは、闇が深ければ深い程その性格は
寧猛になり、本人自身も制御が難しい。“個性”強化訓練も洞窟で制
御しようと励んでいたが毎回訓練が終わる頃にはへばっていたくら
いだ。そして、今はその闇が深い夜の森。ダークシャドウにとっては
絶好の世界となっていた。

「制御が出来ない“個性”……暴走か……。その腕はあそこで暴れてる
奴にやられたのか？」

「いや、変幻自在の刃を使う敵に^{ヴァイラン}切られた。と言っても、複製した腕を
切られた。傷は浅くないが……失ったわけじゃない。それよりも、緑谷
……いや、アंक。火野が連れ去られたとはどう言う事だ？マンダレイ
の指示は爆豪だけじゃなかったのか？」

「説明は後だ。今はさっさと先に進みたいってのに、面倒な事に巻き
込みやがって……」

障子の腕から流血しているのをそっちのけにして緑谷アंकは暴走するダークシャドウを見遣る。どうやら音で獲物を把握しているようで、無視して先へ進もうとすれば、先程みたいに襲ってくるのは間違いない。苛々が募る中、緑谷が精神の中から声を掛けてきた。

「(アंक君…！炎出せる…!?)」

「あ？出せない事もないが、アイツ事焼き払う気か？」

「(ち、違うよつ。常闇君のダークシャドウは闇が深まる程強力な『個性』。なら、その逆はー…:…)」

「…ほお。成る程なあ。おい、お前。奴から注意を逸らさせろ」

「何をする気だ…?」

緑谷の案にアंकは理解したのか、障子にそう声を掛ける。疑問を抱く障子に「いいからさっさと動け」と命令口調で指示を出し、何か策があると理解した障子は「…わかった」と頷く。

「今はお前を信じるぞー」

「ッー」

ダツと駆け出した障子の足音に気付いたダークシャドウは視線を障子に向けて進行しようとする。

「ぐっ!?!静まれ…:…ダークシャドウ…!!」

『アラガウナー！アバレサセロ!!』

その中心部で抑え込もうと常闇は抵抗するが、夜の闇でパワーが増幅されたダークシャドウには子犬が戯れてくる程度なのか、容易にその抵抗を阻止して障子に詰め寄ろうとする。辺りの木々を薙ぎ倒すその猛進に、あつという間に障子の背後へと突進していた。

だがその時。吹き飛ばされた木々を踏み台として緑谷アंकはダークシャドウの真上へと跳躍する。その右腕には炎を灯しており、ダークシャドウの頭部目掛けて落下し、その右腕を突き出した。

『ヒャン!!?』

炎の灯を照らされ、女の子のような悲鳴を上げたダークシャドウは勢いよく常闇の体内へと逃げ込む。その瞬間、常闇は息遣いが荒くなると同時に膝をついた。

「ハアツ…ハアツ…:…!」

「無事か、常闇！」

障子が駆け寄り、安否を確認すると常闇は「すまん…助かった…」と息を整えながらそう応える。すると、緑谷アंकは2人に近寄り、辺りの倒れている木々を見ながら口を開いた。

「フン、お前のその怪物…難儀な“個性”だなあ」

「ハア…ハア…緑谷…？じゃないな…お前は…？」

「アंकだ。訳あって今は緑谷の中に居る」

雰囲気が違う緑谷に戸惑う常闇に障子が軽く説明をすると、納得した様子で、申し訳なさそうに口を動かした。

「アंक…障子…悪かった…。俺の心が未熟だった。」

「礼なら緑谷に言うんだな。こいつの起点がなけりや危うく潰す所だったがなあ…」

自身に指を指して言う緑谷アंक。その本人の体で喋る彼に常闇と障子は一瞬戸惑って言葉を失っていた。

「……すまない、緑谷。障子の複製の腕を飛ばされた瞬間、怒りに任せてダークシャドウを解き放ってしまった。闇の深さ…そして俺の怒りが影響され、奴の凶暴性に拍車をかけた…。結果、収容も出来ぬ程に増長し、障子を傷つけてしまった…」

ふと、常闇は障子の顔を見遣る。「そう言うのは後だ」と言わんばかりの表情をしており、常闇はこれ以上何も言うまいと口を閉じるが、疑問が浮かんだのか再度口を開いた。

「して、何故緑谷の体に火野のアंकが憑依してる…？肝心の火野はどうした…？」

「……チツ。何度も説明するのは面倒だ。さっさとしないと、爆豪が狙われてるみたいなんだな。俺はもう行くぞ」

「爆豪…？命を狙われているのか…？何故…？」

アंकの言葉に常闇は更に疑問を抱く。恐らく暴走したダークシャドウを抑えるのに必死でマンダレイのテレパスを聞き取れなかったのだろう。背を向けようとする緑谷アंकに「待て」と障子が声を掛けた。

「その怪我ではアंकが憑依したとしても乱暴な行動は出来ないだ

ろ。俺におぶされ」

「あ？」

障子の言葉に緑谷アंकは顔を顰める。

「同じクラスメイトが狙われているとなれば、黙ってはいられない。俺も行くぞ」

「無論、俺もだ。だが：闇夜の中ではダークシャドウを制御するのは難しい。悔しいが、戦力としては役に立てない……」

障子に続いて、立ち上がる常闇は申し訳なさそうな表情を浮かべながらそう言う。すると、緑谷アंकは何かを思い付いたのか常闇を見つめては口を動かした。

「おい、お前のダークシャドウって奴は、光が在れば制御出来るんだよな？」

「：？あ、ああ。焚き火くらいの灯りさえあれば大人しくなるが……」

「……そうか」

その言葉を聞いた緑谷アंकは、何か企みのあるような、不敵な笑みを浮かべていたのだった。

No. 87 不意打ちの幕引き

「肉……早く見せてええええ！」

爆豪と轟と交戦するムーンフィッシュ。私欲が暴走したかのように歯の刃を無数に伸ばして攻撃を仕掛けるが、轟は休む事なく氷壁を作り出してそれを防御していた。

「近付けねえ!!クソ！最大火力でブツ飛ばすしか…」

「駄目だ！」

「木イ燃えてもソツコー氷で覆え!!」

「爆発はこっちの視界も塞がれる！仕留めきれなかったらどうなる!?手数も距離も向こうに分があんだぞ！」

防戦一方で怒り吠える爆豪だが、ムーンフィッシュの容赦ない猛攻に突っ込めば切り刻まれるのは目に見えている。増してや、爆発や炎を使えば辺りの森に燃え移るのも当然なので、得意とする「個性」が使えない状態が続いていた。

「肉…肉……肉ううううっ!!」

歯の刃を更に増やしてムーンフィッシュはかき氷のように氷壁を削っていく。いくら氷結を繰り返すと云っても、限界も当然あり、轟の体は霜に覆われつつあった。炎を出せば温度調節が出来るが円場を背負っている以上、下手に炎を出すことは出来ない。当然嫌がるだろうが、無理を承知で爆豪に円場を任せようとしたその時だった。

『ウオオアアアアアアアアアアッ!!』

「あ…?」

「!?!」

ムーンフィッシュの後ろから獣が雄叫びを上げるような咆哮が轟く。気を失っている円場以外の3人はその咆哮の先へ首を向くと、そこにはダークシャドウが凄まじい勢いと速度でこちらに向けて移動していた。

「ンだありゃ…!?!」

凶暴化したダークシャドウを見るのは初めてなのか爆豪は声を漏らす。すると、ムーンフィッシュは「肉」と一言呟いて歯の刃をダークシャドウに向けて突き出した。だが、全身影の体に刃は通用せず、その体を通り抜ける。そして、敵と見做したダークシャドウは一気に間合いを詰めて、巨大な腕でムーンフィッシュを叩き潰した。

「あ…!?!」

虫を潰したみたく潰されたムーンフィッシュ。轟と爆豪は警戒して後退るが、ダークシャドウは咆哮を上げるだけで、その場から動かなかった。妙だと思つた爆豪はダークシャドウを見つめてみると、その背中にはなんと障子とそれを背負つた緑谷が居たのだった。

「デク…!?!」

「かつちゃん!」

緑谷も爆豪を見るなり声を上げると、轟はこの状況に理解が追いついていないのか、障子と緑谷に声を掛ける。

「障子に緑谷…!?!そいつ常闇のダークシャドウだよな!?!どおなつてんだ!?!」

「訳あつて常闇の中にアंकが憑依してる! 2人共出来るだけ離れてくれ! こつちで敵を何とかする!!」

障子が応えると、潰されていたムーンフィッシュが力を入れてググツと起きあがろうとする。それに気付いた常闇に憑依したアंकが見下すようにダークシャドウに声をかけた。

「おい、トドメは刺すなよ? こいつは貴重な情報を持つてるんだ。死なない程度にきつさと始末しろ」

『ヌウ! 貴様ア! コノオレサマニ、指凶スルンジヤネエゾオオ!!』

「ほお? ならお前の大好きな光を浴びせてやろうか? “個性”如きが主人に逆らうとどうなるか教えてやろうか!?!」

『ググ…!! ウオオアアアアア!!』

「!?!」

常闇アंकの言葉に怖気づいたダークシャドウは言い返すのを辞めて、抗うムーンフィッシュを掴み上げると、辺りの木々を薙ぎ払う

と同時に、ムーンフィッシュを後方へと放り投げた。衝撃音が鳴り響く中、ダークシャドウは『暴レ足リンゾオオオ!!』と辺りの木々を紛いでは投げ散らかし始める。

「うおっ!？」

「常闇：アंक君！」

必死にしがみつくと障子。おぶさっていた緑谷が叫ぶと、常闇アंकは右腕から炎をポツと放射させる。ダークシャドウは『ヒャン!?!』と嘆いて瞬く間に常闇の体の中へと入っていった。

「チッ、この馬鹿が！貴重な情報源を放り投げやがったな！あれじゃあ生きてるのかどうかも分かんないだろうっ！」

背後で着地する障子。常闇アंकは辺りを見渡し終わると、中に居るダークシャドウに向かって吠えていた。すると、精神の中から常闇がアंकに声をかけてくる。

「(アंक、俺の体から離れてほしい)」

「何でだ？」

「(頼む)」

単調にお願いをする常闇に、アंकは舌打ちをしながら常闇の体から離れる。セルメダルを消費したせいも、人型ではなく右腕だけの状態で浮遊しているアंकに、常闇は睨みながら口を開いた。

「：俺の暴走と、友を救けたのは感謝する。だが、俺のダークシャドウを愚弄するな」

「あ？…フン。あの化け物の暴走を制御出来ないお前が悪いだろ。俺がいなかったら危うく緑谷達を殺し掛けたんだぞ？逆に感謝するべきだと思いがなあ」

「ぐっ、貴様…！」

「落ち着け常闇、アंकもだ」

常闇にとつてダークシャドウは本人曰く“分身”。アंकの言い方は自分を愚弄するような物言いだっただのか、睨みつける常闇だが、障子が間に入ってそれを止める。右腕のアंकはスナップするようにそっぽを向き、常闇は息を吐いて「すまない…」と謝ると、轟が近付いて声を掛けた。

「障子、常闇、緑谷…それにアंक。悪い、助かった」

「轟君達も無事で、よかった…」

「ああ、俺達はな…。それよりアंक。火野はどうした？一緒じゃねえのか？」

息を吐く緑谷の言葉に、轟はそのボロボロの体を心配そうに見ながらアंकに声をかけると、アंकは浮遊しながら轟の隣に移動し、言葉を発した。

「…映司は、脇真音達に連れ去られた」

「「!?!」」

アंकのその言葉に緑谷以外の轟、障子、常闇、爆豪の4人は驚愕し、目を見開いた。すかさず障子が口を開く。

「脇真音…。確か敵サイランにいた火野と同じ“個性”を持つオーズだったな…」

「連れ去られたって、どうなってんだ…?目的は爆豪じゃねえのかよ…!?!」

「奴らと戦っていた時、俺と同じグリード…簡単に言えば、人格を持った“個性”が生まれた。恐らく、脇真音に唆されて連れて行ったんだろな」

アंकは言い終わると轟達は驚愕と同時にその言葉を聞いて押し黙る。コアメダルから生まれたアंकの件についてはA組全員が把握している事なので、なんらかの拍子で別のグリードが生まれたと言われて今更驚きはしないが、よりによって火野が連れて行かれた事は、予想打にしていけない衝撃の出来事だ。自身と爆豪達を守る事で精一杯だった轟は己の不甲斐無さに腹が立ち、「クソ!」と悪態を吐く。すると、緑谷が弱々しい声で口を動かした。

「火野君は恐らく敵の本拠地サイランに連れ去られたと僕は思う…。直ぐにでも追いたいけど、今の僕達じゃあどうする事も出来ない…」

「だからって放って置くわけにもいかねえだろ。早く火野を連れ戻さねえとー…」

焦る気持ちで一杯なのか轟はそう言うと、緑谷は掻い摘んで「だから」と口を動かした。

「現状、今狙われているのはかつちゃんなんだ……！ここで合流した今、僕達のするべき事はかつちゃんの護衛。ブラドキング・相澤先生プロ2名がいる施設まで送るのが僕達のするべき事……そして……」
「……成る程、敵と遭遇し、拘束すれば火野の居場所を突き止められるかもしれない……か！」

火野以外にも狙われているのは目の前にいる爆豪。彼を安全な場所へ送り届けると同時に遭遇した敵から情報を聞き出す。その判断に理解した常闇が言うと、緑谷は深く頷いて口を開いた。

「広場は依然にプツシーキャッツが交戦中。まずは敵から避けてかつちゃんを最短ルートで護衛し、施設に預けた後、広場へと向かってマインダレイ達に加勢しよう」

「爆豪を護衛している途中で敵と出くわす可能性があるぞ」

「障子君の索敵能力がある！轟君の氷結……制御手段を備えた常闇君のダークシャドウ。そして、アंक君が憑依してくれば僕もそれなりに動ける……！」

この場にいる全員を見渡しながら緑谷は唾を呑む。また、爆豪もここにいる連中を唾然とした様子でキョロキョロと見回していた。

「このメンツなら……、オールマイトだって恐くないんじゃないかな……！」

「何だこいつら……！」

目指す方角に全員が視線を向け、覚悟を決めた。すると、勝手に話を進めて勝手に護衛すると決まった事にプライドが許さないのか、爆豪はくわつと目を見開いて吠える。

「お前、中央歩け」

「俺を守るんじゃないぞ共……！」

「行くぞ……！」

「無視すんなあ……！」

轟の命令にキレル爆豪だが、それを無視して一歩踏み出す障子に更に怒りが募っていた。アंकもその後方を着いて行こうとすると、常闇が浮遊する右腕のアंकに声を掛ける。

「アंक……、さつきは……すまなかつた……。お前も火野が居なくなつて

焦っているのに、俺はそれを知らずに怒りをぶつけてしまった…」

「……フン。ならさっさとその『個性』をモノにしろ」

事情を知った常闇は申し訳なさそうに謝ると、アंकもバツが悪いと思っただのか遠回しにフオローを入れる。その言葉に常闇は「…ああ」と頷き、悪態を吐きまくる爆豪の後方を歩いた。

「……おい、轟」

「何だ？」

「そいつ、気を失ってるのか？」

ふと、アंकは轟に声を掛け、背中におぶさっている円場を見て問い掛ける。

「ああ、毒の煙吸っちゃまって意識が無い。こいつも早いところ施設に持っつかねえと…」

脅かし役として森の茂みに隠れていた円場もマスタードの有毒の餌食になってしまい昏睡状態となっている。たまたま通りかかった轟が保護をしてくれたが、現状おぶさったまま敵と鉢合サイランわせすれば、先程みたいに防戦一方となってしまう。すると、アंकは意識を失っている円場へと近寄り、顔を確認すると、その体の中に入ったのだ。

「!？」

ガバツと起き上がった顔を見て轟は体を一瞬跳ね上がらせて驚くと、円場は轟の背から降りて肩を回し始める。その髪は赤のメツシユが掛かっており、どうやらアंकが憑依したらしく、口を開いた。

「コレなら背負わなくても大丈夫だろ」

「………お前、火野と同じくらいなんでもアリなんだな……」

☆☆☆☆☆☆

マンドレイが交戦する広場を避けて獣道を移動する緑谷一行。

「……誰かいるぞ…、2人…いや、3人だ」

先頭を歩く障子は、複製した耳を動かして気配を感じたのか他の皆に声をかける。それを聞いて、腰を低くして警戒する全員。障子は茂みを抜けて道に顔を出すと、そこには敵のトガに跨っていた麗日がいた。

「麗日?!」

「障子ちゃんっ!皆…!」

麗日とは別に、ペアで行動していた蛙吹が声を上げる。彼女を見ると、髪の毛がナイフで木に刺さっており、貼り付け状態となっていた。そして、障子達の存在に気付いたトガは、勢いよく立ち上がり、跨っていた麗日を払い退ける。

「あっ、しまっ…!」

「人増えたので、殺されるのは嫌だから、バイバイ…?!」

取り逃した麗日は咄嗟のトガの行動に体が追いつかずよろけてしまう。茂みの方へと移動して、麗日にトガはそう言おうとすると、ふと、障子におぶさっていた重症の緑谷が視界に入る。数秒立ち止まって見つめていたが、直ぐに我に返ってその場から姿を消した。

「待っ…!」

「お茶子ちゃん危ないわ!どんな『個性』を持ってるかもわからないわ!」

急いで追おうとする麗日を、自分で髪に刺さっていたナイフを外して蛙吹が駆け寄って彼女を止める。女子高生の身なりをしているが、ナイフや注射器を兼ね備えている彼女を無闇に追うのは危険過ぎる。そう判断した蛙吹の指示に麗日は追うのをやめて、障子等に近寄った。

「何だ、今の女…」

「敵だろ」

「ええ、クレイジーよ…。って…、貴方…B組の円場ちゃん…よね?」

轟は姿を消したトガの跡を見ながら呟くと、円場アंकが鼻を鳴らしてそう言う。それに蛙吹が応えるが、それと同時に円場を見て様がおかしいと感じたのか疑問に首を傾げていた。

「麗日さん怪我を…!」

すると、障子の背中から緑谷が声を上げて言う。それに反応した皆は麗日を見ると、太腿辺りに針で刺されたような跡があり、ツーンと血が垂れていた。麗日は反応してその足をぐりぐりと動かす。どうやら軽傷のようで、麗日は心配させまいと口を開いた。

「大丈夫…、全然歩けるし…っっていうかデク君の方が…！」

「おい、呑気に会話してる場合じゃないだろ」

緑谷の重症に驚く麗日。だが、ここで立ち止まっただけでは先程のトガみたくいつ敵が襲^{ツライ}つて来るかわからない。円場アंकは声をかけると、緑谷はハツとする。

「とりあえず無事で良かった…。そうだった、一緒に来て！僕ら今かつちやんの護衛しつつ施設に向かってるんだ」

率直に目的を話す緑谷。だが、何故か麗日と蛙吹はその言葉に疑問を抱いて緑谷達の背後を見ながら口を開いた。

「……………ん？」

「爆豪ちゃんの護衛？その爆豪ちゃんは何処にいるの？」

「え？」

何を言ってるんだ？と護衛していた緑谷達は顔を顰める。そのまま確認しようと後ろを振り返ると、そこに居た筈の爆豪、そして常闇までもが居なかった。護衛していたメンバーは障子、轟、円場に憑依したアंकしか居ない事を理解して、緑谷の顔は一気に青冷める。

この非常時、誰も油断する人間なんている筈なかった。まさかと思った次の瞬間、何処からか男性の声が聞こえてきた。

「悪いね。俺のマジックで貫^つちや^つたよ」

「！！！！」

木の上に立つのは、黒い目出し帽の上に白の仮面を被り、丈の長いトレンチコートと羽飾りのついたシルクハットを身に付けた男性だった。白黒を基調とした貴族のような仮面を付けており、その指には小さなガラス玉が2つ握られている。男性は指先でガラス玉を転がしながら緑谷に声をかけた。

「…いつあヒーロー^{そっ}側^ちにいるべき人材じゃあねえ。もつと輝ける舞台に俺達が連れて行くよ」

「……!?返せ!!」

「返せ? 妙な話だぜ。爆豪君は誰のモノでもねえ。彼は彼自身のモノだぞ!! エゴイストめ!!」

「返せよ!!」

仮面の男の言動よりも、怒りの方が強く、緑谷は短直に声を張り上げる。すると、轟が「どけ!」と声を上げて障子は身を横に引く。一步踏み出した足元から氷結が繰り出されると、仮面の男の立つ木を凍らせる。だが仮面の男はその木から飛び退き、起用にも木のてっぺんに片足を乗せて再度口を動かした。

「我々はただ凝り固まってしまった価値観に対し、『それだけじゃないよ』と道を示したいだけだ。今の子らは価値観に道を選ばされている」

大人の都合に子供は強制的にその道を歩かせている。彼が言いたいのはそう言う事だろう。恰も時間を稼ぐような物言いをする仮面男。ふと、障子は辺りを見回すと、常闇もない事に気付いたのか口を開いた。

「爆豪だけじゃない、常闇もないぞ!」

「わざわざ話しかけてくるたア…舐めてんな」

ついさっきまで後ろに居た爆豪と常闇が急に居なくなった。あの仮面の男はどんな“個性”を使ったんだ? と轟は模索しながら話しかけると、仮面の男はガラス玉を見せびらかしながらそれに反応し、口を動かした。

「元々エンターテイナーでね。悪い癖さ。常闇君はアドリブで貰っちゃったよ。ムーンフィッシュ:『歯刃』の男な。アレでも死刑判決、控訴棄却されるような生粋の殺人鬼だ。それをああも一方的に蹂躪する暴力性。彼も良いと判断した!」

「この野郎!! 貰うなよ!」

「緑谷落ち着け」

ムーンフィッシュと交戦している時から仮面男は監視していたような物言い。暴走したダークシャドウの強さと凶暴さを見込んで捕らえたのだろう。そんな仮面男に、怒りで我を忘れた緑谷は声を張り

上げるが、複製した口で障子がそれを宥めようと声を掛ける。

「返してもらおうぞー」

すかさず轟はもう一度足を踏み出し、先程とは比べ物にならない巨大な氷結を繰り出す。辺りさえも覆う程の氷壁。だが、仮面男はそれを潜り抜けるかのように氷結の中から姿を現した。

「悪いね俺ア、逃げ足と欺くことだけが取り柄だよ！ヒーロー候補生なんかと戦ってたまるかー…」

「ほお、なら俺となら問題ないな？」

「!?」

大道芸みたく宙を舞う仮面男。すると、その背後から声が聞こえ、振り返るとそこには円場アंकが空の上に空気の足場を生成し、立っていた。

「アレ、えと、B組の人!?」

「っ、アंकー！」

「ええっ!?」

「ゲロ!?」

それを見た麗日はうる覚えで叫ぶと、轟が憑依しているアंकの名を言う。それを聞いた麗日と蛙吹は目を見開いて驚愕していた。円場アंकは右腕をグライド化し、仮面男目掛けてその腕から火球を放射する。だが、仮面男は腕を突き出すとその火球が瞬く間に消えたのだ。

「!? “個性”か…!」

「アंक…ああアंक君！資料で見たぞ！これは予想外なサプライズだ！確か火野君の“個性”だったな!?他の人に入り込む事が出来るのか!?面白いな！どうだ、敵連合に出来ないか!?」

「ハッ！断る！もうそういうのはウンザリなんだよ！さっさと降参して映司の居所を白状しろ！でなければお前を潰す！」

轟の言葉を聞いてテンションが舞い上がる仮面男はアंकに加入を申し込むが、円場アंकはそれを即答で断り、右腕から炎を出しながら警告する。くると宙を舞い、轟が生成した氷結の上へ着地すると、仮面男は深々とお辞儀をしながら口を動かした。

「それは残念、そしてその申し出も断る。彼は優無ちゃんが勧誘してくれた、連合にとって逸材かつ貴重な人材！君達と同じ道を辿る運命を俺達が変わえて、新しい人生を歩ませてあげよう！」

「巫山戯るな！」

円場アंकは激怒して火球を仮面男に目掛けて放つ。だが仮面男はヒラリとそれを避け、氷壁を踏み台として高く跳躍する。離れた所で着地すると、右耳に手を当て通信機を起動させた。

「開闢行動隊！目標回収達成だ！短い間だったがこれにて幕引き！！予定通り、この通信後5分以内に〃回収地点〃^{ワイルド}へ向かえ！」

通信を発した各場所に散らばっていた敵連合はそれを聞いて承諾する。そして、通信を終えた仮面男は、直ぐにその場から跳躍し、アंक達の前から姿を消した。

「ダメだ…!!」

「幕引き…だと!?させねえ!!絶対逃すな!!」

「チツ！逃してたまるか！」

火野を連れ去られた拳句、爆豪、増してや常闇までもが連れて行かれる。焦りと恐怖が募り、緑谷は顔を歪めると、轟が後を追おうと声を張り上げる。1番付近に居た円場アंकは強く舌打ちをして、追いかけてようとその場から跳躍する。

だが、次の瞬間。

「ツ!?!」

突然、宙を跳ぶその体の力が抜け落ちるように脱力感が襲う。体に全く力が入らず、アंकはその場から落下していく。

「ああ…消費し過ぎたか…:…:…」

ポセイドンの衝撃波でかなりセルメダルを落としてしまったアंक。その状態でセルメダルを消費してしまう火球の攻撃を何度かしてしまつた為に、動ける状態では無くなつてしまつていた。火野を取り戻そうと必死になつていたアंकはそれに気付かず、動かないその身を悔やみながら、地面へと落ちて行つたのだつた。

第9章 く神野区く

No. 88 敗北と病院

仮免許取得に向け「個性」の強化訓練を主体とした林間合宿。地獄のような訓練に勤んだ生徒達だが、その鞭には当然飴もあった。その内の1つで行われたA組とB組の合同による肝試し。

生徒達はその飴に有意義な時間を過ごす筈だったが、突如現れた敵^{サイラン}連合開闢行動隊。予期せぬ襲撃に、困惑するヒーロー、生徒達。だが、それぞれの行動と起点によって甚大な被害は出さずにそれは治った…と、思っていたが。

結果は完全敗北。

騒動の最中、ブラドキングの通報によって敵があの森から去った15分後、救急、消防隊が到着した。生徒40名の内、敵の1人、個性^{サイラン}によるガスによって意識不明の重体15名。重・軽症者10名。無傷で済んだのは13名だった。

そして…行方不明2名。

プロヒーローは6名の内、1名が頭を強く打たれ重体。1名が大量の血痕を残して行方不明となっていた。一方、敵側は3名の現行犯逮捕。彼らを残し、他の敵は跡形も無く姿を消した。1年A組、B組による林間合宿は、最悪の結果でその幕を閉じたのだった。

その翌日、夏休みに入っていた雄英高校は生徒達が不在の為に校内は魂の抜け去ったように静まり返っていた。だが、その校門の外は校内とは裏腹に騒めきと困惑を隠さずにマスコミメディアの集団で騒いでいた。万全を期すと宣言をしていた矢先に林間合宿の襲撃に会い、怪我をした生徒、2人も行方不明になった事に、世間は事情を聴こうと計画した雄英に押し寄せて来ていたのだろう。

その騒動が校門前で起きている中、先日の事件を議題に招集された雄英教師達が、会議室で緊急会議が行われていた。

「敵との戦闘に備える為の合宿で襲来……。恥を承知でのたまおう。」
「敵の活性化の恐れ」……という我々の認識が甘すぎた。奴らは既に戦争を始めていた。ヒーロー社会を壊す戦争をさ」

根津の言葉に室内の空気は重々しく深刻だった。今回の合宿は一部の人間しか知らされていない学校行事。最小限にしか伝えていない。これなら大丈夫だろうと思っていた矢先に事件は起きた。教師としてこれ以上不甲斐無い事が起きてしまった今回の事件。

「認識できていたとしても防げていたかどうか……。これ程執拗で矢継ぎ早な展開……。『オールマイト』以降、組織立った犯罪はほぼ淘汰されてきましたからね……」

「要は知らず知らずの内に、平和ボケしてたんだ俺ら。『備える時間がある』。つっ—認識だった時点で」

両サイド、向かい合わせで座っているミッドナイト、プレゼントマイクが教師として受け止める議題に反省と指摘をする。すると、ミッドナイトの隣に座っているトゥルーフォームのオールマイト。その顔は他の教師達よりも深刻な表情だった。今にも突っ伏してしまいうような顔で俯いており、その口を悔し気に開いた。

「己の不甲斐なさに心底腹が立つ……。彼ら在必死で戦っていた頃、私は……。半身浴に興じていた……。っ!!」

敵^{サイラン}連合、少なくともその統括であろう存在、死柄木はオールマイトを殺す事が目的なのは把握している。今回の合宿に同行しなかったのはオールマイトが居るとなると敵^{サイラン}連合は確実に何処からか情報を得て殺しに襲撃してくるだろうと判断し、敢えてオールマイトは参加しなかった。無論参加しないとは言っても、敵^{サイラン}が襲つて来るかもしれないのを頭に入れて、休日を過ごしていた。が、その連絡が来るまで呑気に休みを過ごしていた事に彼は悲観的になっている、

「襲撃の直後に体育祭を行う等……。今までの『屈さぬ姿勢』はもう取れません。生徒の拉致、雄英最大の失態だ。奴らは火野と爆豪、同時に我々ヒーローへの信頼も奪ったんだ」

今更自分を責めた所で事実からは逃れられない。スナイプは遠回しにソレをオールマイトに突きつけ、現状の話を戻すと根津は今朝の

新聞紙を取り出して広げた。

「現にメディアは雄英の非難でもちきりさ。爆豪君を狙ったのも恐らく体育祭で彼の粗暴な面が少なからず周知されていたからだね。もし彼が敵サイランに懐柔されでもしたら教育機関としての雄英はお終いだ」

根津の取り出した新聞の記事には、大きく『雄英大失態』と題名が記載されており、囚われた爆豪の話題が大きく載せられている。爆豪の気性の荒さも体育祭でメディアに知られているので、敵サイランに寝返つてもおかしくはない。そう書かれていた。

「火野君も…、彼のオーズは予測変換する多彩な「個性」だから、敵サイランに目を付けられたのかもしれないですね…。敵にもオーズの力を持つ人も居るし、もしかして何か関係が……」

「……可能性はある。だが、彼は心当たりが無いと言っていた。彼自身のオーズの「個性」は警察でも調査済みだから黒では無い筈だ。それに火野少年は根っからの優しい性格の持ち主だ。強制的に連れて行かれたとしても敵側サイランに就く事など、それこそ有り得ない話だね」

ミッドナイトの異論に落ち込んでいたオールマイトが応える。彼の事情は警部の塚内と事情は把握しており、ヴィランオーズとの関係もオール・フォー・ワン絡みだと推測している。先ず持って火野はそんな男では無いと主張すると、ふと、プレゼントマイクが「まあ…」と口を挟んで来た。

「信頼云々って事でこの際言わせてもらおうがよ…。今回で決定的になつたぜ。いるだろ、内通者」

その言葉に会議室は重い空気が響めく。それをお構い無しにプレゼントマイクは続けて口を開き、声を張り上げた。

「合宿先は教師陣とプッシュキャッツしか知らなかった！怪しいのはこれだけじゃねえ！ケータイの位置情報なり使えば生徒にだつてー……」

「マイク、やめてよ」

「やめてたまるか！洗おうぜ、この際ってー的に!!」

そんな訳が無いと言わんばかりに、顔を曇らせながらミッドナイト

はプレゼントマイクを宥めようとするが、プレゼントマイクは怒りで冷静さを失っているのか、他の教師達を見渡しながら声を荒げて訴える。

「お前は自分100%シロという証拠を出せるか？この者をシロだと断言出来るか？」

プレゼントマイクの隣に座っていたスナイプが割り入り、その発言を撤回しようとする意義を話す。

「お互い疑心暗鬼となり内側から崩壊していく。内通者探しは焦って行うべきじゃない」

無論、内通者は全員が思っていた事。誰も疑わなかった訳ではないが、同じ雄英の職員として、表では誰も疑いたく無い問題だった。所謂社会人に於けるセンシティブな問題だからだ。スナイプの言葉は正論なのか、プレゼントマイクは「Umm…」と口籠もり、言い返せなくなっていると、根津は落ち着いた様子で口を開く。

「少なくとも私は君達を信頼してる。その私がシロだとも証明しきれないワケだが。とりあえず学校として行わなければならないのは生徒の安全保障さ。内通者の件もふまえ…、かねてより考えていた事があるんだ。それは…」

『でーんーわーがーー来た！』

何かを提案しようとした直後、オールマイトの音がオールマイト本人のポケットから鳴り出した。何事かと教師達はオールマイトを見遣ると、オールマイトは慌ててポケットから携帯を取り出していた。どうやら、自分の声を録音した着信音らしい。

「すみません、電話が」

「会議中っスよ！電源切つときましょーよー！」

そそくさに席を立ち、申し訳無さそうに言いながら部屋から出ようとするオールマイトにマイクはキレ気味に声をかける。そして、ミッドナイトとスナイプはその着信音を聞いて、心の奥底でダサイと思っていたが、それを口にするのは失礼なのか無言で彼を見送っていた。

会議室を出たオールマイトは小さく溜め息を吐く。それは何も出来なかった自分を悔やんでいたからだ。教え子すら救けられず…何

が平和の象徴か…何がヒーローか…！オールライトは悔しさと怒りに体を震わせていた。

雄英の教師となって間も無い期間に、^{サイラン}敵の襲撃が相次いで起きている上に、その敵の目的は平和の象徴、オールライトを殺す事。雄英から遠ざかってしまえば雄英には危害は最小限になると最初は考えていたが、この学校で生活している内にその考えはプツンと途絶えていた。故に、現在狙われてしまった生徒が出て来てしまっている。甘い考えが仇となってしまったと悔やんでも悔やみ切れない気持ちの最中、

鳴り止まぬ着信音にオールライトは、気持ちが悪くないまま、携帯を耳に当てた。ふと、画面を見ると宛先は塚内からだった。

「………すまん、何だい塚内君」

『今レイザーヘッドとブラドキングから調書を取っていたんだが、思わぬ進展があったぞ！^{サイラン}敵連合の居場所、突き止められるかもしれない！』

「！」

予想外で思わぬその発言に、曇っていたオールライトの顔は一気に希望を取り戻した表情へと変わる。通話越しでも驚いた様子がわかったのか、塚内は笑みを浮かべてそのまま事情を説明した。

『2週間程前、顔中ツギハギの男がテナントの入っていないハズのビルに入っていった』という情報を入手していた。20代くらいだというので過去の犯罪者を焦ってみるも目ぼしい者はいない。又、ビルの所有者に確認したところいわゆる隠れ家的なバーがちゃんと入っているという話だった為、捜査に無関係だと流していたんだが、今回生徒を攫った敵の一人と特徴が合致した！事態が事態だ、裏が取れ次第すぐにカチ込む！これは極秘事項、君だから話してる！今回の救出・掃討作戦、君の力も貸してくれ！』

「……………」

事細かく説明してくれた塚内。だが、何も応えない彼に『オールライト？』と塚内は声を掛けると、オールライトは深く息を吐いて口を開いた。

「………私は…、素晴らしい友を持った……」

悔やんでいた無念を晴らしてくれるかのような提案にオールマイトの顔は徐々にやる気に満ち溢れた表情へと変わる。

ああ、本当に素晴らしい友を持った…。

オールマイトは全身に力を入れる。その体からは蒸気が放たれ、筋骨隆々のマツスルフォームへと変わった。囚われた生徒、そして可愛い教え子達に牙を向いた敵に報い^{サイラン}を晴らすべくと、覚悟の眼をした笑顔で彼はこう言った。

「奴らに会ったらこう言つてやるぜ…、私が反撃に来たつてね」

☆☆☆☆☆☆

事件から2日後、軽・重症を負った生徒達は直ぐに合宿近くにある病院に搬送されていた。軽症者は軽い手当をしてそのまま直ぐに帰宅出来たのだが、重症者は病院でそのまま入院となっている。

その重症者の1人、緑谷もまた、病室で寝たきりとなっていた。全身包帯を巻かれ、バキバキに折れた両腕はかなり大きめのギブスが付けられている。

「……」

かなりの重症で、気絶と悶絶、それに加えて高熱で魘されやつと治った緑谷は、目が覚めて病院の天井を死んだ魚のように、茫然と只々見つめていた。ふと、隣の机に綺麗にカットされたりんごが置いてある事に気付く。そこには『起きたら食べて連絡下さい』と置き手紙があった。それは間違いなく母親の字。それを見た緑谷はふと、ショッピングモールの事件で警察に赴き、迎えに来た母親の事を思い返していた。また心配させてしまったと。

だが、それも一瞬で、緑谷は再び天井を見つめる。母親の心配よりも、救けた洗太の事を思い出す。

「……洗太君、無事かな……」

「あー緑谷!!目え覚めてんじやん」

「え?」

小さく呟く緑谷。すると、病室の扉が開かれた。そこには上鳴が立っており、「オハー」と気軽に挨拶をしながら入ると、その後ろからぞろぞろと大勢の人が入って来る。無傷・軽症で済んだA組生徒だった。

「テレビ見たか!?学校今マスコミでやべーぞ」

「春の時の比じゃねー」

「メロンあるぞ。皆で買ったんだ!」

上鳴、砂藤、高そうなメロンを掲げて喋る峰田を筆頭に皆は心配そうな表情で緑谷を見つめる。

「具合はどうだ?」

「迷惑をかけたな、緑谷……」

左腕に包帯を巻いた障子、軽く腕にガーゼを付けている常闇が声を掛ける。同時に、余程メロンを自慢したいのか「デカメロン!!」と峰田は言う。緑谷は生気を失っているような表情で口を開いた。

「何とか……。ううん……。僕の方こそ……。A組皆で来てくれたの?」

緑谷の言葉に、少し籠り気味で飯田が応えた。

「いや……。耳郎君、葉隠君は敵のワイランのガスによつて未だ意識が戻っていない。そして八百万君も頭を酷くやられ、ここに入院している。昨日一度意識が戻ったそう。だから来ているのはその3人を除いた……」

「……………14人だよ」

「爆豪と火野がいねえからな」

「ちよつ轟……」

黙り込む飯田の変わりに麗日がそう言うと、轟が掻い摘んで行方不明となった2人の名を出す。精神的にも肉体的にも1番酷くやられている緑谷にとってその言葉はタブーだと芦戸が声を掛ける。だがそれは同じ仲間として連れ去られた事にはA組全員も悔しい気持ちで一杯だからだ。轟の言葉を聞いた緑谷はハツとし、その黒ずんだ瞳

に白い気泡のような色が戻る。

「オールマイトがさ…、言ってたんだ。手の届かない場所には助けに行けない…って。だから手の届く範囲は必ず助け出すんだ…。僕は…手の届く場所に居た。必ず助けなきやいけなかった…！僕の「個性」は…その為の「個性」…なんだ。相澤先生の言った通りになつた…！体…動かなかつた…！」

あの事件は悪い夢ではない。現実の出来事なんだと、緑谷の死んでいた表情は徐々に感情を取り戻していく。救けられなかった悔しさ、無念が、満身創痍の体に突き刺さる。そして後悔が今になってぶり返して来た。

友に託され、置いて行ってしまった事…。

重症になった体のせいで、幼馴染が目の前で連れ去られてしまった事…。

悔やんでも悔やみ切れないその表情を表に出す緑谷。すると、切島が突然緑谷に声を掛けた。

「じゃあ今度は助けよう」

突如、あつさりと告げられた一言に、緑谷と病室にいる一同は言葉の意味を取り損ねる。「「へ!?!」」と呆気にとられた生徒達は反応し、切島の隣にいた轟は寡黙に佇んでいた。

「実は俺と…轟さ、昨日も来ててよオ」

切島は昨日の出来事を語り出す。極力用が無い限り自宅から出るなど言われた生徒達だが、切島はジツとしていられなかったようで、病院に足を運んだらしく、偶然にも受付で同じ理由で轟と合流したらしい。お見舞いに向かおうと病院の通路を歩いていた際、八百万の病室でオールマイトと警察が話している所に遭遇したようで、その会話を盗み聞きした。その時八百万とオールマイトは、こんな発言をしたそうだ。

『B組の泡瀬さんに協力頂き敵の1人に発信機を取り付けました。こ

れが信号を受信するデバイスです。捜査にお使ください」

『この前相澤くんは君を“咄嗟の判断力に欠ける”と評していた。素晴らしい成長だ！ありがとう、八百万少女！』

『級友の危機に…、こんな形でしか協力できず…悔しいです』

『その気持ちこそ君がヒーローたりうる証だよ。後は私達に任せなさい！』

「…つまりその、信号デバイスを…、八百万君に創ってもらおう…と？」

内容を聞き、それを掻い摘んで飯田が確認を取ると、緊迫感で顔を強ばらせる切島は無言で頷く。それを見た飯田は、保須事件で体験先に迷惑をかけたことを思い返す。その瞬間、声を荒げた。

「オールマイトの仰る通りだ、プロに任せるべき案件だ！生徒おれたちの出たい舞台ではないんだ馬鹿者!!」

「んなもんわかってるよ!!でもさア！何つも出来なかったんだ!!ダチが狙われてるって聞いてさア！なんつっても出来なかった！しなかった!!」

期末テストで赤点を取った切島は、補修の為に肝試しの時に施設に残っていた。強制的にその場から動けなかったので、マンダレイのテレパスが発信された際はどうする事も出来なかった。その時の後悔と悔しさが溢れ出て飯田の言葉に反発してしまっている。

「ここで動けなきゃ俺ア！ヒーローでも男でもなくなっちゃうんだよ!!」

「切島落ち着けよ病院だぞ?!こだわりは良いけどよ、今回は…」

「飯田ちゃんが正しいわ」

「飯田が、皆が正しいよ!!」

上鳴、蛙吹が声を張り上げている切島を宥めようと飯田の意見に賛同しながらそう言うと、切島は自分の言ってる事は違うと一旦区切り、「なア緑谷!!」と緑谷に振り返る。

「まだ手は、届くんだよ!!」

緑谷に手を差し伸ばし、力強い言葉が病室に響き渡る。愕然と緊張

感が漂う病室。その中、芦戸が戸惑うように切島の言った言葉を整理しようとして口を開いた。

「つまり、ヤオモモから発信機のやつもらって、それ辿って…自分らで火野と爆豪の救出に行くってこと…!!?」

「敵は俺らを殺害対象と言いつつ、爆豪は殺さず攫った。火野も恐らく爆豪と同じで生かされるだろうが、殺されないといい切れねえ。俺と切島は行く」

無謀な事だと、学生の身だと重々承知している。保須事件の事もあってそれはやってはいけない事だとも把握していた。それでも、友が危険に晒されているのを黙って見過ごす訳にはいかない。揺るがないその決意を示す轟だが、同じ過ちを犯そうとするその轟の発言に飯田は激昂した。

「……ふっ、ふざけるのも大概にしたまえ!!」

「待て、落ち着け」

すると、障子が包帯を巻かれた左腕を出して飯田を宥める。激怒していた飯田はハツとし、息遣いが荒くなる呼吸を整えようとする中、障子が口を動かした。

「切島の『何も出来なかった』悔しさも、轟の『眼前で奪われた』悔しさもわかる。俺だって悔しい。だが、これは感情で動いていい話じゃない」

障子も目の前で連れ去られた事を根に持ち、その気持ちは表に出してはいないが、内心は相当悔やんでいる。彼の言う通り、ここで感情任せに行動してしまえば、下手をすればこの先の雄英生活や周りに支障をきたしてしまう。御尤もな意見に轟と切島は黙っていると、震えながら青山が口を開いた。

「オールマイトに任せようよ…。戦闘許可は解除されてるし。やれる事はやったよ…☆」

「青山の言う通りだ…。助けられてばかりだった俺には強く言えんが…」

便乗して常闇もそう言っていると、蛙吹が顎に人差し指を当てながら轟と切島、そして緑谷に言い放った。

「皆、火野ちゃんと爆豪ちゃんを攫われてショックなのよ。でも冷静になりましょう。どれ程正当な感情であろうと、また戦闘を行うというのならー、ルールを破るといふのなら、その行為は敵のそれと同じなのよ」

救済したい気持ちは皆同じ。だが、その場の感情に任せて動けば、犯罪人と同じよう、気持ちや感情で人を殺める、物を奪う、金を盗る。その言い分は正論で、皆の顔は徐々に曇っていた。すると、病室の扉がノックされる音が聞こえてくる。

「お話し中ごめんね。緑谷くんの診察時間なんだが…」

「い…行こか。耳郎とか葉隠の方も気になっし…」

緑谷の担当医の医者がそう言って入って来ると、邪魔になつてはいけないと瀬呂が苦笑しながらそう言って、A組一行はそろそろと病室から出て行く。飯田も出ていこうとすると、切島が小声で緑谷に話しかける声が耳に入る。

「八百万には昨日話をした。行くなら即行…、今晚だ。重傷のおめーが動けるかは知らねえ。それでも誘つてんのは、おめーが一番悔しいと思うからだ。今晚…病院前で待つ」

何を、どんなに言われようと、切島の誤った決意は曲がらなかった。危険な行動だと分かつて緑谷にその話を持ちかける。飯田はその場に立ち止まり、その目を大きく見開いていた。それを聞き終え、飯田はその場から出て行くと、緑谷は何か思い出したのか切島に声を掛けた。

「切島君…アंक君は来てないの…?」

林間合宿の時、アंकは円場に入ったままの状態に警察に保護されており、その後は入院していた為見かけていない。緑谷の言葉に、切島はバツが悪そうな素振りを見せて、口を開いた。

「実はよ、俺も轟も気になつて円場の病室行つただけだよ…。い…なかつたんだ」

「え…?」

☆☆☆☆☆☆

場所は変わり、ここは東京都三鷹市。

保須市の隣街で、かの大企業、鴻上ファウンデーションが聳え立つ街。その鴻上ファウンデーションの会長室に1人の男が現れていた。会長の机に座っている鴻上は、少々驚いた様子で、彼に話し掛ける。

「…ほう、君だけがここに来るとは珍しい。相方はどうしたんだね？
アंक君」

「…………お前らの手助けを申し込むのは尺だが、…頼みがある」

鴻上の目の前には、人型の姿をしたアंकが立っていた。その眼は、何かを決意したような瞳で、鴻上に向かって口を開いていたのだった。

A組の生徒達が病室から出て行った後、緑谷は健診の為、整形外科の別室へと連れて行かれた。両腕に付けられたギブスを取ると、担当医は緑谷のカルテを見ながら口を開いた。

「君が寝込んでいる間、リカバリーガールにかなり強めの治療を施してもらったから、動かせるとは思うが…、その腕を見れば分かると思うけどグチャグチャだったよ。この短期間で何度も大怪我をしてると思うけど、君ね、ぶっちゃけ今回は比にならん程重いよ」

ギブスをとった緑谷は両腕を見ながら目を見開き、同時に担当医の言葉に驚く。自由に動かせてはいるが、生々しい傷跡が残っており、若干骨格も変わっていた。その比にならないと聞いた緑谷は恐る恐る質問をする。

「比にならん…っていうのは…?」

「君の今までのカルテ、特別に借りただけど、毎度内側から爆竹が爆発したような壊れ方してんのね」

担当医がそう言っていると、看護師が緑谷の両腕に包帯を巻き直し始める。「どうも…」と緑谷は小声で会釈をすると、担当医は続けて説明をし始めた。

「で、今回は特に酷いのよ。人の体って普段は80%程度のパワーしか出せないようリミッター掛かってんのね。でも危機的状况に陥った時、リミッターを外して100%出せちゃう事あるのよ。『火事場の馬鹿力』ってやつ。リミッターがあるって事は、それ体の負荷が耐えられないからってことよね?今回の君は恐らくその『馬鹿力』の状態でパワーが噴出…:…しかも長時間続いた」

担当医の言葉に緑谷は俯く。ワン・フォー・オールの力を受け継いだ緑谷はオールマイトが言っていたように、受け継がれたと言えど、器が儘ならなければ負荷に耐え切れず、四肢が爆散してしまう力。そのパワーを抑えようと5%のフルカウルを習得したのだが、目の前で襲われそうになった洗太の為に100%を何度も使ってしまった。

緑谷は申し訳なきように腕を摩ると、担当医は続けて口を動かす。

「骨、筋肉がボロボロなのがマズイが…何より靭帯ね。靭帯は関節を保持するところ…、そこが酷く劣化している。つまりね、あと…どうだろう、一、二、三度が…同じような怪我が続けば、腕の使えない生活になると思っというて」

それを聞いた瞬間、緑谷は愕然とした。今まではリカバリーガールに治してもらい続けて来たが、今回は今までの積み重なったダメージが耐え切れなくなって靭帯に影響が出てしまっている。治して貰えると、心のどこかで思っていたその感情が今ぶち壊された気分になっってしまう緑谷。

二元に戻すには、リハビリあるのみ。痛くてもガンガン使ってって、後のことは地元…雄英の方に任せることになっているから…。ここで今日は退院ね。リカバリーさん呆れてたよ…。きつと沢山怒られてきたんだろね」

体育祭を期に、もう金輪際、こんな怪我は治癒出来ないと言われたのにも関わらず、やってしまった事を思い出す緑谷。申し訳なきように途方に暮れていると担当医は胸ポケットから一枚の手紙を取り出す。

「ただ、君に救けられた人間はいる。病は気から…あんま思い悩まず前向きにね…」

広げられた手紙、そこにはひらがなで感謝の文が書かれていた。宛先は、敵から救け出した洗太からだ。緑谷は受け取り、その文を読むと、グツと歯に力を入れていたのだった。

☆☆☆☆

退院と言われた緑谷は、母親が持って来てくれた私服に着替え、病室のベッドの布団を綺麗に畳んでいた。すると、扉からノックの音が聞こえ、「はい？」と緑谷は返事をする。ドアが開かれると、そこには耳郎が立っていた。

「耳郎さん!？」

「……おつす、緑谷……具合どう?」

「僕は大丈夫だけど、耳郎さんの方こそ大丈夫なの!？」

バツが悪そうに返事をする耳郎に、緑谷は慌てて駆け寄る。

「何とかね……葉隠はまだ意識戻ってないんだけど……それより、話があるんだ」

敵のガスの影響で昏睡状態になっていた耳郎と葉隠。「良かった……^{ヴァイラン}と呟く緑谷に、耳郎は真剣な目付きで、その話を持ち掛けた。

☆☆☆☆☆☆

一方その頃、鴻上ファウンデーションに訪れたアंकは、会長室のソファアに腰掛け、用意されていたセルメダルをその腕に呑み込むように入れていた。それを見ていた鴻上が口を開く。

「アंक君、我が社にとってセルメダルは大変貴重な代物でね。あまり使い過ぎるのもよろしくないのだが……」

「ハッ、俺達に協力がどうか言ってなかったか?コレも協力の一環だと思っとけ」

「ふむ……。では、前借りと言う形で、そのセルメダルは提供しよう」「あ……!?……チツ、相変わらず器の狭い野郎だなあ」

保須の一件で大量に出現したヤミーを倒し、そのセルメダルは全て鴻上ファウンデーションが研究材料として回収していた為、かなりの量が保管されているが、それ以来はヤミーの目撃情報は全く無いので、それからは収穫をしていないのだ。バースの実験がたらに消費している為、鴻上の表情を見る限り使うのは少々嫌がられている。

文句を垂れ流しながら、アंकはある程度セルメダルを補充し終わると、本題の話を持ち掛けた。

「で、さっきの話だが……」

「火野さんの中にアंकさんと同じグリードが生まれたのはびっくりですね……」

「……………」

鴻上の隣に立っていた里中が、林間合宿の事情を聞いて驚いていた。普段は冷静な素振りを振る舞っているが、火野のオーズの力に加えてグリードが増えるとなるとある意味オーズの力の代償のような捉え方として認識出来る。ふと、鴻上は無言で里中の言葉を聞いていたと思いきや、突然静かに笑い出し、バツと椅子から立ち上がった。

「ンンン素晴らしい!!アंकというグリードが生まれながらも新しいグリードが誕生した!!昆虫をモチーフとしたウヴァ!!新たな命の誕生だよ!!ハッピーバースデイイイアツ!!」

相変わらずのテンションの鴻上に、バンツ!と机を叩いて立ち上がり、アंकは激昂した。

「祝ってる場合か!!そのせいで映司が攫われたんだぞ!おまけにコアメダルも殆ど持ってかれてこっちはドン底に墮とされたような最悪の気分なんだよ!」

「そんなに怒らなくても……」

「黙れ女狐!」

「…会長、アंकさんが消費したセルメダルの利子を20%追加しといてください」

それを見た里中が、若干ほくそ笑むようにボソツと呟くと、聞こえていたのか吠えるアंक。だが、スンとした里中が会長に嫌味を言うように言伝を伝えると、アंकは「ンなっ!」と声を漏らしていたが、話が逸れている事にハツとし、アंकは鴻上に声を掛ける。

「……………おい、さっさと敵^{サイラン}連合らを探して映司を連れ戻すぞ。お前らのこのサポートアイテムとかいう会社なら、そういう搜索とかも出来る道具があるんじゃないのか?」

「生憎ですが、人を探するようなアイテムは我が社で作られていません。それに、個人の会社で勝手に行動すれば、それこそ問題になりますので」

「フン、お得意の『個性』を使えば良いだろ」

鴻上の『個性』『権限』は、発したその宣言通りの世界の基準として認識されるが、そのリスクは私生活でテンションが常時ハイになる事。発令した権限の内容が大きければ大きい程、下手をすれば命に関わってしまう『個性』だ。簡単に言うアंकに里中は「無茶を言わないでください」とキレ気味に言う。すると、会長室の扉が勢いよく開かれる。そこに立っているのは伊達明だった。

「会長……ってアレ!?アंकコじゃん!何でここにいんの?」

「アंकだ!……クソ、まアちようどいい、伊達。映司を探すの手伝え」
相変わらずの呼び名にいい加減呆れてしまうアंकだが、バースの力が使える伊達に要件を上から目線で言うのと、伊達は「あく」と口を開いた。

「良いよっ」

「……?やけに素直だな?」

「ちよつと伊達さん、個人での搜索は上部の人に怒られますー」

「まあまあまあ、里中ちゃん。俺がそんな単純な男に見える?」

「見えます」

「はい即答……相変わらず酷いねえ……」

さざらつと了承する伊達にあっけからんとなったアंक。里中の毒舌に落ち込みながらも、伊達は了承した理由を応えた。

「ちようど今、その件に関しての依頼が来たのよ、警察の人から。……」

火野の奴、サイラン敵に攫われちまったんだろ?」

「ほお!伊達君、詳しく聞かせたまえ」

伊達の報告に、興味深そうにニヤリと笑う鴻上は要件を聞こうとそう言ったのだった。

そして、その夜。

場所は変わり、緑谷達が入院していた病院の外で爆豪達を救出するべく、集まった轟と切島。約束の時刻となった時間に、切島がボソツと呟いた。

「八百万……考えさせてくれつつつてくれた……。どうだろうな……」

「まあ、いくら逸つても結局あいつ次第……」

発信機を取り付けた八百万がついて来てくれれば、もう一つ発信機のデバイスを創つて、爆豪達がいる場所を特定出来る。今回の轟達の作戦に同行してもらえないかと八百万にも頼んではいるものの、それに参加してしまえば、もし学校や警察側にバレた時には今の人生が大きく変わってしまうかもしれない。それでも友を救けようと切島や轟は覚悟は決めていたが、結局の所、その感情で動くのは本人次第だ。互いはしばらく無言で待っていると、病院の自動ドアが開かれる。切島は「お、来た」と気付くが、その出てきたメンバーを見て、轟と切島は目を見開いた。

「緑谷……、っ!？」

「え、耳郎!？」

「………っす」

八百万とその後ろに緑谷。そして、昏睡状態だった筈の耳郎が私服に着替えて立っていた。驚愕する2人に耳郎は挨拶をすると、切島が直ぐに口を開いた。

「えっ!?!何で耳郎が……?!お前意識戻った!?!よ、良かったな!」

「う、うん……」

「耳郎、お前がここに居るって事は……そうなんだな?」

驚く切島に対して、この場にいるという事は、そういうことだと理解した轟が聞くと、耳郎はコクリと頷く。

少し時間は遡り、病室で緑谷と会った耳郎は、彼にこう話していた。

『意識が戻った時、隣の部屋がヤオモモの病室だったんだけど……ウチ

の「個性」で聴いた…。ヤオモモと轟、切島の会話…全部……………ウチも行く」

『耳郎さん……………でもー』

『行っちゃいけない事はわかってる。でも話を聞いた以上、ウチもジツとなんかしてらんないよ……………だから…お願い、緑谷…！』

真剣な眼差しで訴えてくる耳郎に、緑谷は何も言えなかった。自分も今からその過ちを犯しに向かうからだ。説得力のかけらも無い。緑谷はそのまま了承し、今現在、ここに連れて来たいという訳だ。轟の言葉に頷いた耳郎は、今の意思を伝えようと口を開く。

「ウチ、透と直ぐに意識無くなつてたけど…まさか敵が襲撃して来たなんて思つてなかつた…っ。ウチが倒れている間、クラスの皆は必死に戦つてたんだよね……………っ…！知らない間に…何も出来なかつた自分に…悔しいんだよ…！必死に火野が戦っている間に…ウチは…何も…!!」

「耳郎……………」

「ウチの「個性」があれば、火野と爆豪を直ぐに見つけられると思う…。だから……………！」

悔しきで涙ぐむ耳郎に、轟と切島は顔を顰める。自分の能力をアピールし、一緒に同行するようお願いしようとしたその時、切島達の背後から「待て」と声が聞こえる。振り返るとそこには、飯田が立っていた。

「飯田……………」

「……………何で、よりもよつて君達なんだ……………！」

飯田のその言葉は、轟と緑谷に向けられていた。2人は黙って飯田を見つめていると、飯田は震えながらもその口を開く。

「俺の私的暴走を咎めてくれた……………、共に特赦を受けた筈の君達2人が…っ!!何で俺と同じ過ちを犯そうとしている!?!あんまりじゃないか……………」

「何の話をしてるんだよ…」

保須の一件、ヒーロー殺しに復讐しようと感情的に動いた飯田を止

めてくれた轟と緑谷が、この場所にいる。それはもう、今から爆豪達を救けに行こうと集まっていたからだ。切島の誘いの声を聞いた飯田は、止めようとここに来たのだろう。保須事件の詳細を知らない切島は聞こうと尋ねるが、無言で轟が彼の肩に手を置き、それを止めた。「俺達はまだ保護下にいる。ただでさえ雄英が大変な時だぞ。君らの行動の責任は誰が取るのかわかってるのか!？」

「飯田君、違うんだよ。僕らだってルールを破っていいなんて……」

俯きながら言い続ける飯田に、緑谷は近寄りそう言うが、それは言い訳に過ぎなかった。飯田はプルプルと拳を震わせていた、その次の瞬間。

ゴチツ！と鈍い音が響く。震わせていた拳を、緑谷の頬目掛けて飯田が殴ったのだ。驚愕するメンバー、それを無視して、飯田は感情的になって緑谷を叱責する。

「俺だって悔しいさ!!心配さ!!当然だ!!俺は学級委員長だ!クラスメイトを心配するんだ!!爆豪君、火野君だけじゃない!!君の怪我を見て、床に伏せる兄の姿を重ねた!!君達が暴走した挙句、僕の心配はどうなってもいいって言うのか!!」

兄のように、これ以上、大事な仲間が傷付くのは沢山だ。無謀な真似をする彼の行動に怒り、そしてそれは悲しみへと変わり、飯田はそつと緑谷の両肩に手を置いた。

「僕の気持ちは……!どうでもいいって言うのか……!」

「飯田君……」

「飯田」

友達を悲しませる事はしたくなかった緑谷は、それでも説得しようとその口を開く。だが、それに割入るよう、轟が口を動かした。

「俺達だって何も正面切ってカチ込む気なんざねえよ」

「……!?!」

「戦闘無しで救け出す」

その言葉に飯田は何を言ってるんだと言わんばかりの表情で驚愕する。すると、切島が後を説明するように言った。

「要は隠密活動!!それが俺ら卵の出来る……ルールにギリ触れねえ戦い

方だろツ」

「なら、ウチの『個性』が必要だね」

戦闘せずに救う事が出来れば、処罰を降される可能性は低い。轟と考えたその意気込みを、漢らしく切島が発言すると、耳郎が耳朶のプラグを指に回しながら自身気にそう言う。

「……………私は、轟さんを信頼しています…が!!万が一を考え私がストップパーとなれるよう…、同行するつもりで参りました」

「八百万君!?!」

「八百万!」

「ヤオモモ…!」

黙っていた八百万から、まさかの同行すると聞いて飯田は驚き、切島と耳郎は嬉しくなって笑顔を見せる。緑谷もまた、八百万に便乗して口を動かした。

「僕も…、自分でもわからないんだ…。手が届くと言われて…、いてもたってもいられなくなつて…救いたいと思っちゃうんだ」

かのトップヒーローは、学生時から逸話を残している。彼らの多くが話をこう結ぶ。

『考えるよりも先に体が動いていた!』と。

緑谷の真つ直ぐな瞳、その揺るがぬ想いに飯田は「平行線か…」と息を整えながら呟き、そして、覚悟を決めた表情で飯田は口を開いた。

「……………ならば、ーっ……………俺も連れて行け」

「[[[[[?]]]]」

☆☆☆☆

鴻上ファウンデーションにて、塚内警部からの敵^{サイラン}連合掃討、及び爆豪、火野救出作戦の要請を承諾した鴻上は、伊達を向かわせようとする指しを出した。伊達はセルメダルが大量に入ったミルク缶を背負い、ア

ンクに声をかける。

「アンコー、準備出来たか？」

「…アंकだ、俺はいつでもいいぞ」

「お前は火野の『個性』だから戦闘には参加出来ない。あくまで救出のサポートだ、忘れんなよ？」

伊達の言葉にアंकは「フン」と鼻を鳴らしてそっぽを向く。今回の作戦にアंकも特例として参加する事になったのだが、『個性』手続きではアंकは火野の『個性』と認識されている為、アंकが戦えば、火野が『個性』を使用してしまう事になってしまう。無論、それを聞いて納得の行かないアंकは鴻上の権限に頼ろうとしたが、「今後私の『個性』を使うなら、ヤミーを倒した暁にセルメダルを60%を支払いたまえ」と要求されたのだ。前世でも似たような台詞に踏まえて狡賢いその要求に、アंकは不服そうに断っていた。よって仕方なく、出来るだけサポートに回ると了承したわけだ。

準備が整った伊達の後を追おうとアंकも一歩踏み出す。すると、里中が声を掛ける。

「アंकさん、真木博士からのお預かり物です」

「あ？」

差し出された黒い箱をアंकは疑問を抱きながら受け取り、さっそく中身を開ける。すると、そこにはなんとコアメダルが3枚入っていた。だが、アंकはその見たことが無いコアメダルを見て目を見開いている。左から順番に、『カンガルー、パンダ、ヤドカリ』と、造形が模されたコアメダルを見て、アंकは口を開いた。

「何だ、このメダル…？」

「以前後藤さんが、I・アイランドから持ち帰った黒いコアメダルを元に、独自で開発された人造のコアメダル…らしいです。研究材料の報酬として受け取って下さいと、真木博士が」

「…：ほお、感情無さそうなあの男も、偶には気の利いた事をしてくれるなあ」

どうやら、I・アイランドを襲撃したテロ組織の1人、オルカがウオルフラムから譲り受けた甲殻類の黒いコアメダルを、後藤は持ち帰

り、それを真木に渡したようだ。里中の言う通り、人造で造られたコアメダルを元に、新しいコアメダルを作り出す事に成功したのだから。

アंकはニヤリと笑い、その中から3枚のコアメダルだけを取り、黒い箱はその場でポイッと投げ捨てる。それを見て里中は顔を顰めているが、アंकは無視をしてその場を後にし、伊達を追っていったのだった。

☆☆☆☆

耳郎、八百万、そして飯田も同行する事になった緑谷一行は病院を出て、駅へ向かおうと歩き出した。その道中、飯田が申し訳なさそうに緑谷に声を掛けた。

「暴力を振るってしまった事…陳謝する。ごめん…」

「本当ですわ飯田さん。同行する理由に対し、説得力が欠けてしまいます」

「だっ大丈夫だよ、気にしてないから」

殴ったのにも関わらず、一緒に着いて行くと矛盾を言い出した飯田の行動に対して八百万が呆れていると、緑谷は両掌を差し出してフオーする。

すると、八百万の言葉に対して飯田は同行する意思を話した。

「俺は…君達の行動に納得いかないからこそ同行する。少しでも戦闘の可能性を匂わせれば即座に引き戻すからな…！言わば監視者…そうウオッチマン！」

「メンじゃねえのか？」

「manは単体、menは複数って意味だよ」

「複数…あー、成る程な！」

「ウォッチマン飯田…」

監視をする男と意味で飯田は緑谷に指を指すと、切島が疑問を口に、耳郎がそれに応える。切島は納得していると、ボソツと轟が隣で呟いていた。

「私もですわ。ウォッチマン八百万ですわ」

「お、2人ならメンじゃねーか？」

「ウォッチメン飯田と八百万…」

すると、八百万も便乗してそう言いながらポケットから携帯端末機らしき物を取り出す。2人揃えばメンになると思った切島が言うのと、轟はまたもボソツと呟く。それを聞いた耳郎は面白かったのか「ブツツ」と吹き出していた。八百万は恥ずかしくなったのか、「コホン！」と咳払いをして注目を集め、口を動かした。

「これはプロの仕事。側から見ればあなた方が出張の必要性は一切ありません。しかしお気持ちがよくわかるからこそその妥協案という事、お忘れなきよう」

端末機の正体は発信機を追う為の受信デバイス。それを見た切島は「おおつ」とやる気を見せ、皆の顔に不敵な笑みを見せる。だが、八百万は思っていた。戦闘皆無の救出など現実的ではなく、この場にいる愚か者達^{メン}が冷静になれていない事を自覚していないと承知していた。その現実という名の現場を見れば、非現実的発想に、気付く筈だと、八百万は信じて緑谷の後を追った。

「…結局、アंक見当たらなかったな」

「ああ…まさかあいつ、1人で行ったんじゃないか…？」

「えっ？轟、どういう事？」

ふと、ボソツと切島に声を掛ける轟。切島も何となく勘付いていたのかそう応えると、何も事情を知らない耳郎が反応する。

「襲撃された時、火野と逸れちまったみたいだよ。意識を失ってたB組の円場ん中に入って行動してたんだけど、途中で逸れちまったんだ…」

「B組の奴らもガスで意識失って病院に搬送されたけどよ、その円場の中にアंकが居なかったんだ。ほら、アंकって火野の中いたら右

腕が変わってたろ？でも病室に居た円場の腕変わってなかったからよ……」

アंकが他人に憑依すれば、髪型も変わるし、見た目もそうだが、1番の特徴はその右腕がアंकの右腕となる。病室に昏睡状態となっていた円場の見た目は何も変わっていなかった。あの場に居なかったと轟と切島は推測していた。それを聞いた耳郎は、目を見開くと、俯きながら口を開く。

「……アंकにとつて火野は多分、凄い大事な存在だと思う。…アイツもきつと、ジツとしてられなかったんだよ……」

「…そうだな、友を大事にする気持ちは痛い程分かるぜ……！だけど1人で敵の^{ツイラン}ところ行くのは無謀過ぎるぞ!？」

「なら、早く行かないと……！こつちが早く行けば、アंकと合流出来ると思うつ。アंकつて結構冷静な奴だから、無謀な事はしない筈だから」

耳郎の言葉に、切島は「だなー」と拳を作る。ふと、それを見ていた轟が、耳郎に声を掛けた。

「…耳郎、お前火野こと好きなんだな」

「HE?」

突然、あつさりと言い放ったその言葉に、理解が追いつけずキョトンとする耳郎。だが、次第にその発言が脳内に響き渡り、耳郎の顔が一気に真っ赤になった。

「……は？……え!?うえつ!?えええつ!?ととととととツ!!突然何言い出すんだよ轟!?!」

挙動不審になって慌てて両腕をブンブンと振るい、真っ赤になる顔を隠そうとする耳郎。ポカンと見守る切島の隣で、轟は「いや……」と頬を指で掻きながら口を動かした。

「こんなの言うの……恥ずかしいんだけどよ……俺も火野を友達と思ってるから……心配になる気持ち……俺にも分かるぜ……」

「へ………あ……あ……あ………そうだね……！そうだよ……！うん……！（イケメンの発言怖ええ……!）」

友達として好きだから心配してる。そう捉えていた轟の発言に、理

解した耳郎は、変に勘違いしてしまったと更に顔を赤く染めていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

死柄木らが潜む都内の闇密かに立つバー。ライラン敵連合が集まったその部屋に、拘束具で縛られて椅子に座っている爆豪に、死柄木は声をかけた。

「早速だが…ヒーロー志望の爆豪君。火野映司彼と同じように、俺らの仲間にならないか？」

カウンターには黒霧、トガ、死柄木。部屋の隅には荼毘、スピナー、マグネ、仮面男の“Mr.コンプレス”。中央に立つトウワイス、脇真音姉弟。そして、カウンター席に座って爆豪を不敵な笑みで見つめる火野映司事、ウヴァ。ライラン敵側に居てはいけない存在が居る中、死柄木の誘いの言葉に爆豪は脂汗を流しながら、不敵に笑いながら、こう言い放った。

「寝言は寝て死ね…！」

No. 90 バカとプロと作戦開始

爆豪と火野が連れ戻そうと無謀な奪還作戦を決行した緑谷達。
ヴィラン敵連合が居ると思われる場所へ、向かうべく、駅に到着したメン
バー。すると、八百万が向かう先の詳細を説明する。

「いいですか？ 発信機の示した座標は、神奈川県横浜市神野区。長野
からの出発ですので約2時間…、10時頃の到着です」

それを聞いて皆は同意すると、さっそく新幹線へと乗り込む。席へ
座り、新幹線が動き出した数分後、緑谷が向かい合わせで座って、弁
当を食べている轟達に声を掛けた。因みに、緑谷の隣は飯田。4人が
座っている反対側の席には、八百万と耳郎が向かい合わせとなつて
座っている。

「あの…この出発とか詳細って皆に伝えてるの？」

「ああ。言ったら余計止められたけどな」

「その後、麗日がダメ押しでキチい事言ってくれたぜ」

「麗日さんが？」

切島の言葉に緑谷が反応する。麗日はこう言ったそうだ。

『火野君はともかく…爆豪君、きつと…皆に救けられんの屈辱なん
と違うかな……』

それを聞いた緑谷は目の前で爆豪を連れて行かれそうになり、必死
に手を伸ばした時の彼の言葉を思い出す。

『来んな、デク』と。

自尊心、プライドの塊の爆豪にとって、今助けに行った所で、それ
はきつと彼の望んでいる事では無い。深刻な表情で目を見開いてい
る緑谷を見て、轟は弁当を食べながら口を動かした。

「一応聞いとく。俺達のやろうとしてる事は、誰からも認められねえ
エゴって奴だ。引き返すならまだ間に合うぞ」

「迷うくらいならそもそも言わねえ！ あいつらは敵のいいようにされ
ヴィランていいタマじゃねえんだ…！」

「ウチも切島と同じだよ。絶対に爆豪も、火野も連れ戻す…！」

漢らしく切島はその想いを曲げずに覚悟を言い放ち、耳郎もそれに頷く。監視役の飯田と八百万はおかしな行動を止めるべく参加したので、何も応えず黙っていると、緑谷は小さな声で「僕は…」と口を開いた。

「後戻りなんてできない」

オールマイトから授かった「個性」。彼が見初めてくれた以上、誰かを救える為に使いたい。例えそれが、望まれていない救いだつたとしても。緑谷も覚悟を決めて、そう応えたのだった。

☆☆☆☆☆☆

新幹線で移動する事2時間。緑谷達は駅から降り、しばらく歩くと、そこには夜の灯りが視界一杯に広がった街並みが目に映つた。

「着いた！神野区！」

「この街の何処かに潜んでんのか」

「人多い…！」

現在午後22時過ぎ。都会の街はこれからだと言わんばかりの人並みの多さに呆気を取られる緑谷達。

「さアどこだ、八百万！」と早速動き出そうとする切島。

「お待ち下さい！ここからは用心に用心を重ねませんと！！私達サイラン敵に顔を知られているんですよ！！」

御尤もな意見に切島は立ち止まる。このまま目的地に行つたとしても直ぐに見つかつて戦闘になる可能性は高い。八百万の言葉に、緑谷は「うん、オンミツだ」と言つて両手を交差して顔を隠そうとしていた。

「…しかしそれでは偵察もままならんな」

「場所が分かれば良いけど、もし見つかつた時がマズイよね…」

飯田と耳郎がそう言つて、どうしたものかとメンバーは考えると、

八百万が何かを見つけたのか指を指しながら口を開いた。

「そこで私、提案がありましたよ!？」

ソワソワと落ち着かない様子で言う八百万。その頬は、若干赤目らせていた。

☆☆☆☆

八百万が指した方向にあったのは、安い値段で売られているのに名を知れた名店、〃激安の王道 鈍器 大手（ドンキ・オオテ）〃だった。その入って数十分後、緑谷達は、普段見られないような可笑しい服装で出でくる。

「オツラア!!コツラア!!」

ワックスで逆撫でた髪、サングラスと付け髭を付けた緑谷は、チンピラのようなスーツを身に纏い、不慣れた怒号を張り上げる。すると、ツノのカチューシャを付け、不良少年のような格好をした切島がぎこちない態度の緑谷を指摘する。

「ちげえ。もつと顎をクイクイやんだよ」

「オツラア!」

「そーそー!」

「成る程、変装か」

2人のやり取りの横で、二色の髪色を隠すように黒のカツラを被り、ホストのような身なりをした轟が呟く。

轟の言う通り、八百万が提案したのは変装だ。身なりを変えれば、^{ヴィラン}敵に出会してもそう簡単にバレる確率は低いと判断した八百万に皆は同意して、普段の格好とはかけ離れた姿をしていた。ちなみに八百万は、セレブ嬢のようなドレスを纏い、サングラスを装着し、普段のポニーテールをポリュミーにワックスで整えていた。その手には、ワックスのスプレー缶を所持している。

一方で隣にいる耳郎も、切島みたく不良少女を模した黒と紫の力

ラーの上着、赤のスカートに黒のニーソックスを着用しており、金髪
のロン毛をカツラとして被っている。そして、飯田はワックスでオー
ルバックの髪型、サスペンダーのズボンにリボン結びのネクタイを着
こなし、どこかヤバイ店の客引きのような姿をしていた。

「夜の繁華街！子供が彷徨くと目立ちますものね！」

「確かに良い案だけども…皆主旨がバラバラ過ぎて逆に目立ちそうな
んだけど……」

ふーつと鼻息を大きく吐く八百万に、統一されていない皆の変装を
見ながら、不服そうに耳郎が呟く。その後ろで、切島に何か言われた
のか、飯田は「パイオツカイデーチャンネーイルヨー!!」と可笑しな
発言をしている。

「八百万…、『創造』で作ればタダだったんじゃねえか？」

ふと、轟が八百万に尋ねると、八百万は慌てて口を動かした。

「そそソレはルール違反ですわ！私の『個性』で好き勝手に作り出し
てしまうと流通が…そう！国民の一人として…！うん、回さねばな
りませんもの！経済を！」

「そうか」

「ドンキ入りたかったんだな、あのピュアセレブ」

「すつごいはしゃいでたもんね」

言い訳をする八百万に轟はスンと頷く。その隣で、切島が呟くと、
耳郎も同意見だったのかケロつとした態度で応えていた。

「お？雄英じゃん!!」

すると突然、通行人の男性の声がそう聞こえ、5人はビクツ！と肩
を跳ね上げる。

「オッ、オツラ…！」

早速バレたかと、緑谷は慌てて切島の言われた通りの怒号をかまそ
うと振り返る。だが、通行人を含めた人々は、変装した緑谷達ではな
く、一斉に建物の上へと見上げていた。緑谷達も吊られて見上げる
と、そこには大きな液晶画面が設置されていた。その映像を見て緑谷
達は驚愕する。

『……では、先程行われた雄英高校謝罪会見の一部をご覧下さい』

なんと映し出されていたのは深々と頭を下げている雄英高校の教師達だった。根津を筆頭に、ブラドキング、そして、もう1人の教師が頭を上げて口を開いていた。

『この度、我々の不備からヒーロー科1年生27名に被害が及んでしまった事、ヒーロー育成の場でありながら、敵意の防衛を怠り社会に不安を与えた事、謹んでお詫び申し上げます。誠に申し訳ございませんでした』

「メディア嫌いの相澤先生が……！」

お詫びの言葉を丁寧に喋っていたのはなんと相澤だった。メディア嫌いでは有名な彼が、身なりを整えて無精髭も綺麗に剃っている。目を見開く緑谷達の中、メディアの1人が相澤達に質問するべく口を動かした。

『NHAです。雄英高校は今年に入って4回、生徒が敵と接触しますが、今回生徒に被害が広がるまで各ご家庭にはどのような説明をされていたのか、また……具体的にどのような対策を行ってきたのかお聞かせください』

雄英体育祭の件から、雄英の基本姿勢はその時にメディアを通して知らせていた。市民やメディアの人達も当然知っていた……の筈なのに、質問をする男性は白を切るような素振りで問い掛ける。そして、その質問に対して緑谷は「悪者扱い……かよ……」と悔しそうに呟き、強く拳を握る。

『周辺地域の警備強化、校内の防犯システム再検討、〃強い姿勢〃で生徒の安全を保障する……と説明しておりました』

「は……」

「全然守れてねーじゃん」

「何言ってるんだこいつら」

根津が応えると、映像を見ていた人々から不平不満を垂れ流し始める。この世は結果が全て。その空気は澱んでいく。いくら教師達が宣言し、頑張っていたとしても、結果が果たせなければ、それは虚勢に過ぎなかった。所詮は他人事だ。実績を残さなければ、栄光や信頼など直ぐ地に落ちる。罵声や文句が飛び交う街中、緑谷達はその澱ん

だ空気の中、身を縮こまらせていた。

☆☆☆☆

一方で、その中継を見ていた敵^{サイラン}連合達も然り。死柄木はそれを愉快そうに眺めては口を動かした。

「不思議なもんだよなあ……何故奴等が責められてる!? 奴等は少ーし対応がズレただけだ! 守るのが仕事だから? 誰にだってミスのはつや2つある! 『お前らは完璧でいろ』って!? 現代ヒーローってのは堅っ苦しいなア。爆豪君よ!」

恰も他人行儀の素振りを見せ、皮肉に笑う死柄木。周りの連合達は黙って見守る中、爆豪も死柄木を睨みながらそれを聞いていた。すると、便乗するようにスピナーは口を動かす。

「守るという行為に対価が発生した時点で、ヒーローはヒーローでなくなつた。これがステインのご教示!!」

「人の命を金や自己顕示に変換する異様。それをルールでギチギチと守る社会。敗北者を励ますどころか責め立てる国民。俺達の戦いは『問い』。ヒーローとは、正義とは何か。この社会が本当に正しいのか、1人1人に考えてもらう! 俺達は勝つつもりだ。君も、勝つのは好きだろ?」

ステインの思想を追いかけるスピナーは、相変わらずの威勢を見せる。

死柄木の言う爆豪を引き込む理由はその乱暴な性格と何が何でも勝つというプライドに目を付けたからだ。ヒーロー側ではルールや縛りが多い。だが敵^{サイラン}側ならば、その縛るモノが無い。勝つという概念は敵にも存在する。死柄木はそれを見据えて爆豪を勧誘しようとしていた。

「……………フン」

すると、カウンター席に座っていた火野ウヅアが突然立ち上がり、

出口まで移動すると扉のドアノブに手を掛ける。それを見た優無は声をかけた。

「ウヴァ、何処行くの?」

「そいつの引き込みなんざ、俺には何も関係ない。外の空気を吸ってくる」

火野ウヴァはそう言ってバーの外へと出て行き姿を消した。それを見ていたマグネは皮肉そうに口を開いた。

「…何よ、頼もしい仲間が増えるつてのに、感じ悪いわねあの子」

「まアそう言いなさんなマグ姉。俺達連合にとって彼の力は必要不可欠な存在だ。今は馴染めないだろうから、彼にも息抜きという時間を与えてやってあげようじゃないか」

出て行った扉を睨むように言うマグネをMr. コンプレスが宥める。ふと、皆が扉を見つめる中、槍無はマグネと同様、またはそれ以上の、睨みつけるような目付きでその扉を見つめていたのだった。

☆☆☆

バーから出て行った火野ウヴァは、そのビルの屋上へと足を運んだ。夜の明かりが灯される街並みを、柵から顔を出して火野ウヴァはその光景を視界に入れる。微妙に冷たい微風が吹き、火野ウヴァの肌に感覚が走る。すると突然、何処からか声が聞こえてきた。

『やつと一人になったな——!?!』

「ツ!?!」

その声に驚いた火野ウヴァはバツと後ろへと振り返る。だが、その屋上には誰もいない。今居るのはウヴァだけだった。ハッキリと聞こえた声に同様するウヴァ。数秒経ち、その声の主が誰なのか理解すると、ウヴァは口を開いた。

「……貴様……いつから……!?!」

『お前がこのビルに入った時からだよ』

「お前の精神は完全に閉じ込めた筈……!?!何故出てこれる……!?!」

『ん〜：お前よりも狡賢くて、ムカつくグリードが、ほぼ毎日俺の体使ってるからね〜：その耐性がついたんじゃない？』

話しかけてくる正体は火野映司本人だった。普段からアंकが体の中を出入りしては精神を乗っ取っている為、本人の言う通り耐性が知らぬ内に付いてしまったのだろう。

「：俺が1人になった所を襲う気か？」

『話をしたかっただけさ。他の奴らがいると怪しまれるし。それに、直ぐに出たいけど、多分体が言う事きかないだろうし』

「：フン！だが今更出て来た所で無駄だ！この体は俺が使わせてもらう。目障りなアंक以外の他の奴らはいない！：この世界で俺は、完全な存在になる!!」

『それは無理な相談だね……』

奴ら、とは恐らく他のグリード達の事を言っているのだろう。前世では、ちまちまとセルメダルを集めては奪われ、一緒に組んでいた他のグリード達から見放されたウヴァは、孤立気味ではあったもの、それこそ虫の執念深さみたく最後まで生き残っていた。だが、完全な存在となつて欲望を欲しようにも、結局は邪魔をされ、それを実現する事は出来なかった。握り拳を作りながら言うウヴァに、火野はそう返す。すると、『だけど……』と言つて口を開いた。

『お前のその欲望……、多分全部は出来ないと思うけど、：満たす事なら手助けをしてあげてもいいよ』

「は？どう言う事だ……？」

発言の意味が分からず、ウヴァは困惑する。その中、火野は続けて口を動かした。

『俺……お前達がいた時の記憶が全然無くてさ。：アंकと出会って色々聞かされてもらったんだ、前の世界の記憶を……。当然グリード達の事もね……。だから、お前とこうして会って会話するのも俺にとつては初めてなんだ』

「記憶が無い……？フン、それが俺の欲望を満たすのと何の関わりがある？」

『初対面のお前だからこそ、記憶が無い俺はお前がどんな事をしでか

したのか分からない。と言っても、さつきみたいな事をしている時点で、悪い奴だって思っちゃったけどな』

「それがどうした？俺達グリードは、お前達みたいな人間はただのメダルを増やす『道具』に過ぎない。…その人間に俺達が作り出されたつてのも癪な話だがな……」

元々グリードは800年前の王が、当時の科学者：言わば錬金術師によって作り出された存在。各生き物の力を宿したコアメダル10枚を、1枚ずつ減らし、9という欠けた数字にした結果、足りない故に満たしたいと誕生したのがグリードだ。皮肉に言うウヴァに、火野は続けて語りかける。

『…1つ質問なんだけど、俺の体を使って何か感じた事ない？』

「………なに？」

『ほら、グリードつて五感が無いだろ？でも、俺の体は人間の体だから、アंकも食べ物を食べたい時は体借りて食べてるし…。何か感じたことないかな？つて、思ってたさ』

『欲望』が中心的な位置にあるグリードだが、逆に言う欲望しか存在せず、その欲望を満たす事が出来ずそれを感じる肉体的機能、そして感情的機能も人間に比べて退化している。アंकから聞いたグリードの事を火野はそう言つて質問をすると、ウヴァは黙り込み、ふと夜の街並みを眺めた。

「………ああ、人間の…お前の体は…随分と居心地が良い…」

肉体機能が低下していたグリードの体でずっと生きていたウヴァは、ノイズの走るような音、ピンぼけする濁った景色で過ごして来た。が、火野の体に入って初めて明確に聞こえる音、色鮮やか景色を知り、その身に実感していた。死柄木達が居たバーの中に居るよりも、新鮮な外を見る方が何倍も良いとウヴァは屋上にやって来たのもあった。ウヴァにとつては衝撃的な実感だったのか、火野の質問に素直にそう応えると、火野は続けて語りかける。

『セルメダルもグリードにとつて大事なモノだと思っけど…、世の中それだけが欲望じゃないって俺は思うんだ。食べて味わつて、色鮮やかな景色を見て、何気ない生活を送るつても1つの欲望だし…』

一旦区切る火野は、再度口を開いた。

『えつと：ウヴァ、今後俺の体でその欲望を体感してもらおう代わりに、俺と一緒に戦ってくれないか?』

「…一緒にだど?」

まさかの勧誘にウヴァは戸惑いながら首を傾げる。

『うん、ここに居る理由って多分だけど：脇真音にセルメダルをあげるって言われたから来たんだろ? グリッドにとって大事なモノなのかもしれない。でも：俺にとって別にメダルとかはどうでもいい。だから、ヤミーを倒した分ウヴァにあげるよ。…：ウヴァみたいな強い奴が味方だと心強いんだけどなあ』

人々を餌とし、欲望を求めるだけの存在グリッド。だが、火野は精神の中で考えていた。

人間の体に入り、娯楽を味わうアंकと同様、ウヴァもその娯楽に浸ってくれるのではないか? 現に、ウヴァは火野の体に入って人間の感じる感覚、色鮮やかな景色を見るという時点で堪能している。その条件を持ち掛ける火野に、ウヴァは黙り込む。すると、静かに笑い出した。

「…：ククク…ハハハハ…!! お前と言い、あの脇真音とかいう女…、オーズの力を持つ人間は俺達グリードを何だと思ってる!? 要はお前達と共に人間を救って事なんだろ? ふざけた話だ。第一、お前はこっちの世界でもアंकと一緒に居るだろ。俺は昔から奴が嫌いなんだ…! 自分だけメダルを横取りしようって考えてるアंकなんかと一緒にいてたまるかッ!」

『そ、そんなにアंकの事が嫌いなのか?』

相当アंकの事が嫌いなのかその表情は徐々に怒りが増して眉に皺を寄せる。火野は問い掛けるとウヴァは続けて口を開いた。

「大嫌いだ! お前、記憶が無いとか言ってたな? 奴はお前を散々たぶらかして自分が良いようにメダルを集めていた姑息なグリッドだった。たまに同情する程、お前もこき使われていたぞ」

『ええ…つ…。でも…確かにアंकって強情で、なんか自分優先って感じだな…』

「フン！そうだろ？俺も奴に随分と騙され続けてきたからな…。思い出しただけでも腹が立つ…！」

『腹立つで思い出したんだけど、この間ヤミーが現れたとか言って商店街に行ったんだけど、結局ヤミーが見つからなくて、アイスを奢らされた事あったんだよなあ…』

「フツ、相変わらずの野郎だ…」

話は逸れていつの間にかアंकの愚痴を言い合う火野とウヴァ。この場にアंकがいない事を良いことに2人の会話は絶妙に弾んでいた。すると、屋上の扉が開かれる。顔を出して現れたのは槍無だった。

「……………ウヴァ……………捕まえた爆豪…暴れ出した…」

「……………俺の知ったことじゃない」

槍無はポツポツとそう告げると火野ウヴァはそつぽを向く。その態度に苛立ったのか槍無は睨みながら口を開いた。

「姉さん……………呼んでる……………早く来て……………来ないとセルメダル……………あげない……………」

「……………わかった……………」

火野ウヴァは大きく息を吐き、面倒臭そうに頷くと、槍無の横を通り過ぎて扉の中へと入る。すると、精神の中から火野が言葉を発した。

『ウヴァ、さっきの件…』

「悪いが、俺は好きなように暴れさせてもらう」

『……………そっか』

小声でそう応えるウヴァに火野は残念そうに呟く。アंकみたいなグリードがいるなら他のグリードも話し合えば共に戦ってくれると、そう思っていた。が、現実はそう上手くはいかない。敵と同様に、自身の強い欲望という名の邪心を持つ者など素直に従うわけがないのだ。

諦めかけていた火野は、今この状況、どうするかと考え悩んでいたのだ。

☆☆☆☆

「俺は、オールマイトが勝つ姿に憧れた。誰が何言つてこようが、そこアもう曲がらねえ！」

火野ウヴァと槍無はバーの扉を開けると、拘束具を外された爆豪が掌から煙を上らせ、そう吠えていた。どうやら、対等に話す為に死柄木達が外したのだろう。だが、爆豪は正義の勝つその背中に憧れた為、勧誘されようとその信念を曲げずに立っていた。爆豪の前に立っていた死柄木は、顔に付けていた手が床に落ちており、それを見つめながら「お父さん…」とポツリと呟く。

そんな中、先程まで見ていたテレビの記者会見が相澤達に質問をしていた。

『生徒の安全…と仰りましたが、イレイザーヘッドさん。事件の最中生徒に戦うよう促したそうですね。意図をお聞かせください』

『私共が状況を把握できなかった為、最悪の事態を避けるべくそう判断しました』

『最悪の事態とは？26名もの被害者と、2名の拉致は最悪と言えませんか？』

メモ調を見ながらメディアの男性は質問をする。だが相澤の返答に眉をピクリと動かせ、続けて質問をした。

『…………私があの場で想定した“最悪”とは、生徒が成す術なく殺害される事でした』

プロヒーローが少なく、森の何処にいるかも分からない生徒達の前に突然襲来した敵^{サイラン}連合。成す術も無く殺されてしまうよりも、今まで培った経験を活かして戦う術を持ち、立ち向かう事で、被害は最小限に収まった。その最適な判断をした相澤には正しいと一理ある。メディアの男性は眉に皺を寄せると、根津が口を動かした。

『被害の大半を占めたガス攻撃。敵の“個性”から催眠ガスの類だと判明しております。拳藤さん、鉄哲君の迅速な対応のおかげで全員、

命に別状はなく、また…生徒らのメンタルケアも行っておりますが、深刻な心的外傷などは今の所見受けられません』

『不幸中の幸いだとも?』

『未来を侵される事が『最悪』だと考えております』

『ほお、なら攫われた爆豪君や火野君についても同じ事が言えますか?』

その一言で、騒ついていた室内が一気に静まり返る。メディアの男性は続けて口を開いた。

『爆豪君は体育祭3位、ヘドロ事件では強力な敵に^{ワイラン}単身抵抗を続け、経歴こそタフなヒーロー性を感じさせますが、反面決勝で見せた粗暴さや表彰式に至るまでの態度など、精神面での不安定さも散見されています。』

方や火野君は体育祭優勝、動物のあらゆる力を己のモノとして扱う『個性』。学校面での活躍は鰻登りの様子も把握しています。彼の『個性』は珍しく、超人社会にとっては逸材な存在になり得る。…ですが、その強大な力に並みの敵^{ワイラン}同様、彼自身が溺れてしまったら?もし、2人はそこに目をつけた上での拉致だとしたら?言葉巧みに彼を匂引かし、悪の道に染まってしまったら?未来があると言い切れる根拠を、お聞かせ下さい』

調べられた爆豪と火野。それに加え、攻撃的な質問。明らかにストレスを掛けて粗野な返答を曝け出そうとしている。ブラドキングは息を呑む。恐らく、メディア嫌いの相澤を知ってての挑発的な言葉なのだろう。相澤はスツと椅子から立ち上がと、深々と頭を下げたのだ。

『行動については私の不徳の致すところですよ』

冷静かつ、予想外のしつかりとした謝罪に、ブラドキングは動揺する。静まり返る室内の中、相澤は続けて口を動かした。

『ただ…、体育祭でのそれらは彼らの理想の強さに起因しています。誰よりもトップヒーローを追い求め…また、誰よりも手を伸ばそうと…もがいている。あれらを見て隙と捉えたのなら、^{ワイラン}敵は浅はかであると、私は考えております』

メディアに対して相澤は感情的になる事無く、冷静に対応し、自身の意見を述べる。その努力を、実績を、有望さを、爆豪と火野の教師である相澤だからこそ言える言葉だ。他のメディア達が騒つく中、質問をした男性は顔を曇らせながら口を開いた。

『根拠になつておりませんが？感情の問題ではなく、具体策があるのかと伺っております』

『……我々も手を拱いているわけではありません。現在警察と共に調査を進めております。我が校の生徒は必ず取り戻します』

その質問に根津が応えると、中継を聴いていた爆豪が不敵にも笑って口を動かした。

「ハッ…言つてくれるな、雄英も先生も…！そういうこつた！クソカス連合！」

ガーツハツハツハ！と豪快に笑う爆豪。大見えを振るっている素振りを見せているが、内心は冷静に考えていた。自分は「利用価値のある最重要人物」、早々に殺しに来る事は先ず無いと。なら、隙あらば何人か蹴散らしてこの場を脱出しようと考えていた…のだが。

「言つとくが、俺アまだ戦闘許可解けてねえぞ…！」

そう言いながら、爆豪はチラリと火野ウヴァを見つめる。ここに拉致されてから大体は予想していたが、爆豪は火野の中に別の何かを感じ取れるのが目で見て理解していた。また、火野映司本人が出てきてないのは今表に出ているウヴァが精神を乗っとなっているのだろうと。「相手は火野を含めて10…。火野をブツ叩き起こして脱出してエが…：そう簡単にはさせてくれねえみてえだな…：！」

火野を連れて逃げようと考えてるが、ウヴァがそうさせてはくれないだろう。増してやこの数。何人かは重症を与える事が出来ても、数で圧されてしまうのが目に見える。思考がフルになっている中、威勢を吐く爆豪に、マグネがほくそ笑む。

「自分の立場、よくわかってるわね…！小賢しい子！」

「刺しましょう！」

「…僕、殺る…！」

「殺つちやダメでしょ。しまいなさいその槍」

カウンター越しに笑顔で言うトガに、便乗してか槍無がディーペス
トハーブーンを取り出し、構える。捕獲したのに殺しては元も子もな
いので、優無は頭を軽く小突いてそれを止める。

「いや…馬鹿だろ」

「その気がねえなら懐柔されたフリでもしときやいいものを…、やつ
ちまったな」

爆豪の行動を見て呆れる茶毘とMr.コンプレス。場所が何処か
も分からず、狭い空間で逃げようとするのは自殺行為に等しい。仲間
になる振りをし、隙を見て逃げ出せば、そちらの方が有利だっただろ
う。

「したくねーもんは嘘でもしねんだよ俺ア。こんな辛気くせーとこ、
長居する気もねえ…！てめエもそーだろ、三色野郎！」

「三色…？え、私？」

ふと、爆豪は火野ウヴァに視線を向け、吠える。オーズの色かと思
い、優無は自分に指を指すが、その目線は火野ウヴァに向けられてお
り、察した優無はバツの悪そうな顔をしてそつと指していた指を下ろ
した。

「こんなチンけな奴らと一緒にいる事を選んだか!?てめエには山程仕
返しがあんだよ!!ボケつとせずつに出てこいや！」

「…：フン、本人に聞こえているだろうが、今は俺がこの体を使つて
る。叫ぶだけ無駄だ」

精神に閉じ込められてる火野の意思に呼び掛けるように吠える爆
豪。だが、その体の主導権はウヴァが握っている為、ウヴァは鼻を鳴
らしてそう言った。

その間、死柄木は床に落ちている手をずっと見つめていた。それに
気付いた黒霧はハツとする。

「いけません、死柄木弔！落ち着いて…」

黒霧は慌てて死柄木の元へ駆け寄ろうとする。すると、死柄木は急
にギロリと爆豪を睨んだ。悍ましいその目付きに爆豪はピタリと動
きを止め、警戒をする。

「手を出すなよ…：お前ら。こいつらは…大切な駒だ」

スツと手を差し出して床に落ちていた手を拾い顔に付ける死柄木。前までの死柄木だったら、感情的に怒り、見境無しに爆豪を殺していただろう。その冷静な振る舞いに驚く黒霧。同時に、それを見た優無は微笑ましそうな小さな笑みを浮かべて死柄木を見つめていた。

「出来れば、少し耳を傾けて欲しかったな…君とは分かり合えると思ってた…」

その言葉に「ねえわ」と断固拒否する爆豪。

「仕方がない、ヒーロー達も調査を進めていると言っていた…。悠長に説得してられない」

何れはこの場所がヒーロー達に知られるかもしれない。時間が無いと判断した死柄木は「先生」と先程まで見ていたテレビに向かってそう言う。すると、テレビの画面が急に乱れ始めた。

「力を貸せ」

『……………良い、判断だよ…死柄木弔』

No. 91 激突と太古の力

記者会見をざっと見終えた緑谷達は、爆豪と火野を奪還するべく、八百万の創った受信デバイスの発信源を辿っていた。大通りに比べて人通りが少ない路地裏の場所で、先頭を歩いていた八百万は立ち止まる。

「ここが発信機の示す場所ですわ」

「これがアジト…いかにもだな！」

切島が見上げるその目の前に、聳え立つのは使われていない廃倉庫の建物だった。人が徘徊する場所に比べて不気味な静けさを増す建物。敵が潜伏するにはうつつつけとも言える。すると、八百万は受信デバイスを見ながら皆に声を掛けた。

「わかりません…ただ、私が確認した限り敵は丸一日ここから動いてません。敵がいるからといって爆豪さんと火野さんがここに居るとは限りません…。ですが」

「ああ…耳郎、ここに爆豪達はいるか？」

八百万と轟が耳郎を見遣る。索敵に優れた彼女のイヤホン・ジャックがあれば、中の様子を音で把握する事が出来る。頼られる耳郎は「任せて」と頷き、耳朶のプラグを建物の外壁に刺し、中の音を探り始めた。

「……………人の居る気配がない…」

人の呼吸、足音、会話をする声がかく聞こえない。数秒模索した耳郎は首を横に振り、俯きながらそう呟く。八百万の言う通り、受信デバイスが必ずしも爆豪達がここに居るという確証は何処にもなかった。微かな希望を頼って、一か八かでここに来たのも、それは覚悟の上。今になって悔しい気持ちが入み上げてくる。

飯田は俯きながらも、後はヒーロー達に任せようと、口を開こうとしたその時だった。

「ツ…待ってっ」

突然耳郎が声を上げる。皆は顔を上げると、耳郎は不審な表情を浮

かべて口を動かした。

「何か…音がする…水…?」

「廃倉庫だろ?水道の水くらい出しっぱなしでも不思議じゃねーよ」

「違うつ。なんかこう…ブクブクって溜まってるような音が聴こえるんだ、それも何個もっ」

切島の言葉を否定する耳郎。すると、轟が廃倉庫を見上げてポツリと呟く。

「…調べてみる価値はありそうだな…」

爆豪と火野がいなくとも、何か手掛かりがあるかもしれない。そう判断した轟に、緑谷は「…行こう」と頷く。耳郎と切島もそれに同意し、止めても無理そうな彼らの表情を見て、八百万と飯田は黙って後を着いて行った。

☆☆☆☆

同時刻、誰も使われていない神野区のビルの中に明かりがついていた。その中には、有象無象と今回の事件に向けて動き出そうとする猛者達がいた。

「何で俺が雄英の尻拭いを…こちらも忙しいのだが」

「まアそう言わずに…OBでしょう」

「そうそう、エンデヴァーさんがいてくれたら百人力だって事で」

不機嫌そうなエンデヴァーにベストジーニストと伊達が宥める。それを聞いた塚内も口を動かした。

「雄英からは今ヒーローを呼べない。大局を見てくれエンデヴァー。今回の事件はヒーロー社会崩壊の切っ掛けにもなり得る。総力をもつて解決にあたらねば」

今回の作戦は敵^{サイラン}連合の殲滅。拠点を突き止めた今こそ、世間を脅かす悪を退治出来る。故に、こちらもそれ相応の力を持って対抗しなければならぬ。塚内や警察らが招集した錚々たる面子のプロヒーロー達がその証拠だ。

「バース、それにアंक君。作戦に参加してくれてありがとう。脇真音の“個性”には君達の力が必要不可欠だからね」

「俺なんかお役に立てるならお安い御用ですよ。知人が捕まってるとなると、尚更ジツとなんかしてられませんから」

「フン：礼を言う暇があるなら、さっさと話を進めろ」

敵^{ワイラン}連合の中の2人、脇真音優無と槍無はメダルを使用した“個性”。2人の鎮圧の為にバースは呼ばれており、塚内の御礼の言葉に後藤は軽い挨拶で受け流すも、その表情は真剣だった。アंकも腕を組んでそう言っていると、職場体験で来てくれた爆豪の事を思っつかべストジーニストが口を開く。

「私は以前、爆豪の素行を矯正すべく事務所に招いた。あれ程に意固地な男はそうそういまい。今頃暴れていよう、事態は急を要する」

「ホホオ、貴様が変わえられなかったのか」

「毛根までプライドガチガチの男だった」

彼の発言に、白いスーツを見に纏い、その顔は“シャチ”そのもののヒーロー“ギャングオルカ”が反応する。捻くれた者を正しく粛清すると有名なベストジーニストまでもが、根を上げてしまうくらい粗暴な性格の爆豪。何か思い出したのか、頭を押さえて俯くベストジーニスト。すると、付近にいた虎も悔しそうに口を開いた。

「我が同志ラグドールが奪われている。個人的にも看過出来ぬ！」

林間合宿、ラグドールは森の中央で脅かし役として参加していたのだが襲撃された後、音沙汰も無く姿をまるで神隠しのように消えてしまったのだ。悔やむ気持ちを晴らすべく、敵^{ワイラン}連合の拠点が見つかったと聞いて真っ先にこの作戦に虎は参加していた。

「生徒の一人が仕掛けた発信機では、アジトは複数存在すると思われる。我々の調べで拉致被害者が今いる場所はわかっている。主戦力をそちらへ投入し、被害者の奪還を最優先とする。同時にアジトと考えられる場所を制圧し、完全に退路を断ち一網打尽にする」

日頃から敵^{ワイラン}連合を突き止めるべく動いていた塚内は、情報を炙り出し、別の場所に爆豪と火野が囚われている場所を見つける事が出来た。八百万から譲り受けた受信^{デバイス}には、ベストジーニストを率

いた何人かのプロヒーローを向かわせるつもりだ。そして残りのメンバーは塚内と共に死柄杓木らが潜伏している隠れ家のバーへと直行する作戦。

塚内がそう話している間、グラントリノはオールマイトに声をかけていた。

「俊典、俺なんぞまで駆り出すのはやはり…」

「『なんぞ』、なんぞではありませんよグラントリノ！ここまで大きく展開する事態。奴も必ず動きます」

「……オール・フォー・ワン…」

長年から敵対していた巨悪、オール・フォー・ワン。この掃討作戦に、奴も必ず出てくる筈。小声でそう行ってくるオールマイトにグラントリノは真剣な目付きで巨悪の名を口にした瞬間、塚内は叫んだ。

「今回はスピード勝負だ！^{サイラン}敵に何もさせるな！先程の会見、^{サイラン}敵を欺くよう校長にのみ協力要請しておいた！さも難航中かの様に装ってもらっている！あの発言を受け、その日のうちに突入されるとは思うまい！意趣返ししてやれ！さア反撃の時だ！流れを覆せ！！ヒーロー!!!」

市民を脅かす悪の集合体。それを覆さんと装甲を纏った警察部隊、ベストジーニスト、ギャングオルカ、Mt.レディ、虎達は緑谷が現在居る廃倉庫へ。

残りの部隊と塚内、オールマイト、エンデヴァー、忍者のコスチュームを纏ったヒーロー「エッジショット」、シンリンカムイ、グラントリノ、バース、そしてアंकは、隠れ家のバーへと到着する。^{サイラン}敵連合を撲滅せんと、今、反撃の狼煙が上がったのだった。

☆☆☆☆

一方、緑谷達は廃倉庫の中を調べるべく正面の入り口へと足を運ぶ。バリケードがされており、当然中に入ることは出来ない状態の

中、切島は耳郎に声をかけた。

「中に人の居る気配全くねーけど、本当に何かあるのか？」

「何か…機械が動いてる音がするんだ。間違いない」

「正面のドア、下に雑草が茂ってる…他に出入り口があるのか？どうにか中の様子を確認できないものか…」

耳郎は頷くと、隣で緑谷がブツブツと言いながら入り口のドアを見つめていた。

その瞬間、「おい」と男性の声が掛けられる。まさか、敵サイランに見つかってしまったのかと、5人は慌てて振り返る。するとそこに居たのは、仕事が終わった後なのか、泥酔していた男性が2人立っていた。

「ホステス〜！何してんだよホステス〜！俺達と飲みましょ〜！そっちの彼女も〜！」

「やーめとけバカ！」

「いつ!？」

1人の男が酔った勢いで八百万と耳郎に話し掛ける。2人は顔を引き攣らせていると、もう1人の男が話しかけた男の頭を叩いて止めようとする中、緑谷達が割り込んだ。

「オツラア!？」

「パツ、パイオツカイデーチャンネル!？」

「一旦離れよう」

切島に教わった方法で威嚇をする中、拉致があかないと轟は指示を出し、この場を離れ移動した。

少し離れた場所に移動し、轟は彷徨く人々を見ながら口を動かす。

「多くはねえが人通りもある…」

「目立つ動きはできませんわよ。どうされますの?」

「…………裏に回ってみよう。どれだけか細くても、この中を調べる必要性がある事は変わりない…」

通行人が少ないとは言えど、少数の人は目に入る。戸惑う八百万に緑谷が提案すると、それしか無さそうと判断した4人は頷き、廃倉庫の路地裏へと再び移動した。

「かなり狭いな…大丈夫か2人共ツ」

路地裏へと回り込んだ緑谷達だが、その道は壁と壁で挟まれ、決して人が通れるような道ではなかった。横歩きで1人1人が移動する最中、切島が後方にいる耳郎と八百万に声を掛ける。

「ウチは平気……」

「狭いですわ……つつかえそう」

「……………」

小柄な体型をした耳郎にとっては十分なスペースがあつたのか難なく擦り抜けているが、後ろの八百万がサラツと呟く。学生とは思えないナイスボディが擦れているのだろう。それを聞いた切島は何とも言えない表情で黙り込み、方や耳郎は憎悪を抱いたような険しい表情となっていた。

「安全を確認出来ない限り下手な行動は出来ない……。ここなら人目はないし……」

先頭を歩く緑谷はそう言うと、何かを見つけたのかハツとする。

「あの高さなら、中の様子見れそうだよ!!」

少し高い場所に見受けれるのは、鉄格子が貼られている小さな小窓だった。

「この暗さで見れるか?」

「それなら私暗視鏡を……」

辺りも廃倉庫の中も暗い状況で肉眼で様子を探るのは困難だと轟は言うのと、八百万が創造で暗視鏡を創ろうとする。だが、それを見た切島が「いや!!」と声を上げて止めた。

「八百万、それ俺持ってきてんだな実は」

「ええすごい!何で!？」

「アマゾンには何でもあつてすぐ届くんだ」

切島がスツと取り出した暗視鏡を見て緑谷は驚いて目を見開く。恐らく緑谷達がまだ入院している間に注文したのだろう。切島は暗視鏡を見つめながら口を開いた。

「1つしか買えなかつたけど、やれる事考えた時に……いると思つてよ」
「用意周到だな……つて……その暗視鏡、ウチもアマゾンよく使うから見たことある!」

「それメツチャ高いやつじゃない!? 僕もコスチューム考えてた時、ネットで見たけど確か5万くらいしたような…」

「値段はいんだよ。言うな」

感心する耳郎がふと、切島の暗視鏡が高い代物だと知って驚愕すると、緑谷も便乗して驚く。友を救うべく買ったので、値段の事は野暮なのか切島は表情を曇らせていた。

「よし…じゃあ緑谷と切島が見て、俺と飯田で担ごう」

轟の言葉に皆は頷くと、さっそく行動に取り掛かる。

「狭いな…」

「あまり身を乗り出すなよ。危ないと思ったらすぐ逃げ出せるよう」

「飯田ちよつと下がるか?」

「ちよ、切島つ、もうちよいゆつくり上がんなよ。見てるこつちがコワイ」

ウズウズと狭い通路の中、緑谷と切島は轟と飯田の背中に攀じ登り、上へと上がる。

「様子を教えたまえ。切島君どうなっている!？」

「奥の方から音が聞こえるよッ」

「んあー…奥…奥はー…」

不安定の中、飯田と耳郎が言うと、切島は暗視鏡で鉄格子の小窓から中の様子を覗く。

「ッ?! うおっ!!」

「切島君!？」

「っべエ!!」

突然、何かに驚いたのか声を張り上げ不安定な状態でふらつく切島。今にも落っこちそうになり、緑谷は慌てて声を掛けると、切島は何とか態勢を立て直す。

「おい! どうした、何が見えた!? 切島!!」

「クツソ…! 耳郎の言ってた事がマジだった…!! 左奥…!! 緑谷左奥!! 見ろ!!」

荷台代わりになっている轟は何も見えない状態なので、驚くだけの

切島に困惑し、声を上げる。だが切島は轟の言葉を無視し、大量の冷や汗と愕然とした表情で緑谷に暗視鏡を渡した。一体何が…？と言わんばかりの表情で緑谷は受け取り、恐る恐る切島の言われた方向を暗視鏡で覗く。

流石5万円相当の暗視鏡だけあつてか、暗い倉庫内でもハッキリと緑谷は見渡せていた。切島の言われた通り、左奥の方を見遣る。

「!?ウソ…だろ…!?あんな…無造作に…!アレ…全部、脳無…!?!」

見つめたその先にあつたのは、無造作に置かれた巨大な培養器のような入れ物の中、液体からはみ出していた脳みそ剥き出しが特徴の脳無が、敷き詰められるようにあつたのだ。

☆☆☆☆

一方、隠れ家を装った敵^{サイラン}連合がいるバーでは、緊迫の空気に包まれていた。正攻法では耳を傾けてくれないと死柄木は判断し、『先生』と名乗る人物、即ちオール・フォー・ワンに助力を求めていた。

「先生え…?てめエがボスじゃねえのかよ…!白けんな」

今になって明かさされた黒幕の存在を聞いて爆豪は不敵な笑みを浮かべていても、その顔からは冷や汗を流していた。

「黒霧、コンプレス、脇真音。また眠らせてしまっておけ」

「私…?はいはい、わかりました」

「ここまで人の話聞かねーとは…、逆に感心するぜ」

死柄木に指示を出された優無は渋々と頷き、取り出したオズドレイバーを腰に宛い装着する。Mr.コンプレスもまた了承し、爆豪の性格に呆れを成して溜息を吐いていた。対して爆豪は「聞いて欲しけりや土下座して死ぬ!」と威勢を吠えるが、脳内では必死にこの人数から火野を取り返して、脱出の糸口を探ろうとしていた。

だが思いもしない突然の一言で、それは杞憂に終わった。

「どーもオ、ピザーラ神野店ですー」

扉のノック音と同時に聞こえたのは気の抜けた声。

誰がこんな時間にピザなんて頼んだんだ？と疑問を抱いた次の瞬間ー…。

「SMASH!!」

筋骨隆々とした肉体のオールマイトが壁を打ち破った。壁際に寄りかかっていたスピナーと槍無は吹き飛ばされ、「何だあ!!？」と愕然とするスピナー。

「黒霧！ゲート…」

何はどうであれ、現れたのは本物のヒーロー。死柄木は直ぐに逃げようと黒霧に指示を出したその時、オールマイトと共に駆け込んだ若手ヒーロー、シンリンカムイが動いた。

「先制必縛！“ウルシ鎖牢”!!」

爆豪以外の敵^{サイラン}連合に木の腕を伸ばし、瞬く間に捕縛する。ワープゲートを開こうとした黒霧も拘束されて身動きがとれなくなっていた。

「木イ!?んなモン…」

「逸んなよ」

束縛された木を見た茶毘は燃やしてと炎を出そうとすると、勢いよく飛び出たグラントリノが茶毘の後頭部に向けて蹴りを放つ。脳震盪を起こした茶毘は気絶し、その場で沈黙した。

「大人しくしといた方が、身のためだぜ」

「流石若手実力派だシンリンカムイ!!そして目にも止まらぬ古豪グラントリノ!!もう逃げられんぞ敵^{サイラン}連合よ!何故つて!我々が来た!」

即時敵を捕縛したシンリンカムイ。その早業を見せたグラントリノ。そして、No. 1ヒーロー、オールマイト。これだけの精鋭が目の前に現れたら並みの敵^{サイラン}は腰を抜かすだろう。驚愕する連合の中、木に拘束された優無は慌てるように口を開いた。

「ちよっ!? まっ!? オールマイト…!? 何でここが分かったの!？」

「…!! 力…強い…!!」

両腕が拘束された以上、変身する事が出来ない優無と槍無。無理矢理引き千切ろうとするが、かなりの強度の木に成す術もなかった。

「ぐっ! どーなっつてんだ!?! ここは安全じゃないのか!!」

火野ウヴァもまた必死に抗おうともがいている中、オールマイト等が続いて入ってきたアंकがその哀れな姿を見て鼻で笑う。

「2日振りだなあ、ウヴァ。さっさと映司を返してもらおうか…!」

「アंक…!? 貴様…!!」

「…ふむ、これがアंक少年が言っていたグリード…。アंक少年!

一先ず今はこいつ等を連行して、火野少年は警察署で対処しよう。いいね?」

合宿の出来事はアंकから事前に聞かされたオールマイトは、見た目も性格も変わっている火野を見つめて、アंकにそう指示を出す。アंकは「…フン」と鼻を鳴らしながらそれを了承すると、バーの扉の隙間から「擦り抜ける」ようにエッジショットが現れる。

「攻勢時程、守りが疎かになるものだ…。ピザラ神野店は俺達だけじゃない。外はあのエンデヴァーをはじめ手練のヒーローと警察が包围してる」

エッジショットは言うのと、内側から扉の鍵を開ける。すると、装甲を纏った警察部隊が次々と中へ侵入し始めた。彼の言う通り、外にはエンデヴァーを筆頭に、バース、その他のヒーロー、そして塚内の連れた特殊部隊がずらりとバーの外を包围していた。その中、エンデヴァーはカチコミに入ったオールマイトが気に入らないのか塚内に向かって吠える。

「塚内イ!! 何故あのメリケン男が突入で俺は包围なんだ!!」

「万が一捕り漏らした場合君の方が視野が広い。勿論、ヤミーが出た場合もね? 頼むよバース」

「シャ!!」

「単純だねエ…」

的確な判断に怒鳴っていたエンデヴァーは意気込みを入れている

と、隣のバースはマスク越しで何とも言えない表情となってエンデヴァーを見ていた。

そして、完全包囲した状況でオールマイトは爆豪にようやく声を掛けた。

「怖かったろうに……よく耐えた！ごめん……、もう大丈夫だ少年！」

「こっ……怖くねえよ、ヨユードクソツ!!」

約2日間は監禁されていた爆豪。優秀な彼であっても、オールマイトからすればまだまだ子供。守るべき存在な事には変わりはない。安心させるようにオールマイトは言葉を掛けるが、その安堵する表情を押し殺して爆豪はいつものように吠える。それを見たオールマイトは安心したのかサムズアップを彼に向けていた。

一方で、アंकは拘束されている連合らの側を歩き、優無へと近寄る。後ろの腰に入れてあったメダルホルダーを確認すると、それをぶん取り口を開いた。

「あ、ちよつ?!盗らないでよ泥棒!」

「その言葉そっくりそのまま返してやるよ、盗人が」

吠える優無にアंकはそう吐き捨てて、念の為と思ったのか中身を確認する。位置は変わってはいたが、ホルダーの中には所持していた時と同じコアメダルと数枚のセルメダルが入っていたので、アंकはニヤリと喜びの笑みを浮かべる。すると、拘束された死柄木が不満そうに、憎悪を抱いた目付きでオールマイトを睨み、口を開いた。

「せつかく色々こねくり回してたのに……。何でそつちから来てくれんだよ、ラスボス」

ずっと狙っていた因縁のNo.1ヒーロー。

その宿敵が目の前に居る。だが、襲おうにも他の敵は押さえられ、

一旦立て直そうにも逃げれない。死柄木は些か不満ではあるが、黒霧に向かつて叫んだ。

「仕方がない……俺達だけじゃない……そりゃあ、こっちもだ。黒霧、持って来れるだけ持って来い!!!」

別の場所に保管していた脳無を呼べば戦局を変えられるかもしれな

い。何匹かは倒されてしまうが、脳無が暴れて拘束が解かれれば形成逆転。死柄木は黒霧に指示を出すのが、何故か黒霧は反応せず、その場は静まり返った。疑問を抱く死柄木に、黒霧は言いにくそうに口を開いた。

「すみません死柄木弔…。所定の位置にある筈の脳無が…、無い…!!」
「!?」

場所を特定し、繋げる事が出来るワイプゲート。廃倉庫に保管していた筈の脳無が何故か呼び出せず、黒霧も死柄木も困惑の顔を隠せなかった。すると、オールマイトは爆豪の肩に手を置きながら圧力を重ねて激昂した。

「やはり君はまだまだ青二才だ、死柄木!」

「あ?」

「敵^{ヴィラン}連合よ、君らは舐めすぎた。少年達の魂を、警察のたゆまぬ捜査を、そして、我々の怒りを!!」

何が起きたのか分からない死柄木。それを応えるかのように、警察部隊の1人がオールマイトらに声を掛けた。

「連絡ですーベストジーニスト率いるヒーロー達が倉庫に居る脳無を鎮圧ーラグドールも保護したとの事!!」

「!?」

「おいたが過ぎたな、ここで終わりだ死柄木弔!!」

廃倉庫に保管されていた脳無達の居場所は、事前に発信機を取り付けた八百万のおかげで突き止める事が出来た。ここに来ていないベストジーニスト、ギャングオルカ、Mt.レディ、虎はそちらの方へ向い、見事沈静化に成功したのだ。それを踏まえて把握していたオールマイトは、もうどうする事も出来ない、観念しろと言わんばかりに重圧を死柄木達に飛ばす。

「オールマイト…これが、ステインの求めた…ヒーロー…!」

その圧巻とせん存在感にスピナーが戦慄する中、死柄木は焦りと募る怒りが込み上げ、ポツポツと口を動かした。

「終わりだと…?巫山戯るな…始まったばかりだ。正義だの…平和だの…あやふやなモンで蓋されたこの掃き溜めを、ブツ壊す…。その為

にオールマイトを取り除く。仲間もようやく集まり始めたばかりなんだよ…巫山戯るな…！ここからなんだよ…！…！」

瞬間、死柄木は「黒霧」と叫ぼうとした。ここから逃げる為にワーブゲートを開かせようとしたのだろう。だが、刹那。黒霧の胸の辺りに突然一本の黒い線が黒霧を貫いた。

「うっ…！」

「!?」

「…え…!?キアアア！やだあもお!!見えなかつたわ！何!?殺したの!?」

首を落とし、気絶する黒霧を見ていたマグネが焦り声を荒げる。すると、貫いた黒い線が徐々に形を変えていき、その正体はなんとエツジショットだった。

「中を少々弄り気絶させた。死にはしない。『忍法千枚通し』！この男は最も厄介…、眠っててもらう」

エツジショット

個性『紙肢』

忍法とか言ってるけど体を薄く細く伸ばせるだけだ！

しかしその変化速度は鍛錬により音速を越える！

紙肢の身体でエツジショットはそう言って爆豪を見遣る。黒霧は全身が黒いモヤで覆われているが、爆豪の見つけだした弱点を持っており、それを把握してエツジショットはその部分を狙って攻撃を繰り返していった。いよいよ逃げる算段を失ってしまった敵サイラン連合に、グラントリノは追い討ちを駆けようと口を開く。

「さっき言っただろ、大人しくしといた方が身の為だつて。引石健磁、迫圧紘、伊口秀一、渡我被身子、分倍河原仁、少ない情報と時間の中お巡りさんが夜なべして素性を突き止めたそうだ。もっとも、その姉弟は別だがな…」

警察が調べ上げたのか、敵サイラン名ではなく本名を1人1人上げるグラントリノ。だが、脇真音姉弟を眼で訴えるように見つめる。何かを

黙っているかのように顔を曇らせる優無。グラントリノは「まあどうであれ…」と口を開いた。

「お前さんらはもう、逃げ場アねえって事よ。なア死柄木弔。聞きてえんだが…、お前さんのボスはどこにいる？」

「……………」

グラントリノの言葉に、無視をするように死柄木は黙り込む。

…否、多様な感情で脳内が葛藤していた。ヒーローに鎮圧されてしまふ焦り、オールマイトを目の前にして何もできない怒り、憎しみ、集めた仲間さえも捕まってしまう悲しみ。追い詰められたストレスのせいか、過去の記憶がまるで走馬灯のように頭に流れ込んでくる。幼少期、誰も救ってくれなかった少年に、差し伸べてくれる一つの手を。

「奴はどこにいる、死柄木!!」

「おまえが!!嫌いだ!!」

爆発された感情がオールマイトに向かって絶叫し、その室内に木霊する。その瞬間、死柄木の叫びに呼応するかのように、背後からタールのような黒い液体が溢れ出し、その中から脳無が出現した。

「!?!」

「脳無!?!何も無い所から…!あの黒い液体は何だ!」

突如、死柄木の背後から現れた2体の脳無にシンリンカムイどころか死柄木本人も驚いている。まさかと思いい、グラントリノはバツと振り返り、エッジショットに声をかけた。

「エッジショット!黒霧はー!」

「気絶している!こいつの仕業ではないぞ!」

黒霧の側を離れずに見ていたエッジショットは断言する。

「どんどん出てくるぞ!!」

黒い液体は次々と現れ、その中から脳無達が産声のような叫びと共に出現する。

「ぐっ!?!おいアंक、どーなってんだ!!」

「は!?!知るか!そっち側の、お前等の、仕業だろが!」

火野ウヴァも状況が把握出来ておらず、アंकに声を掛けるが、アंकは襲って来る脳無の攻撃を避けながらキレ気味に応えた。

「シンリンカムイ！絶対に離すんじゃないぞ!!」

拘束しているシンリンカムイにオールマイトはそう言い放つ。

その瞬間だった。

「お!!?」

「ぼあ!!?」

混乱する室内の中、突然爆豪と火野ウヴァの口から、ゴボツと脳無が出現したのと同様、黒い液体を吐き出した。物凄い勢いで黒い液体は爆豪と火野ウヴァの身体を呑み込んでいく。

「!!爆豪少年!!NO!」

「ツ!?何だ!」

「っだこれ、身体が…飲まっれ…!」

オールマイトは必死に爆豪を押さえようとする。アंकは何が起きたのか分からず、愕然と火野ウヴァを見つめていたその時、爆豪と火野ウヴァは液体に呑み込まれ、その場から忽然と姿を消した。

意識が朦朧とするウヴァ。その精神の中に居る火野は、何とか表に出れないかと万華鏡のように輝く精神の中を彷徨っていた。

「おい、ウヴァ!何がどうなってんだよ!」

先程からずっと叫んでいるが、ウヴァの反応が全く無い。焦りが募る火野は、外に出ようと必死に模索を続ける。ふと、火野は自身の両手を見つめる。こうなったのは自分のせいだと悲観的になり始めていたのだ。

「俺が…弱いから……俺のせいで…皆に迷惑を……」

自身の力が足りないせいで、コンボも碌に扱えず、弱い自分があったから、ウヴァの語り声に耳を傾けてしまった。そんな自分が情けない、悔やんでも悔やみ切れない気持ちで胸が張り裂けそうになっている。こうしている間にも、爆豪やアंकに危険が迫っているかもしれない。皆の命が危険に晒されそうになっているのかもしれない。

「もっと……俺に力があれば……皆を守る力が……!」

人並みに欲深く無い火野は、初めて欲しいと言う欲望を口にする。どんなに離れていても絶対に手が届く力。それが欲しいと思ったそ

の時だった。

何も無かった精神世界の奥、微かに紫色の光が輝いた。

「…あれは……？」

光を見つけた火野は、その先に向けて足を踏み出す。

まるで、「力をくれてやろう」。

そう思わせられるかのように、火野はその光に吸い寄せられて行ったのだった。

No. 92 巨悪と無敵のコンボ

黒い液体から脳無が現れ、混戦に包まれた隠れ家のバー。その騒動が発生した2分前、廃倉庫に居た緑谷達は、奇襲を掛けたベストジーニストらの衝撃の爆風によって転がっていた。

「ど…どうなってるんだ!？」

「いつ、いきなりMt. レデイが現れて…廃倉庫…ぶっ壊した…」
「いつててて……」

起き上がる飯田が状況を確認しようと声を掛けると、かろうじて現場を見ていた耳郎が応える。衝撃で落下した緑谷は腰を打ったのか押さえながら立ち上がると、切島が飯田の背中を、耳郎が轟の背中を借りて壁をよじ登り、顔を出した。

「Mt. レデイにギャングオルカ…、No. 4のベストジーニストまで……」

「プッシーキャッツの虎もいる…。それに警察の人達も沢山…!」

半壊して中が剥き出しになっており、その室内には脳無を捕らえたベストジーニストらが立っていた。

視点は変わり、巨大化しているMt. レデイは四つん這いになって脳無を握っていると、気持ち悪そうな表情をして口を開く。

「うええくくく、これ本当に生きてんのオ…?めっちゃ勢い良く突入しましたけど、こんな楽な仕事でいんですかね、ジーニストさん。オールマイトの方行くべきだったんじゃないですかね?」

「難易度と重要性は切り離して考えろ、新人。機動隊、すぐに移動式牢を!まだいるかもしれない、ありったけ頼みます」

文句を垂れるMt. レデイに自身の服から出た繊維で捕縛しているベストジーニストが喝を入れる。今年からプロヒーローとなった彼女とは打って変わって、彼の緊張は解けることなく、警戒態勢を随時行っていた。

個性『ファイバーマスター』

繊維を自在に操作する！

人が服を着る以上彼には抗えないぞ！ちなみにデニムが最も操りやすく、スウエットがちよっぴり苦手だ！

「ラグドールよ！返事をするのだ!!」

一方、脳無と同時に保管されていた行方不明のラグドールを抱えた虎が必死に声を彼女に掛ける。見かけたギャングオルカがひとまず安堵した様子で口を開いた。

「チームメイトか！息はあるのか、良かったな」

「しかし…様子が…！何をされたのだ…、ラグドール!!」

液体に入れられ、裸体となっているラグドール。目は開いており、意識はあるみたいだが、死人のような瞳で目は上の空だった。

プロヒーローが来た事によって、緑谷達はここに居る事は無くなり、飯田は先陣をきって見つからないようにこの場を去ろうと声をかけた。

「ヒーローは俺達などよりもずっと早く動いていたんだ…！」

「すんげえ…」

「さあ、すぐに去ろう。俺達にもうすべき事は無い!!」

危ない真似をしようとした緑谷達よりもヒーローの方が早く事を終息させた。その安心感に安堵した飯田は嬉しそうにそう言うと、緑谷は不安そうにベストジーニストラの方を見つめて口を開く。

「オールマイトの方…かっちゃんはそのうちにいるのか…」

「…火野も、きつとそっちに…」

「オールマイトがいらっしやるのなら尚更安心です！さア早く…」

探していた友人は別の場所に拉致されている。オールマイトが救けてくれるならこれ程心強いものは無い。だが、緑谷と耳郎は何とも言えない表情でその場を見つめていた。

時間は差し迫っており、いつ見つかってもおかしくはない。八百万が飯田の後に続くように、立ち止まっている緑谷と耳郎に声を掛けた、その直後だった。

ベストジーニストらが居る廃倉庫内、暗闇に紛れた奥の部屋から1人の男性の声が聞こえた。

「すまない虎。前々から良い『個性』だと……、丁度良いから……貰う事にしたんだ」

「!?!」

「止まれ!動くな!」

気配すら感じなかったその男性に驚く虎。ギャングオルカはバツと腕を突き出し男に命令するが、男はゆっくりとこちらに向かつて歩く。

「連合の者か」

「誰かライトを……」

暗闇で見えない以上、警戒を緩めず身構えるギャングオルカと虎。灯りを照らそうと指示を出したその時、男性は口を開く。

「こんな身体になってから、ストックも随分と減ってしまったてね……」

圧をかけられても尚、男性は歩みを止めずにこちらに向かつて来る。その瞬間、ベストジーニストが服の繊維を操り、男性のスーツを縛り上げ拘束する。

「ちよ、ジーニストさん、もし民間人だったら……」

「状況を考えて、その一瞬の迷いが現場を左右する。敵には何もさせ
サイラン
るな!」

Mt.レディは言うが、冷静に考えればこんな場所に民間人など居る可能性は極めて低い。ベストジーニストの言う通り、判断を見誤つてしまえばこちらに被害が及ぶ事も有り得る。即座に鎮圧して執行する。その行動を取り乱さず、ベストジーニストは特殊部隊に指示を出そうとした。

「せつかく弔が自分で考え、自分で導き始めたんだ。できれば邪魔はよしてほしかったな」

一瞬、1秒も満たないその瞬間。緑谷達は何が起きたのか分からなかった。気付けば、突如途轍もない轟音と共に、衝撃波が堀を通して響き渡り、聞こえてくるのは男性の声と建物の瓦礫が崩れるような音だけがした。この場に居た者は取り憑かれるように立ち止まる。叫び声を上げなかっただけでもマシだと言えよう。だがその脅威に緑谷達は膨大な冷や汗とかつて味わった事のない死の恐怖が襲ってきた。

ブロック状の岩壁の向こう側に見えるのは男性が吹き飛ばした後の光景だった。周囲の建物は愚か、約半径数km圏内にあるすべてを消し飛ばしている。ベストジーニスト達の生死も分からないこの状況、緑谷の脳内にオールマイトの言葉が過ぎった。

「君はいつか奴と、……巨悪と対決しなければならぬ……かもしれない」と。

そして今向こうに居る男性の言っていた『弔』の言葉。ここまでキーワードが揃っていれば、思い当たる人物はもう1人しかいない。「(なんだよ…嘘だろ!?オールマイト…まさかじゃああれが…:オール・フォー・ワン…:!!)」

息を荒くする緑谷が壁越しに見つめるその先、顔を覆っているパイプのような配管が取り付けられた真っ黒で不気味なマスクをし、黒のスーツを見に纏ったその巨悪の男、『オール・フォー・ワン』は「さて、行くか…」と、まるで準備運動をし終えた様子で呟いたのだった。

☆☆☆☆

「ぼえ!!」

「!!?」

爆豪と火野ウヴァが黒い液体に吞まれ、消え去った後、その現状は伝染するかのようになり、他の敵達ライランの口から黒い液体を吐き出す。

「マズい！全員持っていけるぞ!!」

「クソ！どーなってるんだ一体!!?」

「おんのれッ！私も連れて行け!!」

グラントリノ、アंक、オールマイトは気絶している茶毘と黒霧を含め、次々に吞まれていく敵達ライランを捕まえようと駆け出す。だが、黒い液体は直ぐに連合達を覆い、瞬く間に敵達ライランはその場から姿を消してしまった。

「すみません皆様ア!!」

「お前の手落ちじゃない！俺達も干渉できなかった！恐らく黒霧の『空間に道を開く』ワープじゃなく、『対象のみを転送する』系と見た！」

拘束出来なかったと自分の落ち度だと謝罪するシンリンカムイにエッジショットはフォローを入れながらこの状況の出来事を推測する。

瞬間、この場に残っていた脳無達がオールマイトに目掛けて一斉に飛び掛かり、その身体に噛み付いた。

「オールマイト!!」

グラントリノは叫ぶと、オールマイトは床を蹴り、その体を捻らせ空中へと身を出すと凄まじい速度で回転する。

「Ok la ho ma S M A S H !!」

その勢いに耐えきれず脳無達は四方八方へと投げ出され、壁や床を突き破り吹き飛んだ。その内の一体は天高く上空へと飛ばされるのを下で脳無と交戦していた特殊部隊の1人が見て眩く。

「景気のいいぶっ壊しぶりだな…!!」

「事が事だからだ！敵に集中しろ！こいつら…、あっちから流れて来てるのか…!?!」

廃倉庫に保管されていた脳無。そちら側から送り込まれたのかと警察らは動揺し、混戦となっていた。その中、塚内は応答しない無線

機を握りしめ、エンデヴァー並びにバースへと声を掛ける。

「ジーニストラと連絡がつかない！恐らくあつちが失敗した！」

「こつちに脳無が来たって事は、向こうはヤバい状況なんじゃないのか!?!」

「グダグダじゃないか全ク!!!」

バース・CLAWsを使用し、右腕全体に纏った中距離型支援ユニット『クレインアーム』を装甲したバースは先端のフック『シユプリンガーハーケン』を射出し、複数の脳無達を拘束している中叫ぶと、炎を脳無に向けて放射し、呆れながら怒鳴るエンデヴァー。すると、隠れ家の壁が壊され、剥き出しの室内からオールマイトが「ゴホッ」と咳き込みながらエンデヴァーに声を掛けた。

「エンデヴァー!!大丈夫か!?!」

「どこを見たらそんな疑問が出る!?!流石のトップも老眼が始まったか!?!行くならとつとと行くがいい!!」

「こつちは任せて下さいよ、オールマイト!」

「…ああ、すまない…任せるね…!」

怒号を浴びせるエンデヴァー。だがそれが彼なりの呼び掛けでもあり、オールマイトはその姿勢に安心してこの場を任せ、オール・フォー・ワンが滞在しているであろう、廃倉庫の方へ飛び立つように向かった。すると、その後ろに居たアंकはその方向を見つめながら、神経を研ぎ澄ます。

「…まだ近くで気配を感じるな…、逃してたまるか…!!!」

「っ！おいお前!!」

微かに感じるウヴァと槍無の気配。それを頼りに、アंकもオールマイトの後を追うようにその場から翼を広げて飛び立つ。それを見たグラントリノは呼び止めようと声を掛けるが、アंकは既に空を舞って行った。

☆☆☆☆☆☆

オール・フォー・ワンが何らかの衝撃波の「個性」で消し飛ばした廃倉庫周辺。そこに居合わせたMt.レディ、ギャングオルカ、虎とラグドール、警察の部隊達は深手を負いつつも、まともに食らわずに生存していた。それは1人のプロヒーロー、ベストジーニストがとつさの判断で救出したからこそである。その重症を負ったベストジーニストにオール・フォー・ワンは静かに拍手を行い、賞賛していた。「さすがNo.4!!ベストジーニスト!!僕は全員を吹き飛ばしたつもりだったんだ!!皆の衣服を操り瞬時に端へ寄せた!判断力、技術…、並の神経じゃない!」

「……………いつ…!」

ベストジーニストの行動に敬意を表するオール・フォー・ワン。その余裕のある笑みと言動にベストジーニストは息遣いを荒くしながらも巨悪を睨む。ふと、ベストジーニストはこの作戦が始まる前の作戦会議の事が頭に過った。

連合には間違いなく連合を裏で動かす者がいる。その者の強さはオールマイトに匹敵する力を持っている。だが、そのくせ狡猾で用心深く、自分の身が危険に晒される時は決して表に出てこないと情報部から知らされていた…のだが。

「(話が違う……………!!)」

逆にヒーロー側が押していたと思われるこの状況に自ら進んで現れたのだ。臆するベストジーニスト。

しかし、その考えは一瞬で掻き消される。

彼はプロヒーロー、即ち一流。そんなモノを失敗の理由に……

ズドツ……!

「……………?!」

そう思っていた瞬間、ベストジーニストの腹部に向けて、オール・

フォー・ワンは指先を伸ばすと目視出来ない程の空気丸を飛ばした。「相当な練習量と実務経験故の強さだ。君のは…要らないな。弔とは、性の合わない『個性』だ」

興味がないように吐き捨てる冷静な声。オール・フォー・ワンしかないこの現状、緑谷達は震えが止まらず、動けずにいた。彼ら生徒とは違いヒーロー達は迅速な行動でこの場を終息させたプロ。それをかき消すように巨悪の者は立っていた。明らかに違いすぎるレベル。これが現実なのだと思いき知らされる状況。本当の死の恐怖が襲い掛かり、冷や汗は止まらず、恐怖と震えが彼らを推していた。すると、その時。

「ぶほっ!!ぐっ…!!?ゲツホッ!」

「ゲツホ!!くっせええ…んっじやこりやあ!!」

黒い液体に吞まれ、転送された火野ウヴァと爆豪が現れる。緑谷達はその特徴ある声に直ぐに勘付くと、オール・フォー・ワンが2人を見て申し訳なさそうに口を開いた。

「悪いね、爆豪君。それと…火野君…じゃないか。今の君は『ウヴァ』君だね?」

「あ!!?」

「誰だ貴様…!?!」

声を掛けるオール・フォー・ワンに爆豪は悪態を吐き、火野ウヴァはその人物に問い掛ける。何方も初対面の人物なのか、咳き込みながらも警戒を怠らなく巨悪を見つめる。そんな中、他の敵達も黒い液体から次々と現れ、何人かは、その液体が気持ち悪いのか嗚咽をしていた。

すると、オール・フォー・ワンは真っ先に死柄木に向かって声を掛ける。

「また失敗したね弔。でも決してめげてはいけないよ。またやり直せばいい。こうして仲間も取り返した。この子たちもね…君が『大切なコマ』だと考え判断したからだ。いくらでもやり直せ、その為に僕がいるんだよ。」

全ては、君の為にある」

先生の文字通り、その語りには指導者の思いが込められているように見えるが、不気味さ故かその空気はねつとりとこびりつくような感覚が走る。何かへの復讐か、超人社会を壊そうとしているのか、得体の知れない男に、爆豪、火野ウヴァ、そして緑谷達は冷や汗を垂らしていた。

「ゲッホ……ちよつと先生っ……！救けてくれたのはいいけどもつとマシな方法なかったのっ？くっさいんだけどマジで……」

「ああ、すまないね脇真音優無。黒霧のような正確なワープゲートは生憎使いこなせていないんだ。多少手荒な真似をしてしまったと僕なりに反省はしているよ」

そんな中、文句を垂れる優無に対して礼儀正しく謝罪をするオール・フォー・ワン。すると、オール・フォー・ワンは何か気付いたのか、上の空に顔を上げながら彼は呟いた。

「……やはり、来ているな……」

「!!」

その言葉に隠れていた緑谷達は目を見開く。気付かれてしまったのかと肝を冷やした次の瞬間。

上空から勢いよく飛んで来たオールマイトの拳と拳がオール・フォー・ワンに激突した。しかし、オール・フォー・ワンは予測していたのかそれを掌で受け止める。

「全て返してもらおうぞ！ オール・フォー・ワン！」

「また僕を殺すか、オールマイト。随分と遅かったじゃないか」

その刹那。地面は凹み、衝撃波が辺り一帯に迸る。その場に居た連合達、爆豪、火野ウヴァは巻き添えを食らい吹き飛ばされた。影響は緑谷達の隠れていた岩壁の堀まで抉れ、衝撃に耐えていた緑谷が「オールマイトまで……!!」と驚愕していた。

「バーからここまで5km余り……僕が脳無を送り、優に30秒は経過しての到着……。やはり衰えたね、オールマイト」

「貴様こそ何だその工業地帯のようなマスクは!? だいたい無理してるんじゃないか!？」

両者は距離を取り、互いは悪態をつきながら体勢を整えている。そ

んな中、あのオールマイトの攻撃を素手で受け止めた男に、爆豪は敵のボスだと確信していた。すると、オールマイトは軽快に足を鳴らしながら口を開く。

「5年前と同じ過ちは犯さん、オール・フォー・ワン。火野少年と爆豪少年を取り戻す！そして貴様は今度こそ刑務所にぶち込む！貴様の操る敵^{サイラン} 連合諸共!!」

「それは…やることが多くて大変だな、お互いに」

バツと駆け出すオールマイトに、オール・フォー・ワンは右腕を上げながら言う、オールマイトはハツとする。その右腕が内側から膨張したと同時にオールマイトに向けて突き出した次の瞬間。

空気の衝撃波が放たれ、音が追いついていなく、後から轟音が鳴り響く。オールマイトは最も簡単に後方にあつた建物諸共吹き飛ばされたのだ。建物のコンクリートをぶち破り、その衝撃の余波が辺りに炸裂し、土煙と暴風がその場に居た敵^{サイラン} 達を襲う。

『空気を押し出す』＋『筋骨発条化』、『瞬発力』×4、『臂力増強』×3。この組み合わせは楽しいな…、増強系をもう少し足すか…」

まるで子供が実験道具を弄ぶような態度を出し、独り言を呟く男。土煙が舞う中、それを見ていた爆豪は「オールマイトオ!!」と煙を払って身を乗り出しながら叫ぶ。

「心配しなくてもあの程度じゃ死なないよ。だから…ここは逃げろ弔。この子達を連れて」

オール・フォー・ワンは言う、上げた右腕の指先からペキペキと骨が鳴る音がする。それと同時に、指の形が変化し、真っ黒で鋭利な指になった。

「黒霧、皆を逃がすんだ」

瞬間、5指の棘のような指は不規則に伸びると、黒霧目掛けて勢いよく突き立てられる。隣で見ていたマグネは驚いて声を荒げた。

「ちよーあなた！彼やられて気絶してんのよ!?!よく分かんないけど、ワープを使えるならあなたが逃がしてちょうだいよ!?!」

異論を上げるマグネだが、オール・フォー・ワンは冷静にその理由を応えた。

「さつきも脇真音優無に言ったつもりなんだけどマグネ、僕のはまだ出来たてでね。転送距離はひどく短い上：彼の座標移動と違い僕のもとに持つてくるか、僕の元から送り出すかしか出来ないんだ。ついでに：送り先は人。馴染み深い人物でないと機能しない」

『個性強制発動』!!』

グチグチと生々しい音が聞こえた瞬間、黒霧の頭部のモヤが一気に拡大し、彼の『個性』ワープゲートが作り出された。

「さあ行け」

「行けつて…」

「先生は…」

優無、死柄木が言いかけた直後、瓦礫の山となっていた場所から轟音が鳴り響き、吹き飛ばされたオールマイトが戻って来る。

「逃がさん!!」

「君は他の仲間達と共に弔をサポートしなさい脇真音優無。そして、弔：常に考えろ、君達はまだまだ成長出来るんだ」

オール・フォー・ワンは優無と死柄木にそう言い残すと、ふわりとその身を空中へと飛び、向かって来たオールマイトの拳を受け止める。この場の者に被害が出ぬよう、オール・フォー・ワンは空中へとオールマイトを誘導し、激闘が開始された。死柄木は最強と最凶がぶつかり合うその光景を見つめていると、ハツとしたMr.コンプレスが気絶している茶毘を圧縮し、小さなガラス玉の中へ閉じ込めると同時に口を開いた。

「行こう死柄木！あのパイプ仮面がオールマイトを食い止めてくれる間に！コマ持つてよ」

その言葉に、敵^{ヴァイラン}達はゆらりと爆豪を見遣る。オール・フォー・ワンが時間を稼ぎ、ワープゲートまで開いてくれている。ならば今成すべき事は、目の前にいる逸材を強引にでも連れて行く事だ。敵^{ヴァイラン}達の意図を察した爆豪は「めんつ：ドクセー」と脂汗を垂らしつつ、誤魔化しているのか不敵に笑う。オール・フォー・ワンはオールマイトと対峙しているのを除き、そして気絶しているの2人も除いて現状は1対9。圧倒的に不利な立ち位置だ。

すると、槍無がデーパーストハーブーンを取り出すとこの場に在る皆に向かつて口を開いた。

「……爆豪を連れて……脱出……しなきゃならない……でも……もうひとつ……やること……ある……」

「やること?」

ポツポツと喋る弟に優無が首を傾げる。だが次の瞬間。

「あいつ……連れていけない……!」

槍無はその場から飛び出すと、爆豪ではなく

なんと火野ウヴァに向かつてその槍を振り翳した。

「っ!!」

「っ!!? 弟君!」

「ハっ!!? お前何やってんの!」

かろうじて咄嗟に避ける事ができた火野ウヴァ。その予想外の行動に驚愕し声を張り上げる優無とMr. コンプレス。槍無は火野ウヴァを睨みながらその理由を言った。

「こいつ……さつき屋上で……意識を閉じ込めていた……中の火野映司と喋っていた……その後に来た奇襲……きつと連携して通報したんだと……思う……」

「えっ……?」

「なっ!!? 何を言ってる!? 俺は何も知らないぞ!!」

槍無の言葉に整理がつかない優無は困惑する中、火野ウヴァは焦って動揺していた。すると、敵^{ツイラン}達が全員火野ウヴァの方を見ているのを機に、爆豪は距離を取ろうと一歩下がろうとしたその時。

「おい、待て……」

「っ!」

死柄木だけがその行動に勘付き、爆豪に触れようと手を差し伸ばした。爆破で宙へと跳ぶ爆豪だが、その背後からトガとトウワイスが捕まえようと動き出す。2人が立ち並び、舌打ちをしながら応戦する爆豪。

「……脇真音……そいつを連れて来たのはお前だ。どうするかはお前に任せる……後の奴らはこっちで爆豪を押さえるぞ。先生が身を挺し

てアイツを止めているんだ……絶対、逃すな……！」
「っ……い……」

その間死柄木は優無を背にそう伝えると、彼女は目を見開く。呆然としていたMr.コンプレス、マグネ、スピナーもハツとしトガ達に加勢へと向かう。死柄木も黙って抗う爆豪へと向い、残された優無は息を吐くと、戸惑う火野ウヴァへと振り返り口を動かした。

「弟君は、嘘を付く子じゃあないんだよね……。ここまで来たのに……こうも簡単に裏切るのは……グリードの中でも専売特許なのかな……ねえウヴァ……」

「!?ちよ、ちよつと待てっ！俺は本当に何も知らないぞ!!」

「五月蠅い!!」

弁解しようと火野ウヴァは声を荒げるが優無の怒号を浴びせる。その瞳には涙が浮かばれてあった。そのまま優無はタトバのコアメダルを取り出しオーズドライバーに嵌め込んでいく。そして待機音が鳴るオースキャナーを握り締め、優無は火野ウヴァを睨み付ける。

「ああークソ！切羽詰まって頭ん中ゴチャゴチャだよ！弟君！大馬鹿の姉の尻拭い頼むわよ！変身!!」

「……うん……い……変……身……い……」

髪を掻きながら優無はベルトにオースキャナーをスキャンし、槍無はポセイドンドライバーに脊椎動物のコアメダルを嵌め込み、姉弟は覚悟の目をした瞳で、叫んだ。

タカ！

トラ！

バツタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

サメ！

クジラ！

オオカミウオ！

音声が鳴り響き、優無はヴィランオーズ、槍無はポセイドンへとその身を変え、火野ウヴァへと身構えた。

「な、何でだ…!?俺は…本当に何も知らない…!!」

「お前…もう…黙れ…!フン!!」

「ウぐあっ!!」

火野ウヴァの言葉を無視してポセイドンはディーペストハーブーンを振り上げる。火野ウヴァの肩は斬られ、そのまま吹き飛ばされた。

「ッ!何だ、あの野郎元に戻ったか!」

「余所見するなよ!しちやうよね!」

防戦一方の爆豪が飛ばされた火野ウヴァが視界に入り、声を荒げるとトウワイスが手首に装備されたスケールを模したモノを伸ばしながら接近する。今は人の心配をしている場合ではないこの状況、爆豪は避けながら不服そうに舌打ちをしていた。

「うぐ…クソ…!!なんでこうなるんだ…!!」

流血する肩を押さええながら吠える火野ウヴァ。

何れにせよ、芳しくない現状の刻は止まる事なく、2人の戦士がこちらに向かつて来るよう動いていた。

すると、その時。

ドツクン…!

「っ!な、何だ…!?」

内側から何かが蠢く感覚が体に走る。違和感を覚えたその瞬間、火野の体が紫色に発光し、人間態の本来の姿であったウヴァが跳ね飛ばされた。

「うおあっ!!」

「っ!」

「えっ?ウヴァが火野映司の体から飛ばされた…?」

地面に打ちつけられるウヴァを見てポセイドンとヴィランオーズ

は疑問を抱き、肝心の火野を見遣る。ゆらりと立ち上がる火野。俯くその表情をゆつくりと上げる。その瞳は深紫に輝いていた。

「!?マジで…!?」

「…!?まさか…!」

何かを察したヴィランオーズ、そしてウヴァは驚愕した顔で火野を見つめる。次の瞬間、火野の体から紫色のコアメダルが3枚、飛び出すと、勝手に後ろ腰から飛び出したオーズドライバーが腰へと装着される。そしてそのまま浮遊するコアメダルはスロットへ嵌め込まれると、自動的にオースキャナーが取り出され、そのベルトへとスキヤンされた。

「!!アレが本当ならまずい…!!!」

ヴィランオーズはハツとし、後ろで戦っている死柄木達へと振り返り、大声で叫んだ。

「皆、ここから離れて!!!」

「!!!?!」

全力で声を荒げるヴィランオーズに、死柄木達は驚く。だが、時は既に遅く、ヴィランオーズの背後からその音声が響き渡った。

プテラ!

トリケラ!

テイラノ!

プ・ト・テイラーノ・ザウルーウス!!

絶滅種、恐竜系の名が恐竜の咆哮と共に轟き、禍々しい空気に包まれる。

「…?!寒い…?!」

ふと、見ていたトガが急に寒気を感じたのか身震いをすると…次の瞬間、変身を遂げたオーズの足元から途轍もない冷気が地面を伝って迸った。

「っ!?クソ!」

「弟君!」

「う、うん!」

バキバキと凍っていく地面に触れまいとウヴァは跳ぶと、ヴィランオーズもポセイドンと共にその場から走って逃げる。しかし冷気は止まる事なく、死柄木達の居る方へと襲い掛かる。

「んだこりやつ…!」

「冷た!熱い!」

「っ!触れたら駄目なやつか!」

接近してくる氷結と冷気に驚きながらも距離を取る死柄木達と爆豪。約10メートル満たない場所まで広がった冷気が止まると、その中央にいたオーズが叫んだ。

「ウオオオオオオオツツツ!!!」

「姉さん…あれって…!」

「…オーズの中で最凶の形態…無敵の名を持つ存在…」
「プトティラコンボ」…!!」

辺りの凍らされた地面が咆哮、衝撃波と共に破壊され、その余波から身を守っていたポセイドンとヴィランオーズは冷や汗を流しながら見つめる。

紫をベースとした色に、恐竜を模した体をしたオーズ、
「プトティラコンボ」は真っ直ぐとこちらを見つめる者達を、まるで獲物を狩るような目付きで睨んでいたのだった。

No. 93 絶大と無の力と取り引き

No. 1 ヒーローと敵^{サイラン}連合を裏で操った巨悪の男が激闘している最中、現場から少し離れた場所の空を、翼を広げたアंकが飛翔していた。その時、不穏な気配を感じたのかアंकは飛びながらハツとする。

「っ…何だ…？この気配…」

グリードに似たような気配。だがその奥に感じる濁ったような感覚が走り、アंकは冷や汗を流す。

「まさか…映司…!?クソっ！画風男の奴何やってんだ！」

先に到着しているであろうオールマイトに苛つくアंकは、考えている予想が外れている事を祈り、速度を上げて現場へと向かった。

☆☆☆☆☆☆

「ウウオオオオオオオ!!!」

「何だよありやあ…!?火野の奴、まだあんな姿隠し持ってたのかよ…！」

壁の堀から見つからないように覗いていた切島が、雄叫びを上げるオーズの姿を見て驚愕していた。プテラノドンの頭部、トリケラトプスの角が生えたような胴体、テイラノサウルスを模した強靱な脚部。まるで太古の力を手にしたその形態は、決して味方とは言えない見た目をしており、低い唸り声が聞こえ始める。同時に変化していく体勢と呼吸と共に上下する身体、そこにもはや理性という物が感じられない。そのオーズは、死柄木達、ヴィランオーズ、ポセイドン、ウヴァらを睨むように見つめていた。

「新しい…コンボですわね…」

「ああ…だが様子がおかしいぞ…?!」

初めて見るコンボに八百万と轟は口を開いて言うが、見るからに危険な雰囲気溢れ出しているオーズに愕然としていた。

「火野……！」

飯田、緑谷も目を見開いて啞然と見つめている中、耳郎も心配な表情を浮かべながらオーズを見遣っていた。

激闘を繰り広げているオールマイト、オール・フォー・ワンも同じく、正義とは決して言えないその姿が視界に入る。

「火野少年……!?!」

「これは驚いたね……。僕には感じるよ……。アレがお互いに危険な存在だっ……て事を……！」

オールマイトの拳を腕を交差して防御をとるオール・フォー・ワンは驚いた表情を浮かべているが、その奥底の感情がそれを塞ぎ込み、「良いね……」と不吉な笑みを浮かばせていた。

「ウオオオア!!」

「ツ！来……！」

オーズは咆哮を上げると、ヴィランオーズは身構え、警戒態勢へと入る。プトティラの形態は把握しているつもりで、どのような攻撃を仕掛けて来るのかは予測出来る優無は、一旦距離を取ろうと後方へ足を踏み出した……その直後。

地面が抉れる程、足を踏み出したオーズは脅威的なスピードでポセイドンの方へと詰め寄ったのだ。

「っ!?!」

「ツ！しまっ、弟君!!」

明らかに敵意をこちらに向けていたオーズだが、急にカマをかけたかのようにポセイドンへと接近する。やられたとヴィランオーズは槍無の名を呼び、ポセイドンの方へと駆け出す。標的とされたポセイドンはデーイーペストハーブーンを咄嗟に振り上げた。

「ッ!?!ウオアッ!!」

「なっ!?!」

直撃。した筈なのに、火花が散るだけでオーズの突進の勢いは止まる事なくポセイドンの懐へと入り込むとアツパーをするように拳を

打ち込んだ。その衝撃でポセイドンの腹部から何枚かセルメダルがオーズの足元へ落ちる。

「アぐっ……!!」

「弟君!!」

空中へと吹き飛ばされ、勢いよく地面へ落下するポセイドン。

「こんんの……よくも!!」

怒りが込み上げたヴィランオーズはそのまま背後を見せるオーズへと突っ込んだ。だが、オーズは気付いているのか、オースキャナーを取り出し、ベルトへとスキャンさせる。

スキヤニングチャージ!

音声が鳴り響き、恐竜の鳴き声と同時に緑色の複眼が発光すると、それが伝線するみたくオーリングサークルが光出す。迫り来るヴィランオーズへと振り返り、胴体の「トリケラアーム」の肩部分にある突起物「ウィンドステインガー」が、瞬時に伸びた。

「!」

刹那、ドスツと鈍い音が左肩から聞こえる。一瞬何が起きたのかわからないヴィランオーズは伸びたウィンドステインガーの先を目で追う。それは、ヴィランオーズの左肩を裕に貫いていた。

「……ツツツ?! いぎあああああツ!!」

「ゲホっ……!! 姉さ……ん!!」

気付いた瞬間に襲い来る激痛。大量の流血が地面に落ち、奇声に似た断末魔を上げるヴィランオーズ。腹部を押さえながらポセイドンは抉れた地面から立ち上がろうとするが、ダメージが大きいのか、上半身を起き上がらせるのもやっとな状態だった。その光景を見ていた敵^{ヴィラン}達、爆豪は愕然としている最中、オーズは頭部の「プテラヘッド」から「エクスターナルフィン」と言う紫色の翼を大きく広げる。それは空を飛ぶ為に羽ばたくのではないと、気付いたヴィランオーズ

は痛みに悶絶しながらもハツとし、オースキヤナーを取り出した。

「イイイイ…!!ウえっ…!!こんのおおお!!」

スキヤニングチャージ!!

「!!」

嗚咽しそうになるが、必死に堪えドライバーにスキヤンさせると音声
が鳴り響く。ヴィランオーズの両足が緑色へと発光すると、地面を
強く蹴り、貫いたまま空中へと跳躍する。距離が離れた為、貫いてい
たワインドステインガーがズボツと肩から外れ、ヴィランオーズは
オーズから離れた場所へと落下した。

「あう…!ああアア…!!」

「姉…さん…!!」

「ああ…!!はあ…はあ…!!アレ食らったら間違いなく…死んでたわ
…!!テレビで見てたよりも…お…おっかなすぎるでしょ…!!プト
テイラ…!」

ドクドクと血が止まらない肩を押さえながらヴィランオーズは言
う。咄嗟にジャンプしていなければ重症どころではすまないと悟つ
たヴィランオーズはワインドステインガーとエクスターナルフィン
をしまうオーズを見つめながら、その残虐非道な行動に恐怖を覚え
ゾツとする。標的が離れ、呻き声を上げるオーズの後方、愕然として
いたMr.コンプレスが口を開いた。

「おいおいおい…!冗談が過ぎやしないか!?やる事成す事完全に敵だ
ろ…!」

「!」

動揺するMr.コンプレス。その言葉に反応したオーズはバツと
Mr.コンプレスへと振り返る。すると、足元に落ちていたポセイド
ンのセルメダルを1枚手に取ると、空いている片方の腕を勢いよく地
面へと突き刺した。抉れる地面が紫色に発光し、悍ましい雄叫びと共
に何かを地面から取り出す。恐竜の顎を模した大型斧、それはプト
テイラコンボの専用武器「メダガブリュー」だ。

「ッ!皆…逃げてっ!!」

重症を負ったにも関わらず、ヴィランオーズはオーズの目先にいる死柄木達に向かって掠れた声で張り上げ叫ぶ。その暴走形態が今から何をするのかを分かっているからだ。だが、ヴィランオーズの懸命な言葉を叫んでも死柄木達、爆豪はその場を動けずにいた。メダガブリューを取り出した瞬間、本能的に畏れを感じて動けずにいるのだから。

「っ…いけない！火野少年!!」

今から何をするか、嫌な予感が全身に走ったオールマイトは空中を蹴るようにオーズに向かって突進する。

「させないさ」

対峙していたオール・フォー・ワンは黒霧に仕向けた黒く伸びた指をオールマイトの胴体へと突き刺し、引つ張るように彼を引き戻す。

瞬間、オーズは持っていたセルメダルをメダガブリューの刃の部分、*「克蘭チガルバイダー」*へと挿入すると、グリップ部分を上げた。

ガブツ！ ゴツクン…!!

まるでセルメダルを喰らうような音が鳴り、オーズはそのまま持ち手部分を展開させる。大型の斧とは打って変わり、銃を模した形状へと変化する。それがメダガブリューのもう一つの形態、*「バズーカモード」*だ。

プ・ト・ティラーノ・ヒツサツ!!

*「アックスモード」*だった持ち手部分が銃口となり、その銃口から紫色のエネルギーが凝縮されていく。そしてオーズは畏れを成して動けずにいた死柄木達に、躊躇無くトリガーを引く。目の前にいる全てをモノを葬る、*「ストレインドウム」*破壊光線を放った。

「やべェっ…!」

「皆避けろー!」

ハツとした爆豪が咄嗟に爆破を地面に向け、後方へと下がる。スピナーが叫ぶが、既にその光線は目の前まで迫っていた。その場にいた誰も、ダメかと悟った次の瞬間。倒れていたポセイドンがその光線の前へと立ちはだかった。

「っ！弟君!」

ヴィランオーズが名を呼ぶ直後、光線はデーパーストハーブーンを前に突き出したポセイドンにぶつかり、激しい火花が飛び散った。

「……ツツ!!んうおおおおおおオオっ!!!」

耐えきれぬ程の衝撃が全身に走り、ポセイドンは声を荒げながら死物狂いでその破壊光線ストレインドウームを頭上へと逃す。威力は収まる事なく光線は天高く上昇していった。その余波が地上を走り、土煙が舞う中、息を荒くし、ポセイドンはその場に膝をつく。

「はあ…はあ…!!」

「…た、助かったわ……！貴方凄いわよ槍無ちゃん…」

命の危険を悟っていたマグネは安堵し、ポセイドンに声を掛けるが、その時。

ポセイドンの体の色素が抜け落ちるようにノイズが走ると同時に、変身が解かれた。

「……あれ……!!」

光線を逃しただけでかなりの体力を持っていたが、相当なダメージを負っているわけではないポセイドンは、強制的に解かれた変身に啞然とし、両腕を見つめていた。

「何だっ!?!弟の奴、元の姿に戻りやがったぞ……!」

「あんな攻撃を真正面から受けたんだっ。仕方ない…それより、死柄木どうするよっ。あのオーズは見境無しに俺達を殺す気で来るぞ。肝心の爆豪だけでもさっさと連れてこの場から連れ去らないと、俺達もやられる!」

「脇真音ブラザーズもやられたしよっ！大丈夫かな？大丈夫だろっ！」

ヴィランオーズは重症、ポセイドンは変身解除、今はトガが交戦しているが、この場の全員で取り押さえてワープゲートを通らなければ

ば、いつ襲って来るか分からないオーズ相手に困惑するスピナー、Mr. コンプレス、トウワイズ。

死柄木は激戦を繰り広げているオールマイトとオール・フォー・ワンを見ながら、首元をガリガリと掻きむしり、その口を動かした。

「あの姉弟はもう使い物にならない…：だつたら、二手に別れてこつちで何とかするしかないだろ…。トウワイズとマグネ、スピナーはあのヤバそうなオーズの注意を外らせ…：奴の攻撃には絶対当たるな…、残り俺と一緒に爆豪を捕まえる。Mr. コンプレス、お前が頼りだ」

「やだね！任せろ！」

「もはやアレは肅清対象」

「…しようがないわね」

「やれやれ、余裕な時こそショーつてのは完璧なのにな。まあ、仕方がないか…」

状況を把握した死柄木は言うとその場にいた4人は了承し、行動に移ろうとした。だがその時。

ガブツ！ ゴツクン…!!

プ・ト・テイラーノ・ヒツサクツ!!

「!!」

なんとオーズは再びセルメダルをメダガブリューに装填し、もう一度破壊光線ストレインドウムを放とうとしていたのだ。

「ちよつ、ちよつと!?!またアレ打つ気なの!?!」

「絶対避ける！間違はなく死ぬぞ!!」

2度目の死の危険を感じたマグネが言うと、スピナーが声を荒げる。

すると、オールマイトの攻撃をガードしながら見ていたオール・フォー・ワンはオールマイトから一步距離を取ると、右腕の指先から黒く鋭利な指へと形を変える。

「っ！何度も同じ攻撃など…」

「通用しないのは承知の上さ」

オールマイトが言った直後、オール・フォー・ワンは瞬時に黒い指を引つ込め、その右腕を突き出した。ズツ！と重い衝撃が走り、その右腕からは空気砲のようや衝撃波が放たれ、もろに直撃したオールマイトは再び吹き飛ばされてしまう。

そして、オール・フォー・ワンは脅威的なスピードでその場からジャンプすると、マグネ達の前へと落下し、トリガーを引いたオーズの正面へと立ちはだかった。

「!!」

オール・フォー・ワンは直ぐに左腕を突き出すと、円盤状の防壁が展開され、破壊光線ストレンジウムを真正面から受け止める。防壁に光線がぶつかり、その激しい衝撃が辺りへと迸った。

「……これはなかなか……」

防壁に亀裂が入り、左腕がビリビリと衝撃が伝わっていく。だがそれにオール・フォー・ワンは何処か嬉しそうにそう言って、左腕に力を込め、防壁を何層も作り出す。瞬間、爆発が起こり、マグネ達を巻き込むように土煙が舞った。

「先生……!」

心配する表情で死柄木は見つめていると、土煙からオール・フォー・ワンの姿が現れる。無傷で立っていたので、死柄木は安堵していた。

「……ウウ……!!」

唸り声を上げるオーズはメダガブリューを「アックスモード」へと切り替えると、オール・フォー・ワンに向かって駆け出す。オール・フォー・ワンは再び左腕を突き出し、防壁を出そうとしたその時。

「……!?!」

「ウオア!!」

「!」

違和感を感じたオール・フォー・ワンは自身の左腕を見つめると同時に、接近してきたオーズはメダガブリューを振り下ろす。間一髪で空中へと飛び退けたその直後、吹っ飛ばされたオールマイトがこちらへと向かって突っ込んで来た。

「おのれ！次は無いぞ!!」

「やれやれ、しぶといね君も……！君達、あのオーズの攻撃には絶対に当たってはならないよ」

迎え打とうとオール・フォー・ワンはオーズに向かって右腕を突き出し、空気砲を放つ。吹き飛ばされるオーズと同時にオール・フォー・ワンは立ち尽くしていた死柄木達に忠告し、一旦区切ると、地面に直撃したオーズを見ながらその口を動かした。

「あの攻撃に当たれば……『個性』が使えなくなる」

「！！？」」

☆☆☆☆☆☆

数分前。

「はあ……！はあ……！」

オーズから強制的に切り離されたウヴァは、あの場から離れて走っていた。息が荒くなる中、爆発と衝撃が鳴り響く音が聞こえ、ウヴァは振り返った。

「クソ……！何もしていないのに、何故この俺に攻撃を……！それにオーズの奴も紫のメダルを使いやがる……！あんな状況に居てたまるか……！！」

身に覚えのない槍無の言いがかりに、プトティラとなったオーズ。あの場に居れば、間違いなく破壊されると判断し、恐怖を覚えたウヴァはこっそりと抜け出し、逃げていたのだ。

「……………」

振り返り、ウヴアはこの先どこへ行こうかと考えていた。そして一歩踏み出そうとした、その時だった。

「ハアッ！」

「ぐあっ!？」

突然背後に強い衝撃と痛みが走り、前方に飛ばされ、地面を滑るように転がるウヴア。何事かとバツと振り返ると、そこにはアंकが立っていた。

「ア、アंक…!？」

「お前、何故1人でこんな所にいやがる？映司はどうした？」

「…フン！オーズの奴なら、紫のメダルを使って脇真音共と向こうで戦ってる…!」

「何…!?!…チツ、やはりあの異様な気配は紫のメダルだったか。…で、お前は何をしているウヴア」

「ツ……………」

アंकの質問に黙り込むウヴア。すると、アंकは静かに笑い出し、その口を動かした。

「ハツ…………読めたぞ？お前、どうせ脇真音に愛想尽かされてのこのこと逃げて来たんだろ？」

「ツ！う、五月蠅い!!分が悪いと判断しただけだ！完全な力さえあれば俺は逃げてなんかいなかった!!」

「ほお、凶星のようだなあ？おまけに器の小さい言い訳を垂れやがる…やはりお前は脳筋だけの虫頭のようだな」

「!?アंक…貴様…!!」

挑発的に発するアंकに、ウヴアは拳を握り締め、今にも飛び掛かろうとしていた。だが、アंकは右手を前に出し、口を開く。

「昔ながらの付き合いだから言っておくぞウヴア。この世界の人間は“個性”って言う変な能力を使って生きている。甘い誘惑なんかに関与していると痛い目を見たのは十分理解しただろ？」

「だから何だ!？」

「超人社会…皮肉なもんだ。あれだけ欲望に飢えて何も出来ない人間が、その欲望に近づこうと個性^カを持って動き回っている。…お前、こ

ここで逃げたとしても一匹だとどうする事も出来ないぞ」

「……」

「フン、簡単に言えば忠告だ。この先何をしようと俺にとってはどうでもいい。だが力を持った奴らが直ぐに捕まえに来るぞ。完全体じゃないお前なら、抵抗出来たとしても取り押さえられるのが目に見えるがなあ？」

悔し気に黙り続けるウヴァ。サイラン敵に見限られた今、単体で欲望のままに行動したとしても、プロヒーローが動き出すのが裕に想像出来るアंकはウヴァを見下すような表情で見つめ、笑みを浮かべる。何処で何をしようが、この世界に居る限り、ヒーロー社会と言う名の目で見張られている。アंकはそう言いたいのだろう。

その時、オーズ達が居る方角から大きな爆発音と恐竜が雄叫びを上げるような声が聞こえる。

「チツ！結局この世界でもあのメダルも一緒に、暴走のサービス付きか……！世話の焼ける馬鹿が……」

余計な無駄話してしまったと見つめるアंकは再び飛ぼうと翼を広げようとした。

「……待てっ、アंक！」

「ッ？」

呼び止めるウヴァ。その両手は強く拳を握り締めており、言い出せなさそうな表情を浮かべていた。が、何かを覚悟したのか、小さく頷くとウヴァはアंकに目を合わせず、その口を開いたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「ウオオアアアア!!!」

「もオツ!?止めろって言われたけど近寄るのも無理よこいつ!?あの攻撃食らったら『個性』発動しなくなるって言われたのに!」

「文句を言うなマグ姐!死柄木が爆豪を捕らえるまで注意を外らせと指示を出された以上、我々はやる事をやるだけだ!責務を真つ当するぞ!ステイン様は仰ったー!」

「カッコいい台詞は行動で示してからにしてちょうだい!あんたさつきから威勢張ってるだけじゃないの!」

何とか距離を一定に保とうと動くマグネだが、オーズは詰め寄らんとメダガブリューを振り上げて猛進して来る。スピナーはナイフを構えているが、マグネを先頭に出して後方で騒いでいるだけだったのかマグネは激怒する。そんな中、貫通していた肩を押さえ横たわっていたヴィランオーズにトウワイスが駆け寄り、心配そうに声を掛けた。

「ああ…優無ちゃん!怪我大丈夫!?!平気だろ!」

「変身…してる時は多少は痛みが和らいでるよ…!でも、もう戦うのはキツいかな…それよりも…、早く…皆逃げないと…!」

「任せる!取り敢えず優無ちゃんは先に黒霧さんのところへ連れて行くからよ!」

「ありがとうトウワイス…!」

トウワイスの肩に抱かれ、ゆっくりと立ち上がるヴィランオーズ。だがプトティラコンボのオーズ相手にマグネとスピナーだけでは時間稼ぎすら儘ならない。負傷してしまった体と、プトティラコンボの特有の能力に恐怖心を抱いてしまい、ヴィランオーズは自身の弱さに情けなく拳を握らせていた。

一方で爆豪は襲い来る死柄木、トガ、Mr.コンプレス相手に防戦を強いられていた。二手に別れた人数で逃げれるチャンスが増えたと思いきや、敵^{ヴィラン}達も緊急事態なのか本気で取り押さえようと攻撃を仕掛けて来る。相手に触れて『個性』が発動する死柄木とMr.コンプレスには絶対に触れさせまいと爆破で応戦するが、その隙を突こうとトガが迫り来る。オールマイトも助けに行かせまいとオールフォー・ワンが相手となってしまう爆豪の元へ行けれずにいた。

「弟君…！平気…!？」

「僕は…大丈夫…変身出来ないけど…！姉さんの方が…!？」

「大丈夫…！お互いメダルが破壊されてないだけマシだよ…!？」

黒霧のワープゲートが強制発動された付近で座り込んでいた槍無に連れて来られたヴィランオーズは声を掛ける。負傷はしているものの、コアメダル命に別状は無い為安堵するヴィランオーズ。

「よし、おいお前達！優無ちゃんは無事に連れてきー」

トウワイスはホツとし、時間を稼いでくれているマグネとスピナーに声をかけようとしたその時。応戦していた筈のマグネとスピナーが目の前まで飛んで来た、否。飛ばされて来たのだ。

「マグ姐！スピナー!？」

地面へと転がる2人は意識を失っている。ハツとしたヴィランオーズはオーズの方を見遣ると、オーズの腰から伸びているテイルテイバインダー恐竜の尻尾を地面に叩きつけていた。恐らくあの尻尾で2人を薙ぎ払い、此方まで吹き飛ばしてきたのだろう。

激戦区となってしまったこの現場で、唯一動ける緑谷達。だが彼らは戦う事が許されない状態。仮に爆豪を救い出せても暴走しているオーズを戦闘無しで救けるのは不可能に等しい。どうすれば…!と緑谷が悔し気な表情を浮かべていた。

「ウオオアアアツツ!!」

「!？」

すると、雄叫びを上げるオーズが、ヴィランオーズらの元へと駆け出す。理性を失ったオーズにもはや成す術は無い。全てを壊さんと、メダガブリューを振り上げたその瞬間だった。

オーズの頭上から炎が降り注ぎ、地面に落下した瞬間、行手を阻むように燃え上がる。

「!？」

「熱っ！冷たっ！何だ!？」

「炎…!？どこ、から…!？」

オーズは立ち止まり、トウワイスとヴィランオーズは何事かと、降って来た上を見上げる。その頭上に居たのは翼を広げたアंक

だった。

「アंक……!?!」

「……フン。おいウヴァ、…しっかりやれよ?」

驚くヴィランオーズにアंकは鼻を鳴らし、そう言った瞬間ヴィランオーズは「ウヴァ……!?!」と驚愕し、途中でいなくなつた事に気付いて辺りを見渡す。

「貴様ら…、さつきはよくもやってくれたな……!」

その声にハツとし、ヴィランオーズは振り返ると、そこにウヴァと何体もの奴らがこちらへとゆつくり歩いてきた。全身包帯に巻かれた人間のような姿で、顔の中心には何かを抜かれたような黒い穴が空いており、まるでゾンビのように呻き声を上げていた。

「……! “屑ヤミー” ……!?!」

その正体はセルメダルを “割る” 事によって生成される屑ヤミー。驚愕するヴィランオーズ。一方で、アंकはこちらに視線を向けて唸り声を上げるオーズに向かって口を開いた。

「……随分と懐かしい姿になつたもんだなあ、映司。相変わらず、世話の焼ける馬鹿だな……!」

「ウウ……ウオオアアアア!!」

炎が燃え盛る中、オーズは雄叫びを上げる。その咆哮が木霊する中、アंकはグリード化した右腕を強く握り締め、オーズを睨み付けるように見つめていたのだった。

No. 94 反撃と鎮火の灯火

「ウヴァ……やっぱり君は………!」

「フン、先に仕掛けて来たのはそつちだろが!俺は俺のやり方で動く!……あの暴走しているオーズにも用があるしな」

激戦区となり、苦戦を強いられていた状況で突如現れたグリードのアंकとウヴァ。屑ヤミーを引き連れて敵意を示すウヴァにヴィランオーズは愕然と、寝返った事を確信して口を開いていた。

「貴様らの相手はコイツらで十分だ……行け」

ウヴァは指示を出すと、骨が軋むような音と同時に唸り声を上げながら屑ヤミー達は敵^{ヴィラン}達へと進行する。

「……トウワイス……!私の……分身作れる……!?!」

「任せろッ!拒否する!」

自身が戦えない上に、マグネとスピナーは意識を失っている。槍無も変身出来ない今は、頼れるのはトウワイスのみとなっており、ヴィランオーズはお願いをすると、トウワイスは矛盾した態度で頷き、ヴィランオーズの分身を作り出す。

「こつちもかなり戦力失ってるつてのに……君つて奴は……!!ハアツ!!」

分身したヴィランオーズは、ウヴァの行動に怒りを拳に変え、屑ヤミー達へと駆け出した。そのまま激突し、屑ヤミーと交戦を開始している分身体。その中、本物のヴィランオーズはアंकの方を見遣る。燃え盛る炎が壁となり、その先にオーズが立っている。恐らく、そつちに邪魔者が来ないように炎で行手を阻んでいるのだろう。状況が状況なので、暴走するオーズと戦わずに済んだ事に、少しだけホツとしているヴィランオーズ。

「……今は、コイツらと……あつちの奴を優先……!……ううっ……!?!」

暴走するオーズを相手に捕まえて連れて帰るのは危険すぎる。増してや重症を負ってしまったては返って足手まといになってしまう。ズクンと激痛が絶え間なく襲い来る肩に、ヴィランオーズはせめて、

屑ヤミーが死柄木達の方へ行かせまいと分身体に頼るのだった。

予想外の助っ人の登場に、緑谷達は驚いていた。

「アंक君…!？」

「一緒に居るあの怪物…、もしかして奴がウヴァか？」

飯田が言うのと、初めて見るグリード化したウヴァを見て轟が驚く。鋏形を模した顔に昆虫のような鎧をした上半身、だが下半身は不完全な状態のような脚をしている。それでも、その姿は怪物と同然で不気味さを感じていた。何故火野を連れ去った元凶であるウヴァがアंकと一緒に居るのかは分からない。ヴィランオーズらと敵対している時点で寝返ったと考えた方が妥当だろう。

すると、必死に策はないかと模索し続けていた緑谷が、空を駆け抜けて現れた事を思い出した。

「隙……!」

ハツとした緑谷は戦場を見ていた飯田達に声を掛ける。

「飯田くん、皆!」

「だめだぞ…緑谷くん……!!」

「違うんだよ、あるんだよ!決して戦闘行為にはならない!僕らもこの場から去れる!かつちゃん^{ウイラン}と火野君を助け出せれる方法が…!!」

「助け出されるって…火野は!?!あんな状態じゃあ連れ出せるなんて無茶だよ…!?!」

「変身を強制的に解除すれば行けるんじゃないやねえか？」

「切島さんの言う事には一理あります…。ですが、それでは戦闘をせざるを得ないと言う事にもなりますわ…! 敵が^{ヴィラン}あんなにもあつさりやられてしまう程の力ですと、万が一私達が救出に行くとなれば、必ずしも無事では済みません」

緑谷の言い分に耳郎が問う。何か策があったとしても暴走するオーズを連れて行くのは無謀すぎる。仮に切島の案で、強制的に変身を解けば何とか連れ去られるかもしれない。だが、八百万の言う通りそれだと戦う事になり、緑谷達が戦闘無しで救うと言う意に反してしまふ。

「いや…!今の火野君は僕らで助け出せない…!救けるのはかつちゃ

「ただでいい……！」

「そんな……！」

「大丈夫耳郎さん……！その為にアंक君がいる……！」

「……！」

「……！成る程な……緑谷、言ってみてくれ」

緑谷の考えにハツとした耳郎。それに理解した飯田達もまたハツとし、轟が続きを聞く。

「でもこれは……かつちゃん次第でもあつて……！」

来んな、デク……

爆豪くん、皆に助けられんの……屈辱なんと違うかな……

緑谷の脳内に爆豪と麗日の言葉が過ぎる。その突き刺すような言葉の余韻を吹き飛ばすように緑谷は続けて口を開いた。

「この策だと多分……僕じゃ……成功しない。だから切島君。君達が成功率を上げる鍵だ」

「俺が……？」

まさかの自分を指名されてキョトンとする切島。堀の向こうで爆発音が響く中、緑谷はその意図を説明し始める。

「かつちゃんは相手を警戒して距離を保って戦ってる。火野君がかつちゃんの所に行つて仕舞えばこの作戦はまず無理だと思う……でも、幸いにもアंक君が足止めをしてきている。なら今が絶好のチャンスだ……。火野君はアंक君達がきつと救け出してくれる。タイミングはかつちゃんと敵達（ライバル）が2歩以上離れた瞬間」

「飯田さん……」

「……バクチではあるが、状況を考えれば俺達へのリスクは少ない……。何より成功すれば、状況の半分がそれ以上が好転する……やろう」

不安を煽る八百万。だが爆豪を救け出せれば、暴走して手も足も出せないオーズに死柄木達は無理に近寄る事は無い筈だ。戦闘をせず一人だけでも救出出来れば、少なくともオールマイトの負担が減ると判断した飯田は、緑谷の策に同意し、その身を委ねた。

その一方で、オール・フォー・ワンに拳を繰り出すオールマイトは、

アंकの登場に驚き、声を上げる。

「アंक少年……！ついて来てしまったのか……！」

「ほお、アレが火野君の『個性』から生まれたグリードのアंकかい？とてもヒーロー側に居る存在とは思えない身なりじゃないか」

「アंक少年は立派なヒーローとして火野少年をサポートしている！
貴様如きが見誤るな!!」

一旦距離を取るオール・フォー・ワンは言う、オールマイトは激昂し、再度接近して拳を突き出す。腕を交差し、防御をとったオール・フォー・ワンは続けて口を開いた。

「君こそ勘違いをしてるんじゃないのか？あのオーズを見たまえ。無差別に人を襲い、破壊衝動に駆られている。もし僕がマグネ達を救けに行かなければ間違いなく彼らは死んでいたよ？賞賛して欲しいね、僕は人を救ける行為を行ったんだよ？」

「白々しい！何か目的があつて近づいたただけだろに！」

「人助けをしたのに酷い言われようだね……。まあ、興味はあつたさ。おかげであのオーズの事を少し知れたからね」

力を入れ激怒するオールマイト。だが、オール・フォー・ワンはその拳を払い退き、マスク越しでも分かる不気味な笑みを浮かべ口を開いた。

「あの姿は力を与える代わりに無差別な行動をとる。わかるかい!?暴走ってヤツさ！一度でもその力を味わってしまえば、何度も使ってしまうのが人間だからね！その内、手の付けられないようになる！そして何れは仲間に手を掛けてしまうだろう!!」

「そうなる前に、私が止める！」

「口では何とでも言えるさ。いい加減現実を見て考えろオールマイト。あの子はヒーロー側の人間ではない。脇真音優無のように、彼はこつち側に足を踏み入れたんだ。僕は忠告したよ？仮に今を守ったとしても、内側からきつと……壊れる」

「黙れっ!!」

染み込ませるような揺さ振りを言葉でかけるオール・フォー・ワンに、オールマイトは振り切るように吠え、巨悪に突っ込む。だが、そ

の勢いには些か全力とは言えなかった。アंक達が来てくれたと言えど、理性を失ったオーズなや加え、死柄木達に責められている爆豪がこの区間にいる。2人の存在が、全力を出しきれていなかったのだ。しかし、その状況下で尚、オールマイトは諦めてはいない。危険を顧みず、駆けつけたアंकのように、オールマイトは拳を握らせ、声を張り上げた。

「どんな状況であろうと、私は決して諦めない!!」

「哀れだね、偽善だけ並べてヒーローは失うモノも沢山多いだろう!」

互いに吠え、両者の拳がぶつかる。風圧が全体に広がり、その風が地面に降りていたアंकにも渡り、土煙が彼を覆うように振りかぶる。

「ぐっ……チッ!あんの野郎、パンチ1つでどんだけの威力なんだよ…!?!」

「グオア!!」

「!?」

余所見をしボヤいた瞬間、オーズが駆け出しメダガブリューを振り下ろしてきたのを、アंकは間一髪で体を逸らして避ける。ギリギリの範囲で避けた為か、服がハラリと切れた。

「アアアアア!!」

「おい、ウヴァ!屑をこつちにもよこせ!偽物オーズに手こずりすぎなんだよ!」

「は!?!ならお前も作れば良いだろ!セルメダルだって貴重なんだ!」

「生憎、卑怯者のやる事は俺には性に合わないんでな!そう言う雑魚生産はお前だけで十分だろ!」

「…!!アंक貴様……!」

「こつちは命懸けで危なっかしい大馬鹿と相手してんだよ!取引に応じてやってんだから俺の命令に従え!嫌なら、のこのこと尻尾巻いて何処へでも行けばいい!」

「…!!クソ、覚えてろよ!」

体を震わせ、怒りを押さえるウヴァは澁々と了承し、数枚のセルメダルを取り出すと、それを手で割っていく。そしてそれをアंकのい

る場所へと投げると、その割れたセルメダルから屑ヤミーが何体か生成されたのだ。屑ヤミー達はオーズを標的とし、ゆつくりと前進して襲い掛かろうとする。

「グオアッ!!」

何体かメダガブリューで斬りつける。火花が飛び散り倒れるかと思いきや、仰け反っただけで直ぐに屑ヤミー達は態勢を立て直す。ゾンビのように斬ってもノーダメージの屑ヤミー。

何だこいつらは…?と言わんばかりにオーズは警戒し、唸り声を上げているのを見たアंकは口を開いた。

「これで少しは時間を稼げるか……。後は……」

そう言い終わり、アंकは本物のヴィランオーズとトウワイズがいる後方を見遣る。そこでは、先程からずっと、襲い掛かる死柄木達から爆豪が防戦一方で退けていた。

「ウゼえ!!いい加減諦めるクソ 敵 共!!」
ヴィラン

「嫌!私もそろそろ疲れてきたので貴方がさっさと諦めてください!」

「コイツ野蛮の割に軽快な動きしやがる!逸材って凄いなあ!てな訳で諦めて降伏しなよ!」

「寝言は寝て死ね!!」

器用に急所を狙わず手足をナイフで斬りつけようとするトガに避ける爆豪だが、その隙を突こうとMr.コンプレスと死柄木が襲い掛かる。だがその連携も爆豪はより威力を増した爆破で応戦していた。汗が出れば出る程爆破の範囲と威力が高まる爆豪にとって持久戦は有利に有りつつあるが、それでも人である事には変わりないのか、疲労が溜まり動きが鈍っていくのが見て分かる。これ以上戦いが続けば何方が負けるかは目に見えていた。

そこでアंकは隙を見て爆豪に加勢に行こうと考えている。雑魚の屑ヤミーでも時間稼ぎには打ってつけのヤミー。だが、一瞬でも離れて屑ヤミーが倒されてしまえば、オーズは目の前にいる動く獲物を襲い掛かろうとするだろう。そして何より、本人である火野の体力がいつまで持つのか分からない。オーズを止めている間に爆豪が捕ら

われてしまうかもしれないし、爆豪に加勢しに行つてオーズの足止めが不可能になるかもしれない。

一刻を争う選択にアंकは戸惑っていたのである。

「チツ……簡単に捕まりやがって……」

正直爆豪、人間を救ける事などどうでもいい。救けてアイスやセルメダルをくれる訳でもない上に、仮にあの爆豪を救けるなど虫唾が走るくらいの拒絶反応を起こすだろう。だが、ここで救出せねば、正気を戻した火野が絶望してしまう事にアंकは嫌気が刺していた。また無茶をされてしまったては困る。そう思ったアंकは、一か八かで、隙を見て飛び立とうとした、その時だった。

「行くよ！飯田君、切島君!!」

爆豪が爆破で距離を取った瞬間、タイミングを見計らっていた緑谷達が動き出した。緑谷のフルカウルと、飯田のレシプロバーストによって生まれる推進力を活かし、2人に抱えられた切島の硬化で堀の壁を打ち抜く。コンクリの瓦礫が飛び散り、戦場へとその身を投げ出した瞬間、すかさず轟が天高く登れる程の氷結を形成して繰り出し、緑谷達が駆け上がる。

「（敵は僕達に気付いていない！これまで敵に散々出し抜かれて来たけど……今、僕らがそれを出来る立場にあるんだ！手の届かない高さから、戦場を横断する！）」

予想外の緑谷の策に、その場にいた敵達は驚愕の表情を隠せず、氷結から飛び出した緑谷達をただ見上げている。それはアंकとウヴァもだった。

「何だ、奴らは!?!」

「?!あいつら……!?!」

火野のクラスメイトの事を知らないウヴァは新手かと警戒する中、アंकはこちらを見ている緑谷に気付き、目を見開いていた。

すると、緑谷達に気付いたオール・フォー・ワンはまずいと思ったのか緑谷達に向けて右腕を上げる。だがその行動を緑谷は予測して

いた。巨悪が正義を食い止めているのなら逆もまた然り。土煙の中からオールマイトの裏拳が炸裂し、オール・フォー・ワンは横へと吹き飛ばされていた。

「切島君ッ！」

今だと、緑谷は叫ぶ。横断した状態で、緑谷が手を差し伸べても爆豪はその手を掴んでくれない。それは飯田、耳郎、轟、八百万も恐らく無理である。

だけど緑谷は確信していた。

ただ1人、入学してから今まで、近寄り難い爆豪の側をずっと追いかけて、対等な関係を築きあげていた、切島の呼び掛けにならきつと応えてくれる筈だと。

「来いっ!!」

天高く跳ぶ切島は爆豪に向けて叫び、その手を伸ばす。愕然としていた爆豪は、逃がさないと死柄木が伸ばした腕を爆風で払い除けるように空を跳び……

「…バカかよ」

その手を強く掴んだ。

今をどう動くのが最善か、緑谷を含めて各々は、オールマイトを見てから不思議と体の萎縮が治っていた。

そしてこれが、彼ら達の最も最善な行動へと繋がったのである。

「お、おいおいマジかよ!」

「何処にでも…現れやがる!!」

「アレは……爆豪君…の友達……!?」

敵達は驚愕の表情を浮かべていると、オールマイトも緑谷達の存在に気付き、「マジかよ……全く!」と呆れながらも笑みを浮かべていた。

「爆豪君!俺の合図に合わせ爆風で……」

「てめエが俺に合わせろや!!」

「張り合うなこんな時にイ!」

勢いが弱まり、爆豪に指示を申し出すが爆豪はそう言って吠え、切羽詰まっている状況なのか切島が張り上げながら宥める。その時、緑

谷は空中を跳び交う中、地上にいるアंकを見つけると真剣な眼差しでコクリと頷いた。

火野君は頼んだよ、アंक君ー。

「……………フン、ああ分かった」

アイコンタクトをした緑谷にアंकは鼻で笑い、屑ヤミーを斬って蹴散らすオーズを見遣る。爆豪が居なくなり、余計な心配をせずに済んだその表情はやる気に満ちているような顔をしていた。

「思ったとおりだ、向こうに釘付け！」

「今のうちに行きましよう……！」

堀に隠れていた轟、八百万はそう言い、隙を突いて密かに逃げ出そうと走り出す。耳郎も後を追おうとするが、その足は立ち止まり暴走するオーズの方を見遣る。

「……………ごめん火野……！後は頼んだよ、アंक……！待ってるから……！」

自分達で救けられなかった事を謝り、同時にアंकに後を託すように言うと、耳郎もその場から駆け出した。せめて爆豪だけでもこの場から居なくなれば、オールマイトの負担を軽く出来る。それが耳郎達に出来る最善の策だった。

「ちよつと、ちよつと……！爆豪君……連れ去られちゃったんだけど……………!？」

「逃がすな！遠距離ある奴は!？」

「黒霧も荼毘も……マグ姉もスピナーもやられてる！」

屑ヤミーとウヴァは分身体のヴィランオーズに任せて、本体のヴィランオーズとトウワイスはMr.コンプレスの元へと移動して連れ去られる緑谷達を見上げる。この場から彼らを追おうとしても遠距離で攻撃出来る者は全員ダウンし、ヴィランオーズも槍無も深手を負ってしまい追跡する事は出来ない。

「……トウワイス……！私を……もう一体作って……！分身でもアイツらを止めるくらいなら出来る……！」

ハツとしたヴィランオーズはトウワイスにお願いする。トウワイ

スは「任せろ、やだね！」と了承し、分身を作り出そうとしたその時。
「ぎゃつ…!?」

突然ヴィランオーズの後頭部に強い衝撃が走る。何事かとヴィランオーズは周りを見ると、次々とその場にいた敵^{ヴィラン}達が白目を向いて倒れていた。

「何……爺さん……!?」

複眼のタカアイで目視をすると、脅威的なスピードで彼らの後頭部を蹴った老人、グラントリノが現れ、「個性」を使用して飛び交っていたのだ。

「遅いですよー!」

「お前が速すぎんだ!」

オールマイトが気付き、声を掛けると呆れた様子でグラントリノは返事をし、アंकと対峙しているオーズ、そして屑ヤミーとウヴァの方を見ながら口を開いた。

「敵^{ヴィラン}共は蹴つ飛ばしたが、あの金髪のカキと面と向かってるあいつお前んとこの生徒じゃねえか!? それにあの緑のバケモンとゾンビみてえな集団…ありや何だ!?」

「火野少年は突然変身して暴走しています…! 今はアंक少年が押さえてますが……。アंक少年と一緒に居るのは恐らく火野少年の中にいたアंक少年と同じグリードのウヴァと言う奴です…! 見ていた所、あの軍団はそのウヴァが出したモノだと…」

「……感ではあるが、見たところ今はあの怪物敵意は無さそうだな…だがあの紫のオーズ…これも直感じゃが、あの子は放つてはいかんぞ…!」

異様な殺気を感じるオーズを見て、長年の感が危険だと察知するグラントリノ。すると、グラントリノは空を跳び、かなり離れた場所に着地する緑谷達を確認したのかグラントリノは怒り気味で口を開いた。

「それとなア! あいつ緑谷!!! つとに益々お前に似て来とる!! 悪い方向に!!!」

「保須の経験を経てまさか来ているとは……十代! ……ゴホツ…だが、

これで戦況は変えられる…!!」

裏拳で吹き飛ばされ、瓦礫を背に尻餅をついているオール・フォー・ワンに向かつてオールマイトは指を指し言い放った。心残りが半分消え去り、第二ラウンドが始まろうとした中、グラントリノは残っている敵^{サイラン}達へと駆け出した。

「火野はひとまず奴らに任せろぞ！残りの連合は3人！終わらせる！」

「……！」

「くっ……！」

「弔君、優無ちゃん、終わりたくないです」

立っているのは死柄木とトガ、そして重症を負ったヴィランオーズ。ぐったりとしているヴィランオーズはトガに肩を借りて起き上がらせて貰っているが、肩の出血が酷く、もはや立っているのですらやっとな状態となっていた。戦力が激減してしまい、残された死柄木達はもはや万事休すとなっていた。

「…やれやれ、してやられたな。あの子達の一手に」

ボソツと呟くオール・フォー・ワン。すると同時に指先から黒い指をオールマイト目掛けて伸ばした。往生際が悪い攻撃かとオールマイトは横に顔をずらしてソレを避けるが、その黒い指の「個性」を思い出したのかハツとし、後ろを振り返る。それはオールマイトを狙ったのではなく、付近で横たわっているマグネへと突き刺していた。

「強制発動 磁力!!」

マグネ

個性『磁力』

自身から半径4.5 m以内の人物に磁力を付加!

全身・一部力の調整可!男がS極、女がN極となる!!自身に付加はできないぞ!

突き刺されたマグネから強制的に「個性」が発動され、グラントリ

ノを迎え打とうとした死柄木の体が急に仰け反り、グラントリノの足蹴りをかわす。その瞬間、死柄木の体が宙に浮き、トガ、及びヴィランオーズへと目掛けて飛んで行った。

「んえっ…ちよ…!？」

「やー、そんな急に来られてもお」

N極となったトガとヴィランオーズに、死柄木を含め、気を失っている敵^{ヴィラン}達がS極となつて吸い寄せられていく。2人にぶつかり、その勢いで黒霧のワープゲートへと押し込まれてしまう中、役目を果たしたマグネをオール・フォー・ワンは黒い指でワープゲートへと投げ入れ、同時にグラントリノに邪魔されまいと攻撃を仕掛ける、その間1人、死柄木は吸い寄せられながらも必死に抵抗し、声を出した。

「待て…ダメだ、先生!」

恩師を放つて自分だけ救かるのは嫌だ。

必死に地面へ掴もうと抗うが、磁力の力は凄まじく、死柄木の力ではどうする事も出来ない。

「その身体じゃ、あんた…ダメだ…!!」

懸命に伸ばす腕、だがそれは届かず、逆に離れていく一方だった。ゲートへと引きづり込まれていく中、死柄木は幼少期の頃を思い出す。絶望し、路上に傾れ込んでいた頃、手を差し伸べてくれた先生^{OFA}を。

「俺はまだ…!」

「弔、君は戦い続ける」

言い掛けた直後、死柄木はワープゲートの中へと飲み込まれ、渦巻いていたソレは黒霧事その場から消滅し、跡形も無く消え去った。教え子にそう言い残したオール・フォー・ワンは一気に詰め寄るオールマイトへと身構える。

「僕はただ、弔を助けに来ただけだが…戦うと言うなら受けて立つよ」

死柄木達がこの場に居なくなつた以上、オール・フォー・ワンもまた全力を出さんと迎え討つ覚悟で言い放つ。その場に居たグラントリノを『転送』し、自身の目の前に出して身代わりをさせる。そして、プラスで『衝撃反転』をグラントリノに付与させ、勢いの止まる事のないオールマイトの拳がグラントリノに直撃し、同時にその衝撃が反

転してオールマイトの右腕が弾き飛ばされる。恩師を殴ってしまった事に「すみません!!」と謝りながらもオールマイトは激進した。

その一方で、オーズは斬っても襲い掛かるウヴァの屑ヤミーを相手していた。

「ウヴァ！映司の注意を引け！その際に止める!!」

「俺に命令するな！」

爆豪、^{ウイラン}敵連合が居なくなり、こちらも本気で対処しようとしてアंकは動き出す。

紫色に刃が光ったメダガブリューを薙ぎ払い、その場にいた屑ヤミーが消滅した直後、アंकはウヴァに向かって叫ぶと、ウヴァは嫌悪しながらも頭部から電撃を放出させ、オーズへと放電する。

「ッ!!ウオアア!!」

「っ!!化け物が、全く効いてねえぞ…!」

以前は放電だけでもダメージは入った筈なのだが、完全体では無い為、直撃しても火花が飛び散る程度で効いてない素振りを見せ雄叫びを上げるオーズ。そして攻撃を仕掛けたウヴァに標的を変え、足を踏み出そうとしたその時。

オーズの背後に詰め寄ったアंकはオーズドライバーへと手を突き出す。

「ッ!!ガアア!!」

「!?!」

察知したオーズはメダガブリューを後ろに向かって横振りを繰り返すが、アंकは咄嗟に右腕で刃を受け止めた。

「…!!うう…っ!おおおっ!!」

刃が食い込み、右腕からボロボロとセルメダルが落ちて激痛が走る。だがアंकは痛みを吹き飛ばすように声を張り上げ、左腕でオーズドライバーを掴み、傾けてある部分“オースレイター”をガチャン!と戻した。

「!?!あ……………」

機能停止するように声を漏らし、オーズは持っていたメダガブリューを手放す。地面に落下したメダガブリューは紫の光と共に地

面へと飲み込まれ、同時にその身を宿していた変身が解かれた。

「やったか……！」

「はあ……はあ………！ア……アン……ク………ありがとう………」

暴走も相まってか酷く顔色が悪い様子で膝をつく火野にウヴァは警戒しながらも変身が解かれた事に安堵し、その火野は息遣いが荒くなりながらも目の前にいるアंकへと礼を言い残そうとするが、その場で気を失って倒れる。

「……………この、大馬鹿が………！」

痛む右腕を押さええながら気絶している火野に吐き捨てるアंक。すると、直ぐに火野を担ぎ上げ、ウヴァに声を掛けた。

「さっさと……から離れるぞ。後はオール奴マイトが何とかしてくれる筈だ」

「お、おう………」

ウヴァは了承すると、アंकは翼を広げてその場から飛び立つ。ウヴァも後を続くように昆虫の脚を活かした驚異的なジャンプ力で後を追うようにその場から跳躍し、姿を消す。それに気付いたオールマイトは安堵した様子でホツとし、拳を作る。その眼は口では言わずとも『ありがとう』とアंकの後ろ姿を見送っていた。そして、目の前にいる巨悪を睨み付けるように見つめ、口を開いたのだった。

「これで心残りは消え去った……！……ここからが本当の勝負……決着をつけるぞ!!」

「そうだね……お互いにね………」

No. 95 OFA (オール・フォー・ワン) と AFO (ワン・フォー・オール)

オール・フォー・ワン、オールマイトの激闘が続く中、その余波で被害にあった神野区は混乱に陥り、人々が逃げ惑う最中、緑谷の策で場を離れていた轟が耳郎、八百万を引き連れながら緑谷に電話をかけていた。

「緑谷、そつちは無事か？」

『何とか、うんっ！轟君の方は!?逃げ切れた!?』

「多分な。奴の背面方向に逃げてるプロ達が避難誘導をしてくれる」

『よかった…。僕らは駅前にいるよ！あの衝撃波も圏外っばい！奪還は成功だよ！』

「いいか!?俺ア助けられたわけじゃねえ！一番良い脱出経路がてめエらだったただけだ！」

「ナイス判断！」

「オールマイトの足引っ張んのは嫌だったからな」

駅前に逃亡した緑谷が電話をしている時、爆豪が呟くと同時に電話をし終えたのか緑谷はスマホをしまうと、どこか浮かない表情になっていた。

「火野君の事が気になるのか？」

それに気付いた飯田が緑谷に声を掛ける。緑谷は俯きながら「うん…」と応えると顔を上げて口を開いた。

「かっちゃんの言う通り、あの場に居れば足を引っ張っていた…。これが、僕らに出来る最善の筈…。アंक君、グラントリノだって来てくれていた。アंक君達を信じてかっちゃんだけを連れ出したけど…正直『見捨てた』感じになった気がして……………」

「…緑谷君、俺達は学生身分故に、戦闘を行ってはならない。本来ならば、あの場にはならない存在だ。火野君の救出は出来なかった

が、爆豪君だけでも戦闘無しで救いだせたのだ。俺も悔しいが、俺達の出来る最善の行動をした。後はプロとアंक君に任せて俺達は信じて待つとしよう。君のやった事は間違っではないぞ」

友達の火野を残して去ってしまった事を悔やむ緑谷に、飯田は同じく悔しい気持ちを見せて同情する。緑谷の策はあの場に居たプロヒーロー達にとって予想外の出来事だったが、おかげで爆豪だけでも連れ出せたのはオールマイトにとってかなり楽な道へと繋がれた筈。恐れを振り切った行動に感服しながらも言う飯田に緑谷は「：ありがとう」と一言礼を言い、空を駆ける報道のヘリコプター数機が視界に入る。

緑谷はヘリコプターが行く先を見つめながら、その先にいるオールマイト達を気にかけて、心配そうに眺めていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「……うっ……」

「目エ覚めたか？」

「アंक……？」

目が覚めて火野は目の前にいるアंकに気付く。ぼんやりとした意識の中、火野はゆっくりと体を起き上がらせると、そこにいたのはマンションの屋上だった。夜の神野区の街並みが明かりに照らされているその中で火野はハツとし、状況を確かめようとアंकに声をかけた。

「アイツらは……!? うっ……!」

「馬鹿が、暴走したんだからダメージは体に残ってる。今は大人しく座っとけ」

「暴走……? 俺……何がどうなったんだ……?」

「紫のメダルだ。力が強い分、その力の強大さに飲み込まれたんだろな。……お前、いつからあのメダルを持ってやがった?」

「紫のメダルって……前にアंकが言ってたコアメダルだよな……？…
分らない、ウヴァに乗っ取られて何とかしようって思ったら急に
……！そう言えばウヴァは……!？」

「俺は……だ」

アंकと話している際、火野はウヴァの事を思い出して言うと、屋
上の柵に寄りかかっていたウヴァが反応する。

「ウヴァ……。何でアंकと一緒に……？確か、2人って仲悪かったん
じゃ……？」

「フン、お前に頼みがあつて協力して残っているらしいぞ。まあ、俺に
とってこいつはいない方がいいがなあ」

「お前は黙ってる……！」

不仲だと聞いた火野はこの場に一緒にいる事に疑問を抱いている
と、アंकのぼやきにキレ気味に怒るウヴァ。そして大きく溜息を吐
くとウヴァは火野に近づき、その口を開いた。

「オーズ……『取引』だ。俺もお前と共に行動させてもらうぞ」
「……え？」

突然の言葉に火野はキョトンとしてしまう。

一度協力を申し出て断られたウヴァが何故そう提案してきたのか。
そして仲の悪いアंकと何故一緒にいるのか。

それは、オーズが暴走していた時にアंकと“交渉”していたの
だった。



「あ？……取引だと？」

「お前の言う通り、この世界の人間は前の世界とは大きく違う変な力
を持ってやがる。セルメダルを集めた所で、今の俺だと抵抗するのも
難しい。……そこでだ。俺は……オーズと、お前と一緒に行動してやる。

あの脇真音には色々借りが出来たからな……」

「……フン、まさかお前が、少しは知恵を絞れる事を考えるようになったか……。だが……お前と一緒にいるメリットは俺にはあるのか？」

「奴はヤミーを作れると言ったな？その分前は全てお前にくれてやる」

そのウヴァの提案にアंकは目を見開き、「ほお……」と呟く。だがその表情は直ぐに疑心暗鬼となって口を動かした。

「都合の良過ぎる提案だな。どうせ、何か企んでるだろう？」

「……ああ、確かにな。俺の要求は………」

☆☆☆☆

「え……？体を貸して欲しい……？」

ウヴァからの取引の要求内容に再び火野はキョトンとそう言い、大きく目を見開いていた。その理由をウヴァは続けて喋る。

「お前の体に乗っ取って、グリッドである俺は初めて色を認識出来た……。あんなにも良い景色がな……」

ウヴァはそう言い、夜の空を見上げる。燦んでボヤけた視界、その光景どれもが色彩など一切無い。ウヴァは火野の体に入ってその色鮮やかな景色に感動したのだろう。すると、アंकが鼻を鳴らして口を開いた。

「フン、おい映司。コイツは自分の為なら平気で裏切る奴だ。それを急に心変わりして協力するなんて虫の良い話にも程がある。俺は信用出来ないぞ」

「何だど？さつき手伝ってやっただろうが！」

「ハッ！それはお前が勝手に協力したからだろ？お前如きの虫ケラを信用する要素が何処にある？」

「……!!貴様ア……!!」

アंकの言い分に拳を震わせ今にも襲い掛かろうとした直後、火野

は「ちよちよちよ!?!」と声を張り上げそれを止めた。

「アंक！お前だつて人の事言えないだろ！」

「あ?…フン、人か…：…そいつはグリードだぞ？」

「グリードつて…、ならそれこそお前もグリードじゃんか」

「なっ…!?!」

ボソツと悪態染みた言葉を呟き、アंकは絶句する。いつもなら手を出してもおかしくないアंकなのだが、暴走による疲労とダメージが蓄積されている火野の姿を見て同情したのだろう。アंकは返す言葉も無くなり、舌打ちをしていると、火野が「…とりあえず」と口を開いた。

「…さつきまでの記憶が曖昧だから、確信は持てないけど、今現状仲の悪い2人がここにいるつて事は、ウヴァがアंकに協力して俺を救ってくれたんだろ?で、行く宛が無くて…俺達と一緒に居る代わりに、ウヴァは俺の体を貸して欲しいつて事だよな?」

「おい待て、何だ、お前コイツを信用するのか？」

話の流れ的に取引を飲もうとする火野の言葉にアंकが割入る。その発言に火野は首を傾げながら口を動かした。

「え…いやだつて、事情は如何であれ、救けてくれた事には変わりないだろ。それを断る理由なんてどこにも無いし」

「…!?!良いのか…?」

「良いも何も、俺は最初からそうするつもりだったんだから、逆にこっちからお願ひしたいくらいだよ」

「…おい映司、こいつは俺とは違うんだぞ。そうやってまた…」

「それはもう過去の話でしょ?今は助け合わなきゃ…：…よっ…と」

火野はそう言つて、重い足を上げて立ち上がる。若干千鳥足になりながらもウヴァに歩み寄り、そつと手を差し伸べた。

「ウヴァ。俺の体を好きにしても別にいい。でもその代わり、人を襲うような事は絶対しない事。メダルを優先に動くような事もしない事。俺との約束、守れる?」

その差し伸べた手。そして曇りの無い真つ直ぐな瞳で火野は言う。

「…：…良いだろう。オース、お前に協力してやる」

「うんっ。…あ、それともう一つ」

ウヴァは了承し、その手を掴もうとすると、火野は思い出したかのように口を挟んだ。

「オーズじゃなくて、俺は火野映司。ちゃんと名前があるんだからその名前で呼んで」

「ム…：分かった。よろしく頼む、映司」

「よし、決まり！よろしくウヴァ」

ニコツと笑い、火野はウヴァの手を掴み握手を交わした。それを見ていたアंकは不服そうに眺め、腕を組みながら鼻を鳴らす。

「何処までもお人好しが…」

「まあまあ、戦力は多い方がアंकだって助かるだろ？」

「フン！脳筋野郎の虫が戦力になると思うか？せいぜい困ぐらいが関の山つてとこだな」

「何だ?!アंक！あの脇真音オースより先に貴様から始末してやろうか?!」

「上等だ！お前みたいな虫ケラが今の俺に敵うと思うのか?!ここでぶっ潰してやる！」

「ちよちよ!!?ま、待つてってばー」

歪み合うアंकとウヴァの真ん中に入り、それを止めようとする火野は、何か思い出したのか「あ」と声を漏らす。

「ウヴァが仲間になるって事は…うくん…大丈夫なのかな…」

「何がだ？」

「…フン、馬鹿が。こいつは今学生の身分、それで尚お前のせいで今回の事件の人質となっていた状態なんだ。敵に企てたお前を庇うのに色々手続きとかが必要なんだよ。もつとも、ヒーロー側がお前を許してくれるとは思えないがなあ？」

火野を救い出せたは良いものの、今回の事件は警察とヒーローが大きく含有している為、敵側ライランに寝返ったウヴァを仲間に出れましたなど都合が良過ぎる話でもある。アंकの言う通り、手続きと説得をするとなると、しばらくは警察のお世話になるという事になる。面倒臭そうに息を吐くアंक。すると、火野はボソツと呟いた。

「今まで俺の中にはアंकだけが入れたんだけど、2人まとめて入れるのかな…?」

「……そっち?」「あ?」「ム?」

予想打にもしない一言にアंकとウヴァは思わずツツコミを入れてしまう。そして、2人揃って声を漏らしたのか、同時に互いは顔を見合わせていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「俊典…!」

爆豪、火野、ワイラン敵達がこの場からいなくなり、心置き無く戦う事が出来るオールマイトは、渾身の一撃をオール・フォー・ワンにお見舞いする。だが、グラントリノは息遣いが荒くなるオールマイトの顔を見て驚愕していた。オールマイトの体からは蒸気が立ち上り、顔の半分以上がトウルーフォームに戻り掛かっていた。活動限界が来てしまったのだ。

「ワンフォーオール先代継承者、志村菜奈から…!」

「貴様の穢れた口で…お師匠の名を出すな…!!」

拳の先に倒れているオール・フォー・ワンは、オールマイトの一撃で仮面のマスクが大破し、のっぺらぼうのような悍ましい顔が露わとなりながらも、そのオールマイトの先代の名を口にし、オールマイトは逆鱗に触れたのか怒りをぶつける。だがそのねつとりとした感覚は止まる事無く巨悪は口を動かした。

「理想ばかりが先行し、まるで実力の伴わない女だった…!ワン・フォー・オール生みの親として恥ずかしくなったよ。実にみっともない死に様だった。…どこから話そうか…!」

誇れ俊典!ハナから持つてる奴とじゃ本質が違う。お前は“力”

を勝ち取ったんだ！

「ツ!!Enough!!」

瞬間、オールマイトの脳内に「先代」の言葉が過ぎる。「力」が無
い自分に授けてくれた恩師。それを愚弄するような物言いにオール
マイトは激怒し、殴り掛かろうと拳を振り上げたその時。その一瞬の
隙を突いてオール・フォー・ワンは右腕を膨らませオールマイトを殴
り吹き飛ばした。天高く飛ばされた先にはちようど到着したのか報
道のヘリコプターが飛び交っていた。このままではぶつかってしま
い、巻き込んでしまう。何とか体制を立て直そうとした直後。

「俊典ー!」

「!」

ジェットで跳躍し、ボロボロのオールマイトを寸前で受け止めたグ
ラントリノ。オール・フォー・ワンは「邪魔を……」と咳き込みなが
ら立ち上がり見上げていた。

「6年前と同じだ!落ち着け!!そうやって挑発に乗って!奴を捕り損
ねた!!腹に穴を開けられた!お前のダメなとこだ!奴と言葉を交わ
すな!」

「……………はい…」

感情任せに動いてしまった弟子に喝を入れながら、オール・フォー・
ワンから離れた場所へと無理矢理着地するグラントリノ。過去にも
同じ過ちを繰り返す所だったオールマイトは何も言えずにただ頷い
ていた。

「前とは戦法も使う「個性」もまるで違うぞ。正面からはまず有効打
にならない!虚を突くしかねえ。まだ動けるな!?!限界超えろ!正念場
だぞ!!」

「……………はい…」

既に満身創痍。活動限界を超えつつある体は悲鳴を上げていた。
だが相手は1人、こちらは2人。今、巨悪を逃してしまえば平和とい
う概念が壊されてしまう。グラントリノの言う通り、怒りを力に変え
るよう、限界の体を奮い立たせ、オールマイトは強く頷いた。

その一方で、先程飛び交っていた報道のヘリが地獄絵図と化している神野区をカメラで映しながらライブ中継を行って全国に知らせていた。

『悪夢のような光景！突如として神野区が半壊滅状態となってしまうました！現在オールマイルト氏が元凶と思われる敵と交戦中です！信じられません！敵はたった一人！街を壊し！平和の象徴と五角以上に渡り合って……』

それは瞬く間に伝わっていき、テレビ、パソコン等を通して視覚していた国民達は驚愕し、不安が押し付けられ、皆は画面へ釘付けとなっていた。駅前へと逃げた緑谷達もまたそうだ。そして、緑谷と合流しようとして神野区の繁華街を通っていたアंकや火野達もまた、ビルに映っていた大画面のその中継を愕然としながら見守っていた。「弔がせつせと崩してきたヒーローへの信頼、決定打を僕が打ってしまつてよいものか……」

中継されている中、オール・フォー・ワンは警戒するオールマイルト、グラントリノに向かって両手を広げ、言うと一旦区切り、その悍ましいのつぺらぼうの表情でニヤリと不気味に笑うような仕草を見せ、続けて口を動かした。

「でもねオールマイルト。君が僕を憎むように、僕も君が憎いんだぜ？僕は君の師を殺したが、君も僕の築き上げてきたモノを奪つただろう？だから君には可能な限り醜く惨たらしい死を迎えてほしいんだ！」

悪魔にも似たその顔で言い終わるとその左腕が大きく膨らむ。

「でけえの来るぞ！避けて反撃をー」

「避けていいのか？」

攻撃を仕掛ける素振りを見せ、グラントリノは空中へと飛び出す。だが、手を突き出したと同時にオール・フォー・ワンは違和感のある言葉を投げかける。その瞬間だった。オールマイルトも避けようと体を動かした直後、背後から瓦礫が動くような音が聞こえる。そこには、逃げ遅れたのか瓦礫に埋もれていた女性が取り残されていたのだ。

「おー！！」

慌ててグラントリノは動かなかったオールマイトに気付き、引き返そうとオールマイトの元へ飛んで行く。

「君が守ってきたものを奪う」

刹那、オール・フォー・ワンの左腕から空気を圧縮させた衝撃波が放たれる。辺りの瓦礫は吹き飛ばされ、地面が抉れる程の威力にグラントリノは防御をとるが吹き飛ばされそうになる。

「まずは怪我をおして通し続けたその矜持……」

土煙が舞う中、オール・フォー・ワンは言いながら不敵にも笑みを浮かべる。こうなる事を予測していたかのように。

「惨めな姿を、世間に晒せ」

その目先にいるのは、血まみれの拳を突き出していたオールマイトだった。立っていた場所の背後以外は衝撃波で原形を留めていない抉れた地面が広がっていた。自分を犠牲にしてまで市民を救けるのはヒーローの証。だが、満身創痍だったボロボロのオールマイトはその受け止める力で全てを出し切ってしまう、その身体は筋骨隆々の時は正反対の本来の姿へと成り果ててしまっていたのだ。

そしてそれは、平和の象徴であった姿とは比べ物にならない姿で、中継を通して世間に晒されてしまったのだった。

そこに映っていたのはボロボロになって、今にも倒れそうなオールマイトの本来の姿だった。

☆☆☆☆☆☆

一方で、緑谷達のいる駅前もまた、大画面に映し出されていた映像のオールマイトを認識している最中、報道のリポーターさえも、その姿を見て困惑しながらも、実況をすべく口を動かした。

『えつと…何が…え…？皆さん見えますでしょうか？オールマイトが…しぼんでしまっています…』

人々の希望、平和の象徴と謳われていたNo.1ヒーローのその実態に、世間が事態を把握出来ずぼかんとする。ただ一人、緑谷はその姿を見て愕然とし、冷や汗が止まらず、顔が真っ青に変わっていた。

「そんな…ひみ…っ…」

平和の象徴の正体がこんな痩せこけて頼りない姿なんて予想打にしない。それはオールマイト本人が公表しないでくれと頼んでいたからだ。悪に屈しない強靱な肉体で、人々の前に立っていたその秘密を、巨悪によって打ち砕かれてしまったのだ。

「頬はこけ、目は窪み!!貧相なトップヒーローだ。恥じるなよ、トウルーフオームなんだろう!?!」

正体を暴かせ、世間に知らしめたオール・フォー・ワンは愉快そうに声を張り上げる。だが、そんな嫌がらせなど通用しないと云わんばかりに、オールマイトは、ギン!と巨悪を睨みつけていた。

「……………そっか」

「たとえ己の身体が朽ち衰えようとも…その姿を晒されようとも…私の心は依然平和の象徴!!一欠片として奪えるものじゃあない!!」

身体がボロボロであろうと、その心は死んではない。悪に屈しな

いとはこの事を言うのだろう。その状態でも尚、立ち向かおうと意思を見せるオールマイトに、オール・フォー・ワンは驚き、大袈裟に賞賛した。

「素晴らしい！参ったよ。強情で聞かん坊な事を忘れてた。じゃあれも君の心には支障ないかな…」

人口呼吸器の音が聞こえる中、オール・フォー・ワンは言うど、人差し指をスツと出して口を開いた。

「あのね……死柄木弔は志村菜奈の孫だよ」

さらりと口に出したその一言。だがその一言はオールマイトにとって驚愕の言葉だったのか、時が止まったかのように目を大きく見開き、その動作は固まっていた。

「君の嫌がる事をずうつと考えてた。君と弔が会う機会をつくった。君は弔を下したね。何も知らず、勝ち誇った笑顔で…」

「ウソを……」

「いやいや事実さ。わかってるだろう？僕のやりそうな事だ。あれ…おかしいなオールマイト、笑顔はどうした？」

受け止めきれない事実に向かって追いつかず、否定しようとするオールマイト。だが、オール・フォー・ワンは両手の親指で爛れた頬をくいくいと上げる素振りを見せた途端、オールマイトはハツとする。

その仕草は、オールマイトの師匠、先代の志村奈々の癖でもある仕草だった。

人を助けるってつまり、その人が恐い思いをしたってことだ。命だけじゃなく、心も助けてこそ真のヒーローだと私は思う…。

どれだけ恐くても、「自分は大丈夫だ」つつって笑うんだ。

世の中、笑ってる奴が一番強いからなー…

「き……や、ま……い！」

志村奈々の言葉が頭を過ぎる。挑発に乗るなどグラントリノに言われたばかりだが、その冷静な判断は大きく揺さぶられ、掻き消された。絶望と、罪悪感がオールマイトに押し寄せられるように襲い掛かる。

「やはり…楽しいな！一欠片でも奪えただろうか」

「くくおおおー…!!」

無邪気に、そして愉快そうに嘲笑うオール・フォー・ワン。師匠の孫を害していたことにオールマイトは打ち震えていた。すると、身を挺して守った瓦礫に挟まれていた女性が涙を流しながら、そのか細い声で口を開いたのだった。

「負けないで…：オールマイト、お願い…：救けて」

ヒーローとして、何度もその声を聞き、人々を救い出して来た。そしてその思いは伝達するかのようには、生中継を見ていた画面越しの人々もまた、1人、また1人と口を動かしていく。

「オールマイト…！」

「あんたが勝てなきや…：あんなの誰が勝つんだよ…！」

「姿が変わってもオールマイトはオールマイトでしょ!?!」

「いつだって何とかしてきてくれたじゃんか!」

「オールマイト！頑張れ!!」

「まつ、負けるなあオールマイト!!」

「頑張れえええ!!」

駅前が集まっていた人々は徐々に声を張り上げ、声援をその辺り一帯に轟かす。打ち震える緑谷達も困惑しながら、側にいた爆豪と共に、ボロボロになった背中に向かって叫んだ。

「勝って!!」

「勝てや!!」

「オールマイトオ!!」

他の市民達に負けずと必死に叫ぶ2人。勿論それは、画面先に居るオールマイトには届かない声援だ。しかし、それは届かないと知っていても、平和の象徴を突き動かす動力源となっていた。力など等に出し切っていた筈のオールマイトのか細い右腕が一気に膨張する。

「お嬢さん、もちろんさ」

穏やかで優しいその声が女性を元気づけ、更にはオール・フォー・ワンを若干怖気付かせていた。

「ああ…：多いよ…：ヒーローは…：守るものが多いんだよ、オール・

フォー・ワン!!」

焦りと絶望が消え去ったように、オールマイトの顔は負傷していな
がらも笑顔を取り戻す。

「だから、負けないんだよ」

大規模な攻撃を何度も相殺し、限界など等に超えた筈の状態。その
筈なのに、右腕だけがマッスルフォームという歪な姿が、今の彼を物
語っているとも言えた。

「渾身。それが最後の一振りだね、オールマイト」

ふわりと、オール・フォー・ワンは空中へと浮かび、徐々に上昇し
ていくと同時に口を動かした。

「手負いのヒーローが最も恐ろしい。腸を撒き散らし迫ってくる君の
顔、今でもたまに夢に見る。二・三振りは見といた方がいいな」

兆しとも言えるその姿に、オール・フォー・ワンは言いながら右腕
を大きく膨張させる。距離をとって圧縮させた空気砲を放とうとし
た次の瞬間。突然横から巨大な炎がオール・フォー・ワン目掛けて
迫って来た。気付いた巨悪は、その圧縮させた腕を薙ぎ払うように放
出し、その炎を相殺する。ハツとしたオールマイトは振り返った。

「何だ貴様…その姿は何だオールマイトオ!!!」

そこに立っていたのは哀れな姿のオールマイトに怒鳴り声を上げ
るのはエンデヴァーだった。後ろにはエッジショット、バースも並び
に立っているが、オールマイトの姿にかける言葉が出せず、愕然と立
ち尽くしていた。

「全て中位ミドルレンジとはいえ…、あの脳無達をもう制圧したか。流石No. 2
に昇り詰めた男」

どうやら送り込んだ脳無達を一掃し、こちらに加勢しに来たのだろ
う。賞賛するオール・フォー・ワンだが、それを無視して、エンデ
ヴァーは目の前に立っているトゥルーフォームのNo. 1に向かっ
て「貴様オールマイト…」と歯を食い縛る。平和の象徴を超える為に研鑽を重ねて
来た日々、その差故に己の限界を知り、個性婚までして追い抜こうと
した人生を。

「何だその情けない背中は何!!!」

絶望と憎しみが目標でもあり執念でもあった平和の象徴のその姿に、人生全てを懸け、必死に越えようとしてきた男が目の前で無様を晒しているのが耐えられなかったエンデヴァーは激昂し、叫んだ。

「応援に来ただけなら、観客らしく大人しくしてくれ」

激励と見受けた巨悪は、呆れたような素振りで言い、エンデヴァー達に向けて膨張した右腕を突き出す。すると、エツジシヨットが細く鋭く捻った身体でオール・フォー・ワン目掛けて突っ込んで行くが、巨悪はそれを容易に首を逸らして避けた。

「抜かせ破壊者。俺達は救いに来たんだ」

エツジシヨットは言うのと、その隙にと加勢に来たバース、その他に素早く飛び出したシンリンカムイがシンリンカムイは倒れているMt.レデイ、ギャングオルカ、ベストジーニストを伸ばした木の腕で巻きつけ拾い上げる。

「頑張ったんだな…!!Mt.レデイ」

ボロボロになって意識を失っているMt.レデイにそう言うシンリンカムイ。更に、オールマイトの背後の瓦礫が、ガラ…と音がする。そこには体を柔らかくした虎がラグドールを片手で抱えながらも、埋もれていた女性の救護に回っていた。

「我々…には、これくらいしか出来ぬ…あなたの背負うものを少しでも…」

「虎…!」

自身もボロボロの身体なのに、救命を優先するその行動に感服するオールマイトだが、構わず虎は続けて口を開いた。

「あの邪悪な輩を…止めてくれオールマイト…!!皆…あなたの勝利を願っている…!!どんな姿でも、あなたは皆のNo.1ヒーローなのだ…!」

必死に伝えるその言葉にオールマイトは大きく目を見開いていると、グラントリノを見つけ駆け付けていたバースが便乗して口を動かした。

「虎の言う通りですよ、オールマイトさん」

「!」

「大丈夫ですか、爺さん」

「俺は大丈夫だ…」

バースの存在に気づき、オールマイトは振り返ると、怪我をしたグラントリノの安否を確認し、再度バースはオールマイトに声を掛けた。

「今、中継を通して全国の市民があなたを見えます。勝ってくれよう祈り、そして願ってるんです！オールマイトさん、絶対倒して下さいよ！」

国中が今願っている言葉を、どんな姿であろうと、目の前にいる平和の象徴を信じて代弁するバース。

その熱意は、神野区の繁華街にいた火野も同じだった。No. 1 ヒーローの勝利を信じて叫んでいた。

「負けるな、オールマイトお!!」

必死に叫ぶが、それは決してオールマイトに届かない。が、その思いはきつと伝わっている。1人1人の声援がオールマイトの背中を押ししているよう木霊していくのだった。

「煩わしい」

刹那、その一言と同時にオール・フォー・ワンから衝撃波が放たれ、その場にいた者は吹き飛ばされる。

「精神の話はよして、現実の話しよう」

かろうじて衝撃から耐えたオールマイトに向かって巨悪は言う、その右腕に異変が起き、バキバキと骨が軋むような音と共にその形を変えていった。

『筋骨発条化』、『瞬発力』×4、『膂力増強』×3、『増殖』、『肥大化』、『鋌』、『エアウオーク』、『槍骨』。今までのような衝撃波では体力を削るだけで確実性がない。確実に殺す為に、今の僕が掛け合わせられる最高・最適の『個性』達で、君を殴る」

『個性』を重ねて、言い終わる頃には、その右腕は歪で、不気味、腕とは決して言えないような形へと膨張していた。空中からオールマ

イトに向かつて飛び出したと同時にオール・フォー・ワンはオールマイトと手合わせをして確信を得ていた。彼の中にはもうワン・フォー・オールはない。今オールマイトが使っているのは余韻、あるいは残りカス。譲渡した後の残り火だと。そしてその火は、使う度に力を失い弱まっている。もはや吹かずとも徐々に消えていく弱々しい光だと。更にもう一つ、巨悪の中で確信があった。

「緑谷出久。譲渡先は彼だろうか？」

先程、爆豪を助けに来た少年が発動した“個性”にオール・フォー・ワンは気付いていた。その名前を聞いて一瞬顔が曇るオールマイトを見て巨悪は接近しながらも続けて口を動かした。

「資格も無しに来てしまった…、まるで制御できてないじゃないか。存分に悔いて死ぬといいよオールマイト。先生としても、君の負けだ」

そう言ったと同時に、オール・フォー・ワンは歪な右腕を大きく振りかぶる。オールマイトもマッスルフォームと化した右腕を構え、両者の拳が激突し、大規模な衝撃が轟音と共に巻き起こる。

「（“衝撃反転”。君の放った力は全て君に返って…）」

拳がぶつかる最中、オール・フォー・ワンは続けて“個性”を付与し、反転した力がオールマイトの右腕へと返していた。その衝撃でオールマイトの右腕の至る所から流血し、バキバキと骨が折れる音が鳴ると同時に血飛沫が飛び散る中、「そうだよ…！」とオールマイトは口を開いた。

「!?」

「先生として…、叱らなきゃ…！いかなのだよ！私が、叱らなきゃいかんのだよ!!!」

体から限界で蒸気が立ち上ろうとも、平和の象徴として引き下がる事は許されない。教え子達を放って負ける事も決して許されない。

「成る程、醜い…」

吹かずとも消えゆく弱々しい残り火。それでも抗っていた。役目を全うするまで絶えぬよう、必死でオールマイトは血反吐をしながらも抗っている。そして思っていた。象徴としてだけではない。

先代の師がしてくれたように、緑谷の師として、オールマイトは育てる為に、ここで命を賭すわけにはいかなかったのだ。

「そこまで醜く抗っていたとは……誤算だった」

“SMASH!!!”

ボソツと呟くように悪態吐くオール・フォー・ワンはオールマイトの動作に驚いていた。衝撃反転をしてボロボロになった右腕のワン・フォー・オールを、なんと左腕に移動させ、膨れ上がった腕でオール・フォー・ワン目掛けてその一撃を放った。グラントリノがオールマイトに言った事を学習し、虚を付いた。即ち右腕は囷に使ったのだ。

諸に顔面に直撃した拳。巨悪のマスクは完全に破壊される、だが。

「らしくない小細工だ、誰の影響かな。浅い」

持ち堪えたオール・フォー・ワンは左腕を膨張させ、反撃をしようと構える。

「そりゃア…!!」

「!」

今の一撃が全て。もう残す手は無い。そう思っていた巨悪はオールマイトの一言とその大振りの構えを見て驚愕する。何故なら彼の目はまだ死んではいなかった。ボロボロになった右腕に再びワン・フォー・オールを力に加え、筋骨隆々となった右腕を構える。

「腰が、入ってなかったからな!!!」

蒸気が立ち上り、流血は血飛沫のように飛び散る。が、そんな事は今はどうでもいい。大きく足を地面へと踏み込み、オールマイトは全身の力を右腕へと集め、振りかぶる。

これが最期の一撃。

最期の力。

何人もの人が、その力を次へと託してきたんだよ。皆の為になりますようにと…一つの希望となりますようにと。次はお前の番だ。

頑張ろうな、俊典――…

「おおおおおお!!」

志村奈々の言葉がまるで走馬灯のように頭を過ぎる。オールマイトは歯を食い縛り、拳に全ての力、思いを載せて叫んだ。

さらばだ、オール・フォー・ワン。

さらばだ、ワン・フォー・オール

「ユナイテッド UNITED ステイツ STATES オブ OF スマッシュ SMASH シュウ SH!!!」

最期の、全身全霊を掛けた渾身の一撃。防御をとることのできなかったオール・フォー・ワンはソレを諸に食らい、叩き込まれ、轟音と衝撃と共に、地面へと振り込まれるように倒れたのだった。

No. 97 全ての決着と始まり

渾身の一撃を放ち、凄まじい衝撃と風圧でその一帯が乱気流のような風が巻き起こった。報道のへりは飛ばされまいと必死に操縦を保させ、辺りにいた者は物や瓦礫にしがみついていた。そして、土煙が晴れ、大きく凹んだ地面の中からボロボロになったトゥルーフォームのオールマイトの姿は確認される。その目の前で横たわるのは気を失った巨悪ことオール・フォー・ワン。緊張が走る中、オールマイトは最後の力を振り絞るようにと、震えながら血塗れとなった左腕を掲げ、ズムツとマッスルフォームへとその身を変えた。

「『『オールマイトオ!!』』』」

瞬間、報道を通して中継を見ていた全国の人々は歓喜、喜びの涙を溢れんばかりと流し、彼の名を叫んだ。

『敵は――動かす!!勝利!!オールマイト!!勝利の!!スタンディングです!!!』

感動を見せつける勇敢な姿に、報道のスタッフも涙を流しながらも中継し、勝利の喜びを噛み締める。その姿を見せる中、オールマイトはよろりと蹠跟けそうになっていたのを見て、エッジショットは思わず口を開いた。

「な……今は無理せずに……」

「させて……やってくれ」

すると、腰を下ろしたバースの肩を借りたグラントリノがそれを止める。

「……もういつ倒れてもおかしくないってのに……エッジショットさん、今は見届けてやりましょう」

「……ああ、………仕事 중이다」

ドライバーからセルメダルを抜き取り、メダルは粒子となって消えたと同時に変身が解かれる伊達は、拳を高々と突き上げるオールマイ

トの姿に、察した伊達はそう言うと、グラントリノもまた、頷いて見届けていた。そしてグラントリノは全てを察していた。

市民の歓声が鳴り響く中、猛々しく立つその姿は、
平和の象徴としての

No. 1ヒーローとしての

最後の仕事だと。

☆☆☆☆☆☆

「この下！2人います!!あっちにも！」

「了解！急げ！」

その数分後、大規模な戦闘が行われた神野区に影響が出た崩壊したその街に、『蛇』の“個性”を得意とするウワバミを筆頭に生き埋めとなった市民を救助していた。何名か重症者が見つかり、警察達が保護して救急隊が確保していた地帯へと運び込まれて行く。

「お願いします！かなり酷い出血です！」

「い……てえ……」

「この出血はやばい！早くタンカーに乗せて下さい！」

運び込まれた人の出血を見て慌てる救急隊の1人はそう指示を出している、そこへ駆けつけた伊達が「見せてみろ！」と声を掛け、その患者をジッと見つめた。

「胴体が圧迫されて肋骨が折れてるな。数本が肺に刺さってる……！救助用のヘリが来るまで応急処置するぞ！」

「わ、分かるんですか!？」

「ちよつとした“個性”でな。元より、俺は医者だったからよ。直ぐに始める！俺の言ったものを持ってきてくれ！」

伊達に言われて「は、はい！」と返事をする救急隊の1人。伊達は

「大丈夫だからな、絶対助ける」と重症者に声を掛けながら上着を脱いでいた。

伊達明

個性『レントゲン』

眼球からエックス線を目的の対象に照射し、その視界にはレントゲンで写されたような映像が見えるぞー！正確な病気などは認識不可能だが、そこは元医者者の知識を含めてしまえば、何が悪いのか大体はお見通しになる！

『オールマイトの交戦中もヒーローによる救助活動が続けられておりましたが、死傷者はかなりの数になると予想されます…!!元凶となつた敵は……』

ヒーロー、警察達が救助を行っている頃、報道のリポーターが現状を伝えようと実況する中、全身を拘束されたオール・フォー・ワンが移動牢の中へと連れ込まれるのを目撃し、「あ、今!!」とリポーターは口を開いた。

『元凶と思われる敵^{ヴァイラン}が移動牢^{メイデン}に入れられようとしています！オールマイトらの厳戒体制の中、

今……!』

何人もの特殊部隊が警戒を怠らずに巨悪を護送しようとしている最中、血を吐きながらその実況を見ていたオールマイトがスツとカメラに向けて指を指した。

「次は、君だ」

短く発信されたメッセージ。それは一見、まだ見ぬ犯罪者への警鐘、平和の象徴の折れない姿。大画面を見ていた市民の人々はそれを視覚して喜んで歓声を称えている中、緑谷は気付いて涙を流していた。彼にとっては真逆のメッセージ。

『私はもう、出し切ってしまった』と。

☆☆☆☆☆☆

翌日。

巨悪事、オール・フォー・ワンは事の重大な大きさから、特例中の特例として、刑の判定を待たず特殊拘置所へ入れられた。

「……ここは？」

「黙っている!!見ればわかるだろう!!死刑すら生温い程の罪人が行き着く場所だ!!」

車椅子に乗せられ、特殊な素材で全身に巻かれた布に身を包み、更には拘束具で縛られ呼吸器を着用したオール・フォー・ワンは尋ねると、見れば分かる事を聞いてきたのか監獄の看守が怒鳴りつけるようにその場所を言う。

「ああ…監獄なのか…わからなかった。ここは…、センサーが多すぎて」

「………?何を言っている。貴様……眼が視えてないとも言うのか？」

言われてから場所を把握した彼に、看守は疑問を抱くと、巨悪は車椅子で押されながらその理由を説明した。

「衣ずれの音や空気のわずかな振動に加え、『赤外線』という『個性』で微かながらに感知して6年間過ごしてきた。『音・振動』で動作を…、『感知』で感情の動きや空間把握を補助しているんだ。ここはセンサーだらけで感知が意味を成さない…悪いね」

その言葉を聞いて、看守は冷や汗を流し、目の前にいる元巨悪に戦慄する。そんな状態で、あのNo.1ヒーローと対等、それ以上に闘っていたのかと。

悍ましいその人物を看守が運ぶ中、オール・フォー・ワンはニヤリと不気味にニヤけていた。

「(負けたよオールマイト。実に醜い足掻きだった。…しかし君は間違えたよ。戦いの果て、弟子に寄り添う道を君は望んだ。君は離れ時を見誤った。死に時を失った。先生というのは弟子を1人立ちさせる為にいる。頼りにしてきた師が手の届かぬ場所へ去り、彼は憎悪を募らせる。彼は真に先頭を歩んでいく。仲間を増やす術を学んでいる。

大丈夫だ死柄木弔。経験も、憎悪も、悔恨も、頼れる仲間を率いて全てを糧としろ。

次は、君だ)」

あの場から逃した死柄木への言葉。その思いは伝えなくとも、弟子である彼には十分に伝わっていた。その執念が、次なる強大な巨悪になると。

☆☆☆☆☆☆

神野区の悪夢。その事件から一夜明け、世間は騒然としていた。テレビをつけてもその事件の話題が引つ切り無しで、日常を生活する人々の手にはその話題が大きく載せられていた新聞、スマホのニュース等が写されている。そんな中、国会の警視庁である場所での各部署の責任者が6人程座っている大きな卓上で緊急会議が行われており、資料を手にし、真ん中に立つ司会者が議題を始めるべく口を開いた。「捕えた脳無はいずれもこれまでと同様、人間的な反応がなく新たな情報は得られそうにありません。保管されていたという倉庫は消し飛ばされており、彼らの製造方法についても追って調査を進めるしかありません」

「そもそもその倉庫というのもフェイクじゃねえのか？生体実験など行える環境じゃねえし場も安易すぎる。バーからも連中の個人情報 はあがってねえんだろ？」

年代で上官とも思われる人物が掌に顔を乗せて資料を見るなりそ

う尋ねると、司会者は「現在調査中です」と述べ、尋ねた上官は「……んー……」と俯き唸り声を軽く上げる。

「大元は捕えたものの……死柄木をはじめとした実行犯らは丸々捕り逃がした……。とびきり甘く採点したとして……痛み分けといったところか」

「馬鹿野郎、平和の象徴と引き換えだぞ。オールマイトの弱体化が世間に晒され、もう今までの『絶対に倒れない平和の象徴』はいない。国民にとっても、敵にとってもな」

「たつた1人にもたれかかってきたツケだアな……」

そう、No. 1と謳われ、平和の象徴と掲げられたヒーローはもう存在しない。国を支えられてもらった分、それに継り過ぎたが故の結果が今回の議題。その代償は余りにも大きく、失ってしまった。

「馬鹿も集まりやここまで出来ると……全員が知った。俺は恐れているよ。初期のプロファイリングじゃ子どもの癩癩とまで言われていた主犯格、死柄木弔の犯行計画は、数を重ねるごとに回りくどく、世間への影響を見据えたものになっている。……死柄木は成長している。そして、オールマイトが崩れ以前にも増して抑圧がなくなろうとしている状況。連合は失敗する度に力をつけていく。こうも都合良く、勢力拡大の余地が残っていくものかね？」

「……こうなる事も、向こうの手の内だど？」

「結果論じゃないのか？」

「わからん。ただ一つ確実に言えるのは……奴等は必ず捕えなきやならん。我々警察も敵^{サイラン}受け取り係などと言われている場合じゃない」

上官は息を吐くと椅子に持たれ込み、上を見上げると「改革が必要だ」と最後呟いたのだった。

☆☆☆☆☆☆

その一方、大きな総合病院で入院している病室に一通りの捜査を終えた塚内警部と、同じく入院中だったグラントリノが顔を出し、オー

ルマイトの見舞い見、事情調査をしていた。ベッドに座り込んでいるオールマイトは包帯で巻かれた手を見つめながら口を動かした。

「私の中の残り火は消えた、『平和の象徴』は死にました。…しかしまだやらねばならぬ事があります」

「死柄木弔。志村の孫…：か」

「奴の発言だろ？根拠が薄くはないか？2人共その先代の家族とは交流がなかったのか？」

オールマイトの意思にグラントリノが察すると、塚内は疑問を抱く。巨悪は人を内側、即ち相手の心から崩す話術を得意とし、その発言が嘘の発言かもしれないと考えていた。が、志村奈々と共に活動していたグラントリノが応えた。

「ああ…、志村は夫を殺されていてな。我が子をヒーロー世界から遠ざけるべく里子に出している。俺は俊典には『私にもしもの事があってもあの子には関わらないでほしい』と…」

「故人との約束が逆に…か。…やるせないな」

志村奈々の決断が死柄木の道を踏み外してしまった。塚内は表情を曇らせながら言う、オールマイトが拳を握り締めながら口を開く。

「お師匠がせめて平穏にと決別した血縁…！私は死柄木を見つけなければ…！見つけて彼を…」

「だめだ。見つけてどうする？お前はもう奴を敵として見れてない。必ず迷う。素性がどうであれ奴は犯罪者だ。死柄木の搜索はこれから俺と塚内で行っていく」

見つけて彼を救けようと考えていたのだろうが、例え恩師の孫であろうと死柄木は立派な犯罪者。今のオールマイトが探した所で、その甘い考えはよく知っており、躊躇するのも目に見えている。グラントリノが断ると塚内も無言で頷き、グラントリノは続けて顔を曇らせているオールマイトに声を掛けた。

「お前は雄英に残ってすべき事を全うしろ。平和の象徴ではいられなくなつたとしても、オールマイトはまだ生きてるんだ」

「ですね。…：きて、僕はそろそろ署に戻るよ」

頷いた塚内は椅子からゆっくりと立ち上がる。

「爆豪と火野か？」

「爆豪君はおそらく家に帰宅しているよ。軽い怪我で済んでいるからね。…問題は…」

「火野少年……」

グラントリノが聞くと塚内はジャケットを取りながら応え、その言い分にオールマイトが俯きながら言う。

「ああ、派生で生まれたアंकに続いて2人目の派生が誕生してる。今は問題無いとは思うけど念の為ね。…それに、火野君には新しい“個性”が目覚めた」

「暴走形態ってヤツか……随分と難儀な“個性”を宿したもんだ……。本当にあの少年は一体何もなんだ」

「それも調査中だね。^{サイラン}敵の脇真音姉弟もそうだし、彼の“個性”は特殊過ぎる」

グリードを2体もその体に宿し、単独で行動。そして言わずもがな、オーズの“個性”は多くの動物の力を使い分ける。前代未聞の力故に、その調査の問題は山積みとなっている。グラントリノは息を吐くと、オールマイトに声を掛けた。

「俊典、あの小僧達も含めて今のお前がするべき事はわかつとるな？今はしっかり休めて、今後の活動を見直せよ」

「……はっ」

☆☆☆☆

悪夢の事件からその後、緑谷達は轟、八百万、耳郎と合流し、偶然にもその場所に火野とアंक、そしてウヴァも集まっていた。互いに言いたい事は沢山あっただろうが、爆豪と火野は人質の身だったので直ぐに警察が到着し、そのまま同行されて行った。そして、半日以

上かけて、緑谷達は家路を辿った。

「では」

「ありがとうな、みんな」

「お三方、真つ直ぐ帰って下さいね!」

「うん、本当にありがとう」

「じゃあ…また学校で」

「ん……、じゃあね」

駅で別れの挨拶を告げ、それぞれは去って行く。耳郎も彼らの背中を見送った後、振り返り一步踏み出そうとするが、その足は立ち止まる。何も言わずに、ただ心配そうな表情で来た道を見つめていた。

☆☆☆☆

その夕方、警察署、待合室にて。

「…………ツツ!!」

「う、ウヴァア。あと少しだから落ち着こうよっ」

「はあ!?!落ち着いていられるか!何時間尋問されたと思ってるんだ!?!半分デマカセな言い訳されてる挙句に犯罪者扱いの何とかって処遇みたいな事を言われて気が立ってんだよ俺は!」

「免除だ。…フン、これだから脳筋は。逮捕されなかつただけ有り難く思っとけ。ま、俺はそのまま牢獄にぶち込まれてくれた方が都合が良かったがな?」

「なんだと!?!」

「もお、やめろってアंक!」

その後、警察と同行した火野達は敵に人質にされた時の事情聴取をされたと同時に、その敵に加担したウヴァは犯罪者扱いとしてそのまま逮捕されそうになったのだが、火野の起点を活かして事情を説明

し、何とか逮捕までには至らなかつたのだが、敵の詳細を掴もうと警察達はウヴァに対して尋問を半日以上行われてしまったらしい。その尋問に過去の話を持ち掛けては混乱すると火野に言い訳をお願いされたのだが、それでもウヴァにとっては拘束されたようなもので、耐え難い苦痛だったのだろうか、こうして待合室で沸騰する怒りを椅子を蹴り飛ばす形でぶつけている。

今までは自由の身だった故、人間に拘束されるのが相当嫌な体験だったのだろう。

「まあでも、これで敵に加担したらどうなるか身に染みただろ？」

「フン！言われなくてもたっぷりとな！」

「そんな自信気に言わなくても……」

変に威張るウヴァに顔を顰める火野。すると、待合室野ドアがノックする音が聞こえ、扉が開かれると、馴染みのある人物が入って来た。

「やあ、火野君、アंक君。それとウヴァ君かな？随分待たせたね」

「塚内さん！」

「お前とはしよつちゆう会うな」

「そうかもね。でも君の自由行動は感心しないな。火野君は救い出せたのは良いけど」

現れたのは塚内で驚く火野。続けてアंकが言うと塚内は苦笑をしながら注意するが「なら結果オーライだ」と反省のはの字を見せずアंकは腕を組む。塚内は再び苦笑をしながら頬を掻くと視線をその場に居た3人に向けて口を開いた。

「さて、ウヴァ君の処遇についてだが、今後火野君の管理の元から離れないのならアंक君と同様、火野君の「個性」として大目に見てくれると上が判断してくれたそうだな。だけど、仮にもし1人で行動して、敵に肩入れな行為をするようなら、次は捕まえなきゃいけない。肝に命じて置くように」

「フン、人間に言われなくてもそのつもりだ」

「ウヴァ！」

「……ムウ、わかった……」

こちらにも反省の素振りを見せないウヴァに、火野は声を張り上げる

とウヴァはバツの悪そうな表情で頷き承諾する。塚内は「よし」と頷くと、続けて火野に声を掛けた。

「あともう一つ、火野君。君の新しい力についてだけ……」

「あ……それってあの紫のメダルの事ですか……?」

「うん、事情は聞いたよ。聞いた限り、かなり危ない力なんだってね？」

「そこでなんだけど、そのメダルはこちらでしばらく預かー」

「無理だな」

塚内は提案を申し込もうとすると、アंकが間入れずそれを断る。

「……それは何故だいアंक君?」

「俺もどう言った仕組みかは知らないが、あのコアメダルは他のコアメダルとは違うモノだ。映司が承諾したところで、肝心のメダルは映司の中から出てきやしない。例え身体を解剖して引っぺがしても元の場所に戻るだろうな」

「それは、そのメダルに意思でもあると言うのかい?」

「まア……そんなところだ」

塚内の質問にアंकは何か言いたげにしたが、火野の視線を察して受け流すように振る舞った。

これもアंकの聞いた話で、コアメダルは欲望をもつ力がエネルギーの源、だが紫のメダルはその反対で「無」の力で存在するメダルらしく、前世の火野は事情があつて空白になり、そこに付け込んで入り込んでしまったらしい。だがこの世界の火野には立派な目標があり、決して無欲では無い。何故火野の中に再び現れたのかは、流石のアंकにも分からないみたいだ。

「ふむ……困ったな。仮にもしまった暴走してしまえば、被害を出すだけでは済まないかもしれない」

「つ……だ、大丈夫ですよ!他のメダルよりは癖が強いけど、きつと使いこなせれると思いますから!」

「そのきつとの間に暴走してしまったら?」

「!?……………」

いくら自身の力と言えど、全く持って初めての力を発揮してそう簡単に使いこなせるのは難しい。増してや人に危害を加えかねない紫

のメダル。その過ちを犯してからでは遅いと塚内は目で訴え、火野は返す言葉も無く黙り込んでしまう。

「……フン、要はそのメダルを使わせなきゃ良い話だろ?」

ふと、ウヴァが口を動かす。キョトンとする火野にアंकも喋り出した。

「馬鹿が、アレは映司が戦闘をすれば勝手に出てくる。手の付けられない身勝手な暴走をどうやって使わせないつもりだ? お前も散々見て来ただろ?」

「ぬウ……」

アंकの言い分に何も言えなくなり唸り声を漏らすウヴァ。どうしたものかとその場に居た者は考え込んでいると、再びドアのノックする音が聞こえ、その扉はガチャリと開かれた。

「私が! 来た!! ゲツホツツ!」

「オールマイト!」

筋骨隆々な体はいつも安心感を覚えるその巨体、オールマイトが笑顔で顔を出すのが、瞬時にトゥルーフォームへと戻ると同時に血を吐き出す。

「ああそうか、もう退院しても良いって言われてたね」

「だ、大丈夫ですか!」

「ああ、私は大丈夫さ。もう力は使い切ってしまったがね」

そういえばと塚内が言うと、血を拭うオールマイトを気にかけて火野は声をかけるが、オールマイトは掌を見せて心配させまいと振る舞う。

「火野少年、あの時はすまなかつた……」

「い、いえ……元はと言えば俺が捕まったのが悪いんですから……」

「どっかの虫ケラのせいだな」

「おい」

頭を下げるオールマイトにたじろぐ火野。捕まった張本人を横にしてボソツと言うアंकにウヴァは眉をピクリと上げる。

「塚内君、火野少年はもう家に返せるのかい？」

「それなんだが、彼の新しい『個性』を今後どうするか今取り込み中でね……」

「そうか………」

察したオールマイトは顔を曇らせるが、それも数秒で彼の表情は前向きとなり、塚内に向かって口を開いた。

「なら、その『個性』を使いこなせれば問題ないのではないか？」

「え？」

「…ハッ、良くそう簡単に言えたもんだな。アレは他のメダルとは違う。使えば使う程、映司の体は侵食されて、その時には……」

「だからこそ、私がいる」

「…！知ったような口を……！」

「あ、アंकー！」

紫のメダルの脅威は誰にも、火野にもまだ教えていない。何とかなると言うようなオールマイトの素振りにアंकは顔を顰めらせ、詰め寄ろうとするが火野はそれを制す。するとオールマイトはグツと拳を握り締め、口を開いた。

「君も知っていると思うが、私はもうワン・フォー・オールの力を全て出し切ってしまった。もうマツスルフォームも先程の通り碌に維持する事も出来ない。これからは英雄教師として、君達を全力でサポートをするつもりだ。その力がアंक少年の言う通り、恐れられた力ならば、使う事すら脅威だろう……だが、緑谷少年が私の『個性』を受け継ぎ、己のものにしようとしているならば、君もその力を受け入れられると私は思うんだ……」

「あの力を…俺のものに……？」

「ああ、今はまだ使わない方がいいかもしれない。だが時間を掛けてゆっくりと体に馴染ませていけば…きつといつかは、誰かの救いを手助け出来る正義の『個性』として使いこなせると、私は信じている」

「…フン、また暴走したらどうする？」

「その時は私が全力で止める。…だが、今の私では恐らく力不足だろう……」

エゴだけを並べるオールマイトにアंकは嫌味を垂れると、彼はそう言つて一旦区切り、「その時は」とアंक、そしてウヴァの前に立ち、深々と頭を下げた。

「お、オールマイト!？」

「んなー！」

「!？」

No. 1ともあろう者が、簡単に頭を下げるその行動に火野、アंक、ウヴァは目を見開き驚愕する。

「恥など等に捨てた。私はもう君達の前に立つ男では無い。なら、君達を陰で支える男となつての申し出だ。私が駄目な時は、あの時のように、彼を救つてくれないだろうか。アंक少年、ウヴァ少年」

「……………」

「オールマイト……」

その姿を見て、火野は俯くと、コクリと頷き、アंक達に声を掛けた。

「俺からもお願いだ、アंक、ウヴァ。」

「映司……」

「……………」

火野も同様に深々と頭を下げる。2人から頭を下げられたアंकは舌打ちをしながら頭を搔くと呆れたように口を動かした。

「どうなつても知らないぞ……おい塚内。こいつが暴走したら俺が止める。それとなるべく使わせないようにしてやる。それなら文句無いな?」

「アंक君……」

「オールマイト、お前も使えない無様になり下がったのなら、せいぜいこの馬鹿を暴走させないように見張つとけ」

「アंक少年……ありがとう……」

苛立ちを掻き消すように淡々と2人にそう言い、アंकはその申し出を了承する。火野は顔を上げて「ありが……」と言おうとした直後、アंकは火野の頬を手で鷲掴みし、口を動かした。

「アイス1年分だ」

「ふえ？」

「俺が直々に手伝ってやるんだ。それ相応の対価は払ってもらわないと釣り合わないんだよ」

人差し指を火野に突き出し、断言することアंक。その相変わらずの等価交換に、火野はアंकの手を払いながら安心したような表情で「ありがとう」と礼を言う。そして、何も言わなかったウヴァも続いて言うように口を開いた。

「…俺にも映司とは取引した身だ。面倒だが、その契約に応じてやらん事もない」

「ハッ、自分の身を弁えろ。お前は強制だ、犯罪者が」

「ム!？」

了承するウヴァだが、その上からの物言いにアंकがツッコむとウヴァは目を見開き何も言い返せずにいた。その光景に火野は苦笑をしていると、塚内は咳払いをし、3人を見つめた。

「やれやれ、まさか君が頭を下げるとはね。よし、火野君の件は君達に任せる。万が一、暴走して人に危害を加えるようならその時は覚悟しておいてくれよ?」

「塚内さん…ありがとうございます!」

「ありがとう、塚内君」

「気にするな。君も今後の人生をしつかり励んでくれよ」

平和の象徴ではない彼に、残された選択肢は限られている。だからこそ、友である彼に未来を託した。新しい有精卵が、立派なヒーローになる事を。

第9. 5章 　く学生寮く
No. 98 家庭訪問

『ヒーロービルボードチャートJ P!!』

事件解決数、社会貢献度、国民の支持率など、諸々を集計し、毎年2回発表される現役ヒーロー番付!!まず最初!不動のNo. 1がまさかの!!日本のみならずヒーローの本場アメリカでも騒然!オールマイトの本当の姿!!体力の限界!!事実上のヒーロー活動引退を表明!!そしてNo. 4ベストジーニスト!一命は取り留めたものの、長期の活動休止!!更にNo. 32ヒーロー!!人気が根強いプツシーキャッツが1人、ラグドール!拉致後、*“個性”*を使用出来なくなるという変調から活動を見合わせ!一夜にして多くのヒーロー達が大打撃を受けた*“神野の悪夢”*!!これからどうなる日本、そしてヒーローよ!以上、今日のクイックニュースでした!続いてはお天気、木原さーん……』

そこで、プツンと画面が真っ黒になる。それと同時に「あ」と火野は声を上げてリモコンを持ったアंकに声を掛けた。事情聴取を終えて帰宅した火野は、拉致された身なのでしばらくは外出を禁止されていたのだ。

「ちよつとアंक、まだ見たかったのに」

「フン、どうでも良いだろ。ヒーロー共が何人引退しようが、俺が知りたい情報を1つも出さない。ニュースってのは人間がその場に起きた情報の『上部』だけを提供するもんだろ?肝心な情報は公にしない:見えていても癪に触るだけだ」

「なら、直接確かめたらどうだ?」

そう言つてリモコンをソファーに放り投げ、その横に豪快に寝そべるアंकに、セルメダルを手の中で触るウヴアが声を掛けると、アंकは鼻を鳴らして口を開いた。

「馬鹿が、何処に居るかも分からん連中にどう確かめろって言うんだ

「？映司も外出出来ない以上、ネットで調べるしか手は無いだろ」

「…なら、ヤミーを使って…」

「絶対ダメ。ウヴァ、約束しただろ？ヤミーなんて出したら、騒ぎになるのは目に見えてるんだから。捕まりたくないだろ？」

「ム…」

提案を拒否されまくるウヴァは籠ってしまい窓の外へと視線を逸らす。すると、何を思ったのかアंकはソファから立ち上がり、窓の扉を開けた。

「何処行くんだ？」

「野暮用だ。ちよつと思いついた事があつてな」

「おいおい、俺達外出禁止だぞ？」

「フン、それはお前だけだろ。『個性』の俺なら外で誰かと喋ろうが、関係無い」

吐き捨てるように言い終え、アंकは2階の窓から飛び降り姿を消した。

「自分が『個性』って名目を棚に使うなんて上手い事するなあ…：…つておい！お前が勝手に動いたら『個性』無断使用で俺が捕まるじゃんか！」

飛び降りたアंकに窓から言う火野は、その『個性』の言葉にハツとし、自分にツツコみを入れながら声を上げるが、もうアंकの姿は何処にも無く、溜息を吐きながら窓を閉める。

「ウヴァ、お前らグリードって皆んなあんな感じなの？」

「あんな奴と一緒にするな。…だが、こんな狭い空間に閉じ籠るのはセルメダルを消費している時くらいしか無い。俺達グリードは常に欲望を求めまくるべく行動しているからな」

「へえ、そうなんだ…アंकも偶に1人で行動しているのはその為なのかな…」

「さあな…まあ、お前の体を借りれて普段味わえない欲望が手に入るようになってから、俺もあいつも前より欲望を欲する事は無くなっていくのも事実だ」

「今のところウヴァは良いんだけど、アंकはアイスばかり食べるか

らしよつちゆうお腹下すんだよな」

「あいす…そんなに美味しいのか？」

「冷たくて美味しいけど、ウヴァにも気に入られたら流石に俺が困るな」

火野はそう言つて苦笑する。ウヴァにも体を貸す権利を与えたのだが、彼は物を見る、景色を眺めるのが気に入ったらしく、そこまで負担は感じない。そのおかげで本人も言つての通り、欲望自体が叶えられているという形でこうして落ち着いているのも事実だった。だが、前から一緒に居るアंक。彼はアイスが何よりも好物なアंकは毎日棒のアイスを飽きる事なく食べ続けている。態勢は付いたものの、それでも食べる量が多いのでアंकに体を貸し終えた後は腹痛を訴えるのもしばしばだ。

「…映司、確か今日何かあるんだつたな？」

「え？ああ、うん。昼過ぎくらいに先生達に来るんだよ。郵送された紙、ウヴァにも見せただろ？」

ふと、ウヴァは思い出したのか火野に聞くと、火野は机の上に置かれているプリントに目を配った。突然学校側から送られてきた資料。そのプリントの表紙には、『雄英高校全寮制導入検討のお知らせ』と書かれていたのだつた。

☆☆☆☆☆☆

同時刻、耳郎家。

^{ヴァイラン}敵襲撃が頻繁に起こる雄英高校。根津校長の兼ねてより考えていた案が実行されて『生徒は寮生活』を用いられた。より強固に守り、育てる為に。それを実行され、A組担当の相澤はオールマイトと共に生徒達の両親から了承を得る為に家庭訪問に現在訪れている。

「んー…ロックじゃないよねえ…」。

大事に至らなかつたとは言え、1人娘が被害に遭つた後でしれつと全寮制にしますつて…」

「お父さんの仰る事はごもつともです。我々も知らず知らず芽生えていた慢心・怠慢を見逃し、やれる事を考えております。どうか今一度、任せては頂けないでしょうか」

「……………」

趣味が大見えの楽器が沢山並べられたりビングで、無愛想な態度をとるのは耳郎の父、耳郎響徳。隣に座って緊張気味なのか黙っていたのは母親の耳郎美香。

そして響徳が嫌がる理由は明白だった。

襲撃から一時は逃れたものの、大事な娘を学校側に預けて下さいななどと言われたら親としても黙ってはいない。同時に、オールマイトが引退してしまった学校に安心など極めて少ない。そう思っつて響徳の態度を見た相澤は頭を深々と下げ申し出た。

「必ず響香さんを立派なヒーローに育て上げて見せますので…」

「あー先生いいスよ頭下げなくて！プリント郵送された時点でもう結論出たんで」

すると、器用にイヤホンジャックでリビングのドアを開いた耳郎が申し訳なさそうに声をかける。両手は飲み物を乗せたトレーを持っており、それをオールマイトと相澤の前へ置きながら口を開いた。

「このオッさんオールマイトの戦い見て『こんなロックな人に教えてもらえるなんてウチの娘本気ブライアンザサンだぞ！』って泣いたらしいスもん」

「ばっ!?響香やめろ！折角厳格な父親を通そうとしてんのに!!」

「うっさいなオッさん」

「2人共やめてよ、ラウドバンクじゃないんだから」

折角の威厳が台無しにされて文句を垂れる響徳だが耳郎は流すように言う。その隣で小声気味で美香は止めようとするが2人の親子喧嘩は止まらなかつた。そしてそれをキョトンとした表情で相澤は固まっていると、響徳は溜息を吐きながら相澤に声を掛けた。

「いや…その…すまない。ちよつと調子にのっつてしまいました…。娘の件ですが、私達は言つての通り断る理由なんてございません。ですから、相澤先生、オールマイト先生、娘をロックでビングなヒーロー

に育てて上げて下さい！」

「お、お願いします…」

「あ…はい、こちらこそ……」

両方から頭を下げられ、ワンテンポ遅れた相澤は戸惑いながらもそれを了承すると、響徳は直ぐに顔を上げて相澤に声を掛けた。

「ところで先生。最近ウチの娘なんですが…そのまア、何か変わった事ないですか？」

「変わった事？」

「ええ…なんかこう…娘が思い詰めたりと言いますか、ここ最近女の子らしいと言いますか……」

「オツさん!?ちよつ、先生！何でも、何でもないですから!!」

響徳の言葉に首を傾げる相澤の横で、耳郎はハツとし、真つ赤にしながら響徳の顔にイヤホンジャックを突き刺して爆音を届けたのだった。

☆☆☆☆☆☆

耳郎家の両親から許可を貰い、次の訪問へと車で移動中、相澤はオールマイトに声をかけた。

「もつと非難されるものと覚悟していました。……一杯…奢ります」

「ハハハ、よせやい、らしくない。私飲めないしき、それに次のお宅は…そう上手く行かないと思うぞ」

普段の性格から考えてそう言う相澤にオールマイトは励ましながらも忠告していた。そして次の訪問先へと到着し、その家の表札を眺める。

敵に拉致された少年、爆豪とそこには書かれていたのだった。

「あっはい。よろしくお願いします」

相澤とオールマイトはその自宅にお邪魔して今回の内容を説明すると、母親である爆豪光己はあっさりと承諾すると同時に隣に座っている爆豪の頭をスパアンと叩く。

「バツバァー叩くんじゃねえよブツ飛ばすぞコラ!!」

「うっさい!!元はと言えばアンタが弱っちいからとっ捕まっつてご迷惑かけたんでしょ!!」

思春期なのか性格なのか、負けずと反抗を見せる爆豪だが光己は問答無用でもう一度頭を叩き怒鳴りつける。見た目はかなりの美人だがその性格と言動は息子の爆豪と同等かそれ以上の気迫を見せつけられる彼女にオールマイトと相澤は固まっていた。そしてそれを宥めようと父親である爆豪勝がおどししながら声を掛ける。

「2人共…や、やめろよオ。先生方が…驚いてるだろオ…」

「うっせんだよクソオヤジ!てめエは黙つてろ!!」

「うっせえのは勝己でしょ!あんたも喋るなら、ハキハキ喋りなさいよ!」

「んん〜…」

「(何、この闇深い家庭)」

母親と息子とは裏腹な弱気な性格の勝。そんな3人のやり取りを見ていたオールマイトはこの家族に深く関わるのをよそうと悟っていた。

「あの…本当によろしいのでしょうか」

「ん?!ああ、寮でしょ?むしろ有難いよ!」

絶えず爆豪の頭を叩く光己に、相澤は声を掛けると、その手を止めて光己は喋りだした。

「勝己は、なまじ何でも出来ちゃうし能力も恵まれちゃってき、他所様からチャホヤされてここまで来ちゃった。薄っぺらいとこばっか褒められて……。だから、会見での言葉が嬉しかったんだよね。『ああ、この学校は勝己を見てくれてる』って。一時は不安でどうなるかと

思ったけど、こうして五体満足で帰ってきてるワケだしさ」

1人の親として、息子の顔が無事に見れたのはこんなにも喜ばしい。そんな想いが込められているのか、睨む爆豪の頭にはそっと撫でるように光己の手が置かれているが、その手に力が入り、爆豪の頭はグンと下げられた。

「しばらく風当たりは強いかもしれないけど、私は信頼して任せるよ、な」

「うん」

「こんなどうしようもない奴だけど、みっちりしごいて良いヒーローにしてやって下さい」

光己と勝は顔を見合わせ同時に教師達に向かって頭を深々と下げた。誘拐されて信用されないのが普通だが、この2人は信頼し任せると言った。その姿に相澤は思わず気が抜けた表情をしていると、オールマイトがこっそり膝を叩いた。

「一杯奢ろうか？」

☆☆☆☆

「さて次はー……、緑谷ん家が近いですね」

「ああ、それなんだが相澤君……」

「オールマイト」

「ん？」

爆豪の家庭訪問を終え、相澤はスマホを取り出し、付近に住んでいる緑谷の家へと向かおうとした時、爆豪が玄関から現れオールマイトに声を掛ける。

「デクは、あんたにとって何なんだよ」

真っ直ぐ見つめた表情。それはあの神野区の悪夢の時に、オールマイトがカメラに向けて言った言葉を聞いて、緑谷が涙を流していた。

それを隣で見ていた爆豪は何処か心が引つかかっているように見えた。気になった爆豪はオールマイトに聞くが、オールマイトは数秒固まりその口を開く。

「……生徒だよ。君と同様に前途あるヒーローの卵だ」

すまない、爆豪少年。ここだけは晒せないんだ。

オールマイトは出来る限り、詮索されないような表情を作り、そう言う。

「勝己コラ！あんた外に出るなつてケーサツに……」

玄関の方から光己の怒鳴り声が聞こえる。これ以上はまずいと思ったのか爆豪は「そっか」と体を半回転させて自宅に戻ろうとした。

「あんたが言いたくねえなら、いいわ。ありがとよ」

「勝己!!」

「わーってるよ!」

怒鳴る光己に煩わしそうな返事をし、爆豪は玄関を開けて家の中へ入って行く。その顔は何処か寂し気な様子だったのをオールマイトは、黙って見送っていた。

☆☆☆☆

「……本当に大丈夫ですか」

「ああ！すまん相澤君。今日中に回らないといけないんだろ？この調子だとディナータイムに差し掛かっちゃうぜ。ここは私が行くから君は他の方がいいんじゃない……かな!?!」

「……分かりました。終わり次第迎えに行きますので、緑谷はよろしくお願いします」

相澤は言うとおールマイトは軽く会釈を返した。車は発進し、相澤は次に行く自宅、火野の資料を目視する。すると、深く息を吐いて口を開いた。

「まあ、……今に始まった事じゃないな」

☆☆☆☆☆☆

「先生どうぞ、つまらない物ですが」

「いえ、お気遣い無く…」

テーブルの上に置かれた紅茶とモンブランケーキ。泉比奈に軽く会釈した相澤は目の前に座っている火野とウヴァを見て口を開いた。

「…火野、アंकは留守か？」

「あくその…どこかに行っちゃったみたいで」

「敵に捕まった生徒は許可が無い限り外出は駄目だと言われた筈だぞ。それは“個性”であつてもだ」

「す、すみません…」

バツの悪そうな表情で謝る火野を相澤は息を吐きながら「いや…」と小さく首を振り、その口を動かす。

「今回は責めに來た訳じゃ無い。大目に見てやる。…泉さん、今日は時間を作つて頂きありがとうございます」

「いえいえッ、私が映司君の保護者代わりなので、当然の事です」

火野の両親が海外で働いているのは織り込み済みな上で相澤は泉比奈に一言御礼を言う。泉はお構い無くみたいな表情で気を遣わせているが、この後も恐らく仕事があるのだろう。相澤は手短かに済ませようと本題に入った。

「今回の家庭訪問は、事前に郵送された内容の雄英生徒、全寮制についてですが…」

「あ、はい…私は構いません」

あつさりと了承した泉だが、「ですが…」と後付けに口を開いた。

「映司君…映司君は、本当に大丈夫なのでしょうか」

「比奈ちゃん？」

「…大丈夫です。我々教師が責任持つて…」

「そうじゃないんです」

学校に預けるのが不安なのだろうか、相澤は言うのと、泉は割入つて

キョトンとしている火野の顔を見つめて喋り出した。

「映司君は本当に凄い『個性』を持っていますが、日に日にそれは恐ろしい力ではないかと不安なんです。体育祭の時も突然アंकって言う人格が現れて、今度は不良みたいな奴が出て来て…正直私困惑しています」

「…おい、それは俺の事か？」

「貴方以外に誰が居るんですか」

不良と言われウヴァは自分に指を指すと睨み付けるように泉は言い、そのまま相澤に向かつて口を動かした。

「合宿で火野君が攫われた時、私は心配で震えていました。その後起きた神野区の事件…。映司君は『個性』が暴走してしまったのですよね…？無事に帰って来てくれたのは嬉しいです。でも私、恐ろしい事がないんです。立派なヒーローになつてくれるのは凄く誇らしい事です…。ですが、あのオールマイトのようにボロボロになってしまうのが恐くて…」

「比奈ちゃん…」

「……」

今にも泣いてしまいそうな表情をする泉に火野は目を見開き俯く。血の繋がった者では無いとは言え、海外で働く両親の代わりに育ててくれた人だ。泉は本当の家族のように火野を見守り続けてくれたのだ。今更その真意に気付き、蔑ろにし続けた火野は申し訳ない気持ちで胸が張り裂けそうになる。

「映司君はまだ学生です…。自分の事は後回しにして他人を優先にしないでしまうお人好しなんです…。先生、本当に貴方方の学校は生徒を立てて、無事にヒーローを目指す事が出来るのですか…？」

「…それは、映司君次第です」

きつぱりと言われた言葉。事実ではあるが、その言い方は信用を損なう発言。泉は目を見開き、呆れた様子で「じゃあ…」と口にした瞬間。相澤は「ただ…」と上乘せし、席を立ち上がって口を動かした。

「それを支えるのが学校…雄英教師の勤めです。映司君の『個性』は危険を抱えた『個性』ですが…担任として、大人として、責任を持つ

て守り、見届けて行きます。今の雄英には不安を抱いてもおかしくはありません。その状態で我々教師、そして生徒達は変わろうとします。なので…火野映司君と言うヒーローに近づこうとする者をどうか、見守って上げては頂けないでしょうか」

相澤は言い終わると同時に深く頭を下げる。その姿勢は教師としての立場、1人の男としての真意。その姿に泉は愕然と目を見開き、ふう…と大きく息を吐いた。

「……映司君」

「うん…」

「絶対、無茶な事はしないでね？」

「……わかった。約束する」

火野に向けられた泉の眼差しは、今にも泣きそうな眼をしていたが、その奥には信じているような瞳が写されていた。火野はその想いを受け止め、重々承知して頷くと、泉は相澤に向けて「頭を上げてください」と言った。

「先生、どうか…映司君をよろしくお願いします」

「…はい。ありがとうございます……」

☆☆☆☆☆☆

一方、アंकは翼を広げて空を飛行し、とある高層ビルに到着する。最上階の部屋の窓が開いており、無断で中へと入るとバーステークキを作っている男性の背中が視界に入る。

「これはこれは、高度なテクニクで侵入してくるとはね。側から見れば泥棒に近い行動だが…？それもグリードの習慣の一種なのかね？」

「別にいいだろ」

アंकの存在に気づいたのか、男性もとい鴻上は動きを止めずにホイップクリームをスポンジケーキに搾り出し、デコレーションを続け

る。アंकは鼻を鳴らしながら続けて口を開いた。

「お前らの会社はサポートアイテムを作る会社だったな？作って欲しいもんがある」

「ほう、何かね？」

「情報を探れる缶と、それを出し入れ出来るバイクだ」

アंकのその言葉に鴻上はピタリと動きを止める。そしてニヤリと頬を上げると勢いよく振り返り「詳しく聞こう！」と声を上げて言ったのだった。

No. 99 入れ寮

「着替え良し…歯ブラシ歯磨き粉も予備を入れた…。うん、大丈夫そうだな」

「アイスはこれで全部か？」

「全部だよ。てかお前少しは手伝えよ」

「面倒な事は俺のやる事じゃない」

「薄情だなあ。ウヴァは手伝ってくれたのに」

「それはお前が等価交換をしたからだろ？俺のは断りやがって…！」

「ウヴァはこれから一緒になるって意味の前祝いも兼ねてるんだよ。お前の申し出は対価がデカすぎ、何だよアイス10年分って」

火野にジト目で言われ、アंकは「フン」と鼻を鳴らしてそっぽを向く。火野は大きく息を吐きながら家具が無くなった間抜けの空になった部屋の中を見回す。

8月中旬。今日から雄英生徒は新生活が始まるのだ。持つて行ける手荷物はリュックと鞆に入れて、火野は玄関へと移動するとリビングから泉が声を掛けてくる。

「映司君、忘れ物無い？」

「うん、大丈夫。事前に業者の人達が持つて行ってくれたから後はこの荷物だけ」

靴を履きながら火野は笑顔で応えると、泉は少し寂しげな様子で口を開いた。

「…アंकとウヴァは？」

「え？ああ、俺の中にいるよ。移動は面倒みたいだし」

「そう…。アंक、ウヴァ、映司君の事お願いね？」

泉は火野の胸元を見ながら語りかける。精神の中に居るアंकとウヴァには当然聴こえていたが、返事は無い。だが2人揃って「フン」と鼻を鳴らす声だけは火野に聞こえた。

「もお……任せろってさ」

「良かった……じゃあ映司君。身体に気をつけて、頑張ってるね？」

「ありがとう比奈ちゃん。じゃあ行ってくるね」

「うん、行ってらっしゃい」

別れの挨拶を告げ、火野は玄関のドアを開ける。暑い日差しが差し込む中、火野の後ろ姿を泉は寂しげな顔を隠すように、笑顔で見送ったのだった。

☆☆☆☆☆☆

雄英高校に到着した火野はH型の校舎を見上げて少し懐かしさを覚えた。思えば林間合宿から数週間、色々な事がありすぎて濃い期間となっていた。敵襲撃。グリードのウヴァとの出会い。神野区の悪夢。そして平和の象徴の喪失。その影響は時を経るにつれて大きく表れるだろう。だが、それと同時にワクワク感を少し感じる。

「クラスのみんなは元気にしてるかな」

合宿以来まともにクラスメイトと会っていない。不安も残るが、今は無事に仲間達の顔が見たい。火野はそう呟き、指定された場所へと移動した。

☆☆☆☆☆☆

雄英敷地内、校舎から徒歩5分の地区3日。

豪華に立つその建物の名は“ハイツアライアンス”。前面には1—Aの文字があり、その玄関前にはお馴染みのA組生徒達が既に集まっている。どうやら火野が1番最後に到着したみたいだ。

「みんな！」

「火野お！」

「火野ー、お久ー！」

「身体はもう大丈夫かよ？」

「うん、もう大丈夫だよ」

火野は声を掛けると、クラスメイト達は振り返り笑顔で応える。ほ

んの少し懐かしさを覚えるその面々に火野は嬉しい気持ちと同時に安堵した。

「火野君、無事で何よりだよ」

「緑谷君も。それに、…ありがとう」

声を掛けてきた緑谷に、火野はお礼を言う。「え？」とキョトンとした顔をするが、察したのか緑谷はバツの悪そうな表情になる。

「…ああ、えと、うん…でも、お礼を言われる筋合いなんて…」

「何の話？」

緑谷が籠った瞬間、麗日が2人に顔を覗かせ話を聞こうとしたその直後、2つある寮の玄関の左側が開かれ、そこから相澤が姿を現したと同時に、生徒達はシン…と一瞬で静かになり整列する。

「おはよう、とりあえず1年A組。無事にまた集まれて何よりだ」

「皆許可降りたんだな」

「私は苦戦したよ…」

「フツ…そうだよね…」

「2人はガスで直接被害あったもんね」

瀬呂は言うと言葉隠と耳郎は顔を顰めらせる。ガスの影響で昏睡状態だった2人を見て言う尾白だが、昏睡から一早く目が覚めた耳郎はその後に緑谷達と神野区に赴いた事に罪悪感を持ったのか、顔を曇らせる。すると、蛙吹が心配そうな表情で相澤に声を掛けた。

「無事に集まったのは先生もよ。会見を見た時はいなくなってしまうのかと思って悲しかったの」

蛙吹の意見に同意したのか麗日は「うん」と頷く。

「…………俺もびつくりさ。まあ…色々あんだろうよ。さて…！これから寮について軽く色々説明するがその前に1つ」

何か訳有りなのか頬を掻き目線を逸らす、余計な心配させまいと相澤は手を叩き、続けて口を動かした。

「そっぴやあつたなそんな話!!」

「色々起きすぎて頭から抜けてたわ…」

騒つくA組だが「大事な話だ。いいか？」と遮られ、その騒つきは一瞬で止んだ。そして相澤

の目付きは嫌悪、あるいは怒りのこもったような目付きとなっており、相澤はA組の生徒達の一部の名を呼んだ。

「轟、切島、緑谷、八百万、飯田、そして耳郎」

その名を呼んだ瞬間、呼ばれた6人はハツとし、同時に察した。

「この6人はあの晩あの場所へ、爆豪と火野の救出に赴いた」

相澤が言った瞬間、「え」と声を漏らす峰田を筆頭に呼ばれた6人、そして爆豪と火野以外の生徒達の表情は曇り、内心驚愕した顔で緑谷達の方へと視線が向かれる。それもその筈、緑谷達が神野区へ赴いた事を麗日達は知らなかった。増してや昏睡状態だった耳郎もさえた。

「その様子だと、行く素振りには皆も把握していたわけだ。色々棚上げした上で言わせてもらうよ。オールマイトの引退がなけりや俺は、爆豪、火野、葉隠以外全員除籍処分にしてる」

「!？」

久しく忘れていた。相澤は見込みが無いと判断すれば容易に生徒を除籍処分する担任の存在。その相澤の発言にクラスメイトは動揺し、緑谷は唾を呑むと相澤は続けてその理由を喋った。

「彼の引退によって暫くは混乱が続く：敵^{ライアン}連合の出方が読めない以上、今雄英から人を追い出すわけにはいかないんだ。行った6人はもちろん、把握しながら止められなかった11名も理由はどうあれ、俺達の信頼を裏切った事には変わりない」

「せ、先生！でも緑谷君達はー」

「話の途中だぞ。それに肩入れするな火野」

火野は口を挟むが相澤はそれを割入るように言い、火野に向かって口を開く。

「もし逆の立場ならお前もあの場に行ってただろ、違うか？」

「……!？」

「人質の身だからって鼻肩はしない。お前は敵と手^{ライアン}を組んだアंकと同じグリードを匿ったみたいだが、罪人と言う事に変わりない。こいつらも俺もまだ認めてないからな」

「え……」

犯罪者を匿っていると言うような突きつける言葉を相澤が喋ると

クラスメイト達が再び騒めき始める。ウヴァは林間合宿で敵と手を組んだ事をあの場にいた全員は知らされていたがその後火野の仲間になった事は誰も知らされていない。困惑と驚愕、更に重い空気が漂う中、相澤は続けて口を動かした。

「まあ、何にせよ…これからは火野とそのグリード達を含めてお前らは正規の手続きを踏み、正規の活躍をして、信頼を取り戻してくれるとありがたい。」

以上！さっ、中に入るぞ、元気に行こう」

「（いや待つて、行けないです…）」

即決に言い終え、体を半回転してツカツカと寮へと歩き出す相澤。だが心を抉られるような指摘にA組生徒達は直ぐに元気を出す事は無理なのか重々しい雰囲気を漂わせ、皆は俯いていた。

すると、爆豪は不機嫌そうな顔をしながらも落ち込んでいた切島と上鳴を見遣る。爆豪は何を思ったのか上鳴の方へと歩き、彼の首根っこを突然掴んだ。

「来い」

「え？何？ちよ、怖い！やだ…」

戸惑う上鳴を構い無しに茂みの方へと連れて行き、他のみんなの目の届かない場所へと入って行く。次の瞬間、上鳴の「個性」である放電が茂みの奥から鳴り響く音と同時に発光する。いきなりの電撃の音に驚く全員だが、鳴り終えた直後、上鳴の姿が現れる。

「うエ~~~~い……」

放電し過ぎたのか上鳴はアホの顔になりサムズアップをしながら皆の側へとやって来る。戸惑う生徒達の中、笑いのツボに入った耳郎は「バフオツ！」と吹き出していた。

「何？爆豪何を…」

「切島」

「んあ？」

突然の行動に瀬呂は聞くが爆豪は無視して切島に声を掛ける。すると、ポケットから万札を5枚取り出し切島にそれを差し出した。

「えっ怖っ、何カツアゲ!？」

「違え、俺が下ろした金だ！いつまでもシミつたれられつと、こつちも気分悪イんだ」

「あ…え!?おめーどこで聞いた…」

爆豪の言葉に切島は以前アマゾンで購入した暗視鏡を思い出す。目を見開いて驚いていると爆豪は有無を言わずに切島にその金を押し付けた。

「いつもみために馬鹿晒せや」

爆豪はそう言つて切島から離れていると「うエイ?うエイうエウエウエイ!」と上鳴がアホな発言を連発しながら耳郎達の周りを徘徊する。

「だめ…ウチ、この上鳴…ツボツフォ!!」

「ふえ…ふえ、ふえいだウエイ!」

ヒートアップする上鳴に耳郎は再び吹き出す。恐らく、爆豪なりにクラスの雰囲気明るくしたかったのだろう。それに上鳴もアホになりながらも察して笑いを取ろうと必死にアピールする。次第にA組の連中の口は綻び、その場は笑いに包まれて行つた。

「あはは……。そうだ、皆」

笑い終えた火野はふと、その場に居た全員に声をかけて視線を向かせる。

「どうした火野?」

切島が聞くと、火野は真剣な表情となつて口を開いた。

「うん、その…この場を借りて紹介しておこうかと思つて。ウヴァ、出て来てくれる?」

『?…何でだ?』

「挨拶。これから皆と居る事になるんだからさ」

『!今するのか?』

「今じゃ無きやいつやるんだよ、ほら早くつ」

『こ、断る!あんな自己紹介やつてられるか!』

「あ、そう。なら、引越しに手伝ってもらつたお礼のアレは無しで良いんだな?」

『なっ…!?卑怯だぞ?!』

体の中に居るウヴァに話しかける火野。側から見れば1人で喋っている雰囲気だが、しばらくすると、火野の中から大量のセルメダルが浮遊しながら溢れ出しその形が形成され、人間態のウヴァが姿を現した。殆どのA組達は初めて見るウヴァ。目付きも悪くオールバックにした髪型、緑色のジャケットを着込んだその容姿はとてもしーローの手助けをするとは思えない。言ってしまうえば敵そのものの風格だ。

「映司……本当にやるのか……!?!」

「当たり前だろ、その為に練習したじゃないか」

「ウぐつ……!」

響んだ空気の中、ウヴァと火野はコソコソと小声で話し合う。ウヴァは観念したのか、大きく溜息を吐くと、一步前に出てクラスメイ卜達の顔を伺う。

そして、ウヴァは覚悟を決めたのか大きく息を吸い込むと……

「み……みんな！ おはよウヴァ!! 俺はグリードのウヴァ!こ、これからは心を入れ替えて君達の手助けをしていくよ!よろしくね!」

その瞬間、その場に居た者達の顔はポカんと啞然する。柄の悪そうな先程の見た目とは思えない程の満面の笑み。そして子供番組のお兄さんのような喋り方と振る舞い。笑いの場となっていた筈の空気が、一気に冷めてしまった雰囲気となってしまう、火野は全員の顔を伺いながらオロオロとしていたその時。火野の体から再び大量のセルメダルが飛び出し、形を形成していく。

「クククク……ハハハハハッツ……!!おいウヴァ、お前そんな芸当が出来たのか?虫頭が随分と優しい顔をするもんだなあ!フツ、こいつは傑作だ!ハハハハ!」

現れたと同時に高笑いしたのはアंकだった。1人だけ腹を抱えて大笑いし、それを見ていたウヴァは1番笑ってほしくない相手だったのか拳を震わせ顔を真っ赤にしながら声を掛けた。

「アंक!! 貴様、そこまで笑うか!？」

「ああ? 何だ、笑いを取る為にあんなギャグをかましたんだろ? 笑って何が悪いんだ?」

「んぐ…つつ…!! よりにもよって1番聞かれたく無い奴に…!!」

「……………ブツふ…!」

「思い出し笑いをするなっ!!」

余程恥ずかしい思いをしたのかウヴァは悔しそうに再び拳を強く握り締め震わせる。アंकとウヴァの2人のやり取りを見てみると、芦戸が火野に声を掛けた。

「ねえねえ火野、うづあって人はアंकと知り合いなのー?」

「え? ……あ、ああ。えっと…知り合いつて言うか、因縁って言うか…」

前世の事はボロを出さないよう、火野はしどろもどろに返答すると芦戸は「へー」とあまり納得してない返事をし、続けて口を開いた。

「なんか面白そうじゃん!」

「^{ウイラン}敵に加担してたのはちよつと動揺してるけど」

「アंकと仲良さそうだな」

「むしろ並んでると敵^{ウイラン}って間違えられてもおかしくないな…」

「全然敵意なさそうだしねー!」

「お前が信じるなら俺は賛成だぜ、火野」

「うんうん! よろしくウヴァ!」

次第に1人、2人と曇っていた顔が解けて行き、明るい雰囲気となっていく。賛同していくクラスメイトに火野は「皆…」と嬉しそうに笑みを溢す。ウヴァも近寄るクラスメイトに戸惑いながらも「お、おう…」ときこちなく返事をしていると同時に、立ち止まって生徒達を見ていた相澤は溜息を吐くも、その眼は何処か安心しているような瞳を写していた。

「……………わりイな。……………よしっ」

一方切島はアंकとウヴァに視線を向けているクラスメイトから目を引いて爆豪を見遣る。押し付けられた5万円を軽くギユツと握り締めるとその口を開いた。

「皆！すまねえ…!!詫びにもなんねえけど…今夜はこの金で焼き肉だ!!」

「ウェーイ！」

「マジか！」

「買い物とか行けるかな？」

「俺鶏肉食いてー」

「鶏肉…!?おい、せめてアイスにしろ！」

「何だ？同族を食うのは嫌か？」

「黙れ、…『おはよ』ウヴァ君」

「やめろ…!!」

切島の提案に賛成し、笑い嬉しきでその場の空気は和まれ楽しく包まれる。そんな中、先程まで上鳴にハマって笑っていた筈の耳郎は愛想笑いはするも、アंकと痴話喧嘩をするウヴァを嫌悪した目で見つめていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

そんなこんな、茶番を挟んだ後にクラスメイトは寮へと足を踏み込んだ。

「1棟クラス、右が女子棟、左が男子棟と分かれてる。ただし1階は共同スペースだ。食堂や風呂・洗濯などはここで」

「広！キレー!!そふあああ!!」

「おおおっ」

「中庭もあんじゃん！」

「豪邸やないかい」

「うららかに!!」

まずは1階の共同スペース。大型液晶テレビを囲んだソファの場所や食事をするリビングにはテーブルセットの20人分が揃えられた広々とした空間。さらに瀬呂の言う通り、横一面と広がるガラス面の向こう側には芝生や低木がオシャレに生やした中庭が見える。

家具もすっかりと兼ね備えており、贅沢な寮に麗日は立ちくらみがしたのか、ふらりと倒れそうになっていた。

「聞き間違いかな…？風呂、洗濯が共同スペース？夢か？」

「男女別だ。お前いい加減にしとけよ」

息遣いを荒くしている峰田はボソツと呟くと、相澤の低く、精神的に殺しに来るような一声でその卑猥な衝動は「はい」と単調に終わっていた。

和気藹々とクラスメイト達は1階を見終えると、続いて2階のフロアへと移動。同時に相澤は歩きながら説明をした。

「部屋は2階から。1フロアに男女各4部屋の5階建て。1人1部屋エアコン、トイレ冷蔵庫にクローゼット付きの贅沢空間だ」

「ベランダもある、凄いい！」

「我が家のクローゼットと同じくらいの広さですわね…」

「豪邸やないかい」

「八百万さんの家って広い家なんだね」

「ただの金持ちだよ」

一部の部屋を開いて紹介する相澤。一通りの家具が揃われた空間はとても高校生が住まうには贅沢な広さだ。ポツリと呟く八百万に麗日は再びツッコみながら倒れそうになる。そんなやり取りを火野は解釈すると耳郎はジト目でそう応えていた。

「部屋割りはこっちで決めた通り。各自事前に送ってもらった荷物が部屋に入ってるから、とりあえず今日は部屋作ってる。明日また今後の動きを説明する。以上、解散！」

「……はい先生!!!」

説明を終えた相澤はその場を後にして立ち去る。

ふと、火野は部屋割りの見取り図を振り返る。

2階はまず男子、峰田、青山、緑谷、常闇

女子は空室。

3階男子、火野、空室、飯田、尾白

女子は耳郎、空室、空室、葉隠

4階男子、障子、切島、爆豪、上鳴

女子は麗日、空室、空室、空室、芦戸

5階男子、空室、砂藤、轟、瀬呂

女子は八百万、空室、空室、空室、蛙吹

「こんな感じなんだ…。よし、先ずは部屋に行って片付けをしないと
な。アंकもウヴァも手伝えよう？」

「フン、勝手にやってる」

「同感だ。俺はもう疲れた」

「駄目だって、一息吐くのは片付けた後！さ、早く行くよ」

面倒くさがる2人を引き連れ、火野は自分の部屋がある3階へと移動した。中に入ると、部屋の真ん中辺りには実家から事前に持って来られた段ボールが重ねられて置かれている。手荷物を隅に置いた火野は袖を捲り上げ、「やるぞー」と意気込みを入れていたのだった。

No. 100 ベストセンス決定戦

出来立てホヤホヤのハイツアライアンスに越して数時間後、一通り自室の片付けを終えた火野はアंकとウヴァを部屋に残して1階の共有スペースへと降りた。持参した飲み物を片手にゴクつと飲み、「ふう…」と一息を吐きながら晴天が差し込む窓の外を眺める。ふと、玄関先からゴトゴトと物音が聞こえた。何だろう？と火野は玄関先へと足を運ぶと、そこには大荷物をよいしょよいしょと運んでいた轟がいる。

「轟君」

「火野…、もう終わったのか？」

「うん、あまり持つて来てなかったからね。結構早く終わったんだ。ところで、それどうしたの？」

轟が持つて来た荷物に軽く目を見開きながら問い掛ける。何枚かの大きな畳、障子戸、四角い木枠の照明が置かれていた。見る限り何れもまだ新そうな物ばかりのようだ。

「粗大ゴミ置き場から持つてきた…。まあ色々あってよ、リカバリーガールに教えてくれて貰ったんだ」

「これ全部タダでくれたの？凄っ…本当雄英って何でもアリだな」

深くは詮索せずに改めて雄英の凄さに感服した火野。轟の性格の事だ。何か良いことをしたお礼について感じなのだろう。

「あ、轟君手伝うよ。これ1人でやるのは大変でしょ？」

「…良いのか？」

「困ってる時はお互い様、俺はもう終わったし…それに、救ってくれたあの時のお礼も兼ねてね」

火野の言葉に、轟は首を傾げる。

「…俺はなにもしちゃいねえ。あの時は、緑谷の判断で爆豪だけを救けた…その事に関しては、俺はお前に謝らなきゃー」

「そうじゃなくても、あの場に助けに来てくれた事変わらない…だろ？ありがとう轟君」

「……………ああ」

このまま否定を続けたところで火野はそれを拒み続けるだろう。そう思った轟は素直にその礼を受け止め、強く領いた。

「よし、じゃあ運ぼつか。…轟君の家って和風建築なの？」

「俺の実家日本家屋なんだ…。フローリングの部屋はしっくりこねえ…」

「なるほどね、それで畳か」

「とりあえず火野、エレベーター使って持って行こう」

「そうだね、じゃあせーので行くよ？」

火野の言葉に轟は「ああ」と頷き、畳をぶつけないよう、エレベーターの方へと移動したのだった。

☆☆☆☆☆☆

時刻は過ぎ、ATTOTIUMANNIYOUR…

「はー、疲れたあ…」

「切島、荷解き終わったのか？」

「ようやくな！」

「お疲れ様」

「経緯はアレだが、共同生活ってワクワクすんな！」

「だね」

「共同生活…これも協調性や規律を育む為の訓練…！」

「キバるなあ委員長」

荷造りを終え、夕飯も切島の奢りで焼肉を食べて、どつと疲れが出たのか共同スペースで男子達はくっちゃべりながら寛いでいた。

「男子ー、部屋できたー？」

すると、蛙吹を除いた女性組をゾロゾロと引き連れた芦戸が声を掛けてくる。

「うん、今寛ぎ中」

「フン、下らん…」

ふと、隣の自分の部屋のドアにもたれ掛かっている常闇が呟く。その一言に間が空いたが、芦戸と葉隠は無言でドアの横へ押し出し、強引に扉を開けた。その瞬間目の前が真っ暗になるような現象が視界に入る。

「黒!!怖!」

それもその筈、ライトの光と言う概念など無く、薄暗い灯りが灯され、辺り一帯は黒を貴重とした家具やカーテンで囲まれた真っ黒い部屋だった。その小さな明かりに人や鹿の頭蓋骨が浮かんで見える。慌てて常闇も中へと入るが、時は既に遅く、ゾロゾロと見学するクラスメイトに怒りと羞恥心で「貴様ら…」と体を震わせていた。

「このキーホルダー、俺中学ん時買ってたわあ」

「男子ってこういうの好きなんね」

「出ていけ…」

「ハッ…剣だ…カツコイイ…」

「スツゴい、盾もある…」

「出ていけ!!」

常闇の私物を見てはワイワイと騒つくクラスメイト。玄関先に置かれていた模造品の剣と盾に緑谷と火野は感動していると、常闇は珍しく大声で怒鳴り声を上げる。余程部屋の中を覗かれたくなかったのだろう。生徒達はこれ以上怒らせるのはまずいと思ったのか、そそくさにその場を後にした。

その隣、今度は青山の部屋へとお邪魔する。

「「まぶしい!!」」

「アハハハハ!」

常闇とは打って変わってすんなりと中へ入れてくれたが、その部屋はミラーボールに大量の鏡、目移りが悪くなる程の眩しい部屋だった。

「ノンノン、まぶしいじゃなくて、ま・ば・ゆ・い!」

「思ってた通りだ」

「想定外の範疇を出ない」

見学者の発言を言い直そうとするが、芦戸と葉隠を筆頭にクラスメイトはそそくさにそう言って退場していく。完全に想定内なのと、単純に彼のその性格がちよっと絡み辛いのだろう。

「なんか楽しくなってきたぞ！あと2階の人は…」

麗日はそう言つて、他の生徒達は残りの部屋がないかと見回す。すると緑谷の隣、峰田の部屋から本人の峰田が半開きのドアからこちらの様子を伺っていた。

「入れよ…。すげえのを見せてやんよ…」

「凄いのって？」

「気にすんな火野、見たら後悔するぞ」

「3階行こ」

「入れよ…なア…」

物凄い形相と荒い息遣いの峰田が指先で手招きするが、どうせ碌なものではないと皆は3階へと移動して行った。

3階へと移動し、先ず最初は尾白の部屋へと入る一同。女子を先頭にドアを開けると、必要最低限の家具だけが揃われ目立った物は見当たらない普通の部屋を目の当たりにする。

「ワァー普通だア!!」

「普通だア！すごい!!」

「これが普通という事なんだね…!」

シンプル・イズ・ベスト。そう言っても過言では無い部屋に女子達は普通と言う言葉を連呼するが、尾白本人は「言う事無いならいいんだよ…?」と気を使った様子で言っていた。

続いて隣の飯田の部屋は、ベッドの横の本棚や、至る所に分厚い本が並ぶ部屋となっていた。

「難しそうな本がズラツと…さすが委員長!」

「おかしなものなどないぞ」

自身気に紹介する飯田だが、壁に取り付けられている棚に大量の眼鏡が置いてあることに麗日は気付き、ポツと吹き出しながら言った。

「メガネクソある!」

「何が可笑しい!!激しい訓練での破損を想定してだな…」

「なるほど、それならストックが必要だね」

「うむ、理解してくれて何よりだ火野君！」

「だとしても多すぎ」

飯田の言い分に納得する火野だが、それでも本に負けない程の量の眼鏡に耳郎はボソツとツツコんでいた。

続いては一部屋を飛ばして火野の部屋。ドアの目の前に来た一同は騒つき始める。

「火野君の部屋ってどんな感じだろー？」

「実力はA組随一！」

「きつとお部屋もA組随一！」

「意外と普通かもよ？」

「あはは…何も変わった事は無いよ。あまり期待されると返って困るから……」

A組屈指の実力者である火野に期待に胸を膨らますクラスメイトだが、火野は困った様子で苦笑しながら、その扉を開けた。そして一同はその部屋の光景に驚愕する。

「「思ってたのを遥かに上回った!!」」

「赤色と緑色にわかれとる!!」

「何だこの部屋!?!」

視界に入ったのは赤色のデカイシートと緑色のシートが半分ずつ分かれた部屋の色合いに驚く一同。赤色の方にはロフトタイプの木製ベッドが置かれており、その上からも赤いシートを掛けていた。対して緑色のスペースには、これまた緑色のシートを被せたソファアが置かれている。部屋の奥、ベランダ付近にはロフトタイプのベッドが置いてあり、その下は勉強机と液晶テレビがポツンと卓上の上に置いてあるのが見える。恐らく火野のスペースはそこだけなのだろう。

すると、大勢で押しかけたのに驚いたのか、赤色のベッドからアンクが起き上がり、皆を見渡すと同時に不機嫌な様子で火野に声を掛けた。

「おい映司、何だこの集まりは…!?!」

「部屋を紹介してほしいから見せてるだけだ」

「紹介？下らん、さっさと出ていけ」

「そう言うなって」

宥めようとする火野だが、アंकは鼻を鳴らして再びベッドの上に寝転がり、メダルが重なるような音が聞こえてくる。大方ベッドの上でコアメダルとセルメダルを眺めているのだろう。

「アंक君とウヴァ君に部屋乗っ取られとる…！」

「火野のスペースあそこだけ？」

「お前主人みたいなもんだろ？良いのか？」

「まあ、俺そんなに物欲無いからさ…休める所さえあれば別に問題は無いよ」

麗日が驚き、奥にある2段ベッドのスペースを見つけて芦戸と砂藤が声をかけるが、火野はあっけからんとした様子で応える。

「そう言えばウヴァさんはどちらにいらっしやるのですか？」

ふと、八百万が見当たらないウヴァの事が気になったのか火野に尋ねると、「えっと」と火野は部屋の中に入り、鍵の開いたベランダを開ける。

「ム、遅いぞ映司…って何だこの集まりは!？」

ベランダに居たウヴァは火野の存在に気付き、振り返るが、大勢のクラスメイトの人数に驚き声を上げる。

「部屋を紹介してるんだ」

「あーウヴァ君！」

「そんなところで何してるのー?」

「ウヴァくん…!?何だその呼び名は…?」

火野は単調に説明すると、ウヴァを見かけた芦戸と葉隠が声を掛けるが、君付けされるのを慣れていないウヴァはあたふたと動揺している。ふと、ウヴァの隣に置いてある物に興味を持ったのか、緑谷は火野に声を掛けた。

「火野君、これは？」

「望遠鏡。ウヴァは景色や風景見るのが好きみたいで、引越しの手伝いとこれから一緒に戦うお祝いで買ってあげたんだ。一通り部屋紹介済んだ後で俺の体使って見せてあげる予定なんだよ」

「火野お前優しいな」

「フーン！俺にはプレゼントは無いくせにな」

「うるさい」

ベランダに置かれているのは高そうな天体望遠鏡。ウヴァの前祝いとしてあげた物らしく、グリードのウヴァはそのまま見ても燻んだ光景しか見えないが、火野の体を借りればそれは一転。待ちきれないのかベランダで待機していたのだろう。感動する切島だが、聞こえていたのか文句を垂れるアंकクに火野はそう返していた。

「うわっ！冷蔵庫アイスばかり！」

「おい！触んな！食ったらぶっ飛ばすぞ！」

「やめろってアंकクっ」

「映司、こいつら目障りだ！とつとと放り出せ！」

「やなこった」

「…っ！ちっ、まだ実家の方が断然マシだったなア…！」

一方で芦戸は冷凍庫の中身を拝見したのか、ビッシリ敷き詰められているアイスクャンディーを見て驚いていると、いち早く反応したアंकクが殺意を向けた目付きで怒鳴っていた。ギャーギャーと騒いでいるそんな中、耳郎は落ち着かない様子で火野のスペースの箇所をチラチラと見つめていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

火野の部屋を最後に3階男子の部屋を一通り見終えた後、急に尾白が不満気な顔で呟いた。

「なんて言うか…俺釈然としないんだ」

「そうだな」

「僕も☆」

便乗して常闇と青山も納得行かない様子で深く頷く。特に気にして無い火野と飯田、緑谷はけろっとした顔だが、女子に言われ放題で

プライドを傷つけられた3人はこの有様だ。すると、それに同意したのか峰田がズカズカと女子達に向かつて歩み出しながら口を開いた。「男子だけが言われっぱなしってのはあ変だよなあ？お部屋披露大会つつたよな？なら当然！女子の部屋も見て決めるべきじゃねえのか？誰がクラス一のインテリアセンスか、全員で決めるべきなんじゃあねえのかあ!!」

瞬間、ミステリアスドラマの如く雷がズガン！と付近に落ちる（ような気がした）。女子による容赦無い舌剣が、峰田を筆頭に男子の闘争心に火をつけたのだ。

「いいじゃん！」

峰田の提案に乗り気になる芦戸。その横では嫌そうに耳郎が「え」と低い声を漏らす。同時にそれは宣戦布告のように緊張感が巻き起こる。全く興味の無い者達を含めて、第1回A組ベストセンス決定戦が今、始まろうとしていた。

いいのか？はたして…いいのか!!?

「どうしたの緑谷君」

「ひえ!?な、ナニヒノクン!？」

「いや、なんか凄い形相だったから」

火野の声に思わず飛び退くように驚き、裏返る声の緑谷は「な、なんでもないよ!？」と慌ただしく応えていると、芦戸はノリノリな様子で口を動かしていた。

「えっとじゃあ、誰がクラス一番のインテリアセンスか、部屋王を決めるって事で!!」

「部屋王?」

「別に決めなくても良いけどさ…」

分かりやすいルールの内容を決める芦戸。それに戸惑う耳郎と尾白。だが、その話を待ってましたと言わんばかりに、峰田の卑猥な目は輝いていた。

「(フフフ予定通り…！オイラだけが主張していても足蹴にされてただろう。」

だが！少なからず自尊心を傷つけられたこいつらの意思に乗じる

事で、オイラの主張は『民意』という皮を被るのさ!!これにより、実に自然な流れで女子部屋を物色出来る!ひょー!」

その脳内、その意気込み、その表情。全てが妄想と卑猥な考えと言うパラダイスに包まれていく峰田。彼の野心を誰も知らずに、一同は4階へと移動したのだった。

「えつと4階は…爆豪君、切島君、障子君、上鳴君だね」

4階の廊下を歩きながら麗日は再度部屋の主人の確認を取ると、飯田はふと尋ねる。

「爆豪君は?」

「くだらねえ、先に寝る」つてよ。俺も眠い…」

「普段ならもう寝る時間だもんね」

何となく爆豪がこの場にはいない事から事情は察していた火野は「ふあ…」と欠伸をする。何人かも眠たそうな表情を浮かべている中、芦戸と葉隠は容赦無いハイテンションで口を開いた。

「じゃあ先ず切島部屋!!」

「ガンガン行こうぜ!!」

「どーでもいいけど、多分女子にはわかんねえぞ」

切島はそう言っただアを開けると、奥にあるサンドバッグ、床に置いてあるダンベルに、『必勝』『大漁』と書かれた張り紙など、如何にも漢気溢れた熱苦しい部屋だった。

「この男らしさは!!」

グツと拳に力を入れて言う切島だが、芦戸はブレない表情で「うん」と頷くだけだった。それに続き、葉隠と麗日が口を開く。

「彼氏にやってほしくない部屋ランキング2位くらいにありそう」

「アツいね、アツクルしい!!」

葉隠はともかく、麗日は頑張ってフオローをしているつもりだろうが、予想通りの反応なのかあまりよろしくない評価を聞かされ、切島は涙目になりながら「ホラな」と応えた。

切島の部屋も見終えた一同は障子の部屋の前へと移動する。

「次!障子!!」

「何も面白い物は無いぞ」

芦戸の掛け声に障子は無愛想に応え、ドアを開けた。そこには、小さな机1つ、座布団1つ、布団一式が置いてあるだけだった。

「面白いどころか!!」

間抜けの殻状態の部屋に芦戸は声を上げてツッコむ。あまりの殺風景な部屋にクラスメイトは評価し辛いのだろうか困惑している中、轟と火野は障子に声をかけた。

「ミニマリストだったのか?」

「まあ幼い頃からあまり物欲が無かったからな」

「でも逆に考えれば部屋全体を広々と使えるからね」

「こういうのに限って実はドスケベなんだぜ」

3人の会話にボソツと呟く峰田。

特にこれと言って評価し難い部屋だったのか、A組は直ぐに障子の部屋を後にし、上鳴の部屋へと移動した。

ドアを開けると、靴を並べたシューズケースにスケートボードが立て掛けており、壁にはダーツ、床にはバスケットボールが転がっていた。

「チャライ!!」

「手当たり次第って感じだナー」

流行に乗りたくない性格なのか纏まりが無く、女子の評価もいまいちな様子に、上鳴は「うえー!!良くね!」とショックを受けていた。

「うぐ…釈然としねえ……」

「だろ?」

「同士……」

落ち込む上鳴に、尾白と常闇が隣に立ってフォローする。火野も苦笑する中、生徒達は5階フロアへと移動した。

「次は1階上がって5階男子!」

「瀬呂からだ!」

「マジで全員やんのか……?」

あまり乗り気では無さそうに言う瀬呂だが、その部屋を開けると全員は驚いた様子で口を開いた。

「おお!!」

「エイジアン!!」

「ステキー」

その部屋はアジアンテイストを用いた部屋で、大きな絨毯に加え、ベッドの隣にはハンモックが置かれている。これだけ揃えられた部屋に女子達は興奮していると、火野も同様だったのか瀬呂に声をかける。

「へー、凄いね瀬呂君！俺アジアンテイスト結構好きなんだよー」

「へっへっへ、ギャップの男瀬呂君だよ！」

先程のテンションとは裏腹に自身気に言う瀬呂。今のところ男子の中では瀬呂が断トツだろうと火野は思っている中、生徒達は瀬呂の部屋を後にし、次の部屋へと移動する。

「次次ー！」

「轟さんですわね」

クラス屈指のイケメンボーイ。きつとその部屋も貴族のような部屋で彩られているのだろうと、女子達は楽しそうに騒いでいた。

「さっさと済ましてくれ、ねみい」

1番眠たそうにしていた轟はそう言って何事も無くドアを開ける。そして部屋の中を見た瞬間、火野を除いたクラスメイトが一斉に驚愕した。

「「和室だ!!」」

「造りが違うね!?!」

最早テイストなどとは呼べない程の部屋。フローリングは畳で窓は障子戸、木で造られたタンスに盆栽らしき植物までもが置かれている。

「実家が日本家屋だからよ。フローリングは落ち着かねえ」

「理由はいいわ!」

「当日即リフォームってどうやったんだお前!」

ポツポツと喋る轟に上鳴と峰田がツッコむ。すると、轟は火野の方へ視線を向きながら応えた。

「火野と一緒に……頑張った……」

「え！火野お前知ってたの!?!」

「だとしても2人で出来るってレベルじゃねえ!」

「ぐ、偶然だよっ。運ぶのは大変だったけど、2人でやれば半日で何とかなったよ」

「何だよコイツら!!」

少し自慢気に応える火野だが、轟を含め2人のあっけからんとした表情に上鳴と峰田は逆ギレし、声を張り上げていた。

「大物になりそー」

「うちのエース達のやる事は違えな」

葉隠が言い、度肝を抜かれた砂藤は後頭部を手で押さえながらいち早く轟の部屋を出る。すると、芦戸も満足したのか部屋から出て声を上げた。

「じゃ次！最後はー」

芦戸の言葉に砂藤が「俺」とげんなりした様子で反応する。あれだけ驚きな部屋を見せられてしまったのだ。落ち込むのも無理はない。

「まーつまんねー部屋だよ」

そう言っつて砂藤はドアを開けると、そこは至って普通の部屋だった。

「轟の後は誰でも同じだぜ」

「ていうか、良い匂いするのコレ何？」

切島が宥めていると、尾白が鼻を嗅ぎながら言う。火野も吸い込んでみると、何かを熱で焼いたような甘い香りが漂っていた。その瞬間、部屋の本人の砂藤が「あー!!」と声を張り上げた。

「ああイケね!!忘れてた!!だいぶ早く片付いたんでよ、シフォンケーキ焼いてたんだ!!皆食うかなと思っつてよオ…」

慌てて壁付近の台に置いてあるオーブンレンジから、見事にふっくらと焼き上がった1ホールのシフォンケーキを取り出す砂藤。

「ホイップあるともっと美味しいんだが………食う？」

「「KUU〜!!」」

「模範的意外な一面かよ!!」

振り返る砂藤はそう聞くと、待ってましたと言わんばかりに女子達は飛び出していた。意外にもお菓子作りが得意な一面を持つクラスメイトに上鳴と峰田は皮肉そうにツツコむ。

「あんまあい！フワッフワ！」

「瀬呂のギャップを軽く凌駕した」

「素敵なご趣味をお持ちですのね砂藤さん！今度私の紅茶と合わせてみませんか!？」

「オオ、こんな反応されるとは…まあ「個性」の訓練がてら作ったりすんだよ」

砂藤のシフォンケーキは均等に切り分けられ、その場に居た生徒達は試食する形で分け与えられた。味は勿論、女子が満開の笑顔になるほどの美味しさで、砂藤もこんなに好評とは思いもしなかったのか顔を真っ赤にして照れていた。

「ちつきしよー、さすがシユガーマンを名乗るだけうまつ！」

「ごごごどばかりに出してくるな……うまつ……」

餌で釣るやり方に納得が行かないようだが、その味は本物で、悔しがりながらもケーキを口に運ぶ事を止めない瀬呂と切島。

一先ずは一通り男子の部屋を見終えたA組生徒達。続いて女子の部屋を見る為に、シフォンケーキを「うまつ」と食べながら生徒達は一度1階フロアへと降りて行ったのだった。

No. 101 部屋王は誰だ！そして…

「まじで全員やるの…？大丈夫？」

「大丈夫でしょ、多分」

「……ハズいんだけど」

男部屋で砂藤を最後に見学をし終えたA組クラスメイト達は続いて女子寮を見る為に反対側の3階フロアへと移動する。トツプタワーは耳郎の部屋で乗り気ではない本人は嫌そうにしぶっているが、他の女子達に肩を押され、耳郎は覚悟を決めたのかその扉を開けた。「思った以上にガツキガツキしてんな！」

部屋を見るなり上鳴が叫ぶ。その部屋は見渡す限りの楽器部屋で部屋のスペースにこれでもかと言うくらい様々な楽器が置かれている。

「へえ、耳郎さんって楽器弾けるんだ！」

「あ、あんま見ないでくれる火野…？超ハズい……」

目を輝かせる火野に対して耳郎は顔を染めらせながら呟くと、続いて葉隠と麗日が部屋を見るなり口を開いた。

「耳郎ちゃんはロッキンガールなんだねえ!!」

「これ全部弾けるの!？」

麗日の質問に自身のイヤホンジャックを擦り合わせながら「まあ一通りは…」と耳郎は応える。

「女つ気のねえ部屋だ」

「ノン淑女☆」

上鳴と青山がここぞとばかりにボヤくと、耳郎は何事も無かったかのように彼らの後頭部にイヤホンジャックを突き刺し、爆音を提供させていた。

「次行こ次!!」

「次は私、葉隠だ！」

ぴよんぴよんと飛び跳ねる葉隠は、耳郎とは打って変わって移動すると、自信気に自分の部屋の扉を開ける。その部屋はピンクを主張し

た可愛らしいぬいぐるみやクッションが沢山置かれている部屋だった。

「どーだ!？」

「お…オオ」

「フツーに女子っぽい！ドキドキすんな」

普通に女の子らしい部屋に尾白と上鳴が照れ臭そうに見渡していると、コソコソと峰田が部屋に入り、衣類がしまわれているであろうケース状のタンスの前に立つと、くんかくんかと鼻を嗅ぐわせた。

「プルスウルトラ」

「正面突破かよ峰田君!!」

僅かな隙間から香る匂いと、その中に眠っている楽園のお宝を目当てに峰田の心は卑猥な好奇心でフルスロットルだった。だが流石にヤバいと感じたのか怒る葉隠に代わり、瀬呂は肘からテープを射出させ、峰田をぐるぐるのがんじがらめにさせていた。

続いて、4階へと上がり芦戸の部屋へと移動する。またしても女の子らしい部屋だったが、濃いピンクや紫を主張としたかなり奇抜な部屋だ。

「じゃーん!!かわいいーでしょーが!!」

「おオ…」

「可愛いらしい部屋だね」

「奇抜な部屋だな…」

自慢する芦戸に男子達は見惚れる中、火野が呟くと轟は率直な感想を述べていた。

次に同じ4階の麗日の部屋。

中に入るとこれもまた同じく至って普通の女子部屋だった。

「味気の無い部屋でございませ…」

「おお…」

きな臭い様子で紹介する麗日に男子達は声を漏らす。変わった所と言えば、エアコンが設備されているのに扇風機が置かれていた。恐

らく扇風機をサーキュレーター代わりに使っているのだろう。だとすれば節約家の人物だ。

「何かこう……あまりにもフツーにフツーの女子部屋見て回ってるよ、背徳感出てくるね……」

「禁断の花園……」

麗日の部屋を見終え、一同は5階へと移動する最中、尾白が常闇にその声を掛けると、後ろめたい気持ちで罪悪感でも出ているのか常闇はそう応える。

「次は蛙吹さん……」

「つて、そういうや梅雨ちゃんいねーな」

5階に上がり、緑谷が言うと同程から姿の見えない蛙吹に気付き、瀬呂が辺りを見つめながらそう言うのと、麗日が声を掛けていた。

「あ、梅雨ちゃんは気分が優れんみたい！」

「優れんのは仕方ないな。優れた時にまた見してもらおうぜ」

残念そうに上鳴が言い、一同は蛙吹の部屋を後にする。全員が移動した後、麗日は心配した様子で蛙吹の部屋を見つめていた。そして麗日も後を追うと、蛙吹の部屋のドアが開かれる。僅かな隙間から顔を覗かせた蛙吹は、皆の後ろ姿をどこか悲しそうな表情で見つめていたのだった。

「じゃ最後は八百万か!!」

蛙吹を飛ばして最後の八百万に上鳴が言う。

すると、八百万は少し困った表情で口を開いた。

「それが……私、見当違いをしてしまいました……。皆さんの創意溢れるお部屋と比べて……」

八百万は一旦区切り、その扉を開ける。

「少々手狭になってしまいましたの」

視界に入ったのはおとぎの国の城にありそうなお姫様ベッドが部屋の2分の1程の大ききで置かれていたのだ。

「でけえー!!狭!!どうした八百万!」

「私の使っていた家具なのですが……、まさかお部屋の広さがこれだけとは思っておらず……」

「（お嬢様なんだね）」

困ったように言い訳をする八百万に全員は苦笑する。ふと、火野は疑問に思っていた。これだけの巨大なベッド、どうやって部屋に入れたのだろうか。

☆☆☆☆☆☆

各自の部屋を一通り見終えたA組一同は、1階の談話スペースへと集合する。今回の部屋王が誰か決める為だ。

「えー皆さん、投票お済みでしょうか!?自分への投票はなしですよ!」

司会つぽく務める芦戸が聞くと、皆は黙って頷いた。

「それでは!爆豪と梅雨ちゃんを除いた…第一回部屋王暫定1位の発表です!!」

持っていた投票箱に手を突っ込み芦戸は集計を行う。そして、1番多く入れられていた票の名を発表した。

「得票数5票!!圧倒的独走単独首位を叩き出したその部屋は!

砂藤—————力道—————!!」

「はああ!!?」

まさかの自分が部屋王と認定され、驚きを隠せない砂藤。その理由を芦戸を筆頭に女子全員が、涎を垂らしながら応えた。

「ちなみに全て女子票!理由は『ケーキ美味しかった』だそうです」

「部屋は!!?」

まさかの食べ物に釣られた事に驚く男子生徒。すると解せないと思っただのか、上鳴と峰田が砂藤に突っかかった。

「てめーヒーロー志望が贈賄してんじゃねー!!」

「エサ上げりや良いと思っただのか!」

「知らねーよ、何だよすげえ嬉しい!」

怒られる砂藤だが、部屋王になった事に関わりない為か、上機嫌な様子で戯れていた。

「終わったか?寝ていいか?」

「うむ！ケーキを食べたので歯磨きは忘れずになー！」

「終わるまで待つてたんだ」

「優しいね轟君」

そんな様子を見ていた飯田に轟は眠たそうに声を掛けると、飯田はそう返し、最後まで付き合ってくれていた轟に緑谷と火野は感心していた。

了承を得た轟はその場から立ち去ろうとすると、麗日が急に声を上げて呼び止めた。

「あつ、轟君！ちよ待つて！デク君も飯田君も…。それに切島君、耳郎さん、八百万さん、ちよつといいかな」

呼び止められた6人。何故その6人なのか、火野を含めた他の全員は何となく察して麗日に連れて行かれる6人の後ろ姿を、心配そうに見つめていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

部屋に戻り、小1時間が経過した。

戻って来た火野は、ウヴァが見たいと言っていた天体望遠鏡を見る為、体を貸してつい先程まで夜の星を眺めていたようだ。

「あく今日は疲れたなあ」

思えば登校してからずっと体を動かしている。時計をふと見ればもうすぐで日付が変わってしまう時刻になっていた。「ヤバっ」と火野は声を漏らし、明日の必要なものを鞆へと詰め込んでいたその時だった。

コンコンツとドアの向こうからノックする音が聞こえる。

「……あ？何だ？」

「誰か来たみたい」

一足先に寝ていたアंकが腑抜けた様子で目を覚まして言う。こんな時間に誰だろうと火野は思いながら「はーいっ」とドアに近寄り、扉を開けた。

「お……おす……火野」

「え、耳郎さんっ?」

そこに立っていたのはなんと耳郎だった。

「どうしたのこんな時間に?」

火野は理由を聞くと、顔を赤く染めさせた耳郎は「ちよつと……」と言つて軽く部屋の中を覗こうとしながら続けて口を開いた。

「火野、ちよつとだけ話があるんだ。ここは見つかったら面倒だから……その、1階まで来てくれる……?」

「あ、うん。それは全然構わないけど、耳郎さんこそ大丈夫?」

「ウチは平気……あと、……ウヴァはまだ起きてる……?」

「え?ああ、起きてるよ」

「えと……呼んで来てくれる……?」

何だろうか?と思ひながら火野は頷き、自分のソファ―に寝そべつているウヴァに声を掛けた。

「ウヴァ、ちよつと来て」

「ム……何だ?」

火野の呼び掛けに反応し、ウヴァは立ち上がつてこちらに向かつて来る。

「誰だこいつは?」

「同じクラスの耳郎さんだよ。もお、一緒のクラスメイトなんだから名前と顔ぐらい覚えろよな」

「フン。……俺に何の用だ?」

どうでも良いと言わんばかりな傲慢な態度で耳郎に声を掛けるウヴァ。すると、気まずそうにしていた耳郎の顔は一変し、怒りを露わにするような目付きへと変わる。そして……。

いきなりイヤホンジャックを伸ばし、ウヴァの後頭部に刺したのだ。

BOOWツ!!

「ウバァツ!!」

「!?何だ!？」

瞬間、ウヴァの体内に爆音が鳴り響き、内側から破裂しそうな勢いでウヴァは苦痛の声を張り上げる。同時に寝ていたアंकも飛び起き、何が起こったのか火野達の方へと振り返っていた。

「え!?ちよ、耳郎さん!？」

「うオオ……!?き、貴様!いきなり何しやがる!？」

いきなりの行動に驚く火野と、爆音を提供させられ悶絶するウヴァ。すると、耳郎は大きく鼻息を出して口を動かした。

「これでウチの気は晴れた。ウヴァ、あんたが火野にやらかした事は本当はこれだけじゃ済まされないから。今後はしっかり反省して、火野をフォローしなよ」

「ぐっ……何を言い出すかと思えば……!こんな事して貴様こそただで済むと思うなよ!？」

「なら、もう一度味わう?」

「ちよ、ちよつと2人共落ち着いて!」

どうやら耳郎は林間合宿の件を根に持っていたようだ。歪み合う2人の間に火野は慌てて入り、落ち着かせようと宥める。

「と、とりあえず耳郎さんっ、俺に話があるんだろ?ウヴァも十分反省してるみたいだから一旦1階に降りよ?」

「……わかった」

「おい!話はまだ終わってないぞ!」

「ウヴァ!とりあえず今は落ち着けて!時間も時間だし、他の皆は寝てるから……!」

これ以上騒げば他の生徒達に迷惑が掛かってしまう。火野は不貞腐れる耳郎の両肩に手を置いて1階に連れて行こうとしながら、ウヴァにそう言っただけの場を後にした。

「……くくッッ……!!くそっ!」

「……ハッ、お前も随分と恨みを買われたもんだなあ?」

「アंक、お前にだけは言われたくない!」

腑に落ちないウヴァは叫びそうになる声を押さえて悪態を吐く。その様子を、アंकは悪戯心を持った子供みたいに、ニヤニヤしながら

ら見ていたのだった。

☆☆☆☆

1階談話スペースにて。

「……めん火野。かなり凶々しい事しちゃった……」

「だ、大丈夫だよ。……ちよつとびくりしちゃったけど」

熱が冷めたのか、落ち着いた耳郎は申し訳なさそうに謝罪する。突然の出来事に火野も動揺しているが、耳郎が怒る理由も察した為か、深く息を吐いて口を動かした。

「……ありがとう耳郎さん。俺の為に怒ってくれたんだよね？」

「い、いや……！ウチは別にそんな……！ウチこそ……火野に……謝りたくて……」

「俺に？」

笑顔でお礼を言う火野に耳郎は耳を真っ赤にして慌ただしく言う。その言葉に火野はキョトンとすると、取り乱していた顔は直ぐに冷静さを取り戻したみたいなのか、耳郎は口を動かした。

「あの時……ウチも心配で緑谷達と神野区に行っただけどあんな敵サイランを前にして、恐くて……何も出来なかった。爆豪だけを選択したウチ……後悔して……」

「……耳郎さん。俺は大丈夫だよ」

「え？」

本来なら火野に合わせる顔が無い。申し訳無い気持ちで一杯になる耳郎だが、火野は平然とした表情で口を動かした。

「捕まったのは元々俺が不意を突かれたのが悪いし。それに、耳郎さん含めてあの街に行っただけはそれが最善の策だと思って決行した事でしょ？俺も何とかなったんだから、謝る必要なんてこれっぽっちも無いよ」

「火野……。ま、まアでも梅雨ちゃんには呆れられちゃったけどね」

「え？どういふこと？」

火野はそう聞くと、耳郎は先程麗日に呼び出された件を説明した。なんでも、蛙吹は思った事を直ぐ口に出す性格らしく、彼女曰わく「ルールを破ると言うのなら、その行為は敵のそれと同じなのよ」と緑谷達に言い付けた。が、緑谷達はそれを無視して救けに赴き、蛙吹は何て声を掛ければ良いのかわからなくなってしまう、部屋王決定戦の時は部屋に閉じこもってしまったらしい。

「麗日さんのフォローもあって、その場は和解出来たけど…」

「……そっか。皆、元の生活に戻そうと頑張ってくれたんだね」

耳郎の言葉に深く頷く火野。すると、「よしッ」と火野は決意して座っていたソファから立ち上がる。

「ありがとう耳郎さん。俺も迷惑を掛けた分、今回の件は反省して明日からまた頑張るよっ。だから耳郎さんも普段通りまた明日からよろしくね」

「火野……そだね」

「うん。じゃあもう今日は遅いから部屋に戻ろう。また明日ね、耳郎さん」

火野はそう言い残し、自分の部屋へと戻るべく歩き出した。耳郎も立ち上がって「また明日」と言い、その後ろ姿を見送る。

「……普段通り……って言う訳にはいかない……かな……」

耳郎はそつと自身の胸に手を置く。まるでその胸の高なる鼓動を押さえるかのように、彼女はそう呟いたのだった。

☆☆☆☆☆☆

翌日、夏休みも残り僅かとなった日にA組ヒーロー科一同は相澤に呼ばれて、特別授業の朝のHRが始まった。

「昨日話した通り、まずは『仮免』取得が当面の目標だ」

相澤の言葉に全員は元気良く「はい！」と返事すると、相澤は続け

て内容を説明する。

「ヒーロー免許つてのは人命に直接関わる責任重大な資格だ。当然取得する為の試験はとても厳しい。仮免といえど、その合格率は例年5割を切る」

「仮免でそんなキツイのかよ…」

合格率は分かりやすく言えば半分以下。現実を押し付けられ弱音を吐く峰田。すると、相澤は教室の扉に視線を向けると、くいつと指先で手招きをしながら口を開いた。

「そこで君らには1人最低でも2つ…」

“必殺技”を作ってもらおう!!」

その声と同時に教室のドアが勢いよく開かれる。堂々と現れたのは教師のミッドナイト、エクトプラズム、セメントスの3人。

そして、先程相澤が言っていた言葉に生徒達は感極まって声を張り上げたのだった。

「!!!学校っぽくてそれでいて、ヒーローっぽいのがキタアア!!!」

第10章 く仮免取得く No. 102 編め必殺技

「二「学校つぼくてそれでいて、ヒーローっぽいキタアア!!!」」

3人の教師が現れると同時に相澤が言い放った言葉に、緊迫していた生徒達に熱気が高まる。

「必殺! コレスナワチ必勝ノ型・技ノコトナリ!」

「その身に染みつかせた型・技は他の追隨を許さない。戦闘とはいかに自分の得意を押し付けるか!」

「技は己を象徴とする! 今日日きょうび、必殺技を持たないプロヒーローなど絶滅危惧種よ!」

「詳しい話は実演を交え合理的に行いたい。コスチュームに着替え、体育館ガンマに集合だ!」

かつこよく、尚且つノリノリでエクトプラズム、セメントス、ミツドナイトの言い分とは裏腹に相澤はいつも通りの振る舞いで場所を指定する。

各自は元気良く「はい!」と返事して、コスチュームに着替えるべく更衣室へと向かった。

☆☆☆☆☆☆

コスチュームに着替えた一同は指定された場所体育館ガンマへと集まった。

「体育館ガンマ。通称トレーニングの台所ランド、略してTDL!!!」

「(TDLはマズそうだ!!)」

通常の体育館は木を使った床や壁が基本だが、その体育館ガンマは窓ガラス以外は殆どコンクリートで作られており、その規模もかなり広

い。

そして、何処かのデイ○ニーランドをオマージュしてるようなセメントスの略称に生徒達は色々と問題が起きるのではないかと心配を浮かべている中、セメントスは両手を床に着ける。するとコンクリは波打ち、徐々にせりあがっていた。

「ここは俺考案の施設。生徒1人1人に合わせた地形や物を用意できる。台所ってのはそういう意味だよ」

要はセメントスの「個性」を使用すれば、生徒の要望通りに地形を組み替えて使用出来る体育館という事だろう。その説明に上鳴が「なる」と頷き生徒達も納得している中、バツと飯田が勢いよく挙手した。

「質問をお許し下さい！何故、仮免許の取得に必殺技が必要なのか、意図をお聞かせ願います！」

「順を追って話すよ。落ち着け」

何かことあるごとに質問をする委員長はもはやパターン化している。この流れも慣れたのか相澤は切羽詰まらせる飯田を宥めながら、その意図を説明した。

「ヒーローとは事件・事故・天災・人災……あらゆるトラブルから人々を救い出すのが仕事だ。」

取得試験では当然その適性を見られることになる。情報力、判断力、機動力、戦闘力。他にもコミュニケーション能力、魅力、統率力など、多くの適性を毎年違う試験内容で試される」

「その中でも戦闘力は、これからのヒーローにとって極めて重視される項目となります。備えあれば憂いなし！技の有無は合否に大きく影響する」

相澤に続けてミッドナイトが言う。災害、人民救助、敵の鎮静。これら全てにおいてヒーローは迅速に対処するのが役割となるが、ただ普通に対処するのは時間がかかる、救けるのに失敗、最悪の場合は死に至る。それらの機転を上手く覆すのに必殺技が必要なのだろう。

「状況に左右される事なく安定行動を取れば、それは高い戦闘力を有している事になるんだよ」

「技ハ必ズシモ攻撃デアル必要ハ無い。例エバ：飯田クンノ『レシプロバースト』。一時的ナ超速移動、ソレ自体ガ脅威デアル為必殺技ト呼ブニ値スル」

「！アレ必殺技で良いのか……!!」

セメントス、エクトプラズムもそう説明し、エクトプラズムは飯田のレシプロバーストを評価すると、自身の考えた技が必殺技だと言われた飯田は全身を震わせ感動していた。

「マタ、火野クンノ『スキヤニングチャージ』モ然リ。メダル個々ノコンボデ扱ウ事ノ出来ルソノ技モ、必殺技二打ツテ付ケト言ツテモ過言デハナイ」

「へえ…：そうだったんだ…：」

「確かに火野の必殺技には助けられたな…：」

「うんうんッ」

火野のオーズのスキヤニングチャージ。これもまたそのコンボを最大限に活かした大技に値され、気付かなかった火野は感心していると、轟と緑谷が納得して頷いていた。

「なる程…：自分の中に『これさえやれば有利・勝てる』って型を作ろうって話か」

「そ！他にも、先日活躍したシンリンカムイの『ウルシ鎖牢』なんか模範的な必殺技よ。わかりやすいよね。相手が何かする前に縛っちゃう」

砂藤もわかりやすく自分で考察すると、ミッドナイトが例を上げる。

「中断されてしまった合宿での『個性』伸ばし』は…：、この必殺技を作り上げる為のプロセスだった」

ただ『個性』を強化するだけの特訓だったと思ひ込んでいた生徒達は相澤の言葉を聞いて驚く。すると、セメントスがコンクリを勢いよくせりあがらせ、天井高く聳え立ったコンクリの足場に、エクトプラズムは無数の分身を配置させる。

「つまりこれから後期始業まで…：残り十日余りの夏休みは、個性を伸ばしつつ必殺技を編み出す…：」

「圧縮訓練となる！」

A組一同の目の前に広がる光景。聳え立つ無数の足場にエクトプラズムが無数に見下すように配置されていた。圧巻とも言えるその光景に生徒達は緊張感を抱く中、続けて相澤は口を動かす。

「尚、〃個性〃の伸びや技の性質に合わせて、コスチュームの改良も並行して考えていくように。プルスウルトラの精神で乗り越えろ、準備はいいか？」

「二二〃……ワクワクしてきたあ!!!」

返事では無く、良い意味での緊張感が体育館Yに走る。地獄の〃個性〃伸ばしよりも何倍も期待が膨らむ生徒達。そんな中、火野は考え込んでいた。

「どうしょ……」

顎に手を付けて考え込む火野。それを見ていた相澤は察したのか、火野に声をかけた。

「火野、お前は現時点でどのくらい必殺技を持っている？」

「え、あ……えと、コンボの数だから……あの紫のメダルも含んで……多分6個ですッ」

「6もあんの!？」

「やっぱ実力者は違うなあ！」

メダルのコンボによつてその必殺技は繰り出されるオーズ。無論、武器のメダジャリバー、タジャスピナー、メダガブリューを含めばもっと数はあるかも知れないが、オーズ単体での数を火野は指で数えて応える。決して多くない数字だが、必殺技を碌に編み出していない他の生徒達にとってはその数は驚かれる程なのか、上鳴と切島を軸に生徒達は驚き、騒ついていた。

すると、それを聞いた相澤は口を開く。

「そうか。火野は必殺技を2つ以上持つているから、課題ノルマは達成しているな。火野はここでの訓練はそれらの必殺技の修行と、それに対する修正・改善を行い、把握しておけ」

「わ、わかりました」

☆☆☆☆☆☆

やる事が決まり、各々はエクトプラズムの指導を元に、必殺技を編み出す為に訓練を始めていた。

「サテ…火野クン。始メルゾ」

「はいっ…アंकー！」

持ち場に着いた火野は、分身体のエクトプラズムに言われ、さつそく変身しようと体の中に居るアंकに呼び掛ける。それに応えるように火野の体から大量のセルメダルが出て来て、人間姿のアंकへと姿を変える。

そうしている間に、辺りの練習場で衝撃音や恐らく爆豪の爆破であろう轟音が鳴り響いていた。他の者も訓練を開始したのだろう。

すると、アंकは火野に向かって声を掛けた。

「おい映司。ウヴァも呼び出せ」

「え？いいけど、何で？」

「いいからさっさとしろ」

急に要件を言うアंकの言葉に火野は疑問を抱きながら「ウヴァ」と自身に呼び掛ける。すると、アंकと同様セルメダルが漏れ出し、人間態のウヴァが出現した。

「何だ、映司」

「何だじゃない。おいウヴァ、お前のメダルをよこせ」

「は？何言ってるやがる？」

「お前が持ってたらタトバが使えないんだよ」

アंकとウヴァのやり取りを聞いて火野は察していた。昆虫類を模したウヴァは緑のコアメダルをその体内に取り込んでいる。その中にバッタのメダルが含まれている為、基本形態のタトバを使う為にウヴァのメダルが必要不可欠になってくるのだ。

だが、要求されるウヴァは嫌そうな表情を浮かべてアंकに向かって声を上げる。

「断る！貴重なコアメダルをそう簡単に渡せるか！他のメダルで代用しろ」

「あ？……フン。何を言い出すかと思えば……お前、自分がここに居る理由をもう忘れたか？」

「何？」

アंकの言葉にウヴァは反応すると、その意味を察したのか唸り声を上げながら俯く。数秒黙り込むと、ウヴァは観念したのか渋々バツタのコアメダルを火野に向かって投げ渡した。

「おっと。サンキュー、ウヴァ」

「フンッ」

お礼を言う火野にウヴァは鼻を鳴らすと体を半回転し、競り上がったコンクリの方へと歩くとその場に座り込んだ。それを見ていた分身のエクトプラズムは火野に声をかける。

「苦労シテイルノダナ」

「ええまあ……。アイツらにとってこのコアメダルは……その、命みたいなモノですからね」

「事情ハ聞イテイル。ダガ協力シテ行動ヲシナイトイザト言ウ時ニ危険ナ目ニ合ウ事ヲ忘レルナ。火野クンハ、アंकクントウヴァクントノ意思疎通ヲ課題ニ加エテオコウ。ジャア先ズハ君ノ必殺技ヲ見セテクレ」

エクトプラズムの言葉に火野は「はい！」と返事をする。火野の言う通り、アंकとウヴァはコアメダルをその身に宿す事によって実態を保つ事が出来る存在。自身のコアメダルが9枚揃う事によって完全体と言える存在になるのだが、ウヴァの持っている枚数は自信の意思を宿すコアメダルを含めて4枚。アंकは9枚を所持しているみたいだが、それでも火野に渡せるのは信頼関係があつてこそだ。ウヴァは火野と契約して一緒に行動しているとは言え、まだ日が浅い。増してや4枚しか無いので1枚でも渡すのは抵抗があるのだろう。

その信頼を得て実戦の際に直ぐに渡せるようにするのを火野は今後の課題となった。

「アंक、メダル！」

「受け取れっ」

残りのメダルを貰おうと火野は手を差し伸ばすと、アंकはタカとトラのメダルを取り出し火野に向かって投げ渡す。2枚をキャッチした火野はオーズドライバーへとそれを嵌め込み、オースキャナーを取り出してソレをスキャンした。

「変身ッ」

タカ！

トラ！

バツタ！

タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！

3つのリング状のエネルギーが重なり、火野はオーズに姿を変え、戦闘モードに入ったオーズにエクトプラズムは「来イ」と言って身構えた。アंकはその光景を見つめながら、ウヴァとは少し離れた場所へと座り込む。

「おいアंक」

「あ？」

ふと、ウヴァがアंकに声をかけ、面倒くさそうに返事をする。と、ウヴァは口を開いた。

「お前は何故映司と一緒にいる？」

「今更なんだ？」

「前から気になっただけだ。いいから答えろ」

ウヴァの素朴な質問に疑問を抱くアंकだが、その答えを直ぐに返答した。

「まあ、使える馬鹿だからなあいつは。メダル集めは全然駄目だが、ここぞと言う時はやってくれる。……それに、お前も気付いてんだろ？ あいつと一緒にいれば、俺達みたいな奴でも満たされてるってことをなあ……」

火野と一緒に行動すれば、叶えられなかったその欲望を、少しずつ

だが実感して満たされる。グリードの体である彼らにとっては些細な事だが、それでも得られなかった快樂をその身に実感して得ているのだ。

「……………認めたくは無いが……………確かにそうだな」

死闘を繰り広げて来たウヴァにとつては、オーズの力を扱う火野と共に居る事態、認めたくはない現実だったが、火野と共に居る事により、それは認めざるを得ない現実となっていたのだ。

スキヤニングチャージ!!

「せいやあああああッ!!」

アंकと話している間に、オーズは上空に飛び上がり、タトバの必殺技“タトバキック”をエクトプラズムに向けて放つ。衝撃波と轟音が鳴り響き、分身体であるエクトプラズムは威力に耐え切れず、煙となって消え去った。

「つととー…ああすみませんッ!」

「イヤ、謝ル必要ハ無い」

思わず倒してしまった事にオーズは謝っていると、直ぐに別の分身体のエクトプラズムが到着してオーズに言う。

「基本形態デノ威力、破壊力モ申し分無い必殺技ダナ。流石ハ火野クンダ」

「あ、ありがとうございます」

必殺技を評価するエクトプラズム。すると、その訓練場のコンクリをよじ登り、声を掛けて来る男性が現れた。

「やア火野少年!」

「え、あれ!? オールマイト!? どうしてここにっ?」

「私が直々アドバイスをしてあげるぞ」

やって来たのはトゥルーフォームのオールマイトだった。まだ怪我は完治して無いのか、右腕にはギブスが嵌められており、オーズは思わず「動いて大丈夫ですか?」と心配する。

「ハッハッハ、これくらいどうって事無いさ。必殺技は順調かい?」

「はい、俺は必殺技を幾つも持っているんで、その修正と改善を今は行っている所です」

「成る程…。確かに君のオーズにはその“個性”を最大限に活かした機能が備わっていたね。…なら、他のコンボも実戦して私にも見せてくれないか？出来る限りは助言して上げよう」

「オールマイトが直々に観てくれるなんて光栄です！わかりました、アंक！」

オーズは嬉しそうに頷くと、待機しているアंकに声を掛ける。だが、アंकはオールマイトに向かって不機嫌そうに口を動かした。

「おいオールマイト、余計な心配は必要無いぞ。こいつの力くらい俺が嫌と言う程観て来た。助言なら俺でも十分事足りる」

「あ、アंक！」

「H A H A：確かにそうだね。でも、私もジツとはしてられないんだ。こんな体になった以上、今出来るのは生徒達を見守る事。少しばかり私の我が儘に付き合ってはくれないだろうか？」

オールマイトの言葉に、アंकは数秒黙り込むと「…勝手にしろ」と不貞腐れるように了承する。アंकなりに、オールマイトを気遣った態度だったのだろうとオールマイトは解釈しながら「ありがとう」と礼を言い、アंकはそのまま次のメダルをオーズに投げ渡したのだった。

☆☆☆☆☆☆

「んあゝ…流石に連続のコンボは堪えるなあ……………」

「一瞬だけとは言え、連続で扱えるのはせいぜい4回までってところか。さっさとその力をモノにしろ映司」

「無茶言うなよ。力が強い分反動もデカいんだから…。特にウヴァの

コンボが1番負荷が掛かるんだよ」

「ム……………フハハ…、それだけ俺のメダルが強いつて事か」

「フン、低脳みその虫ケラが。お前のは増えすぎんだからそれだけ扱い辛いつて意味だ」

「なんだと!?!」

「あーもう、やめろつて2人共!」

必殺技の訓練を終えた火野は、使い過ぎたコンボの疲労を休憩して少し回復させ、アंकとウヴァと共に廊下でくつちやべりながら歩いていた。毎度のように喧嘩する2人に呆れ果てて溜息を吐く火野に對して、ウヴァは声を掛ける。

「ところで映司。今何処へ行こうとしてる?」

「相澤先生が言つてただろ?…つて聞いてないか。今のコスチュームを少し改良したいからこの開発工房に向かつてるんだよ」

相澤曰く、コスチューム改良は専門外なので雄英専用の開発工房で改良するようにと言われたのを説明する火野。説明などウヴァにとってはどうでも良い事なので聴いていないのも無理は無い。すると、火野のコスチュームをジロジロと見たアंकは軽く鼻で笑った。

「その私服みたいな服を改良だと?フツ、何処をイジるんだ?」

「何処つて、変身しなくても動きやすいようにするのと、この腰の鞆をもう少しデカくしようかと…。連続でコンボを使用して疲れた時の栄養ドリンクとかをもつと入れておこうかなって…」

火野のコスチュームはエスニック風の私服に近いコスチューム。直ぐに変身して活動する為にそこまで改良する必要が無かったのだが、コンボを使い過ぎて倒れてしまつては元も子もないので、多少の疲労が回復出来るようにと改良を望んでいるらしい。

そうしている間に火野達は雄英高校の一階へと降り、サポート科が扱う開発工房へと辿り着くと、その扉付近に1人の女性が立っていた。

「あれ、耳郎さん」

「あ、火野。おつ……………す」

「ム?…貴様……………」

立っていたのは耳郎で火野の呼びかけに反応し、挨拶をしようとするが、耳郎は隣に居たウヴァと目が合い、その目付きは睨むように変わる。

「……アंकも元氣？」

「あ？…別に元氣でも無い」

「そか、火野もコスチュームの改良？」

「おい、無視をするな…！」

ふと我に返った耳郎は視線を変えてアंकと火野に声を掛けるが、その対応が気に入らなかつたのかウヴァが怒り気味でそう言う。だが、いちいち宥めるのも疲れたのか火野は無視して耳郎に向かって口を動かした。

「うん、ちよつとだけね。耳郎さんは？」

「ウチも自分の“個性”を活かす為に改良。ちよつとウチなりに考えた必殺技に使えるかなって」

「へえつ、どんな必殺技なの？」

「まあ…それは実際に出来上がってからってことで」

焦らす耳郎に火野は「えー何だろう」とボヤきながら先にその扉の前に立ち、開けようとした。

その瞬間だった。

B O M B ツ ツ !!

「うわああつ!!？」

「なつ!!爆発!？」

「つ!?!何だ!?!」

突然開発工房の扉が吹き飛び、爆発と同時に立っていた火野が吹き飛ばされてしまう。アंकとウヴァは驚き、一瞬何が起きたのかわからない耳郎はその光景を見て唾然としていた。

「フフフ……まくたやつちやいました……」

「ゲホツゲホツ……お前…何回やれば気が済むんだ……！さつき言つた事をもう忘れたのかよオオ……！」

爆発の煙が工房の中から充満している最中、その煙の中から女性の声が聞こえ、それに反応するかののように部屋からパワーローダーが不機嫌そうに言いながら顔を覗かせる。

「フッフフ…パワーローダー先生、私は失敗なんて恐れませんよ。かのトーマス・エジソンは仰いました。『天才とは、1%の閃きと99%の努力である』と!」

「それさつきも聞いたんだが…!? 本当にお前出禁にするよ…発目!!」

パワーローダーが名を呼んだ頃合いに、その煙は晴れていく。同時に吹っ飛ばされた火野は何事かと目を開けると、爆発の威力で飛ばされたのか火野の上に発目が乗っかっていた。

「は、発目さ…?!?!」

「あれ!? 貴方はオーズのお方ではありませんか!」

火野は発目の胸元に目を向けて硬直した。黒のタンクトップで、次第に感じて来るその柔らかな感触に火野の顔は徐々に赤くなっている。

「(なん…!!!)」

視界が広がった耳郎も、火野の上に乗ってる発目のその胸元を見て驚愕し、そして火野が顔を赤くしているのを見てショックを受けていた。

何故、神とやらは平等と言う物を与えてくれなかったのだろうか。

No. 103 発明好きな発目

「突然の爆発をお許し下さい!!お久し振りですね!オーズのお方、アंकさん!後は……ヒーロー科の……忘れました」

「……ウチは耳郎」

「え……えと、こっちはアंकと同じグリードのウヴァだよ発目さん」

「成る程成る程!では私はベイビーの開発で忙しいので!」

「え!」

ハプニングに巻き込んだ火野達に謝罪をする発目。覚えていない素振りを見せられて自己紹介する耳郎だが、発目の胸元をジト目で見つめながらどこか素っ気ない態度で言っている。火野もぎこちなくウヴァの紹介をすると、どうでも良かったのか発目は勢いよく半回転し持ち場に戻ろうとした。

「あの女は何だ……」

「鴻上で働いてる騒がしい奴だ」

「鴻上?……まさかあの鴻上か?」

「ああ、前の世界とは違うが……あのイラつく会長に秘書、真木にバースの伊達や後藤もいるぞ」

ざっくりとした発目の紹介がてら、この世界に居る鴻上ファウンデーションの存在を教えるアंक。すると、真木のワードにウヴァは形相を変えた。

「真木の奴もいるのか!?!」

「……何だ?……ああそうか。言っとくが、奴に復讐しようとかくだらない考えはやめておいた方が良く。前の世界の事は今言った全員が覚えていないからな」

「……ムう、本当に何なんだこの世界は……!」

暴走させられたウヴァにとっては真木は復讐の相手だが、アंकの偽り無い言葉に改めてこの世界の出来事に困惑し苛立ちながらウヴァは俯く。

そうこうしている間に、早歩きでその場を行こうとする発目を火野

は慌てて呼び止めた。

「は、発目さん！俺達コスチュームの『改良』でパワーローダー先生に相談が…」

「ッ、コスチューム改良!? ええ是非ともそれは協力しますよ!!」

「(切り替え早っ)」

改良の言葉に反応した発目は物凄い速さで火野に詰め寄る。それを見ていた耳郎がそう思っていると、奥からパワーローダーがひよこつと顔を出した。

「発目、これ以上面倒事起こすなら出禁だとさつきも言った筈だぞ。……イレイザーヘッドから聞いている。お前らも必殺技に伴うコス変の件だろ? 中へ入りな」

掘削ヒーロー パワーローダー。

地中を掘るのが得意とされる彼のその指先は硬い地面を諸共しなしい強靱な爪が生えているのが特徴的だ。

パワーローダーはそう言っただけで火野達を中へと招き入れる最中、アंकが発目に声を掛けた。

「おい発目。俺が言ったものは出来たか?」

「あー……会長から言われた例の件ですね!? 残念ながらここは雄英高校の開発工房です! 制作段階途中ですし、こんな小さな場所ではアレを量産するのは正直無理ですね!」

「『小さな』とは何だ、発目? くけけ…」

「ハッ」

アंकの件に表情こそ変わらないが軽くディスプレイされている発言に聞こえたのか、パワーローダーは聴き逃さずに圧を掛けていた。

そしてその例の件が気になった火野はアंकに声を掛ける。

「アंक? 例の件って?」

「お前、いつも乗っていただ……いや、何でも無い。まあその内役に立つ物だ」

「?」

前世の記憶が無い事を忘れていたアंकはいつもの様子で言おうとするが、ハッとしてその話を有耶無耶にし、火野は首を傾げていた。

招かれた火野達は工房の中へと入ると、その施設内に「わあ」と火野は声を漏らした。

幾つも設置されている作業台には改良しているサポートアイテム。奥の壁には工具がずらりと敷き詰められ、右側の台には情報を見る為のモニターが数台も置かれていた。

「すつごおいッ！まるで秘密基地みたいだ！」

「男子が好きそうだね」

「ほお…。人間もここまで進化したのか」

「フン、くだらん」

感想を言う4人。すると、早速と言わんばかりにパワーローダーは火野達に手を差し伸ばした。

「じゃあコスチュームの説明書見せて。ケースに同封されてたのがあ
るでしょ。俺、許可証所持してるから、それを見ていじれるとこはい
じれる」

そう言われた火野と耳郎は持つて来ていたコスチュームの説明書
を取り出し、パワーローダーに渡すと彼はその資料を元にモニターへ
と映し出しながら説明をした。

「小さい改良・修繕なら『こう変更しまった』ってデザイン事務所に報
告すれば手続きしといてくれるが、大きい改良となるとこちらで申請
書作成してデザイン事務所に依頼する形になる。で、改良したコス
チュームを国に審査してもらって許可が出たらこちらに戻ってくる。
まあウチと提携してる事務所は超一流だからだいたい3日後には
戻ってくるよ」

「フン：要は簡単な改造ならここで直ぐ出来て、デカイ改造は大手の
会社でやってもらうって事か」

「くけけ…そういうことだねエ…」

コスチュームの説明に、珍しく聞いていたアंकがわかりやすく応
えるとパワーローダーは独特な笑い声をして頷く。火野と耳郎も成
る程、と何度も頷き解釈していると、火野は肝心の要件を早速パワ
ーローダーに申し出た。

「あの、パワーローダー先生。俺はもう少しこの鞆をデカくしたいん

ですけど…補給の飲み物とか入れられるようにしたいんです」

「ああ、全然構わないよ。要望を聞き次第後日には完成出来る。コスチューム事態は変えなくて良いかい？君は特殊だからね火野君」

「まア…それは大丈夫です」

火野は応えるとパワーローダーは「わかったよ」と了承する。

「良かったじゃん火野」

「うん。じゃあ耳郎さんも……」

火野は言いかけたその途端。腰辺りに何かに触られる感触が伝わり何事かと首を振り向くと、発目がマジマジと腰を見つめる尚且つベタベタと触りまくっていた。

「は、発目さん!？」

「あ、あんた何してるの…?」

「はいはいはいはい成る程ですね。お気遣い無く、私は今彼の体を調べているのですよ。フッフフ、了解しました！オーズのお方にオススメのベイビーを!!」

何かを理解した発目は奥の部屋へ駆け込み、両手で抱えたサポートアイテムらしき物体を持って来る。ソレを本人の許可無しに強制的に取り付けていた。

「とっておきのベイビー! 『ウルトラバッグ』!!」

ゴツゴツとした機械的な造形で、腰の鞆とは思えない見た目のサポートアイテム。火野は「うわ…」と若干引きながらそれを確認していると、発目は続けて口を動かした。

「腰の負担を自動で認識を行い、軽減出来るハイテクツ子です! 第3子です! フッフフ!!」

「あ、あの発目さん。俺物を入れる鞆が要望何だけど…」

「私物が入れますよ、一個くらいは!」

「それ意味無いじゃん」

肝心の物入れが無い事に耳郎はボソツとツツコみを入れてみると、発目はポケットから小さなリモコンを取り出した。

「更ですね! このベイビーには加速式のブースター機能が搭載されているのですよ!」

「え、いや…別にそれは必要『ポチッ』なああああああああ
あーあーあーあー!!」

「火野ー!!?」

火野が言い掛けた直後、発目はリモコンのボタンを押すと、ウルトラバグとやらの後ろ部分から2つのジェット噴射機が突出され、爆風と同時に勢いよくエンジンが噴射される。その勢いは凄まじく、火野の体は海老反りになって真っ直ぐに吹き飛ばされ壁に激突した。

「あだだだ………腰があああ………」

「ちよ、大丈夫火野?!」

「どうやら必要速度の威力調整をミスったようです!ごめんなさい
!」

凹んだ壁から火野は抜け出し、人間の限界を越えそうになった腰を押さえながら悲痛の声を上げる彼に、耳郎は心配そうに駆け寄る。それと同時に発目は全く反省の無い表情で反省点を述べていた。

「…馬鹿の丸出しだな」

「う、うるさいなあ…いだだッ…!」

一連の光景を見ていたアंकは小馬鹿にしたような目で言い、火野は腰を痛めながらそう言い返していると、パワーローダーが「発目」と低い声で名を呼ぶ。すると発目はビクツと肩を跳ね上がらせてバツの悪そうな表情で奥の部屋へと移動して行った。

「すまんね、彼女は病的に自分本位なんだ」

「言われなくても知っている」

「俺も良く理解してます…。入学前の実技試験の時から付き合いで
すし」

変わりに頭を下げるパワーローダーにアंकと火野は重々承知しているのかそう応える。ふと、火野は「あれ?」と何か疑問に思ったのか口を開いた。

「そう言えば、あの実技試験ってヒーロー科の試験だった筈だけど…
サポート科の発目さんがどうして出てたんだ?」

「あいつは申請したんだよ。本来は駄目なだけで特別に上の人達が
許可を出してくれたんだよね。不思議な出来事もあるもんだ…」

「…成る程なア。奴は恐らく会長の『個性』を使ったんだろ」

「あー、だからか！」

パワーローダーの言葉にアंकは察してそう応えようと火野は納得して手を叩く。

鴻上の『個性』は権限発言で、発した言葉が世に知らされてそれは世界の『ルール』として認知される脅威的な『個性』。ヒーロー科専門の試験にサポート科の発目が参加出来たのはそのおかげなのだろう。

「…まア、ヒーロー志望の君達なら彼女との縁を大切にしておくべきだよ…」

「と、言いますと？」

パワーローダーは言うど火野はそう聞き返す。すると、パワーローダーは発目の居る奥の部屋にゴミのように溜められたサポートアイテムの山を指さして口を動かした。

「あの隅のゴミ山…、あれ全部発目が入学してから作ったサポートアイテムさ。休みの日は鴻上ファウンデーションに籠ってるらしいけど、それ以外の平日は夜遅くまでここに滞在しては、ああやって発明に没頭している。今まで多くのサポート科を見てきたけど、発目はやはり特異だ」

「これ全部発目さんが…？」

「ガラクタばかりだな」

「でも、これだけの量を4ヶ月余りで作ってたなら、凄いよ…」

壁の隅に大量に山積みされたサポートアイテムを見て火野、ウヴァ、耳郎は呟いているとパワーローダーは続けて口を開いた。

『常識とは18歳までに身に付けた偏見である』。アインシュタインの残した言葉だ。彼女は失敗を恐れず常に発想し試行している。イノベーションを起こす人間ってのは、既成概念に囚われない。もつとも、鴻上の会社の方がもつと彼女が作った物が散らばっているだろうけどね」

優れた才能を持つ者は幼くしてそれは開花し、変貌を遂げる。それだけ発目という彼女の存在と発明は大きいものだろう。鴻上ファウ

ンデーションでも特別に許可されて手伝っているのも納得が行く。
そんな彼女を見て火野は、凄いい子だと実感し感服していたのだっ
た。

☆☆☆☆☆☆

そんなこんなで4日後――

A組は再び体育館Yで、必殺技のトレーニング真っ最中。

「オッハー。進捗どうだい、相澤君」

「また来たんですか……ボチボチですよ」

生徒達が訓練に励む中、オールマイトが顔を出し、気軽に相澤に声
を掛けるが、何度も来られて鬱陶しいのか相澤は適当にそう応えてい
た。

その頃、緑谷はコスチュームを改良してもらったのか肘まで覆うく
らいの白いグローブを模したサポートアイテムを嵌め込み、確認を
取っていた。

「緑谷！コスチューム変えたのか！」

「うん！腕の負担を減らしてくれるサポートだよ」

「どうせなら全とつかえでイメチェンすりゃいいのに！地味目だし
よ」

「いいんだ。ベースはなるべく崩さない」

峰田の言う通りオールマイトに憧れている緑谷のジャンプスーツ
は、派手な貴重性とは掛け離れた地味目のデザインとなっている。彼
のイメージに合わせてデザインしたのかと思っていたのだが、どう
やら母親から貰った入学祝いらしく、そのベースはなるべく変えない
と決めているらしい。人にはそれなりのこだわりがあるのだろう。

一方で、何日か経過したのも合ってか、生徒達の半数以上は既に必
殺技を編み出している者もいた。常闇もその1人に入っている。
「纏え、ダークシヤドウ……」

『アイヨー！』

常闇の声に合わせてダークシャドウは常闇を覆うように纏い、ダークシャドウの鎧を纏わせた形状となる。

「ダークシャドウを纏う事で弱点であるフィジカル・近接をカバー……。名付けて……しんえんあんく『深淵闇軀』！」

「言いづらくない？ 技名は言いやすさも大事よ」

『アイヨー！』

近くに居たミッドナイトがそうアドバイスをすると、常闇は頷き、代わりにダークシャドウが返事をする。

常闇を含めて、徐々に成果を出して行く生徒達。その中、相澤は爆豪の居る場所に目を向けて口を開いた。

「ようやくスタイルを定め始めた者もいれば、既に複数の技を習得しようとしている者もいます」

目を指す方向、そこには爆豪がセメントスが用意してくれた壁のコンクリを前にして集中していた。爆豪の爆破は基本的に溜まった汗を掌から放出させて爆発する戦闘を得意とするが、彼は掌に丸い穴を作った手を乗せてコンクリの壁へと標準を合わせる。

「A・Pショット（掌全体じゃなく、一点に集中し起爆……）新技・『徹甲弾』！！」

機関銃の如く放たれた爆破はコンクリの真ん中部分へと無数に直撃し、見事風穴を開けていた。

「はっはあ！ 出来たあ！！」

「おー、やるなあ爆豪君」

「つたりめえだ！！てめエの技の数なんか一気に追い抜いてやらあ三色野郎！！」

「そこは別に張り合わなくて良いだろ……」

完成した技に喜ぶ爆豪。ふと、たまたま隣の訓練場に居合わせていたオーズが賞賛していると爆豪はキレ気味に挑発してくる。相変わらぬのコミニケーションにオーズは苦笑いしながらそう応えていた。

「爆豪少年は相変わらずセンスが突出している……」

それを下から見ていたオールマイトはそう言っただけで相澤に視線を向けた、その直後。爆豪が壊したコンクリに亀裂が走り、一部の瓦礫が

オールマイトの居る真下へと落下した。

「あ オイ、上!!」

「ちよ……!」

「馬っ……!」

気付いた爆豪が声を上げる。オーズは駆け出し、相澤は捕縛布に手をかけた。

だがその時だった。

いち早く気付いた緑谷が地面を蹴って跳躍すると、爆豪の立っているせり上がったコンクリに足を置き、瞬時に蹴って瓦礫目掛けて突撃する。

「『SMASH』!!」

その動作、行動に目撃していた誰もが目を見開く。緑谷の戦闘法は基本「拳」がメインだった。それは師であるオールマイトと同様。なのに、今落下してきた瓦礫を「ドロップキック」で蹴り碎いたのだ。

それを見ていたオールマイトは安堵する表情では無く、何か弟子が答えを見つけたのか笑顔で「正解だ」と呟いていた。

同時に、上から駆けつけようとしていたオーズも驚いた表情で口を開く。

「……凄い緑谷君……足で……あれ?今の蹴りって……」

「……アイツめ、お前の『蹴り』を真似たな」

察したアंकが隣で見ていたのかそう呟く。

今の蹴りはタトバキックを模した蹴りだった。標的の瓦礫の真上まで跳躍して飛び出し、背後のせり上がったコンクリの壁を一度蹴って勢いを上げていた。そしてその瓦礫目掛けてオーズ特有のドロップキックを見せた。少しオリジナルを兼ねているだろうが、まさしくオーズの必殺技に似ていたその技に、オーズは「……へえ、やるなあ緑谷君」と嬉しそうに笑っていた。

瓦礫を蹴り碎いた緑谷は地面へと着地し、オールマイトに「大丈夫でしたか!?オールマイト!」と安否を問う。勿論無傷だったオールマイトは「ああ!」と応えていたが、直ぐにその足に装備されているサ

ポートアイテムへと目がいく。

オールマイトは基本的に拳がメイン。ワン・フォー・オールを授かった緑谷も無意識の内に拳が基本だと脳内に擦り刻まれていたのだが、まだコントロール出来ていない彼はその力を制御出来ずに腕を負傷する一方。これ以上怪我をしない状態を維持するならば、それをどうすればいいのか。

答えは簡単だ。

腕が不安なら“脚”をメインにすれば良い。

それが、緑谷の考えた新しい戦闘法、

“ワン・フォー・オール フルカウル シュートスタイル”だ。

「何、緑谷！サラツとすげえ破壊力出したな！」

「おめーパンチャーだと思ってた」

「上鳴君、切島君」

近くに居合わせていた上鳴と切島が緑谷の元に駆け寄りながら先程の蹴り技を賞賛していると、緑谷は脚に装着しているサポートアイテムを見つめて口を開いた。

「破壊力は発目さん考案のこのソールのおかげだよ。飯田君に体の使い方を教わってスタイルを変えたんだ。方向性が決まっただけでまだ付け焼き刃だし、必殺技と呼べるものでもないんだけど…」

「フーン！オーズの技を盗んでおいてか？」

「どわっ!?ア、アंक君!?!」

説明する緑谷の隣からアंकの声が聞こえて、驚くと同時に振り返ると、そこには腕だけの状態のアंकが浮遊しており、アंकは指を緑谷に指しながら喋った。

「さっきの蹴り、あの馬鹿の蹴りと同じだったぞ？」

「う…うん、ちよつと火野君のスタイルを真似て見たんだ…。僕、その…凄いと思った人はノートにまとめて書くのが癖で……」

「まあ、緑谷少年。君の新しいスタイルは多分付け焼き刃以上の効果があるよ。こと仮免試験ではね」

緑谷の言葉にオールマイトが口を並べる。その意味に緑谷は「？」とキョトンとしていると、相澤がオールマイトに声を掛けた。

「オールマイト、危ないんであまり近寄らないように」

「いや失敬！」

注意されオールマイトは謝ると同時に高台から見下ろす爆豪へと振り返る。

「爆豪少年！すまなかった！」

目線の先に立っている爆豪。その視線は緑谷の方に向けられている気がして緑谷は困った表情を浮かべていると爆豪は「ケツ」と悪態

を吐く。

「氣イ付けろやオールマイトオ!!」

張り上げる声と同時に爆豪は爆発を起こす。オールマイトはその言葉を聞いて自身の手を見つめていた。

氣を付けろ、危ないんで。

そんな風に呼び掛けられたような気がしたオールマイトは、もう守られる側の存在になったのだなと実感していたのだった。

ふと、爆豪のいた高台からオーズが飛び降り、変身を解除して火野は緑谷に声をかける。

「よつと、凄いな緑谷君!」

「あ、火野君つ。その、ごめんね…君の技を盗んだ感じに使っちゃって…」

「そんなの氣にして無いよ!寧ろ全然使っちゃって構わないくらい!それより本当今の蹴り凄かったなあ、流石緑谷君だ」

先に謝っておこうと緑谷は謝罪するが、火野は全然氣にしない素振りを見せて素直に感想を伝えるのに対して、緑谷は「いやあ…」と照れ臭そうにする。

すると、側に居た切島と上鳴のコスチュームが変わっていたのに氣付いたのか緑谷は口を開いた。

「氣になってただけど…!皆もコスチューム改良したんだね!」

「あ?!氣付いちゃった!?!お気づき!?!」

「ニュースタイルは何もおめーだけじゃねえぜ!」

変わった印象と言われれば、上鳴はモニターらしき装置が耳に付いているサングラスに右手には何かを射出させるようなサポートアイテムが装備付けられている。一方で切島は顔を保護する為かフェイスが備えられ、両肩には衝撃に耐えれそうなアームが着用されていた。

火野もマジマジと見つめていると切島は口を開く。

「俺ら以外もちょこちょこ改良してる。氣い抜いてらんねえぞ」

言われてみれば、他の生徒達も一部サポートアイテムが追加されたり、コスチューム自体が少し改良されたりと、それぞれがスタイルを

変えていた。必殺技が出来上がっている証拠なのだろう。

「だがな、この俺のスタイルチェンジは群を抜く！度肝ブチ抜かれっぞ！見るか!? いいよ!?すごいよマジで!!」

「そこまでだA組!!!」

余程自分の装備を自慢したいのかぐいぐいと詰め寄る上鳴。だがその時、体育館Yの入り口から猛々しい男性の声が響き渡った。

「今日は午後から我々がTDL（トド）を使わせて貰う予定だ!」

「B組」

「本当だ」

「カーっ、タイミング!」

声の主はブラドキングで、その後ろからゾロゾロとB組生徒達が顔を出す。緑谷と火野の注目がそっちにいつてしまい、上鳴は残念そうに言うと、ブラドキングは相澤に声を掛けていた。

「イレイザー、さっさと退くがいい」

「まだ10分弱ある。時間の使い方がなっていないな」

相澤の言葉にふと、火野は時計を見る。言つての通り、まだ訓練が終わるまで時間は少し余っていた。合理的に行動する相澤にとってB組の為に早めに切り上げるのは論外なのだろう。すると、B組の中から1人、嫌味つたらしい表情で顔を出して声を上げる生徒がいた。「ねえ知ってる!? 仮免試験つて半数が落ちるんだって! A組全員落ちてよ!! アハハハハ、どっちが上かハッキリさせようか!」

「(ストレートに感情をぶつけてくる…)」

高笑いする物間に緑谷達は引いてその対応に困っていると、彼のコスチュームが気になったのか上鳴はB組委員長の拳藤に声を掛けた。「つか物間のコスチュームアレなの?」

「『コピー』だから変に奇をてらう必要は無いのさ』って言った」「てらつてねえつもりか」

確かに物間のコピーは対象に触れて発動させる「個性」。自身が大幅に変わる事は無いのでコスチュームを改良しようにも変に変える必要は無いのだろう。そうなるに変身すればコスチュームなど関係無い火野と一緒になる。だとしても、自身の「個性」や実績を、言

動にひけらかす言葉とは思えない彼の態度に上鳴は苦笑していた。すると、ある程度訓練を終えたのか常闇が近寄り口を動かした。「しかし…もつともだ。同じ試験である以上、俺達は蠱毒…潰し合う運命にある」

確かに、常闇が言う事が事実ならB組と同じ試験会場になった時、合格率が半数以下ならA組とB組が全員合格するのは無理に等しいだろう。同じ学校で同じヒーロー科同士、潰し合いをするのはなるべく避けたいと火野が考えていた時、相澤が言った。

「だから、A組とB組は別会場で申し込みしてあるぞ」

相澤の言葉にその場に居た生徒達はポカンとする。高笑いをしていた物間もその声はピタリと止んだ。

「ヒーロー資格試験は毎年6月・9月に全国三ヶ所で一律に行われる。同校生徒での潰し合いを避けるため、どの学校でも時期や場所を分けて受験させるのがセオリーになってる」

「ホツ…直接手を下せないのが残念だ!!」

『『ホツ』つつたな』

「病名ある精神状態なんじゃないかな」

本音が安堵となって漏れている物間を見て切島と上鳴は逆に心配そうに彼を見つめていた。

そんな中、話を聞いていたのか瀬呂が呟く。

「『どの学校でも』……そうだよな。フツーにスルーしてたけど、他校と合格を奪い合うんだ」

「しかも僕らは通常の習得過程を前倒ししてる…」

「うん…、早い段階で試験、そしてどの道潰し合うのは避けられない…ってことだよな」

瀬呂の言った言葉に反応して緑谷と火野がそう言い俯く。すると、気が落ち込む火野達を見て相澤はもう一押しするような圧を掛けた。「1年の時点で仮免を取るの是全国でも少数派だ。つまり、君達より訓練期間の長い者、未知の『個性』を持ち、洗練してきた者が集うワケだ。試験内容は不明だが、明確な逆境である事は間違いない。意識しすぎるのも良くないが忘れないようにな」

試験を受ける相手は全員が手だれの強敵。1年の生徒達にとつては相当なプレッシャーだろう。だが、それをクリアすれば雄英生徒達は大きく進歩出来る。それ等を踏まえて、火野達は覚悟を決めていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

その日の訓練が終わり、その夜。

A組女子達は寮の談話スペースに集まっていた。

「フヘエエエ、毎日大変だあ…！」

「圧縮訓練の名は伊達じゃないね」

「あと一週間もないですわ」

腑抜けた声で疲れをアピールする芦戸に葉隠が言うと、残された時間に焦りを感じたのか八百万がそう言うと、葉隠が八百万に声を掛けた。

「ヤオモモは必殺技どう？」

「うーん、やりたい事はあるのですがまだ身体が追いつかないので、少しでも“個性”を伸ばしておく必要がありますわ」

合宿で“個性”伸ばしをしたとは言えど、10代であるその体は勿論限界に辿り着くのが早い。だが逆に成長速度も早いので、後は個人の頑張り次第と言えるだろう。葉隠は「そっか」と頷き、今度は蛙吹に声を掛けた。

「梅雨ちゃんは？」

「私はより蛙らしい技が完成しつつあるわ。きつと透ちゃんもビックリよ」

自身気に応える蛙吹。それなりに技の進歩があつたのだろう。葉隠「へエ〜」と気の抜けた返事をし、蛙吹は隣に座っている麗日に尋ねた。

「お茶子ちゃんは？」

「……………」

声を掛けるも、麗日は飲み物のストローを啜えたままボーツとしていた。

「お茶子ちゃん？」と蛙吹は麗日の肩を指先でつつく。

「うひゃん!!」

何か考え事をしてたのか、麗日は驚いて変な声を出して飲み物を盛大に吐く。

「お疲れの様ね」

「いやいやいや!!疲れてなんかいられへん!まだまだこっから!……の筈なんだけど、何だろうねえ。最近無駄に心がザワつくくんが多くてねえ」

麗日がいよいよ終わると同時に、その表情はやんわりとした笑顔になっていた。

だが、それを見逃さんと芦戸は悪戯心を開いた少年のように、麗日に詰め寄る。

「恋だ」

「ギョ」

凶星だったのか、麗日の顔は一変し滝の様に冷や汗を流し始める。そして、麗日は焦った様子で言い訳をした。

「な、何?!故意?!知らん知らん!」

「緑谷か飯田?!一緒にいる事多いよねえ!」

「チャウワチャウワ!!」

物凄い手捌きで全力否定する麗日。すると、麗日は自身の肉球の指先に触れてしまったのか、その体は宙にふわふわと浮き始めた。

「チャウワチャウワ……」

「浮いた」

「誰ー!?!どっち!?!誰なのー!?!もしかして火野君とか!?!」

浮いて尚も赤面する顔を隠しながら否定する麗日。それに便乗して葉隠が嬉しそうに尋ねる。しかし麗日は「チャウワチャウワ」と一点張りだったが、「火野」と言うワードに耳郎がピクリと反応していた。そして、それを見逃さないと芦戸が近寄り声を掛ける。

「ドシタノカナ、響香ちゃん」

「わあっ!!」

まさかの自分にも被害が及ぶとは思わず耳郎は声を上げて驚く。どうやら彼女も凶星のようで、芦戸はニヤニヤとしながら詰め寄った。

「火野で反応したね!? 見逃さないよー!」

「あ、あんたどういう眼してるんだよ!」

「え!?! ここにも恋芽生えた乙女いるのー!?!」

「ち、ちちちがうから! ウチそんなの知らないし!」

葉隠も加わり、言い攻められた耳郎は両手で顔を隠し、更にはイヤホンジャックで顔を塞ごうとしながら必死に否定をする。

すると、蛙吹が困っている麗日と耳郎を見兼ねて助け舟を出した。

「無理に詮索するのは良くないわ」

「ええ。それより明日も早いですし、もうオヤスミしましょう」

「ええー!! やだ!! もっと聞きたいー!! 2人に花開かせようよ! 何でもない話でも強引に恋愛に結び付けたいー!!」

八百万もフォローに入り、そう言うが芦戸は我儘をこねる子供みたく声を上げるが、蛙吹と八百万の真顔の視線を見て、葉隠共々大人しくなっていた。

「そんなんじゃ……」

宙を浮いていた麗日は言い掛けると、窓の外に目が行く。その目線の先には、地面にノートを置いて蹴りの練習をしていた緑谷がいた。

必死に練習をしているその姿に、麗日は恋焦がれるような甘い視線を、彼に送っていた。

「……ああもオ、調子狂う……」

同時に、耳郎も耳を真つ赤にしながら、誰にも聞こえない程度でボソツと呟く。おちよくられた芦戸のお陰で耳郎の脳内には火野の笑顔が思い浮かんでいた。いつの間にか、彼の事を気になっていたのは事実だった。正直に言えば、出来るだけ一緒に居たいと日に日にその気持ちは強くなるばかりだ。そしてその気持ちは徐々に確信へと変わっていく。

その気持ちはきつと「恋」なのだろうと……。

☆☆☆☆☆☆

訓練の日々は流れ、1年ヒーロー科は仮免許習得試験の当日となっていた。朝早くにバスに乗って出発し、高速道路に揺られる事数時間。

「全員降りろ、到着だ。」

『試験会場国立多古場競技場』

指定駐車場へとバスが止まり、同時に相澤は生徒達に声を掛けた。緊張する最中、全員はバスから降りると、デカデカと聳え立つ試験会場を目にする。

「緊張してきたア」

「多古場でやるんだ」

耳郎、緑谷をはじめ、誰もが合格できるかと不安を過っていた。それを峰田が口にする。

「試験て何やるんだろう。ハー仮免取れっかなア」

「峰田、取れるかじゃない。取ってこい」

「おっ!?!もっモロチンだぜ!!」

聞き逃さなかった相澤はダランと前屈みにしやがみ込み、圧を掛けると峰田はビクツと肩が上がりながら無理矢理意気込みを入れる。

「この試験に合格し仮免許を取得できれば、お前ら志望者^{タマゴ}は晴れてヒヨっ子…セミプロへと孵化できる」

言い終わると同時に相澤は「頑張ってこい」と発破をかけるように後押しする。普段励ますような言い方をしない相澤だからこそ、その言葉によって生徒達は気を引き締め、体を奮い立たせた。

「っしやあー!なってやろうぜ、ヒヨっ子によオ!!」

「いつもの一発決めていこーぜ!」

「せーのっPlus…」

「Ultra!!」

切島が指揮を上げ、校訓の音頭をとった直後、見知らぬ男子生徒が大声で円陣に入っていた。度肝を抜かれてしまい、生徒達は硬直してしまう。

「勝手に他所様の円陣に加わるのは良くないよ、イナサ」

「ああしまった!!」

その男子生徒と同じクラスメイトなのか後ろに立っていた男に指摘された大きな男はハツとする。

「どうも大変!!失礼!!致しましたア!!」

「二(ヒイイ!!)二」

謝罪を入れる大きな男だが、その名の通り、気合いを入れすぎたのか頭を地面に叩き込むように深々と頭を下げる。一連の動作が完璧故に、勢いがあり過ぎる謝罪に流石のA組達は驚き怯んでいた。

「なんだ、このテンションだけで乗り切る感じの人は?」

「切島と飯田を足して二乗したような…!」

驚く上鳴に続いて、その性格と行動をうちの生徒の2人を掛け合わせたように説明する。

ふと、僅かに大きな男と同じ制服を着ていた連中に、他の生徒達が騒つき始める。

「待って、あの制服…!」

「あ!マジでか」

「ほら!西の!!有名な!!」

騒つく他の生徒達の声に、雄英校の生徒達の何人かは、彼らが何者なのか理解し始めていた。

同時に、爆豪が言った。

「東の雄英、西の土傑」

「数あるヒーロー科の中でも雄英に匹敵するほどの難関校、〃土傑高校〃!!」

爆豪の言葉に便乗するかのようには、緑谷が言い放つ。その学校名を聞いた火野も察したのか目を見開いていた。土傑高校は雄英に匹敵する数ある名門校。その規律も厳しく、校外での活動中は男子は学ラン、女子はブレザー、そして制帽の着用が義務付けられているらしい。

その凜とした立ち姿が伝統を重んじた厳格な校風の学校であることが窺えるようにも見えた。

「火野、火野！あの女子胸も唇もプルップルだぜえ…！」

「何処見てんだよ…。でも、確か士傑って異性と交流禁止じゃあ…」
「夢壊すなや」

士傑高校の女子生徒を見て卑猥な発言をする峰田。だが掻き消す様に火野はそう言い、峰田は恨むような視線を火野に向ける。

すると、士傑高校の大きな男は勢いよく顔を上げて自己紹介をした。

「二度言ってみたかったっス!!プルスウルトラ!!自分雄英高校大好きっス!!!雄英の皆さんと競えるなんて光栄の極みっス!よろしくお願ひします!!」

「あ、血」

「血スか!?平気っス!好きっス血!」

頭を地面に強く打ったせいかわ、大声で喋るその男の額からはドロツと流血しており、女の子はそれを見て反応していると、見た所規律を重んじた生徒が「行くぞ」と指示を出して士傑高校の生徒はその場を後にした。

「…『夜嵐 イナサ』」

「先生知ってる人ですか?」

「すごい前のめりだな。よく聞きや言ってる事は普通に気の良い感じだ」

ふと、相澤が知っている人物だったのか彼の名を口にすると、それを葉隠が尋ね、切島は意外にも良い人だと実感していると相澤が夜嵐について説明をし出した。

「ありやあ…強いぞ。いやなのと同じ会場になったな。夜嵐、昨年度…つまりお前らの年の推薦入試、トップの成績で合格したのにも拘わらず何故か入学を辞退した男だ」

「え!?じゃあ…1年!?っていうか推薦トップの成績って…」

その言葉に緑谷が驚愕して彼の後ろ姿を見ながら言う。推薦トップ。つまり、轟以上の実力者という事になる。

「けどまあ、アレだろ？ 推薦トップなだけであって、実力はウチの
エース火野の方が勝ってるだろ？」

「なら怖いもん無しだなー！」

楽観的に考えて切島が言い、上鳴が安堵した様子でそう応える。変
にプレッシャーを掛けられた気がした火野は「どうだろ…」と慎重に
なっているが、相澤の険しい表情は晴れてはいない。

もしかしたら、火野以上の実力者かも知れない。

相澤はそう思っていたのだった。

「雄英大好きとか言ってた割に入学は蹴るってよくわかんねえな」

「ねー…変なの」

「変だが本物だ。マークしとけ」

土傑高校の生徒達、主に夜嵐イナサに絡まれた後、相澤の言っていた入学を蹴ると言う驚愕の事実には瀬呂は驚き、芦戸はそう返事をする。推薦入学トップの実力を持つのは本当らしく、相澤は忠告していると、「イレイザー!? イレイザーじゃないか!!」と今度はコスチュームを来た女性が相澤に声を掛けてくる。オレンジ色のバンダナ、スマイリーフェイスが描かれたコスチュームを着用しており、見たところプロヒーローなのだろう。すると、その声に反応した相澤は振り返り、彼女の顔を見るとこの世の物とは思えない程の嫌悪した表情になっていた。

「テレビや体育祭で見てたけど、こうして直接会うのは久しぶりだな!!」

「あの人は…!」

「知り合い?」

知っているのか緑谷が口を開くと、火野は尋ねる。応えを聞こうとした瞬間、その女性は思いがけない発言を相澤に言った。

「結婚しようぜ」

「しない」

まさかの求婚発言に思わず芦戸は「わあ!!」と嬉しそうに声を漏らす。

「しないのかよ!!ウケる!」

「相変わらず絡みづらいな、ジョーク」

即答で断られた女性は面白いのかブツハーと吹き出して笑っていた。そんな中、その女性について緑谷が嬉しそうに語る。

「スマイルヒーロー『M s. ジョーク』!」

“個性”は『爆笑』!近くの人を強制的に笑わせて思考・行動共に

鈍らせるんだ！彼女の敵サイラン退治は狂気に満ちてるよ！」

事細かく解説する緑谷。ヒーローオタクの彼が居れば知らないヒーローの説明をしてくれるとある意味助かっているのも事実だ。

「私と結婚したら笑いの絶えない幸せな家庭が築けるんだぞ？」

「その家庭幸せじゃないだろ」

断られたのにも関わらず、M s. ジョークはアピールするが、それでも拒否をする相澤に彼女は再び「ブハ!!」と吹き出していた。すると、2人はどういう関係なのか気になった蛙吹が相澤に声を掛けた。

「仲が良いんですね」

「昔事務所が近くでな！助け助けられを繰り返すうちに相思相愛の仲間へ」と「なってるない」

昔のヒーロー活動の好らしく、M s. ジョークはそう蛙吹に伝えようとするが、話を盛られているのか相澤は直ぐにそれを否定した。

それを面白可笑しくM s. ジョークは笑っていると相澤は何かに気付いたのか声を掛けた。

「何だお前の高校とこもか」

「本当いじりがあるんだよなイレイザーは。そうそう、おいで皆！雄英だよ！」

揶揄いながらM s. ジョークはこちらに向かって来る他の生徒達を確認すると声を張って呼び込む。火野達もその生徒達に気付き、見つめているとその生徒達は雄英生を見るなり物珍しそうにそれぞれが口を動かした。

「おお！本物じゃないか!!」

「すごいすごいよ！テレビで見た人ばかり！」

「1年で仮免？へえー随分ハイペースなんだね。まあ、色々あったからねえ。さすがやるのが違うよ」

黒髪の男、ツインテールの女、ロン毛の男、そして喋ってはいないが甲殻な男を筆頭にゾロゾロとやってきては、楽し気にA組生徒達を見てそう言っていた。

すると、先程までバカに笑っていたM s. ジョークの表情は真顔になり、相澤達に言った。

「傑物学園高校2年2組！私の受け持ち、よろしくな」

傑物学園高校。ヒーロー育成では一定の評価を受けている私立高校で、雄英や士傑よりもそこまで評判では無いが、良い実績を残すとの噂話を聞いた事があると。火野はそう思い、傑物学園の生徒達を見ていると、先頭に立っていたリーダーらしき黒髪の男が突然緑谷に詰め寄り、彼の手を両手で掴んだ。

「俺は真堂！今年の雄英はトラブル続きで大変だったね」

「えっあ」

「しかし君達はこうしてヒーローを志し続けているんだね。素晴らし
いよ!!不屈の心こそこれからのヒーローが持つべき素養だと思う!!」
友好的なのかA組生徒達の両手を掴んで握手していく真堂。だが
握手された雄英生徒達は顔を曇らせていた。

バチコン！と爽やかにウインクする真堂に「ドストレードに爽やか
イケメンだ…」と上鳴は言うど、真堂は爆豪と火野へと振り返り声を
掛ける。

「中でも神野事件を中心に経験した火野君、爆豪君」

「あ?」

「え?」

「君達は特別に強い心を持っている。今日は君達の胸を借りるつもり
で頑張らせてもらおうよ」

「ああ…えと、はい…こちらこそ」

戸惑いながら火野は差し伸べた手を握って握手を交わし、真堂は続
いて爆豪にも手を伸ばすが、爆豪はそれを払い除けた。

「フカしてんじゃねえ。台詞と顔が合ってねえんだよ」

「こら、おめー失礼だろー！すみません無礼で…」

「いいんだよ！心が強い証拠さー!」

爆豪の態度に見兼ねた切島が叱り、真堂に謝ると、彼は耐えないス
マイルを見せてそう振る舞っていた。

のだが、爆豪の言った直後、密かにニヤリと笑みを浮かべていた真
堂の口を火野は見逃さず見つめていた。

「ねえ轟君、サインちょうだい。体育祭カツコ良かったんだあ」

「やめなよミーハーだなあ」

「はあ…」

「オイラのサインもあげますよ」

一方で傑物学園のツインテールの女が轟にサインを求め、ロン毛の男は失礼だと指摘していた。対応に困る轟の隣で、峰田はしれっと自分のサインを上げようとしているが、見事にスルーされていた。

「おい、コスチュームに着替えてから説明会だぞ。時間を無駄にするな」

他校との会話で盛り上がっている最中、相澤は雄英生徒達に声を掛ける。それを聞いた生徒達はハツとし、「はいっ！」と全員が返事をした後、耳郎が口を開いた。

「何か…、外部と接すると改めて思うけど」

「イヤハヤやっぱ結構な有名人なんだな、雄英生って」

雄英体育祭や敵襲撃サイラン、神野事件など、あらゆる場面でそれはテレビに取り上げられていた為か、他校の生徒達に視線を多く集められている雄英生。余計に緊張している中、その様子を見ていたM s. ジョークは首を傾げていた。

「ひよっとして…言っていないの？イレイザー」

M s. ジョークの言葉に相澤は何も返さず、試験会場へと足を踏み出している。A組生徒達もそれに続く様に歩き出す中、火野は体の中

にいるウヴァに声をかけていた。

「ウヴァ、ちよっといいい？」

☆☆☆☆☆☆

コスチュームへと着替えたA組一同は、試験の内容の説明を受けるべく、説明会場へと赴いた。すると、そこには受ける生徒であろう人達が会場を埋め尽くさんと集まっていた。

「こんなに受ける人達が居るのか……！」

「ハッ、狭苦しいにも程がある」

軽く1000人以上はいるであろうその人数に驚く火野。その隣に、外に出ていたアंकが息苦しそうな表情で悪態吐く。すると、辺りの生徒達が火野の顔を見るなりボゾボソと話声が聞こえて来た。

「おいアレ、オーズの火野じゃね？」

「本物だ」

「マジか、てことは雄英がここ受けに来てんの？」

敵意を向ける視線、本物に会って感激している目線と、他の生徒達に見つめられ火野は思わず苦笑した。

「な、なんか調子狂うなア……」

「フン、向かって来る奴は容赦無く潰せば良いだろ」

「物騒な事言うなよ。……でもまあ、意味合いは違うけどそうだな」

誰であろうと敵である以上、アंकは叩きのめす気持ちで言った。闘争心が強いのはグリードの性質のせいなのだろうか、火野はそれを別の意味で捉えて会釈する。

気持ちを切り替えようと深呼吸をする火野。すると、前方の壇上に上がるスーツの男が立っていた。

「えー……ではアレ……仮免のやつを、やります。

あー……僕は、ヒーロー公安委員会の目良です、好きな睡眠はノンレム睡眠。よろしく」

如何にも気怠るような自己紹介をする目良。

「仕事が忙しくてろくに寝れない……！人手が足りてない……！眠たい！そんな信条の下、ご説明させていただきます」

本音がボロボロと出ており、一切の疲れを隠さないその男に集まった試験者達は困惑した目で見つめていた。

「ずばり、この場にいる受験者1540人一斉に、勝ち抜けの演習を行ってまいります」

そのまま急に試験内容を発表すると、周りから「ぎっくりだな」「マジか」などと驚きを隠せず声を漏らす生徒達がいた。目良はそのまま続けて説明をする。

「現代はヒーロー飽和社会と言われ、ステイン逮捕以降ヒーローの在り方に疑問を呈する向きも少なくありません」

ステイン逮捕をきっかけとした、ヒーロー飽和社会並びにヒーローの在り方への疑問。社会に新たな風を起こした彼の生涯。『ヒーローとは見返りを求めてはならない』『自己犠牲の果てに得うる称号でなくてはならない』と云っていたその執念。その言葉を思い返していた火野を含め、あの場にいた緑谷、飯田、轟は重んじた真剣な眼差しで目良の言葉を受け止めていた。

「まア…一個人としては…、動機はどうであれ命懸けで人助けしている人間に『何も求めるな』は…現代社会に於いて無慈悲な話だと思わわけですが…。とにかく…、対価にしろ義勇にしろ多くのヒーローが救助・敵退治に切磋琢磨してきた結果、事件発生から解決に至るまでの時間は今、ヒクくらい迅速になっています。君達は仮免許を取得し、いよいよその激流の中に身を投じる。そのスピードについて行けない者、ハッキリ言って厳しい」

事件発生から解決まで至る重要な役目はそのスピード。迅速な対応が求められているのが今回のヒーロー候補生達の議題なのだろう。「よって試されるはスピード！」

条件達成者先着100名を通過とします」

「!?!?!?!」

「待て待て1540人だぞ?!?5割どころじゃねえぞ!!?」

「まア社会で色々あったんで…。運がアレだったと思つてアレして下さい」

「マジかよ……!?!」

想像を絶するその合格方法に候補生達は驚愕し、思わず反論する生徒がいたが、目良は軽く受け流すように伝え、続けて口を動かした。

「で、その条件というのがコレです」

そう言つて目良が取り出したのは薄いピンク色のした球体と機械的造形がされた小さな物的な物だった。

「受験者はこのターゲットを3つ、身体の好きな場所、ただし常に晒されている場所に取り付けて下さい。脇や足裏などはダメです。そし

てこのボールを6つ携帯します。ターゲットはこのボールが当たった場所のみ発光する仕組みで、3つ発光した時点で脱落とします。3つ目のターゲットにボールを当てた人が「倒した」事にします。そして2人倒した者から勝ち抜きです…。ルールは以上」

「6個…だけだったら、おいおい無くなれば終わりじゃないか……」
「馬鹿が、誰かからぶん奪れば良いだろ」

1人3ヶ所に当てる。2人なら6個。持ち玉が6個だけならばもし外してしまえば足らなくなってしまう。焦る火野に、補充の仕方を教えるアंकに火野は「ええ…」と声を漏らしていた。

「えー……じゃ、展開後にターゲットとボール配るんで、全員にいきわたってから1分後にスタートとします」

「展開？」

おかしいな発言に疑問を抱く轟。他の候補生も疑問を浮かべている直後、天井辺りからゴゴ…と地響きが聞こえた。火野はバツと上を見上げると、大きく目を見開いた。

「各々、苦手な地形、好きな地形があると思います。自分を活かして頑張ってください」

「(無駄に大掛かりだな!!)」

まるで自動式の箱が開かれるみたいに、天井の壁が鉄のワイヤーに外から引つ張られて展開される。雄英さながらの大掛かりな仕掛けに驚くのも束の間、展開された外には街、工場、高く聳え立つ山など、沢山設置された地形の1帯が広がっていたのだ。多古場全てを試験会場にしたとは言え、これだけの設備を取り付けたのは逆に感服してしまう。

すると、配布されたターゲットを体に取り付けながら緑谷はA組に声をかけた。

「先着で合格なら… 同校で潰し合いはない…。むしろ手の内を知った中でチームアップが勝ち筋…!皆!あまり離れず一塊で動こう!」

1分しかない時間に、他の候補生達も続々と各設備へと散らばって行き、緑谷自身も焦りつつ冷静に指示を出す。ふと、そんな発言を聞いた

爆豪は気に入らないのか「ケツ」と悪態を吐いて緑谷から背中を向けた。

「フザける、遠足じゃねえんだよ！」

「バツカ、待て待て!!」

「かつちゃん…!」

「切島君！」

色々な経験を積み重ね、場数を踏んで来た緑谷がいつの間にか頼もしくなっていた。その発言にほぼ全員が賛同するが、唯一彼を嫌う爆豪は当然従うまでも無く、そのまま走り去って行った。切島と上鳴が後を追いかけて行くと、今度は轟が「俺も」と言って一歩踏み出した。「大所帯じゃ却って力が発揮できねえ」

「轟君!!」

「緑谷時間ねえよ！行こう!!」

実力者が2人も抜けてしまい、焦る緑谷。

だが、悠長に時間など待つてはくれず、刻々と差し迫るのを峰田が急かす。後が無い緑谷は「う、うん」と仕方なく了承していると、アंकが火野に声を掛けた。

「おい映司、俺達も別で動くぞ。緑谷達が周りに居れば返って闘い辛いからなア」

「いや、俺も緑谷君の言う事に従う」

「あア?おい!」

単独で行動すれば、味方に構う事無く力の威力が強いオーズが戦場を独断出来ると提案するアंकだが、仲間思いの火野は即答で断り、駆け出す緑谷達の後を追う。リスクの高い選択をした火野に呆れるアंकだが、それが火野映司なのだと言ぐに諦めがついたのか、アंकも後を追いかけた。

走っている内に、いつの間にかカウントダウンがアナウンスされており、残り5秒を切っている。

『5……………4……………』

「単独で動くのは良くないと思うんだけど…」

「何で?」

「だってホラ……僕らはもう手の内バレてるんだ」

爆豪達を気に掛ける緑谷の独り言に峰田が反応する。

『3……』

「さっき僕が言った勝ち筋は他校も同様なわけで……。学校単位での対抗戦になると思うんだ。そしてら当然、次はどここの学校を狙うかって話になる」

『2……』

「うん、俺もそれ気になってんだ」

緑谷が考察を喋ると、隣まで走って来た火野がそう応える。その火野の隣を走っていた耳郎が「どういうこと？」と尋ね、火野が応えようとしたその時だった。

「お、おいアレ!?!」

『1……START!!』

何かに気付いた峰田が驚愕した表情で言い、指を指す。カウントダウンも言い終わり合図が知らされると同時に、傑物学園の生徒達が一斉に雄英目掛けて動き出して来た。

「アंकク！」

火野は急いでアंकクの名を呼ぶと、察していたアंकクはタトバのメダルを直ぐに投げていた。火野はそれを受け取りながら、「やっぱり……」と呟く。

試験を受ける前、説明会場の場所に居た時、雄英生徒だけあって注目されたり声を掛けられていたが、その視線は敵意を示すのが多かった。そして、傑物学園の生徒が言っていた『テレビにうつっていた』の言葉で火野の予想は確信へと変わる。

全国の高校が一斉に競い合う中で唯一『「個性」・不明というアドバンテージ』を失っている高校。体育祭というイベントで『個性』はおろか弱点・スタイルまで恐らく割れたトップ校。

単刀直入で言えば、『こちらの情報が丸出し』なのだ。

「自らをも破壊する超パワー」。まア……杭が出てればそりゃ打つさ!!!」

緑谷の『個性』を口に出す真堂を筆頭に、傑物の生徒達は一斉に

ボールを雄英生徒目掛けて投げて来る。周りを見れば、他の候補生達もそのどさくさに紛れボールを投げていた。

明らかに先手を打たれてしまった雄英生。開始直後に四方八方からボールを投げられてしまえば、初めて受ける候補生達はほぼ全滅しても仕方無いのかもしれない。

だが。

「変身ッ！」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

ボールが飛んで来ると同時にオースキャナーをドライバーへ振りかざしていた火野。音声時に現れるエネルギー状のメダルが向かって来るボールを宛ら盾のように弾き返す。そのままオーズへと姿を変えると同時に、背後に立っていたA組生徒達もまた、各々の「個性」を使ってボールを防いでいた。

そう、どんなに不利な状況でも『やる事は変わらない』。理^{ピンチ}不尽は常に乗り越える、それがヒーローなのだから。

「緑谷君！」

「大丈夫ッ! 皆、締まって行こう!!」

オーズは緑谷へと振り返ると、シユートスタイルでボールを蹴散らした緑谷が強く頷き、全員へと呼び掛ける。A組生徒達は「応!!」と力強い返事をして、背後を獲られんと円陣を組み、戦闘態勢へと入ったのだった。

No. 106 白熱！各々の実力！

仮免許取得試験 “第一次選考”。

様々な要素を取り入れたフィールドで、ボールをぶつけぶつけられる勝ち抜きバトルが行われた。受験者は3つの『ターゲットマーク』を好きな箇所セットし、そのターゲットに当てる『ボール』は6個所持出来る。自身に取り付けた3つのターゲットにボールを当てられてしまえばそこで脱落。そして2人脱落させた者、先着100名が試験を通過出来るのだ。

☆☆☆

「やっぱり、狙って来たー！」

変身したオーズの声に緑谷は「うん…！」と頷きながらも、フルカウル”を解かずに常時体へと張り巡らせている。開始直後に狙って襲い来る傑物学園並びに、他の候補生達。しかし、これは一種の慣習でもあった。

それは『雄英潰し』。

メディアに取り上げられたヒーロー科1年A組は、体育祭で“個性”は全て情報を流されてしまった為に、それを研究・対策を考えて数々の雄英生徒達は脱落してしまつた話がある。

この一次選考は、団結と連携、そして情報力が鍵となるだろう。

緑谷、火野並びにここに集まる雄英生徒達は敵意を向ける他の候補生達に背中を獲られないよう円陣を組んで身構える中、傑物学園の生徒である甲殻な男が、全て弾かれたボールを見て呟いた。

「ほぼ弾くかアーーー」

「ま、こんなものでは雄英の人はやられないよな」

「けどまア…見えて来た」

“硬質化” ー…

一筋縄では行かないと身構える真堂に甲殻の男は持っていた4個

のボールを両手で捏ねると、硬質なボールへと変化する。ソレを「任せた」

と言つて岩場の下にいたロン毛の男に投げ渡すとロン毛の男も察したのか「任された」と言い受け取った。

「これうっかり僕が一抜けする事になるかもだけど、そこは敵が減るつて事で大目に見てもらえるとありがたいかな」

そう言いながら、独特なポーズを構えるロン毛の男。まるで全身の力をボールに注ぎ込むような行動にオーズは警戒すると、ロン毛の男は大きく振りかぶった。

「ダーゲットロックオン！シユアツ！」

《ブーメラン 軌道弦月》

振り上げると同時に放たれたボールは地面の中へと突き進んで、地中から緑谷達へと押し寄せる。

「ボールが地中に!」

「皆下がって！ウチやる！」

地中からでは何処からボールが出て来るのか把握出来ない。焦る緑谷だが、耳郎がそう言つて緑谷達の前へと出る。

「（《音響増幅 アンプリファイ・ジャック》）」

耳郎はイヤホンジャックを伸ばし、両手の甲に取り付けてあるスピーカーのようなサポートアイテムへと差し込む。そしてソレを地面に当てると同時に、自身の心臓の音を最大限にサポートアイテムへと流し込んだ。

「《ハートビートフアズ》！」

心音がサポートアイテムによって大爆音と鳴り、その地面は轟音と共に地響きを起こす。亀裂が前方へと走り、地面は勢いよく割れ崩れた。

「おおオオ！挟りやがった!?!」

挟れた地面でバランスを崩す候補生達。それを見ていたオーズは耳郎に声を掛けた。

「凄いよ耳郎さん！」

「あ…う、うん…！これがウチの編み出した技だよ…！」

褒められた耳郎は顔を赤く染めながら頷く。だが、先程ロン毛の男が飛ばしたボールは割れた地面の隙間から飛び出して来た。

「オイラに来てるう!!」

どうやら狙いは峰田のようで、驚く峰田に接近してくるボール。すると、一早くソレに気付いた芦戸が峰田へと駆け出した。

「粘度溶解度MAX! アシッドボール!」

振り上げた右腕に粘性の強い酸を纏い、ボール目掛けて振り下ろす。直撃したボールは跡形も無く溶けていった。

「た、助かった! いい技だな!」

「ドロッドロにして壁を張る防御技だよー!」

芦戸の新技に救われた峰田は礼を言い、芦戸もそう応え、気合いを入れ直して身構える。

「皆んなカツコよく仕上がってる…! よオし、俺も負けてられない!」

新技を次々と披露するA組に、オーズは意気込みを入れると、両脚に力を溜める。すると、バツタレツグが能力解放状態となり、蝗のような脚へと形を変えると、その場を勢いよく上空へと跳躍した。

「はアア…! ハアツ!!」

跳躍したオーズは、そのまま候補生達付近の場所へと急降下し、地面を蹴るように脚を叩き込んだ。すると地面に地響きが走り、耳郎と同様に地面に再び亀裂が走り地割れが起きた。

「うオ!?! また扶れた!!」

「アレがオーズか!」

「なんつー脚力してんだ!?!」

蹠踏めきながらも候補生達はオーズの存在に驚き、驚愕していた。

「うおっと…! どうだっ!」

「馬鹿! 余所見すんな!」

「あ、ごめん!」

相手を怯ませて小さくガツポーズを作るオーズだが、迫り上がっていた岩場に立っているアंकに指摘され、ハツとしたオーズは緑谷達の元へと跳躍して戻る。

「連携が崩されたな…これで隙が生じる!」

「深淵闇軀」!

「言いやすくカツコ良くなってる」

今度は常闇が先陣を切り、ダークシャドウを体に纏わせ鎧のように形状を変える。技名も変わっており、緑谷はボソツと言うと常闇はボールを持たせたダークシャドウの腕を伸ばした。

「〃常闇よりし穿つ爪〃!!」

傑物のツインテールの候補生に攻撃を仕掛ける常闇だが、反応した女子生徒は「危な!」と言うと、その上半身が体に引っ込めるように消え、その攻撃を避けた。

「ふー…強い」

下半身からひよこつと顔だけを覗かせて息を吐く女子生徒。どうやら体を自在に引っ込めれる〃個性〃なのだろう。

「体育祭で見てたA組じゃないや。成長の幅が大きいんだね」

体育祭だけの実績を研究した真堂はその成長したA組達を見て笑顔でそう言うが、内心は焦っていた。それだけ苦難な訓練や経験を積み重ねた雄英生に度肝を抜かれているのだろう。攻防が続く中、突然アナウンスが聞こえた。

『えー、現在まだどこも膠着状態…。通過0人です…。あ、情報が入り次第私がこちらの放送席から逐一アナウンスさせられます』

始まってまだ数分しか経っていないが、今言われた通り通過はまだ0人。そう簡単に通れるような試験では無いのだろう。続けて迫り来る候補生達の攻撃を避けながら、オーズは考えていた。装着したターゲットは言わばその人の弱点。皆が皆、そこを狙うわけなので、例え運任せにボールを投げても当たる可能性は低いと見る。だが、先程の甲殻な男が「見えて来た」と言っただけで仕掛けたのを確認するあたり、今の攻撃段階は様子見だと実感する。今は相手の攻撃、行動、〃個性〃を予測している段階だとせれば、この戦いは加速すると踏まえていた。

「よおし」

その予測が当たるかのように、真堂は両手を擦り合わせ、意気込みを入れると同時にその両手を地面へと当てる。

「離れろ! 彼ら防御は固そうだ! 割る!!」

張り上げた声に傑物学園の生徒達は意思を読み取るように散らばって行く。雄英生徒達も何かを仕掛けて来ると身構えたその時だった。

「最大威力！ 震伝動地！！」

その瞬間、真堂を中心に地面は耳郎やオーズの比にならない程の地震が起き、地面は抉れ、破片が迫り上がった。

真堂揺

個性『揺らす』

触れたものを揺らす！ただし、揺れの大きさ・速度に応じた余震が体に来て動けなくなる！

「必殺技なら、当然こちらも編んでるよ！」

威力を最大限にした揺れは、真堂自身にも響いたのか余裕の台詞を吐くその額には大量の汗を流していた。そして、地震は止まる事無く、その一帯は災害が起きたかのように大きな地割れが起こっていた。

「うわあっ!!?」

「チツ！あの馬鹿がつ！」

体制を崩して地割れに飲み込まれそうになるオーズ。アंकはオーズを見つけて不快そうに言いながら、オーズの元へと飛び出して行ったのだった。

☆☆☆☆

『さて…そろそろ通過者が1人や2人、出てきてもいいんじゃないでしょうか…』

真堂が技を出した同時刻。目良がアウンス越しに欠伸をしながらそう言っていると、場所は変わり、高層ビルが建て並ぶ街並みを模したエリアで、候補生の1人が微かに揺れた地響きを感知して口を開いた。

「地震…？ “個性”か!？」

「目の前に集中しろオ!!」

「混戦で何がどうなってるのか……!」

「連携しろって! 距離取って “個性” 見ろ!」

ビルの下では他校の候補生達が一斉に “個性” を駆使してボールを投げ合っていた。その状況はまさに混乱戦。味方さえも巻き込んでしまいそうなボールの飛び交いに、もはや連携と呼べる状態では無かった。

ふと、1人の女子生徒がボールを投げようとしていたが、突然吹き荒ぶ “風” にハツとする。

「あ、ちよ、ボールが風で……って、ええ!？」

かなりの強風なのか、候補生達のボールが次々と飛ばされている。

否、その強風でボールだけが風に乗って飛ばされていったのだ。

「ボールだけが、巻き上げられてく!!」

「どーなってるんだ!？」

混戦していた候補生達も、渦を巻く強風に驚愕し、その闘いはピタリと止んでいた。巻き上げられるボールを目で追っていくと、ビルの屋上でその “風” を片手で容易く扱っている夜嵐が立っていた。

「俺、ヒーローって!! 熱血だと思っんです!! 皆さんの戦い!! 熱いっス!! 俺! 熱いの好きっス!!」

各所に噴射口が装備されたボディに、防寒性コートのコスチュームを身に纏い、その右腕で暴風を操りながら夜嵐は淡々に、そして豪快に声を張り上げていた。

「土傑高校!! 一人かよ!？」

「何言ってるんだ!？ わかるけど…」

「待て、ボール取られたら俺達何も…」

「この熱い戦い!! 俺も混ぜて下さい!!」

下にいる候補生達は驚きながら夜嵐を見上げていると、夜嵐はボールを集めた暴風に更に回転と威力を上げて大きく振りかぶった。

「よろしく!! お願いしまっス!!!」

お辞儀をするような勢いで、大量のボールを巻き上げた暴風をビルの下にいる候補生達へと叩き込む。風を纏ったボールは凄まじい速度で下の候補生に襲い掛かり、轟音と共に土煙がその一帯を覆った。「…あ、ようやく1人目の通過が……」

一方、モニターに表示された通過者に目良が反応すると、その画面を見て『うおっ!?!』と驚愕する。

『脱落者120名!! 一人で120人脱落させて通過した!!』

「ハハ、やったあ!!!勝てた!!!」

その場にいたほぼ全ての候補生達のターゲットにボールを当て、脅威的な脱落者の人数を叩き出した夜嵐。流石の人数に目良も興奮気味にアナウンスし、本人の夜嵐も喜びながら拳を握る。

『えー…さて、ちよつとビツクリして目が覚めて参りました。ここからドンドン来そうですね!』

☆☆☆☆☆☆

夜嵐が通過した同時刻。

雄英と傑物が闘いを繰り広げていた岩場地帯。

真堂の技によつて足場がとても儘ならないエリアと化しており、挟まれた地面の隙間からオーズの顔がひよこつと覗かせていた。

「びっくりしたア…。凄い “個性” を持つてるんだなあ」

「グリードやオーズでは無く、ただの人間がここまでの力を身に付けるとはなア…。だが好都合だ。映司、他の場所に行つて連中共を潰す

ぞ」

「駄目に決まってるだろ、緑谷君や他の皆がどうなったのかわからないし」

「悠長な事ほざいてる場合か！」

「ちよ、ちよつと声大きいって……てか、お前随分と今回の試験は積極的だよな？」

「当然だ。免許が取れればオーズに変身しても騒ぎが起きない。学生が戦うなどか言う調子に乗っている連中もいなくなるってワケだ」

「…ひよつとして保須事件の根に持つてる？」

やけに協力的に提案するアंकだが、その狙いと軽く憎悪したような表情を見てオーズは顔を曇らせていた。

しかし、そんなやり取りをしている場合では無いとオーズはハツとし、状況を考える。

隙間から辺りを見渡してみるが、雄英生徒、他の候補生達の姿が見えない。オーズみたく、地面の隙間に警戒して隠れている可能性もある。それと先程真堂が行っていた『割る』と言う言葉。恐らく、この騒動で守りの固い雄英生徒を分断させる作戦での攻撃だったのだろう。

そしてオーズは仲間をどうやって探すべきかと考えていたその時だった。

「…火野……火野ツ……」

背後から呼ばれる声が聞こえ、オーズは振り返る。すると、地面の隙間から複製させた障子の口が見えた。

「障子君…!？」

オーズは反応し、目立たないようにこつそりと障子の場所へ向かう。アंकも着いて行くと、そこには障子、八百万、蛙吹、耳郎の4人が隠れていた。

「皆、無事だったんだねっ」

「ウチらはなんとか…」

「火野さんもアंकさんもご無事で何よりですわ」

「あの傑物学園の子が地面を揺らした時、障子ちゃんが救ってくれた

のよ」

耳郎、八百万が言い、3人を庇ってくれた障子に感謝しながら蛙吹がそう言うのと、障子は辺りを警戒しながら口を開いた。

「どうやら他の皆は散り散りになった…。俺も辺りを詮索しているが、他校の奴らもこの辺りに潜んでいて中々見つけ出せない…」

「そこで、私考えたのですが無理に出て探すのでは無く他のエリアにこのメンバーで第一次選考を通過しようと思ってますの。ここで探しては、返って時間だけが過ぎて行くばかりですし、私達だけでも通過すれば後の皆さんの負担が減ると考えていますの」

「俺も八百万の意見に賛成だ。火野、お前は どうする?」

八百万の意見に賛同した耳郎と蛙吹は頷き、障子もそう言つてオーズとアंकを見遣る。確かに、先着100名と少ない中で、この場に残っている生徒でこのエリアで搜索しても、残っている相手は傑物学園の生徒が大勢居るだろう。またさっきの様に集まったとしても、真堂に地震を起こされてはいつまで経つても散り散りになる一方だ。考えこんだオーズは他の皆の心配をしながらも、それを同意した。

「…わかった、俺も一緒に行くよ。アंकも問題無いよな?」

「…まア、少人数なら問題無いな。お前ら足を引つ張るなよ?」

「ああ」

「任せてっ」

「ケロツ」

今は通過する事を優先したオーズは了承する。アंकも賛成し、障子、耳郎、蛙吹も頷き八百万はくるりと半回転して口を動かした。

「火野さんとアंकさんが居てくれるなら心強いですわ。では、先を急ぎましょう。隣の高層ビルのエリアなら、この人数でも何とか乗り切れますわ」

緑谷達なら上手く作戦を考えて動いてくれる筈だ。彼らを信じて、オーズ達はその場を見つからないように動き出し、後にしたのだった。

☆☆☆☆☆☆

一方、その高層ビルエリア。

夜嵐によって120名を脱落させたそのエリアには先程までの混戦とは思えないくらいの不気味な静けさが漂っていた。

その高層ビルの屋上、フェンスの上に器用に立っている女子生徒がこちらに向かって来るオーズ達を見つめていた。

「…あ……来た…」

白色の制服、赤い蝶々ネクタイに、白色のベレー帽を模した帽子を被っており、いかにもお嬢様という肩書きを表した学生服に身を包んだ女性。髪もストレートの白の長髪で、風で靡かせながら女性は肉眼でオーズ達を確認しては、小さくそう呟いたのだった。

『えー…けっこう状況動いています！現在通過者が52…あ、53名！続々出てます！2人以上を脱落させた者もいる為、脱落は230名！そして今、54人目出ました、あと半分切った！早く！終われ！』

第一次選考は数十分程経過し、続々と通過者が始めていた。再び目良は眠気が襲ってきたのかややキレ気味にアナウンスする中。

場所は変わり、工場をモチーフにしたエリア。

その一部の帯には、建物や道を埋め尽くす程の氷が覆われており、足を凍らされて身動きがとれなくなっていた忍者を模したコスチュームの候補生達が「くそっ！」と悔しそうに悪態を吐いている。そして氷の“個性”を使用したのは雄英生徒である轟だ。

「フウ…」

白い息を吐く轟は、両手を見ながら歩き出す。“個性”伸ばしや必殺技訓練をしたとは言え、まだ両方を同時に発動するには練習不足なのか体の動きが鈍っている。まだまだだと反省していると、体に取り付けていたターゲットが青色に発光した。

『通過者は控え室に移動して下さい。……早よ』

このターゲット装置は、通過や脱落をデータとして送信されるらしく、ボールと装着者を認識し誰に当てられたか距離や動き等を様々な要素から判定されている。因みに一度取り付けられたら、専用の磁気キーでないと外せないらしい。こういう無駄にハイテクな道具にもお金を掛けているので、それだけ仮免は重要な試験と言えるのだろう。

ターゲットに急かされた轟は少しだけ早歩きとなつて控え室へと足を踏み出したのだった。

同時刻、岩場のエリアを後にしたオーズ達は、高層ビルのエリアへと侵入し、周りの様子を伺いながらその奥地へと入って行く。

「どンドン通過者が出てるわね」

「半分は切ったみたい…俺達も急がないと」

「お2人共、焦りは禁物ですわ。耳郎さん、障子さん、周囲の状況はどうですか?」

アナウンスを聞いて、ビルの隙間壁を張って歩く蛙吹の声に、オーズは頷き、八百万はそう言っただけで周囲の状況を探る障子と耳郎に声をかけた。

「…かなり離れた場所から数人くらいの足音が聞こえるよ」

「どうやら近くにはいないようだ…その数人を叩くか?」

「…そうですね………」

2人の返答に八百万は頷き考え込む。すると、アंकが「フン」と鼻を鳴らして口を開いた。

「ちまちま隠れて行動するなんざ面倒だな…。おい映司、ボールをよこせ。人間2人にボールを当てれば合格ならお前だけ通過すれば良いだろ」

「え?」

手を伸ばして言うアंकにオーズは反応すると、障子が口を動かした。

「…確かに、アंकなら1人の試験者では無く、火野の“個性”。ターゲットが無い以上、強引にでもボールを当ててしまえば火野は少なくとも楽に通過出来るな」

「そうね、この状況から考えれば、アंकちゃんが動いてくれれば今の火野ちゃんは無敵よ」

アंकの提案に障子と蛙吹が頷きそう言う。

火野の“個性”として動けるアंकは、その“個性”である以上ターゲットを身に付けていない。アंकだけで他の候補生に突っ込

んでも、ターゲットが無い以上相手も反撃するだけでほぼデメリットは存在しない。1人でも雄英生が先に通過出来るのなら、今はそれが優先的であると、八百万も無言でオーズを見つめているが、オーズは直ぐにそれを否定した。

「確かにそれなら俺は楽に通過出来るけど、駄目だ」

「あ？」

「そんな勝ち方で通過するのは俺個人としてあまり気が進まない……。ここに居る皆と協力して、通過する方が後味良いでしょ」

「ちつ、どこまでもお人好しが。誰もお前の都合なんか聞いてないぞ！」

「最終的に通過出来たら別に良いだろツ。楽しんでクリアするなんて、俺は望まないね」

「お前……！」

「お2人共御止めなさいー！」

徐々に張り合うオーズとアंकに、八百万は声を上げてそれを止める。オーズはハツとして「ごめん」と謝り、アंकは「：フン」と呆れてそっぽを向くと、オーズは口を動かした。

「とにかくー今は助け合って、誰も脱落せずに全員で通過しよう。人数居た方が全員クリア出来る確率も上がるだろうし、その方が絶対良いに決まってる」

「火野：そうだな」

「ウチも賛成」

「ケロツ」

オーズの言葉に障子、耳郎、蛙吹は頷き、その意見に八百万も賛同して口を開いた。

「そうですね。火野さんの仰る通り、人数が多い方が勝算の幅が広がりますわ。ここは全員で通過しましょう」

「決まりだね。じゃあアंकはフォローを頼むよ？」

「馬鹿が、勝手にやってる」

オーズは頷き、そっぽを向くアंकに声を掛けるが、意地を張ってしまったのかアंकはそれを否定する。「もオ……」とオーズは息を吐

くと八百万が辺りを警戒しながらふと、1つのビルを発見する。

「皆さん、一先ずあのビルの中へ向かいましょう。ここで相手側から見つかってしまえば格好の的になってしまう可能性があります。あのビルの最上部なら、障子さんの索敵も発揮出来ますし、もし敵に見つかってもビルの地形を上手く利用すれば身を潜めながら戦闘を行えますわ」

「わかった」

「ケロ」

「異論は無い。直ぐに向かうぞ」

3人は領き、早速目的のビルへと向かおうとする。すると、オーズは「ちよつと待って」と食い気味に声を掛け、4人の足を止めた。

☆☆☆☆☆☆

同時刻。八百万達が向かおうとしているビルの隣のビル。その最上階部の部屋、試験真つ最中の筈なのだが、その一時を忘れているかのように1人の候補生が、椅子に腰掛けテーブルの上に置かれている紅茶を飲みながら優雅に過ごしている者が居た。見た目は白をベースとした清楚な学生服に学園の勲章をデザインされたベレー帽子を模した帽子を被っており、髪型は薄水色のロングヘアで、片目にはモノクルをかけている。

「才様」

ふと、隣に立っていた少し小太りの女子生徒がその候補生の名を呼ぶ。彼女もまた同じ制服を着ており、どうやら同じ学園の生徒のようだ。

「雄英生5人と1人が、隣のビルに向かっているのを確認致しました」
『映像』は出せて？」

紅茶を置いた才は小太りの生徒に言うと、「はい」と頷き、彼女は片目を開けると赤く光り出したその目から映像が空中投影された。

映し出された映像にはビルに向かおうとする八百万達がくつきりと映し出されており、才は八百万達を見つめて口を開いた。

『腕の複製』、『蛙』、『音波使い』、『物を創り出す』、『動物のメダルを使い分けその能力を伝える』、『個性』そして、その彼から生まれた独自で動く『個性』型の人……」

一目見ただけで瞬時に八百万達の『個性』を見抜く才。すると、彼女はスツと両目を閉じる。何か考え事をしているのか、暫く目を瞑っている、先程までの御淑やかな表情は消え去るように彼女は顔を曇らせながら目を開いた。

「才様、如何なさいましたか?」

「……困りましたよ。私の『個性』を使用してさえ、勝利の方程式が見当たりませんわ。彼、メダル使いの御片が相手では、ビルの構造を駆使しても……此方との戦力差も……恐らく歴然……」

オーズを見るなり、才は眉を八の字にして顔に手を当てながらそう言う。小太りの生徒も心配そうに「才様……」と声を漏らしていると、その部屋の扉がガチャリと開かれた。

「私、なら行け……ます」

「突島つしまさん?」

「……何か申し出して?」

屋上から外の候補生達を偵察していた突島が才に声を掛け、才は意図を聞こうとする。

「隣のビルに……4人だけを入れる。オーズと、その『個性』の人は、わ……私が誘き出して、外で戦い……ます」

「……要するに『囷』。貴方の意見は把握致しましてよ。ですが、メダル使いの彼の『個性』は未知数……。これは推測ですが、彼はまだ複数のメダルを公表せずに所持している可能性が高くてよ?それに姿が変わった時の身体能力も高くなってる……。貴方だけの『個性』ではとても対処し切れるとは思えませんわ」

ポツポツと喋る突島は提案を申し出る。

観察力、そして知恵も働くのか才はオーズを考察して意見を述べる。しかし、突島はそれでも「大丈夫、です」と言い切り、制服のポケットから何かを取り出して才達に見せる。

「……貴方、それを何処で？」

「えと…『神野区』で偶然拾いました。これをオーズに見せれば、少なくとも私の方に来てくれる。時間稼ぎくらいなら、わ、私でも出来ます。その隙に、才…様達は、残りの生徒達を相手に、出来…ます」

突島の見せる物、そして彼女の考える提案に才は顎に手を乗せて俯く。すると、「フフ…」と企みの笑みを浮かべると、席から立ち上がった。

「わかりました。貴方の提案、受け入れましてよ。では、皆を集めてもらえる？残りの4人を相手なら私の勝利の方程式は既に決まっているも同然でしてよ」

「はい、才様」

才の言葉に小太りの生徒は了承し、早速部屋から出て行く。才は突島に「後はよろしくてよ？」と言うと、突島は「はい」と頷き、手に持っている1枚の『セルメダル』を握りしめて部屋を出て行った。

☆☆☆☆☆☆

一方、目的のビルの入り口へと到達したオーズ達。

「よし、尾行はされて無いな…」

「皆さん、用心して下さい。私達の『個性』を把握してこのビルの中にも潜んでいるかもしれません。慎重に参りましょう」

辺りを警戒しながら言う障子に、八百万は警戒態勢を怠らずにメンバーに伝える。緊迫する空気の中、オーズ達はビルの中へと入ろうとしたその時だった。

「いッ!？」

突然耳郎が声を上げる。何かとその場にいたメンバーは耳郎へと振り返る。

「どうしたの耳郎ちゃんっ」

「い、いや、何か肩にぶつかって…」

突然肩に衝撃が走り、心配する蛙吹に耳郎はそう応えながら足元に落ちていた物を耳郎は拾い上げる。

「え…これ…火野！」

それが何か、直ぐに理解した耳郎はそれをオーズとアंकに見せる。耳郎の手に持っていたのは、1枚のセルメダルだった。

「え!?メダル!？」

「なに…!？」

オーズとアंकは目を大きく見開き、アंकは耳郎に近寄りセルメダルを奪うように取り上げる。

「何でこの試験場にメダルが…!?アंक!？」

「…いや、ヤミーの気配は感じられない…。あの脇真音共の気配も…誰かが仕向けたのか?」

この世界でメダル絡みと言えば敵の脇真音姉弟と、それから生み出されるヤミーしか居ない。鴻上ファウンデーションも含まれるだろうが、試験会場に居るとは思えない。八百万達もオーズとアंकが警戒しているのを察して、全員は辺りを見回していた。

すると、オーズは何か見つけたのか「あ!」と声を出す。指を指している方角をその場の全員は見つめると、別のビルの屋上からこちらを見下ろす様に、突島が立っていた。

「誰かいる…!？」

障子が言い、全員は腰を少し低く倒して身構える。全員が見つけたのを確認した突島は、オーズとアंकだけを見つめると、左手を上げて、彼らに手の甲を見せるとクイクイツと煽る様な動作を見せてその場から身を引いた。まるで「貴方達だけ」と言わんばかりの挑発にアंकは「フン!」と鼻を鳴らした。

「何処のどいつだか知らないが、奴を放っておく訳には行かないなア」アंकは言い終わると、地面を強く踏み込み突島の居るビルへ向か

うように跳躍する。

「ちよーアंकツッ！」

オーズは慌てて追いかけてようと足を踏み出す。だが、八百万は「お待ち下さい！」と声を上げた。

「火野さん、これは敵の罠かもしれません！」

一連の流れを見るからに、突島の行動は明らかにオーズとアंकを誘い出す行動を見せた。既に敵の攻撃が始まっていると考えた八百万はオーズを止めようとしていたが、オーズはアंकの方角を見つめて口を開いた。

「例え罠だったとしても、メダルを持っている時点で、無いかも知れないけどもしかしたら敵と何か関わりがあるかもしれない…！それにアंकだけ行動させるのは俺にもリスクがある。皆は先にビルへ入ってて！俺もアイツの正体が分かり次第、後を追うから！」

「あ、火野…！」

そう言い残したオーズはその場から跳躍し、アंकの後を追って行く。耳郎も呼び止めようとするが、既にオーズは突島の居たビルの屋上へと上り詰めてその場から姿を消していた。

2人の姿が見えなくなると、障子は八百万に声を掛ける。

「どうする八百万、火野の後を追うか？」

「…：…いえ、火野さんの言われた通り私達はビルの中へと入りましょう。彼も無闇に行動する御方ではありません。火野さんとアंकさんを信じましょう」

「…：…そうだな」

今成すべき事を思い出し、八百万はそう判断する。八百万と障子が先陣を切ってビルの中へと入って行く中、2人の後を追う耳郎に蛙吹が声を掛けた。

「大丈夫よ耳郎ちゃん。火野ちゃんとアंकちゃんはそう簡単に脱落したりしないわ」

「う、うん…：…ありがと梅雨ちゃん」

「ケロ、今は私達がやるべき事をやりましょう」

心配そうな表情を浮かべる耳郎を励ます蛙吹。耳郎はグツと気持

ちを切り替えて、「マジで頼むよ…」と自分に言い聞かせるような小さい声を出す。そして八百万達の後を追って行った。

☆☆☆☆

「いた…アंक、待ってっ！」

「来るのが遅すぎんだよ」

「急に飛び出すアंकが悪いだろ…。で、あの人がさっきの…？」

ジャンプから着地したオーズはアंकに合流し、文句を垂れるアंकに言い返しながらオーズは目の前に居る突島を見遣る。グリード化している右腕を突き出し、アंकは突島に問い掛けた。

「お前、何者だ？何故セルメダルなんか持っていやがる？」

「えと…偶然、神野区で拾った。君達が、そのメダルに関わっているのは…テレビで見た、から」

「神野区って…、あの現場に居たのか」

ポツポツと喋る突島。悪夢と呼ばれていた事件が起きたその神野区に居合わせていた事に衝撃を受けるオーズ。すると、アंकは「ハッ」と笑い口を開いた。

「何だ、鴻上か脇真音の連中に関わっていると思っていたが、とんだ期待外れだな」

「ごめん、…でも、君達を足止めする様に言われた。だから、暫く…わ、私と相手して欲しい」

深く息を吐くアंकに申し訳なきような表情で突島は言う、その言葉にオーズは反応する。

「足止めって、じゃあこれは俺達を引き離す為…!?八百万さん達が危ない！」

既に敵の作戦にハマってしまった事にオーズは動揺して八百万達が入って行ったビルの方へと振り返る。

その直後だった。

「!?おい映司!!」

咄嗟にアंकがオーズの名を叫ぶ。オーズは「え?」と振り返ると、少し離れていた場所に立っていた突島が、地面を蹴って物凄いスピードでオーズへと接近していた。

「なっ!?!」

「フッ!!」

驚くのも束の間、突島は右腕の掌から“棒状”の何かを生み出す様に取り出し、オーズ目掛けて勢いよく振り上げる。咄嗟にソレをオーズは避け、アंकは「チッ!」と舌打ちしながらグリード化した右腕で突島を払い除けようと振りかぶる。だが、突島はアंकの攻撃を避けて、距離を取る為、その場から直ぐに飛び退いた。

「……先ずは、1つ目」

「あ?」

ボソツと呟く突島の声に、アंकは疑問を抱く。同時にオーズも警戒態勢に入るが、彼女の言葉にハツとし、腰部分を見遣る。

自身に取り付けていたターゲットが1つ、赤く発光していたのだ。

「うわっ、えっ!?!いつの間!?!」

先程の一戦を交わしただけでターゲットにボールを当てられていた事に愕然とするオーズ。アंकは突島を見遣ると、片手で槍のような武器を振り回しながら、もう片方の手にはボールが握られていた。「成る程、当てれば、投げなくても良いね……」

ボールを見つめながら解釈する突島。まさか見るからにか弱そうな女性生徒にターゲットを当てられた事に未だ動揺するオーズだが、相手は相当な手練だと認識し、オーズは警戒して身構える。

「馬鹿が、なに人間相手にやられてんだ!」

「ふ、不意を突かれたのは謝るけど、突然過ぎるだろあんな攻撃!」「チッ!だがあいつ何者だ!?!今の動き、相当な腕前してやがる……」

突島の動きに驚くオーズとアंक。どうやら、そう簡単には行かせてくれなさそうだと認識し、オーズはそのまま戦闘態勢へと入ったのだった。

突島とオーズが対面し戦闘を開始した頃合いを見定め、才達も同じ学園の生徒達を引き連れて動き始めていた。

「才様。突島さんが雄英生を誘き出し、別のビルで戦闘を始めました」「あらあら…。メダル使いの雄英生相手に大丈夫かしら？誘き出すだけでよろしくてよ」

「何か作戦があつての判断なのでは？」

小太りの生徒が報告をし、そう言って尋ねると才は顎に手を乗せながら上の空の目を向ける。だが、その表情は心配している様には見えなく、才は「フフツ」と静かに笑い出した。

「彼女の運動能力を計算すれば、少し不安では有りますが今は彼女を信じましょう。まずは初手段階終了……。私達も手筈通りに、第一段階開始」

「はい」

才の言葉に、別の女子生徒が頷きながら最新モデルのラジカセを取り出していた。

☆☆☆☆

「障子ちゃん、どう？」

「駄目だ、クラスの奴らの姿は見えない」

「他のエリアにいるのかしら」

「恐らくな」

ビルの最上部へと到達した八百万達は、他の候補生達を探すと同時に、散り散りになったA組生徒達がこのエリアに居るのではないかと搜索を試みるが、障子の「個性」を使用しても、辺りにはそれらしい

人物が見当たらない。オーズとアंकも敵の後を追ってしまい、今後どうするべきかと八百万は思考を巡らせている。

「ヤオモモ」

ふと、ビル内の音響を調べていた耳郎が八百万に声を掛ける。イヤホンジャックを壁に突き刺しながら、耳郎は口を動かした。

「階段を歩く足音が4つ…10階下…上って来てる…!」

耳郎の言葉に八百万達は警戒し、障子が口を開く。

「やはり、入り口で差し向けたあの生徒の作戦か」

「このビルに入るのも作戦の内と言う事なのかしら？」

「そのようですわね。この状況で私達が狙われていると言う事になるでしょう…。ですが、やって来るのは4人だけと言うのは気になりますわね…。核が動くこうとも、もつと大勢でチームを組んでいる筈…火野さんの方に人数を差し向けた…?」

障子に続いて蛙吹が喋り、八百万は少ない数の人数が上がって来ると言う言葉に疑問を抱く。雄英屈指の実力者がメンバーから離れてしまい、残された4人がここに来る事も、もしかしたら計算の内。即ち陽動なのかと八百万が考えたその直後だった。

「ツ!?うあああああア!!」

「耳郎さん!?!」

「耳郎ちゃん!?!」

突然断末魔を上げて壁からイヤホンジャックを外し、耳を押さえながら倒れ伏せる耳郎に八百万と蛙吹は何事かと駆け寄る。ハツとした障子は複製した耳を壁に当てると、微かだが下の階から大音量で流しているであろう音楽が聴こえた。

「音楽が鳴ってる…俺はともかく、耳郎にいきなりこの音はキツいだろう…!」

「うう…!!」

微細な音をキャッチ出来る耳郎にとって、屋内で流れる音楽は、一般の人で例えるなら耳元で爆音を流されると同じ音量となる。鼓膜に激痛が走るのか苦痛にもがいている耳郎を目の前にして、蛙吹は顔を曇らせながら口を開いた。

「耳郎ちゃんの『個性』を知ってて妨害したのね」

「それが本当なら、ビルに入ろうとした時点で俺達は狙われている……！」

「マズいですわ……これでは敵の詳細が……」

耳郎が負傷してしまい、敵の位置が把握出来なくなった事に焦りを感じる八百万。

一方で、入り口から4人の仲間と思われる女子生徒達を引き連れた才はそのままビルのエレベーターへと入り込む。不敵な笑みを浮かべながら才は口を開いた。

「第一段階終了……第二段階、開始」

才の合図が降りたと同時に、八百万達のいる通路の外窓が1枚、突然罅が入った。

「何だ！」

障子が逸早く気付き驚いていると、その連鎖は止まる事なく通路の窓が次々と罅が入っていく。

「ッ、隠れて!!」

「外からの攻撃!!」

八百万は敵の攻撃だと察知して全員に向けて声を上げる。耳郎も復帰して窓際の反対側へと身を潜めながら警戒する。ふと、蛙吹は疑問に思った。外からの攻撃なら容易に八百万達を狙う事が出来たのに、何故窓に罅だけを入れるのか。そして何か確信したのか「これは……」と蛙吹が声を漏らす。その後にかけて障子は口を開いた。

「くっ……俺の目も封じるつもりか……!?!」

その隣ビルの屋上には、腕にサポートアイテムを取り付けパチンコ状みたくゴムで礫を飛ばしている聖愛学院の生徒がいた。外の景色が見えない程度の罅を次々と入れていく中、八百万は隠れながらも思っている。1番最初に今のメンバーの実力者、火野を誘導させて分断。ビルに入った後、索敵能力の高い耳郎と障子の『個性』を封じた。それはつまり、相手は八百万達の『個性』を完全に把握していると思われる。

「八百万、相手の目的は何だッ?」

「恐らく、私達をここに釘付けにするつもりですわ！」

「その間に私達を包囲するつもりね…！」

「ええ、既に近くまで来ていると考えた方が良くもありません」

八百万達が敵の意図を探っている中、八百万達が居る廊下より前の部屋でエレベーターが到着する音がする。現れたのは才率いる聖愛学院の候補生達で、既に準備をしていたのかその部屋には2人の候補生が居た。

「順調に進んでまして？」

「はい、才様。ちょうど今、第二段階が終了したと思われませす」

「フフフフ…、複製の“個性”を封じ、音波使いが慌てて動き出す…。隙が生じて彼女の手の甲に備えられたアイテムを壊してしまえば、ビルの壁を破壊出来る程のパワーは居なくなる…」

「では才様。第三段階に移行します。屋上で狙撃を行っている彼女も、監禁した雄英生を警戒した後に、メダル使いの雄英生と交戦している突島さんの加勢へと向かう筈です」

「わかりました。では、後は宜しくて？」

第二段階の作戦は、障子の“個性”を封じるだけでは無く、攻撃を仕掛けようと耳郎がアンプリファアーを使う所を、狙撃に優れた聖愛学院がそれを撃ち抜いて壊すのが真の狙いだった。

現に扉の向こうの耳郎は撃ち抜かれて壊されてしまい、尚且つイヤホンジャックにも負傷を負ってしまっている。

そして、次の指示の承諾を貰った聖愛学院の生徒は、取り出した溶接面を顔に装着し、指先からポツ！と青く発光する火を着火したのだった。

☆☆☆☆☆☆

同時刻、突島に誘き出されたオーズとアंक。不意の攻撃にターゲットを1つ当てられたオーズは彼女の素早く瞬発的な動きに動揺する中、アंकが突島に声を掛けた。

「お前、只者じゃ無いな？とても人間が出来る様な芸当じゃないぞ」
「…それは、訓練、したから。君の『個性』も、えと…大体把握してる。
この武器も、私の…『個性』」

つしまとつき
突島突姫

個性『槍』

聖愛学院2年！体から槍を生成し、己の武器として扱う！

自在に扱うのは彼女自身の訓練が必要で、槍の形状を変える事も出来る優れ物!! 一本を出すにはカロリーを消費し、その一本に付きおよそ500キロカロリー消費する！連続で使用するのは危険だが、食べ過ぎた時のダイエットには打ってつけだ!!

突島はそう応えながら、自身の持つ槍を器用に振り回してオーズ達に向ける。いつ攻撃を仕掛けて来るか読めない動作を見せる突島に、アंकはオーズに声を掛けた。

「おい映司、相手が女だからって油断するな」

「わかってる…！あの子、相当訓練してるみたいだし、手加減なんてしたらこっちがやられるのは目に見えてるから」

一瞬の実力を見せつけられたオーズは試験内容を思い出す。ターゲットを3つ当てられてしまえば即脱落。1つをもう当てられてしまったのでこれ以上の失点は許されない。今は八百万達を信じて、目の前に居る突島を警戒し身構えている。

それを見ていたアंकは「フン」と鼻で笑い、口を開いた。

「ならとつとと始末しろ。コレを使え」

そう言つて、ピンツ！とメダルを指で弾き、オーズの頭上から落下する。慌ててオーズはそれをキャッチすると、見たことの無いコアメダルに首を傾げた。

「これって…？」

「里中から貰った。そのメダルは俺も知らないメダルだが、この機会に試すのに打ってつけだろ」

『パンダ』を模したコアメダルを見つめながらアंकは応える。前世

の時代でも見たことが無いコアメダルを見つめながら、不愉快そうに
応えるアंकにオーズは「よし…」と頷き、ドライバーに嵌め込まれ
ているトラのメダルと入れ替え、ソレをオースキヤナーでベルトへと
スキヤンした。

タカ!

パンダ!

バツタ!

音声が鳴り響き、オーズの胴体は文字通りパンダの姿へと変わる。
一見トラアームと変わらない見た目をしており、配色が白黒を基調と
したフォームだ。

その姿の名はオーズ「タカパンバ」。

「あ、パンダ………可愛い」

オーズの胴体にある円状のシンボルを見た突島は絵柄を見るなり
ボソツと呟いており、オーズも「え?」と言い確認すると、その真ん
中にはパンダの絵柄がクツキリとあった。

「本当だ……ってアंक!可愛いって言われたぞ、これ強いのかツ?パ
ンダじゃん!」

「知るか、文句があるならドクター真木に言え!」

文句を垂れるオーズにキレ気味に返すアंक。「ああもお!」と
オーズは無理矢理踏ん切りを付けて突島へと駆け出す。

向かって来るオーズを目視し、突島は体に付いているターゲットの
位置を確認する。ドライバーよりやや下の右腰部分のターゲットは
先程当てて赤く光っており、残りは左肩と右太腿部分。

対してオーズも突島の両肩とお腹部分に取り付けているターゲッ
トを確認し、ボールを取り出しながらその場を跳んだ。

「君が言ってた、ボールを殴る様に当てれば節約出来る!」

「えと、そんなに「間合い」に入られたら、こっちも…狙いやすい」

そう言いながらオーズはボールを突き出しながら飛び掛かり、突島は槍を構えて右横を狙わんと大きく振りかぶった。突き出すボールよりも突島の槍の方が早く、オーズに直撃する瞬間。

ギヤリツツ!!

「!?くっ…!」

槍の刃先がオーズに命中するのだが、オーズは咄嗟に腕に仕込まれている「パンダクロウ」でその攻撃を防いだ。劈く金属音と火花が飛び散り突島は顔を顰めながら、距離を取ろうとオーズの懐へ蹴りを叩き込む。

「うわあ!」

咄嗟に蹴られたオーズはそれを諸に食らってしまい、転がるように倒れる。そのまま飛び退いた突島は自身の右肩を見遣る。赤く点灯したターゲツトを見ながら突島は口を開いた。

「…普通、刃物向けられたら、皆、驚く筈なのに」

「いってて…!あれ、痛くない…?まあ、刃物扱う人と戦って経験したから慣れって言うか…。てか、これ試験なのにそんな物騒な物使っていいの?」

蹴られた懐に痛みを全く感じ無いオーズは疑問を抱きながらも、突島の槍を見てそう言うが、突島は考えながら口を動かした。

「これ…“個性”だから…。それに、この刃鋭利じゃ無い。わ、私の意思で模造刀みたいになってるから」

ポツポツと教えてくれる突島に「ああそっか。“個性”なら問題無いんだっただ」と納得する。

そんな呑気な姿のオーズを見て、アंकは苛立つ様に舌打ちをする。

「映司…ボサツとしてる暇あるならさっさと脱落させー!」

そう言おうとした瞬間、アंकの頬に強い衝撃が走る。ハツとした時には、目の前の地面が凹んでいた。恐らく何か飛んできたのだろう。アंकは勢いよく振り返ると、隣のビルの屋上で先程八百万達に狙撃していた聖愛学院の女子生徒がこちらに狙撃用のアイテムを向けていた。

「ハッ、仲間が居たのか。…良いだろう、この俺が相手してやる」

じんわりと痛む頬をおさえながら怒りを込み上げるアंकは睨みながら言う、残っているオーズに向かって声を上げた。

「映司！お前もとつとそいつを片付けろ、コイツを使え！」

アंकはそう言うて一枚のコアメダルを取り出し、オーズへと投げ渡した。反応したオーズはソレをキャッチすると、アंकは狙撃する女子生徒に向かってその場から飛び立つ。

「ちよ、アंक何処行くんだよ!?!」

「余所見…！フンツ！」

「うわっつ、たっ!?!」

勝手に離れるアंकにオーズは呼び止めようとするが、背後を突島が狙おうと槍を振り下ろす。オーズは気付いて慌てて横へと転がり避け、アंकから貰ったコアメダルを見つめる。

「これも見た事無いメダル…、今は使うしか…！」

使った事の無いコアメダルだが、形振り構ってられずにオーズはソレをパンダのメダルと取り替える様に装填し、オースキヤナーでドレイバーをスキヤンした。

タカ!

カンガルー!

バツタ!

音声が鳴り響き、オーズの胴体はパンダからカンガルーへとメダルチェンジされる。茶色をベースとした色味を纏い、両腕にはカンガルーのパンチ力を模した赤いパンチグローブが備わっていた。

この姿がオーズ「タカガルバ」だ。

「おお腕が軽い！これならパンチも凄いで！」

「今度はカンガルー…？本当色んなメダル持つてるね…！」

軽量化されたのか身軽に感じる両腕に興奮し、ボクシング選手のような素振りを出すオーズ。対して再び形態が変わったオーズを見た突島は、驚きながらも槍を振り翳してオーズへと駆け出した。

突島はそのまま槍を突きで攻撃を仕掛ける。だが、オーズは先程の動きとは別格の立ち回りで槍を避け、突島の脇腹目掛けて右フックを当てる。

「うっ!?!」

「ハッ、フッ！タアッ！」

よろける突島。だがオーズの攻撃は止まらずに左ジャブ、右ストレート、左フックと拳を連続で当てる。途中から何とか体制を立て直して槍で防御を取る突島だが、連続パンチに押し負け、耐えきれずに突島はオーズから飛び退き距離を取った。

「ケホ……凄いやパンチ……」

「あ、ごめん！痛かった!?!」

「別に」

咳き込む突島にハッとしたオーズは慌てて謝るが、痛かったのか少しムツとする突島。

「……ふう、落ち着け……」

すると、ハッとした突島は首を横に振って深呼吸をする。感情的になつてしまうのだろうか、反省する仕草を見せると、オーズは急に「あ！」と声を上げた。

「何……?」

「このグローブ、一体化してて全然取れない！うわあコレじゃあボール持てないじゃんか!?!」

手に固定しているガンガングローブ。ボールを持つどころかメダルチェンジも出来ないように慌てふためくオーズに、突島は「ふざけてるの……?」と槍を握り締めて勢いよくオーズ目掛けて飛び出した。

「ハアッ!!」

「ッ!?!うわあ!!」

物凄い勢いで突っ込む突島に反応が遅れてしまい振り上げた槍を諸に食らってしまう。火花が飛び散ると同時に、その槍の刃先がオー

ズドライバーに直撃してしまったのか、ドライバーからカンガルーとバツタのメダルが宙を舞った。

「あ……」

「えあ……メダルッ」

まるでやり過ぎたと言わんばかりの声を漏らす突島。オーズも2枚のメダルが宙を舞っているのに気付く。

すると、宙を舞って落下する2枚のメダルの内、カンガルーのメダルは見事にバツタメダルが入っていた左スロットへと装填される。

バツタメダルはそのまま地面に落ちてコロコロと転がって行き、体制を立て直したオーズは慌てて追いかけてメダルを拾った。

「あつぶないあぶないっ。無くしたらアंकがカンカンに怒るだろうな
く……ん？」

拾い上げて安堵の息を吐くオーズは、カンガルーのメダルが装填されている事に気付く。すると、「もしかして……」と呟き、空いた真ん中部分のスロットにパンダのメダルを装填し、オーズはオースキヤナーでドライバーへとスキャンした。

タカ!

パンダ!

カンガルー!

音声が鳴り響き、パンダの胴体に加え、脚部はカンガルーを模した形状へととなっていた。チーターレッグと似たような形状だが、向こう脛に備えられたバネ、"スパイラルシヤンク"が特徴的で、その影響なのか小刻みにオーズはピョンピョンと跳ねて軽快なフットワークを見せる。

今の姿の名はオーズ "タカパンガル"だ。

「おお凄い……このメダル脚にも使えるんだ!それに足が軽い!カンガルーフットワークだ!」

身軽さは脚部へと移行されて驚きながらも喜ぶオーズ。突島も目

を見開いて驚くが、槍を強く握り締めて口を開いた。

「芸が達者だね…でも、そろそろ勝ちに出来ない已向こうもやられるよ」
「そうだね！八百万さん達は、多分大丈夫だけど、時間が限られてるから勝負付けさせて貰うよ！」

「大丈夫…？」

オーズの言葉に、疑問を抱く突島。すると、オーズはボールを取り出して、勝負を仕掛けようと突島に突っ込んだ。

「真正面…！」

突島は槍を構えて身構える。だが、突っ込んだオーズは脚部の脚が発光すると、腰から尻尾が生えた。

「尻尾…!?!」

「ハッ！」

その尻尾をオーズは突っ込む途中で地面に強く叩きつけ、横へと移動する。反応に遅れた突島の間を突いてオーズはボールを投げ付けた。

「うっ!?!」

ボールは見事突島の腹部にあるターゲットに命中し、赤く発光する。当てたボールはそのまま跳ね返って宙を舞うと、オーズはそれ目掛けて尻尾を使ってジャンプした。

「ッカンガルーキック シュートッ!!」

オーズは宙を舞うボールを目の前にして、器用にオーバーヘッドキックを打ちかます。偶然思いついた技名と同時に蹴り出されたボールは物凄い速度で突島に突っ込み、ソレは左肩のターゲットへと命中した。

「あ…！」

思わず声を漏らす突島。ターゲット全てにボールを当てられてしまい、突島のターゲットから『脱落です』と通信音が聞こえる。

「ああ…、負けちゃった。本当、強いね」

「そんな事無い。君も凄い強かったよ」

「……んん、やっぱ難しい、な……」

「え？」

小さく呟く突島にオーズはキョトンとするが、突島はオーズの体を見て口を開いた。

「えと、多分合格してるから、控え室行ったら……？」

「合格？そんなこと、合格者って2人にターゲットを当てる筈でしょ？」

突島の言葉に疑問を抱いてそう言った瞬間。

『通過者は控え室に移動して下さい。……早よ』

「え？あれ!?何で!」

突島にしかボールを当ててないのに合格通知を知らずターゲットに驚くオーズ。すると、ハツとしたオーズはアंकが跳んで行った隣のビルの屋上へと振り返ると、そこにはアंकがボールを持って立っていた。

「アंक!?!」

「フン、俺の方が少し早かったな？」

アंकの隣には狙撃していた女子候補生が悔しそうに座っていた。彼女のターゲットは全て赤くなっている。アंकがボールを奪って当てたのだろう。

解せない気持ちのオーズだが、状況が如何であれ火野は第一次選考の予選を通過した事に変わりはない。

『……はい、現在通過者は55……あ、いや、59人目です。半分以上は切りましたので、残りも手早くさっさと急いで下さい……』

急に目良のアナウンスが聴こえ、その人数にオーズは耳を傾けて指で数を数える。

まさかと言わんばかりの表情でオーズは八百万達が居るビルへと向かって行った。

そして、オーズが向かうビルの屋内。

「まさか……有り得ません、私の方程式が狂わされるなんて……!!誰なの

「ですか貴方!?!」

ボロボロになっている服で床に横たわる聖愛学院達。才もまた同様に、赤く発光しているターゲットを見ながら声を張り上げる。その先には、人間態のウヴァが立っており、想定外の出来事に驚愕している彼女を見てウヴァは口を開いたのだった。

「フン、虫ケラが…」

突島と戦い、見事ターゲットを当てて勝利を掴んだオーズ。アंकクの勝手な手助けもあってノルマは達成し、通過者となったオーズは八百万達が居るビル内へと足を運んだ。

「皆ー!」

「火野さんっ」

「火野、無事だったか」

そこには八百万、障子、耳郎、蛙吹が立っており全員は一斉に振り返ってオーズの安否を確認する。彼等のターゲットは全部青に発光しているのを見て全員は一次選考を無事に通過していた。

そして、八百万達の奥の方にはウヴァと横たわっている才がおり、ウヴァはオーズとアंकクを見るなり「フン」と鼻を鳴らした。

「面倒な事をやらせてくれたな」

「まア、そう言わずに。お陰で何とかなったみたいだしさ」

面倒臭そうに文句を垂れるウヴァを宥めながら、オーズはドライバーからコアメダルを抜き取り変身を解く。すると、横たわっていた才が火野に声を掛けた。

「この御方も…、貴方の『個性』でして?」

「うん、少し前に仲間になったんだ」

「……そうですね。計画の『第三段階』までは順調でしたのに…いきなり溶接で加工した扉を壊して来るのは予想外でしてよ…。私の方程式がこうも簡単に覆されるなんて本当、想定外……」

才の計画はこうだ。先ず、1番の実力者を突島に陽動させてオーズをメンバーから外し、残りのメンバーがこのビル内に入り込んだと同時に索敵能力が高い耳郎と障子の『個性』を封じた。その後、八百万達の居る部屋を防壁シャッターで閉じ込め、唯一出られる扉は溶接で封じ、更には冷房に冷気をふんだんに送り付けて部屋の温度を下げる。これは『蛙』の『個性』である蛙吹の動きを封じる為だった。メンバーの殆どの『個性』を封じて、残された八百万が『個性』を使わ

せると言う計画だったらしい。

その場面で、何故ウヴァが八百万達と一緒に居たのか。それは火野がこのビルに入る前に八百万達に1つ提案を申し出たからだだった。

☆☆☆

『あのビルに入る前に、誰かの体にウヴァを付けて欲しいんだ』

『ウヴァさんを？』

『そう言えば、予選が開始してからウヴァの姿が見えないな』

『うん、始まる前に、俺達結構他校の人達に絡まられてたでしょ？有名
人になったって事は、俺達の“個性”が多分把握されてると思って
……ちよつと考えたんだけど、ウヴァは神野区から正式に仲間に加
わったから、他校の人達はウヴァの存在を恐らく知らないと思っ
たんだ』

『成る程……ウヴァさんの存在を知られてない以上、敵にとってウヴァ
さんは予想外の存在ですわね』

『考えたわね、火野ちゃん』

『そういうこと。だから、あのビルに向かう前に、誰かにウヴァを憑依
させたいんだ。良いかな？』

☆☆☆

「……で、ジャンケンの結果ウチの中にウヴァを忍ばせたってワケ……
ハア」

「おい爆音女。何故溜息を吐く？」

「ウチの名前は耳郎！嫌に決まってんでしょ、お前みたいな奴を体に入
れるなんて。本当にウチの体の中、何もしてないよね？」

「するか！」

ウヴァを憑依させた耳郎は嫌そうな表情で言い、もう一度深い溜息

を吐いていた。その意図を聞いた才は、悔しそうに俯くが納得したのか口を開いた。

「裏の裏を読まれたわけですね…。認めましょう、私達の負けですよ……」

現実を受け入れ完敗した聖愛学院。火野達は勝利を掴み取り、メンバー達でハイタッチをその場で交わしたのだった。

☆☆☆☆☆☆

通過した火野達は、控え室へと赴いた。そこには先に通過した候補生達が待機しており、火野達も疲れた様子で中へ入ると、先に突破した轟が火野達を見かけて声を掛けた。

「火野、来たか」

「あ、轟君！通過したんだね」

「フン、先に通過したのか。映司、お前も一人で行動すれば手こずる必要なんか無かっただろ」

「無事に通過したんだから良いだろ別に」

「馬鹿が、俺が手伝ってやったからクリア出来たんだろ。…まあ、丁度いい憂さ晴らしが出来たから俺は満足してるがなア」

「おまつ、ちゃんと手加減したんだよなツ？」

アングのその言い方に火野はゾツとして確かめる為に聞くが、アングは「さあな」と言ってそっぽを向く。火野は深く溜息を吐いていると、八百万が轟に声を掛けた。

「轟さんも無事に通過出来て何よりですわ」

「ああ、何とかなった…」

「流石轟ちゃんね」

轟はそう応え、蛙吹もそう言うのと、後ろに居た障子が耳郎に向かっ

て口を開く。

「他校の生徒達も侮れなかったな」

「確かにね……」

「…ム、何見ている?」

耳郎は頷きながら、ジト目でウヴァを見遣る。ウヴァも視線を感じてそう言っている、轟は「とりあえず…」と口を動かした。

「他の奴らが来るまで休んでろよ…。あそこにターゲットを外す鍵があるから、そこで外してボールバックと一緒に返却棚に戻せば良いらしい」

轟が奥の方へ指を指しながら言う。指す方向を見ると、他の候補生が使われたボールを入れるバックとターゲットが置かれているのが見える。更に、控え室の各席のテーブルには軽い食べ物と飲み物が置かれていた。有難いと思った火野達は、早速ターゲットを外す為奥の部屋へと行ったのだった。

☆☆☆☆

『さて、立て続けに3名通過。現在83名となり残席はあと17名！』

休憩を程無くして約数分が経過した頃、試験会場に慣れて来たのか通過者が続々と増え出し、あつという間に残り20名を切っていた。そしてアナウンスが流れた時、身知れた顔馴染みが控え室へとやって来る。

「お!?お前等先に来てたんだなッ!」

火野達に声を掛けてきたのは切島で、その後ろからは爆豪、上鳴、更には緑谷、麗日、瀬呂の計6人の雄英生がゾロゾロとこちらに歩み寄って来る。

「皆さんよくぞ無事で!心配していましたわ」

「ヤオモモー!ゴブジよゴブジ!つーか早くね皆!」

「俺達もついさっきだ。火野の提案で何とか通過出来た」

「轟君が1番早かったよ」

ホッと安堵する八百万に上鳴が驚いた様子で尋ねると、障子と火野がそう応える。すると、耳郎が納得した表情で上鳴に言った。

「爆豪も絶対もういると思ってたけど、なる程！上鳴が一緒だったからか」

「はア!?おまえちよつと、そこなおれ!」

ちよつかい出す耳郎に上鳴はカチンと来たのか耳郎に怒鳴る。火野も轟と爆豪は先に来ていているだろうと予想していたのだが、この順位で通過して来たとなると、余程相手が強かったのだろうと察する。

「お疲れ様皆、ターゲットを外すキーが奥にあるわ。ボールバツグと一緒に返却棚に戻せって」

やって来た6人に蛙吹が後始末の説明をして、上鳴達は早速ターゲットを外しに奥の部屋へと向かうが、「火野君」と緑谷は火野に声を掛ける。

「お疲れ様、通過出来たんだね」

「うん、八百万さん達と一緒にね。緑谷君もお疲れ様」

お互いの苦労を労っていると、轟もこちらに近寄って口を開く。

「A組はこれで12人か…」

「あと8人…」

「アナウンスでは現在通過82名……梓は後18人……飯田さん大丈夫かしら…」

雄英生の残り人数をボソツと呟く火野に続いて、八百万が残り梓と未だ通過していない飯田の事を気に掛ける。それに緑谷は反応し「飯田君……?」と心配していた。



『ハイ、えー、ここで一気に8名通過来ましたー！残席は残り10名です』

暫くしてアナウンスが鳴り、火野達はピクリと反応する。その8名に雄英生徒が入っているのかとソワソワして控え室の入り口の方へと見遣る。だが、入って来たのは傑物学園の候補生、真堂達であった。

「A組は…」

「あと8人…これ…全員はもうムリかなあ…」

残り10名の人数に絞られた現状、8人も雄英生がまだ通過していないとなると、突破する希望が薄れていく。耳郎が弱音を吐く中火野は心配そうな表情を浮かべるが、グツと拳に力を入れる。数々の苦難を共にして来たクラスメイトがこんな所で落ちる訳が無い。微かな希望を信じて今は待つ事だけを考えていた。

その一方、八百万達が心配していた飯田は、偶然にも合流した青山と行動していた。

だが、彼等が居る場所は早く通過しようと焦る候補生達が集う激戦区のだ真ん中。飛び交うボールや“個性”の攻撃を2人でフオロし合い避けるので精一杯だ。

「クソ…このままでは…」

焦る気持ちが募り、飯田の思考は冷静では無い。その中、青山は「フ…」と不敵に笑みを浮かべると、その場で立ちブリッジをし、天高くネビルレーザーを射出した。

「青山君!?何をしている!?待って…本当に何している!?!」

突然血迷った行動をする青山に飯田は驚きながら尋ねると青山はプルプル震えながら言った。

「目立ってる☆」

「とっつてもなー…違うー!そうじゃなく!!」

天高く射出されるネビルレーザーに、候補生達も思わず手を止めて見つめて居るが、返って注目が集まってしまっている。急いで止めようとする飯田だが、青山は続けて口を動かした。

「僕を庇っていると共倒れ☆目立ってる僕は、もう二ヶ所もターゲットトをやられてる。あと一ヶ所で僕アウト。君に、譲っちゃおう☆」

「!!」

「目立ってる僕を取りに来る人達の裏を取るんだよ。君のスピードなら…君1人なら、可能だろ?☆」

「なーにを急に言ってるんだ!!」

「急に聞こえるだろうけどね。僕はずっと、対等になりたかったのさ☆」

ネビルレーザーを出し続け、青山のお腹から下す生々しい音が聴こえる。どうやら言っている事は本当らしく、お腹を壊しても出し続けるつもりだろう。だが、飯田はそれを認めなかった。仲間を犠牲にしてまで勝ち上がるのは、自分の信念に反するからだ。そして、隙あらばと迫り来る他校の候補生達。この窮地をどう打開するか考えたその時だった。

「行つくよー!!」集光屈折 ハイチーズ!!」

突如、上空から青山のネビルレーザーに引けを取らない程の眩い光が放たれる。

「った、まぶしっ!」

「何も見えねー!!何だ!」

「ッ!葉隠君!!」

候補生達は目をやられて怯んでいる中、飯田は頭上から着地したその正体、葉隠に気付き声を上げる。

「おまたせー!敵の視界封じたよ!常闇君!」

「御意、ブラックアング深淵闇軀!」

飯田にピースを見せながら、葉隠は叫ぶと同時に光は消える。すると、岩陰に潜んでいた常闇が姿を現し、ダークシャドウを覆うと目の前に居る敵目掛けてダークシャドウの両腕を放った。

「かいな黒き腕の暗々裏!」

「ぐあっ!」

放たれた両腕は候補生達を薙ぎ払う。体制を崩し、立て直そうとする候補生達だが、違和感を感じて何故か足が動けなかった。

「なに!?なんだコレ…!」

「ハアツ!!」

「うがつ!」

足元には紫のボールが付着しており、ソレに気を取られた候補生達の間を突き、尾白が尻尾で迎撃していく。そして、紫のボールは血塗れになった頭部から投げまくっていた峰田の「もぎもぎ」だった。

「オラオラオラ取れる奴から取ってけえ!!!」

「他に取られる前に!!」

「おおつ、皆ア!!!」

「雄英だ!!いつの間にも?」

尾白達の登場により、歓喜する飯田。候補生達も続々と集合する雄英生徒に驚きながらも、体制を立て直した奴らから反撃しようと攻撃を仕掛ける。

「もう一度行くよ!」集光屈折 ハイチーズ!」

「ぎゃあ!」

「また目が!」

だが、攻撃をさせまいと葉隠が再び光を放ち、視界を奪われる候補生達。その隙に尾白と葉隠はボールを取り出して怯む候補生達のターゲットに当たった。

「お先ねー!!」

「俺も!」

『2名通過!!残りは8名!!』

ノルマを達成し、直ぐにアナウンスが流れる。雄英生登場によって場がどんでん返しとなった戦況を見て、青山は「ねえ」と顔を強張せながら言うのと、それに割入って到着した芦戸が口を開いた。

「みーんな焦って大雑把になってきて、敵も味方もぐっちゃぐちゃで周り全然見えなかったんだよー!」

「マジでヤバかった!」

喋る芦戸の背後からボールが飛んでくるが、岩の瓦礫を持ち上げて砂藤がそう言いながらガードする。そして、芦戸は飯田と青山へと振り返りサムズアップを見せながら言った。

「青山のおへそレーザーが見えたから！また集まれたねえ！」
「！」

まさか捨て身の策で放ったネビルレーザーが散り散りになったクラスメイトを集まるきっかけを作るとは思わなかった青山。目立って散ろうと覚悟していた青山は、釈然としない気持ちだが、集まってくれた事に実際は少しホツとしていた。

「もーらいー！」

「うらアツ！」

「御免……！」

「や……やったア……！」

『7名……5名！』

隙を突いて、芦戸、砂藤、別の場所では常闇、フラフラになった峰田がボールをターゲットに当てて通過する。

『続々と！この最終盤で一丸となった雄英が！コンボを決めて通っていくー！』

アナウンスを送る目良が興奮気味に解説している中、観客席に座っていた相澤が、終盤まで残っていた雄英生徒達に呆れた様子で見守っていた。そして、『残り！2名!!』と続けて誰かが通過している中、飯田と青山もまたその波に乗ろうとボールを握り締めて駆け出す。

「青山君！何をもって対等なのか…、物差しが違う故わからんが！そして……！」

目の前から向かって来る候補生達に、飯田はそう言いながら、青山と同時にボールを振り翳す。

「君のおかげだ、ありがとう！」

敬意を評して、飯田はそう言いながら、ボールを敵のターゲットに当てる。同時に青山も当て、目良は感極まった様子で声を上げた。

『0名！100人!!今埋まり!!終了！です！』

ツハーーーー!!…これより残念ながら脱落してしまった皆さんの撤回に移ります』

「…ま☆僕のキラメキは止まらないってことだよね…☆」

「ああ！多分！わからんが!!」

自分の思考を貫く青山に対して飯田は受け流し気味にそう応えたのだった。

☆☆☆☆

その頃控え室で、目良の興奮熱狂のアナウンスを聞いた雄英生徒達は、残っていたクラスメイト達が無事に通過した事を知らされる。それを聞いた瞬間、「おおおおくくく…っ」と上鳴が腰を低くして、その溜めた声を張り上げて出した。

「しゃああああ!!!」

「スゲエ!!こんなんスゲエよ!」

「雄英全員一次通っちゃったあ!!!」

瀬呂と麗日も大喜びで叫び、雄英生徒達の場合に歓喜の音が響き渡る。

「やったツ!本当、本当凄いよ皆!!」

「フン、ボールを当てるだけの試験に落ちる方がおかしいだろ」

「人間のやる事はおかしな事ばかりだ」

火野も喜んでいるその隣で、アंकは見下すようにボヤキ、ウヴァも疑問を抱きながら、歓喜するA組生徒達の様子を眺めていたのだった。

No. 110 救助演習

『えー、1000人の皆さんこれ、ご覧下さい』

第一次選考を通過した候補生1000人は、アナウンスの目良の声を聞いて映し出されたモニターへと注目する。

「フィールドだ」

「なんだろうね……」

緑谷、麗日が言う通り、映っているのは先程の試験会場だ。火野も何だろう?と思いつながらその光景を見ていた次の瞬間。先程火野達が滞在していた高層ビルのエリアで小規模な爆発が起こる。その爆発は連鎖していき、次々と他のエリアも爆発が発生する。それは瞬く間に、試験会場全てが爆発によって崩れきった。

「(((……何故!!)))」

一瞬にして荒れ果てたフィールドと化した試験会場に雄英生徒達は驚愕した表情で思っていた。

「うわあ、もったいなア……」

これだけの設備を完成させるのにかなりの資金が注ぎ込まれたと思うと、火野は少々乱暴に扱い過ぎでは無いかと思いつながら声を漏らす。すると、アナウンス越しで目良が口を開いた。

『次の試験でラストになります！皆さんにはこれからこの被災現場でバイスタンダーとして救助演習を行ってもらいます』

「救助…!?!」

目良の言葉に火野はハツとする。第一次選考は互いにボールをターゲットに当てる試験。それを例えるならば、敵との戦闘ヴァイランに対しての“個性”を使った戦い方。相手が未知数の敵だからこそ、どうやって攻略するかが試される試験。

そして、次に行われるのは救助活動。

災害や崩れた場所から人々を救い出すその活動は、ヒーローにとっての必要不可欠の内容だ。

「『パイプスライダー?』」

「バイスタンダー！現場に居合わせた人の事だよ。授業でやったでしよ」

「一般市民を指す意味でも使われたりしますが…」

『ここでは一般市民としてではなく仮免許を取得した者として……どこだけ適切な救助を行えるか試させて頂きます』

一部理解に苦しむ者がいるが、葉隠と八百万が納得させ、目良がざっくりとした説明をアナウンス越しで言う。すると、荒れ果てたフィールドが徐々に拡大されて行き、何か見えたのか障子が「む…」と異変に気付く。

「人がいる…」

「え…あア!?老人に子供!?危ねえ、何やってんだ!?!」

砂藤が声を上げるそのモニターの先には、無人だった筈のフィールドに年齢差が大きく別れた人影が映っていた。瓦礫で碌に足場も無く、今にも崩れそうなエリアに躊躇無く足を運ぶ人々を見て、控え室は騒めきに包まれる。

『彼らはあらゆる訓練において今引つ張りダコの要救助者のプロ!!』

「要救助者のプロ!!」

『HELP・US・COMPANY』、略して『HUC』の皆さんです』

「色んなお仕事あるんだな…!」

「ヒーロー人気のこの現代に則した仕事だ」

目良の説明を聞き、候補生達はHUCの人達を見て感心しながら驚く。

『傷病者に扮したHUCがフィールド全域にスタンバイ中。皆さんにはこれから彼らの救出を行ってもらいます。』

尚、今回は皆さんの救出活動をポイントで採点していき、演習終了時に基準値を超えていれば合格とします。10分後にスタートしますので、それまでにトイレとか済ましといてくださいね…』

「採点形式なのか…」

段々と声の音が小さくなり、フェードアウトするアナウンス。次の試験の内容を頭に入れて息を吐く火野に、ふと飯田が声を掛ける。

「緑谷君、火野君」

「ん？」

「この試験、似てないか？」

「似てる…」

飯田の言葉に火野は数秒考え込むと理解したのかハツとする。緑谷は既にわかってたのか「うん…」と頷き応えた。

「神野区を横してるのかな……」

「俺達とアंक君やウヴァ君は爆豪君達を敵から遠ざけ…プロの邪魔をしない事に徹した…。その中で死傷者も多くいた…」

「ー頑張ろう」

「…うん、今度は俺の手で救ける番だ」

プロや敵の抗争に入り込み、自分達の事で手一杯だった彼等は、その巻き添えを食らった市民達を救ける余裕が無かった。だが今回の仮免試験に合格すれば、仮とは言え、

助けを求める人々に手を差し伸べる事が出来る。緑谷と火野はそのチャンスを絶対に掴もうと、決意を露わにしていたのだった。

☆☆☆☆

「…フン。黙って説明を聞いてみれば、今度は演技地味な連中を救助……馬鹿がやる事だな」

「ああ、くだらん。瓦礫の山くらい自分で這い上がって助かれば良いものを…」

「ちよ、駄目駄目！ヒーローになる為に救助活動は当たり前で必要不可欠だぞ。それに、普通の一杯市民が怪我したら自力で助かるなんて難しいに決まってるでしょ、お前達グリードとは違うんだから」

10分の休息が入り、アナウンスを聞いていたアंकは面倒臭そうに言い、同意見なのかウヴァもそう言って頷く。元人間を利用して襲っていた彼等にとっては他人の命などどうでも良いのだろうが、火野は全力で否定してヒーローのやるべき事を伝える。

「チツ、…まア、免許は必要だからなア。映司、協力してやるが、アイヌで手を打ってやる」

「ム、なら俺も何処か良い景色を眺める場所を教えろ。それなら手助けも考えてやらん事は無い」

「ああもオわかったわかった！無事に合格出来たらな」

2人の要求に呆れながらも火野は了承すると、そそくさにその場から離れようとする。

「どこ行くんだ？」

「ト、トイレ！緊張解けたら一気にきちやつて！」

そう言い終わると余程我慢してたのか火野は早歩きでその場から離れて行く。アंकはその様子を見て深く息を吐いてその場に残っていた。

☆☆☆

「あくぶなかつたあ…」

用を足してスッキリした表情で火野は男子トイレから出て来る。残り5分弱となった時間を見て、火野は控え室の広場へと向かおうとすると、目の前から土傑高校の金髪の女子生徒が歩いて来る。火野は軽く会釈をしてそのまま通り過ぎようとする、女子生徒はすれ違い側に口を開いた。

「君、メダルを使ってる雄英の生徒だよね？」

「え…あ、はいそうですけど」

急に声を掛けられ、戸惑いながらも火野は応えたと女子生徒は振り返り、ジロジロと火野を見つめながら口を動かす。

「色んな種類あるんだってね？どのくらいそのメダルを持って使ってるの？あの子以外は興味無いんだけど、私のお友達が気にしていたから君は特別。教えてほしいな…ねえ、教えてよヒノエイジ君。君のこと」

「えっ…ま、まア色々ある…けど…、ちよつ、近いっ…！」

ズイズイと詰め寄られ、体が密着するかしないかの瀬戸際で顔を覗かせて来る女子生徒。逆に気味が悪いくらいの笑顔と距離を気にしない彼女に、色々引つ掛かる発言があったが火野は焦って少し引き気味になる。

「ごめんーこの試験が終わってからも良いかなッ？俺ちよつと今急いでるから、じゃあね！」

「あ…」

慌てて火野は彼女から離れ、手を合わせて謝るとそそくさにその場から駆け出す。呼び止めようとする彼女の視線を感じながらも、火野はその場から立ち去った。

☆☆☆☆

試験の緊張とそれを解す為に控え室は会話で賑わっている中、瀬呂は上鳴と峰田に声を掛ける。

「なアなアすげー事あってさア、聞いてくれよ」

「Rは？」

「18」

「聞こうー」

18と言うワードにピクリと反応した峰田は興味津々に応え、瀬呂は続けて土傑高校の女子生徒に指を指しながら口を動かした。

「土傑のボディスーツいるじゃん？あの女の人」

「いる」

『『良い』…』という話なら甘い。オイラはもうさつきからずっと彼女を視…」

「素っ裸のまま緑谷と岩陰にいたんだよ!!」

「緑谷ア!!」

瀬呂の言葉を聞いた途端、峰田と上鳴は形相を鬼のように変えて緑

谷へと詰め寄る。

「何してんだてめエはア!?俺たちが大変な時にてめエはア!？」

「試験中だぞ!ナメてんのか人生を!!」

「わ、痛いやめて、何!？」

今にも襲い掛かりそうな勢いで来る2人に訳もわからず戸惑う緑谷。

「とぼけんじゃねえ、あの人と!お前は!何をして…」

峰田はビツと土傑の女子生徒に指を指す。すると、騒動に気付いたのか、女子生徒もこちらを見つめており、その場に居た3人と目が合う。その瞬間彼女はニコツと微笑み、緑谷に向かって軽く手を振ったのだった。

「良い仲に進展した後男女がコツソリ交わす挨拶のヤツをやってんじゃねーか!!」

「見損なつたぜナンパテンパヤロー!!!」

「あ…ああ成る程、瀬呂君か!違うよ、そういうんじゃないってば!」個性”の関係だよ!というか、わけわかんなくてめっちゃ怖かったんだよ」

血走った目付きで怒りをぶつける峰田と上鳴の言動に緑谷は気付いて言い訳をすると、ジツと緑谷を見つめる麗日の隣に居た火野が声を掛けた。

「緑谷君あの子と相手してたの?俺さつきすれ違った時に声掛けられたんだけど…ちよつと近寄り難いって言うか、怖かった感じだったなあ」

「え、火野君喋り掛けて来たんだ」

「「ああ!？」」

土傑の女子生徒を見ながら苦笑いして火野は言う。緑谷がそう応えると、その矛先は火野へと変わった。

「おまつ!!火野オ!!何でテメーが声を掛けられてんだよ!!」

「イケメンか!?轟に次いでの子イケメンだからか!?変身する高性能な上の!その上から発言かゴラア!!」

「ちよ、まつ!?!何だよ急に!？」

殴られそうになるのを必死に腕を交差して防御していると、上鳴と峰田の後頭部に耳郎のイヤホンジャックが突き刺さり、2人の体は内側から弾けた。

BOOW!!

「ギヤア!!?」

目が飛び出そうな程の顔で2人は断末魔をあげ、その場に倒れ込む。耳郎は「うっさいアホ共」と悪態を気絶している2人に吐き捨てる。

「あ、ありがとう耳郎さん」

「…別に」

礼を言う火野だが、何故か不満な態度で彼女はそっぽを向いて歩き出す。その行動に火野はハテナマークを浮かべながら首を傾げていた。

「…ん?おい、士傑がこっち来てんぞ」

ふと、通過者用の支給された食べ物を摘んでいた切島が雄英生徒に声を掛ける。その目の先には士傑の生徒達がぞろぞろとこちらにやって来る。

「爆豪君よ」

「あ?」

全身体毛で覆われた士傑の(恐らく男子)生徒が爆豪に声を掛けた。

「肉倉…糸目の男が君のここに来なかったか?」

「ああ…ノした」

言われて思い浮かんだ爆豪はそう応えようと体毛の男は「やはり…!」と頷き、口を動かす。

「色々が無礼を働いたと思う。気を悪くしたろう。あれは自分の価値基準を押しつける節があつてね、何かと君を見て暴走してしまった。

雄英とは良い関係築き上げていきたい。すまなかつたね」

「良い関係…!?!」

「良い関係…とてもそんな感じではなかった…」

律儀に謝罪をする体毛の男。今は敵同士の関係でもあるのにも関わらず、こうしてわざわざ謝りに来る素行を見る限り、この男は士傑

のリーダー的存在なのだろう。そして良い関係というワードに、いつの間にか起き上がっていた峰田が血走った目付きで緑谷と火野を睨み付け、方や緑谷は戸惑いの目でそう呟く。

「それでは……」

「おい、坊主の奴」

言う事を伝えて土傑の生徒達はその場を立ち去ろうとすると、突然轟が夜嵐に声を掛け呼び止めた。

「俺、なんかしたか？」

「……ほホウ」

振り返った夜嵐は敵意、或いは憎悪に満ちた目で轟に睨み付ける。試験始まる前の風格とはまるで違うその表情に、何かあったのだろうか。と周りの生徒達は思っていた中、夜嵐は一歩前に出た。

「いやア、申し訳ないっすけど……エンデヴァアの息子さん。俺はあんたらが嫌いだ。あの時よりいくらか雰囲気は変わったみたいスけど、あんたの目は……エンデヴァアと同じっす」

エンデヴァア。轟にとってそれは聴きたく無い言葉だろう。それに加えられハッキリと申し上げられる拒絶の意志に、轟は目を見開いた。

「夜嵐、どうした」

「何でもないっす!!」

体毛の男に呼ばれて夜嵐は直ぐにその場を後にする。異様な緊迫感に包まれた雰囲気は解け、緑谷は心配そうに「轟君……」と声を掛けようとするが、轟の険しい表情を見てそれは踏み止まっていた。

「轟君、気にしなくて良いから」

「火野……」

そんな彼に近付いたのは火野だ。肩にそつと手を置いて話しかける彼に、轟の表情は少しだけ穏やかになる。

「事情は詳しくはわからないけど、轟君は体育祭の時よりも随分と表情がわかりやすくなったって言うか、打ち解けてくれたって感じがする。上手くは言えないけど、轟君が困ってたら俺……俺達がついていかさ」

「……………ああ、ありがとう」

励ましの言葉を入れる火野。轟は礼を言つて頷くが、その顔はまだ拭い切れない表情だった。

火野はその様子を見て無言で轟の肩をポンポンと叩き、轟から離れようとすると、小さな声で呟いた。

「…メンドクさいな、さっさと潰しちやおうか」

「?…何か言ったか?」

「…あれ、え?…ごめん、何か言つた轟君?」

「いや、お前が……………いや、何でもねえ」

上手く聞き取れなかった轟は聞き返そうと声を掛けるが、火野も聞き取れなかったような顔で轟に応える。噛み合つてない会話に轟は首を振つてその場を終わらせようとするが、「あ…」と火野は何処か解せない様子で轟の背中を見つめていた。

そして、その会話を全く聞いていない部外者が1人反応していた。

「(何だ…?今、微かに…………)」

「やけに険しい顔だなアंक」

辺りをキョロキョロと警戒するように見回していると、ウヴァが気になったのか声を掛ける。

「おいウヴァ、お前感じなかったのか?」

「…?何がだ、相変わらず喧しい人間の声とその人間の視線ならさつきからずっと感じているが?」

同じグリードのウヴァにそう聞くが、ウヴァは控え室にいる候補生達を見ては嫌気をさしていた。火野の体から離れてグリードの体として行動しているが、それは五感が無い状態を意味する為、人の会話はノイズが走る雑音にしか聞こえない。

「……………ああ、確かに五月蠅い部屋だここは」

ウヴァが全く反応しなかった、同じグリードである故にだ。それが気の緩みとなつてしまったのか、アंकは気のせいと感じてウヴァの発言に同意していた。

その時。

火災報知器みたいな警報が大音量で響き渡り、候補生達はビクツと肩を上げ驚く。

『敵ヴァイランによる大規模事故テが発生！』

『演習の想定内容シナリオね』

「え!?!じゃあ…」

『規模は〇〇市全域、建物倒壊により傷病者多数！』

「始まりね」

何も説明無しに始まる試験。本番のような想定内容に火野は強張りながらも説明に耳を傾ける。

『道路の損壊が激しく救急先着隊の到着に著しい遅れ！到着するまでの救助活動はその場にいるヒーロー達が指揮を執り行う。1人でも多くの命を救い出す事!!! START!!』

一次選考同様に控え室の天井や壁が展開され、中に居た候補生達は合図と同時に一斉に飛び出す。

「何だ、いきなりだな」

「映司、始まってるぞ!」

「わ、分かってる!」

雄英と同様にいきなりスタートする試験。アंकとウヴァは火野に合流し、声を掛けると火野は反応が出遅れしまいながらも、オーズドライバーにタトバのメダルを装填し、オースキヤナーでドライバーをスキヤンした。

「変身ッ!」

タカ!

トラ!

バツタ!

タ・ト・バ! タトバタ・ト・バ!

再び火野はオーズ、タトバコンボへと姿を変えバツタレッグの脚力でその場を蹴って跳躍する。アंकとウヴァも遅れまいと後を追いかけた。

次の試験は救出活動の採点方式と目良が説明していたが、その基準は一切明かされていない。

「分からない以上、とにかく目の前の人を救ける……！」

今分かるのは基準値を規定範囲内に達した時クリアと見做される事。二次選考は非常事態のシナリオにどれだけクラスメイトや他の人と協力して救出出すかの課題になるだろう。雄英で培った訓練授業を意識して、オーズは駆け出して行く。

「あ、火野……」

声がる方向をオーズは見遣ると、そこには耳郎、尾白、葉隠らしき人物が走っていた。

「火野、一緒に行動しよう！この試験、頼れる奴が居た方が動きやすいと思うんだ！」

「わかった……」

尾白の言葉にオーズは同意し、ここから見える高層ビルがあつたエリアへと移動した。

一足先に到着したオーズは、その目「タカアイ」を目視して周囲の様子を伺うと、何かを発見したのかビルの瓦礫に囲まれた所へと移動する。

「い、いでええエ……！足がア……挟まって……！動けねえッ……た、助けてくれえ……！！」

「大丈夫ですか!?!」

そこには頭から血を流し、苦痛と共に助けを求める御老人の人が瓦礫に埋もれていた。この人が目良の言っていた^{フッ}HUC^クの人なのだろう。

オーズは駆け寄ると、合流した耳郎達が老人を発見すると、慌てて駆け寄って来た。

「大変！瓦礫に埋もれてる!?!」

「直ぐ救けないと……」

葉隠が驚き、耳郎がそう言つて飛び出そうとした瞬間、オーズが「耳郎さん待った！」とそれを止める。直ぐにオーズは老人が埋もれた瓦礫の周りを確認すると、耳郎達に声を掛けた。

「この人足が痛いって言つてたんだ。今無理に引つ張り出せば、怪我が悪化するだけだと思つて何より力づくで瓦礫から退かせば振動で崩れるかもしれないから。先ずはゆっくりと瓦礫を退かせよう！アंक、ウヴァー！」

「あ？何で俺が…」

「アイス！」

「チツ…」

状況を把握し説明を終えたオーズは、後ろに居たグリードの2人に声を掛ける。ウヴァは無言を貫くが、こちらに近寄つて来る辺り了承したのでらう。だがアंकは面倒臭い態度をとつてるが、オーズの交換条件に舌打ちしながらもしぶしぶこちらに近寄る。

「今瓦礫を退かしますから、もう少しだけ耐えて下さいっ」

「うう…！痛えツ…！」

老人に声をかけてながら、オーズは崩れないように慎重に瓦礫を退かし始める。ウヴァとアंकも手伝うが、老人の態度とわざとらしい発言を聞いたアंकは不服そうに舌打ちした。

「…チツ、演ー」

「アंकツッ！」

『演技』と言うワードを言い掛けたが、オーズの叱りつけるような一声に黙り込む。

「火野、俺も手伝うよ！」

「ありがとう尾白君」

「わ、私も！」

「ウチも…！」

率先して動いたオーズ達に、気を取られた尾白はハツとして瓦礫を持ち上げる。葉隠と耳郎も手伝おうとするが、オーズはそれを止めた。

「ここは俺達で大丈夫！耳郎さん、個性で辺りの状況を確認して

欲しいんだ。まだ他の場所にも怪我してる人が残されてるかも、葉隠さんもそつちに周ってくれると助かるんだけど…」

「わ、わかったよー!」

オーズの指示に葉隠は了承する。瓦礫を退かすのは女性の力では無理だと遠回しに言われているがそれが現実だ。

そして、耳郎は「う、うん」と頷きオーズを見遣る。慎重に救助活動を行いながらも、オーズは常に被害者の老人に声を掛け続けた。た。

そんな彼の姿を見つめていると、やはり面倒臭くなったのか、瓦礫を捨てながら耳郎に声を掛けた。

「全くお人好しな奴だ…」

「え?」

「あの馬鹿は自分を犠牲にして他人ばかりを気にする…。命懸けで…」

「それって…」

アंकの発言に耳郎は尋ねると、自分の発言を気にしてアंकは目を泳がせながら、オーズを見つめて言った。

「あいつはオーズとしての素質も実力もある。…だが、目の前にいる人間を救ける為ならそれ以上の実力を持つてる。どんな奴でも手を伸ばす…。それが映司だ」

No. 111 その者は飾られる

仮免許取得試験 // 第二次選考”。

一次選考で使われた様々な要素を取り入れたフィールドは、サイラン敵による大規模事故^テが発生し、荒れ果てたフィールドと化した想定内容^{シナリオ}から救出活動を行う試験。消防・警察が到着するまでの間、その代わりを務める権限を行使する事ができ、スムーズに橋渡しを行えるよう最善を尽くすのが重要となる。ヒーローは人々を救ける為にあらゆる場面をこなす必要がある、何より恐怖と苦痛で不安な市民に勇気付け、救い出さなくてはならない。

「救護所は控え室で！」

「だいぶ広いぞ！一時救出場を設定しよう！」

「トリアージはとりあえず私やります！」

状況を把握した他の候補生達は連携を取り合い、重症の負傷者を匿える安全な場所を作り始める。そしてトリアージとは、負傷者の重症度に応じて治療の優先度を決める係でもあり、その準備は着々と行われていた。

「もう大丈夫です！今、安全な所へ運びますね！」

「ああ…、すまないな…」

救助者を瓦礫から救い出したオーズは、老人を慎重に抱き抱えながら声を掛ける。老人は礼を言っつて頷き、オーズの対応を観察して無言でコクコクと再び頷いていた。

「火野、向こうにも人が居るよ！数は…2人！」

「わかった、葉隠さん、尾白君、ウヴァ、アंक！俺はこの人を安全地帯に運ぶから、耳郎さんに従って救助者を見つけてくれるツ？」

「まっかせてー！」

「わかったー！」

「ああ…」

「チツ、まだいんのか…」

イヤホンジャックで位置を把握した耳郎の知らせにオーズは頷き、

その場に居た4人に任せてオーズは救助者を抱えてその場を後にする。

瓦礫と化したビルから出ると、他の候補生達が連携を取って救出場を作っていた。1人の候補生がオーズの存在に気付くと、声を掛けてくる。

「君！その人は…!?!」

「あ、はい！要救助者です、足を負傷していますけど意識は正常で会話もしつかり出来ています！」

「わかった、とりあえず俺達がその人を引き受ける」

「助かります！じゃあ俺は他に取り残された救助者を見つけますので！」

「ああ、頼む！」

救助者を引き渡したオーズは礼を言つて尾白達がいる場所へ戻ろうと振り返る。すると、こちらに向かって子供を抱えた緑谷が走って来ていた。

「あ、火野君っ！」

「緑谷君！その子は？」

「近辺の瓦礫の側で見つけたんだっ。今から安全な場所へ送り届けるところ！」

緑谷に抱えられた子供は頭から出血しており「うう…ひぐっ」と泣いて怯えていた。すると、1人の女子生徒が近付き、「見せて！」と声を掛ける。

「頭から出血してるわね…重症度が酷い救助者は控え室があつた場所に連れて行かなきゃ！」

「じゃあ僕がこのまま運びます！」

指示を受けた緑谷はそのまま抱えて目的地へと駆け出す。オーズは何か言いたげに手を伸ばそうとするが、今はやるべき事が残っていると我に返り、緑谷に背を向ける。

「(緑谷君…)」

「(火野君…)」

「(お互い頑張ろう！)」

声に出さず、互いは背を向け合つてそう思い、やるべき事を成す為に駆け出した。仮免許取得の為、そして多くの市民達を救い出す為に、その足を、手を少しでも伸ばそうと前へと進んだ。

☆☆☆☆☆☆

「もうすぐ安全なところだからね」

「ううっ……えぐ……」

指示を受けた場所へと走って向かう緑谷は、控え室だった場所へと到着する。そこには、既に他校の候補生達が救出場として使われており、要救助者が大勢運ばれていた。

「もうこんなに…!？」

「!君!その坊や見せて!」

「あっハイ!」

先に来ていた候補生がトリアージをしていたのか、緑谷に声を掛ける。緑谷はゆっくりと子供を下ろしながら容態を説明した。

「頭怪我してます、出血多いけどそんなに深くないです!受け答えはハッキリしてます!」

「……………うん!じゃあ右のスペースに運んで!」

子供の容態を確認した候補生はそう応え、緑谷は「はい」と頷いた。

☆☆☆☆

「怪我人のふるい分けに応急処置…。救急隊が来るまでの僅かな時間、その代わりをヒーローが勤め…。そして円滑な橋渡しをできるようにしておく……」

候補生達が試験に全身全霊で務めている中、薄暗い空間で、一際体の大きな男が独り言のように喋る。

そして視点は変わり、フィールド全体を見渡してモニターをチエツ

クしている目良にその男の通信が入った。

『調子は?』

「初動はまア…至らない者も多いですが…それでも HUC^{フック}の皆さんが下す減点判断は想定してたのより少ないです。概ね良いんじゃないですかね」

『フン! 最近の HUC^{フック}の連中は審査が甘エんだよ! プロを目指すなら人一倍努力した真つ当な奴らに絞るべきだろが!』

目良が報告した直後、通信を入れた男とはまた別の荒々しい声の男が割入るように口出しする。

『相変わらずうるさい奴だ、このご時世 敵が活性化^{サイラン}した時代にヒーローが手薄なのは貴様も知っているだろ? 視野を多く、未来を見据えての判断をしてきてると言うのに貴様は…』

『あア!?!』

「あのくすみません。喧嘩なら他所でお願いしますか。貴方達はこの後大事な役としての仕事なので、そこは弁えて下さいよ…?」

通話越しで揉め事になる男達に目良は面倒くさそうに言つてフオーする。2人の男は沈黙してしまうが、それは了承したと捉え、目良は続けてモニター画面をチェックし、口を開いた。

『じゃア、合図したら襲撃して下さい…』

☆☆☆☆

「…よし、耳郎さん他に救助者は!?!」

「…:大丈夫、今のところこれで全員!」

要救助者を救け出したオーズは、他にいないかと耳郎に尋ねると、イヤホンジャックで探っていた耳郎はそう言つて地面からプラグを抜いて立ち上がる。

「ここら一帯は全員救い出せたみたいだね」

「火野君凄いな！あんなに正確な指示出せるなんてビックリ！」

尾白も一息を入れ、葉隠は的確に動いていたオーズを褒めると、オーズは口を開いた。

「ありがとう。なんか、自然と頭と体が動いちゃって…。それより、他の区域も調べてみよう。まだ取り残されてる人が残ってー」

BOOM…！BOOOOM…！！

瞬間、何処かで爆発が起きたのか2回程鳴り響く轟音と地響きがオーズ達の地面を迸る。

「うわっ！」

「何だ!?爆発!？」

「しかも連続…!？」

爆発に驚く尾白達。瓦礫の高い場所にいたアंकはその方角を見ており、気付いたオーズが声を掛ける。

「アंक、何か見える!？」

「さっきの待機してた場所の近くで2箇所爆発が起きてるな…。…：…ほおオ…：どうやらこの試験、ただ人間を助けるだけじゃなさそうぞぞ」

「え、どういうことだよ…っ」

何か理解した様子でオーズに伝えるアंक。オーズはその言葉の意味に疑問を抱くが、同時に試験が始まった時の目良の説明が頭を過る。

「これも演習の想定内容…!？」

『敵が姿を現し追撃を開始！尚、指揮を取る敵は2名確認されています！現場のヒーロー候補生は敵を制圧しつつ、救助を続行して下さい』

オーズがそう言った直後にアナウンスが流れる。想定内容通りの演習なら、大規模破壊の発端となる敵が出て来てもおかしくはない。HUCを救うばかりに気を取られたオーズはこの出来事に冷や

汗を流し戸惑っていると、俯き加減で下を向いていた耳郎は決心した
みたく小さく頷くと、オーズに声を掛けた。

「火野、あんたは追撃に行つて！」

「え…、いやでもっ、他の市民が」

耳郎の言葉に反応するオーズ。取り残された HUC^{フツ}がまだ沢山
いる。そう思つて渋るオーズに葉隠と尾白が自信気に言った。

「ここは私達で何とかするよ！」

「そうだな。オーズの “個性” のお前なら^{ヴァイラン}敵に対抗する術を幾つも
持つてる。火野が行つてくれたら絶対食い止めれると俺は思う！」

「皆……」

背中を押されるような発見にオーズは受け入れ「うん！」と強く頷
く。すると、ウヴァに向かつてオーズは口を開いた。

「ウヴァ！耳郎さん達と一緒に救助にまわつてほしい！」

「は？何言つてやがる。敵が出たなら俺も行くぞ、暴れる絶好の機

会だ！」

^{ヴァイラン}「敵は俺とアंकで何とかする！お前は少しでも救助者を助けに……」

「断ると言つてるだろが！」

本心をぶつけるようにオーズに叫ぶウヴァ。無言で救助を手伝つ
てはくれたのだろうが、内心は嫌々で仕方なく、だったのだろう。だ
が時間は待つてくれない。言う事を聞かないウヴァにオーズは唸り
声を上げて人差し指を突き出した。

「ウヴァ、家庭用のプラネタリウム[？]知ってる？」

「ム……家庭用……？」とウヴァは耳を傾ける。

「ああ、自宅の中で……そりやもう堪らないくらい最ツ高の絶景が見れ
る物があるんだ。ソレ、欲しくない？」

興味があるその素振りにオーズは続けて交渉すると、ウヴァは一度
辺りを見渡しながら興奮していた気持ちを整える為にゆっくりと息
を吐く。

「……忘れんじゃねえぞ？」

「決まり！行こうアंक！」

「フン……」

承諾したウヴァを見てオーズは直ぐにアंकに声を掛けてその場を跳躍する。ウヴァを見ながら鼻を鳴らしたアंकは、ヴァイラン敵が出現した方角へと向かうオーズの後を追って行った。

2人の背中を見送る耳郎達。すると、ウヴァは耳郎に声を掛ける。

「耳女、埋まつてる人間共はどこだ。直ぐに教えろ」

「耳郎!!言つとくけど、火野がないからってサボるのはナシだから」「わかつている。…ククク、ぶらねたりうむが、俺を待っているからな…さっさと案内しろ!」

えらくやる気に満ち溢れているウヴァ。アंकのアイスの件といい、こども単純な生き物なのかと耳郎、尾白、葉隠はウヴァを見つめてそう思っていた。

☆☆☆☆☆☆

「ハッ!人間をちまちま救けるより潰しがいがあるこっち戦闘の方が断然楽だなア」

「お前爆豪君みたいだな…」

「あんな奴と一緒にするな!で、どっちに向かうんだ映司?」

ヴァイラン敵が出現した方角へと向かいながらアंकは尋ねる。フィールドの壁が破壊されたのは救出場となってる控え室の両サイド少し離れた場所。オーズ達が向かっている方角路は右サイドだ。

「右の方!飛ばすよアंक!」

「フン、誰にモノを言ってる!」

脚部に力を入れて強く踏み出し速度を上げるオーズ。アंकもそれに負けずと後を追いかける。そして、目的の場所へと到着すると、会場の壁が抉れており、土煙の中から人影が動いているのを確認してオーズは身構えた。

「…フン！随分とヒーローらしい格好の奴が来たな？俺の相手をするのはお前かア!？」

「…あ！貴方は、プロヒーローの『シシド』!？」

土煙から晴れ、敵の姿を目視したオーズは驚く。

ライオンヒーロー シシド。

『ライオン』の『個性』文字通りライオンっぽい事は何でも出来る『個性』。その見た目も似せているのか哺乳類の牙を模したマスクや首飾り、毛皮のような分厚いマフラーを着込んでいる。小柄にして威厳を放っている風格で、彼はヒーロービルボードチャートJP第二次15位の上位に匹敵する野生溢れるヒーローだ。

「凄いッ本物…確か『敵』っぽい見た目ヒーローランキング』は上位の第4位…」

「詳しいな！だが今は本物の敵だ!!死ぬ気で来ねエと死ぬぞお!!」

近頃ニュースで見た記憶を辿ってオーズは呟くと、シシドは声を張り上げ思い切り地面を踏む。同時に後ろに大きく振り上げる右腕にオーズは感付き、横へとジャンプして避ける。

「うわつととッ!？」

振り翳した拳はブオン！と空気を押し除ける音がしていた。シシドはオーズを睨み付けており、それは獲物を見つけ機を伺うライオンそのものの眼をしている。プロの威厳か、本気で食い殺そうとしている獣の殺意か、目の前の敵に肝を冷やすオーズに、近寄ったアंकが声をかけた。

「フン、随分とライオン染みた見た目をしてやがるな」

「そりや、プロだからな…『個性』もライオンでカッコいいし…」

「ライオン…百獣の王の名を持つ動物…か。なら、こっちもその名に相応しい…いや、それ以上のメダルで格の差ってヤツを見せつけてやるか。映司、このコンボで行け！」

シシドを観察し、アंकはオーズに2枚のメダルを投げ渡した。

「おっとーよお……し……」

受け取ったオーズは意気込みを入れてそのコアメダルを確認する。

「……………」

「……おい、どうした?」

だが、オーズは何故かメダルを取り替えずにジツとコアメダルを見つめていた。アंकは気になって声を掛けるが、同時にシシドも何もしてこないオーズに声を掛ける。

「どうしたア!? 何もしてこねえならこつちからやんぞ!!」

「なっ!? おい映司!」

両腕を後ろに振り上げながら飛び出すシシド。立ち尽くして何もしないオーズにアंकは急いで駆け出した。

瞬間、オーズはシシドに向かって顔を上げる。そして、同時にアंकは異様な気配を感じ取った。

「!?」

「さつきからうるさいよ。その猫」

直後、オーズは呟くように言った瞬間、シシドに向かって駆け出し、シシドよりも低い体勢にしゃがみ込むと拳をシシドの懐に向かって叩き込んだ。

「ぐおっ!」

持ち上げられた体は宙に浮き、そのまま勢いよく上空へと飛んでいき離れた場所へと落下する。オーズは殴った拳を痛かったのか振るい、首を傾けてゴキゴキと音を鳴らし始める。

「ま、まさか……!」

アंकはそのオーズを見つめて、驚愕した顔をしていた。それは、そこにいるのは火野ではないと、そんな顔をしながらアंकはオーズに問い掛ける。すると、オーズはアंकの顔を見つめてその口を開いた。

「…やア、久しぶり…アंक。相変わらず変わらないね君は…」

「ッ!? その喋り方…、お前…『カザリ』だな…!」

独特な喋り方に指先を擦るような仕草をするオーズ。直ぐにそれが同じグリードであるカザリだと確信する。オーズは「フフ…」と静かに笑うと、アंकから受け取ったライオンとチーターのメダルを見

つめながら口を開いた。

「それより感謝するよアंक。わざわざ僕のコアメダルを渡してくれ
るなんて…どうやって奪い取ろうか考えてたんだけど、お陰で手間が
省けた」

メダルを見つめて不気味に笑っているように見えてしまうその仕
草。情報量が多過ぎなのかアंकは強く舌打ちをして睨み付けてい
た。

なんでカザリが？

何故このタイミングで出て来た？

ウヴァと同様にまたしても火野の中から突然現れた？

奪い取ると言うことは前から存在していたのか？

「…クソツツ！最悪だ。こんな大事な時に…厄介な奴が復活したもんだ
なア…！」

「君にだけは言われたくないね、アंक」

一旦考える事を吐き捨てるように悪態吐くアंक。だが気分はド
ン底に突き落とされるみたく落ちる一方だった。

No. 112 一か八か最後の手段

「ギャングオルカ！」

「さて…どう動く!? ヒーロー！」

突然の爆発によって現れた敵達。

シンド単体で出現した右サイドとは別で反対側の左サイドから出て来たのは黒のボディスーツを着ており、仮面とプロテクター、そして右腕には遠距離攻撃が出来そうなサポートアイテムを着用しており、その中心に君臨しているのが緑谷が言っているプロヒーローの『ギャングオルカ』。

白いスーツを着た人型のシャチのような容姿で、ヒーロービルボードチャートJPでは10位、こちらも上位のランキングに立つ実力者だ。

「戦うか、守るか、救けるか…逃げるか!? どうするヒーロー！」

「…ッ！」

敵^{ヴァイラン}っぽい見た目ヒーローランキング第3位だけあって、その威厳はまさに敵^{ヴァイラン}そのもの。すぐ側には救出場となっているエリアで要救助者^{フック}のHUCの人達が動けずにいる最悪の状況。だが、そんな状況下でも、緑谷はまつすぐギャングオルカを見つめる。逃げるという選択肢など毛頭無い視線で身構えていた。

瞬間、その横を勢いよく駆け出す者が現れる。

「皆を避難させろ！ 奥へ！ 敵^{ヴァイラン}から出来るだけ距離をおけ！」

「真堂…さん！」

救出場に居たのか傑物学園の真堂が突っ切り、敵^{ヴァイラン}達の前へと立ち塞がる。一次選考とは違い、今はお互いを支え合うヒーローとしての彼の背中を見て、緑谷は信じてその場から手を引き、HUC^{フック}の人達の移動へと専念する。

「インターバル1秒程の震度でたたまかける！」

両手を地面に当て、真堂は“個性”を発動する。揺れ挟れた地面にギャングオルカの部下である相棒^{サイドキック}達は体勢を崩しているが、それを

諸共せずギャングオルカは真堂に詰め寄った。

「温い」

瞬間、ギャングオルカの頭部から超音波らしきものが放たれ、キン!!と耳鳴りが起きそうな高音が鳴り響く。それを諸に食らった真堂は白目を向いて膝を付いていた。

ギャングオルカ

個性『シヤチ』

シヤチっぽいことが陸上でも出来る!

その内の一つ! “超音波アタック”で、相手を麻痺させる!

「この実力差で、殿一人…?なめられたものだ…!」

例え強力な“個性”を持ってしても、相手は格上、プロの領域の存在。経験値も天と地の差とも言えるギャングオルカ相手に一人だけで挑んでも時間稼ぎにもならない。それを見せつけるギャングオルカに緑谷は前線に加勢しようと足を踏み留めたその時。ギャングオルカの横から凄まじい勢いの氷結が繰り出される。

一瞬早く勘付いたギャングオルカは腕を振るって氷を砕きその攻撃を防いでいた。緑谷はバツと振り返ると氷結の先には轟が立っており、その付近から常闇と芦戸がこちらへと駆けつけていた。

「緑谷!手伝う事ある!」

「皆!どこいたの!」

「向こうの水辺付近!皆、街の方へ向かったから別の場所に向かったの! 敵が現れたって聞いて応援に来た!梅雨ちゃんらは向こうで救助続けてるよ!」

芦戸が息を整いながら説明すると、常闇が続けて口を開いた。

「此方と反対側にも大規模事故を招いた敵が現れた。火野がその敵と交戦しているのを目視し確認。彼方は単体の敵で、火野にはアंकも同行していた。向こうは任せて数の多い此方に加勢したのだが…どうする、緑谷」

オーズとアंकがシンドを押さえようと報告を受けると報告を受ける緑谷は一度考え込む。そして「救助の人達を避難させよう！」と指示を出した。加勢しに行った方が良いのだろうが、オーズの実力は雄英でも随一。アंकも居るのであれば、冷静に対処出来ると判断し、緑谷は今やるべき事を全力で行動に移したのだった。

☆☆☆☆☆☆

同時刻、耳郎達と救助活動を続行していたウヴァは、オーズ達が向かった爆発現場から異様な気配を察知したのか、ウヴァは急に立ち上がりオーズとアंकが向かった方角へと振り返る。

「どうかした？」

「…………この気配…………まさか…!？」

感じた事のある嫌な気配。有り得ないと思っていた表情が徐々に深刻な表情へと変わっていくウヴァは、焦りを感じてオーズが向かった方角へと足を踏み出した。

「ちよ！あんだ、まさか火野のとこ行くつもり!？」

「嫌な気配がするんだ、この目で確かめないと気が済まない」

「待って！」

「何だ!?今人間如きを救う場合じゃない！」

「あんだ、火野に言われた事忘れたの!？」

直ぐにでも飛び出しそうにしているウヴァを必死に止める耳郎。それでも「知るか！」と一点張りに拒むウヴァに耳郎は続けて口を開いた。

「火野とアंकが今頑張つて敵を止めようとしてくれてる！で、あんたはここでウチらと救助をしろって言われたんだろ？だったら、今は火野を信じてウチらとやるべき事をやろうよ」

「信じる…？フン、そんな感情グリードの俺には無い」

「もオ、いちいち面倒臭いなア！だったら今から思えば良いだろ！あ

んたはもう火野の仲間なんですよ!？」

「ッ…」

痺れを切らした耳郎の怒鳴り声にウヴァは黙り込む。

神野区の一件以来火野と共に行動し、互いを助け合うと制約したウヴァ。どうでもいい雄英に通う火野に同行したり、助けたくもない人間を救けるのは性に合わないウヴァだが、その見返りはきちんと火野は返してくれている。グリードには無かった人間の五感を初めて実感させてくれたのも事実だ。

「耳郎ちゃん！見つけたよ、こっち！」

ふと、葉隠が要救助者を発見したのか耳郎に声を掛ける。耳郎は「今行くー」と応えた後、ウヴァに向かって口を開いた。

「どうしてもって言うならウチはもう止めない。後はあんたが決めて」

耳郎はそう言い残して葉隠のもとへと向かう。残されたウヴァはいつの間にか握り拳を作っており、それを確認すると「チッ」と舌打ちしながら振り払う。そして、オーズの居る方角を見つめた。

「気が進まないが…：映司なら…問題無いな」

ふとした瞬間、昂っていた気持ちがおさまっていた。耳郎に言われた言葉がきつかけとなったのだろうか、それは自分にもわからない。理由はどうであれ、今成すべき事をやる為に、ウヴァは振り返り、耳郎達の後を追った。

☆☆☆☆

「…成る程なア、この試験が始まる前に微かに感じていた気配はお前だったのか、カザリ。…：で、いつから復活していた？コソコソと映司の中に潜んでたのか？」

「別に、そんな事どうでも良いでしょ？まアでも、復活したのは教えて上げるよ。この仮免許取得試験つてのが始まる前くらいかな：ちようどバスつて自動車に乗ってる時」

「：ハッ。俺やウヴァも映司の身体の中にいたんだぞ？なのに気配すら感じなかったが？」

「生憎、身を潜めるのは得意な方だからね」

「フーン！その臆病な性格も健在な訳だなア」

「慎重、と言ってほしいな」

煽るような口調にピクリと反応しながら訂正を求めるオーズ。その動きや口調はグリードのカザリそのもので合つて嫌悪する表情を浮かべるアंक。

「あの時、僕は確かに王に裏切られて取り込まれた：。けど何故か復活した。なのに復活した瞬間、君のオーズの中にいたんだよね。しかも前の世界とは違う別世界に：」

自身の腕を見つめながら喋り出すオーズ。警戒を怠らずに身構えるアंकだが、オーズの言葉に耳を傾けていた。

「最初は僕も驚いたよ：。アंकはともかく、どう言つた風の吹き回しか知らないけどあのウヴァも一緒に行動しているんだからね。だから君とウヴァがオーズの中からいなくなる機を伺っている間に、このオーズの記憶を少しだけ調べていたんだ。お陰で多少はこの世界の事を理解する事が出来たよ。変な世の中だね、個性”って言う能力に恵まれた人間がうじゃうじゃいるのだから」

「：フン、まアそこは否定しないな」

オーズの言葉に渋々同意するアंक。すると、先程オーズが殴り飛ばしたシシドが、瓦礫の中から勢いよく退かして起き上がる。

「いってエなア：！フーン！やるじゃねえかそのヒヨツ子！」

「あれ？結構本気で殴つたつもりなのに、随分とタフだな君」

起き上がったシシドにオーズは少し驚いた様子でそう言うと、アंकに振り返り口を開いた。

「どうするアंक？一応僕も大体試験の内容は把握してるんだ。ここは一度手を打たない？」

「あ？」

「簡単な話さ、この試験に協力してあげるよ。その代わりに、君の持つて
いるコアメダルを全て渡してくれればいい……」
「!?」

両手を広げ、そう言つて交渉を求めるオーズ。今は2次試験の真っ
最中で、ここで立ち話をして審査している人に見つかつてしまえば、
減点されてしまうのも時間の問題だ。今カザリの提案を了承すれば、
少なくとも試験には合格出来る確率は上がるのだろう。

だがアंकは、「フーン！」と鼻を強く鳴らす。

「断る！お前がゲスな奴で何か企んでるのは見え見えなんだよ」

「あつそ……じゃあ、この試験で僕が暴れても問題無いって事で良い
んだね？」

「そんな事させるかッ！」

アंकは言い放つと同時にグリード化した右腕を突き出し、オーズ
に向けて炎の球を飛ばした。オーズはそれを横に避けると、両腕に力
を入れてトラクローを展開し、刃先を擦り合わせ、金属音を響かせな
がら身構え口を開いた。

「後悔してももう遅いからねアंक……。どのみちコアメダルは君から
奪い取れば済む話だよ！」

そう言つてオーズは強く地面を踏み込み駆け出した。刃先は地面
に食い込み、削りながら一気に間合いを詰め、アंकの顔面目掛けて
トラクローを振り上げる。勢いよく仰け反つてアंकはその刃先を
ギリギリで避けるが、オーズはくるりとその場で横に回転し、勢いを
付けた飛び蹴りを懐へと直撃させる。

「うぐっ!?」

重い衝撃が走り、疼くまるアंकに追撃をせんとオーズはもう一度
蹴りを叩き込み、アंकを吹き飛ばす。

「ぐあっ!!」

「!?おいおいおいちよつと待て！敵を目の前にして何喧嘩し始めてん
だてめエら!?試験の事を忘れたのか!？」

「……よく吠える猫だなあ。君、ライオンの“個性”なんでしょ？同じ

類なんだろうけど、全然興味が沸かないな」

仲間同士で戦闘を始めるオーズ達に怒鳴り声を上げるシンド。オーズは振り返りシンドにそう言いながら腰を低くする。

「良い機会だから教えてあげるよ。ライオンってのはこうやって吠えるのさ…ハアツ!!」

オーズは腕を交差し、その腕を勢いよく振り払うと凄まじい砂塵を纏った渦を巻く風が巻き起こる。その突風はシンドに直撃し、辺りに散らばった瓦礫事、宙へと浮かせた。

「うおおア!!」

シンドはそのまま吹き飛ばされ、落下し土煙が舞う。それを見てオーズは「フフ…」と不敵な笑みを浮かべると、反対側に吹き飛ばしたアंकが翼を広げて飛翔し、オーズ目掛けて突っ込む。

「ハアツ！」

「!?」

滑空しながらアंकは炎の球を放ち、オーズの背中に命中させる。怯むオーズだが、小さく溜息を吐きながら迫ってくるアंक目掛けて砂塵を纏った突風を食らわせる。

「うっ…うあア!!」

気付いたアंकは広げた翼を防壁の様に身を包ませ防御態勢を取ったが、勢いが凄まじくアंकは吹き飛ばされ、地面へと落下した。そして、その衝撃に所持していたメダルホルダーが飛ばされ、オーズの付近へと落ちる。

「フフフフ…貫うよ」

「ぐっ…!?」

拾い上げたオーズはメダルホルダーを開けて中を確認する。そこにはサゴーズとシャウタのメダルが3枚ずつ入っており、残りは空白とセルメダルが裏面に入っていた。オーズはそれを見て小さく溜息を吐きながら、そのコアメダルだけを全て抜き取り、アंकに文句を垂れる。

「これだけ…？僕のメダルはもう無いの？」と言いながらオーズはメダルホルダーを投げ捨てた。

「知るか！俺以外は3枚だけしか無い！返せ！」

「嫌だね。……ふうん、じゃあ君からもメダルを貰おうかな」

「素直に渡すわけないだろ！ハアツ！」

立ち上がったアंकは直様右腕を突き出してオーズに向けて炎の球を放出する。顔面目掛けて飛んで来る炎の球をオーズは首を傾けて避け、そのまま地面を踏み込んで飛び出す。再びアंकに間合いを詰めたオーズはトラクローを振り上げ、アंकの胴体に直撃させた。「ぐああっ!!？」

諸に食らったアंकは苦痛の声を上げ、そのまま後方へと吹き飛び、斬られた部分からセルメダルを散らばせながら地面へと落下し転がり込む。

すると、オーズは自身の両手を見つめながら静かに高笑いし出し、口を開いた。

「オーズの力、凄いな……！それに感じた事の無い景色の色……鮮麗に聞こえる耳……そして匂い……！それ等を体に伝わってくるのを感じる……！とても最高の気分だ……今なら完全体じゃなくても、僕は強い存在になれる……!!」

「ぐっ……！クツッ……！！」

アंकの攻撃が多少は通じるとは言え、オーズの能力によって研ぎ澄まされた五感を身に付けた力ザリは恐ろしく強い。コアメダルを盗られた上に映司も恐らく精神の中へと意識を閉じ込められている以上、成す術が無くなったアंकはどうすれば良いかと目の前に立つオーズを前にして考えていたのだった。

☆☆☆☆

「おい、イレイザー。お前のところの生徒、めちやくちや喧嘩してないか？大丈夫かあれ」

同時刻、候補生達が試験を受けている中、観客席で見学していたM s. ジョークが近くに座っていた相澤へと声を掛ける。それは相澤も同じで、オーズとアंकが交戦している様子を見て、彼は顔を曇らせていた。

「試験の最中だったのに何やってんだアイツら……！」

教師として数ヶ月火野を見てきたが、普段火野は穏やかな性格で他人に危害を加える事など有り得ない。一方でアंकは喧嘩越しの性格をしているが、冷静さは火野以上でよっぽどの事が無い限りは彼もまた有り得ない話だ。何か様子がおかしいと相澤は違和感を覚えながら見つめていた。

☆☆☆☆☆☆

「……あれ……ここは……？」

意識を失っていた火野は目が覚めると万華鏡のように輝く空間をふわふわと宙に浮きながら漂っていた。その感覚は身に覚えがある火野は直ぐに理解し、ハッとする。

「まさか、グリードの誰かが出てきたのか……!？」

ウヴァと同じ様に、目覚めた瞬間に精神が入れ替わった感覚を思い出した火野は確信し顔を上げる。

「ウソだろ……! 試験の真っ最中だろ……!？」

現実の状況を思い出す火野は焦り、どうにかして外に出れないかと辺りを見回す。だが出口らしいものなど当然見当たらない。何か方法は無いかと必死に考えていると、何か思いついたのか目線を下に背ける。

「……あの、紫のメダル……！」

ウヴァと入れ替わる事が出来た唯一の方法。だが、アレを使ってしまえばアंक曰く暴走してしまうデメリットがあった。今紫のメダ

ルを使用したとしても、暴走し、辺りの人達を全員敵と見做して破壊の限りを尽くすだろう。困惑する火野だが、首を左右に大きく振り顔を上げた。

「いざとなったらアंकが…いや、暴走を制御出来たら、何とかなるかもしれない！」

アंकに頼ろうとする欲を再び首を振って否定する。

残された可能性はこれしか無い。

暴走を制御出来るのなら、その選択肢を選び実行するのみ。火野は一か八かの手段に賭け、覚悟を決める。するとそれに応える様に、火野の目の前に紫色の光輝く3枚のコアメダルが現れた。

☆☆☆☆

「…ん？………うっ!？」

オーズは違和感を覚え、自身の胸に視線を向けると、突然痛みでも走ったのか顔を上げる。赤色だったそのタカアイは紫色へと変化していた。

「何…!？」

「…ツ！まさか…!」

突然来る身体の異変に困惑するオーズ。そしてそれを見ていたアंकは、その異変が何なのか直ぐに理解し、冷や汗を流す。

瞬間、オーズから溢れんばかりの紫色のオーラが放たれ、憑依していたカザリがグリード形態となって放り出された。

「うあッ!!」

転がり込むカザリだが、アंकはオーズから目を離さなかった。何故なら、オーズの胴体から3つの紫のコアメダルが飛び出されていたのだから。

「映司よせっ!!」

阻止しようとアंकは手を伸ばし、叫ぶ。だが、それは届く事無く、ドライバーに装填されていたタトバのメダルを押し退ける様に紫のメダルは自動で装填され、勝手にオースキャナーが飛び出してドライバーへとスキャンされた。

プテラ!

トリケラ!

テイラノ!

プ・ト・テイラーノ・ザウルーウス!!

禍々しい音声が鳴り響くと同時に、オーズの足元から冷気が発生し、その氷結は地面へと伝って迸る。

「ッ!?クソー!」

「ちよっ!」

広がっていく氷結にアंकは飛び退き、カザリも体勢を立て直して距離を取る。侵食していく氷結はやがてピタリと止まると同時に中央にいたオーズは雄叫びを上げた。

「ウオオオオオアッッ!!!」

咆哮と衝撃波が地面を凍らせていた氷結事破壊し、辺りへと散らばっていく。それと同時に3枚のタトバのメダルも飛ばされていた。「!?くっ!」

それを見逃さなかったアंकは宙を舞うコアメダル目掛けてジャンプする。だが、それはカザリも一緒だった。互いに空中で交差し、

同時に着地する。

「カザリ……」

「……コレだけか……まあ仕方ないし、予想外だよ。まさかあの僕の嫌いなメダルまで持つてるなんてさ……」

カザリは手に持っているトラのメダルをアंकに見せながらオーズに視線を向ける。アंकも自身の手の中を確認すると、キャッチ出来ていたのはタカとバツタの2枚だけだった。しかし、カザリが火野から離れたとは言え状況が芳しく無い。寧ろ焦りと恐怖を感じていた。

目の前でこちらを睨み付けている「プトティラコンボ」のオーズが立ち塞がっているのだから。

カザリを身体から分離させようと、決死の覚悟で火野はプトティラコンボへと姿を変えた。その作戦は成功し、オーズの身体からカザリが放り出されたのだが、それを観客席から見ていた相澤はオーズの姿を目視してバツと席から立ち上がった。

「どうしたイレイザー？」

「…マジで何やってんだあいつ…?!正気か…?!」

始めてプトティラを目にするその姿はとてもヒーローとは思えない凶悪感を示しており、低い姿勢でアंकとカザリを睨んでいる。相澤は血相を変えて捕縛布を手に取り、足を踏み出そうとした。

だが、ピタリとその場に立ち止まる。その瞬間相澤は、塚内警部と話していた会話を思い出していた。

それは、神野区の事件以降の出来事だった。

『相澤君、もし火野映司君が紫色の姿に変身して、見境無く暴れ出したら直ぐに止めてほしい』

『…?変身してしまった直後じゃないんですか?』

『僕も最初はそう考えていたんだけどね。でも、彼は約束し、アंक君もいざとなれば止めると宣言してくれたからね…』

『お言葉ですが塚内さん、そんな呑気に…』

『責任は、僕が全てとるよ。…だから、もし制御出来るのであれば、その時は教師として見守って置いてくれないか?』

「……………」

思い返した相澤は、無言で捕縛布から手を退き、席へと座り込む。

「だ、大丈夫かイレイザー？」

「……今はな……」

突然の行動に驚くM.S. ジョークは相澤に声を掛ける。相澤は静かにそう応え、目線の先にいるオーズから監視する様に見つめていた。

☆☆☆☆

場所は変わり、プトテイラへとその身を変えたオーズ。姿勢を低くして、今にも飛び掛かりそうな態勢を取るその姿に、アंकは息を呑みながら警戒していた。

「…相手が悪いね。僕は一旦身を退かせてもらうよ」

「!?カザリ!!」

アंकが目を離れた隙に、カザリはその場から跳躍する。気付いた時にはもう遅く、カザリは途轍もないジャンプ力で瞬時にその場から離れ、会場の外へと逃げてしまっていた。

「ウウツ…!!」

「っ！クソ!!この大馬鹿が…!!」

今すぐにも追いかけてみたいアंकだが、目の前にいるオーズを放つては置けなかったのか、オーズを睨み付け悪態を吐き捨てる。その直後だった。

「オラアツ!!随分と派手な攻撃してくれたなア!?」
「!?」

オーズの後方から怒りを上げる声が聞こえる。アंकはそちらを見遣ると、先程カザリに飛ばされたシンドが全速力でこちらへと向かって来ていた。

「チッ！おい！今こいつに近寄るなっ!!」

今のオーズでは例えプロだろうと無事では済まないだろう。ましてや理性を失っているとすれば、その身の安全は保障されない。それを知らずに駆けて来るシンドにアंकは止めようと声を荒げた。

だが、そんな悠長な時間など与えてくれる筈も無く、オーズは気配を感じたのか迫るシンドへと勢いよく振り返った。

「ハアツ!!」

「!!」

瞬間、オーズは鼻から口にかけてを覆う強化外骨格から冷気をシンドに目掛けて放つ。初見攻撃のせい、シンドは腕を交差して防御を取るが、冷気は足元に当たり、一瞬にして下半身が地面事凍らされた。

「クソ、んだこりやあ?」

身動きが取れず苛付きが募り吠えるシンド。すると、オーズは息切れを起こしながらも咄嗟に両手を確認するように見つめる。それに気付いたアंकは駆け出した足を止め、オーズの方へと見遣った。

「映司!?!」

「ハア……ハア……アンク!大丈夫!!」

なんとオーズはアंकの方へと見つめ、自身が暴走していない事を言葉で伝えた。この一連の出来事でプトティラを制御出来たのだ。アंकは驚いた様子で目を見開くが、制御が出来たとわかった途端、オーズに向かって怒鳴り声を上げる。

「この馬鹿がつ!余計な心配と手間取らせやがって!」

「も、文句言うなよ!俺だって必死だったんだから!」

「チツ!制御出来たならさっさとカザリを追うぞ!メダルをこっそり持ってかれた!」

「事情は何となくわかってたけど……やっぱりウヴァみたいにグリードが俺の中から出て来たのか!?!」

オーズは言うど、続けて「けど……」と口を開く。

「今は試験中だから、それが終わってからな!」

「あ、おいつ!!」

緊急事態と言えど、試験はまだ終わってはいない状況。カザリの復活により、かなり時間をとってしまったが、本来やるべき事の仮免許試験を最優先にし、シンドを行動不能にしているのを確認したオーズは、ギヤングオルカがいる場所へ向かおうとする。

紫色の翼竜を模した翼を出現させたその直後、ビーツ!!とブザーが鳴るような音がけたたましく会場全体に鳴り響いた。

「うわっ!?!えっ!?!」

『えー、只今を持ちまして配置された全てのHUCが危険区域より救助されました。誠に勝手ではございますが、これにて仮免試験全行程終了となります!!』

「!?」

突然のアナウンスで終了を知らされ、これから挽回しようとしていたオーズは驚いた様子であたふたしていた。プロティラの姿で戸惑っているのは異様な光景だが、それどころでは無いアंकはカザリが跳んで行った方角を見遣る。既にカザリの気配は感じ取る事が出来ず、かなり遠くに行ってしまった事にアंकは強く舌打ちをした。

『集計の後この場で合否の発表を行います。怪我をされた方は医務室へ：他の方々は着替えてしばし待機をお願いします』

目良はそう言ってアナウンスを切る。試験を受けた候補生達は緊張していた心と疲れた体で深い息を吐きながら指示通りに行動を開始する。そんな中、オーズに凍らされていた氷が綺麗に砕け散り、シンドは動ける様になっていた。すると、耳に着用していた通信機から連絡が入る。

『だいぶ苦戦していたようだな』

「ああ?……攻撃を全て真つ向から受けてやっただけだ。それにこのプロテクター」が邪魔になった」

シンドはそう言って自身に付けている「拘束用」プロテクターを見る。かなりの重量と強力なバネでも仕込んであるのか、反発して思うように動く事が出来なかった様で、シンドは文句を垂れ流しながら、通信機のギャングオルカに口を開いた。

「あいつ……オーズの「個性」を持った火野映司だっけか?一応上のもんに報告した方が良さそうだな」

『……ほう?貴様が認めるとはな』

「違うわ!様子がおかしかつたんだよ!」

☆☆☆☆

「制御出来たあ!?! (ですの!?)」

「う、うん……何とか出来たみたい……」

試験が終了し、制服へと着替えた候補生達は結果報告を聞く為再びフィールドへと足を運んでいた。その間、A組達の中で切島、耳郎、八百万はオーズがプトテイラで自我を保つ事が出来たのを聞いて驚きの声を上げる。

「敵感が凄かったあの姿をコントロ^{ウイラン}ール出来たって事?」

「すげエー! それならもう敵無しじゃねえか!」

「流石火野君だ!」

耳郎、切島、そして飯田が火野を評価し、褒め称えていた。彼等は神野区で一度その姿と暴走していたのを目の当たりにした為、余計に制御出来た事に驚いているのだろう。火野は「あはは……」と苦笑するが、浮かない顔をして歩いていた。

「火野君?」と、俯向く火野に緑谷が声を掛ける。

「え、ああ……ごめんごめん。緑谷君もお疲れ様」

「あ、うんお疲れ様……。火野君も闘ってたんだね」

「うん、ちよつとだけね……」

「ちよつと?」

火野の言葉に疑問を抱いて尋ねると、火野は「いや、何でもないと行って誤魔化しながら、耳郎達の方へと見遣った。

「どうかなア……」

「やれる事はやったけど……どう見てたのかわかんないし……」

「こういう時間いっちなばんヤダ」

「わかる」

「わかる」

「わかります。人事を尽くしたならきつと大丈夫ですわ」

試験を挑み、結果報告にそわそわしながら緊張を紛らわせようとA

組達は話し合っていた。今ここでグリードが復活したと報告すれば返って心配や不安を思わせてしまうと考えた火野は、結果報告がわかるまで、その事件を胸にしまう事にした。第一カザリが介入した事により、アंकと対峙してしまった時間が恐らく審査の人達に見られてしまっている。二次選考が採点方式なら、火野が受かる可能性が極めて低い。火野は深い溜息を吐きながら、呆然とした様子で歩いていた。

そんな中、候補生達とは少し離れた場所で、アंकから事情を聞いたウヴァは驚いた様子でアंकに向かって口を開く。

「カザリの奴、やはり復活しやがったのか…」

「ああ、おかげでメダルが殆ど持っていかれた…!」

「コアメダルが!?! 貴様何してやがった!」

「あ? お前こそ一体何処でサボってた?」

「お前等がない間に俺は人間を救っていたんだぞ!」

「ほオ…? 律儀にこの試験の為に精を尽くしていやがったのか? こっちは酷い目にあつたつてのに、お前はえらく呑気にほつつき歩いていたらもんだなア?」

「何だと…!?!」

「フン! どのみち映司に取り憑いたカザリを止める所を審査している人間に見られた。この試験はもう落ちたも同然だろうな」

アंकはそう吐き捨て、苛々が治らないのか地面にあった小石を思い切り蹴飛ばす。カザリが復活してしまったお陰で試験どころでは無かったのだろう。完全に落ちたと言わんばかりな顔をするアंकを見て、影で人間を救っていたウヴァは腑に落ちない表情をしながら「クソ!」と悪態を吐いていた。

☆☆☆☆

『えー…皆さん、長いことお疲れ様でした。これより発表を行います』

が…その前に一言』

モニター画面が後ろにある壇上の前に、目良が立ち、マイクに向かって集まっている100名の候補生達に喋り出す。いよいよ発表される結果発表に、候補生達は不安と緊張の空気が激んでいる中、目良は続けて指を2本指し出しながら喋り出す。

『採点形式についてです。我々、ヒーロー公安委員会とHUCの皆さんによる、二重の減点方式であなた方を見させてもらいました。つまり危機的状況の中でどれだけ間違いない行動を取れたか審査しています』

その言葉に、火野の表情は曇っていた。自身の行いでは無いとは言えど、要救助者を救ける有無関係無くトラブルを起こしてしまった。それがプロとなったとして、実際に今日みたいな出来事があれば決して許される事では無い。

『とりあえず合格点の方は五十音順で名前が載ってます。今の言葉を踏まえた上でご確認ください…』

目良はそう言つて、モニター画面に手を向けると、そこには合格者の名前が画面一杯に並んで表示されていた。騒めく候補生達の中、自身の名前が表示されて喜ぶ生徒達の声上がる。対して雄英のA組クラスでは、「み…み…み…み…」と緑谷と峰田が必死に自分の名前を探していた。火野も受かつてはいないだろうなと半分諦めた様子で、恐る恐るモニター画面の一覧に目を向けた。

「……………え？」

思わず声に漏らしてキョトンとする。は行が終わった2列目の下に『火野映司』と名前が記載されていたのだ。

「あ…あった…!?!」

「あ？何言つてやがる映司、欲に塗れて幻覚でも見えたのか？」

「違う！ほ、ほら！あそこ！見て！」

興味を無くしていたアंकに火野は懸命にそう伝え、アंकは面倒くさそうに見遣る。ウヴァもつられてモニター画面を見つめると、名前があったのを確認したのか目を見開いていた。

「お…オオ！やはり俺が人間を助けたからだろ！」

「……ハッ。何だ、案外チョロいもんなんだなこの試験」

「そんなわけ無いだろ…でも、よかったア……」

トラブルを起こした筈なのに合格している事にホッと安堵する火野は、クラスメイト達の方を見つめる。まず先に見つけたのは緑谷で、声に出さずともわかりやすい表情で「!!」と驚いていた。

「峰田実! あったぜ!」

「あったア……」

「あるぞ!!」

「よし……」

「コエー……」

「麗日ア!!」

「フッ」

「よかった……」

「メルスイ!」

「あったぜ!」

「わー!!」

「点滴穿孔ですわ」

「ケロツ」

「やったー!」

「っしエーい!!」

「あった…けど」

「…ねえ!!」

次々とクラスメイト達は合格してあったのか喜びの声を上げていた。すると切島も見つけたようだが、心配そうに隣にいる爆豪を見遣る。爆豪はどうやら受かっていなかったらしく、名前が無い事に驚愕した様子で汗を流していた。

「……」

それは轟も同じで、名前が記載されていないモニター画面を黙って見つめていた。同時に気が付いた火野は、轟になんて声を掛けられないのかわからず戸惑っていると、「轟!!」と人混みを掻き潜ってこちらに迫って来る男、夜嵐に目が行った。ズンズンと轟に近寄り、その身

長相まって見下すように轟を見つめる。控え室でもいざこざがあったのを思い出していた火野はこれはヤバイ雰囲気では無いかと心配そうに見つめていると、それを掻き消す様に「ごめん!!」と夜嵐は地面に頭を打ちつける程の深々の謝罪をした。

「あんたが合格逃したのは、俺のせいだ!!俺の心の狭さの!!ごめん!!」
突然の謝罪に轟は若干目を見開いて驚いていた。言っている事から察するに、夜嵐も試験に落ちてしまったのだろう。すると、夜嵐に向かつて口を開く。

「元々、俺が蒔いた種だし…よせよ。お前が直球でぶつけてきて、気付けた事もあるから」

轟はそう言って謝罪を止めさせようとする。2人が何故落ちたのか、その原因が何なのかわからずにいた火野は、同じく心配そうに見つめていた緑谷へと尋ねる。

「轟君、士傑のあの子と何かあったの?」

「うん…試験中にちよつと喧嘩して…」

「大事な試験だと言うのに、揃いも揃って何してやがる」

「ああ?…フン、調子に乗るな虫ケラが」

「んだと…!?!」

「やめろ2人共」

事情を聞いた火野は驚いた様子で言葉が出せずにいると、ウヴァがアंकを見遣って嫌味つたらしく小さく呟くと、聞こえたのかアंकが睨み付けるように言う。喧嘩腰になる2人を火野が止めると、夜嵐と轟を見ていたクラスメイト達がぞろぞろと集まって来た。

「轟…落ちたの?」

「うちのスリートップ、2人も落ちんのかよ!」

芦戸と瀬呂が驚いた様子で声を掛けると、もう1人落ちた爆豪に上鳴が機嫌良く口を開く。

「暴言改めよ?言葉って大事よ。お肉先パイも言ってたしき、原因明らか」

「黙ってる殺すぞ…!」

明らかに掛ける言葉を間違えている上鳴に当然爆豪は本当に殺し

かねない殺意を向けて言う。普段から言葉遣いが荒いのもあつてか、爆豪が落ちた理由は聞かなくても見てわかる火野は密かに苦笑を浮かべていた。すると、自分が合格して調子に乗っているのか峰田が轟に声を掛けていた。

「両者ともトップクラスであるが故に、自分本位な部分が仇となったわけである。ヒエラルキー崩れたり！」

空気を読むもクソも無く、肩に手を置いて悠長に喋る峰田。まるでザマアと思っている様な腹が立つ顔。だが、それはいけないと思つたのか委員長の飯田は無言で峰田の首を半回転させて距離を取らせていた。

「火野は合格出来たんだな」

「真の強者……」

「いや：俺こそまぐれだよ」

ふと、障子と常闇が火野に声を掛けるが、火野はそう言つて横流している。目良が一通り確認出来た候補生達を見ながら口を開いた。『えー、全員ご確認頂けたでしょうか？続きましてプリントをお配りします。採点内容が詳しく記載されていますので、しっかり目を通しておいて下さい』

そう言っている間に、黒服の公安委員会であろう人達からプリントが配られる。

「切島君」

「あざっすー！」

「よこせや……！」

「そういうんじゃないからねえからコレ……」

「上鳴君見してー」

「ちよ待て、まだ俺見てない」

『ボーダーラインは50点、減点方式で採点しております。どの行動が何点引かれたか等、下記にズラーっと並んでいます』

名前を呼ばれてプリントを受け取る生徒達。その間に目良の説明が入る中、黒服の男が火野にもプリントを差し出す。火野は「はいっ」と返事をして受け取るとさっそくプリントへと目を通した。トラブ

ルがあつたのに何故受かつたのかが気になつて仕方がないのだろう。だが、先ず先に目に入つたのは点数だつた。

「え、うわ…ギリギリ…」

「何点だ？見せろ」

「あつ、ちよ」

点数を見て驚く火野に、アंकが横からプリントを奪い取る。まだ目を通していない火野の催促を放つて、アंकはプリントに目を移した。

「50点ハツ、本当にギリギリだな」

点数はボーダーラインギリギリの50点。それを見て鼻で笑うアंकだが、下の文を見てその顔は徐々に曇らせていた。

『二次試験の最中、人格を持った“個性”と喧嘩をしてしまった事について大幅減点。本番でそのような事態を起こすのは決して許され無いので、上手く連携を取つて行動するように』…だと？フン！どんな状況だつたかも知らないくせに上から目線でモノを言いやがつて…！」

「おい、俺にも見せろ」

恐らく下の文に書いてある反省点を読んだのだろう。アंकは手を震わせ、公安委員会に睨み付けながら文句を言う、今度はウヴァがプリントを奪つて確認した。

「…ほう。『もう1人人格を持った“個性”が、仲間と連携を取り、不安がつている要救助者に耐えさず笑顔を振る舞い、迅速な救助活動を行っていた。』か。フン、やはり俺が活躍していたおかげだな、アंक？」

「ああ？黙れこの八方美人の虫が」

「何…!?この恩知らずが！」

「だからやめろつてば！ウヴァ、俺もまだ見てないから返せよ！」

再び言い争いになるアंकとウヴァを止めながら、火野はウヴァの持っていたプリントをとって目を通す。一次試験についても高評価の方が多く、二次試験もぎつくりと前半は良かった等と記載されていた。

「……でも、合格出来たのはウヴァのおかげだな。ありがとう、ウヴァ」

「ム……と、当然だ！それより映司、約束忘れるなよ？」

「わかってるって。帰ってからネットで注文しておくよ」

前半がどれだけ頑張っていたようと、ウヴァがいなければ試験に合格する事が出来なかったであろう。火野は感謝すると、ウヴァは少し照れ臭そうにしながらもそう言ってそっぽを向いた。

一方でアंकの方を見遣ると、機嫌は損ねたまま腑に落ちない顔をしている。見兼ねた火野はアंकにもお礼を言った。

「アंकも、最初の試験の時フォローしてくれてサンキュー」

「……………フン、まあ…俺が居たから最初の試験を突破出来たのもあるからな。映司、お礼はとびきり美味しいアイスだ」

「はいはい」

相変わらずの態度だが、内心は少し喜んでいるのだろうか口元が緩んだのを見逃さなかった火野は安堵した様子でそう応えた。

『合格された皆さんはこれから緊急時に限りヒーローと同等の権利を行使出来る立場となります。すなわち敵との戦闘・ヴァイラン事件事故からの救助など…ヒーローの指示がなくとも君達の判断で動けるようになります。しかしそれは君達の行動一つ一つにより大きな社会的責任が生じるといってもあります』

目良が再度アナウンスで喋り出す。

オールマイトという偉大なヒーローが役目を終え、その1人によって抑制されていた犯罪者が増えてしまっているこの世の中。心のブレーキが治らず、犯罪に手を出す人が増える状況。その崩れた均衡を変えるのがこれから社会に向けて顔を出す候補生の若い人達と言うのを伝えられた。試験中の怠そうにしていた目良とはまるで違うその説明に火野達は、合格したのも相まってか、その手はグツと握られていた。

『そして……………えー、不合格となってしまう方々』

一回区切り、目良は再び声を出す。その声に反応した轟、爆豪、夜嵐を含めた一握りの不合格者が顔を上げた。

『点数が満たなかったからとしよげてる場合じゃありません。君達にもまだチャンスは残っています。3ヶ月の特別講習を受講の後、個別のテストで成績を出せば君達にも仮免許を発行するつもりです』

「!!?」

まさかの挽回させてくれるチャンスを与える目良。爆豪達3人は目を大きく見開くと続けて目良は説明する。

『今私が述べたこれからに対応するには、より質の高いヒーローがなるべく多くほしい。一次はいわゆる“おとす試験”でしたが、選んだ100名はなるべく育てていきたいのです。そういうわけで全員を最後まで見ました。結果決して見込みがないわけではなく、むしろ至らぬ点を修正すれば合格者以上の実力者になる者ばかりです。学業との並行でかなり忙しくなるとは思いますが。次回4月の試験で再挑戦しても構いませんがー……』

「当然……!」

「お願いします!!」

応え方はそれぞれだが、その思いの先にある目標は同じ。再挑戦の言葉に頷く3人。

「やったね轟君!」

「やめとけよ、な?取らんでいいよ楽に行こ?」

「:すぐ、追いつく」

もう一度チャンスを与えてもらい、英雄生徒達はワツと集まる。轟を囲んでワイワイと話している中、火野はふとカザリが逃げた方角を見つめていた。

一時はどうなるかと思っていた仮免許取得試験。

突然目覚めたグリードのカザリ。その脅威は解き放たれ、消息がわからないまま、試験は終了となったのだった。

仮免許取得試験が終了し、もうすぐ日が暮れそうな時間に差し掛かる頃、火野達は雄英に帰る為にバスへと向かう。合格したクラスメイト達のその手には発行されたばかりの仮免許が握られていた。

「デク君泣いとらん!？」

ハアッツと自分の仮免許をマジマジと見つめて歓喜の涙を流す緑谷を見て、麗日は何事かと驚く。

「いや……なんかね、こうね。色んな人に迷惑かけてきたから……だから、何て言うんだろ……成長してるな!……って証明したいで、なんか嬉しいんだ。お母さんとオールマイトに早く見せたい!」

「無個性」だった少年が、ヒーローを目指し、苦難を乗り越えて手に入れたヒーローの資格。それは仮の免許だが、彼にとつてはヒーローを志す者として大きな第一歩だった。そしてそれを何より応援してくれていた母親と、師であるオールマイトに一刻も早く見せたいのだろうか、スマホで仮免許を撮影しまくっているのを見て、麗日は微笑ましそうに「うん、そだね」と笑った。

その中、火野は見終えた仮免許をポケットにしまい、クラスメイト達を見渡す。試験を終えて、完全に緊張が解れていた生徒達の顔は感動と高揚感に満ち溢れていた。そんな雰囲気を出来るなら壊したくない。でも、今日起きた出来事は言わなければならないと、葛藤する火野に、相澤は彼に近寄った。

「火野」

声を掛けて火野は振り返ったその時、相澤は突然捕縛布で火野の体に巻き付け、グイッと引き寄せた。

「!?」

「せ、先生!？」

その様子に耳郎は気付いて声を上げる。他のクラスメイト達も異変に気付いて注目を浴びる中、相澤は火野に向かって突きつけるように言い放った。

「何だあの二次試験の有様は？ “個性” 有りきで合格出来たからってそれは実際の現場じゃ何の結果も出せない、寧ろヒーローの名に泥を塗る好意だ」

「す…すびば…せん……」

自身の生徒がした失態を兼ねて苛立つ相澤の表情と声に火野は何も言えず、口元に絡む捕縛布を咥えながらそう謝っていると、アंकが相澤に声を掛ける。

「おい相澤。あの時はこいつの体の中からー」

「知ってるよ、出たんだろ？ お前らと同じグリード」

「!!!?」

グリードと言うワードに、クラスメイト達の形相が変わり、その場の雰囲気は緊迫とした空気に包まれる。

「あの時目覚めて、何がどうなって喧嘩になったのか知らないが、それでもあの場が試験中だった事を忘れて喧嘩した事は雄英生徒として非合理的な事態だ」

「先生…喧嘩なら、俺もしてしまいました…」

静かに声を荒げる相澤に、轟がフォローするように口を挟むが、相澤は続けて口を開く。

「それで落ちた。当たり前だ。だが火野は自分の力じゃなく、ウヴァのお陰で合格する事がかろうじて出来ただけだ」

相澤の突きつける言葉に火野は大きく目を見開く。自分の力では無く、ウヴァが努力してくれたからこそ、仮免許を合格した。先程まで浮かれていた気持ちに申し訳なくなっただのか俯く火野を見て、アंकはキレ気味に相澤に向かって声を上げる。

「だからそれはカザリが復活したからだ!」

「アंक。塚内さんから事情は色々聞かせてもらったが、そのコアメダルから生まれたお前とウヴァ、それと今言ったカザリだったか？ その復活する前から面識はあったのか？」

「……………多少な……………」

相澤の質問に、目を泳がせながらアंकは誤魔化す。前世の事、並びにコアメダルの真実は火野から固く口止められていた。事実を言ってしまうと困惑してしまうし、それを信じてもらえるかもわからない。そう応えるアंकに相澤は続けて質問を問う。

「なら、残りのメダルにもそのグリードつてのがいるのか？」

「……ああ、あと2体いる」

「そいつらは火野に協力してくれるのか？」

「……さアな」

確証は持てず、アंकはそう応えると、ウヴァが近寄りながら相澤に向かって口を開く。

「俺がこいつらと手を結び、加わったんだ。他の奴らも説得すればどうとでもー」

「なら聞くが、あの時火野の体から出て来たカザリは何処に行った？ウヴァの様に敵に肩入れでもする為に行ったのか？」

間を入れず相澤の質問に、アंक、ウヴァ、そして火野は何も応えずに黙り込む。ウヴァと同様に人間を物として扱っていたカザリは、その狡賢さと慎重な性格故に、こちら側についてくれる等考えられないからだ。アंकは息を吐いて「無理だな」と応える。すると相澤は深く息を吐き、火野を拘束していた捕縛布を解いた。

「お前の『個性』といい、自我の芽生えるグリードつて『個性』……

火野、お前は一体何者なんだ？」

「……」

その質問に火野は黙り込む。確かに他の人達からすれば、火野のオーズは稀にも見る事が無い『個性』。特別な『個性』と今まで思ってたのだらうが、今回の事件でその問題はその言葉だけで納まる事態じゃなくなってきた。クラスメイト達も啞然と見守る中、火野は正直に言うしかないと思ったのか「俺は……」と口を開いたその時だった。

「相澤君」

その声に反応し、振り向くとそこには警部の塚内が手を振りながらこちらに近寄る。

「塚内さん……」

「やあ火野君、ちよつと前振りだね。試験は受かったかい？」

「……えと、はい……一応」

塚内の言葉に、火野は相澤から言われた言葉を思い出し、自信を持たずにしどろもどろに応える。場の雰囲気を見て何となく察したのか塚内は「そうか」と頷き、相澤に声を掛ける。

「事情は聞いたよ。火野君はちよつと預らせてもらっても良いかい？」

「問題ありません」

「ありがとう。終わったら雄英まで送り届けるよ。じゃあ火野君、アंक君、ウヴァ君。試験終わって早々に悪いけど、署まで御足労願えるかい？」

塚内の言葉に、クラスメイト達は只事では無い事態になった思ったのかと騒めく。アंकとウヴァはこの空気から抜け出したいのか早々に塚内に着いて行き、火野もかなり落ち込んだ様子でその後をゆっくり歩いて追いかける。それを見た相澤は、再び深い息を吐いて「おい火野」と呼び止めた。

「何を隠しているのかはあまり詮索しない。この試験の出来事も教師として言う事を言ったまでだ。だが、信用は損なわれた」

「……」

「…だが、今後の活躍でそれを取り戻せるよう努力し勤めろ。俺はお前を除籍するつもりはまだ無い」

「………はい！」

フオローをしてくれるその言葉に火野は目を見開き、それに応えようと大きく頷く。火野達はそのまま塚内の後を追いつ、その場から居なくなる。相澤は重い空気を漂わせる生徒達を見ながら口を開いた。

「…とりあえず試験合格した奴らはおめでどう。落ちた者は反省して次の試験を死ぬ気で頑張れ。……よし、じゃあバスは向かうぞ。元氣出して行こう」

「()()いや、ちよつと、無理ある……()()」

くるりと半回転し、バスへ向かおうとする相澤。いつも通りの雰囲気を見せる教師だが、雄英生徒達は急に気持ちは切り替えせずに全員はそう思っていた。

「おーい!!」

「あら、士傑の人」

すると、その空気を打ち壊すかの様に夜嵐が士傑生の団体から抜け出し、全力でこちらに向かって来る。蛙吹は気付いて言うと、夜嵐は元気良く声を出した。

「轟!!また講習で会うな!!けどな!正直まだ好かん!!先に謝っとく!!ごめん!!」

「どんな気遣いだよ」

躊躇なくツツコみを入れる切島。「そんだけーっ!!」と本当にそれだけを伝えたかったのか夜嵐は手を振りながら団体へと戻って行く。それを聞いた轟は「善処する」と小さく呟いていた。

「……………」

「大丈夫、耳郎ちゃん?」

一方、火野が行ってしまった方角を心配そうにずっと見つめる耳郎に葉隠が声を掛ける。耳郎は「うん…」と小さく頷くが、その顔は曇ったままだ。

「火野君の事が心配で心配で仕方がないんだね!」

「んあっ!?ちがっ!」

少し悪戯心があるような葉隠の言葉に耳郎は耳を赤くしながら手や首を横に振って全力否定する。

「まア火野なら大丈夫っしょ!」

「そだな、逆にあれだけスゲー事を物にしちまうんだからよ!」

偏差値が低い上鳴と切島の馬鹿コンビがポジティブに捉えてそう言う。だが彼らの言葉相まってか、沈んでいた空気は徐々に晴れいき、その顔に安堵の笑顔を見せ始める。火野なら大丈夫だろうと、そう信じる目を各々は見せていた。緑谷も釣られて頬を少し上げてみると、何か思い出したのか「あ!」と声を漏らし、士傑生の元へと全

力で走って行く。

「すみませんー！あ、あの…」

声を掛けた相手はリーダー的存在の毛むくじやらの男だった。男は振り返ると、緑谷はポケットからメモ帳とボールペンを取り出す。

「気配消す訓練ってどんなことされてるんですか!!？」

「……………？そんな訓練してないが……………」

「？でも、あの唇がプルつとした人が…それに、もつと話したそうにしてたのでお話できればと思ってたんですけど…どこへ…」

「ケミイか？彼女は調子が悪いと先にタクシーで駅へ向かってしまっただよ」

「えー…そっか…悪いことしたな…」

事情を聞いて申し訳なさそうに俯く緑谷。すると、毛むくじやらの男はふと、思い出したかのように口を開く。

「そういうえばあいつ、ここ3日ぐらい変だったな…なんか普段と違うというか……………」

☆☆☆☆☆☆

同時刻、会場から離れた街の路地裏にて。

ケミイと呼ばれる土傑の女の子は、着信音が鳴るスマホに気付き、彼女は耳元に当てる。

『やっとな繋がったー！』

電話越しからは焦ったように男性の声が聞こえる。その瞬間、彼女の体から張り付いていた粘土のような物がボト…ボト…と剥がれ落ちるように落ちていく。綺麗な髪色も、プルつとした唇も、その身体も被せる様に着せていた物が落ちていくように、その姿を徐々に変えていった。

『どこで何してる!? トガ!!』

不気味に笑って見せるその顔は、サイラン敵連合の1人、トガヒミコだった。

「素敵な遊びをしていました」

『定期連絡を怠るなよ! 1人捕まれば全員が危ないんだ: つて、ちよ!? 何すんー』

声を荒げる声の主は同じく敵サイラン連合の1人、Mr. コンプレスだった。すると、電話越しからガサガサと物音が聞こえる。数秒静かになると思いきや、電話の主が変わり、今度は女性らしき声が聞こえてくる。

『もしもしトガちゃん?』

「ああつ、その声は優無ちゃんですね!」

変わったのは敵サイラン連合の脇真音優無だ。好いているのかトガの声は嬉しそうに跳ね上がると、優無は苦笑しながら口を動かした。

『ねえねえ、弟君そつちに来てない?』

「弟君? まだ来てないみたいですよ」

トガは笑いながらも疑問を抱くような素振りを見せ応える。すると、トガの背後から足音が聞こえる。

「あれ?」

トガは気配を感じて振り返る。だが、そこに立っていたのは脇真音槍無ではなかった。風に靡かせる白い長髪。服装もお嬢様の肩書きを模倣する制服。

その少女は、「聖愛学院2年」突島だった。

「遅くなりました: トガさん」

「あ: あ: そうでしたそうですね! その格好で試験に受けてたのですね!」

突島の姿を見て、思い出したのか目を見開いて言うと、突島の体は徐々にセルメダルが覆い始める。それと同時に、トガの持っていたスマホからMr. コンプレスと優無の声が聞こえて来た。

『ちよ、はア!? 優無ちゃん、槍無つてこの所体調が優れないからって別の場所で休んでんじゃないのか!』

『あくそれ嘘だよ。いやア、火野映司君との闘いで力：“個性”が使えなくなつた時は肝を冷やしたよ。でも、それは“一時的な封じ”だったみたいだから、今回の混ざり込みは肩慣らしと、ちよつとした実験がてらみたいいな…かな』

優無がそう言い終わると同時に、完全にセルメダルで覆われた突島の体は徐々に姿を現す。

若干小柄にして、姉の優無に似た顔付き。白と黒のアツシユが掛かった髪色の、脇真音槍無が化けの皮を剥いだかのように立っていたのだった。

「…………ふう…………」

『あ、トガちゃんつ、音をスピーカーにしてくれる？』

神経を使つたのか、息を吐く槍無。そんな中、スマホ越しの優無はトガにそう言うと、「はい」と彼女はスピーカーにさせる。

『お疲れ様弟君、どうだった？』

「疲れたし…大変…それに、本気出せずに闘うの、凄い…：怠い」

『怠いて！反抗期の一歩手前かな!?毎回可愛いんだからもオ!…まあでも、何事も無い感じ、その実験は成功したみたいだね。セルメダルで体を変えさせて、しかもバレずにアंक達と対面した…うんうん! 凄い進歩!』

「…………うん、それも…トガさんが、色々教えてくれたおかげ…………」

槍無はそう応え、トガの方へと見遣る。だがトガは少し不機嫌そうな顔をして口を開いた。

「シー、でもなんか不公平です!私の“個性”と被ってますし、私のより凄い“個性”!ちよつと妬くよ」

渡我被身子 (とが ひみこ)

個性『変身』

他者の血を摂取することで、他者に変身出来る!

「どうせなら、一緒に行動したかった！」

続けて文句を言うトガ。だがそれを聞いた優無は電話越しに口を開いた。

『トガちゃん、試験前にも言ったよー？ “個性” の関係で土傑の生徒は弟君の “個性” に似たような “個性” を持つてる人いないって』
「どうでしょう？」

少し呆れた様子でトガに伝えるが、白を切るような顔をして彼女は首を傾げる。すると、何か思い出したのか「あ」と言つて口を開いた。「有益な時間のおかげで、いい物手に入りました。弔君、喜ぶよ」

そう言つて、ポケットに手を入れて取り出したのは小さい小瓶だった。中には、ごく僅かな数滴の赤い液体が入っている。

「出久君の血を手に入れました」

☆☆☆☆☆☆

日が完全に落ち、夜の暗闇が空を覆う時間。

警察署に足を運んだ火野とアंक、ウヴァは個室にて待たされていた。そして、ノックの音が聞こえると共に、ドアが開かれ塚内が顔を出す。

「ごめんよ、待たせたね」

「待たせ過ぎだ！」

「全くだ、長い話なら御免だぞ人間！」

「ちよ！なんてこと言うんだ！す、すみません塚内さん！」

「あはは、試験終わりなのに元気だねアंक君もウヴァ君も」

早速怒号をぶつける2人に火野は慌てて宥め、塚内に頭を下げる。塚内は笑いながらそう言い、置いていたパイプ椅子に近寄る。

「さて、今回の件は粗方目良さんに報告を貰ったよ」

椅子に腰掛けようと手を伸ばすが、塚内はチラリとドアを見ながら火野達に口を動かした。

「本題に入る前だけど……ちよつと君達に紹介したい人がいるんだ」
「紹介？」

火野はキョトンとする。すると、入り口の扉から1人、男性が入つて来る。

「え!?!」

「あ…!?!」

「こいつは…!?!」

その男性を見た火野達は驚愕した顔をする。それもその筈だ。

「久しぶり、映司君。それと、初めましてだな、アंक君とく…ウヴァ君」

「信吾さん!!」

その男は、泉比奈の兄で捜査一課に所属している泉信吾だったのだ。

No. 115 意思は揺るがない

仮免許取得試験が終わり、バスで雄英の寮へと帰って来たA組生徒
一向は食事を終えて談話スペースでわいわいとくつちやべっていた。

「明日からフツの授業だねえ！」

「色々ありすぎたな！」

「ねえねえチョコチョコダイ」

「一生忘れられない夏休みだった…」

気が抜けていつも通りの日常に戻った様な雰囲気の中、切島はずつ
とスマホを眺めている緑谷に声をかける。

「メール？」

「うん！」

コクリと頷く緑谷。今回の仮免許を写真で撮影し、オールマイトに
送ったのだが中々返信が返ってこないのずっと眺めているのだろ
う。すると、突然爆豪が緑谷に「おい！」と声を掛けられ、緑谷はビ
クツと肩を震わす。

「後で表出ろ。てめエの『個性』の話だ」

すれ違い側に放った一言。その言葉の意味に緑谷は固まり呆然と
していたのだった。

☆☆☆☆☆☆

その一方で、警察署に事情聴取として連れて来られた火野達は、塚
内と共に個室に入って来た刑事の泉信吾と対面し、火野は嬉しそうに
声を掛ける。

「お、お久しぶりです信吾さん！」

「久しぶりだな。暫く見ない間に随分と逞しくなったんじゃないか

？」

「そんな事無いですよ…俺はまだまだ未熟者です…」

「そこまで謙遜しなくても良い。雄英に入ってから本当に見違える様な感じになってるじゃないか」

「あ、ありがとうございます…」

両親が海外出張の為、泉家に引き取られた火野は比奈と生活しているが、その仕送りは殆ど兄の信吾が提供してくれている。偶に家に帰って来るのだが、殆どは刑事の仕事で署に寝泊まりしている事が多い。仕事人間過ぎだと妹の比奈に怒られる事もしばしばあるくらいだ。そして信吾と会ったのは雄英に入る春頃以来なので、火野は改まった様な挨拶をしつつ会話している中、その信吾を見たウヴァは隣に居るアंकの顔を何度も物珍しそうに見比べ、驚いていた。

「…アंक、アイツは親戚か何かか？」

「どうやったらその思考になるんだ？アレは俺が体を借りていた時の人間だ。…まあ、大方この世界にも居るだろうと察してはいたがなア」

人間の体に憑依したグリードは素体はそのまま目立った変化と言えばそのグリード特有の色をした髪になるのが特徴的。そして憑依しなくても、その人間のベースを頭で記憶していれば、他人の姿にも変化出来る。実際にウヴァがそうだ。

考えのレベルが低すぎるウヴァに呆れた様子でアंकは言う、塚内は火野達の方へと声を掛ける。

「僕も泉君と初めて会った時は驚いたよ。アंक君と顔がそっくりだったからさ」

「それを言ってしまうえば僕の方こそ、比奈…いや、妹から事前に聞いて…今日アंक君と初めて会いましたが、正直驚きました。いやア、世の中は狭いものですね」

互いがアंकの顔をジロジロ見るなりそう言いながら静かに笑う。ふと、火野は疑問に思ったのか信吾に尋ねた。

「そう言えば信吾さん。どうしてここに居るんですか？他県の方に転職した筈じゃ…？」

「ああ、上の命令でこっちに転職したんだ。敵^{サイラン}連合が活発になつて来たからって言われてね。全く、人使いが荒いもんだ……」

少し愚痴が溢れながら応える信吾に、塚内は続けて信吾の肩に手を置き、口を動かした。

「で、泉君は僕と同じ部署に配属されたってわけ」

「なるほどー」と納得する火野。

「フーン！どうでもいいから話を進めろ。こっちも試験に疲れて早く休みたいんだ」

無駄話をしに来た訳では無いと言わんばかりにアंकは催促すると塚内は「そうだね」と頷き、信吾と共にパイプ椅子へと腰掛ける。

火野も用意されていた椅子に座ると、早速塚内は内容を説明した。

「さて、じゃあ本題に入ろうか。火野君、試験中にウヴァ君とは別の異様な見た目をした人が、君の中から出て来たのを公安委員会の人が目撃した……それは、アंक等と同様にグリードと見て間違いないかい？」

「はい、そうです」

「そうか、そのグリードとは、アंक君達の仲が悪いのか？」

「ハッ……、悪い以前の問題だな」

塚内の質問に、アंकは嫌悪した表情で言う、塚内は「どう言う事だ？」と疑問を抱く。すると、アंकは突然火野に近寄ると、火野の体の中へと入っていった。

「うわっ!? えっ、ちよー!」

『映司、聞け』

どうやら憑依では無く、精神の中へと入っただけの様子だが話の途中に入られ火野は困惑していると、アंकは精神の中から語りかけてくる。

『今回の件、これ以上誤魔化しは通用出来ないぞ。警察の連中はやらと質問攻めしてきやがる……周りくどい説明を考えるのも、もうウンザリなんだよ。素直に吐いたらどうだ?』

アंकの提案に火野は目線を下に向けて黙り込む。確かにウヴァの件でもそうだが、何とか思いついた言い訳をしたのだが塚内達は納

得の行かない表情を見せていた。それに、大勢の人達が居た試験でのカザリが復活してしまった事。相澤も何か隠してあると揺さ振りを掛けてきたくらいだ。アंकの言う通り、もう誤魔化しは通用しないのかもしれない。

必死に考え、決断した火野は小さく「わかった」と頷くと、アंकは火野の中から出て来て無言のまま腕組みをする。

「……塚内さん、信吾さん。ちよつと話があるんですけど、良いですか？」

「……ああ、構わないよ」

意を決した火野の表情に、塚内と信吾は何か大事な話をするのだろうと頷く。ウヴァも何となく察したのかその様子を見つめている。

そして、火野は真実を説明し始めた。

自身がこの世界に転生して来た事、グリードの存在、オーズの力。転生した前の記憶は火野には無いが、そこをアंकとウヴァが補って説明する。

「……と、言う訳なんですけど……」

とりあえず重要な部分だけを話終え、一区切り付けた火野。「転生」と言う言葉に最初は信じてくれない様な顔をしていた塚内と信吾だが、その真実とグリードの現在の行動と火野のオーズの力の真意を知ったのか徐々にその表情は真剣な顔となっていた。

「……ふう……いや失礼……。あまりの衝撃的な事実にちよつと頭がまだ追いついていないみたいで……参ったな……」

衝撃の事実を受け止め、深く息を吐いた塚内はそう言っただけで手を置く。いきなり転生したのだ、オーズの力は錬金術師が作った能力だの、そんな話をすれば誰だって困惑する。それは信吾も同様だった。

「えつと……つまり、前世の世界に居た火野君達と、僕と同一人物もその世界に居たって事？」

「ああ、随分とそいつの体には世話になったからなあ……。この顔もその時の馴染みだ、一番しつくりくる」

信吾を含めて、妹の比奈、鴻上ファウンデーションの人達は火野と

同様に転生して来たのかはわからない。瓜二つであつてこの世界の住人では無いかと思つた火野は、ひとまず同一人物と説明した。

「その、錬金術師によつて作られたのがコアメダルと欲望を元に作られたグリード……」

「まあ、辻褄が合うつちや合う話になるね……俄かに信じ難い話だけど……」

「突拍子も無い話をしてすみません……俺も最初は信じられなかつたんですけど、アंकやウヴァが言つてる事が嘘には思えないので」

伝えられた真実をボソボソと呟く様に口に出す信吾と塚内。火野がそう言うのと、塚内は不審に思つていた内容を口にする。

「アंक君、ウヴァ君。その前世の記憶に、脇真音姉弟は存在しなかつたのは本当なのかい？」

「ああ、姉弟揃つてオーズと同じ力を持つてたら忘れる訳が無い。おいウヴァ、連合にいた時に何か聞かされてないのか？」

「悪いが、お前等が出会した時と同じ理由しかアイツ等は喋らなかつた。一点張りだつたぞ、『ずっと見てきた』とな」

「彼女も……その『転生』した人間……か」

火野達もその素性を知らない敵ヴィラン連合の脇真音姉弟。彼女達が何故オーズと同じ能力を持っているのかは不明で、今まではオール・フォー・ワンが「個性」を奪つて提供したのだと推測していたのだが、それがもし本当だとすれば、今の火野はオーズの力を使える事が出来ない。

すると、信吾は何か思い当たる節があるのか口を開いた。

「ちよつと思つたんですけど……もし彼女達も『転生』したと言うのであれば……火野君のオーズの「個性」は何かしら「付与」されたんじゃないでしょうか？」

「付与？」

「実は僕……小説とか読むの結構好きな方で、転生した主人公が別の世界に行く話とかも結構読みます。ああでも、もし仮にと言う話なので、そんな深くは思わないで下さい」

首を傾げる塚内に信吾はそう言つて蔑ろにする。だがその話は火

野が『転生』したと言う事実が本当だとすれば、それは有り得る話だと塚内は息を呑む。オーズの力を使いこなしていると言うこと、見てきたというワード、つまりは何かしらの接点があったと言うことになる。

「…ハッ、そんな妄想世界の話なんざ信じられるか」

「でも、現に君達も同じ道理だろ？」

「ッ……」

嘘だと思ひ込むアंकだが、先程説明したのと同じ様に火野達も転生してここにいる。そう解釈して塚内が喋ると、アंकは何も言い返さずに不快な顔をして黙り込むと、塚内は再び深い息を吐いた。

「何にせよ、脇真音姉弟は捕えないと情報が聞き出せないな……困みに火野君。この事は他の誰かにも言ったのかい？」

「いえ…今喋ったお二人が初めてです。正直に話しても多分びっくりさせちゃうだろうし…、そう簡単には信じて貰えないと……ていうか、塚内さんも信吾さんも、今の話信じて貰えるんですか？」

「まあ、それが本当なら色々都合点が行くからね。内心は凄く驚いてるつもりだよ？」

塚内がそう言うのと、信吾も「そうですね」と頷き、事情聴取の為に用意していたメモ帳とボールペンを手に取ると続けて口を開いた。

「…さて、どうしますか塚内さん。この件は上に報告しても多分信じてくださいませんよ？」

「そうだなア……偽の報告書を出して言い訳作つとくしかかないだね」

頭を搔いて困り果てた顔をする塚内。信吾も苦悩する様な表情で考え込み、「わかりました。後で考えておきます」と頷くと、塚内は「助かるよ」とお礼を言い、火野達に目を向ける。

「ありがとう、3人共。正直に話してくれて。この件は僕と泉君で調査として把握しておくよ。他人事みたいな言い方だけど、君達も相当苦勞してきたんだね…特に火野君」

「えと…そうですね…俺自身も記憶無いんで苦勞して来たかどうかわかりませんけど…」

「馬鹿が、俺達よりよっぽど苦労したんだお前は」

目の前の小さな命を救ける為、死に際に願ったアंकというグリードを蘇らせた記憶、それ等の出来事は今の火野の頭には存在されていない。そんな事実をはぐらかす様な笑みをする火野だが、それを沢山見てきたアंकがフォローを入れて、塚内は静かに「あはは」と笑うと、続けて口を動かした。

「君達の話は僕と泉君と…そうだね、信頼出来る人達の秘密にしておこう。もし、他に話したい人が居るなら、それは直接君の口から話すと良い」

「はい、そうします」

「うん…。さて、じゃあ今回の大元の件についてだけど、そのカザリと言うグリードは、欲望の為に人々を襲うのも時間の問題だよ。そうなってしまいう前に我々警察も動かなくてはいけなくなる」

市民を脅かす敵を取り締まるのが警察の勤めなのだが、やけに遠回しをする様な言い方をする塚内にアंकは疑問を抱いていた。

すると、塚内の視線は火野だけに向き、彼に向かって問い掛けた。

「火野君は、そのカザリ君とも行動を共にしたいかい？」

「!?!」

まさかの発言にアंकとウヴァは目を見開く。その問いに火野が何か応えようと口を開いた瞬間、ウヴァが割入って塚内に向かって声を荒げる。

「おい、何の冗談だ？貴様さっきの説明聞いてただろ!？」

「ただでさえウヴァと一緒に居る事さえ不愉快なんだぞ！それに加えてカザリが仲間？フン！絶対が付くほど有り得ない話だな」

「何だとアंक！俺があれだけ貢献して来たのにか!？」

「ああ、不愉快も不満も大有りだ」

「ツ！貴様ア！」

「ちよお、喧嘩するなってツもオ！」

今にも胸ぐらを掴み掛かろうとするウヴァに、火野は席から立ち上がって間に入る。アंकとウヴァは互いに鼻を鳴らしてそっぽを向いていると塚内は少し困った様な顔をして口を動かした。

「相当仲が悪い様だね」

「本当：毎日大変なんです…」

「あはは、まア何だかんだで一緒に居れるって事は火野君自身がそうやって間に入ってくれているのもあるんだろ？僕はその優しさを見込んでの質問をしてるんだ」

「フン！お人好しの間違いだろ」

塚内の言葉にボソツとアंकが悪態を垂れる。

「そうかな？実際今一緒にウヴァ君と居るだろ？敵^{ヴァイラン}連合と手を組んで一度は悪の道を歩もうとしたのに、それを改心させたのは火野君の行いがあつてこそじゃないか？」

その言葉にアंकとウヴァはピクリと眉を上げて反応する。人間の欲望を利用して己の叶えられない欲を満たそうとしていたグリードだが、アंकも、ウヴァも火野と行動している内に悪事からは身を引いている。火野の人間の体を貸してもらい、叶えられなかった欲が満たされているのが要因だろう。そしてオーズとしての才能もそうだがそのお人好しと言う性格も、ある意味才能かもしれない。

「……チツ、だが：仲間どうこうの話より、相手はカザリだ。簡単に行く筈がない」

「…まあ確かにそうだな。奴は自分が気に入った場所を好む。その上、グリードの中でも一番警戒心が強いからな。こっちに加わるなんて到底無理な願いだぞ、映司」

グリードの中でも一番食えない奴らしく、常に先の先を読んで行動するグリード。こちらに敵意が無く、仮に仲間にしようとしても、はい喜んで：などとあっさり承諾するわけが無いとアंकとウヴァは考えていた。

だが、火野は慎重になるアंक達の顔を見つめながらその口を開いた。

「…でも、塚内さんも言ってたけど、ウヴァだってこうして仲間になっているわけだから：カザリも、そうなってくれるんじゃないかなって俺は思う」

ここまで冷静に状況を考えているのにも関わらず、相変わらずの

『お人好し』を露わにする火野。幾ら前世の記憶が無いからとは言え、その考えにアंकは静かに怒りを覚えていた。

ああ、つくづくこいつのくだらない考えをどうにかできないのか、いつそこでこの男を締め殺してしまえば楽になるのかと。

だが、その怒りは通り越して呆れる様に息を吐く。

「……ったく、つくづく大馬鹿だ。いいか？お前がどんだけ花咲かせてる脳内思考だろうと、カザリだけは絶対俺達の味方になってくれるのは絶対に有り得ない話だ」

「じゃあそれでも仲間になったら？」

「フン！文句を言わずにお前の言う事何でも従ってやる」

「言ったな!?!絶対だぞ!?!」

アंकの交換条件に火野は声を捲し立てる様に約束させる。普段から言う事を素直に聞いてくれなかった火野にとってはこれ以上ない申し出なのだろう。すると、黙って見つめていた塚内と信吾は互いを見て頷くと火野に声を掛けた。

「…どうやら決まったみたいだね。僕達としても、ウヴァ君みたいに火野君の元で更生してくれた方が助かる。カザリの捜索に当たり、見つけ次第君に連絡をさせてもらおうよ」

「ありがとうございます」

塚内の言葉に礼をする火野。それを見ていたウヴァは皮肉そうに呟いた。

「フン、カザリを仲間にするなど出来るわけがない」

「ああ、だが…奴は馬鹿が付く程お人好しだ…俺等の言う事を無視して…やりかねないな」

火野がどんな男なのかは、近くで見えて来たウヴァも重々承知しているだろう。そう言っただけアंकは、呆れるように火野を見つめていたのだった。

第11章　くインターンく
No. 116　後期始業式

事情聴取が終わり、火野達は信吾に送られて雄英高校へと帰って来る。車のドアを開け、すっかり夜の静けさへと変わっていた空を見上げながら、運転席にいる信吾へと火野はお礼を言った。

「信吾さん、ありがとうございます」

「おいおい、当然だぞ？それにこっちの方こそ時間を取らせてしまつてすまないな、3人共」

「全くだ。さっさと寮へ戻るぞ」

後部座席から降りて来たウヴァはそう言つて早々に寮に向かつて歩き出す。アंकも同じ様に無言で寮へと向かつて足を運んだ。2人の態度に火野は呆れながらも「すいません…」と信吾に言うと、信吾は苦笑しながら口を開いた。

「大変だな」

「ええまア…、信吾さんはこの後家に帰るんです？」

「ああ、久々の地元だからな。早く帰らないと、比奈に怒られる」

「あゝ、怒つた比奈ちゃん怖いですもんね」

「そうだな…、個性”ありきで本手が付けられない…：映司君。この事はくれぐれも…」

「勿論言いませんよ。俺も怒られますから…」

普段は優しいが、怒ると「個性”を躊躇無く使用してくる為、共に生活をしていた火野と信吾の苦笑する表情を見る限り、どれだけ怖いかを物語っている。すると、信吾のスマホからバイブの音が聞こえる。反応した2人は置いてあるスマホの画面を見るとそこには『比奈』と記載されていた。

「っと、早速催促だ…じゃあ映司君、君のグリードの事は一旦警察に任せて、君は学校生活を楽しんで。じゃ、また近いうちに」

「はい、帰り道気を付けて下さいね」

火野はそう言い残してドアを閉めると、車はそのまま走り去って行った。軽く見送った火野は、欠伸をしながらアंक達の後を追いか、寮へと戻っていったのだった。

☆☆☆☆

歩いて数分、1-Aの寮へと戻って来た火野。アंकとウヴァはもう部屋に戻ってしまったのか辺りに見当たらず、火野も玄関へと入って行く。そのまま廊下を通っていると、ふと、明かりが付いている部屋を見つめる。誰か居るのかと火野はこっそり中を覗き込んだ次の瞬間。

「爆豪は四日間！緑谷は三日間の寮内謹慎！その間は寮内共有スペース清掃！朝と晩！+反省文の提出！！怪我については痛みが増したりひかないようなら保健室へ行け！ただし余程の事でなければ婆さんの“個性”は頼るな、勝手な傷は勝手に治せ！」

「うわっ……！」

怒号する声が部屋内に木霊し、思わず声を漏らす火野。怒っているのは相澤で、その隣にはオールマイトが立っており、そして椅子に座って叱られているのは怪我をしている緑谷と爆豪だった。

「ん？火野少年……!？」

「火野、今帰ったのか？」

「あつ、えと……はい……遅くなりました……！」

オールマイトが火野の存在に気付き、緑谷と爆豪も振り返って驚く。相澤はそう声を掛けると場の雰囲気は気圧された状態になってしまい火野はビクビクしながらそう応える。

「ちゃんと話は付けて来たのか？」

「は、はい……！」

「ならもう部屋に戻って寝てろ。お前等もだ、寝ろ！」

「は……！」

「……！」

相澤は言い放ち、彼等を捕縛していた捕縛布をシユルシユルと巻きながら深い息を吐く。緑谷と爆豪は椅子から立ち上がり、そのまま部屋を火野と一緒に出て行く姿をオールマイトと相澤は見送った。

「つたく、本当どうしようも無いくらい仲悪いガキ共だ……」

「ま、まア相澤君…今回は大目に見てあげようじゃないか……」

「あいつ等の担任の身にもなって下さい。怒られるのは俺なんですよ……?」

「す、すまない……」

『電話が、キター!電話が、キター!』

ギロリと睨まれ怖気づくオールマイト。すると、オールマイトのスマホから着信音が鳴り出す。今の機嫌が頗る悪い相澤にとつて耳障りな音声なのか、再びオールマイトをギロリと睨む。慌ててオールマイトは部屋から出て行き、スマホに耳を当てた。

「も…もしもし、何だい塚内君?」

『オールマイト、度々すまない。今時間あるかい?』

声の主は塚内だった。オールマイトは「大丈夫だ」と頷く。

『実は、火野君の事についてなんだけど…』

火野に言っていた数少ない信用の出来る人物。塚内は今日あった出来事を、オールマイトに説明し始めたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「え?!喧嘩した!?!」

「う、うん……」

「うるせーぞ三色野郎、時間考えて叫べや!」

あの後、部屋を出た緑谷達は談話スペースまで移動し、何があったのか気になった火野は2人を呼び止めて理由を聞く。怪我をしたその理由を聞くと驚いて声を上げる火野だが、爆豪がそれを制して黙らせる。

「ご、ごめん…てか、何があったの?」

「……ちよつと…ね…。…率直に言えば、ワン・フォー・オールの話についてだよ」

「ツ!?バツ、てめエクソデク!何素直に吐いてんだ!」

緑谷の告白に、爆豪は驚愕した表情で緑谷に詰め寄る。胸ぐらを掴み掛かるが、緑谷は「待ってー!」と口を開いた。

「かつちゃんごめん…!火野君も知ってるんだ…!」

「あア!」

その事実を聞いた瞬間、驚愕していた爆豪の顔は啞然となり、掴んでいた緑谷の胸ぐらを振り払うように手を離す。一旦落ち着こうと思ったのか、側にあつたソファアへ豪快に座り込むと緑谷に声を掛けた。

「オールマイトは校長と保健室のババア…生徒は俺とデクだけだった筈だろ…」

「ごめん…訂正して…火野君も知ってたんだ…」

「騙しやがったなNo.1…」

爆豪は深く溜め息を吐く。それを聞いていた火野は困惑した様子で緑谷に声を掛ける。

「えつと…ごめん緑谷君…。爆豪君も知ってるの…?」

「う、うん…結構前に…僕が喋ったんだ…」

緑谷はそう言つて、何故爆豪が知っているのか、そして何故喧嘩をしてしまったのかを白状した。

元々、〃無個性〃だった緑谷が何故雄英に合格出来、そして何故〃個性〃を使えるようになったのかについて、雄英通い始めた当時に、爆豪は疑念を抱いていた。咄嗟の拍子に吐いてしまった人から授かった〃個性〃。最初は爆豪はそれを鵜呑みにせずに受け流していたのだが、あの神野区で全力を出し切ったオールマイトの引退でそれは徐々に確信へと変わっていく。

更に自身が人質として捕まり、それが原因でオールマイトは力を使ひ果たしたのでは無いかと罪悪感に襲われる。もう一つ、元々努力家である緑谷のその急激的なスピードで成長して行く姿は、いつの間にか追い抜かれている劣等感にも襲われていた爆豪は、モヤモヤの気持

ちを鬱憤晴らしになってしまいう様に緑谷にぶつけ、緑谷も買ってしまった、そのまま喧嘩をしてしまったらしい。

「…オールマイトからも事情は聞いた。デク、コレ知ってるのはもういねエんだな？」

「う、うん…！誓うよ、生徒はここにいる3人だけ」

「…ケツ！」

何度も頷く緑谷に爆豪はそう吐き捨てる、火野に向かって口を開いた。

「…火野、てめエは何とも思わなかったのか？」

その問いに火野は無言になる。確かに爆豪の思っている気持ちは火野自身もわかっていた。あの時、自分が捕まっていなければ…もしかしたらオールマイトはまだ引退せず現役を続けられたのではないのか。あの悲劇を起こさなければ、平和の象徴として立っていられたのではないか。

そう思っていた火野は、ゆっくりと口を開いた。

「確かに…爆豪君の気持ちはわかるよ。俺も負目を感じて、あの事件の後オールマイトに謝ったんだ…。でも、さっき緑谷君が言ってたように、オールマイトは『どの道活動限界が近いから君のせいじゃない』って言ってくれた…」

一旦区切り、火野は両手を目一杯広げる。

「だから無理矢理前向きに考える事にした！今やるべき事を考えて、精一杯自分がヒーローになる為に努力するって決めたんだ。そして、これくらい！手が届く範囲で動いて、憧れのオールマイトにも負けないくらい、人々の手を掴める最高のヒーローになる…ってね」

オールマイトが言っていた「次は、君だ」と言う言葉。それが例え自分では無くても、その言葉を糧として、次の若きヒーローになる為、火野は前向きに捉え、そう宣言する。それを聞いた緑谷は「火野君…」と彼の意思に呼応する様に言う、爆豪は「…ケツ！」と悪態吐く。「てめエの意思なんざどーでもいいんだよ…！お前、試験の時に紫色のコンボを使いこなしたらしいな？」

そう言いながらソファから立ち上がり、火野へと詰め寄る。

「どれだけ強くなろうが関係ねエ。俺は俺の力で上へいき、誰にも負けねエ完全勝利のヒーローになる」

爆豪はそう言って火野にガン飛ばす様に見つめる。どうやら吹っ切れたみたいで、彼の意思が体の節々に伝わってくる。すると、緑谷も一歩前に出てその意思が伝染するみたく口を開いた。

「僕も、2人には負けないヒーローになるよ!」

「ああ!?だからさっきそれを超えるつつってんだろが!」

「いやでも、さっきも言ったけどそれよりも上に行かないといけな
いって…」

「だから!俺がその上行くつつってんだろ!!」

ギャーギャーと揉め出す2人。喧嘩したかのように見えるが、それは何処かお互いの実力を認め合うライバル視している様な会話に見え、火野は少し微笑ましそうに見つめていた。

そして、ふと、火野は思っていた。この2人なら、自分の過去の真実を言っても良いのではないかと。少し考えた火野は決意し、「あ…」と口を開いたその時だった。

「ほお……『寝ろ』って言ったのに、無視してまた喧嘩か?随分な反抗期を持つて先生は逆に感心を覚えるぞ……」

「!!」

談話スペースの入り口からドスの効いた低い声が聞こえ、騒いでいた2人と火野を含めてビクツと肩を震わせる。恐る恐る火野は振り返ると、そこには憤る表情で立っていた相澤がこちらを睨み飛ばしながら口を開いた。

「火野、お前も参戦か?」

「い、いエ!違います…!」

「あ、相澤先生いつからそこへ…!?」

「んなもん気にする要素が何処にあるんだ?おい?」

話を聞かれたのかと焦りビクつく緑谷の言葉に怒れる声でそう応える相澤。どうやら今さっきに来たようなので、心の中でホッと安堵する火野。

「これ以上罰増やしたくないなら5秒以内に部屋に戻れ……5」
「オオやすみなさい!!」

数を数えようとした直後に緑谷と火野はそう言い残してエレベーターへと全力で走り去り、爆豪も無言のまま、そそくさにその後を追って行ったのだった。

☆☆☆☆☆☆

「ケンカして」

「謹慎~~~~~!」

翌朝、夏が終わりを迎えた時期の朝。まだ蝉の鳴き声が聞こえる残暑の中、新学期登校初日を控えたクラスメイト達は、私服で掃除機をかける2人を見て驚いていた。

「馬鹿じゃん!!」

「ナンセンス!」

「馬鹿かよ!」

「骨頂ーッ」

何があったのかは知らないが、それを機に茶化し始める男子達。当然爆豪は「ぐぬぬ…」と唸り声は出しているも、反撃しない所を見る限りかなり本気で怒られたのだろう。

「えええっ。それで、仲直りしたの?」

「仲直り…っっていうものでも…うーん…言語化が難しい…」

「よく謹慎で済んだものだ…!!ではこれからの始業式は君ら欠席だな!」

心配そうに尋ねる麗日だが、色々ありすぎた昨日の喧嘩の内容を、言い訳しようにも言葉出てこずに唸る緑谷。だが親友と言えど、飯田は過ちを犯してしまった緑谷にビシッと厳しく言う。

「爆豪、仮免の補習どうすんだ」

「うるせえ…：てめーには関係ねえだろ…！」

心配を装う様に声を掛ける轟だが喋りかけてほしくないのか爆豪はそう言っただけで黙らう。

「じゃー掃除よろしくなー」

時間が差し迫り、生徒達は雄英に行く為鞆を持ってぞろぞろと出て行く。クラスメイトが出て行った後、事情を知っていた火野は黙々と掃除している2人に近寄る。

「2人共、頑張れ！」

「う、うん…！」

「ケツ！嫌味か!?とつとと行きやがれ！」

悪態吐く爆豪に「ごめんごめん」と火野は苦笑しながら、出て行くクラスメイト達の後を追った。

☆☆☆☆

「皆いいか!?列は見出さずそれでいて迅速に!!グラウンドへ向かうんだ!!」

「いや、おめーが乱れてるよ」

「委員長のリレンマ!!」

長い夏休みの期間が終わり、いよいよ学校に専念する時期の初日。最初に行われる始業式に久々に委員長の飯田が捲し立てるようにならして整列させようとする。だが相澤の厳しい習慣があったか、列からはみ出している飯田に瀬呂がツツコみを入れる。

「入学式、出られやんかったから今回も相澤先生何かするんかと思っただ」

「まー4月とはあまりに事情が違うしね」

前方にいる麗日と尾白の会話が聞こえる。確かに入学当時は直ぐに体力テストを行われた為、始業式もてつきり無いのかと思っていた火野は共感しながらツツツと歩いてみると、前方の下駄箱に凭れ掛

かっている生徒が視界に入る。B組の物間だ。

「聞いたよーA組イイ！2名!!そちら仮免落ちが2名も落ちたんだってええ!!」

「B組物間！相変わらず気が触れてやがる！」

わざわざA組が来るのを待ってまで煽りたかったのだろうか。物凄いい形相で迫り来る物間に上鳴が辛口でそう言い放つ。

「さてはまたおめーだけ落ちたな」

ハツとした切島が何か思い当たる節があるのかそう尋ねると、物間は急に「ハツハツハツハツハツ」と腹を抱えて笑い出す。が、スン：と笑いを止めて無言で後ろに振り返り、切島は思わず「いやどっちだよ！」とツツコみを入れた。

「こちとら全員合格、水があいたねA組」

その前方にはB組生徒達が集まっており、振り返る物間はドヤ顔で1人だけ勝ち誇っていた。

「……悪イ、皆……」

「いやいや、向こうが一方的に競ってるだけだから気に病むなよ」

それを聞いて鵜呑みにしてしまったのか、悔しそうに轟が俯く。切島がフォローを入れていると、B組の中から1人、角取が少し嬉しそうにA組に声を掛ける。

「ブラドティーチャーによるウト、後期イはクラストウゲザージュギョーあるデスマタイ。楽シミシテマス！」

「へえーそりや腕がなるぜー！」

「つか外国人さんなのね」

カタコトな日本語を聞き取って切島が喜び、アメリカ人の彼女を見て上鳴は見つめていると、物間が角取にコソコソと何やら小声で伝え始める。

「ボコボコオにウチノメシテヤア：ンヨ？」

「変な言葉教えんな！」

アメリカ人を良いことに変な言葉を教える物間は後ろで高笑いをするが、B組の拳藤が目潰しという暴力で反省させる。そんなこんなで、ヒーロー科のA、Bクラスが靴を履き替えず下駄箱で屯っている

と、後方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「オーイ、後ろ詰まってるだけだ」

「すみません！さあさあ皆、私語は慎むんだ！迷惑掛かっているぞ」
「かつこ悪イとこ見せてくれるなよ」

ハツとした飯田は急いで屯っている生徒達を下駄箱へと誘導させる。呆れた様な物言いに火野は振り返ると、普通科のクラスで、先頭に立ってそう言っていたのは心操だった。

「心操君！体育祭以来だね！」

「相変わらずお前のクラスはおちやらけてんな」

「あはは…」

彼とは体育祭の時に騎馬戦を共にした生徒。久々もあって火野は列から外れて近寄り声を掛けると、気怠そうに彼はそう応える。火野は苦笑していると、飯田が「火野君！」と列を外れた火野に向かって声を上げていた。

「ご、ごめん！じゃあね心操君ッ」

「おう」

火野はそう言い残し、心操も軽く手を上げてその場を後にする。下駄箱で靴を履き替えていると、耳郎が火野に声をかけた。

「あれって緑谷と戦った生徒でしょ？仲良いね」

「うん、体育祭の時から付き合いだからね」

「ふうん。……火野」

ふと、耳郎は火野の名を呼び、火野は「ん？」と返事をする。その時の耳郎の脳内には、仮免許試験が終わった後、相澤に尋問されていた光景を思い出しており、耳郎は心配そうに口を開いた。

「…その……なんかあったら、ウチに相談しなよ？」

「？ うんっ。ありがとう」

急な言葉にキョトンとする火野だが、彼女の善意だと受け取り、火野はお礼を言う。

そのまま靴を履き替え、先に歩き出す火野の背中を耳郎は見つめていたのだった。

校庭のグラウンドへと集合した全生徒達。一学年にヒーロー科、普通科、サポート科、経営科の11クラスが合計33クラスも集まっていると、かなりの人数で、グラウンドは大所帯となっていた。

その中に並んでいる火野。すると、体の中からアングの声が聞こえてくる。

『おい映司。何をそんなに嬉しそうにしてやがる?』

「(そりゃあ、入学式とかやってなかったからね。なんか新鮮って言うか、学生らしい事が出来て嬉しいって言うか…)」

『長つたるい話する行事だろ。何処が楽しいのか、俺には理解出来ん』
「(まあ普通の人ならそうだろうけど、俺は何とも思っていないよ)」

アングに続いてウヴァも面倒くさそうに言ってくるのが聞こえ、火野はそう言って小声で応える。入学当時は相澤先生の独断で入学式は出られなかったが、先程尾白も言っていた様に、一学期の間で色々事件があったのもあって、今回の始業式は出る事になったらしい。雄英入って初の学校行事なので、火野自身は少し嬉しそうにソワソワとしていた。

「やあ!皆大好き小型ほ乳類の校長さ!」

ふと、全校生徒の前にある壇上に上がって元気よく挨拶をするのは雄英の根津校長だ。そこから何処の学校でも共通の校長の話が始まったのだが、その内容は自身の毛質がどうだの、食事を考え、睡眠を良くとって毛並みを整えるだのと私用の事ばかりを語り始める。火野に関してはへえ〜と興味を持って話を聞いているが、他の生徒達は長つたるい話だと反応に困っていた。

すると、根津の空気が変わり始める。

「生活習慣ライフスタイルが乱れたのは皆もご存知の通りこの夏休みに起きた『事件

』に起因しているのさ」

自身の生活習慣を例え話にして、根津は本題へと入り口を動かす。

「柱の喪失、あの事件の影響は予想を超えた速度で現れ始めている。これから社会には大きな困難が待ち受けているだろう。特にヒーロー科諸君にとっては顕著に表れる。2・3年生の多くが取り組んでいる『ヒーローインターン校外活動』もこれまで以上に危機意識を持って考える必要がある」

「ヒーローインターン校外活動…?」

「職場体験の発展系のようなものかしら…?」

聞き慣れない言葉に1年生徒達は首を傾げるが、根津校長はそのまま口を動かした。

「暗い話はどうしたって空気が重くなるね。大人たちは今、その重い空気をどうしようか頑張っているんだ。君たちは是非ともその頑張りを受け継ぎ発展させられる人材となってほしい。経営課も、普通科も、サポート科も、ヒーロー科も、皆社会の後継者であることを忘れないでくれたまえ」

生徒達を見守る校長として最もらしい事を言い終えると、根津校長は壇上の階段を下りてその場を後にした。

その後は注意事項として、生活指導のハウンドドッグ先生が壇上にあがって物申そうとしたのだが言葉を喋らず、猛犬が怒り狂って吠える様な怒号で伝える。のだが当然伝わる訳も無く、ブラドキングが代わりに「昨晚喧嘩した生徒がいました。慣れない寮生活ではありますが節度をもって生活しましょう」と通訳してくれ、生徒達はハウンドドッグ先生何だったんだ?と言わんばかりに校庭は啞然に包まれていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

とある市街地。人混みが交う街中で1人の青年が立っていた。黄

色い服を基調に白髪の上に帽子を被っている彼は、まるで猫の様に人間を見つめていた。

すると、何かを見つけたのか青年はニヤリと笑みを浮かべて目的の者へと足を運ぶ。その人間の後ろ姿は至って普通だが、まだ残暑の時期なのに紫色のファー付きのモッズコートを羽織っている。

「ねえ君」

青年はある程度近寄ると声を掛ける。男は気付いたのか振り返ると、口元には赤いペストマスクを着用していた。

「面白いマスクをしてるんだね」

「何か要でも?」

興味を持つ青年だが、如何にも無駄話をする暇は無いとその表情に出す男は要件を聞く。

「ちよつとね、君の欲望がかなり渦巻いていたから思わず声を掛けちゃった」

「ツー」

青年の言葉にペストマスクの男は目を見開く。何か考えていたのか数秒無言が続き、男は右手を軽く上げて口を開いた。

「1つ質問良いか?お前には目的はあるのか?」

「目的…?そうだね、その人の欲望を解放させて上げることかな」

青年はそう言つて、1枚のセルメダルを取り出そうとする。

だが、ペストマスクの男は続けて口を開いた。

「少し、話さないか?連れも待たせてるので…」

「話?まア、それくらいなら良いよ」

「なら移動しよう、ここは人目が多くつく…。もう一つ質問良いか?名前は何?」

「別に、教える義理はな…」

ペストマスクの男に、青年はそう言つて促そうとするが、何か思ったのか不敵な笑みを浮かべ、口を開いた。

「僕は『カザリ』。君は?」

「しがない組を任されていね。……組の奴らからは〃オーバーホー
ル〃と呼ばれてる」

No. 117 出合いの季節

始業式は終わり、アナウンスと共に校内へと戻る生徒達。A組も教室へと戻って席へ着くと、早速相澤がHRを始めた。

「じゃあまア：今日からまた通常通り授業を続けていく。かつてない程に色々あったが、うまく切り換えて、学生の本分を全うするように。今日は座学のみだが、後期はより厳しい訓練になっていくからな」
「話ないねえ…」

淡々と報告する中、芦戸が後ろの蛙吹へと耳打ちをする。だがそれを見逃さなかった相澤は髪が上部へと浮き、捕縛布がゆらゆらと宙を舞う。「個性」を発動した時の状態だ。

「何だ芦戸？」

「ヒツ！久々の感覚！」

「ごめんなさい、いいかしら先生」

低い声と共に睨まれる視線にビクツとする芦戸。すると、蛙吹が拳手をして口を開いた。

「さっき始業式でお話に出てた“ヒーローインターン”ってどういうものか、聞かせてもらえないかしら」

「そういや校長が何か言ってたな」

「俺も気になっていた」

「先輩方の多くが取り組んでらっしゃるとか…」

その言葉に瀬呂、常闇を筆頭に教室内は騒つく。八百万も挙手して相澤にそう尋ねると相澤は頭を軽く掻きながら口を動かした。

「それについては後日やるつもりだったが…：…そうだな、先に言うっておく方が合理的か…。平たく言うと“校外でのヒーロー活動”。以前行ったプロヒーローの下での職場体験…その本格版だ」

「はあく…：そんな制度あるのか…：…」

説明を聞いて感心する麗日。すると、ハツとしたと同時に席から勢いよく立ち上がる。

「体育祭の頑張りは何だったんですか!!？」

急に声を上げる麗日に前席に座っていた飯田が肩をビクツとして驚きながらも、その言葉に何か気付いた様子で口を開く。

「確かに……インターンがあるなら、体育祭でスカウトを頂かなくとも道が拓けるか」

確か、体育祭で相澤が言っていたのは『年に1回、計3回だけのチャンス』は職場体験で数あるプロヒーローに見てもらい、評価と知名度を知らせるイベントだった。今回のヒーローインターンが本格的なら、体育祭でのアピールとその指名は何だったのか？麗日と飯田に続いて火野もそう疑問を抱く。

「まー落ち着けよ、麗かじゃねえぞ」

「しかしー！」

あんなに頑張ったのにと言わんばかりの形相な麗日を宥める砂藤。それでも気になってしょうがない麗日に相澤は説明した。

「校外活動は体育祭で得た各々の指名をスカウトコネクションしていくんだ。これは授業の一環ではなく、生徒の任意で行う活動だ。むしろ体育祭で指名をいただけなかった者は活動自体難しいんだよ。元々は各事務所が募集する形だったが、雄英生徒引き入れの為にイザコザが多発し、このような形になったそうだ」

その説明に麗日は食い下がる様に納得する表情となり、「わかったら座れ」と相澤に言われた麗日は「早とちりしてすみませんでした……」とイソイソと座り込む。

「仮免を取得したことで……より本格的・長期的に活動へ加担できる。ただ1年生での仮免取得はあまり例がない事。ライオン敵活性化も相まつてお前らの参加は慎重に考えてるのが現状だ」

本来は2年から受けられる行事活動を今の学年で受けられるのは前代未聞の話。それだけ敵の動きが活発ライオンになっていっていると伝えられたクラスメイト達は緊迫の空気に包まれる。

「もつとも……」

ふと、相澤はそう言って視線を火野に向ける。気付いた火野も軽く眉を上げて様子を伺うが、相澤は軽く首を振って口を開いた。

「まア……体験談なども含め、後日ちゃんとした説明と今後の方針を

話す。こつちも都合があるんでな。じゃ…待たせて悪かったマイク」
「二限は、英語だー!!すなわち俺の時間!!久々登場俺の壇場待ったか ブラ!!今日は詰めていくぜー!!アガってけー!!イエアア!!」
相澤が背を向けると同時に教室の扉が勢いよく開かれ、プレゼントマイクのMAXなテンションと共に授業が行われる。だが彼のテンションにもう慣れてしまったのか生徒達は「はーい」と普段通りのテンションで対応していた。

一方、入れ替わる様に教室を出て行った相澤。手に持っていた資料の1枚がはみ出ており、それが彼の視界に入る。

「情報が漏れるのは早いもんだ…もう指名が来てる…。が、これも後日で良いだろ」

相澤はそう思い廊下を歩いて行く。そのはみ出た資料の題名には、『鴻上ファウンデーション』と書かれていたのだった。

☆☆☆☆

「あー終わったーっ!」

「久しぶりの授業疲れたねー」

「なんか習ってねー文法出てたよな」

「あーソレ!!ね!私もビックリしたの!」

授業が終わり、帰宅する時刻となった教室内は今日の出来事をクラスメイト達が話し合っていた。色々と濃い夏の期間合間って勉強は完全に疎かになってしまったと火野も少し焦る様子で教科書を鞆に詰め込む。

「帰って予習しないと」

「終わったか?さっさと帰るぞ、アイスが食いたい」

「アंक、俺にもよこせ」

「死んでもやるか」

「なに…?」

「わかったわかった、帰ったらな」

1日中、火野の体の中にいたアंकとウヴァは早速と言わんばかり自分の欲望を解放してくる。火野は宥めながら教室を出よう足を運ぶと、廊下の向こうから走ってくる音が聞こえてきた。

「私が全力でキタ!!」

「わっ!」

「あ、オールマイト」

扉を開けた瞬間、オールマイトが「ハッ…ハッ…」と息切れを起しながら現れ、驚く火野とその後ろにいた上鳴が気付く。

「どうしたんですか?」

「火野少年、ちよつといいかい?」

クラスメイトの視線が集まる中、火野にオールマイトは手招きをしてそう言う。火野はキョトンとしながらも「わかりました」と言っ、オールマイトの後をについて行った。

☆☆☆☆☆☆

「おいオールマイト。要件あるならさつきと言え。こっちは1日中アイス食ってないから苛々してんだよ…!」

「アंक!」

「俺もだ。いちいち呼び止められては腹も立つ」

「ウヴァ!もオ、…すみませんオールマイト…」

「いや、3人共すまない…聞きたい事があるんだ。それが終わったら直ぐに帰っていい」

個室に呼び出された早々にアंकとウヴァが火野の体の中から出て来ては文句を垂れる。その失礼な態度に火野は代わってオールマイトに謝るが、オールマイトは申し訳なさそうにお茶を淹れて、火野達の元へ置くとその口を開いた。

「まず先に、火野少年。合格おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

少し笑みを浮かべながらオールマイトは言う。憧れたヒーローも合間ってか、火野は照れ臭そうに素直に喜ぶ。「それを言う為だけに呼んだのか？」とアंकはキレ気味に尋ねるが、オールマイトは「いや…」と続けて口を開いた。

「試験の時、私は別の用事があつて居合わせていなかったのだが、事情は塚内君から全て聞かせてもらったよ」

一旦区切るオールマイト。その言葉の意味が何なのか、火野達は察して俯き気味の顔を上げる。

「アंक少年、ウヴァ少年達と同じグリードが生まれた事。あの紫のメダルを上手く使いこなせた事……そして、君達がこの世界の存在では無い事をね。……先に謝っておこう。転生してきたという事に、私はまだ半信半疑だ……すまない」

「い、いえいえ！そんな急に言われても信じて貰えないのは俺も承知ですから……」

事実を知っているのならもう隠す必要は無い。頭を下げるオールマイトに火野はそう言つて両手を振るう。塚内と信吾は成り行きで納得してくれてはいたが、実際は信じて貰えないのが当たり前だ。

すると、アंकは鼻を鳴らして口を開く。

「フン、じゃあ何だ？事細かく説明すれば信じて貰えるのか？」

「……いや、失礼。言い方が少し違ったな。私が君達を呼んだのは、確信が欲しいからだ」

「あ？」

「つまりどう言う事だ？」

オールマイトの言葉に首を傾げるアंक。ウヴァも同様で、そう尋ねた。

「全ての真実を把握している訳では無いのだが、火野少年。君のオズの力はとても危険な力だと聞いた……。現に紫のメダルの力を見てしまったから私もそれは重々把握している。生徒を危険に晒してしまうのは教師として見過ごせないのだが……そうも言えないのが事実だ……」

俯き加減でそう言うオールライト。恐らく、弟子である緑谷のことを言っているのだろう。

「建前上、無理はするなと言わせてほしい。そして、火野少年…君に尋ねたい…君は、どんなヒーローになろうとしている？」

その言葉に火野は「え？」と声を漏らす。少しだけ沈黙になるが、火野は直ぐにその質問を答えた。

「勿論、どんな場所にも手が届く…貴方みたいなヒーローになる事です」

「それは、サイラン敵であつてもかい？」
「え」

「例えば、君の中から生まれたグリード…カザリも、その中に加われるのかい？」

再び声を漏らす火野にオールライトは真剣な様子でそう尋ねる。アंकもその言葉の意味を察した様子で火野を見つめる。実際にカザリがどれだけ危険な存在なのかはアंकとウヴァだけが知っている記憶上でしか説明していないが、脇真音達の行動と同じように、欲望の為にヤミーを生み出して人々を襲う。お人好しの性格だろうとオールライトに言われれば少しは考え方も変わるのではないかとアंकは少しだけ期待していたのだが、それは無意味な考えだった。

「…でもやるしかないんです。自分が関わった人みんなを幸せにするために。そうすれば、ひどい奴もきつとわかってくれます」

他人を助ける為なら、自分をいくらでも犠牲にしてしまう過剰な自己犠牲精神は何処の世界に居ても、記憶を無くしてようとそれは変わらない。真つ直ぐに応えたその表情にオールライトは「そうか…」と頷く。

「それが君の真意だね…。ありがとう、すまない…それが聞きたかっただけだ」

「何だ、もう話は終わりか？」

「ああ、時間を取らせてしまつてすまないね。今日はもう帰つてもらつて構わないよ」

アंकの言葉にオールライトは安堵した表情で笑みを浮かべそう

言う。火野は若干キョトンとしながらも「わかりました」と頷き、ア
ンクとウヴァを連れてその部屋から出て行く。

部屋に1人、残されたオールマイトは塚内との会話を思い出し
ていた。

『塚内君、その話は本当なのか?!?』

『ああ、僕も最初は驚いたよ。でもあのオーズの“個性”といい、ア
ンク君やウヴァ君のグリードといった特異体質：それに、脇真音姉弟も
同じ“個性”：彼等が異様な力を持っているとなると、その話は嘘で
は無いのも合点がいく』

『Sit…信じ難い話だ…』

『そうだね。：オールマイト、君は今まで通り、彼等の教師として接し
てくれ。この話はできるだけ公に出さない様にする為にも。そして、
“監視”という形で彼等を見守っていてほしい。紫のメダルが制御
出来たみたいだけど、完全には言い切れないからね』

「……やれやれ、どうしたものか…」

教師としてそれらしい事を振舞ったが、内心はかなり動揺してい
る。

オールマイトはそう呟きながら、少し心配そうな顔をして出て行っ
た扉を見つめていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

後期が始まってから4日が経過し、謹慎を終えた緑谷は、爆豪より
一足先に雄英高校へと登校して来た。

「…迷惑おかけしました!!」

「デクくん、オットメ…くろうさま!!」

「オツトメって……つか何息巻いてんの？」

教室に入ってきて来たと同時に頭を下げる緑谷。鼻息が荒い様子を見て耳郎は少し困惑していると、緑谷はズカズカと歩き出し、飯田の元へと歩み寄る。

「飯田君！ごめんね!!失望させてしまつて!!」

「う、うむ…反省してくれば問題無いが…」

「どうしたの、そんなに声を荒げて？」

「この3日間でついた差を取り戻すんだ！」

「あ、良いな。そういうの好き俺！」

いつもより一層険しい緑谷に火野が尋ねると、3日間で置いてけぼりにされたのに焦りを感じたのか鼻息を深く吐きながら宣言する緑谷。その意気込みに共鳴したのか切島が隣でグツと拳を握っていた。

「じゃ、緑谷も戻ったところで、本格的にインターンの話をしていこう。入っておいで」

十分なやる気を見せた所で、授業が始まる。相澤は扉の向こうへと声を掛けると、教室のドアがスラー…と開かれていく。

「職場体験とどういう違いがあるのか、直に経験している人間から話してもらおう。多忙な中、都合を合わせてくれたんだ。心して聞くように」

相澤が言うと共に教室へと呼ばれた生徒達が入ってきて来る。男子2人と女子1人だ。彼等を見た火野は、何処かで見た事のある様な顔ぶれに少し首を傾げる。後ろに座っていた緑谷は、ハッキリと覚えてい
るのか目を見開いて口をあぐりと開けていた。

「現雄英生の中でもトップに君臨する3年生3名……通称、ビッグ3の皆だ」

「雄英生のトップ…ビッグ3…!!」

「あの人達が…的な人がいるとは聞いてたけど…!」

「びっぐすりー!」

「めっちゃ綺麗な人いるし、そんな感じには見えねー…な？」

突然の紹介と共に入ってきて来て教壇の前に立つ3年生達に教室内は

騒つき始める。水色のウェーブがかかったロングヘアの女の子、金髪でゴツい体には似合わない様なつぶらな瞳をした男、黒髪で目付きが鋭く、耳が尖っている男と、どれも見た目は個性的な3年生徒達だった。

火野も「ビッグ3」と息を呑みながら3年生徒達を見つめていると相澤が口を動かした。

「じゃ手短に自己紹介いいか？まずは天喰から」

そう言われ、1番右に立っている黒髪の生徒、天喰は反応した瞬間、ギンツ!!と鋭い眼光を1年に向ける。

「(一瞥だけでこの迫力ー!!おおおお!!)」

ガン飛ばしている様に向けられた視線は、異様な威圧感を覚えさせ、1年生徒達は震え上がり気圧されていく。だが、次の天喰が発した言葉は誰もが予想出来なかった。

「駄目だミリオ…波動さん…ジャガイモだと思って臨んでも…頭部以外が人間のままで依然人間しか見えない。どうしたらいい、言葉が…出てこない」

か細い声で喋り出すかと思えば、その身体は小刻みにカタカタと震え始めていた。先程の威圧とは裏腹な態度に、生徒達は「？」と反応に困っている。

「頭が真っ白だ…辛いつ…帰りたい…!」

「(ええ…!?)」

くるりと半回転し、生徒達に背を向けてしまった天喰。突然の仕草に生徒達は困惑の空気に包まれていた。

「雄英…ヒーロー科のトップ…ですよね…」

ビッグ3と聞いて緊張感を覚えていた空気は崩れ落ちる様に啞然とした空気に包まれる。その中、尾白が恐る恐る尋ねると、今度は隣にいた女子生徒が口を挟んで言った。

「あ、聞いて天喰君!そういうのノミの心臓っていうんだって!ね!人間なのね!不思議!」

天喰とは真逆のフレンドリーな態度を見せる彼女。黒板に顔を突っ伏してもう喋れない天喰の自己紹介も兼ねて、彼女は口を続けて

開いた。

「彼はノミの『天喰環』。それで私が『波動ねじれ』。今日は^{//}校外活動^{インターン}”について皆にお話して欲しいと頼まれて来ました。けどしかし、ねえねえところで君は何でマスクを？風邪？オシヤレ？」

「！これは昔…」

「あらら？あとあなた轟くんだよね！？ね！？何でそんなところを火傷したの!？」

「……!?!それは……」

「芦戸さんはその角折れちゃったら生えてくる？動くの!?!峰田君のボールみたいなのは髪の毛？散髪はどうやるの!?!蛙吹さんはアマガエル？ヒキガエルじゃないよね？どの子もみんな気になるところばかり！不思議ッ」

自己紹介そつちのけで波動はA組生徒を質問攻めにし、回答する間も無くしてその移り気なマシンガントークで一同は思わず唾然としていた。だが、その好奇心旺盛な故にどこか憎めない雰囲気を出している為か、上鳴と芦戸は笑顔で言った。

「天然っぽーい、かわいー!！」

「幼稚園児みたいだ」

「オイラの玉が気になるってちよつとちよつとー!!?!セクハラですつて先パハアイ!!！」

「違うよ」

己の欲まみれな感想を息遣いを荒くして言う峰田に後ろの席の八百万はドン引きして、瀬呂が静かにツツコみを入れる。その間に波動は尾白や他の生徒達に質問を続けていると、相澤がイラつき始めているのか、金髪の3年生に声を掛けた。

「合理性に欠くね？」

「イレイザーヘッド、安心して下さい！大トリは俺なんだよね!!！」

慌てて金髪の男はワタワタと相澤を宥めさせると、一步前に出て大きく声を上げた。

「前途……!!?!」

耳に手を当て、急な呼び掛けとその言葉にA組は驚く間も無く(ゼ

ント……?)と困惑していた。

「多難——！つつつてね！よオし掴みは大失敗だ！」

激しくオーバーリアクションを取って、ハッハッハ！と高笑いが教室内に響き渡る。先程の天喰といい、波動といい、途轍も無く個性的な3年生達に生徒達はいよいよ動揺と困惑を隠せずボソボソと耳打ちをし始めていた。

「3人とも変だよな……ビッグ3という割には……なんかさ……」

「風格が感じられん……」

「まあ何が何やらって顔してるよね。必修ってわけでもない校外活動インターンの説明に、突如現れた3年生だ。そりゃわけもないよね。1年から仮免取得……だよな。フム、今年の1年生ってすごく……元気があるよね……」

フツと高笑いを止めて金髪の男の雰囲気が変わり、ジロジロとA組生徒達を見るなりくちを動かす。

「そうだねエ……何やら滑り倒してしまったようだし……」

「ミリオ……!?!」

何かを察したのか黒板に突っ伏していた天喰が彼の名を呼ぶ。そして、次の言葉に一同は予想打にしない発言を聞いた。

「君達まとめて、俺と戦ってみようよ!!」

「え……」

「「「ええくく!?!」」」

いきなり戦闘を申し込むミリオに一同は驚愕し騒然の空気に包まれる。火野もポカンと口を開け、驚く中ミリオは相澤に声を掛けた。「俺たちの『経験』をその身で経験した方が合理的でしょう!?!どうでしょうね、イレイザーヘッド!」

「……………好きにしな」

No. 118 A組VS通形ミリオ

場所は変わって、体育館^{ガンマ}。体操服に着替えたA組一同はコンクリートの岩山地帯と化した体育内へと集まり、準備体操をするミリオと距離を取っている中、瀬呂が不安そうに声を掛けていた。

「あの……マジすか？」

「マジだよね！」

「ミリオ……辞めた方がいい、形式的に……こういう具合でとても有意義です」と語るだけで十分だ」

本気で取り組もうとするミリオに天喰がボソボソと言う。だが体育館の壁に突っ伏して喋っており、正直聞こえづらいのもあつてか、峰田が「遠つ」とツツコみを入れる。

「皆が皆、上昇思考に満ちているわけじゃない。立ち直れなくなる子が出てはいけない」

「あ、聞いて知ってる？昔挫折しちゃってヒーロー諦めちゃって問題起こしちゃった子がいたんだよ。知ってた？大変だよねえ。通形、ちゃんと考えないと辛いよ。これは辛いよー」

「おやめください……」

天喰に続いて、芦戸の触覚をいじりながら波動は喋る。その2人の言葉はA組の生徒達が挫折する前提で言ってきており、火野は軽く首を傾げていると、解せなかったのか常闇がミリオに声を掛ける。

「待ってください……。我々はハンデありとはいえプロとも戦っている」

「そして、^{サイラン}敵との戦いも経験しています！そんな心配される程、俺らザコに見えますか……？」

噛み付く様に切島はミリオに言う。

「うん、いつどっから来てもいいよね。一番手は誰だ?!」

格下を見る様な目で頷き、ミリオはそう言つてA組を見つめる。その言葉に間入れず切島が親指を自身に向けながら叫ぶが、意外な人物が真っ先に口を開いて宣言する。それは緑谷だ。

「おれ！」

「僕……行きます！」

「意外な緑谷!!」

被せられた切島も驚いていた。どうやら3日間

で差を付けられた分取り戻す為なのだろう、他の生徒達よりも意気込みが違う様子に火野も感心していた。相澤も「お前ら。良い機会だ、しっかり揉んでももらえ！」と声を上げる中、ミリオはやる気を見せる緑谷を見るなり嬉しそうに口を開いた。

「問題児!!いいね君、やっぱり元気があるなあ！」

耐えさず余裕そうな笑顔を振る舞うミリオ。緑谷はダンツと足を大きく踏み込むと同時に腰を低くする。瞬間、全身にワン・フォー・オールのを張り巡らせ、戦闘態勢へと入る。

それに呼応する様に、他のA組達も臨戦態勢へと入っていく。

「近接隊は一斉に囲んだらうぜー！」

砂藤が言う様に、近接戦を得意とするメンバーは緑谷の後ろへと移動し、その他の遠距離戦のメンバーは後方でいつでも攻撃が出来る様構えていた。

そんな中、火野はオーズドライバーを腰に宛い装着し、「よしッ」と意気込みを入れて近接メンバーの元へ行こうとした瞬間、体の外へ出ていたアंकが「映司」と呼び止める。

「アंकク？」

「お前はまだ出るな」

「え、なんで？」

「この雄英高校で最強と言われてんだろ、アイツは？様子見だ」

「でも……」

「馬鹿が、先ずは敵の動きを知っておけ。アイツがどの程度の実力か……見物だなア」

格下に見られていると言えど、相手はビッグ3と謳われる程の実力者。このまま緑谷と一緒に出て行っても良いが、他の生徒達が居ると返ってオーズの実力が発揮出来ないのもアंकは考えていた。火野は納得の行かない様子で顔を曇らせている。ふと、それは轟も同じな

のか火野と同様に距離を置いて様子を見ていた。すると、硬いものが軋む様な音が聞こえる。切島が硬化して腕を擦り合わせる音だ。

「よっしゃ先輩！そいじゃあぶこ指導おー……」

よろしくお願いしまーっす!!」

切島の声が狼煙となつて、先頭に居た緑谷がまず先に駆け出した。

だが次の瞬間、ハリリと、ミリオの着ていた体操服が下着ごとその身体からすり抜ける様に落ちた。

「あー！ー！！」

「今服が落ちたぞ!？」

「ああ失礼、調整が難しくてね!」

男の勲章が見えそうになり、大声を上げて顔を隠す耳郎、服の落ち方に驚く瀬呂。慌ててズボンだけを履き直すミリオはそう言うが、その瞬間が隙だらけと思つたのか、緑谷は動じず、顔面目掛けて回し蹴りを打ち込んだ。

が、確実に直撃したと思われた回し蹴りはミリオの顔をすり抜ける様に空かぶり、緑谷はその背後へと着地する。

「ー！ツ!!」

「顔面かよ」

遠慮ない攻撃にズボンを履き終えたミリオは息を吐きながら緑谷へと振り返る。その瞬間、遠距離メンバーである瀬呂のテープ、芦戸の酸、青山のネビルレーザーが緑谷に続いて顔面へと攻撃を仕掛ける。だが、その攻撃もすり抜けてしまい、緑谷は咄嗟に横へとジャンプして瀬呂達の攻撃を避ける。すり抜けた攻撃は地面へと直撃し、轟音と共に土煙を舞わせていた。

「!?待てツー！いないぞ!!」

ハツとした飯田が声を上げる。土煙が晴れると、一步も動かず立ち尽くしていたミリオの姿が消えたかの様にいなくなっていた。

「まずは遠距離持ちだよね!」

全員がミリオを探そうと辺りを見渡す中、遠距離メンバーの最後尾に居た耳郎の背後からミリオが現れ、宙を舞っていた。何処から!?!と一部の生徒が困惑する刹那、戦闘に参加していない火野は地面から飛

び出てきたミリオオを見て目を見開いている。

「ギャアアア!!」

再び耳郎は全裸になっているミリオオの身体を見て悲鳴を上げると同時に、ミリオオは耳郎の鳩尾に拳で強烈な一撃を叩き込む。怯んだ隙に、伸ばしていたイヤホンジャックで体をぐるぐると拘束し、その場にダウンさせた。

「ワープした!!」

「すり抜けるだけじゃねえのか!?!」

「どんな強個性だよ!?!」

初見殺しもいいところの「個性」を見せつけるミリオオ。近接戦メンバーの生徒達は困惑しながらも急いでミリオオの居る後方へと駆け出す。

後方の一同は取り乱しながらもミリオオに攻撃を仕掛けるが、ミリオオは「個性」を駆使して遠距離メンバー達を次々と鳩尾に急所を叩き込み、ダウンさせていった。

「おいおい嘘だろ…これが雄英トップの実力…!?!」

遠距離のメンバー10人が僅か4秒程で地面に倒れている。少なくとも、経験を積み重ねて来たA組は力を培ってきた筈なのに、こうもあっさりやられてしまっているその光景を見て火野は驚愕する。ミリオオの実力を認めたのか、隣に立っていたアंकとウヴァも「ほオ…」と声を漏らしていた。

そして、叩きのめしたミリオオはズボンを履いて、高らかに「POWERRRRRR!!!」と声を捲し立てる。

『通形ミリオオ』……。あの男は俺の知る限り、最もNo.1に近い男だ。

プロも含めてな」

「一瞬で半数以上が…!No.1に最も近い男…」

相澤が珍しく素直に評価していると、隣に立っていた轟が目を見開いて息を呑んでいた。

「……………お前行かないのか?No.1に興味無いわけじゃないだろ」

「俺は仮免取ってないんで…」

「(丸くなりやがって…) ……火野、お前も見学か?」

「あ、すみません…! 行きたいのは山々なんですけど…」

「フン、もう少し待て」

これまでは真つ先に氷結を繰り出して先制攻撃をしていた筈の轟は理由を述べて参加していない。相澤は心の中でそうツツコみながら少し離れた場所に居る火野にも声をかけるが、まだ様子見だと言わんばかりにアंकがそれを止めていた。

「遠距離はこれだけ、あとは近接主体ばかりだよね!」

「何したのかさっぱりわかんねえ!!」

「すり抜けるだけでも強いのに…ワープとか…!」

「それってもう…無敵じゃないすか!」

「よせやい!」

近接戦メンバーは緑谷、砂藤、切島、飯田、葉隠、麗日、尾白の場で合わせて6人。遠距離メンバーは全員倒されてしまい、その“個性”の凄さに何もする事が出来ず気圧されていた。

だが、それでも諦めていないのか緑谷が「何かからくりがあると思うよ!」と言う。

『すり抜け』の応用でワープしているのか『ワープ』の応用ですり抜けているのか、どちらにしろ直接攻撃されてるわけだからカウンター狙いでいけばこっちも触れられるときがあるハズ…! 何しているかわかんないなら、わかってる範囲で仮説を立てて、とにかく勝ち筋を探っていこう!」

久々に聞く緑谷のブツブツモードだが、それは闘気を奮い立たせる言葉で諦めかけていた皆の指揮が上がる。

「おお、サンキュー! 謹慎明けの緑谷、スゲー良い!!」

フンスツと鼻息を吐いてやる気を見せる緑谷に切島はそう言うてる気を見せる。が、ミリオも同じで「探ってみなよ!」と駆け出し、地面へと通り抜けるように落ちて行った。

「!! 沈んだ!」

ズボンだけがその場に残り、完全に姿を消したミリオに慌てふためく一同だが、1人…緑谷は咄嗟に背後へと振り返ると同時に右足を振

りかぶる。緑谷の背後からミリオが飛び出てきたのだ。

「凄い……！予測した！」

「勘が冴えたか」

攻撃を仕掛ける緑谷に火野とウヴァが言う。だが、それはミリオも同様に驚いてはいるが、迫り来る回し蹴りにそのまま突っ込み、腕で受け止めるかと思いきや、その右足は通り抜けていった。

「だが必殺!!ブラインドタッチ目潰し!!」

「うっ!?!」

通り抜けていく腕は、緑谷の顔面へと迫り目潰しをしようとして仕掛ける。咄嗟に目を瞑ってしまった緑谷は、隙だらけとなってしまう、空中で体制を立て直したミリオは下から緑谷の鳩尾目掛けて一撃をお見舞いする。

「うグ……!!?!」

「ほとんどがそうやってカウンターを画策するよね。ならば当然、そいつを狩る訓練!するさ!!」

「緑谷君!?!」

地面へと倒れる緑谷に声をかける飯田だが、ミリオはもう既に飯田の背後へと回っていた。

再びミリオの一人無双が行われている中、見学していた波動が天喰に声を掛けていた。

「通形さー、ねえ聞いて、通形さー。強くなったよね」

「ミリオは子どもの頃から強かったよ……。ただ……」

加減を覚えた方がいい」

そう言っている間にも、近接の生徒達は次々と腹パンされていき、地面へと落ちていく。無敵と言わざるを得ない彼のその姿に火野も圧巻していた。そしてその場の生徒達を全てダウンさせ、ミリオは高らかに「POWER!!」と声を張り上げていた。

「……おいウヴァ、奴に一泡吹かす。お前のメダルよこせ」

「ム……う……チツ、絶対返せよ」

勝利宣言の様に立つミリオを見て、アंकはボソツとウヴァに交渉を申し込む。ウヴァは釈然としない様子で渋々コアメダルを渡すと、

ソレを火野に向かって投げ渡した。

「映司、これで奴を潰せ」

「え?…うわつつと!いきなり渡すなよな!」

完全に不意を突かれ、火野は遅れて反応するが、何とかコアメダルをキヤッチし文句を垂れる。

が、同時にやつと出番かと言わんばかりに火野はコアメダルを3枚ドライバーへと装填し、右腰のオースキヤナーを取り出し、ドライバーへとスキヤンした。

「変身!」

クワガタ!

カマキリ!

バッタ!

ガクタ!ガタガタ・キリツバ・ガタキリバ!

昆虫類のコンボソングが鳴り響き、火野はエネルギー状の虫を模した輪をその身に纏う。その体は緑一色に覆われた姿、*“ガタキリバ”*コンボへと変わり、オーズは「ハアツ!」とファイティングポーズを構える。のだが、ガタキリバ専用の変身音声と、体が緑色一色になっている事に気付き、思わず口を開いた。

「え、ええっ?いきなりこれ…ガタガタの奴!?!」

「いいからさっさと行け」

普段はタトバのコンボで対応するのが基本だが、生憎トラのメダルはカザリに奪われて持ち合わせていない。それに、A組達が先に戦闘を行って、ミリオを観察出来たのもあつての判断をしたアंक。オーズは何か策があるのだろうかと思いい「わかったツ」と取り敢えず領き駆

け出した。

すると、隣に居たウヴァが顔色を悪くしながらアंकに声をかけた。

「グウ…アंक…セルメダルをくれ…力が入らん…」

「…ハッ、無様だなア。勝手にくたばってる」

「ムウ…貴様ア…」

意思の入っているコアメダル1枚と先程オーズに渡したコアメダル3枚、計4枚しか無いウヴァにとって3枚も手放してしまえばグリードにとって死活問題になる。体に力が入らず今にも倒れそうになっているウヴァをアंकは滑稽そうに見下していた。

「…おや!? そうだったね! もう1人いたっけな!」

「先輩! 手合わせお願い、します!

ウオオオオオオオ!!」

ズボンを履き終えたミリオは、こちらに向かって来るオーズの存在に気付き、嬉しそうに声を掛ける。オーズもそう言って立ち止まって構え、気合いを入れるかの様に雄叫びを上げる。

「…!!」

「うるさ…!?!」

「火野…!?!」

「あ、あのコンボって…確かUSJの時の…」

「ガタキリバ…!」

体育館内に響き渡る音量が木霊し、グロツキーになっていたA組生徒達は思わず耳を塞いでいた。オーズの姿に気付き、一同は見つめている中、オーズはガタキリバの特性、“分身”という名の大海戦術の能力が発動し、約50体程の数へと瞬く間に分裂していった。

「……へえ! 面白い “個性” だ!」

「!! 凄ッ! 何アレ!?! ねえ、あれもしかして最近噂で聞くオーズの子!?! 凄い数! 緑色で虫みたいで不思議! なんか天喰君に似てるね!」

「む、虫はちよつと……!」

分身した脅威の数にミリオ、波動、天喰が目を見開いて驚く。それを見ていた相澤も若干目を見開きつつ、その口を開いた。

「通形ミリオの『個性』は絶対的な初見殺し…。」

だが、火野のオーズの力は…下手をすれば、雄英随一の初見殺しかもな…。」

「これなら…あの先輩に勝てるんじゃないですか…？」

オーズの能力はメダルによつて形態が異なり、未知数の『個性』。メダルを統一させたコンボの力もまた絶大的。幾度と無く見て来た轟はそう確信した様子で口を開くが、相澤は「どうだかな…」と口を挟んだ。

「『全力で、行かせてもらいます!!』」

「おお、凄いね!!同時に喋れるんだ!良いよ君、君達!さアどっからでもかかって来い!!」

オーズ達が一斉に喋り、驚きながらも腰を低くして構えるミリオ。コンクリートで出来た岩山の構造を駆使して何十体の数のオーズは飛び交う様に跳躍し、3〜4体だけは倒れているA組達を運んで相澤の元へと連れて行っていた。

「す、すまない…。」

「ありがとう…。」

「大丈夫、後は俺が頑張るからッ」

「応…行つたれ…真打…。」

最後になった飯田と緑谷を運び終え、お礼を言ってくる2人にオーズは応えると、切島がグロッキーになりながらも応援する。

そして、オーズ達は一斉にミリオへと飛び掛かっていった。

「『ハアアッ!!』」

四方八方から飛び掛かるオーズ達。何処にも逃げ場など無い絶望的な状態だが、ミリオはズボンだけを残して、立っていた真下の地面へと落ちていった。

「また消えた!」

「とりあえず、攻撃してみるよ!!」

いなくなったミリオを探すべく、攻撃を仕掛けたオーズ達は円陣を組んで死角を無くして警戒していた。だが、背後から出て来る戦法では無く、円陣を組んでいたオーズ達の付近で地面から飛び出て来た。

「!!死角からじゃない?」

「これだけ数いれば死角からの方が難しいからね!」

驚くオーズ達にミリオはそう言っ、回し蹴りを直撃させる。

「「うわあ!」」

「(ダメージは入る…なら叩きまくるだけだ!)」

分身と言えば、連想するのは分身された人間は影武者で本体を狙うのが筋だが、ガタキリバは全員が本体そのもの。誰かが攻撃に当たってしまえば、残りの全員にもダメージが入ってしまうのが欠点。分身だろうと攻撃が入った事にミリオは確信を得て続け様にオーズ達に攻撃を仕掛けて行く。

だが、オーズも負けずと数で攻め寄せるが、ミリオの通り抜ける体に攻撃は当たらず、全てが空かぶってしまった。いた。

「やっぱ攻撃が当たらない!」

「ハハ!そうだろうね!どうする後輩!…:とは言ったものの、俺の攻撃で倒れないのはちよいと面倒だね…」

余裕の笑みを見せるミリオだが、急所

を狙って攻撃しても怯むだけのオーズ達に警戒していた。オーズの中でも防御性が高いガタキリバの体はシンプルな打撃は通らない。殴る、蹴るの攻撃を得意とするミリオにとって防御が硬い相手は天敵と言える存在でもあった。

「(これは持久戦になりそうだ!)」

そう思った直後、オーズ達は先手を取って再びミリオへと飛び掛かっていく。ミリオと交戦をしていく中、1人のオーズに、腕だけのアंकが「映司」と声をかけて来た。

「アंक?」

「作戦がある。頭のツノを使え」

「ツノ?何で?」

「黙って聞け。いいか、一度しか言わないぞ」

頭部のクワガタヘッドの鋏形を模した角に指を指しながらアंकはその作戦を伝える。それを聞いたオーズは「成る程、やってみる!」と頷き、それをその体育館内に居た50体のオーズの脳内へと意思を

疎通させる。全員のオーズ達はハツとし、攻撃を仕掛けていたオーズ達は一旦距離をとった。

「よし…ハアツ!!」

ミリオの近くに居たオーズ達は力む様に力を入れると、複眼が発光し出す。

「?あからさまに力んじやってるけど、何かする気かい?」

「んん…ちよつと…!!」

「パワーを溜めているみたいだけど、それがー…」

腰を低くして踏ん張る様に気合いを入れているオーズ達。ミリオは笑みを浮かべながら、地面へと落ちて行き、そのオーズ達の背後へとワープして地面から飛び出した。

「(隙だらけなんだよね!!)」

宙へと飛び出したミリオは右腕を振りかぶり、オーズの背面目掛けて拳を振り下ろし、直撃させた。

だが次の瞬間。

BZZZZZZ!!!

「がつつつつ?!?!」

「?!?!」

オーズの背面に拳を当てた直後、ミリオの体に電撃が走り、稲妻が走る轟音と共にミリオは感電する。それを見ていたA組生徒、相澤、波動、天喰は驚愕した表情で目を見開いていた。

「な…電撃…?!」

「うあああ…?!や、やったあ…?!」

束になつてまで攻撃を当てる事のできなかつた生徒達は啞然とする。初めての攻撃が直撃し、目の前に映っていたのはミリオが膝をついて倒れそうになっていたのだ。だが、反動なのかオーズ達もまた体に電気が走っているせいかビリビリと痺れて次々と地面に膝をついていき、最終的には変身が解除され、本体の火野がその場に倒れ込んでしまっていた。

「あぐ…!? ああア！……し、しびイ!? レ……る…!!」

「ビクンビクンと痙攣を起こしながら、体から煙が立ち上る火野。痙攣すると同時に声も裏返ってしまっている。それを見ていた波動と天喰は驚きを隠せずに口を開いた。

「う、嘘でしょ…!? 通形君に…攻撃を当てた…!?」

「あの姿…分裂するだけじゃないのか…!?」

2人が驚いている中、相澤もまた目を見開きながら「成る程な」と理解した様子で口を開いた。

「通形に気付かれないように電気を体にへと流し込み、攻撃する直後の実態した腕へと通電させた……。あのツノは電気も使えるんだったな、見た目と使える能力がちやごちやになってて忘れてたわ」

「ツ………すげエ……」

相澤が評価をしている最中、轟も素直に火野を評価し、思わず感服したのか声を漏らしていた。そんな中、人間態へと姿を変えたアंकが「フン」と鼻を鳴らして火野を見つめる。

「相手がどれだけ強い、個性」だろうが、オーズの力はそれ以上だ。

……もつとも、それを上手く使いこなせるアイツこそあつてだがなア…。

「が、この程度で倒れる様じゃ、まだまだアイツも未熟者だな」

「いやア!!まさか身体に電気を流し込んでたとはね、俺の読みが甘かった!!普通虫って電気を流すなんて思わないよ、中々やるね君!」
「い、いえ…攻撃当てただけで、俺は倒れちゃったので…流石です通形さん」

「ハッ、使いこなせればお前なんざ一捻りだったのに」

「そうだ、俺のメダル3枚も使ったんだぞ!?!映司の使い方にも問題あるに決まってる」

授業の残り時間を鑑みて、ミリオとの戦闘は終了となり、体操服へと着替えたミリオは後頭部に手を置きながら火野を評価する。火野は受け流す様に言うが、釈然としなかったのかアंकとウヴァが隣でブツブツと嫌味ったらしく言われ、「仕方ないだろ、てかあの電撃もう少し何とかならないのかよ…」と火野はクワガタメダルに茶々を入れる。

すると、鳩尾を押さええながら上鳴がハッと口を開いた。

「そ、その手があったなく…俺もそうすればパイ先倒せたかもなあ…」
「アンタが使っても稲妻が走るから気付かれるのがオチだったの……」

提案するも、その隣で冷静にツッコまれる耳郎に項垂れる上鳴だが、続けて皮肉そうに口を開いた。

「てか増えるのは分かっけど、昆虫に電気って反則すぎね…?原理とかそう言うの超えちゃっててスゲーけどさ、ズルい気がするわー…。腕の刃物と馬鹿みたいな脚力と言うおまけ付きでさ…」

ガタキリバの全面的な能力に嫉妬するような目付きで火野を見つめる上鳴。それを見て、満更でも無い様な笑みを見せるアंक。すると、緑谷は「それだけじゃないよ…」と口を開く。

「最初に分身して攻撃を仕掛けたのはそれがガタキリバの『個性』だと思ひ込ませる為…。更に、アレだけの数で押し寄せれば通形先輩はそっちに集中してしまうから、同じ『個性』でもあるアंक君が一体

の分身の火野君に作戦を伝えてる目論見に気付かず、ガタキリバの電撃攻撃に油断してしまった：初見じゃないと例え僕でも、絶対やられていたと思う：」

「んん、凄い考察！殆ど言われちゃったんだよね！」

ハハハハ！と高笑いしながら言うミリオオだが、それをスン：と止めてミリオオは口を開いた。

「確かに多種多様の『個性』が使えるのは凄いけど、それを使いこなせる彼自身も凄いなと思うんだよね。多分、電気を体に流し込むのは相応な技術と同時に体にもダメージが大きい筈。それを俺に気付かれずに宛かも力を溜めている様に見せかけたのは俺も想定外だったんだよね……」

「あ、ありがとうございます……！」

ここまでの的確に評価してくれるとは思わなかったのか火野は隠しきれず笑みを浮かべてお礼を言う。すると、相澤が軽く咳払いをしてジロツとミリオオを睨む。ハツとしたミリオオはあたふたしながらグロッキーになっっているA組達に向かって口を動かした。

「と、というわけで!!ギリギリちんちん見えないよう努めたけど!!すみませんね女性陣!!とまあ……こんな感じなんだよね！」

「殆どが腹パンされただけなんです……」

時間が少し立って少しは回復したつもりなんだろうが、A組の一同はそれでも顔色が真っ青なグロッキー状態で立っていた。火野自身はガタキリバの防御力のおかげでそこまでなダメージは無かったのだろうが、殴られ、蹴られた部分を摩っていた。

3年生だけあってか、ミリオオの体はかなり鍛えられており、戦い途中でも見せたその筋骨隆々の体には驚かされていたのもある。

そんな、今にも座り込みそうな一同を見つめて、ミリオオは軽い様子で口を開いた。

「俺の『個性』、強かった？」

「強すぎっスー！」

「ずるいや、私の事考えて！」

「すり抜けるしワープだし、轟や火野みたいなハイブリッドですか!？」

間入れず反発する瀬呂、葉隠、芦戸。その芦戸の質問にミリオは笑顔で「いや、1つ!!」と言い放つ。

「え、1つ…!?!」

「はーい！私知ってるよ。個性”！ねえねえ言ってるよ？言ってるよ！? 『トーカー』！」

「波動さん…今はミリオの時間だ」

驚く緑谷の前に、元気良く拳手する波動はミリオの「個性”」の名を上げるが、後ろを向いたままの天喰がソレを止めると、ミリオは彼女を割いて口を開いた。

「そう！俺の「個性”」は『透過』なんだよね！君達がワープと言う移動は推察された通りその応用さー！」

説明を全部持つてかれたのかムスツとふて腐れながら裾を引っ張る波動にミリオは「ごめんて」と謝る。すると、緑谷は詳しく聞こうと手でメモをする様な動きをしながら質問をした。

「どういう原理でワープを…!?!」

「全身に「個性”」を発動すると、俺の身体はあらゆるものをすりぬける！あらゆる！すなわち、地面もさー！」

「あつ、じゃあ…あれ、落っこちてたつてこと…!?!」

「そう！地中に落ちる!!そして落下中に「個性”」を解除すると不思議な事が起きる！質量のあるモノが重なり合う事はできないらしく…：弾かれてしまうんだよね。つまり俺は瞬時に地上へ弾き出されてるのさ！これがワープの原理、体の向きやポーズで角度を調整して弾かれ先を狙う事ができる！」

「…?ゲームのバグみたい」

「イーエテミヨー!!」

ミリオの説明に納得しない顔でボソツと言う芦戸に彼は吹き出す。そんなミリオの「個性”」に蛙吹は口を開いた。

「攻撃は全てスカせて自由に瞬時に動けるのね…：やっぱりとっても強い「個性”」」

「ハッ、馬鹿が。映司は当てられたらろ」

アंकの言葉に一同は「あつ」と口を開く。その言葉にミリオはう

んうんと頷き口を動かした。

「そつちの金髪の子の言う通り、俺の『個性』は攻撃時には実体化して相手に攻撃を当てる。裏をかけば、その直後の実態に攻撃を当てる事が出来るんだよね……それに、俺の『個性』は、強くしたんだよね」

一旦区切るミリオの言葉に全員は不思議そうな表情を浮かべる。それを回答する様に続けて彼は言った。

「発動中は肺が酸素を取り込めない。吸っても透過しているからね。同様に、鼓膜は振動を、網膜は光を透過する。あらゆるモノをすり抜ける。それは何も感じる事が出来ず、ただ質量を持ったまま、落下の感覚だけがある……ということなんだ」

その言葉に殆どの一同はハツとする。一件はかなりの脅威的な『個性』だが、透過している間は息も呼吸も何も出来ない。地面に落ちている間は何も見えず、下手をすれば何処に出て来れるのかもわからない状態。自身がその『個性』だったらと思うとかなりゾツとする話だ。

「分かるかな!? そんなだから壁一つ抜けるにしても、片足以外発動、もう片方の足を解除しながら向こう側に接地、そして残った足を発動させてすり抜け、簡単な動きにもいくつか行程が要るんだよね」

「急いでる時ほどミスるな俺だったら……」

「おまけに何も感じ無くなってるんじゃないや動けね……」

「そう……案の定俺は遅れた!! ビリっけつまであつという間に落っこちた。服も落ちた。この『個性』で上に行くには遅れだけとはとっちゃダメだった!! 予測!! 周囲よりも早く!! 時に欺く!! 何より『予測』が必要だった! そしてその予測を可能にするのは経験! 経験則から予測を立てる! 長くなつたけどコレが手合わせの理由! 言葉よりも『経験』で伝えたかった! インターンにおいて我々は『お客』じゃなくて一人のサイドキック! 同列として扱われるんだよね! それはとても恐ろしいよ、時には人の死にも立ち会う……! けれど恐い思いも辛い思いも全てが学校じゃ手に入らない一線級の『経験』! 俺はインターンで得た経験を力に変えてトップを掴んだ! ので! 恐くてもやるべ

きだと思うよ1年生!!」

「(経験を……力に……)」

熱く、そして力強く語ってくれたミリオに火野はブルッと武者震いを起こす。3年生ともあって、見てきた光景の経験差が今の彼を物語っているのだろう。すると次第にA組達から拍手が次々と送られていた。

「話し方もプロっぽい……」

「1分で済む話を、ここまで掛けて下さるなんて……!」

「お客か、確かに職場体験はそんな感じだった」

「危ない事はさせないようにしてたよね」

「インターンはそうじゃないって事か……」

「仮免を取得した以上、現場に出ればプロと同格に扱われる……!」

「うんツ」

「覚悟しとかなきゃだな……」

「上等だったの!」

「そうだよ、私たちプロになるために雄英入ったんだから!」

「そうだな」

「セラビィ☆」

「上昇あるのみ」

「プルス、ウルトラ……」

ミリオの演説を聞いた一同は奮い立つ様に和気藹々と盛り上がっていた。仮免を取れなかった轟も、早く追いつこうとその目を真っ直ぐやる気に満ち溢れており、火野も拳に力を入れて意気込みを見せていた。

すると、時計を気にしていた相澤がクラスの一同に声をかける。

「そろそろ戻るぞー、挨拶!」

「」「」「ありがとうございまして!」「」「」

一同は先輩達に元気良く挨拶し、体育館内を後にしたのだった。

その夕方、授業が終わって寮へと戻り一段落の息をついていた。すると、謹慎最終日の爆豪が大きいポリ袋を持っては吠える様に声を荒げていた。

「オラア!!ゴミあるなら持ってこいやああ!!」

「爆豪、頼むー!」

「俺もー」

「頼む…」

「オイラも」

「テメエら溜め込み過ぎなんだよこのクソ共お!!」

ゴミを出してくれると男子達は見境無く次々と溜め込んでいたゴミ袋を持って来る。

「手伝おうか?」

「いらんわ、ヨユーだ!全部よこせ!!…ああ!?何だこのゴミ!」

自分のゴミだけでもと火野は声を掛けるが、爆豪は啖呵切つて火野からゴミをぶん取る。すると、突起物らしきものが幾つも出ているゴミ袋に違和感を覚えていると、アंकが口を開いた。

「見てわからないのか?アイスの棒だ」

「見りやわかるわ!!俺が驚いてんのは量だ!てめエコレ入れ過ぎなんだよ!てか、食い過ぎだろ!何本あんだ!」

「ハッ、お前には関係の無い事だ。ほら、さっさと捨てて来い、謹慎君」
「ぐぬぬぬ…!!」

謹慎もあつてか、挑発するアंकに言い返せず唸り声を上げる爆豪。火野も苦笑しながらも見ているその一方で、談話スペースのソファーでは、女性陣が腰を掛けて会話を弾ませていた。

「くー!通形先輩のビリっけつからトップつてのはロマンあるよねー!」

「うんうん!」

「インターンに行くのが楽しみになってきたわ」

「どうなんやろね、1年はまだ様子見ってたけど」

「とりあえず相澤先生のGOサイン待ちですわね」

髪を下ろしながら八百万が言うと、葉隠が「ねー！」と言って女の子達の会話が一旦止まる。それに耳を傾けていた火野は、帰りのHRで言っていた相澤の言葉を思い出していた。

『ビッグ3から校外活動インターンの意義を教わったが、お前らがまだ同列プロの現場に行けると決まったわけじゃない。職員会議で是非を決める必要があるし、やるならやるで、マスコミ等への対応も考えなきゃならん。しばらくは様子見だ』

「ん〜…、行けるのは難しいのかなあ」

独り言の様に呟いた火野は、窓の外を眺める。夕暮れで赤面に広がる空は、いつもよりも赤色に染まっていた。

その景色を見て火野は微かに胸騒ぎを感じる。が、気のせいと直ぐに思い込み、談話スペースで盛り上がっているクラスメイト達の輪に入って行ったのだった。

☆☆☆☆

少し時間が経ち、辺りは夜の闇に吞まれそうになっていた空の下、人里から離れた場所の森の中に建設されて随分と日が経っていたのは廃工場だ。その付近に、1台のセダン車が止まっており、中から2人の男性が顔を出す。

敵ヴァイラン連合の1人、トウワイスと、オーバーホールだった。

「見るからに不衛生だな。ここが拠点か？」

「ああ！いきなり本拠地連れてくかよ。面接会場つてどこ！」

「勘弁してくれよ。随分埃っぽいなここは…病気になるそうだ」

「安心しろ！中の奴らはとっくに病気だ」

ゴホゴホと咳をするオーバーホールの意見を無視してトウワイス

は錆びついた扉を開ける。

薄暗い工場内には灯りが灯されており、その部屋の奥には死柄木、優無、槍無、マグネ、トガ、Mr. コンプレスが、各々の定位置に座ってオーバーホールを見つめていた。

「ヨオヨオ！連れて来たぜー、帰ったぜー！話してみたら意外と良い奴ですよ!!お前と話をさせろってよ！感じ悪いよな!!」

相変わらず1人で2人分の会話を行っているように矛盾し続ける喋り方をするトウワイス。だが連合等は慣れたのかツツコむ者は誰もおらず、紹介されたオーバーホールを見つめて死柄木が口を開いた。

「……とんだ大物、連れてきたな……トウワイス」

「大物とは……皮肉が効いてるな、ヴァイラン敵連合」

オーバーホールが言うのと、大物のワードにマグネが食い付く。

「何?!大物って有名人?!」

「先生に写真を見せてもらった事がある。いわゆる筋者さ。

『死穢八齋會しえはっさいかい』、その若頭だ」

「死穢八齋會の若頭?てことは極道のNo. 2?!やだ初めて見たわ、危険な香り!」

何か興味でもあるのか目を輝かせウツホホイ!とテンションを上げるマグネ。すると、優無もオール・フォー・ワンに聞いた事があって、何か心当たりがあるのか、トウワイスに声を掛けた。

「私も前に確か先生が教えてくれたかな。トウワイス、凄い人連れて来たね。何処で知り合ったのさ?」

「家の近くでブラブラしてたらちようどその街中で起きてた事件に絡んでたんだ!声かけなかったけど!」

「はーん……まあこれはこれで収穫物だねえ」

優無はそう言って死柄木の顔を見るが、手で顔が見えない死柄木の表情は読み取れず、優無は軽く息を吐いていると、極道と言う言葉に不思議そうな顔をしていた槍無。隣のトガも同様なのか、真上の鉄置き場に座っていたMr. コンプレスに声を掛けた。

「私達と何が違う人でしょう?」

「あ…僕も気になる……」

「よーしよし、中卒のトガちゃんも世間をあまり知らない槍無君におじさんが教えてあげよう。昔は裏社会を取り仕切る恐ろしい団体がたくさんあったんだ。でも、ヒーローが隆盛してからは摘発・解体が進み、オールマイトの登場で時代を終えた。尻尾を掴まれなかつた生き残りは、^{ライオン}敵連合予備軍って扱いで監視されながら細々生きてんのさ。ハッキリ言つて時代遅れの天然記念物」

時は流れてヒーロー飽和時代、そしてオールマイトの台頭により、旧来のヤクザは組織解体が進んでいく。Mr. コンプレスの回答にオーバーホールも「天然記念物か。まア、間違っちゃいない」と同意していた。

「それでその細々ライフの極道くんが何故敵連合^{ウチ}に？あなたもオールマイトが引退して、ハイになっちゃったタイプ？」

「いや…オールマイトよりもオール・フォー・ワンの消失が大きい」
オーバーホールの言葉に、死柄木、優無はピクリと反応する。

「裏社会の全てを支配していたという闇の帝王…俺の時代じゃ都市伝説扱いだったが、老人達は確信をもつて畏れてた、死亡説が噂されても尚な。それが今回実体を現し…：…オールマイトは引退、そしてオール・フォー・ワンもタルタロス^{監獄}へとブチ込まれた。つまり今は、日向も日陰も支配者がいない。じゃあ次は誰が支配者になるか」

「…：…ウチの『先生』が誰か知つてて言つてんならそりゃ…挑発でもしてんのか？」

「本当ね。てか支配者つて、そりやもうここに居る死柄木君じゃんね。ね、弟君」

「うん…」

気に入らなそうに立ち上がりオーバーホールへと歩き出す死柄木に優無も当たり前前の様に言つて槍無に共感を求めていた。オール・フォー・ワンが捕まってしまった以上、師である死柄木に全てを託し、^{ライオン}敵連合の統率を任された死柄木が、次の世を支配する存在。その優無の意見に同意したのかその場の敵連合^{ライオン}達は同意の笑みを浮かべる。

「今も勢力を掻き集めてる。すぐに拡大していく。そしてその力で必ずこのヒーロー社会をドタマからブツ潰す」

「計画はあるのか？」

「計画？おまえさつきから何だ？…仲間になりに来たんだよな？」

「計画のない目標は妄想と言う。妄想をプレゼンされてもこっちが困る。勢力を増やしてどうする？そもそもどう操っていく？どういう組織図を目指してる？ヒーロー殺しのステインをはじめ、マスキュラー、ムーンフィッシュ、どれも駒として一級品だが、すぐに落としてるな？使い方がわからなかったか？イカレた人間十余人も操れないのに勢力拡大？コントロール出来ない力を集めて何になる？目標を達成するには計画がいる、そして俺には計画がある。今日は別に仲間に入れて欲しくて来たんじゃない」

「ええ…、間違っちゃ無いけど…さア」

確かにオーバーホールの言ってる事は一理ある。今までの仕掛けてきた事件も、勢力を集めて攻めただけの無計画な作戦ばかりだった。捕まった敵^{サイラン}達も自身の我欲が強過ぎて突っ走り、雄英に倒された。ここに残っているのは、生き残れた偶然の者ばかりだとしても、少なくとも死柄木に着いて行こうと決意した、有象無象の連中の集まり。点穴を突かれた様な気がした優無は顔を曇らせていると、不機嫌そうに死柄木はトウワイスに声を掛けた。

「トウワイス…ちゃんと意志確認してから連れて来い」

「いつ…」

「計画の遂行に莫大な金が必要。時代遅れの小さなヤクザ者に投資しようなんて物好きはなかなかいなくてな。ただ名の膨れ上がったおまえ達がいれば話は別だ…：俺の傘下に入れ。おまえ達を使ってみせよう。そして俺が次の支配者になる」

まさかの逆の勧誘提案に工場内は沈黙に包まれる。トウワイスもまさかこんな奴だと思わなかったのか、この空気をどうしたものかと慌てふためいている。槍無もまた、どうするか考えながら姉の表情を見遣る。だが優無は小さく溜息を吐いていた。まるで、それはNGワードだよ、と言わんばかりの表情で、死柄木を見つめる。

「帰れ」

死柄木が誰かの下につくのは有り得ない話。その一言によって、この場の空気の流れが変わった。そして先に動き出したのは、包帯を解いた巨大な磁石を手を持ったマグネだった。

「ごめんね極道君！私達、誰かの下につく為に集まってるんじゃないの！」

「！」

「あらら…喧嘩っ早いなあ、マグ姉…」

磁石をN極に向け、オーバーホールは男即ち“S極”となつて彼はマグネに引き寄せられて行く。短い期間共に過ごした優無は、何かと世話焼きで、意外にも怒りっぽい性格のマグネに対して苦笑を浮かべていた。こうなつてしまえば冷静に話は出来ない。落ち着かせる方法を後で考えないと。

「こないだ、友達と会つてきたのよ。内気で恥ずかしがり屋だけど、私の素性を知つても尚友達でいてくれた子。彼女言つてたわ、『常識という鎖に繋がれた人が繋がれてない人を笑つてる』」

『剣ちゃんは、その常識から飛び出したんだよね…。私は、飛び出す勇氣も持てないや…』

マグネの脳内にふと、同じトランスジェンダーである友人の言葉を思い返していた。その言葉に、マグネはグツと腕に力を入れ、迫り来るオーバーホール目掛けて声を荒げる。

「何にも縛られずに生きたくてここにいる！私達の居場所は私達が決めるわ!!」

“生きやすい世の中にした”。その想いもあつてか、マグネは叫ぶと同時に、巨大な磁石をオーバーホールの後頭部目掛けて直撃させる。

鉄の塊が直撃した今、勝負はあつたかとその場の者達は見届けていた。

だがそう思つた直後、オーバーホールはいつの間にか外していた手

袋を右手に持っており、素手になっている指先をマグネの左腕に触れた。

その瞬間だった。

バツン!! と、マグネの上半身が、風船の様に割れて血飛沫と共に吹き飛んだのだ。

「！！！！！！！！！！」

一瞬の出来事に死柄木達は何が起きたのか頭が追いつかなかった。目の前に広がるのは無惨にも散っていくマグネの肉片、血飛沫、そしてオーバーホールの側で倒れるマグネの下半身。その血みどろになっっていく床下を見て、ようやく、マグネが死んだという事を理解し、興奮する以外の感情を見せないトガがゾツと口を開いた。

「マ、マグ姉え…!!?」

「……!!」

思わぬ味方の死。サイラン 敵にとってはそれは日常茶飯事なのかも知れないが、完全に油断していた此方が迂闊だったとも言い切れる。優無は咄嗟にオーズドライバーを取り出そうとするが、その手は直前の所でピタリと止まっていた。

「先に手を出したのはおまえらだ……ああ汚いな…!!これだから嫌だ…!!」

「……まえ……」

マグネの返り血を浴びたオーバーホールは服の袖でゴシゴシと不快そうに血を擦る。

すると、優無の横から小さく震え上がった声が聞こえる。ハツとした優無は振り向くと、いつの間にか立っていた槍無が俯きながらその拳を震わせていた。

「おまえっっ…!!!」

「っーバツ！弟君!!」

「変身!!」

サメ!

クジラ!

オオカミウオ!

「うおおああアア!!!」

激昂を露わに、バツと駆け出すと同時に槍無の体は水流へと包まれ、ポセイドンへと姿を変える。そして振り翳した赤い槍、デーパーホルプーンを、オーバーホール目掛けて突き刺そうとしていたのだった。

No. 120 いざ、再びあの会社へ！

「うおおおアア!!」

ポセイドンとなつた槍無は怒りのままにディーペストハーブーンを振り翳し、オーバーホール目掛けて突き刺そうと駆け出す。オーバーホールも素手になつた左手を突き出したその時だった。

ムカデ！

ハチ！

アリ！

ムカチリー！チリツチリツ！ムカチリー！チリツチリツ！

「ンンッ!!」

「がっ!!?」

ポセイドンの背後からコンボ専用音声が鳴り響く。その正体は優無が変身したヴィランオーズ「ムカチリコンボ」で、姿を変えたと同時にムカデの体を模した頭頂部を伸ばしてポセイドンの体へと絡み付き、締め上げた。

「が…ううっ！あああアツツ…!!」

「ちよつと…落ち着けバカ…!!」

怒りで我を忘れてしまつてるのか、後一歩手前に居るオーバーホールに巻きつかれても尚、襲い掛かろうとするポセイドン在必死に押さえるヴィランオーズ。だが、彼とは別にダン！と地面を蹴つてオーバーホールに向かう者が他にもいた。Mr. コンプレスだ。

「待てコンプレス！」

「こいつはやべエ!!俺の圧縮で閉じ込める!!」

死柄木が止めようと声を張り上げるが、マグネを一瞬で死に貶めたオーバーホールはもう脅威でしか見ていないMr. コンプレスは、自

身の「個性」で圧縮させようと右腕を突き出した。ポセイドンを止めるのに精一杯のヴィランオーズも「待つて!!」と声を出したその時、ヴィランオーズの頭部の目、「ムカデアイ」によって虫の様に特化した複眼は奇妙な物体を捉えていた。

「弾…!?!」

Mr. コンプレス目掛けて飛んできていたのは小さな針が付いた弾丸だった。それがMr. コンプレスの右肩に直撃するも、小さ過ぎて痛みを感じないのか、Mr. コンプレスはそのままオーバーホールの左腕に触れる。だが、何故かMr. コンプレスの「個性」が発動しなかった。

「(…!?! 「個性」が発動できないー…)」

相手に触れれば、忽ちガラス状の球体に圧縮させる「個性」。それは発動せず、触れた瞬間オーバーホールの体が蕁麻疹の様にブツブツが大量に浮き出ただけだった。

「触るな…!!」

オーバーホールが言つて、Mr. コンプレスの右腕を払い除けた直後、マグネの様に彼の右腕はバツン!!と破裂し、血と肉片が飛び散つた。

「ツツツ!!~~~~ツツ!!?!」

右腕が無くなり、激痛で声にならない断末魔を上げてその場に尻餅を着くMr. コンプレス。

「コンプレス!!!こんのオ…!!!」

ヴィランオーズも、冷静を乱しては話にならないと、必死に堪えていたが、目の前で次々と仲間が倒れて行くのを見届けるのは我慢がならなかったのか、ポセイドンを拘束していたセンターセンチピードを緩めようとしたその時。

「押しえてろ脇真音!」

「!」

声を上げた死柄木の言葉にハツとするヴィランオーズ。直後、死柄木はその場から全力で駆け出し、オーバーホール目掛けて右腕を突き出した。

それと同時に、先程のMr. コンプレスに打ち込んだ小さな弾丸が死柄木の腕目掛けて飛んでくるが、ヴィランオーズはハツとし、咄嗟に腕を伸ばしてソレを見事にキャッチする。

それに気づいたオーバーホールは迫り来る死柄木の手が触られようとした瞬間、声を張り上げた。

「盾っ!!」

叫んだ直後、死柄木の目の前にオーバーホールと同じペストマスクを着用した男が現れ、身代わりに死柄木の手が触れられた。

「うぐっ…!?!」

触れられた腹部からボロボロと崩壊していき、男はあつという間に消し炭となつてその場に崩れ落ちる。

「薄々…感じてたけど…!」

「…なるほど…ハナからそうしてりや幾分わかりやすかつたぜ」

ヴィランオーズは察知し、死柄木は理解したのかその場から飛び退き、気を失つたMr. コンプレスを抱えるトゥワイスの横へと着地する。

その時だった。

オーバーホールの背後の壁に亀裂が走り、その壁は勢いよく破壊される。衝撃と共に現れたのはこの場に居る者達よりも何倍ものある屈強な体をした男、その頭部には黒い布を被つた小さな男、右には黒いマント、左には白いコートを着た男達がオーバーホールの元へと集結する。全員のその顔にはペストマスクを着用しているのを見る限り、オーバーホールの傘下と見て間違いないだろう。

「待て、どこから!!尾行はされてなかつた!!」

「大方、どいつかの“個性”だろう」

送迎の1人を除いた2人だけで、車で来た筈なのに、大勢の加勢に驚愕するトゥワイスだが、尾行を得意とする“個性”がこの中に混じってるだろうと解釈する死柄木。

すると、オーバーホールの隣に白いコートを来た男が彼に声を掛ける。

「危ないところでしたよオーバーホール」

「遅い……！」

「予想外でした。チャカの弾を見抜ける “個性” が居るとは……。まあしかし、即効性は充分でしたね」

白いコートの男は拳銃を握りながらそう言つて、ポセイドンを押さえてるヴィランオーズへと見遣る。Mr. コンプレスが “個性” を使えなかったのは、恐らく彼が持つ拳銃に何か仕掛けがあるのだろうと考えるヴィランオーズ。

「穏便に済ましたかったよ、敵ヴィラン連合。こうなると冷静な判断を欠く。そうだな……戦力を削り合うのも不毛だし、ちょうど死体は互いに1つ……キリもいい、頭を冷やして後日また話そう。腕一本は負けてくれ」

「ふざけるな……!!今すぐにお前もぶつ倒す!!」

「ためエ殺してやる!!」

「弔くん、私刺せるよ。刺すね」

「弟君、駄目だってば……!!」

「……駄目だ」

コンプレスとマグネの仇を討とうと怒りを露わに声を荒げるトウワイス達だが、ヴィランオーズと死柄木は押さえようと制す。

「殺してやる!!」

「責任取らせろ!!」

「駄目!!」

「駄目だ」

仲間を殺された仇をとポセイドン、そしてオーバーホールを紹介してしまった罪悪感に襲われたトウワイスを再度制すヴィランオーズと死柄木。

「賢明な判断だ、手だらけ男に虫女」

それを見た大男の頭部に乗っている小さな布の男はそう言っていると、釈然としなかったのか「誰が虫女だ……」とヴィランオーズは呟く。そんなやり取りを無視して、オーバーホールは背を向けながら1枚の紙切れを取り出すと死柄木の方へと投げて口を開いた。

「すぐには言わないが、なるべく早めがいい。よく考えてみてくれ

…自分たちの組織とか色々…冷静になつたら電話してくれ」

「待てゴリアア!!何故止めた死柄木イ!!」

死柄木の足元に落ちた紙切れ。そこには死穢八斎會のものであるであろう電話番号が記載されていた。オーバーホールと部下達はそのまま倉庫から退出し、トウワイスは立ちあがろうとしたその時、トガが口を挟んだ。

「仁君、それより庄紘君を医者へ」

トガの言葉にハツと我に返る。抱き抱えていたMr.コンプレスはオーバーホールにやられて無くなった腕の肩から大量に血が流れている。

「ッ!?…立てるか?」

「〃個性〃が…出なかつた…クソ痛ええエ…!!」

先ずは怪我人を何とかするのが優先だ。冷静になつたトウワイスは、苦痛で呻き声を上げるMr.コンプレスをゆっくりと立ち上げらせ、肩を貸しながらその場から離れて行く。

倉庫から姿を消したオーバーホール達を見送つたヴィランオーズは、拘束していたポセイドンを解いて、そのまま変身を解除する。ポセイドンも息切れを起こしながら変身を解くと、そのまま振り返り、優無に近寄つて胸ぐらを掴んだ。

「姉さん!何で止めた!?!目の前でマグ姉が死んだ!!」

「マグ姉とコンプレスがやられたの見たでしょ…?アイツに触れられたら、あんたもああなつてたんだよ?」

「でも!だからって見殺しにー」

「いいから黙って!!」

捲し立てる様に怒鳴り声を上げる優無は、掴まれた腕を払い除ける。暫く沈黙が続き、優無は小さく「ごめんね…」と呟くと、槍無は納得の行かない顔をし、トウワイス達の後を追つた。

すると、死柄木が優無に声を掛ける。

「脇真音…持つてるソレを渡せ」

「ああ…そうだったね…」

死柄木に言われ、持っていた小さな弾丸をソツと死柄木に渡す。死

柄木はそれを見つめ、ポケットへと仕舞い込むと、そのまま彼もトウワイスの後を追った。

優無も後を追おうと足を踏み出した時、無惨にも下半身だけが残されたマグネを見つめているトガに視線が向く。

「…優無ちゃん、アイツら刺すよ?」

「駄目だつて……………」

「どうして……………!?!」

ナイフを取り出して言うトガだが、優無の顔を見て言葉を失った。血塗れの地面を見つめていた優無の顔は、今にも噴火しそうな怒りと憎悪の顔で満ちていたのだ。そして、優無はふと、血塗れになっていた腕に付けるブレスレットを見つめる。それは、優無がプレゼントとして買って上げたマグネのブレスレットだった。

『あらやだ!?!優無ちゃん、めちやくちやお金持つてるじゃない!?!どしたのそれ!』

『ああ、先生の紹介で外国人さん達と取引した時に貰ったんだよね。先生は君が使うと良いって言ってくれたからさ』

『ヤダー! 私実は欲しい物があるの! 中々高級品で手が出せなくて困ってたのよっ』

『なに? あからさまに買って欲しいみたいな言い方じゃん。…良いよ、連合に入ってくれた祝いとして買ったげるよ』

『ウソ、やだ本当!?!嬉しい! ありがと優無ちゃん! 一生の宝物にするわね!』

『大袈裟だなア。…まあ、これからもよろしくね、マグ姉』

「……………馬鹿野郎……………」

ボソツと呟きながら、血塗れの中へと手を伸ばし、ブレスレットを手取る。それを自身の胸へと押し当て、身体が微弱に震え出すと同時に頬に一滴の涙を流す。そして優無は顔を上げると、覚悟に満ちた

眼をしてオーバーホール達が出て行った倉庫の外を見つめていたのだった。

一方で、倉庫から出て行ったオーバーホールは、乗ってきた車の後部座席へと乗り込む。横にあったハンカチを手に取り、ゴシゴシと返り血を落としていると、運転席へと乗り込んだ白いコートの男が彼に声を掛けた。

「オーバーホール、そーいやア例の若い奴はどうしたんで？」

「ああ……何でも力を蓄えてから合流すると言って離れた……」

「力ですか？何かの『個性』で？」

「知らん……何れにせよ、部下を1人失った今、あの男も戦力として加えなきゃならない……。使える者は使わないと、俺の計画が狂う」

オーバーホールはそう言い終わり、倉庫の方へと目を向けながら「出せ」と命令する。白いコートの男は「へい」と頷き、エンジンを掛けると、車を走らせたのだった。

☆☆☆☆☆☆

同時刻、街の明かりが綺麗に灯されている都市、三鷹市。その市内の屋上に、眺める様に見つめている1人の青年、カザリが座っていた。「『個性』……力を持った人間か……。その人間がどんな欲望を持っているのか楽しみだな」

セルメダルを手に取り、手の中で転がす様に回しながらカザリはゆっくりと立ち上がる。

「それにしても、一体どんな偶然かな……。まさかあの連中までこの世界に存在してるなんてさ……」

カザリはそう言っつて、目の前に聳え立つビルを眺めている。それはこの世界で有名な大企業、鴻上ファウンデーションだった。

「1年生の校外活動ヒーローインターンですが、昨日協議した結果、校長をはじめ多くの先生が『やめとけ』という意見でした」

翌日。爆豪も謹慎から戻り、朝のHRで相澤の報告にクラス内の空気が騒然となっていた。

「えー、あんな説明会までして!？」

「でも全寮制になった経緯から考えたらそうなるか…」

「ざまア!!」

「自分が参加出来ないからって…」

報告を聞いてがっかりする生徒もいれば、納得する生徒もいる中、仮免で落ちた爆豪は嬉しそうな表情で席から立ち上がる。のだが、それを割いて相澤は「が」と一声を上げ、教室内は再び静まり返る。

「今の保護下方針では強いヒーローは育たないという意見もあり、方針として『インターン受け入れの実績が多い事務所に限り、一年生の実施を許可する』という結論に至りました」

「成る程…つまり、申請出してくれるところは行けるって事か…」

「ガンヘッドさんとどうなんやろー…」

「セルキーさん連絡してみようかしら」

インターンがなくなった訳では無いと言う報告を聞いて、生徒達は職場体験でお世話になっていたプロヒーロー達に宛が無い心配を浮かべている中、爆豪の「クソが!!」と吠える様に悪態を吐くのが教室内へと響く。

「鴻上会長のところ…申請出してくれているかな…」

火野もまた、職場体験でお世話になった鴻上ファウンデーションが脳内に思い浮かぶ。近年活動を開始したヒーロー「バース」事、伊達が事務所として扱っている会社…なのだが、火野は「うくん…」と首を傾げて項垂れていた。

「火野」

ふと、相澤が名を呼び、火野は顔を起こして反応する。

「あ、はいっ」

「それと、耳郎」

「えっ、あつはい」

「2人共、放課後に職員室に來い」

まさか自分が呼ばれるとは思わず耳郎も驚きながら返事をする、相澤から短調に告られる。内容は全く言わずに終わった空気に、火野と耳郎は何かしたのだろうかと思様な罪悪感を覚えていた。

☆☆☆☆

そして迎えた放課後、火野と耳郎は早めに身支度を終わらせ、クラスメイトに「じゃあな」。「何かわかんないけど、頑張れ！」と励ます様に見送られ、教室を出て行く。階段を降りている最中に耳郎が声を掛けた。

「何だろね、話って」

「さあ……耳郎さん心当たりはある？」

「ウチは…無いかな」

「だよね……」

思い当たる節が見当たらず、顔を曇らせる耳郎。頷く火野もインターンの事かと思つたが、耳郎までもが呼ばれている辺り別の件での話なのだろうと、そう思いながら2人は廊下を歩いていた。

そして職員室へと辿り着いた2人。

「失礼します」と言つてドアを開けて中へと入り、相澤が座っている机の方へと移動する。

「来たか」

「先生、ウチらに話つて？もしかしてインターンですか？」

「とりあえず聞け」

声を掛けるなり、気になつて仕方がないのか耳郎は質問攻めするみたく相澤に問い掛けるが、相澤は制して口を開いた。

「その様子だと薄々勘付いている様だな。お前ら呼んだのは耳郎の言つた通り、インターンの事だ」

相澤の言葉を聞いて、やっぱり…と2人は眉を寄せた。

「…で、話と云うのは火野と耳郎、お前らには鴻上フアウンデーションからインターンの活動受け入れの申し出が届いている」

「あ、はい」

「そうなんですネ……………」

渡された用紙をプリントを配られる感覚で受け取った2人だが、数秒沈黙し、2人は揃って「ええっ!？」と声を上げた。

「申請が来たんですか!？」

「マジびつくりなんだけど…!?え、てか先生…火野はわかるんですけど何でウチもですか?」

「そこまではわからん。その用紙に書いてある通り火野とお前の名前が推薦されてあったのを確認しただけだ」

職場体験で鴻上の所とは無関係のプロヒーロー事務所で世話になった耳郎。会長の鴻上自身が決めたのだろうか?それとも伊達さんが推薦してくれたのだろうか?と、火野は顔を曇らせていると、相澤は口を動かした。

「申請が来ているのはお前ら2人だけだ。教室で渡せば喧しくなるからここに来てもらった。…………行くか行かないかはお前達が」

「勿論ー」

「行きますー!」

「(即答ね…)……………なら、それに名前と印鑑を押しして俺に提出しろ。以上だ」

「はいっ」

やる気を見せる2人の顔を見ながら相澤はそう言っただけで火野と耳郎を職員室から退場させる。

軽く見送っていた相澤に、通りかかったミッドナイトが声を掛けた。

「どういう風の吹き回し?何方かと言えば反対派だったでしょ、イレイザー?」

「…………別に、直に世の中を見てきた方が経験も得て合理的だと思っただけだ」

校外活動^{ヒューマンインターン}1年生の実働は多くの教師が反対していた中、相澤もその中の1人であった。賛成派のミッドナイトは先程火野と耳郎にインターンの許可を出しているのを見て驚いたのだろう。

「…それに……」

「それに？」

何かを言いかけたが、直ぐに「いや、何でもない」と相澤は首を振り、火野達が出て行ったドアを見つめていたのだった。

☆☆☆☆

そして日は流れ、週末日。

休みの日あつてか、A組一同の活動は緩やかであった。

「オッスー、火野お出かけ？」

「ああおはよう、上鳴君。うん、ちよつとね」

「女か？」

「うん違うよ」

制服へと着替えた火野は、談話スペースへ行くと、ジャコジャコと眠たそうに歯磨きをしている上鳴と峰田に声を掛けられ、火野はそう応えて素通りして行くと、階段辺りからドタドタと凄い勢いで降りて来る足音が聞こえる。火野は振り返ると、急いで身支度をした緑谷が「おはよう!!」とすれ違い様に挨拶をし、そのまま玄関へと走り去っていく。遅刻したのだろうか？と火野は心配そうにしていると、机に座っていた切島と常闇に声を掛けられる。

「おお火野、早いな」

「…出掛けるのか？」

「おはよう切島君、常闇君。うん、インターンでちよつとね。切島君達も？」

「まあな、もう少ししたら俺も出るぜ」

「同じく」

2人もインターンに行く事になった様なのか、朝から意気込みをす
る様に拳に力を入れる切島。常闇もまた同様で、いつもとは違う様な
雰囲気を出していた。火野は2人を見て、「頑張つてね」と言い残し、
談話スペースから出て行く。

靴を履き替えた火野は、寮の玄関を開けると、先に外で待機してた
であろう耳郎が出迎えた。

「おはよ、火野」

「おはよう耳郎さん。じゃあ行くっか」

「うん」

鴻上ファウンデーション自ら申し出を申請された火野と耳郎は、切
島達よりも一足先に、本日が校外活動初日ヒーローインターンとなっていた。期待に胸
を膨らます火野と耳郎は、現地に向かう為、三鷹市へと赴いたのだっ
た。

…だが、到着した火野達は、会社の入り口先で用意されていたモニ
ター画面に映っている鴻上会長。

モニター越しで発言された言葉は、出発前の火野と耳郎は予想打に
もしなかった。

『よく来てくれたね火野君!!アंक君!そしてウヴァ君!!』

………それと、………誰かね君は!』

「……………え?」

申請出してくれた筈の耳郎に、衝撃の一言が突きつけられる。その
言葉に耳郎は困惑し、驚愕の表情で立ち尽くしていたのだった。

No. 121 不安から始まった校外活動

電車に揺られて数時間、三鷹市へと到着した火野と耳郎は、インターン先へと向かう為に足を運ぶ。物珍しそうに辺りを見渡していた耳郎がふと、火野に声を掛けた。

「休日なのになんか新鮮だね」

「確かに：職場体験以来だよな、制服来たままこうやって街中歩くの」「だよね。：それにしても、何でウチも面識がないあの会社に呼ばれたんだろ？」

「ん、俺も分からないなあ。あそこの会長、結構個性的な人だから」「ふうん。：火野、鴻上ファウンデーションの人達ってどんなヒーローが居るの？」

たわいも無い会話から始まって、耳郎の質問に火野は「んー」と少し考え込み、口を開いた。

「後藤さんと同じバースの力を持つてる伊達さんがメインだとして：あとは秘書の里中さんとか：俺が知ってるのはそれくらいかな」

火野が言うと、耳郎は「へえ：」と頷く。あの会社には他にもプロヒーローを雇っている様だが、何せ会社が大きいだけあってすれ違った事ですら無い。主にバースが鴻上ファウンデーションの専属プロヒーローなので、インターンでもお世話になるのは間違いないだろう。

暫く、淡々と終わる様な会話をしながら歩いていると、いつの間にか鴻上ファウンデーションの大きな出入り口へと辿り着く。耳郎は聳え立つ会社を「うわあ：」と圧巻した様子で見上げている中、同時に火野も見上げていた。相変わらずの巨大なビルには彼も驚かされていた。

「：やつと着いたか」

「：……ここがあのか会社か」

すると、目的地に到着したのを察したのか火野の身体の中からアンクとウヴァが人間態となって現れる。

軽く首を鳴らしているアंकはさておき、火野は小声でウヴァに声を掛けた。

「ウヴァ、一応言っとくけど……中の人達とは初めての感じで接してよ？」

「ム？……ああ、そうだったな……。だが面倒だ、この奴らにも正直に言ったらどうなんだ？」

「あく……うくん……そうだよなア」

アंकに一押しされて塚内や信吾に事実を伝えたが、今から向かう鴻上ファウンデーションの面々は前世の主要メンバーと言つても過言ではない。事実を伝えるべきであろうが、無関係の耳郎が隣に居るのもそうだろうし、いきなり伝えた所で塚内達みたく困惑してしまうだろう。ウヴァの問いかけに火野は小声で項垂れながら首を傾げると、「火野？」と耳郎が声を掛けてくる。火野はハツとし、「何でもない、行こう」と言つて、足を踏み出して会社の中へと入って行った。

「……………今回は出待ちしてないな」

「え？あ、ああそうだったな……。流石に何度もしないでしょ」

やたら辺りを警戒するアंकがそう呟く。職場体験に入った瞬間に鴻上が出迎えてくれていたが、正直心臓に悪い。火野もホツとしながらホールの方へと向かおうとすると、目の前の壁に大きなモニター画面が取り付けられているのに目が入る。以前は無かった様な気がした火野はマジマジとそのモニター画面を見つめていたその時だった。

『ハッピーバースデーエ!!!』

「!？」

デン!!とサプライズを思わせる様な効果音と共に、ドアップ顔の鴻上が映し出される。思わずビクツと肩を上げて驚く火野と耳郎。だがグリードの2人はそこまで驚かず、アंकは鼻を鳴らしてモニター越しに鴻上に声を掛けた。

「何だ、今回は出迎えは無いのか？」

『ハツハツハ!!単純な話さ…下まで降りるのが面倒だからだよ☆』

相変わらずのテンションにアंकは不機嫌な顔を浮かべ、ウヴァは、何だこいつは?と言わんばかりの表情を浮かべる。それは耳郎も同様に眉を寄せている中、火野は苦笑しながらも口を開いた。

「お、お久しぶりです鴻上さん」

『暫く振りだ!我が社へよく来てくれたね火野映司君!!アंक君!そして新しいグリードのウヴァ君!』

元氣よく挨拶する鴻上。『それと…』と耳郎の方へと視線を送り、間が空くその空気に耳郎は背筋を真っ直ぐにして緊張していた次の瞬間だった。

『誰かね君は?!』

「……え?」

鴻上が発した言葉。それを脳内が理解出来て無いのか耳郎はキョトンと立ち尽くし、再度「え……?」と声を漏らす。火野も目を見開きながら、慌てて耳郎の紹介をする。

「こ、鴻上さん?ほら、俺と一緒に推薦してくれた雄英高の耳郎さんですよツ?」

呆然とする耳郎に手を向けて伝える。だが、鴻上は眉を寄せて口を開いた。

『私は火野君だけしか呼んでない。君の事は申し訳無いが心当たりがンンナツツシングー……だ』

「!?!」

キツパリと告げられたその言葉に、火野と耳郎は驚愕の表情を浮かべる。耳郎の顔は徐々に困惑と焦りを募らせて冷や汗を流し、火野は再び口を動かした。

「そんな筈無いですよ!受け入れの申し出の用紙にもちやんと俺と耳郎さんの名前が記載されてあります!だろ、アंक、ウヴァ?」

「悪いが俺はみていない」

「俺もだ」

「おい!」

証言を聞こうとグリードの2人に言うが、アंकとウヴァは知らん顔をし、火野は少しキレ気味に吠えると鴻上は『ふうん…』と息を吐く。

『すまないが、私は火野君しか呼んだ覚えが無いのでね。…君には帰ってー』

「鴻上さん!!」

今言つてはならない言葉を口にしようとした瞬間、火野は声を荒げてそれを制した。すると、耳郎が「火野!」と割り入り、火野へと声を掛ける。

「た、多分手違いなんだよ。よくよく考えたらウチが呼ばれる事無かったんだからさ……」

「何言ってるんだ耳郎さん!用紙にも君の名前がちゃんと書いてあつただろ!?!」

とにかく!ちゃんと用紙見せるんで上へ行かせて貰いますよ!」

徐々に声が震え始める耳郎。肩も震わせてしまっている彼女を見て、火野は鴻上にそう伝えて「行こう!」と耳郎の手を無理矢理引つ張って歩き始める。

「ちよ、火野……」

「おかしいだろ、相澤先生が直々に言ってくれたのに呼んでないって。他の人…秘書の里中さんなら知ってるかもしれないし、このまま帰させる訳に行かないツ。絶対に呼ばれてる筈だ」

気性が少し荒くなり気味になる火野。自分よりも誰かの為に優先的に考え、他人事にこうも真剣に考えてくれていたのだなど、耳郎は手を引つ張られながらも思い、困惑していた感情は徐々に落ち着きを取り戻している。後から続いて火野達の後ろを歩くアंकに、隣のウヴァが声をかけた。

「あの爺はいいつもあんな感じなのか?」

「あ?馬鹿言え、アレはまだマシな方だ」

ウヴァの質問にそう応え、アंकはエレベーターに乗り込む火野達の後を追った。

☆☆☆☆☆☆

「いやア、よく来た……よく来てくれたな火野クン、耳郎サン！」

鴻上ファウンデーションの最上階、会長室に到着した火野達は、鴻上と一緒にその部屋に居合わせていた伊達とも合流する。本当に火野しか呼ばれてないのか、伊達も耳郎が居る事に驚いたており、ぎこちない挨拶をする。

だが、火野の不貞腐れた顔は変わらずに「こんにちは伊達さん」とだけ言つて彼を素通りし、鴻上が座っている机へ申請された用紙を叩きつける様に見せる。

「鴻上さん、よく見て下さい」

「………確かに、これは私が申請届けに出した用紙で間違い無い！」

「でしたら何でー」

「さつきも言ったが、私が申請したのは君だけだよ火野君！耳郎君の名がここに記載されているのは私自身も!!………予想外の出来事だ！」

「……！」

言い切つた鴻上は椅子に背もたれし、深く息を吐く。納得しない火野の表情を見て、伊達は「まあまあまあ！」と宥める様にフオローに入る。

「こつちとしては火野の事以外何も聞かされてないんだけど良いじゃないですか、1人増えるくらい俺は構いませんから」

そう言つて伊達はチラリと耳郎を見つめる。ここに居てはいけなと言わんばかりに落ち込んでいる彼女の顔に伊達もオロオロと目を泳がせている中、火野は用紙を手にとって伊達へと見せる。

「鴻上さんが知らないのですら別の人が書いたんですか？」

「ん〜…ちよつと今肝心の里中ちゃんが席外しているから何とも言えないんだよね。まあとにかく！火野も彼女も俺が見るからさ、よろしくね耳郎ちゃん！」

「………」

秘書である里中なら何か知っている筈なのだが彼女は業務でここ

に居合わせておらず、伊達は受け入れるつもりで耳郎に声を掛けるが耳郎は俯いたままだった。

「じゃあ誰が耳郎さんを指名したんですか…」と火野は問い掛けたその時、この室内の空気が重いものにも関わらず、ソファで寛いでいるアंकとウヴァが何かを反応したのか顔を上げると同時に、会長室の出入り口の扉が開かれた。

「私が彼女を呼びました」

「！」

声と同時に入って来た人物に火野と耳郎は振り返る。その人物を見たウヴァは血相を変えてソファから立ち上がり数歩後ろへと下がっていた。右肩に不気味な人形を座らせて凜とした表情で喋る人物は、鴻上フアウンデーシヨンの開発部部长であるDr. 真木だった。

「真木さん!？」

「……っ！貴様ア……！」

驚く一同の中、ウヴァは警戒態勢で真木を睨みつける。するとアंकはそれを見て滑稽に思ったのか「フツ」と鼻を鳴らし口を開いた。

「やめとけ。奴はお前の知ってるあの真木じゃない」

「ツ……ああ、そうだったな」

アंकに言われてウヴァはハツとし、気持ちを落ち着かせようと息を整える。だが面影も見た目も前世の真木そのものなので、ウヴァの警戒は消える事は無かった。

「……Dr. 真木、私は知らされてないのだが？」

「申し訳ありません会長。申請を提出する日に私が里中さんをお願いしたので。私の用意した電磁防壁バリアを破壊した彼女の、個性に興味がありましたね」

鴻上の言葉に真木はそう言って説明する。雄英のA組で行われた期末実施試験に火野と耳郎ペアの相手をした真木。火野達を止める為に用意されたバリアを壊した耳郎を賞賛したのだろう。火野と耳郎は目を見開いて驚いている中、伊達は軽く息を吐くと真木に早歩きで近寄り、彼の頬を勢いよくガシツと掴んだ。

「えっ!？」

「伊達さん!？」

突然の暴行かと耳郎と火野は声を上げる。伊達に頬を掴まれている真木だが、人形から目を逸らさずにギチギチと引つ張られる力に負けずと抵抗する真木に伊達は怒りながらも優しく話しかけた。

「ハナシテクハハイ」

「ドクター、こういう話はこっち見て言おうよ、ネ?そんな人形ばかり見つめないでさ。それに勝手な事しないでくれる?会長も俺も知らされてないんだけど、会社として報連相は大事なんだよドクター?」

「それについてへは申し訳ありません。ハナシテクハハイ」

「そもそもこんな人形があるからそう言う事出来ないんだよ。ほら貸しなさい!」

「!!ヤーミーローロー!!ハナーセー!!」

「没収だ没収!」

「ヤーミーロー!!」

人形を取り上げ、必死に取り返そうと声を荒げる真木。そんな2人のやり取りを見て、落ち込んでいた耳郎の顔は徐々に緩み始め、最終的には真木の豹変した姿を見て思わず「ブフツツ!」と吹き出していた。

「と、とりあえず…これで疑問は晴れた…のかな?」

「ハッ、別にどうでも良い」

重い空気は伊達と真木のやり取りで緩和され、火野も安堵した様子で呟くと、アंकはめんどくさそうにそう言う。

そして伊達から人形を死の物狂いで取り返した真木は慌てて定位置の肩へと人形を戻すと、スンと真顔になってアंकへと声をかけた。

「アंक君、君の要望していた物は完成しましたよ」

「やっとか…:…ならさっさとよこせ」

「完成?何だよそれ?」

真木の言葉に疑問を抱いて火野はアंकに尋ねると、話を逸らされ

た伊達が真木に向かつて口を開いた。

「ドクター、耳郎ちゃんはあるのか？」

「いえ、私は観察したいので君が指導して下さい。それに先程自分が見ると仰ってましたよね？」

「ええ…言っただけど…ドクター地獄耳持ちですか」

頭を搔いて伊達は息を吐く。すると、伊達は鴻上に声を掛けた。

「会長、とりあえず火野は元々そのつもりでしたが、耳郎ちゃんもやらせませすよ？」

「ふむ、確かに会社として報連相が出来ていなかった私達の責任もあるようだね…：…よろしい!!では火野君、並びに耳郎君!!」

「は、はい！」

「っ、はい！」

急に声を上げる鴻上に火野と耳郎は肩を上げて返事をする。

「少しトラブルが起きてしまったが！改めて歓迎しよう!!インターン活動を開始するこの1週間!!君達には!!特別に!!!

私の“権限”によって、バイクに乗ってもらう!!」

「「え？」」

No. 122 バイクは自販機!?

「あのっ、伊達さん…バイク乗るって…一体どういう事ですか？」

「ん？あ〜…そのアंकちゃんがちよつと前くらいに提案して来たのよ」

「あんこ…？」

「アंकだ！」

開発部署へと移動の最中、先程鴻上に言われた発言が気になった火野は先頭を歩く伊達に尋ねる。アंकの呼び名のワードに耳郎は首を傾げると後ろにいたアंकが吠え、呆れながらも続けて口を開いた。

「人間の技術は俺達よりも遙に進歩していやがるからなア。前の出来事を考えてあの鴻上に教えてやったら機嫌良く受け入れてくれたぞ…まあ、交換条件も付けてもらったがな」

「交換条件？」

アंकの言葉に疑問を抱く火野。すると、いつの間にか到着したのか、伊達は「着いたぞ」と言って目の前にあった自動ドアが開かれる。

開発部署本部の作業場が視界に広がり、初めて見る耳郎は「わあ…」と声を漏らして見渡していた。ウヴァも同様に無言だが辺りを物珍しそうに見つめている。すると、試作品なのかガラスケースに並べられているサポートアイテムらしきものを目にし、耳郎が指を指した。「すつご…！アレ、テレビで見たことあるサポートアイテムだよ…！めっちゃ高かったような…」

「むっふっふっ、そうだろそうでしょ？今日は特別に好きな物一つ持って帰っていいぜ耳郎ちゃん」

「え、マジすか!？」

「伊達君。勝手な真似はしないで下さい」

伊達の発言に目を輝かせる耳郎だが、黙って着いて来ていた真木が声を出してそれを制す。

「社会見学に来た訳ではない筈ですが？」

「相変わらずお堅いねえ…」

「見学は休憩の時にでもご覧になって下さい」

「へいへい、じゃあ早いところ行こうか火野、耳郎ちゃん、アンコに……」
先を行く真木に伊達は渋々頷き、火野達に声をかけるが、ふとウヴァに目線を送る最中に言葉が出ず、口を開いたままになる伊達。

「えくくつと、アンコと同じグリードの………」

あ、『ウギヤ』だ！」

「は……？ぼっ!?誰だそいつは!?俺の名はウヴァだ!!」

「フツ」

「おいアंक！貴様なに笑っているんだ！」

変な呼び方で驚くウヴァと同時に可笑しくて吹き出すアंक。確かにウヴァと言う名前は呼びづらいのもあるのだろうが、伊達はカタカナの名称や名前を覚えるのが苦手なのもあるようだ。

「ま、とりあえずよろしく！」

「グヌヌ……バース！次妙な呼び方をしたら許さんぞ！」

吠えるウヴァに伊達は「ごめんて」と苦笑しながら開発部の奥へと進んでいく。初めて伊達と出会ったテスト用の実験部屋とは違う場所の横開きのドアの前に着き、伊達は持っていたカードキーらしきものを取り出す。そして認証する場所へとそれをスキャンさせると、ロックが解除され自動で開かれた。

「よっ、後藤ちゃん！」

「お疲れ様です。……暫く振りだな火野」

「後藤さん！え、もしかして…後藤さんも？」

「一応な。学校側の形状、今日から俺も校外活動だ」

白いパネルが部屋一帯に重ねられたただっ広い部屋の中央辺りに居た後藤は、入って来た伊達達に気付き声を掛ける。軽く挨拶を交わしている、耳郎の存在に気付いたのか、後藤は顔を曇らせながら口を開いた。

「君は…耳郎響香？何でA組の君がここに？」

「あ、えつとその…」

もじもじとする耳郎。すると伊達は真木に肘を数回当てると、真木

は察したのか軽く息を吐いて口を動かした。

「私が今回のインターン候補生としてお呼びしました」

「真木博士…がですか…？他人に興味を持つなんて珍しいですね……」

軽く目を見開いて驚く後藤だが、この場に彼女がいるということとは、何か察したのか伊達に声を掛ける。

「ちよつと待って下さい。伊達さん、まさか彼女にも…」

「うん、そう、そおなのよお」

「そうなのつて、良いんですかつ？」

「まあ、なんて言うか…もう会長の『個性』も使っちゃったし、このお人形博士のせいでもあるからさ…しょうがない」

「伊達君、その呼び方は辞めて下さい。くだらない話はその辺にしておいて、早速始めましょう」

真木はそう催促すると、伊達は「せっかちだねえ」と言いながらポケットからスマホを取り出す。誰かと連絡するのか耳に当てるとその口を開いた。

「あ、発目ちゃん？着いたんだけど、早速始めてもらっても大丈夫か？」

『もちろん構いません！というか早速始めましょう!!!』
「うわっ!」

電話越しの相手はサポート科の発目みたいだが、伊達が尋ねた瞬間、火野達が居る実験部屋の天井から突然スピーカーから大声が飛び交った。その声を主は発目で、その場に居た火野達は突然の声でビクツと肩を跳ね上げる。

『やくつと来ましたねオーズのお方、その他の皆さん!!』

「は、発目さんっ？どこから…」

「別室のモニタールームだ。このテストルームのあらゆる所に設置されているカメラで俺達が何しているのかも分かるし、実施された実験のデータもそこで纏めている」

「ハッ、要は監視か」

火野の言葉に後藤はそう言うと、アंकは鼻を鳴らして天井に取り

付けられている監視カメラをキョロキョロと見つめながら言う。「ハイテクだア」と火野は呟くと、スピーカー越しから発目の声が響いた。『挨拶とかはどうでもいいのですのから！ササッと紹介&お見せしますね!!鴻上フアウンデーションの新作のドットベイビーを！』

そう言い終えた直後、テストルームの中央部の白いパネル一枚がガコツ！と何かを外れる様な音と共に両サイドへと展開し始める。

鴻上の人達である伊達等は特に驚いた様子も無くそれを見つめている中、火野や耳郎達は高揚するかのように目を見開きながらそれを見つめる。

そして、四角い穴となった床から新作であろう物体が徐々に競り上がっていき、その姿を現した。

だが、感動する筈の火野と耳郎の顔はその物体を見つめてポカンと固まっていた。

「これが……新作の？」

「こ、これって……え、自販機？」

この世界に存在してある『ある物』に当て嵌まる耳郎がその物体の解答をする。彼等の目の前に現れたのは黒を基調とした人間よりも大きな自動販売機だった。変わった所と言えば普通の自販機とは違い、少し近未来を装った造形となっており、お金を入れて買えそうな缶らしきものも見た事無い銘柄と形が模されている。

『フフフ!!凄くないですか?驚きましたか!?これがオーズのお方達をサポートするアイテム第2号！』

その名も……『ライドベンダー』!!』

「第2号？」

『おやおや、もうお忘れですか?初代はメダジャリバーですよ』

「あゝそっか、そうだった」

ヤミー対策として発目が作ってくれた武器のメダジャリバー。あまり使う機会が無かったのか火野は思い出した表情を浮かべて手をポンと叩いていると、ふと耳郎が口を開いた。

「ライド……?何で自販機なのに乗るって名前なんだろう？」

その言葉を聞いていた火野は「確かに」とハツとする。2人の疑問

を聞いていた発目は『フツフツフツフ、それはですねえ…』と直ぐにでも説明したそうな声で言っていたその時、突然アंकが無言でライドベンダーへと歩き出した。

「アंक？」

咄嗟に名を呼ぶ火野だが、アंकは構わず取り出した一枚のセルメダルをライドベンダーの投入口に入れると、真ん中にある大型の黒いボタンを迷うこと無く押した。

アंकはその場から一步下がったその瞬間、ライドベンダーは瞬間に変形し、完成したその形に火野と耳郎は目を見開いて驚愕した。「うわわっ!! えっ、これってー」

「バイク!? すっごい!!」

ブオン! とエンジン音と共にバイクへと変わったライドベンダーに火野は目を輝かせ喜んでいた。耳郎もそのあと「だからライドなんだ」と納得していると、伊達が驚いた様子でアंकに声をかける。

「あらア? え、アニコ、ライドベンダーのやり方知ってたの?」

「馬鹿言え、俺が考案したんだぞ」

「ええ、そうなの?」

「セルメダルを原料に乗り物として扱える代物…よく思い付いたものですねアंक君」

驚く伊達に続いて真木はアंकを評価すると、アंकは「発案したのはお前ら人間だろ」と小さく呟く。すると、スピーカー越しから発目が声を上げた。

『ちよつとちよつとちよつとアंकさん! 私から説明しようと思っただんですよー!! 真木博士もあまり口出ししないで下さい!』

自分の口から色々と説明したかったのか発目はブーブーと文句を垂れており、耳郎達は若干苦笑を浮かべている中、アंकは「フン」と鼻を鳴らした。

「どオでも良いだろ。俺は乗り方も使い方も知っている。説明は映司達にでもしている」

『確かにそれは言えますね…。分かりました! 気を取り直してオーズのお方とついでにそちらのA組の人! 今アंकさんがやってくれ

た通り、そちらのライドベンダーは自販機モードとバイクモードにもなれる超・優れ物のベイビーのご説明をさせていただきますッ！』
『オホン！』とわざとらしく咳払いをした発目。伊達や後藤、真木はやれやれと肩を竦めている中、火野と耳郎は目の前にあるライドベンダーに興味が引かれている中、発目の熱意のある説明が始まったのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

火野達がインターン活動を開始している同時刻、三鷹市の街中では午前の時刻だと言うのにも関わらず道行く人々が大勢歩いている。

そんな中、小さなビルの小会社の建物の窓から人々を見下ろす様に眺めていた女性が居た。女性は小さく溜息を吐き、机に置かれている化粧水を見つめる。どうやら化粧品を扱う会社の社長なのだろう。

「このままじゃ…ダメだわ」

盛に思える街でも並に乗れなければ商品は売れない。売り上げが著しく結果が出せない彼女は現状に嫌気が刺し、再び溜息を吐いた。

「なるほどね」

「!？」

その時、見知らぬ男の声が聞こえた。今室内には誰もいない筈の他人の声に女性は勢いよく振り返る。そこには人間の姿をしたカザリが化粧水を手に取って立っていた。

「あなた…誰ッ？」

「人間が使うこの商品売りたい…でも、君の欲望はそれだけじゃ無い筈だ」

「何を言ってる!？」

不法侵入の拳句、語りかけるカザリに恐怖を覚えた女性は1歩2歩と後ずさる。だが瞬きをした直後、目の前に居たカザリの姿が消えて

いた。

「君のその欲望…解放しなよ」

「!?」

瞬間、背後からカザリの声が聞こえて女性は勢いよく振り返る。距離を取ろうとしたその時、女性は何故かその場から動けなくなっていた。

カザリの手には1枚のセルメダルが握られており、それを女性に見せると、彼女の額にはメダルを入れる投入口らしき物体が現れる。カザリは彼女の意に問いかける事無く、メダルを額の投入口に投げ入れた。

「うっ……!?ああ……!!?」

チャリン!とメダルが投入される音と共に、女性は苦しみ始める。次の瞬間、女性のお腹に大きな穴が開かれる。その中からあろう事か、包帯で巻かれた腕がぬうつと出てきたのだ。

「ひっ!?」

「怖がる事無いよ。それは君の欲望。君の本当の欲望が具現化したものさ……」

ヌルヌルと自分のお腹から出て来るヤミーに恐怖する女性だが、カザリはそう言い聞かせて悍ましい笑みを浮かべていたのだった。

☆☆☆☆☆☆

「なるほど…、じゃあこのライドベンダーはセルメダルをエネルギーに変えて走行出来るバイクなんだ。最近の乗り物って良く出来てるなあ〜」

「だね」

「何が良く出来てるだ!メダルがエネルギー源?巫山戯るなツ!貴重なメダルだぞ!」

一方、鴻上ファウンダーションでは、発目の説明を一通り聞いた火野達はライドベンダーの性能に感服していた。ガソリン要らずの乗り物に加えて色々と機能が搭載されているバイクに火野と耳郎は感心しているが、メダルをエネルギーに変えると言う発想に気に入らないのかウヴァは文句を垂れてライドベンダーを睨んでいた。それに火野は「でも」と口を挟む。

「街中で事件が起きた時移動が楽になるし、直ぐに駆けつけられるだろ。ガソリンも要らないってもう願ったり叶ったりでしょ」

『フフフフ、そうでしょう!? それにまだ秘密はありますか
らね!』

「秘密だど?」

評価してくれる火野に嬉しさを覚えたのかご機嫌な様子で発目は喋る。『秘密』というワードにウヴァは反応すると、真木が火野達のスタスタと前に歩き出しライドベンダーに近寄る。

「ええ、ライドベンダーにはもう一つの機能があります」

そう言いながら、真木はライドベンダーに手を置き、ボタンらしき物押し込むと、バイクだったライドベンダーは形を変えて再び自動販売機の形態へと変形した。

それと同時に、真木はポケットからセルメダルを一枚取り出すと、アंकと同様にライドベンダーの投入口に入れ込み、大きな黒いボタンでは無く、その上にディスプレイに並べられたカンの形をした物に軽く目を通し、複数ある自販機に模した小さなボタンの一つを選ぶと真木はそれを押した。

『タカ・カン』

ロボットの様な音声が聞こえると、下の排出口に赤いカンが出される。それを真木は取り出すと、手の平に乗せて、プルタブを開封する。

すると、手の平に置かれたカンは一瞬にして変形し、『ピイイ!』と甲高い鳴き声を上げると共に小さな鷹を模した鳥型ロボットへと姿を変えたのだ。

「うわわ、鳥!」

真木達の頭上を自由気ままに飛行し、耳郎が声を上げる中、真木は

説明する為に口を開いた。

「これは『カンドロイド』。プルタブを引くことでセキュリティが解除されメカモードに変形し、メダル投入者のサポートを行う事が出来るサポートアイテムです。このタカカンドロイドは主に偵察や周囲の搜索が可能、ある程度の言語は理解してくれますので簡単な指示を出せます」

「へえ！すっごいっ!!」

「ハツハツハ、だろお！他にも色々あるぞ〜?」

「伊達さん」

感動する火野に伊達は鼻を伸ばして何かを言おうとすると、軽く咳払いをした後藤が呆れた目付きで伊達を見ていた。

それに便乗したのか、壁に寄りかかって座っているアंकも伊達に声をかける。

「おい伊達。くだらん話をしてる暇があったらさっさと乗り方を教えてやれ」

「アंक！すみません伊達さんッ」

相変わらずの態度に火野は代わって謝ると、伊達は察したのか口を尖らせると、渋々口を開いた。

「そだったな。じゃあ…火野、ある程度理解した様だから早速、後藤ちゃんと一緒にライドベンダーの乗り方を教える」

「あ、はい！よろしくお願いしますー!」

本格的な内容に火野もハツとし、伊達にお辞儀をするが、名前を呼ばれてない耳郎に気付き、火野は再び口を開いた。

「伊達さん、耳郎さんは?」

「あくそれはだな…、男の俺が教えるのもなんだから、発目ちゃんが説明している間に代わりの奴呼ばせてたぜ」

「代わり?」

伊達の言葉に火野と耳郎は首を傾げる。すると、それが合図かの様に入り口のドアが開かれ、1人の女性が現れる。鴻上の秘書である、里中だった。

「里中さんッ?」

「…伊達さん。私もやる事があつて忙しいんですけど…」

「まあまあそう言うなつて里中ちゃん。ライドベンダーに乗れるのは現段階で俺と里中ちゃんだけだからさ、ね？」

「……まあ問題はありません。会長にはボーナス上乗せと言う形で交渉してきましたので」

「かあツ、相変わらずそこら辺はちゃんとしています事」

してやられたと伊達は額に手を置いてそう言う伊達。そしてそのまま火野達を見ながら口を開いた。

「よしッ！じゃあ火野、耳郎ちゃんに後藤ちゃん！改めて特例のインターン活動を始めて行くぞ。課題内容はインターン活動が終わるまで、お前らにはライドベンダーの特別運転免許を会得してもらおう事。勿論ヒーローとしての活動もするし、怠らないつもりだ。いいな？」

「はい」

「はいっ！」

「はい！」

一通りの説明を終え、いよいよ始まろうとする特別インターン活動。3人は意気込みを入れて、大きく返事をするのであった。

No. 123 練習と事件と恋愛コンボ？

校外活動インターンの初日を迎えた火野は鴻上ファウンデーションにて、より迅速に現場へと駆けつける為・戦闘のサポートを有する「ライドベンダー」の存在を知り、鴻上会長の「個性」「権限」によってバイクの免許を取得する事となった。真木博士の紹介とは知らずに一緒に来た耳朗、そして別に来ていた後藤合わせて3人の生徒はライドベンダーを乗りこなす為、用意されている講習場にて、練習を励んでいたのだった。

☆☆☆

ブオン!!とアクセルを吹かす音と共に練習用の大型バイクに乗った人物はS字のコースを軽快に走らせる。その運転捌きは驚く程に器用なもので、監督で見届けていた伊達も思わず「おお…」と声を漏らしていた。

教えたコースを一通り走り終え、指定された場所へと止めると、火野はヘルメットを外してエンジンを切り「ふう…」と一息を吐いた。「おいおいマジかよ、スゲーな火野ツ。ちよつと教えただけで結構乗り回してんじゃないの!?さてはコソコソと乗ってたなア?」「というか……素人とは思えない運転技術だな」

「い、いえいえッ、そんな事ないですよ!今日乗ったのが本当初めてなんですッ。初めてなんですけど…えつと、何て説明すれば良いか…なんか、乗った感じが初めてじゃないような気がして……」

歩み寄って来た伊達と後藤は驚いた表情で声をかける。丁寧に教えたとは言え、素人が中型以上のバイク…否、そもそもバイクを一度乗っただけで簡単に乗りこなす事など出来ない。火野はあたふたしながらそう言い訳をしていると、いつの間にか立っていたアंकが「フン」と鼻を鳴らして火野に近寄ると、耳打ちをする様に口を開いた。

「大方、前の記憶が身体に馴染んでたんだろ」

「あ〜…」

その言葉に火野は納得の声を漏らす。表情は打って変わって「え、そうなの？」と言わんばかりに顔を顰める。前世の元の精神をそのまま引き継いだのならその説も妥当な考えとも言えるが、記憶はリセットされた以上火野は解釈も出来ず困惑するけど顔を浮かべていた。

すると、伊達はアंकに声を掛ける。

「アंक、お前乗らなくて良いのか？」

「…………。ハッ、俺は発案者だぞ？あんな乗り物くらい簡単に乗りこなせる」

「そうは言っても、世の中決まりつてのがなあ…」

「フン、また人間のお得意の規則か？言つとくが、仮に映司が乗りこなせる様になつたら、その脳内を見て俺も自在に扱えるようになる。これで何も問題がないだろ？」

「マジ？もしかしてウギャモか？すっげえな」

「ウヴァだ！バース、巫山戯るのも大概にしろ！」

唯我独尊の如く技術の大変さを覆すように物申すアंकに、伊達は返ってその性能に驚いていた。練習場を見ていたウヴァが声を荒げる中、後藤は火野に声を掛ける。

「火野、今度は俺が乗る」

「ああ、わかりました。…あ、ヘルメットはいつ」

「全く、お前の直感的な神経は逆に感心する。俺も負けてられないな」「そ、そんな事ないですよ。後藤さんの方が俺なんかより上手ですし、俺もまだまだですから」

「相変わらずの謙遜だな。俺こそ、まだ乗らしてもらってまだ間もないんだ。…………でもまあ、せめてこの先輩らしい所は見せないとな」

ヘルメットを被り、バイザーを下げながら後藤は小さく呟く。その声に火野は「え？」と声を漏らす。後藤は「なんでもない」と言っ
てバイクに跨り、アクセルを吹かして走行させて行った。それを見届けていた火野は、別方向へと視線を向ける。そこには教官をしている里中と、倒れたバイクをゆつくりと起こす耳郎の姿が目に入っている。

た。

「よいしょっ…と、うわッ本当に起こせた」

「はい。足を密着して支え、持ち上げれば重たいバイクだろうと女性でも難なく持ち上げられます。もっとも、雄英で鍛えられた身体あつてこそですけどね、流石です」

「あ、ありがとうございます…。ふう…」

「緊張してますか？」

「は、はい…。バイクなんて初めて乗るもんですから…。里中さんはどうでしたか、運転の方は」

「どうも何も、私は通勤時にバイクを使用しますので、乗り慣れていきますよ」

「マジっすか」

「マジです。さ、お話はこれくらいにして本題に入りますよ。次は実際に走行してもらいます」

「は、はい！」

常に冷静に喋る里中。ビジネスが Motto と聞いてはいたが、面倒見が良さそうな雰囲気を見て火野は微笑ましく見ていると、伊達が声を掛けた。

「火野、お前の番だぞ次」

伊達の声に気付けば、後藤は走り終えたのかいつの間にかスタート地点にバイクから降りていた。「は、はい！」と慌てて火野は返事して向かおうとすると、悪戯心を得た笑みで口を開いた。

「どしたどした。耳郎ちゃんの事が気になって仕方ない顔してるな？」

「え？ああそうですね…。訳もわからずここに来てしまったんでちよつと心配で…」

「そりやお前もだろ？いや、そうじゃなくてだな、俺が気にしたのはそつちじゃあないんだよねエ…」

「え？何です？」

キョトンとする火野に伊達は苦笑しながらくりと半回転し、「最近の子は興味無いかねえ」と呟く。再び火野はキョトンとしなが

ら、首を傾げ、そのまま練習を続行したのだった。

☆☆☆☆☆☆

「おい見ろよ、あの人スゲー美人じゃね？」

「ホンマや、どっかのモデルさんとちやうか？」

「やべエ、普通に見惚れちやう…」

火野達が練習に勤しむ中、三鷹市の街中で1人の女性がその場を歩いている美しい姿を、人々は野次馬の様に彼女の美貌を見惚れていた。市街地なら、若い女性も多く街中を歩いてはいるが、人々が立ち止まって見るほど絶世な美女はそう存在しない。

それもその筈、彼女はグリードのカザリによって欲望を露わにした化粧品会社の女性だ。

快楽に堕ちたその表情。その心の奥底では、欲望と言う名のセルメダルが1つ、また1つと貯蓄されていく。その音をビルの屋上から聴いていたカザリがニヤリと頬を上げた。

「世界は違っても、欲望はどの世界でも同じ…。フフ、人間は本当に欲深い生き物だね。ま、こつちが助かるけど」

そう言いながらカザリは目線を1つのビルに向ける。そこは下にいる女性の小さな会社だった。その中にある部屋の片隅には、繭みたいなモノに覆われた卵が、鼓動を打つ様に不気味に、脈打つ様に動く。それはまるで、彼女の中にある欲望のセルメダルに反応するかの様だった。

☆☆☆☆☆☆

再び鴻上フアウンデーションにて、午前の実技練習は終了し、昼飯の時間となり広々とした食堂ルームで従業員達が食堂を訪れ、食事を

とっている中、火野、耳郎、後藤もまた食事をとっていた。朝昼晩の食事は鴻上から提供されるので、学生の彼らにとっては非常に有り難く堪能していたのだが、飲み物を口から離れた耳郎が「あー…」と気の抜けた声を出しており、気になった火野が口の中にある食べ物を飲み込んで声を掛けた。

「お疲れ様、耳郎さん」

「火野もお疲れ様、いやア…バイクなんて縁が無かった乗り物なのにさ…。火野と後藤がマジで羨ましいよ、何であんなに簡単に乗れるの？」

「俺はこの関係者だ。かなり特殊なバイクだが、仕組みと技術が分かればなんともない」

「俺は、え〜つと身体がすぐ慣れた…って感じかな？」

「軽く才能を見せつけられた気分なんですけど…」

聞く相手を間違えたと言わんばかりに耳郎はため息混じりの息を吐く。

そもそも校外活動インターンでバイクの免許を取得するという目的でさえ衝撃の出来事、その上何も予兆無しに、土日である休日の今日明日は泊まり込みで練習する事になっているのだ。平日は普段通り学校も行かなければならないし、終われば就寝前まで鴻上ファウンデーションでバイク講習というハードなスケジュール。『休みが無い』、それを分かっていても、しんどい事は目に見えているので耳郎は少し不服そうな態度を見せていた。

ふと、そんな彼女が目に入ったのか後藤が口を開く。

「…しんどいのは察するが、普通ならバイクの免許を取得するのに1ヶ月は必要な期間だ。それを1週間そこらで取れって言われる方が現実的に厳しい条件だからな」

「…耳郎さん、もししんどかったら無理しなくても大丈夫だからね？」

後藤に続いて火野も心配そうにフォローに入る。もともとこの校外活動インターンは火野だけがA組で受ける特別な案件だったのだが真木博士の独断で耳郎も半ば強制で受けている。思いもよらない活動内容

に後藤もフオローせざるを得なかったのだろう。そんな彼らの言葉に俯き気味だった耳郎は「……いや」と顔を上げた。

「ちよつとハードだけど、バイクが乗れるなんて滅多な事だし、経験しとかないとツ。それに、ウチもヒーロー目指してるのにこんな弱音吐いてる場合じゃないからね。ありがと後藤、火野」

「ツ、うん！ そうだね、よオし午後も頑張るぞ！」

彼女のやる気を見せる微笑ましい表情に火野もやる気を見せて声を上げる。後藤も軽く頬を上げて鼻で笑っていると、「そう言えば」と火野は何か思い出したのか後藤に尋ねた。

「後藤さん、バイク取得だけが今回の校外活動インターンなの？」

「いや、一応校外活動インターンの定でここに来てる訳だから合間を見てヒーローとしての訓練を行うそうさ」

「あく、そうだよね」

「……アハ……ハ……」

予想はしていたが、そうであつて欲しくない後藤の発言に火野は顔を顰め、耳郎は思わず悲しみの笑みを浮かべていたのだった。

☆☆☆

「…お、来たね」

三鷹市のビルの屋上。

気配を察知したカザリは不気味な笑みを浮かべ、顔を向ける。ビルの中にあつた繭に覆われた卵から亀裂が入り、パチュツ！と弾ける様にエイサイヤミーレは産まれた。小型のヤミーと言えど、次々と卵から産まれて部屋一帯の空中をウヨウヨと泳ぎ始める。

「フフツツ、存分に暴れなよ。渦巻く欲望と言う海の中をね」

食べ終えた火野は、突然身体の何かに違和感を感じる。それと同時に近くに座っていたウヴァもまた「ん…」と何かに気付いたのか顔を上げる。

次の瞬間、火野は突然バツと立ち上がる。

「火野？どうし……」

耳郎は声を掛けようと火野の顔へと視線を向けた直後、耳郎の言葉が止まった。彼の眼は左右共に紫色へと変色していたのだ。火野自身もこの感覚が何なのかは薄々察していた。それは紫のメダルの力だと。恐らくヤミーが現れる、即ち欲望の力が現れると紫のメダルがそれに反応したのだろう。

「この感じ……まさか……!!」

「ヤミーが現れた…カザリか!」

「!?!」

ヤミーと言うワードに耳郎と後藤は顔色を変えて席から立ち上がる。すると、何処に行っていたのか、食堂の窓に足を掛けるアंकが姿を現した。

「映司、ヤミーだ。しかもかなりの数の気配だ、その中には——」

「カザリだろ？分かってる、俺も感じるから」

「ツ…お前、紫のメダルか？」

「ああ、何となくだけど俺も分かるんだ」

「チツ、馬鹿が。オールマイトの約束忘れた訳じゃないだろな？その力はあまり使うなツ……だがまあ、それなら話が早い。とつとと行くぞ。久々のメダル稼ぎだ、奴からもコアメダルを奪い取るチャンスだからなア」

ヒーロー仮免許取得の会場で殆どのコアメダルを奪われてしまったアंकは屈辱を晴らせると言わんばかりの不敵な笑みを見せると、そのまま窓の外へと飛び降り去って行く。

高層ビルの上層階に近い場所に居るので、その破天荒な行動に耳郎は「えっ、ちよっ、ここ何階…ツ」と目を見開いていると、後藤はス

マホを取り出して耳に当てた。

「火野、耳郎、俺は伊達さんに連絡する！コスチュームに着替えて下で待機しろ！」

「あ、うん！」

「わかった、ウヴァも行くよ」

「フン。カザリの野郎に会えるのなら、ついて行く価値はあるか」

☆☆☆☆☆☆

「うわあ、^{サイラン}敵だっ！」

その一方で街の方には、何処からとも無く現れたエイサイヤミー。

サイの怪人がイトマキエイを背負ったような風貌と見た目のグロテスクな姿に怯えて市民達は恐怖し、逃げ惑う中エイサイヤミーは高らかに笑う。

「フハハハ、醜い！醜い人間共め！美貌を求めぬ者に価値は無い！」

悪党に相応しい台詞を吐き捨てながらも、エイサイヤミーは街を横断し、その口から水を纏った弾を辺りへと吐き散らす。壊れて行く建物の瓦礫が落下していく中、飛翔していたアंकがエイサイヤミーの前へと降り立った。

「…あ？なんだ、また混合系のヤミーか。まあ、カザリ奴がガメルとメズールのコアメダルを持ってやがるからこんな芸当が出来るのも訳ないか」

猫系のグリード、カザリは以前アंकから奪った重量系と水系のコアメダルを持っている。恐らくそれらを組み合わせれば目の前にいる混合系のヤミーを作ったのだろう。

前世もそうだった手口を使っていた為か、アंकは皮肉そうにエイサイヤミーを睨みつける。

すると、人々の騒ぎの中火野、ウヴァと耳郎がアंकの元へと駆け

付けた。

「アンクツ」

「映司、奴はカザリが生み出した混合系のヤミーだ」

「混合系だと？カザリの野郎、妙なヤミーを…」

自身の知らないヤミーを見てウヴァはカザリに怒りを覚える中、耳郎は状況を見渡しながら口を開いた。

「あれってUSJの時のヤミー!?早く伊達さん達に知らせないとー」

「知らせるも何も、ここにヤミー専門のヒーロー様がいるだろ」

「えっ?いや、ウチらはまだ仮免のヒーローだし、ヤミーを見つけ次第、俺に知らせろ」って伊達さんが…」

「あ?フン!そんなの待つてられるか!お前が勝手に知らせろ。もつとも、アイツはそんなの待つてはくれなさそうだが?」

仮免許を取得したとしても、個人でのヒーロー活動は厳禁されている。火野、耳郎、そして後藤は現場に来たとしても、悪魔で伊達のサポートであつて、避難誘導が優先的。

ここに来る前に、伊達と後藤、火野と耳郎で別々に行動し、耳郎の言う通り伊達にはヤミーを見つけ次第無理な戦闘を避けて知らせろと命令されている。

だがもう一つ言われている事があつた。

「耳郎さん!ここは俺が被害を食い止めるから、伊達さん達にこの場所知らせて!」

伊達に言われたもう一つは、ヤミーを先に見つけたら、〃防衛として戦闘をしろ。危なくなったらその場から離れろ。〃

その命令に従う火野は耳郎にそう告げ、オーズドライバーを腰に宛い、装着する。

「わ、わかった…火野、気を付けてよ!」

「うん。アンク!」

耳郎はそう言い残すと、逃げ惑う市民達に向かって「あちらに避難を!」と声を張り上げ誘導を始める。

迅速に避難誘導をする耳郎を誇らしげに見つめる火野は、エイサイ

ヤミーへと振り返り、アंकにメダルを催促するよう手を差し伸ばした。

一方でアंकはタカのメダルを取り出すが、トラのメダルが無い以上タトバに変身は出来ない。

「…まあ、一度戦った相手だ。俺のメダルじゃ相性が悪いな。おいウヴァー！お前のメダルを映司に渡せ」

「ああ？嫌に決まってるだろ、コアメダルは貴重なんだッ」
「おいアंक！」

敵を目前としている状態でまた喧嘩かと火野は怒号すると、アंकは舌打ちしながらもウヴァに話を持ち掛けた。

「ウヴァー！奴の属性はメズールを多く引き継いでいる。俺のメダルじゃなく、お前のメダルなら戦いが有利になるぞ」

「ム？……そこまで言うなら、2枚、2枚だけだ」
ウヴァはそう言いながらカマキリとバツタのメダルを取り出す。

アंकは「よし、映司！」と、ウヴァも「映司！」と言って2人からメダルを投げ渡された。

ソレをキャッチした火野はコアメダルを3枚ドライバーへと装填し、右腰のオースキャナーを取り出し、ドライバーへとスキャンした。

「変身！」

タカ！

カマキリ！

バツタ！

頭部は赤、胴体から下は緑の昆虫をモチーフとした形態。タカキリバツタとなり、オーズは「ハアッ！」とファイティングポーズを構える。戦闘態勢に入ったと認識したエイサイヤミーは腕を大きく振るい、オーズ目掛けて突進してくる。

サイのヤミーだけあつてか、真つ直ぐ突進してくる相手にオーズはその場を動かさず、両腕に仕込まれた強化外骨格カマキリソードを持つ。

「ハッ！」

「!?」

そして、突進攻撃をひらりと横に交わしたオーズはカマキリソードを一撃、二撃とエイサイヤミーに当て、火花を散らしながらエイサイヤミーは体制を崩す。

更に追撃にとオーズは連続攻撃を繰り返し、エイサイヤミーは地面を転げ回る。

「ハアッ！セイッ！」

「うがつ!？」

「つとッ！やっぱコレ使いやすいなあ」

とても頑丈な相手ではない限り攻撃が通りやすいカマキリソードにオーズは満足感を抱いてると、心なしかウヴァは「フン」と満足気に鼻息を漏らす。それを見ていたアंकは「単純単細胞が…」とボソツと呟いていた。

「オーズ！貴様も醜い存在!!私が消し去る！」

体勢を立て直したエイサイヤミーは怒号し、オーズに再び突進攻撃を仕掛ける。が、オーズはギリギリまで引き付け、バツタレッグの脚力を活かした強靱な蹴りをお見舞いし、ガラ空きとなった背中にカマキリソードを連続で斬り込んだ。

「ハアッ！」

「ウオツ!？」

火花を散らして倒れ込むエイサイヤミー。

オーズは追撃をお見舞いしようとカマキリソードを構えたその時だった。

何かを飛ばしてきたのか、オーズの辺りの地面に衝撃が走り、火花が飛び散った。

「うわっ!？」

不意を突かれたオーズはその場でよろけ、その攻撃にアंकとウヴァは何事かと飛んできた方向へと目を向ける。すると、そこには怪人態となっていたカザリが立っていた。

「カザリ！」

「やあアंक、それにウヴァ。まさかまた君達が一緒に行動しているのを見れるなんてね。悪いけど、せつかく成長したヤミーなんだ。邪魔はさせないよ」

「おいカザリ！コアメダルを返して貰おうか！」

そう言い放ったウヴァは自身の身体をメダルに包まれ怪人態となり、カザリへと飛び掛かる。だが、攻撃を仕掛けるも容易にソレは止められ、小さい溜め息混じりにカザリは口を開いた。

「返して貰うって、このメダル君のじゃないでしょ？それにその状態で今の僕に勝てるっても？フツ!!」

オーズに2枚を渡している為、ウヴァの持つメダルは自身のコアを入れて2枚だけ。その為、怪人態となっても胴体も脚も不完全な状態だった。対して自身のコアメダル3枚に加えて、ガメルとメズールのコアメダルを取り込んだカザリは簡単にウヴァを弾き返すと、その腕から大量の水を放出し、ウヴァは諸に直撃する。

「うおおっ!?!」

「ウヴァー！」

「ちっ！メズールのメダルか」

水圧で吹き飛ばされるウヴァにオーズは声を上げ、その能力に面倒だと不満を抱くアंक。すると、カザリに集中してしまっているオーズにエイサイヤミーが突進し、オーズは直撃してしまふ。

「だあ!?!」

「映司！ったく、何やってやがる！」

「ぬう…！おい映司、メダルを返せ！奴に一泡吹かせてやる！」

「痛た…メダル返したら俺戦えないだろツ。アंक、お前のメダル貸してよ」

少しでも力を取り戻して反撃をしようとオーズに催促するウヴァだが、代わりにとオーズはアंकに声を掛ける。

「…まあ、今はその方が良さそうだな」

エイサイヤミーには相性が悪いが、カザリがいるとなると、コンボの方がこの場を切り抜けるリスクが高い。アंकはクジャクとコンドルのコアメダルを取り出し、オーズに投げ渡そうとしたその時

だった。

カツン：カツン：とヒールの足音が聞こえる。怪物が現れたこの場所に誰かが近付いて来たのだ。オーズ、アंक、ウヴァは足音のする方角へ視線を向けると、そこにはヤミーの親である女性がこちらへと歩いて来る。

「あ？奴はヤミーの親か……。：!!」

一瞬気を取られたアंकだが、その瞬間ある記憶が蘇った。前世にもエイサイヤミーが現れたが、その欲望は「美しくなりたい」。その時のオーズ、火野は、一種の呪いに犯された。

ハツとしたアंकは「映司！」と声を荒げるが、時は既に遅かった。オーズはその女性を見つめると時間が止まったかの様に固まり、なんとその場で変身を解いてしまう。

「おい映司!!」

「な…なんて綺麗な女性なんだ…:!!」

誰もが目を引いてしまうくらい的美貌へと変貌した女性を見たその目は一目惚れしてしまい、火野は彼女に夢中になってしまっている。

「お、おい映司！何してやがる!?!」

ウヴァも驚きながら火野の肩を掴んで揺さぶるが、ウヴァに見向きもしない程虜になっている。すると、カザリが「フフ」と笑みを浮かべた。

「前にも見た光景だね。これはデジャヴってやつかな」

「チツ！あんの馬鹿が！」

舌打ちをしながら、アंकは火野に近寄る。すると、火野は片手で胸を抑えながらアंकに声を掛けた。

「アंकく、なんか変なんだ…:!コンボでも無いのに、胸が苦しくて…なんかドキドキしてる…:!!」

「前にも聞いたぞ、おい映司！しっかりしろ！」

取り乱す火野にアंकは正気を保たせようと呼び掛けるが、火野はアंकに見向きもせず、その場で変身ポーズを行った。

「これって…:恋愛、コンボ!?!」

ラブ！♡

ラブ！♡

ラブ♡！！♡

ボーンボーン♡と火野の脳内でハートを全面に模されたポップテ
イストなオーズが妄想で現れる。

魅了されている火野に、アंकは深々と溜め息を吐いて「馬鹿か！」
と怒号したのだった。

No. 124 2人のバースと呪いと告白

校外活動インターンが始まり、鴻上ファウンデーションで活動している最中に市内でヤミーが現れたと情報が手に入った火野達は、現地へと向かう。そこでカザリと出会う最中、ヤミーの親である女性に、火野は魅了されてしまったのだった。

「誰だか存じませんが、ヤミーこの子は私の大事な存在です。出来れば、手を引いてくれると嬉しいのですが…」

「え〜困ったなあ…、でも…君の頼みなら仕方ないかなあ」

「なに馬鹿な事言つてやがる！映司しつかりしろ！」

女性の頼み事に普通なら絶対^に断る筈だが、魅了されている火野はすんなりと承諾しようとしてしまい、アंकは頬を掴んで気を引かせようとするが、彼の顔は「エへへ」とニヤついているだけだった。すると、ウヴァが火野のオーズドライバーから自分のコアメダルを抜き取る。

「おいウヴァ、何しやがる!？」

「フン、使いものにならない奴がメダルを持っていても仕方ないだろ。俺がカザリを叩き潰す！」

そう言つて、ウヴァは2枚のコアメダルを自身の身体に取り込むと、力を取り戻し、上半身にウヴァの鎧が生成される。腕の刃をギラリと構え、ウヴァはカザリへと駆け出した。

だが直後、ウヴァの横から突進してきたエイサイヤミーにぶつかり、吹っ飛ばされる。

「うおっ!？」

「邪魔はさせません！」

「ムウ！ヤミー如きが、グリードのこの俺に楯突くか！」

「余所見していいの？ハッ！」

エイサイヤミーに気を取られ、カザリの繰り出す水流にウヴァは直撃し、そのまま後方へと吹き飛ばされるウヴァ。

「がつ!?ア、アंकク!」

2対1では不利だと思ったのか情けない声でアंकクへと縋る。その貧弱そうな声を聞いたアंकクは「役立たずが…!」とキレ気味に火野を突き飛ばして、右腕に力を入れたその時だった。

『ピイイツ!』

「!?」

突然、空から滑空して来たタカカンドロイドがエイサイヤミーへと降下し、その嘴でつつく様に攻撃を仕掛けた。カザリも何事かと気を取られる最中、突然銃弾の様な弾がカザリへと命中する。

「うっ!?何!?!」

「大丈夫か火野、アंकク、ウギヤ!伊達明、助太刀に来たぜ!」

カザリが見る方角に、アंकクは振り返るとそこには伊達がバースバスターを構えながら吠えていた。隣には後藤と耳郎が立っており、アंकクに突き飛ばされて座り込んでいる火野へと駆け寄った。

「火野、大丈夫かツ?」

「大丈夫、俺は幸せだからあゝ」

「え、ちよつ、火野どうしたのツ?」

明らかに様子がおかしい返事に耳郎は困惑する中、アंकクは「ヤミーの呪いに犯された」と一言交わすと、耳郎は「ええっ!」と驚愕する。その間、伊達は追撃にとバースバスターからセルメダルの銃弾を放ち、カザリに何発か命中させ、火野やアंकク達に近づけさせないよう距離を取らせた。

「ツ!バース、やつぱり君もこつちに来てたんだ」

「え!?なんの話だっ?お前とは初対面なんだけど!俺ってそんなに有名な人ツ?」

カザリの言葉に疑問を抱くが、一応プロヒーローなので、そこそこ名が知れているのかと勘違いをし、勝手に納得する伊達。

その隙にと、アंकクは火野の元へと駆け寄り、耳郎に声を掛けた。

「おい、コイツは今使いもんにならない。早く別の場所に連れて行けッ」

「アंकク、何があつたのっ?」

「ヤミーの毒気にやられた。話は後だッ、さっさと行け」

「わ、わかった。火野、行くよっ」

「えく待ってよ耳郎さん。あの人にもっと話したいんだけど…。
あ、耳郎さんって恋した経験ある〜?」

「はあっ!?ちよ、な、何言ってるのっ!?!」

両脇に手を入れて立たせようとする耳郎に、火野は尋ねると耳郎は耳を真っ赤にさせながらその発言に驚いた。少し別行動した間に何があったのか分からず、とりあえずアंकクの言う通りにして耳郎は力づくで引つ張り、足に力が入っていない火野を引き摺る様に連れ行つた。

それを軽く見送ったアंकクは、戦況を見返す。

伊達はカザリにバースバスターで迎え撃ち、エイサイヤミーにはいつの間にかウヴァが交戦を始めていた。「さつきはよくもやってくれたな!」と声を荒げるウヴァに、調子の良い奴だとアंकクは睨みつける。

同時にふと、周囲を見渡すがいつの間にかヤミーの親である女性がいなくなっていた。伊達達が来てまずいと思っただろうか。その女性の行動に、アंकクは舌打ちをすると、後藤がアंकクへと駆け寄る。「アंकク、あいつは…」

「ああ?…ああ、奴は俺やウヴァと同じグリードだ。そこらのヤミーとは訳が違う。後藤、映司は使い物にならない。お前等だけで奴と戦え」

「火野の奴、何かされたようだな。つたく、何やってる…」

察しが良い後藤は呆れた物言いをするが、それについては「同感だ」とアंकクも頷いていた。

すると、戦闘態勢に入るのか後藤も所持していたバースバスターを構え、「伊達さん!」と伊達の方へと駆け出した。

「あいつは前話したグリードです!普通のヤミーとは訳が違います!」

「っ、だろっうな!バースバスターを撃ち込んでもあんま効いてる気がしないしよ…!ここは本領発揮と行きますかねェ」

バースバスターの威力を持ってしても、カザリにダメージを与えている様子は殆ど無く、ケロツとした姿勢でこちらを見つめていた。伊達はバースバスターをポイッと投げ捨てると、持って来ていたバースドライバーを取り出し、腰へと装着する。

「伊達さん、僕も一緒に!」

「……そうだな。仮免とは言えお前も免許を持ったんだ。後藤ちゃん!俺が仕掛けるから、フォローよろしく!」

伊達の言葉に後藤は嬉しかったのか、「はいっ!」と強く頷き、バースドライバーを腰に装着する。2人は並び立つと、持っていたセルメダル1枚を取り出し、伊達は指で弾き、後藤は器用に持っていたセルメダルをバースドライバーのバースロット^{投入}へ投げ入れる。

そして、伊達は弾いたセルメダルをキャッチした。

「変身」

「変身っ」

《カポーン…》

《カポーン…》

2人はバースドライバーのグラップアクセラレーター^{ダイヤアル式ハンドルレバー}を回すと、^{中央部}の^{カプセル}トランサーシールドが展開される。

伊達と後藤を包む様にドームの様なエネルギーが形成されると、複数のカプセルがアーマーを創り出し、その身に装着され、2人は仮面ライダーバースとなった。

「さて、稼ぎますか。おいウギヤ!そっちのヤミーは任せても良いか!」

「ウヴァだ!うおっ!」

手を握り合わせながら、バース(伊達)は呼び掛けると、またしても名前を間違えられ吠えるウヴァだが、余所見した隙にエイサイヤミーの一撃をもらってしまふ。「くそっ!」と腹を立て、そのままウヴァはエイサイヤミーと戦いを続行しているのを見る辺り、ヤミー相

手は任せても良いだろうと判断したバース（伊達）は「よし」と頷き、カザリへと駆け出した。

そしてそのまま、バース（伊達）はセルメダルを1枚バース^投スロット^入に入れると、グラッ^{ダイアル}プア^式クセラ^{ハンド}レータ^{ドル}ーを回し、武装を形成する。

《カポーン… 『ドリル・アーム』》

右腕のカプセル部分からアームが出現し、『バースCLAWS・ドリルアーム』が装着されると、バース（伊達）は「うらア！」と高速で回転するドリルアームで殴り掛かる。回転されるドリルにカザリは防御態勢を取るも、削れる様にその攻撃は腕へと当たり、数枚のセルメダルが落ちながら「くっ！」とダメージを与えられた。

そのまま追撃にとバース（伊達）はドリルアームを振り回すが、カザリは飛び退く様に避けて距離を取ろうとする。追いかけている間に攻撃を仕掛けるバース（伊達）。

すると、バース（後藤）はセルメダルを2枚^投取り出しバース^入スロット^口に連続で入れると、グラッ^{ダイアル}プア^式クセラ^{ハンド}レータ^{ドル}ーを回した。

《カポーン… 『ドリル・アーム』》

《カポーン… 『クレーン・アーム』》

音声が鳴り、右手・右肩のカプセルが展開されると、右肩・右腕全体を纏う武装が出現し、バース（後藤）に装着される。それは肩に搭載される小型のクレーンで、腕の部分にはドリル・アームが装備されていた。これが『バースCLAWS・クレーン・アーム』だ。

「ハッ！」

バース（後藤）はフックのドリルを射出すると、ワイヤーがカザリ目掛けて伸び、カザリの肩部分に高速回転したドリルが突き刺さる。「うぐっ!？」

痛みに硬直するカザリだが、直ぐにドリルを払い除ける様に引っこ抜く。それを見ていたバース（伊達）は「おおっ」と声を漏らし、バース

ス（後藤）に向かつて口を開いた。

「スゲエな後藤ちゃん！そんな使い方もあつたんだな！」

「当然です！マニュアル読んでください伊達さん」

「俺マニュアル苦手なんだよなア…。やっぱこういうのは実際使つてなんぼでしょッ」

言い訳をするバース（伊達）にワイヤーを収納しながら「後が困りますよ！」と喝を入れるバース（後藤）。そして再びドリルを射出するバース（後藤）だが、カザリは横に飛び退く様にソレを避ける。威力は充分だが反動がデカい為、その攻撃パターンを読まれてしまうのが欠点でもあり、バース後藤は「くそっ」と舌打ちをする。

「流石にバース2人相手じゃ部が悪いね。ここは一度退かせてもらおうよ」

カザリはそう言うと、その場から跳躍してビルを登り、姿を眩ました。一方でエイサイヤミーも頭部から高圧の水を吹き出し、ウヴァに浴びせる。その怯んだ隙をついて、エイサイヤミーも駆け出し、その場から逃走してしまった。

「ッ！クソッ、逃げ足だけは相変わらず早いなア…！」

既に遠くまで逃げたカザリを見つめて、アंकは舌打ちをする。バースの2人もやるせない表情でその場に立ち尽くし、ウヴァもまた「クソ！」と悪態を吐いていた。

「まあ、被害は最小限で済んだな…。問題は…。」

兎にも角にも、民間人は逃げてくれた様で負傷者は誰もいない事を確認したバース（伊達）はドライバーからセルメダルを抜き取り、変身を解除する。そして、小さく息を吐きながら伊達は、耳郎に肩を借りている火野を見遣ったのだった。

「……とまあ、今回の事件はこんな所ですかね」

「ふむ、アंकとウヴァに続いて同じグリードのカザリ!! 実に興味深い!」

一旦鴻上フアウンデーションへと戻ったアंक達。伊達は1人、報告書を纏めて、鴻上の会長室へ訪れ、今回の事情を説明し終えた所だ。同じく、部屋に滞在して鴻上のケーキを食べながら里中が口を開く。

「厄介ですね。今までのヤミーとは違って、人間からヤミーが産まれるなんて…」

「そこはアंकから聞いたから俺もよく分からないだよな。あいつが言うには、『それが本来のヤミーだ』とか言っちゃってたけどよ」
「今まで君達が相手をしていたヤミーは敵の脇真音サイランが生み出したヤミー。恐らく! 私の推測だが紛い物の生物にすぎないだろう!」

鴻上の言葉に「そうでしょうね」と里中は頷き、ケーキを頬張る。ここ最近この三鷹市では、敵サイランの出現もそうだがヤミー絡みの事件が相次いでいた。ヤミーを作り出せる脇真音の仕業だろうが、何故この場所近辺に暴れさせているのかは定かでは無い。親玉の脇真音を捕まえればその事件は無事に終わるが、目撃情報は出ていない。だが、ヤミー専門のバース達にとっては倒せばセルメダルを回収出来るので好都合でもあった。

「何にせよ、今はグリードとその親となる人物を見つけるのが最優先だな」

今は深く考えず、目の前の事件を解決せねば、人々の安心は拭えない。伊達は決意すると、鴻上が「ふむ、ところで…」と伊達に尋ねた。「火野君は現在どうしているのかね?」

「え? あー、それなら…」

伊達はそう言っつて、机の上に置かれていたリモコンを手に取り、鴻上の座っている横のモニターに向けてボタンを押す。

そして、映し出された映像に鴻上とケーキを食べようとしたフォークを止めた里中は思わず目を見開いた。

「ほほう！これは…」

「…何があつたんですか？」

「まア、色々だね…」

そこに映っていたのは、箒を持ってせっせと事務所内を掃除している火野…では無く、変身しているオーズの姿があつた。

☆☆☆☆

時は遡り、数十分前。

「成る程、つまり火野はヤミーの能力で美貌へと変わった女性を見てあなっている？」

「大丈夫ですよ後藤さくん。俺は至って普通ですから」

アंकから事情を聞いた後藤は何処から摘んだのか野花を1つ両手で握ってヘラヘラと笑っている。見るからに大丈夫ではなさそうなその姿を見て後藤は目を若干引き攣っていた。

同時に耳郎もだが、何処か不貞腐れている様な表情で火野を睨みつけている。

「せっかかくカザリを見つけたのにこのザマだ。その虫ケラ野郎も役に立たない始末だしなア」

「何だ?!アंक、貴様も闘えば楽に勝てただろうが！」

「ハッ、勝手に映司からメダル奪って置いてあのザマジやあ助ける義理も無いだろ」

「言わせておけば貴様あ！」

カツとなつたウヴァがアंकに詰め寄ろうとする。仲裁役の火野は見向きもせず、伊達が代わりに間に入ろうとしたその時、耳郎のイヤホンジャックが伸び、アंकとウヴァの後頭部に突き刺した。

「うるさいー！」

BON!!

「がつ!？」

「うばあ!?!…またコレか…!!」

爆音を流し込まれ、その衝撃にアंकとウヴァは四つん這いになってダウンしてしまう。女を怒らせると怖いのは里中から熟知している伊達は「おおくこつわ…」と誰にも聞こえない程度の声で囁いていた。

「くっ……お前……!」

「アंक、ウヴァ、火野をどうにか出来ないのツ？」

「知らん!あのヤミーを倒せば勝手に元に戻るだろ」

キレ気味に返事するウヴァだが、何か思い出したのか、アंकはハッとすする。

「いや、方法はある。コイツを变身させる」

「え?」

「何?」

その案に耳郎とウヴァは思わずキョトンとし、後藤が疑問を抱きながら尋ねた。

「何故变身を?」

「オーズになればヤミーの毒気が払える、一度経験したからな。こうなったら構うのが面倒だ、さっさとやるぞ。手伝え」

「…あ、わ、わかった」

火野の腰にアंकは手を入れ、オーズドライバーを取り出しながらそう言い、ホツとした様子で耳郎は了承して火野を支えようとする。

「火野、ほらッちゃんとして立って…」

「えへへ」

「ちよっ、力抜かないで……ウヴァも手伝えよ!」

「…ああわかったわかったッ」

フニヤリと倒れそうになる火野に、流石に支えれないと思ったのか声を荒げてウヴァにも手伝わせる。ウヴァと耳郎が火野を支えている間に、アंकはオーズドライバーを腰に宛い装着させ、タカ、パンダ、コンドルのコアメダルを装填する。

異様な光景に後藤と伊達は立ったままその様子を見守っていた。

「耳郎、スキヤナーを使え」

「えと、これか」

アंकに指示され、耳郎はオースキヤナーを見つけると、火野に握らせながらスキヤンさせた。

「……あ、へ……変身！」

タカ！

パンダ！

コンドル！

いつも言っている掛け声を少し恥ずかしそうに耳郎が代わりに叫び、音声が鳴り響く。オーラングサークルが重なり、火野はオーズ『タカパンドル』へと姿を変えると、前のめりに倒れそうになるが「おつとと……！」と自力で踏ん張った。

「……ん？あれ……えっ俺、何で変身してるの……？」

「火野、なんともない？」

「あれ、耳郎さん？……え、なんでここに……ていうか、ここ鴻上ファウンテーションだよね……？ヤミーは？」

「よかったあ……戻ったあ」

いつもの様子に戻ったオーズを見て耳郎はホッと安堵する。膝を曲げて座っていたアंकは立ち上がり、腕組みをしながら口を開いた。

「フン！お前がヤミーの呪いみたいなものに犯されて記憶が飛んだんだ。ヤミーとカザリは逃げた」

「え、そうなの……？ごめん、油断しちゃったみたい」

「全くだ。俺のメダルを使って何やられてやがる」

謝るオーズにウヴァは物言うが、自分も苦戦していた癖にと言わんばかりにアंकは「虫が……」と呟く。聞こえていたウヴァは「何だと

？」と喧嘩腰になるが、伊達が「はいはいはい」と割入った。

「アンコ、火野はこの姿なら自制心を保てるのか？」

「アンクだ。…ああ、変身を解けばウザい映司に逆戻りだろうなア。もつとも、あのヤミーを倒せば話は別だが」

「そうかく…。よし、とりあえず俺は会長に報告しに行くからよ、ヤミーの目撃情報が出次第直ぐに向かうから各自待機な。火野は悪いけど、しばらくその姿でいてくれ」

「はい」

「わかりました…すみません伊達さん、ご迷惑をおかけして…」

「まあ仕方ないでしょ…：…てか、鈍感な火野が魅了される程美人ってすげえな。俺も見みたいもんだぜ」

「伊達さん」

恋には疎そうな火野が魅了される程美人だったヤミーの親に興味が湧く伊達だが、巫山戯てる場合ではないと後藤は口を動かす。伊達はビクツツとし、「わかってるって」と苦笑いしながらポケットに手を入れた。

「後藤ちゃん、火野。コレ持つとけ」

伊達は2人に投げ渡す。それはタカカンドロイドとは違う色をした緑のカンドロイドで、キャッチしたオーズは「これは？」と尋ねると、伊達は「開けてみな」と応えた。

オーズはそのままカンドロイドのプルトップスターターを開けて掌に乗せると、変形して小型のバッタの様な形へと姿を変える。

『バッタッ！』

「おおバッター！」

「か、可愛い…」

「こんな物まで作れるのか、この建物は」

オーズの掌でぴよんぴよんと飛び跳ねる仕草を見てオーズ、耳郎、ウヴアは興味を示す様に眺める。

「その缶は映像を映してくれるし、なんと通話も出来ちゃう優れ物よ！連絡はそのバッタちゃんですから常時待つときな」

「ありがとうございますー」

お礼を言い、伊達はそのまま「じゃっ」と言っつて背中を向き歩いて行く。

姿が見えなくなると、後藤はカンドロイドを持ち直し、オーズへと声を掛けた。

「火野、俺もバースドライバーを調整しに開発部へ行く。お前と耳郎はバース専属の事務所で待機して居てくれ」

「あ、わかりました」

オーズが頷くと、アंकもまた「フン」と鼻を鳴らして何処かへ行くようにする。

「アंक？」

「ヤミーを探つて来る。いつでも潰せるよう直ぐ見つけ出してやる」

物騒な事を言い残し、アंकはその場を去つたのだった。

☆☆☆☆

「ーってな事があつたんですよ」

「なんか、掃除しているオーズを見てるとある意味新鮮ですね」

「待機つっつたんだけど…良い子ちゃんだねえ火野は」

事情を説明し、里中はモニターに映るオーズを見ながらボヤくと、伊達は後頭部を掻きながらそう応える。同じく見ていた鴻上はニヤリと頬を上げて口を開いた。

「実に、実に興味深い!!ヤミーにグリードの存在!その生態を是非研究したいものだよ伊達君!!」

「いやいやダメでしょ。人を襲う時点で害でしか無いっすよ。…そんなじゃまあ、俺は戻りませんんで」

ツツコミを入れつつ、伊達はそう言っつてその場から出ていく。鴻上は「ふむ…」と息を吐くと里中に声を掛けた。

「里中君、次ヤミーが姿を現したならば、アレを実験に使うとしよう」「アレとは？」

里中が首を傾げると、鴻上はリモコンを手にとってチャンネルを変

える。

その映された映像には、この会社の何処かに保管されているのか、大量に積み重なれた水色のカンドロイドが置かれていた。

☆☆☆☆☆☆

「……………」

「…あの、耳郎さん。どうかしたの？」

「別に…なんもない」

椅子に座って置物をイジリ、ずっと不貞腐れている様な表情をする耳郎。会話が無く、オーズは声を掛けるも素っ気ない態度で応えられ、再び沈黙の空間となっていたが、耳郎が小さく息を吐き、口を開いた。

「火野、あんた身体は大丈夫なの？」

一方で、事務所内で待機していたオーズと耳郎。

せつせと掃除するオーズに耳郎が声を掛けるとオーズは振り返り応える。

「ん？いや特に…ほら、待機命令出てるけど、落ち着かなくてさ」

「そうじゃなくて、ずっと変身してるから」

「え？ああ…何ともないよ。コンボじゃなければそんなに疲れないし…戦ってないから尚更ね」

意味がわかったオーズはそう応える。すると、隅に座っていたウヴァが立ち上がるとオーズに声をかけた。

「おい映司。俺のメダルは3枚しか無いのか？」

「え、それしか無いよ」

「なら何故アंकは8枚も自分のコアメダルを持ってやがる!？」

怒鳴るように声を荒げ、耳郎はビクツと肩を上げる。それと同時に、ウヴァの発言に疑問を抱いたのかオーズに尋ねた。

「どういう事？火野達が使ってるメダルって3枚だけじゃないの？」

「あく、えつと…俺もそこまで詳しくは無いんだけど、アंकやウヴァが持つてるコアメダルって全部で9枚あるらしいんだ」

「9枚もっ？」

「うん。アंकは自分の持つてるメダル…タカとクジヤクにコンドル、それぞれ3枚ずつあって、アंकはタカを除いて8枚だったかな。で、ウヴァはクワガタ2枚とカマキリとバツタが1枚ずつだけなんだ」

同じ属性のコアメダルが複数もある事に耳郎は驚きながらも「へえ」と頷き、再度尋ねた。

「ウヴァ、9枚揃ったら強くなんの？」

「当たり前だ！完全体になればカザリなんて敵じゃない。アंकは8枚も持っているのに、何故俺は4枚だけなんだ！」

「知らないよっ。アंकが初めて出てきた時は既に持ってたんだから………」

オーズはそう言うと、何か思ったのか首を傾げる。

「どうかしたの？」

「…そう言えば、体育祭で初めてアंकが出てきた時アイツ何か言ってたような…『影響が出る』とか何とか…」

ウヴァやカザリと同様、アंकもまた突然火野の中に現れたのだが、2人と違って何か訳ありの様子で会話した記憶が蘇る。オーズは何か引っかかる表情をしながら、天井を見上げた。

☆☆☆☆☆☆

場所は再び会長室へ。

ケーキを食べ終えた里中は突然「あっ」と思い出したかのように口を開けた。

「会長、今日はお客様がおいでになります」

「む、そうだったかね？」

鴻上も初耳だったのかそう聞き返すと、扉からノックの音が聞こえる。

「入りたまえ！」

鴻上が言うと、ファウンテーションの従業員が1人、「失礼します」とドアを開ける。すると、その後ろからある人物が入って来た。

「ご無沙汰しています、鴻上会長」

「ほう！これはこれは、君が来るのは珍しいよ、塚内君！」

「何か事件ですか？ヤミーでしたら……」

「ああ、その件は把握済みですよ里中さん。本題は別にありまして……火野映司君の事についてお話があります」

現れた塚内は真剣な表情を浮かべ、火野の名前を出す。それを聞いた鴻上は「何かね？」と尋ねたのだった。